

国立研究開発法人

国立成育医療研究センター

年報・業績集

第22号（2023年1月～12月）

National Center for Child Health and Development

2023

目次

1.巻頭言	13
2.沿革・概要・組織・行事	14
組織図 参照	15
沿革	26
3.活動状況	35
3-1 監査室	36
3-2 企画戦略局	36
3-2-1 広報企画室	37
3-2-2 ダイバーシティ実現推進室	38
3-3 情報管理室	38
3-3-1 情報解析室	38
3-3-2 システム管理室	38
3-4 人材育成管理部	40
3-5 研究所	41
3-5-1 研究所概要	41
3-5-2 小児血液・腫瘍研究部	42
3-5-3 分子内分泌研究部	43
3-5-4 免疫アレルギー・感染研究部	46
3-5-5 成育遺伝研究部	57
3-5-6 ゲノム医療研究部	59

3-5-7 システム発生・再生医学研究部	62
3-5-8 薬剤治療研究部	64
3-5-9 周産期病態研究部	66
3-5-10 再生医療センター	68
3-5-10-1 高度先進医療研究室	71
3-5-10-2 好酸球性消化管疾患研究室	75
3-5-10-3 母児感染研究室	77
3-5-10-4 感染免疫研究室	78
3-5-11 社会医学研究部	79
3-5-12 政策科学研究部	81
3-5-13 エコチル研究部	83
3-5-14 マスクリーニング研究室	85
3-5-15 小児慢性特定疾病情報室	87
3-5-16 ダイバーシティ研究室	89
3-5-17 共同研究管理室	90
3-5-18 実験動物管理室	92
3-5-19 ラジオアイソトープ管理室	94
3-5-20 バイオバンク	94
3-5-21 衛生検査センター	95

3-6 研究開発監理部	98
3-6-1 臨床研究管理室	98
3-6-2 知財・産学連携室	99
3-6-3 リサーチアドミニストレーション室	99
3-6-4 生命倫理研究室	100
3-7 病院	106
3-7-1 病院概要	106
3-7-2 総合診療部	106
3-7-2-1 総合診療科	106
3-7-2-2 在宅診療科	109
3-7-2-3 緩和ケア科	110
3-7-3 救急診療部	111
3-7-4 小児内科系専門診療部	112
3-7-4-1 消化器科	112
3-7-4-2 循環器科	115
3-7-4-3 呼吸器科	117
3-7-4-4 神経内科	119
3-7-4-5 腎臓・リウマチ・膠原病科	121
3-7-4-6 免疫科	122
3-7-4-7 内分泌・代謝科	124

3-7-4-8	感染症科	127
3-7-4-9	こころの診療科	129
3-7-4-9-1	乳幼児メンタルヘルス診療科	130
3-7-4-9-2	児童・思春期メンタルヘルス診療科	131
3-7-4-9-3	児童・思春期リエゾン診療科	133
3-7-4-10	心理療法室	134
3-7-5	アレルギーセンター	136
3-7-5-1	総合アレルギー科	138
3-7-5-2	皮膚アレルギー科	143
3-7-5-3	消化管アレルギー科	146
3-7-5-4	鼻アレルギー科	152
3-7-5-5	視機能評価支援室	153
3-7-5-6	免疫機能評価支援室	153
3-7-5-7	遺伝情報評価支援室	154
3-7-5-8	行動機能評価支援室	154
3-7-6	小児がんセンター	154
3-7-6-1	血液腫瘍科	154
3-7-6-2	脳神経腫瘍科	154
3-7-6-3	移植・細胞治療科	154
3-7-6-4	腫瘍外科	156

3-7-6-5	血液内科	156
3-7-6-6	がん緩和ケア科	157
3-7-6-7	長期フォローアップ科	157
3-7-6-8	小児がん免疫診断科	158
3-7-6-9	小児がんゲノム診療科	158
3-7-6-10	小児がんデータ管理科	159
3-7-7	小児外科系専門診療部	159
3-7-7-1	外科	159
3-7-7-2	脳神経外科	159
3-7-7-3	心臓血管外科	160
3-7-7-4	整形外科	161
3-7-7-5	泌尿器科	162
3-7-7-6	リハビリテーション科	162
3-7-7-7	発達評価支援室	162
3-7-7-8	形成外科	164
3-7-7-9	耳鼻咽喉科	166
3-7-7-10	眼科	169
3-7-7-11	皮膚科	171
3-7-7-12	小児歯科・矯正歯科	174

3-7-8	手術・集中治療部	176
3-7-8-1	集中治療科	176
3-7-8-2	手術室	178
3-7-8-3	産科麻酔科	179
3-7-8-4	医療工学室	181
3-7-9	周産期・母性診療センター	182
3-7-9-1	産科	182
3-7-9-2	胎児診療科	186
3-7-9-3	不育診療科	188
3-7-9-4	新生児科	189
3-7-9-5	産科麻酔科	192
3-7-9-6	母性内科	194
3-7-9-7	不妊診療科	197
3-7-9-8	周産期歯科	199
3-7-10	臓器移植センター	200
3-7-10-1	小腸移植外科	200
3-7-10-2	移植外科	200
3-7-10-3	心臓移植科	202

3-7-11	遺伝診療センター	202
3-7-11-1	遺伝診療科	202
4-7-12	医療 AI/DX・医療機器開発部	204
3-7-12-1	開発推進室	204
3-7-12-2	開発支援室	205
3-7-13	放射線診療部	205
3-7-13-1	放射線診断科	205
3-7-13-2	放射線治療科	206
3-7-12-3	診療放射線技師	208
3-7-14	臨床検査部	210
3-7-14-1	生理検査室	210
3-7-14-2	検体検査室（院内ラボ）	212
3-7-14-3	高度先進検査室	213
3-7-14-4	細菌検査室	214
3-7-14-5	輸血細胞療法室	216
3-7-14-6	採血室	217
3-7-15	病理診断部	218
3-7-15-1	病理診断科	218
3-7-15-2	中央病理診断部	221

3-7-16	高度感染症診断部	223
3-7-17	妊娠と薬情報センター	224
3-7-18	遺伝子細胞治療推進センター	226
3-7-19	医療連携・患者支援センター	228
3-7-19-1	国際・医療連携開発室	228
3-7-19-2	医療連携室	229
3-7-19-3	在宅医療支援室	230
3-7-19-4	患者相談窓口	231
3-7-19-5	ベッドコントロール室	232
3-7-19-6	入院サポート室	232
3-7-20	教育研修センター	233
3-7-21	感染制御部	234
3-7-22	栄養管理部	237
3-7-22-1	栄養管理室	237
4-7-23	災害対策部	239
3-7-24	医療安全管理部	241
3-7-25	子どもの生活安全対策室	243
3-7-26	緩和ケア管理室	244
3-7-27	薬剤部	245
3-7-28	看護部（保育士・中央材料室を含む）	247

3-7-29	もみじの家	249
3-7-30	チャイルド・ライフ・サービス室	251
3-8	臨床研究センター	253
3-8-1	臨床研究センター	253
3-8-2	多施設連携部門	253
3-8-2-1	ネットワーク推進ユニット	253
3-8-2-2	国際連携ユニット	255
3-8-2-3	研究相談ユニット	256
3-8-3	研究推進部門	257
3-8-3-1	プロジェクトマネジメントユニット	257
3-8-3-2	開発薬事ユニット	257
3-8-3-3	研究企画ユニット	258
3-8-3-4	臨床研究コーディネートユニット	258
3-8-4	データサイエンス部門	259
3-8-4-1	生物統計ユニット	259
3-8-4-2	データ管理ユニット	259
3-8-4-3	モニタリングユニット	260
3-8-4-4	IT ユニット	260
3-9	事務部門	261
3-9-1	総務部 総務課	261

3-9-2	人事部 人事課	261
3-9-3	企画経営部	262
3-9-3-1	企画経営課	263
3-9-3-2	研究医療課	263
	実績評価書説明資	271
3-9-4	財務経理部	323
	財務諸表	324
3-9-4-1	財務経理課	327
3-9-4-2	医事管理課	327
3-9-4-3	施設整備課	328
3-9-5	図書館	329
3-9-6	こどもシンクタンク	330
3-9-6-1	企画調整室	330
3-9-6-2	戦略支援室	330
3-10	各種事業	332
3-10-1	子どもの心の診療ネットワーク事業 中央拠点病院	332
3-10-2	小児がん拠点病院事業・小児がん中央機関事業	334
3-10-3	小児と薬情報収集ネットワーク整備事業	338
3-10-4	小児慢性特性疾病情報センター	339
3-10-5	アレルギー中心拠点病院事業	340
3-11	各種委員会	346

一覽参照	347
4.研究業績	363
4-0 理事長	364
4-1 病院長	364
4-2 総合診療部	370
4-3 救急診療部	377
4-4 小児科内科系専門診療部	381
4-5 アレルギーセンター	425
4-6 小児がんセンター	457
4-7 小児外科系専門診療部	479
4-8 手術集中治療部	508
4-9 周産期・母性診療センター	521
4-10 臓器移植センター	545
4-11 遺伝診療センター	553
4-12 放射線診療部	557
4-13 臨床検査部	562
4-14 病理診断部	565
4-15 妊娠と薬情報センター	570
4-16 遺伝子細胞治療推進センター	574
4-17 感染制御部	575

4-18	栄養管理部	575
4-19	薬剤部	575
4-20	看護部	580
4-21	臨床研究センター	581
4-22	小児と薬情報収集ネットワーク整備事業	593
5.	医事統計	594
	別紙参照	595
6.	そよ風分教室	667

1. 巻頭言

2023 年の国立研究開発法人国立成育医療研究センター年報・業績集を上梓いたします。

11 回以上のウイルス変異とそれに基づく流行の波を経て、新型コロナウイルス感染症はわが国では 2023 年 5 月に 5 類感染症に移行しました。しかしながら、変異を繰り返した新型コロナウイルスによる最近の感染では、高齢者の致死率が減ったものの、増強した感染力による小児感染患者が増え、熱性けいれん、急性脳症、経口摂取の障害による脱水症など小児特有の症状を呈して入院してきています。

一方、わが国の小児の生育環境の変化が続いており、小児・周産期医療に対するわが国の社会のニーズも大きく変わってきています。医療の進歩により小児がんや低出生体重児などの難治性疾患等の救命率が改善するなかで、わが国の子どもの心理・社会的健康状態には依然として課題が残されています。さらに、出生数の減少にもかかわらず発達障害の子ども数は増加し、これらの子どもと御家族の診療、ケア、トレーニングなど総合的な対応・支援と疾患に対する基礎・社会学的研究の推進が求められています。これからのわが国の小児・周産期医療は子ども、妊婦、御家族の身体的健康を目指すだけでなく、心理・社会的健康をも目指すべきと考えます。

私どもはこれからも小児・周産期における最善の医療・保健を目指して活動し、それを社会に広く提供することを目指します。そのためには、優れた研究を行い、その成果を社会実装することが必要です。生体肝移植、細胞・再生医療、遺伝子治療、胎児治療などの先端医療だけでなく小児・周産期における優れた医療を広く追求すると共に、診療・保健活動の DX 化、AI を用いた病院機能改革、妊娠・出産・子育てにおける女性の負担を軽減するための研究なども推進します。たとえ障害のある子どもが生まれても、保健・医療・福祉を総合的に駆使して御家族が安心して子どもを育てることのできる環境を整備することは、妊娠・出産に対する女性の不安を軽減する助けにもなります。プレコンセプションケアや産後ケアなどの新しい取り組みについても引き続き推進する所存です。

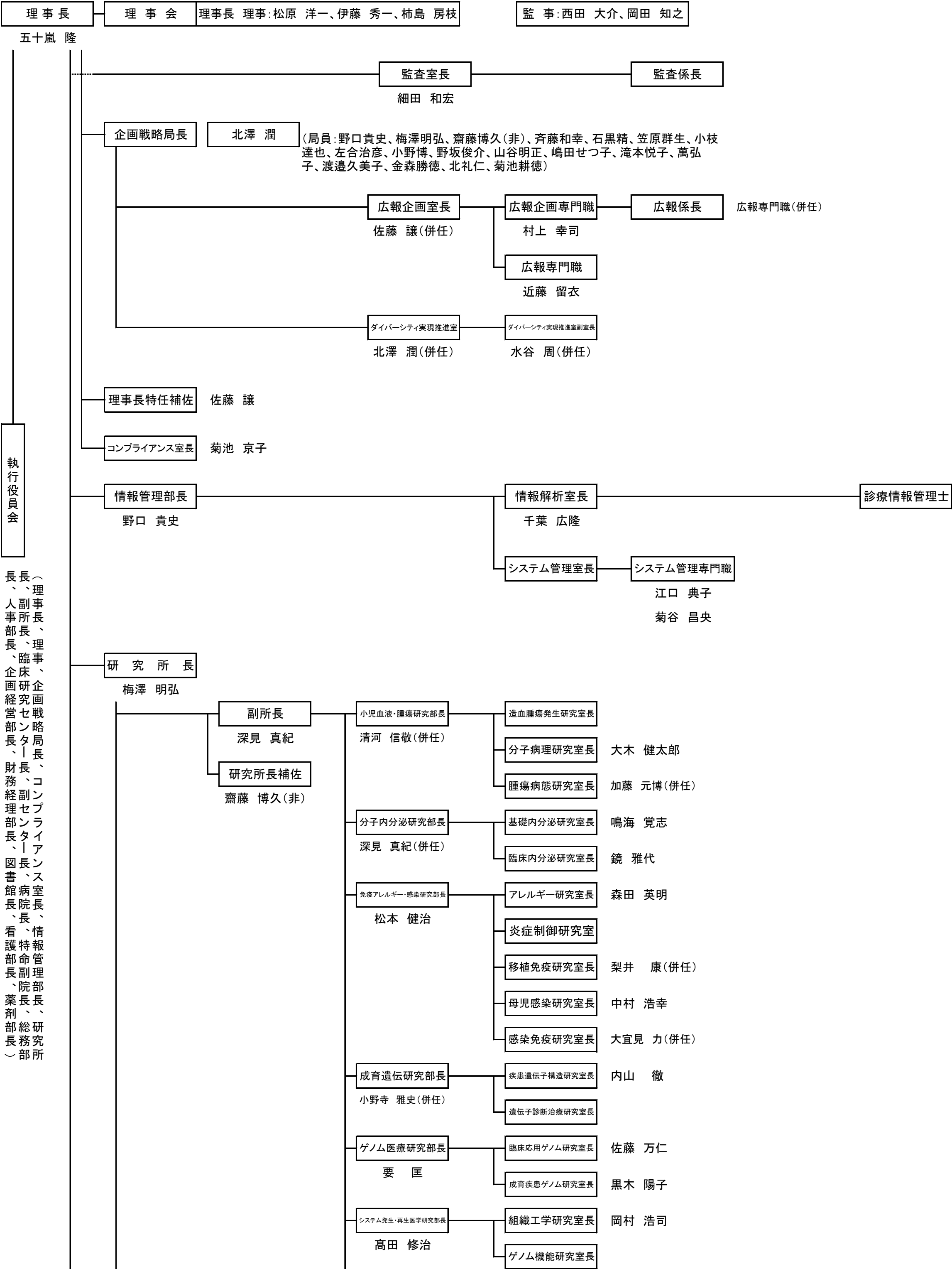
新型コロナウイルス感染症の流行はわが国の社会の在り方を大きく変貌させました。これからの小児・周産期の医療・保健の在り方にも変貌が求められています。また、私たちが行っている医学研究や医療・保健活動がわが国の社会や世界の人類にどのような意味や意義を示すのかを常に自省する姿勢も忘れてはなりません。子ども、妊婦さんと御家族の身体・心理・社会的健康を達成することを目指して、私どもはこれからも診療・研究・人材育成に努力する所存です。

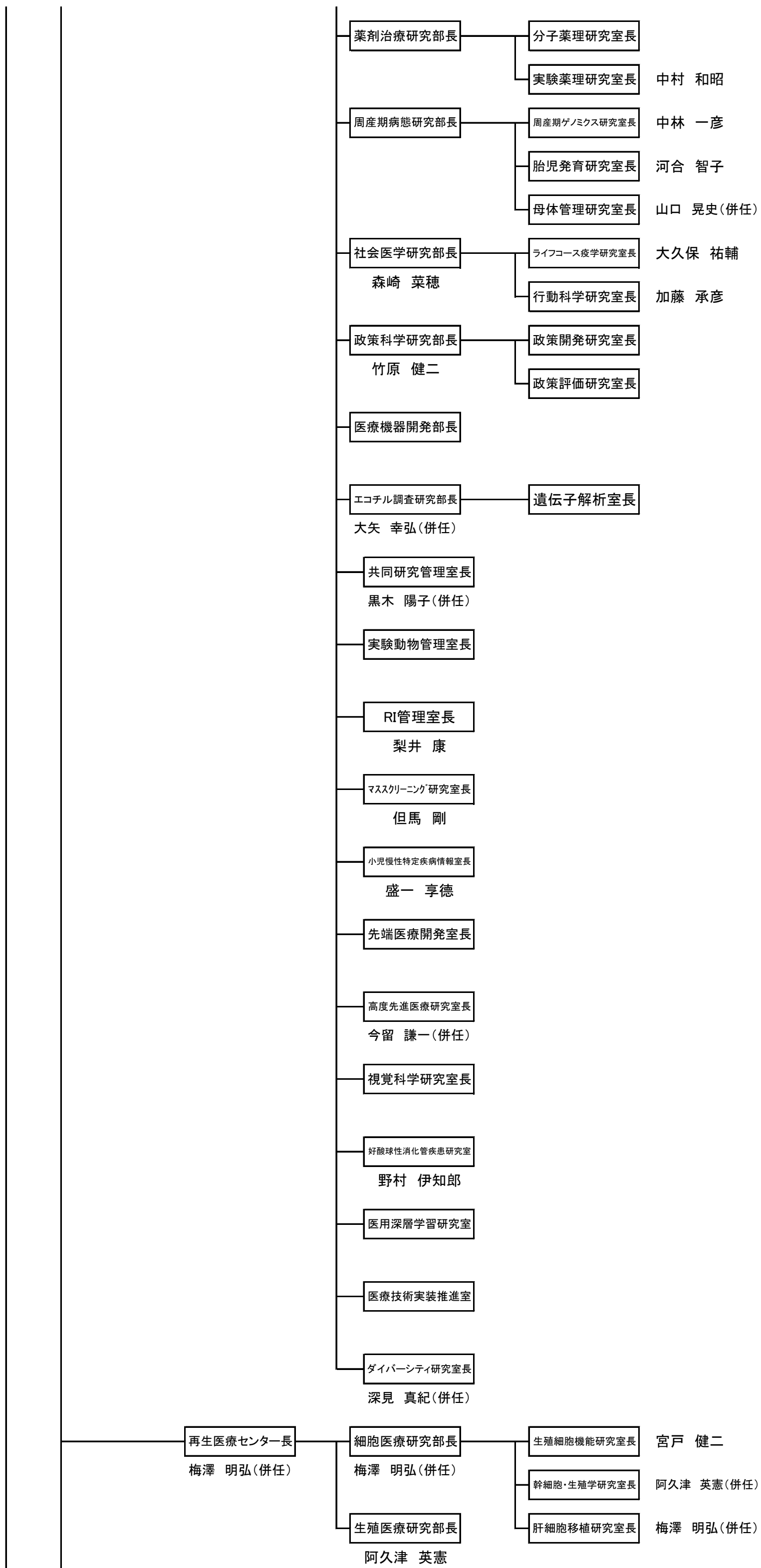
2024 年 9 月

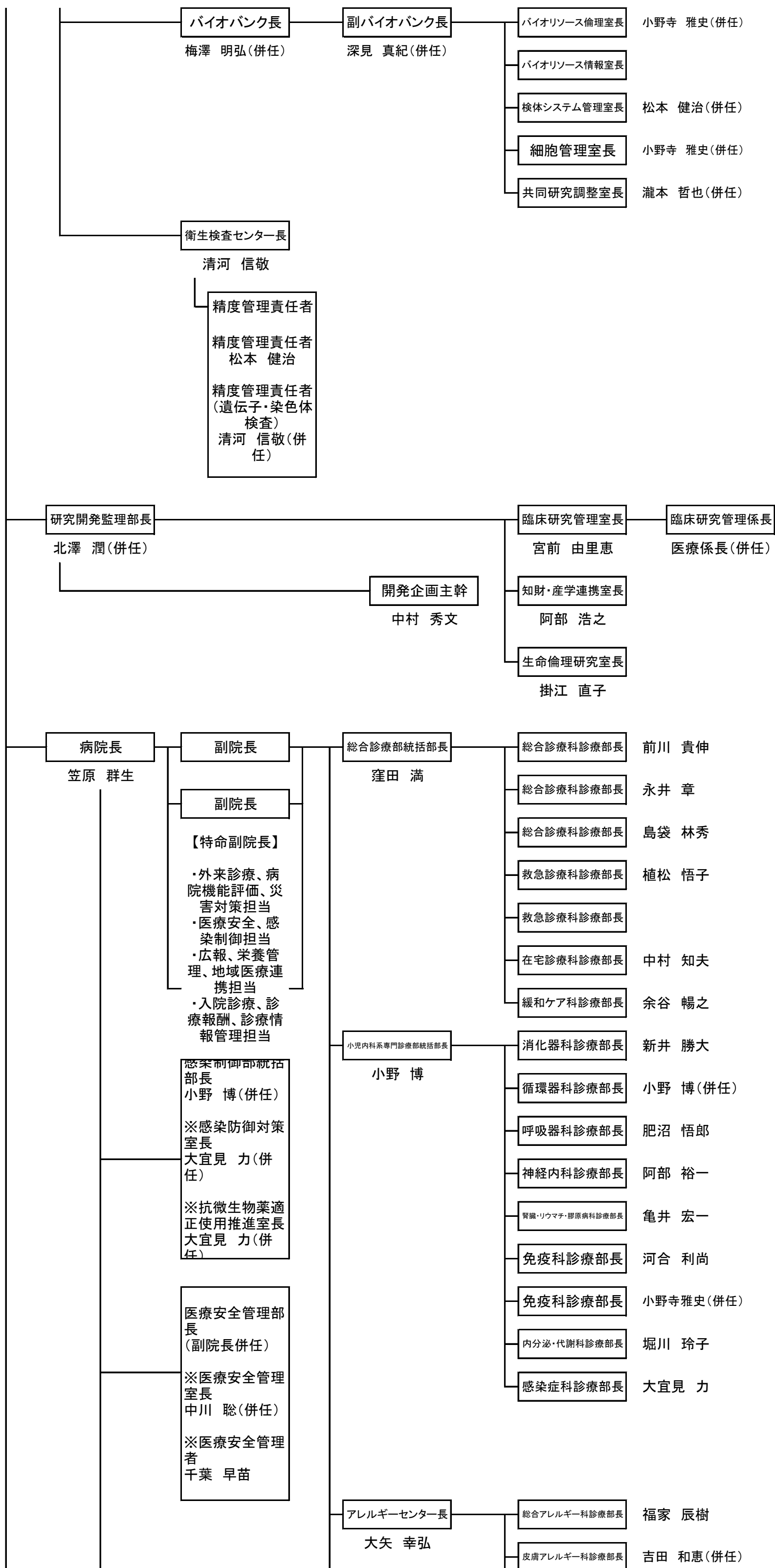
国立研究開発法人国立成育医療研究センター理事長
五十嵐 隆

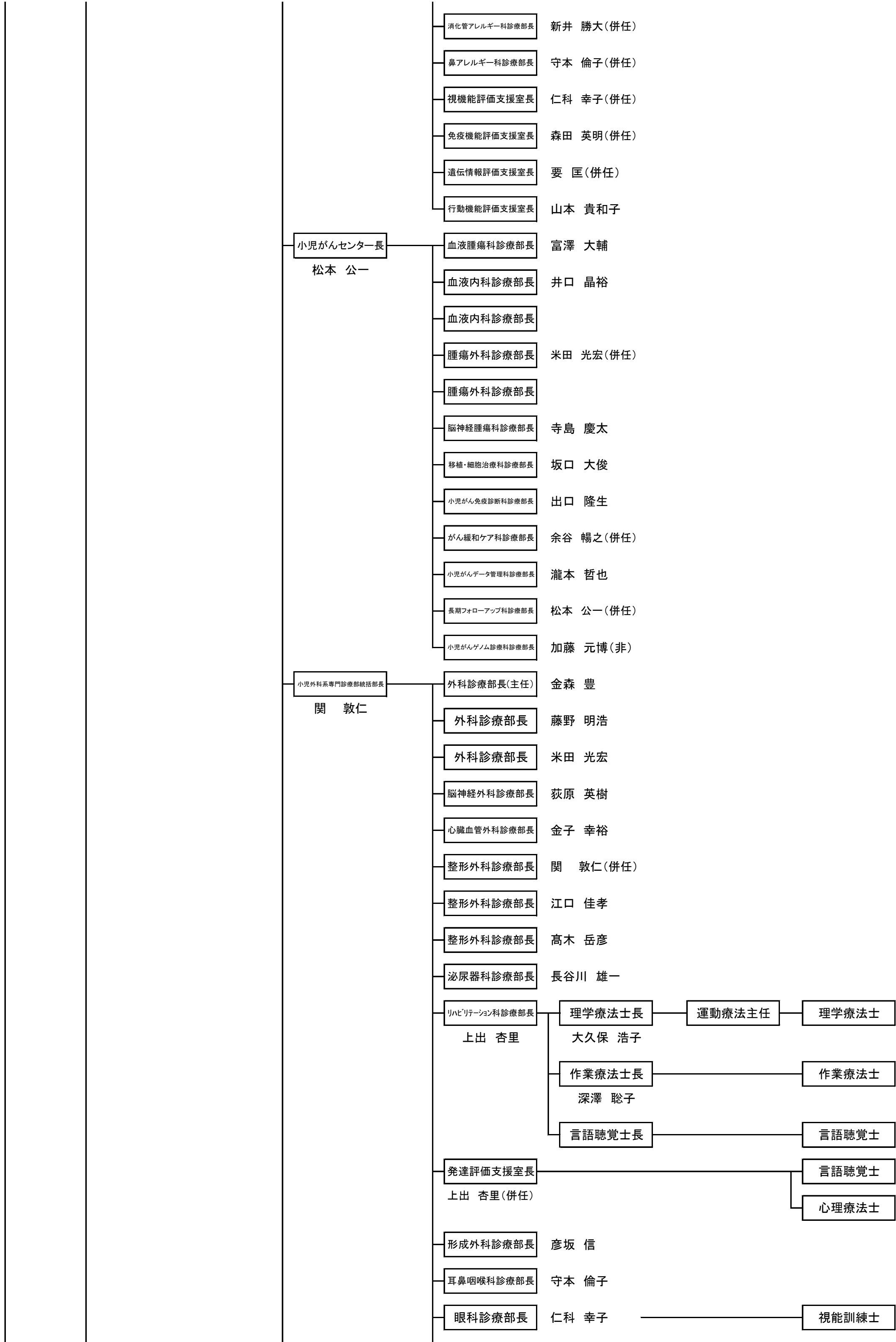
2. 沿革・概要・組織・行事

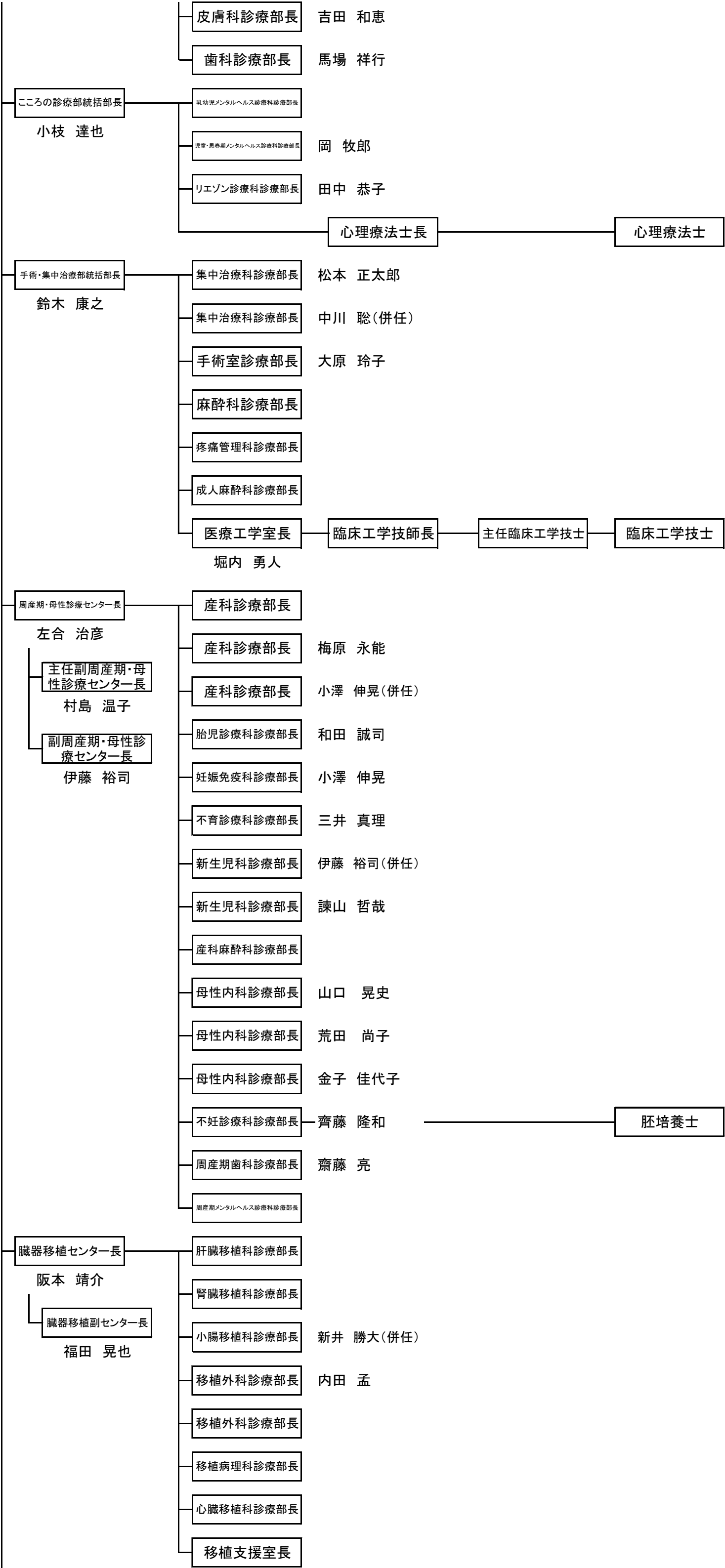
国立研究開発法人 国立成育医療研究センター組織図

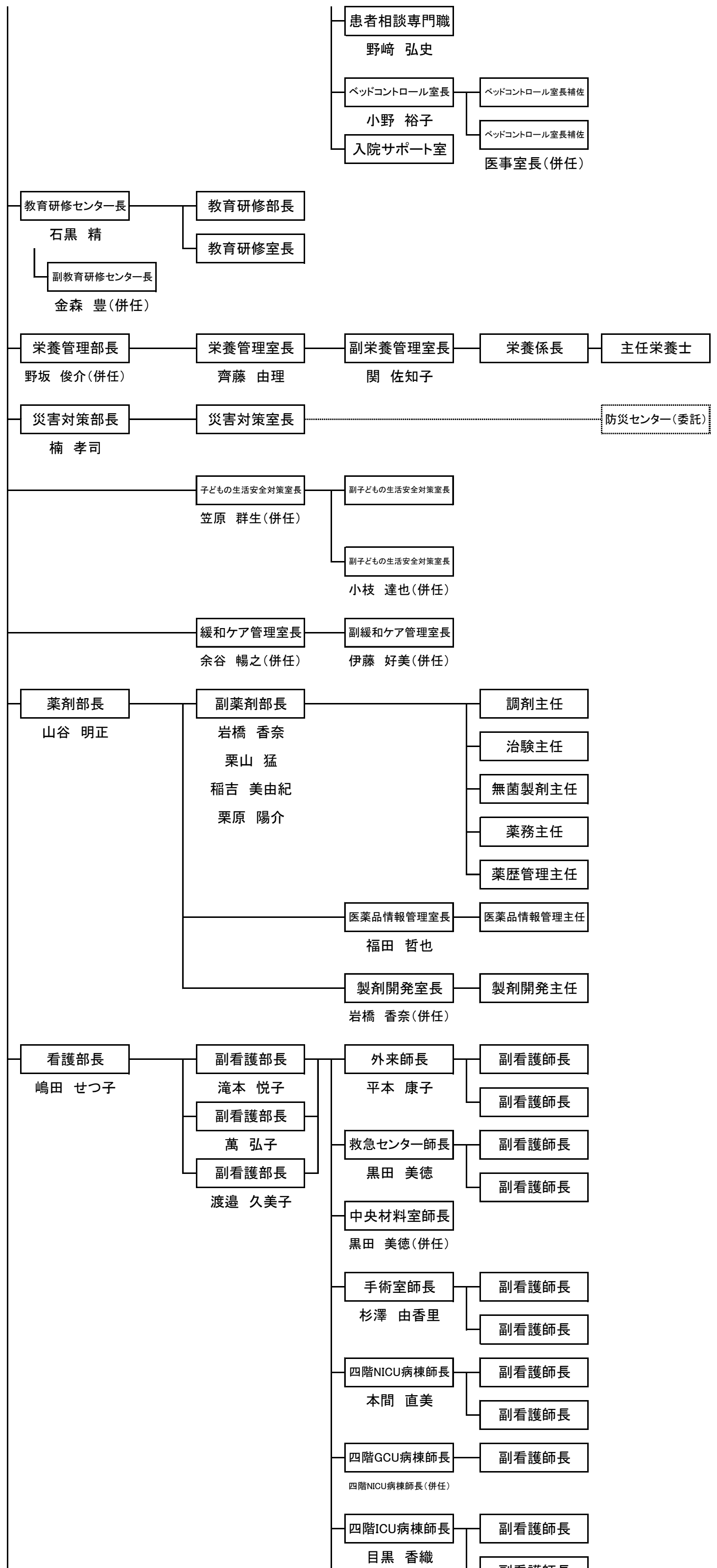


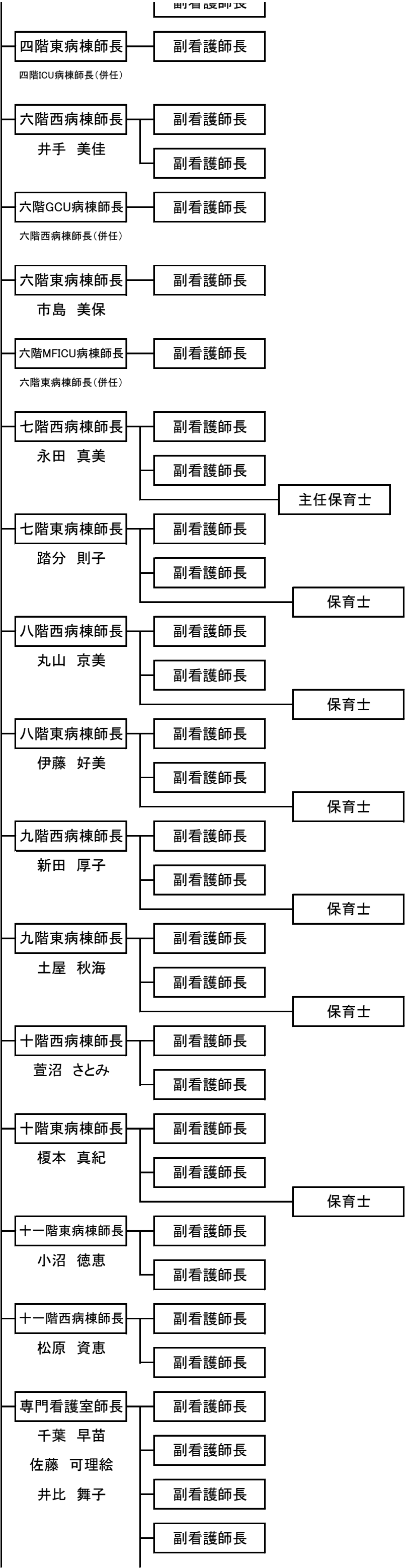
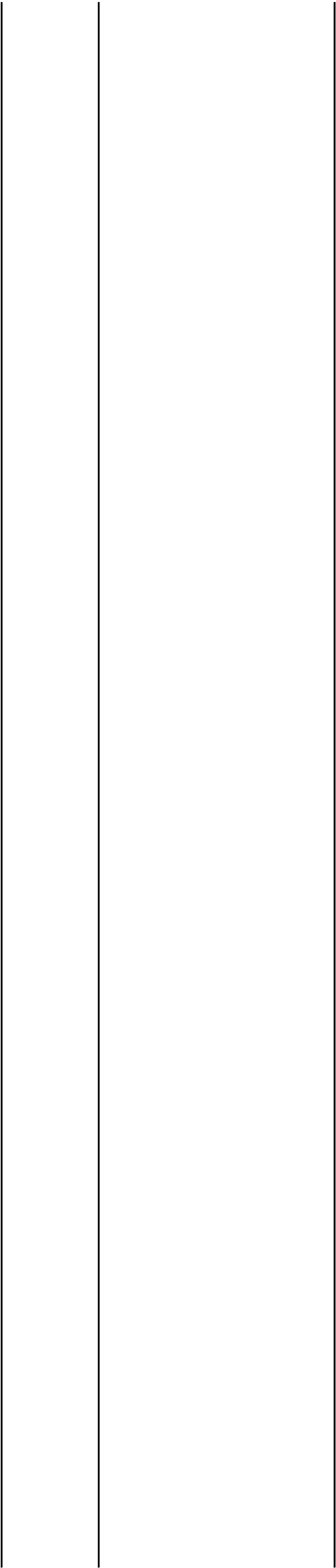


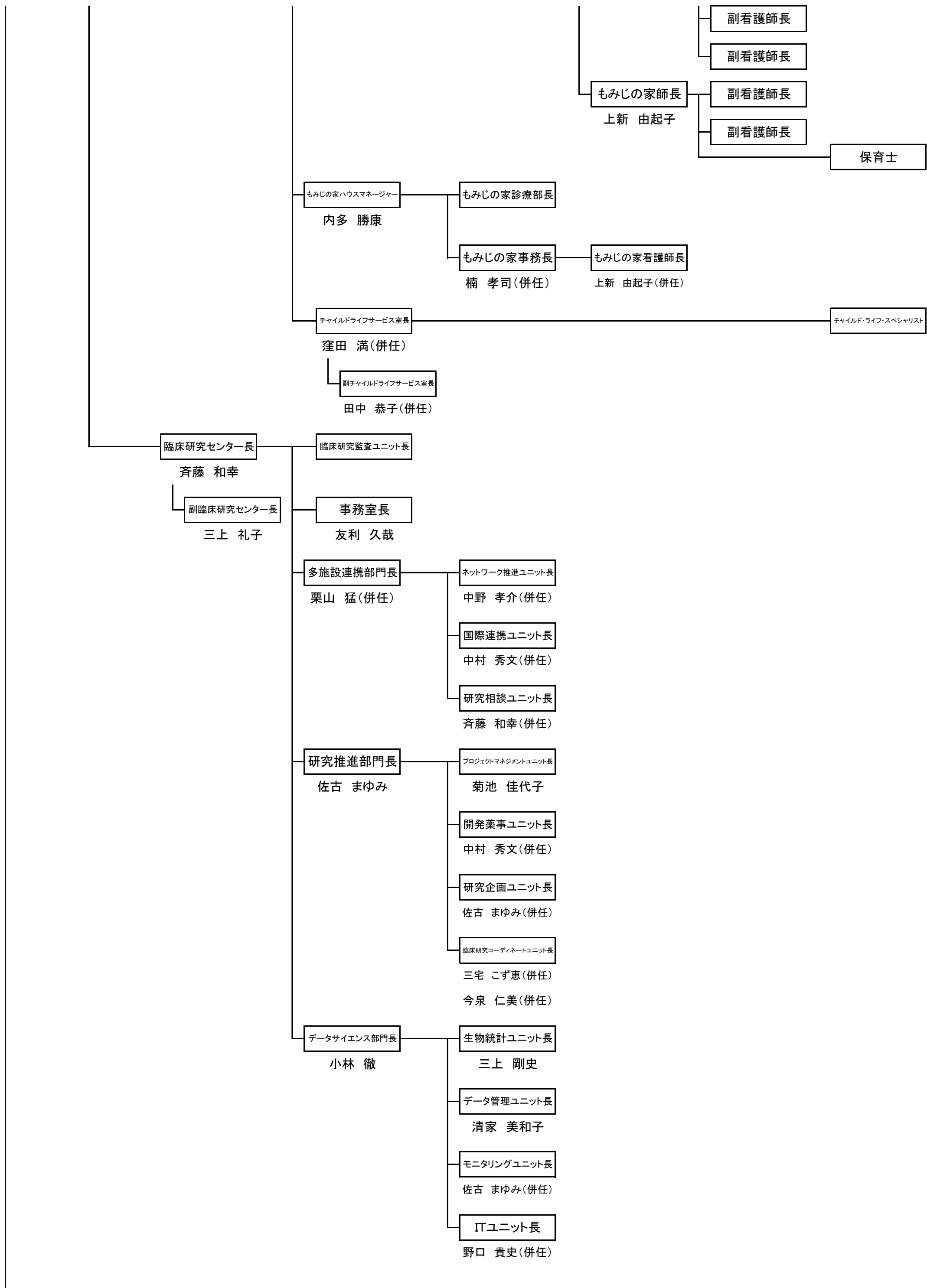


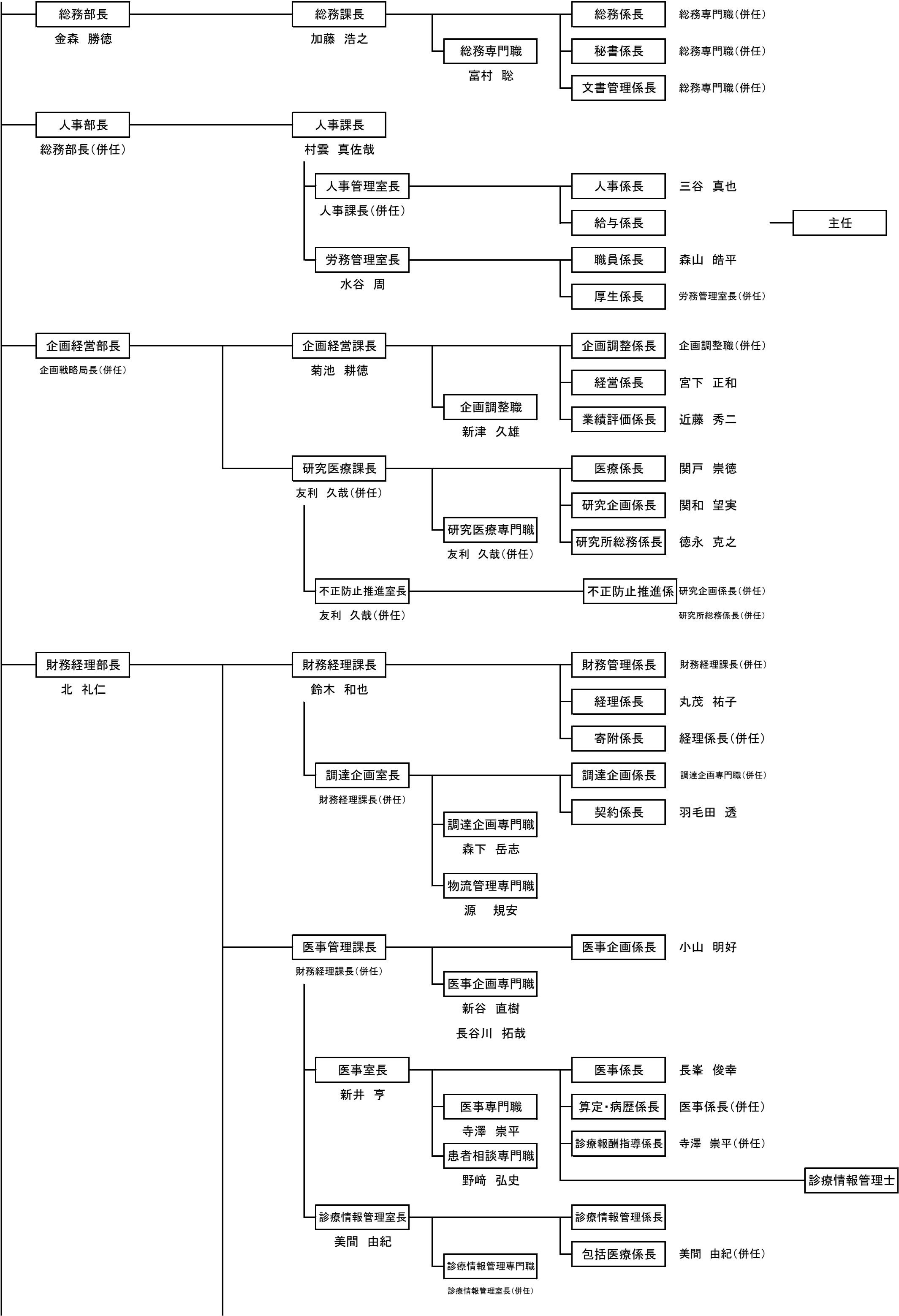


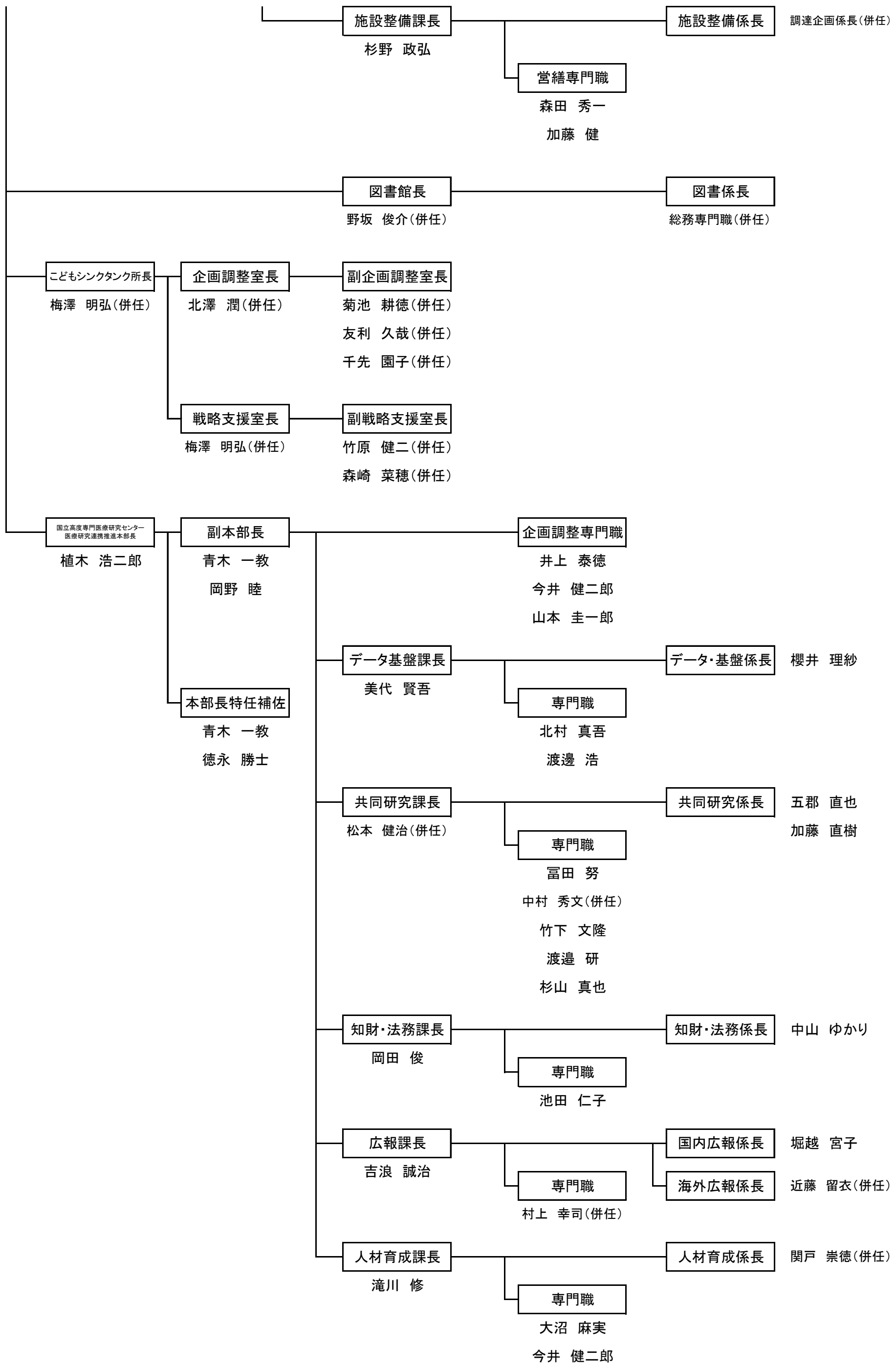












沿革

〔名 称〕 国立研究開発法人国立成育医療研究センター

急速に少子高齢化が進む中、次代を担う世代の健全な育成が急務となっている。

このような社会的要請を受け、国立大蔵病院と国立小児病院が統合し、5番目のナショナルセンターとして国立成育医療センターが平成14年3月1日に開設され、平成22年4月1日に独立行政法人国立成育医療研究センターと改組した。平成22年4月1日には臨床研究センターも開棟した。平成27年4月1日からは国立研究開発法人国立成育医療研究センターとなり、新たなスタートを切った。さらに平成28年4月25日もみじの家を開設し、医療的ケアが必要な子どもを対象とした短期入所事業を開始した。

当センターの使命は、高度専門医療センターとして病院と研究所、臨床研究センターの連携により、成育医療（小児医療、母性・父性医療及び関連・境界領域を包括する医療）及びその基盤研究を推進していくことである。

〔経 緯〕

昭和61年	1月	国立病院・療養所の再編成・合理化の基本方針に基づく全体計画の中で国立大蔵病院と国立小児病院の統合計画を公表
平成6年	7月	国立成育医療センター（仮称）整備基本計画検討会の設置
平成7年	4月	国立成育医療センター（仮称）設置準備室開設
平成7年	5月	国立成育医療センター（仮称）整備基本計画検討会 最終報告
平成9年	1月	国立成育医療センター（仮称）整備基本計画公表
平成9年	3月	国立成育医療センター（仮称）整備工事着工
平成13年	11月	国立成育医療センター（仮称）整備工事（病院棟）竣工
平成14年	3月	国立成育医療センター開設
平成16年	8月	国立成育医療センター研究棟 竣工
平成16年	10月	国立成育医療センター研究棟 移転開設
平成22年	3月	臨床研究センター棟竣工
平成22年	4月	独立行政法人国立成育医療研究センターへ改組
平成23年	4月	11病棟西（周産期病棟）30床増床（合計490床となる）
平成24年	8月	東京都から「総合周産期母子医療センター」に指定
平成25年	2月	厚生労働省から「小児がん拠点病院」に指定
平成25年	4月	厚生労働省の「臨床研究中核病院整備事業」に選定
平成25年	5月	厚生労働省医政局の「小児等在宅医療連携拠点事業評価実施機関」となる

平成25年10月	東京都から「東京都災害拠点連携病院」に指定
平成25年10月	教育研修棟竣工
平成26年2月	厚生労働省から「小児がん中央機関」に指定
平成26年5月	病院機能評価認定
平成26年5月	みんなの「家」(現もみじの家)事業準備・運営委員会の設置
平成27年4月	国立研究開発法人国立成育医療研究センターに移行
平成27年5月	もみじの家 着工
平成28年1月	もみじの家 竣工
平成28年4月	もみじの家 開設
平成30年7月	高規格救急車運用開始
平成30年8月	東京都から「地域医療支援病院」に指定
平成31年4月	遺伝子細胞治療推進センター開設
令和元年9月	厚生労働省から「がんゲノム医療拠点病院」に指定
令和元年12月	「CAR-T 細胞療法(キムリア)提供可能施設」に認定
令和元年12月	「小児心臓移植実施施設」に認定
令和4年4月	成育こどもシンクタンク発足
令和4年9月	遺伝診療センター開設

概 要

国立研究開発法人国立成育医療研究センターは、病院、研究所を有し、病院内に東京都立光明特別支援学校そよ風分教室が併設されている。また、医療的ケアが必要な子どもたちを対象とした短期入所施設もみじの家を開設した。

所在地及び交通機関

東京都世田谷区大蔵二丁目10番1号

首都高速道路及び東名高速道路の「用賀インターチェンジ」より、環状八号線を経て5分。小田急線成城学園前駅からバスで約10分。

環 境

世田谷の西南に位置し、近く多摩川を境に神奈川県川崎市に接している。周辺には大学、高校、世田谷美術館、都立砧公園、区立総合運動場、厚生年金スポーツセンター等があり、緑にも多く恵まれた環境にある。

研究所概要

特 色

12部12室に加え、再生医療センター、バイオバンク、衛生検査センターを開設し、受精からヒトとして成長する過程で生じる疾患の成立機序の解明とその予防、診断・治療法の開発を行っている。

小児血液・腫瘍研究部：白血病や Ewing 肉腫など小児腫瘍の発症機構解明と、新規診断法や治療法の開発を行なう。

分子内分泌研究部：性分化疾患、性成熟疾患、成長障害、先天奇形症候群などの疾患について、発症機序の解明および分子遺伝学的知見に基づいた新規診断法・治療法の開発を行う。

免疫アレルギー研究部：喘息、アトピー性皮膚炎など小児のアレルギー疾患、免疫異常症の病態解明と新たな治療法の開発を行う。

成育遺伝研究部：「遺伝性疾患」について、その原因遺伝子の解明および診断法の確立を図る。また、これらの疾患に対する遺伝子治療の開発を行う。

ゲノム医療研究部：最先端の遺伝子解析機器と手法を駆使して、未だ解明されていない様々な希少難病の原因関連遺伝子を明らかにし、その研究成果の臨床応用を行う。さらには、種々の成育疾患の発症に関与する遺伝要因をもとに、未来の予測医療・予防医療につなげていくことにも取り組む。

システム発生・再生医学研究部：新規研究システムの構築に基づいた発生、再生医学研究により、胎児および小児の疾患の原因と病態の解明を行う。

薬剤治療研究部：ゲノム情報に基づいた成育医療における創薬の研究を行い、オーダーメイド医療の確立を目指す。また、胎児および小児における薬剤の生体内動態を明らかにする。

周産期病態研究部：妊娠中の胎児発育と母体との関係や出生した新生児の生理学的発達および異常発生機序を解明し、ハイリスク妊娠の新規治療法開発、胎児発育不全の防止法開発を行う。

社会医学研究部：成育医療における、疾病構造の調査・研究を行う。また、心身ともに健全な成長を助けるための「こころのケア」に関する調査・分析を行い、実践部門への提言をおこなう。

政策科学研究部：全国の成育医療関連施設と連携し、成育医療に関する情報収集および分析を行い、成育医療・保健のあり方を提言する。

医療機器開発部：妊娠早期に先天性疾患と診断された胎児に対して、出産前または出産後の早期に治療を行うための新しい医療機器の研究開発に取り組む。主に診断や治療に携わる医師や看護師の“新しい目”、“新しい手”、“新しい手術ナビゲーション”の実用化を進めていく。

エコチル調査研究部：日本全国 15 か所で行われている 10 万人の母子を対象とする出生コホート調査、子どもの健康と環境に関する調査（エコチル調査）に対して医学的側面から調査の立案・規格・実施をサポートしている。

共同研究管理室：病院部門や民間等他の研究機関との共同研究の調整を行い、プロジェクト研究の推進を図る。

実験動物管理室：動物実験が科学的に、かつ、動物の愛護と福祉に則って実施されるよう教育し、管理を行う。また、発生工学的手法の提供により研究を支援する。

R I 管理室：R I を用いた研究の管理・調整および研究者の健康管理を行う。

マススクリーニング研究室：新生児マススクリーニング（NBS）が日本のどの地域でも一定の水準を保って行われるよう、スクリーニング指定検査機関の検査精度の保証及び日本全体の NBS システムの維持向上を目的とした、精度管理の実務を担当するとともに、NBS の情報管理、新規対象疾患に関わる研究や研修、人材育成を行っている。

小児慢性特定疾病情報室：小児慢性特定疾患の申請時に提出された臨床情報を集約し疾病研究が行われている。当研究室では小児慢性特定疾病対策に関わる厚生労働省事業や疫学研究等を行い、母子保健行政に関わる施策を支えるための活動を行っている。

先端医療開発室：当室は新規医療技術の開発をもって医療のさらなる進歩と現状の問題解決に努めることを使命として活動している。具体的には、1. 先端医療を科学的・倫理的に適切な方法論に基づく臨床研究につなぐこと、2. 医学研究に必要なヒト由来研究資源のコレクションの形成と利活用、の2つのテーマに取り組んでいる。

高度先進医療研究室：胎児・小児期ウイルス感染症および川崎病の克服を目指して先端的研究を行うとともに、その成果を診断と治療に応用している。様々な血液疾患の原因となる EB ウイルスを主な研究対象とし、疾患モデルの作成を通じて新しい治療法の開発に貢献している。また、成育医療に関連する多くのウイルスの迅速診断を行うとともに、先端医療の実施と技術開発を目指している。そして、難治性 EB ウイルス関連疾患の他には川崎病発症モデルマウスの作製を通して、病態発現のメカニズムの解明を目指している。

視覚科学研究室：当センター病院の眼科は、難治性の眼疾患が全国から集中して紹介されて高度医療を行っている。この病院の臨床と研究所の基礎研究を融合して、眼の難治性疾患の研究を行っている。難治性疾患の遺伝子を解析し、病態の分子メカニズムを解明して、新しい診断法や治療法の開発を行うことを目的とする。

好酸球性消化管疾患研究室：好酸球性消化管疾患の疾患概念構築、診断検査法開発、治療法開発、発症原因の特定を目指した研究を行っている。

医用深層学習研究室：わが国が直面している大きな課題である、デジタル化、AI 化に対し、AI ホスピタルとともに、「分類器・モデル・エンジン」を個別に対応してきた。また、医療研究連携推進本部（JH）に対し、AI に関する

教材を提供するプロジェクトを他の NC に先駆けて行っており、深層学習について、AI やデジタルを駆使した医療イノベーションの創出、社会の中で活用の礎を構築するための研究及び開発を行っている。

医療技術実装推進室：これからの成育医療は、社会と一体となり課題解決に取り組み、コレクティブインパクトを追求していくことが重要であり、持続的な取組、未来への発展の検討が必要である。そのため、こどもたちの幸せのためのソーシャルインパクトを目指し、研究、実装、持続化への取組を推進するために、医療技術の研究開発成果の社会実装の推進を行っている。

ダイバーシティ研究室：生物学的な観点から、小児の身体的・精神的多様性の基盤に関する研究を行っている。本研究室の成果は、社会のダイバーシティ推進に科学的根拠をあたえる。

再生医療センター：胚性幹（ES）細胞、人工多能性幹（iPS）細胞や体性幹細胞などの様々な細胞を用いた再生医療に関する研究を行っている。人のからだは事故や病気で機能を失うことがある。臓器が一旦機能を失うと、その機能を回復させることは大変難しくなる。「再生医療」とは、他人の臓器そのものを移植するのではなく、細胞の移植を行うことにより、臓器の機能を補い、臓器を再生させることを目指した治療法である。再生医療について、幹細胞、ES 細胞、iPS 細胞を対象とし、その有効性、安全性の様々な観点から検証し、臨床応用の実現に向けた取り組みを行っている。

バイオバンク：当センターでは、胎児から小児、そして妊婦、母親に関する疾患（成育疾患）について、疾患克服のための研究を下支えする仕組みとして、「バイオバンク」を設立した。バイオバンクには貴重な試料を系統的に保管し、研究者が有効利用できるようにする。このバイオバンク事業は、他の国立高度専門医療研究センター（ナショナルセンター）と緊密なネットワークを構築して運営される。

衛生検査センター：当センターでは、小児の稀少な難病やがんの診療に必要な特殊検査を「研究所」で実施して、直接全国の医療機関に提供するために平成 31 年 3 月世田谷区保健所に衛生検査所の申請を行い「成育衛生検査センター」を開設した。研究所の最新の研究成果を、診療に役立つ検査法としてリアルタイムで提供していくことにより、わが国の成育医療の発展に貢献している。

建 物	建築面積	4, 9 8 4. 9 5 m ²
	延床面積	1 7, 9 0 3. 5 5 m ²

臨床研究センター

・臨床研究センター：研究所、病院との密接な連携のもとに、研究成果の臨

	床応用、高度先駆的医療ならびに治験・臨床研究の推進を図る。	
建 物	建築面積	7 0 9 . 6 7 m ²
	延床面積	1 , 1 8 6 . 3 8 m ²
病院概要		
病床数	入院病床	4 9 0 床
	外来定数	9 0 0 人
病棟数	周産期病棟（LDR含む）4 棟 小児病棟 8 棟 小児集中治療病棟（PICU）1 棟 新生児集中治療病棟（NICU）1 棟 母胎・胎児集中治療病棟（MFICU）1 棟 新生児治療回復病棟（GCU）2 棟 もみじの家 1 棟	
標榜科目	内科、精神科、神経科、呼吸器科、消化器科、循環器科、アレルギー科、リウマチ科、小児科、外科、整形外科、形成外科、脳神経外科、心臓血管外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科、放射線科、歯科、心療内科、小児外科、矯正歯科、小児歯科、病理診断科、麻酔科	
特 色	国立成育医療センターでは、小児から思春期、母性・父性にわたるリプロダクション・サイクルを対象とした総合的・継続的医療を行う。 病院では、従来の細分化された医療の反省として、さまざまな病状や訴えをもつ患者様に対して、関連する診療科の多職種がチームをつくり、1 人の患者様をトータルにみることを基本としている。次の 1 2 部・9 センター・もみじの家等の体制によりチーム医療を行っているのが大きな特徴である。 また、病院は 2 4 時間 3 6 5 日開かれ、成育医療の救急病院としての役割を果たしている。明るく、開放的で、アメニティに配慮した病院でもある。 東京都から地域医療支援病院の指定を受けるなど地域医療へ貢献にも努めている。 さらにセンターの使命として医療の人材育成のために教育・研修部をもうけ、若手医療人の人材育成に努めている。また先進医療の情報発信も行い日本の医療の均てん化に努めているものである。	
	<u>・総合診療部</u>：外来診療の総合窓口として、成育医療のプライマリ・ケアのモデルを模索し、専門診療科とともに入院患者の全人的医療を目指す。 <u>・救急診療部</u>：24 時間 365 日救急外来診療を行い、地域医療及び重症患者の対応を行っている。 <u>・小児内科系専門診療部</u>：消化器科、循環器科、呼吸器科、神経内科、腎臓・リウマチ膠原病科、免疫科、内分泌・代謝科、感染症科、遺伝診療科、こころの診療科からなる。各臓器疾患、染色体異常・先天異常を対象とする高度	

専門診療を行う他、全身の病気も扱う。また、他施設では困難とされる医療の提供も行う。

・アレルギーセンター：アレルギー疾患対策の中心拠点病院として国内外のアレルギー診療のモデルとなる水準の高い医療を提供するとともに臨床研究の推進を行っている。

・小児がんセンター：わが国における小児がん診療のモデルとなるべく、全ての小児がん患者に対して世界標準かつ優しく温かい医療を提供するとともに、臨床研究の推進、新規治療の開発、長期フォローアップ体制の確立などを通じて、わが国の小児がん診療をリードすることを目標とする。

・小児外科系専門診療部：外科、心臓血管外科、泌尿器科という内臓器を扱う診療科と、脳神経外科、整形外科、リハビリテーション科という神経・運動器を扱う診療科、他に発達支援評価室、形成外科、耳鼻咽喉科、眼科、皮膚科、歯科により構成され、これらの領域の外科的治療や高度の専門的治療を行うとともに、部内及び院内の他の診療科とチーム医療を活発に行っている。

・手術・集中治療部：手術・検査のための麻酔、手術室の管理及び集中治療病棟（ICU）入院患者の診療を担当する。また、医療機器に依存している高度在宅医療患者の管理を行う。

・周産期・母性診療センター：正常及びハイリスク妊婦の妊娠分娩管理と胎児・新生児の診療を担当。不妊症・不育症の治療、病的新生児の新生児集中治療病棟（NICU）における診療を行う。一方母性については、合併症を持つ女性の妊娠前から産後にかけての内科的管理、不妊症の診療、小児・思春期から生殖年齢までを対象とした婦人科疾患の診療を行う。また、女性が抱える“こころ”と“からだ”の悩みを気軽に相談できる『女性総合外来』を平成15年7月から開設。

・臓器移植センター：小児末期臓器不全に対して、生体臓器移植及び脳死臓器移植医療を行う。

・遺伝診療センター：病院と研究所が一体となって、小児・周産期領域の遺伝やゲノムに関連する疾患の診療（遺伝学的検査など）と支援（遺伝カウンセリングなど）、研究、教育とその支援を行う。

・放射線診療部：エックス線、MRI、超音波などの画像診断を統括し撮影と読影を行う。また、核医学検査、腫瘍性疾患患者の放射線治療を行う。

・臨床検査部：病理検査、検体検査、生理機能検査及び輸血・組織適合に関する検査業務を行う。また、高度先進検査室において、日常の検査では行い得ない研究的な検査を行う。

・病理診断部：免疫組織化学検査、電子顕微鏡検査、遺伝子検査などの特殊

検査を駆使した精度の高い組織診断、細胞診断、病理解剖診断を行う。病理セカンドオピニオン外来、病理外来では、病理医が直接病理診断について詳細な説明を行う。

・中央病理診断部：小児がん拠点病院等の整備に伴って、国立成育医療研究センターが2014年2月5日に小児がん中央機関に指定されたことを受け、病理診断支援、病理医の研修・育成を行っている。全国から年間約800例の小児がん症例を受け付け、それぞれの疾患を専門とする院内・院外の病理医が診断し、治療方針の決定、予後因子の探索などの研究にも貢献している。

・高度感染症診断部：胎児・小児期ウイルス感染症の克服を目指して先端的検査・解析を行うとともに、その成果を診断と治療に応用する。

・妊娠と薬情報センター：平成30年11月1日に組織化された部門である。海外の先天異常ネットワークと連携し薬剤の妊娠や胎児に与える影響に関する研究報告を収集評価し、妊娠中や妊娠を希望する女性に対して薬物治療に関する情報提供を行っている。

・遺伝子細胞治療推進センター：平成31年4月8日に発足し、令和元年12月1日に組織化された部門である。遺伝子細胞治療は、現在、注目されている最先端医療の1つであり、特に小児領域での充実が求められている。遺伝子細胞治療推進センターは、遺伝子細胞治療の実施や研究開発に加え、製薬会社や医療機関などからのコンサルテーションを受け付けている。

・医療連携・患者支援センター：医療連携開発室、医療連携室、患者相談窓口からなる組織として2011年5月にスタートした。2013年7月からは、新たに在宅医療支援室が加わり、現在は4部門となり、事務職、MSW (Medical Social Worker)、PT (理学療法士)、看護師、医師で構成している。

・教育研修センター：教育・研修は当センターの使命の一つであり、成育医療に係わる医療者の教育と人材育成を行っている。教育体制の整備、研究所との協力、論文塾、海外との交流などが発展中である。

・感染制御部：医療従事者、事務ボランティア等院内すべての職員等と連携し患者を医療関連感染症から守るべく活動している。感染防御対策室と抗微生物薬適正使用推進室で組織体制が構築されている。

・医療安全管理部：医療安全は当センターが提供する医療の根幹をなす。様々な病態を有する患者に安全な医療を提供するために、センター内の各部署と連携して、管理体制を構築している。

敷 地	77,853.21 m ² (研究所含む)
建 物	建築面積 16,627.79 m ²
	延床面積 85,601.69 m ²

特別支援学校概要

東京都立光明特別支援学校そよ風分教室として病院管理棟5階フロアに開校されている。小学部、中学部、高等部があり、そよ風分教室には医療的ケアを必要とする児童、生徒が在籍している。

成育こどもシンクタンク概要

「すべてのこどもたちが、笑顔になれる社会を創ります」を理念として掲げている。こどもたちを取り巻く健康課題や社会問題が複雑化する中で、この理念を実現するために、こどもの身体的・心理的・社会的な部分を含めた包括的（bio-psycho-social）な支援に取り組むことが求められている。

成育こどもシンクタンクでは、課題解決に向け、当センターがこれまでも尽力してきた医療や研究の成果を最大限に生かし、政策提言や社会実装支援にまでつなげていくことを目指している。

主要行事一覧

開 催 日	行 事 名
2023年 6月19日	ディズニープロジェクト 壁紙、モバイルムービーシアター、病衣の寄附
2023年 8月5日	成育夏まつり
2023年11月28日	中庭イルミネーション
2023年12月14日	おりがみツリ一点灯式

3. 活動状況

3-1 監査室

1.概要

監査室では、当センターの業務及び予算執行に対する監査並びに監事、会計監査人、との連絡調整等に係る事務を行っている。

令和5年度の主な業務内容は以下のとおり。

- ・ 外部資金による研究費等の経理に関する事項、契約に関する事項については、重点事項として内部監査を実施。
- ・ その他に診療報酬の管理に関する事項、任用(採用手続き等)・給与(諸手当支給等)に関する事項、病院情報システムの運用管理に関する事項、法人文書の管理に関する事項、内部統制に関する事項、出納事務(収入管理・支払等)に関する事項、毒薬・毒劇物等の管理に関する事項、個人情報及び特定個人情報の管理に関する事項、労務管理に関する事項について内部監査を実施。
- ・ 監事が行う監査に関する事務補佐を実施。
- ・ 契約監視委員会を3回開催し、随意契約の妥当性や一般競争入札による契約の問題点等について審議を実施。
- ・ 会計監査人や税理士法人と連携し、職員の会計処理能力の向上に資することを目的に職員を対象とした「習熟簿記研修会」や「消費税研修会」を開催。
- ・ 会計検査院の調査、実地検査等に対し、関係部門との連絡調整等の対応を行った。

以上の業務を行うにあたり、センターの業務が適正かつ能率的に執行されるとともに会計処理が適正に行われるよう、諸規程に対する合规性、業務運営の適正性及び効率性を監査し、問題点の検討及び改善を図ることを基本方針として取り組んでいる。

3-2 企画戦略局

企画戦略局は、理事長を補佐し、行政機関と連携して、成育医療に関するモデル医療、高度先駆的医療、先進的研究事業等の企画及び立案に参画するとともに、その実績や成果を踏まえた政策提言に取り組んでいる。

令和元年4月には企画戦略局の下に広報企画室が設置され、広報・情報発信に一層力を入れている。令和4年6月にはダイバーシティ実現推進室が設置され、女性活躍の推進を踏まえ女性職員の上位職割合を増加させることなど目標とし、ダイバーシティの推進にも取り組んでいる。

令和5年(1～12月)は企画戦略会議を4回開催するとともに、小委員会(看護問題小委員会等)及びWGを設置して様々な課題について議論を行った。中でも外部有識者も交えて開催した「老朽化対策WG」ではCOVID-19による経営状況等の変化を踏まえ、整備計画の見直しを行い、第4回企画戦略会議へ報告を行った。

3-2-1 広報企画室

広報企画室は、広報企画室長、広報企画専門職、広報専門職、広報係長で構成されている。「国立成育医療研究センター」が“国内最高峰の小児と周産期の専門病院”として広く一般に認知され、組織としてのブランド価値を高めていくこと。また国立高度専門医療センターとして、成育医療に関するエビデンスのある最新の情報を、国民に還元していくことを目指す。各係の主な業務は以下のとおり

○広報企画室長

- ・ 目標・課題管理
- ・ 組織内の統一見解の醸成
- ・ 寄付者支援・企業パートナーシップの窓口

○広報企画専門職

- ・ 調査・分析
- ・ 広報戦略立案
- ・ プレスリリース、各種取材対応、メディアプロモート
- ・ 寄付者支援・企業パートナーシップの窓口（室長業務の補佐）
- ・ 緊急時対応
- ・ 広報室員の業務マネージング

○広報専門職・係長兼務

- ・ プレスリリース、各種取材対応、メディアプロモート
- ・ 記者会見・メディアセミナー開催
- ・ SNS 管理
- ・ 患者・一般向け情報発信
- ・ 寄附に関する報告書等の周知に関すること

○広報専門職（ウェブ担当）

- ・ ウェブサイト運営（修正、新規ページ作成、分析）
- ・ 書籍・出版物の作成管理
- ・ 寄附関連業務（寄附に絡んだイベント対応など）

病院・研究所・臨床研究センター、女性の健康総合センターの情報を吸い上げ、メディアに分かりやすい表現・構成でプレスリリース（36 本）を配信することで、メディアからの問い合わせを多くもらっている（メディア露出数：2,121 件）。また、SNS（X、Facebook など）を活用して、広く一般への成育医療に関する情報提供にも務めていて、フォロワー数は増加傾向にある。

3-2-2 ダイバーシティ実現推進室

令和4（2022）年6月1日、センターをあげてダイバーシティ推進に取り組む観点から、女性の活躍推進のみならず、成育医学の発展につながるよう活動を行うこととし、ダイバーシティ実現推進室、ダイバーシティ研究室が設置された。

ダイバーシティ実現推進室は、企画戦略局長が室長を併任し、病院・研究所等の各部門代表者で構成されており、センターにおけるダイバーシティ推進に係る活動計画の立案、予算配分、進捗管理、職場環境整備を所掌とし、組織として推進室の下に研究所部門、病院部門、意識改革部門を設置し、センター既存組織と連携のうえダイバーシティ推進に取り組んでいる。

令和5年は、ダイバーシティ研究室とともに6回の「ダイバーシティ推進会議」を開催し、女性活躍の推進を踏まえ女性職員の上位職割合を増加させることなどを目標とし、ダイバーシティの推進に取り組んでいる。

具体的な活動としては、以下の活動を行った。

- 女性活躍、子育て等両立支援に資するものとして、国の法改正に足並みを揃えた就業規則（育児・介護規程）の改正（育児休業制度改正、配偶者出産休暇の新設、拡充）。（2022年1月～）
- 内閣府ベビーシッター補助券事業への継続参加（2021年12月～）
- 授乳室・搾乳室の設置（2021年11月～）
- 既存の制度としての、研究職向けフレックスタイム、妊娠中の通勤緩和等各種配慮措置の利用促進
- 研究所一部部署における公募要項の英語併記
- ダイバーシティに関する意識調査アンケート（2022年8月、2023年10月）
- 女性管理職割合の確認（2022年6月以降毎月）
- 育児休業・介護休業等、取得状況調査（2022年6月以降毎月）
- 東京医科歯科大学宮崎教授による職員意識啓発の講演会を実施（2023年9月）

3-3 情報管理部

3-3-1 情報解析室

3-3-2 システム管理室

情報管理部は、センターの組織構成上、研究所や病院から独立した部門である。

部内にはシステム管理室と情報解析室の2室が存在し、部長および情報解析室長のほか、システム管理専門職2名・非常勤事務職2名から構成されている。またシステム運用にあたるオペレーターとして、業務委託により業務系3名・基盤系3名が従事している。

業務の範囲としては、電子カルテを基幹とする病院情報システムの管理をはじめ、電子メールやグループウェア・各部門用のファイルサーバー・公開Webサーバーなどの基盤情報システムの管理、情報システムの基盤であるネットワークの管理、診療情報の二次

利用のための助言やデータ抽出・提供などがあり、当センターの診療・業務の円滑な運用や臨床研究の支援に広く関与している。

また情報システム関連以外でも、業務への情報技術利用についての確認や助言（テレワーク支援など）、eラーニングシステムの機器・教材・利用者管理、新採用者対象の研修などの職員教育研修業務を行っている。

病院情報システムの運用管理

- (a) 日常運用管理業務として、利用者IDの登録・削除管理、利用権限の見直し、越権・特殊操作の確認及び承認、テンプレートや文書の登録、各種マスターの更新作業等を行っている。
- (b) 情報システム業者や医療事務委託業者等との定例会議の開催、院内での情報システム関連の委員会（情報システム委員会・部会、個人情報管理委員会）の事務等を行っている。
- (c) 診療システムについての質問や要望・障害報告などを受け付けており、調査・回答や対応検討等を行っている。2023年は6,727件の連絡を受け対応した。
- (d) 不具合対応としては、システム不具合・障害情報の集約、障害時の復旧作業指揮、業者との交渉等を行っている。
- (e) 院内の運用や制度の変更に対し、必要となるシステム変更については、現場や関連システム業者と協議し、方針や仕様の決定・交渉等を行っている。2023年における診療システム改修（改善・機能追加・不具合の修正等）は61件であった。
- (f) センター内の情報交換や業務文書管理を円滑にするため、イントラネットサーバーを運用し、病院の病床利用情報や職員向けの連絡等を掲載している。また院内部門のデータ保管・共有サービスも提供し、数十の部門が業務に活用している。
- (g) 診療データ後利用システムとして、DWH（Data Warehouse）を構築・運用している。DWHには開院（2002年3月）以来の基幹電子カルテシステムのデータが蓄積されており、病院情報システムの更新に関わらず統一的に参照・検索・抽出ができるよう整備している。
- (h) ナショナルセンター間連携事業等の先進的取り組みに際し、企画や協議・環境構築等に主体的に参加している。

診療情報二次利用に関する助言とデータ抽出・提供

利用者からの申請・依頼に基づき、システム管理室にて病院情報システム等から関連情報の検索・抽出作業を行い、データの提供をしている。この際、疑義があれば申請者に連絡し、より目的に即した情報を提供できるよう努めている。2023年における利用申請数は335件であった。

また、診療情報システム用端末で各利用者が作成したファイルの取り出し作業も行っており、2023年は208件に対応した。

そのほか、診療情報の利用に関し、必要な手続きや利用する情報の選定・解析手法等についての助言を適宜行っている。

基盤情報システムの運用

センター基盤情報システムの運用・保守・更新作業として、ネットワーク機器や各種サーバーの管理、グループウェア運用管理（利用者管理を含む）、各部署におけるIPアドレス管理、基盤系端末の各部署への設置・管理、ソフトウェア追加等の管理、eラーニングシステムの運用管理等を行っている。

診療システムと同様、質問や要望・障害報告などを受け付けており、調査・回答や対応検討等を行っている。2023年は4,624件の連絡を受け対応した。

また内閣サイバーセキュリティセンター（NISC）・独立行政法人情報処理推進機構（IPA）・厚生労働省と連携し、マルウェア（コンピューターウイルス等）対策・ファイアーウォール構築・不正通信検出・不審メールの相談受付といったいわゆるサイバーセキュリティ確保のための業務を行っている。

2023年3月には情報セキュリティ規程の改訂案を作成し、情報システム委員会による改訂につなげた。

公式Webサイトの運用管理

広報企画室と協同し、センターの一般向け公式Webサイトの編集・運用管理に携わっている。また同Webサイトを提供するサーバーの管理も担当している。

職員への情報研修・教育

新任職員向けに、情報システム利用の基礎及び個人情報保護・情報セキュリティに関する研修を担当している。また全職員向けにもシステムやインターネット利用上の注意情報等を適宜提供しているほか、全体向け講習の開催や攻撃メール対応の模擬訓練の実施をしている。

その他、eラーニングシステムの教材データ作成や設定・受講者集計、講演会等の院内中継、配布用動画・DVD等の作成支援も行っている。

3-4 人材育成管理部

人材育成管理部は、2023年10月1日に設置され、成育医療を支える多職種の専門家の採用・育成とキャリア支援を統括します。職員研修規程に基づき、職員の現在就いている職又は将来就くことが予想される職の職務と責任の遂行に必要な知識、技能等の取得、その他職務遂行に必要な能力、資質等の向上を図ることを目的とし、各部署で企画実施している研修（研修会、講習会、セミナー、ワークショップ等）を取りまとめるとともにさらなる質的向上を図ります。また、職場内外の研修（新規採用研修、一般研修、管理・監督者研修、専門研修、臨時研修等）の企画・管理を行うとともに、より良い研修環境（e-learningの学習管理システムLMSの導入や最新の学習ツールや教育手法の活用等）や研修実施体制を推進します。

3-5 研究所

3-5-1 研究所概要

1. 研究所ミッション

国立成育医療研究センターは「受精・妊娠に始まって、胎児期、新生児期、小児期、思春期を経て次世代を育成する成人期へと至る、リプロダクションによってつながれたライフサイクルに生じる疾患（成育疾患）に対する研究と医療を推進する」ことを目的に平成 14 年に設立された。その後、平成 22 年に独立行政法人国立成育医療研究センター、平成 27 年度に国立研究開発法人国立成育医療研究センターとなった。当センターの理念は、「病院と研究所が一体となり、健全な次世代を育成するための医療と研究を推進する」ことである。

国立成育医療研究センター研究所は、成育医療に関連する調査・研究を行い、成育疾患の原因解明と治療法・予防法の開発に努めている。具体的には、胎児発生分化、身体発育、精神および社会性の発達等のメカニズムを解明し、これらの過程の破綻から生じる不妊、不育、先天異常、先天疾患、成長・発達障害などの問題を解決していくことを使命と考えている。また、社会医学の面から小児の健康や養育に影響を与える因子の研究に取り組んでいる。研究成果は積極的に社会に発信し、国内外の小児の健康推進に貢献している。

2. 組織・人事

阿久津英憲生殖医療研究部長が再生医療センター長（併任：生殖医療研究部長）となった。佐藤万仁臨床応用ゲノム研究室長が任期満了となった。中村和昭実験薬理研究室長と、黒木陽子成育疾患ゲノム研究室長が研究開発監理部リサーチアドミニストレーション室に併任となった。越智真奈美政策開発研究室長、星野絵里政策評価研究室長、松原圭子ダイバーシティ研究室長、柳久美子臨床応用ゲノム研究室長が着任した。

3. 研究業績

国立成育医療研究センターの英文業績数（学会抄録と訂正文を除く）は、2009 年 161 本、2010 年 190 本、2011 年 212 本、2012 年 222 本、2013 年 257 本、2014 年 305 本、2015 年 336 本、2016 年 355 本、2017 年 360 本、2018 年 364 本、2019 年 389 本、2020 年 402 本、2021 年 447 本、2022 年 445 本、2023 年 346 本であった。研究所と病院の業績を切り分けて検索することはできないが、被引用回数上位の論文の多くは研究所所属著者によるものであった。

特記すべき成果として、

- 1) STAT6 機能獲得型変異に起因した重症アレルギー疾患患者が世界中にいることを明らかにした。
- 2) 染色体微細欠失によるキメラ遺伝子形成が、巨人症の原因であることを解明した。
- 3) 高度不妊治療を受ける女性のストレス要因や父親の産前・産後うつリスク要因を解明した。
- 4) ヒト胎盤由来初代培養細胞を用いた解析により、胎盤のウイルス感染に対する防御機

構を解明した。

- 5) 胚由来の特定タンパク質・CTNNB1 が子宮内膜の着床準備に必要。CTNNB1 欠損マウスを用い、補充物により着床に対する子宮反応が回復することを見出した。

3-5-2 小児血液・腫瘍研究部

造血腫瘍発生研究室、分子病理研究室

1. ミッション

小児血液・腫瘍研究部では、小児腫瘍の分子特性解明と、新規診断・治療法開発を目的とした研究をおこなっている。血液腫瘍、固形腫瘍を主な研究対象とし、ゲノム構造異常とこれによって誘導される発現遺伝子や蛋白等の異常について臨床検体を用いて解析して、臨床情報との相関解析、細胞培養系を用いた基礎実験での機能の検証により、各異常が腫瘍細胞の発生や生物学的特性において果たす役割について明らかにするとともに、その成果を新たな診断法、治療法の開発に応用することを目指している。

2. 研究プロジェクト

[中央診断の推進による小児血液腫瘍の発症実態解明とバイオリソース構築]

- 1) 中央診断の体制整備に関する研究
- 2) 小児血液腫瘍の発症実態の解明
- 3) バイオリソース構築とその研究利用

[小児がんの分子特性解析、新規診断・治療法開発]

- 1) 小児急性リンパ芽球性白血病 (ALL)
- 2) 小児リンパ腫
- 3) ユーイング肉腫ファミリー腫瘍
- 4) 小児腎腫瘍

[小児腫瘍の機能分子解析と増殖制御法開発]

- 1) 急性リンパ芽球性白血病における ZNF384 融合蛋白の機能解析
- 2) *BCOR* 遺伝子縦列重複変異の腫瘍発生における機能解明
- 3) 小児腎腫瘍細胞における RASSF1A の機能解析

3. 研究体制

部長：清河信敬

室長：大木健太郎（分子病理研究室 ～2023.3 まで、2023.4 より AMED に出向中）、造血腫瘍発生研究室長は欠員、

上級研究員：上野瞳

研究員：渡部悟

共同研究員：大喜多肇（慶應義塾大学）、岩淵英人（静岡県立こども病院）、草野晋平（順天堂大学）、山中純子（国立国際医療研究センター）

4. 共同研究体制

小児がんセンター（松本公一センター長）、病理診断部（義岡孝子統括部長）、周産期病

態研究部（中林一彦長）、システム発生・再生医学研究部（高田修治部長）等のセンター内の各部門と、東京大学医学部小児科学教室（加藤元博教授）、日本小児がん研究グループ（JCCG）、東京小児がん研究グループ（TCCSG）を始めとする国内外の多数の研究・医療機関やグループと連携し、研究を推進している。

5. 主な研究成果

国内の小児がん治療の統一プラットフォームである JCCG の中央診断施設および検体保存センターとしての役割を担っているが、JCCG 血液腫瘍分科会（日本小児白血病リンパ腫研究グループ、JPLSG）の細胞マーカー中央診断・遺伝子診断については、前年に引き続き、衛生検査センターとしてその解析を実施した（衛生検査センターの項参照）。

前年に引き続き、すでに集積された保存検体や診断情報を活用し、国内の小児白血病・リンパ腫の発症実態解明および病態解明に関する解析を実施した。B 前駆細胞性 ALL の臨床的、細胞マーカーに特徴を有する新たなサブグループとして報告した *MEF2D* 融合遺伝子陽性群に関して、大木室長を研究代表者とする国際共同研究が進捗し、International Berlin-Frankfurt-Münster study group (The Ponte di Legno Childhood ALL Working Group) 参加施設から集められた 107 例の分析から、*BCL9::MEF2D* 陽性例は予後不良であったが、それ以外の融合パートナーでは予後が不良であることは確認できず、融合パートナーによって予後が異なる可能性を明らかにした報告が *Leukemia* 誌に掲載された。

B 前駆細胞性 ALL に特徴的に発現する CD10 (common ALL 抗原) の低発現は、*ZNF384* 融合遺伝子陽性症例に特徴的なマーカー所見である。*TCF3::ZNF384* および *EP300::ZNF384* の双方が CD10 の遺伝子発現を直接抑制し、CD10 の発現低下を誘導することを明らかにした。

BCOR-ITD の腫瘍発生における役割について、モデルマウス作出等により、解明を試みており、*Bcor*-ITD 変異マウスは、発生時期に胎盤形成の異常を有することを明らかにした（上野瞳 他、第 65 回 日本小児血液・がん学会学術集会 2023. 9. 29-10. 1 において発表）。

がん抑制遺伝子で、小児腎腫瘍において予後との関係が報告されている *Ras association domain-containing protein 1 isoform A* (*RASSF1A*) 遺伝子に関して、予後不良と考えられている腎ラブドイド腫瘍 (RTK) や小児腎明細胞肉腫 (clear cell sarcoma of the kidney, CCSK) では同遺伝子のプロモーター領域が高メチル化されて発現が低下しており、細胞増殖に関与して、予後に影響している可能性について報告した論文が *Pediatr Blood Cancer* 誌に掲載された。

3-5-3 分子内分泌研究部

基礎内分泌研究室、臨床内分泌研究室

1. ミッション

当研究部の第一のミッションは、成育疾患の新規発症機序を解明し、新規診断法および治療法の開発を行うことである。さらに、生殖や成長など基本的生命現象の理解につながる知見の獲得を目指している。主たる研究対象は成長障害、先天性内分泌疾患、先天異常症候群、生殖機能障害である。これらについて、単一遺伝子疾患、ゲノム疾患、インプリ

ンティング疾患、多因子形質の観点から、臨床検体の分子遺伝学および臨床的解析を行っている。さらに、ヒトの情報をもとにモデル動物や培養細胞を用いた解析を実施し、分子レベルでの疾患成立機序解明に取り組んでいる。第二のミッションは、ヒトの多様性の分子基盤解明である。一般集団における性の多様性の解明や染色体構造多型の同定などにより、健常人の表現型のバリエーションを明らかにし、これを形成する遺伝学的因子の解明を行っている。

さらに当研究部は、医学研究を介して社会に貢献することを目標としている。このために、臨床検体のバンキングとデータベース構築を行っている。これまでに国内外の連携機関から 17,000 を超える検体を集積し、世界最大規模の成育疾患バンクを構築した。これらの検体の解析によって得られた情報を、論文、講演などの形で社会に発信している。さらに、かずさ DNA 研究所と連携し、先天性疾患クリニカルシーケンスの社会実装化を進めている。

本研究部の最大の特徴は、当センターの研究部および病院診療科および他の研究者と臨床医との密接な連携である。また、次世代の医学研究を担う若手研究者の育成に取り組んでいる。多くの大学から大学院生を受け入れ、研究指導を行っている。さらに、国際誌の編集、AMED 研究班や学会活動などを介して、医学・医療の発展に貢献している。

2. 研究プロジェクト

[単一遺伝子解析]

- 1) 性分化疾患・性成熟疾患・生殖機能障害における疾患成立機序の解明
- 2) 先天性甲状腺機能低下症の病態解明

[染色体・ゲノム解析]

- 1) ゲノム再構成の発症メカニズムと意義の解明
- 2) ゲノム構造異常による発症メカニズムの解明
- 3) 性染色体が性差を生み出すメカニズムの解明

[インプリンティング/エピジェネティック解析]

- 1) 14 番染色体インプリンティング異常症の病態解明
- 2) Silver-Russell 症候群 (SRS) の病態解明
- 3) 20 番染色体インプリンティング領域 (GNAS 領域) 異常症の病態解明
- 4) インプリンティング制御 DNA メチル化可変領域 (DMR) のメチル化維持機構の解明
- 5) 中枢性思春期早発症の (エピ) ゲノム異常の寄与とそれぞれの病因における臨床的特徴の解明
- 6) 生殖補助医療のインプリンティング疾患発症リスクについての検討

[多因子形質]

- 1) 多因子疾患のリスク因子の同定
- 2) こころの性の多様性の解明

[医療・社会への貢献]

- 1) クリニカルシーケンスの社会実装化
- 2) 若手研究者の育成

3. 研究体制

部長：深見真紀

室長：鏡雅代（臨床内分泌研究室）

室長：鳴海覚志、中村明枝（基礎内分泌研究室）

特任研究員：福井由宇子

上級研究員：中尾佳奈子、服部淳

研究員：荒巻道彦、秋葉和壽

大学院院生：荻原康子、玉岡哲、村西雄貴、上原絵理香、小川朋恵、浦川立貴、増渕颯、
中村紗佑里、五十嵐瑞穂、土井響

共同研究員：中川竜一、牛嶋規久美、川嶋明香、小田野（岩橋）めぐみ、張若谷、齋藤大
輔、福家智子、勝又規行、宮戸真美、島彦仁、山澤一樹、中島萌子、井上毅
信、五十嵐麻希、吉田朋子、鳴海宏子、原香織、成澤宏宗、阿部清美

技師：丹治玉江、鈴木江莉奈、影山郁子、宮迫さおり、植田亜季、金子晶子

事務：山崎久美、秋山真由子

客員部長：緒方勤

4. 共同研究体制

国内外の多数の医療施設や学会と連携し、研究を推進している。

5. 研究の概要

[単一遺伝子解析]

- 1) 性分化疾患・性成熟疾患の原因となる多数の単一遺伝子異常とコピー数異常を同定した。
- 2) 15q26.1 の反復配列多型が先天性甲状腺機能低下症の原因であることを明らかにした。

[染色体・ゲノム解析]

- 1) 不完全な X 染色不活化に起因する *SHOX* の男性優位な発現が、成人身長性差の一因である可能性を見出した。
- 2) 非閉塞性無精子症発症における Y 染色体構造多型の意義を明らかにした。

[インプリンティング/エピジェネティック解析]

- 1) KOS14 の自然歴や医療実態を明らかにし、推奨される遺伝学的アプローチを報告した。
- 2) Multilocus imprinting disturbance の病態を明らかにし、疾患概念を確立した。
- 3) 中枢性思春期早発症における（エピ）ゲノムの異常の寄与を明らかにした。

[多因子形質]

- 1) 小児の簡易描画から性別を判定する機械学習プログラムの開発に取り組んだ。

[医療・社会への貢献]

- 1) さまざまな単一遺伝子疾患やインプリンティング疾患の遺伝学的診断を実装化した。
- 2) 国際誌 editorial board や国際コンソーシアムミーティングに参加し、学術の進歩に貢献した。

3-5-4 免疫アレルギー・感染研究部

1. ミッション・目標

乳幼児期は、病原・非病原微生物の侵入や、食物の摂取、物理的・精神的ストレスへの曝露など種々の成育環境に適応しながら、生体調節システムとしての免疫系が確立される重要な時期である。われわれは環境適応のために働く免疫系ロバストネスの機序および、その破綻によって生じる障害の機序を明らかにすることで、喘息、食物アレルギー、アトピー性皮膚炎などのアレルギー疾患、川崎病などの免疫異常疾患に対する有効な予防制御方法を発見・開発することを最終的な目標として研究を行っている。

先進工業諸国においては前世紀後半から急激な感染症の減少等、衛生環境の改善に反比例してアレルギー疾患・免疫異常疾患が急増している。我が国の乳幼児は人類史上最も衛生的な環境下において、様々な環境汚染物質、アレルゲン・抗原と接触していくことによりこれらの疾患を発症する。

アレルギー研究室では、アレルギー疾患・免疫異常疾患の発症機序、増悪機序を網羅的な分子解析手法を用いて探索し、臨床部門との共同研究によりそれらの分子群の医学的・生物学的意義を検証し、予防法、治療法を開発する事を大きな目標としている。

免疫療法研究室は、川崎病の病態解明および新規診断・治療法の開発を目標としている。川崎病は乳幼児期に好発する原因不明の血管炎症候群であり、現在も患者数が増え続けている。特に冠動脈炎症に対する IVIG 製剤の抗炎症分子メカニズム解明を切り口に、IVIG 不応川崎病に対する新規治療薬およびバイオマーカー等の開発を目指した研究に取り組んでいる。

2. 研究プロジェクト

- 1) 自然免疫系を介したアレルギー疾患の発症・増悪機構の解明と有効な予防・制御療法の開発
- 2) オミックス情報に基づく免疫アレルギー疾患解析研究
- 3) IgE 非依存性の消化管アレルギー及び好酸球性消化管疾患の病態解析
- 4) 胎盤絨毛細胞の免疫応答と妊娠・分娩における機能の解析
- 5) IVIG 不応川崎病の病態メカニズム解明および新規治療薬開発を目指した研究

3. 研究体制（2023 年 12 月 31 日現在）

部長：松本健治（免疫アレルギー・感染研究部長）

室長：森田英明（アレルギー研究室長、病院アレルギーセンター併任）、不在（免疫療法研究室長 2022 年 3 月～）

上級研究員：本村健一郎

大学院生：長野直子（東京大学呼吸器内科）、林優佳（東京大学小児科）、伊藤育容（横浜市立大学小児科）、藤多 慧（東京慈恵会医科大学小児科）、中崎寿隆（慶應義塾大学小児科）

共同研究員：斎藤博久（研究所所長補佐）、中江進（広島大学大学院統合生命科学研究科併任）、原真理子（国立成育医療研究センター 耳鼻咽喉科）、新江賢（杏林大学保健学部免疫学）、海野浩寿（東京慈恵会医科大学小児科）、大野建州（東京歯科大学口腔科学研究センター）、折茂圭介（Ubie 株式会社）、竹田知広（関西医療大学臨床検査学科）、溜雅人（Washington University）、山田絢子（日本ハム株式会社中央研究所）

実験補助員：藤原雅子、高見如美

事務：宇佐美千尋

4. 共同研究体制

1) 自然免疫系を介したアレルギー疾患の発症・増悪機構の解明と有効な予防・制御療法の開発

国立成育医療研究センター病院：総合診療部（窪田 満診療部長）、感染症科（大宜見力診療部長）、循環器科（小野 博診療部長）、腎臓リウマチ膠原病科（亀井宏一診療部長）、国立成育医療研究センター研究所：周産期研究部（秦健一郎部長、中林一彦室長）、成育社会医学研究部（森崎菜穂部長）、国立成育医療研究センター病院アレルギーセンター（福家辰樹診療部長、山本貴和子室長）、同皮膚科（吉田和恵診療部長）、同エコチルメディカルサポートセンター（佐藤未織医員）、同病理診断部（義岡孝子統括部長）同周産期・母性診療センター（和田誠司センター長、佐々木愛子医長）、同研究所小児血液・腫瘍研究部（清河信敬部長）、同研究所システム発生・再生医学研究部（高田修治部長）、同再生医療センター生殖・細胞医療研究部（梅澤明弘所長）、都立小児総合医療センター アレルギー科（吉田幸一医長）、東京慈恵会医科大学小児科学講座（大石公彦教授、勝沼俊雄教授、堀向健太講師）、東京医科歯科大学国際健康推進医学分野（藤原武男教授）、高知大学医学部小児思春期医学教室（藤枝幹也教授）、同大学医学部免疫学教室（宇高恵子教授）、獨協医科大学小児科学教室（吉原重美教授）、千葉大学医学部小児病態学教室（下条直樹教授）、国立病院機構相模原病院アレルギー性疾患研究部（海老澤元宏部長、佐藤さくら病因・病態研究室長）、順天堂大学小児科（篠原示和助教）、アレルギー児を支える全国ネット・アラジーポット（栗山真理子幹事）、鶴見大学付属病院眼科（藤島浩教授）、青葉こどもクリニック（倉光 誠院長）、松田小児科医院（松田健太郎院長）、徳島大学疾患酵素学研究センター（木戸博センター長）、札幌医科大学医学部第一病理学講座（久保輝文助教）、秋田大学医学部総合診療・検査診断学講座（植木重治准教授）、佐賀大学医学部分子生命科学講座（出原賢治教授）、Swiss Institute of Allergy and Asthma Research (Prof.Cezmi Akdis)、Phramongkutklao Hospital (Dr.Boonpiyathad)

2) オミックス情報に基づく免疫アレルギー疾患・難治性疾患解析研究

国立成育医療研究センター病院アレルギーセンター（福家辰樹診療部長、山本貴和子室長）、同消化器科（新井勝大診療部長、清水泰岳医員、竹内一朗医員）、同皮膚科（吉田和恵診療部長）、診断部（義岡孝子統括部長）、ゲノム医療研究部（要 匡部長、柳久美子室長）、システム発生・再生医学研究部（高田修治部長）、分子内分泌研究部（深見真紀部長）、周産期病態研究部（中林和彦室長）、東京都立小児総合医療センター（吉田幸一、森田久美子）、慶應義塾大学（福永興竜教授、天谷雅行教授、足立剛也講師）、国立病院機構相模原病院（海老澤元宏センター長、佐藤さくら部長）、国立病院機構三重病院（長尾みづほ部長）、山口大学小児科（長谷川俊史教授）、長野県立こども病院（伊藤靖典センター長、小池由美部長）、福井大学小児科（大嶋勇成教授）、宮城県立こども病院（三浦克志部長）、あいち小児保健医療総合センター（伊藤浩明部長）、浜松医科大学小児科（宮入烈教授、夏目統助教）、富山大学小児科（足立雄一教授、村上将啓助教）、高知大学小児科（大石拓助教）、福岡市立こども病院（手塚純一郎部長）、群馬大学小児科（滝沢琢己教授）、さいたま市民医療センター（西本創部長）、神奈川県立こども医療センター（犬尾千聡部長）、杏林大学小児科（成田雅美教授）、国立病院機構名古屋医療センター（二村昌樹部長）、東京慈恵会医科大学第三病院小児科（勝沼俊雄教授）、獨協医科大学小児科（吉原重美教授）、愛媛大学小児科（西村幸士助教）、埼玉医科大学小児科（板澤寿子教授）、大阪はびきの医療センター小児科（亀田誠部長）、自治医科大学小児科（熊谷秀規教授）、昭和大学小児科（今井孝成教授）、東海大学小児科（山田佳之教授）、千葉大学アレルギー・膠原病内科（目黒和行講師）、同小児科（中野泰至助教）、藤田医科大学ばんだね病院小児科（近藤康人教授）、東京都立広尾病院小児科（濱口冨香医員）、東京医科歯科大学小児科（森尾友宏教授）、京都大学皮膚科（中島沙恵子准教授）、広島大学小児科（岡田賢教授）、久

留米大学小児科（西小森隆太教授）、東京慈恵会医科大学葛飾医療センター（堀向健太講師）、札幌医科大学小児科（野上和剛助教）、東京大学（岡田随象教授）、神戸市立医療センター中央市民病院（岡藤郁夫医長）、防衛医科大学校小児科（今井耕輔教授）、国立病院機構横浜医療センター小児科（只木弘美部長）、社会医療法人かりゆし会ハートライフ病院小児科（崎原徹裕部長）、藤田医科大学病院小児科（中島陽一講師）、筑波メディカルセンター病院小児科（林大輔科長）、広島大学統合生命科学研究科（中江進教授）、東京慈恵会医科大学分子遺伝学（玉利真由美教授）、国立東京病院（大田 健名誉院長、鈴川真穂呼吸器内科医長）、帝京大学呼吸器・アレルギー内科（山口正雄教授）、昭和大学呼吸器・アレルギー内科（相良博典教授）、岐阜薬科大学生体機能解析学大講座・免疫生物科学研究室（田中宏幸教授）、獨協医科大学リウマチ・膠原病内科（有馬雅史教授）、米国 Northwestern 大学医学部（Robert P. Schleimer 教授、加藤厚教授、Bruce S. Bochner 教授）、藤田学園保健衛生大学皮膚科学講座（松永佳世子教授、矢上晶子教授）、順天堂大学医学部アトピー疾患研究センター（奥村 康教授、北浦次郎教授）、慶應義塾大学医学部眼科学教室（坪田一男教授、深川和己医員）、同病理学教室（金井弥栄教授）、日本薬科大学薬学部（岡田直子准教授）東京科学大学大学院医歯学総合研究科免疫アレルギー学分野（烏山 一特任教授）、日本メナード化粧品（株）総合研究所（長谷川靖司研究員、長谷部祐一研究員）、くろさか小児科アレルギー科（黒坂文武院長）、筑波大学遺伝医学教室（野口恵美子教授）、La Jolla Institute for Allergy and Immunology（川上敏明教授、川上裕子教授）、同研究所動物実験施設/動物実験部門（今井俊夫施設長）、国立精神・神経医療研究センター脳神経内科（齊藤勇二医師）、同メディカル・ゲノムセンター（後藤雄一副センター長）、同神経研究所疾病研究第三部（功刀 浩部長、服部功太郎室長）、同臓器障害研究部長（鍋木康志部長、久保田浩之慢性障害研究室長）、国立医薬品食品衛生研究所医薬安全化学部（斎藤嘉朗部長、斎藤公亮主任研究官）、慶應義塾大学 先端生命科学研究所（曾我朋義教授、平山明由特任助教）、兵庫医科大学免疫学講座（黒田悦史教授）、東京大学医科学研究所ワクチン科学分野（石井 健教授）、国立国際医療研究センター第一糖尿病科（坊内良太郎医長）、国立長寿医療研究センターものわれセンター（佐治直樹副センター長）、国立循環器病研究センター（中岡良和病院副院長）

3) IgE 非依存性消化管アレルギー及び好酸球性消化管疾患の病態解析

国立成育医療研究センター病院：アレルギーセンター（福家辰樹医長、山本貴和子医長）、同消化器科（新井勝大診療部長、清水泰岳医員、竹内一朗医員）、同病理診断部（義岡孝子統括部長）、国立成育医療研究センター研究所：好酸球性消化管疾患研究室（野村伊知郎室長）、ゲノム医療研究部（要 匡部長）、システム発生・再生医学研究部（高田修治部長）、群馬県立小児医療センター アレルギー感染免疫・呼吸器科（山田佳之部長）、札幌医科大学医学部第一病理学講座（久保輝文助教）、秋田大学医学部総合診療・検査診断学講座（植木重治准教授）、佐賀大学医学部分子生命科学講座（出原賢治教授）、慶應義塾大学小児科（高橋孝雄教授、森田久美子助教）、さいたま市立病院小児科（明石真幸部長）、川崎市立川崎病院（外山陽子医長）、けいゆう病院小児科（津村由紀副部長）、栃木医療センター（石井とも医長）

4) 胎盤絨毛細胞の免疫応答と妊娠・分娩における機能の解析

国立成育医療研究センター病院：周産期・母性診療センター（和田誠司センター長）、国立成育医療研究センター研究所：分子薬学研究室（本村健一郎室長）、周産期研究部（秦健一郎部長、中林一彦室長）、日本医科大学分子解剖学（瀧澤俊広教授）、自治医科大学産婦人科（高橋宏典教授）、獨協医科大学産婦人科（成瀬勝彦教授）、国立がん研究センター中央病院腫瘍内科（下井辰徳医長）、聖路加国際病院女性総合診療部（山中美智子特別顧問、塩田恭子医長、秋谷文医幹）、聖路加国際病院腫瘍内科（北野敦子副医長）

5) IVIG 不応川崎病の病態メカニズム解明および新規治療薬開発を目指した研究

国立成育医療研究センター教育研修部（石黒 精部長）、同総合診療部（益田博司医員）、同循

環器科（小野 博部長）、同臨床開発センター企画運営部（小林 徹部長）、同研究所高度先進医療研究室（今留謙一室長、川野布由子研究員、石川百合子研究員）、同研究所社会医学研究部（森崎菜穂部長、小林しのぶ研究員）、国立感染症研究所感染病理部（徳永研三主任研究官）、東京都健康長寿医療センター研究所老年病態研究チーム血管医学研究（豊田雅士研究副部長）、一般社団法人日本血液製剤機構研究開発本部中央研究所蛋白化学研究室（村上弘次室長、宇野修正室長補佐、仲野篤史室長補佐、松嶋夢叶、内田博司）、東北大学大学院生命科学研究所（土井隆行教授）、千葉大学大学院公衆衛生学（尾内善広教授）、埼玉県立小児医療センター 感染免疫・アレルギー科（菅沼栄介科長兼副部長）、横浜市立大学医学部小児科（伊藤秀一教授）

5. 研究の概要

アレルギー研究室

[これまでの研究成果]

アレルギー疾患の発症は遺伝的要因と環境要因の相互作用によって制御されることが明らかとなっている。アレルギー研究室ではこの内、遺伝的要因に関する研究は理化学研究所遺伝子多型研究センター・アレルギー体質関連遺伝子研究チームおよび筑波大学遺伝医学教室らと共同で解析を進めている。一方環境要因に関する研究は疫学研究から、アレルギー発症に関わる因子群の探索を行い、その機序を試験管内で網羅的な遺伝子発現解析を行って探索する、という方法論で推進している。また、マウスモデルを用いたアレルギー発症責任遺伝子群の機能解析も並行して行っている。更に、アレルギー疾患発症予防法の確立を目的に、国立成育医療研究センター・アレルギーセンターと共同研究を行い、介入研究を行っている。

現段階で一旦発症したアレルギー疾患を完全に治すことができる治療は存在しないため、アレルギー疾患の発症を抑制する方法の開発が求められている。アレルギー疾患の大半は最初に乳幼児期にアトピー性皮膚炎/湿疹で発症し、各種抗原に対する IgE 抗体の獲得が全ての引き金となって、食物アレルギー、その後幼児期以降に気管支喘息、花粉症を発症する自然史をとることが知られている（アレルギーマーチ）。故に発症予防には、乳児期の免疫機構を詳細に明らかにするとともに、乳児期に起こる様々な抗原に対する感作を予防することが重要であると考えられる。アレルギー研究室では、乳児期の免疫機構に着目し、詳細な炎症惹起機構及び制御機構を明らかにすると共に、アレルギー疾患発症予防法の開発に取り組んできた。また、アレルギー疾患の発症及び増悪に関与する因子の一つとして、主に組織構成細胞から産生放出されるサイトカインである IL-33 と、その下流でアレルギー性炎症を惹起する 2 型サイトカインを大量に産生する 2 型自然リンパ球

（ILC2）に着目し研究を行っている。新規の免疫細胞である ILC2 は、大量に 2 型サイトカインを産生することでアレルギー性炎症において中心的な役割を担っている。一方でその活性化機構は不明な点が多い。

更に、近年世界中で患者の報告数が増えている、消化管アレルギー及び好酸球性消化管疾患の病態に関する研究を、好酸球性消化管疾患研究室（平成 30 年 10 月新設）と共同で行っている。

1) 自然免疫系を介したアレルギー疾患の発症・増悪機構の解明と有効な予防・制御療法の開発

アレルギー疾患の本態であるアレルギー性炎症（好酸球性炎症、現在は 2 型炎症と呼ぶ）の形成には、抗原特異的な IgE 抗体で感作されたマスト細胞や Th2 細胞などが抗原曝露時に活性化して惹起される獲得免疫応答だけでなく、気道上皮細胞へのウイルス感染や PM2.5・タバコの煙への曝露や、皮膚角化細胞への黄色ブドウ球菌の感染や搔抓によって引き起こされる上皮細胞の障害・活性化によって産生放出されるサイトカインを介した自然免疫応答が重要な役割を映じることが明らかとなってきている。当研究部ではこれまでに、IL-33 が自然免疫応答の中心的な役割を演じるサイトカインであることを世界に先駆けて報告してきた（Oboki K. Proc Natl Acad Sci U

S A 2010; 107: 18581)。また、IL-33 が上皮細胞以外の組織構成細胞や血小板から産生されることを見いだした (Emi-Sugie M. J Allergy Clin Immunol 2020 ;146: 1449、Takeda T. J Allergy Clin Immunol 2016; 138: 1395)。さらに、血小板が ILC2 に付着することにより ILC2 の活性化を支持していることを明らかにした (Orimo K et al. Allergy 2022;77: 843)。

マスト細胞や好塩基球、マクロファージ、自然リンパ球等の細胞が抗原非特異的に活性化されてアレルギー性炎症が惹起されることをヒト気道組織構成細胞やマウス喘息モデルを用いて明らかにしてきた (Yagami A. J Immunol 2010;185: 5743、Ohno T. PLoS One 2011;6: e18404、Morita H. Allergol Int 2012;61: 265、Nakanishi W. PLoS One 2013;8: e78099)。また、アレルギー性炎症の主要なエフェクター細胞であると考えられてきたマスト細胞が、IL-33 によって活性化されると、IL-2 の産生を介して制御性 T 細胞を増幅することで、アレルギー性気道炎症を抑制することを明らかにしてきた (Morita H. Immunity 2015; 43: 175)。更に IL-33 がマスト細胞にケモカイン受容体である CCR7 を特異的に発現誘導することを見出した (Emi-Sugie M, J Allergy Clin Immunol 2018;142: 1341)。また、ヒト培養マスト細胞を抗 IgE 抗体や IL-33 で刺激した際に産生放出される chemokine を網羅的に検討し、IL-33 刺激が臨床的に意義のある濃度の MCP-1 産生を誘導することを見いだした (Emi-Sugie M. Allergol Int 2021;70: 386)。

ダニや真菌、昆虫、甲殻類に幅広く存在するキチンが、IL-33 を介して抗原特異的なアレルギー性気道炎症の増悪に関与していることを明らかにした (Arae K. Sci Rep 2018;8: 11721、Hiraishi T. Sci Rep 2018;8: 18502)。また、この反応には IL-33 だけでなく、TSLP や 2 型自然リンパ球が関与していることを見出した (Arae K. Sci Rep 2021;11: 5913)。

自然リンパ球のうち炎症制御に寄与する IL-10 産生性自然リンパ球が、レチノイン酸によって誘導されること、更に健常の組織では存在せず、炎症によって誘導されることを明らかにした。(Morita H. J Allergy Clin Immunol 2019;143: 2190) 更に、IL-10 産生性自然リンパ球は、ダニによるアレルギー性鼻炎患者のうち、抗原特異的免疫療法が奏功した患者の末梢血で増加することを明らかにした (Boonpiyathad et al. J Allergy Clin Immunol 2021;147: 1507)。

更に、TLR7 のアゴニストが間質内マクロファージから IL-27 の産生を誘導することで、2 型自然リンパ球を介したアレルギー性気道炎症を抑制することを明らかにした (Okuzumi S et al. Am J Respir Cell Mol Biol 2021;65: 309)。

2) アレルギー疾患発症予防法や新規治療法の確立

ハイリスク児を対象に新生児期から毎日保湿剤を全身に塗布し続けることにより、アトピー性皮膚炎の発症リスクが 3 割以上低下することを明らかにした (Horimukai K. J Allergy Clin Immunol 2014;134: 824)。さらに、離乳期早期に鶏卵を摂取させることで、鶏卵による食物アレルギーを 8 割予防できることを明らかにした

(Natsume O. Lancet 2017;389(10066): 276)。この研究成果は、従来の定説を覆す大きな発見であるだけでなく、現実的な食物アレルギー予防法になり得る点で大きな注目を集めた。また、この介入の「アトピー性皮膚炎／湿疹の治療」と「早期の経口摂取開始」の両方が必須であることを米国アレルギー学会誌の Rostrum に発表した

(Matsumoto K, J Allergy Clin Immunol 2018;141: 1997)。

鶏卵アレルギーを含む食物アレルギーの発症予防には、皮膚からのアレルゲン侵入を防ぎ、離乳期からアレルゲンを経口摂取することが重要である。一方で、離乳期からの鶏卵摂取は、既に潜在的に鶏卵アレルギーを発症している患者ではアレルギー症状の誘発リスクとなる。また、鶏卵を摂取する際に皮膚に付着すると、新たに鶏卵アレルギーを発症するリスクになる。従って、より安全な予防法の確立が求められている。ニッポンハムグループとの共同研究で、食品加工用のタンパク分解酵素で処理した卵白は、鶏卵アレルギーモデルマウスに投与した場合に未分解の卵白より症状が誘

発されにくく、且つ未分解の卵白と同等の鶏卵アレルギー発症予防効果を持つことを明らかにした (Yamada A. *Allergol Int* 2022;71: 528)。現在、このタンパク分解酵素処理した卵白の知財を確保し、臨床応用に向けた取り組みを進めている。

また、1966年にIgE抗体を発見したことで有名な故・石坂公成博士らとの共同研究で、妊娠マウスに抗IgE抗体を投与すると、生まれてきた仔マウスで長期間IgE抗体を作らなくなることを明らかにした。(Morita H. *J Allergy Clin Immunol* 2019;143: 1261) 本研究成果は、朝日新聞に1面で取り上げられた他、新聞各紙(日本経済新聞、読売新聞、山形新聞、The Japan Times)で紹介されるなど、注目を集めている

3) オミックス情報に基づく免疫アレルギー疾患・難治性疾患解析研究

小児の周期性熱である Periodic fever, aphthous stomatitis, pharyngitis and cervical adenitis syndrome (PFAPA 症候群) の病態形成に関わる分子経路を、手術時に採取した15症例の扁桃における自然免疫系の分子群のmRNA発現量の網羅的解析やPathway解析などを用いて検討し、PFAPA 症候群には2つの Endotype が存在し、それぞれの endotype で異なる toll-like receptor や inflammasome 関連遺伝子が活性化すること、TLRs 活性化、IFN- γ 産生、1,25-(OH) $_2$ ビタミン D 減少などの自然免疫系と獲得免疫系の相互作用が、病態形成に寄与する可能性を明らかにした (Hara M. *Allergy* 2021;76: 359)。

4) IgE 非依存型消化管アレルギー/好酸球性消化管疾患の病態解明

IgE 非依存型消化管アレルギーは食物アレルギーの一種と考えられているが、その病態、原因抗原に関しては不明な部分が多い。鶏卵が原因の一般的な IgE 依存型食物アレルギーでは、原因となる鶏卵の成分が卵白であることが多いのに対し、消化管アレルギーの一種である食物蛋白誘発性腸炎 (Food protein-induced enterocolitis syndrome: FPIES) では卵黄が原因であることが多いことを明らかにした (Toyama Y. *J Allergy Clin Immunol Pract* 2021;9: 547)。本研究成果は朝日新聞で取り上げられ注目を集めた。また、多施設共同後方視的研究で、2018以降にFPIES患者、特に鶏卵が原因のFPIES患者が本邦において急激に増加していることを明らかにした (Akashi M. *J Allergy Clin Immunol Pract* 2022;10: 1110)。

5) 胎盤絨毛細胞の免疫応答と妊娠・分娩における機能の解析

胎盤は母体と胎児をつなぐ妊娠には欠かせない臓器で、絨毛という微細な構造で形成されており、絨毛の表面には胎児由来の合胞体栄養膜細胞が存在し、この細胞が胎盤の主要な役割(ガス交換、栄養輸送、ホルモン産生等)を担っている。胎児由来である絨毛細胞は直接母胎血に曝露するが、免疫学的に半分非自己でありながら胎盤は免疫寛容によって母体の免疫システムによる拒絶から免れている(母児免疫寛容)。その一方で多くの感染性病原体から胎児を保護し垂直感染を防いでいる。こうした胎盤の機能を理解し、その機能の破綻による妊娠合併症の形成機序や、経胎盤感作(子宮内感作)などの分子機構を解明することは、アレルギー疾患や免疫疾患の発症を理解するだけでなく、妊娠・分娩そのものの生理学的な機構を理解することにも繋がる。と考え、ヒト胎盤から細胞性栄養膜細胞を単離し、試験管内で多核単層の合胞体栄養膜細胞を安定的に培養する系を樹立した (Motomura K. *PLoS One* 2017 ;12: e0177994)。今後はこの系を用いて、胎盤の様々な機能を解析して行く。

6) 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の疫学と病態解明

新型コロナウイルスの重症化リスクとして、糖尿病、肥満、心臓疾患、慢性腎疾患、慢性閉塞性肺疾患 (COPD) が知られている。気管支喘息患者は一般的に呼吸器感染が重症化しやすいと考えられていたが、COVID-19では罹患率、重症化に関与しないことを疫学的に明らかにした。(Matsumoto K. *J Allergy Clin Immunol* 2020;146: 55) 本研究成果は、NHK ニュースや各新聞で取り上げられ大変注目を集めた。新型コロナウイルス (SARS-CoV-2) は小児患者の大多数は重症化に至らないが、一部の患者では小児期特有な重篤な合併症、COVID-19 関連多系統炎症性症候群 (MIS-C) を発症

することが知られている。一方で、MIS-Cの病態や何故小児期にのみ発症するか等、不明な点が多い。我々はウイルス関連分子による刺激により小児扁桃上皮細胞で、新型コロナウイルス感染関連分子が発現増強することを見出した (Hara M. Allergy 2022;77: 2240.)。

7) その他

医薬基盤研研究「多層的疾患オミックス解析に基づく創薬標的の網羅的探索を目指した研究」および「小児希少・未診断疾患イニシアチブ (IRUD-P)」の一環としてアレルギー疾患の疾患解析拠点およびトランスクリプトーム領域の解析拠点として研究を行っている。さらに、Birth Cohort Studyとして、環境省エコチル事業、理研オープンラボ、および成育母子コホート研究などに、積極的に参画している。

6. 本期間の研究成果

1) 自然免疫系を介したアレルギー疾患の発症・増悪機構の解明と有効な予防・制御療法の開発

気管支喘息をはじめとしたアレルギー疾患が急激に増加した原因の一つとして、近代化に伴って衛生的な環境となり幼少期に微生物（細菌やウイルス）へ曝露される機会が減ったことが原因であるとする「衛生仮説」が広く知られている。近年、この「衛生仮説」に加えて、人間の体が外界と接する部分に存在する細胞（上皮細胞）のバリア機能が何かしらの要因で障害されることがアレルギー疾患発症の要因であるとする新たな仮説「上皮バリア仮説」が提唱された。上皮バリア機能障害を誘導する環境要因として、大気汚染物質などとともに、家庭で使用される洗濯用洗剤をはじめとした合成洗剤など、様々な因子が影響する可能性が示唆されており、実際にクリーニング業に従事する人では職業性喘息の頻度が高いことが知られていた。今回、マウスに洗濯用洗剤、または洗剤に含まれる界面活性剤を吸入させると、気道のバリア障害とともに、酸化ストレス誘導を介して IL-33 の産生が増強され、ILC2 の活性化を誘導して、喘息様気道炎症が誘導されることを明らかにした (Saito K. Allergy 2023;78: 1878)。また、ボランティアの家庭内粉塵の検体全てから、一定量の界面活性剤が検出される事を見いだした。

2) 神経系の働きがアレルギー性炎症を制御する機構の解明

マウントサイナイ医科大学（米国）の Brian S. Kim 教授らの研究グループと共同で、肺の末梢感覚神経が喘息様気道炎症を軽減させるメカニズムに関する研究を行った。その結果、皮膚では末梢感覚神経 JAK1 は主に痒みを伝達し、かきむしることによる皮膚障害を介して炎症を悪化させるのに対し、肺では逆に神経ペプチドの CGRP β を介して 2 型自然リンパ球 (ILC2) の働きを抑制して炎症を軽減させるように働くことを見いだした (Tamari M. Cell 2024;187: 44)。このことは、これまで炎症には直接関与しないと考えられていた神経系は臓器特異的に作用し、炎症制御の新たな標的となり得ることを示唆している。

3) オミックス情報に基づく免疫アレルギー疾患・難治性疾患解析研究

重症アレルギー性角結膜炎患者に対して、免疫抑制剤であるタクロリムス点眼が著効する症例が多く報告されているが、その一方で無効である症例も少なくない。有効性を予測する因子として涙液中のサイトカイン/ケモカインやペリオスチン

(POSTN) を網羅的に解析した結果、患者のエンドタイプが 4 群に分類できること、POSTN と TARC や IL-8 を組み合わせることで AUC が 0.952 と高い確度でタクロリムス点眼の有効性が予測できることを見いだした (Okada N. Allergy 2023;78: 319)。

小児の周期性熱である Periodic fever, aphthous stomatitis, pharyngitis and cervical adenitis syndrome (PFAPA 症候群) の治療には扁桃摘出術が最も奏効率が高いが、それでも約 15%の症例では周期性熱が残存する。この扁桃摘出術の有効性を事前に予測する因子を探索して、周期性熱に頭痛が随伴し、かつ発症時年齢が以上の児では 100%奏功する事を見いだした (Hara M. Int J Rheum Dis. 2023;26: 480)。

さらに、免疫アレルギー疾患の解析にオミックス解析が有用である事を明らかにするため、Year-in-reviewを行い、その結果が米国アレルギー学会雑誌に掲載された (Saito H. J Allergy Clin Immunol 2024;154: 1378)。

4) 重症アレルギー疾患の発症に繋がる新規遺伝子変異の発見と機能解析

生後早期から複数の重症アレルギー疾患と、高 IgE 血症、好酸球性消化管疾患を伴う患者において、STAT6 遺伝子変異を同定し、その遺伝子変異により STAT6 が異常に活性化することが疾患の原因であることを世界で初めて明らかにした (Takeuchi I et al. J Allergy Clin Immunol 2023;151: 1402)。その後、同様の症例が 22 例から報告され、森田室長が加わって新規の症候群として報告されるとともに (STAT6 Gain-of-Function International Consortium. Trends Immunol 2024 ;45: 138)、アレルギー疾患の様な Common disease の若年発症・難治例にはこうした monogenic disorder が含まれている可能性が示唆され、米国アレルギー学会雑誌では特集号が組まれた。

5) IgE 非依存型消化管アレルギーの病態解明

2015 年 4 月から 2016 年 3 月の間に消化管アレルギーを発症した 2 歳未満の新生児、乳児の患者について、日本全国の病院および診療所に質問票を送付して全国疫学調査を実施した。その結果、嘔吐と血便の有無で分類される 4 つのクラスターについて、患者数はほぼ均等に分布していること、新生児、乳児の消化管アレルギー患者 (FPIES に) の約半数は新生児期に発症していることが明らかとなった。また、重症度が最も高く特に注意が必要な「クラスター1」(嘔吐と血便の症状がある患者グループ) の発症は出生後 7 日目 (中央値) と、4 つのクラスターの中で最も早いことや、原因食物は牛乳由来ミルクが最も多く見られたが、母乳、治療用ミルク、大豆、鶏卵、米により発症した患者も存在する事が明らかとなった (Suzuki H. Allergol Int 2024;73: 264)。

好酸球性消化管疾患の発症機序については不明な点が多く残されている。一部の症例では特定の食物抗原に対する非 IgE 依存性の免疫応答が関与する可能性が示唆されている。成育で特定の食物抗原除去あるいはアミノ酸製剤に野菜などを加えた食事療法を実施した患者について、その安全性と認容性を検討したところ、7 例中 6 例でこの食事療法が実施でき、栄養学的には脂質が不足する可能性が明らかとなった (Nagashima S. Allergol Int 2023;72: 306)。

本邦における FPIES の症例の急速な増加をうけ、臨床現場での対処方法 (Action plan) を Delphi 法で策定し、その有用性について検討した (Kram YE. World Allergy Organ J 2023;16: 100772)。

6) 胎盤絨毛細胞の免疫応答と妊娠・分娩における機能の解析

ヒト胎盤から分離した細胞性栄養膜細胞を培養して、試験管内で多核単層の合胞体栄養膜細胞を作成し、自然免疫系の受容体の発現を確認したところ、二重鎖 RNA の受容体のみが高発現することを見いだした。また各種病原体の Mimic である各種 Pathogen-associated molecular patterns (PAMPs) で刺激を行ったところ、poly IC 刺激時にのみ強力な免疫応答が惹起された。合胞体栄養膜細胞を poly IC 刺激した際と、末梢血を poly IC 刺激した場合の遺伝子発現と比較したところ、抗ウイルスインターフェロンの産生を誘導することは共通に認められたが、合胞体栄養膜細胞でのみミトコンドリア経路を介した細胞死 (アポトーシス) が誘導されることを証明した (Motomura K. J Immunol. 2023;210: 1552)。合胞体栄養膜細胞には母胎からの拒絶を防ぐために HLA Class-I 分子の発現が無いため、Cytotoxic T 細胞によるウイルス感染細胞の除去が及ばないと考えられており、今回明らかにした細胞死はウイルスの垂直感染を防ぐ重要な仕組みであると考えられる。

また、この胎盤における自然免疫系受容体の機能についてまとめた総説 (Motomura K. J Reprod Immunol 2023;156: 103811)、抗ウイルス免疫応答は妊娠合併症である preeclampsia の発症機序の一端を担う可能性について言及した総説を発表した (Motomura K. Am J Reprod Immunol. 2024 Apr;91(4):e13844)。

さらに、既に発表していたヒト胎盤から細胞性栄養膜細胞を単離し、試験管内で多核単層の合胞体栄養膜細胞を安定的に培養する系 (Motomura K. PLoS One 2017 ;12: e0177994) を詳細に Step-by-step で解説した総説を Placenta 誌に発表した (Motomura K. Placenta. 2024 Jul 24;S0143-4004(24)00603-9. Epub ahead of print)。

7) 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の疫学と病態解明

本邦の複数の健康保険組合より寄せられたレセプト情報を元に、COVID-19 流行が花粉症の治療に及ぼした影響を明らかにした (Saito-Abe M. Clin Transl Allergy. 2024;14: e12394)。

8) 乳酸菌果汁が牛乳アレルギー患児に対する経口免疫療法に及ぼす影響

小麦や卵のアレルギーに比べて効果が得られにくいとされる牛乳アレルギーに対する経口免疫療法に乳酸菌果汁 (死菌 *Lactiplantibacillus plantarum* YIT 0132) を上乗せすると、24 週後の牛乳アレルギーの閾値改善効果は得られなかったが、腸内環境の変化により免疫バランスは潜在的にアレルギー体質を改善し、耐性獲得の方向へとシフトした可能性が考えられる (Yamamoto-Hanada K. Benef Microbes 2023;14: 17)。

免疫療法研究室 (2020 年 10 月 1 日より炎症制御研究室に改称、2022 年 4 月から室長不在)

【これまでの研究成果】

川崎病は乳幼児期に好発する血管炎症候群であるが、未だその原因が特定されておらず病態形成機序も不明な点が多い。1990 年代に川崎病に対する免疫グロブリン大量静注療法 (IVIG) が開発され、後遺症である冠動脈瘤形成患者数が激減した。一方、本邦における患者数は年間 1 万 5 千人を超えており、約 20% の患者が初回 IVIG 治療に不応で心後遺症合併リスクも高い。また本邦における小児期発症後天性心疾患の最大の原因が川崎病による心後遺症合併であり、これをゼロにすることが社会および臨床現場における最大のニーズである。そのためには、IVIG 不応患者に対するエビデンスに基づいた新規治療法の開発が必要であると考え、IVIG 製剤の冠動脈炎症反応に対する抗炎症分子メカニズムの一端を世界に先駆けて明らかにした (Matsuda A., et al. Eur J Immunol. 2012)。さらに、ヒト冠動脈血管内皮細胞の炎症モデルを用いた解析から、IVIG 製剤の抗炎症機序には転写因子 NF- κ B の抑制が関与しており、一方 IVIG 不応には IL-17 や IL-1b によって誘導される転写因子 C/EBP β や δ が関与することを見いだした。これらの研究成果内容に基づき、特許申請を行った。また、明らかにした IVIG 不応メカニズムに基づいて、AMED の創薬等先端技術支援基盤プラットフォーム (BINDS) の支援のもと、東北大学化合物ライブラリーから提供を受けた 6,400 種の化合物を用いて IVIG 不応川崎病患者に対する新規創薬ターゲットのスクリーニングを実施し、15 個の候補物質まで絞り込んだ。

1. 本期間の研究成果

1) IVIG 不応川崎病患者に対する新規創薬ターゲットの探索

これまでに冠動脈血管内皮細胞 (HCAEC) の培養系を用いて確立した IVIG 不応モデルを活用し、IVIG 不応を解除する物質として、TCA サイクルの代謝物およびその誘導体であるジメチルイタコン酸 (DI) とジメチルフマル酸 (DMF) を発見した。DI および DMF の詳細な作用メカニズムとして、細胞内の IVIG 不応答性に関与する転写因子である IL-1 β 誘導性の I κ B ζ の発現を抑制することを見いだし、現在論文投稿中である。また、新規治療薬候補 (DI および DMF) の *in vivo* における薬効を評価する目的で、川崎病血管炎モデルマウス (ヒト型) および乳酸菌細胞壁抽出液 (LCWE) による川崎病血管炎モデルマウスを用いて動物実験を実施している。

移植免疫研究室 (ラジオアイソトープ管理室)

1. ミッション・目標

研究活動においては、種々の臓器移植、自己免疫疾患、慢性炎症モデル、あるいは *in vitro* の評価系を用いて、免疫寛容の誘導・維持に関与する分子・細胞の機序の解明を行っている。また、制御性 T 細胞、iPS 細胞由来制御性樹状細胞 (DC)、間葉系幹細胞等を用いた免疫制御細胞療法 (Cell Based Therapy) を確立するための基礎研究を行っている。さらに、新規免疫抑制剤、新規臓器保存法の開発を数社のベンチャー企業と精力的に行っている。一方、悪性腫瘍モデルを用いたがん免疫、新規がんワクチン、抗がん剤の開発及びその作用機序の解明するための基礎研究も推進している。近い将来これらの研究テーマの成果を移植・再生医療、がん医療のヒトへ応用することを通じて、患者の QOL の向上、医療費の削減に繋げていきたい。

業務活動は、ラジオアイソトープ施設の整備維持と安全運営、変更・許可等の届け出・申請、ラジオアイソトープ使用者の健康管理、安全使用の指導及び知識の周知教育、放射線ラジオアイソトープ関連の情報提供や研究活動の支援など、研究所内でのラジオアイソトープ使用に関する支援・管理を務めている。

2. 業務活動

1) 原子力規制委員会へ申請書・届出・報告

「2022 年度放射線管理状況報告書」を作成し、原子力規制委員会宛に提出した。

2) RI 使用施設の点検および維持活動

RI 廃水貯留槽の清掃と点検の実施、RI 関係施設の自主点検 (2 回/年)、RI 廃棄物引き取り依頼と日本アイソトープ協会への引渡し (毎年 1 月、7 月頃実施) などの作業を実施した。

この他、放射性化合物の受注受入登録 (毎週)、施設の汚染検査と除染清掃 (毎週)、廃棄物の整理と排気排水の状況管理 (毎週)、個人線量計 (ガラスバッジ) による被爆状況の把握 (月 1 回)、自動現像機、超純水作成装置、CO₂ インキュベータ、入退室管理システムの保守管理、RI の使用者への最適環境の整備などを行い、RI の安全な管理に努めた。

また、放射線安全管理委員会を年に 2 回開催した。委員長、放射性取扱主任者、放射線取扱代理者、放射線施設責任者、施設管理責任者、健康管理医ならびに RI 事務担当者が共同して、放射性同位元素の安全管理に関する年間業務の確認、個人線量計の適正な利用法の推進、新規 RI 利用登録講習会の開催方法の検討、管理区域入退室システムの保守管理等の検討を行い、法令遵守と安全管理に一層努めることを申し合わせた。

3) RI 登録者講習会

新規登録講習会 (計 2 時間) を年 2 回 (4 月、10 月もしくは 11 月) 実施した。講習内容は放射線・放射性同位元素概論、放射線防御の基礎、取扱の基本、施設の基準、法令、施設の説明であった。

また、継続登録者講習会は対面式ではなく、Stream で動画配信を行った。過去 1 年間の RI 管理の報告およびその他の気づいた点の注意事項を伝達した。講習内容は「放射線試薬の安全取り扱いガイド」であった。

4) 健康診断・血液検査

新規登録者は新規登録講習会を受講後、最初に管理区域へ立ち入る前に実施した。また利用登録中の業務従事者については、特殊健康診断、職員健康診断の年 2 回健診を実施している。

これらの管理業務には、RI 管理室事務補助員として小越千草、(株) 千代田テクノルより業務派遣（関軒昌幸、3 回／月）が参加した。また、放射線安全管理においては、放射線施設責任者である深見真紀、放射線取扱代理者として藤渕智康、健康管理医として松本健治、管理区域担当者として黒木陽子、また施設管理責任者として杉野正弘に御協力を頂いている。

3. 研究活動

当研究室では、基礎研究は臨床研究につなげるトランスレーションリサーチであることを常に念頭に置き、基礎研究の成果を近い将来に「移植医療」・「再生医療」・「がん医療」の臨床応用へと推進できるような研究を行っている。この一年間は主に下記のテーマで国立成育医療研究センター内外および海外の研究グループ、企業と連携体制を取り、研究を進めていた。

4. 研究体制

室長：梨井康（李小康）

研究員：胡鑫、稲永由紀子

研究補助員：アヌパマラジャパクシェ、櫻井海月

共同研究員：藤野真之、馬快、丁兆倫、小原弘道、中條哲也、森田美和、松田佳子、松永愛理、曹書寧、田中淳之介、前原未来、柳田琴音、水一方、王白潔、上田大輔、呉洪福

事務：小越千草

5. 研究の概要

1) 担癌モデルを用いた PD-L1 抗体による β -グルカンの抗腫瘍効果の増強に関する研究

腫瘍微小環境（TME）では、腫瘍に動員された CD11b⁺ 細胞（腫瘍随伴マクロファージ（TAMs）、腫瘍随伴樹状細胞（TADCs）、骨髄由来抑制細胞（MDSCs）を含む）が、腫瘍の成長を支え、免疫逃避を促進する上で重要な役割を果たしている。これらの細胞は、T 細胞を介した抗腫瘍免疫応答を抑制し、腫瘍が生存しやすい免疫抑制環境を作り出す。しかし、腫瘍に動員された CD11b⁺ 細胞は顕著な可塑性を持ち、特定の刺激により腫瘍促進型から抗腫瘍型に変化することが可能であり、免疫療法の有望なターゲットとなる。本研究では、*Aureobasidium pullulans* 由来の β -グルカン（AP-BG）を免疫刺激剤（アジュバンド）として使用し、腫瘍に動員された CD11b⁺ 細胞を活性化する効果および抗 PD-L1 モノクローナル抗体（mAb）治療との相乗的抗腫瘍効果を検証した。

担癌（B16F10 メラノーマ）マウスモデルでは、AP-BG および抗 PD-L1 mAb の単独療法では腫瘍増殖抑制率（TGI）はそれぞれ 24.8%と 19.3%と限定的だった。しかし、これらを併用することで抗腫瘍効果が大幅に向上し、TGI は 54.9%に達した。さらなる解析により、併用療法は腫瘍浸潤リンパ球（TIL）の機能を著しく改善し、細胞傷害性マーカー（グランザイム B、パーフォリン、CD107a）の発現、炎症性サイトカイン（IFN- γ 、IL-2）の分泌、および増殖マーカー Ki67 の増加を引き起こすことが明らかになった。また、腫瘍に動員された CD11b⁺ 細胞は炎症促進活性を強化し、IL-1 β 、IL-6、IL-12 の産生が著しく増加し、免疫抑制型から免疫刺激型への変化が示された。さらに、AP-BG の CD11b⁺ 細胞への活性化効果は非腫瘍環境でも確認された。未処置 Naive マウスでは、AP-BG は腹腔内マクロファ-

ジ (PEC) の炎症促進能力を大幅に高め、炎症性サイトカイン (IL-1 β 、IL-6、IL-12、TNF- α) の分泌を誘導し、PD-1 および PD-L1 の発現を増強した。しかし、担癌マウスでは、AP-BG が CD11b⁺ 細胞のサイトカイン産生を増加させた一方で、PD-1 の発現は TME の免疫抑制影響により変化なかった。これは抗 PD-L1 mAb 療法が免疫チェックポイント抑制を緩和し、T 細胞の細胞傷害性と増殖を著しく強化すると同時に、CD11b⁺ 細胞の抗腫瘍潜在能力を活性化したと考えられる。

一方、PD-1/PD-L1 経路は TME における重要な免疫抑制機構であり、T 細胞の増殖を阻害し、アポトーシスを誘導し、抗原提示を弱める。AP-BG は腫瘍に動員された CD11b⁺ 細胞を活性化することで TME の免疫環境を改善したが、同時に高い PD-1 および PD-L1 の発現を誘導し、その抗腫瘍効果を制限した。抗 PD-L1 mAb の追加投与はこの制限を効果的に克服し、TIL の細胞傷害性と増殖を回復させ、さらに CD11b⁺ 細胞を活性化して強力な抗腫瘍機能を発揮させた。

本研究は、AP-BG と PD-L1 ブロック療法の相乗的抗腫瘍効果および免疫機構を体系的に明らかにした。AP-BG は腫瘍に動員された CD11b⁺ 細胞を活性化し、T 細胞を介した抗腫瘍免疫を強化する一方で、PD-L1 ブロックは AP-BG による免疫チェックポイント抑制を効果的に緩和した。併用療法は腫瘍増殖を著しく抑制するだけでなく、免疫抑制的な TME を再構築し、腫瘍に動員された CD11b⁺ 細胞を標的とするがん免疫療法の新たな知見と実験的証拠を明らかにした。この発見は将来臨床応用の可能性が高く、多様な腫瘍モデルおよび臨床試験でのさらなる検証を必要と考えている。

3-5-5 成育遺伝研究部

1. ミッション・目標

先天性免疫異常症成育遺伝研究部の最大のミッションは、小児の難治性遺伝性疾患に対する「遺伝子医療」の確立である。次世代シーケンサーを始めとする遺伝学的解析の急速な進歩は、小児の遺伝性疾患の病態の解明に大きな進歩をもたらし、さらに近年の遺伝子治療技術の発展は、治療が困難であった疾患に対する新たな治療法の開発につながった。当研究部では、小児遺伝性疾患患者の予後の向上を最大の目的として、未知の病態解明、新生児スクリーニング法による早期発見・診断、遺伝子細胞治療を含む最先端医療の開発に取り組んでいる。

2. 研究プロジェクト

- 1) 小児の難治性遺伝病に対する *ex vivo* 遺伝子・細胞治療法の確立
- 2) 小児の難治性遺伝病に対する *in vivo* 遺伝子治療法の確立
- 3) ゲノム編集による先天性免疫異常症への遺伝子治療法の開発
- 4) 重症複合免疫不全症 (SCID) の新生児スクリーニングの普及
- 5) 遺伝子細胞治療推進センターにおける活動
- 6) 原発性免疫不全症の病態解析や新規治療法の有効性評価
- 7) 先天性血小板減少症の中央診断システムの構築など

3. 研究体制

部長：小野寺雅史

室長：内山徹

研究員：安田徹、三浦茜

FACS オペレーター：枝澤佳織

テクニカルスタッフ：安藤由希子、秋葉由美、峰岸知子、菊池亜美花、國里ゆき子

共同研究員：岡田真由美、河合利尚、石川尊士、中國正祥

事務：橋井晶子、近藤直子、桜山ちづる

4. 研究の概要

1) 小児の難治性遺伝性疾患に対する ex vivo 遺伝子・細胞治療法の確立

先天性免疫異常症であるアデノシン・デアミナーゼ (ADA) 欠損症、X 連鎖慢性肉芽腫症、Wiskott-Aldrich 症候群に対して造血幹細胞遺伝子治療の臨床研究・治験を実施している。治療後の患者の免疫再構築、ウイルスベクターの挿入部位解析、ベクターコピー数解析などを通じて、長期の有効性・安全性の検討を行っている。

2) 小児の難治性遺伝病に対する in vivo 遺伝子治療法の確立

遺伝子治療の開発では、ベクター製造施設の整備や大型動物による非臨床試験の必要性などもあり従来の医薬品開発に比べてコスト面での負担が大きい。そこで、共通のウイルスベクターを用いることで開発の加速化を図る「遺伝子治療ベクタープラットフォームパイロットプロジェクト：Platform vector gene therapy (PaVe-GT)」を 2019 年より立ち上げ活動を行っている。モデル疾患として遺伝性網膜ジストロフィーを標的とし、アデノ随伴ウイルス (AAV) ベクターの構築と現在動物モデルを用いた非臨床 POC の取得を行っている。その他、ニーマンピック病 C 型に対する in vivo 遺伝子治療法の基礎開発として、関連企業との共同研究として、神経親和性の新規 AAV カプシドを用いた遺伝子治療法の開発を開始した。

3) ゲノム編集による先天性免疫異常症への遺伝子治療法の開発

従来のウイルスベクターによる遺伝子治療に加えて、ゲノム編集による遺伝子治療法の開発を行っている。X 連鎖高 IgM 症候群 (XHIM) に対するゲノム編集による T 細胞遺伝子治療の開発では、ゲノム編集企業より新規の CRSIPR ヌクレアーゼの提供を受け、臨床試験の開始に向け、有効性、安全性に対する非臨床試験を実施中である。

また、従来の Cas9 ヌクレアーゼによるゲノム編集では、DNA の二本鎖切断 (double strand break: DSB) による染色体異常などが報告されており、これらの課題を克服するため、大阪大学との共同開発として Cas9 ニッカーゼによるゲノム編集法 (NICER 法) を用いた遺伝子治療の開発を開始した。NICER 法では、ヘテロ変異を標的として、変異アレルに特異的なニッカーゼと、正常・変異アレル共通のニッカーゼを同時に投与することで、正常アレルを鋳型とした変異アレルの修復が可能である。先天性免疫異常症の中でも、常染色体顕性遺伝形式を取る疾患や、複合ヘテロ接合性変異による疾患を標的に開発を行っている。

4) 重症複合免疫不全症 (SCID) の新生児スクリーニングの普及

出生後早期より致死的感染症を発症する重症複合免疫不全症 (severe combined immunodeficiency: SCID) の新生児スクリーニングの普及に向け活動を行っている。2019 年 4 月よりオプショナルスクリーニングとして、全国の提携医療機関において SCID スクリーニングを開始しており、当研究部は開始時よりスクリーニング陽性者に対する精査を担当している。また、関連企業とともにリアルタイム PCR 法によるスクリーニングキットの開発・販売を通して、国内の SCID スクリーニングの普及に貢献をしている。

5) 遺伝子細胞治療推進センターにおける活動

成育遺伝研究部における遺伝子細胞治療の経験を基に、2019 年より遺伝子細胞治療推進センターとしての活動を行っている。当センターにおいて神経疾患に対する AAV ベクターに

よる in vivo 遺伝子治療、難治性がんに対するキメラ抗原受容体 (CAR) T 細胞療法などの ex vivo 遺伝子治療を実施する際の院内管理体制の構築のほか、ウイルスベクターの排出 (カルタヘナ) に関する指針の作成、国内の医療機関に対して遺伝子治療の実施体制構築のサポートを提供している。

6) 先天性免疫異常症の病態解析や新規治療法の有効性評価

当センターおよび関連病院において免疫能の低下が疑われる患者に対して、フローサイトメトリーを中心とした免疫病態解析を行っている。2023 年度は 152 件の解析を実施し、先天性免疫異常症患者の診断に貢献している。

その他、SCID の一つであるアデノシン・デアミナーゼ (ADA) 欠損症は、酵素補充療法が存在することから早期の診断が重要であるが、当研究部は国内で唯一 ADA 活性の測定が可能であることから、ADA 欠損症の診断・検査を引き受けている

7) 先天性血小板減少症の中央診断システムの構築

先天性血小板減少症・異常症は、血小板の産生・機能に関連する遺伝子の異常によって引き起こされる遺伝性の疾患である。慢性・難治性の免疫性血小板減少症 (ITP) の 10% 程度が本症であると言われており、長期のステロイド投与や脾臓摘出などの誤った治療を受けている可能性がある。2019 年から国立成育医療研究センターに先天性血小板減少症・異常症の疾患レジストリとハイスループット遺伝子解析システムによる中央診断システムを構築し、当研究部は検体の収集と遺伝子解析を実施している。

3-5-6 ゲノム医療研究部

1. ミッション・目標

ゲノム医療研究部では、さまざまな疾患に対する遺伝的要因、病態を明らかにし、個人のゲノム情報に基づく最適な医療が実現されることを目標としている。

ゲノム医療研究部では、原因不明の小児希少・難病など、様々な遺伝子関連疾患について、ゲノム解析を中心に、原因解明、分子病態解明といった基礎研究から、診断、治療、予防に繋がる臨床応用研究までを行う。技術的には、従来のゲノム解析に加え、短鎖型次世代シーケンサ (短鎖型 NGS) や長鎖型一分子シーケンサ等を用いた解析および基礎的開発研究も推進する。加えて、解析データの精度、プログラムに関する開発研究、また、遺伝子関連疾患の血液検体、唾液検体等からの迅速診断システム、遺伝子網羅的な (プロモーター領域を含む遺伝子全長) 解析などの臨床的に有用な解析法の開発を行う。さらに、遺伝子関連疾患に関して、通常の短鎖型次世代シーケンサを用いたゲノム解析で解明できない約 55% の症例について、RNA-seq 解析、長鎖型次世代シーケンサ、人工知能などを活用し、新たな手法、技術により原因の特定を行う。これらを推進して、ゲノム医療の実現を目指す。

2. 研究プロジェクト

- 1) 遺伝子関連疾患の原因・病態解明
- 2) 遺伝子関連疾患のゲノム診断および診断法の開発
- 3) 人工知能を用いた診断支援システムの開発と運用

3. 研究体制

部長：要匡

室長：佐藤万仁 (臨床応用ゲノム研究室)

室長：黒木陽子 (成育疾患ゲノム研究室)

研究員：柳久美子、五十嵐ありさ

大学院生：青木大芽、飯田貴也

共同研究員：我那覇章（国際医療福祉大学成田病院 耳鼻咽喉科 教授）、山毛利雅彦、
他 6 名

研究補助員：比田井朋美、阿部幸美、小林奈々、藤井陽子

事務担当員：金子加奈子、山口圭子、磯部未紀

4. 共同研究体制

韓国サムスン医療院小児科 Jin Dong-Kyu 教授を始め、国内外の多数の施設、研究者と共同研究を行っている。

5. 研究の概要

1) 遺伝子関連疾患の原因・病態解明

①未診断疾患の原因解析・診断

希少・難病は、その約 8 割が遺伝性疾患（遺伝子関連疾患）とされている。これら未診断の希少・難病の原因解明や診断を目的とした全国プロジェクト、未診断疾患イニシアチブ（IRUD）に、2015 年の開始時より参画し、また、全ゲノム解析等実行計画 2022 に基づく全ゲノム解析基盤に関する研究開発へも参画して、未診断疾患、診断困難症例についての解析等を行っている。これらについては、主に、全エクソーム解析、または、全ゲノム解析を行っており、2023 年 12 月時点で、約 2,963 症例（約 8,224 検体）を収集し、解析した。結果、診断到達率は、約 46.1%であった。解析により、新規の原因遺伝子や病型が特定された例、診断に至った結果、長期にわたり診断がつかなかった患者家族の安心へとつながった例、日常生活等で今後の対処法が明確になった例、また一部で、効果的な治療法を選択、開始できた例などがあった。具体例としては、重症のアトピー性皮膚炎、好酸球生胃腸炎等を合併する患者の解析により、新規疾患であることが判明し（STAT6 異常症）、疾患集積が進んだ例、重症アトピー性皮膚炎において、JAK-STAT シグナル伝達経路遺伝子の機能亢進型の変化が原因と判明し、特異的シグナル伝達経路阻害剤により高い効果が認められた例、LongQT 症候群の原因として知られていないユビキチン化にかかる遺伝子の病的バリエーションが LongQT を引き起こすことを見出した例などがあった。短鎖型次世代シーケンサでの解析で原因特定に至らなかった患者においては、長鎖型シーケンサを用いた解析により、短鎖型では検出困難なバリエーションを検出し、かつフェージングにより、複合型の病的バリエーションを確認することで患者単独で原因および疾患が判明した例など、長鎖型次世代シーケンサの活用により診断到達率が上昇した。

②遺伝子関連疾患の病態解明

IRUD を含め、原因不明の遺伝子関連疾患において新規原因が判明、あるいは推定された疾患については、*in vitro*, *in vivo*での機能解析、発現解析等により病態解明を行っている。原因不明の成長障害、易感染性（反復中耳炎）、骨奇形を呈する患者の原因遺伝子 *SLC35C1* 異常について、本バリエーションにより、血球細胞、血漿中でのフコース糖鎖残基がほぼ消失し、P-selectin 等の糖鎖構造消失により免疫能の低下が起こること、過剰フコース投与により *in vitro* で細胞表面等でのフコース残基回復が認められることを確認した。また、精神発達遅滞、てんかんを呈する患者で、*PIGK* のホモ接合バリエーションを同定し、その機能・病態解析を行った。小胞体 GPI トランスアミダーゼは、5 つのサブユニット（*PIGK*、*PIGS*、*PIGT*、*PIGU*、*GPAA1*）からなり、グリコシルホスファチジルイノシトール（GPI）アンカータンパク質が細胞表面に表出する際に重要な役割を果たす分子であり、これらサブユニットタンパク質の機能喪失は、精神発達遅滞やてんかん、脳の形態学的な奇形に関与することが報告されているものの、*PIGK* に関しては機能解明が進んでいなかった。当該患者で認められた *PIGK* のホモ接合バリエーションについて、*in vitro*, *in vivo*での解析を行い、本バリエーションではトランスアミダーゼ活性が低下していること、GPI アンカータンパク質

の細胞表面への局在が消失すること、ゼブラフィッシュの変異体では触覚誘発運動反応が低下していること、電位依存性ナトリウムチャネルの軸索移動が妨げられていることを証明し、病態発症の原因について報告した (J Hum Genet. 2024 69:553-563)。

③ゲノム創薬への臨床応用

IRUD 等の大規模全エクソーム解析・全ゲノム解析から得られた知見について、ゲノム創薬を志向した臨床応用を進めている。

遺伝性疾患の原因遺伝子変異の同定において、近年では全エクソーム解析による同定率の頭打ちやゲノム解読単価の下降等の理由により、急激に全ゲノム解析への移行が進みつつある。一方で全ゲノム解析においては膨大なデータ量とそれに伴う計算時間の増加が大きな課題となっている。当研究部では、大規模臨床ゲノムデータに対応可能で、遺伝性疾患研究全般において必須となる解析手法を網羅し、かつ高速に実行可能なシステムの開発に取り組んでいる。具体的には、高速・高精度なマッピングおよび各種バリエーションコーリング、多種多様な公開データベースや私家版データベースによる遺伝子変異のアノテーションおよびその柔軟なフィルタリング、個人ゲノムの解析から家系解析や全ゲノム関連解析までの多岐にわたる解析手法の実装、またその可視化をユーザーフレンドリーに実施できるシステムの開発、改良を行ったほか、リファレンスとして最新の標準ゲノム配列の導入も行った。加えて、多くの遺伝性疾患に関連していると考えられている長大な構造多型やコピー数多型等の検出に有効なロングリードシーケンサーから産出されるデータも十分に活用できるようなプログラム・パイプライン整備も行っている。

2) 遺伝子関連疾患のゲノム診断および診断法の開発

①遺伝子パネルを用いた遺伝子関連疾患診断および診断法の開発

小児希少・難病の多くが遺伝子関連疾患であり、診断には遺伝子診断が非常に有用である。疾患あるいは症状に応じた遺伝子解析による診断が可能な系、即ち遺伝子パネルによる診断システムを構築している。難聴、多発関節拘縮、結合組織疾患、頭蓋骨早期癒合症、先天代謝異常症、先天性肝障害に関わる遺伝子パネルをそれぞれ作製し、FPGA (field-programmable gate array) を活用した迅速診断法の開発、および診断精度の検証と遺伝子診断を行った。難聴に関しては、126 の遺伝子パネルを作製、約 50%に病的バリエーションを確認し、さらに解析を進めている。先天性肝障害 57 遺伝子の迅速診断パネルについても、検証と実践を進めている。先天代謝異常症 219 疾患 (309 遺伝子) をカバーした遺伝子パネルに関しては、それらに新生児期の診断が有用な心伝導路系異常の原因遺伝子等を追加した、新生児期用遺伝子解析パネルを作製し、有用性の検証を行った。これらについては、同バーチャルパネルも整備した。また、これらについては、臨床検査への応用が可能となるよう、条件等の整備も行った。救急診療科と共同で、院外心停止の患児の遺伝的要因を探るための、SIDS・SUD 原因遺伝子バーチャルパネルを作製し、継続して該当患児の解析を行うとともに、解析後の心理的ケアに関する検討も行った。ほか、糖鎖異常症等の診断法開発 (特願 023-83053) を行い、各疾患について簡易診断法の整備を進めた。

次世代シーケンサ解析の初期ではパネル解析や全エクソームシーケンス解析などに解析方法が限られていたが、現在は複数のプラットフォームが開発されており、症例に応じてさまざまな解析法を選択することができるようになった。また、それぞれのプラットフォームから得られる情報の種類も増えており、検出するためのアルゴリズムの開発や効率的な解析ワークフローの確立が重要になってきている。

・実践できるプログラムは以下の通り

WES 解析: SNV、CNV/SV、ミトコンドリア

SR-WGS 解析: SNV、CNV/SV、ミトコンドリア、STR

ロングリード解析: SNV、CNV/SV、STR、Phasing、メチル化解析

②ゲノムマップ解析基盤の整備

ロングリードシーケンスなど次世代シーケンサーに用いられている原理では、ゲノム診断同定率は 50%程度にとどまることが分かってきた。即ち、解析症例の約半数では原因が未解決のままであり、これらの『未解決症例』に対するアプローチ法の開発が喫緊の課題

である。そこで、次世代シーケンサーよりも検出範囲が広く、新たな疾患原因の同定につながると期待されるゲノムマップ解析原理に有用性を見出し、ゲノム診断を前提とした解析基盤の整備を目指している。ゲノムマップ解析は、近い将来、ゲノム診断法のひとつとして導入されると予想されるが、最新の技術であるため知見が少ない。そこで、まずは実データの収集に着手し、データの特性や解析結果の妥当性について分析を進めているところである。臨床実装する上での問題点を明確にし、解析プログラムの開発に取り組む予定である。

③難病領域における遺伝学的検査等の情報収集・提供

難病の多くは遺伝性疾患であり、多くの遺伝学的検査は大学等の研究機関において研究の一環として実施されてきた。このような中、2018年12月に第8次改正医療法が施行され、遺伝子関連検査等の検体検査の精度確保に関する基準が明確化された。検査の実施主体や実施場所等も規定され、医療と研究との明確な線引きが必要となっている。当研究部では鳥取大学等と研究班を構成し、検査を直接的あるいは間接的に実施している施設にアンケート調査を実施するなどして現状の把握と今後の課題等について検討した。この結果をもとに2018年12月に鳥取大学とともに難病領域における遺伝学的検査等の情報提供サイトを構築し、引き続き各難病の検査実施施設や保険収載状況等の情報提供を行っている。（今後日本人類遺伝学会へ移設する予定）

3) 人工知能を用いた診断支援システムの開発

遺伝子関連疾患は、メンデル遺伝カタログ (OMIM) の登録項目だけでも9,000以上あり、また、希少疾患が多数を占め、その診断は困難なことも少なくない。特に、初診で診断することは難しく、また、診断の見当もつかない、といった状況も多々見受けられる。これらについて、遺伝性疾患データベース (UR-DBMS: 琉球大学名誉教授成富研二博士により OMIM 等を基に作成されたデータベース; 2019年9月より当研究部に移管され運用中) を活用し、人工知能 (AI) と組み合わせることで、精度の高い汎用型診断補助システムの構築を目指して開発・運用を行っている。

自然言語処理、機械学習等を用いて、症状の入力を中心としたプロトタイプの診断支援システムを設計・構築している。本診断支援システムは、1) 自然言語処理による症状抽出、2) 症状からの候補疾患の合致スコアとヒートマップによる視覚的表示、3) 他情報付加等 (疾患鑑別、確認用)、また、指定難病、小児慢性特定疾病の表示、リンクなどが搭載されている。本診断支援システムについて、更新・改良を重ねており、2023年度も改良・検証を進めている (遺伝子解析等にて確定診断済みの200症例についての検討では、精度約81%)。実際の診断困難症例についてコンサルテーションによる診断支援を開始し、250症例の検討を行い、Kabuki 症候群など、早期の診断へつながった。また、画像 (顔画像等) の取り込みによる画像ベースの診断支援システムの構築を開始し、下顎低形成症例、Kabuki 症候群、Pitt-Hopkins 症候群などの画像の取り込みを行った。加えて生成 AI による希少疾患の診断予測について検討を開始した。

3-5-7 システム発生・再生医学研究部

1. 概要

1.1 研究プロジェクト

分子生物学・遺伝学的手法とバイオインフォマティクスなどのアプローチを駆使した研究を推進し、生殖腺の形成や機能維持の分子機構、その破綻が原因となる不妊症や性分化疾患の病態の研究を進めている。また、疾患原因変異を培養細胞やマウスモデルで再現するため、迅速かつ高精度に多様な変異アレルを作製する技術の確立を目指した遺伝子改変

マウス作製法の開発も行っている。

1.2 研究体制

部長：高田修治

室長：岡村浩司（組織工学研究室 平成 24 年 8 月～）

研究員：寺尾美穂（平成 28 年 9 月～）、辻敦美（平成 31 年 2 月～）

研究補助員：平林美果（令和 4 年 4 月～）、杉山有希（平成 31 年 4 月～）

共同研究員：23 名

1.3 共同研究体制

国立成育医療研究センター研究所各研究部・病院、国立医薬品食品衛生研究所、北海道大学、東北大学、東京大学、東京医科歯科大学、山梨大学、九州大学、久留米大学、長崎大学、横浜市立大学、浜松医科大学、慶應義塾大学、東邦大学、東京薬科大学、北里大学、京都薬科大学、東洋大学、金沢大学、宮崎大学、お茶の水女子大学、福岡歯科大学、国立長寿医療研究センター、医療 AI プラットフォーム技術研究組合

2. 研究内容

2.1 転写因子 SOX9 をコードする遺伝子の発現調節機構の解析

転写因子 SOX9 をコードする遺伝子もしくは近傍の変異や転位は、XY の患者の約 2/3 で雌性への性転換が見られる Campomelic dysplasia を引き起こす原因である。SOX9 は精巢の組織形成に必須である。しかし、SOX9 遺伝子の発現調節機構は、その周辺 2 Mb のどこに存在するか不明なため解明が困難であった。我々は性分化疾患の原因解明、確定診断法の開発を目指し、これまでに、ヒトの性分化疾患症例で共通して欠失している 32.5 kb の領域に着目から、独自に開発したマウスゲノムでネステッドデリジョンを迅速に作製する方法を利用することで、711 bp の責任配列であるエンハンサーを同定した。その中で、性決定遺伝子 *Sry* の転写産物が結合する配列と SOX9 が結合する配列が機能に関わっていることを明らかにした。これらは、冗長的に機能することも示した。

2.2 ゲノムインプリンティングを受ける遺伝子の発現制御の解析

ヒトでは受精時に精子と卵子からそれぞれ一組の染色体、遺伝子が受け継がれるが、いくつかの遺伝子に関しては父方あるいは母方から受け継がれたときにしか発現が起こらない。染色体に親の性の由来が記録され、この現象はゲノムインプリンティング (GI) と呼ばれている。GI は脊椎動物では哺乳類にのみ存在し、胎児、胎盤の正常な発生などにも関与し、GI を受ける遺伝子が正常に発現することが胎児、胎盤の発育に必要不可欠である。我々は GI を受ける遺伝子の発現調節機構の解明を目指し、マウス 12 番染色体/ヒト 14 番染色体上の GI の制御に最も重要であるゲノムの配列 (IG-DMR) に着目し、その中で制御の中心となる配列のスクリーニングをゲノム編集による欠失マウス作製により行っている。今期は、IG-DMR のセントロメア側の機能配列存在領域と、テロメア側の 2 つの機能配列存在領域を約 200-500 bp にまで絞り込んだ。今後さらに絞り込みを続け、母方アレルのエピゲノム状態を規定する配列を特定し、さらにそこに結合する因子からその分子機構の解明を目指す。

2.3 ゲノムヒト化マウスによりヒトゲノム配列の機能解明

ヒト 14 番染色体の GI 領域もマウスと同様に IG-DMR で制御させていることが明らかに

なっている。しかし、ヒトとマウスの IG-DMR は塩基配列が大きく異なり、マウスで明らかにしたことをそのままヒトにあてはめることができない。また、GI では世代を経ることによってエピゲノム状態が確立するため、この点でヒトでの解析は困難であった。そのため、我々は、マウス IG-DMR 8.9 kb をヒト IG-DMR 11.2 kb に置換したマウスをゲノム編集により作製した。通常このマウスは、ヒト IG-DMR がホモ接合対であっても野生型と同様に成長したため、ヒト IG-DMR がマウスで *in vivo* で機能したと考えられる。今後、GI 領域のエピゲノム状態や GI 遺伝子の発現状態を検討し、モデルとしての有用性を検討する。モデルとして有用である場合は、ヒト IG-DMR の機能配列の同定に用いる。

2.4 ゲノム編集技術のモデルマウス作製への応用

当研究部では TALEN および CRISPR/Cas9 によるゲノム編集技術を導入し、迅速かつ簡便に疾患モデルマウスを作製する系を確立した。TALEN や CRISPR/Cas9 の設計・合成からマウス受精卵への導入、マウスの解析まで一貫して研究部内で行うため、短時間、低コストにモデルマウスを用いた解析が行えるようになっている。この技術の応用法を開発し、多様なアレルの作製が可能となった。これらの技術は他の研究部にも提供している。

2.5 配列ビッグデータ解析パイプライン構築

オンプレミス並列型計算機システムを活用し、配列データ等を処理するパイプラインソフトウェア群を構築した。全エクソーム解析をはじめとして、全ゲノム、遺伝子発現、DNA メチル化、RNA メチル化、ヒストン修飾、クロマチン高次構造、さらには *de novo* アセンブリ、遺伝子治療ベクターの挿入部位決定、コピー数多型、転座など構造変異の検出等、他研究部や病院から依頼されるデータ処理も行い成果を上げている。近年、ロングリードデータが得られるシーケンサーの利用が進んでおり、PacBio、Nanopore 両プラットフォームに対しクラウドの GPU も利用して結果を得られる体制が整った。新しいヒトゲノム参照配列 T2T-CHM13v2.0 へのマッピングも多く行われるようになっている。

2.6 ディープラーニングによる診断支援ツールの開発とサービス提供

機械学習を中心とした教育活動を積極的に行っており、2019 年から 2023 年までデータサイエンス研修を 223 回開催した。この活動は国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部 (JH) からの支援も受け、そのうち 54 回分については再収録した動画を ICR 臨床研究入門サイトから一般に公開し好評を得ている。病院の医療データを活用し、これまで多くの医療 AI サービスの開発に取り組み、そのうち感染症起因菌の同定支援、腎細胞がんの病理診断支援、先天性代謝疾患のスクリーニングシステムについてはコンテナ化を行い、医療 AI プラットフォーム (HAIP) から利用可能な状態になった。病院からの相談は年々増えており、データ収集から、アノテーション、GPU 搭載計算機、機械学習フレームワーク、ウェブサービス、コンテナ化、また生成 AI の活用など、AI 構築のための全過程をカバーして対応を行い、多くの部署との連携を深めている。

3-5-8 薬剤治療研究部

1. ミッション・目標

近年のオミックス解析等の進展に伴い、これまでの小分子化合物を中心とした薬剤開発

以外に、分子標的薬、抗体医薬、細胞医薬、核酸医薬など医薬品の新たな考え方が生まれている。加えて、再生医療、遺伝子治療といった新しい治療法が開発されてきている。このような背景のもと、再生医療、遺伝子治療を含む成育医療における新規治療法の開発、薬効薬理・毒性評価法の開発、再生医療・遺伝子治療の発展を目的に、分子・細胞レベルから個体レベルに至る解析を行い、成育医療における疾患の病態解明・新規薬物療法の開発の開発を目指す。また、薬物の毒性評価とその発現機序の検討を行い、小児・妊婦における安心・安全な薬物療法を科学的に検討する。いずれも、分子生物学的、分子細胞生物学的、生物化学的、組織学的、分子生理学的手法等を用い、多角的な観点から小児難治性疾患に対する基礎医学研究を行う。特に、薬物代謝の主要組織である肝臓の *in vitro* 評価系、再生医療・遺伝子治療に資する新規細胞の開発に注力している。

2. 研究プロジェクト

- 1) ヒト検体を利用した薬剤治療研究基盤の構築
- 2) 神経内分泌的機序に基づく薬物標的分子の探索と機能解析に関する研究
- 3) 小児・周産期病院における AI ホスピタル機能の実証研究

3. 研究体制

部長：梅澤明弘（兼任）

室長：中村和昭（実験薬理研究室）

上級研究員：宮本幸

研究員：相澤和子

大学院生：倉持颯（埼玉大学大学院）、高橋弘人（埼玉大学大学院）、南木美歩（埼玉大学）、鈴木萌華（埼玉大学大学院）、平塚晶（埼玉大学大学）

共同研究員：原田一貴（東京大学）、窪田みち（ちとせ研究所）、平井悠吾（ちとせ研究所）

研究補助員：宮井まなみ

事務：大場恵子

4. 研究の概要

- 1) ヒト検体を利用した薬剤治療研究基盤の構築

体内での薬物の代謝は肝細胞の薬物代謝機能に依存するものが多く、創薬研究や薬物動態研究においてヒトの肝機能発現や薬物代謝に関する検討は極めて重要な研究課題となっている。これまでの成果でヒト初代培養肝細胞の培養基材への接着性が細胞表面の細胞外マトリックス（ECM）によって変化していること、および細胞表面 ECM の除去がヒト初代培養肝細胞の培養基材への接着性を改善させることを見出してきた。当該年においては本知見についてさらに検討し、細胞表面 ECM の中で、vitronectin 量と接着率が有意に反比例することを見出し、ECM 分解のための Matrix metalloproteinases 処理が接着性を改善することを見出した。薬物の肝代謝や肝毒性を *in vitro* 系で検討する場合、接着培養による検討が有効であり、本知見はヒト肝細胞を接着状態で培養可能とする方法として、肝細胞の *in vitro* 評価系の改善に寄与するものである。

再生医療等の提供に当たっては、当該再生医療等に用いられる細胞加工物及びその原材料となる細胞について、適切に保管されることが重要である。しかし、これまで、細胞培

養加工施設以外の施設における原料及び細胞加工物の保管に係る管理基準 や保管業務等の在り方について、明確に定められていなかった。日本再生医療学会に設置された「再生医療等安全性 確保法における細胞保管に関する考え方タスクフォース」のメンバーとして、「再生医療等安全性確保法における 細胞保管に関する考え方」を作成した。

遺伝子治療に用いるウイルスベクターを産生するためのホスト細胞として、現在主にヒト胎児腎臓由来細胞である HEK293 細胞株やその亜株が用いられている。しかし、HEK293 細胞は組織提供者の由来が不明であり、かつ由来する組織も明瞭ではなく、また海外企業がライセンスを保持しており、国内製薬企業や CDMO (Contract Development and Manufacturing Organization) あるいは試薬メーカーが使用する場合、多額のライセンス料を要求される。これら国内企業が安心して使用でき、HEK293 細胞に比べより最適な国産ウイルスホスト細胞を新規に樹立するため、20 例の帝王切開褥婦より同意の下に通常医療廃棄物として廃棄される胞衣組織を提供いただき、羊膜細胞を分離し、初代培養、ヒトアデノウイルス E1 遺伝子の導入による不死化細胞の樹立を行った。新たに樹立した不死化羊膜由来細胞を HAT (Human Amniotic epithelial cell line for gene & cell Therapy) 細胞と名付け、ウイルスベクター産生細胞としての特性解析を行った。HAT 細胞は、HEK293 細胞に比べ、増殖能が高く、トランスフェクション効率は同等あるいはそれ以上であり、アデノ随伴ウイルスベクター (AAV)、レンチウイルスベクター (LV)、レトロウイルスベクター (LV) のいずれに対しても、高産生能を示した。これらの結果から、HAT 細胞は HEK293 細胞以上にウイルスベクター産生能に優れた細胞であることが示された。HAT 細胞の樹立に当たって提供いただいた胎盤は適切なインフォームド・コンセントを得て提供されており、倫理的観点からも適切に樹立されている。本成果は、新規に樹立した HAT 細胞により国産の新規ウイルスベクター産生細胞として HEK293 細胞が抱える課題を克服することが期待されるとともに、今後の我が国における遺伝子治療の発展に寄与するものと期待される。

2) 神経内分泌的機序に基づく薬物標的分子の探索と機能解析に関する研究

血圧や体内の水分量の調節、情動行動や社会的行動などに関わる脳下垂体から分泌されるバソプレシンを受容するバソプレシン受容体遺伝子を欠損したマウスに見られる代謝疾患の発症機構の一端を明らかにした。血液成分分析、組織解析、遺伝子発現解析、ふん便中の脂質分析を行うことで、バソプレシン受容体遺伝子欠損マウスの骨格筋や脂肪組織に脂質が異常に蓄積し、消化管ホルモンであるグルカゴン様ペプチド-1 (glucagon-like peptide-1: GLP-1) の分泌能が低下することを明らかにした。この GLP-1 の分泌能の低下は、腸内に生息する細菌類 (腸内マイクロバイオータ) が作り出す代謝物である酪酸の腸内濃度が異常に増加したことによることも明らかにした。

3) 小児・周産期病院における AI ホスピタル機能の実証研究

2023 年度研究開発と Society 5.0 との橋渡しプログラム (BRIDGE) 「AI ホスピタルを実装化するための医療 AI プラットフォームの構築に必要な技術に関する研究開発」においてセンター内プログラムマネジメントとして関与し、自閉スペクトラム症の早期診断支援システム、グラム染色細菌判別支援システム、生殖補助医療プロセスの自動化等の開発と実証研究の支援を行った。

3-5-9 周産期病態研究部

1. 目標

周産期の異常は、母子双方に対して緊急かつ集学的な医療介入と、多くの医療資源投入を必要とする。また近年、胎児期の環境が胎児期のみならず出生後も長期にわたり児の遺伝子発現等に影響を及ぼし、その結果、成人後の生活習慣病等の発症リスクを上昇させる可能性が指摘されている。このように、周産期の異常の病因病態解明と適切な管理法の開発は成育医療上の重要な課題であるが、周産期異常の分子メカニズムは未解明な点が多く、早期の診断や根治的な治療法が確立された疾患は少ない。当研究部の目標は、先端オミックス技術を駆使して胎児・胎盤の発生分化異常に伴う周産期病態を解明し、新しい診断治療技術を開発することで周産期医療に資することである。

2. 研究体制

部長：梅澤明弘（併任）

室長：中林一彦（周産期ゲノミクス研究室）、河合智子（胎児発育研究室）、山口晃史（母体管理研究室）

研究員：谷口公介、大西英理子、富川順子

共同研究員：22 名（大学院生 6 名を含む）

3. 研究内容

周産期関連疾患・子宮内膜関連疾患の病因・病態解明

日本人における早産の遺伝的関連を検索するために、日本人の分娩直後女性 1,078 人の血液由来ゲノム DNA を用いて、早産及び在胎週数について Genome-wide association study (GWAS) を行った。日本人集団を対象にした初の早産関連 GWAS と位置付けられる。ゲノムワイド有意性を示すバリエーションの同定には至らなかったが、本研究における要約統計量データが今後のメタ解析において活用されることが期待される。

慢性子宮内膜炎（CE）の分子病態情報が極めて限られている状況を打破するために、RNA シーケンスにより子宮内膜組織の網羅的遺伝子発現データを取得し、CE 特異的な発現パターンを示す遺伝子群を同定した。特に TVP23A は形質細胞ではなく子宮内膜由来細胞で発現する CE 特異的マーカーとして、今後開発が期待される分子診断法において有用な可能性が示唆される。

新たな出生前診断手法開発

当研究部で世界に先駆けて、非欠失タイプの RhD 陰性アレル頻度が高い東アジア人種にも適応可能な、母体血を用いた無侵襲的胎児 RHD 遺伝子型決定法を開発している (Takahashi K et al. Clin Chem. 2019)。この方法を臨床応用する場合、偽陰性判定（胎児 RhD 陽性アレルの見逃し）は母体から必要な医療介入の機会を奪うため判定には確実性が求められる。判定結果の信頼性の指標の一つとして、胎児由来 DNA 比率を同時測定することを着想した。RHD/RHCE 領域増幅プライマー 2 組と in/del 多型領域プライマー 35 組でのマルチプレックス PCR を導入することで両者のデータの同時取得を達成した。専用のデータ解析スクリプトを作成し、短時間で胎児 RhD 遺伝子型と胎児由来 DNA 比率を推定する体制を整備した。また、この方法の臨床応用に向けて 100 検体規模での検査精度評価研究を実施すべく、全国 43 施

設が RhD 陰性妊婦症例をリクルートする形での中央一括倫理申請を成育倫理委員会に提出し、承認された。

精緻エピゲノム技術開発と診断応用

知的発達遅延を伴う難病など未診断症例の原因遺伝子の同定にエクソームシーケンスが導入され、多くの確定診断にいたっている。一方で、未報告の病的意義不明のバリエーション(VUS)が検出される症例も増えている。近年、原因遺伝子によっては共通したエピゲノム異常(エピシグナチャー)があることが報告され、我々も NSD2 遺伝子機能異常に伴うエピシグナチャーの同定を行った。モデルマウスで病的多型であることを確認した未診断疾患児の NSD2 の VUS が、上記のエピシグナチャー解析でも病的と判断できたことより、我々が同定した NSD2 エピシグナチャーは診断に有用であることを示した。また、Nsd2 欠損マウスを作製し、脳のエピゲノム異常を確認した。NSD2 機能異常が知的発達遅延の原因である可能性を示唆した。また、共同研究者らが診断に難渋していた Coffin-siris 症候群 や Nicolaides-Baraitser 症候群、あるいは Kabuki 症候群の原因遺伝子の VUS の病的意義の判断にエピシグナチャー解析が有用であることを示した。

エピバリエーションは主にプロモーター領域の稀な DNA メチル化異常であり、プロモーター不活性化を伴うようなゲノム変異の指標となる。全ての単一遺伝性疾患において、ゲノム配列解析では見逃された疾患責任変異をエピバリエーション探索により同定できる可能性が考えられる。2023 年度は、希少疾患症例群を対象としたエピバリエーション解析を効率的に実施するために、遺伝子プロモーター領域に特化したキャプチャーメチルシーケンス法を開発した。加えて、健常人集団におけるエピバリエーション頻度を遺伝子毎に確認できるデータベース Epimutation Viewer (mgc.nrichd.ncchd.go.jp/EMu/) を公開している。これらのプラットフォームを基盤として、未診断疾患症例群に対するエピバリエーション探索を進めている。

周産期環境が児のエピゲノムに及ぼす影響の検討 (DOHaD 研究)

DNA メチル化修飾は標的によって細胞や個人の形質を変化させる。子宮内炎症が児の成長に及ぼす影響を解明するため、同一個人から胎盤、臍帯血、出生後数カ月の NICU 退院時の乳児末梢血の 3 検体を採取し DNA メチル化値を測定後、それぞれの組織のエピゲノムの特徴をすり合わせ、発育と関連する DNA メチル化異常の候補を同定した。

3-5-10 再生医療センター

細胞医療研究部・生殖医療研究部

1. ミッション

当研究部では、受精から成長する過程で生じる疾患の成立機序の解明とその予防、診断・治療法の開発をめざしている。卵、精子、ES 細胞・iPS 細胞含む各種幹細胞を研究対象とし、さらに、生殖腺、胎盤、心臓、神経系、骨、軟骨、脂肪組織、骨髄を筆頭とする造血器官を研究対象に加え、幹細胞の機能を調節する分子機構の解明と臨床応用をめざした研究を展開している。基盤的研究をさらに臨床研究に進展させ、生殖医療ならびに再生医療に貢献することが当研究部の使命である。

2. 研究プロジェクト

1) 「いのちの萌芽(受精)」のエビデンスに基づいた考え方の提示

受精の膜融合過程は、精子の卵細胞膜への接着、融合、多精拒否からなる一連の現象であり、その分子メカニズムの解明に挑戦するため、受精における膜融合が、時間的・空間的にどのように形成されるのかを解析している。この研究から、膜融合にも新しい概念を提案し、不妊治療への道が開かれると考えている。

2) ヒト胚性幹細胞の樹立

ヒト ES 細胞に関する医学研究が、生命倫理及び医の倫理に基づき、また「ヒト ES 細胞の樹立に関する指針」と「ヒト ES 細胞の使用に関する指針」に基づき、適正に行われるよう、ヒト ES 細胞研究倫理審査委員会を設置し、ヒト ES 細胞樹立研究、使用研究及び細胞の分配に関してそれぞれ規定を定めている。小児難治疾患克服に向けて、ヒト ES 細胞を用いた研究を進めており、今後も国の指針を遵守し我々の研究がヒト生命の萌芽の滅失の上に成り立っていることを常に認識し厳粛にヒト ES 細胞研究を行っていく。

3) 再生医療・細胞治療

ヒト組織幹細胞を生体外で培養し増殖させることに成功し、幹細胞の分離・同定を行っている。細胞の生体外における培養技術とそれによる細胞数の確保とそれに続く分離技術は、再現性の高い生物実験系に基づいた細胞の基盤解明によってのみ可能となる。

4) 成育バイオリソースの構築

病院内の整形外科、産婦人科、眼科、形成外科と研究所の連携により、骨髄、臍帯血、胎盤、子宮内膜を細胞供給源として研究を遂行している。臨床研究を前提とした ad hoc 委員会を設立し、臨床試験研究への具体的なロードマップの作製、医療に提供できる新たなヒト細胞の分離・培養法の開発を行っている。

5) ヒト多能性幹細胞による造血システムの構築

臓器新生を模倣する Biomimetic モデル、即ち臓器オルガノイド作製に関する研究は生理機能性も有する臓器モデルとして疾患解明、薬剤開発など広範囲な医療への応用と活用が期待される。移植医療や免疫学の研究に貢献するために ES 細胞・iPS 細胞を含むヒト多能性幹細胞を用いて造血に重要な機能的骨髄オルガノイドを作製している。この骨髄オルガノイドはリンパ球など血液細胞分化に働く間質細胞を多量含んでいることから、骨髄オルガノイド由来間質細胞を樹立し、ヒト多能性幹細胞由来造血幹細胞の分化法開発に用いて新たな造血システムの構築を行っている。

3. 研究体制

センター長：阿久津英憲（生殖医療研究部長、幹細胞・生殖学研究室長）

部長：梅澤明弘（細胞医療研究部長、肝細胞移植研究室長）

室長：宮戸健二（生殖細胞機能研究室長）

研究員：16 名

大学院生：22 名

共同研究員：62 名

研究補助員：8 名

事務：5名

4. 共同研究体制

国内外の多数の大学、研究所、企業と連携し、研究を推進している。

5. 研究の概要

1) 受精・細胞融合に関わるエクソソームの発見から機能解明、更に不妊治療への応用

精子と卵子が融合することで、受精卵が作られる。受精卵が細胞分裂を始める＝「卵活性化」のためには、精子が卵子に融合したことを知らせるシグナルが必要である。我々は、「クエン酸」に注目し、カルシウム波を誘導する精子側の因子は少なくとも2つあり、その1つであるクエン酸合成酵素が加齢によって活性が弱まり、精子内で合成される「クエン酸」含有量も減少すると、男性不妊を発症することを明らかにした。

2) 卵の老化と胚発生メカニズムの解明と生殖医療への応用

卵細胞の機能を分子レベルで解明する研究を行っている。特に2つのX染色体を有する受精卵（女性の細胞）の発生に着目している。初期発生に確定するX染色体不活化の乱れが流産、不育症や先天性疾患の病態などとも関係する。これまで受精卵の生命発動させる機能としても重要であることを見出した。更に研究を展開することで、卵子の全能性獲得機構のみならず、女性の健康に関わる生命動態を「女性の細胞」視点で明らかにしていく。受精胚から獲得する女性固有のサイトジェネティクス動態を発生と器官発生・制御への理解のもとに深め、女性医学の様々な分野の発展に貢献していく。

3) ES細胞の樹立に関わる技術の確立と機能解析

ヒト ES 細胞樹立研究が最大限有効に行われるように基礎研究を進めている他に、ヒト ES 細胞に関する培養技術や知見を海外の先端の研究所といち早く共有できるようにハーバード大学幹細胞研究所と共同研究を含めた人的交流を積極的に行っている。8つのヒト ES 細胞の樹立に成功し、国のバイオリソースとして登録され利用されている（SEES-1, SEES-2, SEES-3, SEES-4, SEES-5, SEES-6, SEES-7, SEES-X）。SEES-4, SEES-5, SEES-6, SEES-7 は、動物由来産物を全く使用しない環境で樹立された国内初のヒト ES 細胞株である。これら貴重な細胞リソースは、ナショナルバイオリソースとして理化学研究所バイオリソースセンター (<http://cell.brc.riken.jp/shinkiteikyoku>) から提供されている。

ヒト ES 細胞から蠕動様運動も有する小腸オルガノイド作製に世界で初めて成功し国際誌 (Uchida, et al. JCI Insight 2017) へ報告し、国内外から注目された。さらに、COVID-CoV-2 の腸管感染モデルの構築に成功し NHK などメディアにも多く取り上げられた (Miyakawa, et al. Gastroenterology 2022)。組織マクロファージも内在化するミニ腸に成功し腸管疾患研究へ進む重要な成果を得た (Tsuruta, et al. CMGH 2022)。

4) 成育疾患に対する幹細胞治療法

ES細胞の再生医療等製品 (HAES) を尿素サイクル異常症患者へ移植する医師主導治験を国に申請し、ES細胞による治験を実施した。ES細胞を使った人を対象にした再生医療は国内初めてであり、世界的にも肝臓への移植は初である。本治験は、予定症例数の移植を完了し、完遂に向けた情報の取りまとめを行っているところである。

5) 成育バイオリソースーヒト臍帯血・子宮内膜・月経血・胎盤・軟骨・骨髄・眼球由来幹細胞ーの単離技術の開発、多分化能の同定

手術検体からの細胞分離、培養と細胞寄託を行っている。さらに企業にも同様の検体提供を行う倫理申請が承認され、細胞の供給施設としての役割を強化した。成育バイオリソースによる細胞株を日本国内の公的細胞バンクに登録し、様々な活用されており、国内の再生医学研究および医薬産業の発展に貢献している。

6) 安全で高品質な細胞提供技術の開発

CPF（セル・プロセッシング・ファシリティー）を使用したヒト幹細胞の培養ならびに臨床研究への供給を課題として、CPF 運用のソフト面（文章、手順書等）やハード面（室圧管理、培養製造等）を整備し、研究所 7 階の CPF が再生医療等安全性確保法に基づく特定細胞加工施設として認可された。本 CPF において、下肢虚血（バージャー病）に対する細胞加工医薬品、自家培養表皮シート等を製造している。

7) ヒト骨髄オルガノイド作製及び間質細胞株樹立とその応用

ヒト iPS 細胞由来骨髄オルガノイド作製技術の活用に着目し、ヒト骨髄オルガノイドを介した多能性幹細胞由来骨髄間質細胞株樹立に関する研究及びその細胞株を利用した血球細胞分化系の構築に関する研究を行っている。

3-5-10-1 高度先進医療研究室

1. ミッション・目標

高度先進医療研究室は、胎児・小児期感染症の病態と発症機構を患者検体および疾患モデル実験系を用いて解明し、その成果を診断・治療法の開発に応用することを目標とする。主な研究対象は EB ウイルス（EBV）、川崎病である。加えて移植患者と免疫不全症患者における移植後日和見感染症関連ウイルス（13 種類：HSV-1, HSV-2, CMV, EBV, VZV, HHV-6, HHV-7, HHV-8, ADV, PVB19, JCV, BKV, HBV）の解析を通し、検体提出当日に結果を臨床サイドに提供し、診療への貢献を行うとともに、そのデータを臨床研究として移植治療実施患者に対するウイルス日和見感染症の新規診断法・診断法の開発につなげている。成育医療において EBV をはじめとした上記ウイルスは日和見感染症の原因ウイルスとして重要である。当センターをはじめとして小児の移植治療が盛んに行われるようになり、日和見感染症対策は重要課題となっている。また、我が国では EBV 初感染年齢が上昇しつつあり、移植後リンパ増殖性疾患（PTLD）の発症率の増加と重篤化が懸念されている。EBV は、一生の間には大多数の人が感染する遍在ウイルスであるため、医療の発展や生活習慣の変化に基づく感染症像の変化は社会的にも大きな影響を与えられ、政策医療のレベルでも積極的な対応が必要と考えられる。2020 年から新型コロナウイルスに対するリアルタイム PCR 法を用いた新規検査法を開発し、院内迅速診断の実施を開始した。新興ウイルス検査・診断体制の構築へも即座に対応できるよう応用性の高い診断法の開発を進めている。変異ウイルスに対する検査法の検証と改良も進め院内迅速診断の提供による患者および職員の早期感染者封じ込めに貢献している。また、診断法のみならず、治療薬開発も進めている。抗 SARS-CoV2 新規治療薬の開発も進め知財獲得まで進められた。一方、川崎病は 5 歳未満の乳幼児に好発する原因不明の発熱性疾患である。1967 年に日本で初めて報告され発症頻度も世界で最も高い。川崎病発症原因因子の特定は未だにされていないため、成育

医療研究センターで基礎研究を進めることは使命と言える。

EBV は、PTLD だけでなく慢性活動性 EBV 病 (CAEBV) や EBV 関連血球貪食リンパ組織球症 (EBV-HLH) などの難治性疾患の原因ウイルスである。また、バーキットリンパ腫などの悪性リンパ腫の原因ウイルスであるが未だに抗ウイルス薬などなく、治療法さえ確定していないのが現状である。そこで当研究室では難治性 EBV 関連疾患について、ヒト化マウスを用いた感染モデルマウスを作製し発症機構解明と治療薬開発を進め、さらに実際の EBV 関連疾患患者におけるウイルス動態の解析と診断・治療に対する支援を行っている。また、CAEBV 発症原因因子の同定解析を進め治療標的分子の開発を進めている。

川崎病に関しては難治性川崎病の診断と治療のバイオマーカーの開発を目指している。難治性川崎病を早期に診断するためのバイオマーカーを同定し、その簡便な測定法を開発することが求められている。また、川崎病の病態のひとつである血管炎発症メカニズムの解明を進めている。

2. 研究プロジェクト

- 1) 難治性ウイルス感染症に対する新規治療薬の開発
- 2) 移植治療後日和見感染症重症化予防に関する研究
- 3) 新型コロナウイルスに関する研究
- 4) 川崎病における血管炎発症機構の解明研究
- 5) 成育医療研究センター病院の移植医療実施感のウイルス制御と全国の何処世ウイルス感染症中央診断実施

3. 研究体制

室長：今留謙一

研究員：石川百合子(～2024. 3. 31)

研究補助員：和田尚美(～2024. 3. 31)、高橋絵都子(～2024. 3. 31)、三澤直美、伊藤恵理、吉川有希、川野布由子、樽見明美

臨床検査技師：田坂梓(～2024. 3. 31)

研究補助者：森田繭子(～2023. 3. 31)

大学院生：松津見和(明治薬科大学大学院)、伊藤彩乃(明治薬科大学大学院)

共同研究員：山田全毅(高度感染症診断部医長)、阿部淳(成育医療研究センター研究所高度先進医療研究室)、伊藤玲子(成育医療研究センター病院総合診療部)、志村まり(国際医療センター研究所難治性疾患研究部)、上村悠(聖マリアンナ医科大学血液・腫瘍内科)、大橋彩香(聖マリアンナ医科大学血液・腫瘍内科)、那須涼(国際医療センター病院血液内科)、亀田和明(自治医科大学血液科)

4. 国際共同研究

- 1) 米国 Uniformed Services University of the Health Sciences (Dr.Cliffprd)：免疫細胞治療法の開発研究

5. 国内共同研究

- 1) 国立成育医療研究センター病院：石黒精教育研修センター長、笠原群生院長、福田晃也副臓器移植センター長、小野博副院長、富澤大輔診療部長、坂口大俊診療部長ほか
- 2) 国立成育医療研究センター研究所：高田修治部長、小野寺雅史部長、秦健一郎部長、中林一彦室長、岡村浩司室長、内山徹室長ほか

3) 国立成育医療研究センター臨床研究センター：斉藤和幸センター長、小林徹部門長ほか

6. 外部施設

1) 東京医科歯科大学小児科：森尾友宏教授、金兼弘和教授

2) 聖マリアンナ医科大学内科（血液・腫瘍）：新井文子教授

3) 東海大学総合医学研究所：幸谷愛教授

4) 国立循環器病研究センター：福嶋教偉部長

5) 九州大学小児科：大賀正一教授

6) 横浜市立大学小児科：伊藤秀一教授

7) 京都大学小児科：滝田順子教授

8) 国際医療福祉大学保健医療学：竹内啓晃教授

9) 東北大学災害科学国際研究所：児玉栄一教授

10) 医薬基盤・健康・栄養研究所：安居輝人プロジェクトリーダー

7. 研究の概要

1) EBV 関連 T/NK 細胞リンパ増殖性疾患モデルマウスを応用した新規治療薬 (S-FMAU) の開発研究

(a) 新規治療薬 S-FMAU の治験プロトコルの作成

本治験は推奨用量の推定を目的とした第 I 相試験であり、3+3 デザインを用いた用量漸増試験とし、S-FMAU の忍容性を検討する用量として、10 mg/kg（レベル 1）、20 mg/kg（レベル 2）、40 mg/kg（レベル 3）の治験プロトコルの作成を行なった。

治験薬投与開始後から終了時又は中止時検査が完了するまでに認められたすべての有害事象を収集する。上記内容を PMDA 事前面談資料として治験プロトコルの作成を完了し、現在治験で使用する薬剤製造を進めている。

(b) CAEBV 患者由来 EBV 感染細胞株を用いた異種細胞株移植モデルマウスの作製

EBV 関連リンパ増殖性疾患のひとつである慢性活動性 EBV 病（CAEBV）治療には抗悪性腫瘍剤や免疫抑制剤が用いられているが、未だ有効な治療薬はないため CAEBV 治療薬の開発が急務となっている。大量かつ安定的に供給可能なモデルマウスの作製を目指し、CAEBV 患者由来 PBMC から樹立した EBV 感染細胞株を用いた新規薬効モデルマウスの作製に成功した。

2) 移植治療後日和見感染症重症化予防に関する研究

(a) 小児肝移植患者における PTLD 発症リスク因子の探索研究

EBV 感染および移植後リンパ増殖性疾患（PTLD）は、小児肝移植患者における重要な罹患率および死亡率の原因であるが、生体肝移植を中心とした小児肝移植における EBV の動態、疫学、転帰に関する知見は不足している。本研究では、5827 件の EBV 負荷測定値と 394 名の移植患者の臨床データを解析した。小児肝移植後の EBV 感染の早期検出および CMV 抗体陰性ドナーの評価は、PTLD 予防のためのリスク層別化に寄与し、免疫抑制の適切な調整を可能にすることが示唆された。

(b) 小児肝移植後患者におけるペニシリン系抗生物質使用時のアンピシリン発疹リスク検討研究

小児肝移植患者の移植後2年以内にペニシリン系抗生物質を使用した286名の患者を解析し、EBV陽性群と陰性群で発疹の発生率を比較した。その結果、アンピシリン発疹は確認されず、抗生物質関連発疹の発生率にもEBV感染の有無やウイルス負荷量による差はなかった。このことから、ペニシリン系抗生物質はEBV感染を伴う肝移植患者にも安全に使用できることが示された。

(c) 小児心臓移植後患者におけるサイトメガロウイルス(CMV)感染の新規バイオマーカー探索研究

臓器移植治療後の免疫抑制剤下において一番懸念されるのが移植後EBV関連リンパ増殖性疾患と移植後CMV感染症である。移植成績に影響を及ぼすだけでなく、患者予後にも大きく影響するためである。心臓移植後の免疫抑制剤量は、他の臓器移植と比較して投与量が多い傾向にある。そのためCMVやEBVといった潜伏感染ウイルスの再活性化の早期発見、早期治療介入が重要になる。本研究により、CMV感染の新規バイオマーカー(X)が発見された。CMV感染細胞が彩活性化により増殖を開始した時点で減少を示すため、CMV感染症重症化の予防と早期発見に有用となりうる。今後症例数を増やし知財も申請も進めていく。

3) 新型コロナウイルスに関する研究

(a) 基礎疾患のある小児(成育医療研究センターに受診している小児)において、新型コロナウイルスワクチン後の副反応や、抗体産生の状況を、調査した報告である。基礎疾患を持つ5~11歳の小児に対するBNT162b2ワクチンの研究では、安全性が確認され、副反応は軽微であった。接種後の抗体陽性率は99.1%と高く、免疫不全患者でも良好な血清転換が認められたが、抗体価は免疫正常患者に比べて低かった。

(b) SARS-CoV-2 ワクチン接種後の抗体価に対する解熱剤使用の影響についての報告は、青年および若年成人において限られている。本研究では、多変量線形回帰分析を用いて、解熱剤使用と抗体価の関連性を検討した。その結果、解熱剤使用と抗体価の間に有意な関連性は認められなかった(回帰係数 [95%信頼区間] = -0.107 [-0.438 ~ 0.224])。これにより、解熱剤使用が抗体価に影響を及ぼさない可能性が示唆された。解熱剤が抗体価の情報に及ぼす影響について解析し、報告した。

4) 川崎病に関する研究

川崎病患者において最近の抗生物質使用が冠動脈病変(CAL)の発生に与える影響を調査したものである。2017年から2018年に実施された第25回全国疫学調査のデータを基に、初診1週間以内の抗生物質使用状況とCAL発生率を比較した。28,265人の川崎病患者のうち45.7%が抗生物質を使用しており、抗生物質使用患者では非使用患者に比べてCALの発生頻度が高いことが確認された。さらに、傾向スコアマッチングを用いた詳細な解析では、抗生物質使用は急性期および後遺症期におけるCAL発生と有意に関連していることが示された。この関連は、抗生物質が腸内細菌叢に影響を与え、有益な細菌を減少させることによって冠動脈の健康に影響を及ぼす可能性が考えられる。

5) ウイルス検査・診断とデータ集積及びデータによるウイルス感染症治療ガイドラインの作成

病院 高度感染症診断部と連携し、ウイルス感染症が疑われる小児と妊婦に対しウイルス迅速診断を実施している。年間3,000件以上のウイルス迅速診断を実施している。また、

全国の難治性ウイルス感染症に対する中央診断を実施している。その結果はガイドラインや政策提言に利用され診断・治療方針決定の一助となっている。

3-5-10-2 好酸球性消化管疾患研究室

1. ミッション

当研究室は、西暦 2000 年頃より急激な増加を見せている、新生児-乳児食物蛋白誘発胃腸症（消化管アレルギー）、好酸球性胃腸を研究対象としている。いずれも、厚生労働省指定難病である（指定難病 98）。新生児-乳児食物蛋白誘発胃腸症は、出生前、胎児期から消化管の炎症がスタートしていると考えられており、壊死性腸炎、栄養障害から神経発達症を起こす場合もあり、健康に生まれたと安堵していた保護者を苦しめる。好酸球性胃腸炎は、その 75%は持続型であり、生涯、炎症が続くと考えられている。我が国はこれらの疾患の増加に早くから直面しており、重症患者も多い。このため患者を救うための有効な手段を世界に先駆けて開発し、貢献すべきであると考えます。

これらの疾患を正確に診断するとともに、新たな治療法を開発すること、病態の解明をすること、疫学調査、最良の診療ガイドラインを作成すること、わかりやすい情報公開をすることにより、日本の、世界の患者の幸福を守ることが本研究室のミッションである。

2. 研究プロジェクト

- 1) 幼児～成人の好酸球性消化管疾患（EGID）
- 2) 新生児-乳児食物蛋白誘発胃腸症（慢性型）
- 3) 急性 Food-protein induced enterocolitis syndrome (Acute FPIES)
- 4) 遺伝子変異による重症アレルギー疾患

以上の疾患について、当センターにおける重症者の診断治療、疾患サブグループの疾患名を国際的に整備、Minds 準拠診療ガイドラインの作成、疫学研究、病態の解明、血清と消化管組織の Precision medicine、新規診断法の開発、新規治療法開発（Rainbow 食事療法）、発症リスク因子の解明（疾患コホート研究）、情報の一般公開、難病の政策への貢献を行う。

3. 研究体制

室長：野村伊知郎

研究員：楠田理奈（R3 年 5 月～）

共同研究員：鈴木啓子（H30 年 11 月～）、永嶋早織（H30 年 11 月～）、渡辺翔（R4 年 8 月～）

事務：石井美穂（R4 年 4 月～）

4. 共同研究体制

- 1) 厚生労働省難治性疾患 EGID 研究班（野村伊知郎研究代表）分担、協力者は 100 名以上
- 2) アメリカ、アンナ・ノヴァク教授（ニューヨーク、マウントサイナイ病院）が代表を

務める国際 FPIES Association : FPIES の国際ガイドライン制に参加している。

3) アメリカ、マーク・ローゼンバーグ教授 (Cincinnati Children's Hospital, Cincinnati, Ohio) らが代表を務める Consortium of Eosinophilic Gastrointestinal Disease Researchers にて活動。

5. 研究の概要

1) 幼児～成人の好酸球性消化管疾患 (EGID)

引き続き、全国の基幹病院から紹介を受けて診断治療を行った。特に 6 種食物除去にても寛解導入が不可能であった患者についても、Rainbow 食事療法によって全症例を寛解導入させることができた。我々の疫学研究の結果、75%が持続型であるとの発表から、製薬企業 2 社の臨床研究が行われた。

好酸球性胃腸炎の中でも、胃に炎症が集中している好酸球性胃炎 (EoG) について、発現マイクロアレイ解析を行った。①EoG のすべての患者が炎症期において、均一の mRNA 発現パターンを示した。②すべてのサイトカインのうち、IL13 のみが、有意な上昇を示していた。③食物除去治療において炎症の特徴が消失した (世界初、楠田研究員)。このことにより、原因食物が、炎症を起こす主体である可能性が高まった。

新規治療法開発 (Rainbow 食事療法) について、これまでの結果を報告し (Allergol Int, 2023) プレスリリースなどで紹介された。ヨーロッパアレルギー学会のシンポジストにも選出され、発表を行い、賛同を得た。

2) 新生児 - 乳児食物蛋白誘発胃腸炎症 (慢性型)

アレルギーセンターを中心に、消化器科の援助をいただき、NICU、PICU、小児外科、総合診療部、移植外科、放射線診断部、病理診断部、栄養科らと診療を行い、40 名/年の診断治療を成功させた。最重症患者の離乳食は、Rainbow 離乳食とでも言うべき内容であり、全例が症状寛解維持を達成した。

また、生体肝移植後の患者は、5%の高率で本症を発症する。アレルギーセンターは移植外科から紹介を受けて、患者、保護者負担が起きないように注意を払って診療を行い、全症例の寛解維持を続けることができた。

全国調査の論文を公開した (Allergol. Int)。発症率は 0.20%であり、嘔吐と血便を同時に見るクラスター 1 だけは、新生児期に発症が集中しており、特に注意を要することがわかった。プレスリリース、各種新聞紙上でも紹介された。

3) Acute FPIES (Acute food-protein-induced enterocolitis syndrome)

Acute FPIES 単独の冊子を作成することになり、国際診療ガイドラインに基づいた改訂作業を行っている。また、成人 FPIES についても追加していく。救急アクションプランを作成し (WAO journal2023)、全国の患者が使用できるよう公開された。成人 Acute FPIES 日本初の調査を論文にて報告した (Ann Allergy Asthma Immunol 2023)。

4) 遺伝子変異による重症アレルギー疾患

本期間中に 4 名について、世界で初めての遺伝子異常が発見された。①重度の湿疹と好酸球性胃腸炎をもつ男児、STAT6 の機能亢進遺伝子異常が発見され (要部長、柳研究員)、胃の異常なリンパ濾胞形成が判明 (新井診療部長、竹内医師)、細胞遺伝学的研究、動物実

験（森田室長、松本部長、高田部長、五十嵐研究員他）にて STAT6 の機能異常が解明された。野村は主治医として児の治療と血清サイトカイン測定、消化管粘膜マイクロアレイ解析を行い、全身の各種症状が STAT6 に関して起きていることを明らかにした。結果は J Allergy Clin Immunol に報告した。

3-5-10-3 母児感染研究室

1. ミッション

さまざまな病原体が引き起こす多様な感染症は現代においても脅威であり、成育医療分野においても克服すべき感染症が多く残されている。当研究室では、母体から胎児へと病原体が感染することで引き起こされる先天性感染症を主な研究対象とし、研究対象となる主な病原体はサイトメガロウイルス（CMV）および風疹ウイルス（Rubella virus: RuV）である。先天性 CMV 感染症に合併する神経・感覚器障害などの発症メカニズムの解明とその制御法開発、RuV 感染に対する免疫応答の性状解析、先天性 CMV 感染に起因する遅発性難聴の臨床病態解析、などを進めている。

2. 研究プロジェクト

- 1) 先天性感染症の発症メカニズムとその制御法に関する研究
- 2) 先天性 CMV 感染に起因する遅発性難聴に関する研究

3. 研究体制

室長：中村浩幸

大学院生：黒坂美月

共同研究員：藤原成悦、山下泰

事務：吉川朋子

4. 共同研究体制

国立成育医療研究センター耳鼻咽喉科（守本倫子診療部長）、同研究所再生医療センター（阿久津英憲センター長、明治大学農学部生命科学科（河野菜摘子准教授）

5. 研究の概要

- 1) 先天性感染症の発症メカニズムとその制御法に関する研究

ウイルスの増殖や病原性発現には宿主細胞機能が密接に関与することから、ウイルス感染現象を制御する上でもウイルス・宿主間相互作用の理解が重要と考えられる。本研究では、short hairpin RNA (shRNA) ライブラリーを用いたスクリーニングにより CMV の増殖や細胞毒性を抑制する shRNA を同定することで、CMV 生活環に関与する細胞因子の同定を進めてきた。現在、同定された shRNA について CMV の増殖や細胞毒性を抑制する機序について解析を行っている。

- 2) 先天性 CMV 感染に起因する遅発性難聴に関する研究

当センター耳鼻咽喉科を受診する原因不明の難聴症例について、保存臍帯を用いた先天性 CMV 感染の後方視的研究により、先天性 CMV 感染に関連する遅発性難聴に関する臨床病態の解析および医療介入法などについて検討を進めている。

3-5-10-4 感染免疫研究室

1. ミッション

感染免疫研究室では、病院感染症科や多くの病院、研究機関と連携して、分子生物学的診断法の臨床への応用と、治療にむけた病態解明を進めている。

小児における重症感染症や免疫不全者の感染症の原因の多くは一般的な検査室において検出することの出来ないウイルスや培養困難な細菌・真菌などであり、病原体同定、また感染症を否定する事は治療や予後に直結する。分子生物学的な手法を用いた病原体診断を我々は 2010 年から実施し、重症感染症の原因診断とメカニズムの解析、院内感染対策、抗微生物薬の適正使用に活用してきた。我々はこれを進展させ、次世代シーケンサーなどの新しい手法の臨床応用を検討している。さらに、分子生物学診断技術の向上とともに、これまで病原体と広く認識されていなかった微生物も検出される機会も増え、その病態を正確に理解し治療へ応用するためには病原体検出に加えて、宿主の生体反応も含めた網羅的な解析が不可欠である。

我々の目標は、①感染症患者における病原体の網羅的な検査を迅速に実施し、患者の診療に寄与する、②疫学的・社会的意義のある情報を発信する、③サーベイランスや院内感染対策として、病原体の分子解析、さらには薬剤耐性菌の耐性機構の遺伝子学的な検討と細菌の遺伝子相同性検査を次世代シーケンサーで行う、④次世代シーケンサーも活用し免疫不全者の感染症や重症感染症の病態について微生物学的・免疫学的観点から検討し、臨床面および研究面で寄与することである。

2. 研究プロジェクト

- 1) 小児重症感染症の迅速診断法の開発と臨床応用
- 2) MRSA を nanopore シーケンサーによる whole genome sequencing を用いてリアルタイム解析
- 3) 小児重症感染症の病原体検索および宿主の反応の解明

3. 研究体制

室長：大宜見力（感染免疫研究室長、病院感染症科兼任）

研究員（非常勤）：河野直子

4. 共同研究体制

国立成育医療研究センター病院：アレルギー研究室（森田英明室長）、感染症科（庄司健介医長、松井俊大医員）、感染症科兼任（山田全毅医員）、神経内科（阿部裕一診療部長）、集中治療科（松本正太郎診療部長）、小児がんセンター移植・細胞治療科（坂口大俊診療部長）、救急診療部（植松悟子統括部長）、大阪大学微生物病研究所（中村昇太助教）、浜松医科大学小児科（宮入烈教授）、国立感染症研究所病原体ゲノム解析研究センター（堀場千尋第三室長）その他多数の臨床医から検体供与

5. 研究の概要

小児感染症患者の臨床検体から、55 種類の培養困難な微生物（SARS-CoV2 を含むウイルス、細

菌、真菌)をリアルタイムPCRで検出およびPan-fungal bacterial/fungal pathogenによる検出体制を整備し、年間1,500件の検査を実施してきた。重症感染症の診断や臨床像の解明に寄与してきた。次世代シーケンサーを用いて臨床検体から直接病原体を検出する手法の条件検討を行うほか、院内感染対策への応用を行っている。

1) 一般培養検査では検出されない病原体検索

小児における重症感染症や免疫不全者の感染症の原因の多くは一般的な検査室において検出することの出来ないウイルスや培養困難な細菌・真菌などである。ムコールなども含めた網羅的な真菌感染症の診断を行うため、Pan-fungal PCRの系の立ち上げを行った。重症肺炎患者における下気道病原体(123例)では、65%の症例で微生物が検出された。ウイルス感染症と確定診断がつき、抗菌薬投与の中止。あるいは微生物薬以外の治療(ステロイドや免疫抑制薬等)開始を行うことに寄与した。

2) Nanopore シーケンサーによる whole genome sequencing を用いてリアルタイム解析

MRSA は市中感染症および医療関連感染症の原因菌として重要であり、菌株を遺伝子学的に分類し、耐性・病原遺伝子を特定するため個別の分子生物学的手法が臨床応用されているが、情報が断片的で時間を要するなどの課題がある。我々はMRSA株の全ゲノムを携帯型次世代シーケンサー(Nanopore)で解読し、オンラインで経時的に解析するシステムを開発し、その臨床的有用性について検討している。

3) 次世代シーケンサー(NGS)による網羅的なウイルス検出

検体の宿主ゲノムが多い際にNGSの感度が低下するといわれており、検体処理を工夫することによりNGSの感度を上げることに成功した。髄膜炎・脳炎や心筋炎などが疑われた症例の髄液・血液・心筋検体を用いて、ウイルスをターゲットにしたNGS病原体解析を行った。Multiplex PCRでは病原体が検出されなかった無菌性髄膜炎疑いの14歳男児でNGSにて髄液よりHHV6検出(後日リアルタイムPCRでも陽性)。無菌性髄膜炎疑いの6歳男児でEBV含めたMultiplex PCRでは病原体が検出されなかったが、NGSにて髄液よりEBV検出(別のリアルタイムPCRでもEBV陽性)され、Primer/Probe領域におけるリードの有無によってはPCRで偽陰性となる可能性も示唆された。Multiplex PCRの結果と比較して新たに検出されたウイルスの確認・病原性の解釈が必要で、宿主の反応も含めた解析も必要になる。

3-5-11 社会医学研究部

1. ミッション

社会医学研究部は、複数の疫学研究手法を用いて、小児期や子育て家庭における各種疾患や社会的困難の原因を追究し、研究から得られた成果から、安心して妊娠・子育てできる環境を社会に提案することを目指しています。当研究部の構成員は疫学、小児科学、周産期医学、統計学、社会学、スポーツ学、栄養学、遺伝学、精神保健、子どもの認知・行動および社会情緒発達等の幅広い専門知識を有しています。全国の大規模な統計情報や医学情報データベース等を活用した研究から、地域レベルでのリクルート・試料採取を行うフィールドワークや記述的な研究まで、多岐にわたる研究手法を用いています。

また、2016年より6NCプロジェクトとしての電子的臨床研究基盤整備事業を運営し、この一環として2022年度からは全国出生コホートコンソーシアムを運用しています。

2. 2023 年活動実績概要

原著英語論文 (件)	招待講演・シンポジウム・教育講演・特別講演 (件)	全国紙（転載含）（件）	地方紙（転載含）（件）	海外研究者（長期・短期）受入 (名)
32	9	27	142	4

獲得研究費（成育 開発費・JH 研究費 含）	こども科 研費	AMED	厚労科 研費	JSPS	JST (さきが け)	受託研究 (SIP)
35	主任 3 分担 2	分担 2	主任 2	主任 7 国際 1 分担 5	1	1

3. 研究体制

部長：森崎菜穂

室長：加藤承彦（行動科学研究室）、大久保祐輔（臨床疫学・ヘルスサービス研究室）

研究員：田中久子、Aurelie Piedvache、小林しのぶ、石塚一枝、榎並公平、帯包エリカ、
糸井しおり シニアフェロー：浦山ケビン リサーチアソシエイト：森口ふさ江、
佐田文宏

共同研究員：小川浩平、鈴木朋、本多由紀子、小林実夏、可知悠子、山本恵美子、原田正平、藤原武男、大西香世、谷川朋幸、伊藤淳、市瀬雄一、青木康太郎、阿部恵理、越智真奈美、友利久哉、半谷まゆみ、宮山千春、澤田なおみ、高畑香織、左勝則、三瓶舞紀子、岡坂昌子、近藤天之、Nihal Rahman、木下真里、山内里奈、藤井伽奈、糸井しおり、呂天元、中田晋也、物井綾香、多田由紀、ジョップ加南、加来美森、廣田尚紀、野間口剛、船富爽子、柳川侑子、内藤真紀子 他

4. 主な研究内容とその概要

◆不妊に関するコホート研究

高度不妊治療を受ける女性約 500 名を対象とした追跡調査から、うつ症状、不安、QOL が妊娠成立や治療の中止とどのように関連しているのかを分析しています。

◆小児の臨床疫学に関連する研究

複数の全国規模の大規模医療診療情報データベースを用いて、COVID-19、インフルエンザ、アレルギー性鼻炎、RSV 感染症など複数の疾患について、時系列診療パターン、重症化危険因子の探索と入院費用の推定、医療政策効果の推定、医療資源の利用状況把握や医療提供体制変化の評価、など複数の小児の臨床疫学分析を行っています。

◆教育機関における小児の健康、感染対策、医療知識、予防接種の意向に関する研究

コドモン社のネットワークを利用して全国の保育施設における感染対策の状況を調査

し、感染対策の緩和の経時的変化や、学校生活変化が肥満・やせ・近視など小児の健康に与えている影響を調べています。

◆産婦・乳幼児・その家庭の養育環境と支援の必要性・社会的リスクに関する研究

支援を必要とする家庭を同定するリスクアセスメントシートを実用化しました。母子保健指導者養成研修・統括支援員養成研修等での周知、複数自治体への試験導入、ダミーケースや自治体データでの精度検証や、自治体向けの BI ツールの開発をしています。

◆こどもの食生活・食習慣の要因および影響に関するコホート研究

成育母子コホートの研究チームの一員として、こどもやその家族の食生活・食習慣及び食への意識の形成・変遷や、その成長発達への影響を調べています。また、世田谷区学校保健委員会の協力機関として生活習慣病健診の集計をしています。

◆川崎病に関する研究

川崎病遺伝コンソーシアムの体制整備、治療反応性に要因分析や治療実態等の解析、川崎病既往者の心理社会的困難や QOL に関する調査やニーズ・課題分析を行っています。

◆新型コロナウイルス流行が与える影響の研究

こどもと保護者の生活と健康の現状を把握する横断・縦断調査を実施しています。また、医療従事者の心身の健康状況やコロナ感染の実態を把握する縦断調査を行っています。

◆アプリ「ルナルナ」を用いた女性ヘルスケア研究

株式会社エムティーアイ社と、社会心理的要因やワクチン接種が月経周期や妊孕性に与える影響を調べる共同研究を行っています。

◆周産期関連データベース連携事業

日本産科婦人科学会周産期登録と ART オンライン登録を連結するアルゴリズムや、周産期登録と DPC データを連結し指標を産出するアルゴリズムを開発しています。

◆コホート連携事業

成育母子コホートのデータマネジメント、全国出生コホート連携(JBiCC)の事務局と全国の出生コホートの統合解析の実施、6つのナショナルセンター合同での共同研究や健康寿命延伸のための指針や提言の作成を行っております。

また、日欧の出生コホートでサプリメント使用に関する方法論の標準化の検討や、妊娠の栄養摂取と出生時アウトカムについての共同分析を実施しています。

3-5-12 政策科学研究部

政策開発研究室、政策評価研究室

1. ミッション・目標

当研究部のミッションは、成育医療および保健に関連する情報の収集および分析を通じ、健全な次世代育成に資する政策提言・情報発信・研究活動を行うことである。「政策」を看板に掲げる研究部として、様々な研究手法を活用しながら研究根拠に基づく政策(Evidence-based health policy)への貢献を目指す。具体的には、①政策の実施・評価に使用しやすい手法を用いた研究推進と支援、②二次データの利活用とその体制構築、③

一次データを用いた疫学研究、④政策・事業実施支援と評価体制の構築、の四つの柱を立てて研究している。また、得られた知見は国民に幅広く届けるよう努めている。

2. 研究体制

部長：竹原健二

室長：星野絵里（政策評価研究室）、越智真奈美（政策開発研究室）

研究員：山本依志子、須藤茉衣子、川崎麻紀、矢竹暖子、Olukunmi Balogun、Dhungel Bibha、丸山菜穂子

共同研究員：諏訪敏幸、橋本直也、柳川侑子、鈴木博道、芹澤優子、片岡智恵美、田中俊之、蓋若琰、小河邦雄、西田俊彦、山崎むつみ、北村光司、渡邊正彦、田中素子、大塚美耶子、今井健二郎、杉山雄大、古野孝志、持田敬司、キタ幸子、吉川裕貴、木内翔太、松山春佳、永田知映、上畑ひなた、青木藍、Andrea-Sakura Chalameev、奥村貴帆、堺琴美、

研究補助員：新村美知、KC Bhandari Aliza、加藤直美、清水桃子、花井範子

3. 研究の概要

1) 系統的レビューの実施と支援体制の構築

複数の文献検索の専門家や系統的レビューに長けた研究者による支援体制を整備し、文献検索式の構築、システマティックレビュー、スコーピングレビューの実施・支援をおこなっている。また、小児がんや慢性肺疾患、妊娠合併症など様々な疾患に関する診療ガイドラインの作成支援をおこなっている。

2) 診療レセプトを用いた周産期・小児・思春期における健康課題の抽出に関する研究

National Database (NDB) や JMDC Claims Database などのレセプトデータを用いた、周産期や小児・思春期の健康課題の抽出に取り組んでいる。

3) 子どもの予防可能な死亡の削減に関する研究

こども家庭庁が実施している Child Death Review のモデル事業を実施している自治体に対する体制構築や実施支援、各種支援ツールの作成と提供をおこなっている。

4) 父親のメンタルヘルスの実態把握やその支援に関する研究

二次データ解析や系統的レビュー、全国調査など複数の調査を組み合わせ、わが国における父親に対する支援の必要性や具体的な支援策などについて示し、専門家のみならず国民にも広く周知している。

5) 保育環境の向上に関する研究

国内の保育事故に関する各データベースや自治体のデータを用いて、事故の要因や対策に関する情報の整理と、保育事故の実態の記述を進めている。

6) モンゴルにおける精神保健に関する研究

モンゴル国の唯一の精神科専門医療機関の児童思春期外来に通院する子どもを対象に調査を行い、国際的な精神保健の質問紙のモンゴル国における有効性の検討や、モンゴル国における子どもの精神保健上の問題のリスク因子の分析を行った。

7) アンゴラにおける母子健康手帳の有効性に関する介入・実装研究

アンゴラ共和において、母子健康手帳のプロジェクトが地域の妊産婦の産前・産後の

保健医療サービスの継続利用にもたらす効果を検証するクラスターRCTを実施した。

8) 医療経済的な分析

小児レスパイトケアにおけるサービスについて、利用者の嗜好の順位付け、さらにそれに対するWillingness to pay推定のためのインタビュー調査、解析を行っている。

9) HPVワクチン接種後の体調不良の発生とその実態に関する研究

2022年4月にHPVワクチンの積極的接種勧奨が再開されたため、全国の協力医療機関と連携して、ワクチン接種後に体調不良を訴えて受診した患者数のサーベイランスなどを実施し、国の分科会や各地域に結果を還元している。

10) 女性のやせの実態把握と健康情報の提供に関する大規模実証事業

先進国では珍しい女性の「やせ・低栄養」について、JMDCの健診・レセプトデータを用いて、発生頻度やそうした女性の背景、その後の健康影響などを探索的に明らかにすることを目的とした二次データ解析をおこなっている。

11) 人口動態調査のリンケージからみた産後一年の女性の死亡に関する研究

人口動態調査の死亡票・個票と出生票・個票、死産票・個票等をリンケージし、産後一年以内の女性の死亡を同定して、その死因や背景因子の解析を行っている。

12) 新規疾患の新生児マスクリーニングに求められる実施体制の構築に関する研究

新規対象疾患のスクリーニング導入における費用効果分析を実施し、質調整生存年(QALY)に基づく増分費用効果比(ICER)を算出して実施の妥当性を検証する。

13) 医薬品・医療機器の費用対効果評価の公的分析業務の実施

新規医薬品・医療機器の臨床的有効性について系統的レビューを実施し、それに基づいて医療経済評価モデルの構築と費用対効果分析を行う。その上で、分析結果の不確実性評価とシナリオ分析を実施している。

4. 国際共同研究

モンゴル医学大学、モンゴル体育大学、アンゴラ国保健省、INAHTA(the International Network of Agencies for Health Technology Assessment)、HTAsiaLink、EuroQOL

5. 主な国内共同研究

筑波大学、慶應義塾大学、山梨大学、三重大学、名古屋大学、北里大学、大阪教育大学、国立保健医療科学院、国際協力機構(JICA)、京都大学、聖路加国際大学

3-5-13 エコチル研究部

1. ミッション

2011年に環境省の事業として、環境中の物質がこどもの成長や健康にもたらす影響を明らかにするための疫学調査「エコチル調査」がスタートした。環境省が企画・立案し、国立環境研究所(コアセンター)が事業の集約的管理を行い、国立成育医療研究センター(メディカルサポートセンター)が医学的側面から支援している。エコチル調査研究部は、成育内の専門家と担当者を取りまとめ、このメディカルサポートセンターの機能を担ってい

る。

2. 研究プロジェクト

- 1) 質問票作成ワーキング
- 2) 対面調査ワーキング
- 3) データマネジメント検討ワーキング
- 4) 遺伝子解析検討ワーキング
- 5) アレルギー分野プロジェクト
- 6) 精神神経発達分野プロジェクト
- 7) 内分泌分野プロジェクト
- 8) 分野横断的検討プロジェクト

3. 研究体制

エコチル調査研究部 代長／エコチル調査メディカルサポートセンター長：大矢幸弘

チームリーダー（生体制御系計測研究プロジェクトチーム）：山本貴和子

チームリーダー（行動発達系計測研究プロジェクトチーム）：目澤秀俊

チームリーダー（遺伝子解析研究プロジェクトチーム）：熊坂夏彦

質問票作成ワーキング長：大矢幸弘（アレルギーセンター長、エコチル調査研究部代表）

対面調査ワーキング長：山本貴和子（アレルギーセンター行動機能評価支援室長、エコチル調査研究部チームリーダー）

データマネジメント検討ワーキング長：目澤秀俊（エコチル調査研究部チームリーダー）

遺伝子解析検討ワーキング長：熊坂夏彦（エコチル調査研究部チームリーダー）

アレルギー分野プロジェクト長：松本健治（免疫アレルギー・感染研究部長）

精神神経発達分野プロジェクト長：小枝達也（副院長、こころの診療部統括部長）

内分泌分野プロジェクト長：鏡雅代（分子内分泌研究部臨床内分泌研究室長）

分野横断的検討プロジェクト長：目澤秀俊（エコチル調査研究部チームリーダー）

研究員：佐藤未織、齋藤麻耶子、宮地裕美子、西里美菜保、羊利敏

4. 研究の概要

エコチル調査では、10万人を対象に主に質問票でデータを収集する「全体調査」に加え、小児診察、血液検査、家庭訪問等によって、質問票のみでは得られないより詳しいデータを収集する「学童期調査（全体調査の参加者を対象とする）」「詳細調査（全体調査の参加者からランダムに抽出した5000人を対象とする）」を実施している。

当研究部では、質問票および医学的検査や精神神経発達検査の起案を目的に、エコチル調査の中心仮説テーマに沿った各専門分野のプロジェクトを組織し、調査対象とすべきアウトカムおよびその測定手法の選定・評価を進めている。また、全国の調査実施機関（ユニットセンターとする）からの医学的な質問等に対し助言を行い、調査が円滑に進行するようサポートを行っている。また、2021年度より遺伝子解析室を創設し、臍帯血、母親血からのDNA解析、データ品質管理、全ゲノムインピュテーション、ゲノムワイド関連解析（GWAS）および、GWAS結果を用いたフラグシップ論文執筆を進めている。

3-5-14 マスクリーニング研究室

1. ミッション・目標

新生児マススクリーニング(newborn screening; NBS)は現在、全部で 20 疾患を対象に実施されている(アミノ酸代謝異常症 3 疾患・尿素サイクル異常症 2 疾患・有機酸代謝異常症 7 疾患・脂肪酸代謝異常症 5 疾患・ガラクトース血症・先天性甲状腺機能低下症・先天性副腎過形成症)。多彩な対象疾患について、過剰診断や偽陽性の多発を防ぎつつ、早期発見によって真に救われる子供たちを確実に見つけ出し、適切な医療を提供することが求められており、このような要請に応えることが当研究室の使命である。

2. 研究プロジェクト

- 1) NBS 対象疾患の確定検査の整備拡充と提供・重症度評価
- 2) NBS 発見症例の登録・コホート体制の構築
- 3) NBS 検査の標準化
- 4) NBS 対象疾患の拡充
- 5) 糖原病 1a 型のアンチセンス療法開発

3. 研究体制

室長：但馬剛

臨床検査技師：志村明子，相崎潤子

研究補助員：前田堂子

共同研究員：北澤温子，小澤仁子，重松陽介(福井大学)，
花井潤師(北海道薬剤師会公衆衛生検査センター)，
宇都宮朱里(広島市立北部医療センター安佐市民病院)

4. 共同研究体制

政策科学研究部 政策評価研究室、広島大学 小児科、福井大学 小児科、島根大学 小児科、国立保健医療科学院 保険医療経済評価研究センター、

臨床検体の解析：47 都道府県すべての医療機関から診断依頼の検体提供を受けている。

5. 主な研究成果

1) 脂肪酸代謝異常症の確定診断データ集積

MCAD 欠損症・VLCAD 欠損症・CPT2 欠損症を対象に、酵素活性測定と遺伝子解析による診断確定・重症度評価を継続している。

・2023 年の診断実績(罹患者数)：MCAD(2)，VLCAD(16)，CPT2(2)

2) VLCAD 欠損症・CPT2 欠損症スクリーニング指標の再検討

これまでに確定検査を実施してきた NBS 陽性例の血液濾紙アシルカルニチンプロファイルについて、receiver operating characteristic 分析を実施した。その結果、CPT2 欠損症スクリーニングでは C12/C2、VLCAD 欠損症スクリーニングでは C14:1/C8，C14:1/C10

が、それぞれ高い水準で感度・特異度を両立し得ると評価された。原著論文として報告後、全国のマススクリーニングデータでの検証について、当センター倫理審査委員会での承認・実施許可と、日本マススクリーニング学会精度管理委員会・理事会での承認を得て、各自治体検査施設に対する調査の準備を進めている。

3) 各自治体の NBS 連絡協議会・中核医師を介する発見患者情報の収集

現行 NBS 事業の効果・有用性を正しく評価するためには、高精度かつ均質な検査の提供と、陽性例の精査結果および罹患確定例の臨床経過などの情報集約が不可欠である。しかし、実施主体は都道府県＋政令指定都市＝計 67 自治体に細分化されており、運用実態は自治体・検査機関ごとにかかなりの相違がある。特に、個人情報保護のための規制方針には自治体間の温度差が大きい。

このような困難を克服する方途として、精査以降の医療レベルで情報を収集するべく、全自治体に NBS 事業の取りまとめを担う「連絡協議会」の設置と、そこで中心的役割を担う「中核医師」の選定を要請し、中核医師を対象に発見患者情報の調査を行う仕組みづくりを進めてきた。これは 2019 年度までは日本公衆衛生協会補助事業の補助を受けて取り組んできた（分担事業者：島根大学特任教授・山口清次）が、2020 年度からは当研究室が引き継いでいる。2021 年度からは新生児マススクリーニング精度管理事業の一環と位置付けることとなった。なお、2023 年度からは精度管理事業が一般社団法人格を取得した日本マススクリーニング学会へ移管され、当研究室の発見患者情報収集等も、その枠組みの中で継続している。

2023 年度調査結果

2022 年度 NBS 新規発見患者数の調査と、2020 年度 NBS 発見患者の予後調査を実施した。28 都道府県から回答があり、新規発見患者は 337,964 出生中 42 例（アミノ酸代謝異常症 17、有機酸代謝異常症 13、脂肪酸代謝異常症 12）、患者頻度 1/8,047 出生という結果であった。2020 年度発見患者は、当初確認済み 59 例（＊うち 1 例は初回調査時点で死亡報告あり）中 47 例について回答があり、発達予後良好 31、軽度遅滞 4、中等度遅滞 2、重度遅滞 1、不明 8、死亡 1 という結果が得られた。

4) NBS 対象疾患の拡充

2020～2022 年度 AMED 成育疾患克服等総合研究事業「新生児マススクリーニング対象拡充のための疾患選定基準の確立」に引き続き研究代表者として、2023～2025 年度こども家庭科学研究 成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業「新規疾患の新生児マススクリーニングに求められる実施体制の構築に関する研究」を進めている。AMED 課題で策定した選定基準に即して新規スクリーニングを評価する上で必要な情報を収集するため、各疾患領域の専門学会および公的研究班と連携して調査計画を立案し、順次着手している。重症複合免疫不全症・脊髄性筋萎縮症については、公的スクリーニングの早期実現に対する社会的要請の高まりを受けて、複数の自治体でモデル的に実施する「実証事業」が令和 5 年度補正予算に盛り込まれ、これによって得られる知見も研究班へ提供される予定である。各領域横断的な課題として、遺伝カウンセリング体制や費用対効果についても、それぞれ専門とする班員による調査・検討を進めている。

3-5-15 小児慢性特定疾病情報室

1. ミッション

小児慢性特定疾病とは、国が医療費等の支援を行うべきと定めている子どもの慢性疾病であり、800以上の疾病が対象となっている。小児慢性特定疾病対策はこれらの疾病を抱える子どもたちへの医療費等の支援を支援する国の重要な施策である。申請の際に臨床情報を記載した医師の診断書である医療意見書が提出され、この臨床情報を集めデータベース化し疾病研究が行われている。当研究室は、小児慢性特定疾病児童等データの入力・運用や小児慢性特定疾病に関する情報発信を行うウェブサイトの運営等に関わる厚生労働省受託事業を実施するとともに、慢性疾患や子どもの健康に関する疫学研究等を行い、難病政策や成育・母子保健政策、障害福祉政策など疾病を抱える子どもたちに関連する厚生労働省や子ども家庭庁の施策を支える活動を行っている。

2. プロジェクト

○事業関連

- 1) 小児慢性特定疾病児童等データベースの運用
- 2) 小児慢性特定疾病ポータルウェブサイトの運用
- 3) 子どもの医療費助成制度の解説サイトの運用
- 4) 小児慢性特定疾病指定医研修用 e-learning サイトの運用

○研究関連

- 1) 小児慢性特定疾病に係る基盤研究
- 2) 難治性肝胆膵疾患に係る政策研究
- 3) 難治性消化器疾患に係る政策研究
- 4) 自己炎症性疾患に係る政策研究
- 5) 小児 SLE 診療ガイドラインの作成支援
- 6) 乳幼児身体発育調査に関する研究
- 7) 低出生体重児の成長・発達に関する研究
- 8) 国際生活機能分類を用いた難病・小慢患者の生活機能評価に関する研究
- 9) ICT を利用した早産低出生体重児の育児支援ツールに関する研究

3. 研究体制

室長：盛一享徳

研究員：桑原絵里香、加藤成美、渡部静

研究補助員：白井夕映、森淳之介、伊藤昌子、渡部静、高木麻衣

事務：佐藤かおり

4. 共同研究体制

株式会社 JMDC との診療報酬明細書データの利活用に関する基盤研究

5. プロジェクトの概要

○事業関連

1) 小児慢性特定疾病児童等データベースの運用

小児慢性特定疾病児童等データベースを作るために、全国の自治体から医療意見書の写しを回収し、電子データ化を行っている。また厚生労働省からのデータ二次利用のためのデータ提供依頼に対しデータ抽出を行っている。また次期登録システム開発支援やデータ抽出用システムの開発を行っている。

2) 国民に向けた情報発信

疾患概要や診断の手引き、医療意見書様式等を公開しているポータルウェブサイトや子どもの医療費助成の解説サイト、小児慢性特定疾病指定医研修用 e-learning サイトの運営を行い小児慢性特定疾病に関する情報発信を行うとともに、施策運用を支えている。

○研究関連

1) 小児慢性特定疾病に係る政策研究

小児慢性特定疾病に関する基盤研究として、日本小児科学会および関連学会、難病政策研究班と協同し、対象疾病の追加検討を実施し、厚生労働省へ新たに 13 疾病の追加要望を行った。成人移行において重要である指定難病と小児慢性特定疾病との対応状況の検討を行い、指定難病 253 疾患、小児慢性特定疾病 406 疾患の対応を明らかにした。子ども自身への疾患理解を促す情報伝達手段の検討として、動画媒体を利用した場合の子どもの認知について評価を行った。一般国民を対象とした医療費助成制度の解説として、イラストや漫画を用いて指定難病と小児慢性特定疾病の違いを解説するコンテンツを作成して公開し好評を得た。

2) 子どもの慢性疾患に係る疫学研究

死亡票を利用しわが国の小児期慢性疾患の死亡率が過去 50 年間でおよそ 1/7 に減少していることを証明し、成人移行症例が増加している可能性を示した。死亡票を利用した染色体異常症の死亡率の変化に関する分析を進めた。リウマチ性疾患のアンメットニーズを評価手法に関する系統的レビューを行った。厚生労働省研究班と連携し、自己炎症性疾患や SLE の診療ガイドライン作成を支援した。

3) 乳幼児身体発育および早産・低出生体重児の長期予後に関する研究

こども家庭庁による研究班にて、乳幼児身体発育調査の実施とその結果分析を行った。新型コロナウイルス感染拡大により実施が延期されていた乳幼児身体発育調査を令和 5 年に実施できた。わが国は早産・低出生体重児の割合が高く、母子保健行政上の重要な課題の一つであるが、研究班において遠隔期の身体発育や精神発達に関する全国調査を開始した。また極低出生体重児の育児支援として、ICT を利用した情報共有に関する研究を進めた。

3-5-16 ダイバーシティ研究室

1. ミッション・目標

当研究室のミッションは下記の3つである。

- 1) 「生物学的性(sex)に着目したヒトの多様性を解明する」
- 2) 「ゲノム・エピゲノム解析による先天希少難病の遺伝学的背景を解明する」
- 3) 「研究組織の多様性を推進し、研究支援環境を整備する」

われわれは、ダイバーシティを構成する属性について、性別や年齢などに加え、「病気であること」や「病気の原因となる遺伝子の変化を持つこと」も、重要な属性であると捉えている。当研究室では、科学的・医学的視点からヒトの生物学的多様性を深く理解するとともに、その知見を広く発信していくことを目指す。また、ダイバーシティ実現推進室と連携し、センター内の多様性を尊重する研究環境整備にも取り組むことで、すべての研究者が能力を最大限発揮できる職場を構築し、組織全体の持続可能な発展にも寄与したい。

2. 研究体制[]内は兼任

室長：深見真紀（～2023年6月）松原圭子（2023年7月～）

研究員：深見真紀（2023年7月～）[研究所副所長、分子内分泌研究部部長]

松原圭子（～2023年6月）[分子内分泌研究部上級研究員]

宮戸健二 [細胞医療研究部 生殖細胞機能研究室室長]

黒木陽子 [ゲノム医療研究部室長、共同研究管理室室長]

服部淳 [分子内分泌研究部上級研究員]

辻敦美 [システム発生・再生医学研究部研究員]

3. 活動概要

[生物学的性(sex)に着目したヒトの多様性の分子基盤研究]

生物学的性（遺伝的性、ホルモン、解剖学的特徴など）に着目し、それに関連する多様な要因を解明することで、ヒトの多様性を包括的に理解する研究を行っている。

- ・シールを用いた簡易描画、文字などの制作物で小児の性差を予測するAIプログラムを開発し、機械学習を用いた筆記文字、描画、工作、シール貼りの特性解析を行った。
- ・多嚢胞性卵巣症候群の原因解明のため、44人の患者と301人の対照を対象にSKAT-0解析を実施し、GST02遺伝子の希少な病的バリエントが患者群で有意に多く検出され、GST02の希少バリエントが一部のPCOSリスク因子となる可能性が示唆された。
- ・日本の大学生736名を対象に性自認と性的指向の多様性を調査し、低い性自認スコアや非典型的な性的指向を示す80名に対し遺伝学的解析を行った。その結果、性自認や性的指向には幅広い分布が見られ、TDRPなどの遺伝子の希少バリエントが関与する可能性が示唆された。性が連続的な表現型であることを支持し、性の多様性を理解する一助となるデータを提供した。

[ゲノム・エピゲノム解析による先天性遺伝性疾患の分子遺伝学的研究]

ゲノム・エピゲノム解析手法を用い、先天性遺伝性疾患の遺伝学的背景や、疾患の発症メカニズムと発症に関わる要因の解明を目指す分子遺伝学的研究を行っている。また、研究所内の衛生検査センターにおける先天性遺伝性疾患に対する臨床検査の社会実装推進にも取り組んでいる。

- ・非症候性胆道閉鎖症の原因解明のため、15人の患者群と509人の対照群に対しゲノムワイド解析を実施した。SKAT-0解析により、MFHAS1遺伝子の稀な病的バリエント変異(p.Val106Glyとp.Arg556Cys)が患者群に有意に多く、MFHAS1変異が非症候性BAのリスク因子となる可能性が示唆された。
- ・日本のPrader-Willi症候群患者177名の周産期と新生児期における臨床的特徴を解析し、生殖補助医療による出生児、胎動の減少、帝王切開による出生、新生児期の筋緊張低下や授乳困難、停留精巣が高頻度に認められることを明らかにした。

- ・ かずさ DNA 研究所との共同研究で、機械学習の手法を用い、クリニカルシーケンシングにおける潜在的なシーケンシングエラーに対処するためのスコアを開発した。

[研究組織の多様性推進と研究支援環境整備]

ダイバーシティ実現推進室と協働し、一般事業主行動計画に基づき、センター内のダイバーシティ、エクイティ、インクルージョンの推進に努めた。具体的には、東京医科歯科大学学生支援・保健管理機構長 宮崎泰成先生による特別セミナーを開催し、研究所職員公募、研究所内研究成果発表会の英語併記対応などを開始した。

3-5-17 共同研究管理室

1. ミッション

共同研究管理室では、センター内における円滑な共同研究の推進支援と、研究に必要な施設や機器等の基盤整備に関わる業務を推進している。

研究所の各階に位置する共同利用機器室には、超純水製造装置、製氷機、オートクレーブ、乾熱滅菌器等の実験設備が配備されている。また、各種顕微鏡、細胞分取装置、キャピラリー型シーケンサー、次世代シーケンサー、定量 PCR 装置、シングルセル解析装置などの大型で精密な共同利用機器が設置されている。これらの実験機器に加えて、共用で利用可能な安全キャビネットや CO₂ インキュベーター等の細胞培養関連機器、核酸のフラグメント解析装置、恒温培養器、超低温フリーザー等の汎用性の高い共同利用機器の維持管理、並びに、研究所の施設に関わるインフラ整備が主要業務である。

また、テクニカルセミナーの開催を通じて、最新の研究技術と新規解析機器に関する情報共有を行っている。さらに、ユーザーの希望に応じて、共同利用機器の取扱説明会の開催やテクニカルサポートに関する情報提供など、共同研究管理室が管理する共同利用機器の効率的な運用を推進している。

研究所の共同利用機器室及び臨床共同研究区域では、各研究部室、再生医療センター、臨床研究センターに所属する研究者の他、病院部門各科の臨床研究実施者が、共同利用機器を用いて研究を行っている。上記の各部室・センターに属する研究者と緊密に連携しながら、滞りなく基礎研究、臨床研究が推進されるように努めている。今後、センター内の研究者とのさらなる連携体制の確立を目指して、同研究区域がより有効かつ効果的に利用されるよう支援する。

また、上記の研究支援業務に加えて、小児や周産期に関する疾患ゲノム解析を行っている。具体的には、先天性稀少難病に対する適切かつ質の担保された遺伝医療の実装を目標に掲げ、研究所内の各部室と共同研究を行っている。

2. 研究プロジェクト

1) 先天性稀少難病の遺伝学的背景探索のための基礎的研究

近年のゲノム解析手法の進展およびヒトゲノムデータの共有化に伴い、先天性稀少難病患者に対する遺伝学的背景の探索が急速に進められ、多くの疾患の発症原因が明らかになっている。しかしながら、依然として原因不明の疾患に悩まされている患者は少なくない。当研究室では、原因不明の先天性稀少難病の原因究明を目指したゲノム・エピゲノム解析を実施し、未診断疾患の原因究明を目指した研究を行なっている。既存のゲノム・エピゲノム解析手法に加えて新たな解析手法を導入し、先天性疾患を対象とした遺伝学的解析を進めることにより、疾患発症機序の解明、診断法ならびに検査法の開発に向けた研究を進めている。

2) 先天性疾患のクリニカルシーケンスの社会実装

クリニカルシーケンスとは、次世代シーケンサーを用いて患者の持つゲノム情報や疾患関連遺伝子を網羅的に解析し、検出されたゲノム配列の変化（バリエント）の結果に臨床的な意味づけを行うことによって、診断や治療法選択の一助とする解析法である。当研究室では、センター内に設置された衛生検査センターやかずさ DNA 研究所かずさ遺伝子検査室と密に連携し、国内における先天性疾患のクリニカルシーケンスや遺伝学的検査の普及を目指した取り組みを進めている。また、遺伝学的検査手法の高精度化や新規検査法の開発など、未診断疾患の診断率向上に向けた研究を行っている。

3) 管理業務

当センターにおいて各研究者の研究活動が円滑に進むよう、共同利用設備・機器の管理運営を実施している。

- ・共同利用機器購入および共同利用機器保守契約の申請
- ・共同利用機器修理・部材の緊急発注・納品業務・伝票処理
- ・研究者からの日々の問い合わせに対する対応

4) 研究支援

研究者向けに、最新技術、最新機器（共同利用機器として有用な機器、解析技術、ソフトウェア、等）を紹介するテクニカルセミナー、テクニカルサポートセミナーを定期的に開催している。2023 年度は、研究機器や解析手法に関するセミナーを 8 回開催した。また、それらのセミナーの動画を録画し、動画の編集を行った上で、センター職員であればいつでも自由に視聴できる仕組みを構築した。

・新規購入または既存の共同利用機器について、機器設置に関する業務並びに機器アップグレードなどのテクニカルサポート。

3. 研究体制

室長：黒木陽子（ゲノム医療研究部成育疾患ゲノム研究室長、バイオバンク共同研究調整室長、衛生検査センター先天性疾患遺伝学的検査部門、リサーチアドミニストレーション室、ダイバーシティ研究室、併任）

上級研究員：松原圭子（～2023 年 6 月）

研究補助員：植田亜季

事務補助員：島本愛子

4. 共同研究体制

- 1) 国立成育医療研究センター研究所：深見真紀部長、要匡部長、中林一彦室長、宮戸健二室長、鏡雅代室長、岡村浩司室長ほか
- 2) 浜松医科大学：緒方勤特命研究教授
- 3) 国立遺伝学研究所比較ゲノム研究室：豊田敦特任教授
- 4) 東京大学新領域創成科：鈴木穰教授
- 5) かずさ DNA 研究所：小原收副所長
- 6) 別府大学食物栄養科学部：宮戸真美教授
- 7) 北海道大学大学院理学研究院：黒岩麻里教授

5. 研究の概要

〔先天性稀少難病の遺伝学的背景探索のための基礎的研究〕

染色体構造変化を有する性分化異常症の症例に対して、オプティカルゲノムマッピング解析（OGM）、アレイ CGH および全ゲノム配列解析を実施し、これら 3 つの手法を比較し、染色体切断点の同定において OGM が有用であることを示した（国立成育医療研究センタ

一、深見真紀部長との共同研究)。

また、当研究室では、ヒトゲノムの難解読領域を対象としたゲノム構造決定を進めている。成育疾患において、遺伝学的原因が未解明な疾患の多くは、その疾患原因が難解読領域に由来することや疾患原因領域のメチル化異常に由来するものが含まれている。それらの疾患原因を明らかにするため、ゲノム・エピゲノム解析手法を用いた検査法、診断法の開発を進めている。

3-5-18 実験動物管理室

1. ミッション

実験動物管理室は、動物実験において感染症が発生しない衛生的な飼育管理を実施、動物福祉に配慮した飼育、実験が行われることを。また、実験動物委員会を通じて適正な動物実験や法規についての最新情報を入手するよう努め、実験動物講習会やホームページなどを通して情報提供を行う。人員は研究員二名で構成されており、研究支援として遺伝子改変動物の作製、胚や精子の凍結保存を活用し動物の清浄化を積極的に推進する。

2. 活動状況

[講習会の実施]

毎月1回、新規利用者に対して利用者講習会を実施している。動物愛護法、実験動物の飼養と管理に関する基準の概要を説明し、動物福祉に配慮した実験が遂行されるよう指導する。また、動物施設は共同利用施設であることから使用に関するルールが定められており、その内容の詳細や実際の手順についても説明する。2023年度は38名の新規受講者に対して講習を行った。

[動物実験計画書の審査]

研究所内で行われる動物実験はすべて動物実験計画書を提出しなくてはならない。動物実験委員会は動物実験計画書の内容を審査し、動物福祉に沿った実験であるかを審議したのちに承認する。2023年は2件の新規課題件と50件の継続申請があった。

[微生物モニタリング]

指定のブリーダー以外の外部機関からの動物の導入は、感染症予防の観点から受精卵もしくは凍結精子で個体復元を行った後に導入する。2023年の5月と11月の微生物モニタリング検査では異常は認められなかった。

[技術支援]

2023年は遺伝子改変動物の作製(7件)、受精卵精子凍結(13件)、個体復元(12件)、卵巣移植(1件)を行った。

[動物慰霊祭と実験動物利用者再教育]

2023年12月22日に研究所2階セミナー室で実験動物慰霊祭が行われた。また、実験動物利用者の再教育も行われた。

再教育の内容

2023年12月22日10時～10時30分

出席者119名

- 1) 3Rsの確認と動物実験の重要性(梅澤所長)
- 2) EUの動物実験の現状、慰霊祭の歴史(宮戸動物実験委員長)

3. 研究プロジェクト

ヒトの病態を再現するモデルマウスの作製には、ゲノム編集技術やジーンターゲットイングだけでなく、メスマウスから卵子を効率的に得るための過排卵処理や自然交配における精子の挙動など、発生工学に関する幅広い知見が必要となる。当研究室では独自に遺伝子改変マウスを作製し、網膜色素変性症やゲノムインプリンティングに関する研究を行うとともに、マウスの生殖効率に関する研究を行う。

4. 研究体制

研究員：津村秀樹

研究員：進導美幸

5. 共同研究体制

明治大学農学部生体制御学研究室 河野菜摘子准教授

明治大学農学部動物再生システム学研究室 乾雅史准教授

別府大学食物栄養科学部食物栄養学科 宮戸真美教授

6. 研究の概要

1) 網膜色素変性マウスのゲノム編集治療

CBA/J, C3H/HeJ マウスは遺伝的に網膜色素変性症を発生する。原因遺伝子はPde6b(ホスホジエステラーゼ6B)の1塩基置換により桿体細胞がアポトーシスを起こし発症すると報告されている。CRISPR/Cas9により、この原因遺伝子の変異を正常に戻した。CBA/J, C3H/HeJは正常遺伝子に置換する事により桿体細胞が正常に認められた。行動試験では視覚的断崖課題、可視逃避台課題、明暗選択課題を実施した。試験の結果、CBA/JとC3H/HeJでは視覚の正常行動が両系統に認められたが、若干異なる行動様式が認められ系統差が存在していることが判明した。

2) ゲノムインプリンティングの研究

哺乳類は、父親と母親それぞれから1セットずつもらった遺伝情報をゲノムとして持っている。そのうち一部の遺伝子は片方の親由来のみが働くゲノムインプリンティングと呼ばれる、進化の過程で哺乳類が獲得した特異な遺伝子発現制御を受ける。二倍体としての利点を捨ててまでなぜ特定の遺伝子がインプリンティングを受けるようになったのか、またどのようなしくみで生物種を越えてインプリンティングが維持されているのかなどわかっていないことも多くある。*Impact*はほぼ全ての生物に存在する遺伝子であるが、哺乳類のなかでもウサギ目とげっ歯目では父親由来のアレルのみが発現する。ウサギ目のなかでも初期に分化したナキウサギは、*Impact*の周辺領域が他のどの生物とも一致しない特徴を持っていることから、ナキウサギ *Impact*が、他のウサギと同様にインプリンティングを受

けていることを確認するために日本固有種であるエゾナキウサギ (*Ochotona hyperborea yesoensis*) の全ゲノムシーケンシングを行った。その結果、*Impact* は他のウサギと同様に父親由来のアレルのみが発現している可能性が示唆された。また *Impact* 周辺の遺伝子配置がナキウサギ間で保存されていることを見出した。今後、ナキウサギゲノムをより詳細に解析するとともに、ナキウサギゲノムをマウスゲノムに挿入した遺伝子改変マウスの解析により、*Impact* の発現制御機構の解明を目指す。

3) マウス生殖効率に関する研究

遺伝子改変マウス作製では体外受精、顕微授精、マイクロインジェクション、胚移植など多岐にわたる発生（生殖）工学技術を駆使する必要があるが、体外受精の効率は系統ごとに異なるように、同一の処置に対して異なる結果を示す例がある。モデル生物として最も多用されるマウス系統 C57BL/6 (B6) には異なる維持施設に由来した B6/J と B6/N の 2 種類が存在し、両系統にみられる遺伝的な違いはわずかながら、肥満や糖耐能、インスリン分泌などの代謝反応には顕著な違いがあることが報告されている。そこで、外来性のホルモンを投与し多数の卵子を得る過排卵処理を B6/J と B6/N のメスに対して実施したところ、4 週齢の B6/J 系統がとりわけホルモンへの応答性が高いことを見出した。今後は B6 間でのホルモンへの応答性に差が生じる原因を追求するとともに、体内環境での受精に必須である精漿タンパク質の機能解析を行う。

3-5-19 ラジオアイソトープ管理室

生命科学研究部門 免疫アレルギー・感染研究部 移植免疫研究室と重複のため、ラジオアイソトープ管理室は省略

3-5-20 バイオバンク

1. 概要

国立研究開発法人国立成育医療研究センターを含む国立高度専門医療研究センター（ナショナルセンター）は、国民の健康に重大な影響のある様々な病気を解明し克服することを使命としている。各々のナショナルセンターが、病気に関する最高レベルの医療を国民に提供できるように日夜努めるとともに、特に診断・治療に苦慮する疾患を対象として、新しい診断・治療・予防技術の開発に積極的に取り組んでいる。しかし、このような医学の進歩に向けた取り組みには、検査に使われた後の余剰な血液、体液や組織等を有効に活用した研究が不可欠である。これまでの医学の進歩も、疾患に苦しむ方々から同様に検査や治療の過程で発生する余剰な生体試料を利用して行われた研究成果に依るところが大きい。最新の解析技術を用い、多くの患者さんにご協力いただいた生体試料を解析することで、これからも新たな医学の発展が生み出されていく事に疑念の余地はない。そしてこれらの研究成果は、現在病気に悩まされている人々だけでなく、将来世代（子供、孫の世代）の人々を病気から救うことができる可能性を秘めている。このような「新たな医療の創造」に向けて歩みを進めるべく、6つのナショナルセンターが協力し、血液・組織等の保管、研究のための手続きを共通の体制で運用できるよう、「ナショナルセンター・バイオバンク

ネットワークプロジェクト」を推進している。

2. 目的

比較的多数が罹患する可能性のある疾患（common disease：がん、心血管病等の生活習慣病、認知症など）の成因・病態は極めて複雑であり、その解明・克服のためには多面的かつ統合的な研究アプローチが必要とされる。一方で、難病（その多くは rare disease：稀少疾患）の有効な治療法開発にも、実態調査・基盤研究から臨床への展開研究が必要である。従来から、ヒトの生体由来試料－バイオリソース－が研究目的で収集保管され、それを活用することで最先端研究を推進しようという動きは見られた。特に近年、ゲノム医学・再生医療分野の技術革新が進むにつれて、バイオリソースのバンク化の重要性が認識され、各国が精力的に「バイオバンク」構築に取り組んでいる。我が国は、“iPS細胞などの細胞株の加工技術”及び“高度な医療体制の充実に伴う高精度な医療情報”において、先進諸国の中でも優位性を保っている。しかし、これらの高度な医療の普及に伴い蓄積される膨大な生体試料や医療情報も、適切に整理・保管されていなければ、有効活用されずに死蔵されてしまう。残念ながら我が国は、「バイオバンク」のような体制の構築に関しては十分といえない状況であり、先端技術を医療に適用して社会に還元していくためにもこれらの整備が喫緊の課題である。6つのナショナルセンターは、主要な疾患を網羅し、国民の健康を守るために疾患の解明と治療法の開発を目指す医療研究機関であり、これらが率先して共同のバイオバンク構築に取り組み、ナショナルセンター内あるいは外部研究機関との共同研究等を積極的に推進し、バイオリソースを産学官連携して活用できるような仕組み作りを目指す。

3. 進捗状況

ナショナルセンターバイオバンクネットワークプロジェクトのホームページが公開され、進捗状況が逐一報告されるようになっている（<https://ncbiobank.org>）。当センター内のバイオバンク（成育バイオバンク）は、当センターに期待されている試料収集に最適化した運用プロトコルを定め、当センター倫理委員会の承認を受け（受付番号 630 および 1584、2022-212）、2014年度中期から新規検体の収集を進め、登録者数 2,776、総検体数 5,738、DNA 2,486、血清 1,478、組織その他 1,774 を収集した（2023年12月末時点）。NCBN カタログデータベースへの情報更新も順次行っている。なお、外部からの問い合わせは 215 件あり、そのうち 121 件は企業から、残り 94 件は大学・研究機関からの問い合わせであった。バイオバンク長 梅澤明弘（併任）、副バイオバンク長 深見真紀（併任）、検体システム管理室長 松本健治（併任）、バイオリソース倫理室長/細胞管理室長 小野寺雅史（併任）、共同研究調整室長 瀧本哲也（併任）、事務局 川村和世・長谷川冬雪・諸隈史香

3-5-21 衛生検査センター

1. ミッション

衛生検査センターでは、様々な小児の稀少疾患や難病を対象とし、研究所で行っている

研究の中で開発/確立された新たな解析技術や検査法を、診療に役立つ検体検査として、国内の診療機関に提供することを目指している。これらの解析技術や検査法を用いて、他の施設では実施することが困難な検査項目に対応することで、それぞれの疾患に対して、迅速で正確な診断や治療反応性の予測に有用な情報がもたらされることが期待される。臨床検査技師等に関する法律では診療に供する検体検査を実施できるのは「病院の検査部門」と各都道府県知事等に認可された「衛生検査所」に限定されているため、2019年3月付で、研究所の一部を衛生検査所として管轄の世田谷保健所に申請、登録し、「成育衛生検査センター」を発足させた。

2. 体制

[血液・腫瘍検査部門（発足当初より）]

小児白血病・リンパ腫に対して中央診断として実施してきた、細胞マーカー解析とキメラ遺伝子スクリーニングを検体検査として受託している。

1) 細胞性免疫検査/マーカー解析（フローサイトメトリー法）

①白血病・リンパ腫解析検査

50項目以上の分子（抗原）の発現を解析し、白血病/リンパ腫の診断や、詳細な病型分類を迅速に行う。

②白血病微小残存病変解析

治療経過中の骨髄残存白血病細胞数の変化を、最大10種類の抗原発現の特徴を目印に追跡する。治療反応性を確認する上で最も有用な指標の1つと報告されており、治療を進める上で重要である。

2) 体細胞遺伝子検査/造血器腫瘍遺伝子検査（定量PCR法）

急性リンパ芽球性白血病、急性骨髄性白血病キメラ遺伝子スクリーニング

染色体の転座によって2つの全く別々の遺伝子が1つに融合した異常であるキメラ遺伝子について、近年新たに同定されたものを含め、可能な限り網羅したスクリーニング解析を提供している。国内発症の大部分の症例を対象に実施しているため、希少項目の解析も有効で、発症実態の解明に結びつくことが期待される。

[先天性疾患遺伝学的解析部門（2022年5月より）]

内分泌疾患やインプリンティング疾患の診断を目的とし、以下の項目について、MLPA法及びMS-MLPA法による遺伝学的検査を受託している。

保険 MS-MLPA 解析：プラダー・ウィリ症候群、アンジェルマン症候群、鏡・緒方症候群

非保険 MLPA 解析：SHOX 異常症、先天性副腎過形成症、Y染色体微細欠失、非保険 MS-MLPA

解析：シルバー・ラッセル症候群、ベックウィズ・ビーデマン症候群、テンプル症候群、新生児一過性糖尿病、偽性副甲状腺機能低下症、ヒトインプリンティング疾患スクリーニング

3. スタッフ

管理者、センター長（遺伝子・染色体検査精度管理者）：清河信敬（小児血液・腫瘍研究部長併任）

精度管理責任者：松本健治（免疫アレルギー・感染研究部長併任）

事務：徳永克之（企画経営部研究医療課研究所総務係長併任）、堀部ひかり（企画経営部研

究医療課研究所総務係併任)
事務補助員：得田恵美（～2023年8月まで）
[血液・腫瘍検査部門]
細胞性免疫検査担当医師：出口隆生（小児がんセンター小児がん免疫診断科診療部長併任）
臨床検査技師：在家裕司（小児がんセンター小児がん免疫診断科）、渡部悟（小児血液・腫瘍研究部研究員併任）
検査補助員：欠員
[先天性疾患遺伝学的解析部門]
遺伝子・染色体検査精度管理者：黒木陽子（ゲノム医療研究部成育疾患ゲノム研究室長併任）
検査担当医師：松原圭子
検査補助員：植田亜季

4. 活動状況

[血液・腫瘍検査部門]

新規発症 914 例の細胞マーカー解析を行った。このうち急性リンパ芽球性白血病（ALL）440 例、急性骨髄性白血病（AML）130 例、リンパ腫（疑い症例を含む）116 例、等が含まれていた。また、再発例として 109 例の解析を行った。ALL 及び AML 白血病のキメラ遺伝子スクリーニングを 738 例に実施した。

国内対象 138 施設と何らかの形での受託検査の契約を結んでいる。受託検査以外に、もともと臨床研究の枠組みの中で実施されている解析等については JCCG の臨床研究として実施した。

[先天性疾患遺伝学的解析部門]

65 症例（SHOX 異常症 8 例、21 水酸化酵素欠損症 4 例、インプリンティング疾患 53 例）に対して MLPA または MS-MLPA 法による臨床検査を実施した。また、AMED 研究班などの解析委託を受け、研究検査として 126 件の MLPA および MS-MLPA 検査（SHOX 異常症 8 例、21 水酸化酵素欠損症 5 例、インプリンティング疾患 113 例）を実施した。他の施設では実施が困難な先天性疾患の遺伝学的診断を当センターが実施可能していることを、国内の診療関係者へ周知する目的で、関連学会に連動して広報活動を行っており、現時点で 30 施設と契約が完了している。

3-6 研究開発監理部

3-6-1 臨床研究管理室

臨床研究管理室では、センターにおける医学系研究や、医薬品等の適応外使用等が、倫理的・法的に、適正かつ円滑に行われるよう、各種指針や法に沿った委員会運営や研究管理を行っている。

1) 委員会運営

①倫理審査委員会

- ・倫理指針に基づき設置した委員会で、医薬品等の臨床研究（特定臨床研究以外）、観察研究、手術・手技の臨床研究等の審査を行っている。
- ・12回開催し、523件の審査を行った。
- ・前年から引き続き中央一括審査も実施している。

②臨床研究審査委員会

- ・臨床研究法に基づいて設置した委員会で、特定臨床研究の審査を行っている。
- ・12回開催し、38件の審査を行った。
- ・委員会の認定更新申請を行い、更新が認定された。

③特定臨床研究等管理委員会

- ・特定臨床研究の当センターでの実施について管理者許可を得るための委員会で、実施中のすべての特定臨床研究が適正に実施されるよう、審査を行っている。
- ・メール審査を含め、13回開催した

④医療安全監査委員会

- ・委員会は、病院における医療安全に係る遂行状況及び管理状況を監査する役割を担っている。
- ・年2回開催し、管理状況に係る監査及び報告、必要な管理体制に関する提案・助言が行われた。

⑤臨床研究監査委員会

- ・委員会は、病院において実施中の臨床研究に係る遂行状況の確認及び不正事案等の監視、管理状況を監査する役割を担っている。
- ・年2回開催し、管理状況に係る監査及び報告、必要な管理体制に関する提案・助言が行われた。

⑥高難度新規医療技術評価委員会

- ・高難度新規医療技術の提供に関する倫理的・科学的な妥当性、センターで当該高難度新規医療技術を提供することの適切性並びに適切な提供方法について審査を行っている。
- ・5回開催し、5件の審査を行った。

⑦未承認新規医薬品等評価委員会

- ・未承認新規医薬品等の使用に関する倫理的・科学的な妥当性、センターで当該未承認新規医薬品等を使用することの適切性並びに適切な提供方法について審査を行っている。
- ・緊急開催を含め30回開催し、66件の審査を行った。

⑧受託研究審査委員会

- ・治験以外の受託研究（製造販売後調査、医学専門家業務、企業依頼の観察研究等）の契約、臨床研究センターが受託する臨床研究支援業務の契約について審査を行っている。
- ・10回開催し、262件の審査を行った。

⑨細胞原料提供倫理審査委員会

- ・再生医療等製品の製造に利用可能なヒト（同種）体性幹細胞の安定的な供給を実現するため、生物由来原料基準、ヒト細胞原料供給に係るガイダンスに基づき審査を行っている。
- ・7回開催し、12件の審査を行った。

2) 教育研修

- ・臨床研究教育研修について、教育研修センターと共同でプログラムを策定した。
- ・外部機関からの受講希望者の受け入れも行っている。
- ・倫理審査委員会、臨床研究審査委員会の委員対象研修を3回開催した。
- ・研究者の研修受講状況の確認、管理を行っている。

3-6-2 知財・産学連携室

知財・産学連携室は、国が進める知的財産の保護と活用の基本の方針を推進するために設置されたものであり、産業技術力強化法の理念に則り、知財の適切な管理と研究開発成果の産業への移転促進の業務を担っている。職務発明審査委員会、共同研究審査委員会ならびにそれら委員会の事務局を担う研究医療課と密な連携をとりながら活動を進めている。

2023 年も引き続き、1) 研究活動や診療活動の中からの知的財産になりうる成果の掘り起し、2) 職務発明申請ならびに特許出願手続きの支援、3) 出願中の特許の管理、4) 共同研究の相談・契約交渉等、これまでの活動を継続実施した。また、外部からの問い合わせに対して、研究者・専門医の紹介を行い、共同研究等の協業スキームの提案を行っている。本年度の実績としては、職務発明の認定12件、特許の取得5件、共同研究契約締結21件であった。

職務発明の目利き役として 2011 年度から導入している顧問弁理士制度は引き続き活用しており、職務発明委員会へのオブザーバーとしての参加、職務発明届に先立つ特許性の有無などへの助言を求め、無駄のない特許出願・管理に努めている。

3-6-3 リサーチアドミニストレーション室

RA（Research Administration）室は、令和5年4月1日、大型研究の支援や社会実装化の支援を目的に設置された。RA 室長および室員で構成されており、主に産学官連携に関わる研究の支援を中心としている。

具体的な活動は、以下のとおり

1) ホスピタル事業に関連した支援 (BRIDGE)

AI ホスピタル事業の後継である単年度事業、「研究開発と Society5.0 との橋渡しプログラム (BRIDGE)」に研究支援チームとして参画し、研究費獲得支援、事業マネジメント会議等の開催、企業との橋渡し、PMDA 申請に係る支援、その他研究推進に係る様々な支援を行った。

2) AI ホスピタル事業に関連した支援 (SBIR)

ベンチャー企業等のスタートアップ等による研究開発を促進する SBIR 制度 (Small/Startup Business Innovation Research) における事業「AI (人工知能) ホスピタル実装化のための医療現場のニーズに即した医療 AI 技術の開発・実証」(令和5～7年度予定)に関して、過去に AI ホスピタル事業で連携した2企業と成育内研究者の連携に関する橋渡し、研究費獲得に係る支援等を行った。

3) バイオバンク連携の推進

3大バイオバンク(東北メディカル・メガバンク機構、バイオバンク・ジャパン、6NC バイオバンク)と情報共有を行い、成育との連携推進を図った。東北メディカル・メガバンク機構とは、研究推進に関する包括的連携協定の締結に至った。

4) その他

AI ホスピタル事業に関連した研究を中心に、臨床研究センター、知財・産学連携室等の関係部署と協力し、約20件の研究等に関して、企業と研究者の橋渡し等の支援を行った。また、女性の健康総合センター創設に際し、関連する企業・アカデミア等との橋渡しや情報収集、小規模な勉強会開催等の支援を行った。

3-6-4 生命倫理研究室

1. ミッション・目標

生命倫理研究室では、成育医療領域における臨床倫理および研究倫理に関する諸課題について学問的に取り組むと共に、倫理的問題についての臨床倫理コンサルテーションを行っている。特に成育医療領域では、その対象が自らの医療に関して自己決定することのできない子ども(未成年者)であることから、つねに「代行判断(代諾)」の倫理的妥当性の問題や子どもの権利擁護の問題等に特別な配慮が必要となる。

また、上記に加え、研究プロトコル作成時の研究者等への研究倫理に関するコンサルテーションも実施している。さらに、研究者、CRCをはじめとする研究支援者、倫理委員会委員および事務局等に対する倫理研修等を通して、成育医療研究の倫理的基盤の構築にも貢献している。

また、当センターで取り組まれている先端医療技術等に関連した生命倫理にかかる政策等の検討、小児患者の権利擁護の観点から小児慢性疾患対策のあり方、自立支援、移行支援等に関する政策検討、さらに小児の慢性疾患患者の生活実態調査(well-being 向上のため

の調査研究) 等も実施し、小児である患者ならびに被験者の権利擁護、QOL 向上の観点を踏まえた成育医療・保健政策の立案に資するエビデンスの構築に取り組んでいる。

2. 研究プロジェクト・概要

1) 臨床倫理コンサルテーション

成育医療領域における臨床倫理に関する諸課題について学問的に取り組むと共に、倫理的問題についての臨床倫理コンサルテーションを実施している。また、必要に応じて臨床倫理検討会を開催して、院内の合意形成に努めている。

2) 研究倫理コンサルテーション

成育医療領域における研究倫理に関する諸課題について学問的に取り組むと共に、研究プロトコル作成時の研究者等への研究倫理に関するコンサルテーションを実施している。

3) 慢性疾患を有する子どもの健康と福祉に関する研究

慢性疾患や障がいをもつ子どもたちの総合的な健康や福祉に関する指標や評価法の開発を行うと共に、それらの評価指標を用いて、慢性疾患を有する子どもたちの well-being 向上のための生活実態調査等を進め、養育・療育における子どもたちの権利擁護の観点を踏まえた自立支援・移行支援等の政策提案を行っている。

4) 先端医療技術等に関連した生命倫理にかかる政策の検討

再生医療、iPS 細胞研究、細胞治療等、先端医療技術等に関連した生命倫理にかかる政策等の検討を進めている。また、被験者(参加者)保護に配慮した臨床研究の適正実施のために、研究審査の質の向上ならびに研究規制についても検討を進めている。

3. 研修会

2023 年は、下記の通り研修会を開催した。

1) 小児慢性特定疾病児童等移行期医療支援者養成研修会

移行期医療支援を実施するために必要な知識や専門性を身につけ、移行期医療支援コーディネーターの育成や移行期医療支援体制の普及を図ることを目的として、対面にて開催した。

【移行期医療支援者養成研修会プログラム】

沖縄会場(会場参加: 44 名/オンライン参加: 108 名)

日時: 2 月 28 日(水) 18:30~20:30 ※ハイブリッド形式(Zoom ウェビナー)

会場: こっぼ KoPHO(沖縄小児保健センター) 3 階ホール

(沖縄県島尻郡南風原町字新川 218-11)

プログラム: ①移行期医療支援について

国立成育医療研究センター総合診療部統括部長 窪田 満

②成人移行期の患者・家族支援とは—日本小児科学会の考え—

日本小児科学会移行支援委員会 委員長 賀藤 均

③成人移行の基礎となる自立支援

国立成育医療研究センター生命倫理研究室長 掛江 直子

名古屋会場（会場参加：32名）

日時：3月1日（金）18:00～20:00

会場：TKP ガーデンシティ PREMIUM 名古屋新幹線口 バンケットホール2A
（愛知県名古屋市中村区椿町1-16 井門名古屋ビル2階）

プログラム：①成人移行期の患者・家族支援とはー日本小児科学会の考えー
日本小児科学会移行支援委員会 委員長 賀藤 均
②成人移行支援、及び成人移行の基礎となる自立支援
国立成育医療研究センター生命倫理研究室長 掛江 直子

山形会場（会場参加：20名）

日時：3月5日（火）18:00～20:00

会場：ダイワロイネットホテル山形駅前 ホテル3階会議室
（山形県山形市幸町2-9）

プログラム：①成人移行期の患者・家族支援とはー日本小児科学会の考えー
日本小児科学会移行支援委員会 委員長 賀藤 均
②成人移行支援、及び成人移行の基礎となる自立支援
国立成育医療研究センター生命倫理研究室長 掛江 直子

東京会場（オンライン参加：118名）

日時：3月6日（水）18:00～20:10 ※ハイブリッド形式（Zoom ウェビナー）

会場：TKP ガーデンシティ PREMIUM 東京駅丸の内中央 ホール12A
（東京都千代田区丸の内1-9-1 丸の内中央ビル12階）

プログラム：①成人移行期の患者・家族支援とはー日本小児科学会の考えー
日本小児科学会移行支援委員会 委員長 賀藤 均
②移行期医療支援について
国立成育医療研究センター総合診療部統括部長 窪田 満
③移行期のこどもの意思決定支援
国立成育医療研究センターこころの診療科診療部長 田中 恭子
④東京都移行期医療支援センターの立上げと現在の活動
東京都小児総合医療センター副院長 三浦 大

大阪会場（会場参加：21名）

日時：3月14日（木）18:00～20:10

会場：TKP ガーデンシティ東梅田 バンケット3A
（大阪市北区曽根崎2-11-16 梅田セントラルビル3階）

プログラム：①移行期医療支援について
国立成育医療研究センター総合診療部統括部長 窪田 満
②成人移行期の患者・家族支援とはー日本小児科学会の考えー
日本小児科学会移行支援委員会 委員長 賀藤 均
③成人移行支援の諸外国の動向
東京都立病院機構 研究推進センター 顧問 本田 雅敬
④大阪府移行期医療支援センターの立上げと現在の活動
大阪府移行期医療支援センターセンター長 位田 忍

佐賀会場（会場参加：17名）

日時：3月15日（金）18:30～20:00

会場：アバンセ 第1研修室 佐賀県立男女共同参画センター・生涯学習センター
（佐賀市天神三丁目2-11）

プログラム：①成人移行期の患者・家族支援とはー日本小児科学会の考えー

日本小児科学会移行支援委員会 委員長 賀藤 均

②行政が実施する移行期医療支援

PwC コンサルティング合同会社 公共事業部マネージャー 当新 卓也

滋賀会場（会場参加：18名）

日時：3月29日（金）18:00～20:00

会場：ホテルテトラ大津. 京都 プエルタ大津会議室
（滋賀県大津市逢坂1-1-1）

プログラム：①移行期医療支援について

国立成育医療研究センター総合診療部統括部長 窪田 満

②成人移行期の患者・家族支援とはー日本小児科学会の考えー

日本小児科学会移行支援委員会 委員長 賀藤 均

③行政が実施する移行期医療支援

PwC コンサルティング合同会社 公共事業部マネージャー 当新 卓也

2) 小児慢性特定疾病児童等自立支援員研修会

小児慢性特定疾病対策における自立支援事業を推進するために必要な知識や専門性を身につけ、自立支援員の育成や自立支援事業の普及を図ることを目的として、対面にて開催した。

基礎編については、主に受講申し込みができなかった方向けに10月にオンデマンド配信を実施した。また、11月にアドバンス編をオンライン形式にて開催した。

【自立支援員研修会プログラム】

第13回自立支援員研修会【基礎編】（参加者数：121名）

日時：【1日目】7月27日（木）9:30～16:00 【2日目】7月28日（金）9:30～12:00

開催方法：オンライン形式（Zoom）

プログラム：

①小児慢性特定疾病対策の概要

厚生労働省健康局難病対策課 西條 晴貴

②小児期発症の慢性疾病を有する患者の就学について

文部科学省初等中等教育局特別支援教育課 相原 千絵

③小児慢性特定疾病児童等自立支援事業の現状

愛媛大学大学院医学系研究科 檜垣 高史

④患者・家族からの声（30分×5団体）

瘰癧の会、魚鱗癬の会、Telomere Japan（先天性角化不全症患者会）、日本コケイン症候群ネットワーク、がんの子どもを守る会

⑤自立支援 任意事業の現状とこれから（25分×5講義）

・就園支援（大阪公立大学大学院看護学研究科看護学専攻 仁尾 かおり）

- ・就学支援・学習支援（京都女子大学発達教育学部教育学科 滝川 国芳）
- ・就労支援（横浜市立大学医学部看護学科成人看護学 落合 亮太）
- ・きょうだい支援（名古屋大学大学院医学系研究科看護学 新家 一輝）
- ・「小児慢性特定疾病児童等自立支援員による相談対応モデル集」の紹介（千葉大学附属法医学教育研究センター 三平 元）

第13回自立支援員研修会【基礎編】（オンデマンド配信）（申込：149名／聴講：92名）

配信期間：10月10日（火）9:00から10月16日（月）17:00まで

配信方法：オンデマンド配信（MOOGA）

第14回自立支援員研修会【アドバンス編】（参加者数：25名）

日時：【1日目】11月7日（火）13:00～16:15 【2日目】11月8日（水）10:00～14:30

開催方法：オンライン形式（Zoom）

プログラム：

- ①慢性疾患のある子どもたちの自立をめざした、就園・就学、学習・復学支援の重要性
愛媛大学大学院医学系研究科 檜垣 高史
- ②慢性疾患をもつ子どもの就学・教育における合理的配慮と法
ー2022年国連の総括所見を受けてー障害の人権モデルとは何かー
アリエ法律事務所 弁護士 大谷 恭子
- ③病気の子どもの新たな学びとそれぞれの自立のための指導と支援
京都女子大学発達教育学部教育学科 滝川 国芳
- ④事例検討
認定NPO法人ラ・ファミリエ 理事／愛媛県・松山市自立支援員 西 朋子
認定NPO法人ラ・ファミリエ／愛媛県・松山市自立支援員 日山 朋乃
- ⑤ライブインタビュー「当事者家族の想い」
医療的ケアが必要な子どもの親の会 らいおんはあ〜と 代表 湯池 三代子
- ⑥子どもが教育を受けることを支援するために知っておきたい施策・関係機関
千葉大学附属法医学教育研究センター 三平 元

4. 社会貢献活動

- ・厚生労働省 先進医療技術審査部会 構成員
- ・厚生労働省厚生科学審議会 再生医療等評価部会 委員
- ・厚生労働省厚生科学審議会 臨床研究部会 委員
- ・厚生労働省厚生科学審議会 再生医療等評価部会遺伝子治療臨床研究に関する審査委員会 委員
- ・厚生労働省厚生科学審議会 ゲノム編集技術等を用いたヒト受精胚等の臨床利用のあり方に関する専門委員会 委員
- ・国立研究開発法人日本医療研究開発機構 再生医療実現拠点ネットワークプログラム 再生医療の実現化支援課題 プログラムオフィサー（PO）
- ・国立研究開発法人日本医療研究開発機構 成育疾患克服等総合研究事業課題評価委員会 委員
- ・国立研究開発法人日本医療研究開発機構 再生医療実用化基盤整備促進事業課題評価委員

会 委員

- ・国立研究開発法人日本医療研究開発機構 再生医療臨床研究促進基盤整備事業課題評価委員会 委員 (2023 年 3 月 31 日まで)
- ・国立研究開発法人日本医療研究開発機構 再生医療実用化研究事業課題評価委員会 委員 (名称変更のため 2023 年 9 月 30 日まで)
- ・国立研究開発法人日本医療研究開発機構 再生医療等実用化研究事業課題評価委員会 委員 (新名称で 10 月 1 日より)
- ・国立研究開発法人日本医療研究開発機構 再生・細胞医療・遺伝子治療産業化促進事業 (委託事業) 課題評価委員会委員 (2023 年 3 月 1 日より)
- ・公益社団法人成長科学協会 倫理審査委員会 委員
- ・公益財団法人日本臓器移植ネットワーク 提供施設委員会家族ケア部会 委員
- ・公益財団法人日本小児科学会 倫理委員会 委員
- ・公益財団法人日本小児科学会 移行支援委員会 委員
- ・公益財団法人日本小児科学会 自発的意思決定が困難な患者の成人移行支援のあり方を検討する WG
- ・一般社団法人日本小児総合医療施設協議会 小児治験ネットワーク中央治験審査委員会 委員
- ・一般社団法人日本循環器学会 研究倫理審査委員会 委員
- ・一般社団法人日本循環器学会 利益相反委員会 委員
- ・東京大学大学院薬学系研究科・薬学部ヒトを対象とする研究倫理審査委員会 副委員長
- ・大阪大学大学院医学系研究科ヒト ES 細胞倫理審査委員会 委員
- ・大阪大学第二特定認定再生医療等委員会 委員
- ・九州大学病院心臓移植術後検討委員会 委員
- ・東京医科歯科大学特定認定再生医療等委員会 委員
- ・東京女子医科大学病院認定再生医療等委員会 委員
- ・埼玉医科大学臨床研究審査委員会 委員
- ・特定非営利活動法人日本小児がん研究グループ (JCCG) 監査委員会 委員
- ・株式会社ジャパン・ティッシュ・エンジニアリング (J-TEC) 倫理委員会 委員
- ・公益社団法人日本小児保健協会倫理委員会 委員
- ・一般社団法人日本小児神経学会 小慢・指定難病に関する委員会脊髄性筋萎縮症マスキングワーキンググループ 委員
- ・一般社団法人日本医学教育学会 プロフェッショナルリズム部会 部会員
- ・岐阜大学医学部 非常勤講師
- ・公益社団法人 革新的医療開発支援機構 特定認定再生医療等委員会
- ・群馬大学医学部付属病院 特定認定再生医療等委員会
- ・ときわバイオ株式会社倫理審査委員会
- ・明治薬科大学 令和 5 年度 明治薬科大学大学院「生命・研究倫理」講師
- ・株式会社シード・プランニング「再生・細胞医療・遺伝子治療の社会実装に向けた環境整備事業」採択審査 審査委員
- ・国立障害者リハビリテーションセンター 運営委員会委員

- ・PwC コンサルティング合同会社 「小児慢性特定疾病児童等自立支援事業立ち上げ支援」事業検討委員会及び自治体アドバイザー
- ・一般社団法人 miraii 事業に関するアドバイス業務

3-7 病院

3-7-1 病院概要

理 念 「研究所と一体となって、健全な次世代を育成するための、診療と研究を推進する」

特 色 国立成育医療センターでは、小児から思春期、母性・父性にわたるリプロダクション・サイクルを対象とした総合的・継続的医療を行う。

病院では、従来の細分化された医療の反省として、さまざまな病状や訴えをもつ患者様に対して、関連する診療科の多職種がチームをつくり、1人の患者様をトータルにみることを基本としている。4月に救急診療部が新設され、計15部・9センター・もみじの家等の体制によりチーム医療を行っているのが大きな特徴である。病院は24時間365日開かれ、成育医療の救急病院としての役割を果たしている。明るく、開放的で、アメニティに配慮した病院でもある。

また、東京都から地域医療支援病院の指定を受けており、地域医療への貢献にも努めている。

さらに、センターの使命として医療の人材育成のために教育・研修部をもうけ、若手医療人の人材育成に努めている。また先進医療の情報発信も行い日本の医療の均てん化に努めているものである。

特命副院長 4名

- 外来診療/薬剤/病院機能評価 担当
- 入院診療/診療報酬/診療録管理/医師事務作業補助 担当
- 医療安全/DPC/感染防御 担当
- 広報/地域医療連携/栄養/図書館 担当

3-7-2 総合診療部

3-7-2-1 総合診療科

1. 活動状況

2023年、新型コロナウイルス（COVID-19）の状況は大きく変化しました。WHOは5月に「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」を終了とし、日本では5月から感染症法上の位置づけが「5類」に引き下げられ、医療体制や感染者の扱いがインフルエンザと同様にな

りました。公共でのマスク着用は自主的な着用が主流となり、以前よりも人々が素顔で街を
行き交う姿が見られるようになりました。新しい生活様式が広まり、人々の集いが再び活発
化しはじめた 2023 年。子育てをとりまく環境も少しずつ変化してきていますが、いつの時
代でも子どもたちは、ひとりひとりがオンリーワン。総合診療科では、すべての子どもたち
のよりよい健康と発育を目標に、総合診療部の中核として、入院病棟・外来の両方で多くの
子どもたちに幅広い医療を提供しています。

① 入院診療

総合診療科では 24 時間 365 日いつでも子どもたちに必要なケアが提供できる医療チーム
体制をつくり、医療を提供しています。

【急性期疾患】

2023 年は、新型コロナウイルス感染の入院が減った一方で、昨年と同様に夏季に RS ウイ
ルスの流行がありました（図 1）。RS ウイルス以外にも、多くのウイルス感染を契機とした
気管支炎や肺炎の入院が増加傾向にあり、入院患者数の大半を占めました（表 1）。新しい
生活様式で人々の交流が活発となったことや感染予防が緩和されたことが要因と考えられ
ます。ワクチンや手洗いなど、予防のために私たちができることは続けながら、感染症と付
き合ってゆく必要があるのだと思います。これからも感染症の流行や、そのほかの疾患の動
向にも引き続き注目してゆきたいと思います。

【NICU からの継続治療】

生後すぐから集中的な医療ケアを必要とする赤ちゃんは NICU に入院します。NICU に入院
したあと、体調が安定して退院ができる赤ちゃんもいますが、引き続き多くの医療的ケアが
必要となる赤ちゃんもいます。総合診療科ではそのような赤ちゃんのケアを NICU から引継
いで担当し、安心して自宅に帰ることができるように本人の体調を整え、ご家族に医療的ケ
アの指導を行い、社会資源の調整を行っています。2023 年、総合診療科では NICU を卒業し
た 23 人の子どもたちを病棟で担当しました。心疾患、消化器疾患、神経疾患など生まれ持
った病気は多様ですが、ひとりひとりに合わせた医療を提供しています。

【慢性疾患をもつ子どもたちの包括ケア】

当センターでは複数の疾患を抱えながら日々を過ごしている多くの子どもたちが通院し
ています。彼らの体調が悪化して入院した場合、呼吸器、循環器、消化器、神経系など疾患
に応じて専門診療科が診療にあたりますが、総合診療科が全身管理を行います。また、課題
が複数ある場合は総合診療科がまとめ役として診療を調整します。専門診療科と総合診療
科が円滑な連携が図れるように face to face でのコミュニケーションを心がけています。

② 総合診療科外来診療

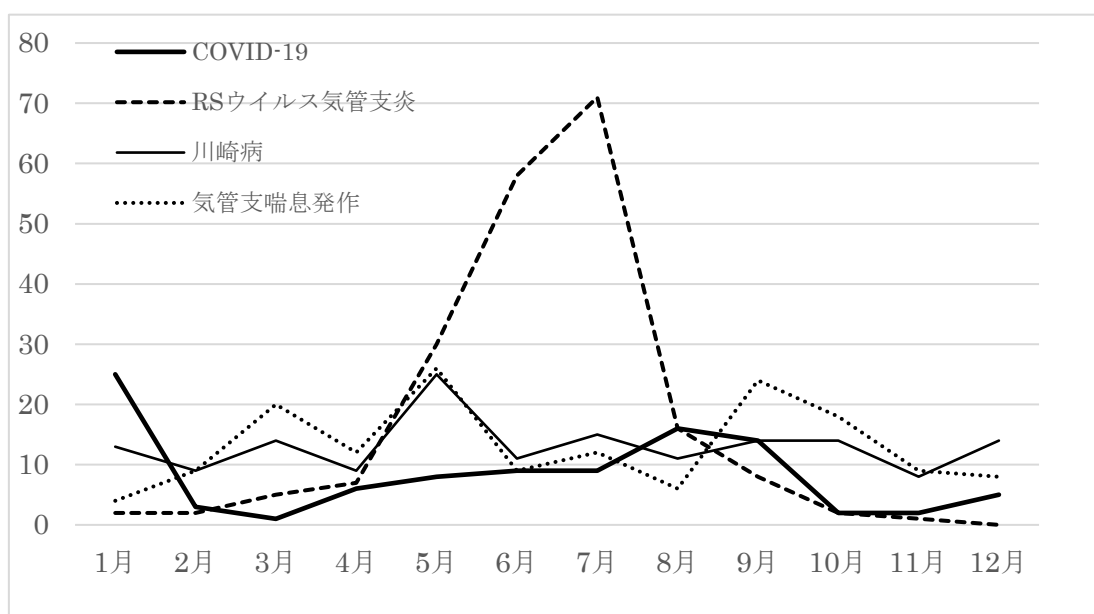
総合診療科外来では院外から 725 名の初診患者をご紹介いただいております。紹介患者
さんの内訳では、乳幼児では、体重増加不良、言語や運動発達の遅れ、頭囲拡大などのご紹
介が多く、学童期、思春期では起立性調節障害、慢性頭痛・腹痛などのご紹介が多かったで

す。概況として総合的な小児の発育、発達な視点もしくは心身両面の視点での評価、対応が必要な患者さんが変わらず多い状態が続いています。

また総合診療科外来では、日常的に医療的ケア（人工呼吸管理や経管栄養など）を必要とする多くの子どもたちの診療を行っています。院内の専門診療科や、院外のクリニック、訪問看護ステーション、療育施設や教育機関など関係機関と連携をしながら、よりよい子どもたちの成長と発達を目標に、必要な医療的ケアを提供しています。

③ 医学教育

当院では小児科専門医を目指す多くのレジデント（専門研修医）が子どもたちひとりひとりにより質の高い医療ケアが提供できるよう日夜研修を行っています。総合診療科は教育研修センターと連携し、「子どもの総合医」である次世代の小児科医の育成も担っています。



(図1) 2023年の疾患別入院患者数の月別推移

	疾患名	入院患者数 (人)
1	RS ウイルス気管支炎・再気管支炎	202
2	ウイルス性気管支炎 (RS ウイルス以外)	182
3	気管支喘息発作	158
4	川崎病	157
5	尿路感染症	129
6	新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)	100
7	熱性けいれん	85
8	細菌性肺炎	47
9	インフルエンザウイルス感染症	43

10	新生児発熱	38
	その他	
	合計	2、311

(表 1) 2023 年の総合診療科入院患者の内訳

3-7-2-2 在宅診療科

1. 講習会

- ・第 21 回 SSSG（世田谷小児・成育医療学術講演会）2023. 5. 26
- ・令和 5 年度世田谷区小児訪問理学療法士研修 2023. 7. 8、2023. 9. 3、2023. 12. 4
- ・令和 5 年度 第 1 回 世田谷区薬剤師会在宅研修会 2023. 7. 25
- ・葛飾区小児科医会小児科集談会講演会 2023. 9. 19
- ・令和 5 年度小児在宅医療技術講習会 2023. 1. 5、2023. 3. 2、2023. 5. 11、2023. 6. 15、2023. 7. 20、2023. 9. 7、2023. 10. 12
- ・令和 5 年度在宅医療を支える訪問看護研修 2023. 10. 7
- ・小児期発症の慢性疾患を持つ成人患者に対する医療ネットワーク構築に向けての話し合い。2023. 10. 28
- ・令和 5 年品川区保育課の研修「のびしなプロフェッショナルスクール」2023. 12. 1-2024. 2. 10：動画配信
- ・令和 5 年度小児薬物療法認定研修会 2023. 12. 1-2024. 2. 28：動画配信

2. 研究・事業

AMED 研究 医療機器開発推進研究事業 小児用医療機器の実用化を目指す医師主導治験・臨床研究：重症小児在宅患者に対するスマートフォンアプリを活用した状態判定支援医療機器プログラムの開発

3. 社会貢献

1) 参加委員会

- ① 日本医師会 小児在宅ケア検討委員会
- ② 東京都医師会 在宅医療協議会小児在宅医療部会
- ③ 日本小児科学会 重症心身障害児（者）・在宅医療委員会
- ④ 世田谷区医療的ケア連絡協議会
- ⑤ 世田谷区医療的ケア小委員会
- ⑥ 世田谷保育園医療的ケア連絡会
- ⑦ 世田谷区医療的ケア相談支援センター（Hi・na・ta）事業運営委員会
- ⑧ 中野区医療的ケア児等支援地域協議会
- ⑨ 川崎市小児在宅医療を考える会

2) 医療的ケア指導医

① 東京都立光明学園

② 世田谷区立豪徳寺保育園、希望丘保育園、松沢保育園、世田谷保育園

3-7-2-3 緩和ケア科

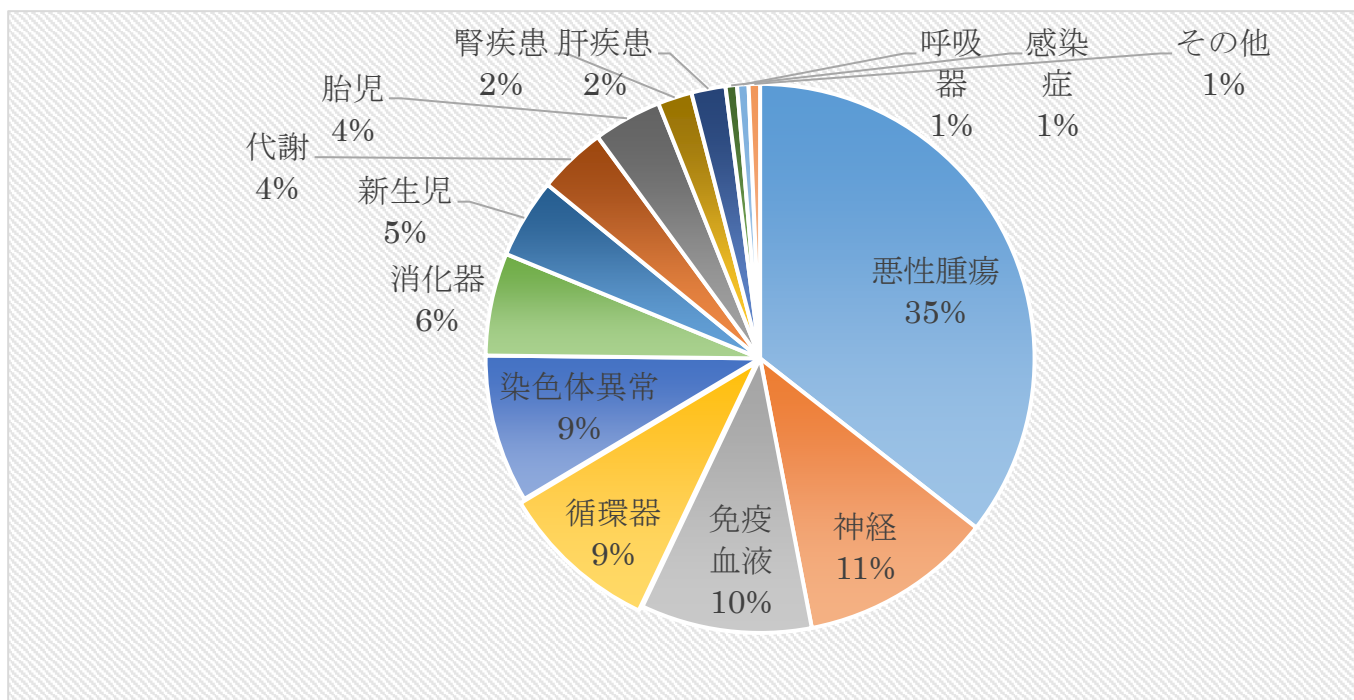
1. 活動状況

重い病を抱えるこどもと家族の様々なつらさをやわらげ、より豊かな生活が送れるために活動を行っている。

1) 緩和ケアチーム活動

痛みをはじめとする身体の苦痛およびこころの苦痛をとらえて対応することや難しい状況下での意思決定支援など、疾患や領域を問わず、診断時から多職種で包括的にアセスメントを行い、こどもと家族のクオリティ・オブ・ライフ（QOL）の向上を目指した緩和医療が提供できるよう、主治医チームと協働し支援を行っている。

2023 年の年間コンサルテーション件数は 149 件で、悪性腫瘍 53 件、神経筋疾患 17 件を始め、幅広い疾患に対して介入を行っている。



2) 緩和ケア病床運用

もみじの家において、専門的緩和ケアを受けながら最期の時間を過ごすための病床運用を行っている。2023 年度は 1 人の利用があり、最期までその子らしく生き抜くことを支える医療の提供を行っている。

2. 診療体制

医師：診療部長 11 人、フェロー 1 人、非常勤 1 人

看護師：緩和ケア認定看護師 専従 1 人

その他、薬剤師、栄養士、心理士、チャイルドライフスペシャリスト、リハビリテーションスタッフ、MSW、ファシリティードッグなど多職種でチームを作り緩和ケアを提供している。

3. 講演会・研修会

2022 年度は当科主催で以下の講演会や研修会を実施した。

1) 小児がん緩和ケアレクチャー

全国のこどもの緩和ケアに関わる医療従事者向けに、Web によるレクチャーを行っている。
2023 年度は 4 回開催し、1,250 人の方に参加いただいた。

2) せいいくケアカフェ

地域の様々な分野で重症児のケアに携わる職種（医療職、行政職など）を交えた交流会を Web 開催し自由闊達な意見交換を行い、経験を共有し情報交換できる場を提供している。
2022 年度は全 3 回 85 人の方に参加いただき、活発な意見交換が行われた。

4. 研究活動など

小児緩和ケアに関する研究を進め、英文誌 4 件、和文誌 12 件にまとめた。また、小児緩和ケアに関する講演を 18 回実施した。

3-7-3 救急診療部

私たちは、『救急診療が必要なお子さんをいつでも診療します』をモットーに、日々の診療に取り組んでいます。小児科専門医および救急専門医で構成される専属の救急医が 24 時間体制で常駐し、重症度や疾患の内科系・外科系を問わず対応しています。2023 年には、延べ 24,953 人のお子さんを診療し、救急車の受け入れ台数は 4,248 台にのびりました。また、地域のお子さんの直接来院や救急搬送に加え、他の医院や病院からの紹介・転院搬送を 3,980 件受け入れ、そのうち転院搬送は 480 件でした。さらに、当センターの「小児専門搬送チーム」は 24 時間 365 日体制で稼働し、重症なお子さんの病院間緊急搬送を 46 件行いました。救急外来を経由して入院した患者は 3,307 人で、そのうち重症例 367 人は PICU（小児集中治療室）に入室しました。

地域連携においては、患者さんの転院をご依頼いただいた搬送元施設と症例振り返りの会を各病院と開催し、更なる連携の強化と診療の質の向上に努めています。9 月 9 日には、救命処置や事故防止の啓発を目的とした成城消防署との共催である「救急の日」を 5 年振りに開催しました。例年開催している『東京都子ども救命センター事業地域連携会議』も 2023 年 10 月に主催いたしました。

院外研修会として、第 4 回目の『成育救急 Webinar 2023』を開催し、約 150 名の方によりアルタイムでご参加いただきました。また、オンデマンド配信も行い、多くの方にご視聴いただきました。さらに、集中治療科と共同で『成育救急集中治療セミナー』を開催し、専門

的な知識と技術の共有を図りました。

人材育成では、救急診療部専門修練医 6 名が各々のキャリアに応じたプログラムで研修を行い、うち 2 名が修了しました。1 名は小児救急の経験を活かし、小児に強い救急医として救命救急センターに就職しました。もう 1 名は、さらなるサブスペシャリティー研修のため、当院放射線診断部の専門修練医となりました。さらに、他院の救急科専攻医 3 名、小児科専攻医 1 名と初期研修医 1 名の先生方が、当救急診療部で短期研修を受け、それぞれの経験を深められました。

研究においては、院内データを活用した研究、他施設との共同研究、大規模レジストリデータを用いた研究に取り組んでいます。これらを通じて、小児救急医療、死因究明、小児外傷、院外心停止の分野で研究成果を発表しております。

3-7-4 小児内科系専門診療部

3-7-4-1 消化器科

1. 診療活動

小児の消化器疾患、内視鏡診療、栄養管理のスペシャリストとして、質の高い医療の提供に尽力している。

1-1 炎症性腸疾患の診断・治療

小児の患者数も増えてきている潰瘍性大腸炎・クローン病といった炎症性腸疾患の診療と研究に力を入れており、2019 年には日本初の小児炎症性腸疾患センターを立ち上げた。2006 年以降、約 500 名以上の小児期発症炎症性腸疾患患者の診断・治療を行ってきた。特に乳幼児期に発症した患者や難治性患者については、全国から紹介や相談を受け、診断と治療のみならず、適切な栄養管理とチーム医療の実践による患者 QOL の向上、そして予後の改善まで考慮しての診療をすすめている。

1-2 便秘症・過敏性腸症候群

便秘症や過敏性腸症候群といった機能性の腸疾患に関しても、患者の QOL 改善を目指して、積極的な器質的疾患の除外と、薬剤療法を提供している。

1-3 その他の消化管疾患・栄養疾患

消化管の内視鏡検査数は年間 800 件以上と、国内の小児施設として屈指の件数である。新生児から成人までの、小腸カプセル内視鏡含む診断的な内視鏡のみならず、ダブルバルーン小腸内視鏡や食道静脈瘤の治療、消化管出血の内視鏡的診断と治療も行っている。また、アレルギーセンターとの協力のもと、好酸球性胃腸炎の診断治療にも積極的に取り組んでいる。

2023 年 1 月～12 月 内視鏡件数： 877 件

上部消化管内視鏡	383 件	食道静脈瘤結紮術	6 件
下部消化管内視鏡	293 件	内視鏡的止血術	2 件
小腸カプセル内視鏡	139 件	ポリペクトミー	3 件
小腸内視鏡	44 件	バルーン内視鏡（経肛門法）	3 件
バルーン内視鏡（経口法）	4 件		

2. 研究活動

消化器科では、小児の消化器・栄養分野の臨床研究を幅広く実施している。

以下に、令和5年に行われていた研究を示す。

成育医療研究開発費

- 1) 「免疫抑制薬を内服中の腎・リウマチ・消化器・肝疾患および固形臓器移植後の患者への弱毒生ワクチン接種の有効性と安全性についての検討—多施設前向き研究および全国実態調査—」（分担研究者：新井勝大）

厚生労働科学研究費補助金

- 1) 難治性疾患政策研究事業「好酸球性消化管疾患、診療ガイドラインの改訂と、国際的な疾患サブグループ名の整備に関する研究」（分担研究者：新井勝大）
- 2) 難治性疾患政策研究事業「難治性炎症性腸管障害に関する調査研究」（分担研究者：新井勝大）

文部科学研究費補助金

- 1) 基盤研究 (C) 「乳児に発症する炎症性腸疾患と造血不全の原因となる新たな単一遺伝子疾患の確立」（研究代表者：竹内一朗）

国立研究開発法人日本医療研究開発機構

- 1) 難治性疾患実用化研究事業「インフラマソーム関連腸炎の病態解明ならびに診断法確立」（分担研究者：新井勝大）

倫理委員会承認研究課題

- 1) 「日本人炎症性腸疾患患者を対象としたマルチオミックスコホート解析およびバイオバンク構築 (IBD-MOCHA)」研究責任者：新井勝大
- 2) 「小児クローン病患者における肛門病変の特徴の検討—単施設での後方視的コホート研究—」研究責任者：新井勝大
- 3) 「Ras 関連自己免疫性リンパ増殖症候群様疾患における炎症性腸疾患の探索的研究」研究責任者：新井勝大
- 4) 「10 代の IBD 患者に求められる心理的関与とケアの研究 RESPECT IBD study [Research for Psychological Engagement and Care needed in Teenagers with IBD]」研究責任者：新井勝大
- 5) 「小児潰瘍性大腸炎直腸炎型の自然史の検討：多機関共同研究」研究責任者：新井勝大

- 6) 「超早期発症型炎症性腸疾患におけるカプセル内視鏡の有用性および安全性に関する後方視的観察研究」研究責任者：新井勝大
- 7) 「小児期発症炎症性腸疾患に対する同種造血細胞移植の解析 (IBD-HCT)」研究責任者：新井勝大
- 8) 「口唇肉芽腫症 (Orofacial granulomatosis: OFG)を合併する小児期発症クローン病の臨床的特徴と適切な治療法の検討：多機関共同研究」
- 9) 「小児期に発症する胃関連疾患の病態悪化に關与する細菌叢と免疫応答の検討」研究責任者：新井勝大
- 10) 「小児期発症自己免疫性肝疾患の新規バイオマーカーと病因遺伝子の探索研究」研究責任者：新井勝大
- 11) 「アジア環太平洋地域の小児内視鏡実施施設における小児消化器内視鏡検査の実態調査」研究責任者：新井勝大
- 12) 「小児炎症性腸疾患患者における MR エンテログラフィーの最適化と画像所見の定量化の検討」研究責任者：新井勝大
- 13) 「小児期発症炎症性腸疾患の臨床的検討」研究責任者：新井勝大
- 14) 「超早期発症型炎症性腸疾患児を育てる親の体験およびエンパワメントされていく過程に関するインタビュー研究」研究責任者：新井勝大
- 15) 「超早期発症型炎症性腸疾患の乳幼児をもつ親の心理社会的状態・健康関連 QOL に関する縦断研究」研究責任者：新井勝大
- 16) 「難治性腸疾患におけるオルガネラ異常解明の研究」研究責任者：新井勝大
- 17) 「XIAP 欠損関連腸炎の画像所見ならびに腸管病理所見の探索的検討」研究責任者：新井勝大
- 18) 「小児における潰瘍性大腸炎および類似疾患における自己抗体・抗原の同定」研究責任者：新井勝大
- 19) 「日本人炎症性腸疾患患者における COVID-19 感染者の多施設共同レジストリ研究」研究責任者：新井勝大
- 20) 「腸管切除を受けた炎症性腸疾患患者の手術に対する心理的受容の検討」研究責任者：新井勝大
- 21) 「遺伝子異常に伴う炎症性腸疾患の病態解明・鑑別診断技術の確立を目指した遺伝学的解析ならびにバイオバンク研究」研究責任者：新井勝大
- 22) 「小児期発症炎症性腸疾患の安全性、有効性、治療、およびケアの向上のためのネットワークーPIBD-Net 発端コホート研究および安全性登録制度ー」研究責任者：新井勝大
- 23) 「家族性地中海熱遺伝子関連腸炎の診断法確立」研究責任者：新井勝大
- 24) 「日本小児炎症性腸疾患レジストリシステムの構築及びそれに基づく実態調査と自然史の解明のための研究」研究責任者：新井勝大
- 25) 「炎症性腸疾患を有する小児・家族に対する調査研究ーメンタルヘルスと心理社会的事象、医療的関与との関連性の評価ー」研究責任者：新井勝大
- 26) 「本邦の炎症性腸疾患患者における Epstein-Barr virus (EBV) 感染状況に関する多施設共同研究」研究責任者：清水泰岳

- 27)「小児好酸球性消化管疾患の内視鏡所見についての検討」研究責任者：清水泰岳
28)「成人および小児クローン病の病態把握の補助における金コロイド凝集法便中カルプロテクチン測定試薬臨床性能試験」研究責任者：清水泰岳
29)「小児期発症クローン病に対するウステキヌマブの有用性と安全性の検討」研究責任者：竹内一朗

3-7-4-2 循環器科

1. 特色

循環器科は以下の疾患に対し、他科と協力し診療を行っている。

- ・先天性心疾患
- ・新生児心疾患
- ・小児重症心不全（急性心筋炎、心筋症）
- ・胎児心臓病
- ・肺高血圧症
- ・不整脈
- ・川崎病
- ・マルファン症候群や、ムコ多糖症などの全身疾患や遺伝性疾患に伴う心疾患
- ・成人先天性心疾患

- ・先天性心疾患、新生児心疾患の診療：日本小児循環器学会修練施設である。心臓血管外科、新生児科、集中治療科、麻酔科と協力し、評価、術中・術後管理、外来診察を行っている。心房中隔欠損症、動脈管開存症に対するカテーテル治療の学会認定施設である。
- ・心筋疾患の診療：小児心臓移植の実施施設として認定された本邦唯一の小児病院である。小児補助人工心臓（EXCOR® Pediatric）の認定施設であり、小児重症心不全の管理を行っている。心筋疾患に対し、心筋生検、心臓MRIなどの検査を積極的に施行し、診断、予後評価を行っている。急性心筋炎は早期にECMOを導入する方針で集中治療科、心臓血管外科と共同で治療を行い良好な成績が得られている。
- ・胎児心臓病：本邦初の重症大動脈弁狭窄症に対する胎児カテーテル治療を組み入れ中である。胎児診療科と連携して、胎児心疾患の診断・管理を行っている。
- ・不整脈の診療：心筋電極を用いた植込み型除細動器（ICD）／ペーシングによる心不全治療（CRT）、着用型自動除細動器実施施設である。薬物療法、カテーテルアブレーションを行っている。
- ・肺高血圧症の診療：特発性肺動脈性肺高血圧症だけでなく、呼吸器疾患や肝疾患が基礎にある肺高血圧症の患者さんも多い。治療も積極的に実施している。
- ・川崎病：特に冠動脈病変を合併した症例の管理を中心に行っている、総合診療部に協力し、川崎病外来も一部担当している。乳幼児から積極的に心臓MRIによる心血管病変、特に冠動脈評価を施行している。心臓カテーテル検査による侵襲的な検査を避けるべく、低侵襲なツールによる評価を心がけている。

- ・全身疾患に伴う心疾患の診療：ムコ多糖症は、当院のライソソームセンターなどと連携し、弁膜症や心筋疾患の管理を行っている。マルファン症候群などの結合組織性疾患は、病変が多臓器に渡るため、眼科、整形外科や遺伝診療科などと協力して診療を行っている。
- ・成人先天性心疾患の診療：成人先天性心疾患の連携修練施設である。主に小児期に当院で手術した症例は心臓血管外科と、妊娠出産前後の管理を産科、母性内科と協力して行っている。成人循環器内科への移行も行っている。心肺機能検査、心臓 MRI など施行し、その管理、予後評価に役立てている。

2. 体制

診療部長 1 名、医長 1 名、医員 1 名、フェロー 3 名、兼任医師 2 名

3. 診療活動

外来診療

- ・月から金 午後、初診および再診

診療実績	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年
入院患者数	343	259	249	288	261
心臓カテーテル検査（評価）	107	84	95	106	73
カテーテルインターベンション	49	46	55	53	65
内 心房中隔欠損	5	4	6	10	16
内 動脈管開存	6	8	7	4	15
カテーテルアブレーション	1	2	2	1	0
心内膜心筋生検	18	15	15	16	19
心臓 MRI	42	30	38	50	52
心エコー	8, 153	7, 181	7, 217	7, 028	7, 922
胎児心エコー	48	50	58	97	97
ホルター心電図	308	228	203	220	191
運動負荷心電図	140	91	64	136	135

4. 研究活動

- ・ウイルス量と免疫細胞の活性化及びサイトカインの測定を基にした小児心臓移植後免疫抑制療法の標準化（成育医療研究開発費）
胎児重症大動脈弁狭窄症に対するカテーテル治療を胎児診療科と協力し、患者さんの組入れを実施中である。（成育医療研究開発費）
- ・川崎病ボードに所属し、研究所・総合診療部・臨床研究センター・研修教育センターなどと協力して、川崎病の疫学、遺伝子特性、治療法の確立に協力している。（成育医療開発研究費など）
- ・日本小児循環器学会、日本循環器学会、JCIC 学会など関連学会と協力し、さまざまなデータベース作成に協力している。特に、胎児心疾患レジストリ研究においてデータセンタ

一として活動している。

- ・先天性心疾患による肺高血圧症・川崎病・孤立性右室低形成などの研究に参加している。
- ・肺高血圧症治療薬・心不全治療薬に対する治験に参加している。

5. 学会認定

- ・日本小児循環器学会専門医修練施設
- ・日本成人先天性心疾患学会連携修練施設
- ・小児心臓移植実施施設
- ・小児用補助人工心臓実施施設
- ・日本小児循環器学会専門医 5 名 (内兼任 2 名)

6. 教育・講演など

- ・当センターレジデントおよび東京医大レジデントの受け入れ
- ・近隣の医学生やレジデントの見学の受け入れ
- ・学会、研究会、家族会での講演

3-7-4-3 呼吸器科

1. 特色

1.1 小児呼吸器専門の診療科

1.2 豊富な臨床経験

1.3 小児気管支内視鏡検査

国内では数少ない小児の呼吸器専門診療科として、質の高い医療の提供を目標としている。小児慢性特定疾病や指定難病に含まれるような希少疾患の臨床経験、気道病変に対する内視鏡検査実施件数は国内有数である。これらの診療経験をもとに、他院からの診療相談やセカンドオピニオンに対しても積極的に取り組んでいる。

2. 診療活動、研究活動

2.1 総括

2019 年に紹介初診患者の受け入れを再開した。外来受診者数（延べ 1,695 人）、初診患者数（76 人）はやや増加、入院数（延べ 78 人）、内視鏡検査件数（214 件）は横ばいだった。

	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
外来受診者(延べ)	2187	2142	1679	1495	1367	1419	1315	1690
内初診患者	95	114	28	74	68	69	60	76
入院患者(延べ)	59	38	22	55	47	51	90	78
内視鏡検査症例数	159	107	132	142	170	174	214	215
上気道	46	54	48	39	46	52	38	47
気管支	114	71	106	104	133	128	176	168

2.2 外来

通常枠は月曜午前、水曜午前、金曜午前・午後で継続している。それ以外の曜日や時間帯でも、他科受診のためなどで患者の希望がある場合には、臨時枠での対応を継続した。

新患患者 60 名の受診動機は、例年同様に長引く咳嗽と喘鳴でその大半を占めた。咳の原因として、心因性咳嗽が目立ち、びまん性汎細気管支炎を疑わせる学童例が複数いたことが 2020 年から続いている特徴であった。喘鳴の原因としては、喉頭軟化症が最多であり例年どおりであった。

2.3 入院

気道狭窄や先天性嚢胞性肺疾患の短期の検査入院と、慢性気管支炎（線毛機能不全症状群含む）の診断と治療入院（急性増悪時の入院含む）が目立った。そして、引き続き間質性肺炎（肺胞蛋白症）や肺ヘモジデローシスなどの基礎疾患をもつ患者の入院もあった。新型コロナウイルス感染症影後の気道感染症の増加の影響も多少受けたと考えられた。入院症例の重症度は今まで通り高く、難治性疾患のため長期入院を要した症例や繰り返し入院加療を必要とした症例もあった。

A. 急性疾患

1) 非感染症感染症

気道異物（疑いを含めて 3 例、摘出 2 例）

2) 急性感染症（慢性疾患をもつ児の気道感染に伴う急性増悪）

気管支炎、肺炎

B. 慢性疾患

1) 上気道疾患

上気道狭窄（喉頭軟化症、声門下狭窄など）

嚥下機能異常（吸引性肺炎を含む）

2) 下気道疾患

気管軟化症、気管狭窄

原発性線毛機能不全症候群（PCD）、慢性気管支炎（副鼻腔気管支中葉症候群）

先天性嚢胞性肺疾患（気管支閉鎖、肺分画症、CCAM など）

びまん性汎細気管支炎、遷延性細菌性気管支炎

3) その他

特発性間質性肺疾患（間質性肺炎、肺胞蛋白症）

特発性肺ヘモジデローシス

閉塞性睡眠時無呼吸

2.4 内視鏡検査

原則として火曜日・木曜日を検査日としているが、他科からの依頼には曜日を問わず迅速に応じている。本年の検査件数は 214 件、うち気管支ファイバースコピーが 176 件と増加したことが特徴だった。気道疾患センターとして時便故意かとの連携を強化したことが主因と考えている。

＜内視鏡検査実施実績 2024 年＞

・延べ件数 215 件（気管支鏡 168 件、喉頭鏡 47 件、同時に実施した場合には

気管支鏡にカウント)

- ・気管支異物対応（疑い含む） 3 件（内摘出術 2 件）
- ・心臓血管外科による血管吊り上げ術補助（気管狭窄に対する） 1 件
- ・肺胞洗浄液採取（感染源の特定のため） 10 例

2.5 カンファレンス

科内だけのものは火曜午前・木曜午前、科外を含めたものは木曜午後に放射線科の協力を得て継続している（web 形式）。木曜午後のカンファレンス東京都立小児総合医療センター、慶応大学などの他施設からの参加者があり、症例検討を中心として行い、卒後 15 年以内の若手医師による抄読会も併せて行っている。

他院からのメールやデジタル画像データ郵送による症例相談にも引き続き対応した。

2.6 研究活動

- ・特発性間質性肺炎または肺ヘモジデロシスに対するヒドロキシクロロキン治療～要件を満たす症例について～（倫理委員会受付番号 1514）
- ・先天性嚢胞性肺疾患患者の後方視的検討（倫理委員会受付番号 2249）

3-7-4-4 神経内科

1. 活動状況

1) 診療内容

①対象とする疾患

スタッフ 2 名、フェロー 5 名で外来、入院、他科からのコンサルテーション対応を含むオンコール業務をおこなっている（表 1）。

小児神経領域の全ての疾患に専門的に対応し、各科と協力して診療に従事した。特に急性脳炎・脳症に関しては救急診療部、集中治療部、放射線科、検査部生理部門との協力で診断・治療の標準化を模索している。

救急診療科を受診したけいれん重積、脳炎、脳症など神経疾患が疑われる際には常に迅速に対応、初期から診断、治療に関わっている。ICU 入院患者についても脳炎、脳症の診断、評価、治療だけでなく、外科系患者、内科系患者といった神経疾患以外の患者の神経学的評価、診断、治療を行っている。また法的脳死判定についても生理機能検査室、ICU の協力の下でおこなっている。NICU では神経発達のフォローアップの必要な児に退院前から関わっているほか、合同カンファレンスも開催している。当院神経内科で実施している特殊診療としては、脊髄性筋萎縮症の患者に対するアデノ随伴ウイルスベクター製剤による遺伝子治療に関する受け入れ体制を整えているほか、同疾患に対するアンチオリゴヌクレオチド製剤定期投与をおこなっている。外科的適応のあるてんかんにおいては、脳神経外科と協力しててんかん外科治療（脳梁離断術、焦点切除術、VNS）のための診断および術前検査、下肢痙縮に対する選択的後根切除術を補完する治療として頸部、上肢の痙縮に対する Botox 療法、および抗痙縮剤としてのバクロフェンのポンプ持続注入療法など痙縮の包括的治療と

して他科との連携の元で実施している。また、国立精神・神経医療研究センターとの共同でドゥシェンヌ型筋ジストロフィーの遺伝子治療治験をおこなっている。

	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年
入院患者数	327	313	351	354	367
外来患者数（再診）	7,232	6,604	7,000	7,396	7,192
外来患者数（初診）	286	292	450	452	419

表 1 2019～2023 年の入院・外来患者数

③ 診断・検査・治療の概要

診断に必要な検査として、頭部画像検査（核磁気共鳴画像、CT スキャン）、脳血流シンチグラム、神経電気生理検査（脳波、ポリグラフ、各種誘発電位、末梢神経伝導速度、事象関連電位）などを、外来または入院にて施行した。磁気刺激装置、NIRS による中枢神経系の病態、特に不随意運動、てんかんでの検索を実施した。また、筋ジストロフィー、先天性ミオパチー、筋炎などの筋疾患などについては筋生検を施行し、遺伝性神経疾患については他施設との協力のもと遺伝子検査にて診断を行った。以下にこの 5 年間の神経生理学的検査の数を示す。

	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年
脳波	1,184	839	866	944	867
長時間脳波ビデオ 同時記録検査	136	159	157	134	132
聴性脳幹反応 (ABR)	347	254	240	308	252
体性感覚誘発電位 (SEP)	67	61	80	85	67
視覚誘発電位 (VEP)	29	34	43	43	53
神経伝導検査	95	74	114	120	99
表面筋電図	4	5	5	5	4
針筋電図	1	2	3	11	7
磁気刺激検査 (TMS)	9	5	9	8	8
F 波	60	38	69	57	62
反復筋電図	15	11	2	3	3

表 2 2019～2023 年における神経生理学的検査数の推移

2) 院外活動

患者支援活動への関与：結節性硬化症、無痛無汗症、大田原症候群の患者会および当科受診中の難治性神経疾患患者の会があり定期的なシンポジウム、会合やキャンプなどの活動を再開した。

3-7-4-5 腎臓・リウマチ・膠原病科

1. 当科の概要

最先端の小児腎疾患医療の提供とともに、都内でも数か所しかない小児リウマチ性疾患専門施設として、当科がこの分野で果たすべき役割は極めて大きい。

診療構成員（2023年1月1日～2023年12月31日の間に在籍した者）

診療部長：亀井宏一

医員：小椋雅夫、佐藤舞、西健太郎

フェロー：大坂溪、猪野木雄太、金田朋也、秋山みさき、岡田聡司、坂野嘉紀

2. 診療

1) 腎臓部門

当科は、小児期から思春期・成人期に至るまでのすべての腎疾患を診療している。なかでも以下の腎疾患に関して、豊富な臨床経験と研究実績があり、最新の研究成果や知見に基づいた診療を目標としている。主な診療内容は以下のとおりである。

- ・ 学校検尿等で発見された血尿・蛋白尿の管理・治療
- ・ IgA 腎症、紫斑病性腎炎などの慢性腎炎および遺伝性腎疾患（アルポート症候群、家族性血尿、先天性ネフローゼ症候群、先天性腎尿路奇形など）の診断・治療
- ・ 難治性ネフローゼ症候群の診断・先進的治療（リツキシマブ治療を含む）
- ・ 急性腎不全への血液透析、炎症性腸疾患への白血球吸着療法
- ・ 慢性腎不全に対する腹膜透析、血液透析、腎移植

当院は難治性小児腎疾患、とくに難治性ネフローゼの患者を多く診療しており、日本全国の大学病院を含む、他施設からの難治患者の紹介も多い。特に、多数の免疫抑制剤を使用してもステロイド薬から離脱できない、あるいは既存の治療で寛解しないステロイド抵抗性ネフローゼ症候群の重症例・難治例が主である。当科ではこのような患者に、リツキシマブ（抗 CD20 モノクローナル抗体）療法を行うなど、世界でも最先端の治療を提供してきた。当科はリツキシマブを積極的に導入し、世界でも有数の使用経験を持つ施設である。このリツキシマブ療法については、当科が患者登録の中心となり、医師主導型臨床治験を完了し、厚労省より保険承認された。

また、慢性腎不全の診療として血液透析、腹膜透析、腎移植を行っている。血液浄化療法については、外来透析室での慢性血液透析、炎症性腸疾患に対する白血球吸着療法、ネフローゼや移植腎に対する血漿交換などを行っている。小児の慢性血液透析の患者は大変に少なく、その総数は透析学会の全国統計調査でも 20 名以下である。しかし、当科では乳幼児を含め慢性血液透析を行っており極めて高度かつ専門的な医療を行っている。

2) リウマチ・膠原病部門

小児リウマチ性疾患の全てを対象として診療を行っている。主な疾患としては、若年性特発性関節炎、全身性エリテマトーデス、若年性皮膚筋炎、ANCA 抗体関連疾患、高安動脈炎、線維筋痛症、自己炎症性症候群等があり、エビデンスに基づいた最新の診療を行っている。難治性の小児リウマチ性疾患の治療には、ステロイド薬を減量するために、積極的に免疫抑制薬や生物学的製剤を導入し、後遺症のない治療を目指している。日本小児リウマチ学会認定の小児リウマチ中核施設であり、都内の小児リウマチ性疾患について中心的な役割を果たすようになっている。

3. 臨床研究・治験

当科は、ネフローゼ症候群、慢性腎臓病、の臨床試験等の多くの多施設共同臨床試験に参加し、これらの疾患の治療エビデンスや治療ガイドラインの作成に貢献してきた。コロナ禍は終息傾向となり、学会発表も徐々に増加傾向で、質の高い研究・発表を行っている。

4. 教育、研修

当科は全国から広くフェローを受け入れており、とくに小児腎臓医の少ない地域からは優先的に採用し、小児腎・リウマチ医療のリーダーとなるべき人材の育成を当科の使命としている。令和5年は、上記のフェローが当科で研修を行った。患者の診療のみでなく、国内外の学会や研究会での発表、雑誌総説などの原稿の執筆、英語論文の作成を義務としている。

以下に、当科の定期カンファレンスについて記す。

1) 病棟カンファレンス

毎週火曜日に病棟患者のカンファレンスを行っている。そのほかに患者別の個別ケースカンファレンスを関係各科の医師、看護師、薬剤師などを交え、非定期的に行っている。

2) 勉強会

月に1回程度、英語論文の抄読会、あるいは、日常診療に関係するテーマでの自由調査による勉強会を開催している。

3) 病理カンファレンス

毎月1回病理診断科医師とともに、腎生検標本のカンファレンスを開催

4) 腹膜透析患者カンファレンス

毎月1回、腹膜透析患者のカンファレンスを開催。

5) 当科に研修に来る教育研修部レジデントの発表

レジデントの研修期間は3～4週間で、研修終了時に、腎臓・リウマチ関連の clinical question をベースに調査研究を行ってもらい発表をしてもらっている。

6) 母性内科との合同カンファレンス

毎週火曜日にお互いのカンファレンスに参加し、膠原病患者について小児・成人の垣根をこえ知識・経験を共有している。小児・成人の診療方針を共有することで、トランジションへの方策や別視点での気づきなど、多くのシナジーが期待できる。

3-7-4-6 免疫科

原発性免疫不全症や遺伝性自己炎症性疾患などの先天性免疫異常症は、感染症や発熱を繰り返すことで初めて疑われる疾患です。免疫科では、PFAPA 症候群、自己免疫疾患などを含む、いわゆる不明熱や周期性発熱を呈する小児を中心に、診断や治療など専門的な診療を行っています。原発性免疫不全症や治療に伴う免疫能低下によって、「感染症に罹りやすい」あるいは「なかなか感染症が治らない」といった症状がみられます。また、反復性の発熱や長期の発熱などでは、PFAPA 症候群や自己炎症性疾患、リウマチ膠原病、原発性免疫不全症など、免疫の調節が上手くできない病気が潜在することがあります。一般的な検査に加えて、リンパ球サブセット解析や活性酸素産生能検査、サイトカイン測定などの専門検査を実施して、これら難治性疾患の診療を行っています。

1. 外来診療

外来診療は、月曜日の午前、水曜日の午前と午後、金曜日の午後に行っており、その他の曜日も相談を受け付けています。2023 年の外来受診者は、年間 1,182 名でした。

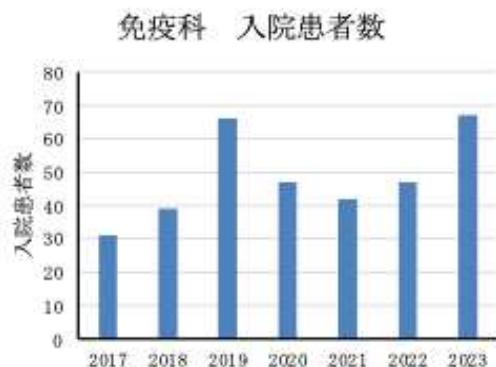


2023 年に、免疫科外来で診療した主な疾患を下記に示します。

慢性肉芽腫症	重症先天性好中球減少症
ADA 欠損症	無 γ グロブリン血症
高 IgE 症候群	自己免疫性好中球減少症
慢性皮膚粘膜カンジダ症	周期熱症候群
X 連鎖重症複合免疫不全症	PFAPA 症候群
メンデル遺伝型マイコバクテリア易感染症	クリオピリン関連周期性症候群
X 連鎖リンパ増殖症候群	家族性地中海熱
Wiskott-Aldrich 症候群	遺伝性自己炎症性疾患
分類不能型免疫不全症	SAVI 症候群
乳児一過性低 γ グロブリン血症	若年性特発性関節炎
Shwachman-Diamond 症候群	若年性皮膚筋炎
高 IgM 症候群	I 型インターフェロノパチー
CDC42 異常症	嚢胞性乾癬

2. 入院診療

原発性免疫不全症、自己炎症性疾患、リウマチ膠原病の方の入院診療を行いました。主に、原疾患および合併症の治療、免疫グロブリン皮下注射の在宅導入支援などを目的に、2023 年は 67 名へ入院診療を実施しました。



2023 年に免疫科で入院診療を行った疾患を下記に示します。

慢性肉芽腫症	重症複合免疫不全症
高 IgE 症候群	若年性特発性関節炎
X 連鎖リンパ増殖症候群	好中球減少症
若年性皮膚筋炎	家族性地中海熱
重症好中球減少症	CDC42 欠損症
慢性皮膚粘膜カンジダ症	I 型インターフェロノパチー
高 IgM 症候群	X 連鎖無 γ グロブリン血症

3. 臨床研究

診断や治療など医学的発展に貢献することを目的として、原発性免疫不全症や遺伝性自己炎症性疾患など指定難病に認定されている疾患を中心に、臨床研究や臨床試験（医師主導治験を含む）に取り組んでいます。本研究は、当センターの倫理審査委員会や治験審査委員会の承認を得て、センター内外の関係施設と連携して実施しています。

＜臨床試験＞

慢性肉芽腫症関連腸炎に対するサリドマイド医師主導治験

慢性肉芽腫症に関連した炎症性腸疾患に対して北海道大学、金沢大学、広島大学、京都大学、宮崎大学、九州大学と連携し多施設共同医師主導治験を実施し、新たな治療法の開発を行っています。

Wiskott-Aldrich 症候群の遺伝子治療

海外施設と共同で遺伝子治療を実施した Wiskott-Aldrich 症候群の方について、遺伝子治療後の臨床経過を検討しました。

この他、I 型インターフェロノパチーの新たな治療薬の開発、低ガンマグロブリン血症の治療法の確立を目的とする治験（3 件）を実施しました。

＜臨床研究＞

原発性免疫不全症の診断と病態解析および遺伝子解析

フローサイトメトリを用いて、リンパ球サブセットや活性酸素産生能（殺菌能）を行いました。

また、免疫不全症における移行支援の全国専門施設の実態調査を行いました。

3-7-4-7 内分泌・代謝科

内分泌・代謝科は、小児・思春期、および小児期に発症し若年成人に達した内分泌・代謝疾患を対象とした診療している。

当科の特色は、

- 1) 小児内分泌代謝疾患の包括的な診療を提供し、外来の年間患者数は約 16,000 名、入院患者数は年間約 200 名である。
- 2) 稀少疾患診療の拠点病院として国内の専門施設との連携のもと、臨床試験をはじめ、先進的な医療に取り組んでいる（2023 年度に行った臨床試験 12 件）。

- 3) 国内はもとより、国際的、特にアジアにおけるリーディングホスピタルとして、国内全域、海外からのフェローを受け入れ、研修を行っている。
- 4) 成育医療研究センター研究所との連携による、小児内分泌代謝疾患の病態解明、治療法開発を行っている。

1. 診療・研究活動 診療の目標

最新の知見とエビデンスに基づいた診療の提供を優先事項とし、ナショナルセンターとしての社会的役割を果たすべく、最新の診断・治療法の開発へ貢献する。疾患の治療にとどまることなく、患者さんやそのご家族の生活の質向上にも目を向け、多職種との連携のもと、包括的な医療を提供する。

2. 診療内容

こどもの成長、性分化と性成熟、下垂体、副腎、甲状腺疾患、骨系統疾患、1型糖尿病など、内分泌に関わるすべての疾患に対し新生児期より若年成人まで診療をしている。先天性代謝疾患全般に関する診療も併せて行っている。特筆すべきは有機酸代謝異常、尿素サイクル異常症など、重篤な先天性代謝疾患であり、移植外科と連携の上、生体肝移植前の全身管理に加え、移植後のフォローアップなどを併せて行っている。

- 1) 成長障害：その原因を包括的な視点から鑑別、診断すると同時に、必要に応じ成長ホルモン治療を行っている。最近では骨系統疾患に対する新しい薬剤が開発されており、臨床試験にも積極的に取り組んでいる。
- 2) 性分化疾患・性成熟異常症：性分化疾患：国内の診療中核施設となっており、全国からの診療相談、診察依頼を受けている。性分化・ジェンダーセンターを設置し、その中心診療科として、チーム医療を行っている。
- 3) 小児がん経験者(CCS)：複数科共同フォローアップ体制のもと内分泌晚期合併症の診断と治療を行っている。
- 4) 小児：1型糖尿病：ライフスタイルに併せて積極的なインスリンポンプの導入を図っている。現在約140名の1型糖尿病患者を診療し、特に年少児に対してインスリンポンプを積極的に導入している。
- 5) 生活習慣病の早期発見：小児期からの肥満に対し、早期からのフォローアップ体制構築（世田谷区医師会との連携）を施行している。
- 6) ライフサイクルに沿った成育医療の実践：内分泌代謝疾患に罹患した母体（特に甲状腺、副腎、下垂体疾患）における胎児や新生児の診断と治療している。
- 7) 代謝性疾患の臨床研究：先天性代謝疾患のES・iPS細胞由来肝組織の臨床応用プロジェクトに参加し、難病治療法の開発に貢献している。

3. 研究活動

国内随一のコホート研究である、成育母子コホート研究の中心科として、研究を主導している。新たな治療法の開発にも積極的に参加している。

基礎研究は、併設の研究所と連携し、内分泌代謝希少疾患の分子病態解明と治療法開発を

行っている。

4. 教育・研修

1) カンファランス

世田谷 ENDO フォーラム (Web 開催)、成育母子コホート市民公開講座、性分化疾患 Web カンファランス、こども病完内分泌代謝ネットワークなどを主催している。

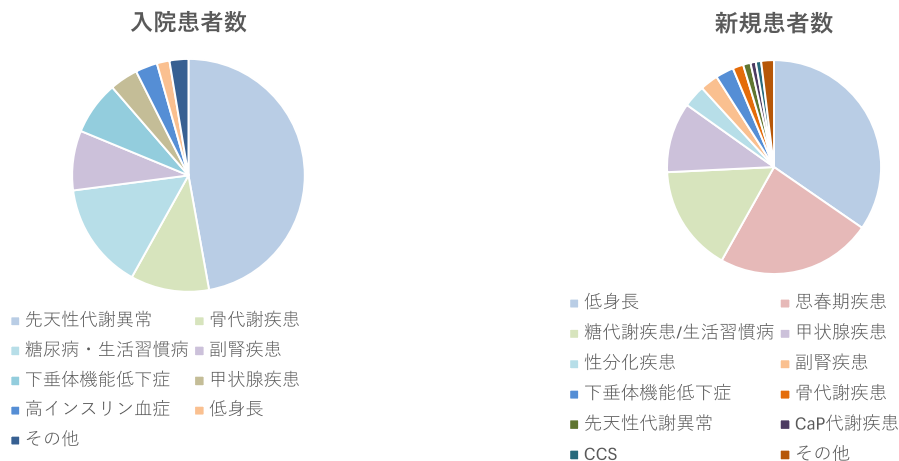
2) 研修

国内外からの研修生の受け入れ：全国から内分泌代謝疾患の専門研修を希望するフェロー、臨床研究員を受け入れ教育や指導を行っている。海外からの留学生を受け入れ、内分泌・代謝疾患の国際的な診療レベル向上に努めている。

3) 社会的活動

各種内分泌関連者会のサポート、世田谷区生活習慣病健診、学校検尿、新生児マススクリーニングの精密検査施設として、社会貢献を行っている。

年度別患者数

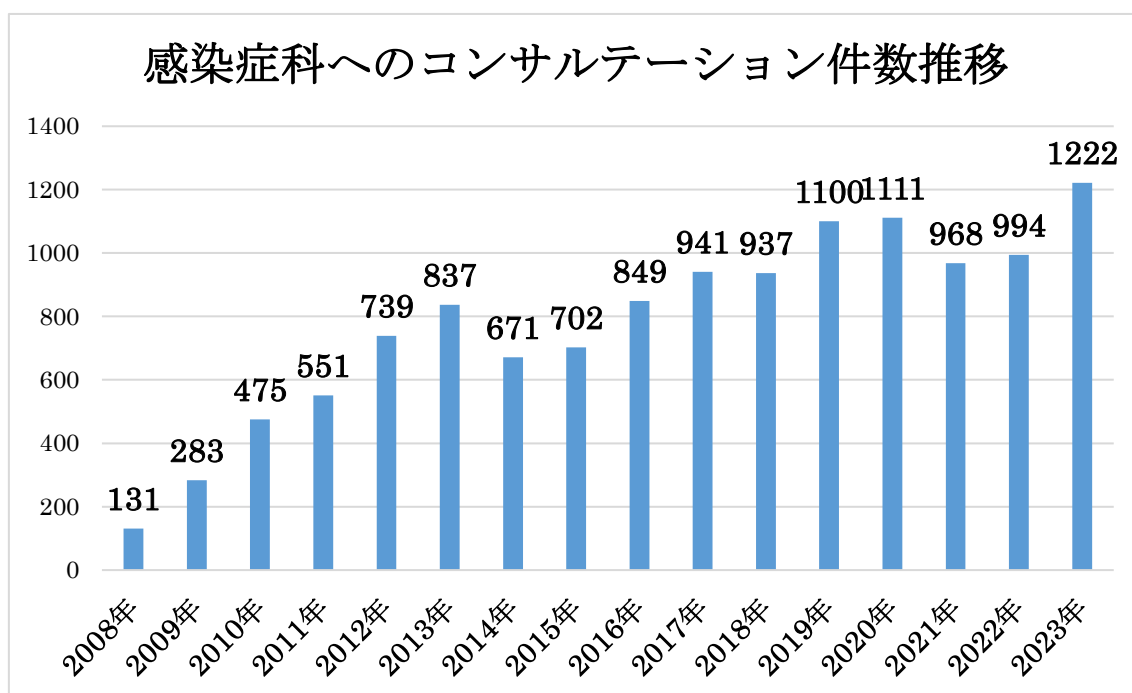


	2019	2020	2021	2022	2023
外来受診患者数	20265	13585	15131	15338	16056
入院患者数	256	174	193	188	229

3-7-4-8 感染症科

1. 臨床面での活動

コンサルテーション業務：感染症科では感染症が疑われる個々の患者について、主治医から相談（コンサルト）をうけ、その診断、治療に関して主治医と協力して診療にあたっている。そのコンサルト件数は徐々に上昇し、ここ数年は年間平均 1,000 件を超えている（カーブサイド的な相談や感染管理に関する相談は除く）。コンサルテーション内容としては、原因不明の疾患の解明、複雑な感染症の診断や治療方針の決定、免疫不全など基礎疾患のある患者において感染症の合併が疑われるときの対応などである。外来では、免疫不全者をはじめとする基礎疾患のある患者へのワクチン接種、ワクチン副反応への相談、ワクチン忌避への対応、繰り返す発熱患者の診療、先天性感染症のフォローを行ってきた。



2. 教育面での活動

感染症学会専門医・小児感染症専門医を育成する3年間のフェローシッププログラムを行っている。定期的に院内からのローテーター、国内外問わず他施設の感染症科フェローを受け入れ、その指導にも力をいれている。教育活動は院内において高く評価されており、スタッフ、フェロー、あるいはいずれも Distinguished Teaching Award を毎年受賞している。1～2週に1回の抄読会、月2回以上の総合診療部レクチャー、不定期に教育研修部、集中治療部、救急診療部に向けてのレクチャーなどを行っている。週1回、全国の小児医療施設とオンラインでの合同症例検討会を行い、活発に議論している。日本小児感染症学会教育セミナー Basic Course の運営や小児感染症認定指導医を目指すための小児感染症ハイレベルコース開催に関わり、講師として参加している。当科スタッフは小児感染症学会の専門医制度の設立にも携わり、専門医の問題作成を担っている。米国感染症学会の感染症科研修医試

験の受験を行い、2022 年より韓国の Samsung Medical Center と 3 か月に 1 回オンラインでの Case conference も行っている。成人症例の感染症の勉強のために、国立国際医療研究センター国際感染症センターおよび国立がん研究センターとの合同症例検討会を年 4 回程度開催している。

3. 病院関連感染対策

病院の Infection Control Team の主要メンバーとしての仕事を積極的に行い、病院関連感染症の予防、病院関連感染サーベイランスのシステムを各科と共に行った。2020 年以降、新型コロナウイルス感染症対策本部の設立運営から実務まで広範囲に活動してきた。また、病院関連感染の予防に重要な手洗い、各種感染予防対策の啓発活動を行った。これらの活動は、看護部、細菌検査室、薬剤部、救急室など他部門との連携で支えられている。

4. 抗菌薬の管理プログラム (Antimicrobial Stewardship Program: ASP) の実施

2009 年から始めた当院の ASP の活動は定着し、抗菌薬使用に関する担当医師への直接介入、抗菌薬のデエスカレーションの促進、適切な投与量の調整、静注抗菌薬から経口抗菌薬への適切な変更、適切な治療期間などに感染症コンサルテーションを通じて行ってきた。抗菌薬の許可制を継続し、カルバペネム系抗菌薬の使用量の減少と緑膿菌のカルバペネム系抗菌薬に対する感受性の改善が確認されている。また、経口抗菌薬についても許可制を導入し抗菌薬適正使用に貢献している。散発的に起こる抗微生物薬の供給不足に対しても迅速に対応を行い臨床現場における負担が最小限になるように努めている。

5. 研究面での活動

肝移植後の患者さんにおける感染症に関する研究などに関して、成果をあげ医療の最前線に還元している。新型コロナウイルスワクチンを基礎疾患のある小児に接種し、その安全性や抗体獲得について研究を行った。2023 年はコロナ禍にもかかわらず、国内外学会で 37 件の発表を行った。査読のある英文雑誌 43 件の発表を行っている。

6. 病原体の迅速診断

2010 年 4 月から、専任技術師を雇用し、PCR による病院内の感染症の迅速診断を開始した。様々な検体に対応するこの検査は患者の診療に直接役立つもので、患者の予後、死亡率の改善に貢献したり、院内感染対策にも寄与している。確定診断をつけることで病原体に特異的な治療が可能となり、不必要な検査や治療を避ける、あるいは中止することが可能となっている。近年は PCR 検査が一般化したことをうけ、次世代シーケンサーの臨床応用を推進し、抗酸菌の種の同定、原因不明の重症感染症の病原体診断が可能となってきた。

7. 国内の小児感染症領域における指導的役割

小児感染症領域において指導的な役割を担い、小児感染管理ネットワークの委員長、小児科学会・小児感染症学会委員、J-SIPHE の専門家委員の一員として定期的に活動している。新型コロナウイルス診療の手引き、小児科学会の各種ガイドライン作成等への貢献も行っている。新型コロナウイルス、RS ウイルスなどに関しても当センターのホームページから

積極的に情報発信を行っている。

3-7-4-9 こころの診療科

1. 概要

院内の組織改組により、こころの診療部は 2023 年 10 月に内科系専門診療部こころの診療科となった。ここではこころの診療部に関する活動状況を中心に記載する。

こころの診療部とは子どもとその家族のこころの問題に関する診療を行う部門である。こころの診療部各科の外来診療に加えて こころの問題を持った子どもの入院治療、慢性の病気の子どもと家族へのこころのケア、先端医療へチームとしての参加、周産期の妊婦さんへのこころのケアなどを行なっている。また、こころの診療は医師だけでは行うことは困難であり、こころの診療部の心理士をはじめとして、ソーシャルワーカーなどの院内の他部署との連携や地域の保健・教育・福祉などの連携も重要な業務に位置付けて実施している。

また、急増している子どものこころの問題に対応できる医師の教育として、レジデントやフェローの教育を重視している。院内教育研修センター所属のレジデント医師 4 名の研修（各 4 週間）を担当し、こころの診療部フェロー医師 5 名の教育を実施している。また、10 月 2 日から 27 日にはタイ王国から 1 か月間の研修に訪れた小児科医 1 名に臨床研修を行った。

子どもの心の診療ネットワーク事業の中央拠点病院として、子どもの心の診療医の交換研修を募集しているが、2023 年に該当者はいなかった。

2. こころの診療科 診療体制

こころの診療部は、乳幼児メンタルヘルス診療科、児童思春期メンタルヘルス診療科、児童思春期リエゾン診療科の 3 つの診療科と臨床心理で構成されている。乳幼児メンタルヘルス診療科は乳幼児の外来や病棟における心の諸問題に関する診療に加えて、周産期の母親のメンタルヘルスの問題を取り扱う。児童思春期メンタルヘルス診療科は、児童期と思春期の子どもたちのこころの問題をおもに外来診療で行う。児童思春期リエゾン診療科は慢性疾患で入院中の子どもと家族の心のケアおよび小児がんセンター入院患者と家族の心のケアを担当している。詳細は各診療科の項に記載されている。

スタッフは統括部長 1 名、診療部長 2 名、医長 2 名、医員 1 名、フェロー医師 5 名、非常勤医師 5 名、常勤心理療法士 3 名、非常勤心理療法士 8 名で診療を行った。乳幼児メンタルヘルス診療科は医長 1 名、児童思春期メンタルヘルス診療科は診療部長 1 名、医長 1 名、児童思春期リエゾン診療科は診療部長 1 名、医員 1 名となっている。フェロー医師のうち 1 年目の医師は各診療科を 4 か月単位でローテートし、3 つの診療科の業務の診療技術の習得を目指している。2 年目の医師は診療科には属さず、3 つの診療科の業務に関わっている。

3. 内科系専門診療部こころの診療科（2023 年 10 月～12 月）

院内の組織改組により、こころの診療部は内科系専門診療部こころの診療科となった。こころの診療部を構成していた乳幼児メンタルヘルス診療科、児童・思春期メンタルヘルス診

療科、児童・思春期リエゾン診療科の3つの診療科は、こころの診療科として統一された。
また臨床心理は内科系専門診療部の心理療法室として独立した。

4. 社会的活動（小枝）

4.1 公的委員会

- 1) 厚生労働省障害福祉課 発達障害の情報提供等事業に関する運営会委員（2019年度より継続中）
- 2) 東京都世田谷区児童福祉審議会委員（2020年度より継続中）
- 3) 東京都世田谷区世田谷区児童福祉審議会措置部会委員（2020年度より継続中）
- 4) 文部科学省 通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への支援の在り方に関する検討会議委員（2022年）

4.2 学会役員等

- 1) 日本小児保健協会会長
- 2) 日本 ADHD 学会常務理事
- 3) 日本小児神経学会評議員
- 4) 日本発達障害学会評議員
- 5) 内閣府障害者政策委員会委員

3-7-4-9-1 乳幼児メンタルヘルス診療科

1. 概要

乳幼児メンタルヘルス診療科は、主として就学前の子どもの発達相談、こころの問題や親子関係の問題、周産期・母性診療センターに通院・入院中の妊産褥婦のメンタルケアを行っている。

幼児期の患者は、他医療機関小児科や地域の発達センターからご紹介を受け、主として自閉症スペクトラム障害などの発達障害や子どもの情緒的問題の早期発見・早期介入を行っている。診断や支援のために、Autism Diagnostic Observation Schedule (ADOS)などを用いた行動観察、発達歴の聴取や質問紙による評価や発達検査を行い、対人交流を引き出すアプローチや発達特性に応じた養育や環境調整等のガイダンスを行っている。

妊産褥婦のメンタルケアについては、また周産期・母性診療センターのスタッフ、医療連携室と連携し、産後うつ病の予防や治療、精神科合併症妊婦のケアに力を入れている。

2. 診療体制

岸本真希子医長、こころの診療部フェロー、臨床心理士（主に新村麻里奈、引土達雄、柿沼里奈）で担当している。

3. 診療実績

2023 年の初診・再診患者の精神障害は下記のような内訳である。

ICD-10 コード	初診 (人)	再診 (人)
F00-F09 症状性を含む器質性精神障害	0	0
F10-F19 精神作用物質使用による精神および行動の障害	0	7
F20-F29 統合失調症, 統合失調型障害および妄想性障害	2	14
F30-F39 気分[感情]障害	9	45
F40-F48 神経症性障害, ストレス関連障害および身体表現性障害	22	540
F50-F59 生理的障害および身体的要因に関連した行動症候群	0	10
F60-F69 成人のパーソナリティおよび行動の障害	5	35
F70-F79 精神遅滞	0	5
F80-F89 心理的発達の障害	16	640
F90-F98 小児<児童>期および青年期に通常発症する行動および情緒の障害	1	88
合計	55	1, 377

3-7-4-9-2 児童・思春期メンタルヘルス診療科

1. 概要

児童・思春期メンタルヘルス診療科では、主に小学1年生から中学3年生までの児童を対象に外来診療を行っている。自閉スペクトラム症、注意欠如多動症、限局性学習症（学習障害）、知的発達症、チック症などの神経発達症（発達障害）に加えて、不登校や適応反応症、抑うつ症、不安症、強迫症、身体症状症、PTSD、心身症など、心身に関わる問題全てが対象疾患である。受診する児童は家庭生活や学校生活で様々な困難を抱えているが、その原因は本人の特性だけでなく、保護者の特性や親子の関係性、学校や地域などの環境要因などが絡み合っており、一様ではない。本人や家族と一緒に問題点と実行可能な解決策を丁寧に整理していくことで、患者本人にも積極的に困難に向き合ってもらえるような診療を心がけている。

当診療科では心理・発達検査を導入している。子どもの元々の発達特性はどうか、現在のコンディションはどうか、親子関係はどうか等を診察と検査を通して整理している。また、治療は薬物治療や心理社会的治療など多岐にわたる。患者本人や家族の生活とのバランスをとりながら、どの治療にどのタイミングで取りかかるか、適宜検討している。

また、他病院や近隣のクリニックとの連携も進めている。普段はかかりつけ医の診療を受けながら定期的に当院にも受診してもらい、治療方針などのかかりつけ医に連絡するなど病診連携を重視している。

当診療科のディスレクシア外来は、発達性ディスレクシア（発達性読字障害、発達性読み書き障害）の診断と治療を行う全国の国公立病院では唯一の専門外来である(担当：小

枝)。本が読めるようになって子どもが自信を取り戻し、登校渋りがなくなるなどの成果を挙げている。また、2021年1月からは学習困難を抱える児童を診療する専門外来として、LD外来を設けている(担当:岡)。ディスレクシア外来同様に、教育機関と連携しながら学習支援や指導を行っている。

また、Web会議システムを用いたオンライン相談も行っており、遠方のために受診できない子どもの相談やセカンドオピニオンを受けている(担当:小枝)。

2. 診療内容・業務内容

当診療科では主に以下の疾患や状態にある子どもの診療を行っている。

- ・神経発達症(発達障害):自閉スペクトラム症、注意欠如多動症、限局性学習症(特に発達性ディスレクシア)、知的発達症、チック症等
- ・心身症 適応反応症 不登校
- ・抑うつ症 不安症 場面緘黙 身体症状症 強迫症
- ・反応性愛着障害 急性ストレス障害
- ・反抗挑発症 素行症
- ・睡眠障害など

専門分野

小児神経学、発達障害医学、児童精神医学

3. 診療実績

2023年1月～9月 当診療科受診患者 病名延べ人数

	2021	2022	2023(1～9月)
症状性を含む器質性精神障害	2	3	2
精神作用物質使用による精神および行動の障害	0	0	0
統合失調症, 統合失調型障害および妄想性障害	4	15	12
気分〔感情〕障害	41	95	68
神経症性障害、ストレス関連障害および身体表現性障害	290	385	308
生理的障害および身体的要因に関連した行動症候群	108	192	102
成人のパーソナリティおよび行動の障害	11	10	8
精神遅滞	132	169	102
心理的発達の障害	778	1,037	1,061
小児〔児童〕期および青年期に通常発症する行動および情緒の障害	448	526	537
合計	1,814	2,432	2,266

*ICD-10 病名により分類。併存病名を含む

精神遅滞(知的発達症)が7%、心理的発達の障害(F80-89 自閉スペクトラム症、限局性学習症など)が47%、小児〔児童〕期および青年期に通常発症する行動および情緒の障害(F90-98 注意欠如多動症など)が24%であり、これらの神経発達症が全体の78%を占める。

2023年1月～9月 新患数216名(2022年1月～12月は301名)

紹介元の内訳は、世田谷区内77名(36%)、東京23区内(世田谷区を除く)63名(29%)、都内(23区外)32名(15%)、東京都外44名(20%)であった。東京都外からは神奈川県が23名で最も多かった。

3-7-4-9-3 児童・思春期リエゾン診療科

1. 概要

平成29年度4月より、入院患者の心理社会的支援に関する依頼件数の増加に伴い、日本国内で初の、小児専門のコンサルテーション・リエゾン診療科に改名し子どものリエゾン活動を開始した。スタッフは診療部長1名、医員1名、修練医1～2名の診療体制で10月の組織改編まで科の運用を行った。10月以降はこころの診療科全体の業務として継続的にリエゾン体制を維持するため対応を重ねている。

2. 診療実績

入院診療：医師、心理士、リエゾン精神専門看護師と共に2022年3月よりリエゾンチーム(300点/週)が稼働。入院精神療法と共に精神科リエゾンチーム加算を取得している。ほか共に緩和ケアチーム(緩和ケア加算定)、小児がんセンター子どもサポートチーム(週1)、移行支援チーム(月1)、VADチーム(全例介入)、ICU:特に自殺企図・虐待が否定できないケースへの対応(週1)、緩和ケア(週1)、性虐待・被害対応チーム、チーム医療を行っている。ほか院内および院外含む緊急カンファレンス(虐待関係)などに参加し心理社会的視点で専門的見解をチームに伝え患者家族のQOL向上に努めている。

外来診療：定期こころ外来、子どもリエゾン室での外来の2つの特色をもつ。

- ① 定期こころ外来：身体、知的、精神に障害をもつ子ども、他施設で診療が難しい被虐待、性的被害が背景にある子どものPTSDに対しトラウマ治療を実践している。また2022年6月より臓器移植ドナー第3者面談(心理社会的評価+第3者性の確認)を当科医師、心理士で面談を実施、昨年は53件を担当した。
- ② 子どもリエゾン室：子どもリエゾン室を2022年1月より医師、心理士、SWとチームでの診療をスタートし2023年度は97件の依頼あり。更に総合診療部、感染症科などと連携しlong covidに関する診療も開始。バイオサイコソーシャルアプローチの専門的視点から丁寧に診察を行い、その見立てと対応に関する資料を作成し教育・福祉との連携を実践している。加算として通院精神療法、初診料(16歳未満、60分以上)、

各種心理検査加算、逆紹介などを取得している。第1回子どもリエゾン室セミナーを2023年3月26日に実施し好評を得た。

3. 教育

杏林大、順天堂大からの医学生実習の受け入れ、およびセンター内、順天堂大学小児科、他院研修医の指導を行った。またセンター内ではコメディカル（保育士、子ども療養支援士、SW、心理等）の教育・連携にも携わっている。センター内レジデント研修に対して実習の受け入れ、トラウマ、リエゾン関係の講義を行った。

4. 研究

AI ホスピタル事業最終年度として、2件の分担研究（aibo を用いたリエゾン介入、「窓」を用いた入院児と家族の支援）担当し2023年3月でそれらの成果を報告した。2021B-16 疾病受容評価に基づく小児慢性疾患患児の意思決定支援プログラムの開発および家族支援のあり方の検討～小児慢性疾患自立支援事業“成育モデル”の開発から継続して実施した。

治験としては以下の事業に発達評価専門家として携わっている。

①「JR-141 のムコ多糖症 II 型患者を対象とした第 II/III 相試験」及び「JR-141 のムコ多糖症 II 型患者を対象とした継続投与試験」における発達評価専門家業務、②JCR ファーマ株式会社が企画又は実施する調査・研究等に関する発達評価等アドバイザー業務、③「JR-141 のムコ多糖症 II 型患者を対象とした第 II/III 相試験」及び「JR-141 のムコ多糖症 II 型患者を対象とした継続投与試験」を担当している。

対外的には、学校保険不服申し立て審査委員、世田谷区児童福祉協議会委員としての委員会参加、ベイリー乳幼児発達検査第3版日本版標準化実行委員としての活動を行い11月に刊行に至った。

3-7-4-10 心理療法室

1. 心理スタッフ（心理療法士）

2023年10月の組織改編に伴いこころの診療部の心理スタッフ（常勤スタッフ3名、非常勤スタッフ8名）は小児内科系専門診療部 心理療法室へ異動となった。また院内の各部門に所属していた心理スタッフ（常勤スタッフ1名、非常勤スタッフ3名）も心理療法室の所属として統合された。なお本報告では、例年にならいこころの診療部における心理スタッフの1年間（2023年1月～12月）の活動状況を報告する。

2. 年間統計

こころの診療部において心理スタッフが実施した心理面接および心理検査の数と内訳は以下のとおりである。

外来患者の心理面接回数は前年と比較して大きな変化は見られなかった。一方、心理検査件数はやや増加した。新型コロナウイルス流行の落ち着きに伴い、一時的に落ち込んでいた心理検査の依頼件数はやや回復傾向にあると推測される。

生体臓器移植ドナーの第三者意思確認面接とはドナーの意思決定プロセスにおける心理的圧力といった問題の有無を中立的立場で確認するための面接である。2021 年度から全面的にこころの診療部の心理スタッフに依頼されるようになり、面接件数は年々微増している。また産後ケア事業コアサポートでも希望に応じて利用者の心理面接を実施している。事業の拡大に伴い面接件数は増加している。

入院患者については、精神科リエゾンチームの活動としての心理介入およびこころの診療部における周産期支援としての心理介入をおこなっている。病棟における心理支援ニーズはこれまでと変わらず存在しており、患者家族への直接支援のほかに、ケースカンファレンスや病棟スタッフへのコンサルテーションによる間接介入をおこなうことで心理支援ニーズに対応している。

<心理の業務内容とその内訳（延べ面接回数および検査実施件数）>

本人面接（外来） 1,089 回

家族面接（外来） 329 回

生体臓器移植ドナーの第三者意思確認面接 89 回

産後ケア事業コアサポートにおける心理面接 54 回

心理面接（外来） 計 1,561 回

発達のアセスメントに関する検査 641 件

人格検査 50 件

心理検査実施数 計 691 件

入院中の患児面接 140 回

入院中の患児の家族面接 68 回

入院中の周産期患者面接 56 回

心理面接（入院） 計 264 回

（他 医療者カンファレンス参加 計 1,090 回）

心理の業務数（延べ面接回数および検査実施数） 計 2,516 回

3. 公認心理師実習生の受け入れについて

2017年9月に心理職の国家資格として公認心理師法が施行されたことを受け、その人材育成に当部門も貢献したいと考え、2018年10月から公認心理師病院実習施設として公認心理師を志望する実習生を受け入れてきた。2022年以降は新型コロナウイルス感染対策をおこないながら受け入れを継続している。

3-7-5 アレルギーセンター

1. アレルギーセンター概要

平成26年6月にアレルギー疾患対策基本法（平成26年法律第98号）が成立、翌年12月に施行された。平成29年3月21日には、アレルギー疾患対策の推進に関する基本的指針が厚生労働大臣告示として公布され、この基本指針において、国民が居住地に関係なく、等しくそのアレルギーの状態に応じて適切なアレルギー疾患医療を受けることができるよう、アレルギー疾患医療全体の質の向上が求められている。

この指針に基づき、国は、国立成育医療研究センターと国立病院機構相模原病院を「中心拠点病院」と位置づけ、最新の科学的知見に基づく適切な医療情報の提供やアレルギー疾患医療に関する研究、専門的な知識と技術を有する医療従事者の育成を推進することを求めている（基本指針 第3条（2）キ）。

国立成育医療研究センターアレルギーセンターは、アレルギー疾患における国の中心拠点病院として、専門診療や研究、教育研修、適切な情報の発信に加え、鑑別診断が困難な症例や標準的治療では病状が安定しない重症・難治性アレルギー疾患の患者さんに対し、関係する複数の診療科が連携することで総合的かつ包括的に診断、治療管理を行い専門医療を提供することを目的として2018年6月に設置された。現在、総合アレルギー科、皮膚アレルギー科、消化管アレルギー科、鼻アレルギー科に加え、4評価支援室（視機能評価支援室、免疫機能評価支援室、遺伝情報評価支援室、行動機能評価支援室）による各科横断的に統合された診療体制とし、臨床面における連携のみならず、難治重症例に対する免疫異常や遺伝的検査など詳細な評価を研究所で実施することにより、総合医療的かつ先進的なアレルギー診療を実現している。

2. 中心拠点病院の役割

国立成育医療研究センターアレルギーセンターは、国の政策に基づき、わが国におけるアレルギー疾患医療の全国的な拠点として、アレルギー疾患医療に関する診療、情報提供、人材育成、研究などに関する以下の役割について求められている。

① 診療

診断が困難な症例や、標準的治療では病態が安定化しない重症及び難治性アレルギー疾患の患者さんに対し、複数の診療科が連携し、診断、治療、管理を行うこと。

② 情報提供

国民や医療従事者、その他のアレルギー疾患に携わる関係者に対し、アレルギー疾患に関する科学的知見に基づく適切な情報を提供すること。

③ 人材育成

都道府県拠点病院でアレルギー疾患医療に従事する、専門的な知識と技術を有する医療従事者の育成を実施すること。さらに、アレルギー疾患に携わる関係者向けの研修や講習会で活用できる共通教材等の作成や提供を行うこと。

④ 研究

全国的な疫学研究、臨床研究等を長期的かつ戦略的に推進すること。

⑤ その他

全国拠点病院連絡会議を通じて全国の都道府県拠点病院との情報共有、意見交換等を行い、アレルギー疾患医療の均てん化に向けた取組等につき協議を行うこと。

3.Center of Excellence

さらに、当センターは2017年に世界アレルギー機構（World Allergy Organization）から「Center of Excellence」の指定を受け、アレルギー診療と研究の世界的リーダーとして認識されており、国内はもとより世界における専門施設への指導的役割を担うことが期待されている。当センターはアレルギー診療の最前線として、国内外の医療機関に示すモデルとなる高品質な医療を提供し、高水準の医療を持続可能にするために必要な臨床研究の推進に力を注いでいる。

3-7-5-1 総合アレルギー科

総合アレルギー科ではアトピー性皮膚炎、食物アレルギー、気管支喘息、好酸球性消化管疾患、遺伝性血管性浮腫をはじめとする、小児アレルギー疾患等を対象とした診療と臨床研究を行っている。アレルギー指導医4名とアレルギー専門医9名を擁し、他の医療機関からの、通常治療ではコントロール困難な重症・難治性の紹介患者が診療の中心となっている。一方で、アレルギー疾患は軽症患者を含めると国民の約半数が罹患するありふれた疾患でもあり、アレルギー疾患対策基本法における中心拠点病院として、軽症患者から重症患者までを網羅する診療ガイドラインに取り入れる標準治療の開発を行うための介入研究や、小児科専門医向けのアレルギー教育研修プログラムの開発と実践を行っている。さらに、アレルギー疾患の発症予防に向けて、発症や増悪に影響する因子を探索する出生コホート研究（成育コホート研究やエコチル調査など）や、国際的にも注目を集めている多施設共同ランダム化比較試験（PACI スタディなど）をはじめ様々な疫学研究を実施している。診療と研究とは車の両輪の関係にあり、診療内容の充実と進歩のためには研究を進める必要があるが、両者を高い水準で実現している医療施設は国内外を含めても稀であると自負している。

1. 臨床実績

1.1. 外来

(1) 初診外来

初診外来は疾患別に曜日等を決めて診療を行っている。初診時には原則、全ての患者家族に対して、少人数制の疾患別の教室を開催し、医師による当センターの治療方針の説明、看護師による治療手技の指導や環境整備についての説明をしたうえで、本診察を開始する。

2023年の延べ初診患者数 917人（※前年度比 +27.5%）

2020年以降、新型コロナウイルス感染拡大の影響により初診患者数が一時的に減少傾向にあったが、2021年より回復し、2023年においても例年通りの初診患者数を

受け入れることが出来ている。

＜アレルギーセンターで実施している患者むけ教室＞

アトピー教室：主に月曜日（9:45～12:00）

アレルギー専門医によるアトピー性皮膚炎の病態や検査、治療管理に関し最新のエビデンスを交えた全般的な内容に関わる講義の後に、専門看護師（小児アレルギーエドゥケーター等）によるスキンケア指導（洗浄と保湿）ならびに適切な外用塗布方法の指導を行う。

食物アレルギー教室：主に木曜日（10:00～11:00）

アレルギー専門医によるアレルギーの感作の仕組みや発症予防に関わる話題の他、アナフィラキシー時における緊急対応に加え耐性獲得を促す生活習慣について講義する。その後、管理栄養士による必要な栄養管理について説明を行う。

喘息教室：主に火曜日（10:00～11:00）

アレルギー専門医による正しい喘息の知識や情報を提供し、専門看護師（小児アレルギーエドゥケーター等）により吸入手技の指導や環境整備について説明を行う。

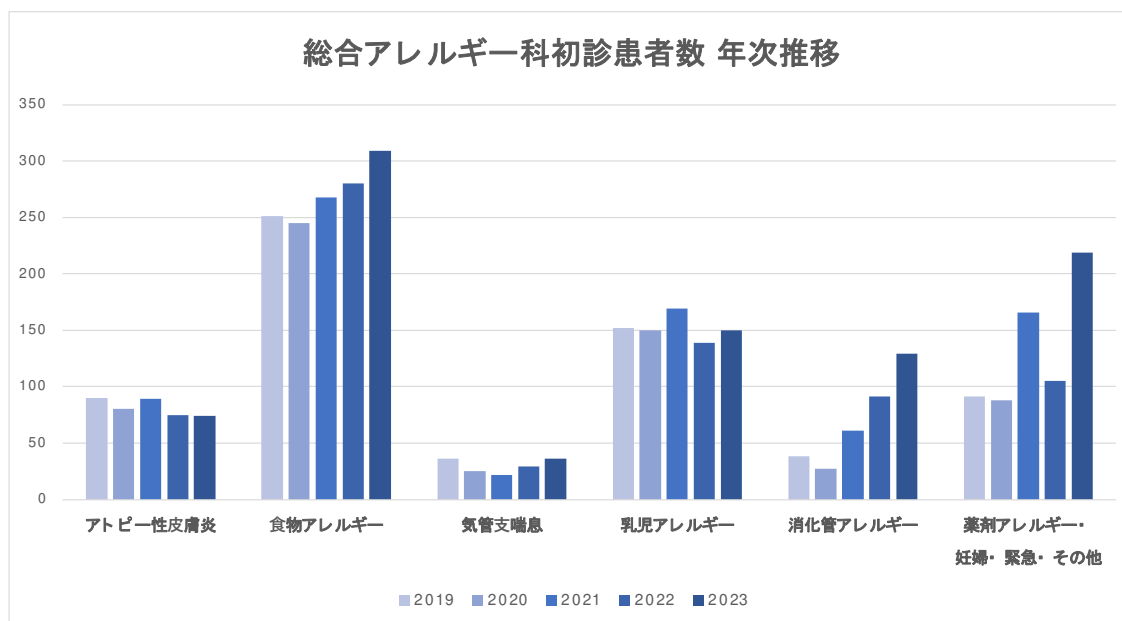
乳児アレルギー教室：主に金曜日（10:00～11:00）

アレルギー専門医による乳児期の湿疹、アトピー性皮膚炎に関する病態や治療管理に関する正しい情報を提供し、加えてアレルギーの感作の仕組みや発症予防に関わる話題を説明する。専門看護師（小児アレルギーエドゥケーター等）によるスキンケア指導（洗浄と保湿）ならびに適切な外用塗布方法の指導を行う。

食物たんぱく誘発胃腸症（消化管アレルギー）教室（動画）：主に火・水曜日

1990年代後半より世界的に増加する食物たんぱく誘発胃腸症は、新生児や乳児期に原因となる食物（調製粉乳や卵黄など）を摂取した数時間後等に嘔吐などの消化器症状を呈する疾患である。近年においても一般小児科領域で十分認知啓発が進んでいる状況になく、その病態、特に即時型食物アレルギーとの違い、即時型と慢性型の違い等に加え、検査等診断法について分かりやすく説明を行う。

この他、夏休みや春休みなどに患児や家族を対象とした「こども教室」の開講（コロナ禍で一時休止期間あり）、その他随時、専門看護師、薬剤師、管理栄養士による個別指導を行っている。



(2) 再診外来

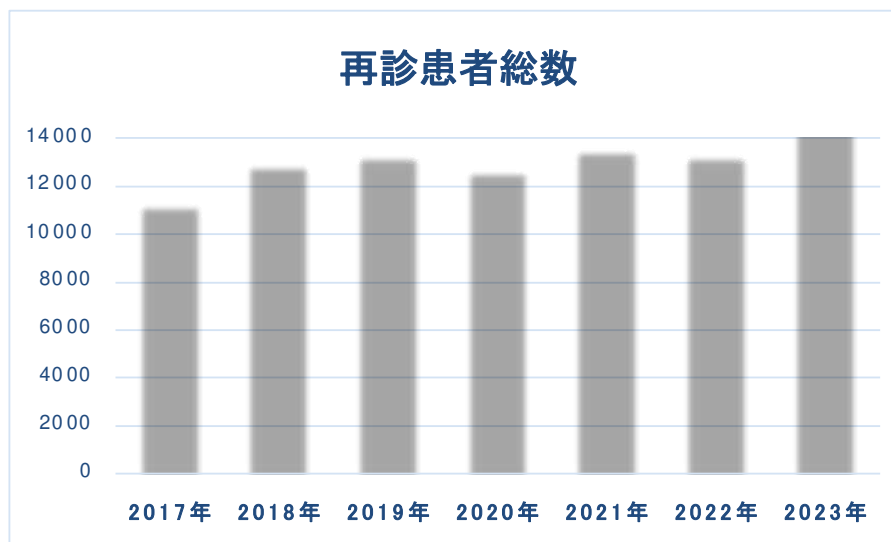
再診外来は月～金曜日まで各曜日 4～6 診を設置している。再診外来では外来検査として皮膚テスト（月曜日）、運動負荷試験（木曜日）を実施している。

2023 年の延べ再診人数： 15,288 人（※前年度比 +15.6%）

（負荷試験前診察外来を除く）

外来検査 皮膚テスト 234 名

運動負荷試験 16 名



(3) 研究外来

通常の初診・再診外来とは別に、月～金曜日までの主に午後、アレルギーセンターで実施する臨床研究参加者を対象とした研究外来を設置している。

(4) 患者教育

アレルギー疾患の多くは慢性疾患であり、治療管理においては保護者並びに患児本人の理解と協力が不可欠であり、患者教育には熱心に取り組んでいる。アレルギーセンター外来には、小児アレルギーエデュケーター（日本小児臨床アレルギー学会認定）を有する看護師2名が在籍し、アレルギー教室や短期・長期管理教育入院、日常診療の患者指導などについて医師と協力あるいは自発的に実施している。また春休み・夏休み・冬休みの各長期休暇期間中に、学童向けのアトピー教室や食物アレルギー教室を開催し、患者本人への教育を実施することにより、治療意欲と自己管理能力を高めている。

(5) 食物経口負荷試験

当センターでは食物経口負荷試験を積極的に実施しており、令和5年2月よりわが国で初となる食物経口負荷試験専門ユニット「OFC ユニット」が新たに稼働し、実施件数はわが国で屈指のものとなっている。

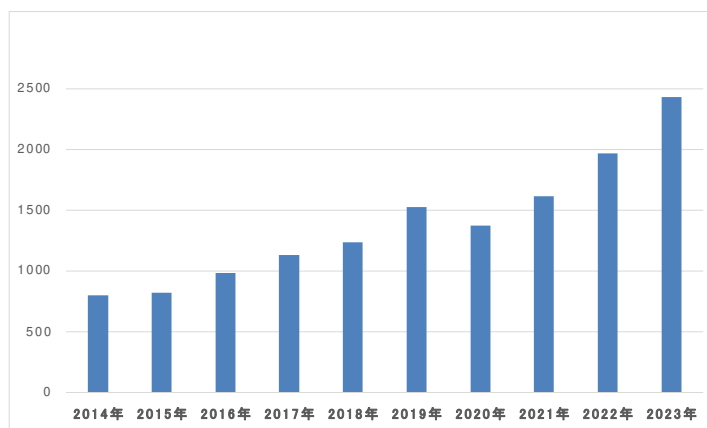
即時型食物アレルギー：外来日帰り負荷試験、あるいは1泊負荷試験

消化管アレルギー：2泊3日、あるいは1～2週間負荷試験（Food protein-induced enterocolitis syndrome の acute タイプ）、もしくは長期負荷試験（好酸球性消化管疾患における内視鏡検査を含めた検査入院）

2023 年 即時型食物アレルギーに対する食物経口負荷試験件数：

2,432 件（前年度比 +23.5%）

食物経口負荷試験 実施数

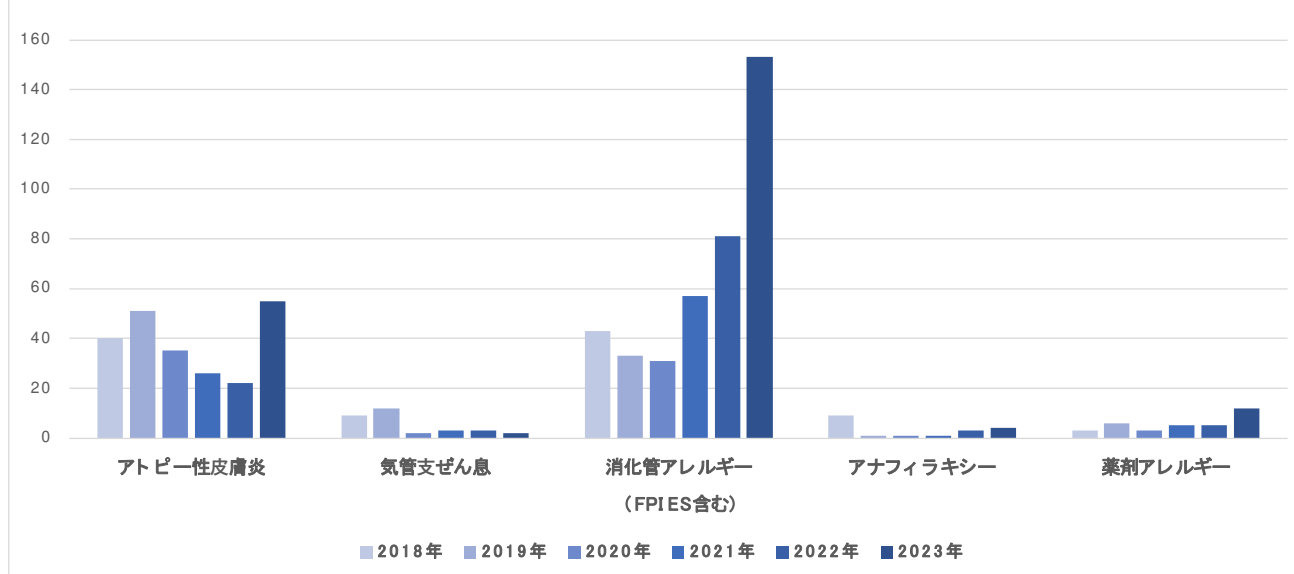


1.2. 入院

外来通院による治療による寛解維持の管理が困難な重症患者には、入院治療を行っている。

2023 年 入院患者数（即時型 OFC を除く）：228 件（前年度比 +91.6%）

総合アレルギー科入院患者年次推移



1.3. 総合アレルギー科 臨床実績のまとめ

令和5年はコロナ禍による行動制限が解除され、同時に、食物アレルギー診療の主軸となる食物経口負荷試験を OFC ユニットでの稼働を開始したことにより、高度な質を保ったまま検査供給数を増やすことが可能となった1年であった。その他業務の効率化等により、結果として初診外来患者数（+27.5%）・再診外来患者数（+15.6%）・入院患者数（OFCを除く。+91.6%）・OFC 件数（+23.5%）の全ての業績について増加した。

2. 研究活動（研究業績参照）

アレルギー疾患の診断・治療・病態解明・発症予防などに係わる多くの臨床研究を実

施、計画しており、その一部を紹介する。

2. 1. 乳児アトピー性皮膚炎への早期介入による食物アレルギー発症予防研究/多施設共同評価者盲検ランダム化介入並行群間比較試験 (PACI study) : 生後7~13週のアトピー性皮膚炎と診断された乳児を対象とし、ステロイド外用薬による標準治療群 (リアクティブ療法) と積極治療群 (プロアクティブ療法) に割り付け、生後半年における鶏卵アレルギーの発症を比較する。
2. 2. 乳児アトピー性皮膚炎への早期介入と経口免疫寛容誘導によるアレルギーマーチへの影響を探索する前向きコホート研究 (PACI-on study) : PACI study に参加完了した対象者において PETIT 研究で有効性を証明した鶏卵2段階摂取法を生後6ヶ月から開始した上で、PACI study で実施した早期の積極的皮膚治療介入が6歳までのアレルギー疾患発症を予防する効果が高いかを調査する。
2. 3. 牛乳アレルギー治療 (経口免疫療法) に対する有効性検証試験 (TOY study) : 乳酸菌発酵果汁飲料を用いた二重盲検プラセボ対照並行群間比較試験。
2. 4. ハイリスク出生コホート研究 (HiRAD study) : アレルギー疾患の家族歴を持つ児における出生コホート研究。アレルギー疾患の発症をアウトカムとし、妊娠中から6歳まで経時的に医師診察、アンケート調査、血液検査、細菌叢検査などを行い発症因子について因果推論を行う。
2. 5. 成育コホート研究 (出生コホート研究) : 2003年から2005年に当院を妊娠中に受診した妊婦をリクルートし、2004年3月~2006年8月に出生した1,550名を追跡調査している。3歳までは年に2回、それ以降は年1回の質問票調査と3回の健診 (5歳、9歳) を行った。2017年には13歳健診を行った。
2. 6. アレルギー疾患の経過・長期予後の解明のための前向き観察研究 (疾患コホート研究) : 対象は、国立成育医療研究センターアレルギーセンターを受診し、アレルギー疾患 (アトピー性皮膚炎、気管支喘息、即時型食物アレルギー、新生児・乳児消化管アレルギー) と診断または疑われた小児を対象に20歳までフォローする予定。
2. 7. アレルギー疾患における標準治療の普及と均てん化に向けた研修プログラムの開発研究

3. 教育・研修

3. 1. 厚労省補助事業 中央拠点病院研修「小児アレルギー診療短期重点型教育研修プログラム」:

2023年度 参加者6名 (全国から小児科医が参加)

本事業は、アレルギー疾患対策推進に関する基本指針に掲げられた各種個別目標を達成することを目的とし、都道府県アレルギー疾患医療拠点病院等の医師に対し、B研修 (中期間: 2週間程度) として「小児アレルギー診療短期重点型教育研修」を実施するものである。その内容は食物経口負荷試験の実践に加えて気管支喘息およびアトピー性皮膚炎の標準治療の実習を充実させ、実際に参加者が都道府県アレルギー疾患医療拠点病院での診療に必要な水準を担保できるものとしている。具体的には、研修参加者ごとに総合アレルギー科医師1名がメンターとして担当し、10日間の研修プログラムにおいて食物アレルギーの診断法 (複数患者への食物負荷試験実施を含む)、問診技術・血液検査・皮膚テストの実施と解釈、基本的な食物除去・除去解除の方針決定、不要な除去食への食事指導や段階的解除の説明や、アトピー性皮膚炎の診断、重症度に応じた適切な外用療法の選択やスキンケア指導、ステロイド忌避への対応などを習得し、アレルギー性鼻炎に対する舌下免疫療法、気管支喘息における呼吸機能検査や吸入手技など一般的な患者指導に加え、入院中の重症患者に対する行動療法的アプローチを含めた介入法を見学することで、難治性アレルギー患者への包括的な対応を学習する。また、研修機会の少ない研修項目や、重要性の高い研修項目に

については、昨年度に引き続き講義動画による e-learning 資材を充実させ、研修参加期間中や研修後に視聴可能とし研修の補完として活用した。

研修参加者の背景（図 1）としては、関東地方を中心とし北海道・青森県、広島県はじめ全国より、主に 30～40 歳代の小児科医が参加され、8 割が小児科専門医を有していた。全員が大学病院や小児専門病院、あるいは県立病院など地域の中核病院に勤務されており、地域診療の底上げが期待される。

3.2. 国立成育医療研究センター

アレルギー臨床懇話会の開催：地域の小児医療従事者を対象としたアレルギー診療に関する講演会を平成 15 年より年 1 もしくは 2 回の頻度で行っており、新型コロナウイルス感染拡大の影響により 2020 年からは WEB 配信とし現在はハイブリッド開催で実施している。2023 年度は「第 28 回成育アレルギー臨床懇話会」等を開催し、順天堂大学医学部附属順天堂医院小児科 稲毛英介先生をお迎えし、「子どもの遺伝性血管性浮腫-最近の進歩-」と題して講演を頂き、262 名の参加者をお招きし盛会に終了した。さらに今年度より、多職種によるチーム医療の発展を狙いメディカルスタッフ向けのオンラインセミナーを年 1 回開催する企画を立て、「成育アレルギーメディカルスタッフセミナー」として特別講演に別府大学食物栄養科学部教授の高松伸枝先生にご登壇頂き、「食物アレルギー診療における管理栄養士の関わりと食事指導のコツ」と題して御講演を頂いた。広く近隣看護協会や栄養士会等呼びかけを行い 420 名の方に参加頂いた。

3.3. 成育アレルギー電話相談室

本事業では、アレルギー疾患対策基本指針に掲げられる「アレルギー疾患に関する啓発及び知識の普及」を目的とし、一般国民等からのアレルギーに関する相談事業として、電話相談事業（「成育アレルギー電話相談室」）を開設し実施する。その内容としては、アレルギー診療を専門的に行う医師を中心とした医療スタッフにより、アレルギー疾患を有する患者やその家族の悩みや不安に対し、科学的知見に基づく適切な情報提供や、「アレルギー疾患の医療提供体制に関する在り方に関する検討会」に基づく各都道府県の医療提供体制を考慮した対応を、電話相談により実施する。

社会的活動（研究業績参照）：

全国各地域の医師会の研修会、自治体が主催する患者向けあるいはコメディカル向けの研修会で の講演活動、NHK テレビ健康関連番組等への出演や制作協力を始め、報道関係者の取材への協力を行った。

3-7-5-2 皮膚アレルギー科

アレルギーセンターでは、アトピー性皮膚炎の診療方針として、ガイドラインに基づいた標準的治療を基本とし、信頼性の高い最新の医学的エビデンスを取り入れ患者さんごとに決定している。アトピー性皮膚炎の患者さんの中には、他の医療機関で診療を受けたにも関わらず、重症難治化する場合がある。多くは外用療法が不適切であったりステロイド外用薬に対する誤った認識があるなどが理由であり、アレルギーセンターで実施されるアトピー教室や専門看護師（小児アレルギーエデュケーター）による患者指導により改善する場合は殆どである。しかし、難治化の原因として皮膚真菌症・ウイルス感染症をはじめとした皮膚感染症、小児皮膚筋炎・SLE を初めとしたリウマチ性疾患・自己免疫疾患の鑑別を要する症例や、先天性外胚葉低形成や先天性魚

鱗性様紅皮症、免疫不全症等における一症状としてアトピー性皮膚炎が併発する症例を管理する際には、小児皮膚科医との連携が必須であり、アレルギーセンター内において皮膚アレルギー科を設置し、シームレスな横断的連携による包括的診療を実施している。

1. 概要と特色

アレルギーセンターでは、アトピー性皮膚炎の診療方針として、ガイドラインに基づいた標準的治療を基本とし、信頼性の高い最新の医学的エビデンスを取り入れ患者さんごとに決定している。

アトピー性皮膚炎の患者さんの中には、他の医療機関で診療を受けたにも関わらず、重症難治化する場合がある。多くは外用療法が不適切であったりステロイド外用薬に対する誤った認識があるなどが理由であり、アレルギーセンターで実施されるアトピー教室や専門看護師（小児アレルギーエデュケーター）による患者指導により改善する場合が殆どである。しかし、難治化の原因として皮膚真菌症・ウイルス感染症をはじめとした皮膚感染症、小児皮膚筋炎・SLE を初めとしたリウマチ性疾患・自己免疫疾患の鑑別を要する症例や、先天性外胚葉低形成や先天性魚鱗性様紅皮症、免疫不全症等における一症状としてアトピー性皮膚炎が併発する症例を管理する際には、小児皮膚科医との連携が必須であり、アレルギーセンター内において皮膚アレルギー科を設置し、シームレスな横断的連携による包括的診療を実施している。

2. 臨床実績

外来診療では、小児のあらゆる皮膚疾患を対象として、月曜から金曜まで平日は毎日外来診療を行っている。特殊外来は、火曜と水曜にレーザー外来を行なっている。

以下に、対象となる代表疾患を記す。

アトピー性皮膚炎などの湿疹・皮膚炎	診断 アレルギー検査 外用療法 皮膚生理検査 スキンケア指導
あざ（血管腫、太田母斑、異所性蒙古斑など）	生後1ヶ月頃からできるレーザー治療 顔面、広範囲のあざなどには、全身麻酔下でのレーザー治療も行っています
ほくろ	悪性か良性かの診断 手術
皮膚腫瘍（石灰化上皮種、粉瘤、脂肪腫、脂肪腺母斑など）	診断、治療（手術）
毛髪疾患（円形脱毛症、先天性乏毛症など）	診断、治療（エキシマライトなど）

乾癬（関節症性乾癬、膿疱性乾癬など）	診断、治療（外用療法、エキシマライト、内服療法、生物学的製剤）
尋常性白斑	診断、外用療法、エキシマライト
イボ、水イボなどのウイルス感染症	液体窒素療法
とびひなどの細菌感染症	長引いている場合の対応
角化症、魚鱗癬	診断、検査、治療
母斑症、その他の遺伝性、先天性疾患	診断、検査、治療

入院診療では、2～3日の短期入院での全身麻酔下手術及びレーザー処置を行なっている。アトピー性皮膚炎、蕁麻疹で自宅では治療が困難な症例、全身状態、栄養状態が悪い症例の改善、ブドウ球菌性熱傷様皮膚症候群、カポジ水痘様発疹症などの感染症を伴うアトピー性皮膚炎の管理、膿疱性乾癬などでの生物製剤の導入期、いちご状血管腫（乳児血管腫）のプロプラノール内服療法の導入期などについても、他診療科とも連携の上、入院診療を行っている。

3. 教育活動

当科は日本皮膚科学会教育施設の認定を受けている。同学会認定専門医3名が勤務している（2023年12月現在）。日本皮膚科学会として乾癬治療薬として認可された生物学的製剤について同学会が組織する認定委員会での審査を経て使用承認施設として認定を受けている（2010年より）。

小児皮膚科学の2つの柱である、アレルギー性疾患と遺伝性疾患に関しては、日本アレルギー学会認定教育施設（2009年6月より）に認定されている。同学会認定専門医1名が勤務している。また、日本人類遺伝学会および日本臨床遺伝学会による認定臨床遺伝専門医1名は、遺伝診療科との連携を図り、遺伝子診断前後の遺伝カウンセリングを行っている。

4. 研究活動

小児皮膚疾患の診断・治療・病態解明・発症予防などに係わる臨床研究を実施、計画しており、その一部を紹介する。研究成果については、学会、論文発表を行っている（研究業績参照）。

1) 肥厚性皮膚骨膜炎における genotype-phenotype correlation の検討

- (倫理審査委員会課題番号：374)
- 2) 乳児期角層バリア因子と母乳中因子の解析
(倫理審査委員会課題番号：2235)
- 3) 乾燥肌または軽度のアトピー性皮膚炎を有する小児を対象としたキッズスキンケア製品の
使用による安全性確認試験
(倫理審査委員会課題番号：2020-094)
- 4) in vivo 共焦点ラマン分光装置を用いた小児のアトピー性皮膚炎における特徴的な皮膚
構成成分の解析
(倫理審査委員会課題番号：2020-095)
- 5) 先天性魚鱗癬の診療実態に関する全国調査
(倫理審査委員会課題番号：2021-280)
- 6) 小児の脈管異常、色素性皮膚病変に対するレーザー治療の有効性と安全性の検討
(倫理審査委員会課題番号：2022-127)
- 7) 【中央一括審査】遺伝学的変化を要因とする皮膚疾患のマルチオミックス解析による病態
解明の研究
(倫理審査委員会課題番号：2023-027)
- 8) 乳児期角層バリア因子と母乳中因子の解析における追跡調査
(倫理審査委員会課題番号：2023-057)
- 9) 発汗異常を伴う稀少難治性疾患の病態解明データベース構築
(倫理審査委員会課題番号：2023-133)

3-7-5-3 消化管アレルギー科

消化管アレルギーは 1990 年代終わりから急増しているアレルギー疾患の 1 つである。年齢としては新生児期・乳児期での発症が多いが、学童や成人でもみられる。Food protein-induced enterocolitis syndrome では、原因となる食物（粉ミルクなど）を摂取してから、数時間後に嘔吐や血便、下痢などで発症する。消化管アレルギーの中には、他の症状がみられず体重増加不良だけの場合もあり適切な鑑別を要する。しかし通常のアレルギー検査（血液検査や皮膚プリック検査）では診断できないことが多く、さらに、炎症性消化管疾患である好酸球性胃腸炎も小児から成人にかけて患者数が増えており、近年その対応は社会的な課題となっている。アレルギーセンターでは、これまでアレルギー科で実施されていた消化管アレルギーの診療経験を活かして、消化管アレルギー科を併設し院内の他の診療科や全国の専門施設とともに診療を展開し、さらに新たな診断・治療法の開発においても中心的な役割を担っている。

消化管アレルギーの確定診断のためには、①原因食物の負荷試験による症状の有無を確認、②消化管組織検査による他消化管疾患の鑑別や消化管炎症の主体となる好酸球の増加の証明、を満たすことが必要となる。消化器症状や体重増加不良から消化管アレルギーを疑う場合、鑑別を十分行うことが重要になり、血液検査、便粘液細胞診・便検査、画像診断、消化器内視鏡検査を積極的に実施している。

また、全身状態が不安定、他の基礎疾患の治療が優先される場合、すぐに確定診断をつけることが困難な場合は、先に全身状態を改善させる治療を優先し観察している。このような場合、症状改善後や体重増加が確認できた段階で負荷試験の実施を考慮している。

新生児・乳児においては牛乳アレルギーを疑う場合は、高度加水分解乳やアミノ酸乳といった栄養剤を代替食として使用する。不足しがちな栄養素は適宜おぎない、症状が重症な場合は経口摂取を中止し、輸液による栄養管理・治療を行う。好酸球性胃腸炎で食物の関与が疑われる場合は、多種類の食物を除去することで胃腸の炎症を鎮静化し、その後原因食物の探索を入院負荷により実施している。

1. 診療活動

好酸球性消化管疾患は 1990 年代終わりから急増し、消化管の炎症から栄養吸収障害、成長発達の障害、長期にわたる日常生活の制限などを起こすことがあり、社会問題となっている。新生児期・乳児期に発症するものを、新生児 - 乳児食物蛋白誘発胃腸症（新生児 - 乳児消化管アレルギー）と呼ぶ。好酸球性胃腸炎は学童以上に多く見られる。

アレルギー科においては、2009 年から厚生労働省難治性疾患、好酸球性消化管疾患研究班を運営、全国で適切な治療ができるように診療ガイドラインを整備、情報発信を行ってきた。全国から患者紹介・患者相談をいただきながら、重症患者については当センターに来院、入院を促し、診療を行ってきた。アレルギーセンターでは、これまでの診療経験を活かして、消化管アレルギー科を併設し院内の他の診療科や全国の専門施設とともに診療を展開し、診断・治療法の開発を続けている。アレルギーセンター、消化器科、栄養管理部を中心とした連携のもと、質の高い医療の提供に尽力している。

1-1. 好酸球性消化管疾患の診断と治療

好酸球性消化管疾患は非即時型反応が主体の炎症を起こす。通常のアレルギー検査（血液検査や皮膚プリック検査）で診断することはできない。新生児 - 乳児食物蛋白誘発胃腸症のサブグループのひとつである、Food protein-induced enterocolitis syndrome では、原因となる食物を摂取してから、1～4 時間後に嘔吐や血便、下痢などで発症する。特に、他の症状がみられず体重増加不良のみの患者は最も診断が困難であり、成長及び発達障害の危険性が高い。確定診断のためには、①診断的治療によって、症状を寛解させ、その後原因食物の負荷試験による症状が出現を確認する、②消化管組織検査による他消化管疾患の鑑別や消化管炎症の主体となる好酸球の増加の証明、のいずれかを満たすことが必要となる。鑑別診断を十分行うことが重要であり、血液検査、便粘液細胞診・便検査、画像診断、消化器内視鏡検査を積極的に実施している。

また、全身状態が不安定、他の基礎疾患の治療が優先される場合、確定診断をつけることが患者の不利益を招くこともある。このため先に全身状態、栄養状態を改善させる治療を優先している。症状が改善し体重増加が確認できた段階で負荷試験の実施を行っている。新生児・乳児においては牛乳アレルギーを疑う場合は、高度加水分解乳やアミノ酸乳といった栄養剤を代替食として使用する。不足しがちな栄養素は適宜おぎない、症状が重症な場合は経口摂取を中止し、輸液による栄養管理・治療を行う。中心静脈栄養も積極的に実施している。

好酸球性胃腸炎で食物の関与が疑われる場合は、多種類の食物を除去することで胃腸の炎症を鎮静化し、その後原因食物の探索を入院負荷により実施している（厚生労働科学研究、多種食物除去とその後の原因食物同定療法）。

以上の診断治療方法によって、これまで 1,000 名の新生児 - 乳児消化管アレルギー、60 名の好酸球性胃腸炎、食道炎を改善させてきた。いずれも成長発達を遂げること、QOL を高めることに注力してきた。

当院で多く実施されている生体肝移植後に本症が発症することも少なくない。自然発症が 0.2%と言われているが、移植後は 6%が発症する。そのほとんどを食物除去療法によって症状寛解させることができ、長期的な QOL を保つことに成功している（Mitsui et al. J Allergy Clin Immunol Pract. 2017）。

好酸球増多症候群（Hyper eosinophilic syndromes）は、遺伝子の異常によって臓器障害とともに末梢血の好酸球が異常高値を示す疾患群である。これまでは、原因が不明で、病態のコントロールに苦慮していた疾患群であるが、原因遺伝子の特定と機能解析が進むことで、分子標的治療の開発の可能性といった進歩が予想され、患者の QoL と長期予後の改善が期待される。

1-2. 内視鏡検査数

当院消化器科の消化管の内視鏡検査数は年間 700 件以上と、国内の小児施設としては屈指の件数である。新生児から成人までの患者に対して、診断的・治療的内視鏡を行っている。好酸球性胃腸炎の診断に欠かせない検査であり、その重要性は年々増してきている。

2. 研究活動

研究所、好酸球性消化管疾患研究室、免疫アレルギー研究部、ゲノム研究部と共同で研究を行っている。

【研究の概要】

1. 好酸球性胃腸炎（non-EoE EGID）と好酸球性食道炎（EoE）

1-a 成育医療研究センターでの診療

引き続き、全国の大学病院、小児病院、基幹病院などから紹介を受けて診断治療を行った。特に 6 種食物除去にても寛解導入が不可能であった患者についても、Rainbow 食事療法によって全症例を寛解導入させることができた。栄養管理部と綿密な協力のもと、満足度の高い食生活を構築できた。認知行動療法による家族関係調整を同時に行う必要がある患者が多かったが、有効であり、良好な家族関係、不登校の消失を高率に達成することができた。

1-b 疾患サブグループの疾患名を国際的に整備

上記命名法を学術会議などで、発表を行い、周知させることができた。

1-c Minds 準拠診療ガイドラインの作成（5 年ごと改訂）

本研究期間（2023 年）の成果

厚労省政策研究班において、次回改訂への議論を重ねている。好酸球性胃腸炎、好酸球性食道炎と、冊子を分けることとし、それぞれに作成委員を選出した。現在 Minds 準拠ガイドライン作成方法に則って、作成を行っている。前回のものからは大幅に改定する。

1-d 疫学

全国調査の結果、特に小児に患者が多く、その 75%が持続型であるとの発表から、製薬企業 2 社の臨床研究が行われた。また、東京大学において、新薬の開発が企図されることになった。

1-e 病態の解明、血清と消化管組織の Precision medicine

好酸球性胃腸炎の中でも、胃に炎症が集中している好酸球性胃腸炎 (EoG) について、発現マイクロアレイ解析を行った。①EoG のすべての患者が炎症期において、均一の mRNA 発現パターンを示した (比較対照はクローン病と非炎症対照患者)。②すべてのサイトカインのうち、IL13 のみが、有意な上昇を示していた。③食物除去治療において炎症の特徴が消失した (世界初、楠田研究員)。このことにより、原因食物が、炎症を起こす主体である可能性が高まった。④また、治療後も発現が高値を持続していた遺伝子グループが、Cell cycle 関連とリモデリング (繊維化) 関連であった。これを消化管組織像において、観察したところ、胃の単層円柱上皮において、細胞核の幼若さと粘液産生の低さが発見された。最終的に、胃粘膜で Cell cycle と繊維化について組織染色を行って、論文化を行うことにしている。

1-f 新規治療法開発 (Rainbow 食事療法)

これまでの結果を日本アレルギー学会英文誌に報告し (Nagashima, Nomura et al, Allergol Int, 2023) プレスリリース、新聞、WEB ページなどで紹介された。ヨーロッパアレルギー学会 (ハンブルグ、ドイツ、EAACI2023) のシンポジストに選出され、Rainbow 食事療法の理論と効果について発表を行い、満場の賛同を得ることができた。

新たに当センターにおいて 10 名程度に実施し、寛解導入、寛解維持を行うことができた。特に、“6 種食物除去”の効果がないとのことで紹介入院となった重症患者も全例、寛解導入することができた。現時点で、世界で最も効果の高い食事療法であると考えられた。特に、壊死性腸炎後、短腸症候群、腸内腔の狭窄、栄養障害などを起こした、失敗の許されない患者においては、このすぐれた効果の意義が感じられた。

2. 新生児 - 乳児食物蛋白誘発胃腸炎症 (慢性型)

2-a 成育医療研究センター病院での診療

引き続き、アレルギーセンターを中心に、内視鏡検査や炎症性腸疾患をはじめとする鑑別が必要な場合消化器科の援助をいただき、NICU、PICU、小児外科、総合診療部、移植外科、放射線診断部、病理診断部、栄養科、の強力なチームを形成して診療を行い、新たに 80 名程度の診断治療を成功させた。PICU を経由して入院となった最重症患者の離乳食は、Rainbow 食事療法を応用した、Rainbow 離乳食とでも言うべき内容であり、全例が症状、組

組織学的寛解維持を行うことができた。

また、生体肝移植後の患者は、5%の高率で本症を発症する(Mitsui, Shoda, Nomura et al. J Allergy Clin Immunol Pract 2017 他多数)。生命に関わる病態の治療のために、肝移植を成功させたのちに、更に消化管アレルギーによって消化管壊死を起こすことがあれば、生体肝移植を受ける患者にとって大きな不安材料となり、移植事業自体の信頼を損なう可能性がある。アレルギーセンターは移植外科から紹介を受けて、患者、保護者の心理的負担、生活上の負担が起きないように、細心の注意を払って診療を行い、全症例の寛解維持を続けることができた。

2-b 疾患サブグループを国際的に整備する

世界から認められる疾患サブグループを制定するために、疾患コホート研究を立ち上げることとした。特に負荷試験において、正確に診断された患者を対象とし、NICHOLAS コホート（マルチセンター、国内の16施設の小児病院、大学小児科を含む）を開始した。これによって、日本で正しく診断治療した情報が世界に届けられるよう企図している。結果が出て論文公表がなされたら、この分野の国際コンソーシアム（野村もメンバーの一人、Anna Nowak 教授代表）に諮り、英語名称をrefineして、世界での認知を広めていく。

2-c Minds 準拠診療ガイドライン作成

本研究期間（2023-24年）の成果

上記ガイドラインの改訂のために、大幅な改訂作業を行っている。

2-d 疫学

全国調査の論文を公開した（Suzuki H, , Nomura I. Allergol. Int）。発症率は0.20%であり、嘔吐と血便を同時に見るクラスター1だけは、新生児期に発症が集中しており、特に注意を要することがわかった。また、牛乳、大豆、米、鶏卵などの原因食物順位も明らかになった。プレスリリース、各種新聞紙上でも紹介された。本論文においても、chronic FPIES、FPIAPなどのサブグループ病名に当てはまらない患者が半数以上であった。

3. Acute FPIES (Acute food-protein-induced enterocolitis syndrome)

3-d 救急アクションプランの作成

論文は受理された（Kram, Sato, Yamamoto-Hanada, , Nomura, WAO journal2023）。アクションプランは全国の患者が使用できるように公開された。

<https://www.ncchd.go.jp/press/2023/FPIES.pdf> プレスリリースも行った。

<https://www.ncchd.go.jp/press/2023/0510.html>

4. 遺伝子変異による重症アレルギー疾患

本期間中に4名について、世界で初めての遺伝子異常が発見された。①重度の湿疹と好酸球性胃腸炎をもつ男児、STAT6の機能亢進遺伝子異常が発見され（要部長、柳研究員）、内

視鏡にて異常なリンパ濾胞形成が判明（新井診療部長、竹内医師）、細胞遺伝学的研究、動物実験（森田室長、松本部長、高田部長、五十嵐研究員他）にて STAT6 の機能異常が解明された。野村は主治医として児の治療と血清サイトカイン測定、消化管粘膜マイクロアレイ解析を行い、全身の各種症状が STAT6 に関して起きていることを明らかにした。結果は J Allergy Clin Immunol にアクセプトされた。②外科で数回の救命的回復術が行われた男児において、食事療法を行い、重症発作の防止を行った。IRUD-P にて遺伝子 KIF26A の異常が発見された。本遺伝子の発見者である研究者と連絡をとり、世界初の発見であり、今後機能解析を行う予定である。③重度の皮膚炎、栄養障害の男児において、やはり我々の食事療法によって救命、神経発達症の防止を行なった（野村、佐藤）。児は Netherton syndrome と診断され（吉田診療部長）、IRUD-P にて（要部長、柳研究員）世界初の形の deletion が起きていることが証明された。現在論文投稿中である。

【医療・社会への貢献】

好酸球性消化管疾患の治療、全国での適切な治療が行える環境を整備

これまでの研究成果

全国で適切な診療が行えるよう、診断治療指針、診療ガイドラインの一般 WEB 公開を行ってきた。

本期間の研究成果

1. Rainbow クッキング WEB ページ レシピ 80 に増加 厚労省研究班参加施設の患者にのみ公開

- ・ 若手研究者の育成

本年の研究成果

1 名の論文博士取得希望者、1 名の大学院進学希望者、2 名のポスドクの研究指導を行った。

- ・ 若手医師の育成

本年の研究成果

アレルギーセンターの週 2 回の病棟カンファレンス、週 2 回の野村外来、常時 5－15 名存在する入院患者についてフェロー先生方と連日数名の患者診断治療について連絡を受け、指導を続けた。特に、好酸球性消化管疾患の診断治療方法、組織学的評価方法、体液管理、栄養管理方法、患者家庭の関係性の改善、行動科学を用いた摂食障害の解除、認知行動療法を用いた、不登校の解除について、入念に指導を行った。

月 1 回のアレルギーセンター/消化器科合同カンファレンスにおいて、入院患者について、同上の指導を行った。

全国の施設とメールや電話、WEB 会議にて診療の相談を行った。全国の施設から患者紹介を受けて、正しく治療を行った。

・ 国際連携と情報発信

1. アメリカ、アンナ・ノヴァク教授（ニューヨーク、マウントサイナイ病院）が代表を務める国際 FPIES Association：野村はメンバーとして Acute FPIES の国際ガイドライン制定に参加中。
2. アメリカ、マーク・ローゼンバーグ教授（Cincinnati Children's Hospital , Cincinnati, Ohio）らが代表を務める Consortium of Eosinophilic Gastrointestinal Disease Researchers：野村はメンバーとして参画。

3-7-5-4 鼻アレルギー科

わが国を含む先進諸国では、約半世紀前からアレルギー疾患が急増し、今や国民の半数近くが何らかのアレルギー疾患を経験する時代になっている。なかでも有症率が高いのは花粉症をはじめとしたアレルギー性鼻結膜炎であり、近年では花粉症発症年齢の低下が叫ばれている。成育コホート研究においても9歳時点で半数以上の子どもで、ダニやスギなどの吸入アレルゲンに対して特異的IgEを認め、約3割で鼻炎症状を有することが明らかとなった。アレルギーセンターでは、舌下免疫療法をはじめとしたアレルギー性鼻炎に対する専門診療を積極的に実施するとともに、難治性喘鳴の原因として知られるILO（Induced laryngeal obstruction）（vocal cord dysfunctionが多い）や、重症喘息にしばしば合併する副鼻腔炎などの鑑別疾患、さらに小児でもときどきみかけられる口腔アレルギーの診断や治療などに対して、特に胃食道逆流などの関与について検討し、薬物治療および非薬物治療の有効性を検証している。

2歳以下のアデノイド切除など術後の気道管理が必須である患者、気管カニューレ抜去困難などで治療方法を模索する患者が全国から来院しており、年々増加傾向にある。他診療科と密接に連携しながら、低侵襲かつ積極的な治療を行っている。嚥下障害に対する嚥下評価チーム外来では診断が困難な小児嚥下障害の評価・カンファレンスに専門家を交えて行っている。

1. 診療活動

- ✓ 気管切開は33件施行しており、気管切開後のカニューレの長さや肉芽などの指導・管理を行っている。
- ✓ 声門下狭窄ではバルーンによる気管拡張術や肋軟骨を用いた喉頭気管狭窄症手術を行っている。治療を行う前に全身麻酔下に内視鏡検査を行って評価するが、同時に薬物鎮静下内視鏡検査（Drug induced sleep endoscopy: DISE）を開始し、睡眠時の咽頭や鼻腔の狭窄を評価している。
- ✓ 嚥下障害では言語聴覚士の介入のもと、作業療法士も共同して嚥下チーム外来を行い、姿勢保持による経口摂取の可能性を検討している。しかし、誤嚥が著しい場合は喉頭気管分離術を行い、肺炎の予防、経口摂取の可能性、さらに在宅医療への移行に一定の成果をあげている。

- ✓ 慢性的な鼻汁の原因の一つである線毛運動障害の診断および原因精査のため、IRUD-Pにて遺伝子検査を行い、確定診断を得ることができている。今年度は2件の検査を行った。
- ✓ 睡眠時無呼吸に対してアデノイド切除 134 件、扁桃摘出術は 280 件行っており、いずれも術後鼻呼吸が改善している。手術前に DISE を開始することにより上気道の総合的な評価を行い、周術期管理のリスク軽減、外科治療適応の適正についての評価を行っている。

・ 外来：

再診・初診：月（午前・午後）、水（午前・午後）、金（午前）

不定期に金曜日午後、嚥下チーム外来

難聴遺伝子外来（担当 松永）：月 1 回月曜日または水曜日 午後

嚥下チーム外来（担当 耳鼻咽喉科・総合診療科、放射線科、歯科口腔外科、リハビリ科）

<アレルギーセンター評価支援室>

2020年度より、以下の4評価支援室が設置されている。

3-7-5-5 視機能評価支援室

室長 仁科幸子 眼科診療部長（併任）

アレルギー性結膜疾患ガイドライン第3版（2021.8.10）に沿って小児に対する副腎皮質ステロイド及び免疫抑制薬の使用を科学的根拠に基づき実践した。アレルギー性結膜炎、アトピー性角結膜炎、春季カタルに伴う角膜障害やステロイドによる緑内障の検出を支援した。難治性緑内障に対する管理と治療法を検討した。

乳幼児期から選択視法を用いて視機能障害の有無を評価した。フォトレフラクション法による屈折異常と斜視のスクリーニングの精度の検証を継続した。視覚障害をきたした小児に対する支援（ロービジョンケア）を、視覚特別支援学校と連携して実施した。

3-7-5-6 免疫機能評価支援室

室長 森田英明 アレルギー研究室室長（併任）

重症のアレルギー疾患患者や、遺伝子異常の合併を伴う可能性のある非典型例において、血清中サイトカインや免疫細胞組成の検討等の免疫学的機能の評価を通じて、診断・診療支援を行っている。これまでに高 IgE 血症、好酸球性胃腸炎と重症アトピー性皮膚炎を合併した症例、重症アトピー性皮膚炎と自己免疫性甲状腺疾患を合併した症例をはじめとした難

治性アレルギー疾患患者の免疫学的評価を通じて、診断・治療に資する支援を行なっている。

3-7-5-7 遺伝情報評価支援室

室長 要 匡 ゲノム医療研究部部長（併任）

標準的治療により寛解・治癒しない重症難治性アレルギー患者や、免疫不全、自己免疫疾患を併発する症例の中には遺伝子異常を伴う場合があり、免疫機能評価支援室とともに原因検索、診療支援を行っている。

3-7-5-8 行動機能評価支援室

室長 山本貴和子 総合アレルギー科診療部長（併任）

診療ガイドラインの普及や薬物療法の進歩により多くのアレルギー疾患において良好な管理が可能となったが、標準的治療によってもコントロール出来ない難治性アレルギー疾患患者が現在も存在し、心理的な要因が関与していることも考えられる。アレルギーセンターでは、重症アトピー性皮膚炎に生じる習慣性掻爬行動の応用行動分析による消去や、難治性喘息、心因性喘息、声帯機能不全などへの行動療法（系統的脱感作）等を含めた、難治性アレルギー疾患患者に対する詳細な行動機能解析による心因的病態の評価に基づく、心理的アプローチや長期入院治療を実施している。

3-7-6 小児がんセンター

国立成育医療研究センターは、国から小児がん拠点病院に指定され、さらに2014年には全国15の拠点病院を牽引する小児がん中央機関に、2019年にはがんゲノム医療拠点病院にも指定された。小児がんセンターは、それらの実務部門として機能している。日本最大の小児がん診療施設として、わが国における小児がん診療のモデルとなるべく、全ての小児がん患者に対して世界標準かつ優しく温かい医療を提供している。また、臨床研究の推進、新規治療の開発、長期フォローアップ体制の確立などを通じて、わが国の小児がん診療をリードすることを目指している。

3-7-6-1 血液腫瘍科

3-7-6-2 脳神経腫瘍科

3-7-6-3 移植・細胞治療科

白血病やリンパ腫、脳腫瘍、神経芽腫・網膜芽細胞腫・肝腫瘍などの固形腫瘍等、小児期に発症するあらゆる腫瘍性疾患に対応し、2023年の年間診患者数は 113例であった（表1）。日本小児がん研究グループ（JCCG）の多施設共同臨床試験や新規薬剤の治験に参画し、新しい治療の開発にも積極的に取り組んでいる。

造血細胞移植については、日本造血・免疫細胞療学会による移植認定施設（カテゴリー1）として、悪性疾患だけでなく、免疫不全症などの非悪性疾患に対する造血細胞移植を積極的に行っている。2023年は同種移植 21件、自家移植 10件を実施した。キメラ抗原受容体（CAR）T細胞療法の提供可能施設に認定されており、2023年は2件のCAR-T治療を実施した（表2）。

2023年は8名の専門修練医（フェロー）、13名の後期研修医、さらに3名の学外研修医に対して、研修を行った。

表 1. 血液腫瘍科、固形腫瘍科、脳神経腫瘍科、移植・細胞治療科診療実績（疾患別）

	2021（令和3年）			2022（令和4年）			2023（令和5年）		
	初発	再発	合計	初発	再発	合計	初発	再発	合計
造血器腫瘍	56	2	58	42	4	46	36	5	41
急性リンパ性白血病	14	1	15	19	2	21	10	2	12
急性骨髄性白血病	11	0	11	2	1	3	9	1	10
まれな白血病	1	0	1	0	0	0	1	0	1
慢性骨髄性白血病	0	0	0	1	0	1	1	0	1
骨髄異形成症候群/MPD	2	0	2	0	0	0	1	0	1
非ホジキンリンパ腫	8	1	9	4	0	4	3	1	4
ホジキンリンパ腫	2	0	2	3	0	3	1	0	1
その他のリンパ増殖性疾患	1	0	1	0	0	0	1	0	1
血球貪食性リンパ組織球症	2	0	2	2	0	2	3	0	3
ランゲルハンス細胞組織球症	6	0	6	5	1	6	4	1	5
その他の組織球症	1	0	1	3	0	3	1	0	1
その他の造血器腫瘍	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Down 症一過性骨髄異常症	8	0	8	3	0	3	1	0	1
固形腫瘍	90	2	92	73	0	73	69	3	72
神経芽腫	6	1	7	9	0	9	10	0	10
網膜芽腫	11	0	11	8	0	8	7	0	7
腎腫瘍	1	0	1	4	0	4	3	0	3
肝腫瘍	10	1	11	11	0	11	7	1	8
骨腫瘍	1	0	1	0	0	0	0	0	0
軟部腫瘍	4	0	4	4	0	4	7	1	8
胚細胞腫瘍（頭蓋内を除く）	12	0	12	8	0	8	10	0	10
脳脊髄腫瘍	43	0	43	26	0	26	22	1	23
その他の固形腫瘍	2	0	2	3	0	3	3	0	3

免疫不全症（移植症例）	9	－	9	4	－	4	5	－	5
代謝疾患（移植症例）	2	－	2	3	－	3	4	－	4

表 2. 造血細胞移植および CAR-T 細胞治療実績

	2021（令和 3 年）	2022（令和 4 年）	2023（令和 5 年）
同種造血細胞移植	21 件	22 件	21 件
非血縁者間造血細胞移植	11	8	11
血縁者間造血細胞移植	9	13	7
非血縁さい帯血移植	1	1	3
自家造血細胞移植	9 件	9 件	10 件
CAR-T 細胞治療	4 件	3 件	2 件

3-7-6-4 腫瘍外科

日本で唯一の「小児がん手術に特化した」外科系診療科で、固形がん手術件数（2023 年）は年間 62（切除術 42、その他（CV 挿入単独を除く）20）と全国トップクラスである。豊富な経験と知識に基づいた最新かつ質の高い外科治療を提供しています。

3-7-6-5 血液内科

血友病などの止血・血栓性疾患、赤血球疾患、原発性免疫不全症など非腫瘍性血液疾患の専門診療に携わっている（表 3）。新規薬剤の治験や遺伝子治療など、新規治療開発にも貢献している。また、先天性血小板減少症の多施設共同研究の中心施設としての役割も担っている。

表 3. 血液内科診療実績

疾患名	血液内科新規患者数（年）				
	2019	2020	2021	2022	2023
止血・血栓性疾患					
免疫性血小板減少性紫斑病	12	19	4	14	13
家族性血小板減少症	0	8	10	0	1
血小板機能異常症	2	7	5	4	0
血友病	4	5	4	2	2
von Willebrand 病	3	1	1	2	2
ループスアンチコアグラント	2	0	1	2	0
上記以外の凝固因子異常症	4	5	2	0	0
PC, PS, AT 欠乏症（血栓傾向）	4	2	1	3	1
播種性血管内凝固症候群	6	0	0	0	0

溶血性尿毒症症候群・血栓性血小板減少性紫斑病	1	1	2	0	0
IgA 血管炎（アレルギー性紫斑病）	2	1	1	0	0
上記以外の血管異常	6	1	0	0	0
原因不明の出血傾向	3	3	0	0	0
PC, PS, AT 以外の血栓・塞栓症	8	9	1	0	1
赤血球疾患					
再生不良性貧血	2	3	2	2	4
Fanconi 貧血	1	0	1	0	1
赤芽球癭	1	4	1	2	1
汎血球減少症(免疫不全、劇症肝炎合併)	4	0	1	0	1
免疫性溶血性貧血	1	2	0	2	0
遺伝性球状赤血球症	1	2	3	2	1
ヘモグロビン異常症（サラセミアなど）	1	4	5	6	4
上記以外の溶血性貧血	5	1	1	0	1
重症鉄欠乏性貧血	2	0	1	0	0
栄養性貧血	0	1	0	2	0
上記以外の貧血	2	4	0	0	0
白血球疾患など					
慢性好中球減少症	7	2	1	4	4
TAM（ダウン症合併）	2	1	0	3	1
血球貪食症候群	6	0	0	0	0
慢性活動性 EB ウイルス感染症	0	0	1	0	1
リンパ管腫症	1	0	0	0	0
その他	8	5	1	0	1
合計	101	91	50	50	40

3-7-6-6 がん緩和ケア科

診断時から多面的かつ包括的なアセスメントに基づき患者と家族の QOL の向上を目指した緩和医療を提供している。多職種により構成される緩和ケアチームを設置し、包括的な緩和ケアが提供できる体制を整備している。

3-7-6-7 長期フォローアップ科

小児がん経験者に生じる問題を理解し、適切に対応するために、経験豊富な医師および看

看護師による長期フォローアップ外来を設置して、成人医療施設との移行期連携を行っている。また、小児がん経験者の長期フォローアップ研究にも取り組んでいる。

3-7-6-8 小児がん免疫診断科

病理診断部、小児血液・腫瘍研究部/衛生検査センター（研究所）と協力して JCCG 等の小児がん全国多施設共同臨床研究の中央分子診断（細胞マーカー診断など）を担い（表 4）、日本国内で発症する白血病のほぼ全症例を網羅するなど、わが国の小児がん診療の質の向上に貢献している。

表 4. 小児がん免疫診断科造血器腫瘍マーカー診断実績

	2020	2021	2022	2023
ALL	474	510	494	532
リンパ腫	62	67	67	53
AML/MDS	160	188	190	141
CML	13	13	19	17
TAM	57	64	55	43
その他	154	119	109	128
新規合計	920	961	934	914
再発 ALL	74	76	78	81
再発リンパ腫	9	7	6	1
再発 AML	10	21	22	31
再発その他	6	2	3	3
再発合計	99	106	109	116
微小残存病変	674	1,079	783	1,059
合計	1,693	2,146	1,826	2,089

3-7-6-9 小児がんゲノム診療科

がんゲノム診療を統括する部署として、小児のがんに豊富な診断経験を持つ専門家でチームを構成し、小児がんに特化したエキスパートパネル（EP）や遺伝カウンセリングの相談体制の整備を進めている。2023 年は 23 件（院内 7 件、院外 16 件）の EP を開催した（表 5）。

表 5. エクスパートパネル（EP）実施件数

	2021（令和 3 年）	2022（令和 4 年）	2023（令和 5 年）
院内	21 件	11 件	7 件

院外	15 件	21 件	16 件
合計	36 件	32 件	23 件

3-7-6-10 小児がんデータ管理科

JCCG 固形腫瘍分科会が実施する臨床研究のデータ管理や日本小児血液・がん学会の固形腫瘍登録の実務を行って、国内における実態の解明や、それに基づく各施設での診療の向上のための提言を行うほか、小児がん経験者の長期フォローアップ体制の構築にも取り組んでいる。

3-7-7 小児外科系専門診療部

3-7-7-1 外科

2023 年の手術総数は 626 件であり、前年（674 件）よりも減少した。新生児手術数も 51 件から 42 件に減少しており、少子化の影響を反映している可能性がある。内訳を見てみると、全国的にも有数の手術件数を持つ先天性横隔膜ヘルニアに対する根治術が 12 件、嚢胞性肺疾患等に対する肺切除術が 6 件と、例年と同様の数をこなすことができた。また、噴門形成・胃瘻造設術を 21 件、虫垂切除術を 29 件、直腸肛門奇形手術を 4 件施行した。胆道閉鎖症は 1 件にとどまったが、胆道拡張症とヒルシュスプルング病根治術それぞれ 4 件施行した。リンパ管腫硬化療法 11 件、腫瘍生検を含む悪性腫瘍に対する手術を 58 件施行した。当科は救急疾患に備えていつでも手術対応ができる体制を組んでおり、多くの救急疾患に対応している。また胎児診療科や新生児科とチームを組んで新生児外科疾患にも積極的に取り組んでおり、先述した 42 件の新生児手術数は全国でも有数である。また、医学生や外科専攻医の研修にも積極的に取り組み、医学生は東京大学や慶応義塾大学他希望者を多数受け入れ、日本外科学会専門研修プログラムを有する基幹病院 11 病院と連携して毎年多くの外科専攻医を受け入れている。

3-7-7-2 脳神経外科

1. 臨床

脳神経外科では、脳腫瘍、脊髄腫瘍、二分脊椎・脂肪腫・頭蓋縫合早期癒合症等の先天奇形、水頭症、もやもや病・脳動静脈奇形等の血管障害、てんかん等の多岐に渡る疾患に対し、個々の病態に応じた 300 件を超える手術加療を行った。

2. 研究

脳神経外科では、主に臨床研究を中心とし、学会での発表と英文での原著論文の発表を行

った。

3-7-7-3 心臓血管外科

1. 概要、特色

1.1 概要

心臓血管外科では、先天性心疾患および後天性小児心疾患の外科治療を行っています。

1.2 特色

心臓血管外科では循環器科と協力して新生児から成人に至るまでのあらゆる先天性心疾患及び後天性小児心疾患の治療を行い、その中で主に手術治療を担当しています。心疾患、年齢、合併症などを考慮し、それぞれの患者に最も適した手術を行うよう心がけています。先天性心疾患の診療には、診断、薬物治療やカテーテル治療、手術、術後管理、その後の外来での長期管理などさまざまなステップがあります。診療の各ステップを専門家が行い、かつ治療全体を齟齬なくスムーズに進めるチーム医療が重要と考えています。心臓手術を必要とする患者さんは、胎児診療科-新生児科-循環器科-心臓血管外科-麻酔科-集中治療科というチーム医療の流れのどこかに乗って治療を受けることになります。対象となる患者さんは、胎児や未熟児から成人まで幅広い年齢層にわたっています。染色体異常や症候群など、心臓以外の複数の臓器に問題を抱える患者さんも多く、このような患者さんは、幅広い集学的医療を必要としますのでその他の診療科とも協力し、診療に当たっています。

2. 診療活動

常勤医師4名で年間 約100例の手術を行っています。手術成績の向上に努めると共に、チーム医療体制の強化と若手医師の教育に力を入れています。

2.1 入院診療

入院診療の中心は手術治療です。火曜、木曜を定時手術日とし、重症例1例、または軽症例2例の手術を行っています。緊急手術に関しては、麻酔科や手術室の協力のもと、曜日を問わず随時施行しています。

2.2 手術症例概要 (2023. 1～2023. 12)

2.2.1 開心術手術総数 65例

内容：心臓移植術 2例、補助人工心臓装着術 1例、心房中隔欠損症閉鎖術 5例、心室中隔欠損閉鎖術 11例、ファロー四徴症手術 10例、Rastelli手術 4例、動脈スイッチ手術 2例、完全型房室中隔欠損症手術 4例、総肺静脈還流異常症手術 2例、大動脈縮窄複合手術 2例、Glenn手術 5例、Fontan手術 9例、弁形成・弁置換 10例など

2.2.2 非開心術手術総数 36例

内容：動脈管結紮術 6例、肺動脈絞扼術 9例、ペースメーカー移植術 6例、ECMO 6例など

2.3 外来診療

外来は毎週水曜の午前に診療を行っています。毎月第3金曜（休日等で診療ができない場合は翌週の金曜）は特殊外来としてペースメーカー外来を行っています。

3. 施設認定

3.1 心臓血管外科専門医認定機構認定施設

当施設は、日本胸部外科学会、日本心臓血管外科学会、日本血管外科学会の3学会で構成される心臓血管外科専門医認定機構の認定修練施設の認定を受けています。心臓血管外科専門医の認定申請に必要な修練をカリキュラムに沿って行っています。

3.2 小児用補助人工心臓実施施設

当施設は、補助人工心臓治療関連学会協議会の小児用補助人工心臓実施施設・小児補助人工心臓装着手術実施医認定の実施施設です。

3.3 小児心臓移植実施施設（11歳未満）

当施設は、医師のこれまでの経験、補助人工心臓の装着手術などの手術実績、その他さまざまな項目で評価され、小児の心臓移植を行える基準を満たす施設として認定されています。

3-7-7-4 整形外科

1. 概要

小児の四肢先天異常、発育障害による四肢の変形、外傷後遺症に対する変形、斜頸の治療を行っています。股関節二次検診外来、骨軟部腫瘍外来、内反足外来、装具外来を設置しています。救急診療科と協力して救急対応を行い、外傷や化膿性関節炎の緊急手術も増えています。

2. 診療活動及び研究活動

2.1 スタッフの構成

統括部長1名、診療部長2名、医員5名は整形外科専門医で、ほかにレジデント1名の9名で診療しています。部長と医員の8名のうち4名は上肢の外傷や先天異常、末梢神経障害を中心に、他の4名は先天性内反足などの下肢の変形矯正や脚延長、斜頸を中心に診療しています。それぞれ日本整形外科学会、日本小児整形外科学会、日本手外科学会、日本股関節学会、日本四肢再建・創外固定学会、日本肘関節学会などで活躍しています。

2.2 外来

初診外来は火・水曜日に交替で行っています。医療連携室を経由して対応を急ぐ症例も受け入れています。また、骨軟部腫瘍外来を第1、3火曜日に設けており慶應義塾大学整形外科の医師が担当しています。毎週火曜日には股関節二次検診外来を行っています。

2.3 入院および手術

常時 約 20 名の入院患者を担当しています。短期入院で手術治療を行う上肢の症例が多いですが、牽引治療や骨延長器装着患者では入院期間が比較的長期に及びます。手術は上肢の先天異常や四肢の変形矯正が中心です。通常火・水曜日に予定手術が組まれています。

《2023 年手術件数》 605 件

- 上肢 357：先天異常 169 [母指多指症（三指節母指を含む） 32、母指形成不全 31、裂

- 手・指列誘導障害 19、合趾症 19、先天性絞扼輪症候群 11、先天性多発性関節拘縮症（握り母指を含む）13、内反手 5、先天性橈尺骨癒合症 22、その他 17]、肘周辺骨折 65、その他の上肢手術 123
- 下肢 165：先天異常 36[多趾症 13、その他 23]、内反足・足部変形 35、発育性障害 3、脚長不等・変形（骨端発育成長抑制による再建）26、脚長不等・変形（脚延長・血管柄付き費骨移植等）12、脚長不等・変形（その他）4、股関節疾患 15、外傷・感染症 34]
- 骨内異物除去 48
- 筋性斜頸 4
- 腫瘍 31：多発性外骨腫症（変形矯正含む）22、その他 9

3-7-7-5 泌尿器科

1. 活動状況

2023 年は、長谷川雄一（日本泌尿器科学会認定指導医・専門医、日本小児泌尿器科学会認定医）と大塚崇史（日本泌尿器科学会専門医）のスタッフ 2 人と後期レジデントである忽滑谷悠仁先生の 3 人体制でスタートした。スタッフは 3 月末に大塚崇史先生が退任し、4 月から石川美夢先生が着任した。後期レジデントは、9 月末に忽滑谷悠仁先生が退任し、10 月より岡本真理愛先生が着任した。後期レジデントは、東京慈恵会医科大学泌尿器科学教室の後期レジデントプログラムと連携し、小児泌尿器科研修を目的に着任した。

泌尿器科手術の総症例数は 300 件であった。Covid-19 による手術延期および感冒やウイルス感染などにより手術を延期した症例が、手術予定患者数の約 15%あった。手術の内訳は、例年通り停留精巣固定術、尿道下裂形成術の順に多かった。

3-7-7-6 リハビリテーション科

3-7-7-7 発達評価支援室

1. 概要

リハビリテーション科では、発達支援、社会参加支援を必要とする多様な疾患、障害を抱えた小児および廃用予防などの身体的ケアを必要とする妊産婦らを対象として、院内の様々な診療科からの依頼を受けて診療にあたっています。必要に応じて理学療法、作業療法、言語聴覚療法を処方し、療法士らによる評価、訓練を行います。また在宅環境調整や復学支援などの社会参加支援を進めるためには、院内多職種および地域の医療・福祉・教育機関との連携を大切にしています。

発達評価支援室では、基礎疾患に応じた発達評価、治療前後・就学前後の問題などを客観的に評価することを目的に、各種神経心理学的検査、知能検査、言語評価、運動・感覚機能評価を実施し、結果説明、個別相談、地域連携への対応をしています。

小児リハビリテーション医療では、障害を必ずしも治癒、正常化させるのではなく、先天のおよび後天的疾患により生じた障害に対して早期発見、早期療育からライフステージに順じた社会参加ができるように成長発達を促し、周りの環境を整えることが重要です。また、特定の疾患、障害に対しては、検査や計測による評価を行い、診断治療方針に役立てています。さらに、移動能力をはじめとする日常生活動作が困難な場合、公的支援を受けるための書類作成（身体障害者手帳など）や成長発達に合わせた補装具（義手、下肢装具、座位保持装置、車椅子など）の処方・作製も行っています。

全科疾患における障害を対象としますが、特徴的なものとして、NICU でのハイリスク児の早期発達支援、フォローアップ、PICU 全例への早期離床訓練、医療的ケア児の在宅移行支援、小児がんセンター全例へのスクリーニングと長期治療に伴う廃用予防、緩和ケア、長期的社会参加支援、肝移植術前後の発達評価、発達支援、長期的社会参加支援、先天性上肢形成不全児の発達支援と義手訓練、脳損傷後の高次脳機能障害や発達障害児の就学、社会参加支援、発達性協調運動障害児の評価と生活支援、器質的病変、中枢神経系病変、発達特性や治療の影響に伴う摂食・嚥下障害の評価とリハビリテーション治療、人工内耳の術前評価、マッピング、障害児の体力評価・パラスポーツ導入、パラアスリートのメディカルチェック、パラスポーツ体験イベントの開催などに力を入れています。

2. 診療活動

リハビリテーション科診療体制

診療部長：上出杏里、理学療法士 8 名、作業療法士 5 名、言語聴覚士 3 名、臨床心理士 2 名

発達評価支援室診療体制

室長：上出杏里（併）、他小児科医師 2 名（併）

臨床心理士（併）、理学療法士（併）、作業療法士（併）、言語聴覚士（併）

施設基準として、脳血管リハ、運動器リハ、呼吸器リハ、がんリハ、障害児（者）リハの施設基準認定を受けています。

パラスポーツ体験イベント開催

令和 5 年度第 59 回世田谷区民スポーツまつり（2023 年 10 月 15 日 10 時～12 時開催）

からだ知る知るロード「100 cm 走&落としちゃい走」 参加者 106 名

ボッチャ成育リハカップ 2023（2023 年 11 月 28 日開催） 入院患児 12 名

リハビリテーション科療法別実績（2022. 1～12）

療法区分	理学療法		作業療法		言語聴覚療法	
入外区分	入院	外来	入院	外来	入院	外来
実施件数	8, 522	747	3, 868	235	1, 690	1, 240
総実施件数	9, 269		4, 103		2, 930	

発達評価支援室実施件数（2023.1～12）

入外区分	入院	外来
実施件数	94	602
総実施件数	696	

3-7-7-8 形成外科

1. 概要

形成外科は、体表とそれに近い組織の先天性・後天性の欠損や変形に対して、形態的・機能的再建を行い、患者の社会復帰を助ける外科の一分野である。当センター形成外科が継続して掲げてきた目標は、①患児の身体・精神の成長・発達を考慮した治療を行うこと、②低侵襲治療を推進すること、③標準的治療体系が無い疾患について上記の基準に従った体系の確立を推進することである。

特に重点をおいている疾患群は、小耳症を含む耳介先天異常、口唇口蓋裂、変形性斜頭症・短頭症、頭蓋縫合早期癒合症、第一第二鰓弓症候群や巨舌症を含む頭蓋顎顔面異常などである。これらについて、院内外の専門科とチーム医療を行っている。

2. 診療スタッフ

診療部長：彦坂 信：2012 年 5 月に医員として赴任し、2021 年 4 月から診療部長に赴任した。日本専門医機構形成外科専門医、形成外科分野指導医、小児形成外科分野指導医、日本頭蓋顎顔面外科学会専門医、口蓋裂学会認定師。

医員：北畑伶奈：2022 年 4 月から 2023 年 3 月まで赴任。日本専門医機構形成外科専門医。

鎌田将史：2023 年 4 月から赴任。日本専門医機構形成外科専門医。

金子 剛（非常勤）：2002 年 3 月の当センター開院より医長として赴任し、2021 年 4 月から現職。日本専門医機構形成外科専門医、形成外科分野指導医、小児形成外科分野指導医、口蓋裂学会認定師。

高松亜子（非常勤）：2010 年 12 月から赴任し、当院の赤ちゃんのあたまの形外来の立ち上げ・運営に携わっている。日本専門医機構形成外科専門医。

レジデント：内田真由佳：2022 年 4 月から 2023 年 3 月まで赴任。

赤堀 真：2023 年 4 月から 2024 年 3 月まで赴任。

3. 診療活動

3.1 外来

通常外来：月、水、金の午前中に初診・再診の診療を行っている。

口蓋裂チーム外来：隔月 1 回で耳鼻咽喉科、リハビリテーション科（言語聴覚士）、歯科と共同で行っている。主として鼻咽喉ファイバースコープにより鼻咽腔閉鎖機能不全の診断と治療方針の決定を行っている。対象疾患は主に口蓋裂術後、先天性鼻咽腔閉鎖不全症である。患児の訓練を担当している外部の言語聴覚士や、言語聴覚士の実習生などの参加も随

時受け付けており、地域に開かれた外来である。

赤ちゃんのあたまの形外来：2011 年 11 月より変形性斜頭症・短頭症の診断と治療を開始した。定額前および軽症例には理学的療法の指導、定額後かつ中等症以上の例には LED スキャナーによる採型データに基づくカスタムメイドの頭蓋形状矯正ヘルメット治療を行っている。科学的エビデンスに基づいた変形性斜頭症・短頭症の治療体系の本邦への導入、変形性斜頭症・短頭症の予防、頭蓋縫合早期癒合症の早期発見を目的としたスクリーニングプログラムの開発をミッションとしている。また頭蓋形状矯正ヘルメット治療の研修施設として、全国より脳神経外科医、形成外科医、義肢装具士の見学を受け付けている。

3.2 手術

2022 年 1 月より 12 月までの手術件数の総数は 247 件であった。手術件数の内訳（以下 NCD 日本形成外科学会疾患登録データベースの分類による）は、外傷 6 件（うち顔面骨折 3 件）、先天異常 231 件（口唇裂・口蓋裂関連 68 件（うち口唇裂・口蓋裂の初回手術 43 件）、頭蓋・顎・顔面の先天異常 74 件（頭蓋縫合早期癒合症に対する形成術 13 件（内視鏡補助下縫合切除術 9 件を含む）、自家肋軟骨移植による小耳症耳介形成術 3 件、Beckwith-Wiedemann 症候群に対する舌形成術 3 件など）、四肢の先天異常 15 件、体幹（その他）の先天異常 5 件（脊髄髄膜瘤の再建 3 件など）、腫瘍 61 件、瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイド 19 件、難治性潰瘍の再建 4 件であった。マイクロサージャリーによる遊離複合組織移植術は 12 件（うち先天性下腿偽関節に対する腓骨弁移植 1 件）であった。

4. 研修活動

4.1 施設認定：形成外科領域専門研修カリキュラムの研修施設、頭蓋形状矯正ヘルメット療法の研修施設に指定されている。また、他施設からの小児形成外科分野に関する見学を随時受け入れている。

4.2 学会活動：

彦坂 信：日本口蓋裂学会評議員、日本頭蓋顎顔面外科学会代議員、日本シミュレーション外科学会理事、Craniosynostosis 研究会世話人、QOL-PRO 研究会評議員。

金子 剛：日本形成外科学会特別会員、同学会の社会保険委員会顧問、日本頭蓋顎顔面外科学会特別会員、日本シミュレーション外科学会理事、日本口蓋裂学会名誉会員。2014 年より乳児頭蓋変形に対する形状誘導療法の普及、情報共有を目的に頭蓋形状誘導療法研究会を設立して世話人代表を務めている。

5. 研究活動

乳児血管腫用のプロプラノロール製剤の国内治験に際して、金子 剛は医学専門家として参加した。この製剤は 2016 年 7 月に製造販売承認取得し、9 月より販売が開始された。

赤ちゃんの頭の形外来で用いている頭蓋形状矯正ヘルメットの薬事承認に協力し、2018 年 4 月に本邦初の頭蓋形状矯正ヘルメットとして承認された。

モノエタノールアミンオレイン酸の静脈奇形に対する硬化療法への適応拡大を目的とした医師主導治験に参加した。本薬剤は 2024 年 12 月に静脈奇形に対して薬事承認された。

鼻咽腔閉鎖機能不全に対する自家脂肪注入術に関する臨床研究を行っている。本治療は、従来は経過観察とされていた比較的軽症例に対して、低侵襲な治療として有望であり、2022年度改訂で保険収載された。

口唇口蓋裂患者の quality of life (QOL)などを計測する質問紙 CLEFT-Q の日本語版に関する研究と臨床応用を行っている。国内6施設と協同で妥当性評価を完了し、現在は反応性評価を行っているほか、国内多施設で広く利用できる基盤づくりに取り組んでいる。

3-7-7-9 耳鼻咽喉科

1. 概要

小児先天性難聴、先天性奇形、小児気道疾患について、他科と情報共有、連携をとりながらチーム医療を行う体制をとっている。

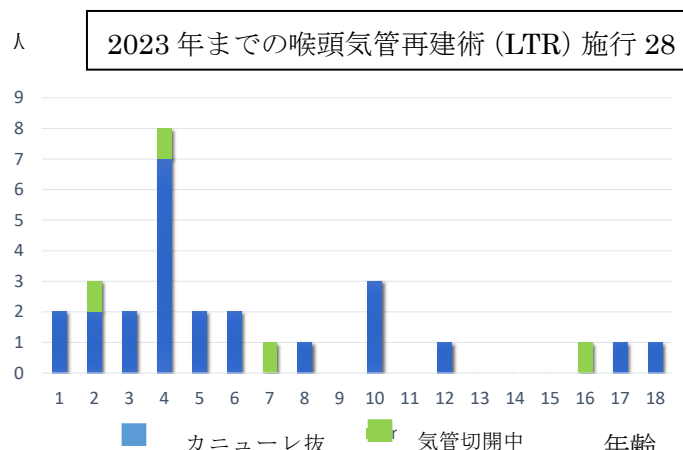
小児難聴医療

新生児聴覚スクリーニングとおよび精密検査：新生児聴覚スクリーニングは院内では100%自動 ABR または conventional ABR にて施行している。精密検査にて難聴または難聴疑いと診断した場合、院内の言語聴覚指導を開始し、近隣の療育施設（立川ろう学校、大塚ろう学校、日本ろう話学園、富士見台きこえとことばの教室など）とは密接に連携をとっており、定期的なカンファレンスや人員交流などを行っている。行政との連携、教育・療育機関との連携の他、両親教室、都が主催する母子保健事業にて保育士や看護師勉強会など難聴の知識普及活動を行っている。難聴の診断から療育、補聴器のフィッティング、人工内耳埋め込み術も行っている。病院の特性上、発達障害や神経疾患、視覚聴覚二重障害など重複障害児が多い。

小児気道疾患センター

気管カニューレ抜去困難や声門下狭窄、などで治療方法を模索する患者が全国から来院しており、年々増加傾向にある。声門下狭窄のためバルーンによる拡張術や肋軟骨を用いた喉頭気管再建術を積極的に行っており、低年齢からの気管カニューレ抜去につながっている（図）。気管カニューレ抜去前

には必ず薬物睡眠下内視鏡検査（DISE）による評価を行っている。2021年6月から小児気道疾患センターを立ち上げ、3年目となり対外的にも周知が進んでおり、小児気道系のセカンドオピニオンなども増加している。週に1回の合同カンファレンスも行い、連携も良好で



ある。嚥下障害に対する嚥下評価チーム外来では診断が困難な小児嚥下障害の評価・カンファレンスに専門家を交えて行っている。誤嚥を繰り返している例では喉頭気管分離術が行われている。

2. 診療スタッフ

医長：守本倫子 日本耳鼻咽喉科学会専門医・気管食道科学会専門医・臨床遺伝学会専門医

医員：鈴木法臣 日本耳鼻咽喉科学会専門医・気管食道科学会専門医

医員：山本修子 日本耳鼻咽喉科学会専門医

レジデント：北川智介 日本耳鼻咽喉科学会後期研修医

フェロー：原真理子 日本耳鼻咽喉科学会専門医

非常勤医師：松永達雄（日本耳鼻咽喉科学会専門医・臨床遺伝学会専門医）：難聴遺伝相談、山口宗太 日本耳鼻咽喉科学会専門医：睡眠時無呼吸検査の読影、指導

3. 診療活動

難聴診療：

- 近隣の聾学校または難聴通園施設と定期的に意見交換：筑波大学 2023 年 1 月 25 日、うさぎクラブ 2023 年 2 月 20 日、立川ろう学校 2023 年 9 月 29 日 大塚ろう学校永福分教室 ライシャワークレーマ学園 2023 年 7 月 14 日 葛飾ろう学校 2023 年 9 月 27 日
- 療育施設見学：大塚ろう学校永福分教室、ライシャワークレーマ学園 2023 年 6 月 1 日
- 両親勉強会：2023 年 10 月 24 日 立川聾学校「きこえの基礎知識、難聴に関する病気とその対応」
- 東京都ろう教育を考えるフォーラムなどでの交流

気道診療：

- 気管切開は 30 件施行しており、気管切開後のカニューレの長さや肉芽などの指導・管理を行っている。
- 喉頭狭窄、気管狭窄の診療ガイドライン作成を開始した。

外来：

再診・初診：月（午前・午後）、水（午前・午後）、金（午前）

補聴器外来：月（リオン補聴器）水 第 1 / 3 / 5 週 （リケン補聴器）第 2 / 4 週 （ブルーム補聴器） 金曜日（第 4 週）午後 （リケン補聴器）

不定期に金曜日午後、嚥下チーム外来

口蓋裂チーム外来（担当 形成外科・耳鼻咽喉科・口腔外科・言語聴覚士）：月 1 回第 2 金

曜日 午後

難聴遺伝子外来（担当 松永）：月 1 回月曜日または水曜日 午後

嚥下チーム外来（担当 耳鼻咽喉科・総合診療科、放射線科、歯科口腔外科、リハビリ科）

4. 手術

1 年間術件数は 879 件であった。手術の内訳は表の通りである。

	年間総手術件数 総計	879
耳科	鼓室形成術	7
耳科	鼓膜チューブ挿入術	205
耳科	人工内耳手術	6
耳科	先天性耳瘻管摘出術	13
耳科	鼓膜形成術	3
耳科	乳突削開術	2
耳科	その他（鼓膜切開、副耳除去、人工内耳除去など）	24
鼻科	その他（後鼻孔削開、変形外鼻手術など）	1
口腔咽頭喉頭	口蓋扁桃摘出術	280
口腔咽頭喉頭	舌・口腔良性腫瘍摘出術	2
口腔咽頭喉頭	咽頭良性腫瘍摘出術	4
口腔咽頭喉頭	アデノイド切除術	134
口腔咽頭喉頭	扁桃周囲膿瘍切開術	2
口腔咽頭喉頭	舌小帯形成	2
口腔咽頭喉頭	喉頭微細手術（声帯ポリープ・結節・嚢胞・ポリープ様声帯手術を含む）	31
口腔咽頭喉頭	喉頭形成術（甲状軟骨形成術、披裂軟骨内転術など）	34
口腔咽頭喉頭	喉頭截開術	1
口腔咽頭喉頭	気管口狭窄拡大術	28
口腔咽頭喉頭	気管切開口閉鎖術	6
口腔咽頭喉頭	喉頭気管分離術	1
口腔咽頭喉頭	その他（舌小帯切断、口唇裂形成、喉頭狭窄症手術など）	41
頭頸部	頸部嚢胞摘出術	4
その他	気管異物摘出術	1
その他	異物摘出術（外耳・鼻腔・咽頭）	14
その他	気管切開術	33

5. 研修：

日本耳鼻咽喉科学会専門医資格取得に必要な研修認定施設

日本気管食道科学会専門医認定施設

日本耳鼻咽喉科学会による新生児聴覚スクリーニング後の難聴精密検査機関

日本聴覚医学会主催「聴力測定技術講習会」中級コースで乳幼児の聴覚検査方法についての講師(守本)を務めた。

3-7-7-10 眼科

1. 概要と特色

当科は国立小児病院時代に 1965 年植村恭夫医長（1973 年～1990 年慶應義塾大学医学部眼科学教室教授）が着任して以来、一貫して我が国の小児眼科医療を牽引し、研究及び教育活動に取り組んできた。1989 年に東範行医長が着任し、2002 年当センター設立後は、重症未熟児網膜症や先天網膜硝子体疾患を含む難治性小児眼科全般の診療と研究に邁進し、視覚科学研究室において基礎研究にも取り組み、国内外に成果を発信した。

2021 年から仁科幸子が診療部長に着任し、2023 年は眼科医 6 名(眼科専門医 4 名、レジデント 2 名)、非常勤医師 2 名、視能訓練士 3 名、非常勤視能訓練士 3 名、研究補助 2 名、臨床研究員 16 名が当科に在籍した。当科スタッフ・研究員は、院内外の専門科と連携し、かつ国内外の専門機関と連携して、我が国の小児眼科医療の発展に寄与すべく診療、研究、教育、社会貢献に取り組んでいる。

2. 診療

外来は、高度専門医療を実施する目的から、他院眼科で当科での診断、検査、治療を要すると判断され紹介された場合に限っており、全国からの紹介を受けている。特に 0 歳から発症する重症眼疾患である先天白内障、先天緑内障、前眼部形成異常、無虹彩症、小眼球、家族性滲出性硝子体網膜症、コーツ病、網膜ジストロフィ、網膜芽細胞腫などの早期診断・治療・管理を行う全国有数の専門施設として、多くの患者さんを受け入れている。早期発症の乳児内斜視や、難治性斜視の治療にも積極的に取り組み、新たな手術法を開発している。

外来は、眼科専門医を取得して小児眼科の専門研修を終えた常勤医が、月、水、木、金（午前）に初診外来、月、火、水、木、金（午前）に再診外来を担当しており、1 日当 40～80 名の診療を行っている。午後には月～金まで毎日、乳幼児に特化した視力検査、網膜電図、視野検査、斜視精密検査（術前検査）、斜視視能訓練を行う眼科特殊検査外来を設けている。また専門外来として火曜日にステロイド外来、木曜日に未熟児外来、第 4 月曜日に角膜移植専門外来を設けている。さらに 2023 年から火曜日・木曜日午後に眼科遺伝外来を新設し、臨床遺伝専門医の資格を有する仁科診療部長を中心として、網膜ジストロフィ、網膜芽細胞腫などの患者さんご両親に対する遺伝相談・カウンセリング・遺伝子解析に精力を傾けている。

視覚障害を来したお子さんご家族に対しては、担当医師、視能訓練士、都立久我山青光学園視覚特別支援教育コーディネーターが連携して、月に 1～2 回（火、木）、0 歳からの早期ロービジョンケア・アイサポート教育相談（院内相談）を実施し、全国的なネットワー

クを形成している。また医療連携室のバックアップのもと、難治性眼疾患患者の病診連携、成人移行を推進している。

入院は、手術目的が多く、全国から様々な難治性小児眼疾患のお子さんの紹介を受けて精密検査と加療を行い、病診連携につとめている。手術の対象疾患は、難治性斜視、眼瞼疾患などの外眼部疾患はもとより、白内障、緑内障などの内眼手術が約半数を占めている。小児角膜移植手術は輸入角膜を取り寄せて実施している。小眼球や先天異常を伴う難治性症例が多く、麻酔科、新生児科、総合診療科、専門各科のバックアップのもと、最新の機器で検査及び手術を行っている。12 歳以上の麻痺性斜視に対してはボトックス注射治療にも取り組んでいる。

2020 年からは未熟児網膜症に対する抗 VEGF 療法に取り組み、重症例の予後向上を目指している。また難治性網膜硝子体疾患、遺伝性網膜ジストロフィ、緑内障、網膜芽細胞腫などに対し、全身麻酔下で広画角デジタル眼底カメラ、蛍光眼底造影、光干渉断層計、網膜電図など最新の機器を用いた網羅的かつ詳細な検査システムによって、臨床像の早期評価・解析、予後判定を行い、早期手術、弱視訓練、ロービジョンケア、遺伝カウンセリング・遺伝子解析を実施している。難治性緑内障に対する新規治療法として 2022 年からマイクロパルス毛様体光凝固、2023 年からプリザーブロマイクロシャント手術を導入して安全で有効な結果を得ている。

2023 年の年間手術数は 645 件（レーザー手術・硝子体内注射・小手術を含む）、全身麻酔下検査は 68 件（検査のみ）であった。ロービジョン院内相談は 42 件に増加し、眼科遺伝相談は 35 件に達した。主要な手術件数は、斜視手術 317 件、白内障・水晶体脱臼手術 80 件、緑内障手術 72 件といずれも増加した。緑内障手術の内訳では新たな術式である毛様体光凝固とインプラント挿入が増加した。眼球摘出、眼球内容除去、角膜移植、羊膜移植も複数例の適応があり実施した。

3. 研究

臨床研究は、弱視・斜視疾患の病態研究、難治性斜視の早期手術および新規手術法、デジタルデバイス（ICT 機器）が小児の視機能に与える影響、視覚スクリーニング機器の低年齢児への応用、新生児・乳児の AI を用いた視覚スクリーニング、先天網膜視神経疾患の病態解明、遺伝性網膜疾患の臨床像の早期評価と遺伝子解析、医療機関と教育機関の連携による小児ロービジョンケアなど、多岐にわたる研究を行い学会あるいは誌上発表を行った。2023 年は、国際斜視学会（38th APAO Congress、42nd meeting of the European Strabismus Association、Human Genetics Asia 2023、130th annual meeting of the Korean Ophthalmological Society）における成果の発信は合計 9 件と大幅に増加、現地で討論、情報収集を精力的に行った。

厚生労働省科学研究費、文部科学研究費、成育医療開発研究費を受けて、乳幼児の難治性疾患、斜視の病態解明、ICT 機器が小児の視機能に与える影響、先天異常症候群の視覚器異常、遺伝性疾患の病態解明の研究を行った。

4. 教育・研修

当科は、日本眼科学会専門医制度研修施設として眼科専門医志向者の受入、眼科専門研修

基幹施設として後期眼科研修医の受入、さらに国内外の多くの施設から小児眼科研修の受入を行っている。現在までに、専門研修連携施設として埼玉医科大学病院、岩手医科大学病院、東京都立小児医療センター、JCHO 埼玉メディカルセンター、関連病院として東邦大学医療センター大森病院、慶應義塾大学病院、東京都立多摩総合医療センター、東京医科歯科大学病院、浜松医科大学病院と連携して教育・研修に取り組んでいる。

5. 社会活動

仁科幸子診療部長は国際斜視学会理事、日本眼科学会評議委員、日本弱視斜視学会副理事長、日本小児眼科学会副理事を務め、林思音医員は日本弱視斜視学会理事を務めている。仁科診療部長は、日本眼科学会の未熟児網膜症眼科管理対策委員として、抗 VEGF 療法の手引き改定に参画した。日本弱視斜視学会・日本小児眼科学会の研究担当理事として多施設共同研究を企画・推進した。

日本眼科医会 3 歳児健康診査推進委員会において仁科診療部長、林思音医員が委員を務めており、3 歳児健診における視覚検査マニュアルの普及、屈折検査の導入を推進し、眼科精密検査の方法に関する啓発を行った。

小児眼科疾患の早期発見と予後向上を図るため、全国の眼科医、視能訓練士、メディカルスタッフ、保健師、小児科医等に対し、多くの講演や研修会における講義を行い、知識の普及に努めた。またマスコミからの取材に積極的に応じ、一般市民への的確な情報発信に努めている。

3-7-7-11 皮膚科

1. 概要と特色

当科は国立小児病院時代からの歴史を含めると 1965 年以来、半世紀にわたる小児皮膚科医療を行ってきた。その診療経験と症例の統計をもとに、国内において専門性の高い医療を提供している。

かつて皮膚科を受診する小児患者は減少し、乳児検診を機に皮膚疾患について小児科を受診する患者が増加する傾向があった。一方で小児慢性特定疾病の助成疾患が年々拡大し、助成される皮膚疾患が増加しただけでなく全身性皮膚疾患の診断における皮膚科の役割が増加し、診断・治療への貢献が期待されるようになった。こういった現状の中で、われわれは小児皮膚科専門領域の特殊性を強く認識し、我が国の小児皮膚科医療のレベルアップによる皮膚科、小児科双方への貢献を目標としている。以下の表は、当センターホームページに掲載している一般向け診療案内を改編したものであるが、われわれの活動内容を記した。

2. 臨床実績

外来診療では、小児のあらゆる皮膚疾患を対象として、月曜から金曜まで平日は毎日外来診療を行っている。特殊外来は、火曜と水曜にレーザー外来を行なっている。

以下に、対象となる代表疾患を記す。

アトピー性皮膚炎などの湿疹・皮膚炎	診断 アレルギー検査 外用療法 皮膚生理検査 スキンケア指導
あざ（血管腫、太田母斑、異所性蒙古斑など）	生後1ヶ月頃からできるレーザー治療 顔面、広範囲のあざなどには、全身麻酔下でのレーザー治療も行っています
ほくろ	悪性か良性かの診断 手術
皮膚腫瘍（石灰化上皮種、粉瘤、脂肪腫、脂腺母斑など）	診断、治療（手術）
毛髪疾患（円形脱毛症、先天性乏毛症など）	診断、治療（エキシマライトなど）
乾癬（関節症性乾癬、膿疱性乾癬など）	診断、治療（外用療法、エキシマライト、内服療法、生物学的製剤）
尋常性白斑	診断、外用療法、エキシマライト
イボ、水イボなどのウイルス感染症	液体窒素療法
とびひなどの細菌感染症	長引いている場合の対応
角化症、魚鱗癬	診断、検査、治療
母斑症、その他の遺伝性、先天性疾患	診断、検査、治療

入院診療では、2～3日の短期入院での全身麻酔下手術及びレーザー処置を行なっている。アトピー性皮膚炎、蕁麻疹で自宅では治療が困難な症例、全身状態、栄養状態が悪い症例の改善、ブドウ球菌性熱傷様皮膚症候群、カポジ水痘様発疹症などの感染症を伴うアトピー性皮膚炎の管理、膿疱性乾癬などでの生物製剤の導入期、いちご状血管腫（乳児血管腫）のプロプラノール内服療法の導入期などについても、他診療科とも連携の上、入院診療を行っている。

3. 手術及びレーザー処置

2023年度の局所麻酔（生検含む）年間手術数は105件、全身麻酔下手術件数は32件、全身麻酔下レーザー処置件数は50件、外来での（局所麻酔または無麻酔）レーザー処置年間件数は1,170件であった。

4. 褥瘡対策チームとしての活動

院内の褥瘡・創傷の治療、予防対策をチームで行い、対象症例を減少させることに努めている。褥瘡対策委員会（Wound-Ostomy-Continence：創傷、ストーマ、失禁対策チーム）は、皮膚科・形成外科医師、看護師、薬剤師、栄養師、作業療法師などからなるチームであり、活動内容は週1回の定期回診をはじめとするベットサイドでの診察と治療、医療従事者に対する勉強会などによる教育活動などである。

主な対象疾患は褥瘡、創傷、ストーマトラブル、点滴漏れ、オムツかぶれなどであるが、小児領域では成人とは異なる基礎疾患とそれに伴う使用薬剤の差、全身や局所の解剖学的、生理学的な差、成長と発達に対する配慮、整容的な問題に対する配慮など特殊な面も多く、一般のいわゆる高齢者を対象とした一般の対策がそのまま通用しないため、小児の特殊性に合わせた治療を目指している。褥瘡、点滴漏れについては、発生予防の啓蒙に力を入れている。点滴漏れに対しては、点滴漏れチェックリストを用いて迅速にチームで連携できるよう診療を行っている。2013年7月より開始したテンプレート記入によるデータベースは過去の蓄積を経て、危険薬、点滴漏れ初期対応フローチャートの見直しに貢献している。

5. 教育活動

当科は日本皮膚科学会教育施設の認定を受けている。同学会認定専門医3名が勤務している（2023年12月現在）。日本皮膚科学会として乾癬治療薬として認可された生物学的製剤について同学会が組織する認定委員会での審査を経て使用承認施設として認定を受けている（2010年より）。

小児皮膚科学の2つの柱である、アレルギー性疾患と遺伝性疾患に関しては、日本アレルギー学会認定教育施設（2009年6月より）に認定されている。同学会認定専門医1名が勤務している。また、日本人類遺伝学会および日本臨床遺伝学会による認定臨床遺伝専門医1名は、遺伝診療科との連携を図り、遺伝子診断前後の遺伝カウンセリングを行っている。

6. 研究活動

小児皮膚疾患の診断・治療・病態解明・発症予防などに係わる臨床研究を実施、計画しており、その一部を紹介する。研究成果については、学会、論文発表を行っている（研究業績参照）。

1) 肥厚性皮膚骨膜炎における genotype-phenotype correlation の検討

（倫理審査委員会課題番号：374）

2) 乳児期角層バリア因子と母乳中因子の解析

（倫理審査委員会課題番号：2235）

3) 乾燥肌または軽度のアトピー性皮膚炎を有する小児を対象としたキッズスキンケア製品の使用による安全性確認試験

- (倫理審査委員会課題番号：2020-094)
- 4) in vivo 共焦点ラマン分光装置を用いた小児のアトピー性皮膚炎における特徴的な皮膚構成成分の解析
(倫理審査委員会課題番号：2020-095)
- 5) 先天性魚鱗癬の診療実態に関する全国調査
(倫理審査委員会課題番号：2021-280)
- 6) 小児の脈管異常、色素性皮膚病変に対するレーザー治療の有効性と安全性の検討
(倫理審査委員会課題番号：2022-127)
- 7) 【中央一括審査】遺伝学的変化を要因とする皮膚疾患のマルチオミックス解析による病態解明の研究
(倫理審査委員会課題番号：2023-027)
- 8) 乳児期角層バリア因子と母乳中因子の解析における追跡調査
(倫理審査委員会課題番号：2023-057)
- 9) 発汗異常を伴う稀少難治性疾患の病態解明データベース構築
(倫理審査委員会課題番号：2023-133)

3-7-7-12 小児歯科・矯正歯科

1. 特色

小児全般の小児歯科・矯正歯科治療を行っています。対象は主に基礎疾患のあるお子様です。具体的には、う蝕処置、予防処置、口腔外科処置、咬合管理等の処置を行います。お子様の状態あるいは処置内容に応じて、必要であれば全身麻酔下での処置となります。矯正歯科では、全身疾患あるいは先天性疾患があるお子様を優先しています。

2. 診療活動

2.1 小児歯科

主に基礎疾患のあるお子様を対象に、外来または全身麻酔下でう蝕処置、嚢胞摘出、舌小帯伸展術、埋伏過剰歯の抜歯等の小手術を行います。その他、歯科の救急として口腔内の外傷処置を行います。

2.2 矯正歯科

当科は日本矯正歯科学会会員が所属する医療機関です。国が定める疾患に起因するかみ合わせの異常に対する矯正歯科治療、ならびに顎の外科矯正手術を要する顎変形症の手術前後の矯正歯科治療には保険が適用されます。これ以外の保険対象疾患については日本矯正歯科学会のホームページ(矯正歯科治療が保険診療の適用になる場合とは>別に厚生労働大臣が定める疾患)をご確認下さい。

対象疾患の中で主に治療しているのは、唇顎口蓋裂、ゴールドデンハー症候群(鰓弓異常症を含む)、鎖骨・頭蓋異形成症、トリチャー・コリンズ症候群、ピエール・ロバン症候群、ダウン症候群、ラッセル・シルバー症候群、ターナー症候群、ベックウィズ・ウィーデマン症候群、軟骨形成不全症、外胚葉異形成症、神経線維腫症、基底細胞母斑症候群、ヌー

ナン症候群、マルファン症候群、プラダー・ウィリー症候群、顔面裂、口・顔・指症候群、カブキ症候群、ウイリアムズ症候群、ビンダー症候群、スティックラー症候群、頭蓋骨癒合症（クルーズン症候群、尖頭合指症を含む）、骨形成不全症、フリーマン・シェルドン症候群、ルビンシュタイン・ティビ症候群、染色体欠失症候群、6 歯以上の先天性部分無歯症、チャージ症候群、成長ホルモン分泌不全性低身長症、リンパ管腫、線維性骨異形成症、偽性副甲状腺機能低下症およびその他顎・口腔の先天異常等です。

2.3 唇顎口蓋裂

生下時より新生児科、形成外科、耳鼻咽喉科、リハビリテーション科との連携のもとにチーム医療を行い、ホッツ床の装着、NAM 床による鼻の術前矯正、う蝕管理、咬合管理を行います。

2.4 口腔ケア

周術期の患児、および腫瘍に対する放射線療法や化学療法を受ける患児の口腔機能管理を行います。ICU における人工呼吸器を装着した患児について、口腔ケアの定期的なフォローを行なっています。

2.5 歯科保健指導

乳幼児期から小児期の主に基礎疾患があるお子様を対象として、定期的に歯科保健指導を行いフォローします。

2.6 医療連携

地域の医療機関との連携体制の整備に取り組んでいます。ご紹介いただいた症例の全身麻酔下の歯科小手術を行い、手術後は地域の医療機関に逆紹介させていただきます。全身疾患を持つ患者様が円滑に転院できるよう、全国の小児総合医療施設の歯科系診療科との連携体制を構築しています。

3. 臨床統計

2023 年には、延べ 88 症例において全身麻酔下の歯科処置が行われました。表中の「その他」には、歯肉内縫合術 2 件および歯槽骨骨折観血的整復術 1 件が含まれます。

全身麻酔下の歯科処置

処置	2015 年	2016 年	2017 年	2018 年	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年
齲蝕	30	33	42	37	38	26	28	20	41
抜歯	7	8	10	5	9	5	5	5	13
舌小帯延長術	4	3	2	3	4	0	1	1	4
過剰埋伏歯摘出術	3	6	11	14	25	16	25	26	26
下顎埋伏智歯摘出術	2	1	2	0	0	0	0	0	1
その他	3	3	4	6	0	3	6	0	3
合計（症例数）	49	54	71	65	76	50	65	52	88

3-7-8 手術・集中治療部

3-7-8-1 集中治療科

1. 診療体制

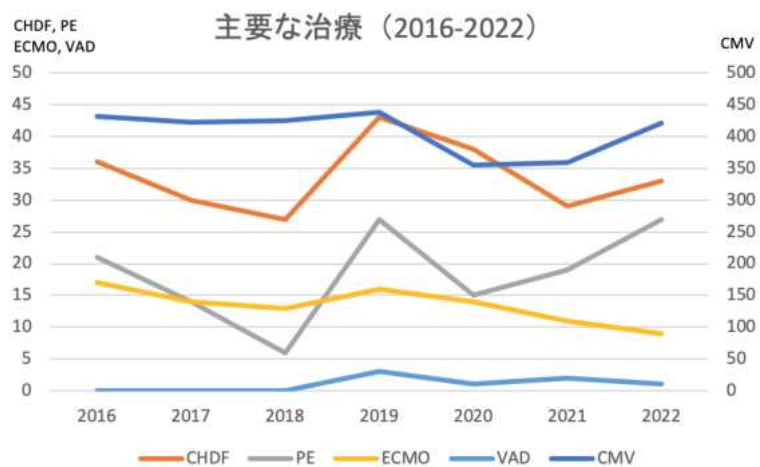
常勤スタッフ医師 10 名、フェロー医師 9 名（小児科専門医 14 名、集中治療専門医 8 名、救急科専門医 3 名、麻酔科専門医 1 名）が、病床数 20 床（小児特定集中治療室管理料 20 床）の診療にあたる。Closed ICU であり、集中治療科は関係する専門診療科及びメディカルスタッフと連携しながら、救命救急・周術期管理・院内急変の全ての患者の管理方針を決定する。専従看護師 80 名、薬剤師 2 名（日勤のみ専従）、理学療法士 3 名（日勤のみ専従）、臨床工学技士、ソーシャルワーカー、チャイルドライフスペシャリスト、心理士、栄養士、等の多職種と連携し、病院の総力をあげて診療を行っている。

2. 診療実績

術後予定入室に加えて、救急外来からの直送症例、他院からの転院搬送症例、病棟急変症例などの緊急入室も多く、年間 1000 例を超える入室数を診療する国内最大規模の小児 ICU（PICU）である。小児救命救急センター、東京都こども救命センターの区西南ブロック拠点病院、さらに小児・周産期医療を専門とする唯一のナショナルセンターとして、全国からあらゆる救命救急症例の転院搬送を受け入れている。新型コロナウイルス感染症の影響により減少していた患者数は、2022 年にはパンデミック前とほぼ同等となった（図 1）。重症の新型コロナウイルス感染症患者の診療にも対応している。当院 ICU で行われた主要な集中治療の年次推移を示す（図 2）。また、国内最多の肝移植に加えて、種々の固形臓器移植の周術期管理を施行している（図 3）。さらに、先進的な再生医療の治験、遺伝子治療の治験等の全身管理を担当する。医療関連感染症などの感染予防、院内急変対応を迅速かつ適切におこなうための RRS(Rapid Response System)、院内蘇生教育、災害医療対策（DMAT 等）も積極的に関与している。結果として、予測死亡率に対して低い実死亡率を実現している。

入室経路別ICU入室患者数（2016-2022）





3. 部門で行った研修

- ・成育救急集中治療セミナー：小児救急集中治療を志す若手医師向けのオンラインセミナー
- ・東京都子ども救命センター事業地域連携会議：東京都西南部の二次病院との連携会議

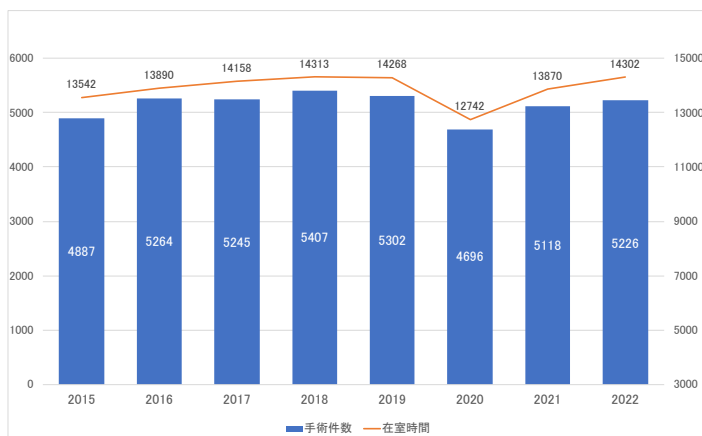
3-7-8-2 手術室

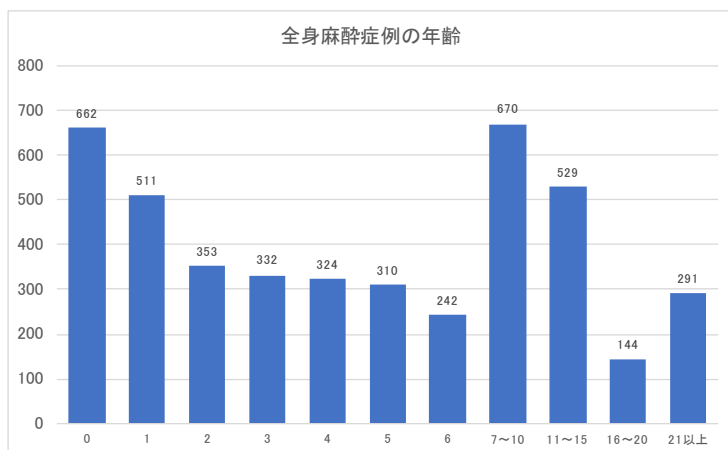
1. 診療体制

麻酔科には、産科麻酔科を含めて医員 14 名、フェロー・レジデント 11 名が在籍し、主に手術室 9 室、血管造影室 1 室、MRI 検査室、LDR 6 室などにおいて、手術・検査や周産期における麻酔関連業務に従事した。各外科系専門診療科、移植関連（肝臓、心臓、腎臓、小腸）、救命センター関連、小児がん関連、周産期関連を含め、小児と母体に関連する様々な手術や麻酔に対応する。手術においては、適宜関係する専門診療科やコメディカルと連携し、病態を共有して綿密な周術期計画を立て、迅速かつ安全に手術対応を行うよう配慮している。全身麻酔管理の他、要請に応じて鎮静での検査・処置の管理も行う。術後の嘔気嘔吐や覚醒時せん妄にも配慮し、確実に安全な麻酔の維持管理を計画する。また術後疼痛の軽減のため、全身麻酔と併用して硬膜外麻酔や末梢神経ブロックを積極的に行い、術後自己調節型ポンプを用いた術後疼痛管理を行う。外来では、手術や検査を控えた方への麻酔の説明、日帰り検査時の鎮静外来、麻酔に関するコンサルテーション外来を行っている。

2. 診療実績

2022 年の総手術件数は 5,226 件、麻酔科管理件数は 5,160 件、総麻酔時間 14,302 時間であった。術後疼痛管理症例数は 570 件、そのうち IV-PCA（静脈内自己調節鎮痛）が 498 件、硬膜外自己調節鎮痛が 72 件であった。外来での鎮静件数は、約 550 件であった。周産期関連の麻酔実績については、産科麻酔科を参照のこと。





	2022	2021	2020
術後鎮痛管理総数	570	559	530
IV-PCA	498	490	460
硬膜外 PCA	72	69	70

3. 研修

毎週火曜日にフェロー・レジデント向けの講義、木曜日に抄読会を行った。

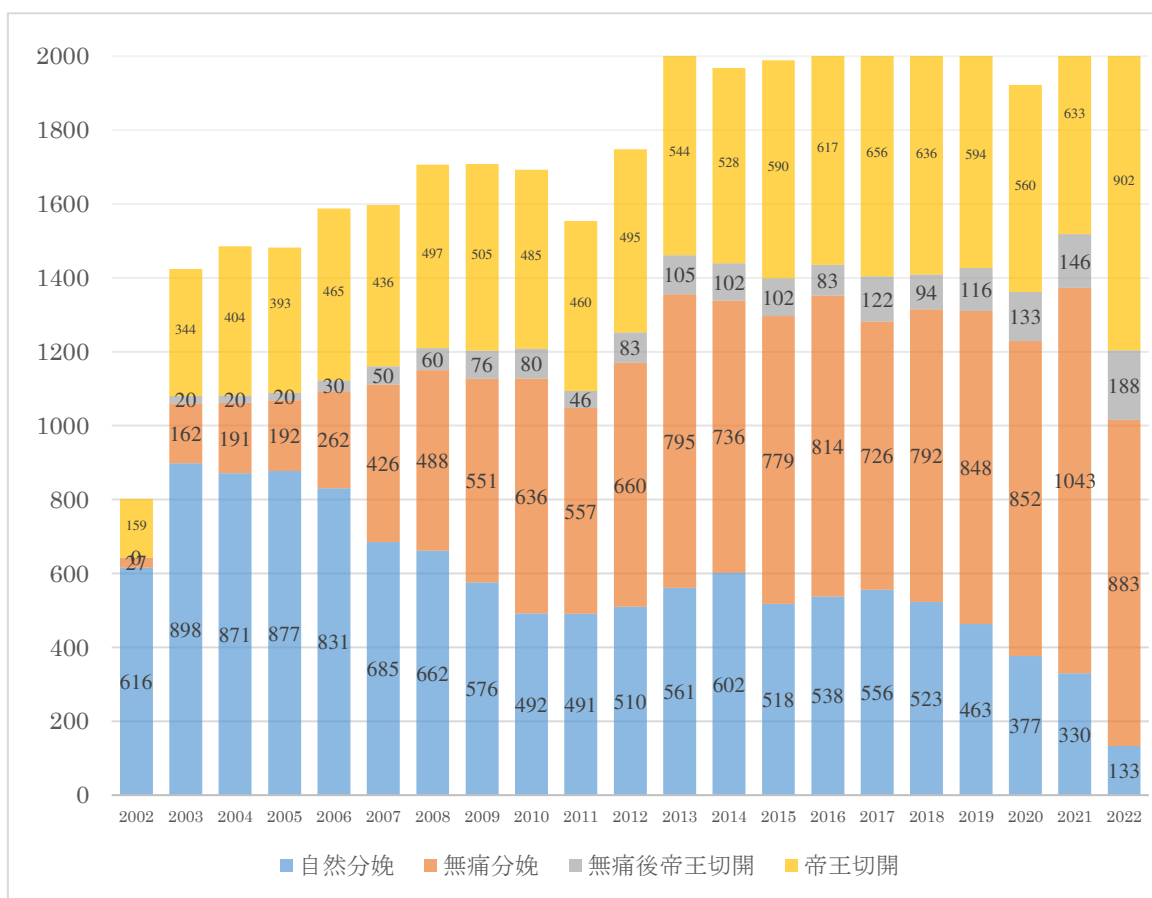
3-7-8-3 産科麻酔科

1. 診療体制

2021 年の産科麻酔科の人員配置は、医員 4～5 名、麻酔科フェロー・レジデント 2～3 名、産科からのローテーター 0～1 名で業務に従事し、24 時間体制で成人麻酔および産科麻酔の業務に対応した。

2. 診療実績（帝王切開、無痛分娩：麻酔科として分娩数ではなく母体数でカウントする）

2022 年（1 月 1 日～12 月 31 日）の分娩数は 2,106 件であった。帝王切開の手術件数は 902 件（予定手術 358 件、緊急手術 448 件）で、麻酔方法は脊椎麻酔 493 件、脊髄くも膜下硬膜外併用麻酔 122 件、硬膜外麻酔 172 件、全身麻酔 19 件（区域麻酔か全身麻酔へのを含む）であった。無痛分娩は 24 時間体制で対応し妊婦がリクエストした時点での導入を基本とし、件数は増加傾向にあり 2022 年は合計 1,071 名（22 週以降 1,035 名、22 週未満 36 名）で経膈分娩の 7 割に無痛分娩を行い、そのうち 188 名（17.5%）が帝王切開に移行した。Covid19 陽性により緊急帝王切開が必要となったものは 20 名であった。



3. 胎児治療の麻酔

双胎間輸血症候群に対する胎盤血管レーザー凝固術は、母体に対しては脊髄くも膜下硬膜外併用麻酔により十分な鎮痛を達成し、さらに少量のレミフェンタニルを持続投与することで胎児の不動化を達成している。2022年の胎盤血管レーザー凝固術は32件であった。その他、無心体双胎に対するラジオ波焼灼術を2件、先天性横隔膜ヘルニアに対するバルーン閉塞術5例、胎児膀胱鏡手術1例の麻酔管理を行い、胎児脊髄髄膜瘤に対するopen fetal surgeryの麻酔管理に関する準備も行っている。病棟手術室における、レミフェンタニルを用いた胎児胸腔穿刺およびシャント術12例、胎児腹腔穿刺1件の管理を行った。

4. その他の産科関連の麻酔

外回転術の麻酔管理は手術室で脊髄くも膜下硬膜外併用麻酔により管理しており、2022年の外回転術の症例数は11件であった。

5. 成人手術の麻酔（産科以外）

子宮内容除去術は27例であった。

6. 周産期麻酔外来

周産期麻酔外来では、帝王切開が予定された妊婦や無痛分娩を希望する妊婦に加えて、ハイリスク妊婦の分娩前診察（スクリーニング）および成人手術を受ける患者の外来を行って

いる。2022 年の外来患者数は 1,885 名であった。新型コロナウイルス感染拡大防止のため面談による外来診察を可能な限り削減しオンライン診療を中心として診療を行った。

3-7-8-4 医療工学室

1. 体制

医療工学室は、開院と同時に医療機器管理部門として開設された。広さ 120 平方メートルの室内に、人工呼吸器や輸液ポンプ、シリンジポンプ、心電図モニタ、パルスオキシメータなど約 2,500 台の医療機器を中央管理している。スタッフの構成は、臨床工学技士 9 名、委託の ME センター専任技術員 1 名(非常勤 2 名含む)の合計 12 名である。臨床工学技士は、人工心肺、血液浄化業務、ペースメーカ業務、人工呼吸器、補助循環の他、手術室で使用する医療機器、PICU、NICU を含む病棟の医療機器の操作及び保守点検業務に従事する。委託の専任技術員は、医療機器の貸出し、回収、清拭、保守業務を行い、安全かつ効率的な運用に努めている。医療機器のトラブル防止と機器の性能保持に不可欠な使用前点検・使用後点検、及び定期点検についても計画的に実施している。2022 年は呼吸器回診や血液浄化業務、人工心臓管理件数が飛躍的に増加し、医師や看護師と連携してこれらの医療機器の維持管理を行って患者管理の安全に貢献した。また教育用ビデオとして 3 種類の人工呼吸器の動画コンテンツを作成し常時閲覧可能にした。最近 CAR-T 療法の開始に伴い末梢血幹細胞採取の依頼も増加しており、今後も多職種と連携しながら医療安全と最適なチーム医療の提供に貢献していく。

1. 活動実績

		2017	2018	2019	2020	2021	2022
心臓外科	人工心臓	105	94	84	76	69	71
	セルサーバー	105	94	84	78	69	73
	ペースメーカー	15	6	6	15	7	7
	その他VAD関連	0	0	11	8	8	2
脳神経外科	ナビゲーション	132	143	142	147	155	148
	マイクログ	218	173	137	173	159	139
	内視鏡	44	35	47	31	20	21
移植外科	マイクログ	47	50	53	55	56	64
胎児診療科	FLP・FETO	58	41	36	32	36	34
	ラジオ波	6	4	4	4	5	4
	その他	6	10	19	6	16	16
	ECMO	308	105	360	132	154	148
	LVAD管理	372	366	589	689	806	1,420
	PM外来	135	124	125	146	152	136
	血液浄化	440	441	472	520	742	946
	sleep study	142	138	161	110	114	118
	在宅人工呼吸器患者支援	77	165	71	49	50	28
	RST	106	318	261	100	153	184
	臨床業務合計	2,316	2,307	2,662	2,371	2,771	3,559
機器保守管理	呼吸器ラウンド	9,084	9,884	11,209	10,816	11,945	13,398
	NO	336	481	331	400	467	505
	機器貸出	20,585	21,647	19,991	17,205	15,416	13,627
	修理	805	540	283	261	430	913
	定期点検	2,435	1,851	1,886	1,651	1,424	1,395
	日常点検	20,305	19,664	18,705	17,152	16,458	14,694
	トラブル対応	772	673	600	459	456	377
	機器保守合計	54,322	54,740	53,005	47,544	46,596	44,909
	機器操作説明会	48	70	27	56	100	30
	参加人数	707	803	283	495	703	220

3-7-9 周産期・母性診療センター

3-7-9-1 産科

1. 概要・特色

当センターは2012年8月から総合周産期母子医療センターに指定されています。MFICU（母体・胎児集中治療ベッド）を有しています。周産期・母性診療センターの産科診療（産科、胎児診療科、不育診療診療科の医師が一緒に産科診療を行っています）は常勤スタッフ14名、フェロー10名、レジデント7名の合計29人体制で行っており、夜間・休日でも常時3名の夜勤・宿直体制となっています。センター内の母性内科、女性内科、産科麻酔科、新生児科等とも連携して、ハイリスクならびにローリスク妊娠/分娩管理をチーム医療として行っています。また専門医の取得状況は、日本産科婦人科専門医23名、周産期専門医（母体・胎児）19名、臨床遺伝専門医14名、超音波専門医12名、生殖医療専門医1名、不育症専門医1名となっています。

2. 診療活動

2-1 診療実績

2023年の分娩件数は1,916件で、分娩数（児数）は2031件、生産数は1957件でした。母体搬送の受け入れ数は88件で、受入れ率は57.8%でした。内訳は妊婦80例、褥婦8例でした。母体年齢の年齢別割合は、35歳未満が785名(40.4%)、35～40歳が771名(39.6%)、40才以上が391名(20.1%)で、初産婦さんは58.3%でした。分娩様式に関しては経膣自然分娩が720件(37.6%)、吸引分娩312件(16.0%)、鉗子分娩8件(0.4%)となっており、帝王切開数は917件(47.1%)で、予定453件、緊急464件でした。また、無痛分娩は986例に行われました。当院での無痛分娩は24時間対応で行っており、産科医、麻酔科医、新生児科医、助産師のチームで連携し、安全性の確保に努めています。

2-2 ハイリスク妊娠に対する専門的対応

当センター産科外来では、妊娠合併症などのために妊娠中ならびに分娩時に厳重な管理が求められるハイリスク妊婦さんに対応するために専門外来を設置しています。

① 骨盤位外来（月曜日午前）

当院骨盤位外来は、35週以降の骨盤位または横位の方で骨盤位外回転術を希望される方を対象としています。外来で骨盤位外回転術についてのご説明を行い、後日入院で手術を行っています。2023年には36名の外来受診者中20名に外回転を施行しました。成功例は15名（成功率75%）でした。

② 早産外来（月曜日午後）

2023年は早産ハイリスクとされる妊婦さん56名の初診があり、その内訳は既往早産症例27例、子宮頸部円錐切除術後症例10例、頸管長短縮症例10例、前回後期流産や切迫早産既往症例10例でした。早産のリスク因子について評価し、頸管縫縮術やプロゲステロン膣錠投与など、エビデンスに基づいた診療を行っています。2023年の外来受診者のうち頸管縫縮術6例、プロゲステロン膣錠の投与もしています。

③ 甲状腺外来（火曜日午後）

バセドウ病や橋本病など甲状腺の病気を合併した妊婦を管理しています。母性内科と連携し母だけでなく児の甲状腺機能を的確に評価し管理しています。2023年には計35名の管理を行いました。

④ FGR（fetal growth restriction：胎児発育不全）外来（水曜日午後）

FGRの原因の検索、及び各種検査（超音波検査による胎児の血流測定・羊水量測定・推定体重測定、推定体重増加の有無、胎児心拍モニタリングなど）を用い、個々の胎児の状況に応

じた適切な妊娠中の管理方法や出産時期の決定をするための外来です。胎児の状況や母体の合併症による入院管理も行い、母児の安全な分娩管理を行います。2023年には328名が受診されました。

⑤ 合併症外来（水曜日午後）

膠原病、抗リン脂質抗体症候群など合併症を有する妊婦や小児期に重症の病気の既往のある妊婦の周産期管理、ならびに妊娠前のカウンセリング等を他科と連携してエビデンスに基づいて行っています。2023年の初診数は 52例で、内訳は膠原病関連 21例、心疾患 3 例、脳・神経疾患 6 例、血液凝固疾患 6 例、腎疾患 1 例、消化器疾患 3 例、内分泌疾患 2 例、 その他でした。

⑥ 多胎外来（火曜日、金曜日）

双胎など多胎妊娠を専門にみる特殊外来で、産科・胎児診療科の担当医が多胎妊娠の診療を行っています。2023 年には双胎 108 例（二絨毛膜二羊膜双胎 61 例、一絨毛膜二羊膜双胎 45 例、一絨毛膜一羊膜双胎 2 例）の分娩管理を行い、4 例は経膣分娩いたしました。また、三胎 3 例の分娩管理を行いました。

1. 研究活動

現在、「新生児ヘモクロマトーシスに対する胎内ガンマグロブリン大量静注療法の医師主導治験」、「無痛分娩で出生した新生児の臍帯血中麻酔薬濃度と出生時の健康状態に関する前向き観察研究」、「無痛分娩から帝王切開移行時の母体および臍帯血の麻酔薬濃度と出生時の健康状態に関する前向き観察研究」、「重症同種免疫性疾患と母体免疫細胞機能との関連解析」、「妊娠・分娩・新生児期を包括した周産期データベース作成」、「重症同種免疫性疾患と母体免疫細胞機能との関連解析」、「双胎妊娠における妊娠高血圧症候群の発症予測に関する研究」、「母の妊娠・産後の菌叢並びにその出生児の生後から 2 歳までの菌叢についての調査」、「プロバイオティクスの自然早産予防効果を評価する多施設共同オープンラベル試験」、「無痛分娩導入下での分娩管理における胎児回旋異常に対する用手回旋の効果に関する横断研究」、「妊娠中や産後の運動が産後うつやマイナートラブルに与える予防効果に関する研究」、「妊娠期から学童期を紡ぐ保健・医療統合データベース基盤開発とエビデンス創出」、「致死性胎児疾患における ferroptosis 依存性胎児死亡の新規予防法の開発」、「無痛分娩の安全性向上のための分娩管理法開発に関する研究」、「双胎妊娠における妊娠中の運動負荷の安全性と産後うつに与える影響についての研究」、「産褥早期からの入浴のリスクベネフィットに関する検討」などの臨床研究を行っています。

2. 分娩実績

① 分娩件数（2023. 1～2023. 12）

	件数	割合
分娩件数	1,916	
分娩数（児数）	2,031	
生産数	1,957	
経膈分娩	1,040	53.1%
自然分娩	720	36.8%
吸引分娩	312	15.9%
鉗子分娩	8	0.4%
帝王切開	917	46.9%
予定帝王切開	453	23.1%
緊急帝王切開	464	23.7%

② 産科合併症の頻度

産科合併症（22 週以降分娩における）	件数
妊娠高血圧症候群	88
妊娠糖尿病	125
前期破水	53
前置胎盤	31
常位胎盤早期剥離	20
癒着胎盤	10
羊水塞栓	2

3-7-9-2 胎児診療科

1. 概要・特色

胎児診療科とは胎児医療を行う専門診療科で、胎児を母体に附属したものではなく、独立した個人として認め胎児を専門的に診療していく部門である。当科の目的は、子宮内の胎児に対して最善の医療を提供することであり、診療の柱は「胎児診断」と「胎児治療」である。また胎児診断に基づき適切な出生後治療を行うために他科との連携を可能とする「チーム医療」の実践を部長1名、医長1名、スタッフ2名、フェロー・レジデント3～4名の体制で行っている。

2. 診療活動

2.1 外来診療胎児診療科で行う外来は胎児診療科外来（月曜日午後、木曜日午前午後）と周産期遺伝外来（火曜日午後、水曜日、金曜日午後）に分かれている。胎児診療科外来では、他院からの紹介が主であり、胎児異常が疑われる症例に胎児精査超音波検査、胎児MRI、胎児3D・CTで画像診断による精密検査を行なっている。必要に応じて羊水検査、絨毛検査による遺伝学的検査も併用する。

周産期遺伝外来では院内、院外の患者を対象に染色体異常を中心とした出生前遺伝カウンセリング・出生前検査（羊水検査、絨毛検査、NIPT、妊娠初期コンバインド検査、クアトロテスト）を認定遺伝カウンセラーとともに行っている。2023年の1年間では全948名に遺伝カウンセリングを行った。

2023年1月1日 — 2023年12月31日

検査名	件数
羊水検査	51 件
絨毛検査	15 件
NIPT	635 件
妊娠初期コンバインド検査	68 件
クアトロテスト	51 件

2.2 胎児異常例の内訳

2023.1.1-2023.12.31の約1年間に当科にて診療した胎児異常例は計363例であった。その内訳と内容の概略を以下に示す。中枢神経系異常であれば脳神経外科、心・大血管系異常であれば循環器科、胸部・腹壁・消化器系異常であれば小児外科、泌尿器系異常であれば泌尿器科、染色体異常・奇形症候群であれば遺伝診療科と、関係する各科や新生児科と出生前から連携を密にとり診療にあたっている。

2023 年 1 月 1 日 — 2023 年 12 月 31 日

中枢神経系疾患 脊髄髄膜瘤(4)、水頭症・脳室拡大(8)、無頭蓋症(2)、くも膜嚢胞(5)など	43 例
胸部疾患 横隔膜ヘルニア(13)、肺嚢胞性疾患(8)、肺分画症(2)など	25 例
消化器・腹部疾患 小腸・十二指腸閉鎖(3)、食道閉鎖(3)、胎便性腹膜炎(3)など	12 例
循環器疾患 左心低形成症候群(2)、大動脈縮窄・離断/大動脈弁狭窄(3)、 心室中隔欠損/房室中隔欠損(16)、ファロー四徴症(2)、内蔵錯位(5)、 完全大血管転移(2)、両大血管右室起始症(5)、肺動脈閉鎖/狭窄(2)、 不整脈(1)など	50 例
泌尿器疾患 巨大膀胱(7)、水腎症(13)、嚢胞性腎疾患(4)、総排泄腔遺残(4)など	30 例
双胎関連疾患 双胎間輸血症候群(17)、sIUGR(17)、無心体(4)など	56 例
その他 胎児水腫・NT 肥厚・ヒグローム(40)、骨系統疾患(10)、 染色体異常・奇形症候群(13)、胎児発育不全(14)、口唇口蓋裂(7)、 卵巣嚢腫(2)など	147 例
計	363 例

2.3 胎児治療

胎児治療の適応となる疾患は限られているが、各種胎児治療法を幅広く行っている。その中で双胎間輸血症候群に対する胎児鏡下胎盤吻合血管レーザー凝固術が最も多く、治療成績も良好である。先天性横隔膜ヘルニアに対する胎児鏡下気管閉塞術(FETO)は、倫理委員会で承認された医療行為として行っている。胎児大動脈弁形成術、胎児膀胱鏡、脊髄髄膜瘤の胎児手術は臨床試験として実施している。

2023 年 1 月 1 日 — 2023 年 12 月 31 日 胎児治療の件数

治療名	件数	適応基準
母体抗不整脈剤投与	0 例	
胎児輸血	0 例	
胸腔・羊水腔シャント術	4 例	胎児胸水(3) 肺分画症(1)
肺嚢胞・羊水腔シャント術	0 例	
膀胱・羊水腔シャント術	0 例	
ラジオ波凝固術	3 例	無心体双胎(3)
胎児鏡下胎盤血管レーザー凝固法	20 例	双胎間輸血症候群(17) sIUGR(3)
胎児鏡下気管閉塞術 (FETO)	3 例	先天性横隔膜ヘルニア(3)

羊水注入	1 例	Potter 症候群(1)
E X I T	2 例	喉頭閉鎖(1) 横隔膜ヘルニア(1)
胎児膀胱鏡	0 例	下部尿路閉鎖(0)
胎児大動脈弁形成術	2 例	大動脈弁狭窄(2)
計		

3. 研究活動

胎児診療科で行っている臨床研究は、胎児治療法の推進と普及に関する研究として 1)「重症大動脈弁狭窄症に対する胎児治療の早期安全性試験」、2)「胎児下部尿路閉塞（Lower Urinary Tract Obstruction; LUTO）に対する胎児鏡下診断・治療の早期安全性確認試験」、および AMED 研究費で大阪大学と共同で 3)「胎児脊髄髄膜瘤の早期安全性試験」を実施している。また、現在実施している胎児治療の成績や予後調査における研究として、4)胎児治療後の長期予後調査システムの開発に関する研究や、5)「重症 selective IUGR に対するレーザー手術のコホート研究」を実施している。さらに、予後不良の胎児疾患における治療法の研究として、6)「胎児十二指腸・空腸閉鎖症の疾患レジストリによる臍帯潰瘍の病態解明と発症予測の研究」、7)「胎児疾患における酸化ストレスによる胎盤機能不全の病態解明」、8)「ゲノム解析による胎児水腫の原因と病態生理の解明に関する研究」を実施している。そして、AMED 研究費で東京慈恵会医科大学との共同研究として「段階的胎生臓器補完による網羅的慢性腎不全の抜本的治療法の開発」を実施している。

3-7-9-3 不育診療科

1. 概要・特色

1.1 不育診療科・妊娠免疫科

不育症とは、妊娠は成立しても流産や死産を繰り返して生児を獲得することができない状態です。2 回以上連続した流産や 1 回でも死産の既往がある場合には、当科では不育症検査を行って原因を探索し、検出された病因にて対して適切な治療を行い、次回妊娠で生児獲得を目指しています。偶発的な流産を繰り返した場合など、実際には一般検査で異常を特定できない症例も多いですが、その場合であっても心理面でのサポートなども含めた厳重な妊娠管理を行っています。

1.2 当センターにおける不育診療の特色

不育症を専門的に取り扱っている病院は全国的にも少ないですが、当センターでは、開院当初より独立した不育診療科として専門外来を設けています。成育医療の特色を活かして、産科・胎児診療科・新生児科・不妊診療科・母性内科・遺伝診療科など各

診療科との連携により、妊娠成立から出産までにわたる包括的な診療を行うことが可能となっています。また、こころの診療部とも連携し、精神心理面でのケアに関しても留意しています。

2. 診療活動

2.1 外来・病棟診療

専門外来を週4日行っています。不育症患者に対して行われている原因検索は多岐にわたっており、検査項目（血液凝固系検査・免疫学的検査・内分泌的検査等）は年度ごとに最新の知見を取り入れ随時検討し変更しています。

検査で見つかった異常に対しては EBM に基づいて適切な治療を行っています。主な治療としては、凝固異常や抗リン脂質抗体症候群の場合の抗凝固療法（アスピリン内服やヘパリン注射）、甲状腺機能異常や糖尿病などの場合のホルモン治療などが挙げられます。また治療を行うも再度流産に至った場合は、次回妊娠のために流産染色体検査を積極的に行って原因の特定に努めています。

2.2 治療成績

2022年の初診患者数は132名、平均流産回数2.8回（最高10回）でした。不育症に対する精査後に妊娠し予後が確認された患者数は70名で（化学流産、予後不明者を除く）、生児獲得率は77%でした。主な治療の内訳はヘパリン注射+低用量アスピリン治療は12例、低用量アスピリン治療は42例、大量ガンマグロブリン療法は5例です。

3. 研究活動

現在、「不育症患者の患者背景、検査別陽性頻度、治療成績などを登録した臨床データベースの作成」、「流死産後の妊娠予後に影響する因子に関する検討」などを行っています。

3-7-9-4 新生児科

1. 診療体制

2012 年度より当周産期センターは東京都より総合周産母子医療センターの認可を受け、所属する世田谷・目黒区の地域の周産期医療のカバーのみならず、多摩地区の産科救急もカバーする事となっている。2013 年以降は、認可新生児集中治療室(NICU)病床を

21 床、認可回復治療室（GCU）病床を 30 床（4 階 18 床＋6 階 12 床）に増床し、大規模に新生児医療を行っている。周産期専門医（新生児）のスタッフ 10 名、フェロー 6 名、レジデント数名で診療を担当している。

2. 診療実績

2022 年 1 月 1 日から 2022 年 12 月 31 日までに当センターで生産児として出生した在胎 22 週 0 日以降の新生児は 2,027 名であった。母体や児に何らかの問題があり、新生児科への入院扱いとなった児は計 1,611 名 (79%) であり、当センターのハイリスク分娩の率は 79% であった。内訳は、出生直後に NICU への入院が必要となった児が 319 名 (16%)、GCU への入院が必要であった児が 197 人 (10%)、新生児室への入院が必要であった児が 1,094 名 (54%) (後に NICU や GCU へ入院した児名を含む) で、赤ちゃん部屋への入院 (特に新生児科的治療・管理を要さない児) が 16 名 (21%) であった。尚、蘇生室で死亡した症例が 1 名あった。

院外出生した児の受け入れも合わせると、NICU/GCU への総入院数は 781 名であった。NICU への総入院数は 430 名で、院内出生が 355 名 (83%)、院外出生が 75 名 (17%) であった。NICU 入院中の死亡数は 17 名であった。過去 10 年間の NICU への入院数の推移を示す (図 1)。

A. 早産・低出生体重児の診療

超・極低出生体重児、超・極早産児の NICU 入院数の経年推移を図 2、図 3 に示す。当院では、慢性期の合併症の治療目的の転院入院も多いため、図は生後 7 日未満に入院した症例を示している。

出生体重別の入院数 (カッコ内は 7 日未満入院の症例数) は、低出生体重児 (出生体重 2500g 未満) が 241 名 (234 名)、極低出生体重児 (出生体重 1500g 未満) が 60 名 (56 名) で、うち、超低出生体重児 (出生体重が 1000g 未満) が 30 名 (28 名) であった (図 2)。在胎週数別では、37 週未満の早産児が 209 名 (200 名) で、32-36 週の Moderate-Late preterm 児が 158 名 (152 名)、32 週未満の極早産児が 51 (48 名)、うち 26 週未満の超早産児は 10 名 (10 名) であった (カッコ内は、7 日未満入院の症例数) (図 3)。

B. 病的新生児の診療

2022 年に当センター NICU に入院となった児 430 名中、気管挿管での人工呼吸管理を要した児は 181 名 (42%) で、挿管なしで非侵襲的呼吸管理 (n-CPAP や high flow canula のみ) であった症例は 85 名 (20%) であった。また、外科手術は延べ 94 件施行した。内訳は、心臓血管手術 28 例 (30%) (うち 7 例は動脈管開存症クリッピング術)、小児外科手術 43 例 (46%)、眼科手術 4 例 (4%) レーザー治療は 3 例、脳外科手術 5 例 (5%)、その他の手術 14 例 (4%) であった。図 4 に NICU 入院児の手術症例数の推移を示す。

C. 長期入院患者・在宅医療への移行患者の診療システム

NICUへの長期入院患者の蓄積が起こらないように、総合診療部、循環器科、小児外科などの他科の協力の下、積極的な院内での NICU から乳幼児病棟への転病棟を図っている。その結果、2022年は、NICU 入院患者430名のうち83%は NICU/GCU/新生児室から直接自宅への退院に至っていたが、32例(約7%)は当センター内の乳幼児病棟へ転棟し、7例(2%)は小児 ICU 病棟へ転棟し、35例(8%)は他院 NICU あるいは他院小児科病棟へ転院していた。

図1：NICU総入院数



図2：超・極低出生体重児 年間入院数
(日齢7未満入院症例のみ)

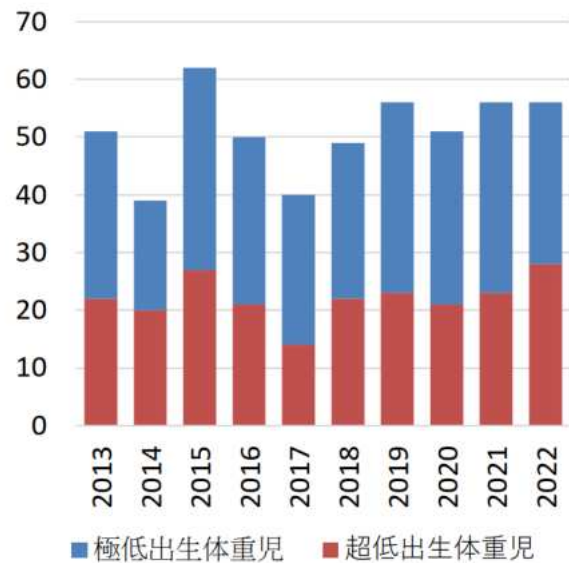


図3：超・極早産児 年間入院数
(生後7日以降入院例除外)

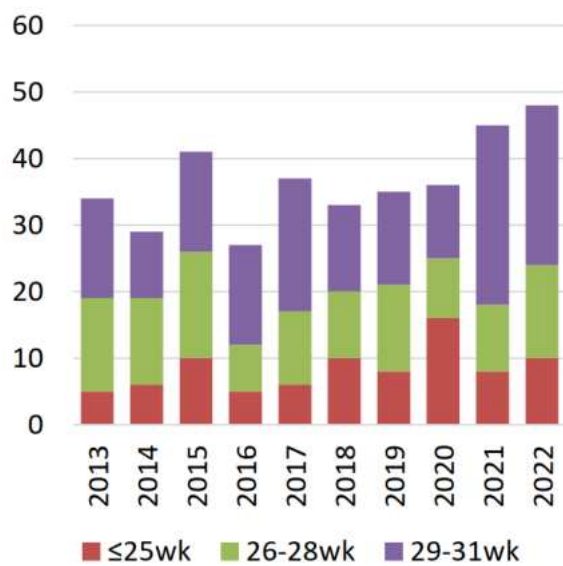
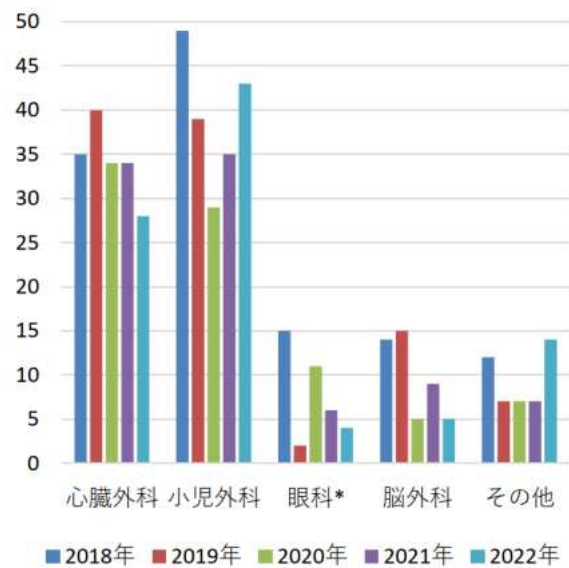


図4：NICU入院例の年間手術件数



3-7-9-5 産科麻酔科

1. 診療体制

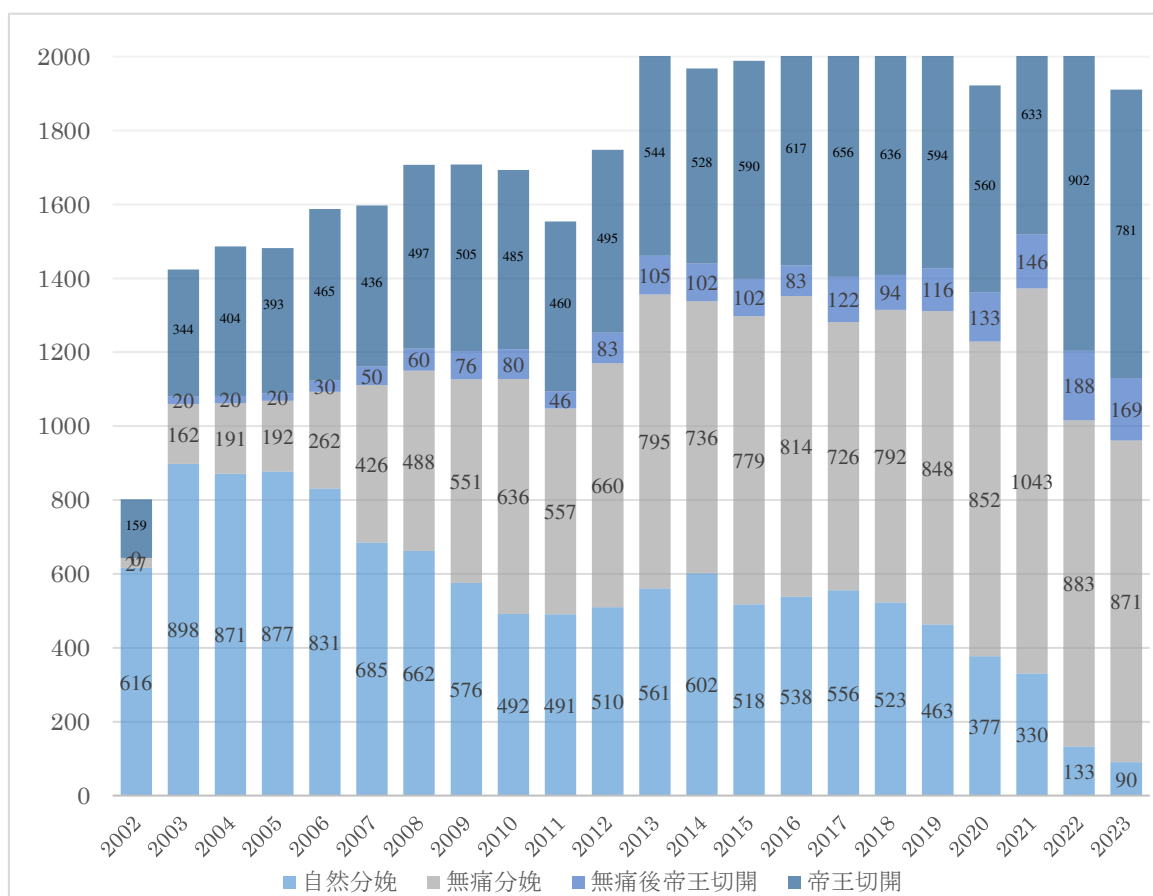
2023 年の産科麻酔科の人員配置は、医員 4 名、麻酔科フェロー・レジデント 2～3 名、産科からのローテーター 0～1 名で業務に従事し、24 時間体制で成人麻酔および産科麻酔の業務に対応した。

2. 診療実績（帝王切開、無痛分娩：麻酔科として分娩数ではなく母体数でカウントする）

2023 年（1 月 1 日～12 月 31 日）の分娩数は 1,901 件であった。

帝王切開の手術件数は 781 件（予定手術 358 件、緊急手術 423 件）であった。

無痛分娩は 24 時間体制で対応し妊婦が希望する時点での導入を基本とし、件数は増加傾向にあり 2023 年は合計 1,040 名（22 週以降 1,007 名、22 週未満 33 名）で経膈分娩 9 割に無痛分娩を行い希望者が増加傾向にあり、そのうち 169 名（16.4%）が帝王切開に移行した。



3. 胎児治療の麻酔

双胎間輸血症候群に対する胎盤血管レーザー凝固術は、母体に対しては脊髄くも膜下硬膜外併用麻酔により十分な鎮痛を達成し、さらに少量のレミフェンタニルを持続投与することで胎児の不動化を達成している。2023 年の胎児鏡下胎盤血管レーザー凝固術は 20 件、無心体双胎に対するラジオ波焼灼術を 3 件、先天性横隔膜ヘルニアに対するバルーン閉塞術 3 例、EXIT 2 例 胎児大動脈弁形成術 2 例の麻酔管理を行っ

た。また病棟手術室における、レミフェンタニルを用いた胎児胸腔穿刺およびシャント術4例の管理を行った。

4. その他の産科関連の麻酔

外回転術の麻酔管理は手術室で脊髄くも膜下硬膜外併用麻酔により管理しており、2023年の外回転術の症例数は11件であった。

5. 成人手術の麻酔（産科以外）

子宮内容除去術は25例であった。

6. 周産期麻酔外来

周産期麻酔外来では、帝王切開が予定された妊婦や無痛分娩を希望する妊婦に加えて、ハイリスク妊婦の分娩前診察（スクリーニング）および成人手術を受ける患者の外来を行っている。2023年の外来患者数は1,832名であった。

3-7-9-6 母性内科

1. 診療実績

1.1 母性内科外来

外来患者数 1日平均 38.01人、延べ9,312人、新患患者数 605人、管理

（1）2023年の初診状況	総数	%
妊娠前	62	10.2
妊娠前	62	10.2
妊娠中	501	82.8
産褥期	38	6.3
時期不明	4	0.7
計	605	100.0

2023年1月～12月	総数	%
内科合併症（セカンドレベルを含む）	465	76.9
妊娠合併症	76	12.6
偶発疾患	20	3.3
その他	44	7.3
計	605	100.0

(2) 依頼元

2023 年1 月～12 月	総数	%
他院	186	24.3
産科・不妊診療科・胎児診療科	228	29.8
不妊診療科	4	0.5
その他診療科	9	1.2
なし	4	0.5
不明	174	22.7
計	601	100.0

(3) 疾患別初診状況(重複あり)

2023 年1 月～12 月	総数	%
膠原病、抗リン脂質抗体症候群	64	10.7
内分泌・代謝	242	40.5
腎・高血圧	109	18.3
呼吸器・アレルギー	39	6.5
感染症・免疫	78	13.1
循環器疾患	13	2.2
消化器疾患	8	1.3
神経疾患	7	1.2
血液疾患	18	3.0
その他	19	3.2
計	597	100.0

1.2 特殊外来

(1) 耐糖能評価(糖負荷試験)外来 756 人

(2) ワクチン外来：妊娠中ワクチン接種人数：インフルエンザ 168 人

産後ワクチン接種人数：MR 145 人、麻疹 72 人、風疹 113 人、水痘 54人、ムンプス 253 人、HBV 1 人

(3) セカンドオピニオン外来 4 人(膠原病 3 人、先天性血栓性素因 1 人)

1.3 妊娠前検診

「プレコンセプションケア・チェックプラン」検診 9 人※；プレコンセプション相談外来 25 人

1.4 病棟

(1) 母性内科入院管理実績

延べ数 768 人（主たる疾患で算定）、その内訳：妊娠前 28 人、妊娠期 642 人、
産褥期 98 人

(2) 妊娠・分娩時に母性内科管理となった疾患の種類（延べ人数）

内科合併症 586 人、妊娠合併症 136 人、偶発疾患 13 人、分類不明 13 人

表 妊娠・分娩時に母性内科管理となった主な疾患と患者数（小分類）

妊娠糖尿病	194	SSA陽性、シェーグレン症候群	7
橋本病・潜在性甲状腺機能低下症	112	IgA腎症・その他の慢性腎炎	10
妊娠高血圧症候群	178	HBVキャリア	1
バセドウ病	43	てんかん	3
気管支喘息・咳喘息	38	抗リン脂質抗体陽性	9
高血圧	33	膠原病以外の免疫疾患	42
SLE	14	1型糖尿病	1
妊娠性一過性甲状腺機能亢進症	5	2型糖尿病	10
関節性リウマチ	14	その他の妊娠前からの疾患罹患	5

2. 研究活動

- ・周産期・母性診療センター他部署、内分泌代謝科、妊娠と薬情報センター、研究所、関連学会（日本糖尿病・妊娠学会、日本リウマチ学会）などと協働し、公的研究費を得て研究活動を行い、成育医療分野での情報発信と政策提言を行った。また特定臨床研究も行った。
- ・不妊症に対するタクロリムス治療（先進医療B）、新生児ヘモクロマトーシスの母体治療（医師主導治験）、新たなHBV母子感染予防方法の開発（医師主導臨床研究）、妊娠合併症の新たなバイオマーカーの開発、妊婦および新生児における百日咳菌抗体保有率の評価、6NC職員における新型コロナウイルス感染症の実態と要因に関する多施設共同観察研究、妊娠中の潜在ウイルス再活性化に関する研究開発の研究遂行もしくは準備をした。

3. 研修、評価

毎週金曜日にカンファランスを行っている。また月 1 回看護部等関連部署と妊娠糖尿病カンファランスを継続した。毎週火曜日には膠原病関係の外来カンファランスを行っている。

4. 社会的活動

講演を中心に当該分野の広報を行った。母性内科に関する公開研究会などを通じて広報に努めた（研究業績参照）プレコンセプションケアの広報活動にも力を入れた。

3-7-9-7 不妊診療科

1. 概要・特色

本邦の公的センターである周産期・母性診療センターに所属する当不妊診療科は、診療を希望して来院する患者様に最適なタイミングで不妊治療を受けていただくために、予約制をひいており、2023 年時点では土曜日の午前診療も行っています（2024 年 10 月からは土曜日診療は休診中です）。女性の社会進出が一因とも言われていますが、受診・治療を希望する女性の高年齢化が見受けられます。また、一般不妊クリニックにて加療するも妊娠に至らない難治性不妊と思われる症例が対象となっています。また、生殖補助医療技術の多様化に伴い、着床前遺伝学的検査（PGT）も開始しております。のこれらの症例に対して当科は、母性内科をはじめとして不育診療科、産科、婦人科、胎児診療科、遺伝診療科、こころの診療部など当院他科との協力しながら診療にあたっています。

2. 診療活動

2023 年 1 月 1 日時点で勤務する医師は、診療部長 1 名 医員 2 名 フェロー 1 名（+育児休業 1 名）非常勤医 1 名 培養士 3 名 合計 8 名（+育児休業 1 名）でスタートしました。3 月末に医員 1 名 非常勤医 1 名が離職し、4 月にフェロー 1 名が育児休業から復帰しました。5 月にフェロー 1 名が入職し、9 月下旬にフェロー 1 名が産休に入りました。

診療はじっくりと患者に向き合う体制を整え、不妊診療にまつわる、ストレスや心の悩みなどを聞きながら診療に従事しております。

初診患者数

年	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
患者数	369	247	353	412	349	270	332	287	213

新型コロナウイルス感染症による受診制限の可能性が一つの原因として考えられた 2020 年の初診患者数減少から、昨年もここ数年の変化に位置する新患患者数となっていました。また、当

科の人員減少に伴った減少の可能性があります。

配偶者間人工授精数

年	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
患者数	726	800	515	525	385	191	263	239	233

2016 年 800 症例、をピークに減少傾向をみせ、2020 年 191 症例と減少した配偶者間人工授精数 (AIH) は、2021 年は 263 例と増加して、その後横ばいとなっています。その分、人工授精処置による妊娠数も増加していました。適応患者様の受診数が増えたこと、生殖補助医療 (ART) に比べて安価で簡便な AIH が見直された結果と考えています。

生殖補助医療治療実績

年	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
採卵件数	147	124	128	164	118	151	137	114	120	141	110
新鮮胚移植妊娠数	6	6	6	5	3	3	0	1	1	1	1
融解胚移植数	136	142	137	166	211	215	220	184	202	187	162
融解胚移植妊娠数	27	34	25	39	46	48	56	41	55	55	44

2023 年の採卵数は 110 症例、融解胚移植数は 162 例でした。両治療を、2022 年に比較すると、採卵数と融解胚移植数は減少していました。

コロナ感染症に対する対策の一つとして 2020 年 9 月より Yadoc システムを利用して不妊オンライン相談を開設し、2021 年は 3 名、2022 年は 8 名、2023 年は 6 名のオンライン相談を実施できました。新規の検査・治療として高度精子調整機器の導入、ART 治療における着床障害の検査として慢性子宮内膜炎に対する検査も開始しました。着床前遺伝学的検査として PGT-A (Preimplantation genetic testing for aneuploidy) 検を実施した周期数は 18 周期、新たに開始した PGT-M (Preimplantation genetic testing for Monogenic) 検査を実施した周期数は 2 周期でした。

治療症例では高齢化が認められ、今後もこの傾向は続くと考えられ、体外受精、顕微授精・凍結融解胚移植といった生殖補助医療を用いた治療でも妊娠成立を達成できない難治性の症例に対して、着床前遺伝学的検査や慢性子宮内膜炎の検査をはじめとした様々な検査法のアプローチがなされていくと思われます。

3. 研究・啓発活動

体外受精時に、妊娠率が高くなる条件の検討として、タイムラプス培養の培養結果や子宮内膜厚などの関連因子に対しての研究を実行中です。また、加齢に伴う妊孕性の低下に伴う妊娠率の低下や不妊治療の困難さを広く世間に知ってもらう為の啓発活動も続行中です。

3-7-9-8 周産期歯科

2023 年 1 月～2023 年 12 月の診療実績

新患患者数 105 人、延べ患者数 401 人

初診時妊娠週数状況

妊娠週数	初期	中期	後期	産後	他
人数	13	54	28	9	1

全身疾患を有する妊婦受診状況（合併症あり）

疾患名	なし	自己免疫	内分泌・代謝	腎・尿路	呼吸器・アレルギー	感染症	循環器	消化器	神経	血液	その他
人数	70	4	19	0	3	0	9	0	0	0	6

初診時受診理由状況（複数回答あり）

理由	歯痛	知覚過敏	歯肉の異常	修復物脱離	虫歯	虫歯予防	口腔清掃	歯科健診	口臭	その他
件数	23	20	24	10	12	7	53	46	4	43

診療内容（2023 年 1 月～2023 年 12 月）

診療内容	人数
歯科健診	105
齲蝕治療（虫歯治療・根管治療等）	43
フッ化物塗布	29
歯周基本治療（歯石除去・歯面研磨等）	93
象牙質知覚過敏処置	14
抜歯処置	2
顎関節症治療	5
外傷治療	2
粘膜疾患治療（口内炎・粘液嚢胞等）	1
エックス線撮影	21
その他	12

3-7-10 臓器移植センター

3-7-10-1 小腸移植外科

- (1) 当センターにおいて R5 年度までに実施された 5 件の小腸移植について、移植腸管の内視鏡による評価を適宜行うとともに、移植外科、紹介元の小児外科医とも連携しながら、栄養ならびに全身の管理をおこなってきた。
- (2) 短腸症、小腸不全関連肝障害の患者の評価と治療、栄養管理を実施した。
- (3) 肝移植後前後の患者における嘔吐や下痢といった消化器症状の評価と治療、栄養管理を移植外科とともに実施した。

以下に、2023 年に行った内視鏡診療実績を示す。

2023 年 1 月～12 月 内視鏡件数： 877 件

上部消化管内視鏡	383 件	食道静脈瘤結紮術	6 件
下部消化管内視鏡	293 件	内視鏡的止血術	2 件
小腸カプセル内視鏡	139 件	ポリペクトミー	3 件
小腸内視鏡	44 件	バルーン内視鏡（経肛門法）	3 件
バルーン内視鏡（経口法）	4 件		

3-7-10-2 移植外科

当センターでは肝移植を 2005 年 11 月より開始し、2023 年末までに肝細胞移植を含め 932 例の臓器移植を実施してきました。2023 年は生体肝移植 50 例、脳死肝移植 12 例、脳死小腸移植 1 例、心移植 2 例、生体腎移植 8 例、脳死腎移植 1 例を行いました（図 1）。また腹腔鏡下の生体ドナーグラフト摘出術を 3 例行いました。肝移植適応疾患の内訳は図 2 の通りで胆道閉鎖症を含む胆汁うっ滞性肝疾患が 52%、代謝異常症が 19%、急性肝不全が 12%でした。ES 細胞由来の肝細胞移植に関する医師主導治験を 2020 年に開始し、目標症例数の 5 例の実施を完遂いたしました。

当センターにおける肝移植後の患者生存率は 1 年 95.4%、5 年 93.5%、10 年 92.0%、15 年 89.0%と良好な治療成績でした（図 3）。

図1 肝移植・肝細胞移植・小腸移植・腎移植数 (総移植症例数：853 例)



図2 肝移植適応疾患

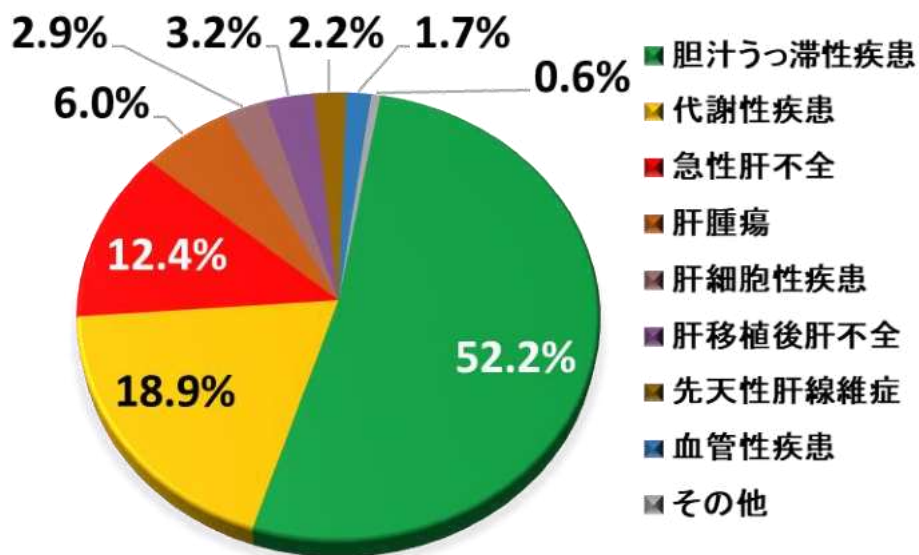
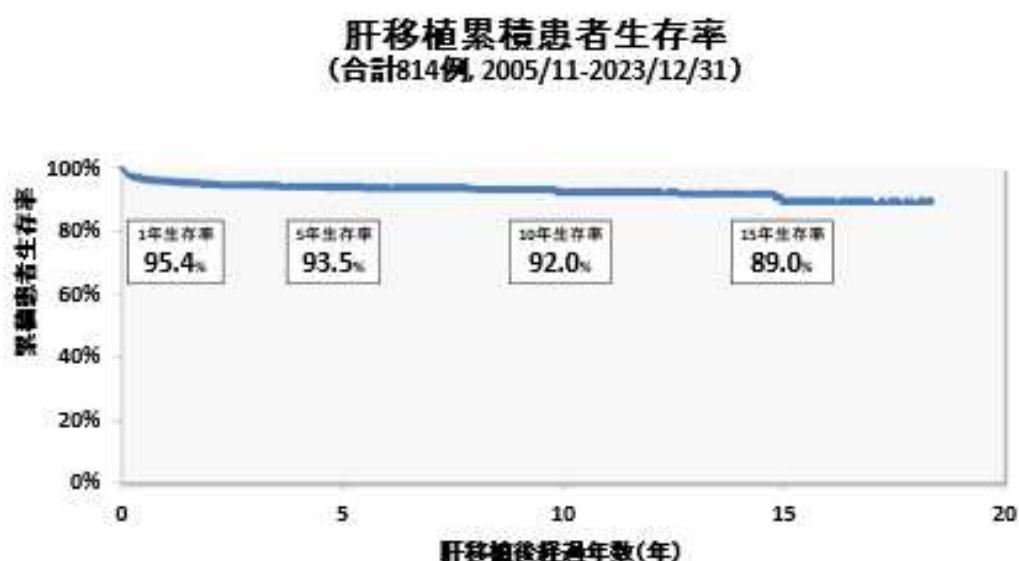


図3 肝移植患者生存率 (Kaplan-Meier 法)



3-7-10-3 心臓移植科

心臓移植科では、心臓移植手術に加えて心臓移植適応となる重症心不全患者に対する補助人工心臓手術を実施している。2023 年は心臓移植手術2件、補助人工心臓手術2件を実施した。その他、これまで移植を実施された患者の外来診療および定期的な心臓カテーテル検査、心筋生検を実施している。移植後患者の心臓カテーテル検査および心筋生検は 2023 年に 18 件実施した。移植後の管理は臓器移植センター他科および高度先進医療研究室と連携しながら行っている。

また、2023 年には補助人工心臓治療を導入予定の施設より医師1名の長期研修およびメディカルの見学も受け入れた。

3-7-11 遺伝診療センター

3-7-11-1 遺伝診療科

小児・周産期のゲノム医療の診療体制充実のために 2022 年 9 月に院内組織として新設された遺伝診療センターは、本格的な稼働となっている。病院部門からは遺伝診療科・ライソゾーム病センター、周産期遺伝外来(周産期・母性医療センター)、総合診療部、新生児科、神経内科、眼科、皮膚科のスタッフが参加し、研究所部門からはゲノム医療研究部、周産期ゲノミクス研究室、衛生検査センターの各スタッフが参画する総合的な体制となった。この体制の下、小児・周産期のゲノム情報を集約化し、それを利活用することによって質の高い

医療の提供と研究の推進を目指すことが目標である。

遺伝診療科では、成育医療のなかに新しい遺伝子診断・治療技術を適切かつ効果的に導入し、診療・研究活動を行っている。本年度は、以下に示す様々な活動を行った。

1. 遺伝学的検査の統括・管理

先天異常や遺伝性疾患患者の診療において遺伝学的検査は有用である。日本医学会より遺伝情報を取り扱う上での留意点などをまとめた「医療における遺伝学的検査・診断に関するガイドライン」（日本医学会 2022.3 改訂）を遵守、実施している。

2. 小児先天異常症の包括的診療

さまざまな先天異常を有する患児の診療を行っている。2023 年度、新規の受診患者数は 205 名（遺伝カウンセリング除く）であり、前年度同様に、内訳は染色体異常症、奇形症候群、診断不明症例で、2/3 を占める。コロナ禍の受診患者数の減少から、以前の受診状況に戻りつつあった。遺伝学的検査は診療報酬改定において、対象疾患が拡充されてきており、対象となる遺伝子疾患が疑われる際は、関係学会のガイドラインを遵守し、遺伝学的検査（保険収載）を実施した。診断不明症例に対して、積極的に次世代シーケンサー等を用いて、既知遺伝子および候補遺伝子の網羅的変異解析研究を実施し、先天異常・多発奇形症候群の確定診断率が向上した。

またライソゾーム病センター、臨床検査部高度先進検査室と連携して、ライソゾーム病をはじめとする先天代謝異常症の確定診断、保因者診断、出生前診断、治療、治験、新生児スクリーニングなどを行っている。ポンペ病新生児スクリーニングは 2023 年の当センター全出生新生児 1,783 名のうち 1,515 名（85%）を対象に実施した。また高度先進検査室と連携して、院内ラボで 170 件の遺伝子学的検査を実施した。

3. 遺伝カウンセリングの実施

遺伝カウンセリングは、遺伝病を有する家族の再発率や出生前診断の可能性について正確な情報を提供し、それに基づく当事者の自己決定を支援する医療行為である。当科では、臨床遺伝専門医と看護師（遺伝コーディネーター）が協力して遺伝カウンセリングを実施している。心理・社会的な支援を含め、多様なニーズに的確に応えられる体制を確立している。2023 年度の新規の遺伝相談者数は 109 件（158 名）である。前年同様、相談内容の多くは、小児科領域の染色体異常症・先天異常症、次子再発、保因者診断に関わる相談事例であった。昨年度より、オンライン遺伝相談窓口を開設し、5 件（延べ 14 件）実施した。

4. 出生前診断の適切な運用

当科では、胎児診療科・臨床検査部との協力の下に、羊水・絨毛組織を用い、迅速かつ正確な出生前遺伝子診断を実施可能な体制を整備している。2023 年度、単一遺伝子疾患を対象とした出生前診断（羊水染色体除く）は、12 件実施した。実施にあたり、症例ごとに慎重な対応を行っている。胎児診療科で実施している無侵襲的出生前遺伝学的検査（NIPT）については、陽性症例等の希望者にカウンセリングを実施した。着床前遺伝学的検査（PGT-M）の遺伝カウンセリングを担当し、日本産科婦人科学会に申請・承諾（当センター初例）され

た。今後も、周産期診療部・不妊診療科と連携し、適正な診療基盤の構築を目指す。

5. 遺伝性疾患に対する臨床研究、新規治療法の開発研究と臨床応用

① 新規遺伝子診断法の開発

「染色体または遺伝子に変化を伴う疾患群の包括的遺伝子診断システムの構築」研究、「先天奇形症候群における遺伝的要因の探索」研究、「エピ・ゲノム解析による先天性疾患発症機序の解明」研究など研究所や他施設との共同研究では、次世代シーケンサー等を用いて、既知遺伝子および候補遺伝子の網羅的変異解析を実施した（2023 年 170 検体）。疾患関連遺伝子の同定、治療や予防法、正確な遺伝相談のために有益な情報などが得られ、小児稀少疾患の確定診断率が著明に向上しており、これらの研究基盤をもとに、「新生児集中治療室における精緻・迅速な遺伝子診断に関する研究開発」や「原因不明の小児突然死の包括的死因検索」において、遺伝学的解析・遺伝カウンセリング等の診療基盤体制の構築、がんゲノムパネル研究エキスパートパネルの支援を行っている。

② 公的研究（競争的研究費等）

厚生労働科学研究費補助金（難治性疾患克服研究事業）研究、AMED 研究事業、成育医療研究開発事業に従事した。

6. 広報・研修セミナー・臨床遺伝専門医・認定遺伝カウンセラーの研修

当センターは、日本人類遺伝学会・日本遺伝カウンセリング学会の臨床遺伝専門医制度の認定研修施設であり、随時、院内外からの見学・研修を受け入れている。2023 年度は、新規に臨床遺伝専門医を 4 名が取得した。

3-7-12 医療 AI/DX・医療機器開発部

3-7-12-1 開発推進室

2023 年 4 月に医療 AI/DX・医療機器開発部が発足した。定期的にミーティングを開催し、小児領域の小さな市場において医療機器を開発し上市していくことの難しさを共有するとともに、2023 年 11 月に岡山大学主催で開催された「2023 年度次世代医療機器開発人材育成プログラム医療機器開発コース」に参加し、院内メンバーで月例会議を開催して突破口について議論を重ねた。

開発推進室としては、当院独自の医療機器開発および研究を始めることを目標に、がんセンター東病院の成功例に倣うべく、2024 年 2 月、3 月に同院 NEXT 医療機器開発センターへの見学へ向けた調整を行った。また、臨床においては、手術支援ロボットの導入に向けて、intuitive 社のトレーニングセンターへ出向いて実機の操作体験をし、2023 年 6 月と 12 月に導入へ向けた勉強会を開催し、国内外のロボット支援手術の動向や国内大学病院小児外科および小児病院での導入状況、財政面などに関して情報共有した。

3-7-12-2 開発支援室

開発支援室は、主に研究開発に関連した企業との連携推進や研究費獲得に係る支援、情報収集等を担当した。具体的には、研究推進室(RA室)と連携し、AIホスピタル事業の後継である単年度事業「研究開発とSociety5.0との橋渡しプログラム(BRIDGE)」に研究支援チームの一員として参画し、同事業の研究費獲得および研究課題6件(「次世代スマートホスピタルでの電子カルテシステムの活用」、「AI実装およびサービス提供のためのプラットフォーム構築」、「妊産婦救急トリアージシステムの開発」、「自閉スペクトラム症の早期発見に有用な視線計測を応用したAIによる進化型診断補助装置の開発」、「小児がんの診断支援システムの開発」、「webアプリケーションを用いた細菌の菌種判別に関するAIプログラム医療機器の開発」)の遂行に関する支援を行った。

また、AI等に関連した約10社の企業との面談、および、日本メディカルAI学会等の関連学会を通じてAI開発等の最近の動向に関する情報収集を行った。企業側から、医療現場におけるデータ等の円滑な活用、医療従事者と意見交換可能な場の提供とクリニカルニーズの把握、小児と成人の両方の診療に資するAI開発を視野に入れること等の意見を伺った。また、生成AIが開発のトレンドであること、画像解析の研究が多い一方でその他の身近なAI開発に関する報告が比較的少ないことから、次年度の方向性として電子カルテへの音声入力及び遠隔診療に関連した開発等を課題に挙げた。

3-7-13 放射線診療部

3-7-13-1 放射線診断科

1. 概要および特色

1.1 24時間体制の放射線診療業務

放射線診断科の最重要目標は患者さんならびに臨床医に役立つ画像診断情報の提供で、ほとんど全ての画像診断(心臓超音波、心臓MRI、心臓カテーテル検査、産婦人科超音波、歯科の単純X線撮影を除く)に対して放射線科医が責任を持って読影報告書を作成しています。夜間休日にも超音波検査、単純X線撮影、X線透視検査、およびCT検査に当直体制で常時対応し、リアルタイムに救急診療をサポートしています。また、各診療科と定期的にカンファレンスを行い、画像診断に関して各診療科からフィードバックが行える体制をとっています。

2. 診療活動、研究活動、研修活動など

2.1 放射線診断

各種画像診断は、放射線科診断医(状況に応じ診療科担当医と協同で)が診療放射線技師とともにを行っています。2023年は、スタッフ(放射線診断専門医)6名、フェロー2名、レジデント2名の体制でした。以下に放射線検査件数の推移を示します。2023年の総検査件数は69,543件でした。2023年は前年までと比較し単純X線撮影の検査件数が増加していま

すが、コロナ禍の影響を脱却し外来受診が増加したことがその要因と推測されます。
画像下治療（インターベンショナルラジオロジー/IVR）の認知度が高まった現在は、先天性脳血管奇形の脳血管内治療、小児肝移植に関連した経カテーテル的治療に加え、産科危機的出血に対する動脈塞栓術などを、関係診療科と共同で行っています。

放射線検査件数の推移

検査	2021	2022	2023
CT	4,916	4,855	4,828
MRI	4,270	4,260	4,351
核医学（RI）	814	773	760
血管造影・IVR	76	84	82
ポータブル X 線撮影	15,659	18,559	19,708
外科用イメージ	485	532	636
体幹・表在 超音波	10,068	10,305	10,955
単純 X 線撮影	22,962	23,767	27,165
透視・造影	933	1028	1058
総計	60,183	64,163	69,543

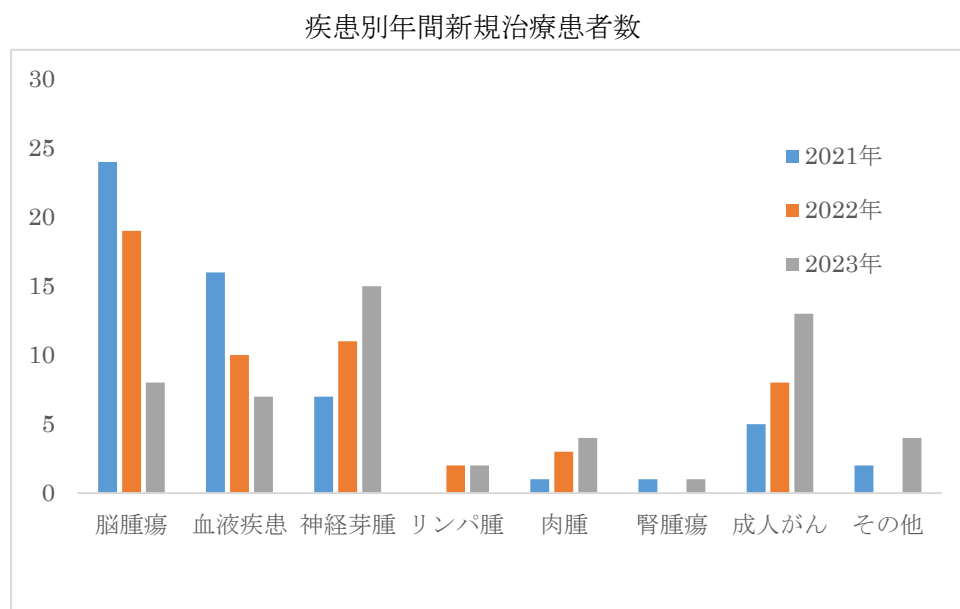
2.2 核医学診断

核医学診断業務は放射線診断業務の一部と考えて行っています。2023 年は合計 760 件行いました。成人を主な検査対象とする病院において年少児への検査は鎮静下に行われますが、当センターでは脳や心臓の SPECT 検査を除いて、患児に好きなアニメーションを持参してもらい液晶モニターで見せることにより、できるだけ無鎮静で検査を行うようにしています。小児核医学検査については、以前より小児の体格に合わせた投与量で検査を行ってきましたが、2013 年に日本核医学会より公表された小児核医学検査投与量ガイドラインを参照して投与量を決定し、検査を実施しています。

3-7-13-2 放射線治療科

小児がんには白血病、リンパ腫、脳腫瘍、神経芽腫、骨軟部肉腫などがありますが、成人のがんに比べると稀な病気です。本邦では年間およそ 500 人の小児がん患者が放射線治療を受けていると考えられていますが、これは本邦で放射線治療を受ける患者全体の 0.5%にすぎません。このため一人の放射線治療医が、小児がんの患者さんの治療を行う機会が少なく、小児がんに関する専門的な知識を持つ放射線治療医も多くありません。放射線治療科では小児専門病院としての診療実績と、最新の小児がん治療に関する情報を踏まえて、専門性の高い放射線治療を提供しています。当センターでは子どもたちが治療を受け入れやすい環境を整備し、子ども特有の放射線治療技術を用いて、がんの子どもたちができるだけ快適に

放射線治療を受けられるようにしています。また当科では、稀な病状に対する治療方針について情報交換したり、陽子線治療の必要な患者さんを紹介するなど、他の施設の放射線治療医との連携も積極的に行っています。



国立成育医療研究センターで1年間に放射線治療を受ける新規患者数は約50人で、延べ約60人です。そのうちおよそ8割は、脳腫瘍やその他の固形腫瘍の患者さんです。

1. 国立成育研究センターの放射線治療の特性

放射線治療では治療中動かないこと、室内に一人であることが求められます。このようなことは、子どもにとって容易ではありません。チャイルドライフスペシャリストによる治療の練習などの心理的プレパレーションは放射線治療の受け入れをよくするのに役立ちます。国立成育医療研究センターでは、10歳未満の子どもたちの約5割に心理的プレパレーションを行い、3歳未満でも、麻酔や鎮静なしで放射線治療を行っています。また全体の1割程度の患者さんでは麻酔下の照射が行われます。麻酔科専門医による麻酔により、安全で正確な放射線治療が行われています。

2. 全身照射

小児の悪性腫瘍の中で最も多いのが白血病です。全身照射は、造血幹細胞の移植に先立って血液細胞や悪性の細胞を死滅させる前処置として行われます。当センターでは抗がん剤による移植前処置が困難な場合などを中心に年間10-15人の全身照射を行っています。最近では悪性腫瘍以外の疾患に対する移植前処置として、少ない線量の全身照射も数多く行っています。

3. 脳腫瘍や固形腫瘍の治療

当センターで1年間に脳腫瘍やその他の固形腫瘍に対する放射線治療を実施する患者さんは、約40人です。小児の脳腫瘍もその他の固形腫瘍も、手術と放射線治療、手術と抗がん剤治療と放射線治療の組み合わせを適切に行うことが重要です。また手術後や診断後に遅れることなく治療を開始することも重要です。当センターでは腫瘍内科医、外科医、放射線診断医、病理医などとカンファレンスを通じて、情報を共有し、速やかに適切な放射線治療を実施する体制をとっています。

4. 緩和的治療や緊急の治療

難治の小児がんにとってQOLを維持する治療法が選択できることはとても重要です。小児がんの患者さんでは、家庭や学校生活を維持しながら行う緩和的治療として、放射線治療が有効な場合があります。このような治療は画一的なものではないので、患者さんやご家族と相談しながら、柔軟に治療方針を検討します。

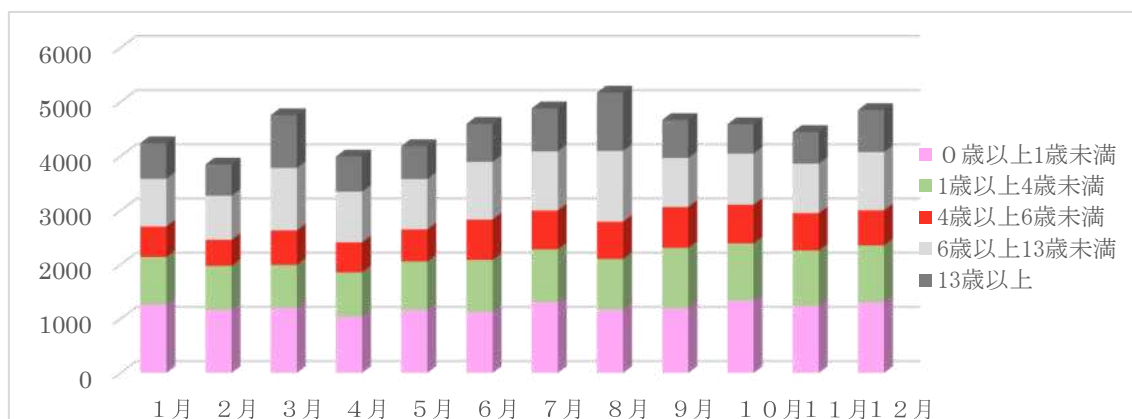
5. 成人の放射線治療

子どもたちが快適に放射線治療をうけるための技術を活用するとともに、治療装置の効率的な運用や地域の医療への貢献のために、当センターでは成人のがん患者の外来放射線治療も実施しています。当センターの放射線治療科の受診についてはホームページに掲載しています。当センターでは、紹介元の担当医と連携して診療します。

3-7-12-3 診療放射線技師

現在20名で運用しています。24時間365日2交代制度で勤務しております。放射線機器は、一般撮影4部屋、骨塩定量（全身対応）、X線TV室2部屋、パントモセファロ、血管撮影、X線CT装置64列、MRI 1.5T、3.0Tで2部屋、核医学2部屋、放射線治療が稼働しております。患者の被ばく線量を管理するための線量管理ワーキンググループにて議論を重ね、必要な検査には低線量低被ばくを心掛け、各モダリティ担当技師が懸命に取り組んでいます。

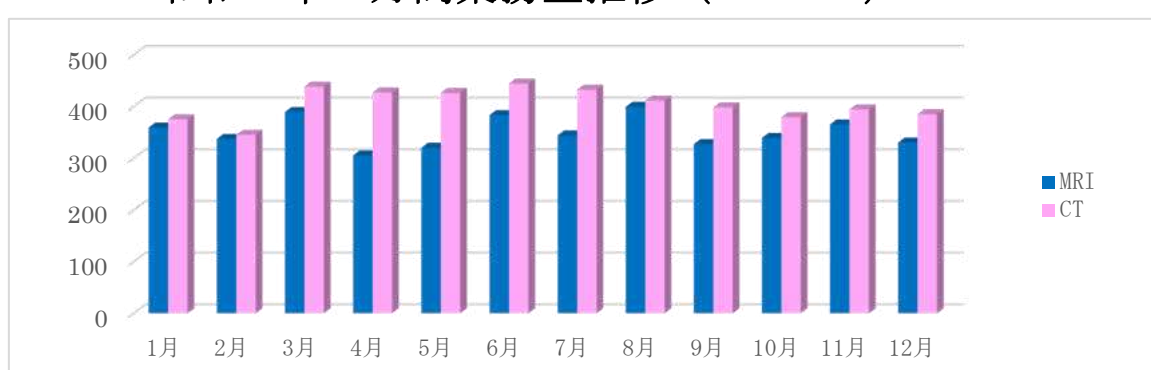
令和5年 月間患者数推移（年齢別）



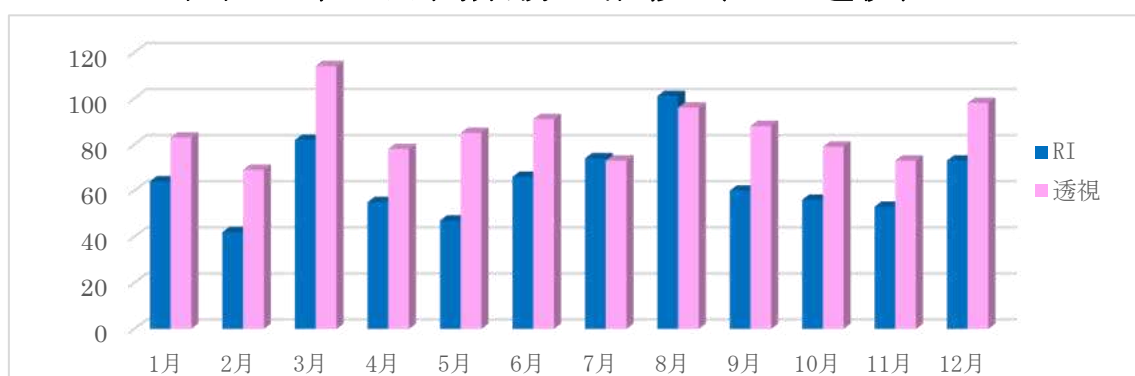
令和 5 年 月間業務量推移（一般撮影）



令和 5 年 月間業務量推移（CT・MRI）



令和 5 年 月間業務量推移（RI・透視）



1) 毎年開催されている成育医療研修（診療放射線技師コース）を令和 5（2023）年は 11 月 16 と 17 日に開催しました。この研修は看護部・薬剤部と合同で行ったもので、国立成育医療研究センターで実践している医療について情報発信し、我が国における成育医療のさらなる充実を図ることを目的としております。Web 開催の特徴を活かし全国からの参加を集い、各モダリティでの取り組み、トピック等の講義を企画しました。

研修内容

講義担当者	講義内容
部門担当者代表	小児放射線技術（MRI 検査） 小児放射線技術（CT 検査）

	小児放射線技術（単純エックス線撮影検査） 小児放射線技術（核医学検査） 小児放射線技術（放射線治療） 小児放射線技術（血管撮影検査・IVR） 小児放射線技術（透視検査）
--	--

2）専門・認定放射線技師、国家資格取得の育成

当部では、専門・認定取得にも力を入れております。

専門知識の向上、スキルアップ等日々研鑽しています。

また、資格取得が施設基準を満たし、診療報酬につながっているものもあります。

以下の専門・認定資格を取得しています。

- ・ 検診マンモグラフィ撮影認定技師
- ・ 放射線取扱主任者
- ・ X線 CT 認定技師
- ・ 磁気共鳴専門技術者認定
- ・ 血管撮影・インターベンショナル専門診療放射線技師
- ・ 救急撮影認定技師
- ・ 放射線機器管理士
- ・ 放射線治療専門放射線技師
- ・ 放射線治療品質管理士
- ・ 医療情報技師
- ・ 医学物理士
- ・ PET 認定技師
- ・ 衛生工学衛生管理士
- ・ 作業環境測定士

3-7-14 臨床検査部

1. 診療科活動

臨床検査部は、生理検査室、検体検査室、高度先進検査室、細菌検査室、輸血細胞療法室、採血室から構成されている。入院および外来患者に必要な臨床検査を提供している。

2. 研究活動

臨床研究中核病院の要件である検査室の国際規格 ISO 15189 認定を取得、維持し、臨床側に質の高い検査結果を提供していく。

3-7-14-1 生理検査室

1. 概要

生理検査室では、循環機能検査（心電図・ホルター心電図・負荷心電図等）、神経機能検査（脳波・神経伝導検査・誘発検査等）、呼吸機能検査（肺活量、呼気一酸化窒素ガス分析検査）、聴覚検査（標準純音・乳児聴検等）などの一般的な生理機能検査に加え、超音波検査（産科・体表）を行っている。医療連携として循環器科の心臓カテーテル検査では血管内圧測定、脳神経外科では術中神経機能モニタリング検査（MEP、VEP、ABR、BCR 等）にも携わっている。日勤及び夜間休日（当直者）が 24 時間体制でポータブル心電図を実施している。

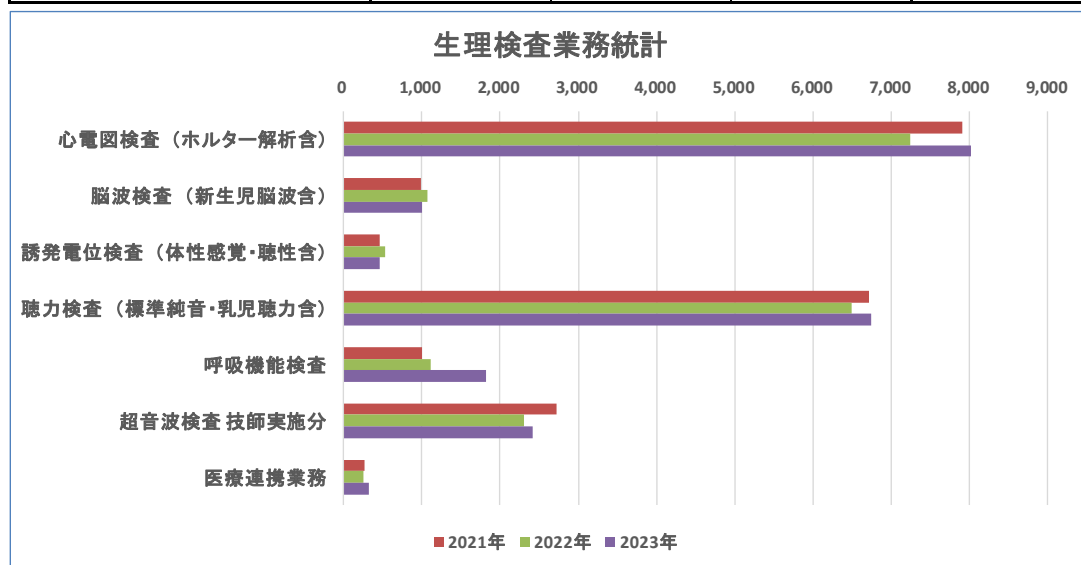
2. 稼働状況

生理検査件数は心電図検査等：10.7%増加、脳波検査：6.4%減少、誘発電位検査（神経伝導速度含む）：12.6%減少、聴力検査：3.7%増加、呼吸機能検査：64.1%増加であり、前年度と比較し 9.7%増加した。医療連携（チーム医療）脳神経外科術中モニタリング・心臓カテーテル検査では、前年度と比べ 23.2%減少であった。新規検査（呼気一酸化窒素ガス分析検査）が始まり、呼吸機能検査の件数が大幅に増加した。誘発検査では当該検査の適用になる患者が少なかったことが検査数減少の要因と考えられる。

生理検査室では、業務のレベルアップをおこなうため生理検査部内で、勉強会を定期的に開催し、また講習会・研修会（Web・LIVE・オンデマンド配信）に参加して知識・技術の向上に努めている。

生理検査業務統計

	2021年	2022年	2023年	前年比(%)
心電図検査（ホルター解析含）	7,904	7,246	8,022	110.7%
脳波検査（新生児脳波含）	987	1,073	1,004	93.6%
誘発電位検査（体性感覚・聴性含）	465	531	464	87.4%
聴力検査（標準純音・乳児聴力含）	6,716	6,497	6,737	103.7%
呼吸機能検査	1,003	1,110	1,822	164.1%
合 計	17,075	16,457	18,049	109.7%
超音波検査 技師実施分	2,720	2,306	2,419	104.9%
医療連携業務	266	259	319	123.2%



3-7-14-2 検体検査室（院内ラボ）

1. 概要

生化学検査、免疫血清検査、血液検査、一般検査を受託しており、採血室受付に配属されているスタッフを含め、19名で対応している。当検査室は24時間365日稼働しており、迅速かつ精度の高い検査結果の報告に努めている。

2023年度の検体数はコロナ感染拡大前と同程度の検体数に戻ってきているが、対前年度比-1.4%の減少となった。また、血液検査室には日本検査血液学会の認定血液検査技師、認定骨髓検査技師を配置し、後進の育成に取り組んでいる。

臨床検査部としては国際規格であるISO15189認定を取得し、認定の維持に当たり検査室の環境や帳票類の整備、運用の見直しに努めている。

2. 精度管理体制

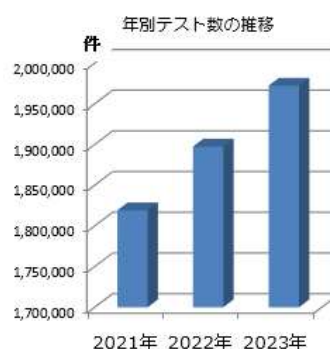
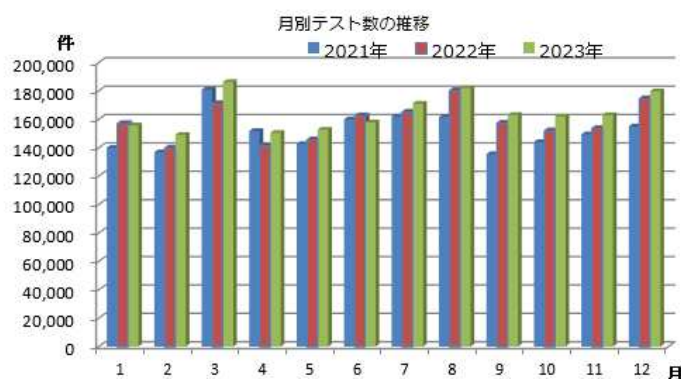
精度管理は精度管理責任者を配し、月1回精度管理委員会を設け精度管理体制を構築している。外部精度管理は日本医師会臨床検査精度管理調査、日本臨床衛生検査技師会精度管理調査、東京都臨床検査技師会精度管理調査に参加している。また、日本臨床衛生検査技師会の品質保証施設認証も取得しており精度の保持に努めている。医療安全対策に関しては、所定の委員会を設け過誤防止活動を行っており、発生したインシデントに対しては速やかに原因究明と是正処置を行い再発防止に努めている。

3. 検査結果報告体制

検査結果の報告は、検査項目毎に報告時間を設定し迅速かつ正確に報告している。なお、設定報告時間は検体が検査室に届いてからの時間とし概ね1時間以内に報告を行っている。また、異常値・パニック値は提出医に直接連絡するなど迅速な対応を行っている。RFID（検体情報統括管理システム）を導入していることから、リアルタイムで検体容器授受の状況確認を行っている。また、コロナ禍以降開催していなかった白血病・リンパ腫カンファレンスを再開する予定であり、これを通して研修医への血液細胞の教育や技師の技術・知識の向上に貢献できればと考える。

月別テスト件数（3ヶ年）

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	合計
2021年	139,877	136,739	180,789	151,736	142,607	159,927	162,086	161,558	135,498	143,993	149,394	154,973	1,819,177
2022年	156,777	139,566	170,898	141,215	145,455	162,243	164,867	180,053	157,100	151,741	153,391	174,283	1,897,589
2023年	155,669	149,045	186,186	150,395	152,667	157,833	170,975	181,932	163,055	162,011	162,971	179,608	1,972,347



3-7-14-3 高度先進検査室

1. 概要

高度・先進検査室は、成育医療を推進するために必要な高度先進的・先駆的な臨床検査サービスを提供すべく設立された部門です。倫理面への配慮と遺伝子関連の個人情報の保護に努めつつ、おもに先天代謝異常症や先天異常症候群のスクリーニングおよび確定診断、保因者診断、出生前診断に関連する遺伝学的検査（酵素活性測定、遺伝子検査など）、重篤な遺伝性疾患を対象とした着床前遺伝学的検査（PGT-M）、ろ紙微量血液検体を用いた先天代謝異常症（ライソゾーム病）の酵素活性測定を実施しています。また院内で出生した新生児を対象としたポンペ病新生児マススクリーニング検査を実施しています。

2. 本年度の実績

2.1 遺伝子解析

2023年度に遺伝子解析を実施した疾患は、ムコ多糖症Ⅰ型・Ⅱ型・Ⅲ型・ⅣA型、Ⅵ型、Ⅶ型、ファブリー病、ポンペ病、ゴーシェ病、ニーマンピック病C型、ムコリピドーシス、ライソゾーム酸性リパーゼ欠損症、カルバミルリン酸合成酵素Ⅰ欠損症、高チロシン症Ⅰ型、オルニチントランスカルバミラーゼ欠損症、メチルマロン酸血症、中鎖アシル-CoA

脱水素酵素欠損症、極長鎖アシル-CoA 脱水素酵素欠損症、三頭酵素欠損症、副腎白質ジストロフィー、異染性白質ジストロフィー、軟骨無形成症、ウィルソン病などでした。これらの疾患に対する遺伝子解析を院内および院外からの確定診断、保因者診断、出生前診断など、計 170 件の遺伝子診断を実施しました

2.2 ポンペ病新生児マススクリーニング

2011 年 1 月からライソゾーム病センターと周産期診療部門と連携して、当センターで出生した新生児を対象としたポンペ病新生児マススクリーニング検査を開始しております。2023 年の一年間に、1,515 名の新生児を対象にポンペ病スクリーニング検査を行いました。

2.3 ポンペ病・ファブリー病・ライソゾーム酸性リパーゼ欠損症ハイリスクスクリーニング

臨床症状からポンペ病、ファブリー病、ライソゾーム酸性リパーゼ欠損症が疑われる症例を対象としたハイリスクスクリーニングの依頼を院内および院外から受け、検査を実施しました。

	2016 年	2017 年	2018 年	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年
遺伝子検査	105	200	123	105	198	166	124	170
ポンペ病新生児マススクリーニング	1,694	1,678	1,651	1,632	1,513	1,741	1,607	1,515
ポンペ病ハイリスクスクリーニング	466	459	685	705	551	650	530	472
ファブリー病ハイリスクスクリーニング	861	728	739	1,062	1,256	1,528	1,433	1,308
ライソゾーム酸性リパーゼ欠損症ハイリスクスクリーニング	499	762	335	61	86	73	72	191

3-7-14-4 細菌検査室

1. 概要

細菌検査業務は、顕微鏡検査、培養同定検査、薬剤感受性検査、遺伝子検査、血液培養検査、抗酸菌検査を実施している。細菌検査検体は、24 時間 365 日体制で必要な検体処理を実施している。また、髄液および救急から提出された至急の尿検体のグラム染色結果は 24 時間体制で報告を行っており、迅速な結果報告に努めている。血液培養検査は自動分析装置で 24 時間監視しており、培養陽性時は 24 時間体制で速やかに診療側へ報告している。遺伝子検査は、LAMP 法で百日咳菌、マイコプラズマ、結核菌、レジオネラ菌の検出、また

FilmArray および ID NOW で SARS-CoV-2 の検出を行い、感染症のより迅速な診断に貢献している。2021 年 12 月からは質量分析装置による菌種同定検査を開始し、より迅速な結果報告が可能となった。

細菌検査室は、臨床検体からの病原菌の検出だけでなく、院内感染防止のための情報発信の拠点であり、感染症発生状況および耐性菌検出状況の掌握、院内感染の防止という重要な任務を担っている。そのため細菌検査室から ICT へ参画し、各種サーベイランス情報の発信、院内環境検査及び環境ラウンド、院内感染対策講習会などを行い、その活動を通じて院内環境の保全に努めている。更に、MRSA の院内感染疑い事例が発生した場合は、疫学的な情報寄与を目的として POT 法で菌を解析している。

細菌検査室は、院外の活動にも参加している。感染対策向上加算 1、指導強化加算に基づき、ICT チームの一員として他施設および当院の院内感染対策を相互に確認することで、自施設だけでなく他施設の院内感染対策の向上に努める活動を行っている。

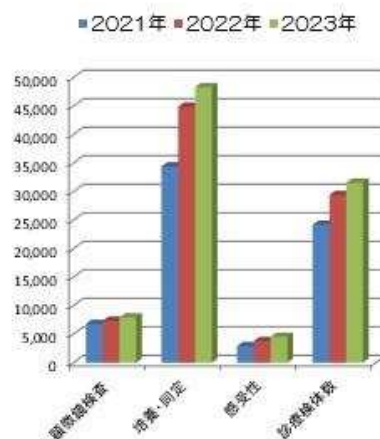
細菌検査室は、室長（ICD）1 名、主任技師（ICMT）1 名、臨床検査技師 2 名で構成されており、認定臨床微生物検査技師制度研修施設として常時スキルアップに取り組んでいる。また、臨床検査室の国際規格である ISO 15189 を取得し継続維持することにより、質の高い検査を提供することに努めている。

2. 稼動状況

当検査室は、2010 年に細菌検査実施規定（検査の適正化や抗菌薬適正使用を図る規定）を作成し、これに基づいた運用をしている。また定期的に見直しを行っている。細菌検査件数については、2022 年と比較し増加傾向となっている。また、試薬購入額および 1 検体

年別検査件数の推移

項目	2021年	2022年	2023年	前年比
グラム染色	6,674	7,287	7,865	107.9%
抗酸染色	156	89	107	120.2%
顕微鏡検査 計	6,830	7,376	7,972	108.1%
呼吸器	5,558	6,408	6,583	102.1%
消化器	1,393	1,595	1,549	97.1%
泌尿器・生殖器	5,041	5,291	5,889	111.3%
血液・体液	8,807	10,444	11,663	111.7%
その他	3,178	3,658	3,890	106.3%
培養培養	7,263	9,029	10,281	113.9%
抗酸菌培養	169	92	95	103.3%
結核菌PCR	62	32	25	78.1%
PCR・分子生物学検査	89	47	25	53.2%
大腸菌抗原同定検査	0	14	6	-
LAMP法	2	4	0	0.0%
トキシン検査	38	45	30	66.7%
FilmArray	2,571	4,543	4,185	92.1%
ID NOW	208	791	1,102	-
質量分析	70	936	1,002	-
培養・同定 計	34,449	44,929	48,331	107.6%
感受性1菌種	1,506	1,846	2,144	116.1%
感受性2菌種	349	498	642	128.9%
感受性3菌種	111	144	236	163.9%
酵母菌・真菌菌感受性	34	31	33	106.5%
薬剤耐性菌検出	342	517	821	158.8%
抗菌薬併用効果	0	2	1	-
感受性 計	2,913	3,824	4,563	119.3%
診療合計	44,192	56,129	60,866	108.4%
診療検査数	24,215	29,424	31,579	107.3%
環境検査等	763	661	662	100.2%
総検査数	24,978	30,085	32,241	107.2%
試薬購入額（円）	28,239,659	71,395,105	77,820,835	109.0%
1検体コスト（円）	1,131	2,373	2,414	101.7%



	2021年	2022年	2023年
顕微鏡検査	6,830	7,376	7,972
培養・同定	34,449	44,929	48,331
感受性	2,913	3,824	4,563
診療検査数	24,215	29,424	31,579

コストについては増加傾向であったが、これは遺伝子検査試薬が高額であることによるものと考えられ、適性に必要な検査を実施している。

3-7-14-5 輸血細胞療法室

1. 概要

輸血細胞療法室では、日勤帯は検査技師 3 名・夜間休日は臨床検査部当直者 1 名が血液型検査・不規則抗体検査・交差適合試験などの輸血関連検査業務と輸血用血液製剤の管理業務を 24 時間体制でおこなっている。加えて日勤帯では、輸血関連検査の精査、新生児輸血用製剤の分割、自己血や移植用造血幹細胞の管理の他、輸血・細胞療法委員会の事務局として輸血副反応症例の把握や廃棄率削減にも取り組んでいる。また、2019 年 4 月に開設された遺伝子細胞治療推進センターにおける品質管理にも携わっており、再生医療等製品であるテムセル HS 注やキムリア点滴静注の管理に加え一部製剤の調整業務も担っている。毎月開催される輸血・細胞療法委員会では安全で適正な輸血療法を推進するための審議をしており、血液製剤等の適正使用に取り組んでいる。

2. 稼働状況

血液型検査（ABO 型、RhD 型）、不規則抗体スクリーニング、直接・間接抗グロブリン試験、成人同型クームス試験（ABO 不適合妊娠時の IgG 性抗 A、抗 B の検出）は 24 時間体制で検査を実施している。また、日勤帯では不規則抗体同定および抗体価測定、抗 A・抗 B 抗体価測定（幹細胞移植時・固形臓器移植時）、亜型検査、自己抗体保有時の抗体解離試験等も行っている。臨床が必要としている検査に 24 時間正確に迅速に対応ができるよう検査技師の教育にも力を入れている。2023 年の検査総数は 19,306 件であった。

3. 輸血用血液製剤の使用状況

2023 年の血液製剤使用量は 28,775 単位（赤血球製剤 3,964 単位、血漿製剤 1,886 単位、血小板製剤 22,925 単位）、購入金額 240,643,047 円であった。廃棄金額は前年の 80.8%に削減され 763,841 円、廃棄率 0.31%であった。異型輸血を含む交差適合試験未実施の緊急輸血は 53 症例、10 単位以上使用した大量輸血症例は 22 症例となっており、緊急輸血症例数は前年比 189.3%に増加している。

輸血検査業務統計

1. 輸血に係る検査（血型・交差試験・不規則）

	2021年	2022年	2023年	前年比（%）
件数	18,427	20,640	19,306	93.5%

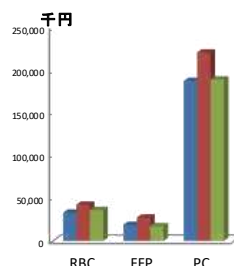
2. 製剤管理状況

製剤名	2021年	2022年	2023年	前年比（%）
購入数				
RBC	3,648	4,673	3,964	84.8%
FFP	2,167	3,121	1,886	60.4%
PC	22,779	26,830	22,925	85.4%
合計	28,594	34,624	28,775	83.1%
購入金額				
RBC	¥32,713,424	¥42,150,841	¥35,934,268	85.3%
FFP	¥18,620,222	¥27,011,494	¥16,928,806	62.7%
PC	¥186,210,614	¥219,347,124	¥187,779,973	85.6%
合計	¥237,544,260	¥288,509,459	¥240,643,047	83.4%
使用数				
RBC	3,582	4,607	3,941	85.5%
FFP	2,157	3,103	1,883	60.7%
Ir-PC	22,769	26,800	22,890	85.4%
合計	28,508	34,510	28,714	83.2%
使用金額				
RBC	¥32,054,375	¥41,487,458	¥35,653,219	85.9%
FFP	¥18,528,614	¥26,846,596	¥16,901,322	63.0%
PC	¥186,128,870	¥219,101,892	¥187,493,720	85.6%
合計	¥236,711,859	¥287,435,946	¥240,048,261	83.5%
廃棄数				
RBC	73	64	30	46.9%
FFP	6	21	18	85.7%
Ir-PC	10	20	40	200.0%
合計	89	105	88	83.8%
廃棄金額				
RBC	¥657,633	¥589,909	¥271,986	46.1%
FFP	¥54,966	¥192,378	¥164,896	85.7%
PC	¥81,744	¥163,488	¥326,959	200.0%
合計	¥794,343	¥945,775	¥763,841	80.8%
自己血				
貯血単位数	414	431	377	87.5%
使用単位数	209	213	209	98.1%
廃棄単位数	190	213	168	78.9%

製剤名	2021年	2022年	2023年	前年比（%）
使用数				
25%アルブミン50ml	3821	4207	4187	99.5%
5%アルブミン100ml	531	473	396	81.6%
5%アルブミン250ml	133	123	89	72.4%
単位数				
25%アルブミン50ml	15921	17529	17446	99.5%
5%アルブミン100ml	885	788	643	81.6%
5%アルブミン250ml	554	513	371	72.3%
使用金額				
25%アルブミン50ml	¥28,355,641	¥31,220,147	¥31,071,727	99.5%
5%アルブミン100ml	¥2,108,601	¥1,878,283	¥1,532,806	81.6%
5%アルブミン250ml	¥985,131	¥911,061	¥659,223	72.4%
合計	¥31,449,373	¥34,009,491	¥33,263,756	97.8%
生医数				
デムセルHHS注	38	61	34	55.7%
キムリア点滴静注	4	3	2	-
使用金額				
デムセルHHS注	¥33,427,460	¥53,659,870	¥29,908,780	55.7%
キムリア点滴静注	¥136,454,620	¥102,340,965	¥68,227,310	-
合計	¥169,882,080	¥156,000,835	¥98,136,090	-

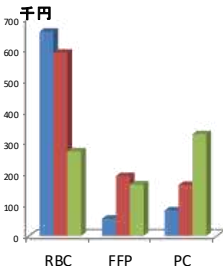
製剤購入状況（金額）

■ 2021年 ■ 2022年 ■ 2023年



廃棄状況（金額）

■ 2021年 ■ 2022年 ■ 2023年



3-7-14-6 採血室

1. 概要

採血室は、診療部、看護部、臨床検査部にて運営されている。主な業務は、採血、採血介助、採尿・採便等の受付や案内、病棟用採血管の準備である。新生児・乳児の採血は難しく、熟練を要する。採血部位は大人と同様に上肢の皮静脈から翼状針を使い採血するが採血困難な場合は手背の表在静脈から直針採血（通称・ポタポタ）で実施する。医師は、on callで患者希望時、採血困難時、採血量が多い時（原則として患児の体重1Kgあたり1mL以上の採血量）に対応している。

2. 稼働状況

採血件数は、2023年は44,460件となっている。また、採血患者の内訳は、6歳未満（3歳未満5,099人、3歳以上6歳未満4,459人）が9,558人と全体の22%を占める。6歳未満の採血には多くの場合介助者が必要であり、採血に時間を要する。採血は基本、受付順で採血を実施しているが、待ち時間が30分以上とならないよう、ベッド採血と採血台（椅子）採血に人員を振り分け、採血待ち時間短縮に向けた対応を実施している。順番は前後する事もあるが、現状では大きな混乱はない。現在の採血待ち時間の目標は30分未満である。医師採血は、43人（前年168人）、全体の0.1%（前年0.4%）であった。採血困難者が11件（前年60件）と前年と比較し減少している。採血量が多い（原則として患児の体重1Kgあたり1mL以上の採血量）場合の依頼は24件（前年98人）と減少している。

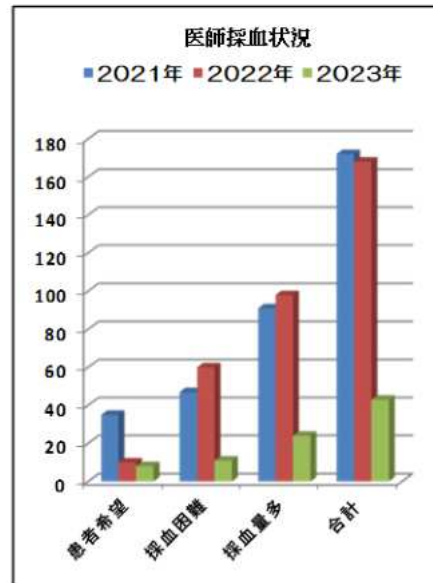
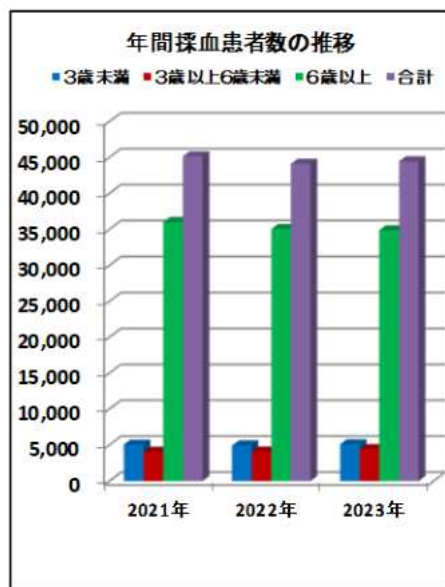
採血室業務統計

年間採血患者数の推移

	2021年	2022年	2023年
3歳未満	5,062	4,944	5,099
3歳以上6歳未満	4,071	4,113	4,459
6歳以上	36,024	35,064	34,902
合計	45,157	44,121	44,460
研究採血	2,897	2,906	2,906

医師採血状況

	2021年	2022年	2023年
患者希望	35	10	8
採血困難	47	60	11
採血量多	91	98	24
合計	172	168	43
医師採血率 (%)	0.38	0.39	0.1



3-7-15 病理診断部

3-7-15-1 病理診断科

1. 診療活動

病理診断部では病理組織診、細胞診、病理解剖を柱とした業務を行っており、2023 年にを行った業務は図 1 に示すとおりである。組織診断は、通常の HE 染色に加えて、必要に応じて特殊染色や免疫組織化学的検索を行い、病理診断の精度を上げるために FISH, RT-PCR 法を用いた遺伝子診断を追加している。また、より正確な診断を行うためには臨床科とのコミュニケーションを重視し、院内の臨床-病理カンファレンスへ定期的に参加している。病理解剖数は減少傾向にあり、概ね 1～2 ヶ月に 1 例程度の依頼があり、臨床科の依頼に対応可能な体制を整備している。肝、腎、小腸の移植を行っている臓器移植センターからの依頼で、緊急性の高い肝生検に対しては、休日を含め、可能な限り当日あるいは翌日までに診断できるように技師、病理医ともに体制を整えており、本年は 118 件の緊急対応、25 件の休日対応を行った。

他施設からの研修生は病理医に限らず臨床医も随時受け入れ、小児の腫瘍性・非腫瘍性病変の診断や研究を行う場を提供してきた。本年も臨床研究員 4 (月 1～2 回) を受け入れた。

小児病理に興味を持つ病理医、臨床医より構成されている日本小児病理研究会の事務局業務を担っており、WEBで行われた学術会議の運営に関わった。

2. 研究活動

研究所の小児血液・腫瘍研究部、周産期病態研究部、分子内分泌研究部、母児感染研究部との密接な連携のもと、小児・周産期疾患を対象として病理学的、細胞生物学的ならびに分子生物学的な解析方法を用いた研究を行ってきた。

小児固形腫瘍（ウイルス腫瘍、横紋筋肉腫、ユーイング肉腫、神経芽腫、肝芽腫）、小児悪性リンパ腫の多施設共同研究においては、小児血液・腫瘍研究部と協力し、JCCG（日本小児がんグループ）の中央病理診断事務局、検体保存施設として、臨床と基礎研究を結ぶ中心的役割を果たしてきた。

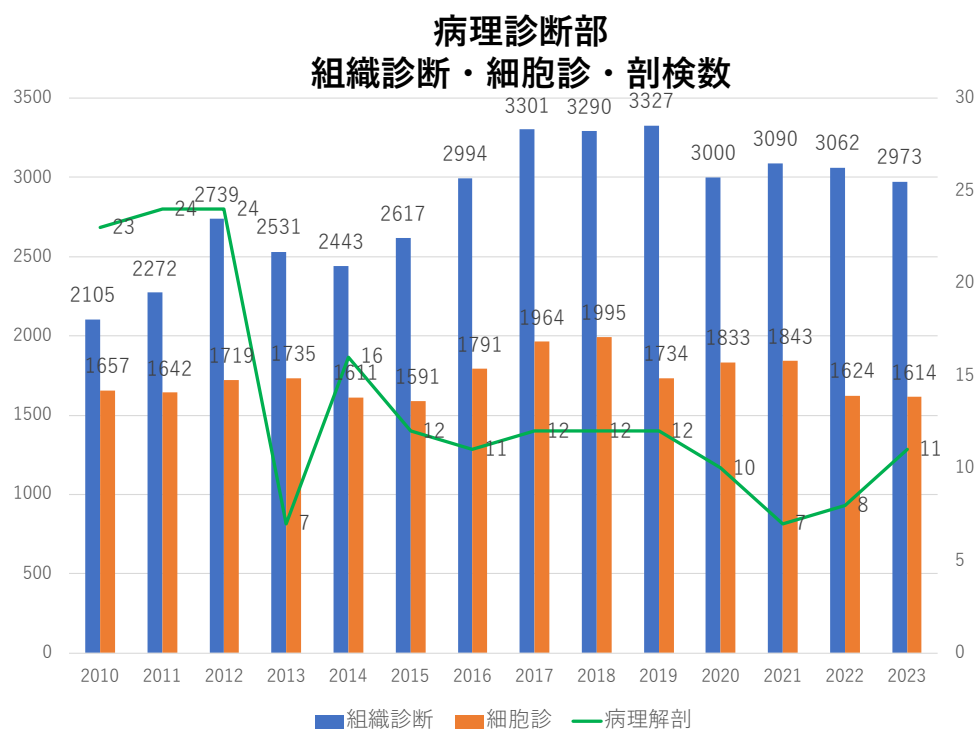
3. 病理診断件数の推移

2023 年の診断症例数は図 1 に示すとおりである。本年もコロナ禍により減少した手術件数の影響を受け、組織診断数、細胞診断数は若干減少した。

前述した小児固形腫瘍および小児悪性リンパ腫の多施設共同研究における中央病理診断業務も担っており、症例数は昨年より増加し、1,200 例を超えた（図 2）。

より正確な組織診断をするために免疫組織化学的検索を追加することは日常的となっており、確定診断に必要な遺伝子検索（FISH, RT-PCR）の検査項目を増やし、積極的に行うようにしている。

(図 1) 診断症例数推移



(図 2) 中央病理診断症例数



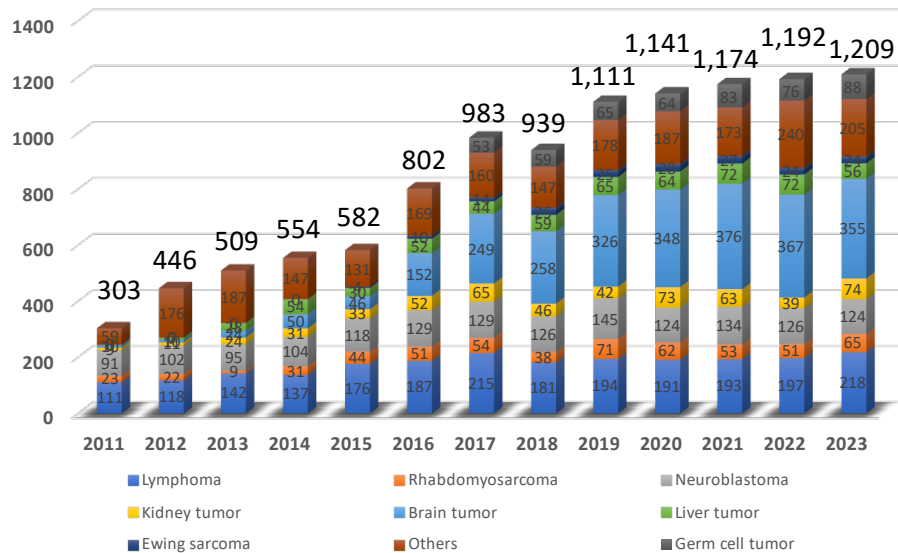
3-7-15-2 中央病理診断部

【成育のミッション：小児がん拠点病院・中央機関としての業務を担当】

国立成育医療研究センターが、小児がん拠点病院等の整備に伴って、2014 年 2 月に小児がん中央機関に指定されたことを受け、中央病理診断部では、小児がん拠点病院のみならず、全国の小児がん診療施設に対し病理診断支援を行っている。中央病理診断部には、病理医 1 名（病理診断部と併任）、常勤事務職員 1 名、非常勤事務職員 2 名が所属している他、病理診断部（病理診断科）の常勤病理医や非常勤病理医も小児がんのエキスパート病理医として活動を共にしている。

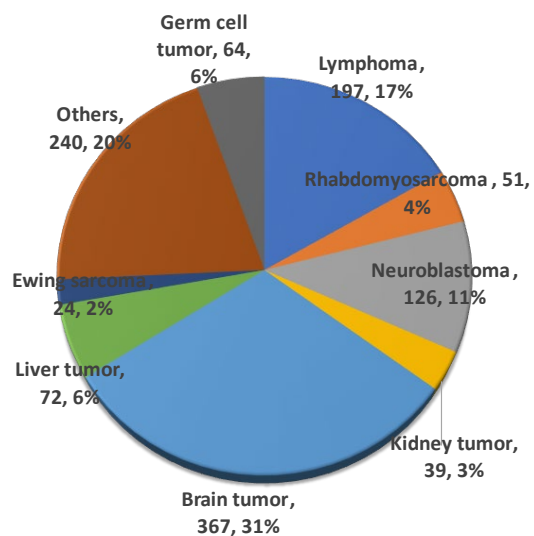
中央病理診断部に設置されている中央診断事務局は、2011 年に活動を開始した日本病理学会小児腫瘍組織分類委員会における中央病理診断事務局が原点である。2015 年に日本小児がん研究グループ（JCCG）が設立されてからは、JCCG 病理診断委員会事務局としての活動の場を広げている。全国から依頼される病理診断症例数は年々増加しており、2023 年は 1,209 例の症例（脳腫瘍 355 例、リンパ腫 218 例、神経芽腫 124 例、腎腫瘍 74 例、横紋筋肉腫 65 例、肝腫瘍 56 例、胚細胞腫瘍 42 例、ユーイング肉腫 24 例、その他の骨軟部腫瘍等 205 例）を受け付け、それぞれの疾患を専門とする院内外のエキスパート病理医が診断を行い、治療方針の決定、予後因子の探索などの研究に貢献した。2016 年からは、脳腫瘍の WHO 分類の改定に伴い、組織学的診断に分子病理学的検索結果を加えた統合診断が求められ、脳腫瘍凍結検体の受付、保存や分子診断担当施設への検体送付業務が追加された。脳腫瘍以外の腫瘍においては、FFPE 検体を用いた FISH や、凍結検体から行う RT-PCR を中央病理診断部で施行し、より正確で質の高い病理診断を行うことが可能である。

中央病理診断症例数の推移

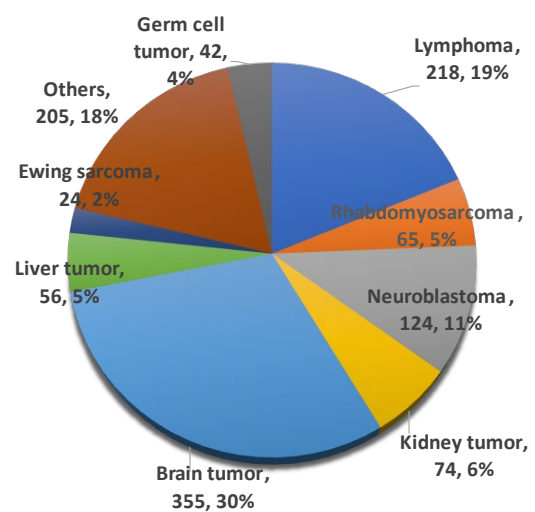


腫瘍グループ別 中央病理診断症例数

1,192 cases, 2022



1209 cases, 2023



3-7-16 高度感染症診断部

成育医療に関連する多くのウイルスの迅速診断を行っている。特に小児移植治療後の日和見感染症関連ウイルス（EBV, HSV-1, HSV-2, VZV, CMV, HHV-6, HHV-7, BK virus, JC virus, Parvo virus B19, AdV, HHV-8, HBV など）の早期発見・早期治療を目指し移植医療の成績向上に貢献している。2020 年からは上記ウイルスに加え新型コロナウイルス（SARS-CoV2）の迅速診断をリアルタイム PCR 法を用いて実施した。また、難治性ウイルス感染症の一つである EB ウイルス（EBV）が原因で起こる慢性活動性 EBV 病（CAEBV）や EBV 関連血球貪食性リンパ組織球症（EBV-HLH）に対する様々な検査・解析を行っており、EBV 関連難治性疾患については全国の中央診断施設として治療方針決定に大きく貢献している。

ウイルス検出にはリアルタイム PCR 法を用いた多項目同時迅速診断システム（マルチスクリーニング解析）による定性解析（ウイルスがいるか・いないかを解析）を行い、陽性となったウイルスに関して定量解析（どれだけのウイルス量が存在するかを解析）を実施する。ウイルスの中にはどれだけの量のウイルス感染細胞が身体の中に存在するかが重要であるものがあり、その場合、定量解析が必須である。体内にどれだけのウイルス量が存在すると発症し、治療が必要になるのかを見極めるためにウイルス量の正確な測定が重要になる。検出されたウイルス量と性状を分析し、フローサイトメトリー法での免疫細胞の詳細な解析による免疫応答分析との包括的な解析に基づき、治療方針を決定する独自の診断法を用いて支援を行っている。ウイルス感染症の多くは時間との戦いになることは新型コロナウイルスで周知となったが、これだけの多項目解析を半日で行い、検査結果はその日の夕方には現場に報告され、夜には治療が開始できる体制を整えているのは世界的にもほとんどない。特に CAEBV, EBV-HLH, 小児肝・小腸移植後・小児骨髄移植・心臓移植後のウイルス感染症については、国内の中央診断センター的役割を果たしている。心臓移植後の解析は国内外で移植したものの多くの症例を当診断部で解析・検査しウイルス感染制御を日々行っている。希少疾患である CAEBV, EBV-HLH は日本の 80%以上の症例を診断し、治療サポートをしている。日本で唯一の移植治療後のウイルス制御と難治性ウイルス感染症制御を目的として設立された診断部である。SARS-CoV2 に対する PCR 検査は検体受付から 2 時間で診断可能なシステムで実施している。

提言として日本移植学会が作成を目指した「臓器移植後の CMV 診療ガイドライン（策定中）」の策定委員として移植後ウイルス制御の標準化に貢献している。また、日本小児感染症学会が改定を進める「慢性活動性 EBV 感染症とその類縁疾患の診療ガイドライン（出版済）」の策定の統括委員を務めている。

3-7-17 妊娠と薬情報センター

1. 相談業務

厚生労働省の事業として2005年10月1日に国立成育医療センター内に開設された「妊娠と薬情報センター」は18年目を迎えた。

2017年に全47都道府県に拠点病院の設置を完了したが、各地域の人口や交通の便などによる必要性を考慮しながら拠点病院の増設をすすめており、2023年現在は、成育医療研究センターを含めた61病院において「妊娠と相談外来」が行われている。今後も地域医療に貢献するため、さらなる新規拠点病院増設にむけての働きかけを継続していく予定である。

厚生労働省令和3年度医療施設運営費等補助金（医療情報データベース関連事業等）妊娠と薬情報センター高度化推進事業により予算を得て、2022年から新規システムを導入した。新規システムでは、相談者からの申し込み方法が郵送からオンライン方式となり、全国の拠点病院の担当者が妊娠と薬情報センターが作成する安全性情報をオンラインでリアルタイムに閲覧が可能となった。これらのことにより、迅速な相談外来実施につながり、相談者の利便性を大きく向上させている。

2012年から授乳中の母親に対して、授乳中の薬剤使用に関する電話相談をおこなっており、これまでに約8,000件の相談に対応してきた。2022年からオンラインでの相談も可能になっている。

新型コロナウイルス感染症の流行を受け、2021年から新型コロナウイルス感染症の治療薬の妊娠中の安全性に関する情報をホームページに掲載している。また、製薬企業の委託を受け、妊娠に気づかずに特定の薬剤（ゾコーバ®、ラゲブリオ®）を使用した妊婦の相談に対応している。

表1. 2023年1月～2023年12月の業務集計グラフ

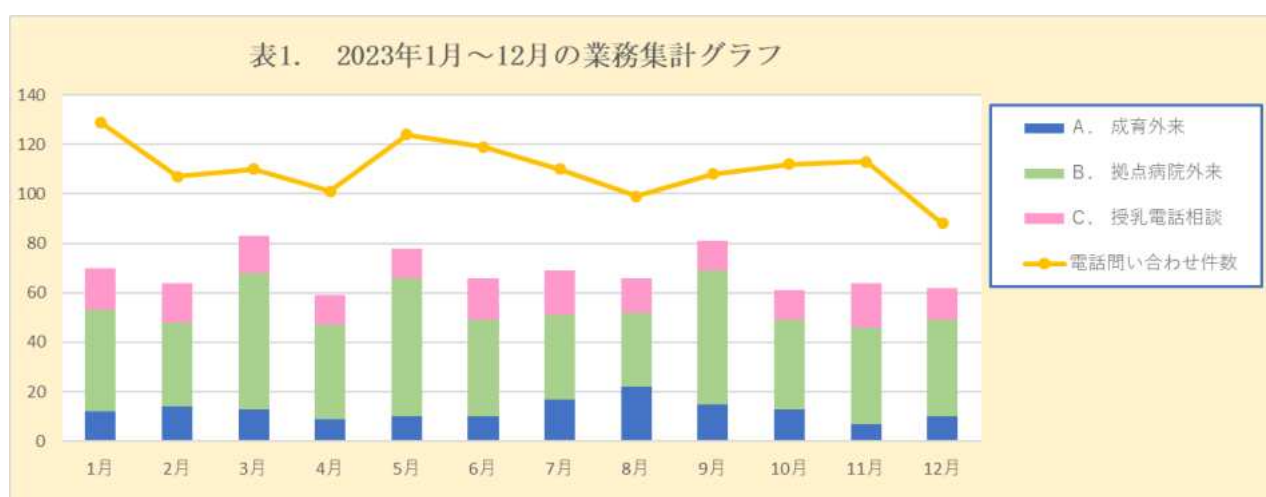


表 2. 2023 年の相談・回答数

年	2023年											
月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
回答件数合計(A～E)	70	64	83	59	78	66	69	66	81	61	64	62
A. 成育外来	12	14	13	9	10	10	17	22	15	13	7	10
B. 拠点病院外来	41	34	55	38	56	39	34	30	54	36	39	39
C. 授乳電話相談	17	16	15	12	12	17	18	14	12	12	18	13
電話問い合わせ件数	129	107	110	101	124	119	110	99	108	112	113	88
(成育外来のうち オンライン外来件数)	(1)	(1)	(0)	(3)	(0)	(2)	(1)	(8)	(4)	(3)	(0)	(0)

2. 事業

各医薬品の添付文書において妊婦等に関する記載が不十分なため、適切な治療を行うことが困難な場合があることを踏まえて、厚生労働省より委託を受け「妊婦・授乳婦を対象とした薬の適正使用推進事業」を2016年より実施している。妊娠と薬情報センターを中心に結成されたワーキンググループで、妊娠中の安全性に関する研究論文ならびに診療ガイドラインなど国内外から収集した情報をもとに検討を行い、添付文書の「妊婦、産婦、授乳婦等への投与」欄の改訂案の作成作業に取り組んでいる。ワーキンググループが作成した報告書に基づいて行われた、2018年のタクロリムス水和物・シクロスポリン・アザチオプリン の3剤の添付文書記載の改訂に引き続き、2022年にはカルシウム拮抗薬（ニフェジピン・アムロジピン）、2023年にはβ遮断薬（ビロプロロール、カルベジロール）の添付文書記載の改訂が行われた。また、2年ごと（2019年、2021年、2023年）に各専門学会に対する検討薬剤に関する要望依頼を行っており、ワーキンググループで各学会から寄せられた薬剤の中から検討候補薬を確定している。現在、ドンペリドンの報告書を厚生労働省に提出し、検討作業が進められている。

3. 研修・広報活動

年1回、拠点病院の医師・薬剤師の相談業務の質向上を目的とした研修会を行っており、2023年もWeb形式での研修会を開催し、182名が参加した。相談外来の模擬演習などで、活発な議論がおこなわれた。

日本病院薬剤師会の妊婦・授乳婦薬物療法認定・専門薬剤師の研修機関として、毎年、他施設の薬剤師を受け入れており、各1週間計4名の指導を行った。

2018年より、開局薬剤師を対象とした研修会を全国で開催してきた。2023年はWeb形式で2回の研修会を開催し、107名の病院・薬局薬剤師が参加した。

これまで同様に各学会ガイドライン（2023年は日本小児感染症学会のワクチンガイドライン）、厚生労働科学費補助金研究班（2023年は難治性炎症性腸管障害に関する調査研究）の「妊娠に関するガイドラインや指針」、厚生労働科学研究費補助金研究班（難治性疾患政策研究事業）の「SLE/PAPS分科会APSガイドライン作成」、厚生労働科学研究費補助金研究班（免疫・アレルギー疾患政策研究事業）の「関節リウマチ診療ガイドライン

の改訂による医療水準の向上に関する研究（22FE1002）」、などの作成および改訂作業に、引き続き参加・協力した。

4. 研究活動

厚生労働行政推進調査事業費補助金（医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業）「妊婦・授乳婦における医薬品の安全性に関する情報提供の在り方の研究」研究班（4月～）として、これまでに蓄積してきた妊娠と薬情報センターの相談薬剤登録データベースを用いて解析をおこなった。レンボレキサントでの治療中の母親の母乳中薬物濃度や臍帯血濃度を測定した結果を、論文報告し、LactMed（NIH の関連ウェブサイトにて無料公開されている授乳と薬に関する情報データベース）に引用されている。2021 年度から開始した妊娠中の新型コロナウイルス感染症の妊娠や胎児への影響を評価するための「COVID-19 妊娠レジストリ」を終了し、論文報告に向けての準備を進めている。また 2020 年度より開始した、くすりの適正使用協議会との「相談症例データベースのファーマコビジランス活用」に関する定期的な検討会を継続して行った。

3-7-18 遺伝子細胞治療推進センター

1. 遺伝子細胞治療推進センターの概要

遺伝子細胞治療は、現在、注目されている最先端医療の一つであり、特に小児領域での充実が求められている。そこで、国立成育医療研究センターは、日本国内の遺伝子・細胞治療を推進するため、2019 年 4 月に遺伝子細胞治療推進センターを設立した。

遺伝子細胞治療には、血液細胞のような回収可能な患者細胞を、一旦、体外に取り出し、そこで治療遺伝子を導入し、再び患者に投与する *ex vivo* 遺伝子細胞治療と、直接、患者体内に治療遺伝子を投与する *in vivo* 遺伝子治療に分けられ、前者は主に血液系疾患や免疫系疾患に対し、後者は神経筋疾患や血友病等に対して行われている（下図）。さらには今後、ゲノム編集技術を用いた新しい遺伝子細胞治療の開発が期待されている。

ただ、実際には遺伝子細胞治療はいまだ開発段階の治療法であり、その実施にはこれまでの医薬品開発には全くない新しい安全性、有効性の観点での評価が必要である。さらに治療においてウイルス製剤を使用する場合はカルタヘナ法に則り医療施設内に特別な実施体制を構築する必要がある。

遺伝子細胞治療推進センターは、企業やアカデミア等が国内で小児難治性遺伝性疾患に対する遺伝子細胞治療を実施する際の安全性および有効性の評価を規制・開発の観点から支援することを目的としている。治療推進室、製造・品質管理室、研究開発室で構成されており、遺伝子細胞治療を実施するために病院、研究所および臨床研究センターの関連部門と連携している。

2. 活動状況

2.1 診療活動

小児がんセンターとともに CAR-T 細胞療法（キムリア®）の提供体制の整備を行い、2019 年 12 月 4 日に提供可能施設として認定を受けた。遺伝子細胞治療推進センターの細胞調製室にてキムリア原料細胞の調製を実施している。

そして、血友病および神経筋疾患の *in vivo* 遺伝子治療に用いられる AAV ベクター製品について、医療機関においてカルタヘナ法第一種使用規程に則って適正使用するために必要なマニュアルを作成し、当センターの神経内科とともに治療を実施した。さらに外部医療機関の遺伝子治療の実施を支援した。2023 年には、キムリア治療 2 例の細胞調製を行った。

<これまでの治療実績>

治療実施時期	遺伝子治療	対象疾患	実績	製品区分
2020 年 6 月～ (施設承認： 2019 年 12 月)	LV 製品（キム リア®）	B 細胞性急性リンパ芽球性白血病	12 例	治療
		非ホジキンリンパ腫	1 例	治験（効能追加）
2020 年 10 月	AAV 製品	血友病 B	1 例	治験
2021 年 3 月 2022 年 12 月	AAV 製品	脊髄性筋萎縮症	2 例	治療
2022 年 8 月	AAV 製品	デュシェンヌ型筋ジストロフィー	2 例	治験
2022 年 10 月	$\alpha\beta$ T & B 細胞 除去ハプロ移植	HLA 一致移植ドナー不在の造血異常症	1 例	治療

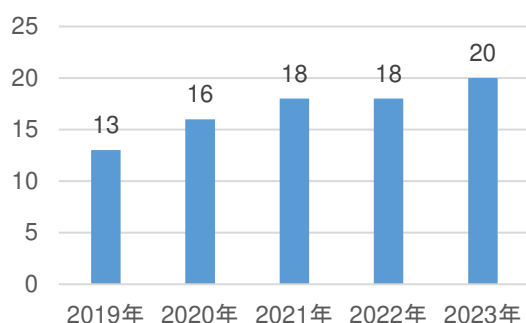
2.2 研究活動

- (1) 当センター遺伝子細胞治療の安全な実施を支援した。
- (2) 遺伝子細胞治療の臨床試験ならびに治験に関する指針整備に関与した。
- (3) 遺伝子細胞治療後の安全性評価のための研究開発を行った。
- (4) 遺伝子細胞治療の安定的な提供に向けた医療体制を検討するための臨床研究を実施した。
- (5) 3H クリニカルトライアル株式会社との共同研究として、遺伝子治療フォローアップ用 モバイルアプリを運用している。
- (6) 一般向け資材の作成などにより遺伝子細胞治療の周知活動に寄与した。

2.3 相談支援活動

遺伝子細胞治療に関する医療機関及び企業からの相談に対して支援し、その数は増加傾向にある。2023 年の相談支援件数は 20 件で、総計 85 件の相談に対する支援を行った。

図) 遺伝子細胞治療に関する相談支援件数 (件)



3-7-19 医療連携・患者支援センター

1. 概要

医療連携・患者支援センターは、他の医療機関との医療連携および患者支援を推進する部門として、2011 年 5 月 1 日付けで、それまでの医療連携室の役割を引き継いで設置されました。2013 年 10 月には在宅医療支援室が新たに加われました。また、2018 年 10 月には組織改編により、入退院センターからベッドコントロール室が新たに加われました。また、2021 年 12 月には入院サポート室が開設されています。さらに、よりグローバルな観点も踏まえ 2023 年 10 月に「医療連携開発室」から「国際・医療連携開発室」に改名致しました。

2. 役割

高度専門医療、急性期病床としての機能を主とする当センターと地域の医療機関との連携をスムーズにできるよう、医療連携・患者支援センターを窓口として、他医療機関からの種々の問合せへの対応・連絡業務を行っています。医療連携・患者支援センター長(併任の下に、役割機能別に国際・医療連携開発室、医療連携室、在宅医療支援室、患者相談窓口、ベッドコントロール室、入院サポート室の 6 部門を置いています。これら 6 部門の業務には共通する部分もあり、医師・看護師・ソーシャルワーカー・事務員が協働しながら活動しています。

3-7-19-1 国際・医療連携開発室

成育医療における国内外の渉外、外事を担っています。海外からの受診希望やセカンドオピニオンの依頼について英語対応が可能な事務職員を複数配置し、身元保証機関を仲介役とし、速やかな連絡・調整が図れるよう努めています。近年増加する外国人患者への支援を充実するため、2021 年 7 月より医療通訳を行う民間企業と契約し、医療通訳体制を整えています(2023 年利用 216 件・7,691 分)。当センターが提供する高度な医療について

適切にお伝えすることに加えて、多国籍化する患者家族も安心して医療を受けられるよう支援体制を整備しています。また、国内外の医療機関および研究機関との協働を促進し、医療の質向上と研究の発展を目的として、情報交換、共同研究の推進、医療技術の交流、人材育成の支援等を積極的に行っています。(2023 年姉妹提携機関数 国内 16 機関 国外 6 機関)

3-7-19-2 医療連携室

1. 前方連携・後方連携

2023 年の平均紹介率は 86.6%, 逆紹介率は 60.3%でした。成人移行期支援における面談や医療機関の調整は 97 件でした。成人移行に対応できる病院の開拓に加え、かかりつけ医を変更することに対する患者・家族の理解を得ることが課題です。また、セカンドオピニオン外来は、259 件（うちオンライン 51 件）の受診でした。治療目的の海外渡航者は、中国、ベトナムなどから 10 名受け入れました。

2. 入退院支援

2020 年 10 月より入退院支援加算 1 体制を取り、入退院支援・地域連携部門専従社会福祉士と各病棟に入退院支援担当者（看護師・社会福祉士）を配置した上で、病棟看護師と協働しながら早期から退院支援を展開しています。早期支援の取り組みの一環として、2021 年 12 月から入院サポート室を開設し、入院前オリエンテーション及び療養生活の情報収集を一元化し入院時支援体制を整えました。

退院支援は 861 件、在宅移行に向けた退院前カンファレンスは 82 件、うち地域関係機関を交えたカンファレンス（退院時共同指導）は 47 件行いました。新規に人工呼吸器装着患者退院用地域連携パスを用いて退院した患者は 17 名でした。

3. 地域医療連携

1) 地域医療支援委員会

地域医療支援委員会を 4 回開催し、地域との連携を図りました。地域医療機関との連携においては、登録連携医療機関は 331 施設となり、地域との連携強化を推進しました。

2) 成育臨床懇話会

当院での診療を紹介する機会とし、医師、訪問看護師、療育職員、行政職員など 108 名の方にご参加いただきました。

4. 医療福祉相談

2023 年にソーシャルワーカー（社会福祉士・精神保健福祉士）に寄せられた医療福祉相談は、新規患者数 1,162 名、全対応患者数 2,068 名、全相談件数は 14,471 件でした。1 件あたりの相談に複数の内容が含まれる場合もあり、相談内容の総数は 16,023 件となりました。相談内容の内訳と総数に占める割合は、経済的支援 2,045 件（13%）、心理社会的支援 7,620 件（48%）、受診受療支援 2,930 件（18%）、退院支援 2,112 件（13%）、社会復帰支援 1,009

件（6%）、家族への支援 307 件（2%）でした。

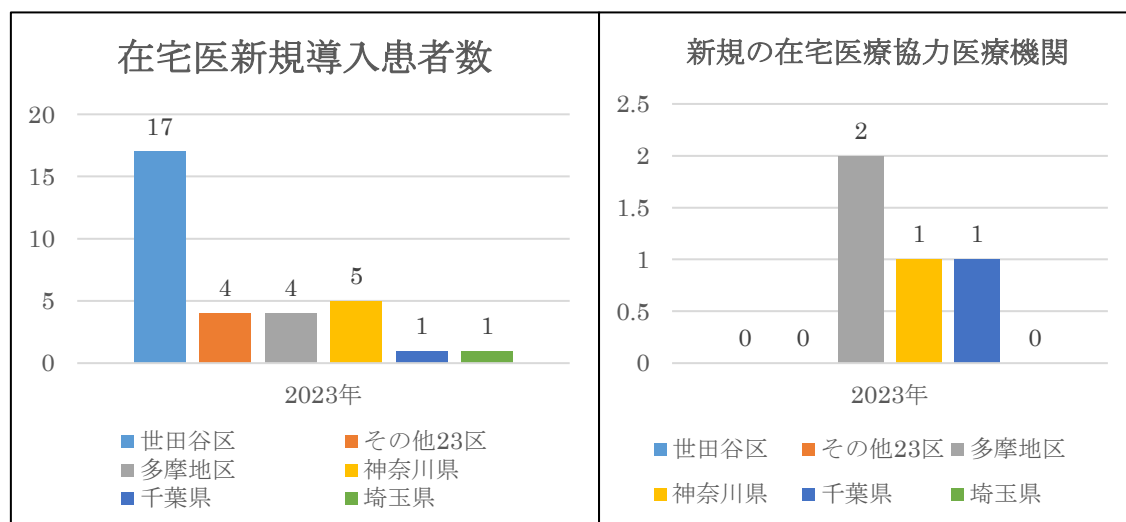
5. 重症患者初期支援

2023 年 3 月より重症患者初期対応メディエーターをソーシャルワーカー（社会福祉士）が担い、2023 年 4 月より重症患者初期対応充実加算を算定しています。2023 年中の対象症例 50 例中 34 例に重症患者初期対応メディエーターが介入しました。

3-7-19-3 在宅医療支援室

成人期移行も見据えて、地域の在宅医に小児患者も診てもらえるよう活動を行っています。在宅医療を必要とする患者・家族の希望を聞いたうえで、在宅医を紹介しています。2023 年 1 月 1 日から 2023 年 12 月 31 日までの実績を下記に示します。

成育の患者さんを新規に診ていただいている在宅医（4 診療所、患者 32 名）



1. コロナ禍での対応

2023 年 1 月から 3 月まで電話再診を実施し、在宅医療物品の郵送を希望する外来患者への郵送対応を 32 件行いました。

2. 講習会

第 21 回 SSSG（世田谷小児・成育医療学術講演会）2023. 5. 26

令和 5 年度世田谷区小児訪問理学療法士研修 2023. 7. 8、2023. 9. 3、2023. 12. 4

令和 5 年度 第 1 回 世田谷区薬剤師会在宅研修会 2023. 7. 25

葛飾区小児科医会小児科集談会講演会 2023. 9. 19

令和 5 年度小児在宅医療技術講習会 2023. 1. 5、2023. 3. 2、2023. 5. 11、2023. 6. 15、2023. 7. 20、2023. 9. 7、2023. 10. 12

令和 5 年度在宅医療を支える訪問看護研修 2023. 10. 7

小児期発症の慢性疾患を持つ成人患者に対する医療ネットワーク構築に向けての話し合い. 2023. 10. 28

令和 5 年品川区保育課の研修「のびしなプロフェッショナルスクール」 2023. 12. 1-2024. 2. 10、動画配信

令和 5 年度小児薬物療法認定研修会 2023. 12. 1.-2024. 2. 28 動画配信

3. 研究・事業

1)内閣府 戦略的イノベーション創造プログラム 人工知能技術（AI）ホスピタル事業：医療的ケア児における AI を用いた医療・生活支援システムに関する研究

2)AMED 研究 障害者対策総合研究開発委事業：人工知能技術（AI）を活用した医療的ケア児に対する組織的支援体制の構築に関する研究

4. 社会貢献

[参加委員会]

1)日本医師会 小児在宅ケア検討委員会

2)東京都医師会 在宅医療協議会小児在宅医療部会

3)日本小児科学会 重症心身障害児（者）・在宅医療委員会

4)世田谷区医療的ケア連絡協議会

5)世田谷区医療的ケア小委員会

6)世田谷保育園医療的ケア連絡会

7)世田谷区医療的ケア相談支援センター（Hi・na・ta）事業運営委員会

8)中野区医療的ケア児等支援地域協議会

9)川崎市小児在宅医療を考える会

[医療的ケア指導医]

1)東京都立光明学園

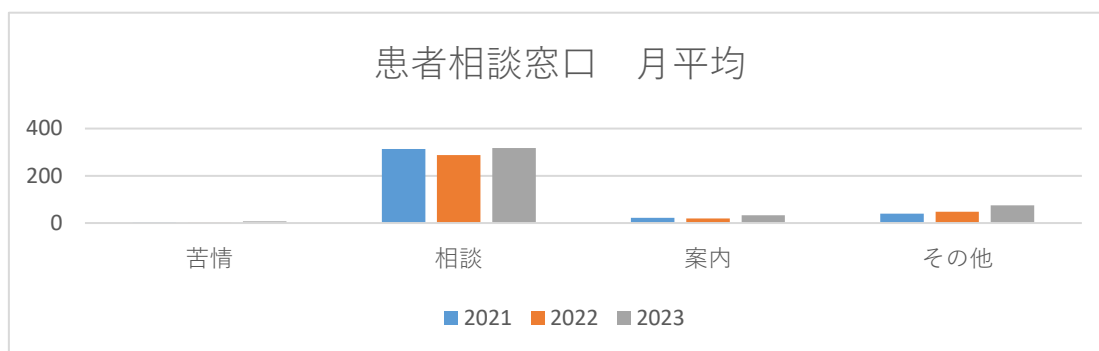
2)世田谷区立豪徳寺保育園、世田谷保育園

3-7-19-4 患者相談窓口

患者支援の一環として相談窓口を設置し、医療安全管理者やソーシャルワーカーを始めとする多職種で、様々な問い合わせや相談、案内、苦情への対応を行っています。

医師や看護師、医療安全、ソーシャルワーカーなど適切な部署・職種への橋渡しの役割を担っています。また、受診や疾患などに関する院外からの電話相談にも対応しています。

苦情対応では、件数は少ないものの、職員の接遇や診療内容の説明不足等を訴える声が大半を占めており、患者の声に耳を傾け、院内の関係部署が解決策の検討を図れるよう情報提供を行っています。



	苦情	相談	案内	その他
2021	3	313	22	40
2022	2	288	20	48
2023	7	317	33	75

3-7-19-5 ベッドコントロール室

1. 緊急入院のベッドの調整・確保
2. 退院予定患者の把握
3. 予約入院のベッドの確保

各病棟看護師長と連携をとり、病床の状況、患者情報をタイムリーに把握し、病床を効率的に活用できるよう迅速なベッドコントロール業務を行い、より多くの入院を受け入れるベッドを確保し、患者のニーズに応えられるよう取り組んでいます。必要時には担当医師とも情報共有を行い入院から退院まで患者・家族が安心して医療を受けられるよう支援をしています。また、DPC データを活用し病床の稼働を適正に調整、データ化し病院経営に貢献しています。

3-7-19-6 入院サポート室

患者家族が退院という局面において感じる心配事を理解し、退院後も続く在宅療養において不安なく生活が送れるよう支援しています。また、治療経過に合わせて退院調整ができるよう、入院時から院内・院外多職種とともに退院支援を推進し子どもの成長発達に応じて変わる社会資源を適切につなぐよう連携を図っています。2021 年 12 月より少数人数から入院時支援を開始し、2022 年 7 月には対象を全診療科に拡大し、2023 年は 2,673 件の入院前の面談を実施しました。

3-7-20 教育研修センター

1. レジデント・フェロー教育

当センターでは、小児医療と周産期医療の中心となる人材育成のために、日本全国から集った総勢 200 名近いレジデント（専門研修医）およびフェロー（専門修練医）に対して、質の高い研修を提供している。当部門では、小児科レジデント（39名）に対する小児科専門研修プログラムの運用を行っており、具体的には小児科レジデントの採用活動、選考・採用プロセス、研修の実施、およびレジデントの評価システムなどを運用している。また当センターは、外科専門研修プログラムの連携病院となっており、計12の基幹病院と連携している。外科（小児外科）、移植外科、心臓外科で受け入れの事務手続きを行っている。当部門では小児科レジデントを対象としたレクチャーを数多く実施しており、小児科の専門家のみならず、外科系や薬剤部など、小児医療を取り巻く様々な領域の専門家が担当している。2017年から小児科専門医試験の受験資格として論文執筆経験が必須化され、研究指導の重要性が増していることから、当部門でも研究指導体制を強化しており、小児科レジデントの執筆する論文数、とりわけ英文論文数は増加傾向である（図1）。加えて、若手医師やメディカルスタッフの国際学会での発表や海外研修プログラムへの参加を推進するために、渡航費用や研修費用を補助する制度を設けている。

2. 研修会開催

2023年は、COVID-19感染症による規制の緩和に伴い、それまではオンライン開催が主であったが、徐々に対面開催を組み合わせた形式に移行した。新入職員を対象として、当センターの理念、患者の権利、臨床倫理、感染対策、情報セキュリティなど約30講義からなる研修を開催した。また、全職員を対象とした医療安全や感染対策等の研修会について、開催を支援した。さらに、シミュレーション教育の手法を用いた講習会（NCPR、PALS など）の開催も支援した。当部門では、全国の小児・周産期医療に関わる医療従事者を対象としたセミナーを開催している。2014年に初めて開催した成育サマーセミナーは、2023年には第10回を迎え、臨床研修医や小児科専攻医のみならず、生涯教育を目的とした小児科や内科の先生方など、全国から多くの参加者を得た。小児医療に興味を持つ若手医師を対象とした成育こどもセミナー（全8回）では、全国から累計1万人を超える申し込みを得た。

3. 海外からの研修

当センターの医療は世界的に高い関心を集めており、国際的な人材交流が盛んである。当部門は、当センターでの研修を希望する国内外の研修生の窓口機能（在留資格認定証明書および臨床修練許可証など）を担っている。COVID-19感染症に対する規制緩和以降、外国人研修生の受け入れは2022年の後半から増加に転じ、73名に達した。受け入れ部署は新生児科、移植外科各15名、整形外科9名、集中治療科、周産期・母性診療センター各7名、緩和ケア科、小児外科、麻酔科各3名、救急診療科、内分泌代謝科各2名、消化器科、循環器科、アレルギーセンター、こころの診療科、小児がんセンター、放射線診断科、研究所・分子内分泌研究部各1名であった。

図1．小児科専攻医（レジデント）が執筆した論文数の変化



3-7-21 感染制御部

1. 概要

院内感染の防止対策や感染管理体制に関する各法令通達に基づいて当院の感染管理全般を担当し、病院内にかかわるすべての人を守る医療安全対策とも深く関連し、安全な医療を提供するために活動を行っている。院内感染対策の実務、新型コロナウイルスを含めた新興感染症訓練対策、感染症を発症した職員に対する対応など広範囲に行った。国内の小児医療施設と情報共有し、加算要件への対応方法や感染症流行状況における面会・隔離対策などについて協議した。

2. 感染防御対策室活動内容

2.1 院内活動

2.1.1 感染対策に関する委員会の開催と活動内容

会議名	会期	内容
院内感染防止対策委員会 (全 12 回開催)	毎月 第 3 火曜日 16 時～17 時	リンク部会報告、感染制御チーム会議報告、抗微生物薬適正使用会議報告 院内感染対策にかかわる事項の承認 院内感染防止マニュアル改訂版の承認 決定事項の広報

感染防止対策 リンク部会 (全 11 回開催)	毎月 第 2 火曜日 16 時～17 時 (8 月を除く)	手指衛生の実施状況の監視(毎月手指衛生遵守率調査を実施) 毎月のサーベランス報告・対策の共有と検討 院内感染防止マニュアル改訂版の作成 感染対策に関わる事項の検討及び対策の立案、実施、実施指導 決定事項の部内周知
感染制御チーム会議 (全 52 回開催)	毎週火曜日 10 時 00 分 ～10 時 30 分	4 職種および事務部の感染管理実行メンバーの会議 院内における感染症発生防止のための監視(サーベイランス) 耐性菌及び抗微生物薬使用状況サーベイランスの実施 医療器具関連サーベイランス(人工呼吸器・尿路カテーテル・血管留置カテーテル・手術部位感染) ウイルス感染症サーベイランス 感染防止対策実施状況の遵守率と問題点の抽出 改善活動の検討と実践指導内容の検討、環境監視ラウンド

2.1.2 院内感染防止マニュアル改訂

2.2 感染防御方法に対する教育

2.2.1 新採用者研修

毎月 1 回 新採用者研修の実施 12 回/年 (ビデオ講習会)

2.2.2 院内病院に従事する者への研修

感染対策研修会を全 4 回開催した。2023 年度としては全職員対象(必須)を 2024 年年頭にも行った(1 月 18 日座学、2 月 8 日～3 月 8 日までビデオ講習)。必須研修会受講率は 100%だった。

対象	研修内容	開催月日	参加者数
新入職者必須	医療安全・感染対策研修 e ラーニング 「ASP の実践、細菌検査の注意事項、アレルギーの基礎知識、MRI 検査について、RST の活動について」	4/17～5/15 (ビデオ講習) 5/16～5/20 (フォロー)	209 名
全職員(必須)	感染対策研修会・ビデオ講習 「5 類移行後の新型コロナウイルス対策」	5/9 (座学) 5/10～6/16 (ビデオ講習・延長)	1,672 名
全職員	感染対策研修会・ビデオ講習 「抗菌薬適正使用について」	7/27 (座学) 10/4～10/13 (ビデオ講習)	1,076 名

全職員 (必須)	感染対策研修・ビデオ講習 「医療施設内での感染対策の実際～抗 菌薬適正使用を実施するために必要な 事～」	11/21 (座学) 12/25～2/5 (ビデオ講習・ 延長) 紙面受講 (フォロー)	2,041 名
-------------	---	---	---------

2.2.3 感染対策の実践教育

1) ブラックライト使用による手洗いのスキル向上に向けた教育

1 回/年 COVID19 対応病棟・総合診療部医師・看護部職員・メディカルスタッフ

2) N95 フィットチェックトレーニング

3) 手指衛生が必要な場面の実地教育 3 回/年 全職種担当者

2.2.4 部門別感染対策の実践教育

耐性菌対応、PICU における HAI、NICU 感染対策及び HAI の実際など

2.2.5 院外研修

2.3 感染対策コンサルテーション

年間 1,158 件のコンサルテーションに対応した。依頼者は看護部、診療部、薬剤部、リハビリ、放射線、栄養部、検査科からの依頼があった。

2.4 病棟ラウンドの実施と病院感染防止対策

毎週火曜日環境ラウンド・抗菌薬使用・細菌培養検査結果ラウンドの実施

2.5 新型コロナウイルス感染症対策

1) 対策本部の設置運用、2) COVID-19 専用病棟の確保、3) 疑似症患者対応、4) 検査体制の維持、5) 水際対策 (スクリーニング体制の徹底)、6) 標準予防策の遵守、7) 職員対応・教育、8) 空気感染隔離ユニット (ミンティ) の設置、9) 保健所との密な連携、10) マニュアル・診療ガイドライン作成・改訂

2.6 地域医療・小児医療施設との連携

2.6.1 小児医療施設との連携

小児医療施設 39 施設とネットワークを作り 1 回/年会議を実施

2.6.2 地域医療連携

1) 地域連携カンファレンス (年 4 回実施)

2) 感染対策相互ラウンドの実施：宮城県立こども病院、埼玉県立小児医療センター (訪問および評価)

3. 抗微生物薬適正使用推進室の活動

3.1 抗菌薬使用量のモニタリングと適正使用の推進

抗 MRSA 薬・メロペン・経口抗菌薬 (キノロン系抗菌薬・リネゾリド) については使用許可制を実施。使用許可および介入率 98%、月平均 94 件のオーダー件数について査定を実施した。29 種類の院内全体における抗微生物薬使用量の推移のモニタリングを継続実施している。

3.2 抗微生物薬適正使用推進活動の実際

週 1 回抗微生物薬ラウンドを実施し、抗微生物薬適正使用の検討を 1,121 件行い、各診療科の医師へフィードバックを実施した。抗菌薬管理プログラムチーム (AST) 全体会議を実施し、開催診療部門代表の医師・薬剤師・看護師・臨床検査技師による抗菌薬に関する事項の検討と広域抗菌薬の使用内容について確認した

3.3 院外医療従事者への研修会開催

3-7-22 栄養管理部

3-7-22-1 栄養管理室

1. 概況

栄養管理部は、主に経腸ルートからの栄養管理を介して医療の一翼を担う部門です。入院診療計画、栄養管理計画立案に参画し、適切な栄養評価を行い、食事（乳児用ミルク、濃厚流動食含む）管理、栄養食事指導、更には栄養サポートチーム（NST）、緩和ケアチーム活動などのチーム医療を通じ、診療支援を行っています。

栄養管理部の人員構成は、栄養管理部長（副院長併任）以下、常勤管理栄養士（5名）、非常勤管理栄養士（2名）、調理師（7名）、再雇用非常勤調理師（1名）、非常勤調理助手（1名）です。2023年は10月30日付で非常勤栄養士1名が辞職、その後12月1日付でもう1名の非常勤栄養士が正職員として国立病院機構高崎総合医療センターに採用となったため、非常勤職員2名の欠員の状態がしばらく続きました。

2. 入院中の食数等について

当院の主な食種は、周産期の妊産婦食と、児の成長や発達にあわせて離乳食、幼児食、学童食となる小児食です。2023年の取扱い患者数、給食患者数、給食患者食数、喫食率は以下のとおりです

【2023年1月～2023年12月 取扱い延べ患者数と給食患者数等】

取扱い患者 延数(人)	給食患者 延数 (人)	給食患者食数（件）		喫食率 (%)
		食数 (食)	特別食 加算 (食)	
161,193	133,469	344,824	14,735	90.5%

なお、主に小児食では、食物アレルギーやてんかん症或いは形態調整の必要な患児等への個別の対応を行っており、院内約束食事基準(84種類)に示している食種以上のきめ細やかな対応を行っています。更に季節や各種行事に合わせた行事食やキャラクターをモチーフとして盛り付けた「プレート献立」も提供し、好評を得ています。

また、食事におやつが付く幼児・学童食を対象に毎週1回手作りおやつの日を設けています。更に長期入院患者の多い病棟では出張おやつサービスを月1回行いました。

これらの取り組みに対しては、定期的にアンケートを実施し、子どもたちの希望を取り入れながらおやつの内容を決定しています。

食事の他にも、乳児用の調乳、濃厚流動食の希釈・分注もかなりの種類と量を取り扱っております。（詳細は下記表参照）

【2023 年 1 月～2023 年 12 月 調乳本数】

調乳（23 種類）		濃厚流動食 希釈・分注（12 種類）	
人数 （人）	本数（本）	人数（人）	本数（本）
31,587	279,138	10,463	65,859

3. 栄養食事指導、チーム医療

個人栄養食事指導の主な依頼病名は、入院・外来問わず、妊娠糖尿病、食物アレルギー患児が多く、保険診療外になりますが、プレコンセプションケアの一環としての栄養食事指導も実施しました。チーム医療では、緩和ケアチーム、NST チームに参画しています。その他、ICU における早期栄養介入管理や入院時支援も行っています。

【2023 年 1 月～2023 年 12 月 栄養食事指導等実施状況】

個人栄養食事指導件数（件）				入院時支援 件数 (2,300 円)	ICU 早期栄養 介入管理 件数 (2,500 円)	ICU 早期栄養 介入管理件 数 (4,000 円)
入院初回 (2,600 円)	入院 2 回目 (2,000 円)	外来初回 (2,600 円)	外来 2 回目 (2,000 円)			
100	19	641	765	194	499	1,063

4. 管理栄養士養成施設から臨地（校外）実習生の受け入れ

北海道文教大学、家政学院大学、東京医療保健大学、家政大学といった養成施設 4 校から合計 15 名の実習生を受け入れました。

5. 研究等への参加

好酸球性消化管疾患、良質な医療の確保を目指す診療提供体制構築のための研究に参画しています。

厚生労働省難治性疾患 EGID 政策研究班 幼児～成人サブグループ

代表研究者：野村伊知郎、分担研究者：齊藤由理

6. 研修

NST 勉強会にて全職員対象に「緊急ミルクとカップ授乳実技講座」を実施いたしました。

3-7-23 災害対策部

災害時等の病院の危機管理への対応には平時からの準備と全職員の協力が必要であり、患者さん及び付き添いご家族、職員の安全を第一に可能な限り診療機能を維持し医療を継続することを目的とした計画と体制整備が必要です。

当院は小児・周産期の医療提供を使命としていることから、入院患者さんへの対応に加え、被災により来院する小児傷病者及び医療的ケア児、妊産婦等の受け入れや、他の医療施設で医療の継続が困難となったことによる患者さんの転送による受け入れ体制も重要です。

また、東京都より災害拠点連携病院としての指定を受けており、地域住民への災害時の医療体制についての役割も有しています。

そのため、消防計画に基づく防災対策を行うとともに突発的に発生する緊急事態、特に首都直下型地震に対する事業継続計画（BCP：Business Continuity Plan）の策定及び災害時対応マニュアルの整備など、災害時の院内における医療体制の検討を行い、事前の準備や訓練を行うとともに、職員への理解や意識の向上など体制整備を進めています。

活動内容

1. 事業継続計画（BCP）の策定

災害から職員・患者さんの安全を守り医療の継続を図るためには、想定される被害と医療ニーズに対する事前の備えと代替え手段、優先する業務などの事業継続計画が必要です。災害対策部では、随時災害対策ワーキンググループと共に課題の抽出や訓練での検証を踏まえたBCPの見直しを行い、体制整備に向けて対応を行っています。

また、感染症の流行を含め、災害により出勤できない職員が多数発生した場合の各部門の対応について、BCP業務縮小計画を感染制御部、ICTとともに各部署へ作成依頼を行い策定しています。

2. 緊急連絡／安否確認システムの導入

当センターでは、BCPの一環として緊急連絡／安否確認システムを導入しています。研究所を含めた全職員に加え防災センター、エネルギーセンターなど災害時重要な業務を担う者に対し登録を行い、災害発生による安否と参集の可否について確認を行います。実災害時に機能できるように、通報・回答訓練を年度当初及び災害訓練時など随時実施しています。

3. 災害対策支援システム（BCPortal）の導入

災害発生によるセンター各部門の被災状況報告をシステムにより現場から発信し、集約された情報を災害対策本部を含む関係者で共有を行うことができるシステムです。インターネットを利用するシステムであり、夜間休日等で人員が少ない時間帯や高層階の病棟など災害対策本部への迅速な被害状況の報告が困難な状況を想定し導入しています。そのため、災害時に円滑に運用できるよう訓練を通じて活用を行っています。

4. ライフライン等の整備

2023 年に行った災害対策にかかる主な整備は下記のとおり。

- ・ 貯水槽の増設 250t (125t×2 基)
地下にある 200t の貯水槽と合わせて 450t の備蓄となり、節水により 3 日分の水道水の確保となっている。
- ・ 雑用水槽拡張 362t から 765t に拡張
水道水に加えて雨水をろ過装置に通し雑用水槽に貯水しており、冷却塔系統、トイレ系統の水の利用を図っている。
- ・ 職員用非常食の増
従前、1 日分の備蓄であったが、職員用非常食として 1,000 食の備蓄増を行っている。

5. 災害研修・訓練の企画・立案及び実施

年次ごとにテーマを持って院内の防災訓練を企画し実施しており、2023 年 9 月 1 日は関東大震災から 100 年となることから、2023 年度の訓練は防災週間である 9 月に併せて実施を行っています。

2023 年実施の研修・訓練は下記のとおりです。

- 1) 大規模地震想定 of 災害訓練 (2023. 2. 17) (2023. 9. 4)
 - ・ 首都直下地震を想定した各部門におけるアクションカードの活用による初動訓練
(各部門における職員、患者さんの安全確認及び被害状況報告訓練)
 - ・ 災害対策本部運営訓練
(各部門からの報告される被害状況の把握と対応、病院機能維持への対応訓練)
 - ・ 被災傷病者への受付からトリアージ、中等症診療エリアでの受け入れ対応訓練
(2023. 2. 17 のみ実施)
- 2) e ラーニングによる災害対策研修
 - ・ 夜間休日に対応するため、日当直担当者全員への災害時に活用するシステム (安否確認システム、院内災害対策支援システム、広域災害救急医療情報システム) に関する研修
 - ・ 新入職者を対象とした自衛消防訓練 (火災発生時の対応と院内消防設備について) と事業継続計画 (BCP) と災害対応マニュアルの解説講習
- 3) 自衛消防訓練 (2023. 12. 5)
 - ・ 病棟での出火想定の実動訓練 (通報連絡、初期消火、避難誘導)
- 4) 病棟等の部門ごとに地震発生を想定した机上訓練の実施

6. 地域における災害時医療体制の構築

当院の位置する世田谷区砧地域は住宅地であり、医療機関は少なく、総合病院及び災害拠点病院を有していない地域となっています。また、高齢者も多く、住民の 20.5% が 65 歳以上となっています。

首都直下地震などの大規模災害が発生した場合、当院は小児・周産期の専門病院で

すが、東京都災害拠点連携病院であり、緊急医療救護所が敷地内に開設されることから、自助・共助による被災傷病者の来院が想定され、地震災害に加え、多摩川を含めた水害への対応も必要な地域となっています。

また、世田谷区との「災害時における妊産婦等支援活動に関する協定」により母子避難所との連携も必要となっています。

地域の医療機関として、行政などの関係機関や近隣（二次医療圏など）の医療機関との連携を図り、さらには、広域災害時にも機能する医療機関としての体制整備を進めてまいります。

3-7-24 医療安全管理部

1. 概要

昨今の技術の進歩は、診療の高度化、複雑化、多様化をもたらし、医療者の負荷は増大し、医療の現場はますます有害事象の発生しやすい環境になってきた。われわれ診療に携わる医療者は常に危機管理意識をもち、安全な医療の提供に努めなければならない。医療安全管理部は、院内の職員に対し安全意識の推進や、情報収集によるシステム改善対策を中心に、当センターで発生した医療事故への対応等幅広い活動を行うため、副院長（医療安全担当）、医療安全管理室長（診療部長）、副薬剤部長（医療安全担当）、医療安全管理者（看護師長）、専任看護師（副看護師長）、患者相談専門職、事務担当者の7名が配属されている。また、院内の各部署32か所に計55名のリスクマネージャーを配置し、患者や職員にとって、安心で安全な医療提供の場であるよう各部署と連携を取りながら活動を行っている。

2. 活動内容

2.1. 医療安全対策に関する委員会の開催と活動内容

会議名	会期	内容
医療安全管理委員会（12回開催）	毎月第3火曜日 13:00～14:00	インシデント・アクシデント報告 再発予防策の検討 医療安全管理に関わる規程や指針等の改訂承認 医療事故外部調査委員会開催案件の検討
リスクマネージメント部会（11回開催）	毎月第2月曜日 16:00～17:00	インシデント・アクシデント報告 勉強会「点滴漏れ発生時の対応」「ナラティブ研修」 医療安全ラウンド 標語ポスター作製 事例検討 医療安全マニュアルの改訂作業
医療安全ミーティング（46回開催）	毎週月曜日 11:30～12:00	インシデント・アクシデントの共有と改善策の検討 対応困難事例、診療録情報管理室との情報共有

2.2. 院内研修

対象	研修内容	開催日	参加者数
新採用者	第1回医療安全・感染対策研修会（e-ラーニング）	2023/4/17	209名

(必須)	抗菌薬管理プログラムの実践、正しい検体採取及び提出方法、アレルギーの基礎知識、MRI 検査について、RST の活動について	～5/15	
全職員 (必須)	第 2 回医療安全研修 (動画視聴) 「点滴漏れ対策と褥瘡について」田中諒 (皮膚科)、 「持続輸液中の観察方法」佐藤撰 (皮膚・排泄ケア認定看護師)・医療安全管理室、「患者誤認を防ぐために」萱沼さとみ (医療安全管理者)	2023/7/10 ～7/31	1691 名
全職員	第 3 回医療安全研修 (動画視聴) 「安全な中心静脈カテーテル挿入のために」 中川聡 (医療安全管理室長)	2023/9/27 ～10/27	1540 名
全職員 (必須)	第 4 回医療安全研修 (現地開催と動画視聴) 「12 月 21 日は医療安全の日」石田あや (医療安全管理室副師長)、「術前の手術説明や合併症発生時の対応で心掛けていること」石丸哲也 (外科診療部長)、NICU における計画外抜管防止の取り組み」丸山秀彦 (新生児科医長)	2023/12/21 (現地開催) 2024/1/4～ 1/31 (動画視聴)	1810 名

2.3 医療安全ラウンド

毎週月曜日に部署をラウンドし (47 回)、医療安全マニュアル・ポケットマニュアルに記載されている事項についてインタビューし、理解度を確認すると共に不足な部分は指導を行った。ラウンド結果については所属長へ評価結果をまとめフィードバックを行っている。

2.4 外部医療施設との連携

小児医療施設 5 施設間の医療安全相互チェックは 9/20 に千葉県こども病院を訪問審査し、11/24 と 12/18 に埼玉県立小児医療センターから訪問審査を受けた。指摘事項を提言書にまとめて交換し、各部門で改善に取り組んだ。NC や NHO の病院間で医療安全管理者協議会を月 1 回対面で開催し、情報共有を行い注意喚起や再発予防策へつなげた。医療安全地域連携加算 2 に関わる相互チェックでは 7/5 に至誠会第 2 病院を訪問し審査実施した。

2.5 インシデントレポート集計

表題別	件数	レベル別	件数	職種別	件数
薬剤	1,255	レベル 0	649	診療部	358
輸血	133	レベル 1	1,042	看護部	4,681
治療・処置	360	レベル 2	2,606	薬剤部	139
医療機器	411	レベル 3 a	1,243	放射線診療部	168
ドレーン・チューブ	1,973	レベル 3 b	16	栄養管理部	72
検査	425	レベル 4	0	臨床検査部	113
療養上の世話	775	レベル 5	0	リハビリテーション	61
その他	224	オカレンス	64	その他	28
オカレンス	64	合計	5,620	合計	5,620

合計	5,620
----	-------

2.6 中心静脈カテーテル挿入に関わる指針の策定

中心静脈カテーテル挿入に関する指針を定め、教育プログラムを整備し、指導認定医と施行医は任命制とし、安全性の強化を図っている。また、各部門から中心静脈カテーテルの挿入実績と合併症の報告をしてもらい、関係する部門でその実績を共有した。

2.7 医療に起因した予期しない死亡（死産）事例について

死亡（死産）事例のカルテレビューを実施し、提供した医療に起因した予期しない死亡（死産）ではないか確認を行っている。予期しない死亡（死産）事例においては、医療事故調査制度に則り、医療事故調査・支援センターへの報告、医療事故調査委員会の開催と報告書作成、及び再発予防対策の立案と院内周知を行っている。医療事故調査委員会は外部委員を招聘し2回開催した。

3-7-25 子どもの生活安全対策室

子どもの生活安全対策室は、院長を室長とし3名の副室長、各部署・診療科から選出された室員59名の計63名で構成されている。

毎月の定例会議に加えて、虐待対応部門と傷害情報収集・支援担当部門・の2部門での活動を行っている。

1. 虐待対応部門

(1) 院内虐待対応・事故防止マニュアルの改定

院内虐待対応・事故防止マニュアルに「障害者虐待の対応」「配偶者からの暴力への対応」「特定妊婦への対応」を追加した。

(2) 臓器提供における児童虐待除外手順の手続きシミュレーション

2023年2月20日にロールプレイによる臓器提供における児童虐待除外手順のシミュレーションを実施した。なおそれに先だって2月16日に室員だけでの検討を行った。

(3) 臓器移植倫理委員会への参加

2023年夏に脳死による臓器移植倫理委員会が開催され、子どもの生活安全対策室院内虐待対応・事故防止マニュアルに基づいて、臓器提供における子ども虐待症例の除外手続きを行った。

(4) 地域活動

これまで地域活動として、検察・警察・室員連携事例検討会を実施していたが、コロナウイルス流行に伴い中止したままである。今後、再開をめざしていく。

(5) 啓発・教育活動

6月3日に子どもの生活安全対策室室員を対象に、チャイルドファーストジャパンが実施する出前型RIFCR研修を院内にて実施した。

11月10日には、外部講師を招き「No Hit Zone すべての人に安全・安心を」院内職員向け講演会を実施した。その後、職員や患者・家族への啓発として、ノーヒットゾーンのポスターを院内に掲示した。

(6) 他機関からのセカンドオピニオンの依頼

2023 年 対応件数 面談 38 件・意見書作成 6 件

2. 傷害情報収集・支援担当部門

(1) 医療機関ネットワーク事業（消費者庁、独立行政法人国民生活センター）

例年通り継続して傷害情報を提供（2023 年 2186 件、月平均 182 件）

傷害情報の詳細報告（2023 年 10 件）

(2) 院内事故予防

2023 年（救急外来 51 例、病棟 34 例）

コロナウイルス流行に伴い、指導を見合わせたりせざるをえない状況があったが、2023 年は以前の介入件数に戻った。

3. その他：電子カルテ更新に伴う子ども生活安全システムの変更

傷害情報収集・支援担当部門も含めたシステムへ変更、院内職員に対してカルテ上の周知表示の追加を行った。

3-7-26 緩和ケア管理室

1. 活動状況

当センターでは、2020 年 8 月より組織全体の緩和ケアの質の向上と均霑化を目指して、緩和ケア管理室を設置しました。生命の危機に直面する疾患を持つ患者と家族の苦痛の緩和と療養生活の質の向上をはかるため、組織横断的に活動する緩和ケアチームの活動を支援するとともに、院内の緩和ケア体制の向上に取り組んでいます。

2. 組織体制

緩和ケア管理室は、室長（緩和ケア科診療部長併任）、副室長（ICU 看護師長併任）の 2 人に加えて、多職種で構成する緩和ケア委員会、緩和ケア小委員会のメンバーとともに活動を行っております。

3. 取り組んでいる主な活動

・緩和ケアチーム活動

緩和ケアチームは身体や心などのつらさをやわらげ、その子らしい生活が送れるよう、医師、看護師、薬剤師、リハビリ、心理士、栄養士、MSW、CLS、保育士、ファシリティードッグハンドラーが協働して主治医チームとともに支援を行っています

・終末期の質の向上に向けた取り組み

当院で亡くなったケース全例において、ケースの振り返りを行い、当院全体の終末期の質向上のために検討を行っています。

・ビリーブメントケア

当院でお子さまをなくされたご家族に、その後も当院と連絡が取れるように窓口を設置し、ご家族が必要と思われたときにアクセスできる体制を整備しております。

3-7-27 薬剤部

薬剤部では、適正かつ安全な薬物療法の実施を目標に、調剤及び各種の診療支援・患者支援を行っている。小児及び周産期の薬物療法は一般成人とは違った特別な情報・技術が必要であり専門性が高い。このため薬剤部では専門性の高い薬剤師教育を行い、医療チームの要望に応えている。また、電子カルテ・IT機器を積極的に活用し、医薬品の安全管理や適正使用に貢献している。近年は医師の業務負担軽減策として、持参薬処方箋の仮オーダー登録や疑義照会後の処方代行入力などを実施し、タスクシフトを実践している。

1) 調剤業務

入院患者の急変、緊急入院及び夜間・休日の急患に対応するため 24 時間体制で内服薬、外用薬、注射薬の調剤を実施している。平成 30 年 7 月より医師の業務負担軽減のために、医局了解のもと院外処方箋疑義照会の代行回答を実施し、約 37%の疑義照会に対し代行回答を行なっている。また、上述したとおり、令和 3 年 12 月より疑義照会後の処方代行入力を開始し、院内調剤の疑義照会のうち、約 45%を代行入力している。

	R3	R4	R5
入院注射処方箋枚数	366,970	410,038	411,416
外来注射処方箋枚数	28,826	31,637	32,120
入院処方箋枚数	108,738	115,296	119,793
外来院内処方箋枚数	16,910	18,335	16,690
外来院外処方箋枚数	68,504	69,985	73,220
院外処方箋発行率	80.2%	79.2%	81.4%

2) 製剤業務（無菌製剤、一般製剤）

薬剤部内の専用のクリーンルームにて注射薬（抗がん剤、TPN 製剤等）の無菌調製を行っている。

抗がん剤については正確な調製及び調製する医療スタッフの暴露防止のため専用の設備を有する薬剤部にて入院患者及び外来患者への投与の全てを調製している。さらに小児における TPN 製剤による感染防止のために無菌製剤処理料 2 の実施件数は、国立病院機構及び国立高度専門医療研究センターの施設の中では、抜きん出た実績を有している。加えて、令和 3 年より従来麻酔科医が実施していたモルヒネ注射液の PCA ポンプ注入を薬剤部で調製することを開始した。

また、小児薬物療法においては市販されている薬剤・剤形だけでは必要な治療が行えないことがあり、多くの院内製剤を製造している。

	R3	R4	R5
無菌製剤処理料 1 総実施件数	4,876	3,968	3,862
無菌製剤処理料 2 総実施件数	12,883	15,385	16,143
院内製剤品目数	53	58	60

3) 薬剤管理指導・病棟薬剤業務

入院中の患者に安全で適切な薬物治療が行われるように、各診療科に担当薬剤師を配置して患者の薬物療法を管理している。また、患者が適正な薬物治療を安心して受けられるように服薬指導を実施しており、小児入院医療管理料に包括ではあるものの、薬剤管理指導料の算定件数は年々増加している。令和元年5月より全病棟の病棟薬剤業務を開始し、様々な診療支援及び適正な医薬品管理を行っている。

	R4	R4 (包括病棟)	R5	R5 (包括病棟)
薬剤管理指導料請求件数 (1. ハイリスク)	1,891	1,078	2,318	1,014
薬剤管理指導料請求件数 (2. 1. 以外)	9,419	967	9,900	957
薬剤管理指導料請求件数 (上記合計)	11,310	2,045	12,218	1,971
麻薬加算件数	591	7	769	32
退院時薬剤情報管理指導料件数	3,758	446	4,398	674
病棟薬剤業務実施加算 1 請求件数	26,209		29,188	
病棟薬剤業務実施加算 2 請求件数	12,513		13,389	

4) 医療チームへの参画

当院では様々な専門医療チームが活動しており、感染制御チーム (ICT)、抗菌薬適正使用支援チーム (AST)、栄養サポートチーム (NST)、褥瘡対策チーム (WOC)、がん化学療法チーム、緩和ケアチームに薬剤師も参画して様々な診療支援を行っている。また令和4年6月より入院サポート室での入院前患者の術前中止薬の確認や、周術期における薬学的管理を開始している。

5) 医薬品リスク管理・医療安全

令和3年度より医療安全専従薬剤師を配置し、医薬品に係るインシデント事例について、医療安全管理部と協力し積極的に対策を行っている。また新採用者研修や院内 e-ラーニングなども活用して再発を防ぐ取り組みを実施している。

6) 医薬品情報管理・薬剤委員会事務局

薬剤委員会を年間11回開催し、医薬品の採用・削除、その他医薬品管理に関する案件について審議している。後発品企業の不正事件に始まり、コロナ禍及びウクライナ問題も影響し、全国的な医薬品不足の状態にあるが、日々流通状況を捕捉し、品目によっては緊急的な採用変更や分割的投与の実施などを行い医療現場への安定供給に努めた。また、医薬品メー

カーからの情報や厚生労働省からの通達等を整理して、院内各所に情報提供を行うとともに、院内外からの医薬品に関する問い合わせに対応した。

7) 専門・認定薬剤師の育成

薬剤部では当院で行われている専門性の高い薬物療法に対応できるよう、主に以下の専門・認定資格を取得している。

	R5
小児薬物療法認定薬剤師	17 名
妊婦・授乳婦専門薬剤師	1 名
妊婦・授乳婦薬物療法認定薬剤師	2 名
感染制御専門薬剤師	1 名
日本糖尿病療養指導士	2 名
NST 専門療法士	2 名

8) 薬剤師教育

薬剤部では小児・周産期領域を専門とする薬剤師育成に関する薬剤師教育を担っている。令和 5 年実施した教育研修は以下の通り。

- ・薬学生の実務実習教育 学生 9 名
- ・薬剤師レジデント育成 5 名（I 期 2～3 名・2 年間）
- ・小児薬物療法認定薬剤師研修 13 名
- ・医薬品医療機器総合機構 薬剤部長期研修 1 名
- ・成育医療研修会薬剤師コース（Web 研修会） 59 名

9) 政策事業・政策提言

小児・周産期薬物療法の発展、小児用剤形開発の推進を目的として、厚生労働省の各種の政策事業に参画している。

〈事業〉

- ・妊娠と薬情報センター事業
- ・小児と薬情報収集ネットワーク事業
- ・小児治験ネットワーク事業
- ・小児製剤ラボ

3-7-28 看護部（保育士・中央材料室を含む）

1. 看護部

1) 働きやすい職場環境づくり

- ・サンキューカードや終礼でのポジティブフィードバック、季節ごとのイベント企画、看護を語る会など、部署ごとに働きやすい職場づくりのための活動を計画し、取り組んだ。

- ・不安や心配等がある職員に対しては、看護師長との面談を早期に行った。また、状況に応じて副看護部長も面談に同席し、職場環境の確認・調整などを看護師長と共に行った。特に新人看護師に対しては、教育担当看護師長と情報を共有して早期に介入し、指導体制の見直しや配置部所の調整などを行った結果、新採用者の離職率を 11.8%から 7.2%に減らすことができた。
- ・病棟管理担当診療部長との週 1 ミーティングを開始。病棟内の情報共有や問題について検討する機会を設け、風通しの良い職場環境の醸成に努めた。
- ・育児休業を取得していた看護師・助産師を対象に「働くママの会」を開催し、参加者は 9 名であった。先輩ママからの経験談を聞き、復帰に向けての不安が軽減したり、家庭と仕事の両立のコツを学んだりすることができていた。

2) 看護（医療）の質の向上

- ・プライマリー看護の推進を図るため、各部署のプライマリーに関するアンケート調査をもとに「プライマリーナーシングマニュアル」を作成し、運用を始めた。
- ・病院機能評価受審に向けて、看護記録の見直しや業務手順の修正、ケアプロセスの確認を定期的に実施し、看護の質の向上に努めた。
- ・周産期部門では、「いいお産の日」や「未熟児早産児デー」などのイベントを企画し、多くの患者・ご家族の参加があった。
- ・コアサポート（産後ケア）では、夫の付き添い宿泊を再開し、利用者が増加した。
- ・効率的な病床運用と断らない医療を目指し、小児病棟満床時には、速やかに病棟看護師長を招集し、ベッドコントロール会議を行い成人病棟との調整を図り、患者数の確保ができた。令和 5 年度平均患者数は 406.9 人（前年度比+17.9 人）で、7 月には平均患者数 436.6 人となり、7 月 12 日には過去最高の 470 人の入院患者を確保できた。
- ・AI ホスピタル事業として、救急部門で看護記録の音声入力の実験運用を開始した。

3) 人材育成と看護研究の推進

- ・看護部院内研修は、新型コロナウイルス感染症の 5 類移行に伴い、集合研修を再開し、研修内容を修正した。また、4 年ぶりに新人看護師のリフレッシュ研修も再開し、同期との絆を深めリフレッシュすることができていた。また、「専門職業人として学ぶ姿勢」の講義を行い、教えられる側の教育も開始した。
- ・特定行為研修の受講支援も行い、「術中麻酔管理領域」、「在宅・慢性期領域」、「救急領域」各 1 名の研修を修了することができた。
- ・新型コロナウイルス感染症で実施できていなかった新任看護師長 6 人と副看護師長 8 人に対して院内研修プログラムを作成し、看護師長 22 項目 16 時間、副看護師長 6 項目 5 時間の研修を実施した。
- ・看護管理者研修の受講の推進も行い、認定看護管理者 2 名合格、ファーストレベル 1 名、セカンドレベル 2 名受講。
- ・幹部看護師任用候補者選考試験対応では、既定の研修以外の補習や模擬試験などの支援を細やかに実施し、当センター初の 100%合格を獲得した。（NHO 合格率約 50%）
- ・統一された教育体制の整備に向けて、配置換え看護職員年間計画を作成し、運用を開始した。また、新人看護職員標準教育計画（看護師版・助産師版）を作成したので、来年度から運用を開始する予定である。

- ・保育士キャリアラダーを完成させ運用を開始し、保育士の体系的な教育体制を構築した。
- ・6月に「看護研究実践マニュアル」を改訂、説明を行い各部署2題以上の看護研究に取り組めるよう看護研究の推進を図った。学会発表・執筆件数、合計23件。
- ・人材確保としては、ナース専科（7件）やマイナビ（1件）の合同就職説明会への参加や4件の院内就職説明会を実施した。
- ・2024年度看護職員（看護師・助産師）採用試験を2023年4月22日、5月21日、6月18日の3回実施し、合計309名の応募があり、1次審査（書類）と2次審査（オンライン面接）を行った。

2. 研修

院内研修の開催数（集合研修）	93回
院内研修の開催数（オンデマンド研修）	36回
院内研修の開催数（eラーニング）	1回
研修に参加した看護職員の延べ人数	5312名

3-7-29 もみじの家

1. 沿革と概要

医療の進歩に伴い在宅で医療的ケアが必要な子どもの数は増え続け、2021年度で2万人以上と推計される。多くの家族が24時間365日のケアに追われ、心身の疲労を蓄積させている。もみじの家は2016年4月、医療型短期入所サービスを提供する施設として、成育医療研究センターの敷地内に開設された。主に医療的ケアが必要な子どもと家族が最長9泊10日滞在できる。また2018年9月より、専門的な緩和ケアを受けながら最期の時間を過ごすための病床運用を開始し、様々な理由で自宅での療養が難しい子どもたちにとって、制限の多い病院とは違った第3の選択肢として、大切な時間を過ごせる場所を提供している。鉄筋2階建て、延べ床面積は約1,700㎡。1階には子どものベッドが11床（個室×5、3人室×2）、共用ダイニングキッチン、2つの浴室（機械、一般）などがあり、2階にはプレイコーナー、音楽室、感覚を刺激するセンサリールームなどが整備されている。子どもには医療的ケアに加えて、成長発達を促す遊びや学びの活動、生活介助（食事や入浴、排せつなどのサポート）のサービスが提供され、家族は安心して自由な時間を過ごすことができる。

2. 理念・ミッション

<理念>

重い病気を持つ子どもと家族のひとり一人が、その人らしく生きることができる社会を創る。

<ミッション>

重い病気を持つ子どもと家族に対する新しい支援の仕組みを研究開発し、全国に広める。

3. スタッフ

- ・施設長（病院長が兼務）
- ・ハウスマネージャー 1名
- ・看護師 16名（看護師長、副師長を含む）
- ・保育士 2名
- ・介護福祉士 1名
- ・事務長 1名
- ・事務職員 1名（非常勤）
- ・医師 1名（併任）
- ・MSW 1名（併任）
- ・薬剤師 1名（併任）

（4）実績

- ・新型コロナウイルスの影響が収束してきているなかで1日入所人数が7.5人となった。（前年度比では0.4人増）
- ・他院にかかりつけの子どもの場合、登録面談時に必要な診察の枠が限られているため、面談までに1年半程度待たなければならない状態が続いている。
- ・小児緩和ケア病床に、1名の入院があった。

2023年実績	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
申し込み数	60	59	72	71	81	85	77	130	74	88	92	81
利用者数	50	49	59	51	57	60	52	66	52	54	57	52
1日平均利用者数	8.3	9.3	9.6	7.0	7.4	8.1	7.4	8.0	7.9	7.1	7.5	6.8
キャンセル人数	15	13	12	16	15	16	15	11	9	20	10	19
キャンセル率(%)	25.0	22.0	16.7	22.5	18.5	18.8	19.5	8.5	12.2	22.7	10.9	23.5

4. 今後の課題

1) 運営の安定化

2023年度の収支は246万円程度の赤字となり、寄付金で補てんする必要がある。利用者数の増加を図り、運営を安定させることで、もみじの家のような施設が各地に広がる基盤を確立することが、引き続き求められる。

2) 寄付の呼びかけ

赤字を補てんするための寄付を、継続的に募る必要がある。また、寄付を赤字補てんでの利用ではなく、使途を明確にした利用方法に変えることで寄付を集めやすくしたい。

3) 他院からの小児緩和ケア病床への受け入れ

成育医療研究センター以外の医療機関からも、要望があれば小児緩和ケア病床への受け入れを進めていく。利用について案内するリーフレットを広く配布し、院外の関係者に周知を行う。

4) 防犯対策

施設南側の敷地にウッドデッキの設置を進めている。従前は北側入口から不審者などが侵入した際に南側キッチンから車椅子で外へ出ることはできずに避難が困難だったが、ウッドデッキ設置によって、いざという時の避難が容易になる。

3-7-30 チャイルド・ライフ・サービス室

1. 目標と評価

1) 他職種との密接な連携を基盤としたチャイルド・ライフ・サービスの提供

積極的に他職種や他部門との情報共有、相談、連携を行い、チャイルド・ライフ・サービスを提供した。

2) チャイルド・ライフ・サービスの紹介と浸透

院内外においてチャイルド・ライフ・スペシャリストの活動や視点について講義を行った。

また、大学生からのインタビューや当院におけるチャイルド・ライフ・サービスの見学なども積極的に対応した。

2. 活動内容

- 1) 手術、検査、処置のためのプリパレーション（心の準備サポート）
- 2) 検査時、処置時の様子観察、ディストラクション（非薬物的疼痛緩和）
- 3) 手術、検査、処置後のフォローアップ（トラウマの予防、次の医療体験へつなげる）
- 4) 入院、病気、身体、内服などについてのティーチング、受容の促進
- 5) 様々な遊びやかかわりを通してストレスや感情の表出、発散を促す
- 6) 終末期のケア/ビリーブメントサポート
- 7) 緩和ケア
- 8) きょうだい支援
- 9) 患者、家族にとってストレスや不安が高いと判断されるケースへの対応

3. 活動状況

1) 2023 年 年間介入件数

	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	平均
プリパレーション	52	61	85	69	46	71	59	64	85	102	95	59	71
ティーチング	6	2	17	11	6	6	59	13	10	6	9	8	13
ディストラクション	79	71	98	101	119	101	102	108	123	167	152	94	110
治癒的あそび	84	66	97	81	59	75	72	63	74	53	58	68	71

家族支援	126	130	187	197	168	158	182	209	188	226	261	192	185
きょうだい 支援	1	5	7	6	1	6	8	15	15	9	16	9	8
グリーフサ ポート	2	1	3	1	0	4	3	2	0	4	2	3	2
フォローアップ	224	215	233	190	179	177	197	266	272	256	277	237	227
退院・復学 支援	1	2	9	2	1	7	4	3	4	4	1	7	4

4. その他の活動

1) 院内発表

- ・2023.4 移植外科系海外研修生レクチャー ”CLS Lecture for Pediatric Transplant”
- ・2023.6 移植外科系海外研修生レクチャー ”CLS Lecture for Pediatric Transplant”
- ・2023.7 移植外科系海外研修生レクチャー ”CLS Lecture for Pediatric Transplant”
- ・2023.7 9 西看護部第1回目 ”Welcome to World of Child Life”
- ・2023.7 9 西看護部第2回目 ”Welcome to World of Child Life”
- ・2023.8 移植外科系海外研修生レクチャー ”CLS Lecture for Pediatric Transplant”
- ・2023.10 循環器科医師レクチャー ”Welcome to World of Child Life”
- ・2023.12 救急勉強会 「The World of Child Life」
- ・2023.12 移植外科系海外研修生レクチャー ”CLS Lecture for Pediatric Transplant”

2) 院外発表

- ・なし

3) 雑誌投稿、著書

- ・小児看護5月号「チャイルドライフスペシャリストの関わり」
- ・時事メディカル10月16日掲載「手術前に“頑張って”と言っていい？～子どもを励まし安心させる言葉～」

3-8 臨床研究センター

3-8-1 臨床研究センター

理念 国立成育医療研究センターの理念の下、成育医療にかかる新しい医療の研究・開発及び既存医療の最適化を推進することにより、健全な次世代の育成に貢献します。

組織 2020 年 7 月に組織変更を行い、臨床研究支援に係る組織は基本的に病院の組織とし、センター長、副センター長の下、臨床研究監査室、事務室、多施設連携部門、研究推進部門、データサイエンス部門の 2 室、3 部門、11 ユニットを設けている。

特色 2013 年度に採択された厚生労働省革新的医療技術創出拠点プロジェクト事業で構築した臨床研究・治験実施体制の維持及び組織の再編を行い、小児・周産期領域のナショナルセンターとして日本の成育医療の臨床研究・治験実施の中心となるべく、更なる体制強化と人材育成に努めている。これらの人員・体制により、治験・臨床研究の実施・支援の他、厚生労働省からの委託事業、AMED 等からの研究事業、団体からの委託事業等を実施している。

3-8-2 多施設連携部門

多施設連携部門は、2020 年 7 月の臨床研究センター組織改編により発足した部門です。当部門は、ネットワーク推進ユニット、国際連携ユニット、研究相談ユニットを設置し、全国の小児医療施設、日本小児科学会及び企業（産業界）と連携することで小児医薬品開発（小児治験）、安全対策を進めていくことで適正使用の推進を目指しています。また海外の関係団体等との連携も強化し、小児開発の国際協調を図っています。さらに小児での開発（臨床研究を含む）を推進するための研究相談窓口を設置しています。

これらの活動を通して、情報交換・技術助言等を行い成育医療の均てん化等の推進を図っていきます。

3-8-2-1 ネットワーク推進ユニット

ネットワーク推進ユニットは、小児治験ネットワーク事務局（小児治験ネットワーク中央治験審査委員会事務局も含む）、小児医療情報収集システム事務局並びに小児医薬品開発ネットワーク支援事業事務局支援を担い、小児での臨床開発（開発・安全対策）推進を目的に活動しています。

（1）小児治験ネットワーク

小児医薬品開発（治験）を促進するためには、医療機関での治験実施体制整備を進めていく必要がありますが、小児領域では治験（開発）数が少ないため、小児施設の治験実施体制は盤石とは言い難い状況です。このため、小児医療施設による強固な「ネットワーク」を形成し、ネットワークを通して治験実施体制を整備していくことが重要となります。日本では、

小児医療施設等が加盟している一般社団法人日本小児総合医療施設協議会が活動しており、この協議会加盟施設を母体として、2010 年 11 月に小児領域に特化した国内初の「小児治験ネットワーク」が発足しました。

小児治験ネットワークは、2023 年（度）末で 55 施設が加盟し、施設間の連携強化に努めています。2023 年（度）においては、治験の一括審査を担う小児治験ネットワーク中央治験審査委員会（いわゆる中央 IRB）を 12 回開催（1 回/月開催）し、製薬企業主導治験 60 件（新規課題：15 件、継続課題：45 件、延べ施設数：211 施設）について、小児治験ネットワークを介した治験として実施しています。製薬企業（治験依頼者）からの依頼に応じる治験実施可能性調査（症例数調査も含める）は、2023 年（度）に 11 件を受託し小児治験促進のための活動を展開しています。

一方、小児 CRC の教育・養成を目的として開催している小児 CRC 教育・研修会については、2023 年 7 月 29 日に開催（Web 開催）し、全国から 54 名が参加した。

今後も小児治験ネットワークで培った人的・機能的なノウハウを活用して小児開発の One Stop Service を実現していきたいと考えています。

※小児治験ネットワークホームページ<<https://pctn-portal.ctdms.ncchd.go.jp/>>

(2) 小児医療情報収集システム

成育医療研究センターでは、小児医療情報収集システム事務局にて、厚生労働省からの補助事業である小児と薬情報収集ネットワーク整備事業により、全国の小児医療機関等から小児における副作用情報や投与量情報などを一元的に収集し、分析・評価する体制（システム）の整備を進めています。

全国の小児医療機関等からなるネットワークを活用して整備された小児医療情報収集システムは、全国の小児医療施設等と小児科クリニック等からのデータがセキュリティの担保されたネットワークを通じて情報収集用のデータベース（医療情報データベース）に収集されます。電子カルテシステムからは、医療情報として「検査」、「病名」、「処方」、「注射」データを収集し、不足する患者情報には問診システムからの「問診」データによって補完しています。問診システムは、患者本人又は家族に情報を入力いただくことで、本人同意を得るツールとしても活用しています。

2023 年（度）は、2022 年（度）のクラウド領域へ小児医療情報収集システムを再構築することを主とした環境再整備後、協力医療機関から患者データの送信を再開しました。2023 年（度）末時点で小児医療施設等 11 施設、小児科クリニック等 31 施設が本事業の協力医療機関として参画しており、データ量は医療情報が約 100 万人分、問診情報が約 10 万人分蓄積されています。小児に対する医薬品の安全性を評価するために必要とされるデータの絶対数の確保に向けて、再整備された環境下で引き続きデータ収集を進めていきます。

小児医療情報収集システムで収集されているデータの利活用の一環として、収集されたデータを用いて小児医薬品の使用実態及び副作用の発現状況等に関する解析を実行し、その解析結果をフィードバックする仕組みの整備を進めています。それらの解析を行うには、病名、使用薬剤、副作用発現状況を示すデータが必要ですが、小児医療情報収集システムでは患者ごとの「検査」「病名」「処方」「注射」データを時系列で収集しており、それらの評価が可能です。小児医療情報収集システム事務局では、収集されたデータから解析の目的に応じてデータを検索及び抽出し、解析に適した形式にデータを変換及び加工し

て準備した解析用データセットを用いて目的とする解析結果をレポートとして出力する一連の流れを自動化する、データ収集・評価システムの開発を進めています。

このようなデータ収集・評価を薬剤ごと個別に実施するには多大なコストがかかることに加え、介入方法の新規導入や変更によるリスクも伴います。低コスト・低リスクかつ多様な目的に利用できる医療情報を多施設から収集することができる小児医療情報収集システムは、極めて重要な社会情報基盤であると考えています。

※小児医療情報収集システムウェブサイト<<https://pharma-net.ncchd.go.jp>>

(3) 小児医薬品開発ネットワーク支援事業

日本では、小児に使用される医薬品の6～7割が広義の適応外使用であると言われていいます。また、平成22年4月から平成27年3月の5年間に承認された医薬品のうち、小児適応がある（小児に対する効能・効果、用法・用量が明記された）医薬品は全体の約30%にすぎなかったとの報告もあり、更なる小児用医薬品の開発が望まれています。

小児医薬品開発ネットワーク支援事業（厚生労働省）は、日本での小児領域における医薬品の開発が遅々として進んでいない状況を踏まえ、医療現場の優先順位リストをまとめ、製薬企業や製薬企業関連団体に開発の要望を行うとともに、計画・実施から承認申請までを支援することにより、小児医薬品開発を促進することを目的とし、公益社団法人日本小児科学会が主体となって活動しています。この事業の事務局支援を担っています。詳細については日本小児科学会のホームページをご覧ください。

<https://www.jpeds.or.jp/modules/activity/index.php?content_id=348>

2023年（度）においては、企業から3件の支援依頼が提出され、専門的見地から助言（開発支援）をしました。

本事業（ネットワーク）の取り組みについて国内外へ情報発信するとともに、欧米のネットワークの事務局とも、将来的な連携を念頭に情報共有を進めています。その取り組みの成果として、米国の小児治験ネットワークである Institute for Advanced Clinical Trials for Children (I-ACT for Children) と日本小児科学会は具体的連携を進めるための守秘義務契約を2021年に締結し、その作業を成育の事務局が支援し、さらなる連携に向けて意見・情報交換を進めています。また2022年11月には欧州の European Network of Paediatric Research at the European Medicines Agency (EnprEMA) に小児医薬品開発のアドバイスをを行う専門家ネットワークとして本ネットワークを登録しました。

本事業を通して、小児開発について専門的助言を担う小児医薬品開発ネットワークと治験実施フィールドである小児治験ネットワークの連携も進み産官学連携による小児医薬品開発の更なる促進が期待されます。

3-8-2-2 国際連携ユニット

成育領域疾患の多くは希少疾病であり、またその治療開発のノウハウも限られていることから、国際的にノウハウを共有し知恵を出し合って開発を進めていかねばなりません。症例数が少ないことからしばしば国際共同開発も必要となります。国際連携を進めるために、AMED 研究・厚生労働科学研究も活用して、主に以下を進めています。

(1) 新生児国際コンソーシアムへの日本からの参画

International Neonatal Consortium (INC)は、新生児疾患の診断基準・評価指標の標準化など、新生児治療開発推進のための多角的な課題に取り組む国際的なコンソーシアムです。東京医療保険大学大学院の楠田 聡臨床教授とともに中村ユニット長がこのコンソーシアムの調整委員会に参加しており、その調整の元で日本の多くの新生児科医が、さまざまなワーキンググループ活動に参加して、日本からの意見提案や、国際的標準化と論文化の作業を行っています。

(2) 小児剤形検討のための国内外連携体制の構築

欧州では小児剤形検討の国際的コンソーシアム European Paediatric Formulation Initiative (EuPFI)が活発な活動を行っており、この日本側のカウンターパートとして、我が国での検討と海外への情報発信を進める国内連携体制の構築を、薬剤部・製剤開発室、昭和大学や関連学会と連携して進めています。この活動の一環として、小児に適した剤形の検討、添加物の安全性評価、薬剤部における剤形変更の標準化等（2023 年は論文1報）にも参加しています。2023 年2月3日にはドイツの小児剤形評価の専門家である新生児科医のクリングマン医師と AMED「小児医薬品等の早期実用化と国際連携に資するレギュラトリー研究」研究班メンバーで小児剤形の服用性評価についての意見交換・情報交換を実施しました。また、2024 年に向けて、日本薬剤学会と EuPFI の守秘義務契約締結に向けた作業を支援しました。

(3) 小児医薬品開発ネットワークと国際連携の支援

日本小児科学会の事務局支援の一環として、欧米の小児臨床試験ネットワークとの情報共有、連携等を進めています。欧州医薬品庁（European Medicines Agency: EMA）に事務局を置くネットワークである EnprEMA の国際連携 WG の活動に医薬品医療機器総合機構

（PMDA）の小児 WG メンバーと共に中村ユニット長が国際協調に向けての調査・論文化等に参加し、日本の状況を紹介しています。2022 年から EnprEMA へ小児医薬品開発ネットワークを登録しており、これにより EMA の Network Database

（enprema.ema.europa.eu/enprema/）から小児医薬品開発ネットワークおよび小児治験ネットワークの情報検索が英文で行えるようになりました。

3-8-2-3 研究相談ユニット

研究相談ユニットは、成育医療研究センター内外のアカデミア、研究者、企業を対象として臨床研究相談・支援窓口を設け、医薬品・医療機器・再生医療等製品、その他機能性食品等の開発等に関する相談、臨床研究・治験等に関する相談等を行っています。相談担当者は、審査、対面助言、信頼性業務など厚生労働省や PMDA での業務経験者をはじめ、当センターの各分野・領域の専門家、研究者及び臨床医が対応しています。2023 年は当センター内から 106 件、当センター外から 72 件（うち、企業から 22 件）の合計 178 件の相談を受けており、その 7 割以上が研究開発に関する相談です。

3-8-3 研究推進部門

研究推進部門は、2020 年 7 月の臨床研究センター組織改編により発足した部門です。当部門は、臨床研究コーディネートユニット、研究企画ユニット、開発薬事ユニット、プロジェクトマネジメントユニットを設置し、それぞれが連携して活動しています。これらの活動を通して、治験・臨床研究の実施支援・推進、臨床研究の企画及びプロジェクトマネジメント、成育医療領域の医薬品等の開発推進に取り組んでいます。

3-8-3-1 プロジェクトマネジメントユニット

プロジェクトマネジメントユニットは 2020 年 7 月の臨床研究センター組織改変により新たに発足した部署です。

臨床研究法下の特定臨床研究や医師主導治験を中心に、臨床研究の方向性を明確にし、一連のプロセスの効率的な計画・運営の支援機能を有します。具体的には、計画段階から研究者の相談にのり、ゴール設定や出口戦略の立案、ロードマップ、スケジュール作成支援、プロトコルや同意文書・説明文書、各種手順書等の作成支援、外部への業務委託支援、他部門や他施設との調整を行っています。

(1) 臨床研究のマネジメント

マネジメントは当センター内研究者が実施する医師主導治験 2 件、特定臨床研究 2 件に対し行いました。また調整事務局業務は、当センター内研究者が実施する医師主導治験 3 件、特定臨床研究 1 件に対し、調整事務局の支援は、特定臨床研究 2 件（センター外 2 件）に行いました。

(2) プロトコル、説明同意文書、各種手順書等の作成支援

プロトコル、説明同意文書、各種手順書等の作成支援は、当センター内外の研究者が実施する特定臨床研究 3 件、医師主導治験 1 件（当センター外）に対し行いました。

(3) 教育

医学系研究に関する指針改訂に伴う観察研究・介入研究のプロトコル及び同意説明文書のテンプレート改訂、特定臨床研究のプロトコルテンプレート改訂を行いました。

(4) 研究活動

日本医療研究開発機構（AMED）により、非臨床から臨床へ引き継ぐ際のプロジェクトマネージャーおよびスタディマネージャーの育成プログラムを作成しました。

3-8-3-2 開発薬事ユニット

開発薬事ユニットは 2020 年 7 月の臨床研究センター組織改変により発足した部署です。

(1) 活動内容

臨床研究センターの関連部署と連携して、蓄積された成育領域における開発薬事のノウハウを提供しています。臨床研究センターが支援しているすべての臨床開発について必要に応じてアドバイスを行っています。臨床研究相談窓口を通して外部企業やアカデミアか

らの開発薬事についてアドバイスをを行っています。

2023 年は、アカデミア 7 件、企業 2 件の開発薬事相談を行いました。

3-8-3-3 研究企画ユニット

研究企画ユニットは 2020 年 7 月の臨床研究センター組織改変により新たに発足した部署です。

研究企画ユニットでは、プロジェクトマネジメントユニットや開発薬事ユニット、データサイエンス部門と連携して、医師主導治験を含む臨床研究を計画している当センター内外の研究者に対し、ゴール（出口戦略）やニーズに応じた企画・立案の相談、研究実施体制に関する助言、プロトコル作成支援、先進医療申請支援を行っています。

(1) 研究企画・研究実施体制に関する助言

当センター内外の研究者が実施する医師主導治験 2 件、特定臨床研究 2 件に対し、企画・立案の支援、研究実施体制に関する助言を行いました。

(2) プロトコル作成支援

当センター内外の研究者が実施する医師主導治験 3 件（センター内 2 件、新規 2 件）、特定臨床研究 6 件（センター内 4 件、新規 3 件）のプロトコル作成支援を行いました。

3-8-3-4 臨床研究コーディネートユニット

臨床研究コーディネートユニットは、本邦初の成育領域を専門とする治験管理室として、1992 年 3 月に発足し、2010 年 4 月の独立法人化に伴い臨床試験推進室に名称変更され、2020 年 7 月組織改変により現在の名称となりました。当センター内の治験・臨床試験支援、国内の成育領域における治験・臨床試験の推進、治験の啓発を目的に活動しています。

(1) 治験・臨床試験の実施支援・推進

当センター内の企業治験（製造販後臨床試験を含む）、医師主導治験に対して、臨床研究コーディネーター（CRC）による実施支援を行い、医師・関連部門と活発に打ち合わせて、治験が GCP 省令等の規制に沿って適切に実施されるよう管理しています。CRC が全被験者に対する治験実施支援を行う体制をとっています。治験患者専用夜間休日緊急連絡窓口を設け、夜間・休日や緊急時にも迅速に対応できるようにしています。

2023 年は、企業治験 67 件（2022 年 63 件）の実施支援と管理を行いました。内訳は消化器科 15 件、内分泌・代謝科 12 件、小児がんセンター 10 件、血液内科 7 件、腎臓リウマチ膠原病科 4 件、循環器科 4 件、神経内科 3 件、免疫科 2 件、手術・集中治療部 2 件、放射線診療部 2 件、アレルギーセンター 2 件、総合診療部 1 件、遺伝診療科 1 件、周産期・母性診療センター 1 件、新生児科 1 件でした。そのうち国際共同治験は 44 件（消化器科 13 件、小児がんセンター 9 件、血液内科 6 件、内分泌・代謝科 5 件、腎臓リウマチ膠原病科 3 件、循環器科 2 件、アレルギーセンター 2 件、神経内科 2 件、新生児科 1 件、放射線診療部 1 件、）でした。医師主導治験は 7 件（2022 年度 9 件）で、内訳は小児がんセンター 4 件、移植外

科1件、産科1件、形成外科1件でした。当センター内の臨床研究については、CRCによる実施支援を11件行いました。

(2) 研修見学受入

2023年は、PMDAから研修見学1名および小児治験ネットワークCRC教育研修会CRC実地研修において外部医療機関からCRC2名を受け入れました。

3-8-4 データサイエンス部門

データサイエンス部門では、当センター内外で実施される臨床研究や医師主導治験などを対象として、適切に計画されたプロトコルの作成や、得られたデータの信頼性確保、IT基盤の維持といった臨床研究データの管理を行っています。また、これらの業務の実施とともに他施設と連携した生物統計やデータマネジメントに係る人材教育を行っています。

3-8-4-1 生物統計ユニット

国立成育医療研究センターは平成25年度に臨床研究中核病院整備事業対象として選定され、平成26年度に臨床研究開発センター、平成30年度に臨床研究センターが組織された。その中で、生物統計ユニットは医師主導治験の計画支援、臨床研究の計画支援および統計解析、そして臨床研究教育を担当している。医師主導治験を目指した研究では、コンセプト立案時から会議に参加し、綿密な研究計画を立てることに寄与している。臨床研究の計画支援では、臨床研究相談窓口にあった相談に対応し、研究計画書作成から論文作成まで幅広く対応している。臨床研究教育では、センター内外の医療従事者を対象とした統計ソフトハンズオンセミナーを開催し、臨床研究を計画して解析するときに必要な知識の浸透をはかった。

生物統計ユニットで臨床研究の計画時支援を行っているものは治験を含めて合計30件以上に及ぶ。研究終了時のデータ解析や論文作成支援を行っているものは毎月10件程度あり、臨床研究を始めるところから終わるところまでの支援を幅広く行ってきた。令和5年に生物統計ユニットが支援し共著者として受理された臨床研究論文は14本であった。

3-8-4-2 データ管理ユニット

データ管理ユニットは、2020年7月の組織改編にて臨床研究センターに設置され、研究者に対する臨床研究支援としてデータマネジメント業務を担い、データの品質を高めるために実施計画の段階から研究者や関連部署との打合せを活発に行っている。

2023年12月31日時点の人員は、ユニット長1名、データマネージャー2名、兼任の研究者1名である。

2023年には、医師主導治験1件、特定臨床研究4件、臨床研究3件、レジストリ2件のデータマネジメント業務、症例登録割付業務、EDC構築および構築修正等を実施した。臨

床研究実施開始前の支援としては、特定臨床研究 2 件、レジストリ 3 件のプロトコルレビュー、症例報告書作成支援、データマネジメントに関するコンサルティングを行った。

また、2020 年から引き続き、研究者自身がデータマネジメント業務を実施する際のデータの品質を向上させることを目的としたデータ管理ユニット独自の研究として、研究者向けのデータマネジメントツールや資材の開発を実施した。

その他の業務としては、国立成育医療研究センターが導入し運用管理している EDC システム「REDCap（米国 Vanderbilt 大学が開発したシステム）」の利用促進を図るため、研究者向けに操作方法及び構築方法のマニュアルを作成し提供するとともに、IT ユニットと協力して、REDCap 構築方法に関するハンズオンセミナーを実施した。

3-8-4-3 モニタリングユニット

モニタリングユニットは 2020 年 7 月の組織改変にて臨床研究センターに設置され、当センター内外の研究者に対して、研究支援としてモニタリングを提供している。医師主導治験、特定臨床研究（先進医療含む）、再生医療等臨床研究、指針下臨床研究で求められる品質管理を行っている。実施医療機関数、リスク、品質方針及び目標に応じて、モニタリング手法を選択している。研究者自らがモニタリングを行う場合は、モニタリング手順書及びモニタリング計画書のテンプレートを提供するとともに、モニタリング計画の相談を受けている。

2023 年 12 月 31 日時点の人員は、ユニット長 1 名（兼任）、専門職 2 名（うち 1 名は兼任）である。

2023 年には、特定臨床研究 16 件、再生医療等臨床研究 1 件、指針下臨床研究 7 件のモニタリング支援を行った。新規にモニタリング支援を開始した特定臨床研究 4 件では、モニタリング手順書及びモニタリング計画書の作成支援も行った。

3-8-4-4 IT ユニット

IT ユニットは、2020 年 7 月の組織改編により臨床研究センターに設置された。レジストリデータを収集管理するための EDC システム（成育 REDCap システム）の運用管理を行うとともに、データの活用基盤の構築事業の支援など、IT に関する環境の整備やソリューションの提供を担当している。2023 年には、成育 REDCap システムにより 22 件（新規 7 件）の研究プロジェクトを運用し、データの利活用や活用基盤構築に関して、新規 3 件の支援を実施した。

2023 年 12 月 31 日時点の人員は、ユニット長 1 名（兼任）、上級専門職 1 名、研究補助員 1 名である。

3-9 事務部門

3-9-1 総務部 総務課

1. 概要

総務部総務課は、総務係、秘書係、文書管理係、図書係の1課4係の組織となっており、病棟・薬剤・栄養管理室・事務部門の業務サポートや清掃業務等を行うワークサポートプロジェクト、電話交換、公用車・救急車の運転、センターの防災防犯等を行っている。

各係の主な業務は以下のとおり

○総務係

- ・印章の保管に関する事
- ・庁舎管理に関する事
- ・防災・消防計画に関する事
- ・寝具・清掃・廃棄物に関する事
- ・自動車の管理及び配車に関する事
- ・職員に貸与する宿舎に関する事
- ・電話交換業務に関する事
- ・小口現金管理に関する事
- ・課の事務で他の所掌に属さない事務に関する事

○秘書係

- ・理事長、理事及び執行役員の秘書に関する事務の処理に当たる

○文書管理係

- ・法令等に規定する法人文書の管理に関する事
- ・文書類の接受、発送及び管理に関する事
- ・訟務及び法務に関する事
- ・センターの保有する情報の公開に関する事
- ・センターの保有する個人情報の保護に関する事

○図書係

- ・書籍の管理及び書籍の整理に関する事
- ・図書館内の運営及び検討に関する事
- ・図書委員会の開催に関する事

3-9-2 人事部 人事課

1. 概要

人事課は、2室4係の組織となっており、職員の任免、人事制度管理、給与制度管理、勤

務時間管理、安全衛生及び福利厚生等を行っている。各係の主な業務は以下のとおり。

人事管理室

- ・人事係：組織、職員の任免、懲戒、服務、栄典の推薦及び表彰等に関する業務を行う
- ・給与係：職員の給与・諸手当の認定及び支給等に関する業務を行う

労務管理室

- ・職員係：勤務時間管理、職員の教養及び訓練、労働組合等に関する業務を行う
- ・厚生係：職員の安全衛生及び福利厚生、共済組合に関する業務を行う

2. 職員数

区 分		R5年度初職員数	増（採用・転入等）	減（退職・転出等）	R5年度末職員数
常 勤 職 員	副院長・部長・医長基本年俸表	77	2	1	78
	副所長・部長・室長基本年俸表	9	1	1	9
	任期付職員基本年俸表	72	5	9	68
	院長等基本年俸表	3	0	0	3
	医療職基本給表（一）	108	9	12	105
	医療職基本給表（二）	131	7	9	129
	医療職基本給表（三）	757	29	83	703
	事務職基本給表	82	3	2	83
	技能職基本給表	8	0	0	8
	研究職基本給表	1	0	0	1
	福祉職基本給表	18	4	2	20
	療養介助職基本給表	1	0	0	1
	専門技術職基本給表	9	1	1	9
	専門修練医基本給表	160	32	29	163
	内 訳				
	専門修練医	97	15	15	97
	臨床研究医	3	0	0	3
	専門研修医	60	17	14	63
	計	1436	93	149	1380
非 常 勤 職 員	医療職基本給表（一）	57	8	6	59
	内 訳				
	医 師	55	7	4	58
	フェロー	1	0	1	0
	レジデント	1	1	1	1
	医療職基本給表（二）	34	3	3	34
	医療職基本給表（三）	27	1	7	21
	事務職基本給表	159	25	22	162
	技能職基本給表	34	2	5	31
	研究職基本給表	138	34	14	158
	福祉職基本給表	2	0	0	2
	専門技術職基本給表	0	0	0	0
	計	451	73	57	467

3-9-3 企画経営部

令和 5 事業年度実績評価書説明資料 別添参照

3-9-3-1 企画経営課

1. 概要

企画経営課では、センターの業務の企画及び立案並びに調整、経営戦略、中期計画及び年度計画、運営費交付金及び補助金、業績評価等に関するを行っている。

各係の主な業務は以下のとおり

○企画調整係

- ・センターの業務及び経営戦略の企画及び立案並びに調整に係る専門的事務の処理
- ・中長期計画及び年度計画に関すること

○経営係

- ・経営戦略に関すること
- ・運営費交付金及び補助金等に関すること
- ・経営に係る資金計画及び資金調整に関すること

○業績評価係

- ・業績評価に関すること
- ・財務諸表に関すること
- ・管理会計に関すること

以上の業務を行うに当たり、企画経営課の役割として、センターが独立行政法人（国立研究開発法人）として期待される役割を適切に果たせるよう、諸事項に関することを一致団結して取り組んでいる。

さらに、令和5年は、「女性の健康総合センター（令和6年10月開設）」を創設するために、センター内にWG等を立ち上げ、中心的な役割を担った。

なお、厚生労働省の国立研究開発法人審議会（高度専門医療研究評価部会）に提出した、センターの「令和5年度業務実績の概要」を掲載する。

3-9-3-2 研究医療課

1. 概要

研究医療課では、成育に係る疾患の医療に関し、調査、研究及び技術の開発並びにこれらの業務に密接に関連する医療の提供に関する企画及び立案並びに調整、外部資金による研究費の経理等に関する業務を行っている。

各係等の主な業務は以下のとおり。

○医療係

- ・研究倫理に関する委員会の事務に関すること
- ・再生医療等に関する委員会の事務に関すること
- ・ES細胞に関する委員会の事務に関すること

○研究企画係

- ・成育に係る疾患に関し調査及び研究に関すること
（令和5年度成育医療研究開発費課題一覧を掲載する）

- ・外部資金による研究費の経理事務に関する事
- ・研究費取扱いや研究倫理の研修に関する事

○研究所総務係

- ・共同研究の事務に関する事
- ・衛生検査センターの運営及び事務に関する事
- ・研究所の人事関係や経費処理等の事務に関する事
- ・知財（特許権等）の申請等の事務や委員会に関する事

以上の業務を行うに当たり、研究医療課の役割として、小児・周産期医療を担う唯一の国立研究開発法人として期待される研究や調査等を適切に実施できるよう、諸事項に関する事を一致団結して取り組んでいる。

令和5年度成育医療研究開発費課題一覧

課題番号	研究者	課題名
30 指-1	大宜見 力	分子生物学的診断法の感染症診療と感染対策への応用
30 指-3	今留 謙一	成育医療における病原体迅速診断システムの構築と応用
2020E-1	余谷 暢之	小児科後期研修におけるアドボカシー研修プログラムの開発
2021A-1	梅澤 明弘	ES 細胞プラットフォームに基づく成育疾患に対する再生医療
2021A-2	笠原 群生	小児臓器移植医療の新規治療法開発・長期生着率向上を目指す研究
2021B-1	松本 健治	川崎病の重症化病態メカニズムの解明に基づく新規治療薬開発を目指した研究
2021B-2	河合 利尚	慢性肉芽腫症腸炎に対する新規治療薬の開発に関する研究
2021B-3	石黒 精	先天性血小板減少症・異常症の新規診断法の開発とレジストリに基づく病態解明
2021B-4	清河 信敬	成育衛生検査センター検査項目としての実用化を目指した新規小児白血病遺伝子診断法開発
2021B-6	仁科 幸子	ICT 機器使用に起因する小児斜視の診断・治療基準の開発
2021B-8	諫山 哲哉	アジアにおける極早産児予後と診療方法・体制に関する国際比較研究（AsianNeo：Asian Neonatal Network Collaboration の基盤を用いて）
2021B-9	亀井 宏一	TNF α 阻害薬使用下での弱毒生ワクチン接種の有効性と安全性
2021B-10	野坂俊介	小児リンパ管疾患に対する複合的臨床及び基礎研究
2021B-11	要 匡	現在の次世代シーケンス解析での未解決領域を解決する技術開発整備：モザイクとスブライシング変異検出
2021B-12	山本 貴和子	尿中 PGDM を用いた経口免疫療法の安全性モニタリングシステムの開発
2021B-13	伊集院 亜梨紗	無痛分娩における麻酔薬が児の健康状態に及ぼす影響についての薬物動態・薬力学的検討

2021B-15	清河 信敬	小児造血器腫瘍の発症や予後に関係する融合遺伝子のパートナー遺伝子検出・診断法の開発
2021B-16	田中 恭子	疾病受容評価に基づく小児慢性疾患患児の意思決定支援プログラムの開発および家族支援のあり方の検討～小児慢性特定疾病自立支援事業“成育モデル”の開発～
2021B-18	梨井 康	iPS/ES 細胞由来 off-the-shelf 型細胞製剤（CAR-NK 細胞）による小児肝芽腫肝移植後再発予防・抑制療法の開発
2021B-19	山口 晃史	妊娠中の潜在性ウイルス再活性化に関する研究開発
2021B-20	室本 仁	出生前遺伝学的検査を検討する妊婦へのテレジェネティクスによる遺伝カウンセリングに関する研究
2021B-21	中村 浩幸	先天性サイトメガロウイルス感染症に対する新たな病態制御法の確立に関する研究
2021B-26	梅原 永能	妊娠・分娩・新生児期を包括した周産期データベース作成
2022E-1	大矢 幸弘	成育医療における長期追跡データベースの構築
2022E-2	堀川 玲子	成育医療における妊娠環境と母子長期予後の病態解明に関するコホート研究
2022E-3	小野寺 雅史	小児難治性疾患に対する遺伝子細胞治療の実装化に向けた体制整備
2022E-4	竹原 健二	成育子ども・周産期シンクタンクセンターの基盤強化と推進に向けた研究
2022E-6	阿部 浩之	成育分野における医療技術の社会実装支援にかかる体制構築に向けた研究
2022A-1	深見 真紀	成育希少疾患の診療成績向上に向けた症例登録と臨床検体解析
2022A-2	阿久津 英憲	難治性急性 GVHD の幹細胞治療有効性向上を目指す研究
2022A-3	鈴木 朋	周産期医療に資する系統的症例収集体制構築とクリニカルシーケンス・クリニカルメタゲノミクス基盤整備による臨床研究の推進
2022A-5	井口 晶裕	$\alpha\beta$ T 細胞および B 細胞除去による造血細胞移植法の開発
2022B-2	da Silva Lopes Tiago Jose	小児疾患を対象とした AI を活用した治療用タンパク質の設計パイプラインの構築
2022B-3	和田 友香	新生児における深層学習モジュールによる動画解析と視線トラッキングデバイス Tobii Pro ナノの有用性に関する検討

2022B-4	塩田 曜子	再発ランゲルハンス細胞組織球症に対するハイドロキシウレア（ハイドレア®）/メソトレキサート（メソトレキセート®）併用療法の安全性と有効性を探索するパイロット研究の遂行
2022B-5	鏡 雅代	新しいインプリンティング異常症の疾患概念の確立およびインプリンティング異常症の新規遺伝子診断法の開発
2022B-6	小野 博	ウイルス量と免疫細胞の活性化及びサイトカインの測定を基にした小児心臓移植後免疫抑制療法の標準化
2022B-7	宮戸 健二	子宮内細菌叢を育てる：不妊・不育～胎児期から始まる生活習慣病リスクの改善法の探索
2022B-8	成相 諒子	小児における集中治療後症候群の多施設共同研究での実態調査とデータベースの構築
2022B-9	加藤 承彦	乳幼児期、学童期、思春期の子どもに関する政府統計等の大規模データ活用のための基盤整備と活用の促進
2022B-10	松本 公一	NCCHD lifetime cohort による小児血液・腫瘍患者の長期フォローアップ体制の整備
2022B-11	森田 英明	小児期の免疫応答形成機構の解明に基づく先制医療の実現に向けた基盤作成
2022B-12	清水 誠一	肝臓移植における免疫寛容誘導予測システムの確立
2022B-13	牛腸 義宏	再発難治性T細胞性急性リンパ性白血病に対する新規治療ダサチニブの安全性・有効性に関する検討
2022B-15	船木 孝則	固形臓器移植患者における予防接種の有効性と安全性に関する前方視的観察研究
2022B-16	小澤 克典	ゲノム解析による胎児水腫の原因と病態生理の解明に関する研究
2022B-17	出口 隆生	小児造血器腫瘍分子標的治療における治療反応性評価と効果予測法の開発
2023E-1	石黒 精	成育医療分野における研究教育・人材育成のための基盤の構築
2023A-1	左合 治彦	小児・周産期ゲノム情報の集約化と利活用の基盤構築に関する研究
2023B-1	高田 修治	成育疾患モデルマウス作製および解析支援体制の構築
2023B-2	富澤 大輔	人工知能による小児白血病の治療反応評価システムの実装
2023B-3	松原 圭子	ゲノム・エピゲノム診断のためのターゲットロングリードシーケンス法の開発および検証

2023B-4	黒木 陽子	ゲノム・エピゲノム解析の高精度化ならびに高速効率化を目指したシステム開発
2023B-5	大久保 祐輔	小児周産期の臨床指標（QI）の社会実装
2023B-6	岡村 浩司	国内で出生した乳児の顔写真収集と医療への活用を目指した社会基盤およびシステム基盤整備
2023B-7	梶原 一紘	致死性胎児疾患における ferroptosis 依存性胎児死亡の新規予防法の開発
2023B-8	中林 一彦	妊婦血中遊離核酸を標的とした診断ゲノミクス技術レパートリーの確立
2023B-9	山田 全毅	小児移植関連分野における橋渡し研究の促進を目的としたバイオレポジトリの構築と維持に関する研究
2023B-10	高木 岳彦	小児運動器疾患・外傷における超音波診断法の確立
2023B-11	阪本 靖介	肝臓移植後肝芽腫再発抑制を目的とした自然免疫関連遺伝子解析と新規治療法の開発
2023B-13	石塚 一枝	思春期やせの予防プログラム開発のための疫学研究
2023B-14	齋藤 麻耶子	ハイリスク乳児を対象としたミックスナッツパウダー早期摂取によるナッツアレルギー予防効果を検証する無作為化二群並行群間比較試験（第二相）
2023B-15	佐々木 愛子	新生児ヘモクロマトーシスに対する胎内ガンマグロブリン大量静療法の実験的試験
2023B-16	上原 陽治	IFALD に対する ω 3系脂肪乳剤の有効性と安全性に関する検討
2023B-17	内山 徹	Ex vivo 遺伝子治療における高精度のゲノム解析による安全性と有効性の評価方法の確立
2023B-18	前川 貴伸	乳幼児健康診査における非侵襲的貧血スクリーニング法の確立を目指す研究
2023B-19	馬場 千晶	小児肝移植におけるトロンボエラストグラフィーと術後合併症の関連性の検討
2023B-20	小須賀 基通	希少疾患の診断における AI による補助診断のアルゴリズムの確立
2023C-1	長谷川 冬雪	ビデオを用いた出生前遺伝学的検査を希望する妊婦に対する 21 トリソミーの情報提供の診療実装化への遺伝カウンセリングに関する検討
2023C-2	守本 倫子	小児気管狭窄症の治療に用いる安全性の高いストレートシリコンステントの開発

2023C-3	松本 正太郎	小児 ECMO における最適な抗凝固モニタリング方法の解明のための研究
2023C-4	丸山 秀彦	NICU における食品ロス低減の取り組み
2023C-5	早川 格	持続脳波モニタリングによる小児心停止蘇生後症候群の神経学的予後予測
2023C-6	内田 佳子	原因不明の小児突然死の包括的死因検索を実現するための研究
2023C-8	井手 健太郎	日本の小児集中治療室における持続的腎代替療法の前向き多施設レジストリ研究
2023C-9	多賀谷 貴史	救急外来における専門診療科との遠隔画像共有の有用性
2023C-10	福井 加奈	先天性横隔膜ヘルニアに対する挿管下での首向き変換に伴う換気量の変化についての検討
2023C-11	上野 瞳	ポリコーム複合体構成因子の機能異常が及ぼす発生異常
2023C-12	辻 敦美	フェニルケトン尿症疾患モデルマウス由来 iPS 細胞の次世代標的ゲノム編集による遺伝子治療と肝細胞分化誘導技術の開発
2023C-13	福井 由宇子	マウス受精卵 Multiplex genome editing による希少疾患バリエーション同時導入
2023C-14	本村 健一郎	妊娠における内因性二本鎖 RNA が果たす役割の研究基盤整備
2023C-15	服部 淳	ヒト精巣におけるエンハンサー候補ゲノム領域データの構築
2023C-16	宮本 幸	陳皮は脳白質形成不全症の髄鞘形成不全を改善するか？
2023C-17	青砥 早希	インプリンティング疾患診断補助のためのエピバリエーション検出ツールの開発
2023C-18	赤石 理奈	小児・周産期病院における「WHILL 自動運転システム」搭載電動車いすの実装に基づく実証研究
2023C-19	帯包 エリカ	Diagnostic Procedure Combination (DPC) データにおける ICD-10 診断コードを用いた小児虐待研究
2023C-20	松永 渉	眠り SCAN を用いた妊産婦の睡眠状況と QOL・産後うつに関する検討
2023C-21	桐野 浩輔	DPC データからの臨床疫学データの抽出と疾患レジストリ作成を可能にする汎用アプリ開発

2023C-22	富田 慶一	小児の下肢痛・跛行に対する股関節 Point-of-Care Ultrasound を用いた診療アルゴリズムについての記述研究/診断精度研究
2023C-23	清家 美和子	成育 REDCap システムを用いて臨床研究を実施する研究者に対する教育体制の整備
2023C-24	益田 博司	川崎病遠隔期における胸部単純 X 線検査の有用性の検討
2023C-25	宮本 義孝	羊膜上皮細胞組織の作製とナノ粒子暴露による影響
2023C-26	清水 薫	小児における術後慢性疼痛の実態と生活の質への影響を調べる研究
2023C-27	胡 鑫	The research of phospholipids adjuvant augments anti-tumor immune responses through activated tumor-associated dendritic cells
2023S-1	河合 利尚	慢性肉芽腫性腸炎に対する抗炎症薬臨床試験に関する研究

業務実績説明資料 別添参照

本館棟

For building the system to support child-rearing
子育てを支えるシステムづくりのために



令和5事業年度実績評価書説明資料

(令和5年4月1日～令和6年3月31日)

研究棟



biopsychosocialに健康な次世代を育成する

国立成育医療研究センターは、十分に自己主張できない子どもの代わりになって行動を起こすことを念頭に、「人のライフサイクル」の過程に生じるさまざまな健康問題に関する医療・健康と研究を推進します。

目 次

評価 番号	内 容・評価項目		自己評価	頁
-	国立成育医療研究センター概要			2
-	国立成育医療研究センター事業体系図			3
-	国立成育医療研究センター組織図			4
1-1	研究開発の成果の最大化その他の 業務の質の向上に関する事項	担当領域の特性を踏まえた戦略かつ重点的な研究・開発の 推進	S	5
1-2		実用化を目指した研究・開発の推進及び基盤整備	S	17
1-3		医療の提供に関する事項	S	24
1-4		人材育成に関する事項	A	31
1-5		医療政策の推進等に関する事項	A	34
2-1	業務運営の効率化に関する事項	業務運営の効率化に関する事項	A	38
3-1	財務内容の改善に関する事項	財務内容の改善に関する事項	A	44
4-1	その他の事項	その他業務運営に関する重要事項	A	46
-	令和5年度財務状況			50

国立成育医療研究センター概要

1. 設 立

- ◇ 平成14年3月1日
国立成育医療センター開設
- ◇ 平成22年4月1日
高度専門医療に関する研究等を行う独立行政法人に
関する法律（平成20年法律第93号）に基づき設立さ
れた非特定独立行政法人
- ◇ 平成27年4月1日
国立研究開発法人 国立成育医療研究センターへ移行

2. センターの行う業務

- ① 成育医療に関する調査、研究及び技術の開発
- ② 上記①の業務に密接に関連する医療の提供
- ③ 成育医療に関する、技術者の研修の実施
- ④ 上記①～③の業務に係る成果の普及及び政策の提言の実施
- ⑤ 上記①～④の業務に附随する業務の実施

3. 組 織

- ◇ 研究所
- ◇ 病 院
- ◇ 臨床研究センター

4. 役職員数

- ◇ 役員数（令和6年4月1日現在）
常勤 2名 非常勤 4名（うち監事2名）
- ◇ 職員数（令和6年4月1日現在）
常勤 1,487名 非常勤 445名

5. 病院の規模

- ◇ 病床数（一般）490床
- ◇ 患者数（令和5年度実績）
 - ・入院患者数（1日平均） 406.8人
 - ・外来患者数（1日平均） 943.0人

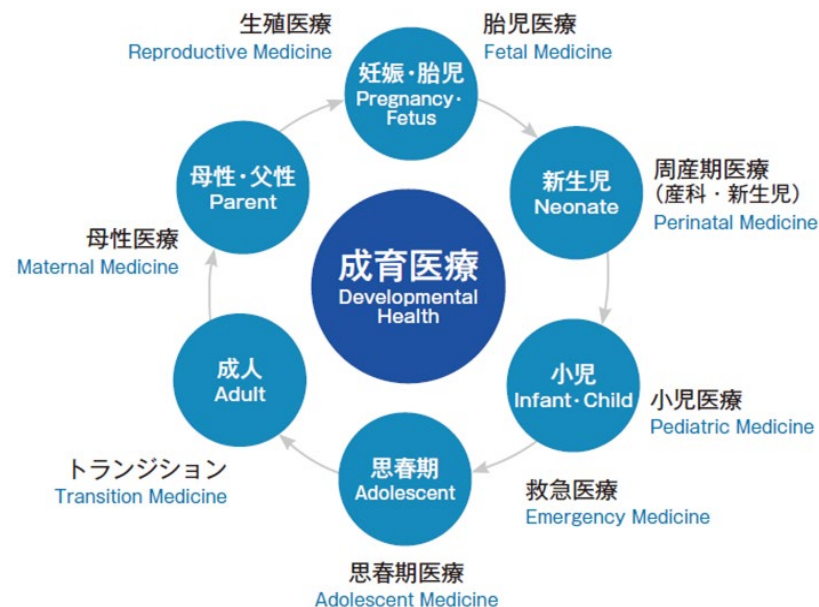
6. センターの理念

病院と研究所が一体となり、健全な次世代を育成するための医療と研究を推進します。

7. センターの基本方針

- ① 成育医療のモデル医療や高度先駆的医療をチーム医療により提供します。
- ② 成育医療の調査・研究を推進します。
- ③ 成育医療の専門家を育成し啓発普及のための教育研修を行います。
- ④ 成育医療の情報を集積し社会に向けて発信します。

小児・周産期医療を担う我が国最大の医療研究センター



国立成育医療研究センター事業体系図

研究・開発に関する事項

- 担当領域の特性を踏まえた戦略的かつ重点的な研究・開発の推進
- 実用化を目指した研究・開発の推進及び基盤整備

医療の提供に関する事項

- 医療政策の一環として、センターで実施すべき高度かつ専門的な医療、標準化に資する医療の提供
- 患者の視点に立った良質かつ安心な医療の提供

人材育成、医療政策の推進等に関する事項

- リーダーとして活躍できる人材の育成
- モデル的研修・講習等の実施
- 国への政策提言に関する事項
- 医療の均てん化並びに情報の収集及び発信に関する事項
- 公衆衛生上の重大な危害への対応

高度先駆的医療の開発、普及
による公衆衛生の向上、増進

効率的な業務運営体制に関する事項

- 効率的な業務運営体制
- 収支改善、収入の確保、電子化の推進
- 予算、収支計画及び資金計画、短期借入金の限度額、剰余金の使途
- 法令遵守等内部統制の適切な構築
- その他厚生労働省令で定める業務運営に関する事項

効率的な業務運営の実施による
安定的な経営基盤の確立

国立成育医療研究センター組織図

(令和6年4月現在)

監 事
Auditor

理事長
President and Chief Executive Officer

理事会
Board of Directors

執行役員会
Executive Board

女性の健康ナショナルセンター
設立準備室

企画戦略局
Strategic Planning Bureau

コンプライアンス室
Compliance

情報管理部
Information Management Division

成育こどもシンクタンク
Think Tank

研究所
Research Institute

研究開発監理部
Research and Development Supervision Department

病 院
Hospital

臨床研究センター
Center for Clinical Research

総務部
Department of General Affairs

人事部
Department of Personnel

企画経営部
Department of Corporate Planning

財務経理部
Department of Financial Affairs

図書館
Library

監査室
Audit Division

自己評価 S

(過去の主務大臣評価 R3年度:S R4年度:S)

I 中長期目標の内容

- ・医療に大きく貢献する研究成果を中長期目標期間中に20件以上あげる。
 - ・原著論文数について、中長期目標期間中に2,500件以上とする。
- 【重要度「高」の理由】
- ・担当領域の特性を踏まえた戦略的かつ重点的な研究・開発の推進は、国民が健康な生活及び長寿を享受することのできる社会を形成するために極めて重要であり、研究と臨床を一体的に推進できるNCの特長を活かすことにより、研究成果の実用化に大きく貢献することが求められているため。
- 【難易度「高」の理由】
- ・免疫不全症や先天性代謝異常症等の多くは希少疾病・難治疾患であり、治療の対象となる患者数が極めて少ないことから全国的なネットワーク形成等により患者情報を集約した上、研究開発を多施設共同で取り組む必要がある。また、倫理的な観点からも、これらの疾患に対する診断・治療等に関し我が国におけるコンセンサスを同時に形成していく必要があるという困難な面もあるため。

II 指標の達成状況（※達成度については小数点第2位を四捨五入して計算）

目標(指標に関連する項目を箇条書きで簡潔に記載すること)	指標	中長期目標 期間(6年間)計		令和 5年度		令和 4年度	令和 3年度			
		実績値	達成度	実績値	達成度	達成度				
医療に大きく貢献する研究成果を20件以上あげる	医療に大きく貢献する研究成果 20件 (目標値:中長期目標期間中に20件以上[年間4件以上])	23件	115.0%	13件	325.0%	125.0%	125.0%			
新規病因遺伝子を5件以上解明	新規病因遺伝子解明数 5件 (目標値:中長期目標期間中に5件以上[年間1件以上])	13件	260.0%	5件	500.0%	400.0%	400.0%			
原著論文数を2,500件以上発表	原著論文発表数 2,500件 (目標値:中長期目標期間中に2,500件以上[年間420件])	1,422件	56.9%	476件	113.3%	109.0%	116.2%			

・要因分析(実績値/目標値が120%以上又は80%未満)

指標	要因分析(①「制度、事業内容の変更」、②「法人の努力結果」、③「外部要因」のいずれかに分類して分析すること) 同一指標で2年続けて達成度が120%以上又は80%未満の場合は、目標変更の可否についても記載すること。
医療に大きく貢献する研究成果20件 (目標値:中長期目標期間中に20件以上[年間4件以上])	・②【法人の努力結果】「染色体微細欠失による下垂体性巨人症の原因解明に関する研究」、「偽性副甲状腺機能低下症を招くゲノム・エピゲノム異常の解明に関する研究」「 <i>STAT6</i> 機能獲得型変異疾患の国際コンソーシアム設立による新たな疾患概念の確立」「高度不妊治療を受ける女性のストレス要因に関する研究」などきわめて重要な研究成果をあげた結果。これらの成果は、成育医療の発展に大きく貢献する。新規技術の開発およびセンター内の共同研究体制強化によって、多くの研究成果が得られた。 【目標変更の可否】令和7年度計画での目標引き上げを検討する。
新規病因遺伝子解明数 5件 (目標値:中長期目標期間中に5件以上[年間1件以上])	・②【法人の努力結果】多数の成育疾患患者を対象に最新技術を用いたゲノム・エピゲノム解析を行い、5件の新規病因遺伝子(KMT2D,POLE,NSD2,INTS15,TTI1-GHRHキメラ遺伝子)の同定に成功した結果。この中には、従来の疾患発症メカニズムの理解を覆す画期的成果が含まれる。データ解析システム効率化と精度向上および令和4年度設立された遺伝診療センターと研究所の連携等により、当初の計画を上回る成果が得られた。 【目標変更の可否】令和6年度計画において変更済

Ⅲ 評定の根拠

根拠	理由
ゲノム解析等最先端技術によって成育疾患の発症機序・病態の解明を推進	さまざまな成育疾患の遺伝的・臨床的研究を行い、成果の実用化に取り組んだ。R5年度の特記すべき成果として、 <i>STAT6</i> 機能獲得型変異疾患に関する国際コンソーシアムを立ち上げて患者の特徴を明らかにし、 <u>本症の疾患概念を確立した</u> 。また、患者由来変異を動物の神経に移入することで <u>本症の病態を明らかにした</u> 。また、食物アレルギー患者の臨床解析から病態解明に取り組んだ。これらの成果は、小児アレルギー疾患に対する画期的治療法開発の基盤となる。
成育難治性疾患の新規原因遺伝子発見と発症機序を解明	国内外の医療機関から600件以上の臨床検体を新規に集積し、最先端技術を用いてゲノム・エピゲノム解析を行った。その結果、 <u>巨人症の新規発症機序解明、胆道閉鎖症や多嚢胞性卵巣症候群のリスクとなる遺伝子多型の同定、偽性副甲状腺機能低下症の遺伝学的原因の解明</u> などの成果を挙げた。これらは、従来の先天性疾患発症機序の理解を覆す画期的成果であり、小児難治性疾患患者の診断法開発と治療成績向上に直接つながる。
こどもや家族のウェルビイングを促進する社会環境の整備	子どもの身体的・心理的・社会的課題について調査研究を実施し、こどもや家族のウェルビイングの実態把握と要因分析を行った。令和5年度の特記すべき成果として、 <u>高度不妊治療を受ける女性のストレス要因、コロナワクチンの月経周期への影響、保護者の食リテラシーがこどもに与える効果、父親の産前・産後うつ</u> のリスク要因の解明が挙げられる。これらをもとにこどもや家族のウェルビイングを促す社会への介入方法を開発し、パイロット試験を実施した。

①ゲノム解析等最先端技術によって成育疾患の発症
機序・病態の解明を推進(評価書12頁)

希少難病だけでなく、比較的ありふれた成育疾患の発症に
関与する遺伝情報や臨床情報を解析して、成育疾患研究
の実用化体制の充実に取り組む

2021年度	2022年度	2023年度	2024年度以降
小児周期熱PFAPA症候群の病態形成機構の解明	STAT6の機能獲得型変異による好酸球性胃腸炎・難治性皮膚炎の発症機序解明	- STAT6機能獲得型変異に起因した重症アレルギー疾患患者が世界中に存在することを明らかに - 患者の遺伝子変異を導入したモデルマウスで、肺の末梢感覚神経の新たな役割を明らかに	- 新たな原因遺伝子の探索 - 胎盤や皮膚、腸管における免疫応答や神経系に与える影響を解析する

Rare disease

希少疾患で得られた知見を一般的な疾患の治療に役立てる

Common disease

新規ゲノム異常の同定

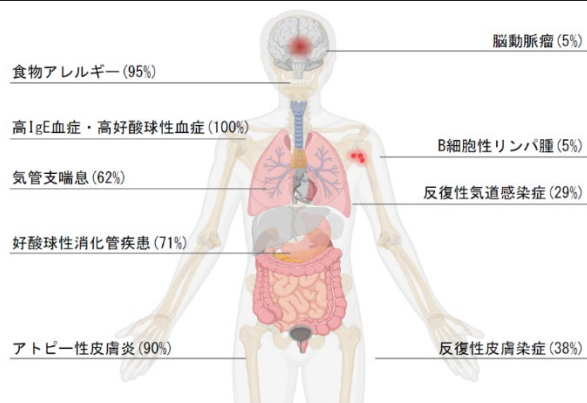
疾患発症機序の解明

アレルギーの
新規治療法の開発

遺伝子異常に起因した
重症アレルギー疾患新たな疾患概念
「STAT6機能獲得型変異疾患」を確立

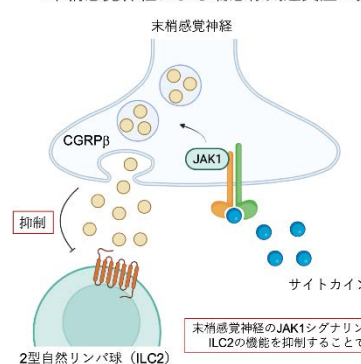
肺の末梢感覚神経が
喘息様気道炎症を抑制するメカニズム
を解明

- ・ 病院と研究所の共同研究の成果
- ・ 国際共同研究の成果
- ・ 「STAT6機能獲得型変異疾患」の国際的コンソーシアムを形成し、臨床的特徴を解析
- ・ 新たな一つの疾患概念として確立
- ・ 患者由来変異遺伝子導入マウスの解析で、肺の末梢感覚神経が喘息様気道炎症を抑制するメカニズムを明らかに



患者由来変異
遺伝子導入マ
ウスの解析

<末梢感覚神経による喘息様気道炎症の抑制>



② 成育難治性疾患の新規原因遺伝子発見と発症機序解明

(評価書11,12,17頁)

成育疾患の新たな遺伝学的原因と病態を解明することによって、患者の予後改善と負担軽減、および医療費削減に貢献する。

2021年度

2022年度

2023年度

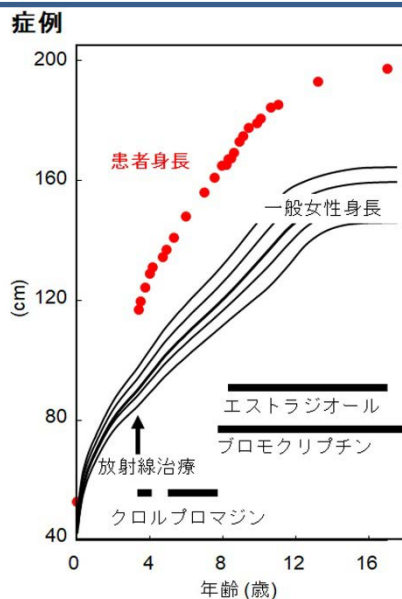
2024年度以降

- 国内外の医療機関・学会・研究班等と連携し、18,000以上の成育疾患検体と臨床データを集積。
- 最新の遺伝学的技術を用いた網羅的ゲノム・エピゲノム解析システムの構築。
- 培養細胞、iPS細胞、モデル動物を用いた機能解析。

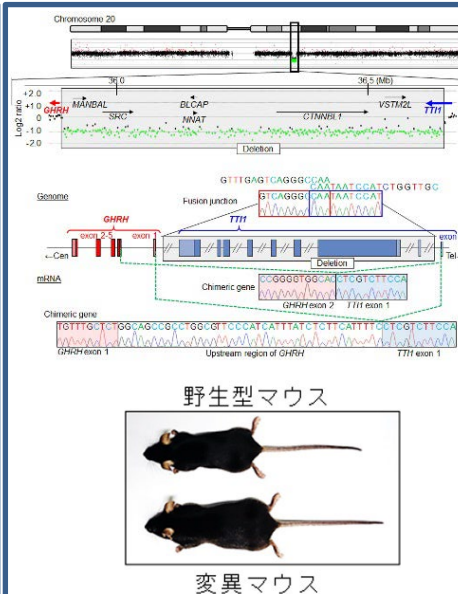
- 染色体微細欠失によるキメラ遺伝子形成が、巨人症の原因であることを解明(下図参照)
- 偽性副甲状腺機能低下症を招くゲノム・エピゲノム異常の解明
- 胆道閉鎖症のリスクに関係する遺伝子多型の同定。

- 遺伝子診断の精度向上。
- 新規治療・重症化予防法の開発。
- ゲノムデータベースと国際研究への貢献。

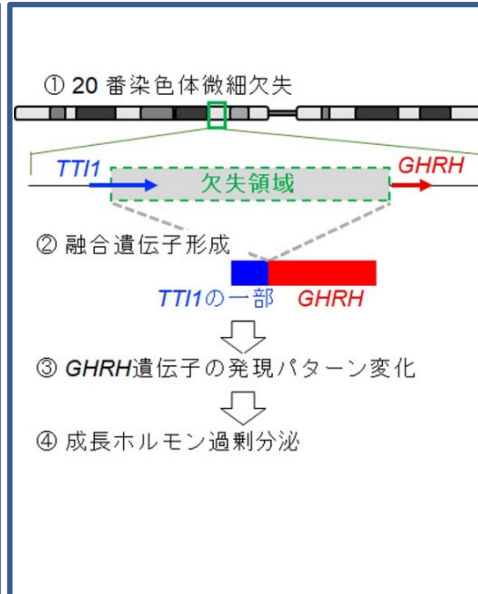
原因不明の過成長患者の同定



ゲノム異常の同定とモデル動物の解析



新たなヒト疾患発症機序の解明



確実な遺伝子診断

新規治療・重症化予防法の開発

ゲノムデータベースと国際共同研究への貢献

③子どもや家族のウェルビイングを促進する社会環境の整備(評価書12,13頁)

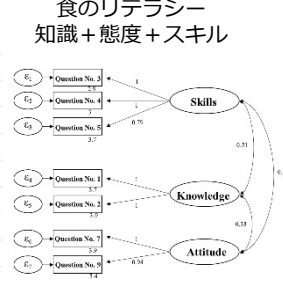
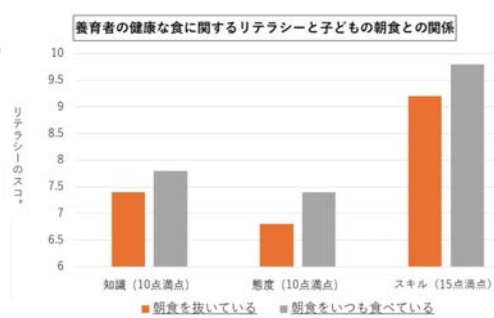
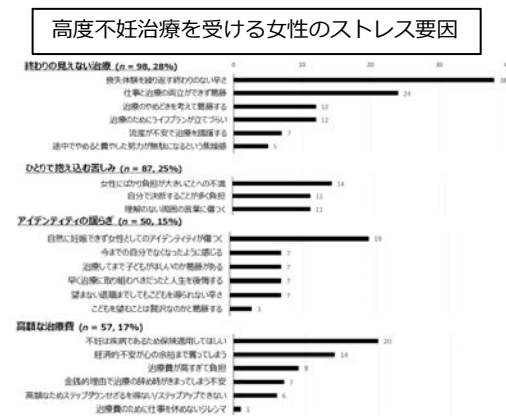
各種調査研究を実施し、子どもや家族のウェルビイングの実態把握、要因分析、そしてウェルビイングを促進する社会への介入提案を行う。

2021年度 2022年度 2023年度 2024年度以降

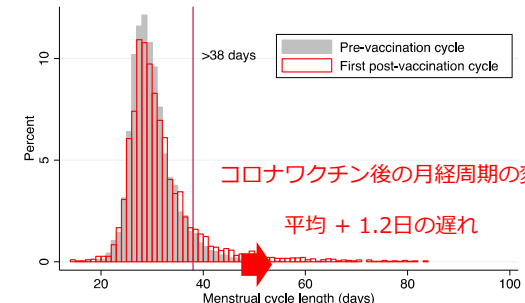
・子どもの身体的・心理的・社会的課題について整理し、各種課題に着手。

- 高度不妊治療を受ける女性のストレス要因は“終わりの見えない治療(28%)”、“ひとりで抱え込む苦しみ(25%)”、“アイデンティティの揺らぎ(15%)”、“高額な治療費(17%)”であることを報告。
- コロナワクチンで月経周期が延びることを報告。
- 保護者の食リテラシーが子どもの朝食欠食や栄養バランスに影響を与えることを報告。
- 父親の産前・産後うつは“コロナへの強い不安”や“周囲や家族のサポート不足”によりリスクが高まることを報告し、介入方法を開発しパイロット試験を実施。

・実態把握、要因分析、介入提案を継続予定

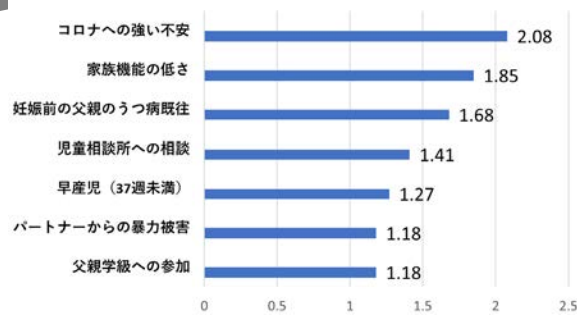


実態把握



要因分析

グラフ2. 父親の産後うつ症状に対するリスク比



介入提案

家族の絆を深める、お父さんの心のケアプログラム

赤ちゃんがもうすぐ生まれるこの特別な時期に、お父さんの心のケアプログラムを受けてみませんか？

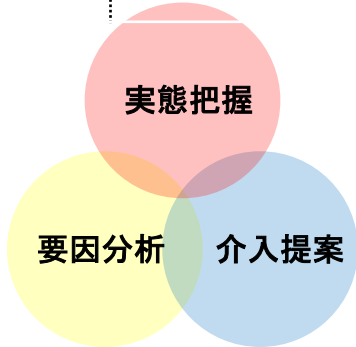
- お父さんが自分の心と身体を大切にすることで、お母さんと気持ちを共有しやすくなり、コミュニケーションを取りやすくなります。
- パートナーシップ向上:育児や家事分担がスムーズに役割分担や希望を話し合い、円滑な役割分担を
- お母さんにも参加ができるプログラム
お母さんにも多くのメリットがあり、家族全体にとってよいことがあります

お父さん向けの心のケアプログラムはこちらです

オンラインで7回のプログラムを受講

第1回 ストレスって何？
第2回 自分の悩みを整理するコツ
第3回 嫌な気持ちを切り替える方法 (1)
第4回 嫌な気持ちを切り替える方法 (2)
第5回 効果的なコミュニケーションの取り方
第6回 問題解決のコツ
第7回 このプログラムについて

1回あたり約10分の動画視聴です



NC 間の疾患横断領域における連携推進

【中長期目標の内容】

NC間の連携による新たなイノベーションの創出を目的とし、NC間の横断領域における研究開発等に取り組むものとする。具体的には、ゲノム医療、大規模医療情報の活用等、NCがそれぞれの専門性を活かしつつ、相乗効果を発揮できる研究領域における研究開発等に取り組むものとする。人材育成については、特に研究支援人材を育成するための体制を構築し、我が国の有為な人材の育成拠点となるようモデル的な研修及び講習の実施に努めること。その他、NCの研究成果の発信やメディアセミナーの開催、知財の創出・管理の強化や企業との連携強化に取り組むものとする。また、JH内で適正なガバナンス体制を構築し、定期的に活動状況の評価を行うこと。

【国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部(JH)の概要】

1.組織

○2020年4月、6 NCの内部組織として、国立高度専門医療研究センター医療研究連携推進本部（Japan Health Research Promotion Bureau (JH)）を設置。

人員：6NC内部職員で構成。（2024.3時点 併任30名）

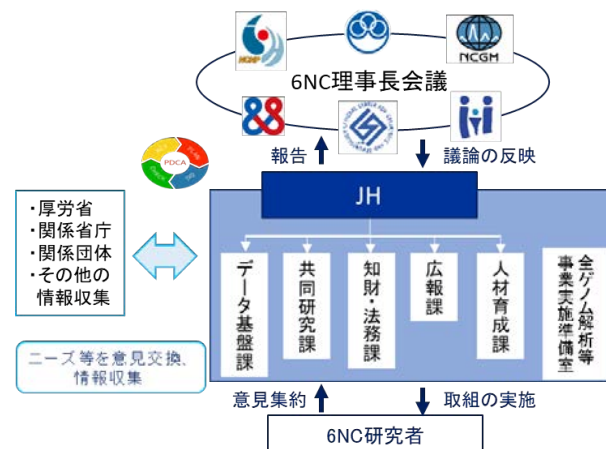
設置場所：国立国際医療研究センター内

2.ミッション

- ①NCが世界最高水準の研究開発・医療を目指して新たなイノベーションを創出するために、6NCの資源・情報を集約し、それぞれの専門性を生かしつつ有機的・機能的連携を行うことにより、わが国全体の臨床研究力の向上に資することを目的とする。
- ②社会ニーズと疾患構造の変化に対応しつつ、6NCの基礎・臨床・社会医学トップランナー間での有機的な連携を強化することにより、革新的な予防・診断・治療及び共生に関する医療技術の開発・実装を促進する。これにより、健康寿命の延伸をはかり、人々があらゆるライフステージにおいて幸福で活躍できる社会の実現に貢献する。

3.JH事業の進め方

- ① JH本部長は、6 NC 理事長が協議して策定した「JH事業計画」に基づき、最大限連携効果が得られるよう JH 事業を遂行。JH 事業を機動的に実施できるようにするため、予算の配分・執行等の事業実施に係る権限および責任は JH 本部長に集約。
- ② 6 NC 理事長は、随時、JH 事業に関する意見・要望等を、JH 本部長に伝えることはできるが、その意見・要望等の取扱いは JH 本部長に一任。JH 本部長は、6 NC 理事長からの意見・要望等や、その後の対応を記録し、6 NC 理事長に報告。



NC 間の疾患横断領域における連携推進

4.2023年度を取組：JH事業計画に沿って以下の取組を行った。**①新たなニーズに対応した研究開発機能を支援・強化**

1. 電子化医療情報を活用した疾患横断的コホート研究情報基盤を整備し「健康寿命延伸のための提言」(第二次)に向け取り組みを行った。
2. ナショナルセンター職員を対象とした職域コホートを整備し、新型コロナウイルス感染症の実態と要因に関する多施設共同観察研究を実施し、新型コロナウイルスの累積罹患率が50%を超えていることなどを見出した。
3. 令和3年度に構築した6NC統合電子カルテデータベース(6NC-EHRs)を、昨年度の69万人から82万人のデータ抽出に拡充し、本データを活用した医学研究を7課題(2022年度採択5課題、2023年度採択2課題)を通して、研究推進支援を推進した。
4. 空間情報を保持した1細胞レベルの網羅的発現解析技術を、病理組織標本の解析に最適化して研究基盤とした6NCの共同研究体制を構築し、新たにコアラボ事業として広く6NCから検体の受託解析を開始した。
5. 研究支援人材の育成に取り組むため、特に生物統計分野において「JH若手生物統計家NC連携育成パイロット事業」を通して2名の若手が実務試験統計家認定資格を取得しており、6NCが連携し実務を通じた人材育成を行う体制の支援を推進した。
6. 「6NC共通教育プラットフォーム」にて、疾患領域横断的な人材育成のため、各NCの教育・研修コンテンツの配信支援を継続した。

②6NC連携で効果的な研究開発が期待される領域の取組を支援・強化

1. 横断的研究推進費課題8課題の進捗支援及び外部評価を実施し、研究開発を推進するとともに、R6年度開始課題を公募し、応募23課題から10課題を採択した。また、NC連携若手研究助成課題24課題の進捗支援及び中間評価を実施し、研究開発を推進した。さらに、2024年度若手研究助成新規課題の審査を行い、12課題を採択した。
2. JH研究課題の成果は、JH発足から総計57件(厚労科研費14件、AMED 14件、文科研費18件、財団系研究費11件など総計5,307,824千円)の新規競争的資金の獲得に結び付き、JH発足から総計136報(2020年4月～2021年12月(18報)、2022年1月～12月(42報)、2023年1月～12月(67報)、2024年1月～3月(9報、in Press含む))の英文論文が発表された。
3. 全ゲノム解析等事業実施準備室において、臨床・患者還元支援、解析・DC運営、利活用支援、IT・情報基盤・セキュリティ、ELSI、総務の6チームにより事業実施組織の創設に向けた検討を行った。

③6NC全体として研究成果の実臨床への展開を支援・強化

1. 知財・法務に関する相談に対応し、併せて著作権を中心とした知的財産権に関する理解を促進する映像資料を提供することで、6NC間の情報共有と課題解決のための連携を推進した。
2. JHが支援する研究課題・概要等について英語版を含めJHホームページを充実させ、第31回日本医学会総会2023東京において、プログラムの一部として6NCリトリートポスターセッションを開催し、6NC内外の研究者・医療者の交流を図り、JHの情報発信を行った。

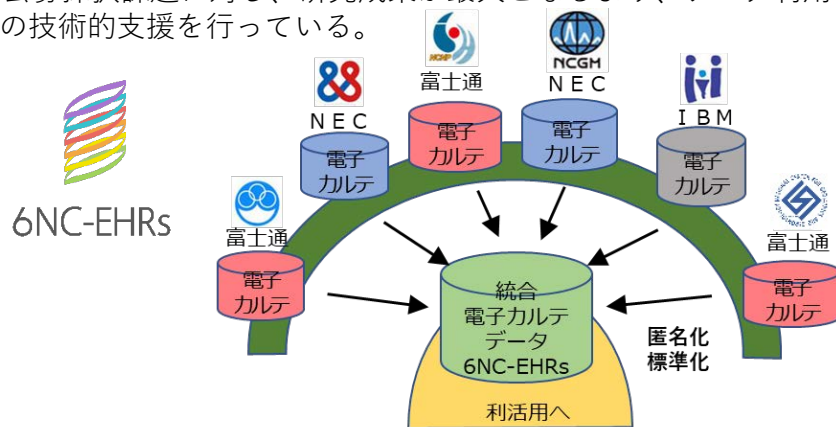
NC 間の疾患横断領域における連携推進 2023年度の実績の具体的な成果（補足）

①6NC電子カルテ統合データベースの構築を推進

- 2023年度は、6NC統合電子カルテデータベース（6NC-EHRs）の拡充した。
- 各NCの病名コード、医薬品コード、検査コードの標準化を実施するとともに、集積されたデータのクリーニングを実施した。
- 6NC-EHRsのデータを活用する研究の追加公募により新たに2つの課題を採択し、合計7課題の研究支援を実施した。

（ポイント）

- 6NC-EHRsは、患者基本情報・病名・検査（結果を含む）・処方情報・入退院情報等が含まれた、医療ビッグデータベースであり、2023年度は69万人→82万人、3億3537万レコード→4億5232万レコードへ拡充を行った。
- 異なるベンダーの電子カルテから収集したデータの標準化を実施し、その結果を各NCにフィードバックすることで、各NCの保有データの品質向上に貢献した。
- 公募採択課題に対し、研究成果が最大となるよう、データ利用の技術的支援を行っている。



②6NC連携人材育成として、疾患横断的な教育・研修コンテンツを配信し、6NC連携事業で若手生物統計家を育成

- 6NC共通教育プラットフォームを構築し、疾患領域横断的な人材育成のため、各NCの教育・研修コンテンツの配信支援した。
- 6NC連携育成パイロット事業として、2022年から2023年の2年間、生物統計課育成に実績をもつNCが、他の5NCから希望のあった若手計2名に対して、OJTを通じた育成を行うことを支援した。

（ポイント）

- 6NC共通教育プラットフォームでは、6NCの有用な教育・研修コンテンツのオンデマンド配信を支援し、令和5年度までに123コンテンツをe-learning動画として配信し、総視聴数は14,000回であった。
- 6NCが連携した生物統計家人材育成として、若手2名が、2023年6月末で実務試験統計家資格（※）申請要件に必要な、プロトコル作成、統計解析、報告書作成実務のマイルストーンに到達し、2024年3月に実務試験統計家資格が認定された。

（※：日本計量生物学会が認定する資格であり、臨床研究中各病院の人員体制の要件において、具体例で取り上げられている資格）

配信中の123コンテンツの内訳

NCG	新倫理指針、臨床基礎研究	NCGM	臨床研究の品質管理、薬剤耐性、情報セキュリティ、業務効率化、リビドミクスシリーズ
NCVC	循環器疾患	NCCHD	小児医療、データサイエンス研修
NCNP	うつ病、臨床モニタリング	NCGG	認知症シリーズ、臨床モニタリング
6NC	動物実験の研究倫理、知的財産セミナーシリーズ、6NCバイオバンクネットワーク		

NC 間の疾患横断領域における連携推進 2023年度の取組の具体的な成果（補足）

③6NCライフ・メディカル研究を加速するミニ臓器 - バイオメディカル技術連携基盤構築

○各NCを繋ぐ、プラットフォーム化し得るバイオモデルとして、病態可視化透明魚、iPS細胞や癌組織由来の細胞を用いたオルガノイド、ミニ臓器を作製・活用する研究基盤を整備した。
○NC発で多層オミックス解析、ゲノム編集技術、時空間的イメージング解析、シングルセル解析や数理モデル、AI解析など様々な革新的技術の組合せを可能とする医学・医療や創薬開発のモデル。

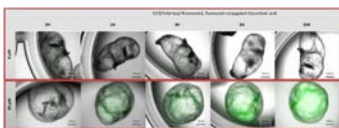
（ポイント）

- オルガノイド培養技術のプラットフォームや解析・評価技術・知見を共有することで疾患横断的検討や広いライフステージに対応。
- ELSI：次世代医学研究環境整備：オルガノイド研究に関する生命倫理的検証と提言を今後に役立てる。

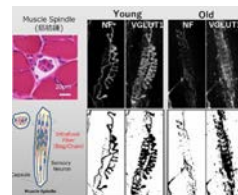
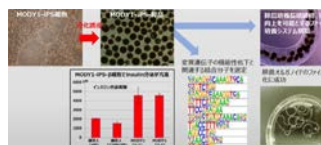
疾患横断的検討や広いライフステージをカバーする
新たな視点でのライフ・メディカル研究を推進

炎症関連がん形成に関与する遺伝子の同定

ミニ臓器による小腸胆汁酸モジュレーション創薬基盤：
小腸吸収不全症の創薬プラットフォーム：蛍光CLFが
吸収されるとミニ臓器内部に蓄積・可視化評価可能



肝臓オルガノイド作成と分子機序・治療法開発



オルガノイド研究の社会的受容
に与える影響調査

1. 個人意見調査
2. 医師の意見に賛同する数値や個人意見を特定する（研究目的の達成によって対象が変動）
3. 研究目的の達成によって対象が変動
4. 個人意見に賛同する数値や個人意見を特定する（研究目的の達成によって対象が変動）
5. 個人意見に賛同する数値や個人意見を特定する（研究目的の達成によって対象が変動）
6. 個人意見に賛同する数値や個人意見を特定する（研究目的の達成によって対象が変動）
7. 個人意見に賛同する数値や個人意見を特定する（研究目的の達成によって対象が変動）
8. 個人意見に賛同する数値や個人意見を特定する（研究目的の達成によって対象が変動）
9. 個人意見に賛同する数値や個人意見を特定する（研究目的の達成によって対象が変動）
10. 個人意見に賛同する数値や個人意見を特定する（研究目的の達成によって対象が変動）

新興科学技術がもたらす倫理的・法制度的
社会的課題(ELSI)を発見・予見しながら、
責任ある研究・イノベーション(RRI)を
進めるための実践的協業モデルの開発

④日本医学会総会のサテライト企画として6NCリトリート を開催し、6NC若手研究者の人材育成とJHの取組を発信

○第31回日本医学会総会2023東京において、プログラムの一部として6NCリトリートポスターセッション「6NCが拓く新たなサイエンスの地平」を開催した。
○若手研究者のポスターセッションを中心とし、6NC内外の研究者・医療者の交流を図り、優秀な演題については、6NC理事長賞及びJH本部長賞の表彰を行った。

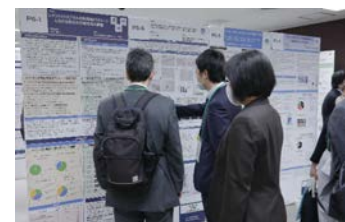
（ポイント）

- 6NCリトリートポスターセッション会場において、6NCから**合計131演題のポスター発表**を行い、NC以外の医学会総会参加者を含め、研究・医療関係者など**合計約400名が参加**した。
- 今後は各NC持ち回りで毎年開催することとなり、2024年度は「6NCリトリート2024」としてNCGMで開催する予定である。

当日のフライヤーから抜粋



当日のご発表の様子



優秀演題に対して表彰



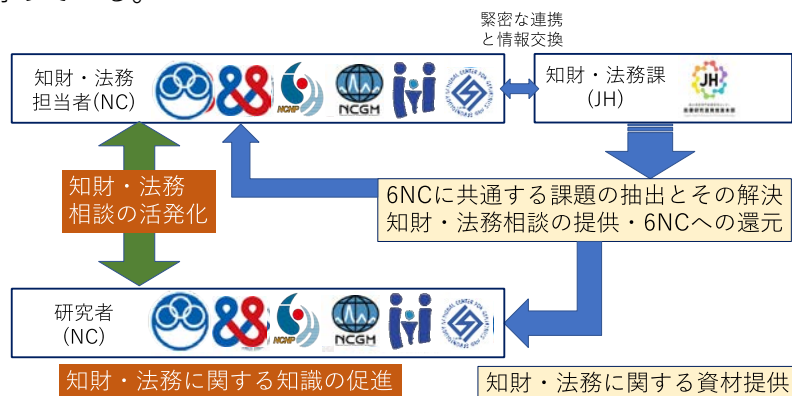
NC間の疾患横断領域における連携推進 2023年度の取組の具体的な成果（補足）

⑤法務専門家の支援を得て相談・支援を提供するとともに 知財・法務に関わる理解を促進する資材を提供

- 6 NCの知財・法務支援に関する情報共有と共通する課題を解決するため、定期的にカウンターパート会議を開催した。
- 3件の知財・法務相談に対応、うち、2件について法務専門家の助言を得た。
- 6 NCで連携し、著作権に関する映像資材を作成した。

（ポイント）

- 国際競争力に卓越した研究成果を創出し、国民に還元するためには、研究機関や民間企業との連携を促進することが必要。
- そのためには、共同研究契約、特許出願、著作権、得られた知的財産の帰属など、知財・法務に関する知識の獲得や専門部門における支援が肝要。
- 知財・法務相談への対応や動画コンテンツのICR-webへの配信等を通じ、知財・法務に関する知識・情報のブラッシュアップを行っている。



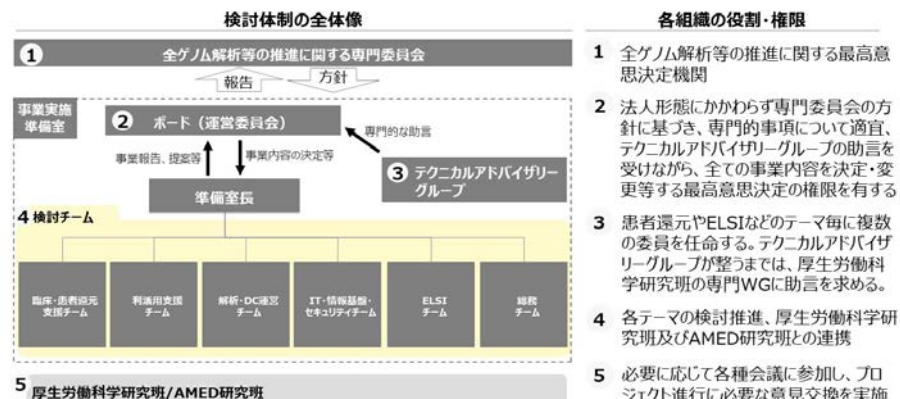
⑥JHに設置された全ゲノム解析等事業実施準備室において、R7年度の事業実施組織設立に向けた検討を推進

- 国が推進する「全ゲノム解析等実行計画」に基づき、R7年度に全ゲノム解析等事業実施組織が発足する。その体制整備のために、JHに「事業実施準備室」が設置された。
- 準備室において、臨床・患者還元支援、解析・DC運営、利活用支援、IT・情報基盤・セキュリティ、ELSI、総務の6チームにより、事業実施組織の創設に向けた検討を進めた。

（ポイント）

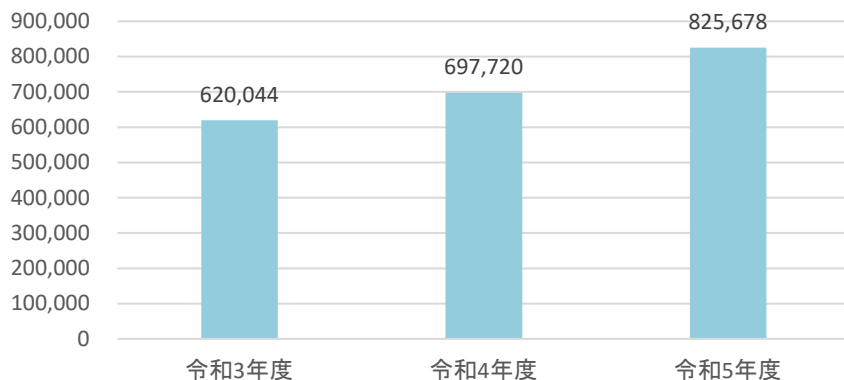
- 事業実施組織では、戦略的なデータの蓄積を進め、それらを用いた研究・創薬などを促進する。また、解析結果の日常診療への早期導入や、新たな個別化医療の実現についても推進する。
- 実データを用いた利活用を進めるため、コンソーシアムの発足支援、データ提供の建付けの整理と利活用の仕組み構築を行った。

全ゲノム解析等に係る検討体制

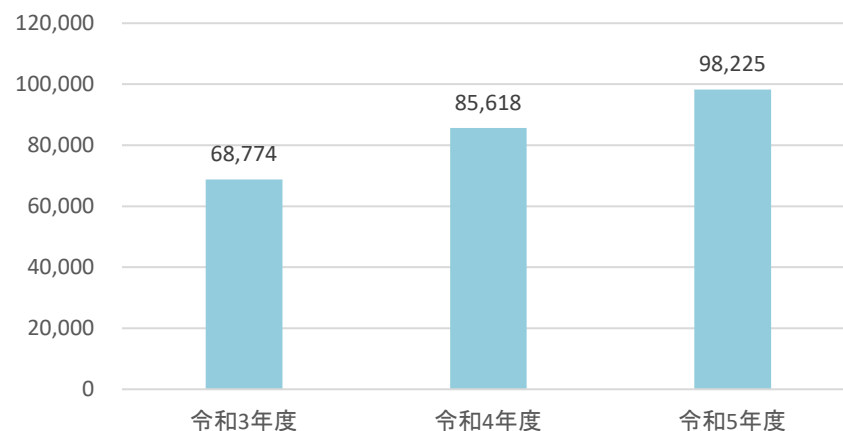


NC 間の疾患横断領域における連携推進 主な評価指標等の推移（補足）

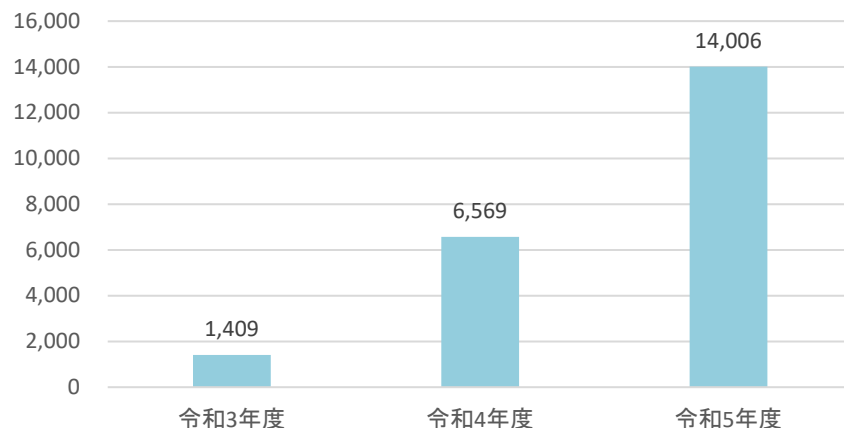
6NC共通電子カルテデータベース
(6NC-EHRs)登録患者数



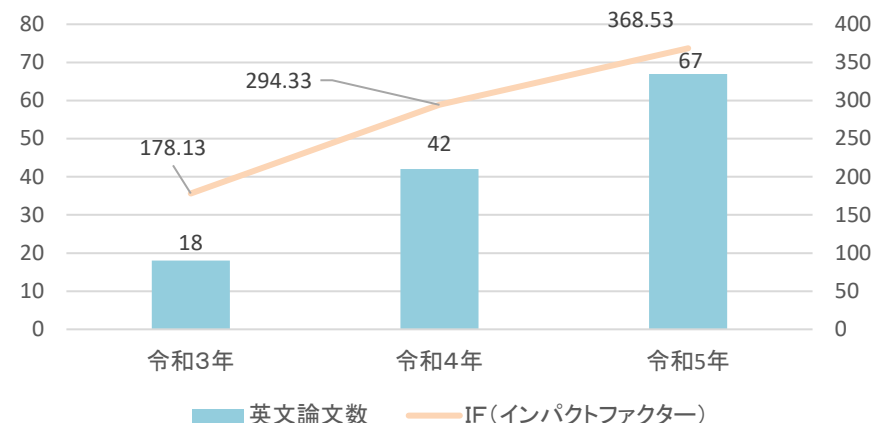
JHホームページアクセス件数



6NC共通教育用コンテンツ総視聴者数

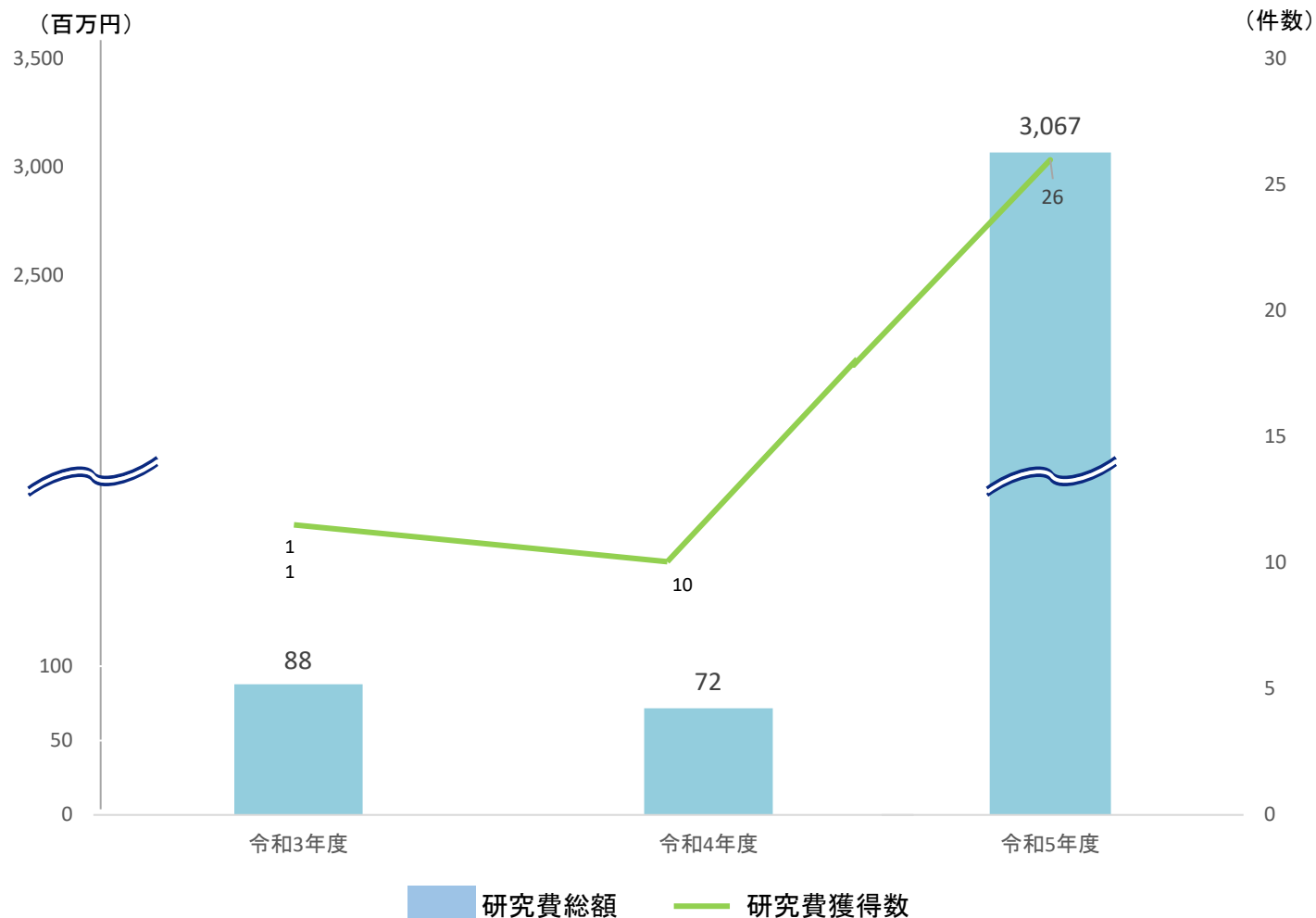


英文論文



NC 間の疾患横断領域における連携推進
主な評価指標等の推移（補足）

JH研究費を獲得した研究者が、その後代表として新規獲得した競争的研究費



自己評価 S

(過去の主務大臣評価 R3年度:A R4年度:A)

- I 中長期目標の内容
- ・First in human / First in Child(ヒト/子どもに初めて投与する)試験を3件以上実施する。
 - ・医師主導治験を20件以上実施する。
 - ・先進医療の承認を4件以上実施する。
 - ・臨床研究(倫理審査委員会にて承認された研究)を1,600件以上実施する。
 - ・治験(製造販売後臨床試験も含む。)300件以上実施する。
 - ・学会等が作成する診療ガイドライン等への採用件数を160件以上実施する。

【重要度「高」の理由】

・実用化を目指した研究・開発の推進及び基盤整備は、国民が健康な生活及び長寿を享受することのできる社会を形成するために極めて重要であり、研究と臨床を一体的に推進できるNCの特長を活かすことにより、研究成果の実用化に大きく貢献することが求められているため。

II 指標の達成状況(※達成度については小数点第2位を四捨五入して計算)

目標(指標に関連する項目を箇条書きで簡潔に記載すること)	指標	中長期目標 期間(6年間)計		令和 5年度		令和 4年度	令和 3年度			
		実績値	達成度	実績値	達成度	達成度				
共同・受託研究契約を、年間100件以上締結	共同・受託研究契約締結件数 100件 (目標値:年間100件以上)	-	-	127件	127%	150.0%	175.0%			
職務発明委員会において年間10件以上審査	職務発明委員会審査件数 10件 (目標値:年間10件以上)	-	-	12件	120%	130.0%	140.0%			
first in human / first in child(ヒト/子どもに初めて投与する)試験を3件以上実施	first in human / first in child試験実施件数 3件 (目標値:中長期目標期間中に3件〔年間1件〕)	0件	0%	0件	0%	0%	0%			

目標(指標に関連する項目を箇条書きで簡潔に記載すること)	指標	中長期目標 期間(6年間)計		令和 5年度		令和 4年度	令和 3年度			
		実績値	達成度	実績値	達成度	達成度				
医師主導治験を20件以上実施	医師主導治験実施件数 20件 (目標値:中長期目標期間中に20件 〔年間 4件〕)	27件	135.0%	6件	150.0%	250.0%	275.0%			
先進医療の承認を4件以上得る	先進医療承認件数 4件 (目標値:中長期目標期間中に4件以上 〔年間1件以上〕)	2件	50.0%	0件	0%	200.0%	0%			
臨床研究(倫理審査委員会にて承認された研究)を1,600件以上実施	臨床研究実施件数(倫理審査委員会承認) 1,600件 (目標値:中長期目標期間中に1,600件以上〔年間267件以上〕)	994件	62.1%	354件	132.6%	129.6%	110.1%			
特定臨床研究(認定臨床研究審査委員会にて承認された研究)を年間16件以上実施	特定臨床研究(認定臨床研究審査委員会承認)実施件数 16件 (目標値:年間16件以上)	-	-	17件	106.3%	112.5%	106.3%			
特定臨床研究に対する多施設臨床研究実施支援を年間15件以上実施	特定臨床研究に対する多施設臨床研究実施支援実施件数 15件 (目標値:年間15件以上)	-	-	19件	126.7%	126.7%	100.0%			
治験(製造販売後臨床試験も含む)を300件以上実施	治験実施件数 300件 (目標値:中長期目標期間中に300件以上〔年間50件以上〕)	186件	62.0%	60件	120.0%	128.0%	124.0%			
学会等が作成する診療ガイドラインへ160件以上採用	学会等作成診療ガイドライン採用件数 160件 (目標値:中長期目標期間中に160件以上〔年間30件以上〕)	89件	55.6%	35件	116.7%	93.3%	96.3%			

・要因分析(実績値/目標値が120%以上又は80%未満)

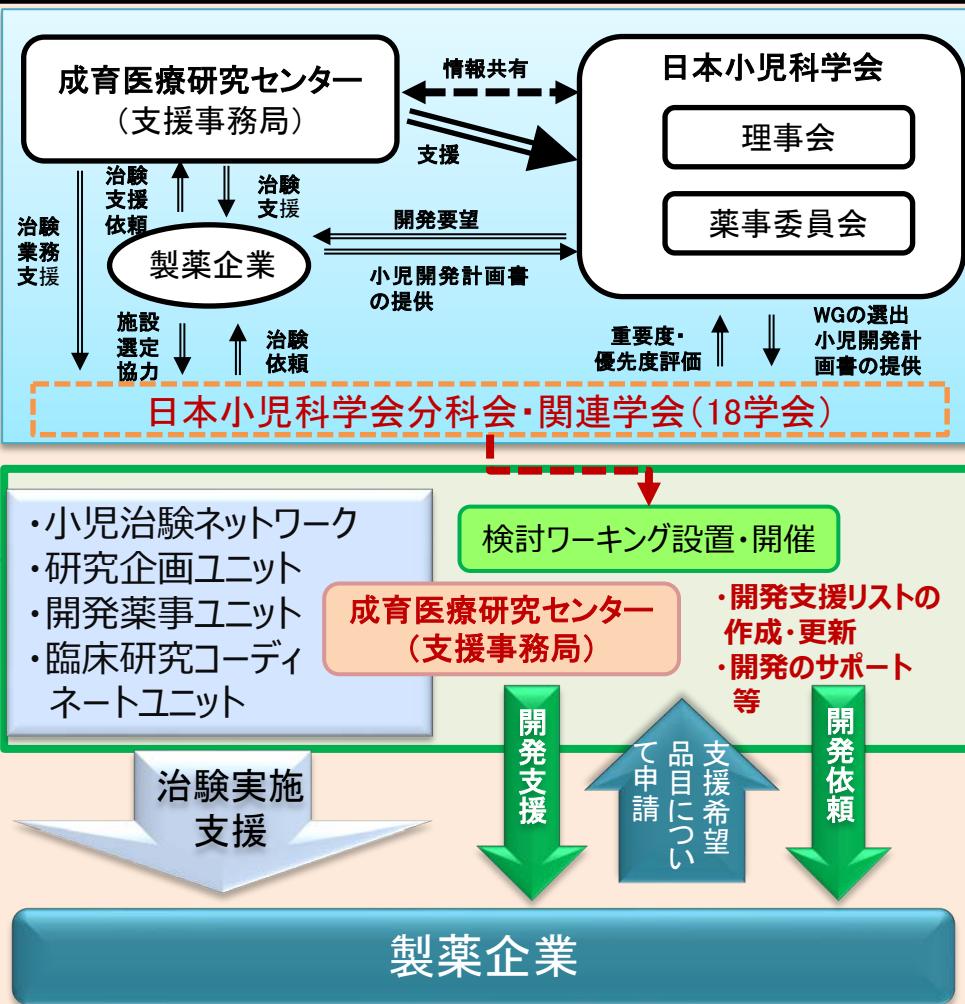
指標	要因分析(①「制度、事業内容の変更」、②「法人の努力結果」、③「外部要因」のいずれかに分類して分析すること) 同一指標で2年続けて達成度が120%以上又は80%未満の場合は、目標変更の可否についても記載すること。
共同・受託研究契約締結件数 100件 (目標値:年間100件以上)	・②【法人の努力の結果】企業や大学等との連携を強化し、共同研究や受託研究を推進した結果。 【目標変更の可否】令和6年度計画において変更済。(年間130回以上)
職務発明委員会審査件数 10件 (目標値:年間10件以上)	・②【法人の努力の結果】知的財産管理・相談の強化を図った結果 【目標変更の可否】令和6年度計画において変更済。(年間11回以上)
first in human / first in child試験実施 件数 3件(目標値:中長期目標期間中 に3件[年間1件])	・③【外部要因】開発支援中の案件について、研究責任医師の退職に伴い研究中断となったため。 【目標変更の可否】中長期目標期間の目標値に達していないため変更しない。
医師主導治験実施件数 20件 (目標値:中長期目標期間中に20件[年 間4件])	・②【法人の努力結果】他大学及び企業と連携して、治験に積極的に取組んだ結果。 【目標変更の可否】令和6年度計画において変更済。(年間8回以上)
先進医療承認件数 4件 (目標値:中長期目標期間中に4件以上 [年間1件以上])	・③【外部要因】申請予定者の共同実施外部医療機関において申請準備が進まなかったため。 【目標変更の可否】中長期目標期間の目標値に達していないため変更しない。
臨床研究実施件数(倫理審査委員会承 認) 1,600件 (目標値:中長期目標期間中に1,600件 以上[年間267件以上])	・②【法人の努力結果】診療部門や企業等との連携を図った結果。 【目標変更の可否】中長期目標期間の目標値に達していないため変更しない。
特定臨床研究に対する多施設臨床研 究実施支援実施件数 15件 (目標値:年間15件以上)	・②【法人の努力結果】研究企画段階から診療部門研究者や他大学等の自施設以外の研究者と開発戦略について 検討を重ねた。また、厚生労働省、PMDAとの相談も有効に利用した結果。 【目標変更の可否】令和7年度計画から年間16件以上と数値目標変更を検討している。
治験実施件数 300件 (目標値:中長期目標期間中に300件以 上[年間50件以上])	・②【法人の努力結果】診療部門や企業等との連携を図った結果。 【目標変更の可否】令和6年度計画において変更済。(年間55件以上)

Ⅲ 評価の根拠

根拠	理由
小児医薬品開発ネットワーク支援事業	本事業は厚生労働省が公益社団法人日本小児科学会に委託した事業である。当センターが、日本小児科学会の委託を受け支援事務局として事業運営を行っている。この事業がなければ製薬企業は小児に対する治験を日本国内で実施することなしに国外のみで承認させることとなり、いわゆるドラッグ・ロス／ラグを招く。事業開始から29品目支援を行い、令和5年度は4品目が承認され、累計で7品目が承認されている。
成育医療研究開発費を活用した研究の適切な実施と評価体制の構築に寄与する、POによる研究進捗管理と研究支援	成育医療研究開発費については、その使用及び成果について適切な管理が必要とされている。令和4年度から特に治験、特定臨床研究、先進医療等を実施予定している課題等について、目的としている成果を確実に取得できるよう支援すること、得られた試験成績を基に公的研究費を獲得すること等を目的として、プログラムオフィサー面談制度を構築した。令和5年度には1課題がAMEDの研究費を獲得し、2課題が特定臨床研究として研究を開始することができた。これまでに選定した課題数は、令和4年度18課題、令和5年度新規10課題、継続12課題、令和6年度新規3課題、継続12課題である。
国際共同ランダム化比較試験(国内医師主導治験)による小児及び若年成人再発急性骨髄性白血病に対する新規治療薬の開発とドラッグ・ラグ／ロス解消	「医薬品の迅速・安定供給実現に向けた総合対策に関する有識者検討会」報告書(令和5年6月9日)において、創薬力の強化及びドラッグ・ラグ／ロスの解消が検討課題とされている。そこで、成育で初めて欧州を中心に計画された「小児及び若年成人再発急性骨髄性白血病」に対する国際共同第Ⅲ相ランダム化比較試験に、日本の医療機関がグローバルの一地域として参加する体制の構築を行った。欧州との頻回な国際会議を開催することで様々な問題を整理し、令和5年度末までにすべての契約が完了した。今後の日本の成育領域における国際共同試験のひな形となり、ドラッグ・ロス／ラグの解消につながる。

① 小児医薬品開発ネットワーク支援事業（評価書44-45頁）

- ・日本で承認されていない小児用医薬品の開発を促進するため、厚生労働省が小児科学会に委託した事業。
- ・成育医療研究センターが日本小児科学会の委託を受け支援事務局として事業取りまとめ作業を実施。
- ・成育で運営している「小児治験ネットワーク」を活用して効率的に治験を実施し、**令和5年度までに7品目が承認された。**



承認取得品目

<令和4年度>

- ①セルメチニブ硫酸塩（コセルゴカプセル®）
・効能効果：神経線維腫症1型における叢状神経線維腫
- ②フェソテロジンフマル酸塩（トビエース錠®）
・効能効果：神経因性膀胱における排尿管理
- ③デクスメトミジン塩酸塩（プレセデックス静注射液®）
・効能効果：小児の非挿管での非侵襲的な処置及び検査時の鎮静

<令和5年度>

- ④レベチラセタム（イーケプラドライシロップ®など）
・効能効果：てんかん部分発作
・令和5年6月薬事承認
- ⑤リバーロキサバン（イグザレルト錠®）
・効能効果：Fontan手術施行後の血栓・塞栓形成の抑制
・令和5年11月薬事承認
- ⑥ベンラリズムブ（ファセンラ皮下注®）
・効能効果：気管支喘息（重症）
・令和6年3月薬事承認
- ⑦ニルセビマブ（ベイフォータス筋注®）
・効能効果：RSV感染による下気道疾患の発症抑制
・令和6年3月薬事承認

②成育医療研究開発費を活用した研究の適切な実施と評価体制の構築に寄与する、POによる研究進捗管理と研究支援(評価書44頁)

目的：治験・特定臨床研究・先進医療等の適切な実施
将来の競争的研究費の獲得

選択基準：

- 臨床研究(可能性含む)に関する課題
- 比較的高額な研究課題
- 出口戦略を見据えた検討が必要な課題
- 成育医療に及ぼす影響が大きい課題

代表PO 臨床研究センター長
担当PO 副臨床研究センター長

PO面談の実施(研究開始時と適宜)

- 研究の進捗管理
- 臨床研究センターによる支援につなげる助言

成育医療研究開発費を活用した研究課題

運営委員会(内部/外部委員)において採択

研究課題ごとにプログラム・オフィサー配置

プログラム・ディレクター
(PD; 理事長)が配置を決定

進捗管理を実施

必要に応じ臨床研究センター各
部門の支援

中間評価及び最終評価

評価委員会(外部委員)

POによる進捗報告を参照

子どもと家族の身体・心理・社会面
(biopsychosocial)での健康の確保と向上に関
する研究推進という国立成育医療研究センターの
方針を徹底

令和4年度(PO制度開始)

新規課題 18件選択

- 令和4年度、多施設共同特定臨床研究支援 1件
- 令和5年度、AMED成育疾患克服等総合研究事業採択 1件
- 令和6年度、AMED臨床研究・治験推進研究事業採択 1件

令和5年度

新規課題 10件、継続課題 12件

- 令和5年度、特定臨床研究支援開始 2件
- 令和5年度、企業と共同研究開始 1件
- 令和6年度、PMDA医療機器相談実施 1件

令和6年度

新規課題 3件
継続課題 12件

③国際共同ランダム化比較試験（国内医師主導治験）による小児及び若年成人再発急性骨髄性白血病に対する新規治療薬の開発とドラッグ・ラグ/ロス解消（評価書49・67頁）

- 小児急性骨髄性白血病は小児で2番目に多い白血病であり、**再発後の予後は不良**（寛解導入率60%以下、生存率30～40%）。
- ベネトクラクス（VEN）は、BCL-2タンパク質を阻害して白血病細胞の細胞死を促す経口薬であり、化学療法に本剤を併用する**国際共同第Ⅲ相ランダム化比較試験**がオランダ Princess Maxima Centerを中心に計画された。
- 海外承認と同時に日本で承認取得するため、日本も本試験に参加し、本試験を日本における医師主導治験としても実施する。**
- 国立成育医療研究センターは、国際共同試験における**日本のNational Coordinating Center**を務める（国内参加は数施設）。
- このような**同時開発国際共同多施設医師主導治験の体制構築は、今後のドラッグ・ラグ/ロスに対する方策**として重要である。



2022年度

2023年度

2024年度

●日本のNational Coordinating Centerとしての業務

- 欧州グループの治験調整事務局（オランダ）と頻回の国際会議実施（定期・臨時開催）日本での**医師主導治験実施の必要性及び日本と欧米の治験制度の違い**の説明と合意
- 国内参加施設の治験実施体制の整備（施設選定、**契約書締結**）
- 研究資金は全額欧州グループから支出されるため、これに伴う**契約内容調整**

●国内医師主導治験における治験調整事務局業務

- 実施計画書の日本語訳レビュー、国内同意説明文書及びアセント文書、国内手順書等の作成

●国内治験代表医師（PI）に対する治験実施に向けた支援

- 出口戦略相談（PMDA対面助言支援等）
- 実施体制構築（治験薬管理委託先選定、**SMO選定等とこれらの欧州との調整**）

各種契約締結に至る

6月:
・治験審査委員会（小児治験NW活用）

7月:
・治験計画届提出
・プレスリリース
・医師主導治験開始予定

自己評価 S

(過去の主務大臣評価 R3年度:A R4年度:A)

I 中長期目標の内容

- ・周産期・小児医療においては、関係医療機関と連携し、妊産婦、周産期における母児、小児の難病・希少疾患や広範な救急医療に対して、質の高い医療の提供や、慢性期における在宅医療との連携の推進を行う。
 - ・合併妊娠症への対応の充実、生殖補助医療の拡充、出生前診断・支援、胎児治療の推進、先天性疾患治療の充実等に取り組むこと。
 - ・小児臓器移植の一層の充実を目指す。
 - ・医療事故防止、感染管理及び医療機器等の安全管理に努め、医療安全管理体制の充実を図る。
- 【重要度「高」の理由】
- ・成育医療に対する中核的な医療機関であり、研究開発成果の活用を前提として、医療の高度化・複雑化に対応した医療を実施することは、我が国の医療レベルの向上に繋がるため。

II 指標の達成状況(※達成度については小数点第2位を四捨五入して計算)

目標(指標に関連する項目を箇条書きで簡潔に記載すること)	指標	中長期目標 期間(6年間)計		令和 5年度		令和 4年度	令和 3年度			
		実績値	達成度	実績値	達成度	達成度				
小児難治性疾患に対する遺伝子細胞治療を3件以上実施	小児難治性疾患に対する遺伝子細胞治療の実施件数 3件 (目標値:中長期目標期間中に3件以上[年間 1件以上])	11件	366.7%	3件	300.0%	600.0%	200.0%			
小児がん診療新規治療レジメン開発を3件以上実施	国立がん研究センターと連携した治療レジメンを3件以上開発 (目標値:中長期目標期間中に3件以上[年間1件以上])	6件	600.0%	3件	300.0%	100.0%	200.0%			
肝臓移植を200件以上実施	肝臓移植実施件数 200件 (目標値:中長期目標期間中に200件以上[年間34件以上])	182件	91.0%	62件	182.4%	191.2%	161.8%			

目標(指標に関連する項目を箇条書きで簡潔に記載すること)	指標	中長期目標 期間(6年間)計		令和 5年度		令和 4年度	令和 3年度			
		実績値	達成度	実績値	達成度	達成度				
心臓移植を1件以上実施	心臓移植実施件数 1件 (目標値:中長期目標期間中に1件以上〔年間1件以上〕)	4件	400.0%	3件	300.0%	0%	100.0%			
医療安全管理委員会を月1回以上開催	医療安全管理委員会の開催回数 12回 (目標値:1回以上/月)	-	-	12回	100.0%	100.0%	100.0%			
医療安全及び感染対策に関する研修会を年3回以上開催	医療安全及び感染対策に関する研修会の開催回数 3回 (目標値:3回以上/年)	-	-	4回	133.3%	100.0%	133.3%			
月平均手術件数(件)	月平均手術件数 291件 (年度計画において数値目標を設定)	-	-	302.7件	104.0%	99.2%	93.1%			
年間病床利用率(%)	年間病床利用率 81.6% (年度計画において数値目標を設定)	-	-	83.0%	101.7%	102.5%	106.4%			
年間平均在院日数(日)	年間平均在院日数 10.0日 (年度計画において数値目標を設定)	-	-	10.7日	93.5%	98.0%	105.3%			
1日平均入院患者数(人)	1日平均入院患者数 389.2人 (年度計画において数値目標を設定)	-	-	406.8人	104.5%	105.2%	109.2%			

・要因分析(実績値/目標値が120%以上又は80%未満)

指標	要因分析(①「制度、事業内容の変更」、②「法人の努力結果」、③「外部要因」のいずれかに分類して分析すること) 同一指標で2年続けて達成度が120%以上又は80%未満の場合は、目標変更の可否についても記載すること。
小児難治性疾患に対する遺伝子細胞治療の実施件数 3件(目標値:中長期目標期間中に3件以上〔年間 1件以上〕)	・②【法人の努力結果】遺伝子細胞治療推進センターで小児難治性疾患に対する遺伝子細胞治療の開発に関わる研究を進めており、その成果を看護部、臨床検査部、薬剤部と連携してカルタヘナ法に則った実施手順により遺伝子細胞治療において活用した結果、目標を上回った。(目標:年間1件以上、実績3件) 【目標変更の可否】令和6年度計画において変更済。(年間3回以上)
小児がん診療新規治療レジメン開発を3件以上実施	・②【法人の努力結果】遺伝学的異常に関連する臨床的特徴を明らかにするなど、新しい治療レジメン開発に有用な研究成果を挙げた結果、目標を上回った。(目標:年間1件以上、実績3件)
肝臓移植実施件数 200件 (目標値:中長期目標期間中に200件以上〔年間34件以上〕)	・②【法人の努力結果】優れた手術手技・周術期管理・早期リハビリテーションに加え、移植後に重篤となりうるウイルス感染症の早期発見・感染対策・治療介入に取組み、移植を促進した結果、目標を上回った。(目標:年間34件以上、実績62件) 【目標変更の可否】中長期目標期間の目標値に達していないため変更しない。
心臓移植実施件数 1件 (目標値:中長期目標期間中に1件以上〔年間1件以上〕)	・②【法人の努力結果】国内小児心臓移植について、ドナー患者が少ない中、移植件数が増加傾向であり、当院において小児心臓移植を3例を実施し、目標を上回った。(目標:年間1件以上、実績3件) 【目標変更の可否】令和7年度計画から年2回以上開催と数値目標変更を検討している。
医療安全及び感染対策に関する研修会を年3回以上開催	・②【法人の努力結果】計画的に医療安全研修・感染対策研修共に2回/年の研修でビデオ上映やeラーニング研修でフォローアップ等を行い、全ての職員の受講した結果、目標(年3回以上)を上回る4回実施した。 【目標変更の可否】令和7年度計画から年4回以上開催と数値目標変更を検討している。

Ⅲ 評定の根拠

根拠	理由
成育医療研究センターで実施されている主な胎児治療について	・脊髄髄膜瘤に対する直視下修復術の臨床試験を大阪大学と共同で実施しており、令和5年度に当院で1例目(全体で6例目)を実施した。先天性横隔膜ヘルニアに対する胎児鏡下気管閉塞術(FETO)と重症大動脈弁狭窄症に対する超音波ガイド下胎児大動脈弁形成術は国内で当院のみ実施施設であり、令和5年度は各々2例行っている。ほか双胎間輸血症候群に対する胎児鏡下レーザー手術、胎児胸水に対する胸腔シャント術、無心体双胎に対するラジオ波凝固術など、これら胎児治療例総数は日本最多である。
救急医療及びPICUについて	・令和5年度の小児救急受診患者数は24,953名、うち3,307名が入院した。救急車受入台数は4,248台でCOVID-19パンデミック前より1000台の増加が継続しており、全ての指標で前年度より増加した。上記のうち、480名は緊急転院搬送を要し、入院のうち367名は小児集中治療室の対応を要しており、小児救急医療提供体制の構築の強化を図り、地域、都内、関東圏内の重篤な小児救急医療に貢献した。
小児がん事業について	・当センターは、小児がん拠点病院かつ小児がん中央機関であり、わが国の小児がん医療を牽引している。令和5年度の小児がん診療実績は107名、造血細胞移植実績は31件と国内最大規模を誇り、当センターが中心的役割を果たしたのも含めて多数の多施設共同特定臨床研究や治験を実施した。造血器腫瘍細胞マーカー診断1608件、固形腫瘍中央画像診断216件、中央病理診断1,209件とわが国の小児がん診断の質の向上に貢献したほか、小児病院唯一のがんゲノム拠点病院として累計134名(自施設61名、他施設73名)のエキスパートパネルを実施した。また、新たに48名の小児がん相談員を新規に育成したほか、緩和ケアチーム研修や小児がん看護研修の実施など、施設や職種を超えた小児がん診療に携わる人材育成も担った。ファシリティドッグの導入やチャイルドライフスペシャリストの関与など、小児がん患者の療養支援にも注力した。

①「成育医療研究センターで実施されている胎児治療について」(評価書65頁)

成育で実施されている主な胎児治療

保険診療となっている胎児治療

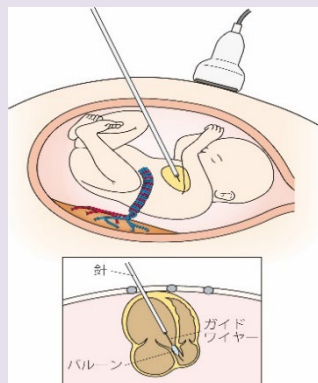
- ・胎児鏡下レーザー手術(双胎間輸血症候群)
- ・胎児胸腔シャント術(胎児胸水など)
- ・ラジオ波凝固術(無心体双胎)
- ・胎児輸血(胎児貧血)

臨床研究として行っている胎児治療

- ・脊髄髄膜瘤の胎児手術
- ・重症大動脈弁狭窄に対する胎児大動脈弁形成術
- ・下部尿路閉鎖に対する胎児膀胱鏡手術
- ・先天性横隔膜ヘルニアに対する胎児鏡下気管閉塞術

重症大動脈弁狭窄に対する胎児大動脈弁形成術

- ・重症大動脈弁狭窄は左心系の機能の悪化から左心の低形成症をきたすため、外科的治療が必要(フォンタン手術)となる疾患である。
- ・胎児治療の目的は左心低形成症候群に進行する前に大動脈狭窄を解除し、二心室循環を保つことである。

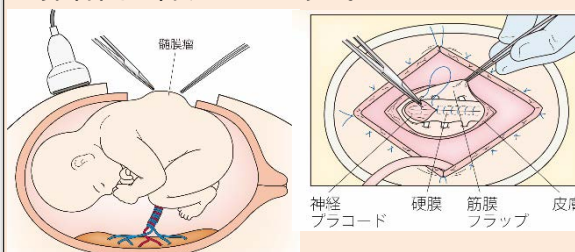


超音波ガイド下に心臓を穿刺し、バルーンカテーテルで大動脈弁狭窄を解除する。

これまで成育へ紹介14例
胎児治療適応 6例
同意が得られた症例 4例
実施症例 3例
(1人は胎位が不適で施行できず)
2023年度 2例実施

脊髄髄膜瘤の胎児手術の臨床研究

- ・脊髄髄膜瘤は脊髄神経の障害により歩行障害、排泄障害、キアリ奇形と水頭症により中枢神経障害を来す疾患である。
- ・米国で行われたRCTにより、胎児治療がこれらの症状を改善することが証明され、世界各国で普及しつつある。



日本では現在まで全6例実施、2023年度 5例(大阪大学 4例、成育 1例)
成育では**2024年3月に1例目を実施(5月10日現在、妊娠継続中)**
現在、先進医療の申請中

本試験の実施体制



大阪大学



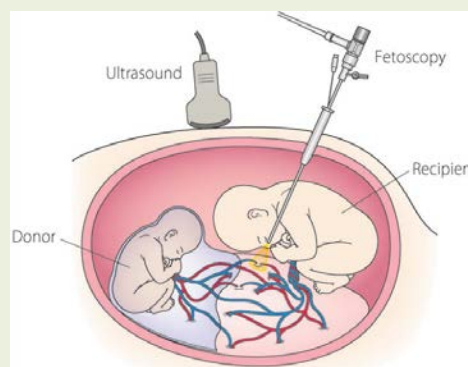
国立成育医療研究センター

胎児治療実施施設は2施設
目標症例数：17症例
(早期安全性試験：2例、先進医療15例)

双胎間輸血症候群に対する胎児鏡下レーザー手術

双胎間輸血症候群は一絨毛膜双胎の約10%に生じ、両児に胎児死亡や神経学的異常を起こす。胎児鏡下レーザー手術は、胎盤の吻合血管を凝固する胎児治療である。

(2023年度:21例)

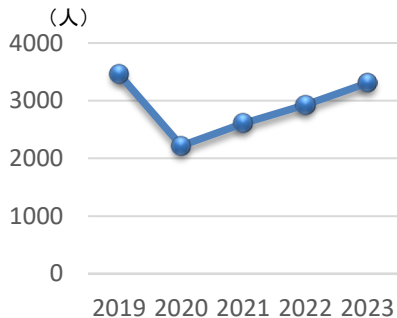


成育では2023年度までに**国内最多の806件を実施**し、少なくとも一児の生存率を98%まで改善、3歳の神経発達異常を9%に減少させ、**世界的にもトップクラスの治療成績**である。

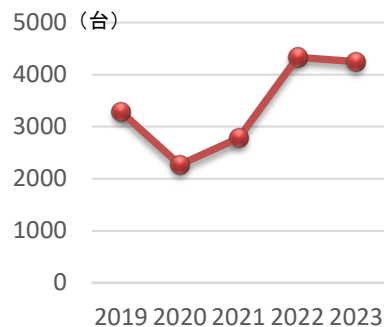
②「救急医療及びPICUの取り組みについて」(評価書80-81頁)

救急医療の取組

救急外来受診者

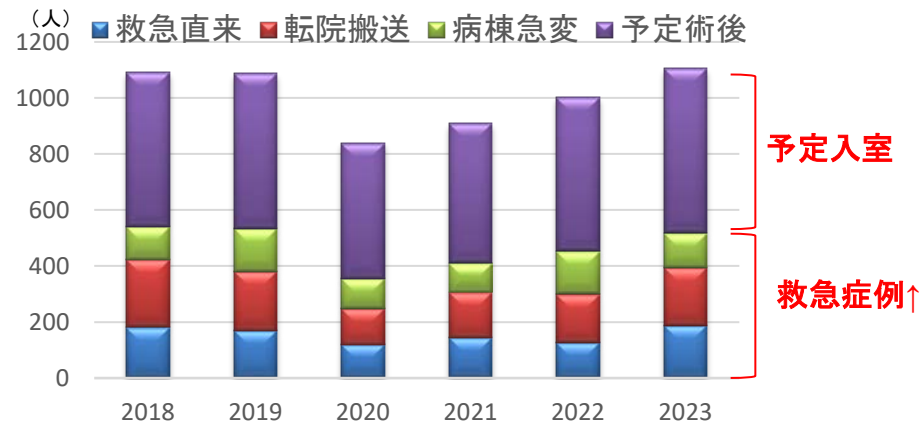


救急車受入れ



COVID-19パンデミック以前の水準へ回復傾向

小児集中治療室(PICU)の取組

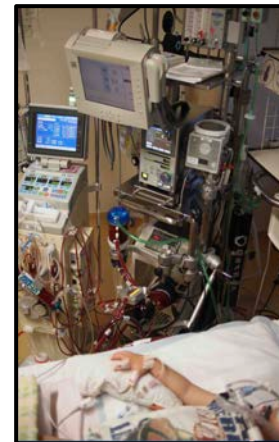
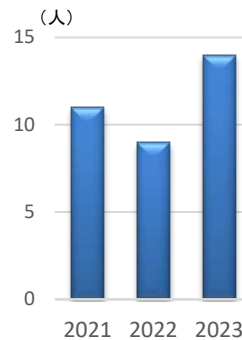


COVID-19以前の水準、特に救急症例の増加に対応

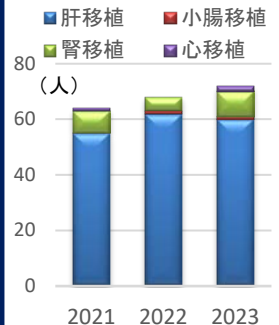
地域患者の受入と広域・重症例の病院間搬送



ECMO



固形臓器移植



新興感染症対応・高度専門的な小児集中治療の提供

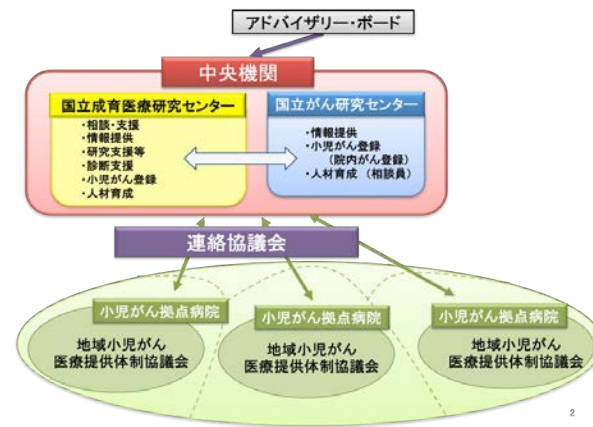
③「日本の小児がん医療を診療・インフラで牽引（患者支援に対する多職種連携）」（評価書66-68頁）

小児がん事業（小児がん拠点病院・中央機関）

【概要】

「がん対策基本法」に基づき、2012年に閣議決定された「第2期がん対策推進基本計画」によって指定された全国15の小児がん拠点病院（2013年～）のひとつとして、さらに、国立がん研究センターとともにこれらを取りまとめる小児がん中央機関（2014年～）として、わが国の小児がん医療の充実及び体制整備に取り組んでいる。

なお、2023年3月28日に閣議決定された「第4期がん対策推進基本計画」では、小児・AYA世代に対して「がん医療」のみならず、療養環境への支援を含めた「がんとの共生」が謳われており、その整備にも取り組んでいる。



事業の取組

1. 中央診断による全国の小児がん診断の質の向上・小児がん長期フォローアップセンターの設立
 - ・ がんゲノムエキスパートパネルは小児がんに対しては国内トップ
 - ・ 小児固形腫瘍の中央診断は、全国発症数の90%以上を網羅
2. ファシリテッドッグの導入
 - ・ 入院中の処置や手術室への出棟に患児の心理的なサポートとして、ファシリテッドッグが活躍し、2023年は計82名（延べ923名）患児に介入。
3. チャイルドライフスペシャリスト（CLS）
 - ・ こどもたちの「こえ」を聴きながら、彼らが自分自身のことを大切に身体や治療に臨むことができるようお手伝いしている。診断時から外来移行後まで、こどもたちの成長発達に合わせた関わりを行っている。家族支援・きょうだい支援にも取り組んでおり、過去5年間で延べ2,925件実施。
4. ディズニーこども病院イニシアチブ
 - ・ ウォルト・ディズニー・ジャパン株式会社より、こどもたちに勇気を与えるための「インタラクティブなディズニーの壁紙」などの寄付を受けている。患児達の癒やしや喜びになるだけでなく、治療に対し前向きに取り組むための「大きな力」になっている。



評価項目No. 1-4 人材育成に関する事項

自己評価 A

(過去の主務大臣評価 R3年度:B R4年度:A)

I 中長期目標の内容

・センターが国内外の有為な人材の育成拠点となるよう、成育医療及びその研究を推進するにあたってリーダーとして活躍できる人材の育成を行うとともに、モデル的な研修及び講習の実施及び普及に努める。

II 指標の達成状況 (※達成度については小数点第2位を四捨五入して計算)

目標(指標に関連する項目を箇条書きで簡潔に記載すること)	指標	令和5年度		令和4年度	令和3年度			
		実績値	達成度	達成度				
臨床研究関連講習会等を年間20回以上開催	臨床研究関連講習会等開催数20回 (目標値:年間20回以上)	35回	175.0%	195.0%	195.0%			
小児科後期研修医を毎年10人以上採用	小児科後期研修医採用数 10人 (目標値:毎年10人以上)	14人	140.0%	140.0%	110.0%			

・要因分析(実績値/目標値が120%以上又は80%未満)

指標	要因分析(①「制度、事業内容の変更」、②「法人の努力結果」、③「外部要因」のいずれかに分類して分析すること) 同一指標で2年続けて達成度が120%以上又は80%未満の場合は、目標変更の要否についても記載すること。
臨床研究関連講習会開催数20回(目標値:年間20回以上)	・②「法人の努力結果」臨床研究に関する講習会、セミナー等の教育・研修の充実を図るとともに、ウェビナー形式で開催する等、当センター以外の機関・施設からも参加できるように努めた結果。 【目標変更の要否】令和6年度計画において変更済。(年間33回以上)
小児科後期研修医採用数 10人(目標値:毎年10人以上)	・②「法人の努力結果」小児科後期研修医を積極的に受け入れた結果。 【目標変更の要否】令和7年度計画から年間12件以上と数値目標変更を検討している。

Ⅲ 評価の根拠

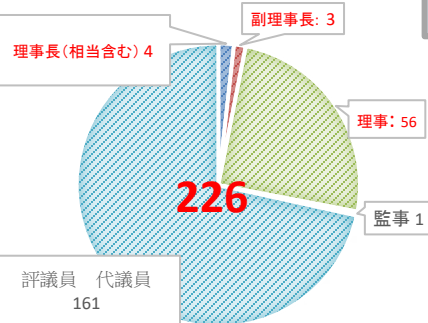
根拠	理由
リーダーとして活躍できる人材の育成	我が国の医療及び研究の推進のため、リーダーとして活躍できる人材の育成と確保を目指している。 なお、所属している学会に理事長4人、副理事長3人、理事56人等計226人が役職に就任した。 また、当センターから令和5年4月に5名が大学教授に就任しており、2015年度より毎年度1名以上大学教授に就任していることは、人材育成の大きな成果であり、また年度計画において、小児科専攻医を10名以上採用することを目標としているが、令和5年度は14人採用し目標を上回ったことにより、小児科を専門とする医師の育成に大きく貢献した。 英文論文の校正に関するサポート等の研究教育を充実させ、小児科専攻医の英文による論文数が過去最多であった前年度より2件(10%)増加した。レジデント・フェローの論文数についても、前年度より和文11件(12.5%)、英文256件(220.7%)増加した。

①リーダーとして活躍できる人材の育成(評価書87-88頁)

(1) 国立成育医療研究センターでの診療・学術実績が評価され、学会・アカデミア等に人材を供給

2023年度 所属学会の役職に就任している職員226名の学会での役職別内訳

役職の内訳(人)



役職が理事長(相当職)、副理事長(相当職)、理事(相当職)の学会の例

役職	学会名称	役職	学会名称
理事長 (相当職)	日本小児保健協会	理事 (相当職)	日本小児科学会
	日本小児放射線学会		日本周産期・新生児医学会
	日本子ども健康科学会		日本免疫アレルギー感染学会
	日本ラクテーション・コンサルタント		日本緩和医療学会
副理事長 (相当職)	日本免疫不全自己炎症学会		日本小児アレルギー学会
	日本弱視斜視学会		国際生体肝移植学会
	日本小児栄養消化器肝臓学会		日本移植学会
			国際小児移植学会

大学教授就任者 年次推移

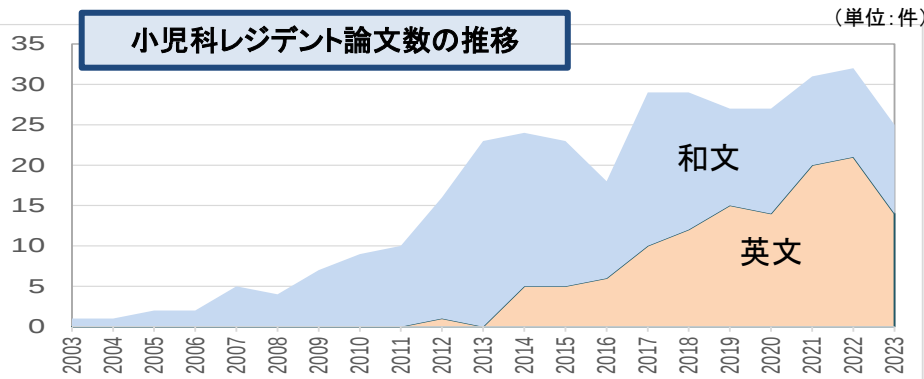


2023年4月: 藤野外科診療部長
慶應義塾大学医学部外科学(小児)教室教授に
2023年4月: 鳴海基礎内分泌研究室長
慶應義塾大学医学部小児科学教室教授に
2023年4月: 山谷薬剤部長
明治薬科大学臨床薬学部小児周産期薬学教授に
2023年4月: 堀内医療工学室長
つくば国際大学医療保健学部医療技術学科教授
2015年度から当センターより9年連続大学教授に

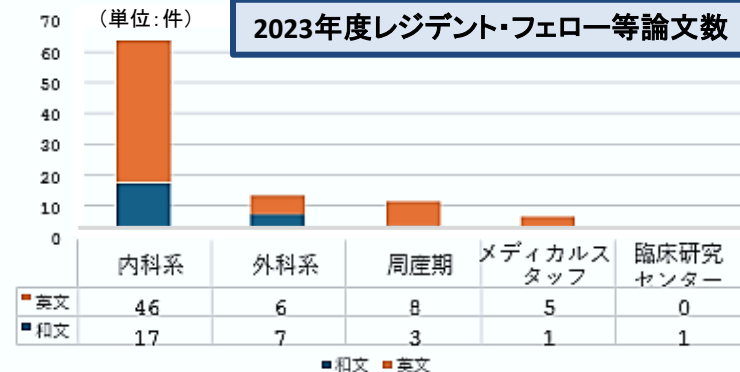
(2) 病院・研究所の連携強化による、若手医療従事者の研究能力の向上

「病院・研究所間での人材交流・研究マッチング」「若手医療従事者への研究教育・OJT」「研究支援・論文執筆支援」により以下の成果をあげている。

小児科レジデント論文数の推移



2023年度レジデント・フェロー等論文数



評価項目 No. 1－5 医療政策の推進等に関する事項

自己評価 A

(過去の主務大臣評価 R3年度:B R4年度:B)

I 中長期目標の内容

- ・研究、医療の均てん化等に取り組む中で明らかになった課題や我が国の医療政策の展開等のうち、特に研究開発に係る分野について、患者を含めた国民の視点に立ち、科学的見地を踏まえ、センターとして提言書を取りまとめた上で国への専門的提言を行う。
- ・医療の評価と質の向上、さらに効率的な医療の提供を実現するため、センターが担う疾患にかかる中核的な医療機関間のネットワーク化を推進し、高度かつ専門的な医療の普及を図り、医療の標準化に努める。
- ・公衆衛生上重大な危害が発生し、又は発生しようとしている場合には、国の要請に応じ、迅速かつ適切な対応を行う。

II 指標の達成状況

目標(指標に関連する項目を箇条書きで簡潔に記載すること)	指標	中長期目標 期間(6年間)計		令和 5年度		令和 4年度	令和 3年度			
		実績値	達成度	実績値	達成度	達成度				
国民向け及び医療機関向けの情報提供の充実(432万件)	ホームページアクセス件数 432万件 (目標値 中長期目標期間中に 432万件以上〔年間72万件〕)	219.6万件	50.8%	64.1万件	89.0%	103.3%	112.6%			

※ 成育医療の推進に寄与する臨床および研究に関するプレスリリース(メディア向け)を46件(前年度45件)配信。メディア露出数は2122件(前年度1,655件)。

Ⅲ 評価の根拠

根拠	理由
妊娠と薬情報センター	令和5年度は全国の56拠点病院と協力し、妊娠・授乳中の薬剤使用に関する823件の相談に対応し、当該分野の学術的振興のための様々な研修会・講演会を企画・開催した。欧州TISとの共同研究報告(モダフィニル)など、相談症例データに基づく妊娠・授乳中の薬剤の安全性に関する複数の学術論文を報告した。添付文書記載の妥当性を評価するための「妊婦・授乳婦を対象とした薬の適正使用推進事業」では、βブロッカー(カルベジロール・ビソプロロール)の妊婦禁忌を解除した。製薬会社との共同研究にも積極的に取り組んだ(COVID19治療薬の安全性研究、抗ヘルペスウイルス薬の母乳移行測定研究)。
成育こどもシンクタンク	こどもの“こえ”を聞く取り組みとして、こどもアンケートを実施した。また、こどもの“こえ”を聞くアドボケーターとしての小児科医の人材育成にも取り組んだ。令和5年4月に設置されたこども家庭庁との連携体制を構築し、母子保健情報DXや保育政策、EBPM推進などの計画立案や評価に関する助言や、データ解析を通じた情報提供をおこなった。情報発信として、こどもの社会的な課題について、実態把握や課題解決策提案に繋がる分析結果を発信するとともに、セミナーやシンポジウムなどによる情報発信を22件実施した。

「妊娠と薬情報センター、成育こどもシンクタンクの取り組み」(評価書103.104頁)

妊娠と薬情報センター

妊娠中の薬剤使用に関する相談業務と安全性の情報発信

全国の拠点病院:57⇒59か所に

オンラインでの相談申し込み
拠点病院との安全性情報の共有

積極的なエビデンス創出への取り組み

拠点病院ネットワークの強化・充実

オンライン導入による相談業務の活性化と相談症例データベースの充実(約20000件)

相談症例データに基づく、疫学研究報告・症例報告(2023年度)

- ・ 欧州TISとの共同研究(モダフィニルの妊娠中使用に関するコホート研究)
- ・ 拠点病院との共同研究(カルボシステインの妊娠中使用に関するコホート研究) 他

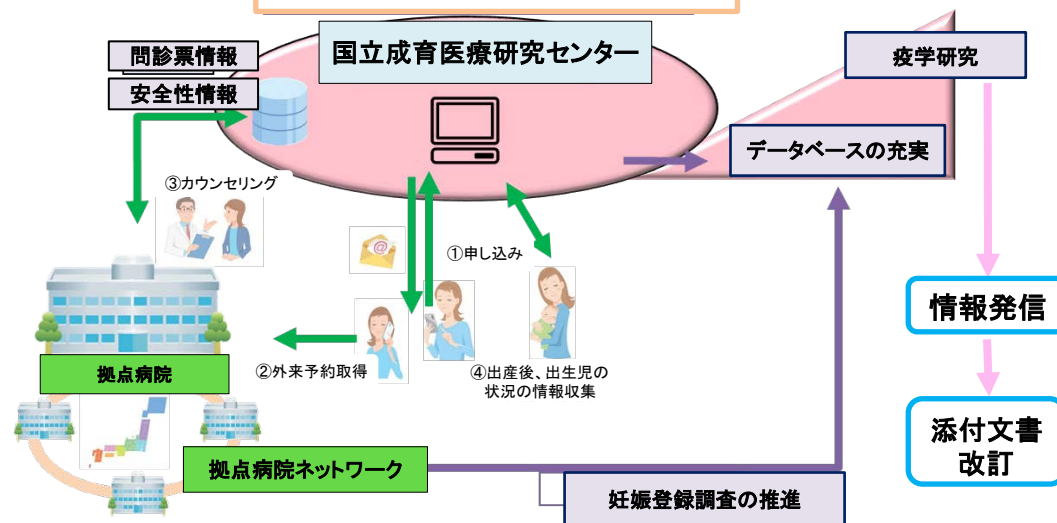
妊娠中の薬剤の安全性に関する情報提供
相談症例を基にしたエビデンス創出

製薬企業との共同研究
(2023年度)

- ・ 妊婦禁忌であるCOVID19治療薬(ゾコーバ®とラゲブリオ®)の相談対応と情報収集
- ・ 抗ヘルペスウイルス薬(アメナリーフ®)の母乳移行量測定研究

妊娠・授乳婦を対象とした薬の
適正使用推進事業
(2023年度)

- ・ β 遮断薬(ビソプロロール・カルベジロール)の添付文書禁忌の妊婦記載削除



「妊娠と薬情報センター、成育こどもシンクタンクの取り組み」(評価書103.104頁)

成育こどもシンクタンク

【概 要】

成育こどもシンクタンクは、すべてのこどもたちが笑顔になれる社会をめざし、エビデンスの創出に加え、こども家庭庁をはじめとする省庁や自治体と連携体制を構築し、先駆的な取り組みや重点政策を中心に様々な活動・事業・政策の社会実装を支援しています。教育活動や民間団体との連携による「こどもの“こえ”」をきくための体制構築、既存データを用いてこどもの社会課題の実情把握や解決策の提案に繋がる情報の発信等も進めている。

【成育こどもシンクタンクの活動目的・取り組み】

こどもたちのBio-Psycho-Socialな健康の実現に向けて、「すべてのこどもたちが、笑顔になれる社会を創ります」という理念を掲げ、令和4年に成育こどもシンクタンクが設置されました。「こどもアドボカシー体制の基盤整備」、「データ利活用基盤構築」、「社会実装支援」、「人材育成」などの活動を推進し、こどもとその養育者に関わるすべての人をつなぐハブになることを目指す。

【具体的な活動成果】

【こどもアドボカシー】

こどものマスクに対する意識調査、こどもの“こえ”を聞く人材育成

【社会実装支援】

母子保健情報DX、保育政策、EBPM推進、こどもホスピスなど

【データ利活用】

実態把握や課題解決策提案に繋がる分析結果の発信

【情報発信・人材育成】

成育こどもシンクタンクセミナー開催:10回

シンクタンクの活動や社会的な課題に対する学会発表・講演・寄稿:12件

政策・医療・研究の“橋渡し人材”の育成

令和6年度に向けて、こども計画の実装支援、政策評価分析(母子保健課調査の分析)などに関する大型の事業費を獲得し、こどもを取り巻く環境改善を加速させていく。



評価項目 No. 2-1 業務運営の効率化に関する事項

自己評価 A

(過去の主務大臣評価 R3年度:B R4年度:B)

- I 中長期目標の内容
- ・業務の質の向上及びガバナンスの強化を目指し、かつ、効率的な業務運営体制とするため、定期的に事務及び事業の評価を行い、役割分担の明確化及び職員の適正配置等を通じ、弾力的な組織の再編及び構築を行う。
 - ・損益計算において経常収支率100%以上を達成する。
 - ・一般管理費については、令和2年度に比し、中長期目標期間の最終年度において、5%以上の削減を図る。
 - ・後発医薬品の使用については、数量シェアで85%以上を維持する。
 - ・医業未収金の発生防止の取組や査定減対策など、適正な診療報酬請求業務を推進し、引き続き収入の確保を図る。

II 指標の達成状況(※達成度については小数点第2位を四捨五入して計算)

目標(指標に関連する項目を箇条書きで簡潔に記載すること)	指標	中長期目標 期間(6年間)計		令和 5年度		令和 4年度	令和 3年度			
		実績値	達成度	実績値	達成度	達成度				
紹介率85%以上	紹介率 (目標値:年度計画 85%以上)	-	-	86.0%	101.2%	100.9%	97.5%			
逆紹介率45%以上	逆紹介率 (目標値:年度計画 45%以上)	-	-	60.0%	133.3%	106.7%	85.1%			
看護師離職率14.5%以下に減少	看護師離職率 (目標値:14.5%以下)	-	-	15.8%	91.8%	93.5%	109.0%			
専門・認定看護師数を30人まで増加	専門・認定看護師数 (目標値:中長期目標期間中に30人まで増加)	-	-	28人	93.3%	100.0%	100.0%			
経常収支率100%以上を達成	経常収支率 (目標値:中長期目標期間を通して100%以上)	-	-	99.2%	99.2%	100.1%	100.9%			

目標(指標に関連する項目を箇条書きで簡潔に記載すること)	指標	中長期目標 期間(6年間)計		令和 5年度		令和 4年度	令和 3年度			
		実績値	達成度	実績値	達成度	達成度				
一般管理費を令和2年度に比し、5%以上の削減	一般管理費削減率 (目標値: 令和2年度に比し、中長期目標期間の最終年度において、5%以上の削減)	-	-	△3.5%	△70.3%	△45.2%	64.0%			
後発医薬品使用数量シェアについて数量シェアで85%以上を維持	後発医薬品使用数量シェア (目標値: 数量シェアで85%以上を維持)	-	-	88.1%	103.6%	103.2%	102.4%			
医業未収金比率を前中長期目標期間の実績の最も比率が低い年度に比して、低減	医業未収金比率 0.021% (目標値: 前中長期目標期間の実績の最も比率が低い年度(平成28年度0.021%)に比して、低減)	-	-	0.024%	△14.3%	△81.0%	△47.6%			

・要因分析(実績値/目標値が120%以上又は80%未満)

指標	要因分析(①「制度、事業内容の変更」、②「法人の努力結果」、③「外部要因」のいずれかに分類して分析すること) 同一指標で2年続けて達成度が120%以上又は80%未満の場合は、目標変更の要否についても記載すること。
逆紹介率45%以上	・②【法人の努力結果】専門性のある高度な医療を適時提供し、円滑に地域との連携が図り、逆紹介率の向上等を定期的に検討を行い、各診療科への支援や指導の実施、診療情報提供書の作成に向けた動画による研修等を計画し、逆紹介率等の向上を図った。
一般管理費を令和2年度に比し、5%以上の削減	・③【外部要因】委託内容の見直しによる委託費の削減等の費用節減の見直しを行っているが、目標達成には至っていない。 【目標変更の要否】引き続き令和2年度に比し、5%以上の削減を目標とする。
医業未収金比率 0.021% (目標値: 前中長期目標期間の実績の最も比率が低い年度(平成28年度0.021%)に比して、低減)	・②【法人の努力結果】「未収金対策マニュアル」に基づき、診療費を一定期間未払いとなった患者へ督促を複数回実施し、未収金縮減に努めたが目標は未達となった。 【目標変更の要否】引き続き平成28年度実績を目標とする。

Ⅲ 評価の根拠

根拠	理由
効率化等による収支改善	物価高騰の影響により、水道光熱費等の費用が前年度より325百万円増となったが、職員の努力により使用量は令和3年度より減少した。また、新型コロナウイルスによる受診控えの影響もあったが、患者確保に努め医療収益は過去最高であること、経常費用が前年度より△219百万円減する等、たゆまぬ経営努力を図った。医薬品に関しては、全国33の施設に積極的に価格照会を行い、費用削減を心掛けている。医療用材料については、3年間で3,400百万円の費用削減が見込まれる契約内容とした。棚卸資産(診療材料)は平成27年度から削減しており、令和2年度の47.0%と大幅に削減に成功した。
働き方改革	医師の働き方改革への対応として、令和4年にビーコン式の勤怠管理システムを導入し、引き続き、客観的な労働時間の把握を行っている。今年度は多職種が参加する医療従事者の労務管理・役割分担推進委員会を3回開催し、引き続き、タスクシフト・シェアの推進について検討したほか、勤務間インターバルや代償休息について定める規程、労働時間短縮計画について審議し、制定した。令和6年3月には特定労務管理対象機関としてB水準、C-2水準の指定を受けた。

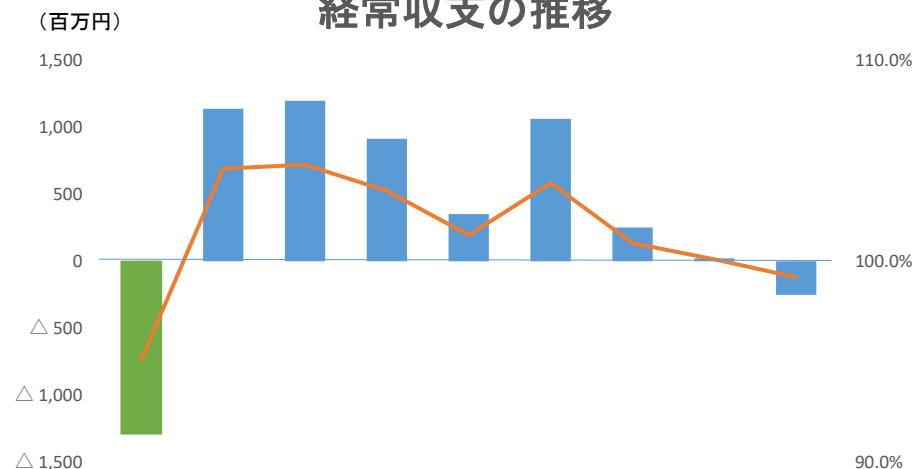
①-1 効率化等による収支改善(評価書116頁)

(1) 令和元年度は働き方改革対応、令和2年度から新型コロナウイルス感染の流行、物価高騰、光熱水量の増加等及び補助金等の減少により収支悪化の要因となり、経常収支はマイナスに転じた。

しかしながら、**経常費用は、委託費の削減や医薬品費等の価格交渉等により材料費の削減等が図られ、令和4年度に比して175百万円減少した。**

(2) 1日平均入院患者数は、前年度より17.8名の増(令和5年度406.8名・令和4年度389.0名)。1日平均外来患者数は、前年度より4.4名の増(令和5年度943.0名・令和4年度938.6名)。患者確保等に努めた結果、**医業収益は過去最高**を記録した。(対前年度: +265百万円増)

経常収支の推移



	H27'	H28'	H29'	H30'	R01'	R02'	R03'	R04'	R05'
経常収支差	△ 1,288	1,137	1,197	913	352	1,062	252	22	△ 250
経常収支率	95.1%	104.6%	104.8%	103.5%	101.3%	103.9%	100.9%	100.1%	99.2%

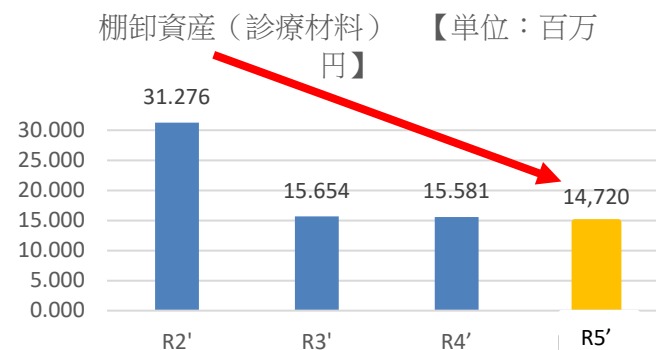
光熱水量(金額)の推移

(百万円)

区分	2021年度(A)	2022年度(B)	2023年度(C)	対前々年度比	対前年度比
電力	314.7	524.4	464.0	+66.6%	△11.5%
水道	96.7	95.9	101.6	△0.8%	+5.9%
ガス	245.2	357.4	241.1	+45.8%	△32.5%
その他	57.9	55.7	57.9	△3.7%	+3.9%
総計	714.4	1033.4	864.6	+44.7%	△16.3%

①-2 効率化等による収支改善(評価書117-118頁)

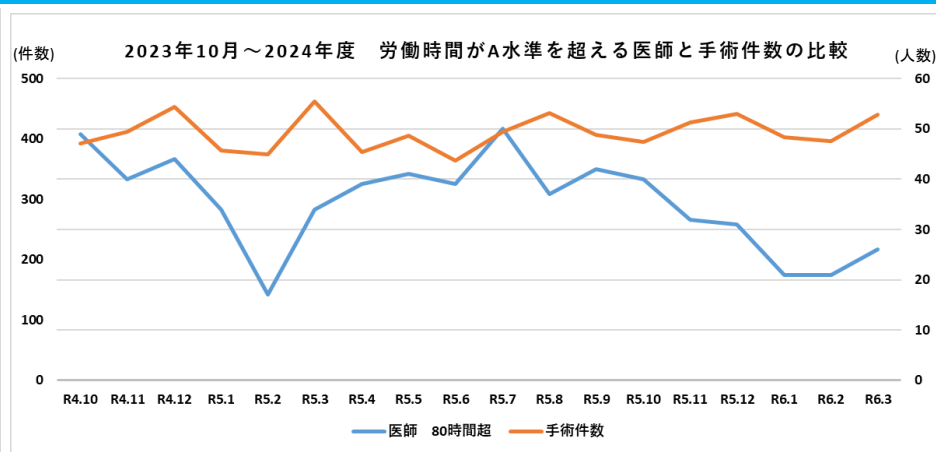
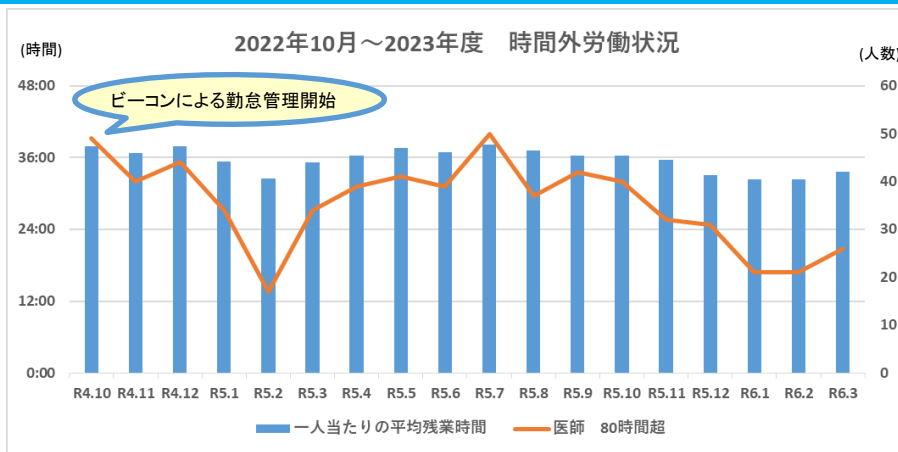
- (1) 医薬品について、小児疾患の治療に使用する医薬品の小児病院を含む全国33の小児医療施設へ価格照会、同種同効医薬品の整理、後発医薬品の採用を実施
- (2) 医療材料費について、令和5年7月からのSPD等業務委託契約で、入札時点の契約単価等を元に算出した基準価格に対して平均で約30%を削減できる契約内容により、**3年間で3千4百万円の費用削減が見込まれる内容**とした。
- (3) 棚卸資産(診療材料)の在庫縮減



② 働き方改革(評価書111-114頁)

- (1) 職員にとって魅力的で働きやすい職場環境の整備
 - 令和4年度に設置したダイバーシティ実現推進室及び研究室による「**ダイバーシティ推進会議**」を開催。**女性管理職割合の増加、ベビシッター補助事業、意識啓発のための講演会の実施**など多様性を活かした組織マネジメントに向けた取組を実施。
 - 「職員満足度調査」を実施。働き方、給料等の処遇や福利厚生等について自由意見も徴収。モチベーション及び職場環境の現状を把握。今後の整備に活用。
- (2) 医師の働き方改革の推進
 - **屋内位置情報システム(ビーコン)**による**医師の勤務実績**をもとに、令和6年度の上限規制に向けて特定労務管理対象機関水準指定の申請書・医師労働時間短縮計画を作成し、医療機関勤務環境評価センターの第三者評価を経て東京都申請を行い、令和6年3月6日付けで**B水準、C-2水準の指定通知を受理**。
 - 業務と自己研鑽との境目を整理するなど**時間外労働を正確にカウントしていくための判断基準をセンター内に共有**した。
 - 長時間労働となった医師が所属する診療科の長に対しては、タスクシフト等を一層推進し、過重労働による健康障害を防止するよう、適時、病院長名で注意喚起・産業医の面接を実施。
 - タスクシフト等の推進に資するよう、優秀な人材の確保・定着に向けて**医師事務作業補助者の常勤化を図った**。
(令和5年度より開始:0人→15人)

③医師の働き方改革の推進(評価書111-114頁)



センター内に共有した労働時間の判断基準

1. 労働時間に該当するもの

(1) 診療に関するもの

- ① 病棟回診、患者家族への説明
- ② 予定手術の延長
- ③ 緊急の患者診療、手術、術後の対応
- ④ オンコール対応(電話対応、出勤した時間)
- ⑤ チャーティング、書類の作成(診療記録、診断書、指示書、インシデントレポート、紹介状、サマリー等)
- ⑥ 事前に命令された始業前準備(白衣等への更衣、医療機器等の起動、外来の準備、オーダーチェック、その他診療上必要不可欠な情報収集等)

(2) 会議・打合せ等

- ① 必須参加の会議、委員会
- ② 必須参加のカンファレンス、研究会、勉強会、ミーティング、打合せ等

(3) 学会・研修・学習等

※ 出張命令、受講命令、決裁、口頭による命令など具体的に命令を行うこと

- ① 上長の命令に基づく学会発表(準備を含む)、学会参加、講演(準備を含む)、講演会参加、研究活動、論文執筆
- ② 上長の命令に基づく研修会、講習会の受講
- ③ 上長の命令に基づく症例見学、学習

(4) その他

- ① 業績評価の面談
- ② 当センター主催の行事の準備、片付け

2. 労働時間に該当しないもの

(1) 休憩等

- ① 休憩、食事、睡眠

(2) 会議・打合せ等

- ① 任意参加の会議、委員会
- ② 任意参加のカンファレンス、研究会、勉強会、ミーティング、打合せ等
※ 開催案内において、あらかじめ任意参加である旨を明示すること
(例)「当方より参加を依頼した方以外の方の参加は自由です。」等

(3) 学会・研修・学習等

- ① 上長の命令に基づかない学会発表(準備を含む)、学会参加、講演(準備を含む)、講演会参加、研究活動、論文執筆
- ② 上長の命令に基づかない研修会、講習会の受講
- ③ 上長の命令に基づかない症例見学、学習



80時間超の医師がいる診療科に向けたメール

〇〇診療科診療部長
CC：〇〇診療部統括部長

平素より勤怠管理業務にご理解、ご協力いただき誠にありがとうございます。

昨年10月よりピーコンを使用した勤怠管理システムを導入し、ご協力いただいているところですが、別添ファイルに記載されている者について、ピーコン導入以降、時間外労働の平均時間数が1月あたり80時間を超えております。
これは年960時間(A水準)を超えるペースです。

ご多用の状況かと承知しておりますが、改正医療法では勤務間のインターバル時間の確保など、過重労働による健康障害を防止することが求められております。
貴診療科内における勤務実態のご確認と必要に応じてタスクシフト、タスクシェア等について、より一層の推進をご検討くださいますようお願いいたします。

なお、ピーコン受信機の設置場所、設定等につきましては、適宜見直しを実施しております。
引き続きご協力の程、何卒よろしくお願いいたします。

病院長

評価項目 No. 3-1 財務内容の改善に関する事項

自己評価 A

(過去の主務大臣評価 R3年度:B R4年度:B)

I 中長期目標の内容

- ・センターの機能の維持、向上を図りつつ、投資を計画的に行い、固定負債(長期借入金の残高)を償還確実性が確保できる範囲とし、運営上、中・長期的に適正なものとなるよう努める。
- ・成育医療に関する医療政策を牽引していく拠点としての役割を果たすため、引き続き運営費交付金以外の外部資金の積極的な導入に努める。
- ・企業等との治験連携事務局の連携強化や、患者レジストリ(登録システム)の充実により、治験・臨床研究体制を強化し、国立研究開発法人日本医療研究開発機構等からの競争的資金や企業治験等の外部資金の獲得を更に進める。

II 指標の達成状況

- ・該当なし

III 評定の根拠

根拠	理由
収益の改善	当センターは、平成22年度の独立行政法人移行後、外部研究資金の獲得に積極的に取り組み、顕著な成果を上げている。令和5年度には、外部の競争的資金として2,066,211千円(前年度比+8,486千円)を獲得し、収益向上を達成した。さらに、受託研究および共同研究の推進を図るため、臨床研究相談窓口や小児治験ネットワーク等を活用し、当センターの取り組みを広く紹介した。また、受託研究規程の見直しや臨床研究支援に関する価格表の改訂を行い、新たな臨床研究支援に係る受託研究を受注することで、外部研究資金のさらなる獲得に成功した。これらの取り組みにより、当センターは着実に外部研究資金の獲得を増やし、研究活動の充実と発展に寄与している。
外部医療機関からの検体検査受託の推進	衛生検査センターにおいて、令和4年5月に新たに先天性疾患遺伝学的検査部門を立ち上げた。令和5年度は130の外部医療機関(令和4年度は19機関)と検査受託契約を締結し、令和5年度の受託収益は52,403千円(前年度1,746千円)となり、大幅に収益向上に貢献した。これらの推進はセンターの収益向上のみならず、我が国の医療・研究の向上にも寄与すると考えられる。
健全な財務内容	財務内容については、大型設備等の工事期間は令和4年度から令和8年度の5ヶ年計画として実施する予定であったが、COVID-19の影響で経営状況等に変化があったことから令和4年6月より外部有識者を含めた「老朽化対策WG」を設置し整備計画の見直しを行い、令和5年2月の企画戦略会議に『今後の老朽化対策について』を報告し、了承された。工事期間は令和6年度から令和15年度の10か年計画で実施する予定。また、医療機器の投資に当たっては、各診療科からの整備要望を基に、病院長によるヒアリングを実施し、収益性、必要性、緊急性、稼働状況、償還確実性等の採点基準を設けて優先度を確認のうえ、医療安全及び病院運営に支障が生じないことを前提とし、修理不能の更新機器を中心に選定を行っている。

①収益の改善(評価書126-127頁)

- (1) 積極的な申請の促進、臨床研究計画策定の支援体制の構築などにより、AMED等からの競争的研究資金の獲得を行った(令和5年度約20.7億円(前年度約20.6億円))。
- (2) 令和5年度は小児医療情報収集システムの製薬企業への試行的利活用を開始し、製薬企業2社に対して2件提供した。
- (3) 寄附受入について、遺贈における外部金融機関との協定を新たに3行と締結するとともに、企業に対する寄付活動などをさらに推進した。また、寄附金の使途をホームページ上に公開したことにより寄附者から反響があった。



②外部医療機関からの検体検査受託の推進(評価書128頁)

- (1) 従来、研究ベースで小児がん、小児難病、感染症等の検体検査を外部医療機関から受託していたが、小児がんや小児難病の検査に関しては、臨床検査技師法上の衛生検査所(衛生検査センター)を開設(平成31年3月登録)。
- (2) 令和5年度は、前年度に引き続いて130の外部医療機関(前年度19機関)との受託契約に加えて、かずさDNA研究所と連携協定を継続し、52,403千円の検査収入を得た。(前年度:1,746千円)

これらの推進は、当センターの収益向上のみならず、わが国の医療・研究の向上にも寄与すると期待される。

③健全な財務内容(評価書129頁)

- (1) 当センターの機能の維持・向上を図りつつ、投資を計画的に行い、中・長期的な長期借入金を償還確実性が確保できる範囲のもと、運営上適切に管理している。
- (2) 大型設備等の工事期間は「老朽化対策WG」により整備計画の見直しを行い、新たな計画により、適正に実施予定。
- (3) 医療機器の投資は、各診療科からの整備要望を基に、病院長によるヒアリングを実施し、収益性等の採点基準を設けて優先度を確認のうえ、医療安全及び病院運営に支障が生じないことを前提に、修理不能の更新機器を中心に選定。

評価項目 No. 4-1 その他の事項

自己評価 A

(過去の主務大臣評価 R3年度:B R4年度:B)

I 中長期目標の内容

- ・研究開発活動の信頼性の確保、科学技術の健全な発展等の観点から、引き続き研究不正など不適切事案に適切に対応するため、組織として研究不正等を事前に防止する取組を強化するとともに、管理責任を明確化するなど、コンプライアンス体制を強化すること等により、内部統制の一層の充実・強化を図る。
- ・監査室による内部監査を年4回実施する。
- ・医薬品や医療機器の実用化に向けた出口戦略機能の強化や、新たな視点や発想に基づく研究等の推進のため、独立行政法人医薬品医療機器総合機構や諸外国を含めた他の施設との人事交流をこれまで以上に推進する。
- ・NC間及びセンターと独立行政法人国立病院機構の間における看護師等の人事交流を引き続き進める。

II 指標の達成状況(※達成度については小数点第2位を四捨五入して計算)

目標(指標に関連する項目を箇条書きで簡潔に記載すること)	指標	令和5年度		令和4年度	令和3年度			
		実績値	達成度	達成度				
内部監査実施回数を年4回実施	内部監査実施回数(会計監査指導回数)年4回 (目標値:年度計画 年5回)	5回	100.0%	80.0%	120.0%			

Ⅲ 評価の根拠

根拠	理由
コンプライアンス室の活動	・中長期目標及び中長期計画に掲げる、コンプライアンス体制の構築・強化を確実に実行するため、職員一人一人の行動を通して、社会からの信頼と要請に応えるべく、内部統制としてのコンプライアンス体制の強化に重きを置いている。 ・労働環境の健全化は、働き方改革を推進するため、前提となるべき基本的要素であると考え、コンプライアンスの視点から、ハラスメントのない職場環境がその資質及び能力に応じてやりがいを持てる職場環境、一人一人が当センターの一員としての誇りと責任を持って、業務を行える職場環境づくりに引き続き努めている。 ・具体的には、現場スタッフへの定期的ヒアリング、スタッフからの相談に対するきめ細かな対応、研修等の啓発活動、スタッフが自ら問題解決するための情報提供等であるが、これらの地道な取組は、コンプライアンスに対する職員の意識として定着してきている。
広報の推進	ホームページ、SNSの迅速・適時の更新や研究成果をわかりやすく解説したプレスリリース作成、疾患の動画制作など、積極的に広報を行った結果、 ・メディア露出数は2,122件（前年度1,655件） ・X（旧ツイッター）のフォロワー数は約14,000人（前年度12,3256人） ・報道番組や医療系の制作番組に出演 など 成育医療研究センターの取組について、広く知ってもらうことができた。
「女性の健康」ナショナルセンター機能の構築	女性の活躍促進や子育て支援の観点から、「骨太の方針」や「こども未来戦略方針」などにおいて、センターに「女性の健康」に関するナショナルセンター機能を持たせ、女性の健康や疾患に特化した研究及び女性の健康に関わる最新のエビデンスの収集・情報提供を行う仕組みを構築することとされたことから、女性特有の疾患や性差医療に関する研究開発等を推進することを目的とし、女性が生涯にわたり健康で活躍できる社会を目指すために、センターで「女性の健康」に関する組織横断的なWGを立ち上げ、令和5年度については10回開催し、検討を行っている。

① ハラスメント対策・情報セキュリティ対策等の推進(評価書135頁)

- (1) 窓口整備を通じ相談対応・職場環境の改善
令和5年3月よりコンプライアンス室対応の変更があった。窓口対応方法は既存のままとしたが、他部門から強く要請のあった「**可能な範囲での情報共有**」を視野に入れて、職場環境の改善やコンプライアンスの徹底に務めている。相談者のプライバシーを保護しつつも、職場の同僚や上長から職場環境情報を得、職場の問題として取り組みが継続され環境変化できるよう経過を共有した。パワハラ等の具体的な相談を55件受け、うち、解決・終了48件、引き続き対応が7件。
- (2) ハラスメント防止と情報セキュリティ対策を目的とした、コンプライアンス研修において、直近半年間の相談事例と学習内容を発信・確認ミニテストを実施、研修開始から約1.5カ月で1,699人の受講・回答(職員数1710人/2023年9月)を確認。閲覧数は2,042回。
- (3) 各部所に掲示のみの相談窓口の案内を、毎月2回(第1・3月曜日)に一斉メールを配信。職員のご意見をタイムリーに案内に反映させる為、2回更新したが、相談者から閲覧の確認ができ、ツールの活用として拡大を計画している。

コンプライアンス通報・相談のご案内

- ▶ コンプライアンス室では、コンプライアンス室の担当者がみなさんからの相談を伺います。何らかのアドバイスで解決に向かう場合もあれば、相談内容から、コンプライアンスに違反する重篤な問題が含まれる場合もあります。
- ▶ 誰にも相談できずに問題を抱えている方、抱えている問題の対処に困っている方など、どんな小さな問題でも遠慮なくご相談下さい。一緒に解決方法を考えていきましょう。もしみなさんの抱えている問題が、センターの信頼に関わるような重大な問題であれば、センターが組織として直ちに対処する必要があります。そういう意味ではどんな相談でも、センターにとって大切な相談です。
- ▶ 通報・相談者のプライバシーの保護を最優先に対応いたします。相談者の望まない事実確認は原則行いません。ただし、公益性を有し、当センターに取って重要な事案の場合は事実確認を行うことがあります。
- ▶ みなさんが相談をしたことを理由に不利益な処遇を受けるなどの報復的な措置は行われません。安心してご相談してください。

② 広報の推進(評価書141頁)

ホームページ、SNSの迅速・適時の更新や研究成果をわかりやすく解説したプレスリリース作成、疾患の動画制作など、量・質ともに充実した。

- (1) 成育医療の推進に寄与する臨床および研究に関するプレスリリース(メディア向け)を46件(前年度45件)配信。メディア露出数は2,122件(前年度1,655件)。
- (2) 総合的なセンターのパンフレット令和4年版(日本語・英語併記)を作成。
- (3) 広報誌は年4回制作(各医療機関およそ3,200件)。
- (4) [ホームページ]「トップページ・ページビュー数」は640,617件(前年度743,546件)。
- (5) [ソーシャルメディア]フェイスブック、ツイッター、ラインで、当センターの取り組み、新着情報、一般の方への有益な情報(災害対策マニュアル、感染症予防策など)、寄付のお願いなどの情報提供。X(旧ツイッター)のフォロワー数:約14,000人(前年度12,326人)。

一般者向けの動画配信

新生児黄疸①



診断は、診察や黄疸計を使うことが一般的です

「女性の健康」ナショナルセンター機能の構築

令和5年度第一次補正予算額 5.4億円

※令和6年度当初予算額 22億

1 事業の目的

・女性は、ホルモンのバランスの変化等により、ライフステージ毎にその心身の状況が大きく変化し、様々な健康上の問題等が生じるため、女性の健康や疾患について、心身における性差も加味し、ライフステージ毎に多面的・包括的な分析を加え、病態の解明と予防及び治療に向けた研究を推進する。

2 事業の概要

・国立研究開発法人国立成育医療研究センターにおいて、「女性の健康」に関する司令塔機能を担い女性の体とこころのケアなどの支援等に関するモデル的な取組の均てん化を行う。

実施主体：国立研究開発法人国立成育医療研究センター

3 事業スキーム・実施主体等

「女性の健康」ナショナルセンター

創業に向けた
共同開発・
治験参加医療
機関の紹介等

製
薬
企
業

◆ 女性の健康に関するデータセンターの構築

- ・医療機関や研究機関などの協力を得て、女性のライフコース毎のデータの収集・解析を行い、女性の健康に関する新たな知見を発掘及び臨床試験を実施するための基礎情報を収集
- ・収集したデータの解析やAI予測を実施し、新たなエビデンスを創出
- ・収集したデータを全国の研究機関・企業が活用できるよう、データ管理、提供を行う窓口を設置

◆ 女性のライフコースを踏まえた基礎研究・臨床研究の積極的な推進

- ・女性の健康に関する調査・研究は多様なアプローチが必要のため、医学的視点だけではなく、社会学や経済学からの研究者を集め、包括的な取組を実施
- ・女性特有の疾患領域における治験等を推進するため、オープンイノベーションセンター等を整備
- ・女性特有の疾患領域の研究を実施する研究機関とネットワークを構築し、企業の治験に協力できる医療機関の紹介等の調整機能を整備

◆ 情報収集・発信、政策提言

- ・「女性の健康」に関するWEBサイトや相談窓口を設置
- ・最新の研究成果について、積極的に情報収集・発信、政策提言

◆ 女性の体とこころのケアなどの支援等

- ・プレコンセプションケアの均てん化に資するモデル事業、調査研究、情報発信等を実施（プレコンセプションケアセンターの新設）
- ・産後の女性の体とこころのケアや子育てを支援し、安心して子育てができる環境（産後ケアセンター）の整備
- ・「妊娠と薬情報センター」の機能を維持して発展させるために、人材、設備、DXの拡充

データの
提供・活用等

・協力
医療機関
学会等

国 民

相談・情報提供等

女性が人生の各段階で様々な健康課題を有していることを社会全体で共有し、女性が生涯にわたり健康で活躍できる社会を目指す

令和5年度財務状況

【貸借対照表: 令和6年3月31日】

(単位: 億円)

資産の部		負債の部	
資産	603.7	負債	206.0
流動資産	128.7	流動負債	72.1
固定資産	475.0	固定負債	133.9
		純資産の部	397.7
		純資産	397.7
資産合計	603.7	負債純資産合計	603.7

※計数は原則としてそれぞれ四捨五入しているの、端数において合計とは一致しないものがある。

【損益計算書: 令和5年度】

(単位: 億円)

勘定科目	金額	勘定科目	金額
経常費用	304.2	経常収益	301.7
業務費用	303.5	業務収益	250.5
給与費	149.0	運営費交付金収益	33.5
材料費	68.4	補助金等収益	6.4
委託費	33.8	その他	11.3
減価償却費	23.1		
その他	29.1		
財務費用	0.2		
その他経常費用	0.5		
臨時損失	1.4	臨時利益	0.3
当期純利益	△3.6		
経常収支率	99.2%	総収支率	98.8%

※計数は原則としてそれぞれ四捨五入しているの、端数において合計とは一致しないものがある。

【キャッシュ・フロー(CF)計算書: 令和5年度】

(単位: 億円)

区 分	金 額
I 業務活動によるCF	24.8
支出	△277.3
収入	302.2
II 投資活動によるCF	△12.6
支出	△16.6
収入	4.1
III 財務活動によるCF	△6.7
支出	△15.5
収入	8.8
IV 資金増加額	5.5
V 資金期首残高	63.0
VI 資金期末残高	68.6

※計数は原則としてそれぞれ四捨五入しているの、端数において合計とは一致しないものがある。

財務状況

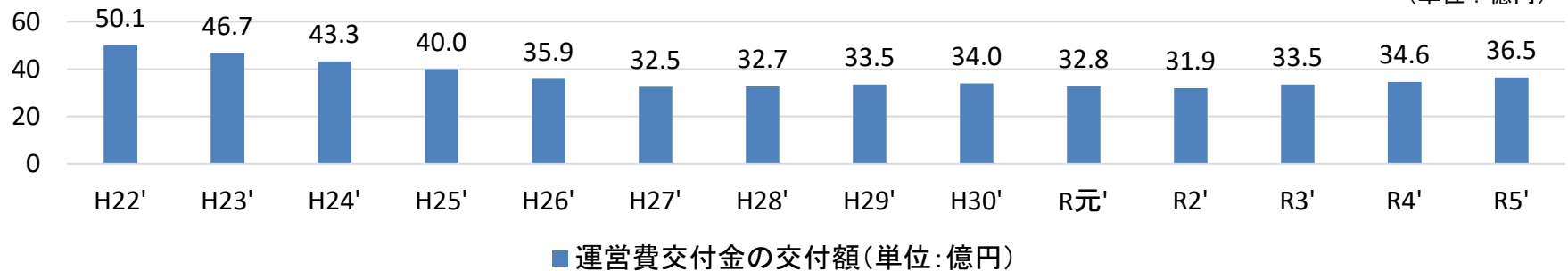
【損益計算書比較】

(単位：億円)

区分	H28' 決算額	H29' 決算額	H30' 決算額	R元' 決算額	R2' 決算額	R3' 決算額	R4' 決算額 (A)	R5' 決算額 (B)	差額 (B)-(A)
医業収益	192.9	194.3	199.3	206.2	192.1	213.5	224.9	227.5	2.6
医業費用	177.3	181.1	186.0	200.0	198.8	217.7	229.3	230.2	0.5
経常収益	260.9	262.7	268.5	272.0	282.3	290.7	306.2	301.7	△4.5
経常費用	249.6	250.7	259.4	268.5	271.7	288.2	305.9	304.1	△2.2
臨時利益	0	0.1	0.9	43.7	0.1	0	0.7	0.3	△0.4
臨時損失	0.1	1.0	1.3	44.3	0.4	0.4	1.5	1.4	△0.1
医業収支差	15.6	13.3	13.3	6.6	△6.7	△4.2	△4.4	△2.7	+2.2
経常収支差	11.4	12.0	9.1	3.5	10.6	2.5	0.2	△2.5	△2.3
総収支差	11.3	11.0	8.7	2.9	10.4	2.1	△0.5	△3.6	△2.7

【参考：運営費交付金の推移】

(単位：億円)



※計数は原則としてそれぞれ四捨五入しているため、端数において合計とは一致しないものがある。

3-9-4 財務經理部

貸借対照表 別添参照

財務諸表

1. 概要

令和5年度については、コロナ収束に伴う補助金収益等の大幅な減の影響が大きく、平成28年度から昨年度まで7期連続だった黒字が途絶え、令和5年度は2億5千万円の赤字となったが、医業収益は過去最大の収益であり、令和4年度と比較すると、2億6千6百万円のプラスであった。

2. 貸借対照表

令和6年3月31日現在

(単位:千円)

資産の部		負債の部	
I 流動資産		I 流動負債	
現金及び預金	6,855,286	運営費交付金債務	68,290
医業未収金	4,637,795	預り寄附金	752,486
貸倒引当金	▲4,539	一年以内返済長期借入金	1,407,130
未収金	1,126,326	買掛金	1,002,140
医薬品	146,924	未払金	2,391,836
診療材料	14,721	一年以内支払リース債務	115,648
給食用材料	2,641	未払費用	416
貯蔵品	31,011	未払消費税等	7,578
前払費用	4,154	前受金	142,776
その他流動資産	60,011	預り金	420,493
流動資産合計	12,874,330	引当金	
		賞与引当金	838,976
		その他流動負債	64,842
		流動負債合計	7,212,610
II 固定資産		II 固定負債	
1 有形固定資産		資産見返負債	
建物	26,749,837	資産見返運営費交付金	104,332
減価償却累計額	▲12,714,541	資産見返補助金等	297,009
構築物	310,460	資産見返寄附金	635,219
減価償却累計額	▲174,021	資産見返物品受贈額	12,081
医療用器械備品	9,784,624	長期借入金	6,570,831
減価償却累計額	▲6,931,647	リース債務	163,244
その他器械備品	6,132,001	引当金	
減価償却累計額	▲5,346,571	退職給付引当金	5,553,103
車両	55,832	資産除去債務	55,215
減価償却累計額	▲55,832	固定負債合計	13,391,035
土地	23,795,696	負債合計	20,603,645
その他有形固定資産	2,678		
減価償却累計額	▲1,903		
有形固定資産合計	41,606,614		
2 無形固定資産			
ソフトウェア	963,361		
電話加入権	160		
特許権	0		
商標権	763		
無形固定資産合計	964,284		

3 投資その他の資産		純資産の部	
破産更生債権等	26,095	I 資本金	
貸倒引当金	▲26,095	政府出資金	36,382,981
長期前払費用	1,126	資本金合計	36,382,981
退職給付引当金見返	4,924,106	II 資本剰余金	
投資その他の資産合計	4,925,232	資本剰余金	5,759,078
固定資産合計	47,496,130	その他行政コスト累計額	
資産合計	60,370,460	減価償却相当累計額 (▲)	▲4,855,454
		除売却差額相当累計額 (▲)	▲322,341
		資本剰余金合計	581,284
		III 利益剰余金	
		前中長期目標期間繰越積立金	3,006,748
		積立金	156,420
		当期末処分損失	▲360,618
		(うち当期総損失) (	▲360,618)
		利益剰余金合計	2,802,550
		純資産合計	39,766,815
		負債純資産合計	60,370,460

3. 損益計算書

令和5年4月1日から令和6年3月31日まで

(単位：千円)

経常費用		経常収益	
業務費		運営費交付金収益	3,354,352
給与費	14,180,211	補助金等収益	637,536
材料費	6,844,048	業務収益	
委託費	3,375,359	医業収益	22,753,664
設備関係費	3,307,586	研修収益	27,521
経費	1,800,707	研究収益	2,264,877
一般管理費		寄附金収益	113,477
給与費	723,231	資産見返負債戻入	
経費	112,183	資産見返運営費交付金戻入	35,204
減価償却費	2,179	資産見返補助金等戻入	71,352
財務費用	23,402	資産見返寄附金戻入	79,306
その他経常費用	49,674	資産見返物品受贈額戻入	3,637
経常費用合計	30,418,581	施設費収益	29,058
臨時損失		退職給付引当金見返に係る収益	408,767
固定資産除却損	11,711	その他経常収益	389,871
その他臨時損失	128,545	経常収益合計	30,168,622
		経常損失	▲249,959
当期純損失	▲360,618	臨時利益	
当期総損失	▲360,618	固定資産売却益	416
		貸倒引当金戻入益	1,743
		その他臨時利益	27,438

4. キャッシュ・フロー計算書

令和5年4月1日から令和6年3月31日まで

(単位：千円)

I 業務活動によるキャッシュ・フロー 人件費支出 ▲14,369,882 材料の購入による支出 ▲6,866,751 その他の業務支出 ▲6,396,692 過年度補助金返還による支出 ▲78,120 運営費交付金収入 3,646,793 補助金等収入 830,363 寄附金収入 146,116 医業収入 23,009,078 研修収入 28,218 研究収入 2,315,572 その他の収入 239,699 小計 2,504,393 利息の支払額 ▲23,345 業務活動によるキャッシュ・フロー 2,481,048	II 投資活動によるキャッシュ・フロー 有形固定資産の取得による支出 ▲1,660,746 有形固定資産の売却による収入 416 無形固定資産の取得による支出 ▲3,795 施設費による収入 408,100 投資活動によるキャッシュ・フロー ▲1,256,024 III 財務活動によるキャッシュ・フロー 長期借入れによる収入 877,960 長期借入金の返済による支出 ▲1,433,012 リース債務償還による支出 ▲117,428 財務活動によるキャッシュ・フロー ▲672,480 IV 資金増加額 552,544 V 資金期首残高 6,302,741 VI 資金期末残高 6,855,286
---	--

5. 損失の処理に関する書類

(単位：千円)

I 当期末処理損失 ▲360,618 当期総損失 ▲360,618 II 損失処理額 360,618 前中長期目標期間繰越積立金取崩額 204,198 積立金取崩額 156,420	
---	--

6. 行政コスト計算書

令和5年4月1日から令和6年3月31日まで

(単位：千円)

I 損益計算書上の費用 業務費 29,507,911 一般管理費 837,594 財務費用 23,402 その他経常費用 49,674 臨時損失 140,256 損益計算書上の費用合計 30,558,837	II その他行政コスト 減価償却相当額 379,698 除売却差額相当額 0 その他行政コスト合計 379,698 III 行政コスト 30,938,536
--	--

3-9-4-1 財務経理課

1. 概要

財務経理課は、会計に関すること、債権及び債務の管理並びに資産の運用に関すること、寄附金の執行管理に関することを所掌としており、主な業務は以下のとおり。

○財務管理係

- ・債権及び債務の管理並びに資産の運用に関すること
- ・財務会計システムに関すること

○経理係

- ・決算に関すること
- ・収入及び支出に関すること

○寄附係

- ・寄附金の執行及び管理に関すること
- ・寄附に関する報告書等の周知に関すること

○調達企画室

- ・物品及び役務の調達計画に関すること
- ・固定資産の管理に関すること（建物を除く）
- ・物品の購入及び検収に関すること
- ・物品の保管及び出納に関すること

以上の業務を行うにあたり、入金及び出金の管理、財務会計システムによる会計伝票の管理、決算の作成及び経営への活用、寄附金の執行管理等を行い、経営の判断に必要な会計情報の迅速化や見える化による経営方針の最適化に取り組んでいる。

また、病院運営に必要な物品の調達及び管理を行い、医薬品については診療報酬制度の改定に即した価格の適正化、医療機器については医療ニーズ等を適切に把握したうえで投資計画作成し、購入品目、購入時期及び購入価格の適正化に取り組んでいる。

3-9-4-2 医事管理課

1. 概要

医事室は、患者の入退院及び入院患者の厚生及び外来患者に関すること、診療情報管理室は診療録に管理及び調査並びに監査に関することを所掌として業務を行っていたが、診療報酬算定業務、診療記録管理業務等の質向上・迅速化において両室の連携をより図る必要を有していた。

そのため、診療報酬算定及び診療記録管理業務等の連携を一層深化させるため、令和5年10月に組織改定を行い、診療情報管理室を医事室に統合した。組織改定後の主な業務

は以下のとおり。

○医事管理課

- ・医事室の統括及び診療部門との調整に関すること
- ・診療報酬の算定に係る企画及び立案並びに調整に関すること
- ・病院における診療収入・診療費用の分析に関すること
- ・前三項に係る診療情報の分析に関すること
- ・臨床研究センターに係る庶務に関すること（事務室の所掌に属するものを除く。）

○医事室

- ・患者の入退院及び入院患者の厚生及び外来患者に関すること
- ・診療記録の保管に関すること
- ・医師事務作業補助者の管理に関すること
- ・診療録の管理及び調査並びに監査に関すること
- ・診療情報の管理及び分析（医事管理課の所掌に属するものを除く。）並びに監査（情報解析室の所掌に属するものを除く。）に関すること
- ・入院医療費の包括評価に関すること

以上の業務を行うにあたり、新たな施設基準の取得に向けたプランニングや将来にわたって求められる医療機能の変化を見据えた戦略的な診療報酬請求の方向性の整理等に取り組んでいる。

3-8-4-3 施設整備課

1. 概要

施設整備課は、施設の管理及び整備、施設整備に係る計画の策定、企画立案、基準の作成及び設計及び固定資産に関することを所掌しており、主な業務は以下のとおり。

- ・工事に係る監理・監督、図面管理、部分・中間・竣工等検査業務に関するこ。
- ・固定資産（土地・建物等）の管理等に係る業務に関すること（建物・附属設備のメンテナンス計画並びに各種設備等の更新及び改修計画等の作成）
- ・温室効果ガス削減対策、省エネ関連設備の適正運用と光熱水の節減及び経費節減に係る試算に関すること
- ・エネルギーセンターの運営に関すること

以上の業務を行うにあたり、施設整備課の役割として老朽化した設備の保守や計画的な更新、省エネに取り組んでいる。

2. 2023 年度の整備実績

2023 年度に完成した工事・設計は以下のとおり。

○病院棟

- ・空調設備整備その他工事（7期）
- ・リニア搬送設備整備工事
- ・自動制御機器整備工事
- ・中央監視 BAS 設備整備工事
- ・地下2階ピット雑用水槽増設工事
- ・入退監視カメラ増設工事
- ・高架水槽（TH-1-1・2飲料水系統）更新工事 他 208件

○研究所

- ・空調設備その他工事（6期）
- ・電気室配電盤部品整備工事
- ・自動制御盤内機器更新整備工事
- ・蓄電池設備整備工事

3. その他

（仮称）「女性の健康」ナショナルセンター整備 基本・実施設計業務の入札公告を行った。

3-9-5 図書館

1. 概要

- 1.1 場所・面積 研究所低層棟3階 427 m²
- 1.2 座席数 閲覧用31席、パソコン16台（事務用PCを含む）
- 1.3 職員 図書館長 野坂俊介（副院長、放射線診療部統括部長）
非常勤職員 司書2名
- 1.4 蔵書数 単行書 4,430 冊（和書3,266 冊、洋書1,164 冊）、
製本雑誌 19,686 冊
- 1.5 購読雑誌タイトル数
洋雑誌 60 誌（電子ジャーナル）
和雑誌 32 誌（冊子体）
- 1.6 データベース メディカルオンラインプラス， 医中誌 Web フリーアクセスプラン，
Clinical Key， Springer Hospitals & Health， Wiley ジャーナル

データベースモデル, JCO Digital Library, The Cochrane Library, ProQuest (Health & Medical Collection with MEDLINE), CHINAHL, PsycINFO, Embase, Up to Date, Web of Science

- 1.7 参加組織 日本医学図書館協会（正会員 B）
NACSIS-CAT/ILL 参加 <FA023189>

2. 利用者サービス

- 2.1 図書貸出件数 91 件

2.2 文献相互利用件数

依頼 [当館から他館への依頼]	1,379 件
受付 [他館から当館への受付]	325 件

2.3 図書館利用説明会

毎月 1 回（約 30 分）が定例であるが、本年度は新型コロナウイルス感染防止のため、説明会は中止、一斉メールでの利用案内および利用者の問い合わせごとに対応

3. 図書購入選定委員会

第 1 回 令和 5 年 4 月 10 日：(1) 異動後の新任の委員の紹介

(2) BMJ Case Reports の定期購読について

第 2 回 令和 5 年 8 月 21 日：(1) 令和 4（2022）年度業務報告について

(2) 2024 年図書館資料購入計画（2024 年 1 月～12 月）について

(3) 図書係の採用について

(4) その他

3-9-6 こどもシンクタンク

3-9-6-1 企画調整室

3-9-6-2 戦略支援室

1. ミッション・目標

成育こどもシンクタンクは、「すべてのこどもたちが、笑顔になれる社会を創ります」という理念を掲げ、令和 4 年 4 月に設置された。この理念を実現するために、「①こどもたちの声を大切にします」、「②からだ・こころ・社会の視点からこどもたちの元気を考え続けます」、「③確かな情報、考えを届け、社会実装にもこだわります」、「④こどもたちの成長を支えるすべての人たち『こども応援団』をつなぎ、育てます」の 4 つの使命を定めている。こ

の理念と使命には、単に子どもたちだけでなく、その周りにいる保護者や専門家など、こどもから見える社会・世界も笑顔にあふれている社会づくりに貢献したいという願いも込められている。

2. 研究体制

所長：梅澤明弘

企画調整室長：北澤潤

副企画調整室長：菊池耕徳、友利久哉、千先園子

企画調整室員：徳永克之、村上幸司、近藤留衣、宮下正和、有村悠子

戦略支援室長：梅澤明弘

副戦略支援室長：竹原健二、森崎菜穂

戦略支援室員/研究員：小林徹、余谷暢之、千先園子、須藤茉衣子、石塚一枝、加藤承彦、大久保祐輔、小林しのぶ、越智真奈美、星野絵里、牧庸彦

3. 活動の概要

「令和5-6年度2か年事業計画書」を策定した。その計画に基づき、「シンクタンク」の活動を軌道に乗せることを目指し、「1. シンクタンクの運営」、「2. こどもアドボカシー体制の基盤構築」、「3. データ利活用基盤の構築」、「4. 社会実装支援」、「5. 人材育成」の活動をおこなった。

4. シンクタンクの運営

関係機関との連携体制の構築として、こども家庭庁からの受託業務を得たり、検討会への委員としての参画、様々な課・室の担当官と連携がとれる体制を構築した。自治体の事業実施支援として、複数の自治体との連携・協働に着手した。シンクタンクの周知・広報として、計9回のシンクタンクセミナーを開催し、各回100人以上の参加が得られた。活動紹介の冊子（年報）を作成し、学会でのブース出展や関係者への配布などをおこなった。

5. こどもアドボカシー体制の基盤構築

こどもの意見を収集する調査基盤のパイロット運用として、こどものマスクに関する意識調査の結果を公開した。また、こどもの意見を代弁できるこどもや、専門家の養成に向けた教育プログラムやワークショップを企画し、今後、より拡大するために助成金への応募などを進めた。国内でこどもアドボカシーの活動が乱立していることを受け、コンソーシアムのような体制のあり方について関係者・機関との協議をおこなった。

6. データ利活用基盤の構築

当センターにおける政府統計の利活用およびデータアイドリングの一環として、厚生労働省人口動態調査と国民生活基礎調査の2つの基幹統計について、当センターの法人としてデータ提供を受けられる体制を構築した。それらの統計調査について、当センター職員を対象にした説明会を開催し、そこから、3件の具体的なデータ解析の伴走支援を開始した。こどもに関する様々な健康課題について、関連する指標をまとめて情報提供する試みとして、こどもに関する様々な指標をまとめたニュースレター「こどものイマを考える」の発刊・公開をおこなった。

7. 社会実装支援

全国自治体の母子保健担当課を対象に、行政計画（こども計画・成育医療等計画）の策定に関する実態調査をおこない、約 600 自治体からの回答を得た。こども家庭庁の目玉政策の一つになっている「こども誰でも通園制度」のモデル事業について、EBPM 推進室からの委託事業を獲得し、この事業のロジックモデルの構築・調査票の作成・中間評価の分析をおこなった。飛騨市が来年度から実施する学童期・思春期健診事業について、その評価計画の設計・実施に関する伴走支援を開始した。

8. 人材育成

JST より研究費を得て、こども政策の EBPM サイクルの阻害促進因子、介入策を把握するための文献レビューと、質的調査を実施し、その成果を日本公衆衛生学会で報告した。これらの調査を通じて、研究者と政策担当者の「橋渡し」が重要であることが示唆されたため、こども家庭庁や横浜市などと連携し、「橋渡し」を実現するための情報交換会の企画を検討した。

3-10 各種事業

3-10-1 子どもの心の診療ネットワーク事業 中央拠点病院

2023 年は以下の事業を行った。

1. 連絡会議の開催

子どもの心の診療ネットワーク事業 連絡会議を年度内 2 回開催し、下記内容を会議にて共有した。

回/日時	議題	参加団体数
第 24 回 2023/1/27(金) 13:30-16:30 【Web 会議】	1. 児童・思春期精神疾患の診療実態把握と連携推進のための研究について 2. 2021 年度標調査結果、未成年の自殺の統計、MAP 現状報告、事業概要集の進捗 3. コロナ禍の子どもの心の実態調査(プレスリリース) 4. 指標調査票改訂について 5. 新規参画自治体・拠点病院のご紹介(群馬県) 6. 学校保健に関するツールのご紹介「子どものストレスチェックについて」(千葉県)	・自治体:14 ・拠点病院/機関:20 ・オブザーバー参加の自治体・病院:8 ・厚生労働省 2 課 ・文部科学省 1 課 ・成育
第 25 回 2023/7/6(木) 13:30-16:30 【Web 会議】	1. コロナ禍の子どもの心の実態調査結果報告(2022 年度) 2. 未成年の自殺の統計、MAP 現状報告 3. 子どもの心の診療研修連絡会 4. 情報交換会 事業概要発表(18 自治体・拠点病院 発表)	・自治体:16 ・拠点病院/機関:23 ・オブザーバー参加の自治体・病院:12 ・こども家庭庁 1 課 ・厚生労働省 2 課 ・成育

コロナ禍における子どものメンタルヘルスへの影響を考え、学校との連携が必要不可欠であるため、学校保健に関するツールの紹介を行った。また、事業概要発表では各自治体の事業内容を発表いただき、共有した。事業関係者以外により分かりやすく説明できるよう項

目の改善等についても意見を伺った。

2. 子どもの心の診療ネットワーク事業主催 研修会開催

「それぞれのライフステージにおける家族支援」 会場 Web セミナー

2023 年 7 月 7 日(金) 10:00~16:05 定員: 170 名中オンラインアクセス延べ 130 名 (内当該事業関係者 52 名)。オンデマンド配信 (2023 年 8 月 1 日から 8 月 31 日、5 演題総再生回数 4,397 回)

演 題
I. こども家庭庁とこども政策 こども家庭庁 成育局 母子保健課 母子保健感染症対策専門官 土田 哲也
II. 思春期の家族支援 (うつ、自傷、摂食障害など) 地方独立行政法人東京都立病院機構 東京都立小児総合医療センター 児童・思春期精神科 医長 長沢 崇
III. 学齢期の家族支援 国立国際医療研究センター国府台病院 子どものこころ総合診療センター長・児童精神科診療科長 宇佐美 政英
IV. 育てにくさのあるこどもの家族支援 総合母子保健センター愛育クリニック 小児精神保健科 副部長 細金 奈奈
V. 当事者である家族に対する支援 昭和大学医学部精神医学講座 教授 岩波 明

3. コロナ禍の子どもの心の実態調査

2021 年度の連絡会議時に摂食障害の患者が増加しているとの意見があったことから実態を把握するため引き続き 2022 年度の摂食障害、強迫神経症、希死念慮、自殺企図の初診外来患者および新入院患者数、平均年齢、ベット充足率の調査を実施した。データを集計した結果、2020、2021 年度に増加していた摂食障害の神経性食欲不振 (神経性やせ症) の初診外来患者数が 2022 年度はやや減少したものの、コロナ前の約 1.4 倍で、新入院患者数は 2022 年度も高止まりであった。希死念慮は、初診外来患者数は毎年増加傾向にあり、2022 年度と 2019 年度に比較して約 1.6 倍であった。新入院患者数は 2021 年度に一旦減少に転じるも 2022 年度は再び増加し、2019 年度と比較すると約 1.9 倍になっていた。自殺企図も 2019 年度と 2022 年度を比較すると初診外来および新入院ともに約 1.7 倍となっていた。2023 年 11 月に摂食障害の続報および希死念慮・自殺企図に関しプレスリリースし、18 件の露出であった。

4. 指標調査

令和 4 年度 (2022 年度) 分の各拠点病院の基礎データおよび事業項目に関する調査を行い、連絡会議時に関係者に集計表、グラフ化したものを配布した。最終集計データをホームページに掲載している。

5. ホームページおよび子どもの心の診療機関マップの運用

11 自治体で運用中である。右記表参照。各自治体・拠点病院は更新データを毎年度 12 月末までに中央拠点病院に提出する。2023 年のアクセス数平均は 1 日約 134.6 アカウントとなっている。登録システムを改訂し、自治体・拠点病院より更新時の負担が減少したとの意見をいただいている。

年度	参加自治体	公開医療機関数
2019 年度	9	534
2020 年度	10	560
2021 年度	10	558
2022 年度	11	585
2023 年度	11	599

6. 交換研修

コロナ禍のため応募なく 2023 年は実施していない。

7. 事業実施主体

本事業に参画の自治体・拠点病院は下記の通りである。

21自治体（20都府県、1指定都市）/30拠点病院・機関		オブザーバー 参加自治体または参加病院・機関リスト	
自治体	行政担当課および拠点病院・機関	自治体	行政担当課および病院・機関
★ 岩手県	岩手医科大学附属病院/いわてこどもケアセンター	★ 神奈川県	神奈川県立こども医療センター (2011年度～2017年度末まで事業参画)
★ 群馬県	群馬大学医学部附属病院 小児科	★ 長崎県	長崎大学病院 地域連携児童思春期精神医学診療部 (2011年度～2015年度末まで事業参画)
★ 千葉県	国立国際医療研究センター国府台病院 児童精神科 千葉大学医学部附属病院 こどものこころ診療部	さいたま市	さいたま市こころの健康センター
★ 東京都	東京都立小児総合医療センター	☆ 和歌山県	和歌山県立こころの医療センター
★ 石川県	金沢大学附属病院 子どものこころの診療科・神経科精神科	★ 大阪府	大阪府立総合医療センター
	独立行政法人国立病院機構 医王病院	★ 大分県	社会福祉法人別府発達医療センター 大分療育センター (大分県2012年度～2020年度末まで事業参画)
	石川県立こころの病院		
	山梨県立こころの発達総合支援センター		
★ 山梨県	山梨県立北病院		
	山梨県立精神保健福祉センター		
	山梨県立あけぼの医療福祉センター		
	信州大学医学部附属病院 こどものこころ診療部		
★ 長野県	長野県立こども病院	★ 子どものこころ専門医研修施設	
★ 長野県	長野県立こころの医療センター-駒ヶ根	☆ 子どものこころ専門医研修施設 連携施設	
★ 静岡県	静岡県立こども病院		
☆ 三重県	三重県立子ども心身発達医療センター		
★ 大阪府	大阪府立病院機構 大阪精神医療センター		
★ 兵庫県	兵庫県立ひょうごこころの医療センター		
★ 鳥取県	鳥取大学医学部附属病院		
	子どもの心の診療拠点病院推進室		
★ 島根県	島根県立こころの医療センター		
★ 岡山県	地方独立行政法人岡山県精神科医療センター		
☆ 香川県	四国こどもととなの医療センター 児童心療内科		
★ 高知県	高知大学医学部附属病院 こどものこころ診療部		
★ 福岡県	九州大学病院 こどものこころの診療部		
★ 佐賀県	独立行政法人国立病院機構		
	肥前精神医療センター		
★ 熊本県	熊本県発達障がい医療センター (熊本大学病院 神経精神科)		
★ 沖縄県	琉球病院		
★ 札幌市	北海道大学医学研究院 (北海道大学病院)		
★ 中央拠点	国立成育医療研究センター		

3-10-2 小児がん拠点病院事業・小児がん中央機関事業

1. 概要

わが国のがん対策を総合的かつ計画的に推進することを目的として平成 18 年 6 月に成立した「がん対策基本法」に基づき、平成 24 年 6 月に閣議決定された「第 2 期がん対策推進基本計画」において、小児へのがん対策の充実が重点的に取り組むべき課題としてとりあげられた。これに基づき、厚生労働省は 2013 年 2 月に全国 15 の小児がん拠点病院を指定し、国立成育医療研究センターもそのひとつに選定された。さらに、2014 年 2 月には、国立がん研究センターとともに 15 の拠点病院を取りまとめる小児がん中央機関に指定され、相談支援の向上、情報収集・提供、臨床試験の支援、診断・治療などの診療支援、小児がん診療に携わる者の育成、登録体制の整備などの業務を行っている。

2. 小児がん拠点病院事業

(1) 小児がん医療従事者研修事業

地域の小児がんに関わる医療従事者を対象とした以下の研修等を計画・実施した。

- 小児がん看護セミナー(Web 開催：6/19～7/31、9/18～10/31、12/18～1/31)：1)小児がん看護に必要な基本的知識・技能を習得し、主体的に実践できる人材を育成することと、2)関東・甲信越ブロックにおける小児がん看護の連携を強化することを目的として研修を実施した。1,140名が受講した。
- 東京小児がん研究グループ(TCCSG) 秋季セミナー共催(東京慈恵会医科大学にて対面で実施：11/19)：小児がん診療に関わる医師が参加し、小児がん診療に関する講演や実習を通じて診療スキルの向上を目指した本セミナーを共催した。93名が参加した。
- 緩和ケアレクチャー(Web 開催)：第40回(5/12)、第41回(8/4)、第42回(11/10)、第43回(2024/3/8)。テーマは「小児がん患者におけるアドバンス・ケア・プランニングについて考える」、「思春期のこどもとの関わりについて考える」、「非がん疾患を抱えるこどもと家族に対する緩和ケア」、「こどもたちの暮らしと希望を支える」など小児緩和医療において必要となる知識や姿勢を身につけることを目的とした研修をオンラインにて実施した。計625名が参加した。このほか、「せいいくケアカフェ」として地域の様々な分野で重症児のケアに関わる職種(医療職、行政職など)を交えた交流会を開催し意見交換を行い、今後の子どものケアにおける情報共有の促進を図った(6/2、9/1、12/1開催)。計36名が参加した。

(2) 小児がん拠点病院ネットワーク事業

- 関東甲信越地域医療提供体制協議会：47の医療施設、10都県から構成されており、2023年度においても、協議会をオンライン開催した(7/19：110名参加)。また、関東甲信越地域医療提供体制協議会のホームページを国立成育医療研究センターのホームページ上に開設し、診療実績や基本情報を病院毎に掲載した。関東甲信越地域医療提供体制協議会運営の打ち合わせには、オンラインを利用したTV会議システムを活用し、定期的な会議により密な連携を図り、効率的な事業運営を行った。2023年度は7回実施し、臨床試験の進捗や協議会運営、小児がん診療に関する情報等を共有した。
- また、東京都小児・AYA世代がん診療連携協議会における各部会取組について積極的に参画した。
- 相談支援部会：7/7と12/15に相談支援部会を行った(57名/49名参加)。また相談支援部会が主催する相談支援研修を11/18に実施。「小児がんの終末期」をテーマとし、ブロック内の相談員とそれらと連携している在宅診療所等の相談員、合計54名が参加した。
- 患者・家族セミナー：ブロック内の小児がん拠点病院で企画し、年4回実施。当センターは3/16に小児がんにおける放射線治療、多職種支援についての講演会を実施(申込者：26名)。期間限定でオンデマンド配信も行なった。

(3) がん相談支援事業

入院及び外来の小児がん患者と家族からの相談に応じるとともに、院外の患者家族や医療従事者、患児関係者等からの相談に応じることができる体制を引き続き整備した。

また関東甲信越ブロックの小児がん拠点病院と連携をとり、小児がん患者家族が適切に相談を受けられる体制の充実を図るため、相談支援部会も活用しながら検討した。

2024年2/4には「小児がんWEB交流フェスタ2024」としてAFLACペアレンツハウス亀戸にて、小児がんや病気の子どもの支援団体紹介、小児がん経験者やそのご家族の交流会、ファシリテッドッグとの交流、レモネードスタンドなどを実施した。

また院内では「国立成育医療研究センター内小児がん患者家族の会 あすなろクラブ」にご協力いただき、10/28と3/16に患者サロンを実施した。

(4) プレイルーム運営等事業

小児がん患者・家族が療養生活を送る上で必要なプレイルーム環境及びベッドサイドでの遊びや保育活動等の充実を図った。小児がん患者の成長・発達に必要な環境を整備、チャイルドライフスペシャリストを配置し、玩具や図書などの備品をより一層充実させ、小児がん患者・家族が適切なケアが受けられるように院内の専門職種が連携を取ることでできる環境や体制を構築した。

また、当院の患者の滞在施設として公益財団法人ドナルド・マクドナルド・ハウス・チャリティーズ・ジャパンが運営している「ドナルド・マクドナルド・ハウスせたがや」と特定非営利法人ファミリーハウスが運営している「ひつじさんのおうち」があり、院内には患者のための院内学級（東京都立光明特別支援学校・そよ風分教室）や、きょうだいを預かるシッティングルームが存在する。それら施設との連携を図り、入院患者家族にとってより快適な生活が送れるよう環境を整えるよう努めた。

3. 小児がん中央機関事業

(1) 小児がん相談・支援事業

小児がん拠点病院や小児がん診療病院の相談員を対象に、以下のとおり研修を実施した。また、これらの研修の内容について検討を行う為、小児がん相談員研修検討委員会を開催した。

- 小児がん相談員専門研修(Eラーニング、Web開催：9/10、計49名)
- 小児がん拠点病院相談員継続研修(Web開催：10/27、19名)
- 小児がん相談員研修検討委員会(Web開催：8/30、2024/1/25、計22名)
- 小児がん拠点病院相談員ブロック企画研修(Web開催：2024/2/28、23名)

(2) 普及啓発・情報提供事業

- 小児がん医療相談ホットライン：疾患・治療の理解をサポートし、納得できる医療が受けられるよう支援を行った。
- その他：国立がん研究センターの「小児がん情報サービス」への情報の掲載を引き続き行った。このほか、全国の小児がん拠点病院及び小児がん診療施設の診療実績及び施設情報を収集するとともにHP上に掲載した。

(3) 小児がん医療の診断支援事業

質の高い小児がん医療の診断のため、小児がん拠点病院等から診断要請があった場合に、匿名化したうえで放射線診断、病理診断、分子生物学的診断、細胞免疫学的診断等の支援を継続した。WEBによる病理・画像診断のための臨床情報収集や専門医のネットワークを活用したコンサルテーションのシステムをさらに充実させた。稀少疾患や診断困難症例に対する特殊検査や、血液腫瘍の遺伝子診断体制をさらに充実させた。

小児がん拠点病院等の病理医と連携をとり、稀少疾患の病理組織診断の参考とするために作成した診断の手引書を普及させて、診断支援の一助とした。また画像診断撮影プロトコルを作成し標準化を目指した。画像診断に関する会議も行った。臨床研究の中央診断と連携し、細胞免疫学的診断の標準化と最新の WHO 分類に準拠した内容の一層の充実を図った。

- 血液腫瘍細胞免疫学的診断新規 914 人（うち、拠点病院・中央機関 223 人）
- 血液腫瘍細胞免疫学的診断再発 116 人（うち、拠点病院・中央機関 22 人）
- 血液腫瘍微小残存病変解析 1,021 人（うち、拠点病院・中央機関 411 人）
- 血液腫瘍遺伝子診断 730 人（うち、拠点病院・中央機関 165 人）
- 中央病理診断件数：1,209 件（FISH：331 件、RT-PCR：105 件）

(4) 小児がん登録事業

全国規模の小児固形腫瘍登録である日本小児血液・がん学会/日本小児外科学会登録、および小児固形腫瘍観察研究の共通オンライン登録システムのメンテナンスを行い、登録実務やデータベース管理を実施するとともに、2022 年度にシステム運用によって明らかになった問題点を解決した。このために、必要に応じてオンライン登録システムの改修を実施した。また国立がん研究センターと共同し、院内がん登録 2018-2019 年小児 AYA 集計報告書を公表し（小児がん 6,898 例、AYA 世代のがん 76,618 例 計 83,516 例）、各種メディア（新聞 33 社、通信社 1 社、WEB 2 社、他テレビ局）に取り上げられた。さらにこれまで紙ベースで運用していた臨床研究のデータ収集を、JCCG-ON REDCap を用いた EDC システムへの変更を進めるとともに、実名を含む個人情報管理ならびに REDCap の国際共同研究への利用拡大のための情報セキュリティ体制の強化を目的とした、インフラ関連業務の外注化に着手した。

(5) 小児がん医療従事者育成事業

2024/1/13 に「小児緩和ケアチーム研修（Web 開催）」として、特に緩和ケアチーム内における職種別の役割と疾患別の介入に焦点をあてて、小児緩和ケアチーム研修会を行った。59 名が受講した。

2024/2/17 に「小児がんリハビリテーション研修会」（TKP 品川カンファレンスセンターにて対面で開催）として、小児がんのリハビリテーションに携わる医師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士を対象に、効果的なリハビリテーションが実施できる体制整備のための研修会を実施した。53 名（小児がん拠点病院 26 名、小児がん連携病院 27 名）が参加した。

2024/3/9 に「小児/AYA 世代のがん長期フォローアップ研修（LCAS）」のアドバンス研修（Web 開催）を実施した。77 名が受講した。

(6) 連絡協議会等運営事業

- 小児がん拠点病院連絡協議会（Web 開催：6/28、2024/1/30）：小児がん拠点病院と小児がん中央機関からなる連絡協議会を設置しており、拠点病院と中央機関間の密接な連携を図るため意見交換等を行った。
- 相談支援部会（Web 開催：6/2、11/30）
- 看護部会（Web 開催：5/30、2024/1/23）
- 緩和ケア部会（Web 開催：7/14）
- アドバイザリー・ボード（ハイブリッド開催：2024/3/11）：患者・家族、教育関係者、有識者等が参画するアドバイザリー・ボードを開催し、小児がん中央機関機能強化事業等の課題を把握し、解決策の検討及び提案を行った。

3-10-3 小児と薬情報収集ネットワーク整備事業

1. 概要

小児用医薬品は、安全性・有効性の評価が難しいこと、開発（治験）の実施が難しいこと、採算性が乏しいことなどから、医療現場では小児用量が明確に設定されていない医薬品について成人の投与量を減らすなどして使用されています。成育医療研究センターでは、厚生労働省からの補助事業として「小児と薬情報収集ネットワーク整備事業」を平成24年度から進めています。この事業は、全国の小児医療機関等からなる小児医療機関ネットワークを活用して、小児医薬品の使用実態（用法・用量等）および有害事象等の情報を自動的に収集し、分析・評価する体制（小児医療情報収集システム）を整備することを目的としています。

このシステムで得られた情報を活用して、小児領域における医薬品の安全対策の向上や小児医薬品の開発促進を目指しています。

2. システム整備の必要性

これまで小児医薬品の使用実態や安全性等の情報を自動的に収集し解析可能とするインフラ（システム）は構築されていませんでした。小児医薬品の使用実態及び有害事象等の発現状況を明らかにするための一つの手段として、コントロールを含んだ多数の症例を網羅的に収集し解析できるシステムの構築が必要です。このシステムを整備することで、小児に対してもより安全に医薬品を使用できる環境を整え、小児用医薬品の安全対策のさらなる向上及び小児医薬品の開発促進を目標に取り組んでいきます。

3. 小児医療情報収集システム

全国の小児医療機関等からなるネットワークを活用して整備された小児医療情報収集システムは、全国の小児医療施設等と小児科クリニック等からのデータがセキュリティの担保されたネットワークを通じて情報収集用のデータベース（医療情報データベース）に収集されます。各施設の電子カルテシステムからは、医療情報として「検査」「病名」「処方」「注射」データを収集し、不足する患者情報は問診システムからの「問診」データによって補完しています。問診システムは、患者本人又は家族が入力することで、本人同意を得るツールとしても活用しています。2023年（度）は、2022年（度）のクラウド領域へ小児医療情報収集システムを再構築することを主とした環境再整備後、協力医療機関から患者データの送信を再開しました。2023年（度）末時点で小児医療施設等11施設、小児科クリニック等31施設が本事業の協力医療機関として参画しており、データ量は医療情報が約100万人分、問診情報が約10万人分蓄積されています。小児に対する医薬品の安全性を評価するために必要とされるデータの絶対数の確保に向けて、再整備された環境下で引き続きデータ収集を進めていきます。

なお、協力医療機関からの情報の収集と利活用にあたっては、「人を対象とする 生命科学・医学系研究に関する倫理指針」に基づき必要な手続きを踏まえて進められています。研究の目的を含む研究の実施についての情報を協力医療機関のホームページ又はポスター等の掲示により公開するとともに、研究対象者から医療情報データベースへの医療情報等の送信について拒否できる機会を保障しています。

4. 環境整備

本事業では、協力医療機関から収集したデータの検索に必要なデータマッピング作業を進めると同時に、医療情報データベースの機能拡充（検索・抽出・加工機能、集計・解析機能等）および改良、収集したデータの品質管理も進めていくことで、より効率的にデータを解析・評価できる環境を整備しています。

本事業の啓発活動の一環としてウェブサイトを開設し、各方面に対して本事業の趣旨説明および本事業への協力の呼びかけ、協力医療機関とのコミュニケーションツールとして活用しています。

収集したデータの整理、解析・評価を進めていくことで、小児用医薬品の安全対策の更なる向上を目指し、小児用医薬品の開発にも貢献していきます。

5. 小児を対象とした医薬品の使用環境改善事業

平成 29 年度より厚生労働省の委託事業として「小児を対象とした医薬品の使用環境改善事業」が開始され、本年度も引き続き実施しています。この事業は、小児に医薬品が使用された際のデータ（小児と薬情報収集ネットワーク整備事業で整備した小児医療情報収集システムで収集したデータ）から得られる情報に加え、これまでに得られている文献情報や規制当局の情報を収集・整理し、小児医療や小児医薬品の専門家や行政等の関係者が参加する検討会で小児医薬品の使用実態の評価を行い、その結果に基づき、製薬企業に対して添付文書改訂や小児用法・用量設定のための一変申請等を促すとともに、添付文書改訂等に至らないものについては、本事業のウェブサイトに掲載し、小児医薬品の使用環境改善ために必要な情報提供を行うことにより小児に対する医薬品の適正使用の推進を目指しています。

3-10-4 小児慢性特定疾病情報センター

1. 概要

「小児慢性特定疾病情報センター」は、厚生労働省からの小児慢性特定疾病に関連した受託事業のうちの一つである小児慢性特定疾病情報管理事業費により運営されている、小児慢性特定疾病に関わる情報を一元的に発信するポータルウェブサイトです（<https://www.shouman.jp/>）。国が定めた子どもの慢性疾病である小児慢性特定疾病について様々な情報の一元化を図り、子どもとその家族、関係する支援団体、医療機関や学会、教育機関や行政等の皆さまに、できるだけわかりやすく情報提供を行うことを目的としています。年間約 330 万件のアクセスがある施策運営に欠かせないウェブサイトとなっています。また一般国民むけに子どもの医療費助成について、イラストやマンガを用いて分かりやすく説明するウェブサイトも公開しています（<https://kodomo.kouhi.jp/>）。

2. 掲載内容

掲載されている主な内容は以下の通りです。

■ 概要

- ・制度の基本理念

- ・制度の沿革
- ・根拠法や関連告示、通知等
- 対象疾病
 - ・疾患群別対象疾病一覧
 - ・小児慢性特定疾病の全対象疾病リスト
 - ・疾病検索
 - ・医療意見書のダウンロード
 - ・新たに追加された疾病について
- 医療費助成
 - ・医療費助成の概要
 - ・自己負担上限額
 - ・重症患者認定基準
 - ・日常生活用具給付事業について
 - ・申請までの手続きの流れ
- 自立支援／相談窓口
 - ・小児慢性特定疾病児童等自立支援事業について
 - ・自治体窓口
 - ・患者団体による相談窓口
- 登録・研究
 - ・小児慢性特定疾病児童等データの登録状況と集計結果
 - ・研究班報告
 - ・登録データの二次利用について
- 制度運用
 - ・小児慢性特定疾病指定医／小児慢性特定疾病指定医療機関
 - ・よくある質問について

3-10-5 アレルギー中心拠点病院事業

1. 概要

アレルギー疾患対策基本法（以下、対策基本法）は、平成26年6月20日に成立し、平成27年12月25日に施行された第一章から第四章、第一条から第二十二条で構成される法律である。その目的は、「アレルギー疾患を有する者が多く、急激な症状悪化を繰り返すことや生活の質が著しく損なわれるなど、アレルギー疾患が国民生活に大きな影響を及ぼしている現状や、生活環境の多様化や複雑な要因により発症あるいは重症化していることを考慮し、対策の充実をさらに図るべくその基本理念を定め、国や地方公共団体、医療保険者、国民、医療関係者、学校等注の設置者や管理者の責務を明らかにし、あわせて対策を推進するための指針策定や、基本事項を定めることで、アレルギー疾患対策を総合的に推進すること」（第一条より、一部略）等とある。

平成29年3月21日には、アレルギー疾患対策の推進に関する基本的指針が厚生労働大臣告示として公布され、この基本指針において、国民が居住地に関係なく、等しくそのアレルギーの状態に応じて適切なアレルギー疾患医療を受けることができるよう、アレルギー疾患医療全体の質の向上が求められている。

この指針に基づき、国は、国立成育医療研究センターと国立病院機構相模原病院を「中心拠点病院」と位置づけ、最新の科学的知見に基づく適切な医療情報の提供やアレルギー疾患医療に関する研究、専門的な知識と技術を有する医療従事者の育成を推進することを求めている（基本指針 第3条（2）キ）。

国立成育医療研究センターアレルギーセンターは、アレルギー疾患における国の中心拠点病院として、専門診療や研究、教育研修、適切な情報の発信に加え、鑑別診断が困難な症例や標準的治療では病状が安定しない重症・難治性アレルギー疾患の患者さんに対し、関係する複数の診療科が連携することで総合的かつ包括的に診断、治療管理を行い専門医療を提供することを目的として2018年6月に設置された。現在、総合アレルギー科、皮膚アレルギー科、消化管アレルギー科、鼻アレルギー科に加え、4評価支援室（視機能評価支援室、免疫機能評価支援室、遺伝情報評価支援室、行動機能評価支援室）による各科横断的に統合された診療体制とし、臨床面における連携のみならず、難治重症例に対する免疫異常や遺伝的検査など詳細な評価を研究所で実施することにより、総合医療的かつ先進的なアレルギー診療を実現している。

2. 中心拠点病院の役割

国立成育医療研究センターアレルギーセンターは、国の政策に基づき、わが国におけるアレルギー疾患医療の全国的な拠点として、アレルギー疾患医療に関する診療、情報提供、人材育成、研究などに関する以下の役割について求められている。

(1) 診療

診断が困難な症例や、標準的治療では病態が安定化しない重症及び難治性アレルギー疾患の患者さんに対し、複数の診療科が連携し、診断、治療、管理を行うこと。

(2) 情報提供

国民や医療従事者、その他のアレルギー疾患に携わる関係者に対し、アレルギー疾患に関する科学的知見に基づく適切な情報を提供すること。

(3) 人材育成

都道府県拠点病院でアレルギー疾患医療に従事する、専門的な知識と技術を有する医療従事者の育成を実施すること。さらに、アレルギー疾患に携わる関係者向けの研修や講習会で活用できる共通教材等の作成や提供を行うこと。

(4) 研究

全国的な疫学研究、臨床研究等を長期的かつ戦略的に推進すること。

(5) その他

全国拠点病院連絡会議を通じて全国の都道府県拠点病院との情報共有、意見交換等を行い、アレルギー疾患医療の均てん化に向けた取組等につき協議を行うこと。

3. アレルギー疾患拠点病院事業

(1) アレルギー疾患医療診断等支援事業

中心拠点病院である当センターと都道府県拠点病院間における連携のうえアレルギー疾患患者にとってより良い医療を提供することを目的とし、診断困難症例に対するアレルギー疾患医療診断等支援を実施した。また、アレルギー疾患医療連携体制の更なる強化等のため、4診療科（総合アレルギー科、皮膚アレルギー科、

消化管アレルギー科、鼻アレルギー科）ならびに4評価支援室（視機能評価支援室、免疫機能評価支援室、遺伝情報評価支援室、行動機能評価支援室）を擁する当センターにおいては、診療連携による難治重症例に対する免疫異常や遺伝的検査など詳細な評価や、総合医療的かつ先進的なアレルギー診療を支援する体制を整えている。近年、次世代シーケンシング解析技術の進歩により、Inborn errors immunity の中に難治性重症皮膚炎に好酸球性消化管疾患、非典型的な合併所見（内分泌疾患、骨形成の異常）等を有する Primary Atopic Disorder といった疾患群が登場しており、遺伝カウンセリングを含めた包括的な診療体制の構築を進めており、広く難治性患者の相談や受け入れを行っている。

これまでに当アレルギーセンターにおいてB研修、C・D研修を履修した都道府県アレルギー疾患医療拠点病院の医師に対する相談事業をメールあるいは問い合わせフォーム形式で受け付け、指導医に確認のうえ数日以内に回答、必要に応じて特殊検査等の実施を行っている。本年度に過去3年間（2021～2023年度）の相談を集計したところ、計27件の診療に関する相談があり、食物アレルギーの管理、経口負荷試験の実施方法、消化管アレルギーの管理、好酸球性消化管疾患の診断・管理、薬剤負荷試験の方法、アトピー性皮膚炎の外用薬の使用法などについて幅広く実地臨床の困りごとを伺う機会があった。

また都道府県拠点病院のみならず当センター周辺地域の開業医を含めた医療機関に対しても、近年需要の増加する消化管アレルギーやナッツアレルギーの診断支援、重症アトピー性皮膚炎に対する分子標的薬導入等の支援に必要な体制を整備するため、東京都保健医療局の協力のもと連携医療機関の明確化などに取り組んだ。

引き続き、都道府県アレルギー疾患医療拠点病院からの相談支援、紹介受診にも対応し、中心拠点病院である当センターにおける精査加療入院の後に再び都道府県拠点病院と併診することで、さらなる診療連携の拡充を狙いたい。

(2) アレルギー疾患に係る医師に対する研修支援事業

本事業は、アレルギー疾患対策推進に関する基本指針に掲げられた各種個別目標を達成することを目的とし、都道府県アレルギー疾患医療拠点病院の医師に対し、A研修（短期間：1日～数日）、B研修（中期間：1～2週間程度）、C/D研修（長期間：数年）を実施するものである。その中心を成すB研修は、「小児アレルギー診療短期重点型教育研修」として実施し、その内容は食物経口負荷試験の実践に加えて気管支喘息およびアトピー性皮膚炎の標準治療の実習を充実させ、実際に参加者が都道府県アレルギー疾患医療拠点病院での診療に必要な水準を担保できるものとしている。具体的には、研修参加者ごとに総合アレルギー科医師1名がメンターとして担当し、1～2週間の研修プログラムにおいて食物アレルギーの診断法（複数患者への食物負荷試験実施を含む）、問診技術・血液検査・皮膚テストの実施と解釈、基本的な食物除去・除去解除の方針決定、不要な除去食への食事指導や段階的解除の説明や、アトピー性皮膚炎の診断、重症度に応じた適切な外用療法の選択やスキンケア指導、ステロイド忌避への対応などを習得し、アレルギー性鼻炎に対する舌下免疫療法、気管支喘息における呼吸機能検査

や吸入手技など一般的な患者指導に加え、入院中の重症患者に対する行動療法的アプローチを含めた介入法を見学することで、難治性アレルギー患者への包括的な対応を学習する。

<B 研修事業について>

B 研修の実施状況としては、コロナ禍においては感染対策を講じつつ令和 4 年度は通常通り募集開始し、青森、秋田、富山、長野、大阪、広島、大分、宮崎の各都道府県拠点病院を含む 14 名の医師が研修に参加され全員が全日程を修了された。令和 5 年度は、感染対策を講じつつ通常通り現地参加型実習を行った。コロナ禍前に満足度の高かった初診患者向けの教育プログラム見学もすべて対面形式で実施された。また、当センターでは令和 5 年度より新たに食物経口負荷試験専門ユニット（OFC ユニット）が開設され、同実習も OFC ユニットで行われた。B 研修の実施状況としては、昨年度より通常通り募集開始し 14 名の医師が研修に参加されたことを鑑み、新型コロナウイルス感染症の第 5 類移行を受けて参加者増を予想していたが、最終的には 6 名（東京都、埼玉県、熊本県、愛知県、大阪府）の小児科専門医かつアレルギー非専門医が参加された。研修参加者の背景としては、主に 30 代の若手小児科医が参加され、多くが大学病院や小児病院、あるいは県立病院など地域の中核病院に勤務されていた。地方からの参加もあり、地域診療の底上げが期待される。

研修結果の評価（図 3）では、拠点病院関連医師の参加が多くを占めるなか、本年度もある程度小児アレルギー診療の経験を持つ医師が多い印象であったものの、本年度は研修前において比較的低値である傾向が伺えた一方、知識や技能に関する 40 の評価項目の全てにおいて研修前の値と比較し研修後で改善が認められた。特に、近年患者数が激増している食物蛋白誘発胃腸症を含めた消化管アレルギーに関する研修項目については、前値の低さから適切な診療技術の普及啓発のニーズが高いことが推測される。今年度は昨年よりさらに研修後の改善が顕著にみられ、次年度以降も引き続き継続したい。

なお例年、前評価が最も低い（つまり知識技能の乏しい）項目である「ダブルブラインド法の実施」、「メタコリン負荷試験の実施」、「消化管アレルギーの診断・管理法」についても動画研修資料の補填効果が認められた。昨年度作成した、前評価が低い傾向にある「皮膚プリックテストの手技と結果解釈」に関する解説動画と、当センターの食物アレルギー診療における経口負荷試験や栄養指導で日常的に使用し、かつ問い合わせの多い「蒸しパンレシピ」に関する動画も学習の補助として活用している。あわせて重要度の高い研修項目の解説動画と、当科のジャーナルクラブを収録した動画をライブラリーとしてバックナンバーの QR コードをかざせば視聴可能な状態へと随時整えており、短期研修参加者が自由に閲覧出来ることで、研修後も継続的な学習効果を狙えるよう研修環境を整えている。



図. 研修結果の評価(知識・技能について)

<A 研修事業について>

令和5度は、昨年度に引き続きA研修として「成育アレルギー中心拠点病院オンラインセミナー」として、毎月オンラインセミナーを企画開催した。これは、成育医療研究センター免疫アレルギー研究部と、アレルギーセンターで隔月交互に担当し、基礎系と臨床系にそれぞれ焦点をあてて専門的な内容から基本的事項まで幅広い領域をWEB配信するWEBセミナーである。当センターのホームページから誰でも視聴予約が出来る。

6月には「第28回成育アレルギー臨床懇話会」等を開催し、順天堂大学医学部附属順天堂医院小児科 稲毛英介先生をお迎えし、「子どもの遺伝性血管性浮腫-最近の進歩-」と題して講演を頂き、262名の参加者をお招きし盛会に終了した。さらに今年度より、多職種によるチーム医療の発展を狙いメディカルスタッフ向けのオンラインセミナーを年1回開催する企画を立て、「成育アレルギーメディカルスタッフセミナー」として特別講演に別府大学食物栄養科学部教授の高松伸枝先生にご登壇頂き、「食物アレルギー診療における管理栄養士の関わりと食事指導のコツ」と題して御講演を頂いた。広く近隣看護協会や栄養士会等に呼びかけを行い420名の方に参加頂いた。

成育アレルギー中心拠点病院オンラインセミナーのアンケート結果(7月~12月)では、9割以上で「とても良かった・良かった」と回答し、参加者職業の内訳も1/3程度で医師以外(看護師、薬剤師、栄養士等)の聴講がみられ、多職種にわたり診療レベル底上げの研修効果が期待された。

加えて今年度も、基本指針改正にアレルギー疾患の情報について出生前からの普及啓発活動に取り組むことが明記されたことを受け、「生まれてくるお子さんの

ためのアレルギー予防オンライン教室」を開催している。アレルギーポータルにもリンクを載せて頂いており、多くの参加者や行政保健師などにご視聴頂いている。

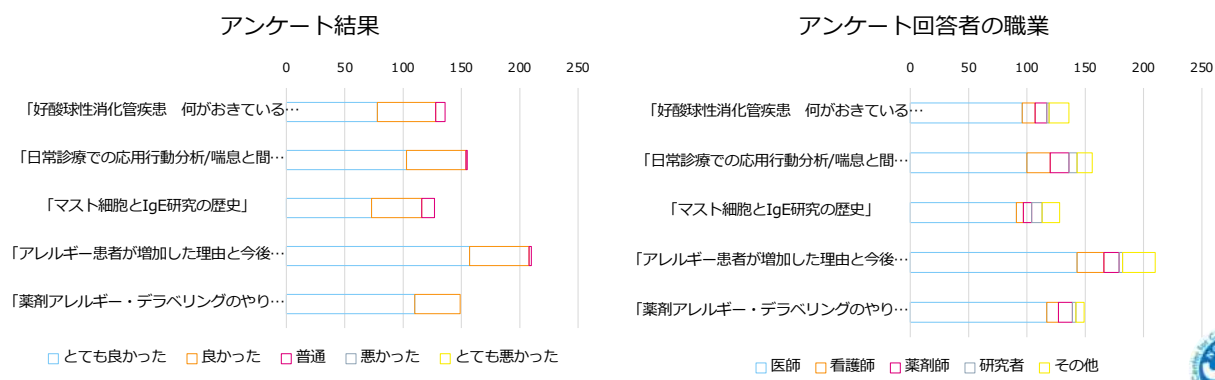


図. 成育アレルギー中心拠点病院オンラインセミナーアンケート結果

(3) アレルギー疾患患者や家族等に対する相談事業

本事業では、アレルギー疾患対策基本指針に掲げられる「アレルギー疾患に関する啓発及び知識の普及」を目的とし、一般国民等からのアレルギーに関する相談事業として、電話相談事業（「成育アレルギー電話相談室」）を開設し実施する。その内容としては、アレルギー診療を専門的に行う医師を中心とした医療スタッフにより、アレルギー疾患を有する患者やその家族の悩みや不安に対し、科学的知見に基づく適切な情報提供や、「アレルギー疾患の医療提供体制に関する在り方に関する検討会」に基づく各都道府県の医療提供体制を考慮した対応を、電話相談により実施する。なお電話相談事業に際しては、専門電話回線および子機を設置し、当センター「個人情報及び特定個人情報の保護に関する規定」に基づく記録・管理を実施している。

今年度の実績として約 180 件の相談の受け入れがあった。その背景として、相談者は関東地方を中心に、海外を含め 21 の都道府県からあり、相談者の 80%以上は母親、父からは 6%であった。

相談疾患としては、食物アレルギーおよび消化管アレルギーが占める傾向は例年通りであったが、特に FPIES（食物蛋白誘発胃腸症）に関する相談は依然として増加傾向であった（昨年 30 件程度）。ただしこの数年の急激な増加を鑑みればやや横ばいとの印象も受ける。

相談結果では過半数が電話相談の説明により納得されている様子が推察された。コロナ後においても十分な診療を受けられず悪化状態となる患者が一定数あると思われ、適切な受診行動を促すための橋渡しの役目としてアレルギー電話相談事業のニーズは益々高いと考えられる。また、発症が増加しつつある乳児期の FPIES に対しては、十分な説明が受けられず医院を転々とする例も見受けられ、引き続き事業を継続したい。

3-11 各種委員会

一覧参照

各 種 委 員 会 一 覧 表

令和5年1月1日現在

区 分	委 員 会 の 構 成 員		調 査 ・ 審 議 事 項	委 員 会 の 所 管 等	開 催	委 員 会 設 置 根 拠 ()は規程・細則の制定年及び規程・細則番号	
	委 員	委 員 長				根 拠 規 程	委 員 会 細 則
1 職 員 採 用 委 員 会	理事長、企画戦略局長、研究所長、病院長、 臨床研究センター長、外部委員(1名)	理事長	研究所研究部長、研究所室長、病院統括 部長、病院診療部長、臨床研究センター部 長、臨床研究センター室長の選考	人事課	必要に応じて	職員人事規程 (H22-14)	職員採用 委員会細則 (H22-1)
2 職 員 表 彰 審 査 委 員 会	役員	理事長	表彰(永年勤続表彰を除く。)を受ける職員 等	人事課	必要に応じて	職員表彰規程 (H22-16)	根拠規程 に規定
3 懲 戒 審 査 委 員 会	理事会構成員のうち理事長が指名した者、企 画戦略局長、人事部長、病院長、看護部長、 研究所長、臨時委員として法律家等の専門家 の指名が可能	理事会構成員のうち 理事長が指名した者	職員に対する懲戒処分	人事課	必要に応じて	職員懲戒規程 (H22-17)	根拠規程 に規定
4 安 全 衛 生 委 員 会	総括安全衛生管理者、安全管理者、衛生管 理者、産業医(1名)、安全に関する経験を有 する職員(2名)、衛生に関する経験を有する 職員(3名)	総括安全衛生管理者	職員の危険及び健康障害を防止するた めの基本となるべき対策、職員の健康の保持 増進を図るための基本となるべき対策、業 務上の災害の原因及び再発防止対策で安 全及び衛生に関すること等	労務管理室	原則月1回	安全衛生管理規程 (H22-21)	安全衛生 委員会細則 (H22-2)
5 外 部 資 金 受 入 審 査 会	副所長、副院長、臨床研究センター長、看護 部長、総務部長、財務経理部長、財務経理課 長	副所長	1,000万円を超える寄附の受入	財務経理課	必要に応じて	寄附取扱規程 (H22-32)	外部審査 受入審査会 細則 (H22-3)
6 職 務 発 明 等 審 査 委 員 会	研究所長、副所長(1名)、副院長(1名)、開発 推進部長、臨床試験推進室長、知財・産学連 携室長、研究医療課長の職にある者、その他 理事長が必要と認める者	研究所長	職務発明に関する重要事項、成育創出 データの移転に関する規程に定める事項	研究医療課	必要に応じて	職務発明等規程 (H22-42)	根拠規程 に規定
7 倫 理 審 査 委 員 会	副院長、倫理予備審査委員会の委員、倫理 学・法学の専門家等、人文・社会科学の有 識者、研究対象者の観点も含めて一般の立場 から意見を述べることのできる者、その他理事 長が必要と認める者	委員の中から 理事長が指名する者	職員が行う人を対象とした医療行為及び生 命科学・医学系研究、並びに外部研究者が 行う医学系研究を対象とした倫理的及び科 学的な観点からの調査審議	臨床研究管 理室	必要に応じて	人を対象とした 医学系研究倫理規程 (H22-43)	倫理審査 委員会細則 (H22-5)
8 共 同 研 究 審 査 委 員 会	研究所長、副所長(1名)、副院長(1名)、臨床 研究センター長、知財・産学連携室長、研究 医療課長の職にある者、その他理事長が認め る者	研究所長	研究の目的、内容及び実施理由の妥当 性、研究成果の公表方法、研究実施体制 及び共同研究機関から研究員の派遣を受 ける場合の妥当性、当センター施設及び設 備の使用法等	研究医療課	必要に応じて	共同研究取扱規程 (H22-45) 共同研究取扱細則 (H22-13)	根拠細則 に規定

各 種 委 員 会 一 覧 表

令和5年1月1日現在

区 分	委 員 会 の 構 成 員		調 査 ・ 審 議 事 項	委 員 会 の 所 管 等	開 催	委 員 会 設 置 根 拠 ()は規程・細則の制定年及び規程・細則番号	
	委 員	委 員 長				根 拠 規 程	委 員 会 細 則
9 競 争 的 資 金 等 調 査 委 員 会	機関及び告発者、被告発者と直接の利害関係を有しない者(弁護士、公認会計士等)		内部監査又は告発等により、競争的資金等の不正使用が疑われる案件が発覚した場合の調査	研究医療課	必要に応じて	研究活動及び研究資金取扱規程(H22-47)	研究活動及び研究資金取扱細則(H22-11)
10 研 究 部 門 評 価 委 員 会	研究部門等の行う業務又は活動に高い見識を有する者のうちから理事長が委嘱する者、役員又は職員のうちから理事長が指名する者	理事長が指名する者	研究部門等が行う業務又は活動に関して、研究の実施体制、研究の進捗状況、研究成果等の評価	研究医療課	必要に応じて	研究部門評価規程(H22-48)	根拠規程に規定
11 利 益 相 反 マ ネ ジ ャ メ ン ト 委 員 会	副所長、副院長(特命副院長1名)、企画戦略局長、コンプライアンス室長、センターに所属しない外部有識者(2名)	理事長が指名する者	利益相反による弊害の防止、利益相反に係る調査及び審査、利益相反ポリシー、利益相反マネジメントガイドラインの制定及び改廃等	研究医療課	原則月1回	利益相反マネジメント規程(H22-49)	根拠規程に規定
12 研 究 所 遺 伝 子 組 換 え 実 験 安 全 管 理 委 員 会	安全管理主任者、所長が指名する研究部長及び研究室長(若干名)、その他所長が必要と認める者	安全管理主任者	実験計画の省令及び本規程に対する適合性、実験に係る教育・訓練、実験に係る健康管理、事故発生の際の必要な措置及び改善策、実験に係る規程等の制定、改正及び廃止等	研究所事務係長	必要に応じて	研究所遺伝子組換え実験安全管理規程(H22-69)	根拠規程に規定
13 実 験 動 物 委 員 会	動物実験等に関して優れた識見を有する者(1名以上)、その他学識経験を有する者(1名以上)	委員の互選	動物実験計画が指針等及び本規程に適合していることの審議、動物実験計画の実施状況及び結果、施設等及び実験動物の飼養保管状況、動物実験及び実験動物の適正な取扱い並びに関係法令等に関する教育訓練の内容又は体制、自己点検・評価等	実験動物管理室	必要に応じて	動物実験規程(H22-70)	根拠規程に規定
14 微 生 物 安 全 管 理 委 員 会	所長が指名する研究所部室長(若干名)	委員の中から所長が指名	安全管理に関する理論的、技術的事項、微生物のレベルの分類及び安全設備の審議	研究所事務係長	必要に応じて	研究所微生物安全管理規程(H22-74)	根拠規程に規定
15 治 験 審 査 委 員 会	専門委員(病院部長、病院統括部長、病院センター長、副院長(2名以上)、研究所部長室長(1名)、副看護部長(1名)、病院診療部長、その他専門的知識を有する職員(1名以上))、非専門委員(事務系職員(2名以上))、外部委員(センター及び治験の実施に係るその他の施設と利害関係を有しない外部委員(2名以上))	専門委員の中から理事長が指名した者	治験を実施することの倫理的、科学的及び医学的・薬学的観点からの妥当性に関する事項、治験実施中又は終了時に行う調査・審査事項等	委員会事務局(臨床研究センター研究推進部門臨床研究コーディネートユニット)	原則月1回	治験等取扱規程(H30-15)	治験審査委員会細則(H22-6)

各 種 委 員 会 一 覧 表

令和5年1月1日現在

区 分	委 員 会 の 構 成 員		調 査 ・ 審 議 事 項	委 員 会 の 所 管 等	開 催	委 員 会 設 置 根 拠 ()は規程・細則の制定年及び規程・細則番号	
	委 員	委 員 長				根 拠 規 程	委 員 会 細 則
16 成 育 医 療 研 究 開 発 費 運 営 委 員 会	執行役員、理事長が指名するセンターの職員、理事長が委嘱する外部有識者	理事長	成育医療研究開発費で行う研究の運営計画の作成、採択研究課題(案)の作成・承認	研究医療課	必要に応じて	成育医療研究開発費取扱規程(H22-66)	成育医療研究開発費運営委員会細則(H22-7)
17 放 射 線 安 全 管 理 委 員 会	副院長、放射線診療部長、放射線施設責任者(診療放射線技師長)、放射線取扱主任者、安全管理責任者(副診療放射線技師長)、施設管理責任者(財務経理課長)、健康管理医、管理区域担当者、医長(1名)、看護部長、副所長、研究所事務係長、人事課長、医事室長、労務管理室職員係長	副院長	管理区域立ち入りに関する注意事項等、放射線障害の発生を防止するために必要とする規程の作成及び改廃、予防規程及び予防規程運用細則の改正、放射線発生装置、密封放射線同位元素、診療用エックス線装置及び放射性医薬品等	放射線診療部	必要に応じて	放射線障害予防規程(H22-67)	放射線安全管理委員会細則(H22-8)
18 棚 卸 実 施 委 員 会	財務経理部長、総務課長、企画経営課長、研究医療課長、財務経理課長、調達企画室長、副院長、薬剤部長、看護部長、栄養管理室長、臨床工学技士長、理学療法士長、診療放射線技師長、臨床検査技師長、副所長、(臨床研究部門)センター長	財務経理部長	棚卸実施に係わる準備、棚卸実施に係わる進捗状況の監督及び報告、棚卸実施に係わる問題点の解決、棚卸実施に係わる実施結果の聴取、棚卸実施の集計、その他棚卸に関する事項を所掌、棚卸資産の確定	企画調達室	必要に応じて	会計規程(H22-57)	棚卸実施委員会細則(H22-9)
19 契 約 審 査 委 員 会	副院長(経営・財務)、研究所長、研究所副所長、臨床研究センター長、放射線診療部統括部長、臨床検査部統括部長、薬剤部長、看護部長、理事長特任補佐、総務部長、企画経営課長、外部委員(公認会計士)	副院長(経営・財務)	契約の方法及び当該方法を採用する理由並びに経営の効率が見込まれる内容及びその見込額、一括購入によるコスト削減の可否、調達数量等の妥当性、競争性の阻害要因の有無、より競争性の高い契約形態への移行の可否、競争性を向上させるための措置の有無、契約の性質又は当該目的から総合的に判断する企画、技術提案等の内容、競争参加資格、取引停止等の競争参加者の制限、低価格入札等における供給者の履行能力	企画経営課	原則月1回	契約事務取扱細則(H22-6)	契約審査実施要領(H22-6)

各 種 委 員 会 一 覧 表

令和5年1月1日現在

区 分	委 員 会 の 構 成 員		調 査 ・ 審 議 事 項	委 員 会 の 所 管 等	開 催	委 員 会 設 置 根 拠 ()は規程・細則の制定年及び規程・細則番号	
	委 員	委 員 長				根 拠 規 程	委 員 会 細 則
20 外 来 診 療 管 理 委 員 会	感覚器・形態外科部長、医事室長、財務管理係長、総合診療部、器官病態系内科部、生体防御系内科部、臓器・運動器病態外科部、感覚器・形態外科部、周産期センターの各組織の長が自組織下から推挙した医長(1名)、薬剤部長、副看護部長(1名)、看護部長が推挙した看護師長(外来看護師長を含む)(2名)	感覚器・形態外科部長	救急外来、病診連携、新設外来、外来診療室の運用、外来診療棟の有効利用、外来診療棟で使用するパンフレット、掲示物等	医事室	原則月1回	組織規程 (H22-50)	外来診療委員会細則 (H22-11)
21 薬 剤 委 員 会	副院長、薬剤部長、病院の部長・医長(6名)、看護部長、副薬剤部長、医療安全担当薬剤師、診療放射線技師長、臨床検査技師長、開発企画主幹、総務課長、財務経理課長、医事室長	副院長	医薬品の有効性及び安全性の検討、医薬品採用(使用)・再生医療等製品・院内製剤採用の採否、医薬品情報、医薬品の適正使用、薬物治療、同種同効薬の整理、在庫医薬品の活用及び死蔵在庫の防止、院内医薬品集、医薬品等の購入費の効率的使用、病棟等配備薬品及び救急薬品、毒劇物薬等の保管管理体制等	薬剤部	原則月1回	組織規程 (H22-50)	薬剤委員会 細則 (H22-12)
22 院 内 感 染 防 止 対 策 委 員 会	病院長、副院長、感染防御対策室長、内科系診療部長、診療統括部長・診療部長(3名(集中治療部、外科、周産期・母性医療センター))、薬剤部長、看護部長、診療放射線技師長、臨床検査技師長、栄養管理室長、理学療法士長、看護師長(1名)、感染管理認定看護師、企画戦略局長、医事室長、総務係長	副院長	感染症の調査、予防対策、予防対策実施の監視と助言、指導、勧告に関すること、職員の感染教育指導に関すること等	感染防御対策室	原則月1回	組織規程 (H22-50)	院内感染 防止対策 委員会細則 (H22-13) 2回変更
23 手 術 室 運 営 委 員 会	手術・集中治療部統括部長、小児外科系専門診療部統括部長、麻酔科診療部長、手術室診療部長、外科診療部長、脳神経外科診療部長、心臓血管外科診療部長、整形外科診療部長、形成外科診療部長、泌尿器科診療部長、皮膚科診療部長、眼科診療部長、耳鼻咽喉科診療部長、歯科診療部長、産科診療部長、消化器科診療部長、腎臓・リウマチ・膠原病科診療部長、移植外科診療部長、循環器科診療部長、放射線診断科診療部長、臨床工学室長、副看護部長、手術室看護師長、ICU看護師長、6階東看護師長、7階東看護師長、9階東看護師長、医事室長、医事専門職、医事係長	手術・集中治療部統括部長	手術枠の運用、手術室の使用医薬品・医療機器、手術の体制等	医事室	月1回 その他必要に応じて	組織規程 (H22-50)	手術室運営 委員会細則 (H22-14)

各 種 委 員 会 一 覧 表

令和5年1月1日現在

区 分	委 員 会 の 構 成 員		調 査 ・ 審 議 事 項	委 員 会 の 所 管 等	開 催	委 員 会 設 置 根 拠 ()は規程・細則の制定年及び規程・細則番号	
	委 員	委 員 長				根 拠 規 程	委員会細則
24 教 育 ・ 研 修 委 員 会 専 門 研 修 プ ロ グ ラ ム 管 理 委 員 会	副院長(教育・研究担当)、教育研修センター長、統括部長又は診療部長(若干名)、薬剤部長又は副部長、副看護部長(1名)、教育研修室長、看護師長(教育・研修担当)、情報管理部長、臨床検査技師長、研究所部長(1名)、人事課長、財務経理課長、研究医療課長、外部委員(若干名)	教育研修センター長	センターの職員及びそれ以外の医療・福祉関係者、学生等を対象とした成育医療に関する教育及び研修に係る計画の企画立案及び運営等	教育研修センター	年2回以上	組織規程 (H22-50)	教育・研修委員会・専門プログラム委員会細則 (H22-15)
25 栄 養 管 理 委 員 会	主任副周産期・母性診療センター長(事務職員)医事専門職(病院)栄養管理部長、消化器科診療部長、アレルギーセンター長、外科診療部長、副周産期・母性診療センター長、総合診療科診療部長、母性内科診療部長、看護師長(2名)、栄養管理室長、副栄養管理室長、主任栄養士、調理師長	主任副周産期・母性診療センター長	患者食糧費、栄養食事指導、栄養サポートチーム、行事食等食事サービス、患者食事満足度等	副栄養管理室長	定例会を年4回 (6、9、12、3月) その他必要に応じて	組織規程 (H22-50)	栄養管理委員会細則 (H22-16)
26 子 ども の 生 活 安 全 対 策 委 員 会	子どもの生活安全対策室室長(病院長)、子どもの生活安全対策室副室長(こころの診療部統括部長、総合診療部統括部長、救急診療科診療部長)、臓器・運動器病態外科部統括部長、放射線診療部統括部長、医療連携・患者支援センター長、看護部長、医事室長、医療社会事業専門員(4名)	子どもの生活安全対策室室長(病院長)	虐待・事故の予防・防止・対応の検討、虐待・事故のケースの分析及び院内対応システムの周知、調査、見直、虐待・事故防止対応を行う職員に対する指示、虐待・事故防止対応の啓発、教育、広報及び出版、虐待・事故防止対応に関する苦情やマスコミへの対応	医療社会事業専門員	概ね年1回 その他必要に応じて	組織規程 (H22-50)	子どもの生活安全対策委員会細則 (H22-18)
27 高 度 先 進 医 療 専 門 委 員 会	病理診断部長、財務経理部長、委員長が指名する診療部長、財務経理課長、医事室長、研究医療課長	病理診断部長	高度先進医療を申請するに当たって事前の審査、高度先進医療の実施についての指導、監督、高度先進医療にかかる診療報酬明細書の検討、評価、高度先進医療の評価等	医事室	定期的に年2回	組織規程 (H22-50)	高度先進医療専門委員会細則 (H22-19)
28 輸 血 ・ 細 胞 療 法 委 員 会	臨床検査部統括部長、医療安全管理室長、輸血管理室長、小児がんセンター長、外科診療部長、集中治療科診療部長、感染症科診療部長、産科診療部長、新生児科診療部長、麻酔科診療部長、主任薬剤師、看護師長、医事係長、契約係長、臨床検査技師長、副臨床検査技師長、輸血検査主任	臨床検査部統括部長	輸血製剤、血漿分画製剤及び細胞製剤の管理と運用、血液関連検査の精度管理、適正な輸血の施行のモニタリング、輸血製剤による感染予防のための選及調査の協力、院内採血による自己血輸血、顆粒球輸血、自己幹細胞移植、血縁者間移植及び非血縁者間移植に関する医療行為の運用と安全性の管理等	輸血検査主任技師	毎月1回 その他必要に応じて	組織規程 (H22-50)	輸血・細胞療法委員会細則 (H22-20)
29 医 療 ガ ス 管 理 委 員 会	副院長、手術・集中治療部長、看護部長、臨床検査部長、薬剤部長、麻酔科医長、手術室看護師長、NICU看護師長、臨床工学技士長、財務経理部長、財務経理課長、施設整備課長、調達企画専門職、営繕専門職、エネルギーセンター責任者	手術・集中治療部長	医療ガス設備の保守点検業務、当該業務の指導、監督、日常点検及び定期点検についての記録の保存、医療ガス設備の工事の際の周知徹底、医療ガスの安全管理に関する研修の実施等	施設整備係長	年1回 その他必要に応じて	組織規程 (H22-50)	医療ガス管理委員会細則 (H22-21)

各 種 委 員 会 一 覧 表

令和5年1月1日現在

区 分	委 員 会 の 構 成 員		調 査 ・ 審 議 事 項	委 員 会 の 所 管 等	開 催	委 員 会 設 置 根 拠 ()は規程・細則の制定年及び規程・細則番号	
	委 員	委 員 長				根 拠 規 程	委 員 会 細 則
30 クリニカルパス委員会	副院長(1名)、診療部長(若干名)、副看護部長(1名)、看護師長(若干名)、医長(若干名)、各診療部のクリニカルパス担当医師、薬剤師、診療放射線技師、臨床検査技師、管理栄養士(各1名)、各病棟のクリニカルパス担当看護師、情報管理部職員(1名)、医事室入院・外来係長、診療情報管理室職員(若干名)	副院長(1名)、診療部長(若干名)又は医長(若干名)から選出	新規クリニカルパス申請、クリニカルパスの変更申請に対する審査及び承認、委員会承認されたクリニカルパスの職員への周知、運用の開始及び保管、クリニカルパスの運用状況に関する調査、クリニカルパスの運用の推進及び運用のための環境整備、クリニカルパスに関する院内研究会などの企画立案及び実施等	診療情報管理室	原則年6回 (奇数月)	組織規程 (H22-50)	クリニカルパス委員会細則 (H22-22)
31 ボランティア運営企画委員会	診療部長、総務課長、副看護部長(1名)、看護師長(2名)、労務管理室長、患者相談専門職、総務係長、広報係長、ボランティア代表(5名)	診療部長	ボランティア活動の具体的内容の企画立案、受け入れ部門との調整、ボランティア受け入れに必要な設備、体制の整備、ボランティアの募集に関する企画立案、ボランティア研修計画の企画立案及び実施、ボランティアの採用、ボランティア活動の評価等	総務課	年2回 その他必要に応じて	組織規程 (H22-50)	ボランティア運営委員会細則 (H22-23)
32 ハラスメント防止対策委員会	理事長が指名する6名以上(そのうちの3分の1以上及び委員長は外部委員)	外部委員の中から互選により選出	ハラスメントに起因する問題の調査審議	労務管理室	必要に応じて	ハラスメントの防止等に関する規程 (H22-5)	ハラスメント防止対策委員会細則 (H22-24)
33 物品調達管理委員会	特命副院長(経営・財務)、臓器・運動器病態外科部長、臨床検査技師長、中央材料室看護師長、調達企画室長、契約係長、システム管理専門職	特命副院長(経営・財務)	物品の取得、SPD 管理に関すること	調達企画室	必要に応じて	組織規程 (H22-50)	物品調達管理委員会細則 (H22-26)
34 診療報酬委員会	副院長(1名)総合診療部長、手術・集中治療部長、財務経理部長、診療報酬請求に詳しい医師(数名)、薬剤師(1名)、医事室長、システム管理専門職、医事専門職、医事第一係長、医事第二係長、DCPデータ管理室(診療情報管理室)、診療報酬算定業務担当者(委託)	総合診療部長	診療報酬の審査増減、過誤増減、審査返戻及び過誤返戻の現状の把握、審査増減等の発生理由、対策の検討、新たな診療行為に伴う診療費請求方法の検討承認、職員研修の実施等	医事室	原則月1回	組織規程 (H22-50)	診療報酬委員会細則 (H22-27)
35 看護職員確保対策委員会	看護部長、総務部長、教育研修センター長、副看護部長(2名)、財務経理部長、人事課長、企画経営課長、財務経理課長、労務管理室長、人事課人事係長	看護部長	看護職員の採用計画、看護職員募集要項	人事課	原則として年4回 (4・7・10・1月)	組織規程 (H22-50)	看護職員確保対策委員会細則 (H22-28)
36 褥瘡対策委員会	皮膚科診療部長、形成外科医師、ICU医師、皮膚科医師(1名)、看護師長(3名)、副看護師長(1名)、皮膚・排泄ケア看護認定看護師、薬剤師(1名)、栄養管理室(1名)、理学療法士(2名)、医事室医事係長	皮膚科診療部長	褥創及び皮膚障害の調査、予防対策の立案、予防対策実施の監視、助言、指導及び勧告、職員の教育指導等	医事室	原則月1回	組織規程 (H22-50)	褥瘡対策委員会細則 (H22-29)

各 種 委 員 会 一 覧 表

令和5年1月1日現在

区 分	委 員 会 の 構 成 員		調 査 ・ 審 議 事 項	委 員 会 の 所 管 等	開 催	委 員 会 設 置 根 拠 ()は規程・細則の制定年及び規程・細則番号	
	委 員	委 員 長				根 拠 規 程	委員会細則
37 ヒトES細胞研究倫理審査委員会	生物学・医学の専門家等、自然科学の有識者、倫理学・法学の専門家等、人文・社会科学の有識者、一般の立場に立って意見を述べられる者(国立成育医療研究センターに所属する者以外の者が2名以上、5名以上で構成され男性及び女性がそれぞれ2名以上含まれていること)	委員の中から理事長が指名	センター等においてヒトES細胞に関する研究責任者から申請された研究計画及びその変更について科学的観点及び倫理的観点から指針等への適合性の審議等	研究医療課	必要に応じて	人を対象とした医学系研究倫理規程(H22-43)	ヒトES細胞研究倫理審査委員会細則(H22-30)
38 施設等有効活用委員会	総務部長、財務経理部長、副所長(1名)、臨床研究センター長、副院長(1名)、看護部長、総務課長、施設整備課長、施設整備課営繕専門職、施設整備課施設整備係長	総務部長	センターの施設等の活用、センターの施設等の活用等に伴う連絡・調整等	総務課	必要に応じて	組織規程(H22-50)	施設等有効活用委員会細則(H22-31)
39 職員厚生委員会	人事部長、労務管理室長、総務課長、研究部(室)長(1名)、産業医、副薬剤部長、副診療放射線技師長、副臨床検査技師長、副栄養管理室長、副看護部長、研究所総務係長	人事部長	行事の年間計画及び実施、行事の予算等	労務管理室	必要に応じて	組織規程(H22-50)	職員厚生委員会細則(H22-32)
40 D P C 委 員 会	器官病態系内科部診療部長、感覚器・形態外科部医員、周産期・母性診療センター医員、アレルギーセンター医員、看護師長、看護副師長、薬剤部、情報管理部長、情報解析室長、医事室長、医事第一係長、診療情報管理室長、入院算定者、委員長が指名した職員	器官病態系内科部診療部長	DPC 業務フローの適正化、診断群分類の決定に係るコーディングの適正化、病院内における標準的な診断及び治療方法の周知、「DPC 導入の影響評価に係る調査」に関する事項等	診療情報管理室	月次開催 その他必要に応じて	組織規程(H22-50)	DPC委員会細則(H22-33)
41 施設・医療機器等整備委員会	企画戦略局長、情報管理部長、副所長、臨床研究センター長、生体防御系内科部統括部長、臓器・運動器病態外科部統括部長、手術・集中治療部統括部長、周産期・母性診療センター長、放射線診療部統括部長、臨床検査部統括部長、薬剤部長、総務部長、財務経理部長、看護部長、総務課長、企画経営課長、財務経理課長	企画戦略局長	施設及び医療機器等について、仕様書等の適正並びに必要性・経営状況及び緊急度を考慮した整備並びに購入計画(案)の作成、施設及び医療機器等(コンピュータソフトウェアを含む。)の維持並びに適正管理(稼働状況含む。)等	財務経理課	原則月1回	組織規程(H22-50)	施設・医療機器等整備委員会細則(H22-35)

各 種 委 員 会 一 覧 表

令和5年1月1日現在

区 分	委 員 会 の 構 成 員		調 査 ・ 審 議 事 項	委 員 会 の 所 管 等	開 催	委 員 会 設 置 根 拠 ()は規程・細則の制定年及び規程・細則番号	
	委 員	委 員 長				根 拠 規 程	委員会細則
42 臓器移植倫理委員会	副所長、研究開発監理部生命倫理研究室長、副院長(入院診療担当)、こころの診療部統括部長、総合診療部統括部長、小児内科系専門診療部統括部長、小児外科系専門診療部統括部長、手術・集中治療部統括部長、主任副周産期・母性診療センター長、放射線診療部統括部長、臨床検査部統括部長、企画戦略局長、コンプライアンス室長、総務部長、倫理審査委員会の委員長が指名する当該委員会の構成員、医学・医療の専門家等自然科学の有識者、法学・倫理学の専門家等人文・社会科学の有識者及び一般の立場を代表する者(2名以上)	研究所副所長	心臓死下臓器提供及び脳死下臓器提供の対象の判定、法的脳死判定、心臓死下臓器提供、法的脳死判定及び脳死下臓器提供に携わる職員に対する指示、臓器移植時におけるセンター内の体制整備	移植支援室	必要に応じて	組織規程 (H22-50)	臓器移植 倫理委員会 細則 (H22-36)
43 遺伝子治療臨床研究 審査委員会	分子生物学、細胞生物学、遺伝学、臨床薬理学、病理学等を専門とする者、遺伝子治療臨床研究の対象となる疾患に係る臨床医、法律を専門とする者、生命倫理に関する意見を述べるにふさわしい識見を有する者	委員の中から 理事長が指名	センターにおいて職員が遺伝子治療臨床研究を実施する場合に、指針に基づきその実施の適否等について科学的観点及び倫理的観点に基づき審査	研究医療課	必要に応じて	人を対象とした 医学系研究倫理規程 (H22-43)	遺伝子治療 臨床研究 審査委員会 細則 (H22-37)
44 研究所麻薬・毒劇物等 管理委員会	研究所部長及び室長(若干名)	委員の中から 研究所長が指名	研究所における麻薬・毒劇物等の管理体制、麻薬・毒劇物等の管理体制保管等	研究医療課	必要に応じて	毒物及び 劇物管理規程 (H22-81)	研究所麻 薬・毒物等 管理委員会 細則 (H22-38)
45 契 約 監 視 委 員 会	監事及び外部有識者	理事長が指名	競争性のない随意契約の事由の妥当性、一般競争契約入札の契約案件のうち、前回契約で一者応札・一者応募又は締結した契約が一者応札・一者応募の契約の競争性を確保するための改善方策の妥当性、一般競争入札等の契約案件のうち、前回契約で落札率100%の予定価格の設定に関する妥当性、前年度契約状況の点検・見直し結果を踏まえた次年度以降における改善状況のフォローアップ等	監査室	必要に応じて	独立行政法人の契約状 況の点検・見直しにつ いて (H21.11.17閣議決定)	契約監視 委員会 設置要綱 (H23.4.1)
46 肝細胞移植治療 臨床研究適応・評価 判定委員会	病院長、臓器移植センター長、移植外科医長、内分泌代謝科医長、病理診断部長、腎臓・リウマチ・膠原病科医長、集中治療部長、放射線診療部長、感染症科医長、遺伝診断科医長、先端医療開発室長、肝細胞移植研究室長、移植コーディネーター	病院長	申請された肝細胞移植症例について科学的妥当性及び倫理的配慮の観点から患者の適応及び治療の効果について審査	研究医療課	必要に応じて	倫理審査委員会規程 (H22-5)	肝細胞移植 治療臨床 研究適応・ 評価判定 委員会細則 (H23-22)

各 種 委 員 会 一 覧 表

令和5年1月1日現在

区 分	委 員 会 の 構 成 員		調 査 ・ 審 議 事 項	委 員 会 の 所 管 等	開 催	委 員 会 設 置 根 拠 ()は規程・細則の制定年及び規程・細則番号	
	委 員	委 員 長				根 拠 規 程	委 員 会 細 則
47 遺 伝 子 治 療 臨 床 研 究 適 応 ・ 評 価 判 定 委 員 会	病院長、副院長(1名)、小児がんセンター長、 成育遺伝研究部長、臨床研究の対象となる疾患 に係わるセンターの臨床医、臨床研究の対 象となる疾患に係わるセンターの基礎研究者	委員の中から 理事長が指名	申請された臨床研究症例について科学的 妥当性及び倫理的配慮の観点から患者の 適応及び治療の効果について審査	研究医療課	必要に応じて	遺伝子治療 臨床研究審査委員会細 則 (H22-37)	遺伝子治療 臨床研究適 応・評価判 定委員会細 則 (H24-2)
48 臨 床 検 査 委 員 会	臨床検査部統括部長、統括部長又は診療部 長(2名)、情報管理部長、副看護部長(1名)、 医事室長、財務経理課長、研究所部長又は 室長(1名)、衛生検査センター(1名)、臨床検 査技師長、副臨床検査技師長(2名)、主任臨 床検査技師	臨床検査部統括部長	臨床検査の精度管理、測定法の変更、新 規検査の採用、実施項目の中止、外部委 託検査、検体検査業務委託、臨床検査部・ 病理診断部運営、他部門との調整、衛生検 査センター等	臨床検査 部・病理診 断部	四半期に1回	組織規程 (H22-50)	臨床検査 委員会細則 (H24-11)
49 診 療 録 管 理 委 員 会	副院長(1名)、情報管理部長、院長が指名す る診療部長(1名)、院長が指名する診療科医 長又は医員(3名)、薬剤部長、看護部長、医 事室長、情報解析室長、医事管理課長、診療 情報管理室長	副院長	診療録の管理、診療録の記載、診療録の 運用、診療録の監査、疾病等の統計及び 退院時要約、がん登録、診療録の提供等	診療情報 管理室	原則月1回	組織規程 (H22-50)	診療録管理 委員会細則 (H25-1)
50 医 療 安 全 管 理 委 員 会	医療安全管理部長、医療安全管理室長、情 報管理部長、病院長が指名した統括部長・診 療部長等(7名(医療機器安全管理責任者、 医療放射線安全管理責任者、褥瘡対策委員 会委員長含む)、臨床研究センター研究推進 部門長、薬剤部長(医薬品安全管理責任 者)、看護部長、医療安全管理者、栄養管理 室長、医療工学室長、診療放射線技師長、総 務部長、総務課長、医事室長、医事患者相 談専門職	医療安全管理部長	医療安全管理の検討及び研究、医療事故 の分析及び再発防止策の検討並びに委員 会が立案した防止対策及び改善策の実施 状況の調査及び見直し、医療安全管理の ために行う職員に対する指示、医療安全管 理のために行う提言、医療安全管理のため の啓発、教育及び広報、医療訴訟、公表等	医療安全 管理部	原則月1回	医療安全管理規程 (H22-22)	医療安全 管理委員会 細則 (H25-7)
51 医 療 事 故 調 査 委 員 会	医療安全管理部長、医療安全管理室長、薬 剤部長、看護部長、当該診療科部長とそれ以 外の診療科部長、コンプライアンス室長、情報 管理部長、総務部長、医療安全管理者	医療安全管理部長	医療事故に係る原因調査・原因究明、医療 事故の発生防止及び改善策等	医療安全 管理部	必要に応じて	医療安全管理規程 (H22-22)	医療事故 調査委員会 細則 (H25-8)
52 医 療 事 故 外 部 調 査 委 員 会	病院長が指名する外部の医療者複数名(外部 委員)、医療安全管理部長、医療安全管理室 長、医療安全管理者、当該診療科診療部長、 コンプライアンス室長、企画戦略局長、総務部 長、その他病院長が指名した者	委員の中から 病院長が指名	医療事故調査制度の対象となる医療事故 が発生し、一般社団法人日本医療安全調 査機構医療事故調査支援センターに報告 した際に開催	医療安全 管理室	必要に応じて	医療安全管理規程 (H22-22)	医療事故 外部調査 委員会細則 (H25-9)

各 種 委 員 会 一 覧 表

令和5年1月1日現在

区 分	委 員 会 の 構 成 員		調 査 ・ 審 議 事 項	委 員 会 の 所 管 等	開 催	委 員 会 設 置 根 拠 ()は規程・細則の制定年及び規程・細則番号	
	委 員	委 員 長				根 拠 規 程	委員会細則
53 臨 床 倫 理 検 討 会	病院長、副院長(2名)、コンプライアンス室長、生命倫理研究室長、医療安全管理室長、医療安全担当師長、その他必要に応じ病院長が指名した者	病院長	診療業務遂行上発生した倫理的問題に関して、関係する職種のカンファレンス等を行っても方針・結論が見いだせない事項等の調査・審議	研究医療課	必要に応じて	組織規程 (H22-50)	臨床倫理 検討会細則 (H25-14)
54 物 品 ・ 薬 剤 管 理 委 員 会	副院長(財務・経営担当)、情報管理部長、薬剤部長、財務経理部長、調達企画室長、中央材料室看護師長、中央材料室看護師(1名)、薬剤師(在庫管理担当1名)、調達企画室契約係長	副院長(財務・経営担当)	診療材料等の物品の在庫管理、医薬品(ABC 管理、ジェネリックへの変更等も含む)の在庫管理等	調達企画室	原則月1回	組織規程 (H22-50)	物品・薬剤 管理委員会 細則 (H26-8)
55 年 報 ・ 業 績 集 編 集 委 員 会	主任副周産期・母性診療センター長、副院長(教育・研究、外来診療担当)、研究所長が指名した者(研究室長1名)、総務部長、企画戦略局長	主任副周産期・母性 診療センター長	年報・業績集の編集及び刊行等	広報企画室	必要に応じて	組織規程 (H22-50)	年報・業績 集編集委員 会細則 (H26-11)
56 図 書 館 運 営 委 員 会	図書館長(副院長<外来診療・栄養管理担当>)、研究所長、研究所長が指名した者(研究部長1名)、薬剤部長が指名した者(薬剤部主任1名)、看護部長が指名した者(副看護部長1名)、企画経営課長、図書係長	図書館長(副院長<外来 診療・栄養管理担当>)	図書館の運営及び図書館に購入する図書 の選定	図書館職員	必要に応じて	組織規程 (H22-50)	図書館運営 委員会細則 (H26-12)
57 再 生 医 療 ・ 細 胞 移 植 等 適 応 評 価 委 員 会	病院長、副院長(1名)、小児がんセンター長、臓器移植センター長、臨床研究の対象となる疾患に係わるセンターの臨床医、臨床研究の対象となる疾患に係わるセンターに基礎研究者	委員の中から 理事会が指名	申請された臨床研究症例について、科学的妥当性及び倫理的配慮の観点から患者の適応及び治療の効果について審査	研究医療課	必要に応じて	倫理委員会細則 (H22-5)	再生医療・ 細胞移植等 適応評価 委員会細則 (H26-21)
58 倫 理 予 備 審 査 委 員 会	理事長が委員を任命 (1)基礎医学研究部会 (2)社会医学研究部会 (3)治療研究部会	理事長が部会長を任命	センター倫理審査委員会への申請が予定されている医学系研究計画について科学的妥当性及び倫理的配慮の観点から審査	臨床研究 管理室	必要に応じて	倫理委員会細則 (H22-5)	倫理予備 審査委員会 細則 (H26-26)
59 情 報 シ ス テ ム 委 員 会	情報管理部長、研究所長、病院長、副所長(1名)、副院長(1名)、研究部長(1名)、診療部長(2名)、薬剤部長、看護部長、総務部長、医事室長、情報管理部情報解析室長、情報管理部システム管理室長	情報管理部長	電子カルテシステムを基幹とする病院情報システムの企画・運用、研究所で利用する情報システムの企画・運用、事務部門やセンター全体で利用する基盤情報システムの企画・運用、センターにおける医療情報データベースの適正な管理及び運営等	情報管理部	必要に応じて	組織規程 (H22-50)	情報システ ム委員会細 則 (H26-28)

各 種 委 員 会 一 覧 表

令和5年1月1日現在

区 分	委 員 会 の 構 成 員		調 査 ・ 審 議 事 項	委 員 会 の 所 管 等	開 催	委 員 会 設 置 根 拠 ()は規程・細則の制定年及び規程・細則番号	
	委 員	委 員 長				根 拠 規 程	委 員 会 細 則
60 特 定 認 定 再 生 医 療 等 委 員 会	分子生物学、細胞生物学、遺伝学、臨床薬理学又は病理学の専門家、再生医療等について十分な科学的知見及び医療上の識見を有する者、臨床医、細胞培養加工に関する識見を有する者、医学又は医療分野における人権の尊重に関して理解のある法律に関する専門家、生命倫理に関する識見を有する者、生物統計その他の臨床研究に関する識見を有する者、一般の立場の者	委員の中から 病院長が指名	再生医療等を提供しようとする病院もしくは診療所または提供機関の管理者から、再生医療等提供計画について意見を求められた場合において、審査を行い、当該管理者に対し意見を述べること	研究医療課	必要に応じて	人を対象とした 医学系研究倫理規程 (H22-43)	特定認定 再生医療等 委員会細則 (H27-2)
61 不 服 審 査 委 員 会	職員以外の法律家等の専門家(3名)、懲戒処分を受けた職員の業績評価の評価者以外の職員(2名)	委員の中から 理事長が指名	懲戒処分を受けた職員から不服申し立てがあった場合の処分の妥当性等	人事課	必要に応じて	職員懲戒規程 (H22-17)	不服審査 委員会 運営要領 (H27-1)
62 災 害 対 策 委 員 会	病院長、副院長(1名)、災害対策部長、災害対策室長、医療安全管理室長、医療連携・患者支援センター長、総合診療部統括部長又は総合診療科診療部長(1名)、救急診療科診療部長(1名)、在宅診療科診療部長、小児外科専門診療部統括部長又は外科診療部長(1名)、集中診療科診療部長、産科診療部長(1名)、副薬剤部長(1名)、副栄養管理室長、主任臨床工学技士、副看護部長(1名)、看護師長(2名)、システム管理室長、研究所副所長(1名)、総務部長、財務経理部長、総務課長、財務経理課長、施設整備課長	病院長	災害時におけるセンター内・外に係るトリアージ等の基本方針、災害時個別支援計画、国立成育医療研究センター消防計画第5条第5項に掲げる事項、BCP(事業継続計画)等	総務係(災害対策担当)	必要に応じて	消防計画(H22-68)	災害対策 委員会細則 (H27-5)
63 心臓移植・補助人工心臓 適 応 検 討 委 員 会	病院長、病院長が指名した副院長、こころの診療部長、看護部長、心臓外科診療部長、循環器科診療部長、手術・集中治療部統括部長、集中治療科(ICU)診療部長、移植・細胞治療科診療部長	病院長	補助人工心臓装着の適応、心臓移植の適応、補助人工心臓離脱等	移植支援室	必要に応じて	組織規程 (H22-50)	心臓移植・ 補助人工心臓 適応検討 委員会細則 (H27-21)
64 個 人 情 報 管 理 委 員 会	企画戦略局長、情報管理部長、コンプライアンス室長、副所長(1名)、副院長(1名)、研究部長(1名)、統括部長(1名)、教育研修センター長、臨床研究センターデータサイエンス部門長、看護部長、総務部長、総務課長、研究医療課長、情報解析室長、システム管理室長、医事室長、診療情報管理室長	企画戦略局長	センターが保有する個人情報の管理及び情報セキュリティ対策、規程に基づく事項に係る企画、立案及び実施、保有個人情報の提供・開示、非識別加工情報の提供等	情報管理部	原則年1回	保有する個人情報 に関する規程 (H22-38)	個人情報 管理委員会 細則 (H27-15) 2回変更

各 種 委 員 会 一 覧 表

令和5年1月1日現在

区 分	委 員 会 の 構 成 員		調 査 ・ 審 議 事 項	委 員 会 の 所 管 等	開 催	委 員 会 設 置 根 拠 ()は規程・細則の制定年及び規程・細則番号	
	委 員	委 員 長				根 拠 規 程	委員会細則
65 移 行 期 委 員 会	病院長が指名した副院長、看護部長、総合診療部長、医療連携・患者支援センター長、病院長が指名した医長(若干名)、外来看護師長、医療連携室長、医事室長、医事室員(医療連携・患者支援センター併任)	病院長が指名した副院長	移行期医療のあり方、移行期の患者が適切かつ円滑に移行するための必要な事項	医事室員 (医療連携・患者支援センター併任)	原則月1回	組織規程 (H22-50)	
66 リ ス ク 管 理 委 員 会	理事長、理事及び理事長が指名する者	理事長	業務部門ごとの業務フローの明確化、業務フローごとに内在するリスク因子の把握及びリスク発生原因の分析、把握したリスクに関する評価、リスク顕在時における対応方針、広報方針・体制、保有施設の点検及び必要な補修、事故・災害等の緊急時等	企画経営課	必要に応じて	業務方法書 (H22-0) リスク管理規程 (H27-61)	根拠規程 に規定
67 も み じ の 家 運 営 委 員 会	病院長 (センター)企画戦略局長、看護部長、総務部長、財務経理部長 (もみじの家)ハウスマネージャー、事務長、医長、看護師長 (外部委員)喜谷喜夫様、日本財団が推薦する者、利用者、難病の子ども支援全国ネットワークが推薦する者、ボランティア代表、一般財団法人重い病気を持つ子どもと家族を支える財団が推薦する者、報道関係者、厚生労働省、世田谷区	病院長	もみじの家の事業計画(収支計画を含む)、活動報告、寄附金状況、利用者の声等	もみじの家	年1回程度	組織規程 (H22-50)	もみじの家 運営委員会 細則 (H28-2)
68 定 年 延 長 審 査 委 員 会	企画戦略局長、研究所長、臨床研究センター長、病院長、人事部長	企画戦略局長	定年に達した部長等の定年延長の審査	人事課	必要に応じて	組織規程 (H22-50)	定年延長 審査委員会 細則 (H29-1)
69 地 域 医 療 支 援 委 員 会	センターが所在する地域の医療を確保するうえで重要な関係を有する者(地方公共団体、地域医師会を始めとする医療関連団体、学識経験者等)及びセンター職員	病院長	共同利用の円滑な実施のための体制の確保、救急医療を提供する体制の確保、地域の医療従事者の資質向上を図るための研修等の実施、診療並びにセンターの管理及び運営に関する諸記録の管理・閲覧体制、紹介患者に対する医療の提供、患者に対する相談体制	医療連携・患者支援センター	原則年2回	組織規程 (H22-50)	地域医療 支援委員会 細則 (H29-3)
70 内 部 統 制 委 員 会	理事長及び理事 監事は、必要に応じて出席可能	理事長	中期計画、年度計画、内部統制を担当する役員からの報告及び改善策の検討、内部統制の研修等	企画経営課	年2回	業務方法書 (H22-0) 内部統制の推進 に関する規程 (H27-58)	内部統制 委員会細則 (H29-7)

各 種 委 員 会 一 覧 表

令和5年1月1日現在

区 分	委 員 会 の 構 成 員		調 査 ・ 審 議 事 項	委 員 会 の 所 管 等	開 催	委 員 会 設 置 根 拠 ()は規程・細則の制定年及び規程・細則番号	
	委 員	委 員 長				根 拠 規 程	委 員 会 細 則
71 病 床 管 理 委 員 会	入院診療担当副院長、総合診療部長、財務経理部長、医長(5名)、医師(若干名)、副看護部長(1名)、入退院センターベッドコントロール室長、医療連携室長、看護師長(2名(周産期1名、小児期1名))、企画経営課長、医事室長、入院・外来係長	総合診療部長	病床管理、運営(目標患者数、成人の看護必要度の問題を含む。)、病床管理のルール(入退院センター、ベッドコントロールを含む。)、有料個室の運用、長期入院患者の対策、決定事項の実施状況、病棟診療業務統一マニュアル等	医事室	原則月1回	組織規程 (H22-50)	病床管理 委員会細則 (H29-8)
72 高 額 医 薬 品 症 例 審 議 委 員 会	病院長、薬剤担当副院長、薬剤部長、診療報酬委員長、看護部長、コンプライアンス室長、財務経理課長、外部委員(2名(倫理に係る委員))	病院長	院内の高額医薬品使用に係る症例の選定、症例が複数の場合は実施の時期・順番	薬剤委員会 事務局	必要に応じて	組織規程 (H22-50)	高額医薬品 症例審議 委員会細則 (H29-10)
73 電 子 的 臨 床 研 究 情 報 基 盤 委 員 会	企画戦略局長、情報管理部部長、研究所長、臨床研究センター長、病院長、研究医療課長、社会医学研究部長、政策科学研究部長、データサイエンス部門長、データ管理ユニット長、IT ユニット長	企画戦略局長	電子化医療情報の活用を目指した各事業等に関する当センターの疾患縦断・横断的研究のための電子的臨床研究情報基盤の構築及び運営	社会医学研究部	原則半年に1回	組織規程 (H22-50)	電子的 臨床研究 情報基盤 委員会細則 (H30-2)
74 緩 和 ケ ア 委 員 会	病院長が指名した副院長、看護部長又は看護部長が指名した副看護部長、緩和ケア科医長、小児がんセンター長、総合診療部長、こころの診療部長、医長(若干名)、もみじの家ハウスマネージャー、看護部長が指名した看護師長(若干名(もみじの家看護師長を含む))、看護部長が指名した副看護師長(若干名(小児専門看護師含む))、緩和ケア認定看護師、薬剤部(1名)、栄養管理部(1名)、チャイルドライフ・スペシャリスト(1名)、医療ソーシャルワーカー(1名)、リハビリテーション部(1名)、医事室(2名(医事室長含む))	病院長が指名した副院長	院内(入院、外来を含む)における緩和ケア、もみじの家の緩和ケア体制、ビリーブメント・ケアに関すること	医事室	原則年4回	組織規程 (H22-50)	緩和ケア 委員会細則 (H30-3)
75 受 託 研 究 審 査 委 員 会	専門委員:副院長、病院部長及び病院センター長から1名以上、研究所部長から1名、病院医長又はその他専門的知識を有する職員1名以上 非専門委員(医学、歯学、薬学その他の医療に関する専門的知識を有する者以外の委員):センター事務系職員から1名以上	専門委員の中から 理事長が指名	使用成績調査又は特定使用成績調査、副作用・感染症報告を実施することの倫理的、科学的及び医学的・薬学的観点からの妥当性、委託者の負担する経費を使用して実施する臨床研究を受託することの妥当性、医学専門家等業務(アドバイザー業務も含む)を受託することの妥当性、臨床研究支援業務を受託することの妥当性等	臨床研究 管理室	原則月1回	受託研究取扱規程 (H22-46)	受託研究 審査委員会 細則 (H30-6)
76 特 定 臨 床 研 究 等 管 理 委 員 会	病院長、副院長(医療安全担当)、薬剤部長、医療安全管理室長、病院統括部長・病院診療部長及び病院センター長から1名	病院長	認定臨床研究審査委員会の承認を得た新規の特定臨床研究等の実施に関し、必要な措置が取られているかの確認等	臨床研究審査委員会の 事務担当が 兼務	月1回以上	組織規程 (H22-50)	特定臨床 研究等管理 委員会細則 (H30-13)

各 種 委 員 会 一 覧 表

令和5年1月1日現在

区 分	委 員 会 の 構 成 員		調 査 ・ 審 議 事 項	委 員 会 の 所 管 等	開 催	委 員 会 設 置 根 拠 ()は規程・細則の制定年及び規程・細則番号	
	委 員	委 員 長				根 拠 規 程	委 員 会 細 則
77 病 院 医 療 従 事 者 の 労 務 管 理 ・ 役 割 分 担 推 進 委 員 会	病院長、副院長(特命副院長含む。)、手術・集中治療部統括部長、救急診療科診療部長、看護部長、副看護部長、薬剤部長、臨床検査技師長、理学療法士長、医療工学室長、人事部長、人事課長、DPCデータ管理室長、医事室長、労務管理室長、医事専門職、職員係長(書記)、その他委員長が必要と認めた者	病院長	医療従事者の勤務管理、医療従事者の負担軽減及び処遇改善に係る計画、計画の実行後の評価等	人事課職員係	原則年1回	組織規程(H22-50)	病院医療従事者の労務管理・役割分担推進委員会細則(H30-18)
78 臨 床 研 究 監 査 委 員 会	理事長が指名する5名以上(そのうちの半数以上及び委員長は外部委員)	委員から互選により選出	病院において実施中の臨床研究に係る遂行状況の確認及び不正事案等の監視、不正行為等不適切事案発生時に、病院長を中心としてとりまとめた不適切事案の詳細、原因の究明、再発防止策等の適正性の検討、是正勧告、臨床研究運営委員会における管理状況に係る監査及びその監査結果の報告、病院における臨床研究管理体制に係る意見書の提出等	臨床研究管理室	年2回 その他必要に応じて	組織規程(H22-50)	臨床研究監査委員会細則(R2-1)
79 臨 床 研 究 運 営 委 員 会	病院長、副院長(医療安全担当)、臨床研究センター長、総務部長、教育研修センター長、情報管理部長、臨床研究センター副センター長、臨床研究センター各部門長、研究開発監理部長、研究開発監理部開発企画主幹、研究開発監理部臨床研究管理室長	病院長	臨床研究等及びその他の臨床研究の実施、運営、臨床研究等の登録、臨床研究センター各部門の運営、治験責任医師等の研究に係る責任者の業務、「研究活動及び研究資金取扱い細則」第6条に基づき、病院の治験、臨床研究に関する告発等がなされた事項、「人を対象とした医学系研究に関する標準業務手順書」第9条に基づき、実施中又は過去に実施された研究における不適切事案に関して報告された事項等	臨床研究センター事務室	原則月1回	組織規程(H22-50)	臨床研究運営委員会細則(R2-6)
80 高 難 度 新 規 医 療 技 術 評 価 委 員 会	高難度医療技術に関連のある診療科等に所属する医師等、当該医師等と異なる診療科等に所属する医師等、医療安全管理室長、病院統括部長、病院センター長および病院診療部長(2名)、臨床研究センター(2名)、手術・集中治療部統括部長、薬剤部長、副看護部長(1名)	医療安全管理室長、病院統括部長、病院センター長および病院診療部長(2名)、臨床研究センター(2名)、手術・集中治療部統括部長の中から病院長が指名	高難度新規医療技術の提供に関する倫理的・科学的な妥当性、センターで当該高難度新規医療技術を提供することの適切性並びに適切な提供方法(科学的根拠が確立していない医療技術については、有効性及び安全性の検証の必要性や、実施医療機関の体制等を勘案した上で、臨床研究として実施する等、科学的根拠の構築に資する実施方法について検討することを含む。)	臨床研究管理室	原則月1回	高難度新規医療技術を用いた医療の提供に関する規程(R2-19)	高難度新規医療技術評価委員会の設置に関する細則(R2-9) 高難度新規医療技術評価委員会細則(R2-9)

各 種 委 員 会 一 覧 表

令和5年1月1日現在

区 分	委 員 会 の 構 成 員		調 査 ・ 審 議 事 項	委 員 会 の 所 管 等	開 催	委 員 会 設 置 根 拠 ()は規程・細則の制定年及び規程・細則番号	
	委 員	委 員 長				根 拠 規 程	委員会細則
81 未 承 認 新 規 医 薬 品 等 評 価 委 員 会	未承認医薬品等を使用した医療の提供に関連のある診療科等に所属する医師等、当該医師等と異なる診療科等に所属する医師等、医療安全管理部医療安全管理室長、病院統括部長、病院センター長および病院診療部長(2名)、臨床研究センター(2名)、手術・集中治療部統括部長、薬剤部長、副看護部長(1名)、の中から3名以上	医療安全管理部医療安全管理室長、病院統括部長、病院センター長および病院診療部長(2名)、臨床研究センター(2名)、手術・集中治療部統括部長の中から病院長が指名	未承認新規医薬品等の使用に関する倫理的・科学的な妥当性、センターで当該未承認新規医薬品等を使用することの適切性並びに適切な提供方法(科学的根拠が確立していない未承認新規医薬品等については、有効性及び安全性の検証の必要性や、実施医療機関の体制等を勘案した上で、臨床研究として実施する等、科学的根拠の構築に資する実施方法について検討することを含む。)	臨床研究管理室	原則月2回	未承認新規医薬品等を用いた医療の提供に関する規程(R2-20)	未承認新規医薬品等評価委員会細則(R2-10)
82 医 療 安 全 監 査 委 員 会	理事長が指名する5名以上(そのうちの半数以上及び委員長は外部委員)	委員から互選により選出	病院において実施中の医療安全に係る遂行状況に対する監査、不適切事案発生時に病院長を中心としてとりまとめた不適切事案の詳細、原因の究明、再発防止策等の適正性の検討、是正勧告、医療安全管理委員会における管理状況に係る監査及びその監査結果の報告、病院における医療安全管理体制に係る意見書の提出等	臨床研究管理室	年2回 その他必要に応じて	組織規程(H22-50)	医療安全監査委員会細則(R2-11)
83 臨 床 研 究 審 査 委 員 会	医学又は医療の専門家、臨床研究の対象者の保護及び医学又は医療分野における人権の尊重に関して理解のある法律に関する専門家又は生命倫理に関する識見を有する者、一般の立場の者(計5名以上)	委員の中から理事長が指名	特定臨床研究に係る審査意見業務	臨床研究管理室	月1回以上	人を対象とした医学系研究倫理規程(H22-43)	臨床研究審査委員会細則(R2-22)
84 フ ァ シ リ テ ィ ド ッ ク 運 営 委 員 会	特命副院長(移行期医療・研究・病院機能評価担当)、副看護部長(1名)、ファシリテッドッグ導入病棟に勤務する医師で特命副院長が推挙した者(1名)、総務課長又は総務専門職(1名)、財務経理課長又は調達企画専門職(1名)、医事室長又は医事専門職(1名)、看護師長(看護部長が推挙した者1名)、ICTで勤務する者(若干名)、もみじの家ハウスマネージャー、広報企画室長又は広報企画専門職(1名)、ハンドラー(1名)	特命副院長(移行期医療・研究・病院機能評価担当)	ファシリテッドッグの導入のための環境整備、運用状況及び運用効果、広報、事業継続等	医事室	原則年2回以上	組織規程(H22-50)	ファシリテッドッグ運営委員会細則(R3-20)
85 成 育 基 金 運 営 委 員 会	企画戦略局長、病院長、研究所長、総務部長、人事部長、企画経営部長、財務経理部長	委員の中から理事長が指名	基金の運営計画及び事業報告、寄附者への称号の授与及び謝意の表明等	広報企画室 財務経理課	原則年2回	成育基金細則(H30-3)	成育基金運営委員会細則(R3-22)

各 種 委 員 会 一 覧 表

令和5年1月1日現在

区 分	委 員 会 の 構 成 員		調 査 ・ 審 議 事 項	委 員 会 の 所 管 等	開 催	委 員 会 設 置 根 拠 ()は規程・細則の制定年及び規程・細則番号	
	委 員	委 員 長				根 拠 規 程	委 員 会 細 則
86 研究企画調整委員会	診療部長(2名以上)、研究部長又は室長(2名以上)	委員の中から 理事長が指名	助成金等競争的資金にかかる公募にあたり、推薦者が設けられている場合において、センターから推薦できる数を超過する応募の申出があった場合の審査	研究医療課	必要に応じて	組織規程 (H22-50)	研究企画 調整委員会 細則 (R3-24)
87 細胞原料提供倫理審査委員	再生医療等について十分な科学的知見及び医療上の識見を有する者、臨床医(現に診療に従事している医師)、産学連携に関する経験及び識見を有する者、生命倫理に関する識見を有する者、医学における人権の尊重に関して理解のある法律の専門家、一般の立場の者、その他理事長が必要と認める者	委員の中から 理事長が指名	「ヒト細胞原料供給に係るガイダンス」に基づき、ヒト細胞原料の採取及び製造販売事業者等への提供並びに仲介について、倫理的、法的及び科学的な観点から審議するものとする	研究開発監理部臨床研究管理室	必要に応じて	ヒト(同種)体性幹細胞 原料取扱規程 (R4-24)	細胞原料提供倫理審査 委員会細則 (R4-11)
88 細胞原料提供倫理予備審査委員	国立研究開発法人国立成育医療研究センター倫理予備審査委員会細則(平成26年10月28日委員会細則第26号)に規定する基礎医学研究部会の委員	委員の中から 理事長が指名	細胞原料提供倫理審査委員会細則第1条第2項に規定する細胞原料の採取及び製造販売事業者等への提供並びに仲介に関すること	研究開発監理部臨床研究管理室	必要に応じて	細胞原料提供倫理委員会細則 (R4-11)	細胞原料提供倫理予備 審査委員会 細則 (R4-12)
89 センター発ベンチャー認定委員会	研究所長、病院長、臨床研究センター長、企画戦略局長、総務部長、財務経理部長	委員の中から 理事長が指名	成育発ベンチャー規程第4条第2項の規定に基づく同規程第2条の成育発ベンチャーの認定に関すること、成育発ベンチャー規定第11条第1項の規定に基づく成育発ベンチャーの認定の取消しに関すること、その他成育発ベンチャーの認定に関し必要な事項に関すること	研究医療課	必要に応じて	センター発ベンチャー の認定に関する規程 (R4-35)	センター発 ベンチャー 認定委員会 細則 (R4-14)
90 業務改善委員会	病院長、特命副院長、看護部長、総務部長、財務経理部長、医事室長、患者相談専門職	病院長	センターの運営における業務の質の改善に関する事項について組織及び運営等について定め、委員会の効率的な運用を図ることを目的とする。	医事管理課	原則週1回	組織規程 (H22-50)	業務改善 委員会細則 (R5-16)
91 女性の健康に関する 総括審議委員会	企画戦略局長、研究所長、病院長、副院長、総務部長、人事部長、企画経営部長、財務経理部長、女性の健康、生殖医療、遺伝学、公衆衛生学、倫理学・法学の専門家等の有識者	委員の中から 理事長が指名	女性の健康に関するデータセンターの構築に関すること、女性のライフコースを踏まえた基礎研究・臨床研究などに関すること、女性の健康に関する情報収集及び発信並びに政策提言等に関すること、女性の体とこころのケアなどの支援等に関すること、その他センターにおける女性の健康全般に関すること	企画経営課	必要に応じて	組織規程 (H22-50)	女性の健康 に関する 総括審議委 員会細則 (R5-18)

4. 研究業績

4-0 理事長

五十嵐隆：健康格差の小さい社会を目指して、日本医師会雑誌 2023; 151:1744

五十嵐隆、近藤克則、和田浩、武田祐子：健康格差社会の現状と対応（座談会）、日本医師会雑誌 2023; 151:1745-1756

4-1 病院長

[英語原著論文：査読あり]

1. Uchida H, Sakamoto S, Komine R, Kodama T, Nakao T, Okada N, Yanagi Y, Shimizu S, Fukuda A, Shioda Y, Kiyotani C, Matsumoto K, Yoneda A, Haga C, Yoshioka T, Miyazaki O, Nosaka S, Kasahara M: Strategy for hepatoblastoma with major vascular involvement: A guide for surgical decision-making. Surgery. 2023 Feb;173(2):457-463
2. Funaki T, Yamada M, Ide K, Ito R, Shoji K, Ogimi C, Imadome KI, Kasahara M: Etiology of Severe Acute Hepatitis in a Pediatric Transplant Center in Japan. J Pediatric Infect Dis Soc. 2023 Apr;12(4):248-251
3. Uchida H, Sakamoto S, Yanagi Y, Shimizu S, Fukuda A, Ono H, Miyazaki O, Nosaka S, Schlegel A, Kasahara M: Significance of a multidisciplinary approach to congenital extrahepatic portosystemic shunt: A changing paradigm for the treatment. Hepatol Res. 2023 Jun;53(6):540-555
4. Shimizu S, Sakamoto S, Yamada M, Funaki T, Fukuda A, Uchida H, Okada N, Nakao T, Kodama T, Komine R, Shoji K, Baba C, Suzuki Y, Nakagawa S, Ogimi C, Kasahara M: Successful pediatric liver transplantation case with a positive SARS-CoV-2 test at the time of transplant. Hepatol Res. 2023 Jun;53(6):569-573
5. Ide K, Uchida H, Sakamoto S, Hayakawa I, Nakagawa S, Kobayashi T, Ito S, Kasahara M: Perioperative risk factors for neurological impairment in infants with acute liver failure following liver transplantation. Pediatr Transplant. 2023 Jun;27(4):e14524
6. Yamada M, Fukuda A, Ogura M, Shimizu S, Uchida H, Yanagi Y, Ishikawa Y, Sakamoto S, Kasahara M, Imadome KI: Early Detection of Epstein-Barr Virus as a Risk Factor for Chronic High Epstein-Barr Viral Load Carriage at a Living-donor-dominant Pediatric Liver Transplantation Center. Transplantation. 2023 Jun;107(6):1322-1329
7. Akiyama S, Saku N, Miyata S, Ite K, Nonaka H, Toyoda M, Kamiya A, Kiyono T, Kimura T, Kasahara M, Umezawa A: Drug metabolic activity as a selection factor for pluripotent stem cell-derived hepatic progenitor cells. Prog Mol Biol Transl Sci. 2023 Jul;199:155-178
8. Ite K, Toyoda M, Akiyama S, Enosawa S, Yoshioka S, Yukitake T, Yamazaki-Inoue M, Tatsumi K, Akutsu H, Nishina H, Kimura T, Otani N, Nakazawa A, Fukuda A, Kasahara M, Umezawa A: Stem cell challenges and opportunities. Prog Mol Biol Transl Sci. 2023 Jul;199:379-395

9. Alfares BA, van der Doef HPJ, Wildhaber BE, Casswall T, Nowak G, Delle M, Aldrian D, Berchtold V, Vogel GF, Kaliciński P, Markiewicz-Kijewska M, Kolesnik A, Bernabeu JQ, Hally MM, Larrarte K M, Marra P, Bravi M, Pinelli D, Kasahara M, Sakamoto S, Uchida H, Mali V, Aw M, Franchi-Abella S, Gonzales E, Guérin F, Cervio G, Minetto J, Sierre S, de Santibañes M, Ardiles V, Uno JW, Evans H, Duncan D, McCall J, Hartleif S, Sturm E, Patel J, Mtegha M, Prasad R, Ferreira CT, Nader LS, Farina M, Jaramillo C, Rodriguez-Davalos MI, Feola P, Shah AA, Wood PM, Acord MR, Fischer RT, Mullapudi B, Hendrickson RJ, Khanna R, Pamecha V, Mukund A, Sharif K, Gupte G, McGuirk S, Porta G, Spada M, Alterio T, Maggiore G, Hardikar W, Beretta M, Dierckx R, de Kleine RHJ, Bokkers RPH: Prevalence, management and efficacy of treatment in portal vein obstruction after paediatric liver transplantation: protocol of the retrospective international multicentre PORTAL registry. *BMJ Open*. 2023 Jul 27;13(7):e066343
10. Baba C, Yukimasa S, Yasuno R, Ichiyanagi H, Ninagawa J, Kasuya S, Kasahara M, Horikawa R, Nagasaka Y, Suzuki Y: Anesthesia management protocol for liver transplantation as treatment for ornithine transcarbamylase deficiency. *Pediatr Anaesth*. 2023 Aug;33(8):620–630
11. Uchida H, Sakamoto S, Komine R, Kodama T, Nakao T, Yanagi Y, Shimizu S, Abbas SH, Fukuda A, Kasahara M: Optimal liver transplant procedure in progressive familial intrahepatic cholestasis type 1 treated with biliary diversion or intestinal transplantation: Lessons learned from three cases treated with different approaches. *Pediatr Transplant*. 2023 Sep;27(6): e14566
12. Rodriguez-Davalos MI, Lopez-Verdugo F, Kasahara M, Muiesan P, Raddy MS, Flores-Huidobro MA, Xia Q Hong JC, Niemann CU, Seda-Neto J, Miloh TA, Yi NJ, Mazariegos GV, Ng VL, Esquivel CO, Lerut J, Rela M: International Liver Transplantation Society Global Census: First Look at Pediatric Liver Transplantation Activity Around the World. *Transplantation*. 2023 Oct;107(10):2087–2097
13. Tamaoka S, Fukuda A, Nakabayashi K, Matsubara K, Ogata-Kawata H, Muranishi Y, Hata K, Kato-Fukui Y, Sakamoto S, Kasahara M, Fukami M: Rare sequence variants associated with the risk of non-syndromic biliary atresia. *Hepatol Res*. 2023 Nov;53(11):1134–1141
14. Tamura R, Sabu Y, Mizuno T, Mizuno S, Nakano S, Suzuki M, Abukawa D, Kaji S, Azuma Y, Inui A, Okamoto T, Shimizu S, Fukuda A, Sakamoto S, Kasahara M, Takahashi S, Kusuhara H, Zen Y, Ando T, Hayashi H: Intestinal Atp8b1 dysfunction causes hepatic choline deficiency and steatohepatitis. *Nat Commun*. 2023 Nov;14(1):6763
15. Tokuda Y, Yamada M, Fukuda A, Shoji K, Sakamoto S, Uchida H, Ishiguro A, Imadome KI, Kasahara M: No additional risk of Ampicillin rash among pediatric liver transplant recipients with concurrent Epstein-Barr virus infection. *Pediatr Infect Dis J*. 2023 Dec;42(12):1063–1066
16. Sakamoto S, Shimizu S, Uchida H, Fukuda A, Kasahara M: Portal vein pressure and flow modulation in pediatric liver transplantation. *Pediatr Transplant*. 2023 Nov;27(7):e14563
17. Kasahara M, Sakamoto S: Optimal graft size in pediatric living donor liver

transplantation: How are children different from adults?. *Pediatr Transplant*. 2023
Nov;27(7):e14543

[日本語原著論文：査読あり]

1. 笠原群生：世界における臓器移植の展開. *小児外科* 55(6):588-591, 2023
2. 阪本靖介, 内田孟, 福田晃也, 笠原群生：小児悪性肝腫瘍に対する移植治療. *小児外科* 55(6):631-635, 2023
3. 福田晃也, 内田孟, 阪本靖介, 笠原群生：小児急性肝不全（劇症肝炎）に対する移植治療. *小児外科* 55(6):643-647, 2023
4. 内田孟, 福田晃也, 阪本靖介, 笠原群生：小児生体肝移植後の神経学的合併症. *小児外科* 55(6):665-669, 2023
5. 近藤宏樹, 多屋馨子, 天羽清子, 乾あやの, 笠原群生, 鈴木光幸, 田中孝明, 津川毅, 別所一彦, 保科隆之, 宮入烈, 虫明聡太郎, 吉川哲史, 齋藤昭彦, 塚原宏一, 森岡一朗, 須磨崎亮, 細矢光亮：原因不明の小児急性肝炎に関する実態調査（一次調査）報告書. *日本小児科学会予防接種・感染症対策委員会報告* 127(7):1033-1038, 2023
6. 清水誠一, 阪本靖介, 山田全毅, 福田晃也, 内田孟, 柳佑典, 小峰竜二, 中尾俊雅, 兒玉匡, 上遠野雅美, 中里弥生, 庄司健介, 船木孝則, 大宜見力, 笠原群生：小児肝移植患者における新型コロナウイルス感染の現状と治療. *Organ Biology* 30(2):105-111, 2023
7. 金澤郁恵, 佐島毅, 福田晃也, 内田孟, 阪本靖介, 笠原群生：小児肝移植患者の青年期のQOLに関する実態調査. *移植* 58(2):93-101, 2023

[症例報告]

<英文>

1. Komine R, Sakamoto S, Uchida H, Nakao T, Kodama T, Okada N, Shimizu S, Fukuda A, Kasahara M: Gallstone ileus at 17 years after living donor liver transplantation: A case report. *Pediatr. Transplant*. 2023 Jun;27(4):e14517
2. Yanagi Y, Sakamoto S, Nakao T, Kodama T, Uchida H, Shimizu S, Fukuda A, Yamada M, Kiyotani C, Matsumoto K, Yoshioka T, Miyazaki O, Nosaka S, Kasahara M: The role of living-donor liver transplantation in children with an advanced malignant rhabdoid tumor of the liver in the era of transplant oncology: Case report and literature review. *Pediatr Blood Cancer*. 2023 Jul; e30582
3. Furukawa K, Haruki K, Kasahara M, Tanial T, Ikegami T: Dual Antibody Treatment for Simultaneous Acute Cellular Rejection and Antibody-Mediated Rejection After Liver Transplantation: A Case Report. *Transplant Proc*. 2023 Oct;55(8):1938-1942
4. Uesato Y, Ono S, Kawamata F, Sakamoto S, Kuda M, Kasahara M, Takatsuki M: Associating liver partition and portal vein ligation for staged hepatectomy as bridging therapy for liver transplantation in an infant with an advanced hepatic rhabdoid tumor. *Pediatr Transplant*. 2023 Sep;27(6):e14559

[国際学会発表]

1. Kasahara M: Management of Established post-LDLT SFSS - Retransplantation. ILTS-iLDLT-LTSI2023 Consensus Conference, India, 2023.1.27
2. Kasahara M: Liver Transplantation for Hyperoxaluria Sequential Vs Simultaneous. Liver Transplantation. MCLD 2023. India, 2023.1.28
3. Kasahara M: Immunosuppression in Paediatric LT: Is it different from adults?. MCLD2023, India, 2023.1.29
4. Kasahara M: LDLT based experience. ILTS Pediatrics Sponsored Webinars, Korea (online), 2023.2.16
5. Kasahara M: Paediatric Liver Transplantation Surgery Evolving. PLDT2023, India (Online), 2023.3.18 (Video)
6. Kasahara M: Mono segmentectomy and reduced size graft. PLDT2023, India (Online), 2023.3.19 (Video)
7. Kasahara M: Portal vein reconstruction and challenges. MCLD2023, India, 2023.3.19 (Video)
8. Kasahara M: Challenges in pediatric liver transplantation in Japan. Tsinghua University International Forum on Organ Transplant and Bionic Medicine, 2023.4.8 (Online)
9. Kasahara M: Progress in pediatric liver transplantation. 2023 Ruijin Hospital International Seminar for Organ Transplantation, 2023.4.15 (Online)
10. Kasahara M: Multi-organ transplantation outcomes - is it worth it?. ILTS2023, Netherlands, 2023.5.4
11. Kasahara M: Overview of hepatic artery complications. International Living Donor Liver Transplantation(iLDLT) Group Colloquium in Mongolia, Mongol (Online), 2023.5.26
12. Kasahara M: Progress of pediatric liver transplantation. The NEW HORIZON 2023, China, 2023.7.15
13. Kasahara M: Large-For-Size Grafts In Paediatric Liver Transplantation. International Paediatric Liver Transplant Symposium 2023 (IPLTS) Singapore, 2023.8.24
14. Kasahara M: Liver transplantation for extended hepatic tumor with extension to right atrium + α . VIII Congress of Surgeons of Kazakhstan, Kazakhstan, 2023.9.8
15. Kasahara M: Challenges for MIDH monosegmentectomy. ILLS Naples 2023, Italy, 2023.9.16
16. Kasahara M: Child health care in Japan. The 4th International Symposium of Human Phenomics, Fudan, China, 2023.11.2
17. Kasahara M: The advancement and prospect of pediatric liver transplantation. 第11回胆道閉鎖症・小児肝移植研究会, Tianjin, China, 2023.11.4
18. Kasahara M: Optimize graft weight in pediatric liver transplantation and immunosuppression regimen: how is it different between children and adults?. Annual congress of Vietnam organ transplantation society, Vietnam, 2023.12.15

[国内学会発表]

1. 笠原群生: 小児肝移植の現状と適応. 沖縄小児科学会地方会, 2023.3.5, 沖縄 (オンライン)
2. 笠原群生: 小児腹部腫瘍に対する外科手術. 第123回日本外科学会定期学術集会, 東京, 2023.4.28

3. 小峰竜二, 阪本靖介, 内田 孟, 清水誠一, 柳 佑典, 中尾俊雅, 兒玉 匡, 福田晃也, 笠原群生: 肝移植により救命し得た腹腔内大量出血をきたした Peliosis hepatis の2例. 第49回日本急性肝不全研究会, 奈良, 2023. 6. 14
4. 内田 孟, 出口晴教, 中尾俊雅, 兒玉 匡, 小峰竜二, 清水誠一, 柳 佑典, 福田晃也, 阪本靖介, 笠原群生: 生体肝移植後患者における超音波ガイド下肝生検の経験. 第39回日本小児肝臓研究会, 神奈川, 2023. 7. 15
5. 酒井愛子, 齊藤博太, 内田 孟, 富永雅規, 福田晃也, 森田篤志, 今川和生, 鈴木忠樹, 笠原群生, 須磨崎 亮: 原因不明の小児急性肝炎により肝移植を要した症例〜研究班における病原体・病態解析について〜. 第39回日本小児肝臓研究会, 神奈川, 2023. 7. 15
6. 福島健志, 鈴木光幸, 越智崇徳, 三原勇太郎, 星野顕宏, 福田晃也, 阪本靖介, 笠原群生, 金兼弘和, 清水俊明: 小葉間胆管消失による閉塞性黄疸をきたしたX連鎖重症複合免疫不全症の乳児例—母児間マイクロキメリズムの関与—. 第39回日本小児肝臓研究会, 神奈川, 2023. 7. 16
7. 近藤宏樹, 中野 聡, 水野忠快, 別所一彦, 長谷川泰浩, 中澤温子, 谷川 健, 東 良紘, 岡本竜弥, 乾 あやの, 今川和生, 笠原群生, 全 陽, 鈴木光幸, 林 久允: 進行性家族性肝内胆汁うっ滞症2型の自己肝自然歴についての疫学調査. 第39回日本小児肝臓研究会, 神奈川, 2023. 7. 16
8. 柳 佑典, 出口晴教, 兒玉 匡, 中尾俊雅, 小峰竜二, 清水誠一, 内田 孟, 福田晃也, 阪本靖介, 笠原群生: 生体肝移植を行った Adams-Oliver 症候群の1例. 第39回日本小児肝臓研究会, 神奈川, 2023. 7. 16
9. 清水誠一, 阪本靖介, 小峰竜二, 福田晃也, 内田 孟, 柳 佑典, 中尾俊雅, 兒玉 匡, 出口晴教, 松本正太郎, 義岡孝子, 笠原群生: Myotubular myopathy における肝紫斑病に起因する肝出血が疑われ生体肝移植を施行した1例. 第39回日本小児肝臓研究会, 神奈川, 2023. 7. 16
10. 齊藤寛貴, 中野 聡, 武藤大和, 平井沙依子, 箕輪 圭, 谷川 健, 阪本靖介, 福田晃也, 笠原群生, 林 久允, 鈴木光幸, 清水俊明: 生体肝移植後に脂肪肝をきたした PFIC5 の1例. 第39回日本小児肝臓研究会, 神奈川, 2023. 7. 16
11. 岡本礼子, 宮坂実木子, 今井絢子, 堤義之, 宮寄治, 阪本靖介, 笠原群生, 早川格, 野坂俊介: 小児肝破裂の原因となった肝紫斑病の1例. 第33回日本救急放射線研究会, 徳島, 2023. 9. 16
12. 笠原群生: 肝芽腫に対する原発巣治療の現状 移植外科医の立場から. 第56回小児血液・がん学会, 北海道, 2023. 9. 29
13. 笠原群生, 福田晃也, 阪本靖介: 更なるチーム医療の深化に必要な+α (技術と情熱) とは?. 第45回日本手術医学会, 神奈川, 2023. 11. 25

[教育講演・パネルディスカッション・ワークショップ・シンポジウムほか 院外 海外]

1. Kasahara M: Panel Discussion, International Meeting of SNUH Alumni of Liver Transplantation (IM SALT), 2023. 6. 15
2. Kasahara M: Surgical tips of donor hepatectomy for pediatric patients. Astellas Transplant Leader Summit (ATLAS) Seoul, Korea, 2023. 6. 16
3. Kasahara M: Personal difficulties of concerns when applying laparoscopic approach in living donor hepatectomy for pediatric patients. Astellas Transplant Leader Summit (ATLAS) Seoul, Korea, 2023. 6. 16

4. Kasahara M: Indications & Considerations for Pediatric Living Donor Liver Transplantation. アジア移植学会, China (Online), 2023. 8. 28
5. Kasahara M: Child Care Health System Challenges in Japan. Singapore Paediatric Society, Singapore, 2023. 8. 23
6. Kasahara M: Progress in Paediatric Liver Transplantation in Japan. National University Hospital Grand Round, Singapore, 2023. 8. 25
7. Kasahara M: Advances In Biliary Atresia Management-What Has Changed Over The Decades?. Wong Hock Boon Masterclass, Singapore, 2023. 8. 25
8. Kasahara M: Child Health care in Japan. The 4th international symposium of human phenomics. China, 2023. 11. 2
9. Kasahara M: The advancement and prospect of pediatric liver transplantation. 第11回中国天津胆道閉鎖症・小児肝移植研究会. China, 2023. 11. 4

[教育講演・パネルディスカッションほか 院外 国内]

1. 笠原群生: 小児腎移植の手技について. 第56回日本臨床腎移植学会教育セミナー, 東京, 2023. 2. 12
2. 笠原群生: 国立成育医療研究センターにおける難病に対する治療の現状. RDD2023 シンポジウム, 東京, 2023. 2. 12
3. 笠原群生: 小児臓器移植 -学生に向けた移植外科医からのメッセージ-, 東京, 2023. 3. 17 (大分県立上野丘高校から訪問)
4. 笠原群生: 小児臓器移植. 東京医療保険大学大学院看護研究科政策医療, 東京, 2023. 5. 16 (講義)
5. 笠原群生: 国立成育医療研究センターにおけるAI ホスピタル事業の実装. 第69回健康医療ネットワークセミナー, 東京, 2023. 10. 3
6. 笠原群生: 小児移植から教えてもらったこと. 群馬大学80周年講演会, 群馬, 2023. 10. 29
7. 笠原群生: 講師 (先天代謝異常症若手セミナー) 「Organ transplantation: Who, when, which organ?」. RRD Foundation 先天代謝異常症若手セミナー. 東京, 2023. 11. 24
8. 笠原群生: 小児臓器移植～医学生に向けた移植外科医からのメッセージ～. 聖マリアンナ医科大学3年生小児科④, 神奈川, 2023. 12. 19

[手術指導・支援]

1. 笠原群生、清水誠一: 小児生体肝移植, 琉球大学病院 沖縄 2023. 4. 11

[司会・座長]

1. 笠原群生: 移植医療者の働き方改革. Liver Transplant Postoperative Management Forum 2023, 座長, 京都, 2023. 2. 4
2. 笠原群生: 症例検討会 (パネルディスカッション). 第35回日本腸管リハビリテーション・小腸移植研究会, 座長, 2023. 3. 4
3. 笠原群生: 肝移植におけるサイズマッチングの問題点 (成人・小児). 第41回日本肝移植学会学術集会, 座長, 愛媛, 2023. 6. 2
4. 笠原群生: 小児肝移植の現状と課題. 第41回日本肝移植学会学術集会, 座長, 愛媛, 2023. 6. 2

5. 笠原群生 : Paediatric Small Bowel Transplantation. IPLTS, 座長, Singapore, 2023. 8. 24
6. 笠原群生 : 京都大学における生体肝移植の歴史と未来への展望. 1st Announcement Liver Transplantation Forum, 座長, 京都, 2023. 9. 20
7. 笠原群生 : 脳死ドナーからの臓器摘出の実際. 第59回日本移植学会RTC教育セミナー, 座長, 京都, 2023. 9. 21
8. 笠原群生 : What is the benefit of machine perfusion. 第49回日本臓器保存生物医学会学術集会, 座長, 北海道, 2023. 10. 20
9. Kasahara M : Pediatric organ transplantation. The 8th Organ Transplant Scientific Conference, Chair, Vietnam, 2023. 12. 15

[社会貢献]

1. キッズセミナー「こどもたちと学ぶ なるほど! 医学体験 外科医を目指す子どものドクタースクール」 東京国際フォーラム 2023. 4. 22

4-2 総合診療部

[原著論文:査読付]

1. Tanaka D, Amagasa S, Kikuchi N, Sasaki R, Uematsu S, Tsuji S, Kubota M, Nakagawa S: Clinical utility and patient distribution of brief resolved unexplained event classification for apparent life-threatening events. *Pediatric emergency care* 2023;39(7):507-510
2. Ishikawa T, Uejima Y, Okai M, Shiga K, Shoji K, Miyairi I, Kato M, Morooka S, Kubota M, Tagaya T, Tsuji S, Aoki S, Ide K, Niimi H, Uchiyama T, Onodera M, Kawai T: Melting temperature mapping method in children: Rapid identification of pathogenic microbe. *Journal of Infection and Chemotherapy* 2023 doi: 10.1016/j.jiac.2023.11.024
3. Murata Y, Masuda H, Moromka S, Yotani N, Morimoto N, Kubota M, Ishiguro A: Kawasaki Disease with Facial Nerve Palsy. *Indian journal of pediatrics* 2023 doi: 10.1007/s12098-023-04835-y
4. Amagasa S, Utsumi S, Moriwaki T, Yasuda H, Kashiura W, Uematsu S, Kubota M: Advanced airway management for pediatric out-of-hospital cardiac arrest: A systematic review and network meta-analysis. *The American journal of emergency medicine* 2023;68:161-169
5. Mori J, Furukawa T, Kodo K, Nakajima H, Yuasa M, Kubota M, Shigematsu Y: A patient with urinary succinylacetone-negative hereditary tyrosinemia type 1. *Pediatrics international* 2023;65(1):e15644 doi:10.1111/ped.15644
6. Tsuboi K, Tsuboi N, Yamashita K, Nakagawa S, Yotani N: Nurses' perception of pediatric pain and pain assessment in the Japanese PICU. *Pediatrics International* 2023;65:1-8
7. Fuseda A, Tagaya T, Tsuji S, Nosaka S, Fujino A, Kubota M, Ishiguro A: Ball-valve syndrome mimicking gastric perforation in a toddler with gastrostomy. *Pediatrics international* 2023;65(1):e15694 doi:10.1111/ped.15694

8. Irayama H, Satomi E, Kizawa Y, Miyazaki M, Tagami K, Sekine R, Suzuki K, Yotani N, Sugano K, Abo H, Sakashita A, Sato K, Nakagawa S, Nakazawa Y, Hamano J, Miyashita M: The effect of palliative care team intervention and symptom improvement using patient-reported outcomes: a multicenter prospective observational study. *Springer Nature*. 2023 July;31:439–439
9. Fukui K, Amari S, Yotani N, Kosaki R, Hata K, Kosuga M, Sago H, Isayama T, Ito Y: A Neonate with Mucopolysaccharidosis Type VII with Intractable Ascites. *American Journal of Perinatology Reports* 2023;13:e25–e28
10. Ishikawa K, Hayakawa I, Masuda H, Kubota M, Ishiguro A: Multisystem Inflammatory Syndrome in Clinically Mild Encephalitis/Encephalopathy with Reversible Splenic Lesion. *Indian J Pediatr* 2023;90(9):940–941.
2023;21:1–2. doi: 10.1007/s12098-023-04542-8.
11. Sato J, Yotani N, Shoji K, Mori T, Fujino A, Hikosaka H, Kubota M, Ishiguro A: Necrotizing fasciitis following rapidly deteriorating neonatal omphalitis with good initial presentation. *IDCases* 2023;32:e01750
12. Amagasa S, Uematsu S, Kubota M, Kashiura M, Yasuda H, Hayakawa M, Yamakawa K, Endo A, Ogura T, Hirayama A, Yasunaga H, Tagami T: Relationship between institutional ventilated COVID-19 case volume and in-hospital death: A multicenter cohort study. *PloS one* 2023;18(6):e0287310
13. Takamura A, Machino A, Sugiyama Y, Sako A, Kohashi K, Yabe C, Ichinose H, Kitanishi F, Kubota M, Miyazaki M: The present circumstances of pediatric practice by family physicians in Japan: Cross sectional research. *Journal of general and family medicine* 2023;24(1):16–23
14. Kondo R, Iijima H, Funaki T, Ishiguro A, Ogimi C: Natural course of acute COVID-19 among healthy children in a tertiary hospital. *Pediatrics International* 2023;65:e15647
15. Nakao-Ise Y, Narita T, Miyamoto S, Watanabe M, Tanaka T, Sowa Y, Iizumi Y, Masuda M, Fujii G, Hirai Y, Nakao T, Takakura H, Mutoh M: Induction of MYCN-amplified neuroblastoma differentiation through NMYC suppression using PPAR- γ antagonist. *Journal of Clinical Biochemistry and Nutrition* 2023;73(3):191–197
16. Okubo Y, Uda K, Ogimi C, Shimabukuro R, Ito K: Clinical Practice Patterns and Risk Factors for Severe Conditions in Pediatric Hospitalizations With Respiratory Syncytial Virus in Japan. A Nationwide Analyses (2018–2022). *The Pediatric Infectious Disease Journal* doi:10.1097/INF.0000000000004181 PMID: 37991478
17. Nakao H, Nomura O, Yoshihara S, Yoshikawa T, Japan Pediatric Society Steering Committee for Board Examinations, Ishiguro A: Association between residents' scholarly activities and publication requirement policy. *Pediatrics International* 2023;65:e15685
18. Takezoe T, Murakami K, Fujishiro J, Horikawa M, Kubota M, Kanamori Y, Takahashi T, Nakano Y, Migita M, Matsufuji H, Sasaki S: Intake levels and main sources of nutrients for Japanese children with motor or intellectual disabilities. *Journal of nutritional science* 2023 doi:10.1017/jns.2023.108

19. 清水俊介, 永井章, 早川格, 宮寄治, 野坂俊介, 窪田満, 石黒精: 治療抵抗性の先天性内反足を契機に発見された尾部退行症候群の1例. 小児内科 2023;55(9):1529-1532
20. 松村健太, 庄司健介, 吉田美智子, 益田博司, 窪田満, 石黒 精: 海外渡航歴のない小児の腸チフス再発例. 小児科臨床 2023;76(5):681-685
21. 菅原碧, 中尾寛, 中村知夫, 宮寄治, 平石のぞみ, 岩間一浩, 窪田満, 石黒精: 在宅診療への移行に成功し、発達を獲得している透明脊椎異骨症の幼児. 日本小児科学会雑誌 2023;127(8):1067-1073
22. 中尾寛, 野村理, 窪田満, 石黒精: 小児病院における小児科専門研修の環境変化が専攻医に与える影響. 日本小児科学会雑誌 2023;127(8):1080-1087
23. 辻聡, 内田佳子, 林紀乃, 窪田満: 剖検にて回盲部に腸重積を認めた乳児突然死症例. 日本小児科学会雑誌 2023;127(3):464-468
24. 酒井伶奈, 益田博司, 堀川美和子, 島袋林秀, 藤村友美, 浦田晋, 大坂溪, 亀井宏一, 石川尊土, 河合利尚, 原真理子, 守本倫子, 福田理紗, 吉田和恵, 窪田満, 石黒精: 腎梗塞と高度感音性難聴を合併した早期乳児川崎病性冠動脈瘤の1例. 日本小児科学会雑誌 2023;127(2):291-291
25. 二木良平, 永井章, 益田博司, 横井匡, 野口杏子, 千先園子, 窪田満, 石黒精: 川崎病再燃と診断し、治療経過中に発症した Stevens-Johnson 症候群の1例. 小児内科 2023;55(3):455-460
26. 木村真子[和田], 富田慶一, 天笠俊介, 内田佳子, 植松悟子, 宮坂実木子, 江口佳孝, 窪田満, 石黒精: 小児の救急外来における股関節 Point-of-care ultrasound. 日本小児救急医学会雑誌 2023;21(3):346-350
27. 鹿島健幹, 多賀谷貴史, 前川貴伸, 江口佳孝, 堤義之, 窪田満, 石黒精: 運動中の軽微な外傷後に生じた恥骨骨髄炎の一例. 日本小児救急医学会雑誌 2023;22(1):57-61
28. 賀藤均, 位田忍, 犬塚亮, 落合亮太, 掛江直子, 坂上博, 櫻井育穂, 福島慎吾, 本田 雅敬, 増子孝徳, 横谷進, 松原知代, 窪田満, 日本小児科学会移行支援に関する提言作成ワーキンググループ委員会: 小児期発症慢性疾患を有する患者の成人移行支援を推進するための提言. 日本小児科学会雑誌 2023;127(1):61-78
29. 船木明日美, 青木美紀子, 島袋林秀: 助産師養成課程における遺伝医療・遺伝看護に関する教育の実態調査. 日本遺伝看護学会 2023;22;9-16
30. 二木良平, 永井章, 益田博司, 横井匡, 野口杏子, 千先園子, 窪田満, 石黒精: 川崎病再燃と診断し、治療経過中に発症した Stevens-Johnson 症候群の1例. 小児内科 2023;55(3):455-460
31. 船田桂子, 余谷暢之, 玉井直敬, 冬木真規子, 肥沼悟郎: 間質性肺炎の難治性咳嗽発作に対し、モルヒネ持続投与で症状緩和を得られた小児. 日本小児科学会雑誌 2023; 127(7):968-972
32. 名古屋祐子, 余谷暢之, 宮下光令, 吉田沙蘭, 津村明美: 小児領域における Care Evaluation Scale(CES)の使用可能性終末期にある子どもと家族へのケアの構造・プロセスに関する文献レビュー. 宮城大学研究ジャーナル 2023;3(1):123-130

〔原著論文:査読なし〕

なし

[症例報告]

1. Takao H, Iijima H, Odagiri R, Hayakawa I, Ogimi C: Acute cerebellar ataxia during acute COVID-19: A case series and review of the literature. Journal of Infection and Chemotherapy 2023;29:792-795
2. 菅原碧, 中尾寛, 中村知夫, 宮寄治, 平石のぞみ, 岩間一浩, 窪田満, 石黒精: 在宅診療への移行に成功し、発達を獲得している透明脊椎異骨症の幼児. 日本小児科学会誌 2023;127 巻:1067-1073

[総説]

1. 窪田満: 【障害児の成人移行支援の課題とトランジション】小児慢性疾患患者の成人移行体制の構築 総合リハビリテーション 2023;51(11):1155-1161
2. 窪田満: 【導入がはじまった拡大新生児スクリーニングの実際と課題】公費事業として承認されるための課題. 日本新生児成育医学会雑誌 2023;35(2):167-170
3. 窪田満: 【How to Follow-up-ハイリスク児フォローアップの必修知識2023】思春期以降 合併症 慢性疾患の成人移行支援. 周産期医学 2023;53(4):565-568
4. 窪田満: 新生児マスキングの継往開来. 日本周産期・新生児医学会雑誌 2023;58(4):669-671
5. 窪田満: 【どうする?小児の便秘・下痢】機能的消化管疾患の診断と長期的な治療戦略 乳児の便秘に対する育児指導. 小児内科 2023;55(3):381-384
6. 窪田満: 【おなかが痛い, 気持ちわるい 子どもの腹部疾患】総論 子どもが「おなかが痛い, 気持ちわるい」と言ったとき. 小児看護 2023;46(2):138-144
7. 余谷暢之: 重篤な疾患をもつ子ども・家族とこれからについて話し合う ～アドバンス・ケア・プランニングの考え方を小児医療に取り入れるために～. 小児科診療 2023;86:101-105
8. 余谷暢之: 重篤な疾患をもつ子ども・家族とこれからについて話し合う～リハビリテーション医療におけるACP 治らないかもしれない障害をもつ患者に対応する. Journal of Clinical Rehabilitation 2023;32:279-283
9. 余谷暢之: 小児神経疾患に対する緩和ケアの実践. 難病と在宅ケア 2023;29:43-46
10. 余谷暢之: 小児がん患児に対する緩和医療. 小児科診療 2023;86:500-502
11. 余谷暢之: 出生前診断をされた児の看取り～最期まで生きるを支えるための支援について考える. 周産期医学 2023;53:797-802
12. 余谷暢之: 重篤な疾患をもつ子ども・家族とこれからについて話し合う～小児領域におけるアドバンス・ケア・プランニングの実践～. 小児保健研究 2023;82:255-257
13. 余谷暢之: 小児在宅医療のこれからを考える～病院勤務医の立場から～. 小児保健研究 2023;82:258-261
14. 余谷暢之: これからの子どものアドボカシー 子どもの医療・保健にかかわる専門職が子どものこえを社会の声にするために. チャイルドヘルス, 診断と治療社 2023;26:685-688
15. 余谷暢之: 小児科医へのアドボカシー教育—小児科専攻医に対するアドボカシー教育プログラム(CHAT). 小児内科, 東京医学社 2023;55:1555-1559
33. 余谷暢之: こどもと向き合う緩和ケア医からのメッセージ. 日経メディカルOnline 2023; 月1連載

[著書]

1. 窪田 満: 最新! 0~6才 病気&ホームケア新百科. 窪田満 (監修), 株式会社ベネッセクリエイティブワークス: 2023
2. 余谷暢之: がん以外の特定集団への緩和医療に関する知識と実践能力〜小児. 緩和医療薬学(改定第2版). 南江堂 2023;182-186
3. 永井章: 心理社会的な問題に関連した便秘、下痢. 小児内科 2023;55(3):331-335
4. 二木良平, 永井章, 益田博司, 横井匠, 野口杏子, 千先園子, 窪田満, 石黒精: 小児内科 2023;55(3):445-460
5. 道端伸明, 永井章: 食行動障害および摂食障害 小児の治療指針. 小児科診療 2023;86(1):848-849
6. 永井章: エキスパートが教える小児の薬物療法 昇圧薬 小児内科 2023;55(増刊号):163-164

[ガイドライン, 報告書, その他]

1. 吉田誠司, 石井和嘉子, 石塚一枝, 神原雪子, 上島奈菜子, 呉宗憲, 永井章, 土生川千珠, 藤井智香子, 松島礼子, 柳本嘉時: 小児起立性調節障害診療ガイドライン改訂第3版 起立性調節性障害ワーキンググループ 子どもの心とからだ 日本小児心身医学会 2023;32(1):42-91

[学会発表]

1. Iijima H, Kubota M: A simple screening method for heterozygous female patients with ornithine transcarbamylase deficiency. The 6th Asian Congress on Inherited Metabolic Diseases, Bangkok, 2023. 3. 23
2. 山元志穂, 飯島弘之, 永井章, 山本裕輝, 庄司健介, 中野雅之, 窪田満: 悪性腫瘍との鑑別を要した頸部放線菌症の一例. 第687回日本小児科学会東京都地方会, 東京, 2023. 1. 14
3. 窪田 満: 遺伝的背景を持つ小児慢性特定疾病児童への支援. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 14
4. 中村知夫, 諸岡進太郎, 伊東藍, 岩本彰太郎, 竹本潔: 機械学習モデルを用いた医療的ケア児のための包括的支援サービスの評価手法の開発. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 14
5. 中尾寛, 野村理, 永田知瑛, 石黒精: 臨床研究教育におけるピアラーニングの効果. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 14
6. 伊東藍, 飯島弘之, 中村知夫, 庄司健介, 窪田満: COVID-19の小児における基礎疾患の有無と臨床像・医療資源利用の関連についての検討. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 14
7. 窪田 満: 診断エラーと向き合う. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 15
8. 余谷暢之, 諫山哲哉, 伊藤裕司: 13/18 トリソミーの無呼吸発作に対するガバペンチンの有効性についての後方視的検討. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 16
9. 益田博司, 小野博, 今村忠嗣, 藤村友美, 西健太郎, 進藤考洋, 亀井宏一, 窪田満: 巨大冠動脈瘤を残した小児COVID-19関連多系統炎症性症候群(MIS-C)の1例. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 16
10. 酒井伶奈, 益田博司, 堀川美和子, 島袋林秀, 藤村友美, 浦田晋, 大坂溪, 亀井宏一, 石川尊士, 河合利尚, 原真理子, 守本倫子, 福田理紗, 吉田和恵, 窪田満, 石黒 精: 腎梗塞と高度感音聴覚を合併した早期乳児川崎病性冠動脈瘤の1例. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京,

2023. 4. 16

11. 石川和, 益田博司, 小池研太郎, 早川格, 窪田満, 石黒精: 川崎病主要5症状を呈し、可逆性脳梁膨大部病変を伴う軽症脳炎・脳症(MERS)を合併した小児 COVID-19 関連多系統炎症性症候群(MIS-C)の1例. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 16
12. 窪田 満: 総論-成人移行支援における小児科医のあたらしい役割. 第34回日本小児科医会総会フォーラム in あいち, 愛知, 2023. 6. 24
13. 中村知夫, 藤澤剛彦, 高橋航: 機械学習モデルを用いた医療的ケア児のための包括的支援サービスの評価手法の開発学会名. 第5回日本在宅医療連合学会大会, 新潟, 2023. 6. 25
14. 中村知夫: 小児在宅患者の健康状態の判断と多職種間での情報共有を支援するアプリの開発の取り組み. 第59回日本周産期・新生児医学会学術集会, 三重, 2023. 7. 11
15. 二木良平, 島袋林秀, 益田博司, 中尾寛, 堀川美和子, 余谷暢之, 窪田満: タナトフォリック骨異形成症例の長期管理における Bio-Psycho-Social アプローチ. 第692回日本小児科学会東京都地方会講話会, 東京, 2023. 9. 9
16. 酒井伶奈, 益田博司, 小森園梨奈, 中村知夫, 窪田満, 石黒精: COVID-19 の発熱が遷延し冠動脈拡張を契機に不全型川崎病と診断した1例. 第692回日本小児科学会東京都地方会講話会, 東京, 2023. 9. 9
17. 金喜栄, 堀川美和子, 島袋林秀, 窪田満, 新井大, 石黒精: 初診時の小球性貧血所見が重要であった Crohn 病症例. 第684回日本小児科学会東京都地方会講話会, 東京, 2023. 9. 10
18. 中村知夫: 機械学習モデルを用いた医療的ケア児のための包括的支援サービス計画作成支援の試み. 第12回日本小児在宅医療支援研究会, 埼玉, 2023. 9. 23
19. 益田博司, 山田全毅, 船木孝則, 中尾寛, 島袋林秀, 中村知夫, 窪田満: COVID-19 流行下における呼吸器ウイルス感染症と川崎病発症の関連の検討. 第43回日本川崎病学会学術集会, 大阪, 2023. 9. 30
20. 近藤せい, 青木美紀子, 島袋 林秀: 血友病保因者の分娩方法選択における経験. 第22回日本遺伝看護学会学術大会, 東京, 2023. 10. 7
21. 東志勇, 伊藤玲子, 大坂溪, 堀川美和子, 中野雅之, 小椋雅夫, 島袋林秀, 義岡孝子, 窪田満, 石黒精: 全身型若年性特発性関節炎に伴うマクロファージ活性化症候群の経過で見られた小児の急性肝不全. 第50回日本小児栄養消化器肝臓学会学術集会, 宮城, 2023. 10. 21
22. 中村知夫, 伊東藍: 小児在宅患者の健康状態の判断と多職種間での情報共有を支援するアプリの開発の取り組み. 第48回日本重症心身障害学会学術集会, 千葉, 2023. 10. 26
23. 中村知夫: 重症心身障害児者の移行期医療. 第48回日本重症心身障害学会学術集会 シンポジウム1, 千葉, 2023. 10. 26
24. 伊東藍, 上原陽治, 生田泰久, 甘利昭一郎, 丸山秀彦, 伊藤裕司, 諫山哲哉: 当院NICUにおける重症患者に対する終末期の積極的治療の差し控え・中止—20年間の後方視的検討をふまえて— 第67回日本新生児育成医学会学術集会 シンポジウム, 神奈川, 2023. 11. 3
25. 中村知夫: OSA Beyond A&T Difficulties in management of Pediatric OSA. The role of general pediatricians in the management of OSA. 9th Asia Pacific Pediatric Otolaryngology Group Conference(APOG2023), 大分, 2023. 11. 9
26. 相葉裕幸, 庄司健介, 竹澤芳樹, 中川聡, 中尾寛, 宮坂実木子, 大宜見力: 犬咬傷による新生児脳膿瘍の1例. 第21回世田谷区医師会学会, 東京, 2023. 12. 2

〔講演〕

1. 余谷暢之: 地域・多職種連携についての教育の実践～インテンシブコースの取り組み～. 第13回大阪小児在宅医療を考える会, 大阪, 2023. 1. 22
2. 余谷暢之: 小児のアドバンス・ケア・プランニングについて考えてみる. 筑波大学小児緩和ケアチ

ームカンファレンス， 茨城， 2023. 1. 27

3. 窪田満: 移行期医療支援センターの必要性と今後のあり方. 三重県移行期医療支援体制を考える会, 三重県, 2023. 2. 3
4. 余谷暢之: 胎児期からの緩和ケアの実践. 第12回高知周産期こころの研究会, 高知, 2023. 2. 12
5. 余谷暢之: がん以外の疾患をもつ子どもたちに緩和ケアを届けるために大切にしたいこと. 兵庫県立こども医療センター 小児緩和ケアセミナー, 兵庫, 2023. 2. 14
6. 永井章: 思春期の診断. 第26回日本病院総合診療学会 シンポジウム, 群馬, 2023. 2. 18
7. 余谷暢之: アドバンス・ケア・プランニングを実践するために大切にしたいこと. 君津中央病院 令和4年度医療倫理講演会, 千葉, 2023. 2. 24
8. 余谷暢之: 小児集中治療領域における終末期ケアの課題～多職種で関わる際に大切にしたいこと～. 第50回日本集中治療医学会学術集会 シンポジウム20, 京都, 2023. 3. 3
9. 余谷暢之: 緩和ケアの視点から見た小児終末期医療・ケアの実態と現場の葛藤. 第13回日本小児科学会倫理委員会公開フォーラム, 東京, 2023. 3. 5
10. 余谷暢之: こどもたちのこえを社会に届けるために. 第15回HPS国際シンポジウム・研究大会, 静岡, 2023. 3. 12
11. 永井章: 診断エラーと向き合う, 小児心身医学における診断エラー. 126回日本小児科学会 総合シンポジウム4, 東京, 2023. 4. 15
12. 窪田満: 小児発症慢性疾患の移行期支援について. 小児てんかん診療を考える会, web, 2023. 5. 19
13. 余谷暢之: こどもの症状を捉えて, 介入する. 第65回日本小児神経学会学術集会, 岡山, 2023. 5. 24
14. 余谷暢之: こどもたちと「いのち」について考える 医療・保健従事者だからできることとは. 第70回日本小児保健協会学術集会, 神奈川, 2023. 6. 18
15. 永井章: 乳幼児の身体、発達に障害を認めたら・・・ 家族にどのように伝えどう支援していくか. 第24回ロービジョン学会 教育講演, 東京, 2023. 6. 30
16. 永井章: 小児の慢性疲労症候群. 第65回日本心身医学会 シンポジウム, 東京, 2023. 7. 1
17. 余谷暢之: 周産期緩和ケアの取り組み～胎児期からの緩和ケアとの協働の可能性について考える～. 第28回日本緩和医療学会学術大会, 兵庫, 2023. 7. 1
18. 余谷暢之: 小児科医がこどものこえを社会の声にするために～小児科医によるこどもアドボカシー活動～. 第36回日本小児救急医学会学術集会, 千葉, 2023. 7. 23
19. 中村知夫: こどもの発達と病態に基づく医療的ケア児の栄養管理. 令和5年度第1回世田谷区薬剤師会在宅研修会, 東京, 2023. 7. 25
20. 窪田満: CCSの移行期支援関連研究について. 令和5年度厚労科研清水班, 東京都, 2023. 8. 3
21. 余谷暢之: Lifeを支える小児緩和ケア. 日本緩和医療学会第5回北海道支部学術大会, 北海道, 2023. 8. 26
22. 余谷暢之: こどものこえを社会に届けるために～小児科医ができるアドボカシー活動について考える～. 横浜General Pediatrics フォーラム, 神奈川, 2023. 9. 13
23. 余谷暢之: こどもたちに緩和ケアを届けるために大切にしたいこと. 第2回北海道・東北ブロック小児がん相談支援研修, Web, 2023. 9. 16
24. 中村知夫: 少子化の中で、医療的ケア児を通して、小児科のこれからを考える「葛飾区で医療的ケア児にどの様に関わりますか?」. 葛飾区小児科医会小児科集談会講演会, 東京, 2023. 9. 19
25. 余谷暢之: 非がん疾患における緩和ケアの視点. 第55回日本小児呼吸器学会学術集会, 兵庫, 2023. 10. 7

26. 中村知夫: 成育医療研究センターにおける医療的ケア児支援の取り組み—いつまでも地域で暮らせることを目指して—。令和5年度「東京都子ども救命センター」地域連携会議。東京, 2023. 10. 11
27. 余谷暢之: 重症心身障害児者の医療における代理意思決定支援について考える～本人を主語に関わるために～。第48回日本重症心身障害学会学術集会, 千葉, 2023. 10. 27
28. 余谷暢之: わが国における小児緩和ケアの実践。小児緩和ケアフォーラム2023, Web, 2023. 11. 4
29. 余谷暢之: 緩和ケアの視点から見た新生児の症状緩和と意思決定支援。第26回京浜新生児医療懇話会, Web, 2023. 11. 25
30. 永井章: 思春期診療を考える。第5回成育セミナー, web, 2023. 11. 30
31. 余谷暢之: 小児の緩和ケアについて考える。小児薬物療法研修会, 東京, 2023. 12. 12
32. 余谷暢之: 重症心身障害児者医療における代理意思決定支援について考える。神戸医療福祉センターにこここハウス講演会 ACP の基礎を学ぶ, Web, 2023. 12. 15
33. 余谷暢之: こどものこえを社会に届ける小児科医の育成～小児科医に対するアドボカシー教育の実践～。第22回日本小児医学教育研究会, 神奈川, 2023. 12. 16
34. 余谷暢之: 最期まで「生きる」を支える。第51回鹿児島小児在宅ケア・人工呼吸療法研究会記念講演会, Web, 2023. 12. 20
35. 余谷暢之: こどもの終末期について考える。第2回臓器提供を考えるコーディネーターワークショップ, 東京, 2023. 12. 21
36. 余谷暢之: 治癒が望めない病気を持つ子どもと家族に関わる際に大切にしたいこと。都立特別支援学校(病弱教育)長 実践研究会, 東京, 2023. 12. 26

[広報]

1. 中村知夫: 小児の人工呼吸管理のヒント 自発呼吸から呼吸管理を考える。令和5年度 成育医療研究センター 小児在宅技術講習会 Part4, 2023. 10. 12
2. 中村知夫: 子どもの育ちと命を支える訪問看護 医療的ケア児の医学的理解。令和5年度 医療的ケア児の在宅医療を支える訪問看護研修, 2023. 10. 24～11. 24 動画配信
3. 中村知夫: 「のびしなプロフェッショナルスクール」「医療的ケア児の理解と保護者支援」。品川区保育課の研修, 2023. 12. 1～2024. 2. 10 動画配信
4. 中村知夫: 小児の呼吸と睡眠を考える。国立成育医療研究センター総合診療部グランドラウンド, 2023. 12. 26
5. 中村知夫: この先ずっとは続かないかもしれない「かけがえのない娘の命。だから今を大切に、できるだけの愛を与えたい、母の思い【体験談・医師監修】」。たまひよオンライン, 2023. 10. 15 配信

4-3 救急診療部

[原著論文: 査読付]

1. Amagasa S, Utsumi S, Moriwaki T, Yasuda H, Kashiura M, Uematsu S, Kubota M: Advanced airway management for pediatric out-of-hospital cardiac arrest: A systematic review and network meta-analysis. Am J Emerg Med 2023;68:161-169
2. Amagasa S, Uematsu S, Kubota M, Kashiura M, Yasuda H, Hayakawa M, Yamakawa K, Endo A, Ogura T, Hirayama A, Yasunaga H, Tagami T: Relationship between institutional ventilated COVID-19 case volume and in-hospital death: A multicenter cohort study. PLoS One 2023;18:e0287310
3. Tanaka D, Amagasa S, Kikuchi N, Sasaki R, Uematsu S, Tsuji S, Kubota M, Nakagawa S: Clinical

- Utility and Patient Distribution of Brief Resolved Unexplained Event Classification for Apparent Life-Threatening Events. *Pediatr Emerg Care* 2023;39:507-510
4. Utsumi S, Amagasa S, Yasuda H, Oishi T, Kashiura M, Moriya T: Targeted Temperature Management in Pediatric Traumatic Brain Injury: A Systematic Review and Network Meta-Analysis. *World Neurosurg* 2023;S1878-8750:00071-2
 5. Kashiura M, Kishihara Y, Ozawa H, Amagasa S, Yasuda H, Moriya T: Intra-aortic balloon pump use in out-of-hospital cardiac arrest patients who underwent extracorporeal cardiopulmonary resuscitation. *Resuscitation* 2023;182:109660
 6. Shiohara T, Miyazaki O, Hasegawa Y, Uematsu S, Nosaka S: Solitary whirlpool sign demonstrated with testicular torsion on ultrasonography. *Pediatr Int* 2023;65(1):e15566
 7. Kram YE, Sato M, Yamamoto-Hanada K, Toyokuni K, Uematsu S, Kudo T, Yamada Y, Ohtsuka Y, Matsumoto K, Arai K, Fukuie T, Nomura I, Ohya Y: Development of an action plan for acute food protein-induced enterocolitis syndrome in Japan. *World Allergy Organ J* 2023;16(5):100772
 8. Ishikawa T, Uejima Y, Okai M, Shiga K, Shoji K, Miyairi I, Kato M, Morooka S, Kubota M, Tagaya T, Tsuji S, Aoki S, Ide K, Niimi H, Uchiyama T, Onodera M, Kawai T: Melting temperature mapping method in children: Rapid identification of pathogenic microbes. *J Infect Chemother* 2023;29:S1341-321X(23)00301-X. doi: 10.1016/j.jiac.2023.11.024. Epub ahead of print.
 9. Yasuda M, Shoji K, Tomita K, Uchida Y, Uematsu S, Yoshida K, Kono N, Funatsu M, Miyairi I: Clinical and Laboratory Diagnosis of Exanthems Among Japanese Children Younger Than 6 Years Old in the Post-Measles-Rubella Vaccine Era. *Pediatr Infect Dis J* 2023;Online ahead of print
 10. Ohnishi S, Yamamoto-Hanada K, Sato M, Uematsu S, Ohya Y: Food protein-induced enterocolitis syndrome is an important differential diagnosis of vomiting in pediatric emergency. *Pediatric International* 2023;65(1):e15675
 11. Tanaka D, Amagasa S, Kikuchi N, Sasaki R, Uematsu S, Tsuji S, Kubota M, Nakagawa S: Clinical Utility and Patient Distribution of Brief Resolved Unexplained Event Classification for Apparent Life-Threatening Events. *Pediatr Emerg Care* 2023;39:507-510
 12. Iwai C, Sasaki R, Yoshioka T: Toward the prevention of group B streptococcal early onset sepsis: the importance of defining target populations and second-line antimicrobials in line with current guideline recommendations. *Am J Obstet Gynecol* 2023;20:S0002-9378(23)02167-1
 13. Tanaka D, Amagasa S, Kikuchi N, Sasaki R, Uematsu S, Tsuji S, Kubota M, Nakagawa S: Clinical Utility and Patient Distribution of Brief Resolved Unexplained Event Classification for Apparent Life-Threatening Events. *Pediatr Emerg Care* 2023;1;39(7):507-510
 14. 下川尚子, 是松聖悟, 植松悟子ら: 小児頭部外傷時のCT撮影に関する医師の意識調査. 脳と発達 2023;1:27-33
 15. 檜林敦, 神谷太郎, 岡本健太郎, 本荘哲, 道端伸明, 北野尚美, 佐々木隆司, 巻和佳奈, 森崎菜穂, 江原朗, 清澤伸幸, 奈倉道明, 杉浦至郎, 水野克己, 真部淳: 病院における小児科及び新生児科の診療体制に係る調査(2021年度病院調査). 日本小児科学会雑誌 2023;1097-1132

[原著論文: 査読なし]

なし

[症例報告]

1. Kikuchi N, Ide K, Tomita K, Hayakawa I, Miyasaka M, Abe Y: A case of rapid progressive fatal encephalopathy associated with coronavirus disease 2019. *Pediatr Int* 2023;65(1):e15455. doi:10.1111/ped.15455.
2. Fuseda Y, Tagaya T, Tsuji S, Nosaka S, Fujino A, Kubota M, Ishiguro A: Ball-valve syndrome mimicking gastric perforation in a toddler with gastrostomy. *Pediatr Int* 2023;65(1):e15694. doi:10.1111/ped.15694.
3. 鹿島 健幹, 多賀谷貴史, 前川 貴伸, 江口 佳孝, 堤 義之, 窪田 満, 石黒 精: 運動中の軽微な外傷後に生じた恥骨骨髓炎の一例. *日本小児救急医学会雑誌* 2023 ; 22 巻 1 号 : 57-61
4. 辻聡, 内田佳子, 林紀乃, 窪田満: 剖検にて回盲部に腸重積を認めた乳児突然死症例. *日本小児科学会* 2023 ; 127 : 464-468

[総説]

なし

[著書]

1. 植松悟子: 無呼吸. (日本小児救急医学会,) 小児救急標準テキスト, 中外医学社, 2023 ; 72-73
2. 植松悟子: 恥骨上膀胱穿刺. (日本小児救急医学会,) 小児救急標準テキスト, 中外医学社, 2023 ; 525-526
3. 多賀谷貴史: Chapter I 症候編[6]活気不良の乳児. (日本小児救急医学会,) 小児救急標準テキスト, 中外医学社, 2023 ; 18-19
4. 多賀谷貴史: Chapter I 症候編[7]顔色不良. (日本小児救急医学会,) 小児救急標準テキスト, 中外医学社, 2023 ; 20-21
5. 富田 慶一: 当院における小児の救急搬送症例の検討. (プレホスピタル・ケア編集室,) プレホスピタル・ケア = Prehospital care, 東京法令出版, 2023 ; 92-94
6. 崎原永立, 新里祐太郎, 柏浦正広, 安田英人: 上気道閉塞の緊急度を見誤らない!. (新里裕太郎, 柏浦正広, 安田英人,) *ER 虎の巻ピットフォールから学ぶ救急診療の要*, 中外医学社, 2023 ; 97-101
7. 崎原永立, 新里祐太郎, 柏浦正広, 安田英人: 高体温には必ず原因がある!. (新里裕太郎, 柏浦正広, 安田英人,) *ER 虎の巻ピットフォールから学ぶ救急診療の要*, 中外医学社, 2023 ; 213-217
8. 崎原永立, 新里裕太郎, 柏浦正広, 安田英人: 発熱と高体温を鑑別するポイントとそれぞれの鑑別疾患!. (新里裕太郎, 柏浦正広, 安田英人,) *ER 虎の巻ピットフォールから学ぶ救急診療の要*, 中外医学社, 2023 ; 218-222
9. 崎原永立, 新里裕太郎, 柏浦正広, 安田英人: 胸痛を伴うアナフィラキシーに注意! Kounis 症候群を見逃さない. (新里裕太郎, 柏浦正広, 安田英人,) *ER 虎の巻ピットフォールから学ぶ救急診療の要*, 中外医学社, 2023 ; 312-316
10. 崎原永立, 新里裕太郎, 柏浦正広, 安田英人: それって本当にアナフィラキシー? アナフィラキシ

—mimics. (新里裕太郎, 柏浦正広, 安田英人,) ER 虎の巻ピットフォールから学ぶ救急診療の要, 中外医学社, 2023 ; 317-321

11. 崎原永立, 新里裕太郎, 柏浦正広, 安田英人: 無症候性細菌尿の治療対象. (新里裕太郎, 柏浦正広, 安田英人,) ER 虎の巻ピットフォールから学ぶ救急診療の要, 中外医学社, 2023 ; 387-391
12. 崎原永立, 安田英人: 中心性肥満. (清水敬樹,) BMI over 30 肥満患者のER・ICU, 診断と治療社, 2023 ; 224-227

[ガイドライン、報告書、その他]

1. 植松悟子: 子どもの傷害情報の解析に基づいた外傷と傷害予防のための研究. 厚生労働科学研究補助金(次世代育成基盤研究事業)「子どもの傷害情報の解析に基づいた外傷と傷害予防のための研究」, 総括研究報告書「子どもの傷害情報の解析に基づいた外傷と傷害予防のための研究」, 2023 ; 3-10

[学会発表]

1. 植松悟子: 小児科医が救急外来で果たすべき一歩先の領域 - 救急外来が子どもたちのセーフティーネットであるために -. 第 126 回日本小児科学会学術集会 分野別シンポジウム, 東京, 2023. 4. 16
2. 天笠俊介, 内海秀, 森脇太郎, 安田英人, 柏浦正広, 植松悟子, 窪田満: 小児院外心停止蘇生中の病院前における高度な気道確保の効果: システムティックレビューとネットワークメタ解析. 第 126 回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 16
3. 内田佳子, 余谷暢之, 壺井伯彦, 西村奈穂, 植松悟子, 松本正太郎, 窪田満: 救急・集中治療部門における遺族支援～電子メールを用いた窓口の設置の取り組み～. 第 126 回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 16
4. 相葉裕幸, 三井真理, 大西志麻, 内田佳子, 植松悟子: 小児周産期病院における性虐待被害児への性感染症スクリーニング検査の実態について. 日本小児保健協会学術集会, 神奈川, 2023. 6
5. 植松悟子: 子どもの性被害・性虐待に立ち向かう 性虐待・性被害の診療～救急外来でできることから一歩ずつ～. 第 70 回日本小児保健協会学術集会 シンポジウム 1, 神奈川, 2023. 6. 16
6. 押方真, 天笠俊介, 植松悟子, 窪田満: 早期乳児発熱における重症細菌感染症の有無による MultiplexPCR 検査陽性率の比較. 第 36 回日本小児救急医学会学術集会, 東京, 2023. 7. 22
7. 森 崇晃, 井上 信明, 浮山 越史, 内田 正志, 城戸 崇裕, 黒澤 寛史, 竹井 寛和, 櫻井 淑男, 多田 明良, 富田慶一, 野中 航仁, 福原 信一, 吉元 和彦: 日本版小児 POCUS 教育コンセンサス作成の試み 小児 POCUS 教育コンセンサス WG 活動報告. 第 36 回日本小児救急医学会学術集会, 千葉, 2023. 7. 22
8. 黒木 興心, 富田 慶一, 窪田 満, 植松 悟子: Point-of-care ultrasound で舌根部に嚢胞性病変を描出した早期乳児喘鳴の 2 例. 第 36 回 日本小児救急医学会学術集会, 千葉, 2023. 7. 22
9. 今井 健太, 富田 慶一, 植松 悟子: 救急外来における股関節 Point-of-care ultrasound 偽陰性 4 症例についての検討. 第 36 回 日本小児救急医学会学術集会, 千葉, 2023. 7. 22
10. 植松悟子: あなたならどうする? 災害時の小児患者対応. 第 36 回日本小児救急医学会学術集会 シンポジウム 7, 千葉, 2023. 7. 27
11. 佐々木隆司, 松居宏樹, 康永秀生: 乳児期の RS ウイルス感染と気管支喘息との関連. 臨床疫学会 第 6 回年次学術集会, 東京, 2023. 11. 11

12. 安田真人, 天笠俊介, 柏浦正広, 安田英人, 植松悟子: 小児院外心停止患者の蘇生時間と1か月後の神経学的転帰の関連. 第51回日本救急医学会総会学術集会, 東京, 2023. 11. 28
13. 天笠俊介, 岩元晋太郎, 柏浦正広, 安田英人, 岸原悠貴, 植松悟子: 小児院外心停止における早期高度気道確保の有効性. 第51回日本救急医学会総会学術集会, 東京, 2023. 11. 29
14. 大石高稔, 天笠俊介, 岩元晋太郎, 柏浦正広, 安田英人, 岸原悠貴, 植松悟子: 小児院外心停止における早期アドレナリン投与の有効性. 第51回日本救急医学会総会学術集会, 東京, 2023. 11. 29
15. 内海秀, 天笠俊介, 森脇太郎, 植松悟子: 小児の筋骨格系損傷の痛みに対する内服鎮痛剤の検討. 第51回日本救急医学会総会学術集会, 東京, 2023. 11. 29
16. 崎原永立, 中島千里, 平良悠, 岸原悠貴, 富永経一郎, 安田英人, 田村洋行, 柏浦正広, 守谷俊: 原発性腹膜炎を合併したStreptococcal Toxic Shock Syndrome (STSS). 第51回日本救急医学会総会学術集会, 東京, 2023. 11. 29
17. 植松悟子: 救急外来における児童虐待対応～当院における対応の実際～. 第51回日本救急医学会総会学術集会 パネルディスカッション, 東京, 2023. 11. 30
18. 大西志麻, 天笠俊介, 植松悟子, 萩原佑亮: Validation of modified LEMON score in predicting difficult intubation in pediatric emergency department. 第51回日本救急医学会総会学術集会, 東京, 2023. 11. 30

[講演]

1. 植松悟子: 嘔吐を主訴にした疾患、心筋炎から消化管異物まで. 令和4年度地域小児医療研修事業第2回小児救急研修会, web, 2023. 2. 10
2. 植松悟子: 救急外来を受診した小児コロナ患者の現状. 令和4年度地域小児医療研修事業第2回小児救急研修会, web, 2023. 2. 10
3. 植松悟子: 小児救急医療. 令和4年度医師救急医療業務実地修練, web, 2023. 2. 10
4. 内田佳子: 乳児の事故予防と健康管理. 社会福祉法人東京育成会乳児委託研修, 東京, 2023. 4. 9
5. 富田 慶一: 救急外来における股関節 Point-of-care ultrasound 偽陰性4症例についての検討. 第8回 初歩から学ぶ POCUS WEB セミナー 救急外来 皮膚・運動器編, web, 2023. 10. 18
6. 植松悟子: 小児救急医療. 令和5年度医師救急医療業務実地修練, 東京, 2023. 12. 6

[広報活動]

1. 富田慶一: 小児救急POCUS事情. 成育救急Webinar2023, 2023. 6. 4
2. 高瀬亮: 超音波ガイド下末梢静脈路確保～見て触って透かしてのその次へ～. 成育救急Webinar2023, 2023. 6. 4.
3. 菊池奈々絵: ERで出会う軽度の意識障害のみかた. 成育救急Webinar2023, 2023. 6. 4

4-4 小児科内科系専門診療部

消化器科

[原著論文：査読付] (Reviewed Paper)

1. Ito N, Kudo T, Eguchi H, Jimbo K, Furuhashi A, Okuno T, Takeuchi I, Arai K, Ishige T, Okazaki Y, Shimizu T: Attenuated Expression of SLC02A1 Caused by DNA Methylation in Pediatric Inflammatory Bowel Disease. *Inflamm Bowel Dis*. 2023 Dec 5;29(12):1920-1928.
2. Darma A, Arai K, Wu JF, Ukrapol N, Hagiwara SI, Oh SH, Treepongkaruna S; on behalf Endoscopy Subcommittee of the Scientific Committee Asian Pan-Pacific Society of Pediatric Gastroenterology; Hepatology and Nutrition (APPSPGHAN): Impact of the Coronavirus Disease 2019 Pandemic on Pediatric Gastrointestinal Endoscopy: A Questionnaire-based Internet Survey of 162 Institutional Experiences in Asia Pacific. *Pediatr Gastroenterol Hepatol Nutr*. 2023 Nov;26(6):291-300.
3. Nomura S, Hirano Y, Takeuchi I, Shimizu H, Arai K: Anxiety, Depression, and Quality of Life in Parents of Adolescents with Inflammatory Bowel Disease: A Longitudinal Study. *Pediatr Gastroenterol Hepatol Nutr*. 2023 Sep;26(5):239-248.
4. Oka I, Funayama R, Shimizu H, Takeuchi I, Nojiri S, Shimizu T, Arai K: Predictors of Small Bowel Transit Time for Capsule Endoscopy in Children with Inflammatory Bowel Disease. *Pediatr Gastroenterol Hepatol Nutr*. 2023 Jul;26(4):181-192.
5. Yokoyama K, Yamamoto Y, Nambu R, Hagiwara SI, Abukawa D, Mizuochi T, Kudo T, Sado T, Iwata N, Ishige T, Iwama I, Kumagai H, Arai K, Shimizu T: Safety and efficacy of vedolizumab in pediatric patients with ulcerative colitis: multicenter study in Japan. *J Gastroenterol Hepatol*. 2023 Jul;38(7):1107-1115.
6. Yasuda R, Arai K, Kudo T, Nambu R, Aomatsu T, Abe N, Kakiuchi T, Hashimoto K, Sogo T, Takahashi M, Etani Y, Kato K, Yamashita Y, Mitsuyama K, Mizuochi T: Serum leucine-rich alpha-2 glycoprotein and calprotectin in children with inflammatory bowel disease: A multicenter study in Japan. *J Gastroenterol Hepatol*. 2023 Jul;38(7):1131-1139.
7. Kram YE, Sato M, Yamamoto-Hanada K, Toyokuni K, Uematsu S, Kudo T, Yamada Y, Ohtsuka Y, Matsumoto K, Arai K, Fukuie T, Nomura I, Ohya Y: Development of an action plan for acute food protein-induced enterocolitis syndrome in Japan. *World Allergy Organ J*. 2023 May 9;16(5):100772.
8. Nambu R, Arai K, Kudo T, Murakoshi T, Kunisaki R, Mizuochi T, Kato S, Kumagai H, Inoue M, Ishige T, Saito T, Noguchi A, Yodoshi T, Hagiwara SI, Iwata N, Nishimata S, Kakuta F, Tajiri H, Hiejima E, Toita N, Mochizuki T, Shimizu H, Iwama I, Hirano Y, Shimizu T; JPIBD-R: Clinical outcome of ulcerative colitis with severe onset in children: a multicenter prospective cohort study. *J Gastroenterol*. 2023 May;58(5):472-480.
9. Takeuchi I, Yanagi K, Takada S, Uchiyama T, Igarashi A, Motomura K, Hayashi Y, Nagano N, Matsuoka R, Sugiyama H, Yoshioka T, Saito H, Kawai T, Miyaji Y, Inuzuka Y, Matsubara Y, Ohya Y, Shimizu T, Matsumoto K, Arai K, Nomura I, Kaname T, Morita H: STAT6 gain-of-function variant exacerbates multiple allergic symptoms. *J Allergy Clin Immunol*. 2023 May;151(5):1402-1409. e6.
10. Fujino A, Fuchimoto Y, Mori T, Kano M, Yamada Y, Ohno M, Baba Y, Isogawa N, Arai K, Yoshioka T, Abe M, Kanai N, Takagi R, Maeda M, Umezawa A: Evaluation of safety and

efficacy of autologous oral mucosa-derived epithelial cell sheet transplantation for prevention of anastomotic restenosis in congenital esophageal atresia and congenital esophageal stenosis. *Stem Cell Res Ther.* 2023 Apr 13;14(1):86.

11. Ishige T, Shimizu T, Watanabe K, Arai K, Kamei K, Kudo T, Kunisaki R, Tokuhara D, Naganuma M, Mizuochi T, Murashima A, Inoki Y, Iwata N, Iwama I, Koinuma S, Shimizu H, Jimbo K, Takaki Y, Takahashi S, Cho Y, Nambu R, Nishida D, Hagiwara SI, Hikita N, Fujikawa H, Hosoi K, Hosomi S, Mikami Y, Miyoshi J, Yagi R, Yokoyama Y, Hisamatsu T: Correction to: Expert consensus on vaccination in patients with inflammatory bowel disease in Japan. *J Gastroenterol.* 2023 Apr;58(4):431-432.
12. Lee WS, Arai K, Alex G, Treepongkaruna S, Kim KM, Choong CL, Mercado KC, Darma A, Srivastava A, Aw MM; APPSPGHAN PIBD Working Group: Management and monitoring of pediatric inflammatory bowel disease in the Asia-Pacific region: A position paper by the Asian Pan-Pacific Society for Pediatric Gastroenterology, Hepatology, and Nutrition (APPSPGHAN) PIBD Working Group: Surgical management, disease monitoring, and special considerations. *J Gastroenterol Hepatol.* 2023 Apr;38(4):510-522.
13. Nagashima S, Yamamoto M, Inuzuka Y, Irahara M, Miyaji Y, Tadaki H, Ito S, Masuda S, Ito Y, Saito Y, Kobayashi S, Morita H, Yoshioka T, Shimizu H, Arai K, Ohya Y, Saito H, Matsumoto K, Nomura I: Tolerability and safety of a new elimination diet for pediatric eosinophilic gastritis and duodenitis. *Allergol Int.* 2023 Apr;72(2):306-315.
14. Ishige T, Shimizu T, Watanabe K, Arai K, Kamei K, Kudo T, Kunisaki R, Tokuhara D, Naganuma M, Mizuochi T, Murashima A, Inoki Y, Iwata N, Iwama I, Koinuma S, Shimizu H, Jimbo K, Takaki Y, Takahashi S, Cho Y, Nambu R, Nishida D, Hagiwara SI, Hikita N, Fujikawa H, Hosoi K, Hosomi S, Mikami Y, Miyoshi J, Yagi R, Yokoyama Y, Hisamatsu T: Expert consensus on vaccination in patients with inflammatory bowel disease in Japan. *J Gastroenterol.* 2023 Feb;58(2):135-157.
15. 高橋達也, 清水泰岳, 義岡孝子, 吉年俊文, 藤田貴子, 山本陽子, 宮田恵理, 藤川皓基, 竹内一朗, 石黒精, 野村伊知郎, 新井勝大: プロトンポンプ阻害薬による長期治療を要した十二指腸潰瘍合併好酸球性胃腸炎の3例. *日本小児科学会雑誌* 2023 ; 127(6) : 866-873

[症例報告]

1. Komorizono R, Takeuchi I, Yoshioka T, Yano T, Kumagai H, Ishiguro A, Arai K: Intestinal polypoid arteriovenous malformation in a 5-year-old boy with recurrent anemia. *Pediatr Int.* 2023 Jan-Dec;65(1):e15564.
2. Miyata E, Arai K, Takeuchi I, Shimizu H, Shimizu T: Refractory pediatric ulcerative colitis responding to High dose tofacitinib. *Pediatr Int.* 2023 Jan-Dec;65(1):e15551.

[総説]

1. 竹内一朗, 新井勝大: 【分類不能腸炎(IBDU)の現状と将来展望】希少疾患 monogenic IBDにおける臨床的特徴. *胃と腸* 2023 ; 58 (6) : 761-772
2. 新井勝大: 【臨床に必要な消化管アレルギー疾患】新生児・乳児食物蛋白誘発胃腸症. *臨床*

消化器内科 2023 ; 38 (6) : 681-687

3. 戸田方紀, 新井勝大 : 【消化管出血のすべて】総論 小児の消化管出血. 消化器内視鏡 2023 ; 35 (4) : 443-448
4. 清水泰岳 : 【小児の治療方針】消化器 潰瘍性大腸炎, Crohn 病. 小児科診療 2023 ; 86 (春増刊) : 644-651
5. 清水泰岳 : 【エキスパートが教える 小児の薬物治療】疾患別 D. 消化器疾患 クローン病. 小児内科 2023 ; 55 (増刊) : 486-492
6. 清水泰岳 : 【分子標的薬を極める】炎症性腸疾患 クローン病. 小児内科 2023 ; 55 (2) : 251-256
7. 清水泰岳, 金森豊 : 【どうする?小児の便秘・下痢】便秘の原因となる器質的疾患の診断と長期的な治療戦略 二分脊椎に伴う排便障害. 小児内科 2023 ; 55 (3) : 400-403
8. 清水泰岳 : 【知っておきたい小児炎症性腸疾患 (IBD)】小児 IBD の治療 小児 Crohn 病の治療指針. 小児科診療 2023 ; 86 (4) : 445-450
9. 清水泰岳 : 【腸内細菌を学ぶ】糞便移植. 小児外科 2023 ; 55 (2) : 233-237
10. 渡辺栄一郎, 川島祐介, 柿原知, 設楽佳彦, 斎藤傑, 香川礼子, 紺野亮, 石川将己, 高見尚平, 清水泰岳, 松本恭明, 福家辰樹, 高澤真也, 西明, 新井勝大, 野村伊知郎, 岡田賢, 高 尚人, 小原收, 藤代準 : 【腸内細菌を学ぶ】便プロテオーム解析. 小児外科 2023 ; 55 (2) : 150-157
11. 石毛崇, 南部隆亮, 竹内一朗 : 超早期発症型炎症性腸疾患と monogenic IBD. 日本小児科学会雑誌 2023 ; 127 (3) : 421-428
12. 竹内一朗, 森田英明 : STAT6 機能獲得型バリエーションは, 複数のアレルギー症状を悪化させる. 臨床免疫・アレルギー科 2023 ; 80 (3) : 365-370
13. 竹内一朗 : 治療法の再整理とアップデートのために 専門家による私の治療 乳糖不耐症. 日本医事新報 2023 ; 5166 : 56-57
14. 藤紘彰, 新井勝大 : 【どうする?小児の便秘・下痢】便秘・下痢の治療薬 近年使用できるようになった薬を中心に. 小児内科 2023 ; 55 (3) : 336-343

[ガイドライン、報告書、その他]

1. 新井勝大 : 四六時中「おなかが鳴る」場合は注意 おなかの音はストレスのバロメーター ストレス排除と腸内環境改善を. テレビ愛知, 2023. 3. 6
2. 新井勝大 : 好酸球性食道炎の臨床 : 診断から治療まで. 小児医療関係者向けサイト「Growth Ring」 <https://growthring.healthcare/knowledge/report/221113symposium16-03.html> 2023. 1. 25

[学会発表]

1. To H, Takeuchi I, Que H, Tokita K, Shimizu H, Arai K : A case of siblings with bruton tyrosine kinase-deficient X-linked agammaglobulinemia complicated by atypical small intestine lesion. The 16th Asian Pan-Pacific Congress for Pediatric Gastroenterology, Hepatology and Nutrition (APPSPGHAN 2023), Coex, Seoul, Korea, 2023. 10. 7
2. 水落建輝, 清水泰岳, 新井勝大, 虻川大樹, 清水俊明, 長沼誠, 渡辺憲治, 中村志郎, 久松理一 :

- 小児 IBD 治療指針の作成。 第 14 回日本炎症性腸疾患学会学術集会, 兵庫, 2023. 12. 1
3. 井上幹大, 齋藤武, 石毛崇, 角田文彦, 加藤沢子, 工藤孝広, 清水泰岳, 南部隆亮, 清水俊明, 新井勝大: 日本小児炎症性腸疾患レジストリ研究: 腹部手術症例の検討結果と課題。 第 14 回日本炎症性腸疾患学会学術集会, 兵庫, 2023. 12. 1
 4. 南部隆亮, 石毛崇, 井上幹大, 角田文彦, 加藤沢子, 工藤孝広, 齋藤武, 清水泰岳, 清水俊明, 新井勝大: 日本小児炎症性腸疾患レジストリ研究: 小児潰瘍性大腸炎の治療経過と予後。 第 14 回日本炎症性腸疾患学会学術集会, 兵庫, 2023. 12. 1
 5. 清水泰岳: Microbiome 解析が開く新しい疾病発症機構と治療展開 小児期発症炎症性腸疾患と Microbiome。 第 55 回日本小児感染症学会総会・学術集会, 名古屋, 2023. 11. 25
 6. 中山佳子, 清水俊明, 西亦繁雄, 横山忠史, 松岡諒, 羽鳥麗子, 清水正樹, 新井勝大, 恵谷ゆり, 十河剛, 石津智子, 新居正博, 中島亮輔, 森雅亮: 逆流性食道炎, 胃潰瘍及び十二指腸潰瘍の小児患者を対象としたエソメプラゾール長期投与の有効性及び安全性に関する検討。 第 65 回日本消化器病学会大会, 神戸, 2023. 11. 2
 7. 伊藤夏希, 工藤孝広, 南部隆亮, 石毛崇, 加藤沢子, 井上幹大, 齋藤武, 角田文彦, 佐々木美香, 清水泰岳, 新井勝大, 清水俊明: 日本小児 IBD レジストリ研究における very early onset IBD と monogenic IBD の実態。 第 50 回日本小児栄養消化器肝臓学会学術集会, 宮城 (ハイブリッド開催), 2023. 10. 22
 8. 宮沢絢子, 南部隆亮, 新井勝大, 工藤孝広, 石毛崇, 熊谷秀規, 萩原真一郎, 梶恵美里, 水落建輝, 倉沢伸吾, 角田文彦, 岩間達: 小児潰瘍性大腸炎直腸炎型の自然歴と治療法の検討。 第 50 回日本小児栄養消化器肝臓学会学術集会, 宮城 (ハイブリッド開催), 2023. 10. 22
 9. 藤紘彰, 竹内一朗, 大植啓史, 時田万英, 清水泰岳, 新井勝大: ウステキヌマブが著効した小児回腸囊炎の 2 症例。 第 50 回日本小児栄養消化器肝臓学会学術集会, 宮城 (ハイブリッド開催), 2023. 10. 21
 10. 吉田正司, 南部隆亮, 清水泰岳, 工藤孝広, 立花奈緒, 水落建輝, 加藤沢子, 岩田直美, 熊谷秀規, 岩間達, 清水俊明, 新井勝大: 小児炎症性腸疾患におけるチオプリン製剤の副作用 日本小児 IBD レジストリ研究。 第 50 回日本小児栄養消化器肝臓学会学術集会, 宮城 (ハイブリッド開催), 2023. 10. 21
 11. 福田理紗, 田中諒, 橋本玲奈, 持丸奈央子, 清水泰岳, 新井勝大, 吉田和恵: アナフィラキシー・薬物アレルギー・薬剤性臓器障害 1 TNF- α 阻害薬によるびまん性脱毛を伴う乾癬様皮疹の一例。 第 72 回日本アレルギー学会学術大会, 東京 (ハイブリッド開催), 2023. 10. 20
 12. 先崎希恵, 笠原沙耶香, 山口みほ, 大穂祐介, 澤田京子, 山田真由美, 風間彩, 山口紗季, 丹沢彩乃, 栗原陽介, 竹内一朗, 清水泰岳, 新井勝大, 赤羽三貴: 消化器症状を有する小児患者におけるコルヒチン使用実態の検討。 第 50 回日本小児臨床薬理学会学術集会, 大阪, 2023. 10. 1
 13. 柳佑典, 出口晴教, 中尾俊雅, 兒玉匡, 小峰竜二, 清水誠一, 内田孟, 福田晃也, 阪本靖介, 山田全毅, 新井勝大, 笠原群生: 肝・小腸異時移植を行うも救命できなかった進行性家族性肝内胆汁鬱滞症 1 型の 1 例。 第 59 回 日本移植学会総会, 京都, 2023. 9. 22
 14. 清水誠一, 阪本靖介, 内田孟, 柳佑典, 中尾俊雅, 兒玉匡, 小峰竜二, 竹内一朗, 新井勝大, 山田全毅, 福田晃也, 笠原群生: 多臓器移植への課題と解決方法 小腸移植後の難治性拒絶反応に対しベドリズマブを使用した 1 例。 第 59 回 日本移植学会総会, 京都, 2023. 9. 22
 15. 清水泰岳, 内田孟, 阪本靖介, 竹内一朗, 福田晃也, 新井勝大, 笠原群生: 腸管不全治療の現

状と課題 新規にテデュグルチドを導入した短腸症候群の2例. 第59回日本移植学会総会, 京都, 2023.9.22

16. 瀧本康史, 藤野明浩, 山本裕輝, 狩野元宏, 五十川伸崇, 新井勝大, 安部真, 梅澤明弘: 再生医療のup to date 先天性食道閉鎖症・先天性食道狭窄症術後吻合部狭窄への細胞シート移植による臨床研究. 第60回日本小児外科学会学術集会, 大阪(ハイブリッド開催), 2023.6.2
17. 安田亮輔, 新井勝大, 工藤孝広, 南部隆亮, 青松友槻, 阿部直紀, 垣内俊彦, 橋本邦生, 十河剛, 高橋美智子, 恵谷ゆり, 加藤健, 山下裕史朗, 水落建輝: 小児炎症性腸疾患の活動性評価における血清LRGと血清カルプロテクチンの有用性 多施設共同研究. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京(ハイブリッド開催), 2023.4.16
18. 日衛嶋栄太郎, 仁平寛士, 新井勝大, 工藤孝広, 岩間達, 水落建輝, 十河剛, 梶恵美里, 清水泰岳, 竹内一朗, 伊藤夏希, 安田亮輔, 乾あやの, 恵谷ゆり, 西小森隆太, 八角高裕, 井澤和司, 滝田順子: 小児潰瘍性大腸炎の診断における Integrin $\alpha v \beta 6$ 自己抗体の有用性に関する多施設共同研究. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京(ハイブリッド開催), 2023.4.16
19. 水落建輝, 虻川大樹, 清水泰岳, 新井勝大, 清水俊明: 小児炎症性腸疾患の診断と治療Update 小児潰瘍性大腸炎の最新治療指針と今後の課題. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京(ハイブリッド開催), 2023.4.14
20. 清水泰岳, 新井勝大, 水落建輝, 虻川大樹, 清水俊明: 小児炎症性腸疾患の診断と治療Update 小児クローン病の治療指針と今後の課題. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京(ハイブリッド開催), 2023.4.14
21. 亀井宏一, 小椋雅夫, 新井勝大, 清水泰岳, 竹内一朗, 河合利尚, 庄司健介, 村島温子, 宮入烈, 大宜見力: TNF α 阻害薬使用下での水痘ワクチンの免疫原性と安全性. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京(ハイブリッド開催), 2023.4.14
22. 野村智実, 竹内一朗, 清水泰岳, 新井勝大: 思春期の炎症性腸疾患児と親の抑うつ・不安・生活の質(QOL)に関する縦断的調査. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京(ハイブリッド開催), 2023.4.14
23. 石毛崇, 南部隆亮, 竹内一朗, 清水俊明: 小児炎症性腸疾患の診断と治療Update 超早期発症型炎症性腸疾患の診断指針作成. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京(ハイブリッド開催), 2023.4.14
24. 野村智実, 横尾実華子, 竹内一朗, 清水泰岳, 遠藤数江, 来生奈巳子, 新井勝大: 超早期発症型炎症性腸疾患の5幼児例における両親のメンタルヘルスとQOLの検討. 第23回日本小児IBD研究会, 福岡(ハイブリッド開催), 2023.3.5
25. 竹内一朗, 柳久美子, 高田修治, 内山徹, 五十嵐ありさ, 本村健一郎, 林優佳, 長野直子, 松岡諒, 杉山弘樹, 義岡孝子, 斎藤博久, 河合利尚, 大矢幸弘, 清水俊明, 松本健治, 野村伊知郎, 要匡, 森田英明, 新井勝大: リンパ濾胞過形成を伴う好酸球性消化管疾患の発症に関与する新規STAT6機能獲得型変異. 第23回日本小児IBD研究会, 福岡(ハイブリッド開催), 2023.3.5
26. 清水泰岳, 南部隆亮, 村越孝次, 国崎玲子, 工藤孝広, 加藤沢子, 水落建輝, 熊谷秀規, 井上幹大, 後藤友梨[平野], 新井勝大, 清水俊明: 日本小児IBDレジストリにおける小児期発症IBD患者における成長障害の検討. 第23回日本小児IBD研究会, 福岡(ハイブリッド開催), 2023.3.5
27. 西田大恭, 石毛崇, 新井勝大, 清水泰岳, 岩間達, 南部隆亮, 国崎玲子, 水落建輝, 村越孝次, 齋藤武, 加藤沢子, 工藤孝広, 岩田直美, 井上幹大, 吉年俊文, 萩原真一郎, 戸板成昭, 田尻仁,

- 望月貴博, 角田文彦: 小児クローン病患者における生物学的製剤の継続率の比較(日本小児 IBD レジストリ研究). 第23回日本小児 IBD 研究会, 福岡 (ハイブリッド開催), 2023. 3. 5
28. 石毛崇, 新井勝大, 清水泰岳, 岩間達, 南部隆亮, 国崎玲子, 水落建輝, 村越孝次, 齋藤武, 加藤沢子, 工藤孝広, 岩田直美, 井上幹大, 吉年俊文, 萩原真一郎, 戸板成昭, 田尻仁, 望月貴博, 角田文彦, 清水俊明: 小児クローン病患者に対する診断後早期の治療内容 小児 IBD レジストリ解析. 第23回日本小児 IBD 研究会, 福岡 (ハイブリッド開催), 2023. 3. 5
29. 日衛嶋栄太郎, 仁平寛士, 村本雄哉, 新井勝大, 工藤孝広, 岩間達, 水落建輝, 十河剛, 梶恵美里, 清水泰岳, 竹内一朗, 伊藤夏希, 安田亮輔, 乾あやの, 恵谷ゆり, 西小森隆太, 八角高裕, 井澤和司, 塩川雅広, 滝田順子: 小児潰瘍性大腸炎の診断における Integrin $\alpha v \beta 6$ 自己抗体の有用性に関する多施設共同研究. 第23回日本小児 IBD 研究会, 福岡 (ハイブリッド開催), 2023. 3. 5
30. 安田亮輔, 新井勝大, 工藤孝広, 南部隆亮, 青松友槻, 阿部直紀, 垣内俊彦, 橋本邦生, 十河剛, 高橋美智子, 恵谷ゆり, 加藤健, 山下裕史朗, 光山慶一, 水落建輝: 小児炎症性腸疾患の活動性評価における血清 LRG と血清カルプロテクチンの有用性の比較 多施設共同研究. 第23回日本小児 IBD 研究会, 福岡 (ハイブリッド開催), 2023. 3. 5
31. 友政弾, 鈴木資, 竹内一朗, 後藤公寿, 萩原真一郎, 慶野大, 才田聡, 石毛崇, 工藤孝広, 石村匡崇, 加藤元博, 笹原洋二, 森尾友宏, 新井勝大, 金兼弘和: IL 10RA 欠損症に対する造血細胞移植. 第23回日本小児 IBD 研究会, 福岡 (ハイブリッド開催), 2023. 3. 5
32. 竹内一朗, 新井勝大: 小児炎症性腸疾患センターにおける monogenic IBD の臨床と研究. 第6回日本免疫不全・自己炎症学会総会・学術集会, 東京 (ハイブリッド開催), 2023. 2. 12
33. 仁平寛士, 日衛嶋栄太郎, 村本雄哉, 塩川雅広, 新井勝大, 工藤孝広, 岩間達, 水落建輝, 十河剛, 梶恵美里, 河合利尚, 笹原洋二, 大西秀典, 岡田賢, 金兼弘和, 西小森隆太, 本田吉孝, 滝田順子, 井澤和司, 八角高祐: 抗 integrin $\alpha v \beta 6$ 抗体の小児 IBD における多施設検討. 第6回日本免疫不全・自己炎症学会総会・学術集会, 東京 (ハイブリッド開催), 2023. 2. 11
34. 森禎三郎, 金森豊, 橋詰直樹, 狩野元宏, 渡辺栄一郎, 高橋正貴, 藤野明浩, 米田光宏, 竹内一朗, 清水泰岳, 新井勝大: 最近5年間に当院で施行した炎症性腸疾患患者への外科治療のまとめ. 第52回日本小児消化管機能研究会, 東京, 2023. 2. 11

[講演]

1. Arai K: Therapeutic Drug Monitoring of Biologic in Pediatric IBD. 16th Congress of Asian Pan-Pacific Society for Pediatric Gastroenterology, Hepatology and Nutrition. Coex, Seoul, Korea, 2023. 10. 7
2. Arai K: The Current and Future Prospectives of Pediatric Endoscopy in Asia-Pacific Area. 25th Annual Meeting of TSPGHAN, Taiwan, 2023. 9. 3
3. Arai K: Changing Landscape in Pediatric Crohn's disease with biologics: What's new?. 25th Annual Meeting of TSPGHAN, Taiwan, 2023. 9. 2
4. 新井勝大: 移行期医療への取り組み. IBD Transition Conference Tokatsu, 千葉, 2023. 12. 7
5. 新井勝大, 石毛崇, 井上幹大, 角田文彦, 加藤沢子, 工藤孝広, 齋藤武, 清水泰岳, 南部隆亮, 清水俊明: 日本小児炎症性腸疾患レジストリ研究の成果と課題. 第14回日本炎症性腸疾患

学会学術集会, 兵庫, 2023. 12. 1

6. 新井勝大: 小児炎症性腸疾患における多施設共同研究とトランスレーショナル・リサーチ ～レジストリから monogenic IBD まで～. 血友病メディカルセミナー, 東京, 2023. 11. 29
7. 新井勝大: 超早期発症型炎症性腸疾患の臨床と研究. The 18th Congress of Asian Society for Pediatric Research 共催セミナー, Web, 2023. 11. 12
8. 新井勝大: 小児の便秘異常 ～便秘から炎症性腸疾患まで～. 第 27 回豊島病院小児科公開勉強会, 東京, 2023. 11. 9
9. 新井勝大: 小児 IBD 診療 Update ～VEO-IBD からトランジションまで～. 2023/10/16_G.E. フォーラム 2023, 新潟, 2023. 10. 16
10. 新井勝大: IBD の小児患者を支えるチーム医療. 第 41 回北海道 IBD 検討会, 北海道, 2023. 10. 13
11. 新井勝大: 小児 IBD に関する最近の話題. 島根県 IBD 講演会, 島根, 2023. 9. 22
12. 新井勝大: 小児 IBD 治療の実際と課題. IBD WEB チャンネル, 東京, 2023. 6. 22
13. 新井勝大: IBD 患者さんの「就学」と向き合う. 5/19 World IBD Day 2023 ～IBD についてとことん向き合う～, 東京, 2023. 5. 19
14. 新井勝大: 小児 IBD における分子標的薬治療の現状と診断技術の進歩. 第 29 回岡山 IBD ミーティング, 岡山, 2023. 4. 20
15. 新井勝大: 小児科診療における低亜鉛血症の治療: 顆粒製剤が広げる可能性. 第 126 回日本小児科学会学術集会 教育セミナー26, 東京, 2023. 4. 16
16. 新井勝大: 小児便秘症の新治療戦略. 第 126 回日本小児科学会学術集会 教育セミナー24, 東京, 2023. 4. 15
17. 新井勝大: 小児難治性 IBD の治療戦略 ～生物学的製剤/低分子化合物の現状と問題～. 第 23 回日本小児 IBD 研究会イブニングセミナー, 福岡, 2023. 3. 4
18. 新井勝大: 小児科診療におけるノベルジン顆粒への期待. 低亜鉛血症オンライン講演会, 東京, 2023. 3. 2
19. 新井勝大: 小児科と小児外科の連携を目指して ～小児 IBD の診療と治療 Update ～. 第 52 回日本小児消化管機能研究会, 東京, 2023. 2. 11
20. 新井勝大: AYA 世代の IBD 診療～小児科医がみる課題と対策～. IBD Diversity Management Web-Seminar, 東京, 2023. 2. 9
21. 新井勝大: 小児便秘症の診断と治療. モビコールHD 新発売記念講演, WEB 開催, 2023. 1. 12

循環器科

[原著論文: 査読付] (Reviewed Paper)

1. Uchida H, Sakamoto S, Yanagi Y, Shimizu S, Fukuda A, Ono H, Miyazaki O, Nosaka S, Schlegel A, Kasahara M: Significance of a multidisciplinary approach to congenital extrahepatic portosystemic shunt: A changing paradigm for the treatment. Hepatol Res 2023;53:540-555

2. Inuzuka R, Nii M, Inai K, Shimada E, Shinohara T, Kogiso T, Ono H, Otsuki SI, Kurita Y, Takeda A, Hirono K, Takei K, Yasukohchi S, Yoshikawa T, Furutani Y, Shinozaki T, Matsuyama Y, Senzaki H, Tokushige K, Nakanishi T: Predictors of liver cirrhosis and hepatocellular carcinoma among perioperative survivors of the Fontan operation. *Heart* 2023;109:276-282
3. Toyoshima K, Saito T, Shimokaze T, Katsumata K, Ohmura J, Kimura S, Aoki H, Takahashi M, Shibasaki J, Kawataki M, Kim KS, Shinkai M, Ishikawa H, Saito N, Masutani S: Right to left ventricular volume ratio is associated with mortality in congenital diaphragmatic hernia. *Pediatr Res* 2023;94(1):304-312
4. Ikegawa T, Kim K-S, Kawataki M, Chikawa Y, Ono S, Yanagi S, Ueda H: Late-gestation prediction of outcome in tricuspid valve dysplasia and Ebstein's anomaly using fetal tricuspid regurgitation waveform analysis. *Ultrasound Obstet Gynecol* 2023 ;61(5):593-600
5. Ichikawa Y, Kuroda H, Ikegawa T, Kawai S, Ono S, Kim KS, Yanagi S, Kurosawa K, Aoki Y, Ueda H: Cardiac features of Noonan syndrome in Japanese patients. *Cardiol Young* 2023;33(4):564-569
6. Ichikawa Y, Kuroda H, Ikegawa T, Kawai S, Ono S, Kim KS, Yanagi S, Kurosawa K, Aoki Y, Iwamoto M, Ueda H: Electrocardiographic Changes with Age in Japanese Patients with Noonan Syndrome. *J Cardiovasc Dev Dis* 2023;11(1):10. doi: 10.3390/jcdd11010010
7. Urata S, Michihata N, Inuzuka R, Matsui H, Fushimi K, Ishimaru M, Kato M, Yasunaga H: Factors affecting in-hospital mortality among pediatric patients with myocarditis treated with mechanical circulatory support. *J Cardiol* 2023;82:108-112
8. 東浩二, 三浦大, 小野博, 坂口平馬, 中國正祥, 中野孝介: 小児循環器疾患患者におけるプロプラノロール処方の実態調査. *日本小児科学会雑誌* 2023;127:1499-1504

[症例報告]

1. Ono H, Sago H, Ozawa K, Wada S, Kato H: Valvuloplasty for fetal critical aortic stenosis: possible first successful case in Japan: *Pediatr Int*. 2023;65:e15491. doi: 10.1111/ped.15491
2. Ogawa Y, Urata S, Inuzuka R: Successful use of ivabradine in a 10-year-old patient with graft failure after heart transplantation. *Cardiol Young* 2023;33:649-651
3. 佐藤麻朝, 進藤考洋, 羽賀千都子, 平井聖子, 牛腸義宏, 小野博: 心室細動で発症した好酸球性心筋炎の1歳女児例. *日本小児循環器学会雑誌* 2023;39:99-105

[総説]

1. 小野博: 小児科専門医を目指す人のためのQ&Aで読み解く 分野別誌上セミナー 循環器. *小児科臨床* 2023;7: 743-74
2. 金基成: エキスパートが教える小児の薬物療法 チアノーゼ発作. *小児内科* 2023;55:428-429
3. 金基成: 胎児心臓を診る—この超音波所見を見逃すな! 大血管断面異常から診断できる先天性心疾患 両大血管右室起始症. *臨床婦人科産科* 2023;77:1136-1141
4. 浦田晋: エキスパートが教える小児の薬物療法 心筋症. *小児内科* 2023;55:430-43

[著書]

1. 小野博：心疾患をもつ児童・生徒の学校管理下での取り扱い方. 福井次, 高木 誠, 小室一成 (編集), 今日の治療指針, 医学書院, 2023 ; 1439-1441
2. 小野博：心室中隔欠損症・心房中隔欠損症. 加藤 元博 (編集), 小児科診療ガイドライン 第5版, 総合医学社, 2023 ; 1439-1441
3. 小野博：重症大動脈弁狭窄症に対する胎児治療. 小児科診療 UP-to-DATE, マルホ株式会社, 2023 ; 8-11
4. 小野博：完全大血管転位症. 小児の治療指針, 診断と治療社, 2023 ; 343-345
5. 小野博：Ebstein 病. 伊藤浩, 山下武志 (編集), 循環器疾患最新の治療 2024-2025, 南江堂, 2023 ; 305-307
6. 小野博：PT APTT 血液学的検査. 加藤 元博, 高橋 尚人 (編集), 小児臨床検査ガイド第3版, 文光堂, 2023 ; 85-87
7. 小野博：小児・精神発達部門. 必携内科医のための臓器移植診療ハンドブック. ぱーそん書房, 2023
8. 小野博：ペーメーカーってなんだろう?. からだとはたらくどうぐたち. ほるぷ出版, 2023
9. 浦田晋, 阪井裕一：深部感染症 (筋炎, 筋膜炎, 壊疽など). 日本小児救急医学会 (監修), 小児救急標準テキスト basic 編, 中外医学社, 2023 ; 258-259
10. 浦田晋, 阪井裕一：尿路感染症. 日本小児救急医学会 (監修), 小児救急標準テキスト basic 編, 中外医学社, 2023 ; 260-261

[学会発表]

1. 小野博：2024 年度診療報酬改定について 内保連経由の提案の流れ. 第 59 回日本小児循環器学会総会・学術集会, 横浜, 2023. 7. 7
2. 小野博：新規心不全治療薬を先天性心疾患診療にどう活かすか. Angiotensin receptor neprilysin inhibitor (ARNI) の小児試験より. 第 59 回日本小児循環器学会総会・学術集会, 横浜, 2023. 7. 7
3. 小野博：HLHS へ移行する Critical AS 胎児治療の現状. 日本胎児心臓病学会第 29 回学術集会, 大阪, 2023. 2. 25
4. 小野博：HLHS へ移行する Critical AS に対する胎児治療. 第 11 回東北小児循環器懇話会, web, 2023. 5. 13
5. 東浩, 三浦大, 小野博, 坂口平馬, 中國正祥, 中野孝介：小児循環器疾患患者におけるプロプラノロール処方の実態調査. 小児医療情報収集システムデータベースによるリアルワールドデータ. 第 126 回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 14
6. 三崎泰志, 藤村友美, 丸山和歌子, 佐藤真朝, 浦田晋, 進藤考洋, 小野博：当院における動脈管ステント留置術の検討. 第 33 回日本先天性心疾患インターベンション学会学術集会, 東京, 2023. 1. 19
7. 三崎泰志, 藤村友美, 丸山和歌子, 佐藤真朝, 浦田晋, 進藤考洋, 小野博：Amplatz Piccolo Occluder は Flipper coil の代替デバイスになりうる. 第 59 回日本小児循環器学会学術集会, 横浜, 2023. 7. 7
8. 金基成, 細川大地, 菅谷憲太, 築野一馬, 池川健, 若宮卓也, 小野晋, 柳貞光, 豊島勝昭, 川滝元良, 上田秀明：緊急の侵襲的介入を準備し帝王切開で出生した、重症心疾患胎児診断症例の予後. 第 59 回日本小児循環器学会学術集会, 横浜, 2023. 7. 6
9. 金基成, 豊島勝昭, 石川浩史, 上田秀明：重症疾患を合併し不良な転帰をたどった動脈管早期収縮

- の2例. 第59回日本周産期・新生児医学会学術集会, 名古屋, 2023. 7. 11
10. 三好剛一, 稲村昇, 堀米仁志, 与田仁志, 金基成, 高橋邦彦, 寺町陽三, 豊島勝昭, 白石公, 黒寄健一, 前野泰樹, 日本胎児不整脈班: 胎児頻脈性不整脈に対する経胎盤的治療後の3歳時予後 多機関共同臨床試験のフォローアップ研究. 第59回日本小児循環器学会総会・学術集会, 横浜, 2023. 7. 7)
 11. 浦田晋, 藤村友美, 三崎泰志, 丸山和歌子, 佐藤麻朝, 進藤考洋, 小野博: 心臓カテーテル後に脊髄くも膜下出血を生じた一例. 第33回日本先天性心疾患インターベンション学会学術集会, 東京, 2023. 1. 19
 12. 浦田晋, 藤村友美, 丸山和歌子, 佐藤麻朝, 山口章, 武井哲理, 近藤良一, 進藤考洋, 三崎泰志, 金子幸裕, 小野博: 一期的心内修復術を行った心室中隔欠損を伴う肺動脈閉鎖症の治療成績. 第59回日本小児循環器学会, 横浜, 2023. 7. 8
 13. 浦田晋, 藪崎将, 西畑綾夏, 浅井ゆみこ, 沼田寛, 金基成, 三崎泰志, 小野博: ソマトロピン投与後に心筋肥厚が進行した Noonan 症候群の一例. 第32回日本小児心筋疾患学会, 札幌, 2023. 10. 29
 14. 佐藤真朝, 藤村友美, 丸山和歌子, 浦田晋, 進藤考洋, 三崎泰志, 小野博: 小児急性または激症型心筋炎における心内膜心筋生検と心臓MRの遅延造影の有用性. 第59回日本小児循環器学会学術集会, 横浜市, 2023. 7. 8
 15. 丸山和歌子, 浦田晋, 藤村友美, 佐藤麻朝, 進藤考洋, 三崎泰志, 小野博: 積極的治療を望まなかった重症僧帽弁逆流を伴った重症大動脈弁狭窄の一例. 第59回日本小児循環器学会学術集会, 横浜市, 2023. 7. 8
 16. 藤村友美, 進藤考洋, 丸山和歌子, 佐藤真朝, 浦田晋, 三崎泰志, 金子幸裕, 小野博: 胆道閉鎖症術後の末期心不全に対する肝移植に心内修復術を先行した多脾症候群の2例. 第59回日本小児循環器学会学術集会, 横浜市, 2023. 7. 6
 17. 浅井ゆみこ, 鈴木孝典, 小島有紗, 内田英利, 齋藤和由, 畑忠善: 術前の造影CT検査、カテーテル検査結果から左下葉切除術を選択し、SpO₂の著明な改善を得たびまん性肺動静脈瘻の一例. 第59回日本小児循環器学会学術集会, 横浜市, 2023. 7. 6
 18. 藪崎将, 岩本洋一, 石戸博隆, 住友直方, 増谷聡: 川崎病の慢性期フォロー中にBrugada症候群と診断された1例. 第59回日本小児循環器学会学術集会. 横浜市. 2023. 7. 7
 19. 藪崎将, 浅井ゆみこ, 西畑綾香, 浦田晋, 金基成, 三崎泰志, 小野博: 心内修復術後早期に施行したバルーン肺動脈拡張術後に肺動脈仮性瘤を生じたAlagille症候群の1例. Informal JCIC. 東京. 2023. 11. 19

【講演】

1. 小野博, 福島裕之, 小垣滋豊: 小児治療のトピックス (Q&A) PAH の会. 第16回全国PH大会, 東京, 2023. 10. 22
2. 小野博: 小児の心不全. ノバルティス社 社内勉強会, 東京, 2023. 12. 13
3. 金基成: 大動脈弁狭窄の臨床像と胎児治療. 第38回胎児遠隔クラウド STIC セミナー, web, 2023. 8. 20
4. 金基成: 肺血管拡張療法を経て片肺での心内修復術に至った PA/VSD の症例. ACHD 診療の最前線

～成人医療へのTransitionCFT～, 東京, 2023. 11. 17

5. 浦田晋: 肺高血圧症を合併した門脈体循環短絡の小児例. 東日本PAH Next Forum～TSUNACARI～, 東京, 2023. 12. 2

呼吸器科

[原著論文: 査読付]

なし

[原著論文: 査読なし]

なし

[症例報告]

1. Kobayashi H, Ogawa E. Insertion of a nasogastric tube in a child using a bronchoscope. *Pediatr Int.* 2023 Jan-Dec;65(1):e15554.
2. 水野皓介, 船田桂子, 玉井直敬, 石黒 靖, 肥沼悟郎: ヒドロキシクロロキンが著効した特発性肺へモジデローシス. 日本小児呼吸器学会雑誌 2023 ; 34 : 87-92
3. 船田桂子, 余谷 暢之, 玉井直敬, 冬木 真規子, 肥沼悟郎: 間質性肺炎の難治性咳嗽発作に対し、モルヒネ持続投与で症状緩和が得られた小児. 日本小児科学会雑誌 2023 ; 127 : 968-972
4. 梅山 知成, 高橋 信博, 工藤 裕実, 金森 洋樹, 加藤 源俊, 山田 洋平, 小林久人, 上野 彰久, 江本 桂, 黒田 達夫: 副肺芽に由来する異常肺動脈と異常気管支動脈から発生したと推察される2本の異常動脈を有した肺葉内肺分画症の1例. 日本小児外科学会雑誌 2023 ; 59 : 885-891

[総説]

1. 金森豊, 肥沼悟郎: 先天性嚢胞性肺疾の自然経過 非手術症例おから得た知見と今後の課題. 小児外科学会雑誌 2023 ; 124 : 507-513
2. 玉井直敬: 家族性間質性肺炎の最新の話 小児間質性肺疾患. 呼吸器内科 2023 ; 46 : 62-66

[著書]

なし

[ガイドライン、報告書、そのほか]

1. 太田 伸男, 竹野 幸夫, 竹内 万彦, 大原 浩達, 沖中 洋介, 上條 篤, 児玉 悟, 洲崎 勲夫, 常見 泰弘, 戸嶋 一郎, 仲野 敦子, 西田 直哉, 増田 佐和子, 森 恵莉, 坂井田 寛, 森本 耕三, 慶長 直人, 後藤 慎平, 近藤 光子, 阿保 未来, 金子 猛, 肥沼悟郎, 錦戸 知喜, 長尾 みづほ, 中谷 中, 伊達 洋至, 白石 晃司, 藤枝 重治, 貝沼 圭吾, 線毛機能不全症候群の診療の手引き作成委員会: 線毛機能不全症状群の診療の手引き. 日本鼻科学会雑誌 2023 ; 62 : i-108
2. Ishiwada N, Shinjoh M, Kusama Y, Arakawa H, Ohishi T, Saitoh A, Suzuki A, Tsutsumi H, Nishi

J, Hoshino T, Mitsuda T, Miyairi I, Iwamoto-Kinoshita N, Kobayashi H, Satoh K, Shimizu A, Takeshita K, Tanaka T, Tamura D, Tokunaga O, Tomita K, Nagasawa K, Funaki T, Furuichi M, Miyata I, Yaginuma M, Yamaguchi Y, Yamamoto S, Uehara S, Kurosaki T, Okada K, Ouchi K. Guidelines for the Management of Respiratory Infectious Diseases in Children in Japan 2022. *Pediatr Infect Dis J*. 2023 Oct 1;42(10):e369–e376.

3. 玉井直敬: 小児の治療指針 特発性間質性肺疾患. *小児科診療* 2023 ; 86 増 : 400-402

[学会発表]

1. 松山 茉衣, 肥沼 悟郎: COVID-19 の後遺症として発症した閉塞性細気管支炎. 第55回日本小児呼吸器学会, 兵庫, 2023. 10. 7
2. 玉井 直敬, 尾崎 桂子, 肥沼 悟郎: 診断時の画像所見と自宅退院後の臨床経過に差異が生じた住居関連過敏性肺炎の姉弟例. 第55回日本小児呼吸器学会, 兵庫, 2023. 10. 7
3. 玉井 直敬, 尾崎 桂子, 肥沼 悟郎: 画像所見の経過から早期に気道異物を疑うべきだった気管支異物自然喀出例. 第55回日本小児呼吸器学会, 兵庫, 2023. 10. 7
4. 松山 茉衣, 肥沼 悟郎, 小崎里華, 鏡 雅代: Silver-Russel 症候群と嚢胞性線維症を合併した日本人小児. 第55回日本小児呼吸器学会, 兵庫, 2023. 10. 7
5. 松尾 基規, 古澤 恭平, 古川 律子, 土橋 隆俊, 玉井 直敬, 船田 桂子, 肥沼 悟郎, 守本 倫子: 出生直後から上気道狭窄症状を呈した巨大舌根部嚢胞. 第55回日本小児呼吸器学会, 兵庫, 2023. 10. 7
6. 玉井 直敬, 尾崎 桂子, 肥沼 悟郎: 小児慢性呼吸器疾患患者の新型コロナウイルス感染症(COVID-19). 第55回日本小児呼吸器学会, 兵庫, 2023. 10. 8
7. 小林 久人, 田中 学: 気管チューブ方向による左右肺への肺気量分布の変化; 計算流体力学による解析 (続報). 第55回日本小児呼吸器学会, 兵庫, 2023. 10. 8
8. 玉井 直敬, 肥沼 悟郎: 気道管理の方針決定に難渋した CHARGE 症候群. 第18回日本耳鼻咽喉科学会, 大分, 2023. 11. 10
9. 古田 真知子, 糟谷 周吾, 北川 智介, 山本 修子, 鈴木 法臣, 肥沼 悟郎, 守本 倫子, 鈴木 康之: 特発性声門下狭窄の1歳に対し、気管切開せずにバルーン拡張術を施行した症例. 第18回日本小児耳鼻咽喉科学会, 大分, 2023. 11. 10
10. 玉井 直敬, 肥沼 悟郎: 特徴的な頸部側面レントゲン像を呈した声門kな異物の幼児. 第18回日本耳鼻咽喉科学会, 大分, 2023. 11. 10

[講演]

1. 肥沼悟郎: 小児の気管支拡張症とその移行期医療. 第3回日本びまん性肺疾患研究会, 東京, 2023. 10. 1
2. 肥沼悟郎: 特発性肺へモジデローシス: 診断と治療の課題. 第55回日本小児呼吸器学会, 兵庫, 2023. 10. 8

神経内科

[原著 (Original article)]

1. Sakuma H, Takanashi J, Kondo H, Muramatsu K, Shiihara T, Suzuki M, Okanari K, Kasai M, Mitani O, Nakazawa T, Omata T, Shimoda K, Abe Y, Maegaki Y, Murayama K, Murofushi Y, Nagase H, Okumura A, Sakai Y, Tada H, Mizuguchi M, Japanese Pediatric Neuro-COVID-19 Study Group; Matsuoka T, Okada H, Sato T, Kikuchi K, Kira R, Kawada N, Morichi S, Iwayama H, Tanaka R, Hanaoka Y, Minamisawa Y, Ema T, Motobayashi M, Itou T, Sano F. Severe pediatric acute encephalopathy syndromes triggered by SARS-CoV-2. *Front Neurosci* 2023;17:1085082.
2. Fujita A, Kato M, Sugano H, Iimura Y, Suzuki H, Tohyama J, Fukuda M, Ito Y, Baba S, Okanishi T, Enoki H, Fujimoto A, Yamamoto A, Kawamura K, Kato S, Honda R, Ono T, Shiraishi H, Egawa K, Shirai K, Yamamoto S, Hayakawa I, Kawawaki H, Saida K, Tsuchida N, Uchiyama Y, Hamanaka K, Miyatake S, Mizuguchi T, Nakashima M, Saitsu H, Miyake N, Kakita A, Matsumoto N. An integrated genetic analysis of epileptogenic brain malformed lesions. *Acta Neuropathol Commun* 2023;11:33.
3. 落合 悟, 早川 格, 阿部裕一. 小児てんかんにおける lacosamide の有効性と安全性. *脳と発達* 2023;55: 23–26.

[症例報告 (Case report)]

1. Ochiai S, Hayakawa I, Mutoh T, Abe Y. Pediatric anti-neutral glycosphingolipid antibodies-positive encephalomyeloradiculoneuropathy presenting with prominent brain demyelination. *Brain Dev* 2023;45:579–582.
2. Kikuchi N, Ide K, Tomita K, Hayakawa I, Miyasaka M, Abe Y. A case of rapid progressive fatal encephalopathy associated with coronavirus disease 2019. *Pediatr Int* 2023; 65:e15455.
3. Aihara T, Hayakawa I, Usami K, Ogiwara H, Abe Y. Spinal Subarachnoid Hematoma After Cardiac Angiography in an Infant: A Case Report *Cureus*2023;15(5).
4. Murofushi Y, Hayakawa I, Kawaki M, Abe Y, Kosaki R, Suzuki H, Takenouchi T, Kubota M. Oral Baclofen Therapy for Multifocal Spinal Myoclonus with TBC1D24 Variant. *Mov Disord Clin Pract* 2023;10: 719–721.
5. Ide K, Uchida H, Sakamoto S, Hayakawa I, Nakagawa S, Kobayashi T, Ito S, Kasahara M. Perioperative risk factors for neurological impairment in infants with acute liver failure following liver transplantation. *Pediatr Transplan* 2023;27:e14524
6. Saettini F, Guerra F, Fazio G, Bugarin C, McMillan HJ, Ohtake A, Ardisson A, Itoh M, Giglio S, Cappuccio G, Giardino G, Romano R, Quadri M, Gasperini S, Moratto D, Chiarini M, Akira I, Fukuhara Y, Hayakawa I, Okazaki Y, Mauri M, Piazza R, Cazzaniga G, Biondi A. Antibody Deficiency in Patients with Biallelic KARS1 Mutations. *J Clin Immunol* 2023;43:2115–2125.
7. Ishikawa K, Hayakawa I, Masuda H, Kubota M, Ishiguro A. Multisystem Inflammatory Syndrome in Clinically Mild Encephalitis/Encephalopathy with Reversible Splenic Lesion. *Indian J Pediatr* 2023;90:940–941.
8. Takao H, Iijima H, Odagiri R, Hayakawa I, Ogimi C. Acute cerebellar ataxia during acute COVID-19: A case series and review of the literature. *J Infect Chemother* 2023;29:792–795.

9. 清水 俊介, 永井 章, 早川 格, 宮寄 治, 野坂 俊介, 窪田 満, 石黒 精. 治療抵抗性の先天性内反足を契機に発見された尾部退行症候群の1例. 小児内科 2023;9: 1529-1532.

[総説 (Review article)]

1. 阿部裕一. 脊髄性筋萎縮症に対する遺伝子治療. 実験医学 2023;41:304-309.
2. 早川 格. ビタミン ビタミンB12 欠乏・葉酸欠乏. 小児科診療 86:1497-1501, 2023.
3. 早川 格. PICU で扱う神経疾患とその管理. 小児科 64:901-906, 2023.
4. 早川 格. 各部位の診察 神経診察. 小児科 2023;64:1136-1142.

[著書]

1. 阿部裕一. 発達の遅れ. 加藤元博 編. 小児科診療ガイドライン 第5版. Pp332-337. 総合医学社, 東京, 2023.
2. 阿部裕一. 片頭痛. 加藤元博 編. 小児科診療ガイドライン 第5版. Pp359-363. 総合医学社, 東京, 2023.

[ガイドライン、研究報告書、その他]

1. 小児急性脳症診療ガイドライン 2023 評価委員 (阿部裕一)

[学会発表]

1. 若林 知宏, 松本 正太郎, 中川 聡, 早川 格, 阿部 裕一. COVID-19 と関連して生じた小児脳梗塞の1例. 第50回日本集中治療医学会学術集会. 京都, 2023. 3. 2-4.
2. 前島 直彦, 井手 健太郎, 松本 正太郎, 中川 聡, 相原 健志, 早川 格, 阿部 裕一. 心臓カテーテル検査術後に脊髄くも膜下出血をきたした一例. . 第50回日本集中治療医学会学術集会. 京都, 2023. 3. 2-4.
3. 阿部 裕一, 相原 健志, 大橋 瑛梨, 早川 格, 落合 悟, 小池 研太郎, 武内 俊樹, 齋藤 加代子. 新生児マスキングを通過した脊髄性筋萎縮症I型の1例. 第78回日本小児神経学会関東地方会, 筑波, 2023. 3. 4.
4. 前島 直彦, 松本 正太郎, 小池 研太郎, 早川 格, 松永 綾子, 清水 直樹, 中川 聡, 阿部 裕一. COVID-19による急性壊死性脳症に伴う多臓器不全が免疫抑制療法と急性血液浄化療法後に改善した一例. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京. 2023. 4. 14-16.
5. 小池 研太郎, 早川 格, 大橋 瑛梨, 鈴木 智, 落合 悟, 相原 健志, 藤井 聡子, 阿部 裕一. 頭部造影MRIで動眼神経の造影効果を認めた再発性有痛性眼筋麻痺性ニューロパチーの3例. 第65回日本小児神経学会学術集会, 岡山, 2023. 5. 25-27.
6. 相原 健志, 早川 格, 大橋 瑛梨, 鈴木 智, 落合 悟, 小池 研太郎, 藤井 聡子, 阿部 裕一. 髄液糖・血糖比の低下を認めなかったグルコーストランスポーター1欠損症の2例. . 第65回日本小児神経学会学術集会, 岡山, 2023. 5. 25-27.
7. 大滝 里美, 近藤 聡美, 寺西 宏美, 颯佐 かおり, 高畠 和彦, 平田 幸子, 川合 謙介, 藤巻 高光, 嶋原 良仁, 酒井 哲郎, 阿部 裕一, 山内 秀雄. てんかん外科手術によって発作が消失した, 皮質形成異常を伴った薬剤抵抗性前頭葉てんかんの2例. 第65回日本小児神経学会学術集会, 岡山, 2023. 5. 25-27.

8. 落合 悟, 早川 格, 大橋 瑛梨, 鈴木 智, 小池 研太郎, 相原 健志, 藤井 聡子, 武藤 多津郎, 阿部 裕一. 抗中性糖脂質抗体陽性 Encephalomyeloradiculoneuropathy の世界最年少例. 第 65 回日本小児神経学会学術集会, 岡山, 2023. 5. 25-27.
9. 大橋 瑛梨, 早川 格, 小池 研太郎, 落合 悟, 相原 健志, 藤井 聡子, 鈴木 智, 加藤 宏樹, 井手 健太郎, 松本 正太郎, 阿部 裕一. 小児心停止蘇生後症候群の神経学的予後と持続脳波モニタリング. 第 65 回日本小児神経学会学術集会, 岡山, 2023. 5. 25-27.
10. 早川 格, 阿部 裕一. 希少疾病に対する診断オデッセイプロットの応用. 第 65 回日本小児神経学会学術集会, 岡山, 2023. 5. 25-27.
11. 小林 揚子, 早川 格, 阿部 裕一. Diagnostic Odyssey Plot を用いた小児ギラン・バレー症候群の診断遅延因子の検討. 第 65 回日本小児神経学会学術集会, 岡山, 2023. 5. 25-27.
12. 秋山 みさき, 松原 圭子, 寺嶋 宙, 阿部 裕一, 大野 欽司, 緒方 謙太郎, 義岡 孝子, 佐藤 舞, 亀井 宏一. 常染色体潜性 Alport 症候群に先天性筋無力症と小口病を合併した母性片親性アイソダイソミ一の 1 例. 第 58 回日本小児腎臓病学会学術集会. 大阪, 2023. 6. 29-7. 1.
13. 長谷川 智美, 渡辺 和宏, 石毛 信之, 小林 正久, 加藤 環, 齋藤 加代子, 阿部 裕一, 森岡 一朗, 石毛 美夏, 大石 公彦. 東京都における拡大新生児スクリーニングの試験研究(第 3 報). 第 50 回日本マス・スクリーニング学会学術集会, 新潟, 2023. 8. 25-26.
14. 宇佐美 憲一, 早川 格, 阿部 裕一, 荻原 英樹. 小児水頭症におけるてんかんの臨床像. 第 56 回日本てんかん学会学術集会, 東京, 2023. 10. 19-21.
15. 阿部 裕一, 早川 格, 宇佐美 憲一, 荻原 英樹, 相原 健志, 立木 伸明, 入江 紗瑛子, 高橋 達也. 小児専門病院におけるてんかん患者の移行に関する後ろ向きコホート研究 最終報告. 第 56 回日本てんかん学会学術集会, 東京, 2023. 10. 19-21.
16. 中國 正祥, 阿部 裕一, 大橋 瑛梨, 本橋 裕子, 小牧 宏文, 福島 富士子, 内山 徹, 小野寺 雅史. 遺伝子治療フォローアップにおけるモバイルアプリの有用性評価. 第 44 回日本臨床薬理学会学術総会, 神戸, 2023. 12. 14-16.
17. 入江 紗瑛子, 高橋 達也, 立木 伸明, 相原 健志, 藤井 聡子, 早川 格, 堤 義之, 阿部 裕一. 両側基底核および大脳皮髄境界に進行性多発石灰化をきたしたもやもや病の 1 例. 第 79 回日本小児神経学会関東地方会, Web 開催, 2023. 10. 28

[講演]

1. 阿部裕一. 子どものてんかんの基礎. 第 25 回子どものてんかんセミナー. 主催: 公益社団法人 日本てんかん協会, 東京, 2023. 7. 28.
2. 阿部裕一. 結節性硬化症/移行について. 2024 TS つばさの会. 主催: TS つばさの会, 東京, 2023. 11. 23.

腎臓・リウマチ・膠原病科 (小児内科系専門診療部)

[原著論文: 査読付] (Reviewed Paper)

1. Ishimori S, Horinouchi T, Fujimura J, Yamamura T, Matsunoshita N, Kamiyoshi N, Sato M, Ogura M, Kamei K, Ishikura K, Iijima K, Nozu K: Is influenza vaccination associated with nephrotic

- syndrome relapse in children? A multicenter prospective study. *Pediatr Nephrol* 2023;38:2107–2116
2. Ishige T, Shimizu T, Watanabe K, Arai K, Kamei K, Kudo T, Kunisaki R, Tokuhara D, Naganuma M, Mizuochi T, Murashima A, Inoki Y, Iwata N, Iwama I, Koinuma S, Shimizu H, Jimbo K, Takaki Y, Takahashi S, Cho Y, Nambu R, Nishida D, Hagiwara SI, Hikita N, Fujikawa H, Hosoi K, Hosomi S, Mikami Y, Miyoshi J, Yagi R, Yokoyama Y, Hisamatsu T: Expert consensus on vaccination in patients with inflammatory bowel disease in Japan *J Gastroenterol* 2023;58:135–157
 3. Malakasioti G, Iancu D, Milovanova A, Tsygin A, Horinouchi T, Nagano C, Nozu K, Kamei K, Fujinaga S, Iijima K, Sinha R, Basu B, Morello W, Montini G, Waters A, Boyer O, Yildirim ZY, Yel S, Dursun İ, McCarthy HJ, Vivarelli M, Prikhodina L, Besouw MTP, Chan EY, Huang W, Kemper MJ, Loos S, Prestidge C, Wong W, Zlatanova G, Ehren R, Weber LT, Chehade H, Hooman N, Tkaczyk M, Stańczyk M, Miligkos M, Tullus K; CNI in Monogenic SRNS Study Investigators: A multicenter retrospective study of calcineurin inhibitors in nephrotic syndrome secondary to podocyte gene variants. *Kidney Int* 2023;103:962–972.
 4. Kamei K: Live attenuated vaccines in patients receiving immunosuppressive agents. *Pediatr Nephrol* 2023;38:3889–3900
 5. Kanamori T, Kamei K, Sato M, Nishi K, Okutsu M, Ishiwa S, Ogura M, Sako M, Ishikura K, Ito S: CD4 + and CD8 + T-lymphocyte number as predictive marker of relapse after rituximab treatment in childhood-onset refractory nephrotic syndrome. *Clin Exp Nephrol* 2023;27:622–630
 6. Inoki Y, Nishi K, Osaka K, Kaneda T, Akiyama M, Sato M, Ogura M, Kamei K: Postoperative management and complications after abdominal surgery in children receiving peritoneal dialysis. *Pediatr Nephrol* 2023;38:3427–3434
 7. Nada T, Kamei K, Sato M, Nishi K, Ogura M, Ito S. Risk factors for early dialysate leakage around the exit site after catheter placement in pediatric peritoneal dialysis: a single-center experience. *Clin Exp Nephrol* 2023;27:791–799
 8. Ito S, Hataya H, Ashida A, Hamada R, Ishikawa T, Ishikawa Y, Shimono A, Konomoto T, Miyazawa T, Ogura M, Tanaka K, Kagami S: Eculizumab for paediatric patients with atypical haemolytic uraemic syndrome:full dataset analysis of post-marketing surveillance in Japan. *Nephrol Dial Transplant* 2023;38(2):414–424
 9. De Mutiis C, Wenderfer SE, Basu B, Bagga A, Orjuela A, Sar T, Aggarwal A, Jain A, Yap HK, Teo S, Ito S, Ohnishi A, Iwata N, Kasapcopur O, Yildiz M, Laurent A, Mastrangelo A, Ogura M, Shima Y, Rianthavorn P, Silva CA, Trindade V, Gianviti A, Akinori M, Hamada R, Fujimura J, Minamikawa S, Kamiyoshi N, Kaito H, Ishimori S, Iannuzzella F, Tullus K: International cohort of 382 children with lupus nephritis – presentation, treatment and outcome at 24 months. *Pediatr Nephrol* 2023;38(11):3699–3709
 10. Takao H, Nishi K, Funaki T, Inoki Y, Osaka K, Nada T, Yokota S, Sato M, Ogura M, Ishikura K, Ishiguro A, Kamei K: Changes in patterns of infection associated with pediatric idiopathic nephrotic syndrome: a single-center experience in Japan. *J Pediatr* 2023;254:11–16. e1

11. Nishi K, Uemura O, Harada R, Yamamoto M, Okuda Y, Miura K, Gotoh Y, Kise T, Hirano D, Hamasaki Y, Fujita N, Uchimura T, Ninchoji T, Isayama T, Hamada R, Kamei K, Kaneko T, Ishikura K: Pediatric CKD Study Group in Japan in conjunction with the Committee of Measures for Pediatric CKD of the Japanese Society of Pediatric Nephrology: Early predictive factors for progression to kidney failure in infants with severe congenital anomalies of the kidney and urinary tract. *Pediatr Nephrol* 2023;38:1057-1066
12. Kamei K, Ogura M, Sato M, Nishi K, Shoji K, Funaki T, Ogimi C, Ito S: Immunogenicity and safety of SARS-CoV-2 mRNA vaccine in patients with nephrotic syndrome receiving immunosuppressive agents. *Pediatr Nephrol* 2023;38:1099-1106
13. Inoki Y, Nishi K, Sato M, Ogura M, Kamei K: The association between hypogammaglobulinemia severity and infection risk in rituximab-treated patients with childhood-onset idiopathic nephrotic syndrome. *Pediatr Nephrol* 2023;38(2):451-460

[原著論文：査読なし]

なし

[症例報告]

なし

[総説]

1. 西健太朗, 亀井宏一：特集 急性腎障害(AKI)新たな局面に向けて．急性腎障害における新しい方向性 小児AKIの現状．*Medical Practice* 2023;40:1224-1228

[著書]

1. 小椋雅夫：「全身をみて、腎・尿路疾患に気づく．Ⅲ．全身疾患に伴う腎・尿路疾患．*小児科診療*，*診断と治療社*，2023；86：189-194
2. 小椋雅夫：ループス腎炎．*小児の治療指針（増刊号）*，*小児科診療*，*診断と治療社*，2023；86：726-729
3. 小椋雅夫：血清補体価（CH50）．補体蛋白（C3，C4など）・免疫複合体，*小児臨床検査ガイド*第3版，*文光堂*，2023；496-500
4. 西健太朗, 亀井宏一：小児AKIの現状．*内科総合誌 Medical Practice*，*文光堂*，2023；1224-1228

[ガイドライン、報告書、その他]

1. 西健太朗（編集委員）ら：エビデンスに基づくCKD診療ガイドライン2023．*日本腎臓学会*，*東京医学社*，2023

[学会発表]

1. 亀井宏一, 小椋雅夫, 新井勝大, 清水泰岳, 竹内一朗, 河合利尚, 庄司健介, 村島温子, 宮入烈, 大宜

- 見力：TNF α 阻害薬使用下での水痘ワクチンの免疫原性と安全性 第126回日本小児科学会学術集会，東京，2023.4.14
2. 亀井宏一，野津寛大，堀之内智子，西健太朗，藤田直也，櫻谷浩志，貝藤裕史，富樫勇人，濱田陸，島友子，吉川徳茂：ステロイド抵抗性ネフローゼ症候群における腎組織と遺伝子異常の有無の関係（多施設共同研究）．第58回日本小児腎臓病学会学術総会，大坂，2023.7.1
 3. 小椋雅夫，西健太朗，伊藤秀一：小児慢性再発性多発性骨髓炎のパミドロネートによる診断的治療は有効である．第67回日本リウマチ学会，福岡，2023.4.26
 4. 小椋雅夫，金田朋也，坂野嘉紀，岡田聡司，秋山みさき，西健太朗，佐藤舞，持丸奈央子，田中諒，吉田和恵，亀井宏一：筋膜・腱まで炎症性病変を呈し全身療法を施行した重症限局性強皮症の1例．第32回日本小児リウマチ学会，大宮，2023.10.14
 5. 小椋雅夫，坂野嘉紀，岡田聡司，金田朋也，秋山みさき，西健太朗，佐藤舞，亀井宏一：小児IgA腎症における初期治療終了時の尿所見とその後の治療戦略．第44回日本小児腎不全学会，佐賀，2023.11.30
 6. 西健太朗，小澤克典，亀井宏一，佐藤舞，小椋雅夫，室本仁，杉林里佳，諫山哲哉，伊藤裕司，和田誠司，横尾隆，石倉健司：胎児期に腎性羊水過少または巨大膀胱と診断された重度先天性腎疾患110例の予後と胎児死亡に寄与する因子．第58回小児腎臓病学会，名古屋，2023.06.30
 7. 西健太朗，小澤克典，亀井宏一，佐藤舞，小椋雅夫，室本仁，杉林里佳，諫山哲哉，伊藤裕司，和田誠司，横尾隆，石倉健司：Potter症候群/Potter sequence 71例の臨床像と長期予後．第44回小児腎不全学会，佐賀，2023.12.05
 8. 西健太朗，小椋雅夫，金田朋也，秋山みさき，坂野嘉紀，岡田聡司，佐藤舞，亀井宏一：遷延性低血圧を呈した両側腎欠損児の3例．第44回小児腎不全学会，佐賀，2023.12.05
 9. 灘大志，亀井宏一，佐藤舞，稲葉彩，濱田陸，伊藤秀一：単回リツキシマブ療法後にミコフェノール酸モフェチルによる維持療法を行った小児難治性ネフローゼ症候群患者の長期予後と安全性．第58回日本小児腎臓病学会学術集会，大阪，2023.6.29
 10. 猪野木雄太，金田朋也，秋山みさき，大坂溪，西健太朗，佐藤舞，小椋雅夫，亀井宏一：初発寛解後初回再発までの期間と早期SDNS/FRNSになる割合の検討．第58回日本小児腎臓病学会学術集会，大坂，2023.6.29
 11. 大坂溪，西健太朗，金田朋也，秋山みさき，猪野木雄太，佐藤舞，小椋雅夫，亀井宏一：小児期発祥の腎疾患または膠原病疾患に対するステロイド大量療法の副作用の検討-当院121例での解析-．第48回小児腎臓病学会学術集会，高槻，2023.6.29
 12. 金田朋也，西健太朗，坂野嘉紀，岡田聡司，秋山みさき，佐藤舞，小椋雅夫，亀井宏一：小児における開腹手術後の腹膜透析施行不可因子．第36回日本小児PD・HD研究会，東京，2023.12.2
 13. 金田朋也，小椋雅夫，坂野嘉紀，岡田聡司，秋山みさき，西健太朗，佐藤舞，亀井宏一：難治性ループス腎炎に対してリツキシマブとベリムマブの併用により寛解を得た14歳女児例．第32回日本小児リウマチ学会，埼玉，2023.10.14
 14. 金田朋也，秋山みさき，猪野木雄太，大坂溪，西健太朗，佐藤舞，小椋雅夫，亀井宏一，山本裕輝，藤野明浩：双胎間輸血症候群に対する腹膜透析管理中に急性腸間膜虚血症を発症した極低出生体重児の1例．第58回小児腎臓病学会，大阪，2023.6.30
 15. 秋山みさき，金田朋也，猪野木雄太，大坂溪，西健太朗，佐藤舞，小椋雅夫，亀井宏一：頻回再発型ネフローゼ症候群における第一選択薬としてのミゾリビンの有効性の検討．第58回日本小児腎臓病学会，大阪，2023.6.29

16. 秋山みさき, 松原圭子, 寺嶋宙, 阿部裕一, 大野欽司, 緒方謙太郎, 義岡孝子, 佐藤舞, 亀井宏一: 常染色体潜性 Alport 症候群に先天性筋無力症と小口病を合併した母性片親性アイソダイソミーの 1 例. 第 58 回日本小児腎臓病学会, 大阪, 2023. 6. 30
17. 秋山みさき, 岡田聡司, 坂野嘉紀, 金田朋也, 西健太郎, 佐藤舞, 小椋雅夫, 亀井宏一: COVID-19 を契機に急性 T 細胞関連拒絶反応がみられた Jeune 症候群・腎移植後の男児例. 第 44 回日本小児腎不全学会, 佐賀, 2023. 11. 30
18. 坂野嘉紀, 西健太郎, 金田朋也, 岡田聡司, 秋山みさき, 佐藤舞, 小椋雅夫, 亀井宏一: 腹膜透析液の業者の変更に伴い電解質や除水量に変化を認めた常染色体潜性多発性嚢胞腎の 1 歳男児例. 第 44 回小児体液研究会, 東京, 2023. 9. 13

【講演】

1. 亀井宏一: ワークショップ「妊娠とワクチン」. 免疫抑制薬内服中の患者への弱毒生ワクチン接種. 第 39 回日本産婦人科感染症学会学術集会, 長崎, 2023. 5. 20
2. 亀井宏一: シンポジウム 25 「実臨床におけるリツキシマブの適応と併用免疫抑制療法」. リツキシマブ療法の問題点と有害事象. 第 66 回日本腎臓学会学術集会, 横浜, 2023. 6. 11
3. 亀井宏一: シンポジウム 6 「小児腹膜透析 腎移植への架け橋」. 低体重児における腹膜透析療法. 第 29 回日本腹膜透析学会, 東京, 2023. 9. 30
4. 亀井宏一: シンポジウム「チーム医療で解決する小児腎代替療法の感染管理」. 小児の腹膜透析の感染症 (腹膜炎・出口部感染). 第 36 回日本小児 PD・HD 研究会, 東京, 2023. 12. 3
5. 小椋雅夫: 小児期から 10 年以上治療中のファブリー病からみる酵素補充療法の効果と重要性. ファブリー病早期診断 Web Seminar, WEB, 2023. 6. 22
6. 小椋雅夫: 小児特発性ネフローゼ症候群診療ガイドラインのエッセンス. 東京「腎炎・ネフローゼ児」を守る会 医療講演会, 東京, 2023. 9. 3
7. 小椋雅夫: 10 年以上治療中のファブリー病からみる酵素補充療法の効果と重要性. 見逃せない!! 日常診療で知っておくべき遺伝性代謝性疾患, 甲府, 2023. 10. 30
8. 小椋雅夫: 「川崎病の診断治療後に全身型若年性特発性関節炎と診断した 1 例」. 第 697 回東京都地方会講和会指定発言, 東京, 2024. 3. 9

免疫科

【原著論文：査読付】 (Reviewed Paper)

1. Ishikawa T, Uejima Y, Okai M, Shiga K, Shoji K, Miyairi I, Kato M, Morooka S, Kubota M, Tagaya T, Tsuji S, Aoki S, Ide K, Niimi H, Uchiyama T, Onodera M, Kawai T. Melting temperature mapping method in children: Rapid identification of pathogenic microbes. 2023 Nov 29:S1341-321X(23)00301-X. doi: 10.1016/j.jiac.2023.11.024.
2. Takeuchi I, Tanase-Nakao K, Ogawa A, Sugawara T, Migita O, Kashima M, Yamazaki T, Iguchi A, Naiki Y, Uchiyama T, Tamaoki J, Maeda H, Shimizu H, Kawai T, Taniguchi K, Hirata H, Kobayashi M, Matsumoto K, Naruse K, Hata K, Akutsu H, Kato T, Narumi S, Arai K, Ishiguro

- A. Congenital anaemia associated with loss-of-function variants in DNA polymerase epsilon 1. *J Med Genet*. 2023 Oct 13:jmg-2023-109444. doi: 10.1136/jmg-2023-109444.
- Uchiyama T, Kawai T, Nakabayashi K, Nakazawa Y, Goto F, Okamura K, Nishimura T, Kato K, Watanabe N, Miura A, Yasuda T, Ando Y, Minegishi T, Edasawa K, Shimura M, Akiba Y, Sato-Otsubo A, Mizukami T, Kato M, Akashi K, Nunoi H, Onodera M. Myelodysplasia after clonal hematopoiesis with APOBEC3-mediated CYBB inactivation in retroviral gene therapy for X-CGD. *Mol Ther*. 2023 Sep 13:S1525-0016(23)00491-4. doi: 10.1016/j.ymthe.2023.09.004.
 - Takeuchi I, Yanagi K, Takada S, Uchiyama T, Igarashi A, Motomura K, Hayashi Y, Nagano N, Matsuoka R, Sugiyama H, Yoshioka T, Saito H, Kawai T, Miyaji Y, Inuzuka Y, Matsubara Y, Ohya Y, Shimizu T, Matsumoto K, Arai K, Nomura I, Kaname T, Morita H. STAT6 gain-of-function variant exacerbates multiple allergic symptoms. *J Allergy Clin Immunol*. 2023 May;151(5):1402-1409.e6. doi: 10.1016/j.jaci.2022.12.802.
 - Kanegane H, Ishimura M, Kawai T, Okada S, Okamatsu N, Go M, Noto S. Patient-reported outcomes in patients with primary immunodeficiency diseases in Japan: baseline results from a prospective observational study. *Front Immunol*. 2023 Sep 27;14:1244250. doi: 10.3389/fimmu.2023.1244250.
 - Okai M, Ishikawa T, Tamura E, Matsui T, Kawai T. *Granulicatella adiacens* Bacteremia in Chronic Granulomatous Disease. *J Clin Immunol*. 2023 Jan;43(1):85-87. doi: 10.1007/s10875-022-01371-w.

[著書]

- 河合利尚. 家族性地中海熱. 日本アレルギー学会. アレルギー. 2023;72(5):492-3
- 河合利尚. 自己炎症性疾患の最前線～I 型インターフェロン異常症～. 臨床免疫・アレルギー科. 2023;80(5):561-7
- 河合利尚. 食細胞(好中球)機能検査. 臨床検査法提要第36版. 金原出版株式会社
- 河合利尚. 慢性肉芽腫症. 小児科診断・治療指針. 中山書店. 2023;20:833-5

[ガイドライン、報告書、その他]

- 河合利尚: 「慢性肉芽腫症」厚労省研究班

[学会発表]

- Kawai T, Ishikawa T, Mori M, Imai K, Ida H. Transition to Adult Care in Inborn Errors of Immunity: a web-based study. APSID-JSIAD 2024 Congress. 2024/3/22
- Kawai T, Kanegane H, Ishimura M, Okada S, Okamatsu N, Go M, Noto S. Patient-Reported Outcomes in Patients with Primary Immunodeficiency Diseases in Japan: Baseline Results from a Prospective Observational Study. APSID-JSIAD 2024 Congress. 2024/3/22
- 水谷祐大, 松田裕介, 宮澤英恵, 白橋徹志郎, 伊川泰広, 東馬智子, 酒井清祥, 八木真太郎, 坂口大俊, 河合利尚, 和田泰三, 内科的治療に抵抗性の多発肝膿瘍に対して膿瘍核出術を施行したX連鎖性慢性肉芽腫症の1例, 第55回日本小児感染症学会学術集会, 2023/11/25, 名古屋

4. 酒井伶奈、益田博司、堀川美和子、島袋林秀、藤村友美、浦田 晋、大坂 溪、亀井宏一、石川尊士、河合利尚、原 真理子、守本倫子、福田理紗、吉田和恵、窪田 満、石黒 精、腎梗塞と高度感音性難聴を合併した早期乳児川崎病性冠動脈瘤の1例、第126回日本小児科学会学術集会、東京、2023/4/16
5. 河合利尚. 原発性免疫不全症に対する新生児マススクリーニング. 拡大新生児スクリーニング講演会. 東京. 2023/3/9
6. 河合利尚. I型インターフェロン異常症. 第6回日本免疫不全・自己炎症学会総会・学術集会. シンポジウム. 東京. 2023/2/11
7. 河合利尚. 発熱を繰り返す子どもの診療、紹介のタイミングと地域連携. 第23回世田谷小児医師会成育講演会. 東京. 2023/11/2
8. 河合利尚. 自己炎症性疾患における移行支援～成人診療科と小児科との連携～. 指定難病疾患の移行期医療とチーム支援, 特別講演. 東京. 2023/11/8
9. 河合利尚. 先天性免疫異常症の診断と治療. 多摩小児感染・免疫研究会. 東京, 2023/2/17
10. 河合利尚. 先天性免疫異常症の移行支援の現状と課題. 第2回リウマチ・膠原病ブリッジセミナー, 特別講演. 東京, 2023/2/22

内分泌・代謝科

[原著]

1. Miyama C, Morisaki N, Ogawa K, Tanaka H, Shoji H, Shimizu T, Sago H, Horikawa R, Urayama KY. : Evaluating the association between caesarean delivery and weight status in early childhood in a Japanese birth cohort study. Sci Rep. 2023;10:13(1):19612.
2. Miller BS, Blair JC, Rasmussen MH, Maniatis A, Mori J, Böttcher V, Kim HS, Bang RB, Polak M, Horikawa R. : Effective GH Replacement With Somapacitan in Children With GHD: REAL4 2-year Results and After Switch From Daily GH. J Clin Endocrinol Metab. 2023;17:108(12):3090-3099.
3. Baba C, Yukimasa S, Yasuno R, Ichianagi H, Ninagawa J, Kasuya S, Kasahara M, Horikawa R, Nagasaka Y, Suzuki Y. : Anesthesia management protocol for liver transplantation as treatment for ornithine transcarbamylase deficiency. Paediatr Anaesth. 2023;33(8):620-630.
4. Abe E, Kobayashi M, Horikawa R, Morisaki N, Tanaka H, Sago H, Ogawa K, Fujiwara T. : The Association Between Eating Quickly and Excessive Gestational Weight Gain. Womens Health Rep (New Rochelle). 2023;2;4(1):280-287.
5. Sankoda A, Arata N, Sato S, Umehara N, Morisaki N, Ito Y, Sago H, Yano Y, Horikawa R. : Association of Isolated Hypothyroxinemia and Subclinical Hypothyroidism With Birthweight: A Cohort Study in Japan. J Endocr Soc. 2023;11;7(5):bvad045.
6. Saito-Abe M, Nishizato M, Yamamoto-Hanada K, Yang L, Fukami M, Ito Y, Ihara K, Iwabuchi A, Okamoto S, Naiki Y, Ohya Y, Horikawa R. : Comparison of physician- and self-assessed pubertal onset in Japanese children. Front Pediatr. 2023;21:11:950541.

7. Säwendahl L, Battelino T, Højby Rasmussen M, Brod M, Röhrich S, Saenger P, Horikawa R : Weekly Somapacitan in GH Deficiency: 4-Year Efficacy, Safety, and Treatment/Disease Burden Results From REAL 3. J Clin Endocrinol Metab. 2023;18;108(10):2569–2578.
8. Miller BS, Blair JC, Rasmussen MH, Maniatis A, Kildemoes RJ, Mori J, Polak M, Bang RB, Böttcher V, Stagi S, Horikawa R : Response to Letter to the Editor From Chatelain et al: “Weekly Somapacitan Is Effective and Well Tolerated in Children With GH Deficiency: The Randomized Phase 3 REAL4 Trial”. J Clin Endocrinol Metab. 2023;14;108(8):e647–e648.
9. Kawai M, Muroya K, Murakami N, Ihara H, Takahashi Y, Horikawa R, Ogata T. : A questionnaire-based survey of medical conditions in adults with Prader-Willi syndrome in Japan: implications for transitional care. Endocr J. 2023; 29;70(5):519–528.
10. Maghnie M, Ranke MB, Geffner ME, Vlachopapadopoulou E, Ibáñez L, Carlsson M, Cutfield W, Rومان R, Gomez R, Wajnrajch MP, Linglart A, Stawerska R, Clayton PE, Darendeliler F, Hokken-Koelega ACS, Horikawa R, Tanaka T, Dörr HG, Albertsson-Wikland K, Polak M, Grimberg A. : Response to Letter to the Editor From Virú-Loza and Chávez-Nomberto: “Safety and Efficacy of Pediatric Growth Hormone Therapy: Results From the Full KIGS Cohort”. J Clin Endocrinol Metab. 2023;17;108(6):e356–e357.
11. Juul A, Backeljauw P, Højby M, Kawai M, Kildemoes RJ, Linglart A, Zuckerman-Levin N, Horikawa R : Somapacitan in children born small for gestational age: a multi-centre, open-label, controlled phase 2 study. Eur J Endocrinol. 2023;10;188(1):lvac008.
12. Hokken-Koelega ACS, van der Steen M, Boguszewski MCS, Cianfarani S, Dahlgren J, Horikawa R, Mericq V, Rapaport R, Alherbish A, Braslavsky D, Charmandari E, Chernaused SD, Cutfield WS, Dauber A, Deeb A, Goedegebuure WJ, Hofman PL, Isganatis E, Jorge AA, Kanaka-Gantenbein C, Kashimada K, Khadilkar V, Luo XP, Mathai S, Nakano Y, Yau M. : International Consensus Guideline on Small for Gestational Age: Etiology and Management From Infancy to Early Adulthood. Endocr Rev. 2023;8;44(3):539–565.
13. Morisaki N, Obara T, Piedvache A, Kobayashi S, Miyashita C, Nishimura T, Ishikuro M, Sata F, Horikawa R, Mori C, Metoki H, Tsuchiya KJ, Kuriyama S, Kishi R. : Association Between Smoking and Hypertension in Pregnancy Among Japanese Women: A Meta-analysis of Birth Cohort Studies in the Japan Birth Cohort Consortium (JBiCC) and JECS.
14. Tanaka T, Yokoya S, Yoshii K : Analysis of the distribution of adult height standard deviation scores in relation to prepubertal height standard deviation scores using longitudinal growth data: -Investigation of the catch-up rates of children with short stature to attain normal adult height. Clin Pediatr Endocrinol. 2023;32:206–212.

[症例報告]

なし

[総説]

1. 内木康博：先天性副腎皮質過形成に対するin vivo遺伝子治療のためのAAVベクター開発.
BioClinica 2023, 38, 13;1157-1159

[著書]

1. 土井 響, 吉井 啓介：微量元素とビタミンが子どもにとってなぜ必要か. 微量元素 ヨウ素欠乏.
小児科診療. 2023; 86:1463-1467

[ガイドライン・研究報告書・その他]

1. 有馬 寛(名古屋大学 大学院医学系研究科糖尿病・内分泌内科学), 大月 道夫, 蔭山 和則, 高橋 裕, 田原 重志, 西山 充, 榎田 紀子, 水野 晴夫, 山田 正信, 有安 宏之, 井下 尚子, 井野元 智恵, 内田 信一, 菅原 明, 杉野 法広, 梶村 益久, 高野 幸路, 伊達木 澄人, 中里 雅光, 西岡 宏, 堀川 玲子, 松野 彰, 山下 美保, 横山 徹爾, 浜中 奈美, 曾根田 瞬, 青山 幸平, 浅利 ゆう子, 安藤 史顕, 井口 元三, 池谷 章, 石坂 栄太郎, 磯島 豪, 岩間 信太郎, 浦木 進丞, 大山 健一, 岡田 満夫, 尾上 剛史, 柿沢 圭亮, カロリナブゼン, 川口 頌平, 鞆嶋 有紀, 工藤 正孝, 小杉 理英子, 小林 朋子, 近藤 友里, 佐藤 潤一郎, 澤部 史一, 須賀 英隆, 菅原 大輔, 杉山 摩利子, 鈴木 敦詞, 鈴木 幸二, 蘇原 映誠, 高木 博史, 高見澤 哲也, 高安 忍, 竹下 章, 竹島 健, 辰島 啓太, 田村 功, 中野 依莉子, 衾津 昌広, 萩原 大輔, 服部 裕次郎, 坂東 弘教, 引間 雄介, 福岡 秀規, 福原 紀章, 藤沢 治樹, 藤本 正伸, 堀口 和彦, 前川 亮, 間中 勝則, 萬代 新太郎, 光井 悠人, 宮田 崇, 三善 陽子, 向井 康祐, 虫本 雄一, 村澤 真吾, 森 崇寧, 安田 康紀, ハツ賀 秀一, 山田 早耶香, 山本 雅昭, 吉井 啓介, 綿貫 裕, 小川 佳宏, 柴田 洋孝, 下村 伊一郎：間脳下垂体機能障害と先天性腎性尿崩症および関連疾患の診療ガイドライン作成委員会, 厚生労働科学研究費補助金難治性疾患政策研究事業「間脳下垂体機能障害に関する調査研究」班, 一般社団法人日本内分泌学会. 間脳下垂体機能障害と先天性腎性尿崩症および関連疾患の診療ガイドライン 2023 年版. 日本内分泌学会雑誌 99 巻 Suppl. Page i-171 (2023. 07)

[学会発表]

1. Naiki Y, Miyado M, Horikawa R, Katsumata N, Fukami M：Effect of a coenzyme in gene therapy for 21-hydroxylase deficiency with AAV vectors into a model mouse. The 11th International Meeting of Pediatric Endocrinology. Buenos Aires. 2023. 3. 5
2. Miyagi H, Noordin M, Igarashi M, Horikawa R：Long term use of tolvaptan in a child with chronic SIADH secondary to intracranial teratoma. The 11th International Meeting of Pediatric Endocrinology. Buenos Aires. 2023. 3. 5
3. Naiki Y, Miyado M, Horikawa R, Katsumata N, Takada S, Fukami M：Effects of coenzymes in gene therapy for congenital adrenal hyperplasia with AAV vectors into model mice. ENDO23, Chicago, 2023. 6. 15
4. Doi H, Igarashi M, Kashima T, Ujita N, Konno H, Fujioka A, Miyagi H, Yoshii K, Naiki Y, Horikawa R：Three Cases of Prepubertal Vaginal Bleeding, ENDO 2023, Chicago, 2023. 6. 15
5. Ujita N, Igarashi M, Yoshii K, Naiki Y, Horikawa R：Genetic test is useful in diagnosing

- nephrogenic diabetes insipidus. The 61st Annual ESPE Meeting 2023, Hague, 2023. 9.21
6. Igarashi M, Ota T, Doi H, Kashima T, Yoshii K, Naiki Y, Horikawa R : Various clinical manifestations found in 3 cases with Progeria syndrome. The 61st Annual ESPE Meeting 2023, Hague, 2023. 9.21
 7. Doi H, Yoshii K, Naiki Y, Horikawa R : Investigation of LDL Cholesterol in Children from Seiku Cohort for Children and Mothers, The 61st Annual ESPE Meeting 2023, Hague, 2023. 9.22
 8. 宇治田風紗, 五十嵐瑞穂, 鹿島健幹, 今野裕章, 土井響, 藤岡晶子, 宮城元, Khishigjargal Batjargal, Mazidah Noordin, 吉井啓介, 内木康博, 堀川玲子 : 13 トリソミ 2023. 4. 1ーと高インスリン性低血糖症の関連. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 14
 9. 川名宏, 山本幸代, 伊藤善也, 横道洋司, 立川恵美子, 齋藤朋洋, 滝嶋茂, 後藤元秀, 齋藤玲子, 堀川玲子, 菊池透 : 日本人小児・思春期1型糖尿病の出生体重は、Large for gestational age の頻度が高い. 第66回日本糖尿病学会年次学術集会, 鹿児島, 2023. 5. 11
 10. 内木康博, 宮戸真美, 堀川玲子, 高田修治, 勝又規行, 深見真紀 : 21 水酸化酵素欠損症に対する AAV バクターでの遺伝子治療モデルにおける補酵素遺伝子混合投与の効果. 第96回日本内分泌学会, 愛知, 2023. 6. 1
 11. 土井響, 五十嵐瑞穂, 宇治田風紗, 今野裕章, 鹿島健幹, 藤岡晶子, 宮城元, 吉井啓介, 内木康博, 堀川玲子, 石黒精, 井口晶裕, 石川美夢, 長谷川 雄一 : Prepubertal vaginal bleeding を契機に von Willebrand 病と診断した4歳女児の1例. 第96回日本内分泌学会, 愛知, 2023. 6. 1
 12. 五十嵐瑞穂, 宇治田風紗, 鹿島健幹, 土井響, 藤岡晶子, 今野裕章, 宮城元, 吉井啓介, 内木康博, 堀川玲子 : SIADH に対する当院でのトルバプタン使用状況, 第96回日本内分泌学会, 愛知, 2023. 6. 1
 13. 鹿島健幹, 宇治田風紗, 今野裕章, 藤岡晶子, 宮城元, 五十嵐瑞穂, 土井響, 吉井啓介, 内木康博, 堀川玲子 : 当院に初診で受診した小児期バセドウ病の21症例の検討. 第96回日本内分泌学会, 愛知, 2023. 6. 1
 14. 堀川玲子 : 『性分化疾患の現状と課題』小児内分泌医の立場から. 第32回日本小児泌尿器科学会総会・学術集会. 兵庫. 2023. 7. 21
 15. 河合智子, 関戸雄貴, 堀川玲子, 秦健一郎 : ART により出生した児で認めらる DNA メチル化変化. 第11回日本DOHaD学会学術集. 福島, 2023. 8. 4
 16. 石黒真美, 小原拓, 西村倫子, 岩田啓芳, 目時弘仁, 岩間憲之, 村上慶子, Shafiur Rahman, 小林澄貴, 宮下ちひろ, 石塚一枝, 田中景子, 三宅吉博, 堀川玲子, 森崎菜穂, 土屋賢治, 岸玲子, 栗山進一 : 出生コホート連携における年齢別の不妊治療と妊娠高血圧症候群との関連. 第11回日本DOHaD学会学術集会. 福島, 2023. 8. 4
 17. 柳佑典, 福田晃也, 小峰竜二, 清水誠一, 内田孟, 阪本靖介, 阿久津英憲, 中村和昭, 梅澤明弘, 堀川玲子, 笠原群生 : ヒトES細胞由来肝細胞を用いた細胞移植療法First-in-human試験. 第49回日本臓器保存生物医学会学術集会. 北海道, 2023. 10. 20
 18. 石丸雅矩, 福井貞弘, 谷本英里, 中村千鶴子, 宇治田風紗, 宮城元, 五十嵐瑞穂, 鹿島健幹, 土井響, 吉井啓介, 内木康博, 堀川玲子 : 当院における Noonan 症候群に対する GH 治療の安全性の検討. 第55回日本小児内分泌学会学術集会, 埼玉 2023. 10. 19
 19. 土井響, 五十嵐瑞穂, 石丸雅矩, 宇治田風紗, 鹿島健幹, 谷本英里, 中村千鶴子, 福井貞弘, 宮

- 城元, 吉井啓介, 内木康博, 堀川玲子: 出生コホートにおける adiposity rebound の検討. 第56回小児内分泌学会学術集会, 埼玉, 2023. 10. 20
20. 中村千鶴子, 石丸雅矩, 谷本英里, 福井貞弘, 宇治田風紗, 宮城元, 五十嵐瑞穂, 鹿島健幹, 土井響, 吉井啓介, 内木康博, 堀川玲子: 高浸透圧性高血糖症候群と非典型的糖尿病ケトアシドーシス3例の臨床像の検討. 第56回日本小児内分泌学会学術集会. 埼玉, 2023. 10. 20
 21. 宇治田風紗, 五十嵐瑞穂, 石丸雅矩, 鹿島健幹, 谷本英里, 土井響, 中村千鶴子, 福井貞弘, 藤岡晶子, 宮城元, 吉井啓介, 内木康博, 堀川玲子: 低ホスファターゼ症4例に対するアスフォターゼアルファの使用経験. 第56回日本小児内分泌学会学術集会. 埼玉, 2023. 10. 20
 22. 宮城元, Noordin M, 五十嵐瑞穂, 宇治田風紗, 今野裕章, 藤岡晶子, 鹿島健幹, 土井響, 吉井啓介, 内木康博, 堀川玲子: 急性脳症を契機に診断した遅発性先天性リポイド過形成症例, 第56回日本小児内分泌学会学術集会, 埼玉, 2023. 10. 20
 23. 福井貞弘, 石丸雅矩, 谷本英里, 中村千鶴子, 宇治田風紗, 宮城元, 五十嵐瑞穂, 鹿島健幹, 土井響, 吉井啓介, 内木康博, 堀川玲子: NKX2-1 遺伝子関連疾患の臨床像. 第56回日本小児内分泌学会学術集会, 埼玉, 2023. 10. 21
 24. 土井響, 五十嵐瑞穂, 石丸雅矩, 宇治田風紗, 鹿島健幹, 谷本英里, 中村千鶴子, 福井貞弘, 宮城元, 吉井啓介, 内木康博, 堀川玲子: 複数回の骨折を初発症状とした小児バセドウ病の1例. 第33回臨床内分泌代謝Update, 神奈川, 2023. 11. 3
 25. 石丸雅矩, 谷本英里, 中村千鶴子, 福井貞弘, 宇治田風紗, 宮城元, 五十嵐瑞穂, 鹿島健幹, 土井響, 吉井啓介, 内木康博, 堀川玲子: メチルマロン酸血症に細胞癌を発症した1例. 第33回臨床内分泌代謝Update, 神奈川, 2023. 11. 3
 26. 五十嵐瑞穂, 谷本英里, 福井貞弘, 石丸雅矩, 中村千鶴子, 宇治田風紗, 宮城元, 鹿島健幹, 土井響, 吉井啓介, 内木康博, 堀川玲子: SIADHに対する小児でのトルバプタンの使用経験. 第33回臨床内分泌代謝Update, 神奈川, 2023. 11. 3
 27. 宇治田風紗, 五十嵐瑞穂, 吉井啓介, 内木康博, 堀川玲子: 遺伝子検査により確定診断し得た腎性尿崩症の一例. 第33回臨床内分泌代謝Update, 神奈川, 2023. 11. 4
 28. 宮城元, 石丸雅矩, 福井貞弘, 谷本英里, 宇治田風紗, 五十嵐瑞穂, 鹿島健幹, 土井響, 吉井啓介, 内木康博, 堀川玲子: 体肝移植後に低血糖を来した一例. 第33回臨床内分泌代謝Update, 神奈川, 2023. 11. 4
 29. 宇治田風紗, 土井響, 五十嵐瑞穂, 石丸雅矩, 鹿島健幹, 谷本英里, 中村千鶴子, 福井貞弘, 宮城元, 吉井啓介, 内木康博, 堀川玲子: 出生コホートを用いたBMIのtrajectoryの検討. 第34回日本成長学会学術集会, 東京, 2023. 12. 2

〔講演〕

1. 堀川玲子: ジェンダーと性差. 日本助産師協会主催研修会, Web講演, 2023. 1. 10
2. 堀川玲子: 軟骨無形成症の疾患概要. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 15
3. 堀川玲子: Once-Weekly Somapacitan in Growth Hormone Deficiency: 4-Year Efficacy/Safety in REAL3. Randomised Controlled Phase2 Trial. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 15
4. 堀川玲子: 慢性疾患をもった子どもたちの社会生活. 第7回 SANDOZ Web Conference. Web講演, 2023. 4. 25

5. 堀川玲子：成長障害 成育の事例らの鑑別診断. 第8回 SANDOZ Web Conference. Web 講演, 2023. 10. 5
6. 内木康博：副腎の話 bedside から bench まで. 第 35 回奈良小児科内分泌研究会. 奈良, 2023. 10. 26
7. 内木康博：ウィルスベクターを用いた遺伝子治療開発-小児内分泌科医からみた遺伝子治療の可能性. 第46回日本分子生物学会, 神戸, 2023. 12. 8

感染症科

[原著論文：査読付 (Reviewed Paper)]

1. Myojin S, Michihata N, Shoji K, Takanashi J, Matsui H, Fushimi K, Miyairi I, Yasunaga H: Prognostic factors among patients with Shiga toxin-producing *Escherichia coli* hemolytic uremic syndrome: A retrospective cohort study using a nationwide inpatient database in Japan. J Infect Chemother. 2023 Mar 4:S1341-321X(23)00052-1. doi: 10.1016/j.jiac.2023.02.016. Online ahead of print.
2. Shoji K, Funaki T, Yamada M, Mikami M, Miyake K, Ueno S, Tao C, Myojin S, Aiba H, Matsui T, Ogimi C, Kato H, Miyairi I. Safety of and antibody response to the BNT162b2 COVID-19 vaccine in adolescents and young adults with underlying disease. J Infect Chemother. 2023 Jan;29(1):61-66. doi: 10.1016/j.jiac.2022.09.013. _
3. Shoji K, Tsuzuki S, Akiyama T, Matsunaga N, Asai Y, Suzuki S, Iwamoto N, Funaki T, Yamada M, Ozawa N, Yamaguchi K, Miyairi I, Ohmagari N. Comparison of clinical characteristics of COVID-19 in pregnant women between the Delta and Omicron variants of concern predominant periods. J Infect Chemother. 2023 Jan;29(1):33-38. doi: 10.1016/j.jiac.2022.09.005.
4. Shrestha RM, Inoue Y, Yamamoto S, Fukunaga A, Sampei M, Okubo R, Morisaki N, Ohmagari N, Funaki T, Ishizuka K, Yamaguchi K, Sasaki Y, Takeda K, Miyama T, Kojima M, Nakagawa T, Nishimura K, Ogata S, Umezawa J, Tanaka S, Inoue M, Konishi M, Miyo K, Mizoue T: The association between experience of COVID-19-related discrimination and psychological distress among healthcare workers for six national medical research centers in Japan. Soc Psychiatry Psychiatr Epidemiol. 2023 Mar 17:1-9. doi: 10.1007/s00127-023-02460-w. Epub ahead of print.
5. Shimizu S, Sakamoto S, Yamada M, Funaki T, Fukuda A, Uchida H, Okada N, Nakao T, Kodama T, Komine R, Shoji K, Baba C, Suzuki Y, Nakagawa S, Ogimi C, Kasahara M: Successful pediatric liver transplantation case with a positive SARS-CoV-2 test at the time of transplant. Hepatol Res. 2023 Jan 18. doi: 10.1111/hepr.13881. Epub ahead of print.
6. Funaki T, Yamada M, Ide K, Ito R, Shoji K, Ogimi C, Imadome KI, Kasahara M: Etiology of severe acute hepatitis in a pediatric transplant center in Japan. J Pediatric Infect Dis Soc. 2023 Mar 31:piad021. doi: 10.1093/jpids/piad021. Epub ahead of print.

7. Takao H, Nishi K, Funaki T, Inoki Y, Osaka K, Nada T, Yokota S, Sato M, Ogura M, Ishikura K, Ishiguro A, Kamei K: Changes in Patterns of Infection Associated with Pediatric Idiopathic Nephrotic Syndrome: A Single-Center Experience in Japan. *J Pediatr*. 2023 Mar;254:11-16. e1. doi: 10.1016/j.jpeds.2022.10.005.
8. Mimura W, Shinjo D, Shoji K, Fushimi K: Prescribed daily-dose-based metrics of oral antibiotic use for hospitalized children in Japan. *Antimicrob Steward Healthc Epidemiol*. 2023 Feb 2;3(1):e24. doi: 10.1017/ash.2023.2. eCollection 2023.
9. Katsuta T, Aizawa Y, Shoji K, Shimizu N, Okada K, Nakano T, Kamiya H, Amo K, Ishiwada N, Iwata S, Oshiro M, Okabe N, Korematsu S, Suga S, Tsugawa T, Nishimura N, Hishiki H, Fujioka M, Hosoya M, Mizuno Y, Miyairi I, Miyazaki C, Morishima T, Yoshikawa T, Wada T, Ouchi K, Moriuchi H, Tanaka-Taya K, Saitoh A: Acute and Postacute Clinical Characteristics of Coronavirus Disease 2019 in Children in Japan. *Pediatr Infect Dis J*. 2023 Mar 1;42(3):240-246. doi: 10.1097/INF.0000000000003792.
10. Kamei K, Ogura M, Sato M, Nishi K, Shoji K, Funaki T, Ogimi C, Ito S: Immunogenicity and safety of SARS-CoV-2 mRNA vaccine in patients with nephrotic syndrome receiving immunosuppressive agents. *Pediatr Nephrol*. 2023 Apr;38(4):1099-1106. doi: 10.1007/s00467-022-05633-y. Epub 2022 Aug 1.
11. Kato H, Shoji K, Jinguji M, Nishimura N, Nakagawa S, Miyairi I: The utility of performing anaerobic blood cultures in pediatric intensive care units. *J Pediatric Infect Dis Soc*. 2023 May 26:piad037. doi: 10.1093/jpids/piad037.
12. Shoji K, Asai Y, Akiyama T, Tsuzuki S, Matsunaga N, Suzuki S, Iwamoto N, Funaki T, Miyairi I, Ohmagari N: Clinical efficacy of remdesivir for COVID-19 in children: A propensity-score-matched analysis. *J Infect Chemother*. 2023 Jun 12:S1341-321X(23)00149-6. doi: 10.1016/j.jiac.2023.06.006. Online ahead of print.
13. Tokuda Y, Yamada M, Fukuda A, Shoji K, Sakamoto S, Uchida H, Ishiguro A, Imadome KI, Kasahara M: No Additional Risk of Ampicillin Rash Among Pediatric Liver Transplant Recipients With Concurrent Epstein-Barr Virus Infection *Pediatr Infect Dis J*. 2023 Sep 7. doi: 10.1097/INF.0000000000004083. Online ahead of print.
14. Aiba H, Funaki T, Yamada M, Miyake K, Ueno S, Tao C, Myojin S, Matsui T, Ogimi C, Kato H, Miyairi I, Shoji K: Association between use of antipyretics and antibody titers after two doses of the BNT162b2 SARS-CoV-2 vaccine in adolescents and young adults with underlying diseases. *J Infect Chemother*. 2023 Sep 26:S1341-321X(23)00235-0. doi: 10.1016/j.jiac.2023.09.025. Online ahead of print.
15. Ishiwada N, Shinjo H, Kusama Y, Arakawa H, Ohishi T, Saitoh A, Suzuki A, Tsutsumi H, Nishi J, Hoshino T, Mitsuda T, Miyairi I, Iwamoto-Kinoshita N, Kobayashi H, Satoh K, Shimizu A, Takeshita K, Tanaka T, Tamura D, Tokunaga O, Tomita K, Nagasawa K, Funaki T, Furuichi M, Miyata I, Yaginuma M, Yamaguchi Y, Yamamoto S, Uehara S, Kurosaki T, Okada K, Ouchi K, Affiliations expand: Guidelines for the Management of Respiratory Infectious Diseases in Children in Japan 2022. *Pediatr Infect Dis J*. 2023 Oct 1;42(10):e369-e376. doi: 10.1097/INF.0000000000004041. Epub 2023 Aug 8.

16. Kondo R, Iijima H, Funaki T, Ishiguro A, Ogimi C: Natural course of acute COVID-19 among healthy children in a tertiary hospital. *Pediatr Int*. 2023 Jan-Dec;65(1):e15647.
17. Okubo Y, Nishi A, Uda K, Miyairi I, Michihata N, Kumazawa R, Matsui H, Fushimi K, Yasunaga H: Financial incentives for infection prevention and antimicrobial stewardship to reduce antibiotic use: Japan's nationwide observational study. *J Hosp Infect*. 2023 Jan;131:89-98.
18. Okubo Y, Uda K, Miyairi I: Trends in Influenza and Related Health Resource Use During 2005-2021 Among Children in Japan. *Pediatr Infect Dis J*. 2023 Aug 1;42(8):648-653. doi: 10.1097/INF.0000000000003966. Epub 2023 Jun 7.
19. Okubo Y, Uda K, Miyairi I, Michihata N, Kumazawa R, Matsui H, Fushimi K, Yasunaga H: Nationwide epidemiology and clinical practice patterns of pediatric urinary tract infections: application of multivariate time-series clustering. *Pediatr Nephrol*. 2023 Dec;38(12):4033-4041. doi: 10.1007/s00467-023-06053-2. Epub 2023 Jun 29.
20. Takao H, Iijima H, Odagiri R, Hayakawa I, Ogimi C: Acute cerebellar ataxia during acute COVID-19: A case series and review of the literature. *J Infect Chemother*. 2023, 29, 792-5, doi: 10.1016/j.jiac.2023.04.003.
21. Yasuda M, Shoji K, Tomita K, Uchida Y, Uematsu S, Yoshida K, Kono N, Funatsu M, Miyairi I. Clinical and Laboratory Diagnosis of Exanthems Among Japanese Children Younger Than 6 Years Old in the Post-Measles-Rubella Vaccine Era. *Pediatr Infect Dis J*. 2024 Feb 1;43(2):e44-e48. Epub 2023 Nov 13.
22. 古市 美穂子, 菅沼 栄介, 大宜見 力, 岡 明: 幼稚園・保育園と医療従事者へのアンケートから考える感染対策の優先度. *日本小児科学会雑誌*. 2023;127(11):1413-1419

[症例報告]

1. Okai M, Ishikawa T, Tamura E, Matsui T, Kawai T: *Granulicatella adiacens* Bacteremia in Chronic Granulomatous Disease. *J Clin Immunol*. 2023 Jan;43(1):85-87.
2. Sato J, Yotani N, Shoji K, Mori T, Fujino A, Hikosaka M, Kubota M, Ishiguro A: Necrotizing fasciitis following rapidly deteriorating neonatal omphalitis with good initial presentation. *IDCases*. 2023 Mar 29;32:e01750. doi: 10.1016/j.idcr.2023.e01750.
3. Fukayama H, Myojin S, Funaki T, Fukuda Y, Nakamura T, Ishiguro A, Ogimi C: Septic Arthritis Caused by *Haemophilus parainfluenzae* A Pediatric Case Report and Literature Review. *Pediatr Infect Dis J*. 2023 Sep 1;42(9):e336-e340. doi: 10.1097/INF.0000000000003979. Epub 2023 May 24
4. Kaizuka A, Tokuda Y, Morooka S, Gocho Y, Funaki T, Uchiyama T, Hirata Y, Yasumi T, Maekawa T, Kubota M, Ishiguro A: Pediatric hemophagocytic lymphohistiocytosis after concomitant administration of SARS-CoV-2 vaccine and influenza vaccine. *J Infect Chemother*. 2023 Aug 30:S1341-321X(23)00201-5.
5. 峠 千晶, 庄司 健介, 宮入 烈, 竹内 典子, 竹下 健一, 石和田 稔彦: ワクチン追加接種後に肺炎球菌3型による尿路感染症を発症した肝移植後の幼児. *日本小児科学会雑誌*. 2023;127(1):28-31

[総説]

1. Yamada M, Shoji K, Miyairi I, Kasahara M, Saitoh A: Pediatric Infectious Diseases Related to Transplantation: Insights From Japan. *Pediatr Infect Dis J*. 2023 Jan 1;42(1):e18-e25. doi: 10.1097/INF.0000000000003731.
2. Matsui T, Ogimi C: Risk factors for severity in seasonal respiratory viral infections and how they guide management in hematopoietic cell transplant recipients. *Curr Opin Infect Dis*. 2023, 36, 529-36, doi: 10.1097/QCO.0000000000000968.
3. Saito J, Shoji K, Miyairi I, Yamatani A, Drug Formulation for Pediatric Oral Antimicrobial Agents in Japan: Current Status, Prospects, and Challenges. *Pediatr Infect Dis J*. 2023 Jun 15. doi: 10.1097/INF.0000000000003913. Online ahead of print.
4. 相葉裕幸, 船木孝則: 学校における感染対策. *チャイルドヘルス* 2023;26(1):40-43
5. 船木孝則: 小児における COVID-19 対策アップデート. *東京小児科医会報 別冊* 2023;41(3):3-7
6. 大宜見力: 感染者急増…どう対応すればいい? 小児の新型コロナウイルス対策. *INFECTION CONTROL* 4月号 2023;32(4)
7. 庄司健介. COVID-19 の小児への影響と対策. (第 69 回日本小児保健協会学術集会シンポジウム 7 新型コロナウイルス感染症の小児保健への影響) *小児保健研究* 2023;82:389-392
8. 庄司健介: 小児感染症の治療 特集 新しい時代の感染症, 「小児内科」55 巻 4 号 492-498, 2023, 東京医学社
9. 山本修子, 船木孝則: 先天性サイトメガロウイルス感染症. *耳鼻咽喉科・頭頸部外科 増刊号* 2023;95(5):252-254
10. 船木孝則: SARS-CoV-2 の検査法. *周産期医学* 2023;53(10):1428-1433
11. 清水誠一, 阪本靖介, 山田全毅, 福田晃也, 内田孟, 柳佑典, 小峰竜二, 中尾俊雅, 児玉匡, 上遠野雅美, 中里弥生, 庄司健介, 船木孝則, 大宜見力, 笠原群生: 小児肝移植患者における新型コロナウイルス感染の現状と治療. *Organ Biology*. 2023;30(2):105-11

[著書]

1. Yamada M and Green M. Infectious Complications in Pediatric Renal Transplantation: Pediatric Solid Organ Transplantation: A Practical Handbook, 2023: 209-22, Springer Nature Singapore
2. Boghdady ZE, Ogimi C, Boeckh M. Respiratory viral infections. In: SoubaniEditor AO, ed. Pulmonary and Critical Care Considerations of Hematopoietic Stem Cell Transplantation: Springer; 2023:161-76.
3. 足立拓也, 鮎沢衛, 氏家無限, 大曲貴夫, 織田順, 加藤康幸, 神谷元, 川名明彦, 忽那賢志, 小谷透, 鈴木忠樹, 徳田浩一, 橋本修, 馳亮太, 早川智, 藤田次郎, 藤野裕士, 迎寛, 森村尚登, 倭正也, 横山彰仁, 市村康典, 斎藤浩輝, 船木孝則, 勝田友博: 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 診療手引き 第 1.0-9.0 版. 厚生労働省, 2023;1-1280
4. 山田全毅, 他多数: 小腸移植, 内科医のための臓器移植診療ハンドブック. 一般社団法人日本移植学会編. ぱーそん工房, 2023;246-247
5. 大宜見力: HIV 感染症. 今日の治療指針 2023, 診断と治療社, 2023:232-235
6. 大宜見力: 小児の急性細気管支炎. 今日の治療指針 2023 年版, 医学書院, 2023:1427-1429

7. 大宜見力：アデノウイルス感染症. 小児科診療ガイドライン第5版, 総合医学社, 2023:145-149
8. 松井俊大：特集 小児の移植医療、造血細胞移植における感染症対策と予防接種. 小児内科, 東京医学社 2023;55(5):847-851.
9. 小児科臨床編集委員会 編(庄司健介他)：小児科専門医受験のための最速トレーニング 144 問 総合医学社
10. 庄司健介：第8章 予防接種 小児科学 第11版. 文光堂, 2023;86-100
11. 加藤元博編集, 吉田美智子, 山田全毅, 宮入烈：小児科診療ガイドライン, 第5版, 総合医学社 2022;150-154, 176-180
12. 大宜見力：特集 小児の移植医療、臓器移植における感染症対策と予防接種. 小児内科, 東京医学社 2023;55(5):769-774
13. 松井俊大：髄液検査(細胞数・細胞種類, 糖・蛋白・C I). 小児臨床検査ガイド 第3版. 文光堂, 2023;630-634
14. 船木孝則：髄液微生物検査. 小児臨床検査ガイド 第3版. 文光堂, 2023;635-639
15. 葛西健人, 大宜見力：【エキスパートが教える 小児の薬物治療】疾患別 B. 感染症 細菌性腸炎. 小児内科, 2023;55:345-348

[ガイドライン、報告書、その他]

1. 山田全毅他：日本小児感染症学会監修 慢性活動性EB ウイルス病とその類縁疾患の診療ガイドライン 2023. 1. 23
2. 松井俊大：インフルエンザ流行期における小児の新型コロナウイルス感染症診療. 東京小児科医会報 2023;41:62-66
3. 庄司健介, 日本感染症学会 COVID-19 ワクチン・タスクフォース：COVID-19 ワクチンに関する提言 (第7版) 2023. 6. 12
4. 庄司健介：小児の抗菌薬データの限界に直面「臨床か研究のどちらかでは・・・」NCCHD感染症科医長が歩むフィジシャン・サイエンティストの道. 医療維新 2023. 8. 28
5. 庄司健介：小児のCOVID-19 とその他の感染症について. 成育だより夏号 2023;35:5
6. 庄司健介：日本小児科学会雑誌 2022 年優秀査読者賞 受賞. 成育だより秋号 2023;36:5
7. 船木孝則, 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 診療の手引き 編集委員会：新型コロナウイルス感染症診療の手引き 第9.0版. 2023. 2. 17
8. 船木孝則, 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 診療の手引き 編集委員会：新型コロナウイルス感染症診療の手引き 第10.0版. 2023. 8. 21
9. 船木孝則, 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) 診療の手引き 別冊 罹患後症状のマネジメント 編集委員会：新型コロナウイルス感染症診療の手引き (別冊) 第3.0版. 2023. 10. 20
10. 大宜見力：保育園、幼稚園でもらってきた感染症、見分け方のポイント～代表的な感染症5選～. 時事メディカル, WEB 公開, 2023. 9. 4
11. 大宜見力：保育園、幼稚園でもらってきた感染症、家庭内パンデミックを防ぐ方法. 時事メディカル, WEB 公開, 2023. 9. 19
12. 大宜見力：子どもの新型コロナワクチン. 東京小児科医会報, 2023;36-41
13. 大宜見力：予防接種で子どもの健康を守る. 月刊母子保健 5月号, 2023;4-5

[学会発表]

1. Myojin S, Misaki T, Okabe N, Miyairi I: Duration of fecal shedding among patients and asymptomatic carriers of Shiga toxin-producing *Escherichia coli* in Kawasaki city, Japan: a descriptive study. 22nd Annual St. Jude/PIDS Pediatric Infectious Diseases Research Conference, Memphis TN, 2022. 3. 1
2. Yamada M, Shoji K, Miyairi I, Kasahara M, Saitoh Akihiko: Current status of pediatric solid organ transplantation in Japan: Disease transmission surveillance in the country where living-donor transplantation is dominant. 12th congress of the International Pediatric Transplant Association, Austin, TX, 2023. 03. 25
3. Matsui T, Shoji K, Okamura K, Jinguji M, Murayama T, Kagawa N, Miyairi I: Can ID physicians and microbiologists distinguish *Staphylococcus aureus* from coagulase-negative staphylococci by Gram-stained images of blood cultures? 22nd St. Jude/PIDS Pediatric Infectious Diseases Research Conference, March 2nd. 2023
4. Shoji K, Hikino K, Saito J, Matsui T, Utano T, Takebayashi A, Tomizawa D, Kato M, Matsumoto K, Ishikawa T, Kawai T, Nakamura H, Miyairi I, Terao C, Mushiroda T. Effect of CYP2C19 on Voriconazole Pharmacokinetics in Children with Malignancy or Inborn Errors in Immunity. IDWeek, 2023/10/14, Boston, USA
5. Hisano H, Shoji K, Matsui T, Kato H, Fukui K, Kano M, Yamada Y, Gocho Y, Ishiguro A. Bacteraemia associated with intravascular catheter colonisation with Gram-negative rods in children. IDWeek, 2023/10/13, Boston, USA
6. Sato E, Iijima H, Shoji K, Ogimi C, Ishiguro A. Urinary tract infection due to *Aerococcus* urinae in children. IDWeek, 2023/10/13, Boston, USA
7. Ikuse T, Aizawa Y, Hasegawa S, Takahashi M, Hayashi T, Kon M, Tamura T, Matsumoto H, Saitoh A: Incidence of Omicron Variant Reinfection and Reduction of Reinfection Risk After Coronavirus Disease 2019 Vaccination in Children. ID Week 2023, Boston MA, 2023. 10. 14
8. Aiba H, Funaki T, Shoji K, Yamada M, Matsui T, Kono N, Terashima K, Uchida H, Ogimi C: Two pediatric cases of catheter-related bloodstream infection due to *Gordonia spp.* with disseminated lesions in the pulmonary lesion. The 55th Annual Meeting of the Japanese Society for Pediatric Infectious Diseases, Nagoya Japan, 2023. 11. 25
9. Iwamoto N: Antimicrobial stewardship and Trend in oral antibiotic use in Japanese children. The 18th Congress of ASPR (ASPR 2023), 2023. 11. 12
10. 貝塚杏奈、徳田雄亮、諸岡進太郎、牛腸義宏、船木孝則、内山徹、前川貴伸、窪田満：新型コロナウイルスワクチンおよびインフルエンザワクチン同時接種後に血球貪食性リンパ組織球症を発症した1例。第689回日本小児科学会東京都地方会講話会。東京，2023. 3. 11
11. 徳田雄亮，山田全毅，福田 晃也，庄司健介，阪本靖介，内田孟，清水誠一，岡田憲樹，石黒精，笠原群生：急性感染症の疑いで救急受診を要した小児肝移植後患者に対する初期対応に関する調査研究 126 回日本小児科学会学術集会，2023. 4. 14

12. 亀井宏一、小椋雅夫、新井勝大、清水泰岳、竹内一朗、河合利尚、庄司健介、村島温子、宮入烈、大宜見力：TNF α 阻害薬使用下での水痘ワクチンの免疫原性と安全性。第126回日本小児科学会学術集会，東京，2023.4.14
13. 伊東藍、飯島弘之、中村知夫、庄司健介、窪田満：COVID-19の小児における基礎疾患の有無と、臨床像・医療資源利用の関連についての検討。第126回日本小児科学会学術集会，東京，2023.4.14
14. 庄司健介：小児感染症科医としてのキャリアの積み上げ方，「特別企画」感染症専門医のこれからとキャリアパスを考える。第97回日本感染症学会総会・学術応援会/第71回日本化学療法学会学術集会 合同学会，東京，2023.4.28
15. 徳田雄亮，山田全毅，福田 晃也，庄司健介，阪本靖介，内田孟，清水誠一，岡田 憲樹，石黒精，笠原群生：急性感染症の疑いで予定外に受診した小児肝移植後患者における確定診断とその臨床的特徴。日本医学会総会，6NC リトリートポスターセッション，東京，2023.4.22
16. 船木孝則，山田全毅，三宅こず恵，上野紗希，明神翔太，相葉裕幸，松井俊大，大宜見力，宮入烈，賀藤均，庄司健介：5歳から11歳の基礎疾患のある患者に対する新型コロナウイルスワクチンの安全性と免疫原性に関する前向き症例集積研究。第27回日本ワクチン学会・第64回日本臨床ウイルス学会合同学術集会，静岡，2023.10.22日
17. 宮入烈：小児におけるCOVID-19治療の選択肢と早期の抗ウイルス治療。第126回日本小児科学会学術集会，東京，2023.4.15
18. 大宜見力：免疫不全児における予防接種の臨床的意義。第126回日本小児科学会学術集会，東京，2023.4.15
19. 葛西健人，船木孝則，飯島弘之，井手健太郎，相葉裕幸，明神翔太，窪田満，松本正太郎，大宜見力：COVID-19に菌血症を合併した早期乳児、幼児の3症例。第126回日本小児科学会学術集会，東京，2023.4.16
20. 庄司健介：小児感染症医としてのキャリアの積み上げ方。第97回日本感染症学会総会・学術講演会，横浜，2023.4.28
21. 相葉裕幸，三井真理，大西志麻，内田佳子，植松悟子，窪田満，山口麻子，庄司健介：小児周産期病院における性虐待被害児への性感染症スクリーニング検査の実態について。第70回日本小児保健協会学術集会，川崎，2023.6.17
22. 葛西健人，船木孝則，相葉裕幸，明神翔太，松井俊大，庄司健介，菅原美絵，三浦祥子，大宜見力：妊婦における海外からの高度薬剤耐性菌持ち込み対策としてのスクリーニング検査の意義。小児周産期施設での検討。第38回日本環境感染学会総会学術集会，横浜，2023.7.21
23. 山田全毅，清水誠一，福田晃也，船木孝則，内田孟，中尾俊雅，兒玉匡，小峰竜二，柳佑典，阪本靖介，笠原群生：小児生体肝移植に先行する腸管除菌プロトコルの改変が臨床予後に与える影響に関する研究。第59回日本移植学会総会，京都，2023.9.22
24. 益田博司，山田全毅，船木孝則，中尾寛，島袋林秀，中村知夫，窪田満：COVID-19流行下における呼吸器ウイルス感染症と川崎病発症の関連の検討。第43回日本川崎病学会総会・学術集会，大阪，2023.9.30
25. 船木孝則：5歳から11歳の基礎疾患のある患者に対する新型コロナウイルスワクチンの安全性と免疫原性に関する前向き症例集積研究。第27回日本ワクチン学会 第64回日本臨床ウイルス学会合同学術集会，静岡，2023.10.22

26. 庄司健介: 小児における β ラクタム系抗菌薬のTDM. 第72回日本感染症学会東日本地方会学術集会 第70回日本化学療法学会東日本支部総会 合同学会, 東京, 2023. 10. 26
27. 庄司健介, 内田佳子, 植松悟子, 幾瀬樹, 宮入烈: ワクチン忌避に対する救急外来と予防接種外来の連携. 第7回玉川医学会, 東京, 2023. 11. 18
28. 幾瀬樹, 相澤悠太, 長谷川聡, 高橋昌, 林嵩憲, 昆美也子, 田村務, 松本晴樹, 齋藤昭彦: 小児新型コロナウイルスオミクロンの再感染の間隔の検討. 第55回日本小児感染症学会総会学術集会, 名古屋, 2023. 11. 25
29. 佐藤英里, 飯島弘之, 庄司健介, 大宜見力: *Aerococcus urinae*による腎盂腎炎を発症した小児例. 第55回日本小児感染症学会総会学術集会, 名古屋, 2023. 11. 25
30. 黒木興心, 相葉裕幸, 松井俊大, 石黒精, 大宜見力: B群溶血性レンサ球菌による小児尿路感染症の臨床像. 第55回日本小児感染症学会総会学術集会, 名古屋, 2023. 11. 25
31. 久野陽菜, 松井俊大, 加藤宏樹, 福井加奈, 狩野元宏, 山田悠司, 牛腸義宏, 石黒精, 庄司健介: 小児における中心静脈カテーテル先端培養カンジダ陽性に続発するカンジダ血症に関する検討. 第55回日本小児感染症学会総会学術集会, 名古屋, 2023. 11. 25
32. 大宜見力: 菌血症を伴う小児尿路感染症治療における経口抗菌薬への変更. 第55回日本小児感染症学会総会学術集会, 名古屋, 2023. 11. 26
33. 庄司健介, 浅井雄介, 秋山尚之, 都築慎也, 松永展明, 鈴木節子, 岩元典子, 船木孝則, 宮入烈, 大曲貴夫: 小児COVID-19患者に対するレムデシビルの効果. 第55回日本小児感染症学会総会学術集会, 名古屋, 2023. 11. 26
34. 葛西健人, 船木孝則, 幾瀬樹, 相葉裕幸, 松井俊大, 山田全毅, 庄司健介, 浦田晋, 武井哲理, 大宜見力: 小児用補助人工心臓装着中の感染症に関する症例集積研究. 第55回日本小児感染症学会総会学術集会, 名古屋, 2023. 11. 26
35. 相葉裕幸, 庄司健介, 竹澤芳樹, 中川聡, 中尾寛, 宮坂実木子, 大宜見力: 犬咬傷による新生児脳腫瘍の1例. 第21回世田谷区医師会医学会, 東京, 2023. 12. 2

[講演]

1. 庄司健介: リスクコミュニケーション. JPS-AAP Immunization Education Program, 東京, 2023. 1. 14
2. 庄司健介: 小児の新型コロナウイルス感染症について. 令和4年度世田谷区学校保健会講演会, Web公園, 2023. 2. 9
3. 庄司健介: 小児感染症診療における抗菌薬適正使用—これまでとこれから—. 第21回日赤にじの会, 東京, 2023. 2. 2
4. 明神翔太: 小児感染症診療の基本とピットフォール. 第11回 後期研修医のための若葉小児科臨床研究会, 兵庫, 2023. 2. 16
5. 大宜見力: 子どもの新型コロナワクチン—今後の見通し—. 第122回東京小児科医会学術講演会, オンデマンド配信, 2023. 3. 18~4. 2
6. 庄司健介: 進化するMultiplex PCR ~小児感染症への貢献と期待~. 第126回日本小児科学会学術集会, ランチョンセミナー, 東京, 2023. 4. 14
7. 大宜見力: RSウイルス感染症診療マネジメントの適正化. 第2回 RSウイルス感染症を知って、子供を守ろう会, Webinar 宮城, 2023. 5. 10

8. 大宜見力：～世界標準の小児感染症診療を目指して～. ネルソン小児科学原著 21 版 刊行記念講演会, Webinar 東京, 2023. 6. 7
9. 船木孝則：小児における新型コロナウイルス感染症後遺症（罹患後症状）について. 第 30 回小児呼吸器セミナー, オンデマンド配信 (2023. 6. 10-18)
10. 大宜見力：思いもよらなかった米国小児科臨床留学. 新潟小児感染症講演会 2023, 新潟, 2023. 6. 23
11. 松井俊大：小児血液腫瘍疾患治療中の抗菌薬使用における施設のお作法. 東京小児がん Webinar, 東京, 2023. 7. 15
12. 船木孝則：接種法・抑制法. 予防接種基礎講座（予防接種従事者研修委託事業）. 国立国際医療研究センター・国立成育医療研究センター・公益財団法人予防接種リサーチセンター共催, 2023. 8. 25
13. 大宜見力：保育施設における感染症対策～新型コロナウイルス感染症を含めて～. 第 11 回保育科学研究所学術集, Webinar 東京, 2023. 9. 9
14. 庄司健介：妊婦 COVID-19 入院患者のデルタ株流行期とオミクロン株流行期における臨床的特徴の比較. 第 4 回 COVIREGI 研究報告シンポジウム, オンライン, 2023. 9. 15
15. 庄司健介：病態と治療（ウイルス感染症）. 2023 年度小児薬物療法研修会, 2023 年 9 月 25 日収録, オンデマンド配信, 2023. 11～12, 2024. 2 配信
16. 大宜見力：薬剤耐性菌対策と抗菌薬適正使用の支援について. 2023 年度第 1 回地域連携合同カンファレンス, 東京, 2023. 6. 14
17. 大宜見力：世界標準の小児感染症診療を目指して. ネルソン小児科学原著 21 版 刊行記念講演会, Webinar, 東京, 2023. 6. 7
18. 大宜見力：小児病院での院内感染対策と抗菌薬適正使用. 令和 5 年度 第 2 回感染対策悉皆研修 (ICT/ASP), 東京, 2023. 10. 24
19. 大宜見力：造血細胞移植レシipientにおける呼吸器ウイルス感染症. 東京小児がん遺伝子細胞治療, Webinar, 2023. 11. 23
20. 大宜見力：小児科医の視点から見た日米の感染症診療の違い. 第 47 回山陰感染症化学療法研究会, 鳥取, 2023. 12. 9

[広報活動]

1. 大宜見力：[スキャナー] コロナ感染じわり拡大 沖縄突出病床使用は 59% 東京読売新聞 読売新聞オンライン 2023 年 6 月 24 日
2. 大宜見力：RS ウイルス感染症&ヘルパンギーナ・子どもの感染症早いペースで拡大 NHK(ニュース LIVE! ゆう 5 時)、NHK 総合大阪(ニュース LIVE! ゆう 5 時)、NHK 総合名古屋(ニュース LIVE! ゆう 5 時) NHK(ニュースウォッチ 9)、NHK 総合大阪(ニュースウォッチ 9)、NHK 総合名古屋(ニュースウォッチ 9)、NHK ニュース web 2024 年 6 月 27 日
3. 大宜見力：RS ウイルス感染症&ヘルパンギーナ・子どもの感染症が増加 NHK 総合(おはよう日本)、NHK 総合名古屋(おはよう日本)、NHK 総合大阪(おはよう日本) 2024 年 6 月 28 日
4. 大宜見力：<ほっと機動班>子ども中心に感染症が流行・消毒&手洗・対策の徹底を NHK 総合大阪 2024 年 6 月 28 日
5. 大宜見力：子供の夏風邪、過去 10 年で最多 コロナ対策で免疫低下か 日経電子版、日経速報ニュース 2024 年 7 月 9 日
6. 大宜見力：<NHK ニュース 7>RS ウイルス感染症 子どもの入院急増 NHK 総合、NHK 総合大阪、NHK 総合名古屋、NHK 首都圏 NEWS WEB、NHK NEWSWEB 2024 年 7 月 16 日

7. 大宜見力：＜ニュース・気象情報 5:00＞RS ウイルス 入院の子ども急増 NHK 総合、NHK 総合大阪、NHK 総合名古屋 2024 年 7 月 17 日
8. 大宜見力, 庄司健介, 船木孝則および関連部署：国立成育医療研究センターにおける小児・周産期領域における新型コロナウイルス感染症（COVID-19）対策の総括と提言 | 国立成育医療研究センター 2023 年 3 月 30 日
9. 庄司健介：RS ウイルス感染の子どもが急増 小児病棟では足りず「危機的状況」 朝日新聞デジタル 2023 年 6 月 22 日
10. 庄司健介：RS ウイルス患者が急増 コロナ対策緩和影響か 朝日新聞（夕刊） 2023 年 6 月 23 日
11. 庄司健介：小児の抗菌薬データの限界に直面「臨床か研究のどちらかでは…」 m3.com 2023 年 8 月 28 日
12. 船木孝則：コロナ後遺症 子ども 3.9% 感染 1 カ月後も症状継続 小児科学会調査 神戸新聞 産経新聞 信濃毎日新聞 下野新聞 2023 年 5 月 2 日
13. 船木孝則：「終わった宿題なのに、繰り返しやってしまう」コロナ後遺症、子どもでも記憶障害や倦怠感 長引けば受験や就職に影響する恐れ 東奥日報ウェブ 沖縄タイムスウェブ 富山新聞ウェブ 信濃毎日新聞ウェブ 新潟日報 2023 年 5 月 12 日
14. 船木孝則：コロナ後遺症「終わった宿題を繰り返しやってしまう」、子どもでも記憶障害や倦怠感 長引けば受験や就職に影響する恐れ 47 ニュース yahoo ニュース (47 ニュース) docomo ニュース (47 ニュース) infoseek (47 ニュース) 静岡新聞ウェブ 北海道新聞ウェブ 2023 年 5 月 17 日

こころの診療科（こころの診療部）研究業績

院内の組織改組により、こころの診療部は2023年10月に内科系専門診療部こころの診療科となった。ここではこころの診療部に関する研究業績を中心に記載する。

こころの診療部

統括部長（小枝達也）が中心となって行った研究業績は以下の通りである。また、こころの診療部在籍フェロー医師の研究業績も併せて記している。各診療科の研究業績は各科の項を参照されたい。

[原著論文：査読付]

関戸雄貴, 小枝達也. ディスレクシア解読指導アプリアプリケーションによる音読困難の改善効果. 日本小児科学会雑誌 2023;127:429-434

[報告書等]

1. 令和5年度 厚生労働科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成総合研究事業）身体的・精神的・社会的（biopsychosocial）に乳幼児・学童・思春期の健やかな成長・発達をポピュレーションアプローチで切れ目なく支援するための社会実装化研究（21DA1001）（研究代表者 永光信一郎）分担研究者 小枝達也
2. 文部科学省特別支援教育課 通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への支援の在り方に関する検討会議 報告

[学会発表]

1. 小枝達也, 五十嵐 隆, 奥野正景ら. 子どもの心の診療実態と研修実態に関する検討. 第126回日本

- 小児科学会 シンポジウム, 東京, 2023. 4. 15
2. 小枝達也, 小児医療と保健の近接化を考える. 第 70 回日本小児保健協会学術集会, 川崎市, 2023. 6. 16
 3. 小枝達也, コロナ禍が子どもたちの成長・発達に及ぼした影響について. 豊田加茂医師会母子保健事業研修会, 豊橋市, 2023. 9. 19
 4. 小枝達也, デジタル化時代に対応した乳幼児健診. 鶴天口県小児保健研究会教育講演, 山口, 2023. 9. 30
 5. 小枝達也, デジタル化を迎えるこれからの乳幼児健診. 秋田県小児保健協会特別講演, 秋田市, 2023. 10. 21
 6. 小枝達也, 発達障害の小児療育に役立つ最近の情報 ア・ラ・カルト. 第 2 回日本小児リハビリテーション学会 教育講演, 東京, 2023. 10. 27
 7. 小枝達也, 児童虐待防止にかかわる医師の役割. 第 37 回日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会 教育講演, 横浜, 2023. 11. 8
 8. 小枝達也, 学習障害のある子への理解と支援. 徳島県医師会学校保健委員会教育講演, 徳島, 2023. 11. 19
 9. 小枝達也, 産婦人科・小児科・精神科の顔の見える有機的な連携について 小児科医の立場から. 日本医師会 母子保健講習会, 東京, 2024. 2. 18
 10. 小枝達也, 五十嵐 隆, 奥野正景ら. 子どもの心の診療実態と研修実態に関する検討. 第 126 回日本小児科学会 シンポジウム, 東京, 2023. 4. 15

[学会の主催]

第 70 回日本小児保健協会学術集会(大会長 小枝達也), 川崎市, 2023. 6. 16-18

乳幼児メンタルヘルス診療科

[原著論文：査読付]

1. Kishimoto M, Sekido Y, Kawai H, Takaki M: Effects of safe and sound protocol system on psychological and physiological functions of children with autism spectrum disorders: preliminary findings. Psychol Psychother 2023;13:4
2. Kawai H, Kishimoto M, Okahisa Y, Sakamoto S, Terada S, Takaki M: Initial Outcomes of the Safe and Sound Protocol on Patients with Adult Autism Spectrum Disorder: Exploratory Pilot Study. Int J Environ Res Public Health 2023;20:4862

[ガイドライン、報告書、その他]

1. 岸本真希子 (研究代表者) : 自閉症児に対する新しい療育 RDI (対人関係発達指導法) の効果検証 (17K10332) , 科学研究費助成事業 研究成果報告書
2. 岸本真希子 (研究代表者) : キャスパーアプローチに基づいたシーティングの実践による発達障害児の発達への影響の調査 (B-6), 成育医療研究開発費 研究成果報告書

[学会発表]

1. Kawai H, Kishimoto M, Okahisa Y, Sakamoto S, Terada S, Takaki M: Effectiveness of the safe and sound protocol for sensory processing and social difficulties in adult autism spectrum disorder: Pilot study. 8th Annual Congress on Mental Health, Dublin, 2023. 7. 3
2. 岸本真希子, 黒神経彦, 鈴木博道, 小河邦雄, 小枝達也: 災害を経験した子どもの心的外傷後ストレス障害に対する介入のスクーピングレビュー. 第119回日本精神神経学会, 神奈川, 2023. 6. 24
3. 岸本真希子, 佐々木掌子: 委員会シンポジウム25 (性別不合に関する委員会) 精神科医にどのように性別不合 (Gender Incongruence) 医療に参入してもらうか 性別違和を抱える子どもに対する医療的ケアの実践と課題、今後の展望. 第119回日本精神神経学会, 神奈川, 2023. 6. 24

[講演]

1. 岸本真希子: こころにトラウマを抱えたこどものメンタルヘルスケア. のびのび育ちの会, 東京, 2023. 3. 16

児童・思春期メンタルヘルス診療科

[原著論文:査読付]

1. 諸岡輝子, 岡 牧郎, 荻野竜也, 吉永治美, 小林勝弘: 発作抑制後も高次脳機能障害が残存した前頭葉焦点と考えられるてんかんの1例. 脳と発達 2023;55:356-362

[総説]

1. 岡 牧郎: 医療の現場からみた特別支援教育. 格致日新〜これからの特別支援教育を語る〜. 特別支援教育研究 2023;793:1-2
2. 岡 牧郎: 発達性協調運動症の医療の到達点と次の一步. 発達障害研究 2023;45:26-28
3. 岡 牧郎: 限局性学習症(学習障害). 特集 発達障害を地域で診る. 月刊地域医学 2023;37:1230-1235
4. 岡 牧郎: 注意欠如多動症. ジェネラリストのための発達障害(神経発達症)入門. 総合診療 2023;33:1046-1050
5. 黒神経彦: 小児科学レビュー ―最新主要文献とガイドライン― 精神疾患・こころの問題 発達障害. 小児科臨床 2023 ; 76:15-20

[著書]

1. 柏木 充, 久保田雅也, 岡 牧郎: 各論6. 治療 (3) 解熱薬. 熱性けいれん(熱性発作)診療ガイドライン2023. 日本小児神経学会監修 熱性けいれん診療ガイドライン改定ワーキンググループ編. 診断と治療社, 2023, 71-84
2. 柏木 充, 久保田雅也, 岡 牧郎: 各論7. 注意すべき薬剤. 熱性けいれん(熱性発作)診療ガイドライン2023. 日本小児神経学会監修 熱性けいれん診療ガイドライン改定ワーキンググループ編. 診断と治療社, 2023, 86-91

3. Kelly DP and Natale MJ(著), 岡 牧郎(翻訳), 小枝達也(編集) : 第48章 神経発達および遂行機能と機能障害. ネルソン小児科学 原著第21版(日本語版). 五十嵐隆(総監訳). エルゼビア・ジャパン(電子版), 2023
4. Shaywitz SE and Shaywitz BA(著), 岡 牧郎(翻訳), 小枝達也(編集) : 第50章 ディスレクシア. ネルソン小児科学 原著第21版(日本語版). 五十嵐隆(総監訳). エルゼビア・ジャパン(電子版), 2023

[ガイドライン、報告書、その他]

1. 夏目 淳, 石井敦士, 岡 牧郎, 柏木 充, 金村英秋, 久保田雅也, 田中雅大, 田邊卓也, 浜野晋一郎, 三牧正和, 吉田 登 : 熱性けいれん(熱性発作)診療ガイドライン2023. 日本小児神経学会監修 熱性けいれん診療ガイドライン改定ワーキンググループ編. 診断と治療社, 2023
2. 岡 牧郎 : 書評 「発達障がい、病態から支援まで 大阪大学大学院連合小児発達研究科(監修)」 小児の精神と神経 2023;63:104
3. 岡 牧郎 : からだの質問箱「16歳の息子が唾液過多症」読売新聞, 2023. 7. 7

[学会発表]

1. 岡 牧郎, 禅正和真, 柴田 敬, 宮崎育子, 浅沼幹人, 小林勝弘 : 大家族における発達性ディスレクシアの病因遺伝子解析. 第65回日本小児神経学会学術集会, 岡山, 2023. 5. 27
2. 岡 牧郎 : 学習困難を抱える児童に対する医療の役割とその課題. シンポジウム8 限局性学習症の医療と教育～学習困難は誰がどのように支援・指導すべきなのか～. 第65回日本小児神経学会学術集会, 2023. 5. 26.

[講演・セミナー・研修]

1. 岡 牧郎 : 医療的ケア児における発達障害を考える. 令和4年度小児在宅技術講習会 Part 7. 講演, 東京(Web), 2023. 3. 2
2. 岡 牧郎 : 限局性学習症の診断と支援. 第65回日本小児神経学会学術集会. 教育講演, 岡山(Web), 2023. 5. 25-27
3. 禅正和真, 岡 牧郎, 柴田 敬, 宮崎育子, 塚原宏一, 小林勝弘, 浅沼幹人 : 大家族における発達性ディスレクシアの病因遺伝子の探索と機能解析. 第48回岡山脳研究セミナー, 岡山, 2023. 2. 16
4. 岡 牧郎 : 限局性学習症における医療の役割. 2023年度山口県小児科医会総会. 特別講演, 宇部, 2023. 7. 30
5. 岡 牧郎 : 限局性学習症の臨床と支援. 第8回三重県小児神経懇話会. 講演, 津, 2023. 11. 9
6. 岡 牧郎 : てんかんと神経発達症. 第6回小児てんかん丸太会学術講演会. 講演, 東京, 2023. 11. 14
7. 岡 牧郎 : 診断・治療ガイドライン第5版に基づいたADHDの治療戦略. ADHD Web Conference Autumn. 特別講演, Web, 2023. 11. 29
8. 岡 牧郎 : 発達障害(神経発達症)の早期発見・早期介入. 第66回岡山県小児保健協会総会及び研究発表会. 講演, 岡山, 2023. 12. 10
9. 岡 牧郎 : 限局性学習症(学習障害)の理解を深めよう. 墨田区子育て支援活動助成事業 発達障害のある子どもを理解するための勉強会. 講演, 東京, 2024. 2. 4

10. 黒神経彦: 神経発達症を中心とした子どもの睡眠障害へのアプローチについて. 子どもの睡眠オンライン講演会, 東京, 2023. 9. 27

リエゾン診療科

[原著論文: 査読付] (Reviewed Paper)

1. Kobayashi M, Ogawa Y, Sensaki S, Tanaka K: Biopsychosocial approach implications in suspected long COVID: A case report. *Pediatr Int* 2023;65(1): e15621
2. Tanaka K, Hayakawa M, Mori M, Maeda N, Nagata M, Horibe K: Medical staff's sense of awareness of informed consent for adolescent cancer patients and the need for decision-making support practiced from the perspective of trauma-informed approach. *BMC Med Ethics* 2023;6:24-28
3. Nakamura A, Tanaka K: A boy with dissociative symptoms who benefited from biopsychosocial assessment. *Pediatr Int* 2023 Jan;65:e15502
4. Ogawa Y, Otani Y, Nakamura A, Hayakawa M, Tanaka K: Urgent Need to Establish a Consultation Liaison System in Pediatric Care. *Pediatr Int* 2023;65:e15505
5. Takahashi N, Shoji H, Arai H, Tanaka K, Kakiuchi S.M.D., Yoda H, et al.: Effect of biotin supplementation in infant formula: A multi-center Study in Japan. *Pediatr Int* 2023;65:e15359
6. Hirayama T, Fujimori M, Ito Y, Ishida Y, Tsumura A, Ozawa M, Maeda N, Yamamoto, Takita S, Mori M, Tanaka K, Horibe K, Akechi A: Feasibility and preliminary effectiveness of a psychosocial support program for adolescent and young adult cancer patients in clinical practice: a retrospective observational study. *Supportive Care in Cancer* 2023;31:146
7. Nakajima N, Tanaka M, Kanehara A, Morishima R, Kumakura Y, Ohkouchi N, Hamada J, Ogawa T, Tamune H, Nakahara M, Mori, Kayo Ichihashi K, Jinde S, Kano Y, Sakamoto I, Tanaka K, Hirata Y, Ohashi H MD, Shinohara T, Kasai K: Relationship between high trait anxiety in 22q11.2 deletion syndrome and the difficulties in medical, welfare, and educational services. *Psychiatry Clin Neurosci Rep* 2023;2:e80
8. Goto R, Piedvache A, Hangai M, Yamaoka Y, Sampei M, Sawada N, Okubo Y, Tanaka K, Morisaki N, Hosozawa M: Time trends in emotional well-being and self-esteem in children and adolescents during the COVID-19 pandemic. *J Clin Med* 2023;12:4154
9. Tanaka K, Tsujii H, Itoh A, Hirahara K: Advocate for children receiving medical care: A study on pediatric care and children's rights. *Int J Healthcare* 2023;(9)2
10. Fuji H, Fujibuchi T, Tanaka H, Ogawa Yuu, Noda C, Hayakawa M, Nakamura K, Tanaka K: Changes in satisfaction and anxiety about radiotherapy for pediatric cancer by two-step audio-visual instruction. *Tech Innov Patient Support Radiatr Oncol* 2023;10:27:100214
11. Sensaki S, Mao Y, Biswas A, Amin Z, Cook AR, Lee J, Epidemiology of birth anthropometry

among three Asian ethnic groups in Singapore. Arch Dis Child 2023;108:367-372

[症例報告]

Kobayashi M, Ogawa Y, Sensaki S, Tanaka K: Biopsychosocial approach implications in suspected long COVID: A case report. Pediatr Int 2023;65:e15621

[総説]

1. 田中恭子: 特集: 子どもと新型コロナウイルス感染症 「子どもの心のケア」 東京都小児科医会報特集 東京都小児科医会報特集 2023;41:57-63
2. 田中恭子: AIテクノロジーを生かした子どもの療養支援. 東京都獣医師会広報誌『TOJUジャーナル』2023;10: 609.
3. 田中恭子: 小児病院のコンサルテーション・リエゾン-周術期の支援で, 再トラウマ化を防ぐ. LiSA 2023;30:888-893
4. 田中恭子: 特集 小児のCOVID-19とその対策 コロナ禍における子どものメンタルヘルス. 公衆衛生 2023;87:555-562
5. 田中恭子: こどもの心とからだ. 日本小児心身医学会雑誌 2023;31:603-604, 2023.
6. 田中恭子: 子どもの医療における共同意思決定 特集:子どもの声を聴く一支援の現場から「子どもの権利」を考える. こころの健康科学. 2023;232:66-72
7. 千先園子: こどものこえを政策につなげる一政策過程への介入戦略. 小児科医ができるアドボカシー活動. 小児内科 2023;55:1615-1621
8. 千先園子: 社会との関わり 2. ソーシャルインパクトと再生医療. 実験医学 2023;42:157-163
9. 深山 はるか, 田中恭子: 【おなかの痛い, 気持ちわるい 子どもの腹部疾患】 その他考えられる疾患・障害・状態 心身症・精神疾患・発達障害 (解説). 小児看護 2023;46:211-217
10. 西ヶ野圭祐, 田中恭子: 思春期以降に発達障害が疑われたら. 周産期医学2023;53:557-560

[著書]

1. 田中恭子: Global Child Health 「The Field of Pediatrics」, ネルソン小児科学 原著第21版 日本語翻訳版, エルゼビア・ジャパン, 2023
2. 田中恭子: Child Trafficking for Sex and Labor 「Adolescent Medicine」, ネルソン小児科学 原著第21版 日本語翻訳版, エルゼビア・ジャパン, 2023
3. 田中恭子: BayleyTM-III乳幼児発達検査 日本語版 Nancy Bayley, 日本文化科学社, 2023

[ガイドライン、報告書、その他]

1. 田中恭子 (分担研究報告書: 研究代表: 岡田直大) 思春期レジリエンス向上に有用な介入プログラムの大規模実証研究 令和3年度厚生労働科学研究費補助金 (成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業 (健やか次世代育成総合研究事業)), 令和4年度研究報告書, 2023
2. 田中恭子 (研究代表) 疾病受容評価に基づく小児慢性疾患患児の意思決定支援プログラムの開発および家族支援のあり方の検討〜小児慢性疾患自立支援事業“成育モデル”の開発〜 成育医療研究開発費, 令和4年度研究報告書, 2023

3. 田中恭子 (分担研究報告書：研究代表：石井礼花) ADHDまたは慢性疾患を持つ児への成育環境の影響を測定するマルチモーダルMRI神経ネットワーク指標の開発—Child Attachment Interview による愛着分類を用いて AMED成育疾患克服等総合事業(BIRTHDAY) , 令和4年度研究報告書, 2023
4. 田中恭子 (分担研究報告書：研究代表：五十嵐隆) 内閣府戦略的イノベーション創造プログラム AI(人工知能)ホスピタルによる高度診断・治療システム 小児・周産期病院におけるAIホスピタル機能の実装に基づく実証研究「テレプレゼンスシステムSONY「窓」を用いた(長期)入院・通院患児と家族・社会との絆支援の検討」成果報告書
5. 田中恭子 (分担研究報告書：研究代表：五十嵐隆) 内閣府戦略的イノベーション創造プログラム AI(人工知能)ホスピタルによる高度診断・治療システム 小児・周産期病院におけるAIホスピタル機能の実装に基づく実証研究「療養環境におけるロボット介在療法が慢性疾患を有する子どもと家族に与える癒し効果の検討」
6. 千先園子:政策形成過程における科学的知見の活用最大化のための中間人材の可能性について ―成育医療・母子保健領域を事例とした分析と実証― 戦略的創造研究推進事業(社会技術研究開発) JST, 2023

[学会発表]

1. 田中恭子: シンポジウム 性的虐待に立ち向かう 第70回日本小児保健協会学術集会, 川崎, 2023. 6. 16
2. 田中恭子: シンポジウム 小児循環器疾患と緩和ケア 日本小児循環系病学会, 横浜, 2023. 7. 7
3. 田中恭子: コロナ禍と特別支援教育～これまでとこれから～ 日本特殊教育学会第61回大会・学会企画シンポジウム, 横浜, 2023. 8. 26
4. 田中恭子: 発達科学研究について 発達科学研究選考, 横浜, 2023. 8. 30
5. 田中恭子: 子どもの心身相関をどのようにアセスメントし伝えるか 第41回日本小児心身医学会学術集会 シンポジウム, 和歌山, 2023. 9. 15
6. 田中恭子: 子どもの権利ワーキンググループ報告 日本虐待防止学会, 滋賀, 2023. 11. 25
7. 田中恭子: 子どもの権利を基盤とする子ども虐待対応について考える 日本虐待防止学会, 滋賀, 2023. 11. 26
8. 千先園子: 第1報: 成育医療母子保健領域における EBPM サイクルの促進阻害因子の分析: 文献調査. 第82回日本公衆衛生学会総会, 茨城, 2023. 11. 1
9. 千先園子: 第2報: 成育医療母子保健領域における EBPM サイクルの促進阻害因子の分析: 質的調査. 第82回日本公衆衛生学会総会, 茨城, 2023. 11. 1
10. 小林まどか, 小川 悠, 千先園子, 田中恭子: 慢性疾患をもつ子どもの養育者への支援: ペアレントトレーニングのニーズを検討する. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 16
11. 小林まどか, 田中恭子, 千先園子, 小川 悠, 金田美緒, 西ヶ野圭祐, 深山はるか, 小枝達也: 慢性疾患をもつ子どもと家族の支援 小児慢性特定疾病事業成育モデル: 子どもリエゾン室の取り組みの実践報告. 第70回日本小児保健協会学術集会, 東京(神奈川), 2023. 6. 17
12. 小林まどか, 田中恭子: 慢性疾患児の家族支援における課題; 保護者のストレス反応と社会的孤立. 第64回日本児童青年精神医学会総会, 青森, 2023. 11. 16
13. 深山 はるか, 小川 悠, 野田千尋, 早川真桜子, 田中 恭子: 学校におけるメンタルヘルス教育の必要性～学校職員に向けたWebセミナーから考察する～. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京,

2023. 4. 16

14. 西ヶ野圭祐, 小川 悠, 柳楽明子, 田中恭子: 当院におけるCOVID-19パンデミック期の小児の自殺企図3例の検討. 第41回日本小児心身医学会学術集会, 和歌山, 2023. 9. 1

【講演】

1. 田中恭子: 子どものこころを診る バイオサイコソーシャルアプローチ 第126回日本小児科学会学術集会教育講演, 東京, 2023. 4. 17
2. 田中恭子: イズカーゴ@UPDATE Seminar JCRファーマ株式会社 MPS研究会, 東京 2023. 4. 22
3. 田中恭子: 子ども療養支援士養成講座 日本子ども療養支援協会, 東京, 2023. 4. 23
4. 田中恭子: 子どもの神秘 遊びと発達 日本子ども療養支援協会 プレイリーダー研修会, 東京, 2023. 5. 24
5. 田中恭子: 医療における子ども憲章 策定のプロセス 日本子ども療養支援協会第10回子ども療養支援研究会 教育講演, 東京, 2023. 6. 24
6. 田中恭子: 子どものメンタルヘルス バイオサイコソーシャルアプローチ 子どものこころ バイオサイコソーシャルアセスメント, 埼玉, 2023. 7. 21
7. 田中恭子: コロナ禍と特別支援教育～これまでとこれから～ 一般社団法人日本特殊教育学会 日本特殊教育学会第61回大会・学会企画シンポジウム, 神奈川, 2023. 8. 26
8. 田中恭子: サイコソーシャルアセスメントとその支援 JCRファーマ株式会社 北関東・甲信越エリア ライソゾーム病ミーティング, 大宮, 2023. 9. 24
9. 田中恭子: 移行期患者のこころの問題 移行期委員会・子どもリエゾン室 成人移行支援グランドラウンド2023, 東京, 2023. 9. 11
10. 田中恭子: 症例で学ぶ! Biology・Psychology・Sociologyで診ることのススメ 第56回日本小児内分泌学会学術集会インタラクティブプレミアムセミナー, 2023. 10. 20
11. 田中恭子: 子どもの支援～バイオサイコソーシャルアプローチのコツ～ 佐賀医大小児科 第58回佐賀大学こどもセンター 多科合同セミナー, 佐賀, 2023. 10. 24
12. 田中恭子: バイオサイコソーシャルに診る子どものメンタルヘルス 武田薬品工業株式会社Torch Webinar, 東京, 2023. 11. 17
13. 田中恭子: 慢性疾患のある子どもと家族のこころについて～メディカルトラウマへのアプローチ～ 東京都福祉局子供・子育て支援部 令和5年度東京都小児慢性特定疾病児童等自立支援事業交流会, 東京, 2023. 12. 2
14. 千先園子: 成育こどもシンクタンク of 取組一すべてのこどものBIOPsychoSocial な支援を目指して一. 成育臨床懇話会, 東京, 2023. 12. 13
15. 千先園子: 成育基本法・緊急提言を踏まえた成育基本法・成育基本計画の実施と運用に向けた次の打ち手. こどもの健康推進プロジェクト公開フォーラム「“異次元” の子ども関連施策の推進に向けた課題と展望」, HGPI(日本医療政策機構), 東京, 2023. 4. 6
16. 千先園子: 成育医療母子保健領域の IT 活用による社会実装推進 第70回小児保健協会学術集会, 神奈川, 2023. 6. 18
17. 千先園子: エコチル調査の概要紹介. エコチル調査概要紹介, 環境省, 東京, 2023. 6. 28

[広報活動]

1. 田中恭子: 小中高生の自殺が過去最多、学業や進路の悩みも 小児科医らの危機感 朝日新聞デジタル, 2023. 4. 3
2. 田中恭子: 重い悩みを抱える子どもに、周りの大人ができること 医師に聞く心得 朝日新聞 2023. 4. 3
3. 田中恭子: 重い悩みを抱える子どもに、周りの大人ができること 医師に聞く心得 livedoorニュース (朝日新聞), 2023. 4. 3
4. 田中恭子: 重い悩みを抱える子どもに、周りの大人ができること 医師に聞く心得 朝日新聞デジタル, 2023. 4. 3
5. 田中恭子: 「人は人」マスク外せない子を追い詰めないで 日経×WOMAN, 2023. 4. 11
6. 田中恭子: 子の悩み、聞いて、ねぎらって 小中高生の自殺、昨年最多514人 朝日新聞, 2023. 5. 1
7. 田中恭子: 子の悩み、聞いて、ねぎらって 小中高生の自殺、昨年最多514人 朝日デジタル, 2023. 5. 1
8. 田中恭子: 「とどけ」の音源使用 ラジオ深夜便, 2023. 5. 25
9. 田中恭子: 新学期の子どもに「心のつらさ」 ～不登校や自傷行為も～ 時事メディカル, 2023. 9. 11
10. 田中恭子: 新学期の子どもに「心のつらさ」 ～不登校や自傷行為も～ Yahoo!ニュース, 2023. 9. 11
11. 田中恭子: 見過ごしたくない「#育児あるある」 つらそうな子どもにどう接する?～コロナで傷ついた心との向き合い方～大人編～【第6回】 時事メディカル, 2023. 11. 13
12. 田中恭子: つらそうな子どもにどう接する? コロナで傷ついた心との向き合い方・大人編 Yahoo!ニュース, 2023. 11. 13
13. 田中恭子: 気持ちががつらいとき、どうする? コロナで傷ついた心との向き合い方・子ども編 時事メディカル, 2023. 11. 27
14. 田中恭子: 気持ちががつらいとき、どうする? コロナで傷ついた心との向き合い方・子ども編 Yahoo!ニュース, 2023. 11. 27
15. 千先園子: 成育こどもシンクタンクすべてのこどものBIOPSychoSocialな支援を目指して一. 小児科診療UpToDate, ラジオNIKKEI, 東京, 2023. 5. 10

心理療法室

[論文]

1. 岩崎美奈子・長田淳子・引土達雄・御園生直美・上鹿渡和宏. 社会的養護のもとで育つ乳幼児の社会的認知発達—アイトラッキングを用いた探索的研究— 乳幼児医学・心理学研究 2023年9月 32巻1号: 63-72.

[著書]

1. 柳楽明子: 特集 How to Follow-up—ハイリスク児のフォローアップの必修知識2023. 年齢に応じ

た発達・知能検査の選択・評価と家族への説明. 周産期医学53 (4), 2023増大号, 2023 ; 538-545

2. 新村麻里奈: 重なり合う支援のかたち: 周産期心理士のメッセージ(第4回)赤ちゃんとの出会いと別れに向き合う家族のこころを支える. With neo = ウィズ・ネオ: 赤ちゃんを守る医療者の専門誌 36 (1), メディカ出版, 2023 ; 154-156

[その他(翻訳)]

1. ビーズリー, P. (監訳) 引土達雄・三輪清子・山口敬子・御園生直美. 養親・里親の認定と支援のためのアセスメント・ガイドブック—パーマネンシーの視点から養子や里子の人生に寄り添うためのヒント. 明石書店 2023年10月.

[学会発表]

1. 柳楽明子, 小川悠, 浦田晋, 進藤考洋, 千先園子, 田中恭子, 小枝達也: 小児補助人工心臓 (VAD) 装着患者家族への心理社会的チーム支援における心理士の関わり. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 14
2. 新村麻里奈: 妊娠中に強い不安を訴えた母親との面接過程. 第42回日本心理臨床学会大会, 神奈川, 2023. 9. 2
3. 小川悠, 小林まどか, 西ヶ野圭祐, 江崎陽子, 柳楽明子, 千先園子, 田中恭子: 慢性疾患により長期療養が必要な児への心理社会的支援システムの現状と課題. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 14
4. 田中恭子, 細澤麻里子, 柳楽明子, 小川知子: 公募シンポジウム 小児医療における虐待への気づき、支え、連携について—トラウマインフォームド・アプローチ・患者を中心とした家族支援の展開のあり方を検討する. 日本子ども虐待防止学会第29回学術大会, 滋賀, 2023. 11. 26

[講演]

1. 柳楽明子: 第41回小児がん緩和ケアレクチャー 思春期のこどもとの関わり 成育医療研究センター緩和ケア科主催 (オンライン講義). 2023. 8. 4

4-5 アレルギーセンター

[原著論文: 査読付 (Reviewed Paper)]

〈欧文〉

1. Matsumoto Y, Mochimaru N, Yasuda H, Pak K, Kobayashi T, Yamamoto-Hanada K, Ohya Y, Kiuchi M, Kurokawa M, Yoshida K: In vivo analysis of the stratum corneum of Japanese neonates and infants using confocal Raman spectroscopy: a pilot study. Skin Res Technol 2023;29:e13276.
2. Yamamoto-Hanada K, Pak K, Saito-Abe M, Sato M, Miyaji Y, Mezawa H, Nishizato M, Yang L, Kumasaka N, Nomura I, Ohya Y; Japan Environment and Children's Study (JECS) Group:

Prenatal antibiotic use, caesarean delivery and offspring's food protein-induced enterocolitis syndrome: A National Birth Cohort (JECS). *Clin Exp Allergy* 2023;53:479-483.

3. Kumagai F, Yamamoto-Hanada K, Saito-Abe M, Sato M, Ishikawa F, Irahara M, Miyaji Y, Kabashima S, Ohya Y, Akiyama M: FLG mutations, Eczema Control, and Respiratory Symptom at One-Year-Old in Early-Onset Atopic Dermatitis Infants (PACI-ON Cohort Study). *J Dermatol Sci* 2023;109(2):99-101.
4. Irahara M, Yamamoto-Hanada K, Sato M, Saito-Abe M, Miyaji Y, Yang L, Nishizato M, Kumasaka N, Mezawa H, Ohya Y, on behalf of the Japan Environment and Children's Study (JECS) Group: Relationship between Food Allergy and Endotoxin Concentration and the Tolerant Status at 2 Years: The Japan Environment and Children's Study. *Nutrients* 2023;15:968.
5. Yamamoto-Hanada K, Sato M, Toyokuni K, Irahara M, Hiraide-Kotaki E, Harima-Mizusawa N, Morita H, Matsumoto K, Ohya Y: Combination of heat-killed *Lactiplantibacillus plantarum* YIT 0132 (LP0132) and oral immunotherapy in cow's milk allergy: a randomised controlled trial. *Benef Microbes* 2023;14(1):17-29.
6. Yamamoto-Hanada K, Saito-Abe M, Shima K, Fukagawa S, Uehara Y, Ueda Y, Iwamura M, Murase T, Kuwano T, Inoue T, Ohya Y: mRNAs in skin surface lipids unveiled atopic dermatitis at one month. *J Eur Acad Dermatol Venereol* 2023;37(7):1385-1395.
7. Yamamoto-Hanada K, Kobayashi T, Mikami M, Williams HC, Saito H, Saito-Abe M, Sato M, Irahara M, Miyaji Y, Ishikawa F, Tsuchiya K, Tamagawa-Mineoka R, Takaoka Y, Takemura Y, Sato S, Wakiguchi H, Hoshi M, Natsume O, Yamaide F, Seike M, Morita K, Inoue E, Fukuie T, Kabashima S, Inuzuka Y, Nishimura K, Toyokuni K, Ogita H, Kiguchi T, Yoshida K, Saito J, Hosoi H, Katoh N, Morimoto M, Masuda K, Kameda M, Shigekawa A, Yamasaki K, Nagai M, Ebisawa M, Asaumi T, Itonaga T, Hasegawa S, Yasudo H, Nagao M, Fujisawa T, Yasuoka R, Fujiyama T, Shimojo N, Nakano T, Kondo Y, Mori Y, Kawaguchi T, Futamura M, Sugiura K, Nagai A, Kaburagi S, Kitazawa H, Kido H, Nakayama FS, Ohya Y: Enhanced early skin treatment for atopic dermatitis in infants reduces food allergy. *J Allergy Clin Immunol* 2023;152:126-135.
8. Saito-Abe M, Nishizato M, Yamamoto-Hanada K, Yang L, Fukami M, Ito Y, Ihara K, Iwabuchi A, Okamoto S, Naiki Y, Ohya Y, Horikawa R: Comparison of physician- and self-assessed pubertal onset in Japanese children. *Front Pediatr* 2023;11:950541.
9. Paller AS, Ladizinski B, Mendes-Bastos P, Siegfried E, Soong W, Prajapati VH, Lio P, Thyssen JP, Simpson EL, Platt AM, Raymundo EM, Liu J, Calimlim BM, Huang X, Gu Y, Hu

- X, Yang Y, Su JC, Zheng M, Yamamoto-Hanada K, Teixeira HD, Irvine AD: Efficacy and Safety of Upadacitinib Treatment in Adolescents With Moderate-to-Severe Atopic Dermatitis: Analysis of the Measure Up 1, Measure Up 2, and AD Up Randomized Clinical Trials. *JAMA Dermatol* 2023;159:526–535.
10. Saeki H, Ohya Y, Nawata H, Arima K, Inukai M, Rossi AB, Bego-Le-Bagousse G: Impact of the Family and Household Environment on Pediatric Atopic Dermatitis in Japan. *J Clin Med* 2023;12:2988.
 11. Futakawa K, Matsumura K, Tsuchida A, Konishi M, Sasaki H, Mezawa H, Yamamoto-Hanada K, Inadera H, Hasegawa T; Japan Environment and Children's Study (JECS) Group: Longitudinal study of the relationship between number of prior miscarriages or stillbirths and changes in quality of life of pregnant women: the Japan Environment and Children's Study (JECS). *BMC Pregnancy Childbirth* 2023;23:297.
 12. Ishitsuka K, Yamamoto-Hanada K, Mezawa H, Saito-Abe M, Sasaki H, Nishizato M, Sato M, Ohya Y; Japan Environment and Children's Study Group: Association between pre-pregnancy weight status and dietary patterns during pregnancy: results from the Japan Environment and Children's Study. *Public Health Nutr* 2023;26:1807–1814.
 13. Saito K, Orimo K, Kubo T, Tamari M, Yamada A, Motomura K, Sugiyama H, Matsuoka R, Nagano N, Hayashi Y, Arae K, Hara M, Ikutani M, Fukuie T, Sudo K, Matsuda A, Ohya Y, Fujieda S, Saito H, Nakae S, Matsumoto K, Akdis CA, Morita H: Laundry detergents and surfactants-induced eosinophilic airway inflammation by increasing IL-33 expression and activating ILC2s. *Allergy* 2023;78:1878–1892.
 14. Tham EH, Leung ASY, Yamamoto-Hanada K, Dahdah L, Trikamjee T, Warad VV, Norris M, Navarrete E, Levina D, Samuel M, van Niekerk A, Martinez S, Ellis AK, Bielory L, van Bever H, Wallace D, Chu DK, Munblit D, Tang ML, Sublett J, Wong GWK: A systematic review of quality and consistency of clinical practice guidelines on the primary prevention of food allergy and atopic dermatitis. *World Allergy Organ J* 2023;16:100770.
 15. Kram YE, Sato M, Yamamoto-Hanada K, Toyokuni K, Uematsu S, Kudo T, Yamada Y, Ohtsuka Y, Matsumoto K, Arai K, Fukuie T, Nomura I, Ohya Y: Development of an action plan for acute food protein-induced enterocolitis syndrome in Japan. *World Allergy Organization Journal* 2023;16:100772
 16. Yasudo H, Yamamoto-Hanada K, Mikuriya M, Ogino F, Fukuie T, Ohya Y: Association of walnut proteins in household dust with household walnut consumption and Jug r 1 sensitization. *Allergol Int* 2023;72:607–609.

17. Ito Y, Kato T, Yoshida K, Takahashi K, Fukutomi Y, Nagao M, Fukuie T, Matsuzaki H, Gotoh M, Tanaka A, Konno S, Tezuka J, Nakamura Y, Adachi Y: Prevalence of Allergic Diseases across All Ages in Japan: A Nationwide Cross-Sectional Study Employing Designated Allergic Disease Medical Hospital Network. *JMA J* 2023;6:165-174.
18. Fujita N, Mezawa H, Pak K, Uemura O, Yamamoto-Hanada K, Sato M, Saito-Abe M, Miyaji Y, Yang L, Nishizato M, Ohya Y, Ishikura K, Hamasaki Y, Sakai T, Yamamoto K, Ito S, Honda M, Gotoh Y; Japan Environment, Children's Study Group: Reference blood pressure values obtained using the auscultation method for 2-year-old Japanese children: from the Japan Environment and Children's Study. *Clin Exp Nephrol* 2023;27:857-864.
19. Inuzuka Y, Yamamoto-Hanada K, Kobayashi T, Pak K, Toyokuni K, Ogita H, Miyoshi T, Ogawa K, Sago H, Ohya Y: Prevention of Atopic Dermatitis in High-risk Neonates via Different Types of Moisturizer Application; a Randomized, Blinded, Parallel, Three-group, Phase II Trial (PAF study). *J Eur Acad Dermatol Venereol* 2023;37:2526-2536.
20. Sasaki H, Pak K, Mezawa H, Yamamoto-Hanada K, Ishitsuka K, Konishi M, Nishizato M, Sato M, Saito-Abe M, Yang L, Ohya Y ; Japan Environment, Children's Study (JECS) Group: Health-related quality of life of mothers and developmental characteristics of very low birth weight children at 2.5 years of age; results from the Japan Environment and Children's Study (JECS). *Health Qual Life Outcomes* 2023;21:68.
21. Fujita N, Mezawa H, Pak K, Uemura O, Yamamoto-Hanada K, Sato M, Saito-Abe M, Miyaji Y, Yang L, Nishizato M, Ohya Y, Ishikura K, Hamasaki Y, Sakai T, Yamamoto K, Ito S, Honda M, Gotoh Y; Japan Environment, Children's Study Group: Reference blood pressure values obtained using the auscultation method for 2-year-old Japanese children; from the Japan Environment and Children's Study. *Clin Exp Nephrol* 2023;27:857-864.
22. Miyaji Y, Yamamoto-Hanada K, Yang L, Saito-Abe M, Sato M, Mezawa H, Nishizato M, Ochiai M, Ohga S, Oda M, Mitsubuchi H, Shimono M, Suga R, Mise N, Sekiyama M, Nakayama SF, Ohya Y; Japan Environment and Children's Study (JECS): Sex steroid hormones and allergic diseases in children: a pilot birth cohort study in the Japan Environment and Children's Study cohort. *BMC Pediatr* 2023;23:479.
23. Miyaji Y, Yamamoto-Hanada K, Yang L, Fukuie T, Narita M, and Ohya Y: Effectiveness and safety of low-dose oral immunotherapy protocols in paediatric milk and egg allergy. *Clin Exp Allergy* 2023;53:1307-1309.
24. Morii W, Kasai K, Nakamura T, Hayashi D, Hara M, Naito T, Sonehara K, Fukuie T, Saito-Abe M, Yang L, Yamamoto-Hanada K, Narita M, Maruo K, Okada Y, Noguchi E, Ohya Y: A genome-wide association study for allergen component sensitizations identifies

- allergen component-specific and allergen protein group-specific associations. *J Allergy Clin Immunol Glob* 2023;2:100086.
25. Yang L, Sato M, Saito-Abe M, Miyaji Y, Sato C, Nishizato M, Kumasaka N, Mezawa H, Yamamoto-Hanada K, Ohya Y; Japan Environment and Children's Study Group: Congenital hypothyroidism and thyroid function in a Japanese birth cohort: data from The Japan Environment and Children's Study. *Clin Pediatr Endocrinol* 2023;32:213-220.
 26. Ohnishi S, Yamamoto-Hanada K, Sato M, Uematsu S, Ohya Y: Food protein-induced enterocolitis syndrome (FPIES) is an important differential diagnosis of vomiting in pediatric emergency. *Pediatr Int* 2023;65:e15675.
 27. Fukuda R, Pak K, Kiuchi M, Hirata N, Tanaka R, Mochimaru N, Mitsui M, Ohya Y, Yoshida K: Association of lipid abnormalities in the stratum corneum and TGF- β 1 and 2 in colostrum and the development of infantile seborrheic dermatitis: A prospective birth cohort study. *J Dermatol Sci* 2023;112:39-42.
 28. Tsurane K, Kaneko K, Yoshida K, Tanaka R, Sago H, Murashima A: Initiation of hydroxychloroquine therapy during pregnancy can cause adverse effects and alter pregnancy outcomes: A case of acute generalised exanthematous pustulosis induced by hydroxychloroquine in a patient with systemic lupus erythematosus. *Mod Rheumatol Case Rep* 2023;7:373-377
 29. Takeuchi I, Yanagi K, Takada S, Uchiyama T, Igarashi A, Motomura K, Hayashi Y, Nagano N, Matsuoka R, Sugiyama H, Yoshioka T, Saito H, Kawai T, Miyaji Y, Inuzuka Y, Matsubara Y, Ohya Y, Shimizu T, Matsumoto K, Arai K, Nomura I, Kaname T, Morita H: STAT6 gain-of-function variant exacerbates multiple allergic symptoms. *J Allergy Clin Immunol* 2023;151(5):1402-1409. e6.
 30. Nagashima S, Yamamoto M, Inuzuka Y, Irahara M, Miyaji Y, Tadaki H, Ito S, Masuda S, Ito Y, Saito Y, Kobayashi S, Morita H, Yoshioka T, Shimizu H, Arai K, Ohya Y, Saito H, Matsumoto K, Nomura I: Tolerability and safety of a new elimination diet for pediatric eosinophilic gastritis and duodenitis. *Allergol Int* 2023;72(2):306-315.
 31. Watanabe S, Sato A, Uchida H, Kusuda R, Suzuki H, Nagashima S, Yauchi T, Matsumoto K, Ohya Y, Nomura I: Comparison of Adult Food-Protein-Induced Enterocolitis Syndrome to Crustaceans and Immediate-Type Food Allergy. *Ann Allergy Asthma Immunol* 2023;131(4):487-493
 32. Hara M, Morimoto N, Watabe T, Morisaki N, Matsumoto K: Can the effectiveness of tonsillectomy for PFAPA syndrome be predicted based on clinical factors. *Int J Rheum Dis* 2023;26(3):480-486.
 33. Yamamoto N, Balciuniene J, Hartman T, Diaz-Miranda MA, Bedoukian E, Devkota B, et al: Comprehensive Gene Panel Testing for Hearing Loss in Children: Understanding Factors Influencing Diagnostic Yield. *J Pediatr* 2023;262:113620.

34. Kaur M, Blair J, Devkota B, Fortunato S, Clark D, Lawrence A, Kim J, Do W, Semeo B, Katz O, Mehta D, Yamamoto N, et al: Genomic analyses in Cornelia de Lange Syndrome and related diagnoses: Novel candidate genes, genotype-phenotype correlations and common mechanisms. *Am J Med Genet A* 2023;191(8):2113-2131.
35. Okura S, Ishii H, Suzuki A, Saegusa C, Fujiki K, Sugano K, Suzuki N, et al: Generation of two induced pluripotent stem cell lines from individuals without auditory disorders. *Stem Cell Res* 2023;67:103017.
36. Oshika T, Endo T, Kurosaka D, Matsuki N, Miyagi M, Mori T, Nagamoto T, Negishi K, Nishina S, Nomura K, Unoki N, Yoshida S: Long-term surgical outcomes of pediatric cataract-multivariate analysis of prognostic factors. *Sci Rep* 2023;13:21645
37. Yoneda T, Miki A, Wakayama A, Nishina S: National survey of amblyopia treatment in Japan: Comparison with Amblyopia Treatment Study results from Pediatric Eye Disease Investigator Group. *Jpn J Ophthalmol* 2023;67(1):97-108.
38. Motomura K, Morita H, Okada N, Matsuda A, Nakae S, Fujieda M, Sago H, Saito H, Matsumoto K: Comprehensive analysis of the expression and functions of pattern recognition receptors in differentiated cytotrophoblasts derived from term human placentas. *J Immunol* 2023;210(10):1552-1563
39. Tamai M, Fujisawa S, Nguyen TTT, Komatsu C, Kagami K, Kamimoto K, Omachi K, Kasai S, Harama D, Watanabe A, Akahane K, Goi K, Naka K, Kaname T, Teshima T, Inukai T: Creation of Philadelphia chromosome by CRISPR/Cas9-mediated double cleavages on BCR and ABL1 genes as a model for initial event in leukemogenesis. *Cancer Gene Ther* 2023;30(1):38-50.
40. Yamano S, Iguchi A, Ishikawa K, Sakamoto A, Uchiyama T, Yanagi K, Kaname T, Kunishima S, Ishiguro A: Splenectomy as an effective treatment for macrothrombocytopenia in Takenouchi-Kosaki syndrome. *Int J Hematol* 2023;117:622-625
41. Wada MK, Fukuhara Y, Hayakawa I, Kaname T, Ishiguro A: KARS-related diseases with macrothrombocytes and pulmonary arterial hypertension. *Pediatr Int* 2023;65(1):e15428.
42. Okano S, Makita Y, Miyamoto A, Taketazu G, Kimura K, Fukuda I, Tanaka H, Yanagi K, Kaname T: GRIA3 p.Met661Thr variant in a female with developmental epileptic encephalopathy. *Hum Genome Var* 2023;10(1):4.
43. Yanagi K, Coker J, Miyana K, Aso S, Kobayashi N, Satou K, Richman A, Indupuru S, Matsubara Y, Kaname T: Biallelic CC2D2A variants, SNV and LINE-1 insertion simultaneously identified in siblings using long-read whole-genome sequencing and haplotype phasing. *J Hum Genet* 2023;68(6):431-435.
44. Tanabe Y, Nomura N, Minami M, Takaya J, Okamoto N, Yanagi K, Kaname T, Fujii Y, Kaneko K: HIST1H1E syndrome with deficiency in multiple pituitary hormones. *Clin Pediatr Endocrinol* 2023;32(3):195-198.
45. Haga S, Takeguchi R, Tanaka R, Satake A, Makita Y, Yanagi K, Kaname T, Takahashi S: Clinical characteristics of muscle cramps in hereditary angiopathy with nephropathy,

- aneurysms, and muscle cramps syndrome associated with a novel COL4A1 pathogenic variant: A family case study. *Brain Dev* 2023;45(7):390-394.
46. Kawano S, Araki K, Bai J, Furukawa I, Tateishi K, Yoshinobu K, Usuki S, Nimmo R, Kaname T, Yoshihara M, Takahashi S, Sashida G, Araki M: A gain-of-function mutation in micro-RNA-142 is sufficient to cause the development of T-cell leukemia in mice. *Cancer Sci* 2023;114(7):2821-2834.
 47. Imanishi R, Nakau K, Shimada S, Oka H, Takeguchi R, Tanaka R, Sugiyama T, Nii M, Okamoto T, Nagaya K, Makita Y, Yanagi K, Kaname T, Takahashi S: A novel HECW2 variant in an infant with congenital long QT syndrome. *Hum Genome Var* 2023;10(1):17.
 48. Kouno H, Kunishima S, Takebe J, Uchiyama T, Kaname T, Ishiguro A: Measurement of immature platelet fraction is useful in the differential diagnosis of MYH9 disorders. *Int J Lab Hematol* 2023;45(5):700-706.
 49. Shimoda F, Naito T, Kakuta Y, Kawai Y, Tokunaga K; NCBN Controls WGS Consortium (Kaname T); Shimoyama Y, Moroi R, Shiga H, Nagasaki M, Kinouchi Y, Masamune A: HLA-DQA1*05 and upstream variants of PPARGC1B are associated with infliximab persistence in Japanese Crohn's disease patients. *Pharmacogenomics J* 2023;23(6):141-148.
 50. Aoki E, Manabe N, Ohno S, Aoki T, Furukawa J-I, Togayachi A, Aoki-Kinoshita K, Inokuchi J-I, Kurosawa K, Kaname T, Yamaguchi Y, Nishihara S: Predicting the pathogenicity of missense variants based on protein instability to support diagnosis of patients with novel variants of ARSL. *Mol Genet Metab Rep* 2023;37:101016.
 51. Kawai Y, Watanabe Y, Omae Y, Miyahara R, Khor S-S, Noiri E, Kitajima K, Shimanuki H, Gatanaga H, Hata K, Hattori K, Iida A, Ishibashi-Ueda H, Kaname T, Kanto T, Matsumura R, Miyo K, Noguchi M, Ozaki K, Sugiyama M, Takahashi A, Tokuda H, Tomita T, Umezawa A, Watanabe H, Yoshida S, Goto Y-i, Maruoka Y, Matsubara Y, Niida S, Mizokami M, Tokunaga K: Exploring the genetic diversity of the Japanese Population: Insights from a Large-Scale Whole Genome Sequencing Analysis. *PLOS Genet* 2023;19(12):e1010625

〈和文〉

1. 佐伯秀久, 秋山真志, 安部正敏, 五十嵐敦之, 今福信一, 大矢幸弘, 加藤則人, 亀田秀人, 梶島健治, 常深祐一郎, 秀道広, 大槻マミ太郎: 日本皮膚科学会ガイドンス アトピー性皮膚炎における生物学的製剤の使用ガイドンス. *日皮会誌* 2023 ; 133 : 1817-1827
2. 高橋達也, 清水泰岳, 義岡孝子, 吉年俊文, 藤田貴子, 山本陽子, 宮田恵理, 藤川皓基, 竹内一朗, 石黒精, 野村伊知郎, 新井勝大: プロトンポンプ阻害薬による長期治療を要した十二指腸潰瘍合併好酸球性胃腸炎の3例. *日本小児科学会雑誌* 2023 ; 127(6) : 866-873
3. 北川智介, 山本修子, 鈴木法臣, 原真理子, 守本倫子: 聴力低下を伴ったゴーハム病の小児3例. *耳鼻と臨床* 2023 ; 69(4) : 267-276.
4. 仙田里奈, 角木拓也, 黒瀬誠, 守本倫子, 高野賢一: 小児気管切開患者の長期経過に関する全国調査. *日気食科学会報* 2023;74(3):228-234.

5. 高田菜月, 原真理子, 和田友香, 渡部高久, 高橋希, 小川 武則, 守本倫子: 気管切開を要した小児咽頭狭窄症例に対する重症度スコアリング化の試み. 日気食科学会報 2024;75(1):21-28.
6. 古田真知子, 糟谷周吾, 守本倫子, 鈴木康之: 喉頭裂縫合術において非挿管・自発呼吸で術中管理した小児の1例. 日小児麻酔会誌 2023;29(1):56-60.

[症例報告]

<和文>

1. 鈴木大地, 齋藤麻耶子, 松本恭明, 梅沢洸太郎, 高田数馬, 豊國賢治, 石川史, 平井聖子, 佐藤未織, 宮地裕美子, 森田英明, 濱口冨香, 樺島重憲, 福家辰樹, 野村伊知郎, 山本貴和子, 大矢幸弘: 重症喘息として加療されていたが, 精査による誘発性喉頭閉塞症の診断と治療的呼吸法指導が有効であった1例. アレルギー 2023;72:44-48
2. 濱口冨香, 山本貴和子, 佐藤未織, 大海なつき, 隈元麻里子, 小川えりか, 野村伊知郎, 山本康仁: 生後3か月時に軽症で発症し, 食物経口負荷試験にて急激な意識障害とアシドーシスを伴う重症症状を呈した乳による acute FPIES (Food protein-induced enterocolitis syndrome) の1例. 日本小児アレルギー学会誌 2023;37:132-137
3. 梅沢洸太郎, 山本貴和子, 三上嘉子, 高橋隼也, 福家辰樹, 浅野善英, 大矢幸弘: 小麦アレルギー, 薬剤アレルギーと考えられていた遺伝性血管性浮腫 III 型の思春期例. アレルギー 2023;72:1147-1153
4. 本多皓, 遠藤麻衣, 吉田和恵, 小崎里華, 山本俊幸: 無汗性外胚葉形成不全症 ~汎発性脱毛症を合併した例~. 皮膚病診療 2023;45(6):696-699

[総説]

<英文>

1. Yamamoto-Hanada K, Ohya Y: Breakthrough evidence based on the dual allergen exposure hypothesis-both skin intervention and oral intervention. Clin Exp Pediatr 2023 Jun 14. doi: 10.3345/cep.2023.00045. Epub ahead of print. PMID: 37321587.
2. Yamamoto-Hanada K, Ohya Y: Overviewing allergy epidemiology in Japan-findings from birth cohorts (JECS and T-Child Study). Allergol Int 2024;73(1)20-30.
3. Motomura K, Hara M, Ito I, Morita H, Matsumoto K: Roles of human trophoblasts' pattern recognition receptors in host defense and pregnancy complications. J Reprod Immunol 2023;156:103811.
4. Makrinioti H, Morita H, Nastouli E, Jartti T: Bridging the gap between immunology, virology, genetics, and epigenetics in bronchiolitis: The multiomics pathway to asthma development. Front Immunol 2023;14:1154121.

<和文>

1. 齋藤麻耶子, 山本貴和子, 大矢幸弘: 我が国における小児アトピー性皮膚炎(湿疹)の実態とその課題—子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)を中心に—. 日本小児皮膚

- 科学会雑誌 2023;42:9-14
2. 山本貴和子, 大矢幸弘: 知っておきたい基礎用語 表皮バリア機能と経皮感作. 日本小児皮膚科学会雑誌 2023;42:78-79
 3. 大矢幸弘: 近接領域学会の研究動向第6回 食物アレルギーの研究動向 日本発育発達学会編. 子どもと発育発達 2023;21:233-236
 4. 山本貴和子, 大矢幸弘: 【アレルギーの発症予防】アトピー性皮膚炎の発症予防 皮膚介入から考察する. 臨床免疫・アレルギー科 2023;79:282-287
 5. 大矢幸弘: 小児科学レビュー 最新主要文献とガイドライン Iアレルギー疾患 (3) アトピー性皮膚炎. 小児科臨床 2023;76:167-174
 6. 大矢幸弘: 環境とライフスタイルの変化に伴うアレルギー疾患の増加. 日本医師会雑誌 2023;152:477
 7. 三牧正和, 大矢幸弘, 吉原重美, 成田雅美: 小児のアレルギー疾患診療の進歩. 日本医師会雑誌 2023;152:481-495
 8. 山本貴和子, 苛原誠: 小児アレルギー疾患の疫学. 日本医師会雑誌 2023;152:497-500
 9. 大矢幸弘: 小児アトピー性皮膚炎の診断と治療. 日本医師会雑誌 2023;152:505-510
 10. 福家辰樹: 学童期以降の食物アレルギーの診断と検査. 日本医師会雑誌 2023;152:515-519
 11. 齋藤麻耶子, 山本貴和子: 特集 アレルギー疾患-最新治療と生活からの視点 IIIアトピー性皮膚炎 アトピー性皮膚炎の発症予防-皮膚介入と腸管介入から考察する. 小児科診療 2023;86:71-74
 12. 福家辰樹: 特集 アレルギー疾患-最新治療と生活からの視点 IV食物アレルギーとその周辺 食物アレルギーの予防法. 小児科診療 2023;86:95-98
 13. 大矢幸弘: 特集 アレルギー疾患-最新治療と生活からの視点 VI生活指導に必要となる視点 アレルギー疾患をQOLの視点でとらえる. 小児科診療 2023;86:160-164
 14. 濱口冴香, 山本貴和子: アトピー性皮膚炎児を取り囲む環境整備. 月刊・小児歯科臨床 2023;28:25-29
 15. 豊國賢治: 【日常診療でみるかもしれないちょっと稀なアレルギー】食物蛋白誘発胃腸症(新生児・乳児消化管アレルギー). 小児科 2023;64:366-372
 16. 山本貴和子: 【医のあれこれ】小児アトピー性皮膚炎診療ーガイドラインと最新情報からアップデート. 大宮医師会報 2023;813:626-630
 17. 吉田和恵: 小児の皮膚の特徴とスキンケア. WOC Nursing 2023;11(3):7-13.
 18. 持丸奈央子, 吉田和恵: 【達人に学ぶ小児の発熱・皮膚疾患】小児の皮膚診療 見逃したくない重症皮膚疾患. 治療 2023;105(4):492-495
 19. 福田理紗, 吉田和恵: 「新生児編」感染 早産児の皮膚はどのような機序で成熟するのか. 周産期医学 2023;53:427-429
 20. 新井勝大: 【臨床に必要な消化管アレルギー疾患】新生児・乳児食物蛋白誘発胃腸症. 臨床消化器内科 2023;38(6):681-687

21. 渡辺栄一郎, 川島祐介, 柿原知, 設樂佳彦, 斎藤傑, 香川礼子, 紺野亮, 石川将己, 高見尚平, 清水泰岳, 松本恭明, 福家辰樹, 高澤真也, 西明, 新井勝大, 野村伊知郎, 岡田賢, 高尚人, 小原收, 藤代準: 【腸内細菌を学ぶ】便プロテオーム解析. 小児外科 2023; 55(2):150-157
22. 竹内一朗, 森田英明: STAT6 機能獲得型バリエーションは, 複数のアレルギー症状を悪化させる. 臨床免疫・アレルギー科 2023;80(3):365-370
23. 竹内一朗: 治療法の再整理とアップデートのために 専門家による私の治療 乳糖不耐症. 日本医事新報 2023;5166:56-57
24. 野村 伊知郎: 【How to Follow-up-ハイリスク児フォローアップの必修知識 2023】疾患別・領域別のフォローアップ 退院時にみられる疾患・合併症のフォローアップ アレルギー疾患 新生児・乳児消化管アレルギー. 周産期医学 2023;53(4):625-629
25. 守本倫子: 小児の耳鼻咽喉・頭頸部手術—保護者への説明のコツから術中・術後の注意点まで—気管切開術・喉頭気管分離術・喉頭気管再建術. 耳喉頭頸 2023;95(9):720-725
26. 守本倫子: 声門下腔狭窄に対する耳鼻科的アプローチ. 小児外科 2023;55(10):1070-1075
27. 山口宗太, 守本倫子: 小児の睡眠時無呼吸. 糖尿病・内分泌代謝科 2023;57(2):197-203
28. 川北大介, 猪原秀典, 折館伸彦, 守本倫子, 丹生健一: ヒトパピローマウイルス (HPV) ワクチン—HPV と中咽頭がん・喉頭乳頭腫. 臨床とウイルス 2023;51(1):16-21
29. 山本修子, 守本倫子: ポストコロナ時代の感染症診療 II 感染症診療各論 頭頸部感染症 急性中耳炎. 診断と治療 2023;111 Suppl.:76-80.
30. 守本倫子: おたふく風邪と難聴. モダンメディア 2023;69(5):115-120.
31. 仁科幸子, 五十嵐隆, 中林正雄, 竹田省編: 簡便な機器を用いた乳幼児の眼科健診. 母子保健マニュアル 改定8版, 2023:144
32. 仁科幸子, 加藤元博編: 新生児・乳児の眼科的異常. 小児科診療ガイドライン—最新の診療指針, 2023:809-812
33. 要匡, 柳久美子: 【遺伝を考える】 Genome Data Viewer. 日本医師会雑誌 2023;152:S13-S14.
34. 要匡: 【遺伝を考える】 遺伝学的診断 個別診療分野における遺伝学的診断の進歩 未診断疾患イニシアチブ. 日本医師会雑誌 2023;152:S128-S131.

[著書]

<和文>

1. ハリエット・ブランドル: エピペン®注射ってなんだろう? (からだとはたらくどうぐたち). 中野泰志 (総合監修), 山本貴和子 (監修), ほるぷ出版, 2023; 1-24
2. 大矢幸弘: 4章 DOHaD の視点からみた疾患発症機序と先制医療 5. アレルギー疾患. DOHaD 先制医療への展開, 金原出版, 2023; 98-104
3. 山本貴和子, 大矢幸弘: 「アトピー性皮膚炎診療ガイドライン 2021」改訂のポイント. 検査と技術, 医学書院, 2023; 844-846
4. 大矢幸弘: 14. アレルギー疾患 3 アトピー性皮膚炎. 最新主要文献とガイドラインでみ

- る小児科学レビュー2023, 総合医学社, 2023; 174-181
5. 山本貴和子, 大矢幸弘: 4 リスク因子と予防. 伊藤浩明・海老澤元宏・吉原重美 (監修), 食物アレルギービジュアルブック 2023, 協和企画, 2023; 10-11
 6. 福家辰樹: 14 アレルギー食品の表示, 15 患者さんの社会生活支援. 伊藤浩明・海老澤元宏・吉原重美 (監修), 食物アレルギービジュアルブック 2023, 協和企画, 2023; 52-62
 7. 平井聖子, 山本貴和子: 薬物アレルギー. 『小児内科』『小児外科』編集委員会 (共編), 小児内科 2023 年 55 巻増刊号 エキスパートが教える小児の薬物治療, 東京医学社, 2023; 86-91
 8. 福家辰樹: アトピー性皮膚炎. 『小児内科』『小児外科』編集委員会 (共編), 小児内科 2023 年 55 巻増刊号 エキスパートが教える小児の薬物治療, 東京医学社, 2023; 765-771
 9. 吉田和恵: 汗疹. 皮膚疾患最新の治療2023-2024, 南江堂, 2023; 283-283
 10. 福田理紗: 山へ行った2日後から皮疹がでた! 何が原因!?. 「おとな」のアレルギー, 文光堂, 2023; 69-74, 180-190
 11. 福田理紗: 蕁麻疹の治療をしたら、小麦が食べれるようになった!?. 「おとな」のアレルギー, 文光堂, 2023; 180-184
 12. 福田理紗: 歯科治療中に唇が腫れて腹痛が出現 「おとな」のアレルギー, 文光堂, 2023; 185-190
 13. 守本倫子: II 解説・エキスパートオピニオン 6 耳鼻咽喉科診療の実践. 岡明他 (編), 先天性CMV感染症診療ガイドライン 2023, 診断と治療社, 2023; 113-117
 14. 守本倫子: ムンプス難聴. 大森孝一 (編), 難聴・耳鳴診療ハンドブック 最新の検査・鑑別診断と治療, 中山書店, 2023; 157-161
 15. 守本倫子: 第49章耳鼻咽喉科疾患. 加藤元博 (編), 小児科学, 文光堂, 2023; 1154-1172
 16. 守本倫子: VIII 境界領域疾患 11 難聴. 小児内科・小児外科編集委員会 (共編), 小児疾患診療のための病態生理3, 東京医学社, 2023; 1065
 17. 仁科幸子: 小児や障害児に適した眼鏡—デザインと装用させるコツ. 日本近視学会・日本小児眼科学会・日本視能訓練士協会 (編), 小児の近視 診断と治療 第2版, 三輪書店, 2023; 144-147
 18. 仁科幸子: ネルソン小児科学 原著第21版 翻訳 Part28 眼科編集 on line 2023.5.31
 19. 仁科幸子: 疾患の早期発見の必要性. 日本小児眼科学会 (編), やさしい小児の眼科, 診断と治療社, 2023; 90-96

[ガイドライン、報告書、その他] (学会・研究班ガイドライン、研究班報告書、刊行物等) (欧文、和文の順に)

＜ガイドライン＞

1. 新井勝大: 好酸球性食道炎の臨床: 診断から治療まで. 小児医療関係者向けサイト「Growth Ring」, 2023
2. 守本倫子他: 先天性CMV感染症診療ガイドライン 2023. 日本医療研究開発機構 成育疾患克

〈政策提言〉

1. 守本倫子他： 難聴児の家族等や支援に携わる関係者が必要とする基本的な情報の整理・一覧化に関する調査研究。 令和4年度障害者総合福祉推進事業、PWC コンサルティング合同会社

〈刊行物〉

1. 大矢幸弘, 阿部正敏, 樺島健治： 【特別番組】アトピー性皮膚炎の新規治療にどう対応するか。 Seminaria Dermatologie (マルホ皮膚科セミナー 放送内容集) No. 281 2023 ; 4-14

〈監修〉

1. 山本貴和子： 小児における食物アレルギーの原因物質とその症状。 タカノ株式会社企業サイト, 2023.9
2. 山本貴和子： 乳幼児のアトピー性皮膚炎をしっかりと治療しましょう。 タカノ株式会社企業サイト, 2023.9

〔記事〕

1. 山本貴和子： りんごや桃で口の中がかゆくなる「花粉-食物アレルギー症候群」。発症に幼児期のアレルギー症状が関連していることが判明【研究発表】。 たまひよ ONLINE, 2023.1.26
2. 山本貴和子： 花粉症の私 りんごが食べられなくなりました。 NHK WEB, 2023.3.16
3. Yamamoto-Hanada K: Enhanced early skin treatment for eczema in infants reduces food allergy. AAAAI, 2023.3.22
4. 山本貴和子： 花粉症の私 りんごが食べられなくなりました。 NHK おはよう日本, 2023.3.23
5. Ohya Y: 'Enhanced' Eczema Treatment Cut Food Allergy Risk, but at What Cost?- Early skin treatment in infants reduced weight and height compared with conventional approach. Medical Today, 2023.3.29
6. Yamamoto-Hanada K: Atopic dermatitis treatment reduces food allergy among infants, but inhibits growth. Helio, 2023.3.30
7. Yamamoto-Hanada K: Early management of atopic dermatitis can reduce food allergy in infants. Medical Dialogues, 2023.4.10
8. 山本貴和子： 卵アレルギーの発症 抑制。 NHK ニュースウォッチ9, 2023.4.10
9. 山本貴和子： アトピー性皮膚炎の赤ちゃん 早期治療で卵アレルギー発症減。 NHKWEB, 2023.4.10
10. 山本貴和子： 卵アレルギーの発症 抑制。 NHK おはよう日本 (5時台), 2023.4.11
11. 山本貴和子： 卵アレルギーの発症 抑制。 NHK おはよう日本 (6時台), 2023.4.11

12. 山本貴和子： 卵アレルギーの発症 抑制. NHK おはよう日本（6時台2回目），
2023. 4. 11
13. 山本貴和子： 卵アレルギーの発症 抑制. NHK おはよう日本（大阪）， 2023. 4. 11
14. 山本貴和子： 卵アレルギーの発症 抑制. NHK おはよう日本（大阪2）， 2023. 4. 11
15. 山本貴和子： 卵アレルギーの発症 抑制. NHK おはよう日本（大阪3）， 2023. 4. 11
16. 山本貴和子： 乳児のアトピー性皮膚炎への積極的な治療が鶏卵アレルギーの発症を予防！.
マイナビニュース， 2023. 4. 11
17. 山本貴和子： 乳酸菌果汁、牛乳アレルギーへの効果は？ 経口免疫療法に併用. Medical
Tribune， 2023. 4. 11
18. Yamamoto-Hanada K: Enhanced treatment of infants diagnosed with atopic eczema appears
to reduce hen's egg allergy compared to a conventional treatment approach. HOAPITAL
HEALTHCARE EUROPE， 2023. 4. 11
19. 山本貴和子, 大矢幸弘： 国立成育医療研究センター、乳幼児アトピー性皮膚炎（AD）の予兆を
生後1カ月の乳児の皮脂RNAに検出ー乳児期早期発症型ADを皮脂RNAモニタリング技術で捉え
るー. 日経バイオテク， 2023. 4. 12
20. 山本貴和子： 乳幼児アトピー性皮膚炎（AD）の予兆を生後1カ月の乳児の皮脂RNAに検出. 時
事通信（PR）， 2023. 4. 12
21. 山本貴和子, 大矢幸弘： 乳幼児アトピー性皮膚炎（AD）の予兆を生後1カ月の乳児の皮脂RNAに
検出ー乳児期早期発症型ADを皮脂RNAモニタリング技術で捉えるー. PR TIMES， 2023. 4. 12
22. 山本貴和子, 大矢幸弘： 花王と成育医療センター、乳幼児アトピー性皮膚炎（AD）の予兆を生後
1カ月の乳児の皮脂RNAに検出. 日本経済新聞， 2023. 4. 12
23. 山本貴和子： 花王と成育医療センター、乳幼児アトピー性皮膚炎（AD）の予兆を生後1カ月の乳
児の皮脂RNAに検出. 日経新聞web（PR）， 2023. 4. 12
24. 山本貴和子： 花王が成育医療センターと共同研究 乳幼児アトピー性皮膚炎の予兆を皮脂RNA
で早期発見. ファッションプレス， 2023. 4. 13
25. 山本貴和子： 花王が成育医療センターと共同研究 乳幼児アトピー性皮膚炎の予兆を皮脂RNA
で早期発見. yahoo ニュース（テレ朝）， 2023. 4. 13
26. 山本貴和子： 赤ちゃんの「アトピー性皮膚炎」 “あぶらとり紙”で検査可能に. yahoo ニュ
ース（テレ朝）， 2023. 4. 13
27. 山本貴和子： 赤ちゃんの「アトピー性皮膚炎」 “あぶらとり紙”で検査可能に. Abema
News， 2023. 4. 13
28. 山本貴和子： 赤ちゃんのアトピー性皮膚炎 ”あぶらとり紙”で検査可能に 肌を傷つけずに
皮脂を採取. テレ朝 NEWS， 2023. 4. 13
29. 山本貴和子： アトピー性皮膚炎の早期治療で卵アレルギーの発症減 研究チーム発表. 毎
日新聞， 2023. 4. 13
30. 山本貴和子： アトピー性皮膚炎の早期治療で卵アレルギーの発症減 研究チーム発表.
yahoo ニュース（毎日）， 2023. 4. 13
31. 山本貴和子： 花王が成育医療センターと共同研究 乳幼児アトピー性皮膚炎の予兆を皮脂RNA
で早期発見. FASHIONSAP， 2023. 4. 13

32. 山本貴和子： 90 人の乳児から肌を傷つけずに顔皮脂を経時的に採取、皮脂 RNA を解析。
Qlifr pro, 2023. 4. 13
33. 大矢幸弘： アトピーの早期積極治療で卵アレルギー予防 二重抗原曝露仮説を実証。
Medical Tribune, 2023. 4. 13
34. 山本貴和子, 大矢幸弘： 生後半年未満のアトピー性皮膚炎、発症予兆を皮脂 RNA から検出—成育医療センターほか。 医療 NEWS Q LIFE PRO, 2023. 4. 13
35. 山本貴和子, 大矢幸弘： アトピー性皮膚炎の早期治療で卵アレルギーの発症減 研究チーム発表。 毎日新聞, 2023. 4. 14
36. 山本貴和子： 乳児期アトピーの“早期治療介入”、鶏卵アレルギーの発症予防に／国立成育医療研究センター。 care net, 2023. 4. 14
37. 山本貴和子： 花王と成育医療研、生後 1 カ月で AD 把握。 化学工業日報, 2023. 4. 14
38. 山本貴和子： 花王、皮脂 RNA からアトピー性皮膚炎の予兆を捉える技術を開発。 日経バイオテク, 2023. 4. 14
39. 山本貴和子： <おかえりニュースランキング> 9 位・赤ちゃんのアトピー・あぶらとり紙で検査可能に。 news おかえり (朝日放送), 2023. 4. 14
40. 山本貴和子： アトピー性皮膚炎の早期治療で卵アレルギーの発症減 研究チーム発表。 news picks, 2023. 4. 14
41. 山本貴和子, 大矢幸弘： 花王生物科学研究所が共同研究で、アトピー性皮膚炎の予兆を皮脂 RNA モニタリング技術で検出。 日用品化粧品新聞, 2023. 4. 17
42. 山本貴和子： アトピー性皮膚炎の早期治療で卵アレルギーの発症減 研究チーム発表 毎日新聞。 Eatreat, 2023. 4. 17
43. 山本貴和子： 『「子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）」に関する効果的な対話の実践に向けたデザインブック～企画・実践方法と事例～』 第 2 版。 環境省, 2023. 4
44. 山本貴和子： アトピー性皮膚炎：アトピー乳児に早期治療 卵アレルギー発症、25%減 臨床研究で初確認。 毎日新聞, 2023. 4. 19
45. 山本貴和子： 花王、乳幼児アトピー早期発見診断技術を開発 皮脂 RNA モニタリングで。 石鹸日用品新報, 2023. 4. 19
46. 山本貴和子： 花王、生後 1 カ月の皮脂 RNA 解析でアトピー性皮膚炎を早期に発見。 粧業新聞, 2023. 4. 21
47. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 山陽新聞デジタル, 2023. 4. 21
48. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 東京新聞, 2023. 4. 21
49. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 北國新聞, 2023. 4. 22
50. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 共同通信 (47 ニュース), 2023. 4. 22
51. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 埼玉新聞, 2023. 4. 22

52. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 静岡新聞,
2023. 4. 22
53. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 新潟日報,
2023. 4. 22
54. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 北日本新聞,
2023. 4. 22
55. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 高知新聞 ,
2023. 4. 22
56. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 佐賀新聞,
2023. 4. 22
57. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 千葉日報,
2023. 4. 22
58. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減。 西日本新聞, 2023. 4. 22
59. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減。 山梨日日新聞電子版, 2023. 4. 22
60. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 徳島新聞,
2023. 4. 22
61. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減。 茨城新聞, 2023. 4. 22
62. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 奈良新聞,
2023. 4. 22
63. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 熊本日日新聞,
2023. 4. 22
64. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 カナコロ（神奈川
新聞）, 2023. 4. 22
65. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 東奥日報,
2023. 4. 22
66. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 ニッポンドットコ
ム, 2023. 4. 22
67. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 沖縄タイムス,
2023. 4. 22
68. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 福島民報,
2023. 4. 22
69. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 dmenu ニュース,
2023. 4. 22
70. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 琉球新報,
2023. 4. 22
71. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 news picks,
2023. 4. 22
72. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター。 愛媛新聞オンライ
ン, 2023. 4. 22

73. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター. 四国新聞, 2023. 4. 22
74. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター. モデルプレス, 2023. 4. 22
75. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター. infoseek ニュース, 2023. 4. 22
76. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター. 宮崎日日新聞, 2023. 4. 22
77. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター. 神戸新聞 next, 2023. 4. 22
78. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター. 信濃毎日新聞デジタル, 2023. 4. 22
79. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター. biglobe ニュース (共同通信), 2023. 4. 22
80. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター. goo ニュース (共同通信), 2023. 4. 22
81. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 アトピー性皮膚炎の赤ちゃん 国立成育研究センター. 山陰中央デジタル, 2023. 4. 23
82. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター. 大分合同新聞, 2023. 4. 23
83. 山本貴和子： 肌治療で食物アレルギー減 西日本新聞, 2023. 4. 23
84. 山本貴和子： 乳児のアトピー性皮膚炎 早期治療で食物アレルギー減か 国立成育研究センター報告. 愛媛新聞, 2023. 4. 23
85. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター. yahoo ニュース (共同通信), 2023. 4. 23
86. 山本貴和子： 子ども肌治療で食物アレルギー減 国立成育研究センター. news collect, 2023. 4. 24
87. 山本貴和子： アトピーの赤ちゃん、全身にステロイド塗ると卵アレルギー発症率減少…「湿疹ゼロ維持重要」. 読売新聞, 2023. 4. 24
88. Yamamoto-Hanada K: Early Steroid Treatment of Infants with Eczema Reduces Egg Allergy, Study Finds. The Japan News, 2023. 4. 30
89. 山本貴和子： 皮脂 RNA で乳児のアトピーを早期検出 発症 1 カ月前からアトピーと類似する特徴. Medical Tribune, 2023. 5. 1
90. 山本貴和子： アトピー性皮膚炎の早期治療は、重症化やアレルギーマーチの予防につながる。赤ちゃんに負担が少ない検査への期待【研究発表】. たまひよオンライン, 2023. 5. 1
91. 山本貴和子： アトピー積極治療で、卵アレルギー率低く 国立成育医療研究センターが調査. 朝日新聞デジタル, 2023. 5. 10
92. 山本貴和子： 乳児期アトピーへの積極的な治療は鶏卵アレルギーの発症予防に有効. 日経メディカル, 2023. 5. 18

93. Yamamoto-Hanada K: New RNA Monitoring Method May Allow for Early Diagnosis of AD in Infants. Practical dermatology, 2023. 6. 9
94. Yamamoto-Hanada K: RNA Monitoring Offers Non-Invasive Detection of Infantile Atopic Dermatitis. Dermatology TIMES, 2023. 6. 14
95. Yamamoto-Hanada K: Sebum transcriptome data predict development of atopic dermatitis in young infants. Healio®, 2023. 6. 20
96. 佐藤未織: 乳幼児の食物アレルギー 発作時の対処指針公開. デーリー東北, 2023. 6. 25
97. 佐藤未織: 乳幼児の食物アレルギー 発作時の対処し疹を公開 嘔吐が特徴のタイプ向け. 山口新聞, 2023. 6. 26
98. 佐藤未織: 乳幼児 食物アレルギー 嘔吐の発作 対処知って 認知度低い胃腸症 親・医師向けに指針. 中国新聞, 2023. 6. 28
99. 野村伊知郎, 明石真幸: 乳幼児が食事をすると嘔吐や血便 「消化管アレルギー」かも…国立成育医療研究センターが行動指針. ヨミドクター, 2023. 7. 1
100. 佐藤未織: 嘔吐発作時どう対処 乳幼児の食物アレルギー 行動指針を公開. 大分合同新聞, 2023. 7. 3
101. 山本貴和子: 不安社会 健康情報の代償 脱ステロイド妄信 アトピー治療遠回り 「いつまで薬」やめ悪化 標準治療戻り克服 副作用の誤解今も. 毎日新聞, 2023. 7. 7
102. 佐藤未織: 乳幼児食物アレルギー 嘔吐が特徴のタイプ 発作時の対処指針公開. 山陰中央新報, 2023. 7. 8
103. 大矢幸弘: くらしナビ きょうのセカンドオピニオン Q. 孫のアトピー性皮膚炎治らない A. 薬の塗り方に誤りないか. 毎日新聞, 2023. 7. 12
104. 佐藤未織: どうすれば安全安心 幼い子の「消化管アレルギー」 吐いた時、重症見分け 1 1 9 番. 毎日新聞夕刊, 2023. 7. 13
105. 佐藤未織: 医療 新世紀 乳児の胃腸症嘔吐発作時の行動指針が公開 保護者と医師が取るべき行動を解説 脱水症状に対する補水の方法など紹介. zakzak by 夕刊フジ, 2023. 7. 17
106. 安戸裕貴, 大矢幸弘: 家庭内のほこりにクルミアレルゲン アレルギー発症の可能性にも注目. Medical Tribune, 2023. 7. 18
107. 安戸裕貴, 大矢幸弘: 家庭内のほこりにクルミアレルゲン. 時事メディカル. 2023. 7. 18
108. 山本貴和子: 今年4月に国立成育医療センターが発表! 赤ちゃん早めのスキンケアが食物アレルギーを防ぐ. RKB毎日放送 TBS NEWS DIG Powred by JNN, 2023. 7. 18
109. 大矢幸弘, 安戸裕貴, 山本貴和子: クルミアレルゲン、家庭内のホコリ中に存在することが明らかにー成育ほか. QLife Pro, 2023. 7. 19
110. 佐藤未織: 新生児、乳児の「消化管 allergy」嘔吐発作時の対処指針 公開. 長崎新聞, 2023. 7. 24
111. 山本貴和子: 「卵アレルギーは湿疹への早期ケアで発症を抑えられる」。世界初の実証でこれからどう変わる? 【アレルギーの30年・前編】. たまひよオンライン, 2023. 7. 26
112. 山本貴和子: 二つの研究で卵の摂取を遅らせないと卵アレルギーを予防できるということが新常識に。アレルギーは予防できる時代に? 【アレルギーの30年・後編】. たまひよオンライン, 2023. 7. 26

113. 安戸裕貴, 大矢幸弘 : 家庭内のほこりにクルミアレルゲン アレルギー発症の可能性にも注目. Medical Tribune Vol.56. No15, 2023.8.3
114. 山本貴和子 : 医療新世紀 クルミアレルギー急増中 予防の鍵は皮膚の健康. デーリー東北, 2023.8.12
115. 山本貴和子 : クルミの食物アレルギーが急増中 抗原はハウスダストの中にも、対策は?. 京都新聞, 2023.8.12
116. 山本貴和子 : 【医療新世紀】クルミのアレルギー急増中. 宮崎日日新聞デジタルタ刊プレミア, 2023.8.18
117. 山本貴和子 : どうすれば安全安心 クルミのアレルギー急増 消費拡大、新たに表示義務. 毎日新聞 東京夕刊, 2023.8.31
118. 山本貴和子 : 乳児期に胃腸炎と診断されたあとも嘔吐や下痢が続く……。そんなときは「食物たんぱく誘発胃腸症」かも?. たまひよオンライン, 2023.9.29
119. 山本貴和子 : 赤ちゃんに増えている「食物たんぱく誘発胃腸炎」。診断されにくいから気をつけたいことは?. たまひよオンライン, 2023.9.30
120. 大矢幸弘 : 【アトピー性皮膚炎】かゆみをともなう湿疹を繰り返す 原因は2つ「皮膚の乾燥」と「アレルギー体質」 名医に聞く 病気の予防と治し方. AERA dot., 2023.11.1
121. Yamamoto-Hanada K: Eczema BREAKTHROUGHS Episode 34 Eczema Research Highlights of 2023. Podcast on eczema(atopic dermatitis)science and research-Global Parents for Eczema Research, 2023.12.19
122. 山本貴和子 : 食物アレルギーの経口免疫療法 「超微量」から食べると安全で効果的. 朝日新聞デジタル, 2023.12.31
123. 吉田和恵: 帝王切開による出産でも、赤ちゃんに初乳を飲ませることの大切さ. たまひよONLINE, 2023.1.14
124. 鈴木啓子, 野村伊知郎 他: 新生児、乳児の消化管アレルギーの全国調査結果～約半数が生後1ヶ月までに発症し、早期の診断治療、栄養管理が重要～. 国立成育医療研究センタープレスリリース, 2023.11.30
125. 渡辺翔, 野村伊知郎 : 成人の繰り返す重症胃腸炎の原因に食物蛋白誘発性胃腸炎がある ～原因食材を食べて数時間後の繰り返す腹痛や下痢には注意が必要～. 国立成育医療研究センタープレスリリース, 2023.6
126. 鈴木啓子, 野村伊知郎 : 小児の消化管アレルギー患者の半数は新生児期に発症/国立成育医療研究センター. Care Net, 2023.12.20
127. 鈴木啓子, 野村伊知郎 : 国立成育医療研究センター、新生児、乳児の消化管アレルギーの全国調査結果 ～約半数が生後1ヶ月までに発症し、早期の診断治療、栄養管理が重要～. 日経バイオテックONLINE, 2023.11.30
128. 野村伊知郎 : 生後7日で重症も！乳児消化管アレルギー. メディカルトリビューン, 2023.12.5
129. 野村伊知郎 : 新生児／乳児の消化管アレルギー、約半数は生後1か月までに発症—成育医療センターほか. 医療ニュース QLifePro, 2023.12.5

130. 野村伊知郎：【医療 新世紀】どの年齢でも発症する「好酸球性胃腸炎」子供なら低体重・低身長などの影響 薬剤多様化など治療の進歩で「早期に対処すれば十分な成長が期待」．Zakzak by 夕刊フジ， 2023. 3. 12
131. 野村伊知郎：乳幼児が食事をするとう嘔吐や血便 「消化管アレルギー」かも…国立成育医療研究センターが行動指針．読売新聞， 2023. 7. 1
132. 野村伊知郎：消化管アレルギー、全新生児の発症率は推定 0.2%、初の全国調査．毎日新聞， 2023. 12. 2
133. 野村伊知郎：どうすれば安全安心 子どもの「好酸球性胃腸炎」早期治療で成長十分に．毎日新聞他、地方紙各紙， 2023. 3. 9

[学会発表]

<国際学会>

1. Matsumoto Y, Fukuie T, Suzuki D, Umezawa K, Takada K, Hirai S, Toyokuni K, Sato M, Hamaguchi S, Saito-Abe M, Ishikawa F, Miyaji Y, Kabashima S, Yamamoto-Hanada K, Ohya Y: Differences in eliciting doses between unprocessed and processed products in eggs. Wao Symposium Food and Respiratory Allergies, Hawaii, 2023. 5. 18
2. Ohya Y, Morita H: How to prevent food allergy: Role of skin care. WAO Symposium Food and Respiratory Allergies. Hawaii, 2023. 5. 20
3. Ohya Y, Morita H: Transition medicine in food allergy (JSA SSS) Natural history. WAO Symposium Food and Respiratory Allergies, Hawaii, 2023. 5. 20.
4. Ohya Y: Can topical steroid management prevent the development of food allergy?. Allergy Academy 16th food allergy study day Royal Society of Medicine, London, 2023. 5. 25
5. Ohya Y: Prevention of food allergy in the session on Food Allergy Treatment and Prevention. CU Allergy Week Scientific Webinar, Hongkong(WEB), 2023. 5. 27
6. Hirai S, Yamamoto-Hanada K, Saito-Abe M, Pak K, Ohya Y: Development and validation of a model to predict tolerance achievement after 3 years of cow's milk slow low-dose oral immunotherapy under 4 years of age. EAACI Hybrid Congress 2023, Hamburg(WEB), 2023. 6. 9
7. Kubota H, Fukuie T, Kabashima S, Yamamoto-Hanada K, Ishiguro A, Ohya Y: Threshold does distributions for peanut, cashew nut, and walnut allergy in Japan and the effects of allergen component-specific IgE levels. EAACI Hybrid Congress 2023, Hamburg(WEB), 2023. 6. 9
8. Sato M, Uehara O, Yamamoto-Hanada K, Umezawa K, Funaki Y, Narumi K, Fukuie T, Ohya Y: Longitudinal evaluation of the skin barrier using new non-invasive portable electrical impedance device : Birth cohort study in infants at high risk of atopic dermatitis. EAACI Hybrid Congress 2023, Hamburg(WEB), 2023. 6. 10
9. Hamaguchi S, Yamamoto-Hanada K, Sato M, Fukuie T, Yamamoto Y, Nomura I, Ohya Y: The features of severe food protein-induced enterocolitis syndrome(FPIES) with acidosis.

EAACI Hybrid Congress 2023, Hamburg(WEB), 2023.6.10

10. Inuzuka Y, Yamamoto-Hanada K, Kobayashi T, Pak K, Toyokuni K, Ogita H, Miyoshi T, Ogawa K, Sago H, Ohya Y: Effective Primary Prevention of Atopic Dermatitis in High-risk Neonates via Moisturizer Application: Randomized, Blinded, Parallel, Three-group, Phase II Trial (PAF study). EAACI Hybrid Congress 2023, Hamburg(WEB), 2023.6.11
11. Yamamoto-Hanada K, Kobayashi T, Mikami M, Williams H, Saito-Abe M, Sato M, Miyaji Y, Ishikawa F, Irahara M, Tsuchiya K, Tamagawa-Mineoka R, Takaoka Y, Takemura Y, Sato S, Wakiguchi H, Hoshi M, Natsume O, Yamaide F, Seike M, Kabashima S, Yoshida K, Inuzuka Y, Nishimura K, Toyokuni K, Ogita H, Kiguchi T, Saito J, Morimoto M, Masuda K, Katoh N, Hosoi H, Kameda M, Shigekawa A, Yamasaki K, Nagai M, Ebisawa M, Asaumi T, Itonaga T, Hasegawa S, Yasudo H, Nagao M, Fujisawa T, Yasuoka R, Fujiyama T, Shimojo N, Nakano T, Mori Y, Kondo Y, Kawaguchi T, Futamura M, Nagai A, Sugiura K, Kaburagi S, Morita K, Kitazawa H, Kido H, Nakayama S, Inoue E, Saito H, Ohya Y: Early enhanced treatment for infant atopic dermatitis prevents food allergy: a multicenter, parallel-group, open-label, assessor-blind, randomized controlled trial (PACI Study). EAACI Hybrid Congress 2023, Hamburg(WEB), 2023.6.11
12. Toyokuni K, Yamamoto-Hanada K, Sato M, Kabashima S, Fukuie T, Arai K, Nomura I, Ohya Y: Crushed enteric-coated budesonide for children with eosinophilic gastritis and duodenitis: A report of two cases. EAACI Hybrid Congress 2023, Hamburg(WEB), 2023.6.9-11
13. Yamamoto-Hanada K: Eczema treatment as a preventive strategy for food allergy. EAACI & APAPARI Joint symposium, Hamburg, 2023.6.11
14. Ohya Y: New Perspectives on How Environment Affects Children's Health: Findings from JECS. The 13th Annual Epidemiology Symposium of Allergic Diseases. Seoul(WEB Hybrid), 2023.9.8
15. Yamamoto-Hanada K, Ogasawara H, Inuzuka Y, Umezawa K, Fukuie T, Shimosawa T, Murata T, Ohya Y: Could Urinary Prostaglandin D2 Metabolite Monitor Subtle Allergy Reactions at Home?. APAAACI 2023, Singapore, 2023.10.25
16. Omori M, Yamamoto-Hanada K, Harama D, Hagino K, Matsumoto Y, Umezawa K, Hamaguchi S, Ishikawa F, Hirai S, Toyokuni K, Fukuie T, Ohya Y: Adolescents with severe atopic dermatitis treated with combinations of topical therapy and systemic molecular-targeted therapy. APAAACI 2023, Singapore, 2023.10.23-26
17. Ohya Y: Symposium 5 Allergy Prevention: Mechanism, Guidelines to Practice Comprehensive Approaches in Primary Prevention of Allergy. WAC 2023, Bangkok, 2023.12.1
18. Yamamoto-Hanada K, Ohya Y: Symposium 2 Role of environment and allergic disease development: What we learned from Allergy Birth Cohort Influence of macro and micro-level environmental factors on allergic disease (JECS study). WAC 2023, Bangkok, 2023.12.1
19. Yamamoto-Hanada K, Kawakami E, Sato M, Toyokuni K, Irahara M, Hiraide-Kotaki E,

- Harima-Mizusawa N, Kubota N, Morita H, Matsumoto K, Fukuie T, Ohya Y: Interaction between lifestyle, immunity and gut microbiota in milk allergy children. WAC 2023, Bangkok, 2023. 12. 01-03
20. Harama D, Saito-Abe M, Hamaguchi S, Yamamoto-Hanada K, Fukuie T, Ohya Y: Feasibility and safety of the early introduction of allergenic foods in infants with eczema : a real-world observational study. WAC 2023, Bangkok, 2023. 12. 01
21. Hamaguchi S, Yamamoto-Hanada K, Sato M, Fukuie T, Yamamoto Y, Nomura I, Ohya Y: Characteristics of food protein-induced enterocolitic syndrome with metabolic acidosis : a case-control study. WAC 2023, Bangkok, 2023. 12. 01-3
22. Fukuda R, Pak K, Mochimaru N, Tanaka R, Kiuchi M, Hirata N, Mitsui M, Ohya Y, Yoshida K: Association of stratum corneum and breast milk factors with the development of atopic dermatitis in infancy: A prospective birth cohort study. first international societies for investigative dermatology meeting (ISID2023) , Tokyo, 2023. 5. 11
23. Nomura I: Clinical features and natural histories of eosinophilic gastrointestinal disorders in a nation-wide survey in Japan. EAACI & JSA joint symposium, EAACI 2023, Hamburg, 2023. 6. 10
24. Morimoto N: Rescue of Fetal airway stenosis via EXIT Procedure. 48 hours of Otolaryngology Updates, 2023. 3. 25
25. Morimoto N: Participation into EXIT Procedure. 7th Asia Pacific Pediatric Airway Conference, Korea, 2023. 3. 3
26. Morimoto N: Endoscopic posterior cricoid split with rib graft. 7th Asia Pacific Pediatric Airway Conference, Korea, 2023. 3. 4
27. Morimoto N, Suzuki N, Yamamoto N, Hara M: Prognostic factors affecting surgical outcomes in pediatric subglottic stenosis: a 5-year experience at a tertiary referral center. ASPO annual meeting, Boston, 2023. 5. 6

〈国内学会〉

1. 山本貴和子: 特別講演 妊娠期からの食物アレルギーについての基礎知識. 第30回広島県栄養改善学会, 広島 (WEB), 2023. 2. 25
2. 福家辰樹: スポンサーセミナー2 小児アトピー性皮膚炎における外用療法の最適化への展望. 第350回日本皮膚科学会長崎地方会, 長崎 (WEB), 2023. 4. 9
3. 福家辰樹: 教育セミナー1 小児アトピー性皮膚炎の攻略～早期介入と緩解維持を目指して～. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京 (WEB), 2023. 4. 14
4. 大矢幸弘: 教育セミナー27 小児アトピー性皮膚炎の診断と治療の最前線. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京 (WEB), 2023. 4. 16
5. 山本貴和子: 教育セミナー25 青少年のアトピー性皮膚炎治療の治療戦略. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京 (WEB), 2023. 4. 16
6. 鈴木大地, 齋藤麻耶子, 樺島重憲, 山本貴和子, 福家辰樹, 大矢幸弘: 重症喘息として治療されていた誘発性喉頭閉塞症の1例. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京 (WEB), 2023. 4. 16

7. 山本貴和子： モーニングセミナー5 ライフコースにおける小児アトピー性皮膚炎の疾病負荷を考える. 第122回日本皮膚科学会総会, 神奈川 (WEB), 2023. 6. 3
8. 大矢幸弘： ランチョンセミナー20 アトピー性皮膚炎患者における移行期医療の現状と治療戦略. 第122回日本皮膚科学会総会, 神奈川 (WEB), 2023. 6. 3
9. 福家辰樹： イブニングセミナー21 小児アトピー性皮膚炎治療を考える. 第122回日本皮膚科学会総会, 神奈川 (WEB), 2023. 6. 3
10. 山本貴和子： シンポジウム6 アトピー性皮膚炎児を取り囲む環境整備. 第70回日本小児保健協会学術集会, 神奈川, 2023. 6. 17
11. 大矢幸弘： イブニングセミナー4 アトピー性皮膚炎治療における小児・移行期医療の重要性. 第39回日本臨床皮膚科医会総会・臨床学術大会, 北海道 (WEB), 2023. 6. 17
12. 福家辰樹： 教育セミナー 小児アレルギー診療における炎症評価の実践. 第39回日本小児臨床アレルギー学会学術大会, 福岡 (WEB), 2023. 7. 15
13. 山本貴和子： ランチョンセミナー2 アトピー性皮膚炎のスキンケア防腐剤フリー保湿剤の可能性. 第47回日本小児皮膚科学会学術大会, 大阪 (WEB), 2023. 7. 15
14. 山本貴和子： 共催シンポジウム スキンケアによるアトピー性皮膚炎発症予防の最新情報と現場での予防戦略を考える. 第47回日本小児皮膚科学会学術大会, 大阪 (WEB), 2023. 7. 15
15. 山本貴和子： 乳児アトピー性皮膚炎への早期介入による食物アレルギー発症予防研究／他施設共同ランダム化比較試験. 第47回日本小児皮膚科学会学術大会, 大阪 (WEB), 2023. 7. 15
16. 大矢幸弘： ランチョンセミナー4 思春期のアトピー性皮膚炎の治療. 第47回日本小児皮膚科学会学術大会, 大阪 (WEB), 2023. 7. 16
17. 大矢幸弘： シンポジウム アレルギーの基本的指針改正とこれから. 日本地域看護学会第26回学術集会, 神奈川 (WEB), 2023. 9. 2
18. 山本貴和子： シンポジウム2 アレルギーマーチの中のアトピー性皮膚炎と食物アレルギー. 第6回日本眼科アレルギー学会学術集会, 東京, 2023. 9. 2
19. 山本貴和子： 公開シンポジウム 疫学研究からみた化学物質暴露とアレルギー疾患の関係. 第30回日本免疫毒性学会学術年会, 神奈川, 2023. 9. 13
20. 大矢幸弘, 片岡葉子, 海老澤元宏, 田中暁生, 土屋邦彦, Gupta Rajan, Bates Lauren, Zhang Annie： ミニシンポジウム4 日本人小児アトピー性皮膚炎患児の疾病負荷と飾奥への影響: PEDISTAD 試験. 第72回日本アレルギー学会学術大会, 東京 (WEB), 2023. 10. 20
21. 山本貴和子, 朴慶純, 齋藤麻耶子, 佐藤未織, 宮地裕美子, 目澤秀俊, 羊利敏, 西里美菜保, 熊坂夏彦, 野村伊知郎, 大矢幸弘： 胎児期の抗菌薬曝露と食物蛋白誘発胃腸症 (FPIES) の関連—エコチル調査より. 第72回日本アレルギー学会学術大会, 東京 (WEB), 2023. 10. 20
22. 大塚祐介, 山本貴和子, 小林徹, 朴慶純, 豊國賢治, 荻田博也, 三好剛一, 小川浩平, 佐合治彦, 大矢幸弘： ミニシンポジウム4 Fam' s baby によるアトピー性皮膚炎予防効果を探るランダム化比較試験 (PAF study) . 第72回日本アレルギー学会学術大会, 東京 (WEB), 2023. 10. 20
23. 福家辰樹： シンポジウム1 食事と栄養から考える食物アレルギーの発症予防. 第72回日本アレルギー学会学術大会, 東京 (WEB), 2023. 10. 20
24. 福家辰樹： 教育講演1 アトピー性皮膚炎の発症予防と早期介入—どこまで検討されているのか—. 第72回日本アレルギー学会学術大会, 東京 (WEB), 2023. 10. 20

25. 佐藤未織, 上原治, 山本貴和子, 梅沢洸太郎, 舟木勇矢, 鳴海賢太郎, 福家辰樹, 大矢幸弘 : インピーダンス測定機器による皮膚バリアの縦断的評価:アトピー性皮膚炎ハイリスク乳児出生コホート研究. 第72回日本アレルギー学会学術大会, 東京 (WEB), 2023. 10. 20
26. 梅沢洸太郎, 山本貴和子, 三上嘉子, 高橋準也, 福家辰樹, 浅野善英, 大矢幸弘 : ミニシンポジウム45 小麦アレルギー, 薬剤アレルギーと考えられていた遺伝性血管性浮腫3型の思春期例. 第72回日本アレルギー学会学術大会, 東京 (WEB), 2023. 10. 22
27. 齋藤麻耶子, 山本貴和子, 朴慶純, 岩元晋太郎, 佐藤未織, 宮地裕美子, 西里美菜保, 目澤秀俊, 羊利敏, 熊坂夏彦, 小林徹, 大矢幸弘 : アレルギー疾患の疾患別家族歴と食物アレルギー発症との関連. 第72回日本アレルギー学会学術大会, 東京 (WEB), 2023. 10. 20
28. 齋藤麻耶子, 山本貴和子, 福家辰樹, 大矢幸弘 : シンポジウム1 日本人のアレルギーマーチの実態 二つの前向きコホート研究, 成育コホート研究と子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査) からみえてきたもの. 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド), 2023. 11. 18
29. 齋藤麻耶子, 熊谷史子, 山本貴和子, 佐藤未織, 石川史, 荀原誠, 宮地裕美子, 樺島重憲, 福家辰樹, 大矢幸弘, 秋山真志, 河野通浩 : 早期発症アトピー性皮膚炎乳児における、フィラグリン変異と1歳時点の湿疹コントロールおよび呼吸器症状との関連 (PACI-ON コホート研究). 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド), 2023. 11. 18
30. 伊藤靖典, 長尾みづほ, 村井宏生, 手塚純一郎, 福家辰樹, 西本創, 佐藤さくら, 足立雄一 : 小児アレルギー疾患教育における対面式とオンライン方式の比較検討. 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド), 2023. 11. 18
31. 梅沢洸太郎 : キャリア支援委員会パネルディスカッション 小児アレルギーをもっと深く学びたい人へ～各施設の研修や取り組み～. 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド), 2023. 11. 18
32. 佐藤未織, 鈴木大地, 平井聖子, 山本貴和子, 福家辰樹, 野村伊知郎, 中村知夫, 大矢幸弘 : 食物蛋白誘発胃腸炎に対し食物負荷試験を実施した重症心身障がい児の2例. 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド), 2023. 11. 18
33. 岸野愛, 福家辰樹, 荀原誠, 小笠原久子, 川崎洋, 諫山純, 増田奏衣, 山本貴和子, 齋藤博久, 大矢幸弘 : わが国における新生児期からの乳幼児スキンケアの現状～ハイリスク出生コホート研究. 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド), 2023. 11. 18
34. 佐藤未織, 冠城祥子, 梶田直樹, 煙石真弓, 豊國賢治 : ハンズオンセミナー1 Food protein-induced enterocolitis syndrome. 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド), 2023. 11. 18
35. 大矢幸弘 : 教育セミナー7 思春期のアトピー性皮膚炎の治療. 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド), 2023. 11. 19
36. 野村伊知郎 : シンポジウム9 、食物アレルギーの新たな展開、消化管アレルギー (食物蛋白誘発胃腸症). 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド), 2023. 11. 19
37. 山本貴和子 : シンポジウム7 日本から世界初の皮膚介入で食物アレルギー予防効果を検証論文からは解読できない舞台裏. 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド), 2023. 11. 19

イブリッド) , 2023. 11. 19

38. 福家辰樹 : 教育セミナー8 基本に立ち戻る、アトピー性皮膚炎治療における皮膚バリアケア. 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド) , 2023. 11. 19
39. 大森茉莉, 山本貴和子, 原間大輔, 萩野紘平, 松本恭明, 鈴木大地, 梅沢洸太郎, 濱口冴香, 石川史, 平井聖子, 豊國賢治, 福家辰樹, 大矢幸弘 : 分子標的薬による全身療法を併用した重症思春期アトピー性皮膚炎の入院症例. 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド) , 2023. 11. 19
40. 房安直子, 柳田紀之, 高橋亨平, 佐藤さくら, 中本牧子, 小池由美, 松井照明, 伊藤浩明, 三浦克志, 福家辰樹, 海老澤元宏 : 少量の鶏卵定型負荷食の再現性の検討に関する多施設共同研究. 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド) , 2023. 11. 19
41. 松本恭明, 福家辰樹, 鈴木大地, 梅沢洸太郎, 高田数馬, 島田真実, 平井聖子, 豊國賢治, 佐藤未織, 濱口冴香, 齋藤麻耶子, 石川史, 宮地裕美子, 樺島重憲, 山本貴和子, 大矢幸弘 : 蒸しパンやパンケーキ等の調理法によるアレルギー症状誘発閾値の変化に関する検討. 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド) , 2023. 11. 19
42. 平井聖子, 山本貴和子, 齋藤麻耶子, 朴慶純, 大矢幸弘 : 低年齢児における牛乳緩徐微量経口免疫療法の3年後の耐性獲得を予測するモデルの開発と検証. 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド) , 2023. 11. 19
43. 山本貴和子 : 教育セミナー10 アレルギーマーチ対策とデルゴシニチブ軟膏の活用を考える. 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド) , 2023. 11. 19
44. 濱口冴香, 山本貴和子, 松本恭明, 鈴木大地, 梅沢洸太郎, 平井聖子, 豊國賢治, 小笠原久子, 齋藤麻耶子, 石川史, 佐藤未織, 宮地裕美子, 福家辰樹, 野村伊知郎, 大矢幸弘 : 代謝性アシドーシスを伴う食物蛋白誘発胃腸炎の特徴. 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド) , 2023. 11. 19
45. 鈴木大地, 佐藤未織, 松本恭明, 梅沢洸太郎, 島田真実, 濱口冴香, 小笠原久子, 石川史, 平井聖子, 豊國賢治, 宮地裕美子, 齋藤麻耶子, 山本貴和子, 福家辰樹, 大矢幸弘 : 医療的ケア児における食物アレルギーの評価と管理. 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド) , 2023. 11. 19
46. 山口かおり, 服部佳苗, 生熊しのぶ, 角野茉莉子, 栗山真理子, 福家辰樹 : 学校における級友向け食物アレルギー啓発教材についての調査. 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド) , 2023. 11. 19
47. 青田明子, 鈴木亮平, 伊藤靖典, 佐藤泰憲, 大矢幸弘 : アレルギー患者 QOL 向上のための医療従事者の効率の育成に関する研究 : part1. 喘息ステロイド吸入の効率的指導に関するeラーニング資料の開発. 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド) , 2023. 11. 19
48. 夏目統, 平井聖子, 加藤由希子 : ハンズオンセミナー2 薬物アレルギー. 第60回日本小児アレルギー学会学術大会, 京都 (WEB ハイブリッド) , 2023. 11. 19
49. 山本貴和子 : 共催セミナー デルゴシニチブ軟膏を活用したアトピー性皮膚炎の診療を考える. 第10回日本小児アレルギー学会関東地方会, 東京, 2023. 11. 25
50. 豊國賢治, 森田英明, 樺島重憲, 大矢幸弘 : シンポジウム 58 アレルギー研究の最新知見 : 基礎と臨床 脱毛、成長障害を呈する難治性アトピー性皮膚炎の原因と治療. 第97回日本薬理

- 学会年会, 神戸, 2023. 12. 16
51. 福田理紗, 朴慶純, 木内めぐみ, 平田尚子, 田中諒, 持丸奈央子, 三井真里, 大矢幸弘, 吉田和恵: 乳児脂漏性皮膚炎の発症における角層内因子と母乳中因子との関連—前向き出生コホート研究—. 第 87 回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 東京, 2023. 11. 18
 52. 坂尾佳香, 本多皓, 星美智子, 遠藤麻衣, 福田理紗, 吉田和恵, 小崎里華, 小崎健次郎, 山本俊幸: 汎発性脱毛症を合併した、無汗症外胚葉形成不全の 1 例. 第 87 回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 東京, 2023. 11. 18
 53. 福田理紗, 田中諒, 橋本玲奈, 持丸奈央子, 清水泰岳, 新井勝大, 吉田和恵: TNF- α 阻害薬によるびまん性脱毛を伴う乾癬様皮疹の一例. 第 72 回日本アレルギー学会学術大会, 東京, 2023. 10. 20
 54. 小椋雅夫, 金田朋也, 坂野嘉紀, 岡田聡司, 秋山みさき, 西健太郎, 佐藤舞, 持丸奈央子, 田中諒, 吉田和恵, 亀井宏一: 筋膜・腱まで炎症性病変を呈し全身療法を施行した重症限局性強皮症の 1 例. 第 32 回日本小児リウマチ学会総会・学術集会 (PRAJ2023), 埼玉, 2023. 10. 13
 55. 田中諒, 福田理紗, 持丸奈央子, 橋本玲奈, 吉田和恵: ダブソンが奏効した正補体血症性蕁麻疹様血管炎の 1 例. 第 47 回日本小児皮膚科学会学術大会, 大阪, 2023. 7. 15
 56. 持丸奈央子, 田中諒, 福田理紗, 橋本玲奈, 石川尊士, 河合利尚, 吉田和恵: COVID-19 罹患後に発症した小児汎発型膿疱性乾癬の 1 例. 第 122 回日本皮膚科学会総会, 神奈川, 2023. 6. 2
 57. 吉田和恵: 皮膚バリアをターゲットとした方法はアレルギーマーチの予防に効くのか. 第 122 回日本皮膚科学会総会, 神奈川, 2023. 6. 2
 58. 竹内一朗, 柳久美子, 高田修治, 内山徹, 五十嵐ありさ, 本村健一郎, 林優佳, 長野直子, 松岡諒, 杉山弘樹, 義岡孝子, 斎藤博久, 河合利尚, 大矢幸弘, 清水俊明, 松本健治, 野村伊知郎, 要匡, 森田英明, 新井勝大: リンパ嚢胞過形成を伴う好酸球性消化管疾患の発症に関与する新規 STAT6 機能獲得型変異. 第 23 回日本小児 IBD 研究会, 福岡 (ハイブリッド開催), 2023. 3. 5
 59. 野村伊知郎: 教育講演 食物蛋白誘発胃腸症の最新知見. 第 39 回日本小児臨床アレルギー学会学術大会, 福岡, 2023. 7. 15
 60. 野村伊知郎: 好酸球性消化管疾患、何がおきているのか? 病態解明と治療法開発の最前線. 成育アレルギー中心拠点病院セミナー (免疫アレルギーTerakoya 勉強会), 東京 (ハイブリッド開催), 2023. 7. 27
 61. 野村伊知郎: 好酸球性胃腸炎、食道炎の診断治療の最前線～炎症の本態を知って消炎、整腸を行う～. 荒川区医師会学術講演会, 東京, 2023. 9. 15
 62. 野村伊知郎: 基礎から理解する新生児 - 乳児消化管アレルギー (食物蛋白誘発胃腸症). 成育アレルギー中心拠点病院セミナー (免疫アレルギーTerakoya 勉強会), WEB 開催, 2023. 1. 19
 63. 永嶋早織, 山本真由, 松本健治, 野村伊知郎: 好酸球性消化管疾患 (好酸球性食道炎・好酸球性胃腸炎) の全国調査 6NC (6 National Center) リトリートポスターセッション. 第 31 回日本医学会総会, 東京, 2023. 4. 22
 64. 森脇太郎, 天笠俊介, 鈴木大地, 大西志麻, 内田佳子, 松本正太郎, 植松悟子, 野村伊知郎: 重度の代謝性アシドーシスを呈した食物蛋白誘発胃腸症の新生児例. 第 50 回集中治療学会, 京都, 2023. 3. 2
 65. 守本倫子: シンポジウム 1 金の卵を守る小児難聴医療 小児難聴医療はどう変わっていけ

- る？. 第85回耳鼻咽喉科臨床学会学術講演会, 東京, 2023. 6. 24
66. 守本倫子: シンポジウム5 これからの乳幼児健診 難聴児の早期発見. 第70回日本小児保健協会学術集会, 東京, 2023. 6. 18
 67. 守本倫子: 教育セミナー1 気管切開と嚥下との関連や嚥下障害の方のカニューレ管理での注意点について (小児). 第29回日本摂食嚥下リハビリテーション学会, 神奈川, 2023. 9. 3
 68. 守本倫子: 先天性上気道症候群 (CHAOS) 児のその後. 第8回胎児MRI 研究会学術集会, 東京, 2023. 2. 5
 69. 守本倫子: 教育講演1 咽頭狭窄は病名になるのか? 第36回日本口腔咽頭科学会, 高知, 2023. 9. 14
 70. 松岡真未, 海外佳奈子, 遠藤陽代, 吉田朋世, 林思音, 横井匡, 岡前むつみ, 宮田守, 仁科幸子: 複数回のロービジョンケアと院内を要した例の検討. 第64回日本視能矯正学会, 香川, 2023. 11. 18
 71. 仁科幸子, 吉田朋世, 林思音, 森川葉月, 大西瑞恵, 横井匡: 小児難治性緑内障に対するマイクropals 経強膜的毛様体光凝固術. 第77回日本臨床眼科学会, 東京, 2023. 10. 6
 72. 大鹿哲郎, 永本敏之, 黒坂大次郎, 根岸一乃, 森隆史, 吉田茂生, 宮城麻衣, 野村耕治, 遠藤高生, 鶴木則之, 松木奈央子, 仁科幸子: 先天白内障手術長期成績に関する多施設スタディ. 第77回日本臨床眼科学会, 東京, 2023. 10. 9
 73. 仁科幸子: シンポジウム「日本における早期の相談支援の現状と課題」小児眼科医の立場から～乳幼児期からの連携と課題 第24回日本ロービジョン学会総会, 東京, 2023. 7. 1
 74. 不二門尚, 仁科幸子, 中野泰志: 視覚障がい乳幼児/学童のロービジョンケアに関する医療機関の現状調査. 第24回日本ロービジョン学会総会, 東京, 2023. 6. 30
 75. 森川葉月, 横井匡, 吉田朋世, 大西瑞恵, 林思音, 仁科幸子: 続発小児緑内障難治例に対する経毛様体扁平部アーメド緑内障バルブ. 第48回日本小児眼科学会総会, 宮城, 2023. 6. 16

[講演、その他]

1. 福家辰樹: 小児アレルギー疾患の最新知識～アトピー性皮膚炎・食物アレルギー・ぜん息予防について～. 川崎市 専門職向け講演会, WEB, 2023. 1. 13
2. 大矢幸弘: アレルギーについて. 栃木県小児科医会学術講演会, 栃木 (WEB), 2023. 1. 18
3. 山本貴和子: 小児アトピー性皮膚炎の常識～最近の知識と治療～. 小児アレルギーについて考える～アトピー性皮膚炎治療の新たな選択肢～, WEB, 2023. 1. 19
4. 山本貴和子: アトピー性皮膚炎と食物アレルギーの予防戦略を考える. アレルギーQ&A 研究会, 大阪, 2023. 1. 21
5. 大矢幸弘: 青少年のアトピー性皮膚炎治療. サイバインコ発売1周年記念講演会 from 愛知, WEB, 2023. 1. 23
6. 大矢幸弘: 小児アトピー性皮膚炎とアレルギーマーチ. 大塚製薬プレスセミナー, WEB, 2023. 1. 24
7. 山本貴和子: 思春期の実態を踏まえた治療戦略. アトピー性皮膚炎エキスパートカンファレンス, WEB, 2023. 2. 4
8. 大矢幸弘: 乳児・小児アトピー性皮膚炎の治療と食物アレルギーの予防. 第5回長崎アレ

- ルギー研究会, WEB, 2023. 2. 9
9. 山本貴和子: 妊娠中からアレルギー予防. 川崎市民向け講演会, WEB, 2023. 2. 10
 10. 山本貴和子: 子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査) 一大規模コホート調査でのデータ利用と成果発表を円滑に進めるには. 第2回アカデミア向けレジストリ勉強会, WEB, 2023. 2. 13
 11. 大矢幸弘: アトピー性皮膚炎治療. アトピー性皮膚炎治療を考える会, 東京 (WEB), 2023. 2. 15
 12. 山本貴和子: 小児アトピー性皮膚炎の早期治療の重要と実際の治療. 第17回埼玉小児アレルギー疾患懇話会, WEB, 2023. 2. 18
 13. 大矢幸弘: パネルディスカッション「これからのエコチル調査～未来の健康と環境のために～」. 第12回エコチル調査シンポジウム, WEB, 2023. 2. 19
 14. 山本貴和子: 思春期のアトピー性皮膚炎患者さんの将来を考えた治療強化. リンヴォック適正使用推進インターネットライブセミナー, WEB, 2023. 2. 20
 15. 山本貴和子: エコチル調査から考えるアレルギーのこと. 「地域の子育て世代との対話」サイエンスカフェ, 東京, 2023. 3. 2
 16. 大矢幸弘: 小児アトピー性皮膚炎のスキンケアと外用療法. アトピー性皮膚炎治療研究会 in 東京, WEB, 2023. 3. 7
 17. 福家辰樹: 食物アレルギー診療における特異的 IgE 抗体検査の解釈. 第9回総合アレルギー講習会, 大阪 (WEB), 2023. 3. 18
 18. 福家辰樹: アトピー性皮膚炎診療の最前線～新規治療をどう取り入れるか～. 八王子医師会小児科部会勉強会, 東京 (WEB), 2023. 3. 20
 19. 山本貴和子: アトピー性皮膚炎治療の現状と治療戦略. アトピー性皮膚炎治療_地域医療連携の会, WEB, 2023. 3. 22
 20. 山本貴和子: 小児アトピー性皮膚炎の常識～最新の知識と治療～. モイゼルト軟膏発売記念講演会 in 山口, WEB, 2023. 3. 23
 21. 大矢幸弘: 食物アレルギーの予防を視野に入れた小児アトピー性皮膚炎の外用療法. 世田谷区医師会 小児科医会 学術講演会, 東京 (WEB), 2023. 3. 29
 22. 福家辰樹: アトピー性皮膚炎治療の最前線～新規治療薬モイゼルトをどう取り入れるか～. アトピー性皮膚炎治療について考える～モイゼルト軟膏発売記念講演会～, 高知 (WEB), 2023. 4. 3
 23. 福家辰樹: アナフィラキシーの診断と原因の同定方法. 徳島県医師会学校保健委員会アレルギー研究会, 徳島 (WEB), 2023. 4. 7
 24. 山本貴和子: 保湿スキンケアはアレルギー発症を予防するのリスクになるのか. 第58回小児皮膚科学セミナー, 東京 (WEB), 2023. 4. 8
 25. 福家辰樹: アトピー性皮膚炎治療の最前線～新規治療薬モイゼルトをどう取り入れるか～. アトピー性皮膚炎治療の新たな選択肢, WEB, 2023. 4. 20
 26. 福家辰樹: アトピー性皮膚炎診療の最前線～新規治療薬モイゼルトをどう取り入れるか～. モイゼルト軟膏発売記念講演会, 静岡 (WEB), 2023. 4. 24
 27. 山本貴和子: 食物アレルギー予防を見据えたアトピー性皮膚炎治療と栄養指導. 皮膚の診療連携フォーラム 2023, 東京 (WEB), 2023. 5. 13

28. 福家辰樹： アトピー性皮膚炎診療の最前線～新規治療薬モイゼルトをどう取り入れるか～。
目黒区医師会学術講演会， WEB， 2023. 5. 17
29. 福家辰樹： 小児アトピー性皮膚炎治療。 コレクチム軟膏全国 WEB セミナー， WEB，
2023. 5. 24
30. 大矢幸弘： アトピー性皮膚炎について。 モイゼルト軟膏発売1周年記念講演会 in 神戸，
兵庫 (WEB)， 2023. 5. 25
31. 大矢幸弘： 食物アレルギーの予防に関係する小児アトピー性皮膚炎の診断と治療。 東海小
児アトピー性皮膚炎 Seminar， 愛知， 2023. 5. 31
32. 齋藤麻耶子： 乳幼児の食物アレルギーについての基礎知識。 令和5年度食育講演会 (狛江
市)， 東京， 2023. 6. 5
33. 山本貴和子： アトピー性皮膚炎について。 こどものアトピー性皮膚を考える～モイゼルト
軟膏発売1周年記念講演会， WEB， 2023. 6. 6
34. 大矢幸弘： 小児/青少年におけるリンヴォックの使いどころ。 Osaka City
ADsmallmeeting， WEB， 2023. 6. 1
35. 福家辰樹： 気管支喘息の基礎と、医療的ケア児における喘鳴に対するアレルギーの面からの
アプローチ。 小児在宅医療技術講習会， WEB， 2023. 6. 15
36. 佐藤未織： 血液検査の正しい理解を含めた食物アレルギーの基礎と、医療的ケア児における
食物アレルギーの考え方。 小児在宅医療技術講習会， WEB， 2023. 6. 15
37. 大矢幸弘： アレルギーマーチ。 北陸小児・皮膚免疫アレルギー講演会， 石川，
2023. 6. 21
38. 福家辰樹： 重症難治性小児アトピー性皮膚炎の攻略。 第82回静岡小児アレルギー研究会，
静岡， 2023. 6. 24
39. 山本貴和子： アトピー性皮膚炎・アレルギー疾患に関する疫学研究・トランスレーショナル
研究の実践。 第1回BReSSセミナー 共催セミナー， 東京， 2023. 6. 24
40. 福家辰樹： アトピー性皮膚炎診療の最前線～変わる外用療法の治療戦略～。 How to Use
Moizerto Web seminar， WEB， 2023. 6. 26
41. 山本貴和子： 小児アトピー性皮膚炎の常識－最新の知見と治療。 モイゼルト発売1周年記
念講演会～湿疹の向こう側を見据えて～， WEB， 2023. 7. 3
42. 山本貴和子： 小児アトピー性皮膚炎の常識－最新の知見と治療。 日野市医師会学術講演
会， WEB， 2023. 7. 4
43. 福家辰樹： 乳幼児アトピー性皮膚炎治療の新展開～早期介入と緩解維持を実現する戦略とは
～。 コレクチム軟膏発売3周年記念講演会， 東京， 2023. 7. 5
44. 山本貴和子： 小児アトピー性皮膚炎治療の現状と医療戦略。 第2回 Allergy Center
alumni meeting， 東京， 2023. 7. 6
45. 大矢幸弘： 小児アレルギー疾患の予防と治療に関する最近の話題～環境の観点も含めて～。
第20回山形県小児アレルギー研究会， 山形， 2023. 7. 7
46. 福家辰樹： アトピー性皮膚炎診療の最前線～新規治療薬モイゼルトをどう取り入れるか～。
福島県小児科医会共催学術講演会， 福島 (WEB)， 2023. 7. 12
47. 山本貴和子： 小児アトピー性皮膚炎の治療戦略－最新の話題－。 アトピー性皮膚炎治療 Web
Seminar～アトピー性皮膚炎の外用療法について学ぶ～， WEB， 2023. 7. 12

48. 大矢幸弘： 小児/青少年におけるリンヴォックの使いどころ。 リンヴォック錠アトピー性皮膚炎 ILS, WEB, 2023. 7. 19
49. 福家辰樹： アトピー性皮膚炎治療の最前線～新規治療薬ジファミラストをどう取り入れるか～。 北九州地区小児科医会学術講演会, 福岡 (WEB), 2023. 7. 20
50. 山本貴和子： 小児アトピー性皮膚炎の治療戦略～最新の話～。 愛媛県小児アトピー性皮膚炎フォーラム, WEB, 2023. 7. 21
51. 山本貴和子： 小児アトピー性皮膚炎の治療戦略～最新の話～。 令和5年第4回 大宮医師会医学講座, 埼玉, 2023. 8. 2
52. 山本貴和子： 乳児期早期から始まるアレルギーマーチ発症予防-PACI Study の結果を中心に。 PACI Study オンラインセミナー, WEB, 2023. 8. 3
53. 福家辰樹： 乳幼児期からのアトピー性皮膚炎治療の最適化へ 早期介入と寛解維持を目指して。 第396回沖縄皮膚科勉強会, 沖縄, 2023. 8. 3
54. 山本貴和子： 小児アトピー性皮膚炎の治療戦略～最新の話～。 八戸市小児科医会学術講演会, 青森 (WEB), 2023. 8. 24
55. 福家辰樹： アトピー性皮膚炎診療の最前線～新規治療薬モイゼルトをどう取り入れるか～。 アトピー性皮膚炎 Web Seminar in Fukui, 福井 (WEB), 2023. 8. 29
56. 山本貴和子： 小児アトピー性皮膚炎の治療戦略～最新の話～。 杉並区医師会小児科医会学術講演会, 東京 (WEB), 2023. 8. 30
57. 福家辰樹： アトピー性皮膚炎診療の最前線～新規治療薬モイゼルトをどう取り入れるか～。 小児アトピー性皮膚炎 講演会 in 岐阜, 岐阜 (WEB), 2023. 8. 31
58. 山本貴和子： アトピー性皮膚炎治療の現状と治療戦略。 Rinvoq AD 2nd Anniversary ILS Day5, WEB, 2023. 9. 1
59. 豊國賢治： 子どものスキンケアと食物アレルギー。 日野市アレルギー講習会, 東京 (WEB), 2023. 9. 2
60. 大矢幸弘： 小児/青少年におけるリンヴォックの使いどころ。 小児ADインターネットライブセミナー, WEB, 2023. 9. 6
61. 福家辰樹： 乳幼児期アレルギー疾患の最新知識～アトピー性皮膚炎・食物アレルギー・ぜん息予防について～。 川崎市 市民向け講演会, WEB, 2023. 9. 6
62. 大矢幸弘： アトピー性皮膚炎早期治療メリットと重症アトピー性皮膚炎への新しいアプローチ。 第1回 皮膚科・小児科 アレルギー免疫疾患合同カンファレンス, WEB, 2023. 9. 12
63. 福家辰樹： アトピー性皮膚炎診療の最前線～新規治療薬モイゼルトをどう取り入れるか～。 第270回刈谷・安生・碧南小児科医会のご案内, 愛知 (WEB), 2023. 9. 12
64. 福家辰樹： アトピー性皮膚炎診療の最前線～新規治療薬モイゼルトをどう取り入れるか～。 小児臨床Web Seminar, 大阪 (WEB), 2023. 9. 13
65. 山本貴和子： 小児アトピー性皮膚炎～最新の知識と抗炎症外用薬どう使い分けるか～。 大塚e講演会, 東京 (WEB), 2023. 9. 13
66. 山本貴和子： 小児アトピー性皮膚炎の治療戦略～最新の話～。 県北小児科医会学術講演会, 長崎 (WEB), 2023. 9. 14
67. 福家辰樹： アトピー性皮膚炎診療の最前～新規治療薬ジファミラストをどう取り入れるか

- ～. 佐久平小児科医の会, 長野県 (WEB), 2023. 9. 19
68. 福家辰樹: アトピー性皮膚炎診療の最前線～新規治療薬モイゼルトをどう取り入れるか～. How to use Moizerto in Gunma, 群馬 (WEB), 2023. 9. 22
 69. 山本貴和子: アレルギーマーチ対策を考慮した小児アトピー性皮膚炎診療と最新情報. 小児アレルギー疾患セミナー2023 in 福島, WEB, 2023. 9. 26
 70. 福家辰樹: アトピー性皮膚炎診療の最前線～新規治療薬モイゼルトをどう取り入れるか～. 小児のアレルギー疾患・アトピー性皮膚炎を考える in 県央, 長崎 (WEB), 2023. 9. 27
 71. 山本貴和子: 小児アトピー性皮膚炎の治療戦略-最新の話題-. 朝霞地区医師会小児科医会講演会, WEB, 2023. 9. 27
 72. 山本貴和子: 小児アトピー性皮膚炎の治療戦略～最新の話題～. Web Symposium～小児アトピー性皮膚炎の最新治療を考える～加南小児科医会学術講演会, 石川 (WEB), 2023. 9. 28
 73. 福家辰樹: 小児アレルギー疾患の最新知識・アトピー性皮膚炎・食物アレルギー・気管支ぜん息. 川崎市 専門職向け講演会, WEB, 2023. 9. 29
 74. 山本貴和子: アレルギーとスキンケアの最新情報. 令和5年度調布市アレルギー講演会, WEB, 2023. 10. 2
 75. 齋藤麻耶子: 最新の食物アレルギーの予防・治療 (アトピー性皮膚炎の治療も含めて). 千代田区保健所 令和5年度「アレルギー予防教室」, 東京, 2023. 10. 4
 76. 福家辰樹: 乳幼児期からのアトピー性皮膚炎診療の新展開～早期介入と寛解維持を目指した新たな治療戦略～. コレクチム軟膏全国Webセミナー, WEB, 2023. 10. 6
 77. 福家辰樹: 教育講演 アレルギー疾患の発症予防に関する最近の話題. 第3回妊娠と薬情報研究会学術集会, 東京,
 78. 山本貴和子: 小児アトピー性皮膚炎の治療戦略～最新の治療～. 小児アトピー性皮膚炎治療Up to Date ～外用療法の新たな幕開け～, WEB, 2023. 10. 12
 79. 山本貴和子: 皮脂中RNAの発現パターン解析によるアトピー性皮膚炎診断のための医療機器の研究開発. Health TECH JAPAN, 神奈川, 2023. 10. 12
 80. 福家辰樹: 教育セミナー24 小児アトピー性皮膚炎外用療法の進化～子どもの健やかな成長を叶えるために～. 第72回日本アレルギー学会学術大会, 東京, 2023. 10. 22
 81. 福家辰樹: アトピー性皮膚炎診療の最前線～新規治療薬ジファミラストをどう取り入れるか～. 尼崎市小児科医会学術講演会, 兵庫 (WEB) 2023. 10. 26
 82. 松本恭明: 蒸しパンやパンケーキ等の調理品を用いた食物経口負荷試験の有用性. 令和5年度第2回成育アレルギーメディカルスタッフセミナー, WEB, 2023. 10. 26
 83. 鈴木大地: 当センターでの医療的ケア児に合併する食物アレルギー評価について. 令和5年度第2回成育アレルギーメディカルスタッフセミナー, WEB, 2023. 10. 26
 84. 大矢幸弘: なぜ乳児への早期介入が大切なのか. 小児スキンケア連携セミナー, WEB, 2023. 10. 27
 85. 大矢幸弘: 小児アトピー性皮膚炎の早期治療の重要性と重症患者へのアプローチ. 第15回Tokyo Skin Seminar, WEB,
 86. 山本貴和子: 小児アトピー性皮膚炎の治療戦略-最新の話題-. Web Symposium 小児アトピー性皮膚炎の最新治療を考える, WEB, 2023. 11. 1
 87. 山本貴和子: 小児アトピー性皮膚炎の治療戦略-最新の話題-. アトピー性皮膚炎Web

- Seminar, 埼玉 (WEB), 2023. 11. 2
88. 福家辰樹: 乳幼児アトピー性皮膚炎治療の最適化～早期介入と長期寛解維持を目指して～.
相模原小児アレルギーWEB セミナー, 神奈川, 2023. 11. 2
89. 齋藤麻耶子: 食物アレルギーと食育. 埼玉県潜在保育士復職支援プログラム, WEB,
2023. 11. 2
90. 山本貴和子: アレルギー診療におけるかかりつけ医療機関・アレルギー拠点病院の診療範囲・連携方法 アトピー性皮膚炎. 東京都保健医療局主催 アレルギー疾患医療連携研修
(第1回), 東京 (WEB ハイブリッド), 2023. 11. 4
91. 福家辰樹: アレルギー診療におけるかかりつけ医療機関・アレルギー拠点病院の診療範囲・
連携方法 食物アレルギー. 東京都保健医療局主催 アレルギー疾患医療連携研修 (第1
回), 東京 (WEB ハイブリッド), 2023. 11. 4
92. 豊國賢治: アレルギー診療におけるかかりつけ医療機関・アレルギー拠点病院の診療範囲・
連携方法 食物蛋白誘発胃腸症. 東京都保健医療局主催 アレルギー疾患医療連携研修 (第1
回), 東京 (WEB ハイブリッド), 2023. 11. 4
93. 大矢幸弘: アレルギー診療におけるかかりつけ医療機関・アレルギー拠点病院の診療範囲・
連携方法 気管支喘息. 東京都保健医療局主催 アレルギー疾患医療連携研修 (第1回),
東京 (WEB ハイブリッド), 2023. 11. 4
94. 山本貴和子: 乳児・こどものアレルギーに現場でどう向き合うか～医師の立場から～. 第2
回アレルギーWEB 講演会, WEB, 2023. 11. 8
95. 山本貴和子: 小児科におけるアトピー性皮膚炎治療について. 小児アトピー性皮膚炎治療
UPDATE, WEB, 2023. 11. 10
96. 山本貴和子: 思春期アトピー性皮膚炎をどう乗り越える?. 群馬県小児科医会学術講演
会, 群馬, 2023. 11. 11
97. 福家辰樹: [保健指導のトピックス] 食物アレルギー・アトピー性皮膚炎, 乳幼児健診を
中心とする小児科医のための研修会 PartVI, WEB, 2023. 11. 12
98. 福家辰樹: アトピー性皮膚炎診療の最前線～新規治療薬モイゼルトをどう取り入れるか～.
小児科地域連携講演会, 和歌山 (WEB), 2023. 11. 7
99. 平井聖子, 佐藤未織: 食育・アレルギー対応. 令和5年度埼玉県保育士等キャリアアップ
研修, WEB, 2023. 11. 16
100. 佐藤未織: 食育・アレルギー対応. 令和5年度埼玉県保育士等キャリアアップ研修,
WEB, 2023. 11. 17
101. 福家辰樹: アトピー性皮膚炎診療の最前線～新規治療薬モイゼルトをどう取り入れるか～.
二水会, 埼玉, 2023. 11. 22
102. 福家辰樹: 薬剤アレルギーの基礎知識とアナフィラキシー対応. 令和5年度第1回愛知県
病院薬剤師会 医療安全対策委員会学術講演会, WEB, 2023. 11. 27
103. 山本貴和子: 小児アトピー性皮膚炎の治療戦略～最新の話～. アトピー性皮膚炎治療の
新たな選択肢を考える～モイゼルト軟膏の使い方～in Tamagawa, 東京, 2023. 11. 27
104. 山本貴和子: 小児アトピー性皮膚炎の治療戦略～最新の話～. アトピー性皮膚炎治療の
新たな選択肢を考える～モイゼルト軟膏の使い方～in Tamagawa, 東京, 2023. 11. 27
105. 福家辰樹: 乳幼児アトピー性皮膚炎の新たな治療戦略～デルゴシニチブをどう取り入れるの

- かへ。 小児アトピー性皮膚炎 Expert Seminar in 宮城, WEB, 2023. 11. 30
106. 石川史： 麻酔中のアナフィラキシーにおけるアレルギー科医の対応の実際。 アレルギー疾患先端治療研究会, WEB, 2023. 12. 1
107. 山本貴和子： 小児アトピー性皮膚炎の治療戦略-最新の話題-。 アトピー性皮膚炎学術講演会〜モイゼルト軟膏発売一周年記念講演会〜in 釧路, 北海道 (WEB), 2023. 12. 4
108. 石川史, 平井聖子： 食育・アレルギー対応。 令和5年度埼玉県保育士等キャリアアップ研修, WEB, 2023. 12. 4
109. 山本貴和子： 子どものアレルギー予防と治療最前線〜妊娠期から子育て期まで〜。 令和5年度調布市アレルギー講演会, WEB, 2023. 12. 5. 〜2024. 3. 29
110. 大矢幸弘： 食物アレルギー予防を視野に入れた小児アトピー性皮膚炎の外用療法。 アトピー性皮膚炎治療を考える〜モイゼルト®軟膏の使い方〜in 城南, WEB, 2023. 12. 6
111. 豊國賢治： アトピー性皮膚炎の外用療法とモイゼルト®軟膏の使い方。 アトピー性皮膚炎治療を考える〜モイゼルトR軟膏の使い方〜in 城南, WEB, 2023. 12. 6
112. 山本貴和子： 湿疹発症を見逃さない！湿疹早期介入による食物アレルギー対策。 皮膚バリア 2023 inCHIBA, WEB, 2023. 12. 6
113. 齋藤麻耶子： 乳幼児のアレルギーについての基本的な知識と対応方法。 中野区鷺宮すこやか福祉センター 令和5年度「アレルギー教室」, 東京, 2023. 12. 7
114. 福家辰樹： アレルギー疾患の理解と対応（各論）。 令和5年度保育士等キャリアアップ研修, 東京, 2023. 12. 9
115. 豊國賢治： 日常診療で知っておくべき食物蛋白誘発胃腸炎（FPIES）。 第31回お茶の水小児アレルギー研究会, WEB, 2023. 12. 9
116. 山本貴和子： 小児アトピー性皮膚炎の治療戦略-最新の話題-。 アトピー性皮膚炎 web seminar in shizuoka, WEB, 2023. 12. 12
117. 山本貴和子： デルゴシチニブ軟膏を活用した乳幼児アトピー性皮膚炎、アレルギーマーチ対策。 アトピー性皮膚炎治療セミナー, WEB, 2023. 12. 13
118. 大矢幸弘： 赤ちゃんから始めるアレルギー対策。 Webで参加する小児アトピー性皮膚炎市民講座, WEB, 2023. 12. 16
119. 福家辰樹： 小児アトピー性皮膚炎〜治療ゴール達成が目指せる時代へ〜。 大塚e講演会, WEB, 2023. 12. 18〜2024. 1. 6
120. 福家辰樹： アトピー性皮膚炎における皮膚バリアケア〜治療と予防のメカニズムを理解しよう〜。 長崎県小児科医会学術講演会, WEB, 2023. 12. 20
121. 山本貴和子： 小児アトピー性皮膚炎の治療戦略-最新の話題-。 Meet the Expert, WEB, 2023. 12. 20
122. 山本貴和子： 食物アレルギー予防をみすえたアトピー性皮膚炎診療と栄養指導。 第193回岐阜県小児科懇話会, WEB, 2023. 12. 21
123. 守本倫子： 小児気管切開カニューレの管理と抜去までの道のり。 小児在宅医療講習会, 神奈川, 2023. 5. 12
124. 守本倫子： わが国のムンプス難聴の現状と課題。 石川県小児科医会ワクチン講演会, 石川 (Web), 2023. 8. 31
125. 守本倫子： 手話言語条例とこれからの東京都のろう教育。 東京都のろう教育を考えるフォー

ーラム, web, 2023. 3. 12

126. 守本倫子 : 聴こえの基礎知識、難聴に関する病気とその対応. 立川学園両親講座, 東京, 2023. 10. 24
127. 仁科幸子 : 子どもの視力について知ろう! ~0歳~3歳の子どもの持つ保護者へ~. 令和5年度墨田区育児講演会, 東京, 2023. 10. 26
128. 仁科幸子 : 小児眼科診療~最近の話題~. 第66回東京都多摩地区眼科集談会, 東京, 2023. 10. 21
129. 仁科幸子 : 小児眼科診療~最近の話題~. 山形県眼科集談会, 山形, 2023. 10. 15
130. 仁科幸子 : 小児のロービジョンケア就学・教育. 日本視能訓練士協会 専門教育プログラム II <視能障害学>, web, 2023. 9. 18
131. 仁科幸子 : 小児への眼鏡処方の基本. 第1回日本眼科医会眼鏡処方講習会, web, 2023. 9. 17
132. 仁科幸子 : わかりやすい小児の眼疾患~先天白内障~. 第20回小児眼科診療セミナー, web, 2023. 9. 16
133. 仁科幸子 : 小児の弱視をどう診るか? 第14回上越眼科研究会, 新潟, 2023. 9. 2
134. 仁科幸子 : 小児眼科ケーススタディ. 第3回 Senju Ophthalmic Web Seminar, Web, 2023. 5. 31
135. 仁科幸子 : 小児眼科診療~最近の話題. 第277回鹿児島眼科集談会, 鹿児島, 2023. 5. 20
136. 仁科幸子 : 子どもの視機能について. 第95回東京都小児保健協会学術講演会, Web, 2023. 3. 19
137. 仁科幸子 : 小児眼科診療~最近の話題. 大田区眼科学術講演会, 東京, 2023. 1. 14

4-6 小児がんセンター

[原著論文 (査読付き)]

<欧文>

1. Nishimura N, Ishida T, Yokota I, Matsumoto K, Shichino H, Fujisaki H, Sarashina T, Kamiyo T, Takimoto T, Iehara T, Tajiri T, On Behalf Of The Jccg Neuroblastoma Committee. Minimal Residual Disease Detected by the 7NB-mRNAs ddPCR Assay Is Associated with Disease Progression in High-Risk Neuroblastoma Patients: A Prospective Multicenter Observational Study in Japan. *Biology (Basel)*. 2023 Oct 20;12(10):1350. doi: 10.3390/biology12101350.
2. Iwahata Y, Takae S, Iwahata H, Matsumoto K, Hirayama M, Takita J, Manabe A, Cho Y, Ikeda T, Maezawa T, Miyachi M, Keino D, Koizumi T, Mori T, Shimizu N, Woodruff TK, Suzuki N. Investigation of Fertility Preservation Education Videos for Pediatric Patients Based on International and Historical Survey. *J Adolesc Young Adult Oncol*. 2023 May 8. doi: 10.1089/jayao.2022.0154.

3. Maezawa T, Suzuki N, Takeuchi H, Nishioka M, Hidaka M, Manabe A, Koga Y, Kawaguchi H, Sasahara Y, Tachibana M, Iwamoto S, Horie A, Hiramatsu H, Kato M, Harada M, Yuza Y, Hirayama M, Takita J, Ikeda T, Matsumoto K. Challenges to Widespread Use of Fertility Preservation Facilities for Pediatric Cancer Patients in Japan. *J Adolesc Young Adult Oncol*. 2023 Aug 3. doi: 10.1089/jayao.2023.0059.
4. Nakata K, Matsuda T, Hori M, Sugiyama H, Tabuchi K, Miyashiro I, Matsumoto K, Yoneda A, Takita J, Shimizu C, Katanoda K. Cancer incidence and type of treatment hospital among children, adolescents, and young adults in Japan, 2016–2018. *Cancer Sci*. 2023 Sep;114(9):3770–3782. doi: 10.1111/cas.15892.
5. Sakamoto K, Fujimori K, Miyazaki O, Yoshioka T, Yoneda A, Matsumoto K, Shioda Y. Inclusion of thymic Langerhans cell histiocytosis in the “5 Ts” of the differential diagnosis of anterior mediastinal mass. *Int J Hematol*. 2023 Mar;117(3):311–313. <https://doi.org/10.1007/s12185-023-03554-6>
6. Yanagi Y, Sakamoto S, Nakao T, Kodama T, Uchida H, Shimizu S, Fukuda A, Yamada M, Kiyotani C, Matsumoto K, Yoshioka T, Miyazaki O, Nosaka S, Kasahara M. The role of living-donor liver transplantation in children with an advanced malignant rhabdoid tumor of the liver in the era of transplant oncology: Case report and literature review. *Pediatr Blood Cancer*. 2023 Nov; 70(11):e30582. Doi: 10.1002/pbc.30582
7. Uchida H, Sakamoto S, Komine R, Kodama T, Nakao T, Okada N, Yanagi Y, Shimizu S, Fukuda A, Shioda Y, Kiyotani C, Matsumoto K, Yoneda A, Haga C, Yoshioka T, Miyazaki O, Nosaka S, Kasahara M. Strategy for hepatoblastoma with major vascular involvement: A guide for surgical decision-making. *Surgery*. 2023 Feb;173(2):457–463. doi: 10.1016/j.surg.2022.11.002. Epub 2022 Dec 5. PMID: 36473744
8. Shirai R, Osumi T, Keino D, Nakabayashi K, Uchiyama T, Sekiguchi M, Hiwatari M, Yoshida M, Yoshida K, Yamada Y, Tomizawa D, Takae S, Kiyokawa N, Matsumoto K, Yoshioka T, Hata K, Hori T, Suzuki N, Kato M: Minimal residual disease detection by mutation-specific droplet digital PCR for leukemia/lymphoma. *Int J Hematol*. 2023 Jun;117(6):910–918. doi: 10.1007/s12185-023-03566-2. Epub 2023 Mar 3. PMID: 36867356; PMCID: PMC10225364.
9. Yoshida M, Nakabayashi K, Yang W, Sato-Otsubo A, Tsujimoto SI, Ogata-Kawata H, Kawai T, Ishiwata K, Sakamoto M, Okamura K, Yoshida K, Shirai R, Osumi T, Kiyotani C, Shioda Y, Terashima K, Ishimaru S, Yuza Y, Takagi M, Arakawa Y, Imamura T, Hasegawa D, Inoue A, Yoshioka T, Ito S, Tomizawa D, Koh K, Matsumoto K, Kiyokawa N, Ogawa S, Manabe A, Niwa A, Hata K, Yang JJ, Kato M: Prevalence of pathogenic variants in cancer-predisposing genes in second cancer after childhood solid cancers. *Cancer Med*. 2023 May;12(10):11264–11273. doi: 10.1002/cam4.5835. Epub 2023 Apr 6. PMID: 37021926.
10. Ceolin V, Ishimaru S, Karol SE, Bautista F, Goemans BF, Gueguen G, Willemse M, Di Lorenzo L, Lukin J, van Tinteren H, Locatelli F, Petit A, Tomizawa D, Norton A, Kaspers G, Reinhardt D, Tasian SK, Nichols G, Kolb EA, Zwaan CM, Cooper TM: The PedAL/EuPAL Project: A Global Initiative to Address the Unmet Medical Needs of Pediatric Patients

- with Relapsed or Refractory Acute Myeloid Leukemia. *Cancers (Basel)*. 2023 Dec 22;16(1):78. doi: 10.3390/cancers16010078. PMID: 38201506.
11. Miyagawa N, Goto H, Ogawa A, Kikuta A, Kosaka Y, Sekimizu M, Tomizawa D, Toyoda H, Hiramatsu H, Hara J, Mochizuki S, Nakayama H, Yoshimura K, Iijima-Yamashita Y, Sanada M, Ogawa C: Phase 2 study of combination chemotherapy with bortezomib in children with relapsed and refractory acute lymphoblastic leukemia. *Int J Hematol*. 2023 Aug;118(2):267–276. doi: 10.1007/s12185-023-03609-8. Epub 2023 May 1. PMID: 37127801.
 12. Hara Y, Shiba N, Yoshida K, Yamato G, Kaburagi T, Shiraishi Y, Ohki K, Shiozawa Y, Kawamura M, Kawasaki H, Sotomatsu M, Takizawa T, Matsuo H, Shimada A, Kiyokawa N, Tomizawa D, Taga T, Ito E, Horibe K, Miyano S, Adachi S, Taki T, Ogawa S, Hayashi Y: TP53 and RB1 alterations characterize poor prognostic subgroups in pediatric acute myeloid leukemia. *Genes Chromosomes Cancer*. 2023 Jul;62(7):412–422. doi: 10.1002/gcc.23147. Epub 2023 Apr 27. PMID: 37102302.
 13. Imai C, Sato A, Hiwatari M, Shimomura Y, Hori T, Suenobu S, Imamura T, Hara J, Hasegawa D, Takahashi H, Moriya K, Katayama S, Tomizawa D, Moritake H, Taga T, Horibe K, Koh K, Manabe A, Okamoto Y: Outcomes following induction failure in Japanese children with acute lymphoblastic leukemia. *Int J Hematol*. 2023 Jul;118(1):99–106. doi: 10.1007/s12185-023-03600-3. Epub 2023 Apr 10. PMID: 37037958.
 14. van Weelderen RE, Klein K, Harrison CJ, Jiang Y, Abrahamsson J, Arad-Cohen N, Bart-Delabesse E, Buldini B, De Moerloose B, Dworzak MN, Elitzur S, Fernández Navarro JM, Gerbing RB, Goemans BF, de Groot-Kruseman HA, Guest E, Ha SY, Hasle H, Kelaidi C, Lapillonne H, Leverger G, Locatelli F, Masetti R, Miyamura T, Norén-Nyström U, Polychronopoulou S, Rasche M, Rubnitz JE, Stary J, Tierens A, Tomizawa D, Zwaan CM, Kaspers GJL: Measurable Residual Disease and Fusion Partner Independently Predict Survival and Relapse Risk in Childhood KMT2A-Rearranged Acute Myeloid Leukemia: A Study by the International Berlin-Frankfurt-Münster Study Group. *J Clin Oncol*. 2023 Jun 1;41(16):2963–2974. doi: 10.1200/JCO.22.02120. Epub 2023 Mar 30. PMID: 36996387.
 15. Hama A, Taga T, Tomizawa D, Muramatsu H, Hasegawa D, Adachi S, Yoshida N, Noguchi M, Sato M, Okada K, Koh K, Mitsui T, Takahashi Y, Miyamura T, Hashii Y, Kato K, Atsuta Y, Okamoto Y. Haematopoietic cell transplantation for children with acute megakaryoblastic leukaemia without Down syndrome. *Br J Haematol*. 2023 May;201(4):747–756. doi: 10.1111/bjh.18691. Epub 2023 Feb 14. PMID: 36786154.
 16. Kaburagi T, Shiba N, Yamato G, Yoshida K, Tabuchi K, Ohki K, Ishikita E, Hara Y, Shiraishi Y, Kawasaki H, Sotomatsu M, Takizawa T, Taki T, Kiyokawa N, Tomizawa D, Horibe K, Miyano S, Taga T, Adachi S, Ogawa S, Hayashi Y: UBTf-internal tandem duplication as a novel poor prognostic factor in pediatric acute myeloid leukemia. *Genes Chromosomes Cancer*. 2023 Apr;62(4):202–209. doi: 10.1002/gcc.23110. Epub 2022 Dec 7. PMID: 36448876.
 17. Hammer ASB, Juul-Dam KL, Sandahl JD, Abrahamsson J, Czogala M, Delabesse E, Haltrich I, Jahnukainen K, Kolb EA, Kovács G, Leverger G, Locatelli F, Masetti R, Noren-Nyström U, Raimondi SC, Rasche M, Reinhardt D, Taki T, Tomizawa D, Zeller B, Hasle H, Kjeldsen E:

- Hypodiploidy has unfavorable impact on survival in pediatric acute myeloid leukemia: an I-BFM Study Group collaboration. *Blood Adv.* 2023 Mar 28;7(6):1045–1055. doi: 10.1182/bloodadvances.2022008251. PMID: 36332007; PMCID: PMC10036516.
18. Numata M, Haginoya N, Shiroishi M, Hirata T, Sato-Otsubo A, Yoshikawa K, Takata Y, Nagase R, Kashimoto Y, Suzuki M, Schulte N, Polier G, Kurimoto A, Tomoe Y, Toyota A, Yoneyama T, Imai E, Watanabe K, Hamada T, Kanada R, Watanabe J, Kagoshima Y, Tokumaru E, Murata K, Baba T, Shinozaki T, Ohtsuka M, Goto K, Karibe T, Deguchi T, Gocho Y, Yoshida M, Tomizawa D, Kato M, Tsutsumi S, Kitagawa M, Abe Y: A novel Menin-MLL1 inhibitor, DS-1594a, prevents the progression of acute leukemia with rearranged MLL1 or mutated NPM1. *Cancer Cell Int.* 2023 Feb 25;23(1):36. doi: 10.1186/s12935-023-02877-y. PMID: 36841758.
 19. Hargrave DR, Terashima K, Hara J, Kordes UR, Upadhyaya SA, Sahm F, Bouffet E, Packer RJ, Witt O, Sandalic L, Kieloch A, Russo M, Cohen KJ; Investigators involved in the high-grade glioma cohort. Phase II Trial of Dabrafenib Plus Trametinib in Relapsed/Refractory BRAF V600-Mutant Pediatric High-Grade Glioma. *J Clin Oncol.* 2023 Nov 20;41(33):5174–5183. doi: 10.1200/JCO.23.00558. Epub 2023 Aug 29. PMID: 37643378; PMCID: PMC10666989.
 20. Suenobu S, Terashima K, Akiyama M, Oguri T, Watanabe A, Sugeno M, Higashimori M, So K, Nishida Y. Selumetinib in Japanese pediatric patients with neurofibromatosis type 1 and symptomatic, inoperable plexiform neurofibromas: An open-label, phase I study. *Neurooncol Adv.* 2023 May 23;5(1):vdad054. doi: 10.1093/noajnl/vdad054. PMID: 37287695; PMCID: PMC10243862.
 21. Mishima S, Naito Y, Akagi K, Hayashi N, Hirasawa A, Hishiki T, Igarashi A, Ikeda M, Kadowaki S, Kajiyama H, Kato M, Kenmotsu H, Kodera Y, Komine K, Koyama T, Maeda O, Miyachi M, Nishihara H, Nishiyama H, Ohga S, Okamoto W, Oki E, Ono S, Sanada M, Sekine I, Takano T, Tao K, Terashima K, Tsuchihara K, Yatabe Y, Yoshino T, Baba E. Japanese Society of Medical Oncology/Japan Society of Clinical Oncology/Japanese Society of Pediatric Hematology/Oncology-led clinical recommendations on the diagnosis and use of immunotherapy in patients with high tumor mutational burden tumors. *Int J Clin Oncol.* 2023 Aug;28(8):941–955. doi: 10.1007/s10147-023-02360-8. Epub 2023 Jun 10. PMID: 37300720; PMCID: PMC10390617.
 22. Naito Y, Mishima S, Akagi K, Hayashi N, Hirasawa A, Hishiki T, Igarashi A, Ikeda M, Kadowaki S, Kajiyama H, Kato M, Kenmotsu H, Kodera Y, Komine K, Koyama T, Maeda O, Miyachi M, Nishihara H, Nishiyama H, Ohga S, Okamoto W, Oki E, Ono S, Sanada M, Sekine I, Takano T, Tao K, Terashima K, Tsuchihara K, Yatabe Y, Yoshino T, Baba E. Japanese Society of Medical Oncology/Japan Society of Clinical Oncology/Japanese Society of Pediatric Hematology/Oncology-led clinical recommendations on the diagnosis and use of tropomyosin receptor kinase inhibitors in adult and pediatric patients with neurotrophic receptor tyrosine kinase fusion-positive advanced solid tumors. *Int J Clin Oncol.* 2023 Jul;28(7):827–840. doi: 10.1007/s10147-023-02345-7. Epub 2023 May 22. PMID: 37212982; PMCID: PMC10310565.

23. Mishima S, Naito Y, Akagi K, Hayashi N, Hirasawa A, Hishiki T, Igarashi A, Ikeda M, Kadowaki S, Kajiyama H, Kato M, Kenmotsu H, Kodera Y, Komine K, Koyama T, Maeda O, Miyachi M, Nishihara H, Nishiyama H, Ohga S, Okamoto W, Oki E, Ono S, Sanada M, Sekine I, Takano T, Tao K, Terashima K, Tsuchihara K, Yatabe Y, Yoshino T, Baba E. Japanese Society of Medical Oncology/Japan Society of Clinical Oncology/Japanese Society of Pediatric Hematology/Oncology-led clinical recommendations on the diagnosis and use of immunotherapy in patients with DNA mismatch repair deficient (dMMR) tumors, third edition. *Int J Clin Oncol*. 2023 Oct;28(10):1237–1258. doi: 10.1007/s10147-023-02397-9. Epub 2023 Aug 20. PMID: 37599324; PMCID: PMC10542286.
24. Huang JH, Chen SH, Liao YM, Kao YC, Ho WL, Chang H, Tsai ML, Lee HL, Kuo CC, Tseng SH, Chang CY, Hsieh KL, Lu LS, Chen YJ, Chiou JF, Hsieh TH, Liu YR, Hsu W, Li WT, Wu YC, Wu WC, Wang JL, Tsai JJ, Terashima K, Kiyotani C, Wong TT, Miser JS, Liu YL. Feasibility and Toxicity of Interval-Compressed Chemotherapy in Asian Children and Young Adults with Sarcoma. *J Pers Med*. 2023 Apr 14;13(4):668. doi: 10.3390/jpm13040668. PMID: 37109054; PMCID: PMC10146212.
25. Sakaguchi H, Umeda K, Kato I, Sakaguchi K, Hiramatsu H, Ishida H, Yabe H, Goto H, Kawahara Y, Yamashita YI, Sanada M, Deguchi T, Takahashi Y, Saito A, Noma H, Horibe K, Taga T, Adachi S; Transplantation and Cellular Therapy Committee of Japanese Childhood Cancer Group: Safety and efficacy of post-haematopoietic cell transplantation maintenance therapy with blinatumomab for relapsed/refractory CD19-positive B-cell acute lymphoblastic leukaemia: protocol for a phase I-II, multicentre, non-blinded, non-controlled trial (JPLSG SCT-ALL-BLIN21). *BMJ Open*. 2023 Apr 17;13(4):e070051. doi: 10.1136/bmjopen-2022-070051.
26. Kawaguchi K, Umeda K, Miyamoto S, Yoshida N, Yabe H, Koike T, Kajiwara M, Kawaguchi H, Takahashi Y, Ishimura M, Sakaguchi H, Hama A, Cho Y, Sato M, Kato K, Sato A, Kato K, Tabuchi K, Atsuta Y, Imai K: Graft-versus-host disease-free, relapse-free, second transplant-free survival in allogeneic hematopoietic cell transplantation for genetic disorders. *Bone Marrow Transplant*. 2023 May;58(5):600–602. doi: 10.1038/s41409-023-01937-1.
27. Nishida M, Sugita J, Takahashi S, Iwai T, Sato M, Kudo Y, Omotehara S, Horie T, Sakano R, Shibuya H, Yokota I, Iguchi A, Teshima T. Correction to: Refined ultrasonographic criteria for sinusoidal obstruction syndrome after hematopoietic stem cell transplantation. *Int J Hematol*. 2023;117:468.
28. Ishida H, Imamura T, Tatebe Y, Ishihara T, Sakaguchi K, Suenobu S, Sato A, Hashii Y, Deguchi T, Takahashi Y, Hasegawa D, Miyamura T, Iguchi A, Kato K, Saito-Moriya A, Hara J, Horibe K. Impact of asparaginase discontinuation on outcomes of children with acute lymphoblastic leukaemia receiving the Japan Association of Childhood Leukaemia Study ALL-02 protocol. *Br J Haematol*. 2023, 201:1200–1208. doi: 10.1111/bjh.18745
29. Fujita T, Fukushima H, Nanmoku T, Arakawa Y, Deguchi T, Suzuki R, Yamaki Y, Hosaka S, Takada H. Acute monocytic leukemia with KMT2A::LASP1 developed 9 months after diagnosis

- of acute megakaryoblastic leukemia in a 2-year-old boy. *Int J Hematol.* 2023 Oct;118(4):514-518. doi: 10.1007/s12185-023-03622-x. Epub 2023 Jun 14. PMID: 37314622.
30. Yano M, Ishida H, Hara J, Kawaguchi H, Ito E, Moriya-Saito A, Hashii Y, Deguchi T, Miyamura T, Sato A, Hori H, Horibe K, Imamura T. Outcome of hematopoietic stem cell transplantation in pediatric patients with acute lymphoblastic leukemia not in remission enrolled in JACLS ALL-02. *Int J Hematol.* 2023 Sep;118(3):364-373. doi: 10.1007/s12185-023-03626-7. Epub 2023 Jun 26. PMID: 37358749.
 31. Sato A, Hatta Y, Imai C, Oshima K, Okamoto Y, Deguchi T, Hashii Y, Fukushima T, Hori T, Kiyokawa N, Kato M, Saito S, Anami K, Sakamoto T, Kosaka Y, Suenobu S, Imamura T, Kada A, Saito AM, Manabe A, Kiyoi H, Matsumura I, Koh K, Watanabe A, Miyazaki Y, Horibe K. Nelarabine, intensive L-asparaginase, and protracted intrathecal therapy for newly diagnosed T-cell acute lymphoblastic leukaemia in children and young adults (ALL-T11): a nationwide, multicenter, phase 2 trial including randomisation in the very high-risk group. *Lancet Haematol.* 2023 Jun;10(6):e419-e432. doi: 10.1016/S2352-3026(23)00072-8. Epub 2023 May 8. Erratum in: *Lancet Haematol.* 2023 Jun;10(6):e399. PMID: 37167992.
 32. Saettini F, Guerra F, Fazio G, Bugarin C, McMillan HJ, Ohtake A, Ardisson A, Itoh M, Giglio S, Cappuccio G, Giardino G, Romano R, Quadri M, Gasperini S, Moratto D, Ishiguro A, Fukuhara Y, Hayakawa I, Mauri M, Piazza R, Cazzaniga G, Biondi A: Antibody deficiency in patients with biallelic *KARS1* mutations. *J Clin Immunol* 2023 Nov;43(8):2115-2125. doi: 10.1007/s10875-023-01584-7.
 33. Tokuda Y, Yamada M, Fukuda A, Shoji K, Sakamoto S, Ishiguro A, Imadome K, Kasahara M: No additional risk of ampicillin rash among pediatric liver transplant recipients with concurrent Epstein-Barr virus infection. *Pediatr Infect Dis J* 2023 Dec; 42(12): 1063-1066. doi: 10.1097/INF.0000000000004083
 34. Kouno H, Kunishima S, Takebe J, Uchiyama T, Kaname T, Ishiguro A: Measurement of immature platelet fraction is useful in the differential diagnosis of MYH9 disorders. *Intern J Lab Hematol* 2023 Oct; 45(5): 700-706. doi: 10.1111/ijlh.14123.
 35. Shimizu S, Sakamoto K, Kudo K, Morimoto A, Shioda Y. Detection of BRAF V600E mutation in radiological Langerhans cell histiocytosis-associated neurodegenerative disease using droplet digital PCR analysis. *Int J Hematol.* 2023 Jul;118(1):119-124. doi: 10.1007/s12185-023-03588-w. PMID: 37010809
 36. Morimoto A, Shioda Y, Kudo K, Kanegane H, Imamura T, Koh K, Kosaka Y, Yuza Y, Nakazawa A, Saito AM, Watanabe T, Nakazawa Y. Intensification of treatment with vinca alkaloid does not improve outcomes in pediatric patients with Langerhans cell histiocytosis: results from the JPLSG LCH-12 study. *Int J Hematol.* 2023 Jul;118(1):107-118. PMID: 36871086 DOI: 10.1007/s12185-023-03568-0
 37. Sakamoto K, Morimoto A, Shioda Y, Imamura T, Imashuku S on behalf of the Japan LCH Study Group (JLSG). Relapses of multisystem/multifocal bone Langerhans cell histiocytosis in paediatric patients: Data analysis from the JLSG-96/02 study. *Br J Haematol.* 2023;200:769-775. DOI: 10.1111/bjh.18583

38. Ono R, Sakamoto K, Doi T, Yanagisawa R, Morimoto A, Kanegane H, Nakazawa Y, Shioda Y. Dexamethasone palmitate as an etoposide-free treatment for children with hemophagocytic lymphohistiocytosis after hematopoietic cell transplantation. *Bone Marrow Transplant*. 58(11):1286-1288. 2023. PMID:37644136
39. Fukuoka K, Kurihara J, Shofuda T, Kagawa N, Yamasaki K, Ando R, Ishida J, Kanamori M, Kawamura A, Park YS, Kiyotani C, Akai T, Keino D, Miyairi Y, Sasaki A, Hirato J, Inoue T, Nakazawa A, Koh K, Nishikawa R, Date I, Nagane M, Ichimura K, Kanemura Y. Subtyping of group 3/4 medulloblastoma as a potential prognostic biomarker among patients treated with reduced dose of craniospinal irradiation: a Japanese Pediatric Molecular Neuro-Oncology Group Study. *Acta Neuropathological communications*. 2023 sep 25; 11(1):153. doi: 10.1186/s40478-023-01652-4. PMID: 37749662
40. Lee SHR, Ashcraft E, Yang W, Roberts KG, Gocho Y, Rowland L, Inaba H, Karol SE, Jeha S, Crews KR, Mullighan CG, Relling MV, Evans WE, Cheng C, Yang JJ, Pui CH. Prognostic and Pharmacotypic Heterogeneity of Hyperdiploidy in Childhood ALL. *J Clin Oncol*. 2023 Dec 10;41(35):5422-5432.
41. Rowland L, Smart B, Brown A, Dettorre GM, Gocho Y, Hunt J, Yang W, Yoshimura S, Reyes N, Du G, John A, Maxwell D, Stock W, Kornblau S, Relling MV, Inaba H, Pui CH, Bourquin JP, Karol SE, Mullighan CG, Evans WE, Yang JJ, Crews KR. Ex vivo Drug Sensitivity Imaging-based Platform for Primary Acute Lymphoblastic Leukemia Cells. *Bio Protoc*. 2023 Aug 5;13(15):e4731.
42. Yoshimura S, Panetta JC, Hu J, Li L, Gocho Y, Du G, Umezawa A, Karol SE, Pui CH, Mullighan CG, Konopleva M, Stock W, Teachey DT, Jain N, Yang JJ. Preclinical pharmacokinetic and pharmacodynamic evaluation of dasatinib and ponatinib for the treatment of T-cell acute lymphoblastic leukemia. *Leukemia*. 2023 Jun;37(6):1194-1203.
43. Hirai M, Yagasaki H, Kanezawa K, Ueno M, Shimozaawa K, Imai K, Morio T, Kato M, Gocho Y, Narumi S, Ebihara Y, Morioka I. Cord Blood Transplantation in 2 Infants Presenting Monosomy 7 Clonal Hematopoiesis: SAMD9 / SAMD9L Germline Mutation. *J Pediatr Hematol Oncol*. 2023 Mar 1;45(2):e290-e293.
44. Lee SHR, Yang W, Gocho Y, John A, Rowland L, Smart B, Williams H, Maxwell D, Hunt J, Yang W, Crews KR, Roberts KG, Jeha S, Cheng C, Karol SE, Relling MV, Rosner GL, Inaba H, Mullighan CG, Pui CH, Evans WE, Yang JJ. Pharmacotypes across the genomic landscape of pediatric acute lymphoblastic leukemia and impact on treatment response. *Nat Med*. 2023 Jan;29(1):170-179.
45. Fujikawa H, Shimizu H, Nambu R, Takeuchi I, Matsui T, Sakamoto K, Gocho Y, Miyamoto T, Yasumi T, Yoshioka T, Arai K. Monogenic inflammatory bowel disease with STXBP2 mutations is not resolved by hematopoietic stem cell transplantation but can be alleviated via immunosuppressive drug therapy. *Clin Immunol*. 2023 Jan;246:109203.
46. Fukano R, Iijima-Yamashita Y, Iwafuchi H, Nakazawa A, Saito AM, Takimoto T, Sekimizu M, Suehiro Y, Yamasaki T, Hasegawa S, Mori T, Horibe K. :Prognostic value of minimal disseminated disease assessed using digital polymerase chain reaction for 3' ALK assays

- in pediatric anaplastic lymphoma kinasepositive anaplastic large cell lymphoma.
Haematologica 2024 Feb 1;109(2):652-656. doi: 10.3324/haematol.2023.282812.
47. Shima H, Sato S, Takimoto T, Sakai M, Hashida N, Isshiki K, Shimada H: Neurocognitive outcomes of children with osteosarcoma treated with methotrexate. Pediatr Int 2023 Jan;65(1):e15487. doi: 10.1111/ped.15487.
 48. Miyazaki O, Oguma E, Nishikawa M, Tanami Y, Hosokawa T, Kitami M, Aoki H, Hattori S, Motoori K, Watanabe K, Ida K, Hishiki T, Kitamura M, Nozawa K, Takimoto T, Hiyama E: Usefulness of central radiologic review in clinical trials of children with hepatoblastoma. Pediatr Radiol 2023 Mar;53(3):367-377. doi: 10.1007/s00247-022-05530-4. Epub 2022 Oct 18.
 49. Kaneko K, Tsutsumi S, Fujita D, Sugiura-Ogasawara M, Mitsuda N, Matsubara K, Atsumi T, Inoue E, Takimoto T, Murashima A: Intravenous immunoglobulin treatment for obstetric antiphospholipid syndrome refractory to conventional therapy: A single-arm, open-labelled multicentre clinical trial. Mod Rheumatol 2023 Jun 21:road062. doi: 10.1093/mr/road062.

<和文>

1. 加藤 実穂, 瀧本 哲也, 松本 公一. 本邦における小児がん長期フォローアップ体制の構築に向けて (第一報). 日本小児血液・がん学会雑誌(2187-011X) 59 巻 5 号 Page387-394(2023. 02)
2. 力武 諒子, 渡邊 ともね, 山元 遥子, 市瀬 雄一, 松本 公一, 新野 真理子, 松木 明, 伊藤 ゆり, 太田 将仁, 坂根 純奈, 東 尚弘, 若尾 文彦. がん診療連携拠点病院等におけるAYA世代がん支援体制2021年の現況 AYAがんの医療と支援(2435-9246) 3巻2号 Page40-46(2023. 09)
3. 清谷 知賀子, 山田 悠司, 寺島 慶太, 塩田 曜子, 牛腸 義宏, 井口 晶裕, 坂口 大俊, 米田 光宏, 富澤 大輔, 松本 公一: 日本人小児がん患児38例におけるアントラサイクリン心筋障害抑制のためのデクスラゾキサン併用治療. 日本小児血液・がん学会雑誌 2023;60(1):15-19
4. 城 友泰, 平安山 知子, 富澤 大輔, 吉原 哲, 加畑 馨, 藤原 実名美, 奥山 美樹, 柴 徳生, 藤井 敬子, 梅澤 佳央, 山崎 理絵, 武田 航, 葉名尻 良, 福島 健太郎, 三村 尚也, 池本 純子, 岩木 啓太, 米谷 昇, 藤原 慎一郎, 李 政樹, 長村 登紀子, 田野崎 隆二, 新井 康之: 急性リンパ性白血病に対するtisagenlecleucel製造結果-日本輸血・細胞治療学会CAR-T療法タスクフォースによる研究 -. 臨床血液 2023;64(5):331-337
5. 今西洋介, 三牧正和, 永光信一郎, 秋山千枝子, 上原里程, 小川厚, 神菌淳司, 齋藤伸治, 坂下和美, 坂本昌彦, 佐藤さくら, 島津智之, 富澤大輔, 西崎直人, 久田研, 日高啓量, 福地成, 藤井智香子, 坊亮輔, 堀内清華, 田中恭子, 岡田賢司, 金子一成, 吉原重美, 井原健二: 男性の産後うつと育児休業に関するアンケート調査. 日本小児科学会雑誌 2023;127(1):90-95
6. 三谷友一, 市村香代子, 荒川ゆうき, 森麻希子, 福岡講平, 大嶋宏一, 出口隆生, 中澤温子, 康勝好: Picture in Clinical Hematology No. 156. 臨床血液 2023;64(4):243-244

[原著論文 (査読無し)]

なし

[症例報告]

<欧文>

1. Tsujimoto SI, Sakamoto K, Nakano Y, Mizuno T, Shindo T, Watanabe J, Sato-Otsubo A, Osumi T, Matsumoto K, Tomizawa D, Kato M: Myelodysplastic syndrome in a patient with Barth syndrome (3-methylglutaconic aciduria type II). *Pediatr Blood Cancer*. 2023 Mar;70(3):e30033. doi: 10.1002/pbc.30033. Epub 2022 Oct 2. PMID: 36184828.
2. Sakamoto A, Nakadate H, Iguchi A, Tsumura Y, Tsuruta T, Yamashiro Y, Hattori Y, Ishiguro A. Unstable hemoglobin Bicêtre, NM_000518.4(HBB):c.191A>C (p.His64Pro), with slightly decreased P50 and no polycythemia after splenectomy. *Pediatr Blood Cancer*. 69:e29777, 2022
3. Yaga T, Iguchi A, Nakayama R, Kosaki R, Ishiguro A. Potocki-Shaffer syndrome revealed in a WAGR syndrome case with multiple exostoses. *Pediatr Int*. 2023; 65:e15405.
4. Yamano S, Iguchi A, Ishikawa K, Sakamoto A, Uchiyama T, Yanagi K, Kaname T, Ishiguro A. Splenectomy as an effective treatment for macrothrombocytopenia in Takenouchi-Kosaki syndrome. *Int J Hematol*. 2023;117:622–625.
5. Komeno Y, Uchiyama T, Kawano F, Kurihara Y, Kurokawa M, Ohara O, Kunishima S, Ishiguro A: Inherited macrothrombocytopenia due to a novel splice donor site mutation in *ITGB3*. *Ann Hematol* 2023 Oct; 102(10):2947–2949. doi: 10.1007/s00277-023-05387-z.
6. Komorizono R, Takeuchi I, Yoshioka T, Yano T, Kumagai H, Ishiguro A, Arai K: Ileal arteriovenous malformation in a five-year-old boy with recurrent anemia. *Pediatr Int* 2023; 65(1): e15564. doi.org/10.1111/ped.15564.
7. Wada MK, Fukuhara Y, Hayakawa I, Kaname T, Ishiguro A: *KARS*-related diseases with macrothrombocytes and pulmonary arterial hypertension. *Pediatr Int* 2023; 65: e15428. doi: 10.1111/ped.15428.

<和文>

1. 平手友章, 北澤宏展, 坂口大俊, 秋田直洋, 長谷川千尋, 山元佳, 忽那賢志, 三木田馨, 森毅彦, 濱麻人, 吉田奈央: 急性骨髄性白血病患者に対する非血縁者間骨髄移植後に発症したトキソプラズマ脳症. *臨床血液* 2023;64(10):1275–1279.
2. 中村こずえ, 樋渡光輝, 新戸瑞穂, 佐藤恭弘, 小山隆之, 三牧正和, 内山 徹, 石黒 精: 免疫性血小板減少症との鑑別診断を必要とした先天性血小板減少症の1例. *日小児血がん会誌*, 2023; 60(3): 266–269.
3. 徳田雄亮, 井口晶裕, 坂本 淳, 平石のぞみ, 今井庸子, 宮城 徹, 柏瀬貢一, 石黒 精: 抗血小板自己抗体を検出した免疫性血小板減少症の1か月児. *日小児会誌*, 2023; 127(5): 701–706.
4. 佐藤麻朝, 進藤考洋, 羽賀千都子, 平井聖子, 牛腸義宏, 小野博: 心室細動で発症した好酸球性心筋炎の1歳女児例 *日本小児循環器学会雑誌* 2023年 39 巻 2 号 99–105 発行日: 2023/08/01 公開日:

[総説]

<欧文>

1. Tomizawa D, Tsujimoto SI. Risk-Stratified Therapy for Pediatric Acute Myeloid Leukemia. *Cancers* (Basel). 2023 Aug 18;15(16):4171. doi: 10.3390/cancers15164171. PMID: 37627199.
2. Tomizawa D: Evolution and optimization of therapies for acute lymphoblastic leukemia in infants. *Int J Hematol*. 2023 Feb;117(2):162-172. doi: 10.1007/s12185-022-03502-w. Epub 2022 Nov 28. PMID: 36441356.

<和文>

1. 松本公一：【小児がん患者/経験者・家族が安心して生活を送るために】小児がんを取り巻く状況 保健の科学(0018-3342)65 巻9号 Page580-585(2023.09)
2. 富澤大輔：本邦における小児がん医薬品開発の現状と課題. 日本小児血液がん・学会雑誌 2023;60(3):253-259
3. 富澤大輔：小児の急性骨髄性白血病：リスク層別化治療の発展. 日本小児血液がん・学会雑誌 2023;60(2):130-138
4. 富澤大輔：「エキスパートが教える小児の薬物治療」 II. 薬剤別 27. 分子標的薬. 小児内科 2023;55 (増刊号) :217-223
5. 富澤大輔：「真の実臨床応用をめざした再生医療 2023：リバーストラנסレーショナルリサーチのいまと産業化のための技術開発」 現場の最前線からみた急性リンパ性白血病に対する CAR-T 療法. 実験医学 (増刊号) 2023;41(2):183-187
6. 寺島慶太：小児脳腫瘍に対する多施設共同試験-海外の動向：臨床脳腫瘍学. 日本臨床増刊号 2023;81(増刊号9):643-648
7. 寺島慶太：中枢神経胚細胞腫瘍. 小児・AYA 世代がん診療の現在と未来. 小児科診療 2023;86(8):1008-1012
8. 坂口大俊：小児急性リンパ芽球性白血病に対する CAR-T 療法. 臨床血液 2023;64(11):1440-1446.
9. 坂口大俊：COVID-19 パンデミック下の移植医療. 小児内科 2023;55(5):863-865.
10. 坂口大俊：「エキスパートが教える小児の薬物治療」 II. 薬剤別 17. 造血薬. 小児内科 2023;55 (増刊号) : 173-177.
11. 坂口大俊：「小児の治療指針」 造血細胞移植, 8. 血液・腫瘍. 小児科診療 2023;86 (Suppl1) : 471-474.
12. 井口晶裕：小児の移植医療 未成年の血縁ドナー. 小児内科 55:829-831, 2023
13. 井口晶裕：小児の薬物医療 自己免疫性溶血性貧血. 小児内科増刊号 55:612-615, 2023
14. 井口晶裕：子どもの検査値の判断に迷ったら 循環抗凝血素. 小児科増刊号 64:1454-1457, 2023
15. 坂本 淳, 石黒 精, 井口晶裕：鉄欠乏. 微量元素とビタミンが子どもにとってなぜ必要か. 小児科診療, 2023; 65(12): 1475-1479.
16. 石黒 精：Glanzmann 型血小板無力症. 別刷日本臨床, 領域別症候群シリーズNo. 28, 血液症候群 (第3版) III, 2023; 84-87.
17. 石黒 精：タイプ II 血小板無力症. 別刷日本臨床, 領域別症候群シリーズNo. 28, 血液症候群 (第

3 版) III, 2023; 88-91.

18. 石黒 精, 森 麻希子, 東川正宗: 小児免疫性血小板減少症診療ガイドライン 2022. 日小児血がん会誌, 2023; 60(3): 228-233.
19. 石黒 精: 血友病. 遺伝を考える. 日医師会誌, 2023; 152 特別号(1): S263-S266.
20. 加藤実穂, 瀧本哲也: 疾患登録 小児外科, 東京医学社, 東京, 55(8) 820-823, 2023.
21. 加藤実穂, 北菌育美, 義岡孝子, 米田光宏: 副腎皮質腫瘍. 小児外科, 東京医学社, 東京, 55(8) 854-857, 2023.

[著書]

1. 富澤大輔 (分担執筆): 7. 血液疾患・悪性腫瘍 白血病. 加藤元博編, 小児科診療ガイドライン-最新の治療指針- 第5 版, 総合医学社, 2023; 425-429
2. 富澤大輔 (分担執筆): 小児の白血病, 23 小児科疾患. 福井次矢, 高木誠, 小室一成編, 今日の治療指針 2023 年版 (Volume 65), 医学書院, 2023; 1457-1458
3. 寺島慶太 (分担執筆): 小児の脳腫瘍, 23 小児科疾患. 福井次矢, 高木誠, 小室一成編, 今日の治療指針 2023 年版 (Volume 65), 医学書院, 2023; 1458-1459
4. 寺島慶太 (分担執筆): hCG, 9 腫瘍マーカー. 加藤元博, 高橋尚人編, 小児臨床検査ガイド (第3 版), 文光堂, 2023; 545-548
5. 出口隆生 (分担執筆): 第2 部 検査データの読み方 1. 血液学的検査 白血病の検査 (細胞化学的検査, 細胞マーカー検査). 加藤元博・高橋尚人編, 小児臨床検査ガイド 第3 版, 文光堂, 2023; 71-77
6. 石黒 精: 血液. 小児科専門医受験のための最速トレーニング. P195-204, 総合医学社, 東京, 2023.
7. 三宅こず恵, 石黒 精: 血友病. 第4 章 治療実施体制と医療経済, 第2 節 AAV 治療実施体制構築, 遺伝子治療開発研究ハンドブック第2 版, エヌ・ティー・エス, 東京, 2023.
8. 塩田曜子. 第IV 章 子どもとコミュニティのかかわり 1 ケースシミュレーション ⑦悪性疾患. 医療×保健×福祉×保育×教育をつなぐ コミュニティ小児科学 診察室を出て地域と育む子どもの未来. 診断と治療社 2023 年4 月5 日 p. 129-134
9. 塩田曜子. エキスパートに聞く LCH の臨床・ステージング. 宮寄 治(編) 小児画像診断の勘ドコロ NEO. 第1 版, メジカルビュー社 2023 年9 月 p. 265-268.
10. 坂本謙一, 塩田曜子, 森本 哲. 特集 小児・AYA 世代がん診療の現在と未来 II. 造血器腫瘍の現在と未来 組織球症 小児科診療 86 (8), 945-949, 2023-08-01 診断と治療社
11. 塩田曜子, 坂本謙一. 第XII 章 小児の造血器悪性腫瘍 7. 小児の血球貪食性リンパ組織球症 (HLH) と Langerhans 細胞組織球症 (LCH). 一般社団法人日本血液学会 血液専門医テキスト (改訂第4 版) 南江堂 2023 年10 月20 日 p. 485-491

[ガイドライン、研究報告書、その他]

1. Kato M, Takimoto T. CHILDREN' S ONCOLOGY GROUP Long-Term Follow-Up Guidelines for Survivors of Childhood, Adolescent, and Young Adult Cancers Version 6.0 (October 2023) "Introduction to Long-Term Follow-Up After Cancer Treatment" contributed to translate

in Japanese.

2. 加藤実穂, 松本公一, 瀧本哲也, 石井太祐, 井上真奈美. 院内がん登録 2018-2019 年小児 AYA 集計報告書. 2023 年 11 月公表.

[学会発表]

<国際学会>

1. Matsumoto K: Japanese trials for high-risk neuroblastoma. 15th Congress of Asian Society for Paediatric Oncology (SIOP Asia 2023), Yerevan, 2023.5.20 (oral)
2. Matsumoto K, Nozawa K, Shichino H, Yoneda A, Soejima T, Okita H, Takimoto T, Yokota I, Kamijo T, Nakagawara A, Tajiri T, for Neuroblastoma Committee of Japan Children's Cancer Group (JCCG) A postinduction Curie Score of more than 2 in MYCN-nonamplified tumor treated by JN-H-15 was not associated with poor prognosis. Advance of Neuroblastoma Research 2023, Amsterdam, 2023.5.14 (poster)
3. Matsumoto K, Fujisaki H, Yoneda A, Kato M, Takimoto T. Changes in structural quality indicators in designated affiliated hospitals of pediatric cancer in Japan. The 55th Congress of the "Society Internationale Oncologie Paediatrice" (SIOP), October 11-14, 2023, Ottawa (poster)
4. Tomizawa D, Miyamura T. JPLSG-MLL-17 update & preparation status of Interfant-21 participation. Interfant meeting at the 4th Annual Meeting of the European Society for Paediatric Oncology (SIOP-E 2023), Valencia, 2023.5.8 (oral)
5. Tomizawa D. New agents for treating children with acute myeloid leukemia. 15th Congress of Asian Society for Paediatric Oncology (SIOP Asia 2023), Yerevan, 2023.5.20 (oral)
6. Tomizawa D. MRD-guided therapy for acute lymphoblastic leukemia. The 13th Japanese Society of Hematology (JSH) International Symposium 2023, Tsukuba, 2023.7.21 (symposium)
7. Tomizawa D. Hematopoietic stem cell transplantation for pediatric AML. ICBMT 2023, The 7th International Congress of BMT 2023/The 28th Annual Congress of KSBMT, Busan, 2023.9.2 (symposium)
8. Kimura S, Polonen P, Montefiori L, Caldwell K, Iacobucci I, Chen C, Brown A, Han K, Liu Y-C, Chang Y, Cheng Z, Yinmei Z, Park CS, Mitchell S, Reyes N, Yeoh A, Attarbaschi A, Moore A, Manabe A, Buldini B, Chiew KH, Li CK, Pui C-H, Qu C, Tomizawa D, Paietta E, Locatelli F, Escherich G, Qingsong G, Muhle HE, Marquart HV, de Groot-Kruseman HA, Rowe JM, Sary J, Trka J, Choi JK, Meijerink JPP, Takita J, Pawinska-Wasikowska K, Schmiegelow K, Eguchi M, Schrapppe M, Zimmermann M, Takagi M, Maybury M, Svaton M, Reiterova M, Kicinski M, Kato M, Spinelli O, Mazilier P, Thomas PG, Masetti R, Kotecha RS, Pieters R, Elitzur S, Luger SM, Shen S, Jeha S, Kornblau SM, Skoczen S, Miyamura T, Vincent T, Imamura T, Conter V, Tang Y, Gu Z, Roberts KG, Teachey DT, Crews KR, Cheng C, Yang JJJ, Inaba H, Mullighan CG. STAG2/LMO2 Gamma-Delta T-ALL: Identification and Characterization of an Extremely High Risk Group of T-ALL in the Very Young. 65th Annual Meeting of the American Society of Hematology, San Diego, 2023.12.11 (oral).

9. Tsujimoto S-I, Kato S, Iwamoto S, Hiramatsu H, Okuno Y, Kamitori T, Ohki K, Deguchi T, Kiyokawa N, Kato M, Takita J, Adachi S, Tomizawa D, Shiba N. Integrated Analysis of KIT Exon 17 Mutations and Flow-MRD Refines Risk Stratification in Pediatric Acute Myeloid Leukemia with RUNX1::RUNX1T1. 65th Annual Meeting of the American Society of Hematology, San Diego, 2023.12.9 (poster).
10. Ikeda J, Kunimoto H, Saito Y, Tsujimoto S-I, Kurosawa T, Takeuchi M, Miura A, Murakami K, Kato I, Hishiki T, Hayakawa N, Matsuura T, Funakoshi-Tago M, Yokoyama A, Yoshida K, Tomizawa D, Miyano S, Tawa A, Adachi S, Ogawa S, Hayashi Y, Shiba N, Tamura T, Ito S, Nakajima H. Metabolic Reprogramming By PRDM16 Drives Cytarabine Resistance in Acute Myeloid Leukemia. 65th Annual Meeting of the American Society of Hematology, San Diego, 2023.12.10 (poster).
11. Ishida H, Kawahara Y, Tomizawa D, Okamoto Y, Cho Y, Koh K, Koga Y, Hama A*, Sato M, Terui K, Miyagawa N, Watanabe A, Takita J, Kato K, Matsumoto K, Hino M, Tabuchi K, Sakaguchi H. Higher CD34+ Cell Doses Correlate with Reduced Incidence of Relapse and Better Event-Free Survival after KIR-Ligand Mismatch Cord Blood Transplantation for Childhood Acute Myeloid Leukemia. 65th Annual Meeting of the American Society of Hematology, San Diego, 2023.12.10 (poster).
12. Ishikita E, Kawai T, Yamato G, Shiba N, Ohki K, Hara Y, Kaburagi T, Takizawa T, Kawasaki H, Ueno H, Tomizawa D, Taga T, Adachi S, Yuza Y, Takahashi H, Ogawa S, Hayashi Y. Integrated Analysis Focusing on Genome-Wide DNA Methylation in Pediatric Acute Promyelocytic Leukemia: The JCCG Study, JPLSG AML-P05. 65th Annual Meeting of the American Society of Hematology, San Diego, 2023.12.10 (poster).
13. Pagliara D, Strocchio L, Compagno F, Algeri M, Iguchi A, Giorgiani G, Del Bufalo F, Galaverna F, Merl P, Perotti C, Lazzaro S, Li Pira G, Bertaina V, Tomizawa D, Zecca M, Locatelli F. TCR α β + /CD19+ - Depleted HLA-Haploidentical Hematopoietic Stem Cell Transplantation in Pediatric Patient with Fanconi Anemia. 65th Annual Meeting of the American Society of Hematology, San Diego, 2023.12.10 (poster).
14. Terashima K, Sonehara K, Kimura Y, Nakano Y, Ozawa T, Takahashi M, Suzuki K, Fujii T, Matsusita Y, Tomiyama A, Kishikawa T, Yamamoto K, Naito T, Suzuki T, Yamaguchi S, Miwa T, Sasaki H, Kitagawa M, Ohe N, Fukai J, Ogiwara H, Kawamura A, Miyawaki S, Matsuda F, Kiyokawa N, Ichimura K, Nishikawa R, Okada Y: Genome-Wide Association Study of Intracranial Germ Cell Tumors. The 23rd ICBT, サウスキャロライナ, 2023.3.28, (oral)
15. Terashima K, Sonehara K, Kimura Y, Nakano Y, Ozawa T, Takahashi M, Suzuki K, Fujii T, Matsusita Y, Tomiyama A, Kishikawa T, Yamamoto K, Naito T, Suzuki T, Yamaguchi S, Miwa T, Sasaki H, Kitagawa M, Ohe N, Fukai J, Ogiwara H, Kawamura A, Miyawaki S, Matsuda F, Kiyokawa N, Ichimura K, Nishikawa R, Okada Y: Genome-Wide Association Study of Intracranial Germ Cell Tumors. Pediatric SNO Meeting, ワシントンDC, 2023.6.24, (oral)
16. Terashima K: Japanese Approach - Debate: Intracranial Germ Cell Tumors. The 55th Congress of SIOP, オタワ, 2023.10.13, (symposium)

17. Sakaguchi H, So T, Kosuga M, Gocho Y, Ikenobe N, Itakura Y, Minato S, Morita M, Fujimori K, Matsui T, Shimizu S, Yasue S, Toyohara M, Wada Y, Sasahara Y, Kato M, Deguchi T, Iguchi A, Tomizawa D, Okuyama T, Matsumoto K. Combined Allogeneic Bone Marrow Transplantation and Intracerebroventricular Enzyme Replacement Therapy for Patients with Neuronopathic Mucopolysaccharidosis type II. 49th Annual Meeting of the European Group for Blood and Marrow Transplantation, Paris, 2023. 4. 25 (oral).
18. Sakaguchi H, Gocho Y, Yamada Y, Shioda Y, Kiyotani C, Deguchi T, Terashima K, Iguchi A, Kato M, Tomizawa D, Matsumoto K. Management of sinusoidal-occlusion-syndrome in pediatric hematopoietic stem cell transplantation after introducing diagnosis by EBMT criteria and treatment with defibrotide: a single center experience. 49th Annual Meeting of the European Group for Blood and Marrow Transplantation, Paris, 2023. 4. 25 (poster).
19. Kato M, Okamoto Y, Imamura T, Kada A, Saito AM, Iijima-Yamashita Y, Deguchi T, Oki K, Fukushima T, Anami K, Sanada M, Taki T, Hashii Y, Kiyokawa N, Kosaka Y, Yoshida N, Yuza Y, Yanagimachi M, Watanabe K, Sato A, Imai C, Taga T, Adachi S, Horibe K, Manabe A, and Koh K. A Nationwide Clinical Trial ALL-B12: An Optimized Therapy for Pediatric B-Precursor Acute Lymphoblastic Leukemia with Excellent Overall Survival and Minimal Non-Relapse Mortality: A Report from the Japan Children's Cancer Group. 65th Annual Meeting of the American Society of Hematology, San Diego, 2023. 12. 10 (oral).
20. Ono R, Sakamoto K, Doi T, Yanagisawa R, Morimoto A, Kanegane H, Nakazawa Y, Shioda Y. Clinical Utility of Dexamethasone Palmitate In Children With Hemophagocytic Lymphohistiocytosis Following Allogeneic Hematopoietic Cell Transplantation. 39th Annual Meeting of the Histiocyte Society. Oct 22-24, 2023. Athens.
21. Sakamoto K, Kudo K, Nakazawa A, Yoshioka T, Morimoto A, Shioda Y. Targetable Juvenile Xanthogranuloma Detected By Immunohistochemistry-Based Screening System. 39th Annual Meeting of the Histiocyte Society. Oct 22-24, 2023. Athens.
22. Yasue S, Sakamoto K, Gocho Y, Shioda Y, Matsumoto K. Long-Term Administration of BRAF Inhibitor For Refractory Infant Langerhans Cell Histiocytosis. 39th Annual Meeting of the Histiocyte Society. Oct 22-24, 2023. Athens.
23. Kato M, Takimoto T. Annual meeting SIOP-RTSG (International Society of Paediatric Oncology, Renal Tumour Study Group). Current Situation of Clinical Research on Paediatric Solid Tumours in Japan ~Data Infrastructure~. 2023年6月23日於ポーランド.
24. Tao K, Yoshioka T, Kato Miho, Komatsu K, Nakano Y, Otani Y, Sakamoto K, Sekiguchi M, Sugiyama M, Tanimura K, Tsujimoto SI, Yatabe Y, Kubo T, Kohsaka S, Yoneda A, Mochizuki S, Shichino H, Yamanaka J, Tajiri T, Suzuki T, Takimoto T, Ichimura K, Ogawa C, Matsumoto K, Ichikawa H, and Kato Motohiro; THE NATIONWIDE PEDIATRIC CANCER GENOME PROFILING PROJECT: A REPORT FROM THE JCCG-TOP2 STUDY. SIOP 2023. 2023年10月於オタワ.

<国内学会>

1. 松本公一. 小児がん医療の現状と展望 第20回日本臨床腫瘍学会学術集会 PAP基礎講座 福岡、2023. 3. 16. (口演)
2. 松本公一. 第3期がん対策基本計画の総括 小児領域での観点から 第5回 AYAがんの医療と支援のあり方研究会学術集会 東京、2023. 5. 14. (シンポジウム)
3. 松本公一、藤崎弘之、米田光宏、加藤実穂、瀧本哲也. 小児がん連携病院類型1層別化の考察 第126回日本小児科学会学術集会、東京、2023. 4. 15 (ポスター)
4. 松本公一: 日本における小児がん医療の集約化を考える 第65回日本小児血液・がん学会学術集会、札幌、2023. 9. 29. (シンポジウム)
5. 富澤大輔. 小児科からみたAMLの移植適応. 第45回日本造血・免疫細胞療法学会総会、名古屋、2023. 2. 11 (シンポジウム)
6. 板倉陽介、坂口大俊、井口晶裕、松井俊大、清水聡一郎、池邊記人、湊苑子、牛腸義宏、宮坂実木子、宮寄治、堤義之、渡辺栄一郎、狩野元宏、出口隆生、富澤大輔、松本公一. EBMT基準およびHokUS-10による診断とdefibrotideによる治療が奏功した最重症類洞閉塞症候群の小児2例. 第45回日本造血・免疫細胞療法学会総会、名古屋、2023. 2. 11 (口演)
7. 松井俊大、山田全毅、福田晃也、牛腸義宏、清水聡一郎、出口隆生、井口晶裕、富澤大輔、今留謙一、阪本靖介、笠原群生、松本公一、坂口大俊. 生体肝移植後EBウイルス関連T細胞性リンパ増殖性疾患に対する同一血縁ドナーからのハプロ一致骨髄移植. 第45回日本造血・免疫細胞療法学会総会、名古屋、2023. 2. 11 (口演)
8. 池邊記士、明神翔太、松井俊大、牛腸義宏、山田全毅、大宜見力、小池研太郎、阿部裕一、小関元太、山本祐輝、藤野明浩、松本正太郎、中川聡、出口隆生、井口晶裕、富澤大輔、松本公一、坂口大俊. 最重症再生不良性貧血に対する免疫抑制療法後に播種性真菌感染を呈し緊急ハプロ造血細胞移植を施行した一例. 第45回日本造血・免疫細胞療法学会総会、名古屋、2023. 2. 12 (口演)
9. 安江志保、清谷知賀子、山田悠司、牛腸義宏、坂口大俊、井口晶裕、塩田曜子、寺島慶太、富澤大輔、葛西健人、庄司健介、渡辺栄一郎、米田光宏、松本公一. 化学療法中にCOVID-19関連多系統炎症性症候群を発症した腎芽腫の一例. 第126回日本小児科学会学術集会、東京、2023. 4. 15 (ポスター)
10. 鈴木彩、富澤大輔、松本公一. 小児がん患者および家族のピアサポート・交流を目的としたイベント開催の意義. 第8回日本がんサポーターズケア学会学術集会、奈良、2023. 6. 23 (eポスター)
11. Hasegawa D, Matsubayashi J, Tanaka S, Nakashima K, Deguchi T, Taki T, Tomizawa D, Adachi S, Ito E, Taga T. Prognostic factors for myeloid leukemia in Down syndrome: Results from the Japan Children's Cancer Group studies AML-D05 and AML-D11. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会、札幌、2023. 9. 29 (口演)
12. Ishikita E, Kawai T, Yamato G, Shiba N, Ohki K, Takahashi H, Kaburagi T, Tomizawa D, Ogawa S, Hayashi Y. The genome-wide DNA methylation of pediatric acute promyelocytic leukemia: The JCCG study, JPLSG AML-P05. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会、札幌、2023. 9. 29 (口演)
13. Aoki T, Shiba N, Tsujimoto S, Hayashi Y, Tawa A, Taga T, Adachi S, Tomizawa D. Single nucleotide polymorphisms of transporter genes can predict the outcome of pediatric patients with acute myeloid leukemia in Japan. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会、札幌、2023. 9. 29 (口演)

14. Yoshitomi M, Ikeda J, Tsujimoto S, Ito S, Hasegawa D, Iwamoto S, Hayashi Y, Adachi S, Tomizawa D, Shiba N. A DOCK1 inhibitor can increase the sensitivity of cytarabine on DOCK1 overexpressed acute myeloid leukemia cell line. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会, 札幌, 2023.9.29 (口演)
15. Mikami T, Kato I, Nishimura A, Kamitori T, Miyamura T, Tomizawa D, Imamura T, Ogawa S, Takagi M, Takita J. Multi-omics analysis dissects M-MDSC like immunomodulatory characteristics of lineage switched AML with KMT2A-AFF1. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会, 札幌, 2023.9.29 (口演)
16. Utano T, Sakaguchi H, Gocho Y, Osumi T, Iguchi A, Tomizawa D, Matsumoto Kimikazu, Matsumoto Kana, Kato M, Yamatani A. Pharmacokinetics of once-daily intravenous busulfan in pediatric hematopoietic stem cell transplantation. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会, 札幌, 2023.9.29 (口演)
17. Fujimori K, Gocho Y, Uchiyama T, Sakaguchi H, Deguchi T, Tomizawa D, Imadome K, Matsumoto K, Onodera M, Iguchi A. HLA-haploidentical $\alpha\beta$ T/B-cell-depleted stem cell transplantation for Fanconi anemia. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会, 札幌, 2023.9.29 (口演)
18. Fukushima H, Terada K, Mori N, Kato M, Kato Y, Matsui T, Tomizawa D, Koh K, Kiyotani C. Using a web-based questionnaire to evaluate long-term comorbidities in childhood cancer survivors: Tokyo Children's Cancer Study Group. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会, 札幌, 2023.9.30 (口演)
19. Matsui T, Fukushima H, Terada K, Kato M, Kato Y, Mori N, Tomizawa D, Koh K, Kiyotani C. Questionnaire survey on COVID-19 incidence and vaccination among childhood cancer survivors: TCCSG cohort Study. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会, 札幌, 2023.10.1 (口演)
20. Kiyotani C, Yamada Y, Terashima K, Shioda Y, Tomizawa D, Matsumoto K. Comparison of Myelosuppression Levels in Pediatric VDC Therapy with and without Dexrazoxane. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会, 札幌, 2023.9.30 (ポスター)
21. Matsui T, Fukushima H, Terada K, Kato M, Kato Y, Mori N, Tomizawa D, Koh K, Kiyotani C. Questionnaire survey on vaccination after cancer treatment among childhood cancer survivors: TCCSG cohort study. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会, 札幌, 2023.9.30 (ポスター)
22. 後藤清香, 柴田映子, 歌野智之, 牛腸義宏, 井口晶裕, 坂口大俊, 富澤大輔, 松本公一. 小児のブリナツモマブ投与中のQOL 向上に向けた看護支援の検討. 第21回日本小児がん看護学会学術集会, 札幌, 2023.9.30 (口演)
23. Ishikita E, Kawai T, Yamato G, Shiba N, Ohki K, Takahashi H, Kaburagi T, Yuza Y, Ueno H, Tomizawa D, Taga T, Adachi S, Ogawa S, Hayashi Y. Comparison of DNA methylation and clinical significance in children and adult cases of acute promyelocytic leukemia: The JCCG study, JPLSG AML-P05. 第86回日本血液学会学術集会, 東京, 2023.10.13 (口演)
24. Tsujimoto S, Kato S, Iwamoto S, Hiramatsu H, Okuno Y, Kamitori T, Ohki K, Deguchi T, Kiyokawa N, Kato M, Takita J, Adachi S, Tomizawa D, Shiba N. KIT mutation and FCM-MRD

- positivity are highly useful to predict the prognosis in pediatric acute myeloid leukemia with RUNX1::RUNX1T1. 第86回日本血液学会学術集会, 東京, 2023. 10. 13 (口演)
25. Takasugi N, Shirai R, Osumi T, Sakamoto K, Kudo K, Tanaka M, Tomizawa D, Ushiku T, Yoshioka T, Shioda Y, Kato M. Germline mosaicism of the BRAF mutation as the origin of Langerhans cell histiocytosis. 第86回日本血液学会学術集会, 東京, 2023. 10. 13 (口演)
 26. Sato A, Yoshida M, Isobe K, Tanaka K, Mikami T, Osumi T, Ohki K, Tomizawa D, Koh K, Takita J, Ogawa S, Kiyokawa N, Nakabayashi K, Hata K, Kato I, Niwa A, Kato M. Genomic pathology of extramedullary relapsed acute lymphocytic leukemia. 第86回日本血液学会学術集会, 東京, 2023. 10. 14 (口演、プレナリー)
 27. Komori T, Kawai T, Tsujimoto S, Kamitori T, Ikeda J, Yoshitomi M, Takeuchi M, Okuno Y, Kato M, Tomizawa D, Taga T, Takita J, Adachi S, Hayashi Y, Shiba N. Identification of Cellular Hierarchy in Pediatric Acute Myeloid Leukemia using Comprehensive Gene Expression Data. 第86回日本血液学会学術集会, 東京, 2023. 10. 14 (口演)
 28. Ito N, Matsuo H, Yoshida K, Iyoda S, Nannya Y, Yamato G, Shiba N, Hayashi Y, Shiraishi Y, Miyano S, Kiyokawa N, Tomizawa D, Taga T, Tawa A, Takita J, Nishikori M, Ogawa S, Adachi S. Difference of mutational landscape and prognosis between infant and childhood KMT2A-rearranged AML. 第86回日本血液学会学術集会, 東京, 2023. 10. 15 (口演)
 29. Iyoda S, Matsuo H, Yoshida K, Ito N, Nannya Y, Yamato G, Shiba N, Hayashi Y, Shiraishi Y, Miyano S, Kiyokawa N, Tomizawa D, Taga T, Tawa A, Takita J, Nishikori M, Ogawa S, Adachi S. KRAS codon G12 mutation as an adverse prognostic factor in pediatric KMT2A-rearranged AML. 第86回日本血液学会学術集会, 東京, 2023. 10. 15 (口演)
 30. Kurosawa T, Ikeda J, Kawai T, Yoshida K, Yoshitomi M, Tsujimoto S, Kamitori T, Takeuchi M, Okuno Y, Kato M, Tomizawa D, Taga T, Miyano S, Tawa A, Takita J, Adachi S, Ogawa S, Hayashi Y, Shiba N. Elucidation of refractory mechanisms in acute myeloid leukemia with high PRDM16 expression. 第86回日本血液学会学術集会, 東京, 2023. 10. 15 (口演)
 31. Goto H, Suenobu S, Koga Y, Yamamoto S, Hasegawa D, Usami I, Yamamori A, Moritake H, Nobusawa S, Okuno K, Kawaguchi K, Kanno M, Ishida H, Cho Y, Nishida H, Tomizawa D, Ihara K, Ohga S. Low H3K27 trimethylation ascertains the high risk of pediatric acute myeloid leukemia with overexpression of HOXA cluster genes. 第86回日本血液学会学術集会, 東京, 2023. 10. 15 (口演)
 32. Fujimori K, Sakaguchi H, Gocho Y, Utano T, Yamada Y, Uchiyama T, Shioda Y, Kiyotani C, Terashima K, Iguchi A, Deguchi T, Tomizawa D, Matsumoto K. A retrospective study of Blinatumomab for pediatric B-cell acute lymphoblastic leukemia. 第86回日本血液学会学術集会, 東京, 2023. 10. 15 (口演)
 33. 富澤大輔. 小児・思春期世代の非ホジキンリンパ腫に対する多施設共同治療開発. 第61回日本癌治療学会学術集会/The 3rd International Congress of the Asian Oncology Society, 横浜, 2023. 10. 21
 34. Terashima K: Basic and Translational Research in Germ Cell Tumors. 第60回日本小児外科学会学術集会、大阪市, 2023. 6. 1 (シンポジウム、英語)
 35. Terashima K, Sonehara K, Kimura Y, Nakano Y, Ozawa T, Takahashi M, Suzuki K, Fujii T,

- Matsusita Y, Tomiyama A, Kishikawa T, Yamamoto K, Naito T, Suzuki T, Yamaguchi S, Miwa T, Sasaki H, Kitagawa M, Ohe N, Fukai J, Ogiwara H, Kawamura A, Miyawaki S, Matsuda F, Kiyokawa N, Ichimura K, Nishikawa R, Okada Y: Genome-Wide Association Study of Intracranial Germ Cell Tumors. 第82回日本がん学会学術総会, 横浜市, 2023.9.21 (シンポジウム、英語)
36. Terashima K, Koga Y, Mukaiyama A, Kurihara R, Okada K: Japanese subgroup analysis of a phase II trial of dabrafenib plus trametinib (D + T) in BRAF V600-mutant pediatric low-grade glioma (pLGG) and relapsed/refractory (r/r) BRAF V600-mutant pediatric high-grade glioma (pHGG). 第41回日本脳腫瘍学会, 新潟市, 2023.12.4 (口演)
 37. 坂口大俊: CD19-CART 治療後の同種造血細胞移植の適応を考える. 第45回日本造血・免疫細胞療法学会総会, 名古屋, 2023.2.12. ワークショップ口演
 38. 坂口大俊: 小児におけるステロイド抵抗性急性GVHDの治療経験と今後の展望. 第45回日本造血・免疫細胞療法学会総会, 名古屋, 2023.2.11. 口演
 39. Ishida H, Imamura T, Suenobu S, Hashii Y, Deguchi T, Iguchi A, Kato K, Saito A, Okada K, Horibe K. JACLS ALL-02 プロトコールにおけるアスパラギナーゼ中止例の予後解析. Impact of asparaginase discontinuation on outcomes of children with acute lymphoblastic leukemia receiving the JACLS ALL-02 protocol. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会(2023年9月、札幌)口頭
 40. Kodama Y, Nishi M, Sato A, Imamura C, Deguchi T, Hirakawa A, Kiyokawa N, Ohki K, Shima H, Kato K, Kato M, Kawasaki H, Sakaguchi H, Hiramatsu H, Goto H, Yamamoto S, Ito M, Tanizawa A, Yuza Y, Saito A, Ogawa C, Taga T, Adachi S, Shimada H. Ponatinib in children with relapsed or refractory Philadelphia chromosome-positive leukemia. 第85回日本血液学会学術集会(東京), 2023年10月15日, 国内, 口演
 41. Yokonichi M, Shimizu D, Uchimura S, Makino R, Hira K, Deguchi T, Sakaguchi K. Steroid-free chemotherapy and CAR-T therapy for a relapsed ALL patient with osteonecrosis. 第85回日本血液学会学術集会(東京), 2023年10月15日, 国内, ポスター
 42. 清谷知賀子, 福島紘子, 寺田和樹, 西村聡, 大熊啓輔, 前田美穂, 富澤大輔, 康勝好. 小児がん長期フォローアップ研究システムの構築と運用: TCCSG Cohort study. 第61回日本癌治療学会学術集会, 横浜, 2023.10.21 (口演)
 43. Ishiguro A, Cuker A, Alzahrani H, Astermark J, Frenzel L, Katsarou O, Kavakli K, Klamroth R, Martino D, Shapiro AD, Wang JD, Fuiman J, McKay J, Sun P, Rupon L, on behalf of the BENEGENE-2 Investigators: Efficacy and Safety of Fidanacogene Elaparvovec in Adults with Moderately Severe/Severe Hemophilia B. The 85th Annual Meeting of the Japanese Society of Hematology, Tokyo, 2023.10.15, 口演.
 44. Ishiguro A, Uchiyama T, Sakamoto A, Kunishima S: High-throughput sequencing-based diagnosis of congenital thrombocytopenia/platelet disorders in a registry study. Symposium 6, The 85th Annual Meeting of the Japanese Society of Hematology, Tokyo, 2023.10.14, 口演.
 45. Shima M, Takedani H, Kitsukawa K, Taki M, Ishiguro A, Nagae C, Nagao A, Nosaka D, Kyogoku Y, Oki H, Iwasaki K, Nogami K: Three-year interim analysis results of the AOZORA Study to evaluate the long-term safety and joint health in children with hemophilia A without factor VIII inhibitors receiving emicizumab. 65th ASH Annual Meeting and Exposition, San Diego,

- CA, 2023. 12. 10.
46. Egami N, Ishimura M, Ochiai M, Ichiyama M, Inoue H, Hotta T, Uchiyama T, Kang D, Ishiguro A, Ohga S: The clinical and genetic characteristics of early-onset thrombophilia in Japan. 65th ASH Annual Meeting and Exposition, San Diego, CA, 2023. 12. 10.
 47. Sakamoto A, Uchiyama T, Kunishima S, Kaname T, Iguchi A, Ishiguro A: Delayed diagnosis and inappropriate treatments for inherited thrombocytopenia in a Japanese registry. The 85th Annual Meeting of the Japanese Society of Hematology, Tokyo, 2023. 10. 15. Poster
 48. Sakamoto A, Uchiyama T, Kunishima S, Kaname T, Iguchi A, Ishiguro A: Diagnosis and treatment of MYH9 disorder with congenital thrombocytopenia based on a Japanese registry study. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会, 札幌, 2023. 9. 30. ポスター
 49. Ikawa Y, Nakamura T, Fujino N, Uchiyama T, Ishiguro A, Wada T: A familial case of double MYH7/MYH9 gene mutations resulting in cardiomyopathy and macrothrombocytopenia. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会, 札幌, 2023. 9. 30.
 50. Nagoshi R, Sakamoto A, Uchiyama T, Kunishima S, Kaname T, Iguchi A, Ishiguro A: Glanzmann thrombasthenia and congenital thrombocytopenia: *ITGA2B* and *ITGB3* variants. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会, 札幌, 2023. 9. 29. 口演
 51. Shima M, Takedani H, Kitsukawa K, Taki M, Ishiguro A, Nagao A, Nosaka D, Kyogoku Y, Iwasaki K, Nogami K: AOZORA Study: Interim Analysis of 3-year Joint Health in Participants from HOHOEMI Study. 第45回日本血栓止血学会, 北九州, 2023. 6. 15. 口演
 52. 石黒 精: 新型コロナウイルスおよびインフルエンザワクチン同時接種後に血球貪食性リンパ組織球症を発症した1例 (指定発言) 第689回日本小児科学会東京都地方会懇話会, 東京, 2023. 3. 11. 口演
 53. 矢賀勇志, 井口晶裕, 小崎里華, 中山ロバート, 石黒 精: 外骨腫を生じたWAGR症候群患者にマイクロアレイ検査を施行し, Potocki-Shaffer 症候群の合併と診断した一例. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 14. ポスター
 54. 竹林 晃, 浜田亮, 赤根祐介, 石黒 精, 山本雅樹: 先天性血小板減少症・異常症レジストリ研究で診断し得た先天性血小板減少症の2家系. 第65回日本血液学会秋季北海道地方会, 札幌, 2023. 9. 16. 口演
 55. 坂本 淳, 内山 徹, 國島伸治, 二木良平, 要 匡, 井口晶裕, 石黒 精: 22q11.2 欠失症候群の血小板機能と出血症状についての検討. 第45回日本血栓止血学会, 北九州, 2023. 6. 16. ポスター
 56. 藤野佐保, 金子佳代子, 三井真理, 石黒 精, 左合治彦, 村島温子: 第IX因子補充を要した血友病B保因者の妊娠管理. 第33回日本産婦人科・新生児血液学会学術集会, 埼玉, 2023. 6. 9. 口演
 57. 野口史織, 吉村 稔, 尾針崇文, 澤部祥子, 石黒 精: 巨大血小板性血小板減少症を呈した Takenouchi-Kosaki 症候群の2症例. 第72回日本医学検査学会, 高崎, 2023. 5. 20. 口演
 58. 中澤温子, 義岡孝子, 坂本謙一, 工藤耕, 森本哲, 塩田曜子. 若年性黄色肉芽腫における分子標的
同定のための免疫組織化学染色の有用性 Usefulness of immunohistochemistry for identification
of targetable tyrosine kinase gene mutation in children with juvenile xanthogranuloma. 日
本病理学会. 秋期特別総会 2023 年 11 月 9-10 日, 久留米. 日本病理学会会誌 112 巻 2 号
Page140 (2023. 10)
 59. 福島俊, 岩田慎太郎, 大木麻実, 米本司, 根津悠, 浅野尚文, 中山ロバート, 小林 寛, 清谷知賀子,

- 川井章. 術後機能やQOLが小児・AYA世代悪性骨腫瘍サバイバーのスポーツ活動に及ぼす影響. 日本整形外科学会 2023. 5. 11 (口演)
60. 宇佐美憲一, 水野貴基, 白井了太, 義岡孝子, 寺島慶太, 荻原英樹, 清谷知賀子, 加藤元博. 小児脳腫瘍におけるLiquid biopsyの実効性. 第51回日本小児神経外科学会 (口演)
 61. 豊原美環子, 清谷知賀子, 森田麻莉, 安江志保, 山田悠司, 出口隆生, 宮寄治, 義岡孝子, 米田光宏, 松本公一. 難治性オプソクロノス・ミオクロノス症候群 (OMS) に対し Rituximab 治療を行った3例. 第65回日本小児血液・がん学会 学術集会. 札幌 (口演)
 62. 金沢英恵, 工藤みふね, 小美濃千鶴, 世川晶子, 高橋奈津子, 清谷知賀子, 五十川伸崇, 馬場祥行. 「ここまでできる! 小児がん治療における機能温存の試み. 小児がん治療における口腔合併症」. 第61回日本癌治療学会学術集会, 横浜, 2023. 10. 21 (ワークショップ口演)
 63. 加藤実穂, 瀧本哲也; 本邦における小児がん長期フォローアップ～情報インフラストラクチャー～. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会. シンポジスト, 2023年9月於札幌.
 64. 加藤実穂, 瀧本哲也; 小児がん臨床研究支援における情報セキュリティ体制の構築. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会. 一般講演, 2023年9月於札幌.
 65. 田尾佳代子, 加藤元博, 義岡孝子, 加藤実穂, 久保崇, 高阪真路, 谷田部恭, 瀧本哲也, 市村幸一, 望月慎史, 七野浩之, 小川千登世, 鈴木達也, 松本公一, 市川仁; The Nationwide Pediatric Cancer Genome Profiling Project: JCCG-TOP2. 第6回日本サルコーマ治療研究学会学術集会, 一般口演. 於神戸, 2023年2月24日～2月25日.
 66. Ohira M, Haruta M, Takimoto T, Nakazawa A, Nakamura Y, Takatori A, Iehara T, Tajiri T, Nakagawara A, and Kamiyo T; JCCG-JNBSG 神経芽腫過去登録例の初回治療後または再発/増悪時検体と初発時検体のゲノムコピー数解析. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会. 2023年9月於札幌.
 67. 田尾佳代子, 義岡孝子, 加藤実穂, 瀧本哲也, 望月慎史, 小川千登世, 鈴木達也, 松本公一, 市川仁, 加藤元博; The Nationwide Pediatric Cancer Genome Profiling Project: A Report from the JCCG-TOP2 Study. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会. 2023年9月於札幌.
 68. 田尾佳代子, 義岡孝子, 加藤実穂, 久保崇, 高阪真路, 谷田部恭, 瀧本哲也, 市村幸一, 望月慎史, 七野浩之, 小川千登世, 鈴木達也, 松本公一, 市川仁, 加藤元博; The Nationwide Pediatric Cancer Genome Profiling Project: A Report from the JCCG-TOP2 Study. 第82回日本がん学会学術総会. 2023年9月於横浜.
 69. 良本翔子, 高見浩数, 木村由依, 日比谷優子, 中野嘉子, 松下裕子, 高柳俊作, 田中將太, 齊藤延人, 平戸純子, 義岡孝子, 加藤実穂, 瀧本哲也, 市村幸一, 日本小児がん研究グループ脳腫瘍委員会; 日本小児がん研究グループ (JCCG) における中枢神経系胚細胞腫178例の臨床・病理解析. 日本脳神経外科学会第82回学術総会. 2023年10月於横浜.

[講演]

1. 松本公一: 小児がん専門医が考えるがん・生殖医療. 都立小児・東京大学共催セミナー 2023. 1. 28
2. 松本公一: 小児がん治療の進化と長期フォローアップの必要性. TeamNET「第10回チャリティーコンサート&セミナー」東京 2023. 3. 10
3. 松本公一: 小児がん治療の実際と今後、そして病弱教育に望むこと. そよかぜ分教室 2023. 7. 24
4. 松本公一: 小児がん医療の現在. 藤沢翔陵高等学校 2023. 11. 22

5. 松本公一：第四期がん対策推進基本計画における小児・AYA がん対策について～小児がん医療提供体制との連携を中心に～ 第16回都道府県がん診療連携拠点病院連絡協議会 東京、2023. 7. 7
6. 松本公一：日本における高リスク神経芽腫の治療戦略. 小児血液・がん WEB セミナー（中外製薬）2023. 6. 6
7. 松本公一：小児がんにおけるトータルケアのありかた 令和4年度国立特別支援教育総合研究所第三期特別支援教育専門研修 2023. 5. 24
8. Tomizawa D: Pediatric Oncology in Japan. The Princess Máxima Center for Pediatric Oncology, Utrecht, 2023. 3. 30
9. 富澤大輔：AYA 世代患者の造血細胞移植～ベネクレクタの使用経験を交えて～. 第8回造血細胞移植 Total Care Forum（名古屋 BMTG、アッヴィ合同会社共催），名古屋，2023. 5. 19
10. Tomizawa D: Standard of care for relapsed/refractory B-ALL in children, adolescents, and young adults 2023. Café Seminar 1（sponsored by Amgen Inc.），The 13th Japanese Society of Hematology（JSH）International Symposium 2023, Tsukuba, 2023. 7. 21
11. 富澤大輔：再発・難治急性リンパ性白血病の治療戦略. Pediatric ALL WEB Conference in North Japan（アムジェン株式会社/アステラス株式会社主催），東京（オンライン），2023. 7. 28
12. 富澤大輔：わが国における小児急性骨髄性白血病の治療開発の歩みとこれから. 第17回京都地区小児血液腫瘍研究会（ミヤリサン製薬株式会社共催），京都，2023. 8. 6
13. 富澤大輔：知っていますか？小児がんのドラッグラグ問題. ケアネットまつり，東京（オンライン），2023. 9. 27
14. 富澤大輔：小児がんにおけるドラッグラグについて. 小児がん患者のご家族のためのオンラインサロン，東京（オンライン），2023. 10. 28
15. 富澤大輔：小児がん分野におけるドラッグラグについて. 第19回小児がん拠点病院連絡協議会相談支援部会，東京（オンライン），2023. 11. 30
16. Terashima K: Genome-Wide Association Study of Intracranial Germ Cell Tumors. PNOC GCT WG Meeting、アメリカ（オンライン）2023. 3. 24.
17. 寺島慶太：小児脳腫瘍のゲノム医療 2023. 小児がん拠点病院機能強化事業東海北陸ブロック小児脳腫瘍セミナー，静岡市（オンライン），2023. 1. 16
18. 寺島慶太：神経線維腫症1型に対する分子標的治療. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会，札幌市，2023. 9. 30
19. 寺島慶太：神経線維腫症1型における叢状神経線維腫の病態と治療. 静岡 NF1 セミナー、静岡市、2023. 11. 13
20. 寺島慶太：NF1 における叢状神経線維腫に対する分子標的治療と臨床経験. NF1 National Web Seminar、東京（オンライン）、2023. 12. 11
21. 寺島慶太：ゲノム医療の時代における小児脳腫瘍診療 Pediatric neuro-oncology in the era of genomic medicine. 第41回日本脳腫瘍学会，新潟市，2023. 12. 4
22. 坂口大俊：Pediatric×Adult SOS web seminar ～それぞれの目線から SOS 治療を考える～. Pediatric×Adult SOS web seminar，東京（オンライン），2023. 8. 3.
23. 坂口大俊：CAYA 世代の ALL 治療における抗体医薬の位置づけ. JACLS/CCLSG 夏季セミナー，松江，2023. 7. 16.

24. 坂口大俊：小児の造血細胞移植における SOS のマネージメント. 埼玉県立小児医療センター小児がん研修会, さいたま, 2023. 5. 25.
25. 坂口大俊：EBMT 基準に基づいた SOS の診断と治療マネージメントの実際. 神奈川小児 SOS 研究会, 東京 (オンライン), 2023. 2. 14.
26. 出口隆生：小児急性リンパ性白血病の診断と治療反応性評価. 神奈川小児血液腫瘍研究会, 横浜 (オンライン), 2023. 8. 19
27. 石黒 精：血友病の概要と緊急時取るべき対応. 血友病 X 救急 CROSS セミナー in 区西南部医療圏, 東京(web 講演), 2023. 1. 26.
28. 塩田曜子. LCH の臨床経過～小児 LCH を疑うとき・大人になったとき～. 静岡県立こども病院 院内学術講演会 ハイブリッド 2023. 1. 30
29. 塩田曜子. 小児科教育講演：Langerhans 細胞組織球症の特徴と課題「CNS リスク部位」とは 第 51 回日本小児神経外科学会 2023. 6. 10 宇都宮
30. 塩田曜子. 皮膚科外来でみつかると小児がん ～ 特徴的な所見や症状を知る ～. 第 59 回皮膚科学会 セミナー 小児皮膚科学会 2023. 9. 9 東京
31. 清谷知賀子「小児がん経験をもつ C/AYA 世代の移行支援の取り組み」 Cancer Supportive Care Web Seminar ～AYA 世代がん患者を支えたい～ NOVARTIS 2023. 3. 6(WEB)
32. 清谷知賀子「小児がん経験者の移行支援」東京都小児・AYA 世代がん診療協議会小児がん連携部会 小児・AYA 世代がん長期フォローアップ研修会 2023. 3. 5(WEB)
33. 清谷知賀子「小児脳腫瘍の晩期合併症と長期フォローアップを考える」第 1 回小児脳腫瘍カンファレンス. 2023. 3. 11 (WEB) 小児脳腫瘍カンファレンス (jspno.site) 第 1 回小児脳腫瘍カンファレンス.pdf (jspno.site)
34. 清谷知賀子「治療からはじまる長期フォローアップ. 小児から AYA, そして成人領域へ」血液情報ひろば つばさ つばさフォーラム 2023. 7. 22 (オンサイト・WEB 配信)
35. 清谷知賀子「小児脳腫瘍の長期フォローアップと移行期の対応-小児腫瘍医の立場から-」小児脳腫瘍の会、第 15 回お泊り親睦会 2023. 9. 23 (オンサイト)
36. 清谷知賀子「小児・AYA 世代のがん治療後の慢性健康障害と長期フォローアップの重要性」臨床腫瘍薬学会 臨床腫瘍薬学会エキスパートセミナー2023 (オンデマンド) エキスパートセミナー2023 | 日本臨床腫瘍薬学会 (jaspo-oncology.org)
37. 山田悠司：神経芽腫に対する抗 GD2 抗体治療. 小児がん交流フェスタ, 東京, 2023. 2. 26
38. 加藤実穂, 瀧本哲也. 第 13 回信濃町小児がんクラスター症例検討会「小児がん長期フォローアップセンター構想」2023 年 3 月 13 日オンライン開催.
39. 加藤実穂, 瀧本哲也. 第 14 回北海道大学病院小児がん拠点病院研修会. 小児血液・がんセミナー in 北海道 2022「小児がん長期フォローアップセンター構想」2023 年 2 月 4 日於札幌

[広報活動]

1. 石黒 精：血液の病気は子どもにもよく起こります. 医学会総会オープンステージ, 東京, 2023. 4. 17
2. 塩田曜子. JCCG Press vol.27 シリーズ臨床試験：ランゲルハンス細胞組織球症 NPO 法人 日本小児がん研究グループ JCCG 第 27 号発行 2023. 8. 10

外科

[原著論文：査読付] (Reviewed Paper)

1. Yokoyama S, Kurashima Y, Ieiri S, Yamataka A, Okuyama H, Uchida H, Ishimaru T, Hirano S: Comprehension of fundamental knowledge about pediatric endoscopic surgery: a cross-sectional study in Japan. *Surg Endosc* 2023;8:6408-6416
2. Ishimaru T, Shinjo D, Fujiogi M, Michihata N, Morita K, Hayashi K, Tachimori H, Kawashima H, Fujishiro J, Yasunaga H: Risk factors for postoperative anastomotic leakage after repair of esophageal atresia: a retrospective nationwide database study. *Surg Today* 2023;11:1269-1274
3. Hosokawa T, Urushibara A, Tanami Y, Sato Y, Ishimaru T, Ohashi K, Kawashima H, Oguma E: Prediction of testicular atrophy based on sonographic findings immediately after successful manual detorsion. *Australas J Ultrasound Med* 2022;1:26-33
4. Hosokawa T, Tanami Y, Sato Y, Deie K, Ishimaru T, Hara T, Nambu R, Deguchi K, Takei H, Iwama I, Kawashima H, Oguma E: Incidence and diagnostic performance of ultrasound for perianal abscess or fistula-in-ano in pediatric patients with perianal inflammation. *J Clin Ultrasound* 2023;5:819-826
5. Nakata K, Matsuda T, Hori M, Sugiyama H, Tabuchi K, Miyashiro I, Matsumoto K, Yoneda A, Takita J, Shimizu C, Katanoda K: Cancer incidence and type of treatment hospital among children, adolescents, and young adults in Japan, 2016-2018: *Cancer Sci* 2023;9:3770-3782
6. Kobayashi T, Fujino A, Furugane R, Hashizume N, Mori T, Kano M, Watanabe E, Takahashi M, Yoneda A, Kanamori Y: Seasonal incidence of cellulitis in cystic lymphatic malformation and Klippel-Trenaunay syndrome. *Global Pediatrics* 2023;5:
<https://doi.org/10.1016/j.gpeds.2023.100071>
7. Honda M, Isono K, Hirukawa K, Tomita M, Hirao H, Hirohara K, Sakurai Y, Irie T, Mori T, Shimata K, Shimojima N, Sugawara Y, Hibi T: Reappraisal of anatomical liver resection for hepatoblastoma in children: *Surg Open Sci* 2023;16:215-220
8. Harada A, Tomita H, Tsukizaki A, Mizuno Y, Ishihama H, Shimotakahara A, Matsuoka K, Shimojima N, Hirobe S: Treatment Strategy for Currarino Syndrome Complicated With Anorectal Stenosis. *Cureus* 2023;12:e50512. doi: 10.7759/cureus.50512. eCollection
9. Yamada Y, Mori T, Takahashi N, Fujimura T, Kano M, Kato M, Takahashi M, Shimojima N, Watanabe T, Yoshioka T, Kanamori Y, Kuroda T, Fujino A: Historical Cohort Study of Congenital Isolated Hypoganglionosis of the Intestine: Determining the Best Surgical Interventions. *Biomolecules*. 2023 Oct 23;13(10):1560. doi: 10.3390/biom13101560.
10. Kyo M, Zhu Z, Shibata R, Fujiogi M, Mansbach JM, Camargo CA, Hasegawa K: Respiratory Virus-Specific Nasopharyngeal Lipidome Signatures and Severity in Infants With Bronchiolitis: A Prospective Multicenter Study. *J Infect Dis* 2023;10:1410-1420

11. Takamoto N, Konishi T, Fujiogi M, Kutsukake M, Morita K, Hashimoto Y, Matsui H, Fushimi K, Yasunaga H, Fujishiro J: Outcomes Following Laparoscopic Versus Open Surgery for Pediatric Intussusception: Analysis Using a National Inpatient Database in Japan. *J Pediatr Surg* 2023;11:2255-2261
12. Konishi T, Fujiogi M, Sato M, Michihata N, Matsui H, Nishioka K, Tanabe M, Seto Y, Yasunaga H: Impact of the National Action Plan for Antimicrobial Resistance on Antibiotic Use for Mastitis Using a Japanese Nationwide Database. *Breast Care (Basel)* 2023;2:122-129
13. Yoneda, A: Role of surgery in neuroblastoma. *Pediatr Surg Int* 2023;1:177
14. Hayashi K, Mori M, Sanmoto Y, Oiki H, Ishimaru T, Arakawa Y, Koh K, Kawashima H: Relationship between the timing of chemotherapy and surgical complications following surgical biopsy in children with malignant solid tumors. *Pediatr Blood Cancer* 2023;1:e30030
15. Uchida H, Sakamoto S, Komine R, Kodama T, Nakao T, Okada N, Yanagi Y, Shimizu S, Fukuda A, Shioda Y, Kiyotani C, Matsumoto K, Yoneda A, Haga C, Yoshioka T, Miyazaki O, Nosaka S, Kasahara M (2023) Strategy for hepatoblastoma with major vascular involvement: A guide for surgical decision-making. *Surgery* 173(2):457-463
16. Sugiyama M, Arakawa A, Shirakawa N, Tao K, Tanimura K, Nakajima M, Watanabe Y, Kumamoto T, Maniwa J, Yoneda A, Iwata S, Kobayashi E, Kawai A, Ogawa C (2023) Safety and efficacy of multiple tyrosine kinase inhibitors in pediatric/adolescent and young adult patients with relapsed or refractory osteosarcomas: A single-institution retrospective analysis. *Pediatric blood & cancer* 70(7):e30360
17. Honda M, Uchida K, Irie T, Hirukawa K, Kadohisa M, Shimata K, Isono K, Shimojima N, Sugawara Y, Hibi T: Recent advances in surgical strategies and liver transplantation for hepatoblastoma. *Cancer Med.* 2023;12:3909-3918.
18. Honda M, Shimojima N, Maeda Y, Ito Y, Miyaguni K, Tsukizaki A, Abe K, Hashimoto M, Ishikawa M, Tomita H, Shimotakahara A, Hirobe S: Factors predicting surgical difficulties in congenital biliary dilatation in pediatric patients. *Pediatr Surg Int.* 2023;11:39:79.
19. Tomita H, Shimojima N, Shimotakahara A, Tamada I, Ishikawa M, Hashimoto M, Tsukizaki A, Miyaguni K, Hirobe S: Vertical Umbilical Incision Achieves Better Cosmesis Than Periumbilical Incision in Neonates and Infants. *Cureus.* 2023;23;15:e36589.
20. 狩野 元宏, 藤野 明浩, 古金 遼也, 橋詰 直樹, 小林 完, 森 禎三郎, 渡辺 栄一郎, 高橋 正貴, 米田 光宏, 金森 豊:小児気胸に対する治療戦略の再考. *日本小児外科学会雑誌* 2023 ; 4 : 741-746
21. 青山 統寛, 川嶋 寛, 石丸 哲也, 住田 互, 柿原 知, 加藤 怜子, 林 健太郎: 当院における小児腎外傷14例の検討. *日本小児外科学会雑誌* 2023 : 1 : 37-43
22. 清谷 知賀子, 山田 悠司, 寺島 慶太, 塩田 曜子, 牛腸 義宏, 井口 晶裕, 坂口 大俊, 米田 光宏, 富澤 大輔, 松本 公一 (2023) 日本人小児がん患児38例におけるアントラサイクリン心筋障害抑制のためのデクスラゾキサン併用治療. *日本小児血液・がん学会雑誌* 60(1):15-19
23. Morita K, Fujiogi M, Michihata N, Matsui H, Fushimi K, Yasunaga H, Fujishiro J. Oral Antibiotics and Organ Space Infection after Appendectomy and Intravenous Antibiotics Therapy for Complicated Appendicitis in Children. *Eur J Pediatr Surg.* 2023 Feb;33(1):74-80. doi: 10.1055/a-1958-7915. Epub 2022 Oct 11. PMID: 36220134.

24. Akel MJ, Camargo CA Jr, Fujiogi M, Hasegawa K, Press VG. Lack of health disparities during implementation of hospital-initiated care bundle among hospitalized adults with asthma. Ann Allergy Asthma Immunol. 2024 Apr;132(4):534-536. doi: 10.1016/j.anai.2023.12.029. Epub 2023 Dec 25. PMID: 38151101.

[原著論文：査読なし]

1. 狩野元宏、黒田達夫：胚細胞腫瘍Update 小児頭蓋外胚細胞腫瘍に対する治療戦略の進歩と課題. 日本小児血液・がん学会雑誌 2023 ; 60 : 220

[症例報告]

1. 小林 完, 藤野 明浩, 古金 遼也, 沓掛 真衣, 森 禎三郎, 狩野 元宏, 高橋 正貴, 米田 光宏, 金森 豊, 義岡 孝子: 乳児期に肝芽腫を発症後, 思春期に乳房線維腺腫を発症した Beckwith-Wiedemann 症候群の1例. 日本小児外科学会雑誌 2023 ; 4 : 804-809
2. 山本 裕輝, 米田 光宏, 小関 元太, 齋藤 傑, 橋詰 直樹, 藤雄木 亨真, 狩野 元宏, 渡辺 栄一郎, 石丸 哲也, 藤野 明浩: 経腹経膈膈膜のアプローチによる再発神経芽腫の縦隔病変を切除し得た1例. 日本小児血液・がん学会雑誌 2023 ; 5 : 381-384
3. 狩野 元宏, 米田 光宏, 小関 元太, 齋藤 傑, 橋詰 直樹, 藤雄木 亨真, 渡辺 栄一郎, 山本 裕輝, 藤野 明浩, 金森 豊 (2023) 【共有したい術式および手術経験: 手術のポイントや工夫】腹腔鏡・腔鏡を併用し posterior sagittal approach で切除した腔原発卵黄嚢腫瘍の1例. 小児外科 55(3):339-343

[総説]

1. 藤雄木 亨真, 石丸 哲也, 金森 豊: 【小児外科疾患に関連する症候群】21trisomy. 小児外科 2023 ; 4 : 359-362
2. 米田 光宏, 小関 元太, 齋藤 傑, 橋詰 直樹, 藤雄木 亨真, 狩野 元宏, 山本 裕輝, 石丸 哲也, 藤野 明浩, 金森 豊: 【小児外科疾患に関連する症候群】Simpson-Golabi-Behmel 症候群. 小児外科 2023;4 : 444-447
3. 金森 豊, 石丸 哲也, 宮寄 治: 【喉頭・気管病変 治療の工夫と予後】先天性上気道閉塞症候群(CHAOS)の診断と対応. 小児外科 2023;10 : 1026-1031
4. 下島直樹: 【胎児・新生児の消化管機能と消化管疾患】鎖肛. 周産期医学 2023;53:1654-1660
5. 下高原 昭廣, 下島 直樹, 富田 紘史, 廣部 誠一: 【小児呼吸器疾患に対する放射線診断のトピックス】小児呼吸器外科領域における画像技術や画像診断のトピックス. 日本小児放射線学会雑誌. 2023;39:62-66.
6. 下島 直樹, 下高原 昭廣, 富田 紘史, 廣部 誠一: 【喉頭・気管病変 治療の工夫と予後】先天性心疾患に合併する気管狭窄に対する治療アルゴリズム. 小児外科. 2023;55:1114-1116.
7. 下高原 昭廣, 下島 直樹, 富田 紘史, 廣部 誠一: 【喉頭・気管病変 治療の工夫と予後】先天性気管狭窄に対する slide tracheoplasty 術後トラブル. 小児外科. 2023;55:1111-1113.
8. 下島 直樹, 下高原 昭廣, 富田 紘史, 廣部 誠一: 【共有したい術式および手術経験: 手術のポイントや工夫】先天性気管狭窄症に対するスライド気管形成術のポイントと工夫. 小児外科.

2023;55:264-269.

9. 下島直樹, 廣部誠一: 【小児の治療方針】消化器 Hirschsprung 病. 小児科診療. 2023;86:655-658.
10. 狩野 元宏, 米田 光宏, 小関 元太, 齋藤 傑, 橋詰 直樹, 藤雄木 亨真, 渡辺 栄一郎, 山本 裕輝, 藤野 明浩, 金森 豊: 【共有したい術式および手術経験:手術のポイントや工夫】腹腔鏡・腔鏡を併用し posterior sagittal approach で切除した腔原発卵黄嚢腫瘍の1例. 小児外科 2023;3: 339-343
11. 森 昌玄, 梅山 知成, 小松崎 尚子, 堀江 貴哉, 大泉 亮太郎, 出縄 康次, 山本 裕輝, 鄭 英里, 平川 均, 渡辺 稔彦: 【検査・処置・手術の合併症:予防と対策】手術・治療 胃食道逆流手術. 小児外科 2023;11: 1200-1204

[著書]

1. Ohno M, Fuchimoto Y, Fujino A, Watanabe T, Kanamori Y: Laparoscopic findings of rare pediatric inguinal hernia. A chapter in Hernia Surgery, Sozen S and Erdem H (eds.), IntechOpen, UK, 2022;DOI: 10.5772/intechopen.102028.
2. 金森豊: 過成長症候群. 別冊日本臨床 領域別症候群シリーズ No. 23 腎臓症候群 (第3版) (II)—その他の腎臓疾患を含めて—. 日本臨床社、東京、2022:164-169
3. 橋詰直樹 田中芳明 総論 12 小児がん 日本臨床栄養代謝学会 JSPEN コンセンサスブック① がん. 日本臨床栄養代謝学会(JSPEN)編, 医学書院, 2022;355-358

[ガイドライン、報告書、その他]

なし

[学会発表]

1. Ishimaru T, Kanamori Y, Fujino A, Yoneda A, Fujiogi M, Yamamoto Y, Kano M, Koinuma G, Deie K, Kawashima H: Comparison of postoperative respiratory function between patients after thoracoscopic and open lobectomy. IPEG' s 32nd Annual Congress for Endosurgery in Children, Sorrento Italy, 2023. 7. 6
2. 石丸哲也, 藤雄木亨真, 狩野元宏, 山本裕輝, 藤野明浩, 米田光宏, 金森豊, 肥沼悟郎, 出家亨一, 川嶋寛: 胸腔鏡下肺葉切除術と開胸肺葉切除術後の呼吸機能の比較検討. 第60回日本小児外科学会学術集会, 大阪, 2023. 6. 1
3. 村上雅一, 小川雄大, 横山新一郎, 倉島 庸, 宮野 剛, 石丸哲也, 川嶋 寛, 内田広夫, 山高篤行, 奥山宏臣, 家入里志: 小児内視鏡外科手術の指導的立場の医師に対する経験症例数からみた執刀自立性に関する解析. 第60回日本小児外科学会学術集会, 大阪, 2023. 6. 1
4. 渡辺栄一郎, 橋詰直樹, 柿原知, 齋藤傑, 藤雄木亨真, 石丸哲也, 小関元太, 狩野元宏, 山本裕輝, 藤野明浩, 米田光宏, 須田互, 金森豊: 長期生存MMIHS 2例の回腸ストーマ排液に関する腸内細菌叢解析研究. 第37回日本小児ストーマ・排泄・創傷管理研究会, 神奈川, 2023. 6. 17
5. 渡邊美穂, 出口幸一, 高橋正貴, 石丸哲也, 平林健, 鈴木真由子, 長田華世子, 阿部薫, 鎌田直子, 奥山 宏臣: 二分脊椎排便管理委員会の取り組み. 第37回日本小児ストーマ・排泄・創傷管理研究会, 神奈川, 2023. 6. 17
6. 石丸哲也, 新城大輔, 藤雄木亨真, 道端伸明, 森田香織, 林健太郎, 立森久照, 川嶋寛, 藤代準, 康

- 永秀生： NCD データを用いた食道閉鎖症根治術後吻合部縫合不全のリスクファクター解析. 第 42 回日本小児内視鏡外科・手術手技研究会, 福岡, 2023. 10. 27
7. Yoneda A, Shichino H, Hishiki T, Matsumoto K, Ohira M, Kamijo T, Kuroda T, Soejima T, Nakazawa A, Takimoto T, Yokota I, Teramukai S, Takahashi H, Fukushima T, Hara J, Kaneko M, Ikeda H, Tajiri T, Mugishima H, Nakagawara A. Surgical Outcome of A Nationwide Phase II Study of Delayed Local Treatment for Children with High-risk Neuroblastoma (JN-H-11). Advances in Neuroblastoma Research. Amsterdam, Netherland, 19th May, 2023
 8. 米田光宏, 家原知子, 菊田 敦, 連 利博, 常盤和明, 高橋秀人, 手良向 聡, 瀧本哲也, 柳生茂希, 細井 創, 田尻達郎. Non-high-risk 神経芽腫における臓器温存. パネルディスカッション5 「小児がんの外科治療と機能温存：どこまで取ってどこまで残すか」. 第 123 回日本外科学会定期学術集会 2023. 4. 27
 9. Shimajima N, Shimotakahara A, Tomita H, Hirobe S: Pearls and pitfalls in slide tracheoplasty for congenital tracheal stenosis. The Pacific Association of Pediatric Surgeons (PAPS) 56th Annual Meeting, Bali, Indonesia, 2023. 9. 10-14
 10. Maeda Y, Shimajima N, Ueda K, Sugihara J, Harada A, Mogaki T, Nishibe S, Isono S, Iwasaki T, Kuroda T: Digitization and visualization of airflow changes using computational fluid dynamics after a slide tracheoplasty for congenital tracheal stenosis. The Pacific Association of Pediatric Surgeons (PAPS) 56th Annual Meeting, Bali, Indonesia, 2023. 9. 10-14
 11. Ueda K, Shimajima N, Maeda Y, Sugihara J, Harada A, Yamakawa Y, Nishibe S, Isono S, Kuroda T, Iwasaki T: Preoperative evaluation of congenital tracheal stenosis using computational fluid dynamics. The Pacific Association of Pediatric Surgeons (PAPS) 56th Annual Meeting, Bali, Indonesia, 2023. 9. 10-14
 12. 下島直樹, 下高原昭廣, 富田紘史, 峯岸英博, 広原和樹, 森禎三郎, 牧本敦, 湯坐有希, 日比泰造, 岡島英明: 肝芽腫を発症し根治的外科切除を施行した 18 トリソミーの 2 例. 第 65 回日本小児血液・がん学会学術総会 2023. 9. 29
 13. 川口皓平, 下島直樹, 月崎絢乃, 下高原昭廣, 熊谷知子, 広原和樹, 伊藤佳史, 阿部陽友, 森禎三郎, 石川未来, 富田紘史, 廣部誠一: 小児外科における術中反回神経モニタリングの経験. 第 5 回多摩外科医会 2023. 3. 4
 14. 広原和樹, 下島直樹, 下高原昭廣, 富田紘史, 石川未来, 阿部陽友, 森禎三郎, 月崎絢乃, 川口皓平, 伊藤佳史, 熊谷知子: アルカリ誤飲による腐食性食道炎後の癒着性狭窄に対して有茎空腸グラフトを利用した食道間置術を施行した 1 例. 第 5 回多摩外科医会 2023. 3. 4
 15. 広原和樹, 下島直樹, 松岡健太郎, 近藤彩, 松寺翔太郎, 日高綾乃, 月崎絢乃, 阿部陽友, 森禎三郎, 石川未来, 下高原昭廣, 富田紘史: 頸部食道筋層由来の infantile fibromatosis の 1 例. 第 57 回日本小児外科学会関東甲信越地方会. 2023. 10. 7
 16. 下島直樹, 広原和樹, 森川和彦, 下高原昭廣, 富田紘史, 熊谷知子, 近藤彩, 宮國憲昭, 松寺翔太郎, 日高綾乃, 月崎絢乃, 阿部陽友, 森禎三郎, 石川未来, 赤星祥伍, 友常雅子, 牧本敦, 廣部誠一: 鎖肛術後の長期難治性便失禁に対する仙骨神経刺激療法の導入. 第 79 回直腸肛門奇形研究会 2023. 10. 27
 17. 炭山 和毅, 小林 雅邦, 下島 直樹: 画像診断を含めた新しいテクノロジーの小児外科治療への応用

消化管神経叢の内視鏡的視覚化の検討. 第 123 回日本外科学会定期学術集会 2023. 4

18. 藤雄木 亨真, 石丸 哲也, 小関 元太, 山岸 徳子, 齋藤 傑, 山本 裕輝, 米田 光宏:
小児虫垂切除術の 3 孔式腹腔鏡下手術から単孔式手術への移行における安全性の検討. 第 36 回日本
内視鏡外科学会総会, 横浜, 2023
19. 藤雄木 亨真, 石丸 哲也, 齋藤 傑, 小関 元太, 橋詰 直樹, 狩野 元宏, 山本 裕輝, 藤野 明浩,
米田 光宏: 後腹膜から結腸間膜根部に発生した完全孤立性重複腸管の一例, 第 60 回日本小児外科
学会学術集会, 大阪, 2023
20. 藤雄木 亨真, 渡辺 栄一郎, 小関 元太, 齋藤 傑, 橋詰 直樹, 狩野 元宏, 山本 裕輝, 石丸 哲也,
藤野 明浩, 米田 光宏, 金森 豊: 一卵性双胎の両児に Isolated 低位鎖肛を呈した一例, 第 60 回日
本小児外科学会学術集会, 大阪, 2023
21. 照井 慶太, 立森 久照, 笈田 諭, 藤雄木 亨真, 藤代 準, 平原 憲道, 宮田 裕章, 菱木 知郎: 小児
消化管穿孔手術において施設 Volume がアウトカムに及ぼす影響について, 第 123 回日本外科学会定
期学術集会, 東京, 2023
22. 坂本 貴志, 藤雄木 亨真, 康永 秀生, 全国データベースを用いた右側閉塞性大腸癌に対する大腸ス
テント留置後手術と緊急手術の周術期成績の比較, 第 123 回日本外科学会定期学術集会, 東京, 2023
23. 山岸 徳子, 藤野 明浩, 小関 元太, 齋藤 傑, 藤雄木 亨真, 山本 裕輝, 石丸 哲也, 下島 直樹, 米
田 光宏: リンパ管腫蜂窩織炎の治療戦略, 第 39 回日本小児外科学会秋季シンポジウム, 福岡, 2023
24. 山岸 徳子, 石丸 哲也, 小関 元太, 齋藤 傑, 藤雄木 亨真, 山本 裕輝, 下島 直樹, 米田 光宏: 急
性虫垂炎に合併した門脈血栓症の一例, 第 37 回日本小児脾臓・門脈研究会, 京都, 2023
25. 山岸 徳子, 石丸 哲也, 小関 元太, 齋藤 傑, 藤雄木 亨真, 山本 裕輝, 下島 直樹, 米田 光宏: 急
性虫垂炎に合併した門脈血栓症の一例, 第 57 回日本小児外科学会関東甲信越地方会, 東京, 2023
26. 山岸 徳子, 加藤 源俊, 藤野 明浩: 2 施設におけるシロリムス使用患者の追跡調査, 第 47 回日本リ
ンパ学会総会, 浜松, 2023
27. 山本 裕輝, 藤野 明浩, 小関 元太, 齋藤 傑, 橋詰 直樹, 藤雄木 亨真, 狩野 元宏, 石丸 哲也,
米田 光宏, 金森 豊: 臍帯ヘルニアの腹壁閉鎖に関する予測因子について. 第 60 回日本小児外科
学会学術集会, 大阪, 2023. 6. 1
28. 山本 裕輝, 金森 豊, 小関 元太, 齋藤 傑, 橋詰 直樹, 藤雄木 亨真, 狩野 元宏, 石丸 哲也,
藤野 明浩, 米田 光宏: 巨大臍帯ヘルニアの多期的腹壁形成に人工真皮を用いた 2 例. 第 37 回日本
小児ストーマ・排泄・創傷管理研究会, 神奈川, 2023. 6. 17
29. 山本 裕輝, 米田 光宏, 小関 元太, 齋藤 傑, 橋詰 直樹, 藤雄木 亨真, 狩野 元宏, 石丸 哲也,
藤野 明浩, 金森 豊: 新生児期と乳児期の心嚢内奇形腫の 2 例. 第 65 回日本小児血液・がん学会,
札幌, 2023. 9. 30
30. 山本 裕輝, 山岸 徳子, 小関 元太, 齋藤 傑, 藤雄木 亨真, 石丸 哲也, 下島 直樹, 狩野 元
宏, 藤野 明浩, 金森 豊, 米田 光宏: 早期腹壁閉鎖が困難な巨大臍帯ヘルニアの治療について-人
工真皮の使用例を含めて-. 第 42 回日本小児内視鏡外科・手術手技研究会, 福岡, 2023. 10. 27

[講演]

1. Tetsuya Ishimaru, Michimasa Fujiogi, Genta Ozeki, Satoko Yamagishi, Takeshi Saito, Yuki Yamamoto, Naoki Shimojima, Akihiro Yoneda: Laparoscopic repair of congenital biliary dilatation. Neonatal and pediatric minimally invasive surgery international symposium, ウ

ランバートル, モンゴル, 2023. 10. 21

2. Tetsuya Ishimaru: Thoracoscopic repair of esophageal atresia/tracheoesophageal fistula. The 18th congress of Asian Society for Pediatric Research (ASPR), online, 2023. 11. 12
3. 石丸哲也, 小関元太, 山岸徳子, 斎藤傑, 藤雄木亨真, 山本裕輝, 下島直樹, 米田光宏: 小児科医が知っておくべき小児内視鏡手術 時代はここまで進化しています. 第22回SSSG(世田谷小児・成育医療学術講演会), 世田谷, 2023. 9. 13
4. 石丸哲也, 小関元太, 山岸徳子, 斎藤傑, 藤雄木亨真, 山本裕輝, 下島直樹, 米田光宏: 日本一の小児内視鏡外科手術センターを目指して. 成育医療リサーチセミナー, 鹿児島, 2023. 9. 21
5. 石丸哲也, 小関元太, 山岸徳子, 斎藤傑, 藤雄木亨真, 山本裕輝, 下島直樹, 米田光宏: 食道閉鎖症の外科管理. 第3回胎児食道研究会, オンライン, 2023. 11. 23
6. Yoneda A. Surgical Treatment of Neuroblastomas-from the Japanese Neuroblastoma Clinical Trial-, SIOP Asia 2023. Yerevan, Armenia, 20th May, 2023
7. 下島直樹: 小児の排便障害に関して. 第28回大腸肛門機能障害研究会ランチョンセミナー, 2023. 9. 2

[広報活動]

当なし

脳神経外科

1. Pineal/germ cell tumors and pineal parenchymal tumors.
Ogiwara H, Liao YM, Wong TT.
Childs Nerv Syst. 2023 Oct;39(10):2649-2665.
2. Second-look surgery for pineal region tumors.
Ogiwara H.
Childs Nerv Syst. 2023 Sep;39(9):2349-2352.
3. Prevention of retethering in untethering surgery of a tight filum terminale.
Ogawa S, Ogiwara H.
J Neurosurg Pediatr. 2023 May 19;32(2):158-162.
4. Cranial distraction osteogenesis for craniosynostosis associated with osteopetrosis: A case report.
Ogawa S, Ogiwara H.
Surg Neurol Int. 2023 Oct 13;14:368.

心臓血管外科

[学会発表]

1. 北 翔太, 宮入 剛, 近田 正英, 縄田 寛, 千葉 清, 駒ヶ嶺 正英, 杵渕 聡志, 富田 真央, 中村 竜士, 金子 幸裕: 僧帽弁異形成からの二心室修復とその後の課題、第53回日本心臓血管外科学会学術総会、2023年3月
2. 山口 章, 武井 哲理, 近藤 良一, 金子 幸裕: 成育医療研究センターにおける Comprehensive Stage 2 Norwood-Glenn 手術の検討、第76回 日本胸部外科学会定期学術集会、2023年10月
3. 児玉 匡, 小峰 竜二, 中尾 俊雅, 柳 佑典, 清水 誠一, 内田 孟, 福田 晃也, 阪本 靖介, 武井 哲理, 近藤 良一, 金子 幸裕, 笠原 群生: 体外循環装置を用いて肝芽腫心房内腫瘍栓を摘出し生体肝移植術を行った一例、第59回日本移植学会学術集会、2023年9月
4. 浦田 晋藤村 友美, 丸山 和歌子, 佐藤 麻朝, 山口 章, 武井 哲理, 近藤 良一, 進藤 考洋, 三崎 泰志, 金子 幸裕, 小野 博: 一期的心内修復術を行った心室中隔欠損を伴う肺動脈閉鎖症の治療成績、第59回日本小児循環器学会学術集会、2023年7月
5. 藤村 友美, 進藤 考洋, 丸山 和歌子, 佐藤 麻朝, 浦田 晋, 三崎 泰志, 金子 幸裕, 小野 博: 胆道閉鎖症術後の末期肝不全に対する肝移植に心内修復術を先行した多脾症候群の2例、第59回日本小児循環器学会学術集会、2023年7月
6. 山口 章, 武井 哲理, 近藤 良一, 金子 幸裕: Dextrorotation を伴う心室中隔欠損症に対して右開胸アプローチを選択した1例、第192回 日本胸部外科学会関東甲信越地方会、2023年6月

整形外科

[原著論文: 査読付] (Reviewed Paper)

1. 中川 蒼之, 江口 佳孝, 高木 岳彦, 福田 良嗣, 星 亨, 山岸 賢一郎. 重度角状変形を有する10歳以上の小児前腕両骨幹部骨折に対する保存的治療の検討. 骨折, 45(2):564-568, 2023
2. 阿南 揚子, 関 敦仁, 江口 佳孝, 高木 岳彦, 高山 真一郎, 金谷 文則. 尺側裂手症の手術治療. 日手会誌, 39(4):502-506, 2023
3. 林 健太郎, 関 敦仁, 阿南 揚子, 稲葉 尚人, 武谷 博明, 高木 岳彦. 肘関節を初発として発症した3例の少関節炎型若年性特発性関節炎の特徴. 日手会誌, 39(4):528-34, 2023

[原著論文: 査読なし]

なし

[症例報告]

1. Chen YC, Kuo KN, Takagi T, Takayama S, Shih PJ, Chang CH. A new technique for separating radioulnar synostosis with vascularized flap: a case report. JSES Int 2023;7(4):709-713
2. Kawano Y, Seki A, Kuroiwa T, Maeda A, Funahashi T, Shizu K, Suzuki K, Inagaki H, Kurahashi H, Fujita N. A case of bilateral elbow dislocation in a patient with Rubinstein-Taybi

syndrome. JSES Int. 2023 Apr 24;7(4):714-718.

3. Nakamura T, Iwai M, Inoue T, Irie H, Karasugi T, Seki A, Hamaguchi M, Kuraoka S, Mizukami T, Nakamura K. A neonate with multiple hand flexor tendon ruptures due to methicillin-susceptible Staphylococcus aureus sepsis: a case report. BMC Pediatr. 2023 Feb 9;23(1):68.

[総説]

1. 高木岳彦. 筋電義手の現状と未来 ―より直感的な筋電義手に向けて―. 日手会誌, 2023;39(4):387-391
2. 高木岳彦. 上腕骨顆上骨折. 関節外科, 2023;42(4 Suppl):57-62
3. 高木岳彦. 小児手外科医としての過去・現在・未来. 日本マイクロ会誌, 2023; 36(3):144-148

[著書]

1. 高木岳彦. 中手指節 (MP) 関節. 「The Grasping Hand 日本語版 手・上肢の構造と機能」(玉井誠、村田景一監訳), 医学書院, 2023; 393-402
2. 高木岳彦. これが本当の感覚検査. 「手救急-手外科専門医が教える現場での初療」(市原理司編), 南江堂, 2023; 74-81
3. 高木岳彦. 分娩麻痺. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第731章, 2023 (電子書籍).
4. 金治有彦, 関敦仁. 成長と発達. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第692章, 2023 (電子書籍).
5. 金治有彦, 関敦仁. 小児の整形外科的評価. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第693章, 2023 (電子書籍).
6. 金治有彦, 関敦仁. 足と足趾. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第694章, 2023 (電子書籍).
7. 金治有彦, 関敦仁. 四肢の回旋変形と角状変形. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第695章, 2023 (電子書籍).
8. 金治有彦, 関敦仁. 脚長差. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第696章, 2023 (電子書籍).
9. 金治有彦, 関敦仁. 膝. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第697章, 2023 (電子書籍).
10. 金治有彦, 関敦仁. 股関節. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第698章, 2023 (電子書籍).
11. 金治有彦, 関敦仁. 成長と発達. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第692章, 2023 (電子書籍).
12. 関敦仁. 脊椎. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第699章, 2023 (電子書籍).
13. 関敦仁. 頸. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第700章, 2023 (電子書籍).
14. 関敦仁. 上肢. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第701章, 2023 (電子書籍).

15. 関敦仁. 関節拘縮症. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第702章, 2023(電子書籍).
16. 関敦仁. 一般的な骨折. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第703章, 2023(電子書籍).
17. 関敦仁. 骨髄炎. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第704章, 2023(電子書籍).
18. 関敦仁. 敗血症性関節炎. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第705章, 2023(電子書籍).
19. 佐藤和毅, 関敦仁. 疫学と傷害予防. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第706章, 2023(電子書籍).
20. 佐藤和毅, 関敦仁. 筋骨格系損傷の管理. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第707章, 2023(電子書籍).
21. 木村豪志, 関敦仁. スポーツ外傷性脳損傷(脳振盪). 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第708章, 2023(電子書籍).
22. 佐藤和毅, 関敦仁. 頸椎損傷. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第709章, 2023(電子書籍).
23. 木村豪志, 関敦仁. 熱中症. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第710章, 2023(電子書籍).
24. 木村豪志, 関敦仁. 女性スポーツ選手. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第711章, 2023(電子書籍).
25. 木村豪志, 関敦仁. 運動能力向上補助. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第712章, 2023(電子書籍).
26. 佐藤和毅, 関敦仁. 特定のスポーツと関連障害. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第713章, 2023(電子書籍).
27. 芳賀信彦, 関敦仁. 骨系統疾患における一般的考察. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第714章, 2023(電子書籍).
28. 芳賀信彦, 関敦仁. 骨系統疾患における一般的考察. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第714章, 2023(電子書籍).
29. 芳賀信彦, 関敦仁. 軟骨マトリックス蛋白が関与する疾患. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第715章, 2023(電子書籍).
30. 芳賀信彦, 関敦仁. 膜貫通受容体が関与する疾患. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第716章, 2023(電子書籍).
31. 芳賀信彦, 関敦仁. イオン輸送体が関与する疾患. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第717章, 2023(電子書籍).
32. 芳賀信彦, 関敦仁. 転写因子を含む疾患. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第718章, 2023(電子書籍).
33. 芳賀信彦, 関敦仁. 骨吸収障害を伴う疾患. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第719章, 2023(電子書籍).
34. 芳賀信彦, 関敦仁. 他の遺伝性骨格成長障害. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第720章, 2023(電子書籍).

35. 芳賀信彦, 関敦仁. 骨形成不全症. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第721章, 2023 (電子書籍).
36. 芳賀信彦, 関敦仁. Marfan 症候群. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第722章, 2023 (電子書籍).
37. 堀川玲子, 関敦仁. 骨構造, 成長, ホルモン調節. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第723章, 2023 (電子書籍).
38. 堀川玲子, 関敦仁. 低ホスファターゼ症. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第724章, 2023 (電子書籍).
39. 堀川玲子, 関敦仁. 高アルカリホスファターゼ症. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第725章, 2023 (電子書籍).
40. 堀川玲子, 関敦仁. 骨粗しょう症. 「ネルソン小児科学 原著第21版」(五十嵐隆 総監訳), エルセビアジャパン, 第726章, 2023 (電子書籍).

[ガイドライン、研究報告書、その他]

1. 江口佳孝 (分担研究者) 乳幼児健診の拡充に向けた提言～こども政策デジタルトランスフォーメーション推進も踏まえて～ こども家庭科学研究3 班合同報告書 2023.11

[学会発表]

1. Takagi T, Seki A, Takayama S. Opponensplasty with abductor pollicis brevis rerouting for various kinds of congenital thumb differences. 2023 World Symposium on Congenital Malformations of the Hand and Upper Limb, Minneapolis, MN, USA, 2023.5.19 (Oral presentation)
2. Takagi T, Yamanoi Y, Yokoi H. Phocomelia and the motor-powered hand prosthesis. 2023 World Symposium on Congenital Malformations of the Hand and Upper Limb, Minneapolis, MN, USA, 2023.5.17-20 (Poster presentation)
3. Takagi T. Camptodactyly, clinodactyly & other digital deformities. 13th Asian Pacific Federation of Societies for Surgery of the Hand (APFSSH), Singapore, Singapore, 2023.6.1 (Oral presentation)
4. Takagi T. Paediatric elbow injuries & complications. 13th Asian Pacific Federation of Societies for Surgery of the Hand (APFSSH), Singapore, Singapore, 2023.6.2 (Oral presentation)
5. Yamaguchi S, Takagi T, Seki A, Takayama S. Opponensplasty with abductor pollicis brevis rerouting for hypoplastic thumb: a retrospective review. 13th Asian Pacific Federation of Societies for Surgery of the Hand (APFSSH), Singapore, Singapore, 2023.6.1 (Oral presentation)
6. Iigaya S, Takagi T, Seki A, Takayama S. Long Outcome of Reconstruction for Severely Hypoplastic Thumb. 13th Asian Pacific Federation of Societies for Surgery of the Hand (APFSSH), Singapore, Singapore, 2023.5.31 (Oral presentation)

7. Almeida M, Takagi T, Torii Y, Takayama S. Humeroradial synostosis: a valuable strategy of resection arthroplasty. 13th Asian Pacific Federation of Societies for Surgery of the Hand (APFSSH), Singapore, Singapore, 2023.5.31 (Oral presentation)
8. Anbarasan A, Takagi T, Seki A, Takayama S. Abductor Pollicis Brevis Rerouting and First Web Deepening for Clapsed Thumb Deformity in Arthrogryposis Multiplex Congenita. 13th Asian Pacific Federation of Societies for Surgery of the Hand (APFSSH), Singapore, Singapore, 2023.5.31-6.3 (E-poster presentation)
9. Misra S, Takagi T, Yamaguchi S, Anami Y, Takayama S. Intercostal Nerve Transfer in Management of Biceps and Triceps Co-contraction in Brachial Plexus Birth Palsy. 13th Asian Pacific Federation of Societies for Surgery of the Hand (APFSSH), Singapore, Singapore, 2023.6.1 (Oral presentation)
10. Takagi T. Current concepts for congenital missing hands -surgeries and prostheses-. 16th National Pediatric Orthopedic Surgery Conference 2023, Hanoi, Vietnam, 2023.9.23 (Oral presentation)
11. Takagi T. Pediatric elbow fractures and complications. 16th National Pediatric Orthopedic Surgery Conference 2023, Hanoi, Vietnam, 2023.9.23 (Oral presentation)
12. Takagi T, Yamaguchi S, Anbarasan A, Seki A, Takayama S. Opponensplasty with abductor pollicis brevis rerouting for congenital hypoplastic thumb. 78th Annual Meeting of the American Society for Surgery of the Hand (ASSH), Toronto, Canada, 2023.10.5-7 (ePoster presentation)
13. Takagi T. Arthrogryposis-Management of Upper Extremity Problems-. 15th National Congress of Chinese Society of Hand Surgery, Chinese Medical Association, Ningbo, China, 2023.12.15 (Oral presentation)
14. Takagi T. Current concepts of thumb polydactyly. 15th National Congress of Chinese Society of Hand Surgery, Chinese Medical Association, Ningbo, China, 2023.12.16 (Oral presentation)
15. 高木岳彦. 小児肘外傷と合併症回避のための適切な初期治療 -上腕骨顆上骨折と内反肘に着目して-. 第35回日本肘関節学会学術集会, 山形, 2023.2.4 (口頭発表、シンポジウム)
16. 高木岳彦, 関敦仁, 高山真一郎. 先天性上肢形成不全とAI義手 -その可能性と現状-. 第66回日本手外科学会学術集会, 東京, 2023.4.20 (口頭発表、シンポジウム)
17. 高木岳彦, 山口桜, 川崎みづ紀, 武谷博明, 林健太郎, 稲葉尚人, 阿南揚子, 関敦仁, 高山真一郎. 小児手外科分野における海外臨床留学受け入れと国際交流 -国立成育医療研究センターでの取り組み-. 第66回日本手外科学会学術集会, 東京, 2023.4.21 (口頭発表、シンポジウム)
18. 高木岳彦. 先天性上肢形成不全と義手 -その可能性と現状-. 第34回日本末梢神経学会学術集会, 京都, 2023.9.9 (口頭発表、シンポジウム)
19. 高木岳彦, 武谷博明, 林健太郎, 稲葉尚人, 福田良嗣, 中川誉之, 阿南揚子, 江口佳孝, 関敦仁, 高山真一郎. Supracondylar humeral fractures and late displacement -for avoiding cubitus varus deformity-. 第34回日本小児整形外科学会学術集会, 神戸, 2023.11.24 (英文ポスター発表)
20. 高木岳彦. 小児手外科・マイクロサージャリー分野における海外臨床留学受け入れと国際交流. 第50回日本マイクロサージャリー学会学術集会, 名古屋, 2023.12.8 (口頭発表)

21. 山口桜, 高木岳彦, 関敦仁, 高山真一郎. 母指形成不全に対する短母指外転筋移行術とその治療成績の検討 第66回日本手外科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 20(口頭発表)
22. 関敦仁, 林健太郎, 稲葉尚人, 武谷博明, 阿南揚子, 高木岳彦, 山口桜, 福田良嗣, 中川誉之, 江口佳孝, 高山真一郎. 無指型合短指症の治療. 第21回関東上肢先天異常症例検討会, web, 2023. 1. 19 (口頭発表)
23. 関敦仁, 高木岳彦, 阿南揚子, 林健太郎, 武谷博明, 山口桜, 稲葉尚人, 江口佳孝, 高山真一郎. 私の母指化術. 第61回手の先天異常懇話会. 東京, 2023. 4. 21 (口頭発表)
24. 関敦仁, 稲葉尚人, 林健太郎, 江口佳孝, 高木岳彦, 阿南揚子, 福田良嗣, 中川誉之, 武谷博明, 山口桜, 佐藤春佳, 川崎みづ紀. 若年性特発性関節炎-少関節炎型を見逃さないために-. 第96回日本整形外科学会学術集会, 東京, 2023. 5. 12 (口頭発表、シンポジウム)
25. 武谷博明, 林健太郎, 稲葉尚人, 阿南揚子, 江口佳孝, 高木岳彦, 関敦仁. 小児陳旧性Monteggia骨折で輪状靭帯断裂部への橈骨頭嵌頓によって脱臼整復に難渋した1例. 第35回日本肘関節学会学術集会, 山形, 2023. 2. 3(E-poster)
26. 武谷博明, 高木岳彦, 関敦仁, 山口桜, 林健太郎, 稲葉尚人, 阿南揚子, 高山真一郎. 当院での母指多指症IV型 末節収束型(Hung 分類 TypeIVD)への長母指屈筋腱 relocation の治療成績. 第66回日本手外科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 20 (口頭発表)
27. 武谷博明, 高木岳彦, 川崎みづ紀, 林健太郎, 稲葉尚人, 福田良嗣, 阿南揚子, 江口佳孝, 関敦仁. 青年期の握り母指症にwide awake surgery で伸筋腱再建を施行した1例. 第34回日本小児整形外科学会学術集会, 神戸, 2023. 11. 24 (ポスター発表)
28. 林健太郎, 関敦仁, 稲葉尚人, 川崎みづ紀, 武谷博明, 阿南揚子, 高木岳彦. 先天性長母指屈筋腱欠損の1例. 第22回関東上肢先天異常症例検討会, web, 2023. 7. 26 (口頭発表)
29. 川崎みづ紀, 高木岳彦, 武谷博明, 佐藤春佳, 林健太郎, 阿南揚子, 福田良嗣, 江口佳孝, 関敦仁. 当院における母指多指症Wassel 分類IV型の治療成績-短母指外転筋移行 APB rerouting の母指多指症への応用-. 第34回日本小児整形外科学会学術集会, 神戸, 2023. 11. 24 (口頭発表)
30. 江口佳孝 福田良嗣 中川誉之 山口桜 阿南揚子 林健太郎 武谷博明 高木岳彦 関敦仁 乳児股関節健診の現状と今後の展望 2023 第33回関東小児整形外科学研究会, 茨城 2023. 2. 4 (口頭)
31. 福田良嗣 江口佳孝 佐藤春佳 Perthes 病を合併したMeyer 病の臨床成績の検討. 第62回日本小児股関節研究会 千葉 2023. 6. 23(口頭発表)
32. 江口佳孝 福田良嗣 佐藤春佳 股関節健診体制の社会実装とその精度管理上の問題点 第62回日本小児股関節研究会 千葉 2023. 6. 22(口頭発表 シンポジウム)
33. 中川 誉之 江口 佳孝, 福田 良嗣, 佐藤 春佳, 高木 岳彦, 阿南 揚子, 稲葉 尚人, 林 健太郎, 武谷 博明, 関 敦仁 6歳以下の小児大腿骨骨幹部骨折に対する手術治療の成績 第34回日本小児整形外科学会学術集会, 神戸, 2023. 11. 24 (口頭発表)
34. 中川誉之. 6歳以下の小児大腿骨骨幹部骨折に対する手術治療の成績. 第49回日本骨折治療学会学術集会, 静岡, 2023. 7. 1(口頭発表, 一般演題)
35. 福田 良嗣 江口 佳孝, 川崎 みづ紀, 佐藤 春佳, 武谷 博明, 林 健太郎, 阿南 揚子, 高木 岳彦, 関 敦仁 当院における小児のステロイド性大腿骨頭壊死の検討 第34回日本小児整形外科学会学術集会, 神戸, 2023. 11. 23 (口頭発表)
36. 佐藤 春佳 江口 佳孝, 川崎 みづ紀, 武谷 博明, 林 健太郎, 福田 良嗣, 阿南 揚子, 高木 岳彦, 関 敦仁 小児屈曲型上腕骨顆上骨折の治療経験 神戸, 2023. 11. 24 (口頭発表)

37. 江口佳孝 阿南揚子 関敦仁 宮寄治 透明脊椎異骨症の骨格形態異常. 第34回日本小児整形外科学会学術集会, 神戸, 2023. 11. 24 (ポスター発表)
38. 江口佳孝 福田良嗣 佐藤春佳 阿南揚子 林健太郎 川崎みつ紀 山本雅貴 高木岳彦 関敦仁 コロナ禍のパンデミック下で切れ目なく股関節健診を継続するための工夫 第21回世田谷区医師会医学会 東京 2023. 12. 2
39. 福田良嗣 江口佳孝 阿南揚子 林健太郎 中川誉之 山口桜 武谷博明 高木岳彦 関敦仁 当院における進行性骨化性線維異形成症の実態調査. 第33回関東小児整形外科研究会, つくば, 2023. 02. 04 (口頭発表)
40. 福田良嗣 江口佳孝 佐藤春佳 阿南揚子 林健太郎 川崎みつ紀 武谷博明 高木岳彦 関敦仁 当院における先天性外反母趾を合併した進行性骨化性線維異形成症4例の検討. 第48回日本足の外科学会学術集会. 大阪, 2023. 10. 27 (口頭発表)
41. 稲葉尚人, 関敦仁, 武谷博昭, 林健太郎, 福田良嗣, 阿南揚子, 高木岳彦, 江口佳孝, 高山真一郎. 分娩骨折として生じた新生児上腕骨遠位骨端離解の1例. 第34回日本小児整形外科学会学術集会, 神戸, 2023. 11. 24 (ポスター発表)
42. 林健太郎, 関敦仁, 武谷博昭, 稲葉尚人, 福田良嗣, 阿南揚子, 高木岳彦, 江口佳孝, 高山真一郎. 単指型・無指型の合短指症に対する中手骨骨端軟骨移植術症例の検討. 第34回日本小児整形外科学会学術集会, 神戸, 2023. 11. 24 (口頭発表)
43. 林健太郎, 高木岳彦, 関敦仁, 山口桜, 武谷博明, 稲葉尚人, 阿南揚子, 高山真一郎. Fourcher 分類I型の第4、5中手骨癒合症の手術例の検討. 第66回日本手外科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 20 (口頭発表)
44. 阿南揚子, 川崎みつ紀, 高木岳彦, 武谷博明, 林健太郎, 江口佳孝, 関敦仁. 偽性偽性副甲状腺機能低下症に伴う中指伸筋腱脱臼の手術治療の1例 第35回日本整形外科学会骨系統疾患研究会, 神戸, 兵庫, 2023. 11. 24 (口頭発表)

[講演]

1. Takagi T. Posterior approach for humeral lateral condyle fractures. PULM Talks #34, Barcelona, Spain (Web seminar) 2023. 12. 12
2. 高木岳彦. 小児肘周辺骨折における病態と戦略 ～国立成育医療研究センターでの取り組みを中心に～. 第46回金鯢手外科セミナー, 名古屋大学医学部基礎研究棟3階 第1会議室, 名古屋, 2023. 11. 30
3. 関敦仁. 子どもの上肢疾患の診かた-手肘の先天異常を中心に-. 第14回秋田県小児整形外科研究会, 秋田web, 2023. 7. 8
4. 関敦仁. 当院における小児整形外科治療の実際. 第10回北関東慶応整形外科研究会, 栃木, 2023. 10. 7
5. 江口佳孝. 小児の整形外科疾患 成育こどもセミナー 国立成育医療研究センター web 2023. 9. 21
6. 福田良嗣. ペルテス病のABC 慶應小児整形研究会. 慶應義塾大学病院, 東京, 2023. 12. 14

[広報活動]

[教育：国際的人材育成]

＜海外留学医師受け入れ＞

1. 2022. 9. 20-2023. 3. 28 インド Sayantani Misra

2. 2023. 1. 16-2023. 6. 30 フィリピン [Angelo Ostrea](#)
3. 2023. 4. 3-2023. 6. 21 フィリピン [Abigail Garcia](#)
4. 2023. 6. 5-2023. 6. 16 タイ [Petai Sopasilp](#)
5. 2023. 7. 3-2023. 9. 29 マレーシア [Mah Keong Kok](#)
6. 2023. 8. 7-2023. 9. 1 香港 [Rachel Lam](#)
7. 2023. 10. 2-2023. 11. 9 サウジアラビア [Abdulmuhsen Alshammari](#)
8. 2023. 10. 2-2023. 11. 9 サウジアラビア [Alabdullatrif Mohammed](#)
9. 2023. 11. 28-2023. 12. 21 イタリア [Rocco Maria Panzera](#)

[取材]

1. [江口佳孝](#) 内股歩行 「からだの質問箱」読売新聞 2023. 3. 4.(記事掲載)
 2. [江口佳孝](#) 発育性股関節形成不全 「からだCafe」読売新聞(夕刊)(取材記事掲載) 2023. 10. 7
 3. [江口佳孝](#) 発育性股関節形成不全 早期発見のポイントは?…国内で生まれる赤ちゃんの1000人に1~3人 ヨミドクター(読売新聞の医療・健康・介護サイト)
- URL<https://yomidr.yomiuri.co.jp/article/20231010-OYTET50018/> 2023. 10. 21(取材記事掲載)

泌尿器科

[著書]

1. 長谷川 雄一:【小児期精巣関連疾患の診断と治療】精索静脈瘤;小児外科(0385-6313)55 巻 9 号 Page981-984(2023. 09)
2. 友政 直也, 石川 美夢, 山本 修太郎, 木村 高弘, 長谷川 雄一:両側停留精巣を契機に判明した Kallmann 症候群の1例;泌尿器外科(0914-6180)36 巻 10 号 Page1149-1152(2023. 10)
3. Shiohara T, Miyazaki O, Hasegawa Y, Uematsu S, Nosaka S. Solitary whirlpool sign demonstrated with testicular torsion on ultrasonography. *Pediatr Int.* 2023 Jan-Dec;65(1):e15566.
4. Yamamoto S, Hasegawa Y, Tomomasa N, Ishikawa M, Yamazaki T, Koike Y, Kimura T. A Novel Strategy to Obtain Continence of a Hypoplastic Bladder in a Patient With an Ectopic Ureter Accompanied by a Solitary Kidney. *Urology.* 2023 Mar;173:e10-e12.

[学会発表]

1. 石川 美夢, 友政 直也, 山本 修太郎, 木村 高弘, 長谷川 雄一:Gonadoblastoma を認めた Denys-Drash 症候群の3例、日本泌尿器科学会東部総会 (2023. 08)
2. 友政 直也, 石川 美夢, 山本 修太郎, 木村 高弘, 長谷川 雄一:両側停留精巣を契機に判明した Kallmann 症候群の1例、日本泌尿器科学会東部総 (2023. 08)
3. 長谷川 雄一:『ドンと来い!異所性尿管瘤』経膀胱的アプローチの疑問にお答えします 日本小児泌尿器科学会(2023. 06)
4. 小林 真也, 宮坂 実木子, 今井 絢子, 岡本 礼子, 塩原 拓実, 堤 義之, 宮寄 治, 長谷川 雄一, 金

森 豊, 野坂 俊介: 異所性精巣3例の臨床像と画像所見; 日本小児放射線学会総会(2023. 05)

5. 土井 響, 五十嵐 瑞穂, 宇治田 風紗, 今野 裕章, 鹿島 健幹, 藤岡 晶子, 宮城 元, 吉井 啓介, 内木 康博, 堀川 玲子, 石黒 精, 井口 晶裕, 石川 美夢, 長谷川 雄一: Prepubertal vaginal bleeding を契機に von Willebrand 病と診断した4歳女児の1例; 日本内分泌学会総会(2023. 05)

リハビリテーション科/発達評価支援室

〔原著論文: 査読付〕

1. 矢野綾子, 山崎伸也, 樋口幸治, 中村康二, 木村麻美, 中村隆, 上出杏里, 阿久根徹. 先天性片側上腕形成不全児に対する上腕義手製作およびリハビリテーション医療の経験と課題. 日本義肢装具会誌 2023;39:131-137
2. 笹尾丞子, 上出杏里. 乳幼児期に生体肝移植を施行した児の姿勢-運動発達の特徴. 理学療法東京 2023;10:36-41
3. 鈴木朋代, 蓮川嶺希, 高橋香代子. 病院および訪問においてがん終末期に携わる作業療法士が感じる困難. 作業療法ジャーナル 2023 ; 57 : 1473-1481
4. 彦坂信, 金子剛, 佐藤裕子, 小林真司, 鈴木麻由美, 福島良子, 吉田帆希. 口蓋裂術後の鼻音腔閉鎖機能不全に対する直脂肪注入術の1例. 日本口蓋裂学会雑誌 2023 ; 48 : 61-68

〔著書〕

1. 上出杏里. リハビリテーション医学・医療における処方作成テキスト. 小児疾患 発達障害 (神経発達症). 久保俊一(総編集). 医学書院. 2023 : 205
2. 上出杏里. リハビリテーション医学・医療における処方作成テキスト. 小児における認知機能訓練 . 久保俊一(総編集). 医学書院. 2023 : 68

〔学会発表〕

1. 蓮川嶺希, 鈴木朋代, 上出杏里, 高橋香代子: がん終末期に携わる作業療法士が感じる困難に関する質的検討～小児と成人の比較から導く小児がんに携わる作業療法士の視点～. 第31回日本医学総会. 東京, 2023. 4. 22
2. 峯耕太郎, 壺井伯彦, 上出杏里, 内田孟. 早期リハビリテーション導入環境下における小児肝移植術後の自立歩行再獲得時期に関連する要因の検討: 6NC リトリート 2023, 東京. 2023. 4. 22
3. 今井裕弥子, 木村奈々子, 上出杏里, 彦坂信: Beckwith-Wiedemann 症候群の舌形成術後の構音発達経過について. 第24回日本言語聴覚学会. 愛媛. 2023. 6. 23
4. 木村奈々子, 今井裕弥子, 佐藤裕子, 上出杏里, 守本倫子: Charcot-Marie-Tooth 病に伴う重度難聴に対し人工内耳埋め込み術を施行した一例. 第24回日本言語聴覚学会. 愛媛. 2023. 6. 23
5. 上出杏里. 障がい者スポーツにおけるリハビリテーション医学の貢献 パラリンピックにおける医師の実践 第60回日本リハビリテーション医学会学術集会. 福岡. 2023. 7. 1
6. 峯耕太郎, 儀間裕貴, 笹尾丞子, 矢島侑実, 丸山秀彦, 諫山哲哉, 上出杏里. 修正36週で慢性肺疾患と診断される極低出生体重児のDubowitz 神経学的評価スコアの特徴: 第10回日本小児理学療法学会

学術大会, 北海道. 2023. 10. 21

7. 笹尾丞子, 峯耕太郎, 阪本靖介, 上出杏里. 当センターにおける小児肝移植術後患者の退院後の粗大運動発達経過と周術期因子の検討: 第 10 回日本小児理学療法学会学術大会, 北海道. 2023. 10. 21
8. 上出杏里. 医療的ケア児・障害児らの活動・社会参加を育むリハビリテーション医療 第 7 回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会. 宮崎. 2023. 11. 5
9. 上出杏里. 国際競技大会帯同時における医薬品管理に関する一考察. 第 32 回日本パラスポーツ学会. 大分. 2023. 11. 18

[その他]

1. 上出杏里. パラスポーツを介した子どもの活動と社会参加. ラジオ NIKKEI 「小児科診療 UP-to-DATE」 2023. 9. 19 放送

[講演]

1. 深澤聡子: 緩和のリハビリテーション～当院における課題を考える～, 第 11 回緩和ケア小委員会, 国立成育医療研究センター, 東京, 2023. 3. 23

[院内研修]

1. 並木亮: ポジショニング・呼吸理学療法研修会. ICU 新人看護師研修会. 2023. 4
2. 並木亮: ポジショニング・呼吸理学療法研修会. 8 西看護師勉強会. 2023. 5
3. 高原伸治: PICU におけるリハビリテーション. ICU 医師勉強会. 2023.
4. 峯耕太郎: PICU におけるリハビリテーション. ICU 看護師勉強会 (ポジショニング) 2023. 6
5. 並木亮: PICU におけるリハビリテーション. ICU 看護師勉強会 (呼吸介助) 2023.
6. 矢島侑実: PICU におけるリハビリテーション. ICU 看護師勉強会 (ROM) 2023. 8

形成外科

[原著論文: 査読付]

14. Kono H., Hikosaka M., Kaneko T., and Baba Y.: Fate of Costochondral Grafts for Micrognathia: 3D Analysis of Postoperative Length, Position, and Graft Take. J Craniofac Surg 2023; 34: 350-355

[原著論文: 査読なし]

1. 中島 悠希, 桑原 広輔, 彦坂 信, 高松 亜子, and 金子 剛: 頭蓋縫合早期癒合症に対する 2 方向頭蓋骨延長術の有用性の検討 同一患者における実際の手術と仮想手術の比較から. 日本形成外科学会会誌 2023; 43: 134-139
2. 彦坂 信, 金子 剛: 【実践 脂肪注入術-疾患治療から美容まで-】鼻咽腔閉鎖機能不全に対する自家脂肪注入術. PEPARS 2023; 73-79
3. 彦坂 信, 金子 剛, 佐藤 裕子, 小林 眞司, 鈴木 麻由美, 福島 良子, and 吉田 帆希: 口蓋裂術後の鼻咽腔閉鎖機能不全に対する自家脂肪注入術の 1 例. 日本口蓋裂学会雑誌 2023; 48: 61-68

[症例報告]

1. Sato J., Yotani N., Shoji K., Mori T., Fujino A., Hikosaka M., Kubota M., and Ishiguro A.: Necrotizing fasciitis following rapidly deteriorating neonatal omphalitis with good initial presentation. IDCases 2023; 32: e01750 該当なし

[総説]

なし

[著書]

なし

[ガイドライン、報告書、その他]

なし

[学会発表]

1. 彦坂 信, 小林 眞司, 杠 俊介, 玉田 一敬, 野口 昌彦, 矢口貴一郎, 蓋 若琰, 金子 剛, 北畑伶奈, 内田真由佳: 口唇口蓋裂の患者立脚型評価質問紙「CLEFT-Q」. 第66回日本形成外科学会総会・学術集会, 長崎, 2023. 4. 26
2. 高松亜子, 畑野麻子, 中島悠希, 彦坂 信, 金子 剛: ヘルメットによる頭蓋形状矯正治療を行なったヌーナン症候群の2例. 第66回日本形成外科学会総会・学術集会, 長崎, 2023. 4. 26
3. 彦坂 信, 小林 眞司, 杠 俊介, 玉田 一敬, 野口 昌彦, 矢口貴一郎, 蓋 若琰, 北畑伶奈, 内田真由佳, 金子 剛: 口唇口蓋裂におけるアピアランス問題と「CLEFT-Q」. 第66回日本形成外科学会総会・学術集会, 長崎, 2023. 4. 26
4. 金子 剛, 彦坂 信, 高松亜子, 山口和章, 高瀬 知幸, 村井 充, 杉山久幸, 平野 綾夏: 強制換気システムを有するハイブリッド型頭蓋形状矯正ヘルメットの開発. 第66回日本形成外科学会総会・学術集会, 長崎, 2023. 4. 26
5. 繼 渉, 倉田 さつき, 彦坂 信, 金子 剛, 高松 亜子: 日本人健常乳児の頭蓋形態の縦断的観察研究. 第66回日本形成外科学会総会・学術集会, 長崎, 2023. 4. 26
6. 阿彦 希, 馬場 祥行, 疋田 理奈, 五十川 伸崇, 彦坂 信: 当センター矯正歯科を受診した先天性疾患患者の臨床統計的調査. 第47回日本口蓋裂学会総会・学術集会, 東京, 2023. 5. 25
7. 彦坂 信, 小林 眞司, 杠 俊介, 玉田 一敬, 野口 昌彦, 矢口貴一郎, 蓋 若琰, 北畑伶奈, 内田真由佳, 鎌田将史, 赤堀 真, 金子 剛: 形成外科の観点からみる口唇口蓋裂診療における心理社会的支援の現状と未来. 第47回日本口蓋裂学会総会・学術集会, 東京, 2023. 5. 25
8. Hikosaka M., Kaneko T., Gai R, Kobayashi S, Noguchi M, Tamada I, Yaguchi K, Yuzuriha S: Construct-Validity of Japanese version of CLEFT-Q: cleft-specific patient-reported outcome questionnaire.. 15th Japan-Korea Congress of Plastic and Reconstructive Surgery, 福岡, 2023. 5. 29
9. 今井 裕弥子, 木村 奈々子, 上出 杏里, 彦坂 信: Beckwith-Wiedemann 症候群の舌形成術後の構音

- 発達経過について. 第24回日本言語聴覚学会, 愛媛, 2023. 6. 23
10. 彦坂 信: 口唇口蓋裂における QOL-PRO. QOL-PRO 研究会 第 19 回研究セミナー, 東京, 2023. 6. 24
 11. 金子 剛, 彦坂 信, 高松亜子, 山口和章, 高瀬 知幸, 村井 充, 杉山久幸, 平野 綾夏: 3D プリンターを用いて快適さを追求したハイブリッド型頭蓋形状矯正ヘルメットの開発. 第 8 回頭蓋形状誘導療法研究会, 福島, 2023. 6. 30
 12. 彦坂 信: 小児神経外科学会シンポジウムに参加して. 第 8 回頭蓋形状誘導療法研究会, 福島, 2023. 6. 30
 13. 彦坂 信: ヘルメット治療の至適時期はありますか?. 第 8 回頭蓋形状誘導療法研究会, 福島, 2023. 6. 30
 14. 彦坂信, 金子剛, 高松亜子: 変形性斜頭症・短頭症に対する頭蓋形状矯正ヘルメット治療: 科学的エビデンスに基づく情報提供と合理的な意思決定の必要性. 第51回日本小児神経外科学会, 栃木, 2023. 6. 9
 15. 鎌田将史, 彦坂信, 赤堀真, 金子剛, 荻原英樹, 宇佐美憲一: 前頭眼窩形成術時の視力障害に対する当院での予防策. 第19回 craniosynostosis 研究会, 福島, 2023. 7. 1
 16. 宇佐美憲一, 彦坂信, 熊谷信利, 澁江昭利, 鎌田将史, 赤堀真, 荻原英樹: 頭蓋縫合早期癒合症患者に対する髄液シャント術の実際. 第19回 craniosynostosis 研究会, 福島, 2023. 7. 1
 17. Kamata M, Hikosaka M, Kaneko T, Takamatsu A, Kitabata R, Uchida M, Ogiwara H, Usami K: Advantage of Endoscope-Assisted Suturectomy for Syndromic Craniosynostosis. 20th International Society of Craiofacial Surgery Congress, Seattle, USA, 2023. 9. 5
 18. Hikosaka M, Kaneko T, Gai R, Kobayashi S, Noguchi M, Tamada I, Yaguchi K, Yuzuriha S: Construct validation of Japanese version of CLEFT-Q: cleft lip and palate-specific patient-reported outcomes measure.. International Society for Quality of Life Research 30th Annual Conference, Calgary, Canada, 2023. 10. 18
 19. 彦坂信, 金子剛, 高松亜子, 鎌田将史, 赤堀 真, 窪田 満: 変形性斜頭症・短頭症に対する頭蓋形状矯正ヘルメット治療: 前後二分割延長・パッシブ型ヘルメット. 第67回日本新生児成育医学会・学術集会, 神奈川, 2023. 11. 4
 20. 鎌田将史, 彦坂信, 赤堀真, 金子剛, 荻原英樹, 宇佐美憲一: 症候群性頭蓋縫合早期癒合症における内視鏡下縫合切除術後の骨欠損が後の monobloc advancement に与える影響についての検討. 第41回日本頭蓋顎顔面外科学会総会・学術集会, 兵庫, 2023. 11. 9
 21. 赤堀 真, 鎌田将史, 彦坂信, 小林 眞司, 金子 剛, 佐藤 裕子, 鈴木 麻由美, 福島 良子, 吉田 帆希: 鼻咽腔閉鎖機能不全に対する自家脂肪注入術. 第41回日本頭蓋顎顔面外科学会総会・学術集会, 兵庫, 2023. 11. 9
 22. 彦坂 信, 金子 剛, 鎌田将史, 赤堀 真: 立体感のある耳介再建を可能とするエキスパンダーを用いた小耳症手術. 第41回日本頭蓋顎顔面外科学会総会・学術集会, 兵庫, 2023. 11. 9
 23. Hikosaka M, Kaneko T, Takamatsu A, Kamata M, Akahori M: Cranial shape induction: management by helmets. 4th Congress of Asian-Australasian Society for Pediatric Neurosurgery, 神奈川, 2023. 12. 13
 24. 鎌田将史, 彦坂 信, 桑原広輔: 症候群性頭蓋縫合早期癒合症に対する内視鏡補助下縫合切除術後の頭蓋形態評価. 第33回日本シミュレーション外科学会, 東京, 2023. 12. 2

25. 桑原 広輔, 彦坂 信, 高松 亜子, 加持 秀明, 金子 剛: “かたち”を特徴づける新しい要素を抽出する-相同モデルを利用した頭蓋形態の研究-. 第33回日本シミュレーション外科学会, 東京, 2023. 12. 2

[講演]

1. 彦坂信, 金子剛, 高松亜子: 変形性斜頭症. 神奈川県立こども医療センター医師の会, 神奈川, 2023. 1. 25

耳鼻咽喉科

[原著]

1. Murata Y, Masuda H, Moroka S, Yotani N, Morimoto N, Kubota M, Ishiguro A: Kawasaki Disease with Facial Nerve Palsy. Indian J Pediatr. 2023 doi: 10.1007/s12098-023-04835-y.
2. Hara M, Morimoto N, Watabe T, Morisaki N, Matsumoto K: Can the effectiveness of tonsillectomy for PFAPA syndrome be predicted based on clinical factors. Int J Rheum Dis. 2023;26(3):480-486. doi: 10.1111/1756-185X.14559
3. Yamamoto N, Balciuniene J, Hartman T, Diaz-Miranda MA, Bedoukian E, Devkota B, et al: Comprehensive Gene Panel Testing for Hearing Loss in Children: Understanding Factors Influencing Diagnostic Yield. J Pediatr. 2023 Nov;262:113620. doi: 10.1016/j.jpeds.2023.113620.
4. Kaur M, Blair J, Devkota B, Fortunato S, Clark D, Lawrence A, Kim J, Do W, Semeo B, Katz O, Mehta D, Yamamoto N, et al: Genomic analyses in Cornelia de Lange Syndrome and related diagnoses: Novel candidate genes, genotype-phenotype correlations and common mechanisms. Am J Med Genet A. 2023 Aug;191(8):2113-2131. doi: 10.1002/ajmg.a.63247.
5. Okura S, Ishii H, Suzuki A, Saegusa C, Fujiki K, Sugano K, Suzuki N, et al: Generation of two induced pluripotent stem cell lines from individuals without auditory disorders. Stem Cell Res. 2023 Mar;67:103017. doi: 10.1016/j.scr.2023.103017.
6. 北川 智介, 山本 修子, 鈴木 法臣, 原 真理子, 守本 倫子: 聴力低下を伴ったゴーハム病の小児3例. 耳鼻と臨床 2023 ; 69 (4) : 267-276.
7. 仙田 里奈, 角木 拓也, 黒瀬 誠, 守本 倫子, 高野 賢一: 小児気管切開患者の長期経過に関する全国調査. 日気食科学会報 2023;74(3):228-234. doi.org/10.2468/jbes.74.228
8. 高田 菜月, 原 真理子, 和田 友香, 渡部 高久, 高橋 希, 小川 武則, 守本 倫子: 気管切開を要した小児咽頭狭窄症例に対する重症度スコアリング化の試み. 日気食科学会報 2024;75(1):21-28.
9. 古田 真知子, 糟谷 周吾, 守本 倫子, 鈴木 康之: 喉頭裂縫合術において非挿管・自発呼吸で術中管理した小児の1例. 日小児麻酔会誌 2023;29(1):56-60.

[総説]

1. 守本倫子：小児の耳鼻咽喉・頭頸部手術—保護者への説明のコツから術中・術後の注意点まで—気管切開術・喉頭気管分離術・喉頭気管再建術. 耳喉頭頸 2023 ; 95 (9) : 720-725.
2. 守本倫子：声門下腔狭窄に対する耳鼻科的アプローチ. 小児外科 2023 ; 55(10) : 1070-1075.
3. 山口宗太, 守本倫子：小児の睡眠時無呼吸. 糖尿病・内分泌代謝科 2023, 57(2), 197-203.
4. 川北 大介, 猪原 秀典, 折館 伸彦, 守本 倫子, 丹生 健一：ヒトパピローマウイルス (HPV) ワクチン—HPV と中咽頭がん・喉頭乳頭腫. 臨床とウイルス 2023;51(1):16-21
5. 山本 修子, 守本 倫子：ポストコロナ時代の感染症診療 II 感染症診療各論 頭頸部感染症 急性中耳炎. 診断と治療 2023 ; 111 Suppl. : 76-80. DOI : 10.34433/dt.0000000130
6. 守本倫子：おたふく風邪と難聴. モダンメディア 2023; 69 (5) :115-120.

[ガイドライン, 政策提言]

1. 先天性 CMV 感染症診療ガイドライン 2023. (日本医療研究開発機構 成育疾患克服等総合研究事業、2023 年 10 月)
chrome-extension://efaidnbmninnibpcajpcgglelefndmkaj/https://www.jspid.jp/wp-content/uploads/2023/03/CMV-guidelines-2023.pdf
2. 難聴児の家族等や支援に携わる関係者が必要とする基本的な情報の整理・一覧化に関する調査研究. 令和 4 年度障害者総合福祉推進事業、PWC コンサルティング合同会社
https://www.pwc.com/jp/ja/knowledge/track-record/welfare-promotion-business2023.html

[著書]

1. 守本倫子：II 解説・エキスパートオピニオン 6 耳鼻咽喉科診療の実際. 先天性 CMV 感染症診療ガイドライン 2023. 岡 明, 他編. 診断と治療社、東京、PP113-117
2. 守本倫子：ムンプス難聴；難聴・耳鳴診療ハンドブック 最新の検査・鑑別診断と治療. 大森孝一編 中山書店 東京都 p p157-161 2023
3. 守本倫子：第 49 章耳鼻咽喉科疾患. 小児科学, 2023, 加藤元博 編, 文光堂、東京、PP1154-1172
4. 守本倫子：VIII 境界領域疾患 11 難聴. 小児疾患診療のための病態生理 3, 小児内科・小児外科編集委員会共編, 東京医学社、東京、p1065

[学会活動 (講演、シンポジウム)]

1. 守本倫子：小児難聴医療はどう変わっていける？第 85 回耳鼻咽喉科臨床学会学術講演会シンポジウム 1 金の卵を守る小児難聴医療, 東京, 2023. 6. 24 国内・口演
2. 守本倫子：難聴児の早期発見. 第 70 回日本小児保健協会学術集会シンポジウム 5 これからの乳幼児健診, 東京, 2023. 6. 18 国内・口演
3. 守本倫子：気管切開と嚥下との関連や嚥下障害の方のカニューレ管理での注意点について (小児), 教育セミナー 1, 第 29 回日本摂食嚥下リハビリテーション学会, 横浜, 2023. 9. 3 国内・口演
4. 守本倫子：先天性上気道症候群 (CHAOS) 児のその後. 第 8 回胎児 MRI 研究会学術集会, 慈恵医大, 2023. 2. 5 国内・口演
5. 守本倫子：咽頭狭窄は病名になるのか？第 36 回日本口腔咽頭科学会教育講演 1、高知, 2023. 9. 14 国内・口演

6. Noriko Morimoto: Rescue of Fetal airway stenosis via EXIT Procedure. 48 hours of Otolaryngology Updates, 2023. 3. 25 国外・口演
7. Noriko Morimoto: Participation into EXIT Procedure. 7th Asia Pacific Pediatric Airway Conference, Korea, 2023. 3. 3 国外・口演
8. Noriko Morimoto: Endoscopic posterior cricoid split with rib graft. 7th Asia Pacific Pediatric Airway Conference, Korea, 2023. 3. 4 国外・口演
9. Noriko Morimoto, Noriomi Suzuki, Nobuko Yamamoto, Mariko Hara: Prognostic factors affecting surgical outcomes in pediatric subglottic stenosis: a 5-year experience at a tertiary referral center. ASPO annual meeting, Boston, 2023. 5. 6 国外・ポスター

[講習会]

1. 守本倫子: 小児気管切開カニューレの管理と抜去までの道のり. 小児在宅医療講習会、神奈川県立こども医療センター, 2023. 5. 12
2. 守本倫子: わが国のムンプス難聴の現状と課題. 石川県小児科医会ワクチン講演会, 石川県 (Web) 2023. 8. 31
3. 守本倫子: 手話言語条例とこれからの東京都のろう教育. 東京都のろう教育を考えるフォーラム、web, 2023. 3. 12
4. 守本倫子: 聴こえの基礎知識、難聴に関する病気とその対応. 立川学園両親講座, 2023. 10. 24

眼科

[原著論文: 査読付] (Reviewed Paper)

1. Azuma N, Yokoi T, Tanaka T, Matsuzaka E, Saida Y, Nishina S, Terao M, Takada S, Fukami M, Okamura K, Maehara K, Yamasaki T, Hirayama J, Nishina H, Handa H, Yamaguchi Y. Integrator complex subunit 15 controls mRNA splicing and is critical for eye development. Hum Mol Genet. 2023 Jun 5;32(12):2032-2045. doi: 10.1093/hmg/ddad034.
2. Oshika T, Endo T, Kurosaka D, Matsuki N, Miyagi M, Mori T, Nagamoto T, Negishi K, Nishina S, Nomura K, Unoki N, Yoshida S. Long-term surgical outcomes of pediatric cataract-multivariate analysis of prognostic factors. Sci Rep. 2023, 13, 21645. <https://doi.org/10.1038/s41598-023-49166-2>
3. Iimori H, Nishina S, Hieda O, Goseki T, Nishikawa N, Suzuki S, Hikoya A, Komori M, Suzuki H, Yoshida T, Hayashi S, Mori T, Kimura A, Morimoto T, Shimizu Y, Negishi T, Shimizu T, Yokoyama Y, Sugiyama Y, Azuma N, Sato M. Clinical presentations of acquired comitant esotropia in 5-35 years old Japanese and digital device usage: a multicenter registry data analysis study. Jpn J Ophthalmol. 2023, <https://doi.org/10.1007/s10384-023-01023-5>
4. Torii K, Nishina S, Morikawa H, Mizobuchi K, Takayama M, Tachibana N, Kurata K, Hikoya A, Sato M, Nakano T, Fukami M, Azuma N, Hayashi T, Saitsu H, Hotta Y. The structural abnormalities are deeply involved in the cause of *RPGRIPI*-related retinal dystrophy in

Japanese patients. Int. J. Mol. Sci. 2023, 24, 13678.

<https://doi.org/10.3390/ijms241813678>

5. Morikawa H, Nishina S, Torii K, Hosono K, Yokoi T, Shigeyasu C, Yamada M, Kosuga M, Fukami M, Saitsu H, Azuma N, Hori Y, Hotta Y. A pediatric case of congenital stromal corneal dystrophy caused by a novel variant c.953del of the DCN gene. 2023 Hum Genome Var 10, 9, 2023, DOI 10.1038/s41439-023-00239-8
6. Yoneda, T, Miki A, Wakayama A, Nishina S. National survey of amblyopia treatment in Japan: Comparison with Amblyopia Treatment Study results from Pediatric Eye Disease Investigator Group. Jpn J Ophthalmol. 2023, 67(1):97-108.
7. 古味優季, 仁科幸子, 坂田公毅, 森川葉月, 檜塚絵実, 吉田朋世, 林思音, 横井匡, 東範行, 寺島慶太, 羽賀千都子, 義岡孝子. 発達白内障に網膜芽細胞腫を合併した1例. 日眼会誌 127(5): 563-569, 2023.

[総説]

1. 仁科幸子: 簡便な機器を用いた乳幼児の眼科健診. 母子保健マニュアル 改定8版, 五十嵐隆, 中林正雄, 竹田省編, p144, 南山堂, 2023. 3
2. 仁科幸子: 新生児・乳児の眼科的異常. 小児科診療ガイドライン-最新の診療指針, 加藤元博編, p809-812, 総合医学社, 2023. 1
3. 吉田朋世: 【未熟児網膜症アップデート】未熟児網膜症のスクリーニング検査(解説). 眼科(0016-4488)65巻1号 Page3-7, 2023. 01
4. 吉田朋世: 【小児の眼科健診と学校保健】学校教育とデジタルデバイスの使用(解説). あたらしい眼科(0910-1810)40巻4号 Page495-501, 2023. 04
5. 吉田朋世, 仁科幸子: Marfan 症候群脱臼水晶体の手術適応と手技(解説). 眼科手術(0914-6806)36巻3号 Page411-414, 2023. 07
6. 林思音: 3歳児健診での精密検査方法とみつけたい疾患. あたらしい眼科 40(4): 4435-441, 2023.
7. 林思音: 3歳児眼科健診におけるフォトスクリーナーの役割と課題. 臨床眼科 77(1): 10-16, 2023.
8. 林思音: 動眼神経麻痺が原因の複視への治療方針. OCULISTA 124: 41-46, 2023.
9. 林思音: 眼底所見が正常な網膜疾患. 臨床眼科 77: 1420-1426, 2023.
10. 林思音: 講演ハイライト: "Optimal and timely vision care for children" Screening strategy for amblyopia. 日コレ誌 65: 122-129, 2023.
11. 林思音: 乳幼児の眼鏡合わせ. 最適 x 快適な眼鏡合わせ. 眼科グラフィック. メディカ出版, 6:667-674, 2023.
12. 遠藤陽代, 松岡真未: 眼科ケア 2023 年秋季増刊 「一人でできる」を目指すための眼科検査 完全攻略バイブル, p235-240 2023 年 10 月

[著書]

1. 仁科幸子: 小児や障害児に適した眼鏡デザインと装用させるコツ. 小児の近視 診断と治療 第2版. 日本近視学会・日本小児眼科学会・日本視能訓練士協会編, p144-147, 三輪書店、東京, 2023
2. 仁科幸子: ネルソン小児科学 原著第21版 翻訳 Part t28 眼科編集 on line 2023. 5. 31
3. 仁科幸子: 疾患の早期発見の必要性. やさしい小児の眼科, 日本小児眼科学会編, p90-96, 診断と治

療社, 2023. 4

4. 林思音: 眼科一般検査. 小児眼科診療実践マニュアル. (野村耕治編) pp. 29-36, 2023.

[ガイドライン、報告書、その他] 学会・研究班ガイドライン、研究班報告書、刊行物等

1. 仁科幸子: 令和4年度厚生科学研究費補助金(難治性疾患政策研究事業)「乳幼児期に重篤な視覚障害をきたす難病の診療体制の確立」, 令和4年度研究報告書, 2023. 5
2. 寺崎浩子、東範行、北岡隆、日下俊次、近藤寛之、仁科幸子、盛隆興、山田昌和、吉富健志. 未熟児網膜症に対する抗VEGF療法の手引き(第2版). 日眼会誌 127(5): 570-578, 2023.
3. 柏井真理子、板倉麻理子、河原歩、小枝達也、南雲幹、二宮博文、林思音. (厚生労働省令和4年度子ども・子育て支援推進調査研究事業): 市町村および都道府県担当者のための3歳児健康診査における視覚検査の円滑な実施と精度管理のための手引書. https://www.cfa.go.jp/assets/contents/node/basic_page/field_ref_resources/cd892ed4-1ec9-4b60-aa2c-ec45d3967729/f31adb95/20231023_policies_kosodateshien_chousa_suishinchosa_r04-01_g33.pdf

[学会発表]

1. Nishina S. Myopia and acute acquired comitant esotropia in Japan. Invited speaker of strabismus & pediatric ophthalmology symposium, 130th annual meeting of the Korean Ophthalmological Society. 2023.11.24
2. Morikawa H, Nishina S, Torii K, Takayama M, Hosono K, Kanbe T, Saitsu H, Fukami M, Hori Y, Hotta Y. Clinical Phenotype of Japanese Infants with *CEP290*-Associated Leber Congenital Amaurosis. 日本人類遺伝学会第68回大会・Human Genetics Asia 2023 同時開催, 東京, 2023.10.13
3. Torii K, Nishina S, Morikawa H, Mizobuchi K, Takayama M, Tachibana N, Yokoi T, Miyamoto S, Fukami M, Kondo H, Azuma N, Hayashi T, Saitsu H, Hotta Y. Whole genome sequence for Japanese patients with Leber's congenital amaurosis and early onset retinal dystrophy. 日本人類遺伝学会第68回大会・Human Genetics Asia 2023 同時開催, 東京, 2023.10.14
4. Nishina S, Yoshida T, Onishi T, Morikawa H, Hayashi S, Yokoi T. Medial transposition of the lateral rectus muscle for third nerve palsy. 42nd meeting of the European Strabismus Association, Zagreb, Croatia, 2023.6
5. Hayashi S, Nishina S, Morikawa H, Utunomiya H, Edamatsu H, Yoshida T, Yokoi T. A case of worsening ocular position and movement after surgery for bilateral inferior oblique overaction. 42nd meeting of the European Strabismus Association, Zagreb, Croatia, 2023.6
6. Iimori H, Sato M, Nishina S. Clinical presentation of acquired comitant esotropia in young Japanese and its relationship to digital device usage: a multicenter registry data-analysis study. 42nd meeting of the European Strabismus Association, Zagreb, Croatia, 2023.6.8
7. Nishina S. Acute acquired comitant esotropia in children. Invited speaker of the Symposium "Strabismus and Amblyopia" 38th APAO Congress, Kuala Lumpur, Malaysia, 2023.2.25
8. Hayashi S, Kashizuka E, Yoshida T, Yokoi T, Nishina S, Okamura K. Identify Left and Right Eyes in Infant Face Photographs Using Deep Learning. 38th APAO Congress, Kuala Lumpur, Malaysia, 2023.2.25

9. Morikawa H, Nishina S, Torii K, Hosono K, Fukami M, Hotta Y. An infant case of congenital stromal corneal dystrophy caused by a novel variant c.953del of the DCN gene. 38th APAO Congress, Kuala Lumpur, Malaysia, 2023. 2. 23-26 poster.
10. 松岡真未, 海外佳奈子, 遠藤陽代, 吉田朋世, 林思音, 横井匡, 岡前むつみ, 宮田守, 仁科幸子. 複数回のロービジョンケアと院内を要した例の検討. 第64回日本視能矯正学会, 高松, 2023. 11. 18
11. 仁科幸子, 吉田朋世, 林思音, 森川葉月, 大西瑞恵, 横井匡. 小児難治性緑内障に対するマイクロバルス経強膜的毛様体光凝固術. 第77回日本臨床眼科学会, 東京, 2023. 10. 6
12. 大鹿哲郎, 永本敏之, 黒坂大次郎, 根岸一乃, 森隆史, 吉田茂生, 宮城麻衣, 野村耕治, 遠藤高生, 鶴木則之, 松木奈央子, 仁科幸子. 先天白内障手術長期成績に関する多施設スタディ. 第77回日本臨床眼科学会, 東京, 2023. 10. 9
13. 仁科幸子. 小児眼科医の立場から～乳幼児期からの連携と課題. シンポジウム「日本における早期の相談支援の現状と課題」. 第42回日本ロービジョン学会総会, 東京, 2023. 7. 1
14. 海外佳奈子, 松岡真未, 遠藤陽代, 矢彦沢玲子, 伊藤明子, 山田和歌奈, 川嶋栄子, 松島賢知, 岡前むつみ, 横井匡, 丹野哲也, 仁科幸子. 家族性滲出性硝子体網膜症に対するロービジョンケアと院内相談. 第42回日本ロービジョン学会総会, 東京, 2023. 6. 30
15. 不二門尚, 仁科幸子, 中野泰志. 視覚障がい乳幼児/学童のロービジョンケアに関する医療機関の現状調査. 第42回日本ロービジョン学会総会, 東京, 2023. 6. 30
16. 仁科幸子, 吉田朋世, 大西瑞恵, 森川葉月, 林思音, 横井匡, 富田香. 動眼神経麻痺に対する外直筋鼻側移動術. 第79回日本弱視斜視学会総会, 仙台, 2023. 6. 16
17. 森川葉月, 横井匡, 吉田朋世, 大西瑞恵, 林思音, 仁科幸子. 続発小児緑内障難治例に対する経毛様体扁平部アーメト緑内障バレル. 第48回日本小児眼科学会総会, 仙台, 2023. 6. 16
18. 林思音, 仁科幸子, 宇都宮寛, 枝松瞳, 森川葉月, 大西瑞恵, 吉田朋世, 横井匡. 下斜筋過動の術後に上斜視と眼球運動異常の増悪をきたした一例. 第79回日本弱視斜視学会総会, 仙台, 2023. 6. 16
19. 鳥居薫子, 仁科幸子, 森川葉月, 横井匡, 立花信貴, 溝渕圭, 宮本祥子, 近藤寛之, 林孝彰, 東範行, 才津浩智, 堀田喜裕. レーバー先天盲および早発発症網膜ジストロフィに対する全ゲノム解析. 第127回日本眼科学会総会, 東京, 2023. 4. 6
20. 落合信寿, 渡邊文夫, 大西瑞恵, 得津慶, 金子優, 川崎良, 日下俊次, 仁科幸子, 松田晋哉, 伏見清秀, 近藤寛之. 家族性滲出性硝子体網膜症における乳幼児治療件数の経年推移. 第127回日本眼科学会総会, 東京, 2023. 4. 6
21. 森川葉月, 仁科幸子, 林孝彰, 鳥居薫子, 細野克博, 佐藤美保, 横井匡, 深見真紀, 才津浩智, 東範行, 堀田喜裕. RPGRIP1 遺伝子変異によるレーバー先天盲の臨床像. 第127回日本眼科学会総会, 東京, 2023. 4. 7
22. 太刀川貴子, 清田真理子, 吉田朋世, 仁科幸子, 今野絵理子, 舟木俊成, 松本直, 横山康太, 齋藤雄太, 取手藍, 根岸貴志, 外山琢, 野田英一郎. 超低出生体重児における未熟児網膜症 東京都多施設研究 第3報. 第127回日本眼科学会総会, 東京, 2023. 4. 7
23. 吉田朋世. デジタルデバイスが内斜視へ及ぼす影響(Effects of digital devices on esotropia). 第127回日本眼科学会総会, 東京, 2023. 4. 7
24. 林思音. Screening Strategy for Amblyopia. 第127回日本眼科学会 International symposium, 東京, 2023. 4
25. 林思音. 弱視のスクリーニングと診断. 第39回日本弱視斜視学会講習会 教育講演, 仙台,

2023/6/17.

[講演・広報活動]

1. 仁科幸子. 子どもの視力について知ろう！～0歳～3歳の子どもを持つ保護者へ～. 令和5年度墨田区育児講演会, 2023. 10. 26 すみだ女性センター
2. 仁科幸子. 小児眼科診療～最近の話題～. 第66回東京都多摩地区眼科集談会, 2023. 10. 21 杏林大
3. 仁科幸子. 小児眼科診療～最近の話題～. 山形県眼科集談会 2023, 2023. 10. 15 山形
4. 仁科幸子. 視器の成り立ちについて. 浜松医科大学 医学部 神経・視覚系講義, 浜松医大, 2022. 9. 27
5. 仁科幸子. 小児のロービジョンケア就学・教育. 日本視能訓練士協会 専門教育プログラムⅡ<視能障害学>, web, 2023. 9. 18
6. 仁科幸子. 小児への眼鏡処方の基本. 第1回日本眼科医会眼鏡処方講習会, web, 2023. 9. 17
7. 仁科幸子. わかりやすい小児の眼疾患～先天白内障～ 第20回小児眼科診療セミナー, web, 2023. 9. 16
8. 仁科幸子. 小児の弱視をどう診るか?. 第14回上越眼科研究会, 2023. 9. 2, 上越市
9. 仁科幸子. 乳幼児の眼振. 第16回神経眼科コロキウム～細雪の会, 2023. 6. 24, 兵庫
10. 仁科幸子. 小児眼科ケーススタディ. 第3回Senju Ophthalmic Web Seminar, 2023. 5. 31 新潟大WEB
11. 仁科幸子. 小児眼科診療～最近の話題. 第277回鹿児島眼科集談会, 2023. 5. 20 鹿児島
12. 仁科幸子. 未熟児網膜症～ハイリスク症例の治療と晩期合併症～. アイリーア ROP 適応追加記念講演会 in 関西, 2023. 3. 30, web.
13. 仁科幸子. 子どもの視機能について. 第95回東京都小児保健協会学術講演会, 2023. 3. 19, web.
14. 仁科幸子. 小児眼科診療～最近の話題. 大田区眼科学術講演会, 2023. 1. 14 東京
15. 林思音. 3歳児健診～屈折検査の導入と眼科医の役割～. Ehime Ophthalmic Meeting. 愛媛県眼科医会. 2023/7/27.
16. 林思音. 第38回三重県眼科セミナー. 3歳児健診～屈折検査の導入と眼科医の役割～. 三重県眼科医会. 2023/7/30.
17. 林思音. 小児眼科診療の基本. 眼科臨床実践講座 2023. 参天製薬. 2023/8/20
18. 林思音. 小児眼科診療について. 第47回全国眼科学校医連絡協議会 教育講演. 日本眼科医会. 2023/11/26.

皮膚科

[原著論文：査読付]

1. Matsumoto Y, Mochimaru N, Yasuda H, Pak K, Kobayashi T, Yamamoto-Hanada K, Ohya Y, Kiuchi M, Kurokawa M, Yoshida K: In vivo analysis of the stratum corneum of Japanese neonates and infants using confocal Raman spectroscopy: a pilot study. Skin Research and Technology 2023; 29(1):e13276.
2. Yamamoto-Hanada K, Kobayashi T, Mikami M, Williams HC, Saito H, Saito-Abe M, Sato M, Irahara M, Miyaji Y, Ishikawa F, Tsuchiya K, Tamagawa-Mineoka R, Takaoka Y, Takemura Y, Sato S,

- Wakiguchi H, Hoshi M, Natsume O, Yamaide F, Seike M, Ohya Y, Morita K, Inoue E, Fukuie T, Kabashima S, Inuzuka Y, Nishimura K, Toyokuni K, Ogita H, Kiguchi T, Yoshida K, Saito J, Hosoi H, Katoh N, Morimoto M, Masuda K, Kameda M, Shigekawa A, Yamasaki K, Nagai M, Ebisawa M, Asaumi T, Itonaga T, Hasegawa S, Yasudo H, Nagao M, Fujisawa T, Yasuoka R, Fujiyama T, Shimojo N, Nakano T, Kondo Y, Mori Y, Kawaguchi T, Futamura M, Sugiura K, Nagai A, Kaburagi S, Kitazawa H, Kido H, Nakayama F S: Enhanced early skin treatment for atopic dermatitis in infants reduces food allergy. *J Allergy Clin Immunol* 2023; 152:126-135
3. Fukuda R, Pak K, Kiuchi M, Hirata N, Tanaka R, Mochimaru N, Mitsui M, Ohya Y, Yoshida K: Association of lipid abnormalities in the stratum corneum and TGF- β 1 and 2 in colostrum and the development of infantile seborrheic dermatitis: A prospective birth cohort study. *J Dermatol Sci* 2023; 112:39-42
 4. Yasuda M, Shoji K, Tomita K, Uchida Y, Uematsu S, Yoshida K, Kono N, Funatsu M, Miyairi I: Clinical and Laboratory Diagnosis of Exanthems Among Japanese Children Younger Than 6 Years Old in the Post-Measles-Rubella Vaccine Era. *Pediatr Infect Dis J* 2023; 43:e44-e48
 5. Osada R, Oshikata C, Kurihara Y, Terada K, Kodama Y, Yamashita Y, Nakadegawa R, Masumitsu H, Motobayashi Y, Takayasu H, Masumoto N, Manabe S, Zhu Y, Tanaka R, Kaneko T, Sasaki A, Tsurikisawa N: A Case of Type I Food Allergy Induced by Monosodium Glutamate. *J Asthma Allergy* 2024;17:161-165
 6. Takeuchi S, Fukuda K, Tanaka R, Funakoshi T, Takahashi H, Amagai M, Tanikawa A: Successful management of tumor necrosis factor- α inhibitor-induced erythema multiforme by switching to a Janus kinase inhibitor in a patient with rheumatoid arthritis and ulcerative colitis. *J Dermatol* 2023;50:e117-e18
 7. Tanaka R, Kurihara Y, Egami S, Saito Y, Ouchi T, Funakoshi T, Takahashi H, Umegaki-Arao N, Kubo A, Tanikawa A, Amagai M, Yamagami J: Clinical severity scores as a guide for prediction of initial treatment responses in pemphigus and pemphigoid patients. *J Dermatol* 2023;50:203-211
 8. Yamagami J, Kurihara K, Funakoshi T, Saito Y, Tanaka R, Takahashi H, Ujiie H, Iwata H, Hirai Y, Iwatsuki K, Ishii N, Sakurai J, Abe T, Takemura R, Mashino N, Abe M, Amagai M: Rituximab therapy for intractable pemphigus: A multicenter, open-label, single-arm, prospective study of 20 Japanese patients. *J Dermatol* 2023;50:175-182
 9. Tsurane K, Kaneko K, Yoshida K, Tanaka R, Sago H, Murashima A: Initiation of hydroxychloroquine therapy during pregnancy can cause adverse effects and alter pregnancy outcomes: A case of acute generalised exanthematous pustulosis induced by hydroxychloroquine in a patient with systemic lupus erythematosus. *Mod Rheumatol Case Rep.* 2023;7:373-377

〔原著論文：査読なし〕

なし

〔症例報告〕

1. 酒井 伶奈, 益田 博司, 堀川 美和子, 島袋 林秀, 藤村 友美, 浦田 晋, 大坂 溪, 亀井 宏一, 石川

- 尊士, 河合 利尚, 原 真理子, 守本 倫子, 福田 理紗, 吉田 和恵, 窪田 満, 石黒 精: 腎梗塞と高度感音性難聴を合併した早期乳児川崎病性冠動脈瘤の1例. 日本小児科学会雑誌 2023 ; 127 : 291-291
2. 竹上 智也, 米倉 慧, 野村 尚史, 梶島 健治, 田中 諒, 吉田 和恵, 新関 寛徳: 原発性頭部脳回転状皮膚の2例. 皮膚の科学 2023 ; 22(3) : 262.
3. 本多 皓, 遠藤 麻衣, 吉田 和恵, 小崎 里華, 山本 俊幸: 無汗性外胚葉形成不全症 ～汎発性脱毛症を合併した例～. 皮膚病診療 2023 ; 45(6) : 696-699

[総説]

1. 吉田 和恵: 小児の皮膚の特徴とスキンケア. WOC Nursing 2023 ; 11(3) : 7-13.
2. 持丸 奈央子, 吉田 和恵: 【達人に学ぶ小児の発熱・皮膚疾患】小児の皮膚診療 見逃したくない重症皮膚疾患. 治療 2023 ; 105(4) : 492-495
3. 田中 諒, 吉田 和恵: 【エキスパートが教える 小児の薬物治療】疾患別 B. 感染症 伝染性軟属腫 (みずいぼ). 小児内科 2023 ; 55:322-323
4. 福田 理紗, 吉田 和恵: 「新生児編」感染 早産児の皮膚はどのような機序で成熟するのか. 周産期医学 2023 ; 53:427-429

[著書]

1. 吉田 和恵: 汗疹. 皮膚疾患最新の治療2023-2024, 南江堂, 2023 ; 283-283
2. 田中 諒, 吉田 和恵: とびひ: 季節をヒントに皮膚を診る, 2023 ; 1:118-119
3. 福田理紗: 山へ行った2日後から皮疹がでた! 何が原因!?. 「おとな」のアレルギー, 文光堂, 2023 ; 69-74, 180-190
4. 福田理紗: 蕁麻疹の治療をしたら、小麦が食べれるようになった! 「おとな」のアレルギー, 文光堂, 2023 ; 180-184
5. 福田理紗: 歯科治療中に唇が腫れて腹痛が出現 「おとな」のアレルギー, 文光堂, 2023 ; 185-190

[ガイドライン、報告書、その他]

なし

[学会発表]

1. Tanaka R, Niizeki H, Nomura T, Seki A, Narumi S, Nakabayashi K, Yoshida K: Genotype-phenotype correlation analysis in Japanese patients with pachydermoperiostosis. first international societies for investigative dermatology meeting (ISID2023) , Tokyo, 2023. 5. 11
2. Fukuda R, Pak K, Mochimaru N, Tanaka R, Kiuchi M, Hirata N, Mitsui M, Ohya Y, Yoshida K: Association of stratum corneum and breast milk factors with the development of atopic dermatitis in infancy: A prospective birth cohort study. first international societies for investigative dermatology meeting (ISID2023) , Tokyo, 2023. 5. 11
3. 森本 亜里, 野村 彩乃, 綿貫 沙織, 平井 郁子, 足立 剛也, 福田 桂太郎, 川崎 洋, 高橋 勇人, 天谷 雅行, 大喜多 肇, 大内 健嗣: 外陰部のmiliun-like syringoma の1例. 第87回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 東京, 2023. 11. 19
4. 福田 理紗, 朴慶純, 木内めぐみ, 平田尚子, 田中 諒, 持丸奈央子, 三井真里, 大矢幸弘, 吉田 和恵: 乳児脂漏性皮膚炎の発症における角層内因子と母乳中因子との関連—前向き出生コホート研究—. 第87回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 東京, 2023. 11. 18
5. 坂尾 佳香, 本多 皓, 星 美智子, 遠藤 麻衣, 福田 理紗, 吉田 和恵, 小崎 里華, 小崎 健次郎, 山

本 俊幸: 汎発性脱毛症を合併した、無汗症外胚葉形成不全の1例. 第87回日本皮膚科学会東京支部学術大会, 東京, 2023. 11. 18

6. 福田 理紗, 田中 諒, 橋本 玲奈, 持丸 奈央子, 清水泰岳, 新井 勝大, 吉田 和恵: TNF- α 阻害薬によるびまん性脱毛を伴う乾癬様皮疹の一例. 第72回日本アレルギー学会学術大会, 東京, 2023. 10. 20
7. 小椋 雅夫, 金田 朋也, 坂野 嘉紀, 岡田 聡司, 秋山 みさき, 西健 太郎, 佐藤 舞, 持丸 奈央子, 田中 諒, 吉田 和恵, 亀井 宏一: 筋膜・腱まで炎症性病変を呈し全身療法を施行した重症限局性強皮症の1例. 第32回日本小児リウマチ学会総会・学術集会 (PRAJ2023), 埼玉, 2023. 10. 13
8. 田中 諒, 福田 理紗, 持丸 奈央子, 橋本 玲奈, 吉田 和恵: ダブソンが奏効した正補体血症性蕁麻疹様血管炎の1例. 第47回日本小児皮膚科学会学術大会, 大阪, 2023. 7. 15
9. 持丸 奈央子, 田中 諒, 福田 理紗, 橋本 玲奈, 石川 尊士, 河合 利尚, 吉田 和恵: COVID-19 罹患後に発症した小児汎発型膿疱性乾癬の1例. 第122回 日本皮膚科学会総会, 神奈川, 2023. 6. 2
10. 竹内 智也, 野村 尚史, 米倉 慧, 吉田 和恵, 関 敦仁, 中林 一彦, 久松 理一, 新関 寛徳, 梶島 健治: SLC02A1 遺伝子異変を有する完全型肥厚性皮膚骨膜炎にアセトアミノフェンが有効であった1例. 第122回 日本皮膚科学会総会, 神奈川, 2023. 6. 1

[講演]

1. 吉田 和恵: 結節性硬化症に伴う皮膚病変に対する治療戦略. 学術講演会「ラパリムスゲル0.2%オンライン講演会」, 東京, 2023. 9. 28
2. 吉田 和恵: 乳児血管腫における治療介入のタイミングと実際の治療. 第1回小児皮膚連携ネットワーク (ハイブリッド開催), 東京, 2023. 6. 10
3. 吉田 和恵: 皮膚バリアをターゲットとした方法はアレルギーマーチの予防に効くのか. 第122回日本小児皮膚科学会学術大会, 横浜, 2023. 6. 2

[広報活動]

1. 吉田 和恵: 赤ちゃん「寝ハゲ」、眠るとき頭ぶんぶんで 専門医「安心して」の理由. ラジオ日経 朝日新聞社: withnews, 2023. 1. 30
2. 吉田 和恵: 帝王切開による出産でも、赤ちゃんに初乳を飲ませることの大切さ. たまひよ ONLINE, 2023. 1. 14

小児歯科・矯正歯科

[原著論文: 査読付] (Reviewed Paper)

1. Kono H, Hikosaka M, Kaneko T, Baba Y: Fate of costochondral grafts for micrognathia: 3D analysis of postoperative length, position and graft take. J Craniofac Surg 2023;34:350-355
2. Fujino A, Fuchimoto Y, Mori T, Kano M, Yamada Y, Ohno M, Baba Y, Isogawa N, Arai K, Yoshioka T, Abe A, Kanai N, Takagi R, Maeda M, and Umezawa A: Evaluation of safety and efficacy of autologous oral mucosa-derived epithelial cell sheet transplantation for prevention of

anastomotic restenosis in congenital esophageal atresia and congenital esophageal stenosis. Stem Cell Research & Therapy 2023;14:86. <https://doi.org/10.1186/s13287-023-03321-8>

3. Kudo M, Miyashin M, Isogawa N, Kanazawa H, Baba Y: Incomplete vertical crown-root fractures in an immature permanent incisor treated using apexification and bonding of fractures - A case report -. J Jpn Assoc Dent Traumatol 2023;19: 51-56

〔学会発表〕

1. 金沢英恵, 工藤みふね, 金田一純子, 小美濃千鶴, 世川晶子, 高橋奈津子, 五十川伸崇, 馬場祥行: 疼痛が先行し急速に下顎前歯部の骨吸収が進行したランゲルハンス細胞組織球症の1例. 日本小児歯科学会, 長崎, 2023. 5. 18
2. 阿彦希, 馬場祥行, 疋田理奈, 五十川伸崇, 彦坂信: 当センター矯正歯科を受診した先天性疾患患者の臨床統計的調査. 第47回日本口蓋裂学会, 東京, 2023. 5. 26
3. 五十川伸崇, 馬場祥行: 小児慢性特定疾病指定歯科診療所分布について一都道府県における乳幼児等医療費援助実施状況との比較一, 第40回日本障害者歯科学会総会・学術集会, 札幌, 2023. 11. 11

〔講演〕

1. 金沢英恵: 小児がん経験者のより良い未来のために知っておきたい歯の話. 公益財団法人がんの子どもを守る会 関東支部講演会, 2023. 3. 4
2. 五十川伸崇: 小児における口腔ケア概論. 第20回日本口腔ケア学会総会・学術大会/第3回国際口腔ケア学会総会・学術大会, 東京, 2023. 4. 21
3. 金沢英恵: 小児がん治療における口腔合併症. 領域横断ワークショップ4 「ここまでできる! 小児がん治療における機能温存の試み」, 第61回日本癌治療学会学術集会, 横浜, 2023. 10. 19

〔活動〕

1. 世川晶子: 学習会「はみがき」. 第50回アレルギー児サマーキャンプ, 神奈川アレルギー児サマーキャンプ実行委員会, 神奈川, 2023. 8. 18-20

4-8 手術集中治療部

〔原著論文〕

1. Tsuboi K, Ninagawa J, Tsuboi N, Nakagawa S, Suzuki Y: Unplanned admission to pediatric intensive care after general anesthesia: A seven-year retrospective cohort study in a tertiary children's hospital. Pediatric Anesthesia, 2022 ; 32(1) : 56-61
2. Osawa I, Ide K, Sakamoto S, Uchida H, Fukuda A, Nishimura N, Haga C, Yoshioka T, Nosaka S, Nakagawa S, Kasahara M: Hematological and biochemical characteristics and diagnostic imaging results in acute T cell-mediated rejection after pediatric liver transplantation. Pediatric Transplantation, 2022 Mar ; 26(2) : e14161

3. Ide K, Uchida H, Sakamoto S, Nishimura N, Nakagawa S, Kobayashi T, Ito Shuichi, Kasahara M : Neurological impairment in children with acute liver failure following liver transplantation-A single-center experience. *Pediatric Transplantation* 2022 ; 26(4) :e14240
4. Ota H, Ide K, Watanabe T, Nishimura N, Nakagawa S : Estimating the insertion length of pediatric peripherally inserted central catheters. *Pediatrics International* [2022 ; 64\(1\) : e15128](#)
5. Myojin S, Pak K, Sako M, Kobayashi T, Takahashi T, Sunagawa T, Tsuboi N, Ishikura K, Kubota M, Kubota M, Igarashi T, Morioka I, Miyairi I : Interventions for Shiga toxin-producing *Escherichia coli* gastroenteritis and risk of hemolytic uremic syndrome: A population based matched case control study. *PLoS One* 2022 ; 17(2) : e0263349
6. Okajima K, Hayakawa I, Tsuboi N, Shimura K, Ishiguro A, Abe Y : Early therapeutic plasma exchange may lead to complete neurological recovery in moderate to severe influenza-associated acute necrotizing encephalopathy. *Brain & Development* 2022 ; 44(7) : 492-497
7. Tsuboi K, Tsuboi N, Nishi K, Ninagawa J, Suzuki Y, Nakagawa S : Trajectory of kidney recovery in pediatric patients requiring continuous kidney replacement therapy for acute kidney injury. *Clin Exp Nephrol* 2022 ; 26(11) : 1130-1136
8. Matsumoto S, Traber M G, Leonard S W, Choi J, Fang X, Maishan M, Wick K D, Jones K D, Calfee C S, Gotts J E, Matthay M A : Aerosolized vitamin E acetate causes oxidative injury in mice and in alveolar macrophages. *Am J Physiol Lung Cell Mol Physiol* 2022 ; 322(6) : L771-L783
9. Nga DTT, Thuy PTB, Ainai A, Takayama I, Huong DT, Saitoh A, Nakagawa S, Dien M T, Nakajima N : Association between real-time polymerase chain reaction cycle threshold value and clinical severity in neonates and infants infected with *Bordetella Pertusis*. *Pediatr Infect Dis J* 2022 ; 41(5) : 388-393
10. Furuta M, Suzuki Y, Sun N, Aoyama K : Chronic post-surgical pain in pediatric population. *Journal of Anesthesia* 2022 ; 36 : 785-786
11. Oami T, Imaeda T, Nakada TA, Abe T, Takahashi N, Yamao Y, Nakagawa S, Ogura H, Shime N, Umemura Y, Matsushima A, Fushimi K : Temporal trends of medical cost and cost-effectiveness in sepsis patients; a Japanese nationwide medical claims database. *J Intensive Care* 2022 ; 10 : 33 doi: 10.1186/s40560-022-00624-5
12. Takahashi N, Imaeda T, Nakada T, Oami T, Abe T, Yamao Y, Nakagawa S, Ogura H, Shime N, Umemura Y, Matsushima A, Fushimi K : Short- versus long-course of antibiotic therapy for sepsis: post-hoc analysis of the nationwide cohort study. *J Intensive Care* 2022 ; 10 : 49 Doi: 1186/s40560-022-00642-3
13. Morin L, Hall M, de Souza D, Guoping L, Jabornisky R, Shime N, Gilholm P, Nakagawa S, Zimmerman JJ, Sorce LR, Argent A, Kissoon N, Tissières P, Watson RS, Schlapbach LJ; Pediatric Sepsis Definition Taskforce : The current and future state of pediatric sepsis definitions: an international survey. *Pediatrics* 2022 Jun ; 149(6) : e2021052565

14. Kubota M, Abe Y, Nishimura N, Nakagawa S, Yoshida N: Spontaneous and reflex movements after diagnosis of clinical brain death: A lesson from acute encephalopathy. *Brain & Development* 2022 ; 44(9) : 635-639
15. Capone CA, Emerson B, Sweberg T, Polikoff L, Turner DA, Adu-Darko M, Li S, Glater-Welt LB, Howell J, Brown CA 3rd, Donoghue A, Krawiec C, Shults J, Breuer R, Swain K, Shenoi A, Krishna AS, Al-Subu A, Harwayne-Gidansky I, Biagas KV, Kelly SP, Nuthall G, Panisello J, Napolitano N, Giuliano JS Jr, Emeriaud G, Toedt-Pingel I, Lee A, Page-Goertz C, Kimura D, Kasagi M, D'Mello J, Parsons SJ, Mallory P, Gima M, Bysani GK, Motomura M, Tarquinio KM, Nett S, Ikeyama T, Shetty R, Sanders RC Jr, Lee JH, Pinto M, Orioles A, Jung P, Shlomovich M, Nadkarni V, Nishisaki A; National Emergency Airway Registry for Children (NEAR4KIDS) Investigators, Pediatric Acute Lung Injury, Sepsis Investigators (PALISI) : Intubation practice and outcomes among pediatric emergency departments: A report from National Emergency Airway Registry for Children (NEAR4KIDS). *Acad Emerg Med* 2022 ; 29(4) : 406-414
16. Miyaji M, Ide K, Takashima K, Maeno M, Krallman KA, Lazear D, Goldstein SL : Comparison of nafamostat mesilate to citrate anticoagulation in pediatric continuous kidney replacement therapy. *Pediatric Nephrology* 2022 ; 37(11) : 2733-2742
17. Shoji K, Saito J, Nagai Y, Hayakawa I, Oho Y, Kato H, Tao C, Funaki T, Yamada M, Ogimi C : Serum and cerebrospinal fluid acyclovir pharmacokinetics in a neonate with HSV-2 meningoencephalitis. *J Infect Chemother* 2022 ; 28(8) : 1168-1171
18. Wick KD, Fang X, Maishan M, Matsumoto S, Spottiswoode N, Sarma A, Simoneau C, Khakoo M, Langelier C, Calfee CS, Gotts JE, Matthay MA : Impact of e-cigarette aerosol on primary human alveolar epithelial type 2 cells. *Am J Physiol Lung Cell Mol Physiol* 2022 ; 323(2) : L152-L164
19. Ansai H, Masuda H, Nakao H, Nishimura N, Kubota M : Plasma exchange and infliximab as a third-line therapy for refractory infantile Kawasaki disease. *Pediatr Int* 2022 ; 64(1) : e15226
20. Akamine Y, Ide K, Kawaguchi A : Assessing agreement on Canadian pediatric critical care training objectives in Japan. *Pediatr Int* 2022 ; 64 : e15363
21. Ide K, Okuwaki H, Ota H, Tokuda Y, Nakagawa S : Tip position of peripherally inserted central venous catheters inserted without fluoroscopy. *Pediatr Int.* 2022 Dec 2
<http://doi.org/10.1111/ped.15432>
22. 宮地麻衣, 池辺諒, 川崎達也, 竹内宗之, 中川聡, 川口敦 : 本邦ICUにおける小児死亡症例の検討:PRINCE study 事後研究. *日集中医誌* 2022 ; 29 : 157-159
23. 片岡怜, 大橋牧人, 川田容子, 古賀早也香, 和多田雅哉, 堀内勇人, 鈴木康之 : 長期体外循環補助における血漿遊離ヘモグロビン測定による溶血発生因子の検証. *体外循環技術* 2022 ; 49 (2) : 103-111

[症例報告]

1. Shimura K, Matsumoto S, Ide K, Baba C, Nakagawa S, Shoji K, Uchida H, Fukuda A, Sakamoto S, Kasahara M: Rescue venovenous extracorporeal membrane oxygenation for the deterioration of acute respiratory distress syndrome in pediatric liver transplantation. *Pediatr Transplant* 2022 Sep ; 26(6) : e14305
2. Hayashi K, Matsui H, Nishimura N, Nakagawa S: Inappropriately home-prepared paste food causing methemoglobinemia in children. *Pediatr Int* 2022 Jan ; 64(1) : e15134 doi: 10.1111/ped.15134.
3. Okano D R, Hasegawa H, Okada H, Kawamoto E, Kurokawa S, Kakogawa J, Y Suzuki Y, Camann W, Nagasaka Y: Valley position for a primary ciliary dyskinesia (Kartagener's syndrome) parturient to optimize respiratory function during cesarean delivery. *Int J Obstet Anesth* 2022 Dec 15;103619 doi: 10.1016/j.ijoa.2022.103619.
4. Nariai R, Mafune R, Ide K, Nishimura N, Ono H: Pulmonary hypertension caused by vitamin C deficiency in a two-year-old girl. *Pediatric Transplantation* 2022 Jan ; 64 : e14971
5. Ohashi E, Hayakawa I, Tsutsumi Y, Kamei K, Ide K, Abe Y: Central-variant posterior reversible encephalopathy syndrome in an infant with mid-aortic syndrome: A rare case of symmetric basal ganglia lesions. *Radiol Case Rep* 2022 ; 17(10) : 3475-3480
6. Nishi K, Ogura M, Tamai N, Gima M, Ide K, Koinuma G, Kamei K, Ito S: Successful rituximab treatment for severe rapidly progressive interstitial lung disease with anti-MDA5 antibody-positive juvenile dermatomyositis: a case report and literature review. *Pediatr Rheumatol Online J* 2022 ; 20(1) : 60
7. Kikuchi N, Ide K, Tomita K, Hayakawa I, Miyasaka M, Abe Y: A case of rapid progressive fatal encephalopathy associated with COVID-2019. *Pediatr Int* 2022 Dec 21 : e15455 doi: 10.1111/ped.15455.
8. 竹澤芳樹, 井手健太郎, 西村奈穂, 富澤大輔, 加藤元博, 中川聡: 集中治療管理を行った青年期の閉塞性細気管支炎の3例. *日集中医誌* 2022 ; 29 : 591-592
9. 藤井聡子, 中尾寛, 竹澤芳樹, 坂本淳, 井口晶裕, 石黒精: RS ウイルス感染に続発した発作性寒冷血色素尿症の1例. *小児科診療* 2022 ; 85(10) : 1361-1363

[総説]

1. Deep A, Nakagawa S, Tissieres P: Non-transplant options in paediatric acute liver failure-what is new? *Intensive Care Med* 2022 ; 48(1) : 114-117 doi: 10.1007/s00134-021-06576-y
2. Shioji N, Tobias Everett , Suzuki Y, Aoyama K: Pediatric sedation using dexmedetomidine and remimazolam for magnetic resonance imaging. *J Anesth*, 2022 ; 36 : 1-4
3. 鈴木康之: 公知申請をやってわかったこと オンダンセトロン(PONV)適応取得への道のり. *LiSA* 2022 ; 29(3) : 234-237
4. 壺井伯彦: 高頻度振動換気法の再考. *日集中医誌*, 2022 ; 29 : 201-203
5. 西村奈穂: 【チームで取り組む!救急ナースが知っておきたい外傷初期診療のキホン】(chapter 2) 症例編 虐待による小児外傷. *Emer Log* 2022 ; 35(2) : 223-227

6. 佐藤正規：エビデンスで斬る！無痛分娩の都市伝説 ～ 信じるか信じないかはあなた次第です。ペリネイタルケア 2022 ; 41 (11) : 54-57
7. 宮坂清之：検査・処置時の鎮静のポイント。小児看護 2022 ; 45 (10) : 1217-1223
8. 古田真知子, 鈴木康之：麻酔が発達期の子どもの脳に与える影響 小児の全身麻酔薬の神経毒性を考える。小児看護 2022 ; 45 (10) : 1197-1199
9. 松本正太郎：【内科医からみた肝移植, 脾・脾臓移植】肝移植 日本における移植小児科医の役割。肝胆脾 2022 ; 85 (5) : 619-626
10. 井手健太郎：治療法の再整理とアップデートのために専門家による私の治療 高アンモニア血症。日本医事新報 2022 ; 5141 : 46-47
11. 加藤宏樹：こどものことをもっと知ろう(第41回) 小児の輸液。LiSA 2022 ; 29 (9) : 826-829
12. 黒澤 寛史, 池山 貴也, 賀来 典之, 川崎 達也, 小泉 沢, 齊藤 修, 竹内 宗之, 武田 充人, 田村 卓也, 塚原 紘平, 清水 直樹, 三瓶 智美, 清水 一好, 辻尾 有利子, 西村 奈穂, 新津 健裕, 平井 克樹, 志馬 伸朗, 日本集中治療医学会, 小児集中治療委員会, 日本小児集中治療連絡協議会 COVID-19 ワーキンググループ：新型コロナウイルス感染症の小児重症・中等症例発生数と重症小児の診療体制。日本集中治療医学会雑誌, 2022 ; 29 (2) : 177-180
13. 蜷川純：症例カンファレンス 巨大縦隔腫瘍と心タンポナーデを合併した乳児。LiSA, 2022 ; 29 (7) : 601-4, 614-7

[著書]

1. 松永渉, 讃井将満：無呼吸閾値: 自発呼吸を促すには? 讃井将満, 大庭祐二(編), 人工呼吸管理に強くなる改訂版, 羊土社, 2022. ; 111-112
2. 壺井伯彦：数学・化学・物理から本質に迫る! Dr. 壺井の集中治療講義ノート。中外医学社, 2022. 1. 5
3. 壺井伯彦：小児における集中治療後症候群(PICS-p), 井上茂亮(編著), 西田修, 小谷穰治(監修), 症例から学ぶPICSの予防と早期介入, 日本維持新報社, 2022 : 59-69
4. 壺井伯彦：代謝救急. 志馬伸朗(編著), 小児集中治療ポケットブック, 診断と治療社, 2022 : 203-205
5. 壺井伯彦：各論3 先天性代謝異常症(早期から実施する施設). 日本小児集中治療研究会(編集), 小児救命救急・ICU ピックアップ6 血液浄化, メディカル・サイエンス・インターナショナル, 2022 : 145-151
6. 鈴木康之：小児泌尿器科の麻酔. 森田潔(監), 川真田樹人, 齋藤繁, 佐和貞治, 廣田和美, 溝渕知司(編), 臨床麻酔科学書, 中山書店, 2022 ; 504-508
7. 浦中誠：三尖弁閉鎖(TA). 吉谷健司(監), 稲富佑弦(編), 50の術式と疾患で学ぶ心臓麻酔, 克誠堂出版, 2022 ; 161-162
8. 中川聡：敗血症の早期発見のためのシステム. 松田直之(編), 敗血症, 感染症と臓器障害への対応(救急・集中治療アドバンス), 中山書店, 2022 ; 393-396
9. 大原玲子：授乳中である麻酔科トラブルシューティングA to Z. 文光堂, 2022 : 306-307
10. 大原玲子：巨大な卵巣腫瘍 麻酔科トラブルシューティングA to Z. 文光堂, 2022 : 308-309
11. 大原玲子：知りたいのです。“無痛分娩”の意味を～メリットとデメリット 助産師主導の無痛分娩ベアシックガイド ペリネイタルケア. メディカ出版, 2022 ; 41 (11) ; 21-24

12. 加藤宏樹： 笠井正志(監)，小児輸液のトリセツ 金原出版， 2022. 4. 22

[監修]

1. 鈴木康之： 鈴木康之，長坂康子(監) 小島純，米子真記(編) 子どものくすり便利帳， 南山堂， 2022. 8. 1
2. 宮坂清之： 宮坂清之，赤沼裕子，吉田奏，岸本陽子， 宮坂勝之(訳・補遺)「麻酔の危機管理」原著 2 版， 南山堂， 2022. 11. 1

[ガイドライン]

1. Tasaka S, Ohshimo S, Takeuchi M, Yasuda H, Ichikado K, Tsushima K, Egi M, Hashimoto S, Shime N, Saito O, Matsumoto S, Nango E, Okada Y, Hayashi K, Sakuraya M, Nakajima M, Okamori S, Miura S, Fukuda T, Ishihara T, Kamo T, Yatabe T, Norisue Y, Aoki Y, Iizuka Y, Kondo Y, Narita C, Kawakami D, Okano H, Takeshita J, Anan K, Okazaki SR, Taito S, Hayashi T, Mayumi T, Terayama T, Kubota Y, Abe Y, Iwasaki Y, Kishihara Y, Kataoka J, Nishimura T, Yonekura H, Ando K, Yoshida T, Masuyama T, Sanui , MARDS Clinical Practice Guideline Committee 2021 from the Japanese Respiratory Society, the Japanese Society of Intensive Care Medicine, and the Japanese Society of Respiratory Care Medicine : ARDS clinical practice guideline 2021. Respir Investig 2022 ; 60(4) : 446-495
2. Tasaka S, Ohshimo S, Takeuchi M, Yasuda H, Ichikado K, Tsushima K, Egi M, Hashimoto S, Shime N, Saito O, Matsumoto S, Nango E, Okada Y, Hayashi K, Sakuraya M, Nakajima M, Okamori S, Miura S, Fukuda T, Ishihara T, Kamo T, Yatabe T, Norisue Y, Aoki Y, Iizuka Y, Kondo Y, Narita C, Kawakami D, Okano H, Takeshita J, Anan K, Okazaki SR, Taito S, Hayashi T, Mayumi T, Terayama T, Kubota Y, Abe Y, Iwasaki Y, Kishihara Y, Kataoka J, Nishimura T, Yonekura H, Ando K, Yoshida T, Masuyama T, Sanui M, ARDS Clinical Practice Guideline 2021 committee from the Japanese Society of Intensive Care Medicine, the Japanese Respiratory Society, and the Japanese Society of Respiratory Care Medicine : ARDS Clinical Practice Guideline 2021. J Intensive Care. 2022 8 ; 10(1) : 32
3. 讃井 将満, 田坂 定智, 竹内 宗之, 大下 慎一郎, 江木 盛時, 橋本 悟, 一門 和哉, 津島 健司, 安田 英人, 南郷 栄秀, 志馬 伸朗, 松本 正太郎, 齊藤 修, 岡森 慧, 櫻谷 正明, 則末 泰博, 加茂 徹郎, 矢田部 智昭, 近藤 豊, 福田 龍将, 中島 幹男, 青木 善孝, 飯塚 悠祐, 林 健一郎, 三浦 慎也, 石原 唯史, 岡田 遥平, 阿南 圭祐, 阿部 良伸, 岡野 弘, 真弓 卓也, 岸原 悠貴, 成田 知大, 岡崎 哲ロバート, 窪田 佳史, 岩崎 夢大, 川上 大裕, 對東 俊介, 竹下 淳, 寺山 毅郎, 林 拓也, 吉田 拓生, 安藤 浩一, 増山 智之, 西村 哲郎, 片岡 惇, 米倉 寛, 奥田 拓史, 三木 誠, 安藤 幸吉, 新井 奈々, 吉田 健史, 瀬尾 龍太郎, 土肥 智史, 森實 雅司, 神津 玲, 横山 仁志, 吉川 博, 石村 慶子, 武澤 恵理子, 中川 聡, 川崎 達也, 野坂 俊介, 榎本 有希, 山谷 明正, 八木 健輔, 大田 えりか, 福岡 敏雄, 湯浅 秀道, 山川 一馬, ARDS 診療ガイドライン作成委員会, 一般社団法人日本集中治療医学会, 一般社団法人日本呼吸器学会, 一般社団法人日本呼吸療法医学会 : ARDS 診療ガイドライン 2021. 人工呼吸, 2022 ; 39(2) : 81-121
4. 讃井 将満, 田坂 定智, 竹内 宗之, 大下 慎一郎, 江木 盛時, 橋本 悟, 一門 和哉, 津島 健司, 安田 英人, 南郷 栄秀, 志馬 伸朗, 松本 正太郎, 齊藤 修, 岡森 慧, 櫻谷 正明, 則末 泰博, 加

茂 徹郎, 矢田部 智昭, 近藤 豊, 福田 龍将, 中島 幹男, 青木 善孝, 飯塚 悠祐, 林 健一郎, 三浦 慎也, 石原 唯史, 岡田 遥平, 阿南 圭祐, 阿部 良伸, 岡野 弘, 真弓 卓也, 岸原 悠貴, 成田 知大, 岡崎 哲, 窪田 佳史, 岩崎 夢大, 川上 大裕, 對東 俊介, 竹下 淳, 寺山 毅郎, 林 拓也, 吉田 拓生, 安藤 浩一, 増山 智之, 西村 哲郎, 片岡 惇, 米倉 寛, 奥田 拓史, 三木 誠, 安藤 幸吉, 新井 奈々, 吉田 健史, 瀬尾 龍太郎, 土肥 智史, 森實 雅司, 神津 玲, 横山 仁志, 吉川 博, 石村 慶子, 武澤 恵理子, 中川 聡, 川崎 達也, 野坂 俊介, 榎本 有希, 山谷 明正, 八木 健輔, 大田 えりか, 福岡 敏雄, 湯浅 秀道, 山川 一馬, 一般社団法人日本集中治療医学会/一般社団法人日本呼吸器学会/一般社団法人日本呼吸療法医学会/ARDS 診療ガイドライン作成委員会: ARDS 診療ガイドライン 2021. 日本集中治療医学会雑誌, 2022 ; 29(4) : 295-332

5. 讚井 將満, 田坂 定智, 竹内 宗之, 大下 慎一郎, 江木 盛時, 橋本 悟, 一門 和哉, 津島 健司, 安田 英人, 南郷 栄秀, 志馬 伸朗, 松本 正太郎, 齊藤 修, 岡森 慧, 櫻谷 正明, 則末 泰博, 加茂 徹郎, 矢田部 智昭, 近藤 豊, 福田 龍将, 中島 幹男, 青木 善孝, 飯塚 悠祐, 林 健一郎, 三浦 慎也, 石原 唯史, 岡田 遥平, 阿南 圭祐, 阿部 良伸, 岡野 弘, 真弓 卓也, 岸原 悠貴, 成田 知大, 岡崎 哲ロバート, 窪田 佳史, 岩崎 夢大, 川上 大裕, 對東 俊介, 竹下 淳, 寺山 毅郎, 林 拓也, 吉田 拓生, 安藤 浩一, 増山 智之, 西村 哲郎, 片岡 惇, 米倉 寛, 奥田 拓史, 三木 誠, 安藤 幸吉, 新井 奈々, 吉田 健史, 瀬尾 龍太郎, 土肥 智史, 森實 雅司, 神津 玲, 横山 仁志, 吉川 博, 石村 慶子, 武澤 恵理子, 中川 聡, 川崎 達也, 野坂 俊介, 榎本 有希, 山谷 明正, 土肥 智史, 八木 健輔, 大田 えりか, 福岡 敏雄, 湯浅 秀道, 山川 一馬, 一般社団法人日本集中治療医学会/一般社団法人日本呼吸器学会/一般社団法人日本呼吸療法医学会 ARDS 診療ガイドライン作成委員会: ARDS 診療ガイドライン 2021. 日本呼吸器学会誌, 2022 ; 11(4) : 235-270

[新聞]

1. 片岡 怜: 特集記事「未来の展望」第44回 「災害時の医療機器をどう備えるか?」-その1-. 医理産業新聞 第1117号 p3, 2022.7.15
2. 片岡 怜: 特集記事「未来の展望」第44回 「災害時の医療機器をどう備えるか?」-その2-. 医理産業新聞 第1118号 p3, 2022.8.1

[講演]

1. Nakagawa S: Management of Refractory Hypoxemia in Pediatric ARDS. Pediatric ICU Forum, PICU Most Requested Topics 2nd Series, 1st station (Web), Philippines, 2022.02.23.
2. Nakagawa S: PICUs in Japan, human resources, training systems, and more. 6th Annual Congress of Korean Society of Pediatric Critical Care Medicine (Web), South Korea, 2022.04.16
3. Nakagawa S: Pediatric Critical Care in Asia; Our Challenges. Indonesian Pediatric Society Online International Symposium World PICU Day "Current Challenges in Pediatric Intensive Care with Limited Resources" (Web), Indonesia, 2022.05.13
4. Nakagawa S: Post-Operative ICU Management of Pediatric Liver Transplantation. 8th Xiaoxiang International Symposium on Pediatrics and 1st Children's Organ Transplant Forum (Web), Changsha, Hunan, China, 2022.05.27

5. Nakagawa S : High-frequency Oscillation; Pediatric application. HFO Webinar, Japan, 2022. 6. 14
6. Nakagawa S: Quality indicators in PICU. Hunan Children' s Hospital (Web), Changsha, Hunan, China, 2022. 6. 28
7. Nakagawa S : Living-related organ donation. 11th Congress of World Federation of Pediatric Intensive and Critical Care Societies (Web), Cape Town, South Africa, 2022. 7. 16
8. Jakob Einhaus, Sato M: High throughput drug screen to identify immune-modulating therapies for the prevention of pregnancy complications. March of Dimes.Stanford, USA, 2022. 8. 24
9. Nakagawa S : Hepatic Encephalopathy. Annual Scientific Meeting of Intensive Care Society of Malaysia (ASMIC) 2022, Kuala Lumpur, Malaysia, 2022. 9. 10
10. Nakagawa S : Has SARS-CoV-2 changed the way we ventilate children with PARDS? Annual Scientific Meeting of Intensive Care Society of Malaysia (ASMIC) 2022, Kuala Lumpur, Malaysia, 2022. 9. 11
11. Nakagawa S : NCCHD Overview and Quality Indicators of Pediatric Intensive Care Unit. Mahidol University Ramathibodi Hospital School of Hospital Management, Setagaya-ku Tokyo, Japan, 2022. 9. 13
12. Nakagawa S : Acute Liver Failure in Children. The 17th Congress of Asian Society of Pediatric Research (Web), Beijing, China, 2022. 9. 17
13. Nakagawa S : Pediatric Sepsis; Recognition and Management. 33rd Scientific Conference on Maternal and Child Health Research (Web), Ulaanbaatar, Mongolia, 2022. 9. 27
14. Nakagawa S : Challenges in Pediatric and Maternal Sepsis. 5th National Conference "Purpose of sustainable development - Maternal, Newborn and Reproductive Health" (Web), Ulaanbaatar, Mongolia, 2022. 10. 7
15. Miyasaka K : Working with the Aviation Industry on Simulation Education. Asian and Australasian Congress of Anaesthesiologists (AACAA2022), Seoul, Korea 2022. 11. 11(Web)
16. Nakagawa S : Nutritional support after liver transplantation in children. National Center for Maternal and Child Health (Web), Ulaanbaatar, Mongolia, 2022. 11. 16
17. Nakagawa S : ECMO Cannulation. 24th National Conference of IAP Intensive Care Chapter, Pre-conference ECMO Workshop, Bhubaneswar, India, 2022. 12. 15
18. Nakagawa S : Management of Coagulopathy in Liver Failure. 24th National Conference of IAP Intensive Care Chapter, Bhubaneswar, India, 2022. 12. 18
19. Nakagawa S : Basic Concepts of Neuro-Critical Care. Hunan Children' s Hospital (Web), Changsha, Hunan, China, 2022. 12. 27
20. 松永渉 : 硬膜外麻酔のトラブルシューティング. 第40回JSEPTICセミナー(Web), 2022. 1. 30
21. 片岡怜 : 在宅人工呼吸器に関連した災害対策について. 日本医工ものづくりコモンズカンファレンスパークセミナー「災害時の医療機器をどう備えるか?」. 第2回在宅人工呼吸器の医療機器をどう備えるか? (Web), 2022. 2. 22
22. 中川聡 : 敗血症の病態・診断・治療の現状と求める診断・治療薬像. 敗血症セミナー (ウェブ講演), 東京都江東区, 2022. 3. 9

23. 中川聡：小児感染症での呼吸管理：パンデミックで変わった？同じ？ 第14回三重小児救命医療講演会 (Web), 津市, 2022. 03. 10
24. 山下陽子：胎児治療麻酔のポイント. 第1回日本周産期麻酔学会学術集会, 大阪, 2022. 3. 12
25. 鈴木康之：小児のPONV 対策とオンダンセトロン裏話. PONV セミナー、山口(Web), 2022. 4. 2
26. 中川聡：小児救急・集中治療の現状. 成育救急・集中治療セミナー (WEB 講演), 東京都世田谷区, 2022. 7. 2
27. 中川聡：呼吸管理. 成育救急・集中治療セミナー (WEB 講演), 東京都世田谷区, 2022. 7. 2
28. 加藤宏樹：小児の輸液療法. 済生会横浜市東部病院人材開発センター認定看護師教育課程講義, 神奈川県横浜市, 2022. 7. 14
29. 加藤宏樹：こどもの是正輸液を改めて考える. 聖マリアンナ医科大学小児科サマーセミナー, 神奈川県川崎市, 2022. 7. 16
30. 加藤宏樹：小児輸液のトリセツ. 久留米大学医学部小児科 Ground Rounds (ウェブ講演), 2022. 8. 19
31. 中川聡：酸素療法の功罪：低酸素血症とそうでない患者での酸素投与を考える. JSPICC メディカルスタッフ向けセミナー22-02 (WEB 講演), 2022. 8. 20
32. 壺井伯彦：小児における PICS (PICS-p). 敗血症セミナー2022 (WEB 講演), 2022. 9. 3
33. 壺井伯彦：小児における PICS. 令和4年度第1回「東京都こども救命センター」小児地域連携研修会, 2022. 10. 4
34. 糟谷周吾：新生児手術における輸液と輸血. 日本小児麻酔学会第27回大会, 岡山, 2022. 10. 8
35. 馬場千晶：脳圧コントロールの基本と小児症例での実践. 日本小児麻酔学会第27回大会, 岡山, 2022. 10. 8
36. 片岡怜：人工鼻・加温加湿器. 令和4年度小児在宅技術講習会 Part 3, Microsoft Teams WEB 講義, 2022. 10. 27
37. 中川聡：RSV 感染症重症例の治療の実際. Save the Small Babies Symposium 2022 第1回 (ウェブ講演), 東京都渋谷区, 2022. 10. 31
38. 中川聡：RSV 感染症重症例の治療の実際. Save the Small Babies Symposium 2022 第2回 (ウェブ講演), 東京都渋谷区, 2022. 11. 14
39. 佐藤正規：「産科麻酔を楽しんでみましょう」. 東京慈恵会医科大学麻酔科学講座 (WEB), 2022. 11. 16
40. 鈴木康之：小児麻酔の質の向上を目指して. 第10回大阪周術期セミナー, 大阪, 2022. 12. 3
41. 加藤宏樹：症例で考える輸液の実際. 群馬大学小児科専門医特別セミナー, 群馬県前橋市, 2022. 12. 13

[学会発表]

1. Sato M, Yamashita Y, Matsunaga W, Ijyuin A, Abe M, Yamashita S, Ohara R：The effect of remifentanyl infusion on respiratory status in pregnant women undergoing fetoscopic surgeries in mid-pregnancy. International Anesthesia Research Society annual meeting, 2022. 3. 18(Web)
2. Choisy B, Hedou J, Verdonk F, Gaudilliere D, Tsai A, Shankar K, Sato M, Einhaus J, Ganio E, Bonham A, Warrington B, Ahmad S, Tingle M, Ando K, Bruckman S, Angst M, Kin C, Gaudilliere

- B: Multimodal, coached telehealth prehabilitation has high compliance and improves exercise and cognitive capacity prior to surgery; a pilot study. International Anesthesia Research Society annual meeting, 2022.3.18 (Web)
3. Verdonk F, Tsai AS, Hedou J, Heifets B, Gaudilliere D, Bellan G, Feyaerts F, Stelzer I, Ganio E, Sato M, Bonham A, Ando A, Aghaeepour N, Angst MS, Gaudilliere B: An immune signature of postoperative cognitive dysfunction. International Anesthesia Research Society annual meeting, 2022.3.18 (Web)
 4. Sato M, Feyaerts D, Stelzer I, Ando K, Tsai A, Einhaus J, Diop Maigane, Gaudilliere D, Angst M, Shaw G, Aghaeepour N, Nolan G, Giudice L, Sirota M, Stevenson D, Gaudilliere B: Multiplex mass-tag cell barcoding assay for the high-throughput pharmacological assessment of candidate compounds to prevent preterm birth. 13th Annual Pediatrics Research Retreat at LKSC. Stanford, USA, 2022.4.29
 5. Nariai R, Tsuboi K, Tsuboi N, Nakagawa S: Survey of Post intensive Care Syndrome in Children. 11th Congress of the World Federation of Pediatric Intensive & Critical Care Societies, Cape Town, South Africa, 2022.6.12 (WEB)
 6. Sato M, Feyaerts D, Einhaus Jakob, Ganio E, Stelzer I, Ando K, Tsai A, Diop M, Bonham A, Gaudilliere D, Aghaeepour N, Nolan G, Giudice L, Sirota M, Stevenson D, Gaudilliere B: Multiplex mass-tag cell barcoding assay for the high-throughput pharmacological assessment of candidate drugs for endometriosis. Anesthesia Research Awards Dinner 2022, Palo Alto, USA, 2022.6.13
 7. Tsuboi K, Tsuboi N, Nishi K, Ninagawa J, Suzuki Y, Nakagawa S: Trajectory of kidney recovery in pediatric patients requiring continuous kidney replacement therapy for acute kidney injury. 11th Congress of World Federation of Pediatric Intensive and Critical Care Societies, 2022.7.12(Web)
 8. Nariai R, Tsuboi K, Tsuboi N, Nakagawa S: Long-term functional outcomes of pediatric intensive care survivors; a prospective cohort study. 11th Congress of World Federation of Pediatric Intensive and Critical Care Societies, 2022.7.12(Web)
 9. Nakagawa S: What is a good death? 11th Congress of World Federation of Pediatric Intensive and Critical Care Societies (Web), Cape Town, South Africa, 2022.7.14
 10. Feyaerts D, Stelzer I, Maric Ivana, Gillard J, Hedou J, Diop M, Bonham A, Ganio E, Hinhaus J, Sato M, Tsai A, Han X, Ando K, Aghaeepour N, Hlatky M, Angst M, Stevenson D, Romero R, Gaudilliere B, Gomez-Lopez, N: Cross-tissue assessment of local and peripheral immune determinants of preeclampsia. Stanford Maternal and Child Health Research Symposium, Stanford, USA, 2022.10.20
 11. Miyasaka K, Suzuki Y, Nagasaka Y: Eeg-guided Anesthesia In Children Shortens Recovery Time With No Difference Thus Far In Emergence Delirium. ANESTHESIOLOGY 2022 Annual Meeting, New Orleans, Louisiana, USA, 2022.10.23
 12. Nakagawa S: Assessment of Respiratory Muscle Power on Conventional Ventilator. 24th National Conference of IAP Intensive Care Chapter, Advanced CME, Bhubaneswar, India, 2022.12.16

13. 鈴木康之:筋弛緩モニタリングの正しい使い方と解釈法. 第3回日本周産期看護医学会学術集会, 東京, 2022. 02. 19
14. 松永渉: 無痛分娩からの緊急帝王切開をどうする? 第1回日本周産期麻酔学会学術集会, 大阪, 2022. 3. 12
15. 大原玲子: 基本手技からトラブルシューティング. 第1回日本周産期麻酔学会学術集会, 大阪, 2022. 3. 12
16. 岩田尚美, 伊集院亜梨紗, 松永渉, 山下陽子, 佐藤正規, 大原玲子, 鈴木康之: 硬膜誤穿刺後に持続脊髄くも膜下麻酔を用いて無痛分娩・帝王切開の麻酔管理を行った一例. 第1回日本周産期麻酔学会学術集会, 大阪, 2022. 3. 13
17. 阿部真友子, 伊集院亜梨紗, 松永渉, 山下陽子, 佐藤正規, 大原玲子, 鈴木康之: 無痛分娩時の硬膜外麻酔を帝王切開術の麻酔に移行させた69症例についての検討. 第1回日本周産期麻酔学会学術集会, 大阪, 2022. 3. 13
18. 鈴木康之: ドラッグラグ解消とPONV対策. 第1回日本周産期麻酔学会学術集会, 大阪, 2022. 3. 13
19. 壺井伯彦: 小児集中治療室における早期リハビリテーション. 第49回日本集中治療医学会学術集会, 宮城(Web), 2022. 3. 18
20. 成相諒子, 壺井薫, 壺井伯彦, 西村奈穂, 中川聡: Webアンケートを用いた小児集中治療後症候群の向ききコホート調査. 第49回日本集中治療医学会学術集会, 宮城(Web), 2022. 3. 18
21. 宮地麻衣, 池辺諒, 川崎達也, 竹内宗之, 中川聡, 川口敦: 本邦ICUにおける小児死亡症例の検討:PRINCE事後研究. 第49回日本集中治療医学会学術集会, 宮城(Web), 2022. 3. 18
22. 今枝太郎, 中田孝明, 高橋希, 中川聡, 小倉裕司, 志馬伸朗, 梅村穰, 松嶋麻子, 伏見清秀: 日本の敗血症疫学データ解析. 第49回日本集中治療医学会学術集会, 宮城(Web), 2022. 3. 18
23. 松本正太郎: 小児ARDSの定義と疫学. 第49回日本集中治療医学会学術集会, 宮城(Web), 2022. 3. 19
24. 加藤宏樹, 庄司健介, 神宮司深雪, 西村奈穂, 宮入烈, 中川聡: 小児集中治療室の血液培養における嫌気性培養ボトルの特徴. 第49回日本集中治療医学会学術集会, 宮城(Web), 2022. 3. 19
25. 奥脇一, 井手健太郎, 徳田雄亮, 西村奈穂, 中川聡: 小児における非透視下で挿入されたPICCの先端位置の検討. 第49回日本集中治療医学会学術集会, 宮城(Web), 2022. 3. 19
26. 山下華奈, 壺井伯彦, 壺井薫, 余谷暢之: PICUでの疼痛管理と看護師の疼痛に対する意識について; 疼痛評価スケール導入前後での質問紙調査の比較. 第49回日本集中治療医学会学術集会, 宮城(Web), 2022. 3. 19
27. 壺井薫, 壺井伯彦, 山下華奈, 余谷暢之, 中川聡: PICUでの疼痛管理と看護師の疼痛に対する意識について:多施設横断研究. 第49回日本集中治療医学会学術集会, 宮城(Web), 2022. 3. 19
28. 竹澤芳樹, 井手健太郎, 西村奈穂, 中川聡: 高条件でのCHDFを施行した小児急性肝不全の1例. 第49回日本集中治療医学会学術集会, 宮城(Web), 2022. 3. 19
29. 上村義季, 壺井伯彦, 西村奈穂, 中川聡: 二相性CPAPにより人工呼吸器との非同調を回避できた. 第49回日本集中治療医学会学術集会, 宮城(Web), 2022. 3. 19
30. 鈴木康之: 小児の手術室外の鎮静の現状と問題. 第49回日本集中治療医学会学術集会, 宮城(Web), 2022. 3. 20
31. 鈴木康之: ムコ多糖症患者の周術期管理. 第9回ムコ多糖症フォーラム, 東京, 2022. 5. 28

32. 蛭川純, 馬場千晶, 伊東祐之, 糟谷周吾, 鈴木康之 : 頭蓋縫合早期癒合症に対する内視鏡下頭蓋海溝術の麻酔管理に関する後方視的検討. 日本麻酔科学会第 69 回学術集会, 兵庫, 2022. 6. 16
33. 前島直彦, 海老島宏典 : 開心術後バソプレシンの昇圧効果と虚血性合併症. 第 58 回日本小児循環器学会総会・学術集会, 北海道, 2022. 7. 21
34. 上村義季, 壺井伯彦, 井手健太郎, 中川聡 : 巨大皮下血腫により出血性ショックをきたした筋拘縮型エーラス・ダンロス症候群の一例. 第 35 回日本小児救急医学会学術集会, 東京, 2022. 7. 30
35. 田中大貴, 天笠俊介, 菊池奈々絵, 植松悟子, 窪田満, 中川聡 : 乳幼児突発性危急事態/Brief Resolved Unexplained Event における有害転帰のリスク因子. 第 35 回日本小児救急医学会学術集会, 東京, 2022. 7. 30
36. 井手健太郎, 赤嶺陽子, 川口敦 : 日本における小児集中治療研修に必要な項目の検討. 第 35 回日本小児救急医学会学術集会, 東京, 2022. 7. 31
37. 浦中誠, 橋谷舞, 鈴木康之 : 下大静脈から肺静脈に側副血行路のある Fontan 術後の開腹 Ladd 手術中の低酸素血症に NO 吸入が著効した一例. 日本心臓血管麻酔学会第 27 回学術大会, 京都(WEB), 2022. 9. 1
38. 橋谷舞, 浦中誠, 松永渉, 鈴木康之 : 胎児期に PVO が疑われた, 出生直後に ECMO 導入し, 手術適応を決定した common pulmonary vein atresia の一例. 日本心臓血管麻酔学会第 27 回学術大会, 京都(WEB), 2022. 9. 1
39. 壺井伯彦, 成相諒子, 壺井薫, 中川聡, 鈴木康之, 峯耕太郎, 上出杏里 : PICU における PICS と早期リハビリテーション. 日本小児麻酔学会第 27 回大会, 岡山, 2022. 10. 8 (シンポジウム)
40. 河村彰久, 壺井薫, 岡愛子, 鈴木康之 : 中毒性表皮壊死症を併発したムコ多糖症 2 型の児に対する麻酔管理の一例. 日本小児麻酔学会第 27 回大会, 岡山, 2022. 10. 8
41. 古田真知子, 鈴木康之 : 術後悪心・嘔吐(PONV)治療のオンダンセトロンにより傾眠となった 1 例. 日本小児麻酔学会第 27 回大会, 岡山, 2022. 10. 8
42. 岡愛子, 壺井薫, 河村彰久, 鈴木康之 : Apneic oxygenation を併用し安全に気道確保が可能であった中毒性表皮壊死症を併発したムコ多糖症の一例. 日本小児麻酔学会第 27 回大会, 岡山, 2022. 10. 8
43. 橋谷舞, 古田真知子, 鈴木康之 : 新生児巨大頭頸部腫瘍により頭頸部が右側屈伸展位に圧排固定された気道確保困難の一例. 日本小児麻酔学会第 27 回大会, 岡山, 2022. 10. 8
44. 渡辺衿, 行正翔, 鈴木康之 : 術中大量出血をきたした Klippel—Trenaunay Syndrome (KTS) 患者の麻酔経験. 日本小児麻酔学会第 27 回大会, 岡山, 2022. 10. 8
45. 中村俊貴, 蛭川純, 鈴木康之 : 先天性重度喉頭狭窄症に対して日齢 0 で気管切開を行った 2 症例. 日本小児麻酔学会第 27 回大会, 岡山, 2022. 10. 9
46. 黒田真由美, 古田真知子, 糟谷周吾, 鈴木康之 : 小児気管切開抜去予定患者における薬物誘発睡眠内視鏡検査(DISE)の麻酔方法の後方視的検討. 日本小児麻酔学会第 27 回大会, 岡山, 2022. 10. 9
47. 廣井祐美, 永田沙也, 古田真知子, 鈴木康之 : 点状軟骨異形成症の頸椎病変を有する児に対し, 術中運動誘発電位を用いて気管切開術を施行した麻酔の一例. 日本小児麻酔学会第 27 回大会, 岡山, 2022. 10. 9
48. 蛭川純 : TAPVC 修復術. 日本小児麻酔学会第 27 回大会, 岡山, 2022. 10. 9 (シンポジウム)
49. 壺井伯彦, 成相諒子, 壺井薫, 中川聡 : 小児における集中治療後症候群. 第 29 回小児集中治療ワークショップ, 東京, 2022. 10. 29

50. 竹澤芳樹：抗凝固薬と血栓・出血性合併症。第29回小児集中治療ワークショップ，東京，2022.10.29
51. 加藤宏樹，中川聡：PICU Awareness Week in Japan @ JSPICC Workshop. 第29回小児集中治療ワークショップ，東京，2022.10.29
52. 加藤宏樹：Quad C文化祭@JSPICCワークショップ。第29回小児集中治療ワークショップ，東京，2022.10.29
53. 松本正太郎：PICUにおける電子カルテの現在と未来。第29回小児集中治療ワークショップ，東京，2022.10.29
54. 中川聡：Family Centered Careについて。第29回小児集中治療ワークショップ，東京，2022.10.29
55. 中川聡：アジア地域の小児集中治療の現状と課題。第29回小児集中治療ワークショップ，東京，2022.10.30
56. 中川聡：呼吸ハンズオン。第29回小児集中治療ワークショップ，東京都千代田区，2022.10.30
57. 松本正太郎：小児ARDSの特徴と管理。第29回小児集中治療ワークショップ，東京，2022.10.30
58. 西村奈穂：小児の副腎不全。第29回小児集中治療ワークショップ，東京，2022.10.30
59. 壺井伯彦，加藤宏樹，野沢永貴，高島光平：スチュワート法を理解して酸塩基並行に強くなる！（エクセル実習形式）。第29回小児集中治療ワークショップ，東京，2022.10.30
60. 成相諒子：PICS-pの実態調査 多施設前向きコホート研究 JPICS-p study。第29回小児集中治療ワークショップ，東京，2022.10.30
61. 糟谷周吾：小児困難気道の臨床：最近の知見。日本臨床麻酔学会第42回大会，京都，2022.11.11
62. 鈴木康之，糟谷周吾：小児麻酔におけるAIの活用～説明と同意におけるコミュニケーションロボットEMIEWタブレットの効果～。日本臨床麻酔学会第42回大会，京都，2022.11.11
63. 阿部まり子，奥山克巳，渡邊朝香：小児脊椎側弯症に対する後方固定術の際に見られた，胸郭出口症候群疑い。日本臨床麻酔学会第42回大会，京都，2022.11.11
64. 峯耕太郎，壺井伯彦，上出杏里，内田孟：早期リハビリテーション導入環境下における小児肝移植術後の自立歩行再獲得時期に関連する要因の検討。第9回日本小児理学療法学会学術大会，WEB，2022.11.13
65. 山下陽子，伊集院亜梨紗，山下早弥華，阿部真友子，松永渉，大原玲子：当センターにおける無痛分娩後の満足度アンケート調査の取り組みについて。第126回日本産科麻酔学会学術集会，浜松，2022.11.26
66. 高橋亜紗子，松永渉，阿部真友子，伊集院亜梨紗，山下陽子，大原玲子：産科危機的出血に対する輸血でTACO(輸血関連循環負荷)となった1例。第126回日本産科麻酔学会学術集会，浜松，2022.11.26
67. 松永渉，阿部真友子，伊集院亜梨紗，山下陽子，佐藤正規，大原玲子：無痛分娩中に子宮破裂を呈した4症例。第126回日本産科麻酔学会学術集会，浜松，2022.11.26
68. 松永渉：無痛分娩からの緊急帝王切開を“快適に行うためのtips”。第126回日本産科麻酔学会学術集会，浜松，2022.11.27
69. 久米澄子，松永渉，伊集院亜梨紗，阿部真友子，山下陽子，大原玲子：硬膜外麻酔による無痛分娩の麻酔導入時にフェンタニルが被疑薬のアナフィラキシーを生じた一例。第126回日本産科麻酔学会学術集会，浜松，2022.11.27

70. 伊集院亜梨紗, 松永渉, 阿部真友子, 山下陽子, 佐藤正規, 大原玲子, 鈴木康之, 和田誠司, 小野博, 佐合治彦: 妊娠 25 週の重症大動脈弁狭窄症に対する胎児大動脈弁形成術の麻酔管理の一症例. 第 19 回日本胎児治療学会学術集会, 大阪, 2022. 12. 3
71. 中川聡: Global Burden of Sepsis and Our Challenges. 第 94 回日本薬理学会年会, 神奈川, 2022. 12. 3

4-9 周産期・母性診療センター

産科・不育診療科・胎児診療科

[原著論文]

1. Funaki S, Ogawa K, Ozawa N, Hosoya S, Okamoto A, Kevin U, Morisaki N, Sago H. Association between fetal sex and pregnancy outcomes among women with twin pregnancies: a multicenter cross-sectional study. Arch Obstet Gynecol 2023 May;307(5):1397-1405.
2. Hosoya S, Ogawa K, Morisaki N, Okamoto A, Arata N, Sago H. Gestational glycosuria, proteinuria, and borderline hypertension in pregnancy are predictors for the later onset of maternal chronic disease. J Obstet Gynecol Res. 2023 Feb;49(2):641-648
3. Hosoya S, Maeda Y, Ogawa K, Umehara N, Ozawa N, Sago H. Predictive factors for vaginal delivery by induction of labor in uncomplicated pregnancies at 40-41 gestational weeks: A Japanese prospective single-center cohort study. J Obstet Gynecol Res. 2023 Mar;49(3):920-929.
4. Unno S, Ogawa K, Nukariya A, Umehara N, Sago H. Predictive factors for successful external cephalic version with regional anesthesia. J Obstet Gynecol Res. 2023 May;49(5):1335-1340
5. Abe E, Kobayashi M, Horikawa R, Morisaki N, Tanaka H, Sago H, Ogawa K, Fujiwara T. The Association Between Eating Quickly and Excessive Gestational Weight Gain. Womens Health Rep (New Rochelle). 2023 Jun 2;4(1):280-287.
6. Inuzuka Y, Yamamoto-Hanada K, Kobayashi T, Pak K, Toyokuni K, Ogita H, Miyoshi T, Ogawa K, Sago H, Ohya Y. Prevention of atopic dermatitis in high-risk neonates via different types of moisturizer application: A randomized, blinded, parallel, three-group, phase II trial (PAF study). J Eur Acad Dermatol Venereol. 2023 Jul 21.
7. Miyayama C, Morisaki N, Ogawa K, Tanaka H, Shoji H, Shimizu T, Sago H, Horikawa R, Urayama KY. Evaluating the association between caesarean delivery and weight status in early childhood in a Japanese birth cohort study. Sci Rep. 2023 Nov 10;13(1):19612.
8. Arai T, Azuma H, Ogawa K, Ozawa K, Muromoto J, Wada S. Risk factors for cesarean section of the second twin after vaginal delivery of the first twin. Arch Obstet Gynecol, 2023 (in press)

9. Ozawa K, Kanazawa S, Mikami M, Muromoto J, Sugibayashi R, Wada S, Sago H. Ultrasound measurement of umbilical venous flow volume at the intra-abdominal portion in normal fetuses. *J Med Ultrason* (2001). 2023 Jul;50(3):427-432.
10. Michi Hisano, Koji Nakagawa, Tomo Suzuki, Rikikazu Sugiyama & Koushi Yamaguchi. Immunosuppressive therapy with tacrolimus is a potential drug candidate for the prevention of unexplained or preeclamptic stillbirths with Th1- dominant immune states: a case series of five patients. *The Journal of Maternal-Fetal & Neonatal Medicine* 2023, vol.36, No.2, 2258254
11. Kato S, Takehara K, Sasaki A, Suganuma H, Kakee N, Inoue E, Tanigaki S, Sago H. Randomized trial of advice from healthcare professionals to eliminate constriction by maternal clothing on the trunk to prevent preterm birth and improve health status. *J Obstet Gynaecol Res.* 2023 Nov;49(11):2656-2663.
12. Sankoda A, Arata N, Sato S, Umehara N, Morisaki N, Ito Y, Sago H, Yano Y, Horikawa R. Association of Isolated Hypothyroxinemia and Subclinical Hypothyroidism With Birthweight: A Cohort Study in Japan. *J Endocrine Society* 2023; 7(5): bvad045.
13. Risa Fukuda, Kyongson Pak, Megumi Kiuchi, Naoko Hirata, Ryo Tanaka, Naoko Mochimaru, Mari Mitsui, Yukihiro Ohya, Kazue Yoshida, Association of lipid abnormalities in the stratum corneum and TGF- β 1 and 2 in colostrum and the development of infantile seborrheic dermatitis: A prospective birth cohort study. *Journal of Dermatological Science.* 2023 Aug 26
14. Hosoya S, Yokomizo R, Kishigami H, Fujiki Y, Kaneko E, Amita M, Saito T, Kishi H, Sago H, Okamoto A, Umezawa A. Novel therapeutic strategies for injured endometrium: intrauterine transplantation of menstrual blood-derived cells from infertile patients. *Stem Cell Res Ther.* 2023 Oct 15;14(1):297
15. Motomura K, Morita H, Okada N, Matsuda A, Nakae S, Fujieda M, Sago H, Saito H, Matsumoto K. Comprehensive Analysis of the Expression and Functions of Pattern Recognition Receptors in Differentiated Cytotrophoblasts Derived from Term Human Placentas. *J Immunol.* 2023 May 15;210(10):1552-1563.
16. Fukui K, Amari S, Yotani N, Kosaki R, Hata K, Kosuga M, Sago H, Isayama T, Ito Y. A Neonate with Mucopolysaccharidosis Type VII with Intractable Ascites. *AJP Rep.* 2023 Mar 16;13(1):e25-e28.
17. Ono H, Sago H, Ozawa K, Wada S, Kato H. Valvuloplasty for fetal critical aortic stenosis: Possible first successful case in Japan. *Pediatr Int.* 2023 Jan;65(1):e15491.
18. Yamamoto Y, Umehara N, Yamashita Y, Sato M, Takehara K, Sago H. Labor risk factors for fetal heart rate abnormality after combined spinal-epidural analgesia. *Int J Gynaecol Obstet.* 2023 Mar;160(3):892-899.
19. Tsurane K, Kaneko K, Yoshida K, Tanaka R, Sago H, Murashima A. Initiation of hydroxychloroquine therapy during pregnancy can cause adverse effects and alter pregnancy outcomes: A case of acute generalised exanthematous pustulosis induced by

hydroxychloroquine in a patient with systemic lupus erythematosus. Mod Rheumatol Case Rep. 2023 Jun 19;7(2):373-377.

20. Nagaoka K, Kaneko K, Miyagawa E, Abe S, Kohno C, Tsurane K, Mito A, Ozawa N, Sago H, Arata N, Murashima A. Clinical features of women with thrombotic microangiopathy in pregnancy: A case series from a single Japanese tertiary perinatal care center. J Obstet Gynaecol Res. 2023 Dec;49(12):2804-2810.

[和文原著]

1. 早産児の脳保護目的の母体硫酸マグネシウム投与における児の出生時蘇生への影響についての検討. 増田 怜良, 栗野 世奈, 三浦 瑠衣子, 鈴木 朋, 小澤 克典, 梅原 永能, 諫山 哲哉, 左合 治彦. 日本周産期・新生児医学会雑誌; 2023; 59(2): 200-205.
2. early-onset FGR の管理: 胎児モニタリングの方法と娩出基準 重症胎児発育不全の前方視的コホート研究の結果より. 日本周産期・新生児学会雑誌; 2023; 59(4): 528-529. 梅原永能
3. 重症胎児発育遅延児の前方視的コホート研究の結果から胎児発育不全の診断基準を再考する. 日本超音波医学会誌; 2023; 50(supple): 323. 栗野啓. 梅原永能
4. 五十嵐 涼, 小澤 克典, 東 裕福, 室本 仁, 小川 浩平, 和田 誠司, 左合 治彦. 非典型的な twin anemia-polycythemia sequence (TAPS) の1例. 東京産科婦人科学会会誌. 2023年10月; 72巻4号: 797-800.

[症例報告]

1. Kamihara Y, Ozawa K, Muromoto J, Sugibayashi R, Wada S, Shibata Y, Hori A, Hasegawa F, Hata K, Sago H. Clinical features of fetal hydrothorax associated with mucopolysaccharidosis-VII. J Obstet Gynaecol Res. 2023 Oct;49(10):2538-2543.
2. Ono H, Sago H, Ozawa K, Wada S, Kato H. Valvuloplasty for fetal critical aortic stenosis: Possible first successful case in Japan. Pediatr Int. 2023 Jan;65(1):e15491.

[英文総説]

なし

[和文総説]

1. 研修ノートNo. 111 妊娠時期による症状に対する鑑別疾患. 妊娠初期/中期. 梅原永能. 日本産婦人科医学会編. 2023; 04: 2-9.
2. 私の治療2023-2024年度版 微弱陣痛・遷延分. 梅原永能. 日本医事新報社. 2023; 04: 47.
3. 今日の治療指針2023年版 胎児発育不全. 梅原永能. 医学書院. 2023; 01: 1367.
4. 今日の治療指針2023年版 羊水塞栓. 小川浩平. 医学書院. 2023; 01: 1367.
5. 研修ノートNo. 111 妊娠時期による症状に対する鑑別疾患. 妊娠後期. 小川浩平. 日本産婦人科医学会編. 2023; 04: 2-9.
6. 特集プレコンセプションケア【ひとくちメモ】家系に遺伝性疾患を有する場合の保因者診断 日本医師会雑誌 第152巻・第6号 P608 (2023年9月) 佐々木愛子
7. 重篤な遺伝性疾患を対象とした着床前遺伝学的検査 (PGT-M) の今後 日本周産期・新生児医学会雑誌

第58巻4号P710-713「学術集会講演記録集」(2023.04)佐々木愛子

8. 和田 誠司, 梶原 一紘, 室本 仁, 杉林 里佳, 小澤 克典. 【知っておきたい周産期・新生児医療up to date】出生前 胎児治療の現状と今後. 小児内科. 2023;55(11):1737-41.

[著書]

1. 小澤克典. 産科診療Pros&Cons 胎児乳び胸水における遺伝子疾患と超音波所見. MCメディカ出版. 2023年5月5日発刊. 頁147-149.
2. 小澤克典. 胎児超音波診断「いつもと違う!」にどうアプローチする? メジカルビュー社. 2023年4月1日発行. 頁49-83.

[ガイドライン、研究報告書]

なし

[学会発表]

1. Yuki Kamihara, Kohei Ogawa, Hiromitsu Azuma, Seiji Wada, Haruhiko Sago. Association Between Gestational Weight Gain and Chronic Disease Risks in Later Life. The 22nd Congress of the Federation of the Asia and Oceania Perinatal Societies. Keio Plaza Hotel, Tokyo. 7th-9th October 2023.
2. Azuma Hiromitsu, Ogawa Kouhei, Arai Tomohiro, Muromoto Jin, Ozawa Katsusuke, Sago Haruhiko. Risk factors for second-twin cesarean section after first-twin vaginal delivery. 第75回日本産科婦人科学会学術講演会 2023年5月(東京)
3. Rina Akaishi, Fuyuki Hasegawa, Yuuki Kakinuma, Chihiro Nishino, Taisuke Morita, Shin Mouri, Saho Fujino, Yuuya Fujibe, Saori Unno, Jin Muromoto, Tomo Suzuki, Rika Sugibayashi, Katsusuke Ozawa, Aiko Sasaki, Seiji Wada, Haruhiko Sago. Pregnant women's recent preferences for prenatal genetic testing: A single-center study in Japan. Human Genetics Asia 2023. Tokyo. October 11-14, 2023
4. Katsusuke Ozawa, Jin Muromoto, Rika Sugibayashi, Seiji Wada, Haruhiko Sago. Role of Venous Doppler in Predicting Perinatal Death in Selective Fetal Growth Restriction without Oligohydramnios. The 22nd Congress of the Federation of the Asia and Oceania Perinatal Societies. Keio Plaza Hotel, Tokyo. 7th-9th October 2023.
5. Katsusuke Ozawa, Jin Muromoto, Rika Sugibayashi, Seiji Wada, Haruhiko Sago. A preliminary study on using artificial intelligence for fetal lung volume identification in three-dimensional ultrasound. The 33th World Congress on Ultrasound in Obstetrics and Gynecology. Seoul Korea. 15th-18th October 2023.
6. Katsusuke Ozawa, Jin Muromoto, Rika Sugibayashi, Seiji Wada, Haruhiko Sago. Lung size and survival in fetuses that underwent fetoscopic endotracheal occlusion for severe congenital diaphragmatic hernia. 日本産科婦人科学会. 2023. 5. 13. 東京.
7. Noriko Kurosaka, Katsusuke Ozawa, Hiromitsu Azuma, Jin Muromoto, Kohei Ogawa, Seiji Wada, Haruhiko. Abnormal cardiotocograms in monochronic monoamniotic twin pregnancies. 第2回日本産婦人科超音波研究会学術集会. 2023. 3. 4. 大阪
8. 小澤克典, 室本仁, 杉林里佳, 和田誠司, 浦田晋, 小野博, 左合治彦. 重症大動脈弁狭窄症に対す

- る胎児大動脈弁形成術. 日本胎児心臓病学会第29回学術集会. 2023. 2. 24. 大阪.
9. 小澤克典. 胎盤循環と動物実験からみた胎児心不全. 日本超音波医学会第96回学術集会. 2023. 5. 28. 埼玉.
 10. 藤野佐保, 小澤克典, 栗野啓, 上原有貴, 藤部佑哉, 室本仁, 杉林里佳, 和田誠司, 左合治彦. 胎児診断されたEbstein 奇形/三尖弁異形成の生命予後指標における検討. 日本超音波医学会第96回学術集会. 2023. 5. 28. 埼玉.
 11. 森田泰介, 小澤克典, 室本仁, 杉林里佳, 和田誠司, 左合治彦. 妊娠後期に胎児の胸郭形成異常が疑われた一例. 日本超音波医学会第96回学術集会. 2023. 5. 28. 埼玉.
 12. 岩井信之介, 小澤克典, 長久保貴也, 森田泰介, 黒坂徳子, 藤野佐保, 室本仁, 杉林里佳, 和田誠司, 左合治彦. 異なる転機を辿った胎児心臓を圧排する縦隔腫瘍の2例. 日本超音波医学会第96回学術集会. 2023. 5. 28. 埼玉.
 13. 小澤克典, 室本仁, 杉林里佳, 和田誠司, 伊藤裕司, 藤野明浩, 左合治彦. 胎児十二指腸・空腸閉鎖の多施設レジストリ研究 (FIND 研究) の進捗報告. 2023. 7. 9. 名古屋.
 14. 黒坂徳子, 小澤克典, 東裕福, 室本仁, 小川浩平, 和田誠司, 左合治彦. 一絨毛膜一羊膜双胎妊娠におけるCTG異常の検討. 2023. 7. 9. 名古屋.
 15. 小澤克典, 梶原一紘, 室本仁, 杉林里佳, 金基成, 田丸俊輔, 和田誠司, 小野博, 左合治彦. 重症大動脈弁狭窄症に対する超音波ガイド下胎児大動脈弁形成術2例目の報告. 第45回日本母体胎児医学会学術集会. 2023. 10. 14. 東京.
 16. 鈴木朋, 肥沼幸, 藤岡泉, 八鍬菜穂, 後藤美賀子, 渡邊央美, 村島温子, 左合治彦. 「妊娠初期におけるクラリスロマイシ服用の胎児への影響についての評価」第59回周産期・新生児医学会学術集会, 2023年7月 名古屋
 17. 鈴木朋, 梅原永能, 松木隆弘, 矢矧加奈, 苛原誠, 福家辰樹, 左合治彦. 「妊娠後期から産後にかけての腔内菌叢についての検討」第75回日本産科婦人科学会学術講演会, 2023年4月
 18. 森田泰介, 鈴木朋, 西野千尋, 小川浩平, 梅原永能, 和田誠司. 「早産既往症例に対して行う子宮頸管縫縮術における実施時期と周産期予後との関連について」第16回日本早産学会学術集会. 2023年12月 富山
 19. 藤野 佐保, 金子 佳代子, 三井 真理, 石黒 精, 左合 治彦, 村島 温子. 第IX因子補充を要した血友病 B 保因者の妊娠管理/Management of hemophilia B during pregnancy requiring factor IX supplementation. 第33回日本産婦人科・新生児血液学会 2023. 6月 埼玉
 20. 藤野 佐保, 荒田 尚子, 金子 佳代子, 梅原 永能, 左合 治彦, 村島 温子. 当院で経験したミトコンドリア糖尿病合併妊娠の1例. 第59回日本周産期・新生児医学会学術集会. 2023. 7月 名古屋
 21. 五十嵐 涼, 小澤 克典, 東 裕福, 室本 仁, 小川 浩平, 和田 誠司, 左合 治彦. 非典型的なtwin anemia-polycythemia sequence (TAPS) の1例. 東京産科婦人科学会第405回例会 2023年5月 (東京)
 22. 李 佳陽, 小川 浩平, 栗野 啓, 海野 沙織, 東 裕福, 梅原 永能, 左合 治彦. 妊娠中期の子宮内胎児死亡 (IUFD) に対して待機的管理を選択した全前置胎盤合併妊娠の1例. 第59回日本周産期新生児医学会学術集会 2023年7月 (愛知)
 23. 黒坂 徳子, 小澤 克典, 東 裕福, 室本 仁, 小川 浩平, 和田 誠司, 左合 治彦. 一絨毛膜一羊膜双胎妊娠におけるCTG異常の検討. 第59回日本周産期新生児医学会学術集会 2023年7月 (愛知)

24. 松尾 李乃, 藤部 佑哉, 大曾根 史将, 栗野 啓, 東 裕福, 金子 佳代子, 三井 真理, 梅原 永能, 左合 治彦. 妊娠 32 週に特発性肝破裂を発症し, 腹腔内出血のため緊急帝王切開術を施行し母児ともに救命し得た 1 例. 第 75 回日本産科婦人科学会学術講演会 2023 年 5 月 (東京)
25. 福田理紗, 朴慶純, 木内めぐみ, 平田尚子, 田中諒, 持丸奈央子, 三井真理, 大矢幸弘, 吉田和恵. 乳児脂漏性皮膚炎の発症における角層内因子と母乳中因子との関連-前向き出生コホート研究- 日本皮膚科学会東京支部学術大会 2023. 5 月 東京
26. 相葉裕幸, 三井真理, 大西志麻, 内田佳子, 植松悟子, 窪田満, 山口麻子, 庄司健介. 小児周産期病院における性虐待被害児への性感染症スクリーニング検査の実態について 第 70 回日本小児保健協会学術集会 2023. 6 月 神奈川

〔講演〕

1. 2023/3/11 (Web 開催, オンデマンド配信)
フェイinjekt WEB 講演会
周産期予後の最近の話題〜妊産婦貧血、高齢妊娠の大規模データベース解析〜
小川浩平
2. 2023/11/6 (Web 開催)
小田原地区産婦人科医学会学術講演会 招聘講演
妊産婦の貧血
小川浩平
3. 2023/10/15 (現地開催)
第 45 回日本母体胎児医学会学術集会
先天性心疾患の胎児スクリーニングと多職種連携
小澤克典
4. 2023/10/16 (Seoul, Korea, 現地開催)
The 33th World Congress on Ultrasound in Obstetrics and Gynecology
Fetal Therapy & Ultrasound Guided Interventions: Where are we now?
Katsusuke Ozawa
5. 2023/7/10 第 59 回 日本周産期・新生児医学会学術集会 (現地+オンデマンド)
ワークショップ 12 early-onset FGR の管理: 胎児モニタリングの方法と娩出基準
重症胎児発育不全の前方視的コホート研究の結果より 梅原永能
6. 2023/5/12 第 75 回 日本産科婦人科学会 (現地+オンデマンド)
専攻医教育プログラム 周産期 骨盤位分娩/帝王切開既往妊婦の管理
梅原永能
7. 2023/5/12
第 75 回日本産科婦人科学会学術講演会 東京国際フォーラム
アフタヌーンセミナー3
出産を迎えるご家族へ, 新生児マススクリーニングとは何かを伝える重要性
「ご家族への情報提供とその後の疾患説明が疾患受容に与える影響」
佐々木愛子
8. 2023/5/21
第 3 回 JOHBOC 学術集会
シンポジウム 4
HBOC の着床前遺伝学的検査 (PGT-M) に関する課題
HBOC 診療ガイドライン BQ10 の解説
佐々木愛子

9. 2023/06/10 ウェスティン都ホテル京都
Nordiscience forum 2023 教育講演
小児内分泌疾患における出生前遺伝学的検査・着床前遺伝学的検査
佐々木愛子
10. 2023/6/22
第119回日本精神神経学会学術集会 委員会シンポジウム8 (医療倫理委員会)
着床前遺伝学的検査をめぐる倫理的課題ー精神医学の観点から
日本産科婦人科学会から日本精神神経学会へのPGT-Mに関する審査協力依頼について
佐々木愛子
11. 2023/7/2 長崎県医師会館
第273回長崎産科婦人科学会・長崎県産婦人科医会総会学術集会
特別講演Ⅰ 「着床前遺伝学的検査に関する審査小委員会による今までの取り組み ～新見解と申請・審査の実際～」
佐々木愛子
12. 2023/10/25 岡山大学 鹿田会館
第4回岡山臨床遺伝カンファレンス
周産期医療に関連した遺伝学的検査の最新動向
佐々木愛子
13. 2023/11/19 Zoom ウェビナー
ウェビナー「筋強直性ジストロフィー 着床前診断の今」
佐々木愛子
14. 2023/11/23 オンライン
第21回全国遺伝子医療部門連絡会議
ワークショップ WS3 PGT-Mと遺伝医療
佐々木愛子
15. 2023/11/24 岡山大学
「妊娠中からの母児支援」即戦力育成プログラム23
遺伝カウンセリングの現場から 産科スタッフが知っておくべき遺伝の話
産科スタッフのための「遺伝の基礎知識」
ケーススタディ「高年妊娠」予後不良な染色体異常(13,18トリソミー)を告げられたカップルへの医療者側の対応など
佐々木愛子
16. 2023/12/15 名古屋 (ウイंक愛知)
第9回日本産科婦人科遺伝診療学会 周産期講義8
出生前遺伝学的検査異常に対する実臨床でのアプローチ法ー超音波検査の活用ー
国立成育医療研究センター 周産期・母性診療センター産科医長 佐々木愛子
19. 2023/11/24 宮崎大学
宮崎大学講演
「妊孕性温存療法、胎児治療」
和田誠司
20. 2023/3/23 慈恵医大第三病院
第34回粕江調布府中産婦人科臨床研究会/慈恵医大産婦人科集談会
「胎児超音波ーここがポイントー」
和田誠司
21. 2023/6/7 信州大学
第34回粕江調布府中産婦人科臨床研究会/慈恵医大産婦人科集談会第336回 長野県周産期カンファレンス
「胎児超音波診断・胎児治療ーUp To Dateー」
和田誠司

22. 2023/12/16 池袋メトロポリタンホテル
第1回板橋加賀産婦人科懇話会
「胎児超音波・胎児治療」
和田誠司
21. 2023/5/14 国際フォーラム
第75回日本産科婦人学会 術講演モーニング セミナー
「軟骨無形成症の胎児診断について」
和田誠司

[広報活動]

なし

産科麻酔

[原著論文]

1. Yamamoto Y, Umehara N, Yamashita Y, Sato M, Takehara K, Sago H: Labor risk factors for fetal heart rate abnormality after combined spinal-epidural analgesia. Int J Gynaecol Obstet, 2023 ; 160(3) : 892-899

[学会発表]

1. Verdonk F, Julien Hedou J, Bellan G, Ganio E, Stelzer I, Feyaerts D, Sato M, Bonham M, Ando K, Gaudilliere D, Gaillard R, Molliex S, Sharshar T, Gaudilliere G: An immune signature of postoperative cognitive dysfunction (POCD), a prospective cohort study. IARS AUA SOCCA annual meeting 2023, AUA Annual Meeting, SOCCA Annual Meeting, IARS Annual Meeting, Denver, USA, 2023. 4. 14
2. Einhaus J, Gaudilliere D, Hedou J, Feyaerts D, Ferreira L, Tsai A, Bruckman K, Ahmad S, Stelzer I, Sato M, Bonham A, Diop M, Ganio E, Sunwoo J, Schurch C, Han X, Gaudilliere B. A : multionomic approach to imaging mass cytometry analysis of the tumor microenvironment in oral tongue squamous cell carcinoma. 15th Annual Plastic Surgery Research Symposium, Stanford, USA, 2023. 4. 18
3. Sato M, Einhaus J, Feyaerts D, Gillard J, Sabayev M, Ganio E, Stelzer I, Hedou J, Ando K, Tsai A, Bonham A, Diop M, Gaudilliere D, Maric I, Angst M, Shaw G, Aghaeepour N, Nolan G, Giudice L, Costello J, Oskotsky T, Sirota S, Stevenson D, Gaudilliere B. A : multiplex mass cytometry assay for high-throughput immunomodulatory assessment of candidate drugs to prevent preterm birth. Immunology Postdoctoral Symposium 2023, Stanford, USA, 2023. 4. 26
4. Feyaerts D, Gillard J, Stelzer I, Marić I, Hédou J, Diop M, Ganio E, Han X, Ando K, Tsai A, Bonham A, Sato M, Einhaus J, Sabayev M, Aghaeepour N, Angst M, Romero R, Hlatky M, Stevenson D, Winn R, Gomez-Lopez N, Gaudilliere B : Cross-tissue assessment of local and peripheral immune determinants of preeclampsia. Immunology Postdoctoral Symposium 2023, Stanford, USA,

2023. 4. 26

5. Smith B, Einhaus J, Sato M, Ganio E, Gaudilliere B: Evaluating the effect of anesthetic pharmacologic compounds on innate immune signaling and effector function with mass-tag barcoding and functional assays. The 38th Stanford Medical Student Research Symposium, Stanford, USA, 2023. 4. 27
6. Ijuin A, Sato M, Abe M, Matsunaga W, Yamashita Y, Ohara R : Ropivacaine and fentanyl concentrations in umbilical cord blood and neonatal outcome after epidural analgesia administration using programmed intermittent bolus: a prospective observational study. SOAP 55th Annual Meeting, New Orleans, USA, 2024. 5. 5
7. Einhaus J, Gaudilliere D, Hedou J, Feyaerts D, Ozawa M G, Sato M, Ganio E, Tsai A. S., Stelzer I A, Bruckman K C, Bonham T A, Diop M., Ferreira L, Han X, Schürch C M, Gaudilliere B: Integrative modeling of multiplex imaging data identifies a spatial immune signature of oral squamous cell carcinoma histological grade. 106th Annual Conference of the German Pathology association, Leipzig, Germany, 2023. 6. 1
8. Sato M, Einhaus J, Feyaerts D, Gillard J, Sabayev M, Ganio E, Stelzer I, Hedou J, Ando K, Tsai A, Bonham A, Diop M, Gaudilliere D, Maric I, Angst M, Shaw G, Aghaeepour N, Nolan G, Giudice L, Costello J, Oskotsky T, Sirota S, Stevenson D, Gaudilliere B A: multiplex mass cytometry assay for high-throughput immunomodulatory assessment of candidate drugs to prevent preterm birth. Anesthesia Research Awards Dinner 2023, Palo Alto, USA, 2023. 6. 5
9. Einhaus J, Gaudilliere D, Hedou J, Feyaerts D, Ferreira L, Tsai A, Bruckman K, Ahmad S, Stelzer I, Sato M, Bonham A, Diop M, Ganio E, Sunwoo J, Schurch C, Han X, Gaudilliere B A: multiomic approach to imaging mass cytometry analysis of the tumor microenvironment in oral tongue squamous cell carcinoma. Anesthesia Research Awards Dinner 2023, Palo Alto, USA, 2023. 6. 5
10. Feyaerts D, Gillard J, Stelzer I, Marić I, Hédou J, Diop M, Ganio E, Bezemer R, Han X, Ando K, Tsai A, Bonham A, Sato M, Einhaus J, Sabayev M, Prins J, Aghaeepour N, Angst M, Romero R, Hlatky M, Stevenson D, Winn V, Gomez-Lopez N, Gaudillière B: Cross-tissue assessment of local and peripheral immune determinants of preeclampsia. Anesthesia Research Awards Dinner 2023, Palo Alto, USA, 2023. 6. 5
11. Smith B, Einhaus J, Sato M, Ganio E, Gaudilliere B: Evaluating the effect of anesthetic pharmacologic compounds on innate immune signaling and effector function with mass-tag barcoding and functional assays. Anesthesia Research Awards Dinner 2023, Palo Alto, USA, 2023. 6. 5
12. Einhaus J, Gaudilliere D, Hedou J, Feyaerts D, Ozawa M. G., Sato M, Ganio E. A., Tsai A. S., Stelzer I. A., Bruckman K. C., Bonham T. A., Diop M., Ferreira L., Han X., Schürch C. M., Gaudilliere B: Integrative modeling of multiplex imaging data identifies a spatial immune signature of oral squamous cell carcinoma histological grade. Annual meeting of the German Society of Pathology, Leipzig, Germany, 2023. 6. 1
13. Sato M, Abe M, Ijuin A, Matsunaga W, Kume C, Ohara R : Combined a single dose of intrathecal morphine and intravenous patient-controlled analgesia for labor analgesia in mid-term

delivery: Report of two cases. 40th ESRA Annual Congress 2023, Paris, France, 2023.

9.6

14. Matsunaga W, Sato M, Abe M, Ijuin A, Yamashita Y, Ohara R: Fetal Anesthesia with Maternal Remifentanyl Infusion for Thoracoamniotic Shunt (TAS) Procedure. Anesthesiology 2023, San Francisco, 2023. 10. 16
15. 山下早弥華, 阿部真友子, 伊集院亜梨紗, 松永渉, 山下陽子, 大原玲子, 鈴木康之: 妊娠後期に心窩部痛を主訴に来院し特発性肝破裂と診断された一例. 第2回日本周産期麻酔科学会学術集会, 福岡, 2023. 3. 25
16. 廣井祐美, 山下陽子, 阿部真友子, 伊集院亜梨紗, 松永渉, 大原玲子: 救急医師、産科医師、麻酔科医の連携による早期対応で救命しえた子宮破裂症例. 第2回日本周産期麻酔科学会学術集会, 福岡, 2023. 3. 25
17. 伊集院亜梨紗, 阿部真友子, 松永渉, 山下陽子, 佐藤正規, 大原玲子, 鈴木康之: 無痛分娩における出生児臍帯静脈血薬物濃度に関する前向き観察研究のパイロットスタディ. 第2回日本周産期麻酔科学会学術集会, 福岡, 2023. 3. 26
18. 松永渉, 阿部真友子, 伊集院亜梨紗, 山下陽子, 大原玲子: ドコサヘキサエン酸サプリメント内服妊婦における血液粘弾性試験を用いた血小板凝集能の検討. 第2回日本周産期麻酔科学会学術集会, 福岡, 2023. 3. 26
阿部まり子, 松永渉, 伊集院亜梨紗, 山下陽子, 大原玲子, 鈴木康之: 産科麻酔領域における硬膜穿刺後頭痛に対する当院での取り組み. 日本麻酔科学会第70回学術集会, 兵庫, 2023. 6. 2
19. 山下陽子: 胎児治療の麻酔. 日本麻酔科学会第70回学術集会, 兵庫, 2023. 6. 3 (シンポジウム)
20. 松永渉, 久米澄子, 橋谷舞: 大動脈弁置換術後妊婦を硬膜外無痛分娩で安全に管理できた1例. 日本心臓血管麻酔学会第28回学術集会, 奈良, 2023. 9. 17
21. 佐藤正規: 胎児治療に必要な小児麻酔の知識. 日本小児麻酔学会第28回大会, 福井, 2023. 10. 8 (シンポジウム)
22. 山下早弥華, 佐藤正規, 久米澄子, 伊集院亜梨紗, 松永渉, 山下陽子, 大原玲子: オピオイド静脈投与と脊髄くも膜下麻酔で分娩鎮痛管理した妊娠中期流産の3症例. 第127回日本産科麻酔学会学術集会, 大阪, 2023. 12. 2

【講演】

1. 佐藤正規: 無痛分娩における麻酔科医の役割 ~パイロット or 一流CA~. 第1回 浜松無痛分娩研究会, 浜松, 2023. 3. 11
2. Ohara R: Improving Perinatal Safety in Japan. The 26th Congress of The Korean Society of Obstetric Anesthesiologists, Seoul, 2023. 6. 23
3. 大原玲子: 産科麻酔部門の紹介. 第4回世田谷区成育医療周産期セミナー ~産科麻酔~, 2023. 9. 21
4. 佐藤正規: 帝王切開一成育の実際を踏まえて. 第4回成育周産期連携セミナー~産科麻酔~, 2023. 9. 21
5. 山下陽子: 無痛分娩一成育の実際を踏まえて. 第4回成育周産期連携セミナー~産科麻酔~, 2023. 9. 21

6. 松永渉： うちの PIEB の設定 クリニカルリレー. 第 127 回日本産科麻酔学会教育講演動画配信, 2023. 12. 2-3

[講義]

大原玲子： 分娩の麻酔 (分娩の麻酔、帝王切開の麻酔). 麻酔に必要な生理学と麻酔の基礎知識
東京医療保健大学 高度実践助産コース, 東京, 2023. 6. 16

新生児科

[原著論文：査読付] (Reviewed Paper)

1. Tsuda K, Shibasaki J, Takeuchi A, Mukai T, Sugiyama Y, Isayama T, Ioroi T, Takahashi A, Yutaka N, Iwata O: Baby Cooling Registry of Japan. Prolonged requirements for mechanical ventilation and tube feeding support predicted 18-month outcomes for neonatal encephalopathy. Acta Paediatr. 2023 Jan 27. doi:10.1111/apa.16687. Epub ahead of print. PMID: 36708079.
2. Wyckoff MH, Greif R, Morley PT, et al (Isayama T is 65th among 135 authors). 2022 International Consensus on Cardiopulmonary Resuscitation and Emergency Cardiovascular Care Science With Treatment Recommendations: Summary From the Basic Life Support; Advanced Life Support; Pediatric Life Support; Neonatal Life Support; Education, Implementation, and Teams; and First Aid Task Forces. Circulation. 2022 Nov 3. doi: 10.1161/CIR.0000000000001095. Epub ahead of print. PMID: 36325905.
3. Wyckoff MH, Greif R, Morley PT, et al (Isayama T is 65th among 135 authors). 2022 International Consensus on Cardiopulmonary Resuscitation and Emergency Cardiovascular Care Science With Treatment Recommendations: Summary From the Basic Life Support; Advanced Life Support; Pediatric Life Support; Neonatal Life Support; Education, Implementation, and Teams; and First Aid Task Forces. Resuscitation. 2022 Oct 29;S0300-9572(22)00684-0. doi:10.1016/j.resuscitation.2022.Oct.05. Epub ahead of print. PMID: 36336195.
4. Yoneda K, Amari S, Mikami M, et al (Isayama T is the Corresponding author/ Last author). Development of Mortality Prediction Models for Infants with Isolated, Left-Sided Congenital Diaphragmatic Hernia Before and After Birth. Pediatr Pulmonol. 2022. Sep.29. doi: 10.1002/ppul.26172. Epub ahead of print. PMID: 36174997.
5. Nakanishi H, Isayama T, Kokubo M, et al. Inhaled nitric oxide therapy in the post-acute phase in extremely preterm infants: a Japanese cohort study. J Pediatr. 2022 Sep 15:S0022-3476(22)00817-4. doi: 10.1016/j.jpeds.2022.Jul.057. Epub ahead of print. PMID: 36116533.
6. Tomo CK, Balogun OO, Davidson J, et al. (Isayama T is 10th among 13 authors). Comparison of mortality and survival without major morbidities of very preterm infants with very low birth weight from Japan and Brazil. Rev Paul Pediatr. 2022 Sep 9;41:e2021389. doi:

10. 1590/1984-0462/2023/41/2021389. PMID: 36102406; PMCID: PMC9462411.
7. Ozawa Y, Miyake F, Isayama T (Corresponding author/ Last author). Efficacy and safety of permissive hypercapnia in preterm infants: A systematic review. *Pediatr Pulmonol*. 2022.Aug.9. doi: 10.1002/ppul.26108. Epub ahead of print. PMID: 35945674.
8. Nishi K, Uemura O, Harada R, et al. (Isayama T is the 14th author among 18 authors) Early predictive factors for progression to kidney failure in infants with severe congenital anomalies of the kidney and urinary tract. *Pediatr Nephrol*. 2022.Aug.11. doi: 10.1007/s00467-022-05703-1. Epub ahead of print. PMID: 35951131.
9. Kim KS, Belley-Côté EP, Gupta S, Pandey A, Alsagheir A, Makhdom A, McClure G, Newsome B, Gao SW, Bossard M, Isayama T, et al. Mechanical versus bioprosthetic valves in chronic dialysis: a systematic review and meta-analysis. *Can J Surg*. 2022.Jul.12;65(4):E450-E459. doi: 10.1503/cjs.001121. PMID: 35820696.
10. Ito M, Tomotaki S, Isayama T, et al. The status of chronic lung disease diagnosis in Japan: Secondary publication. *Pediatr Int*. 2022.Jan;64(1):e15184. doi: 10.1111/ped.15184. PMID: 35727868.
11. Tsuda K, Shibasaki J, Isayama T, Takeuchi A, Mukai T, Sugiyama Y, Ioroi T, Takahashi A, Yutaka N, Iwata S, Nabetani M, Iwata O. Three-year outcome following neonatal encephalopathy in a high-survival cohort. *Sci Rep*. 2022.May.13; 12(1):7945. doi: 10.1038/s41598-022-12091-x. PMID: 35562399; PMCID: PMC9106703.
12. Tanzawa A, Saito J, Shoji K, Kojo Y, Funaki T, Maruyama H, Isayama T, et al. Fluconazole Population Pharmacokinetics after Fosfluconazole Administration and Dosing Optimization in Extremely Low-Birth-Weight Infants. *Microbiol Spectr*. 2022 Apr 27;10(2):e0195221. doi: 10.1128/spectrum.01952-21. Epub 2022.03.10. PMID: 35266811; PMCID: PMC9045325.
13. Guinsburg R, de Almeida MFB, Finan E, Perlman JM, Wyllie J, Liley HG, Wyckoff MH, Isayama T (Last author). Tactile Stimulation in Newborn Infants With Inadequate Respiration at Birth: A Systematic Review. *Pediatrics*. 2022.04.01;149(4):e2021055067. doi: 10.1542/peds.2021-055067. PMID:35257181
14. Isayama T, Kusuda S, Adams M, et al. International Variation in the Management of Patent Ductus Arteriosus and its Association with Infant Outcomes: A Survey and Linked Cohort Study. *J Pediatr*. 2022 May;244:24-29.e7. doi: 10.1016/j.jpeds.2021.12.071. Epub 2022. Jan.04. PMID: 34995641
15. Wada YS, Saito J, Hashii Y, Kishi T, Masayuki K, Kamiya T, Mizuno K. Remdesivir and Human Milk: A Case Study. *J Hum Lact*. 2022.05;38(2):248-251. doi: 10.1177/08903344221076539. Epub 2022 Feb 21.
16. Saito J, Tachibana Y, Kawasaki H, Tamon H, Ishii M, Wada YS, Oho M, Yakuwa N, Suzuki T, Sago H, Yamatani A, Murashima A. Transfer of Zolpidem to Cord Blood and Breast Milk: A Case Series Evaluating Zolpidem Serum Levels and Outcomes in Birth and Suckling Infants. *Breastfeed Med*. 2022.12;17(12):1034-1038.
17. Kuriki A, Hosoya S, Ozawa K, Wada S, Kosugi Y, Wada YS, Sekizawa A, Miyazaki O, Kagami

- M, Sago H. Quantitative assessment of coat-hanger ribs detected on three-dimensional ultrasound for prenatal diagnosis of Kagami-Ogata syndrome. J Obstet Gynaecol Res. 2022. 12;48(12):3314-3318.
18. Yamoto M, Nagata K, Terui K, Hayakawa M, Okuyama H, Amari S, Yokoi A, Masumoto K, Okazaki T, Inamura N, Toyoshima K, Koike Y, Yazaki Y, Furukawa T, Usui N: Long-Term Outcomes of Congenital Diaphragmatic Hernia: Report of a Multicenter Study in Japan. Children (Basel) 2022;9
 19. Kono J, Nagata K, Terui K, Amari S, Toyoshima K, Inamura N, Koike Y, Yamoto M, Okazaki T, Yazaki Y, Okuyama H, Hayakawa M, Furukawa T, Masumoto K, Yokoi A, Usui N, Tajiri T: The efficacy of the postnatal nasogastric tube position as a prognostic marker of left-sided isolated congenital diaphragmatic hernia. Pediatr Surg Int 2022;38:1873-1880
 20. Masahata K, Yamoto M, Umeda S, Nagata K, Terui K, Fujii M, Shiraishi M, Hayakawa M, Amari S, Masumoto K, Okazaki T, Inamura N, Toyoshima K, Koike Y, Furukawa T, Yazaki Y, Yokoi A, Endo M, Tazuke Y, Okuyama H, Usui N: Prenatal predictors of mortality in fetuses with congenital diaphragmatic hernia: a systematic review and meta-analysis. Pediatr Surg Int 2022;38:1745-1757
 21. Terui K, Nagata K, Yamoto M, Hayakawa M, Okuyama H, Amari S, Yokoi A, Furukawa T, Masumoto K, Okazaki T, Inamura N, Toyoshima K, Koike Y, Okawada M, Sato Y, Usui N: A predictive scoring system for small diaphragmatic defects in infants with congenital diaphragmatic hernia. Pediatr Surg Int 2022;39:4
 22. 丹沢彩乃, 齊藤順平, 甘利昭一郎, 大穂祐介, 諫山哲哉, 伊藤裕司, 山谷明正: 新生児におけるトルバプタンの有効性および安全性の単施設後方視的観察研究. 日本小児臨床薬理学会雑誌. 2022;35(1):21-7.
 23. 高見直, 植田智希, 小川瑛雄, 小原真奈, 福井加奈: 2-A. 在胎26週400g児のBPDもしくは死亡を防ぐ呼吸管理として非侵襲的呼吸管理を推奨する. 日本新生児成育医学会雑誌. 2022: 34: 201-203.

[原著論文: 査読付]

1. 和田友香, 迫田真由美, 甘利昭一郎, 堀川美和子, 新田知恵子, 前田美加, 松原資恵, 窪田満, 伊藤裕司, 左合治彦: 乳児が入院した際の母乳育児に関する母親への実態調査. 日本小児科学会雑誌 126(12) 1633-1638, 2022

[原著論文: 査読なし]

1. 和田友香: 新生児の栄養と消化器疾患. With NEO vol.35 no.1 97-72. 2022
2. 和田友香: NICUにおける新型コロナウイルス感染症と搾母乳について. NICU mate 61:5, 2022
3. 和田友香: コロナ禍における出産・母乳育児. 家族と健康 第805号. 一般社団法人 日本家族計画協会
4. 和田友香: 乳び胸水・乳び腹水. 小児内科 vol.53 増刊号. 2021
5. 和田友香: コロナ禍の新生児と母親の生活. 保健の科学. 杏林書院. 64 (4): 226-231, 2022

6. 和田友香： Q27 授乳は1日何回、どのくらいの間隔が適切なのでしょうか？また、母乳と人工乳では授乳間隔や回数を変えるべきですか？ 周産期医学 vol. 52 増刊号. 392-393, 2022
7. 和田友香： Q28 母乳は冷蔵庫や冷凍庫でどのくらい保存できますか？また、保存方法によって母乳の成分は変化するのでしょうか？ 周産期医学 vol. 52 増刊号. 394-395, 2022
8. 和田友香： Q29 生後1か月です。夜中起こさないと6時間ぐらい寝ています。起こして授乳したほうがよいのでしょうか？ 周産期医学 vol. 52 増刊号. 396, 2022
9. 和田友香： 5) 栄養状態の評価方法. 周産期医学 vol. 52 増刊号. 558-560, 2022
10. 和田友香： 6) 母乳と人工乳哺育の比較. 周産期医学 vol. 52 増刊号. 561-563, 2022

[症例報告]

1. 大島あゆみ, 柴田優花, 高見澤幸一, 小杉洋平, 増田怜史, 福井加奈, 上原陽治, 生田泰久, 甘利昭一郎, 竹田知洋, 和田友香, 丸山秀彦, 塚本桂子, 諫山哲哉, 小野博, 伊藤裕司： FOXF1 遺伝子変異より診断された肺胞毛細血管異形成症の一例. 日本小児科学会雑誌(0001-6543)126 巻 2 号 Page381, 2022. 2
2. 小杉洋平, 柴田優花, 増田怜史, 福井加奈, 上原陽治, 生田泰久, 甘利昭一郎, 竹田知洋, 和田友香, 丸山秀彦, 塚本桂子, 諫山哲哉, 伊藤裕司： 橋前槽くも膜嚢胞開窓術により閉塞性無呼吸が改善した 18p テトラソミーの 1 例. 日本小児科学会雑誌(0001-6543)126 巻 2 号 Page339, 2022. 02

[総説]

1. 甘利昭一郎ら. Controversies in perinatology 2023 産科編 胎児異常 (先天性横隔膜ヘルニア)ー経膈分娩. 周産期医学. 2022;52(12):1703-5.
2. 甘利昭一郎. 治療法の再整理とアップデートのために専門家による私の治療 新生児黄疸(新生児高ビリルビン血症). 日本医事新報. 2022(5135):50-1.

[著書]

なし

[ガイドライン、報告書、その他]

1. 臼井規朗. 厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業. 呼吸器系先天異常疾患の診療体制構築とデータベースおよび診療ガイドラインに基づいた医療水準向上に関する研究 (20FC1017). 令和三年度 総括・分担研究報告書. (分担研究者 甘利昭一郎)
2. 木口このみ, 丹沢彩乃, 山谷明正, 諫山哲哉, 竹田知洋, 岩橋香奈, 湖城由佳： PGE1 投与時の無呼吸症例に対するカフェインの使用実態調査. 日本小児臨床薬理学会雑誌(1342-6753)35 巻 1 号 Page118, 2022. 9
3. 丸山秀彦, 吉井沙織, 森田真知子, 大島あゆみ, 福井加奈, 小杉洋平, 柴田優花, 上原陽治, 生田泰久, 甘利昭一郎, 竹田知洋, 和田友香, 塚本桂子, 諫山哲哉, 伊藤裕司： ELBW かつ Severe SGA 児の骨折率減少の試み. 日本周産期・新生児医学会雑誌(1348-964X)58 巻 Suppl. 1 Page289,

2022. 6

[講演]

1. 和田友香：乳児の発達アセスメントと関わり．東京都委託講習会．オンライン， 2022. 2
2. 和田友香：母乳栄養に関する小児科医の役割．第233回大阪小児科学会．教育講演．2022. 4. 2
3. 和田友香：乳児の発達アセスメントと発達を促す関わり．東京都助産師会八南分会つむぎの会 オンライン， 2022. 11
4. 甘利昭一郎．新生児のみかた．成育こどもセミナー．2022. 5. 19. Web 開催
5. 甘利昭一郎．超早産児の急性期呼吸管理と「成育」での超早産児管理．第23回 京浜新生児医療懇話会 フレッシュパーソンセミナー．Web 開催．2022. 6. 25.

[学会発表]

1. Kana Fukui, Yushi Ito, Masayo Kokubo, Hidehiko Nakanishi, Shinya Hirano, Satoshi Kusuda, Shuichi Ito, Tetsuya Isayama. Association between erythropoietin and retinopathy of prematurity: a retrospective cohort study in Japan, 2008-2018. Pediatric Academic Societies Meeting 2022. Denver, 2022. 4. 21-25
2. 4th Taiwan-Korea-Japan Joint Congress on Neonatology poster
Hidehiko Maruyama, Tetsuya Isayama, Saori Yoshii, Machiko Morita, Ayumi Oshima, Satoshi Masuda, Kana Fukui, Yohei Kosugi, Yuka Sasaki, Yohji Uehara, Yasuhisa Ikuta, Shoichiro Amari, Tomohiro Takeda, Yuka Wada, Keiko Tsukamoto, Yushi Ito
Attempt to reduce bone fracture in ELBW infants with severe SGA 2022. 3. 19
3. 大島 あゆみ, 柴田 優花, 高見澤 幸一, 小杉 洋平, 増田 怜史, 福井 加奈, 上原 陽治, 生田 泰久, 甘利 昭一郎, 竹田 知洋, 和田 友香, 丸山 秀彦, 塚本 桂子, 諫山 哲哉, 小野 博, 伊藤 裕司：FOXF1 遺伝子変異より診断された肺胞毛細血管異形成症の一例．第125回日本小児科学会学術集会，福島， 2022. 4. 15-17
4. 小杉 洋平, 柴田 優花, 増田 怜史, 福井 加奈, 上原 陽治, 生田 泰久, 甘利 昭一郎, 竹田 知洋, 和田 友香, 丸山 秀彦, 塚本 桂子, 諫山 哲哉, 伊藤 裕司：橋前槽くも膜嚢胞開窓術により閉塞性無呼吸が改善した 18p テトラソミーの1例，第125回日本小児科学会学術集会，福島， 2022. 4. 15-17
5. 桂 美遥, 大江 俊太郎, 高田 啓志, 坂野 沙里, 影山 智佳, 前田 直則, 旗生 なおみ, 佐藤 利永子, 鈴木 絵理, 藤田 尚代, 山澤 一樹, 増田 怜史, 和田 友香, 丸山 秀彦, 鈴木 俊彦, 山田 洋輔, 長谷川 久弥, 三春 晶嗣：PURA 症候群は先天性中枢性低換気症候群の鑑別診断である，第125回日本小児科学会学術集会，福島， 2022. 4. 15-17
6. 福井加奈, 伊藤裕司, 小久保雅代, 中西秀彦, 平野慎也, 楠田聡, 伊藤秀一, 諫山哲哉：エリスロポエチン使用と未熟児網膜症の関連性についての検討 後方視的コホート研究．第125回日本小児科学会学術集会，福島， 2022. 4. 15-17
7. 余谷暢之, 甘利昭一郎, 杉林里佳, 室本仁, 小澤克典, 和田誠司, 和田友香, 諫山哲哉, 伊藤裕司, 窪田満, 左合治彦：胎児期からの緩和ケアの実践．第125回日本小児科学会学術集会，福島， 2022. 4. 17.
8. 近藤琢也, 永田公二, 奥山宏臣, 早川昌弘, 豊島勝昭, 甘利昭一郎, 照井慶太, 古川泰三, 臼井規朗, 増本幸

- 二, 稲村昇, 岡崎任晴, 岡和田学, 矢本真也, 内田恵一, 横井暁子, 田尻 達郎: JCDHSG 患者支援「多施設共同アンケート調査結果より見た患者会への期待と学会の関わり」. 第 59 回日本小児外科学会学術集会, 東京, 2022. 5. 19.
9. 永田公二, 照井慶太, 近藤琢也, 増本幸二, 甘利昭一郎, 金森豊, 矢本真也, 岡崎任晴, 矢崎悠太, 豊島勝昭, 小池勇樹, 古川泰三, 横井暁子, 稲村昇, 早川昌弘, 臼井規朗, 奥山宏臣, 田尻達郎: 新生児先天性横隔膜ヘルニアにおける多施設共同標準プロトコール導入の意義. 第 59 回日本小児外科学会学術集会, 東京, 2022. 5. 20.
 10. 河野淳, 永田公二, 照井慶太, 甘利昭一郎, 稲村昇, 小池勇樹, 漆原直人, 岡崎任晴, 矢崎 悠太, 奥山宏臣, 金森豊, 豊島勝昭, 早川昌弘, 古川泰三, 増本幸二, 横井暁子, 臼井規朗, 田尻達郎: 先天性横隔膜ヘルニア出生直後の胃管位置による予後予測の有用性に関する検討. 第 59 回日本小児外科学会学術集会, 東京, 2022. 5. 20.
 11. 正島和典, 矢本真也, 梅田聡, 藤井誠, 白石真之, 永田公二, 照井慶太, 早川昌弘, 甘利昭一郎, 増本幸二, 岡崎任晴, 稲村昇, 漆原直人, 豊島勝昭, 内田恵一, 古川泰三, 岡和田学, 横井暁子, 田附裕子, 奥山宏臣, 臼井規朗: 先天性横隔膜ヘルニアに対する重症度予測指標の検討 システマティックレビュー. 第 59 回日本小児外科学会学術集会, 東京, 2022. 5. 20.
 12. 丸山秀彦, 吉井沙織, 森田真知子, 大島あゆみ, 増田怜史, 福井加奈, 小杉洋平, 柴田優花, 上原陽治, 生田泰久, 甘利昭一郎, 竹田知洋, 和田友香, 塚本桂子, 諫山哲哉, 伊藤裕司: ELBW かつ Severe SGA 児の骨折率減少の試み, 第 39 回四国新生児医療研究会, 四国, 2022. 5. 26-29
 13. 早川格, 大橋瑛梨, 鈴木智, 落合悟, 小池研太郎, 永井由紗, 佐々木亜希子, 福井加奈, 柴田優花, 甘利昭一郎, 伊藤裕司, 阿部裕一: 小児専門病院におけるオンライン NICU 神経回診の実践. 第 64 回日本小児神経学会学術集会, 群馬, 2022. 6. 4.
 14. 丸山秀彦: 口演 当院での過去 10 年間の新生児仮死での搬送症例のまとめ. 第 2 回成育周産期連携セミナー, 2022. 6. 16
 15. 丸山秀彦, 吉井沙織, 森田真知子, 大島あゆみ, 福井加奈, 小杉洋平, 柴田優花, 上原陽治, 生田泰久, 甘利昭一郎, 竹田知洋, 和田友香, 塚本桂子, 諫山哲哉, 伊藤裕司: 口演 ELBW かつ Severe SGA 児の骨折率減少の試み. 第 58 回日本周産期・新生児医学会学術集会, 神奈川, 2022. 7. 10-12
 16. 福井加奈, 和田友香, 上原陽治, 柴田優花, 丸山秀彦, 吉井沙織, 余谷暢之, 米田光宏, 諫山哲哉, 伊藤裕司: 急性期に腹部コンパートメント症候群を呈した神経芽腫の一例. 第 58 回日本周産期・新生児医学会学術集会, 神奈川, 2022. 7. 10-12
 17. 伊東藍, 余谷暢之, 生田泰久, 甘利昭一郎, 丸山秀彦, 伊藤裕司, 諫山哲哉: NICU での終末期の積極的治療の差し控え・中止 18 年間の後方視的検討. 第 58 回日本周産期・新生児医学会学術集会, 神奈川, 2022. 7. 10-12
 18. 南谷曜平, 岡俊太郎, 内山温, 和田雅樹, 岡崎薫, 近藤昌敏, 長野伸彦, 吉川香代, 添野愛基, 小林玲, 丸山秀彦, 伊藤裕司, 難波文彦: 早産児の栄養に対する高流量経鼻カニューラ酸素療法と経鼻的持続陽圧療法の影響. 第 58 回日本周産期・新生児医学会学術集会, 神奈川, 2022. 7. 10-12
 19. 内山温, 岡崎薫, 近藤昌敏, 難波文彦, 長野伸彦, 吉川香代, 小林玲, 添野愛基, 和田雅樹, 丸山秀彦: 早産児における抜管後のハイフロー療法と nasal CPAP 療法の治療失敗のリスク因子の後方視的検討. 第 58 回日本周産期・新生児医学会学術集会, 神奈川, 2022. 7. 10-12
 20. 余谷暢之, 甘利昭一郎, 杉林里佳, 諫山哲哉, 和田誠司, 伊藤裕司, 左合治彦: 緩和医療とグリーフケア 胎児期からの緩和ケアの実践. 第 58 回日本周産期・新生児医学会学術集会 倫理委員会主催シンポジ

ウム. 神奈川, 2022. 7. 11.

21. 丸山秀彦, 吉井沙織, 森田真知子, 大島あゆみ, 福井加奈, 小杉洋平, 柴田優花, 上原陽治, 生田泰久, 甘利昭一郎, 竹田知洋, 和田友香, 塚本桂子, 諫山哲哉, 伊藤裕司: ELBW かつ Severe SGA 児の骨折率減少の試み. 第 58 回日本周産期・新生児医学会学術集会, 神奈川, 2022. 7. 11.
22. 甘利昭一郎: 500g 未満の SGA 児の医療の現状 国立成育医療研究センター病院における『500g 未満の SGA 児の医療の現状』. 第 58 回日本周産期・新生児医学会学術集会 シンポジウム 7, 横浜, 2022. 7. 10.
23. 丸山秀彦: 座長 一般演題 (口演)「先天異常 5」 第 58 回日本周産期・新生児医学会学術集会, 神奈川, 2022. 7. 10-12
24. 畑山一貴, 上原陽治, 福井加奈, 柴田優花, 甘利昭一郎, 和田友香, 丸山秀彦, 倉辻言, 塚本桂子, 諫山哲哉, 伊藤裕司: Hypervirulent Klebsiella pneumonia (hvKp) 感染症による Early onset sepsis を来たし生後 38 時間で死亡した 1 例. 第 66 回新生児成育医学会, 神奈川, 2022. 11. 24-26
25. 三浦彩乃, 小杉洋平, 甘利昭一郎, 塚本桂子, 福井加奈, 柴田優花, 上原陽治, 和田友香, 丸山秀彦, 諫山哲哉, 伊藤裕司: 先天性横隔膜ヘルニアと肺葉外肺分画症を合併した超低出生体重児の 1 例. 第 66 回新生児成育医学会, 神奈川, 2022. 11. 24-26
26. 塚本桂子, 伊藤裕司, 奥田裕美, 福井加奈, 倉辻言, 柴田優花, 上原陽治, 甘利昭一郎, 和田友香, 丸山秀彦, 諫山哲哉: NICU での現行の末梢静脈路固定法の検討. 第 66 回新生児成育医学会, 神奈川, 2022. 11. 24-26
27. 福井加奈, 諫山哲哉, 江口麻優子, 畑山一貴, 三浦彩乃, 宮田有里奈, 森田真知子, 吉井沙織, 甘利昭一郎, 上原陽治, 倉辻言, 柴田優花, 塚本桂子, 丸山秀彦, 和田友香, 伊藤裕司: 当院 NICU における腹膜透析関連腹膜炎のリスク因子に関する検討. 第 66 回日本新生児成育医学会学術集会, 神奈川, 2022. 11. 24-26
28. 海野沙織, 小澤克典, 和田誠司, 長谷川冬雪, 室本仁, 杉林里佳, 佐々木愛子, 柴田優花, 和田友香, 丸山秀彦, 宮寄治, 左合治彦: 胎児期に重症度判定に苦慮した骨形成不全症の 1 例. 第 67 回人類遺伝学会, 神奈川, 2022. 12. 15-17

[シンポジウム]

1. 和田友香: 第 47 回ハイリスク児フォローアップ研究会. アドボカシーと子ども・家族中心フォローアップ フォローアップのこれから. シンポジウム. 東京都, 2022. 9. 10-11
2. 和田友香: シンポジウム 7 女性医師の活躍推進: 女性医師の研究活動成育医学会で女性医師の活躍. 神奈川, 2022. 11

[マスコミ]

1. 和田友香: 依存社会第 5 部 カフェイン. 読売新聞. 2022. 4. 21
2. 和田友香: 成育の 30 周年記念事業. 2022. 6. 17.
3. 和田友香: 赤ちゃんギャン泣き「コリック」「黄昏泣き」なぜ起きる? 専門医に聞く イライラしても「絶対 NG」な行為. ヤフーニュース. 2022/12/12 配信. with news
<https://news.yahoo.co.jp/articles/9c21bf4ec0a6b8163d8f21a5b16c76fc15fbfdc5?page=2>
4. 上原陽治, 和田友香, 岩崎由佳, 米田康太, 生田義久, 甘利昭一郎, 丸山秀彦, 塚本桂子,

諫山哲哉, 坂本健一, 塩田陽子, 宮寄治, 入江理恵, 吉岡貴子, 持丸直子, 吉田和恵, 伊藤裕司 : 2022 年度日本 LCH 研究会 (JLSG) 優秀論文賞受賞

[雑誌]

丸山秀彦 : 赤ちゃんを守る医療者の専門誌 with NEO (ウィズネオ) 2022 年 4 号
家族説明のポイントもわかる! 赤ちゃんの目・耳・口・頭の重要トピックス監修

[教育]

丸山秀彦 : 国立看護大学校の授業

6/27 「低出生体重児・早産児」

6/28 「出生直後のアセスメントと新生児蘇生法 1」 「出生直後のアセスメントと新生児蘇生法 2」

[新生児科見学受け入れ]

外国人見学

Baeksup Shin	2022. 8/22-9/1	South Korea
Huangai Zhang	2022. 10/24-12/28	China
Pattima Pakhathirathien	2022. 10/11-28	Thailand
Sasikarn Rujirapaiboon	2022. 10/11-28	Thailand
Kanyarat Prakkamakul	2022. 10/31-11/14	Thailand
Nisakorn Kamchan	2022. 10/31-11/14	Thailand
Tanatta Pattanapongpaibool	2022. 10/31-11/14	Thailand
Fonthip Naiyananon	2022. 11/24-12/14	Thailand

日本人見学

2022. 4. 19	足利赤十字病院初期臨床研修医 木村あやの先生
2022. 5. 9-6. 3	杏林大学 6 年 村上万理絵さん
2022. 5. 19-20	杏林大学 6 年 谷川勇芽さん
2022. 6. 16-17	杏林大学学生 栗林史也さん
2022. 6. 22	倉敷中央病院 近藤友里子先生
2022. 6. 27	兵庫県立こども病院 田中陽菜先生
2022. 7. 14-15	杏林大学学生 坂口未希子さん

[ウェブミーティング開催]

丸山秀彦 : 3/3 タイ Ramathibodi 病院

5/12 韓国 ソウル大学病院

9/22 タイ Ramathibodi 病院

11/18 韓国 ソウル大学病院

【講習会】

1. 甘利昭一郎：新生児蘇生法インストラクターコース講習会。 日本周産期・新生児医学会 新生児蘇生法委員会， 東京都， 2022. 4. 24
2. 甘利昭一郎：新生児蘇生法インストラクターコース講習会。 日本周産期・新生児医学会 新生児蘇生法委員会， 東京都， 2022. 8. 21

母性内科

【原著論文：査読付】 (Reviewed Paper)

1. Saito J, Ishii M, Sandaiji N, Yamaguchi K, Suzuki T, Yakuwa N, Yamatani A, Tachibana Y, Sago H, Murashima A. Lemborexant levels in maternal serum, cord blood, and breast milk during pregnancy and lactation: A case report. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, 2023 Jan 6;2(1):e62.
2. Narita Z, Okubo R, Sasaki Y, Takeda K, Ohmagari N, Yamaguchi K, Morisaki N, Sampei M, Ishitsuka K, Kojima M, Nishimura K, Inoue M, Yamamoto S, Konishi M, Miyo K, Mizoue T. Association of COVID-19-related discrimination with subsequent depression and suicidal ideation in healthcare workers. *J Psychiatr Res*. 2023 Mar;159:153-158.
3. Shrestha RM, Inoue Y, Yamamoto S, Fukunaga A, Sampei M, Okubo R, Morisaki N, Ohmagari N, Funaki T, Ishizuka K, Yamaguchi K, Sasaki Y, Takeda K, Miyama T, Kojima M, Nakagawa T, Nishimura K, Ogata S, Umezawa J, Tanaka S, Inoue M, Konishi M, Miyo K, Mizoue T. The association between experience of COVID-19-related discrimination and psychological distress among healthcare workers for six national medical research centers in Japan. *Soc Psychiatry Psychiatr Epidemiol*. 2023 Sep;58(9):1421-1429. doi: 10.1007/s00127-023-02460-w. Epub 2023 Mar 17.
4. Li J, Nakagawa T, Kojima M, Nishikimi A, Tokuda H, Nishimura K, Umezawa J, Tanaka S, Inoue M, Ohmagari N, Yamaguchi K, Takeda K, Yamamoto S, Konishi M, Miyo K, Mizoue T. Underlying medical conditions and anti-SARS-CoV-2 spike IgG antibody titers after two doses of BNT162b2 vaccination: A cross-sectional study. *PLoS One*. 2023 Apr 6;18(4):e0283658.
5. Hisano M, Nakagawa K, Ono M, Yoshino O, Saito T, Hirota Y, Inoue E, Kikuchi K, Nakamura H, Yamaguchi K. Multicenter, 2-dose single-group controlled trial of tacrolimus for the severe infertility patients. *Medicine (Baltimore)*. 2023;102(32):e34317.
6. Hisano M, Nakagawa K, Suzuki T, Sugiyama R, Yamaguchi K. Immunosuppressive therapy with tacrolimus is a potential drug candidate for the prevention of unexplained or preeclamptic stillbirths with Th1-dominant immune states: a case series of five patients. *J Matern Fetal Neonatal Med*. 2023;36(2):2258254.
7. Sankoda A, Arata N, Sato S, Umezawa N, Morisaki N, Ito Y, Sago H, Yano Y, Horikawa R.

- Association of Isolated Hypothyroxinemia and Subclinical Hypothyroidism With Birthweight: A Cohort Study in Japan. J Endocrine Society 2023; 7(5): bvad045.
8. Sankoda A, Nagae Y, Waki K, Sze WT, Oba K, Mieno M, Nangaku M, Yamauchi T, Ohe K. Glycemic control, renal progression, and usage of telemedicine phone consultations among Japanese type 2 diabetes mellitus patients during the COVID-19 pandemic: a retrospective cohort study. JMIR Diabetes. 2023 Nov 21;8:e42607.
 9. Shibuta T, Waki K, Miyake K, Igarashi A, Yamamoto-Mitani N, Sankoda A, Takeuchi Y, Sumitani M, Yamauchi T, Nangaku M, Ohe K. Preliminary Efficacy, Feasibility, and Perceived Usefulness of a Smartphone-Based Self-Management System With Personalized Goal Setting and Feedback to Increase Step Count Among Workers With High Blood Pressure: Before-and-After Study. JMIR Cardio. 2023 Jul 21;7:e43940.
 10. Nagaoka K, Kaneko K, Miyagawa E, Abe S, Kohno C, Tsurane K, Mito A, Ozawa N, Sago H, Arata N, Murashima A. Clinical features of women with thrombotic microangiopathy in pregnancy: A case series from a single Japanese tertiary perinatal care center. J Obstet Gynaecol Res. 2023; 49(12): 2804-2810.
 11. Tsurane K, Kaneko K, Yoshida K, Tanaka R, Sago H, Murashima A. Initiation of hydroxychloroquine therapy during pregnancy can cause adverse effects and alter pregnancy outcomes: A case of acute generalised exanthematous pustulosis induced by hydroxychloroquine in a patient with systemic lupus erythematosus. Mod Rheumatol Case Rep. 2023;7(2):373-7.
 12. Yamaji N, Suzuki H, Saito K, Swa T, Namba F, Joshua P Vogel, Jenny Ramson, Jenny Cao, Lavin Tina, Ota E. Tocolytic among women at <28weeks' gestation, with multiple pregnancy or a growth-restricted fetus: a systematic review and meta-analysis. Children. 2023; 24;10(3):443
 13. Suzuki H, Ota E. Factors Associated with Maternal Health Services Utilization Among Lao Adolescents: A Nationwide Retrospective Cross-sectional Study. Pacific Rim Int J Nurs Res. 2023; 27(2): 48-59.
 14. Shoki R, Suzuki H, Ota E. Training Programs to Promote the Nursing Practice Skills of Overseas Qualified Nurses: A Scoping Review. Pacific Rim Int J Nurs Res. 2023; 27(2): 74-90
 15. Kawasaki M, Arata N, Sugiyama T, Moriya T, Itakura A, Yasuhi I, Uchigata Y, Kawasaki E, Sone H, Hiramatsu Y; DREAMBee study gestational diabetes mellitus group. Risk of fetal undergrowth in the management of gestational diabetes mellitus in Japan. J Diabetes Investig. 2023 Apr;14(4):614-622.

【総説】

1. Mito A: Postpartum hypertension-The need for definition and classification. Hypertens Res. 2023; 46(12): 2646-2647.
2. 荒田 尚子: 出生前プレコンセプションケアとは. 小児内科 2023; 55(11): 1723-1726
3. 荒田 尚子: 思春期からのプレコンセプションケア教育. 小児科診療UP-to-DATE. 2023; 66: 13-18

4. 荒田 尚子： 多様なライフスタイルに対応する新しい健康支援の概念「プレコンセプションケア」．
エキスパートナース 2023； 8： 132-136
5. 荒田 尚子： プレコンセプションケア 母性内科の視点から． DOHaD 先制医療への展開． 金原出版
2023； 131-137
6. 荒田 尚子： 妊娠で発見される甲状腺疾患． 実地医家のための見つける・見逃さない甲状腺疾患の
診断． 日本医事新報社 2023； 2 08-216
7. 荒田 尚子： 日本で必要なプレコンセプションケアとは？． 精神科治療学 2023； 38(5)： 509-514
8. 荒田 尚子： 基本が大事!ちゃんとできてる?“おさらい”糖尿病診療 いろいろな世代の糖尿病． 総合
診療 2023； 33(3)： 316-318
9. 荒田 尚子, 川崎 麻紀： 糖尿病女性, 妊娠糖尿病既往女性に対するプレコンセプションケア． 月刊
糖尿病 2023； 15(2)： 60-65
10. 三小田 亜希子, 三戸 麻子, 荒田 尚子： 「妊娠と腎臓—成育医療の立場から—」． 腎臓内科
2023;18(4)： 421-427
11. 三小田亜希子, 荒田 尚子： 「甲状腺機能低下症・副甲状腺機能低下症と妊娠」． 日本内分泌外科学
会 雑誌 2023； 340(3)： 163-167
12. 三戸 麻子： 妊娠高血圧腎症症例の出産後ケア Postpartum Care for women who were suffered from
preeclampsia. 日本腎臓学会誌(Web) (Japanese Journal of Nephrology (Web)) 2023； 65(4)： 420-
424
13. 鈴木 瞳, 濱田 ひとみ, 大田 えりか： 思春期女性における月経の心理・社会的問題に関するスコー
ピングレビュー． 助産学会誌 2023； 37(2) 100-113
14. 大田 えりか, 鈴木 瞳： 国際助産師連盟国際評議会および第33回3年毎大会 (33rd ICM Triennial
Congress, Bali, Indonesia) インドネシア・バリに参加して： WHO NEWS. 看護 2023； 75(11) 56
15. 鈴木 瞳, 大田 えりか： 妊娠・出産・育児期の栄養に関するエビデンスをアップデートする． 助産
雑誌 2023； 77(3)： 252-260
16. 鈴木 瞳, 大田 えりか： 国際基準と比較して見る日本のセクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス
／ライツ：WHO NEWS 看護, 2023； 75(3)： 57

[著書]

1. 荒田尚子： 妊娠と甲状腺 内分泌疾患診療ハンドブック Ver. 3. 中外医学社 2023； 247-252
2. 荒田尚子： 妊娠糖尿病 ちょっと困った背景を持つ糖尿病の診かた 基本をクリアしたすべての糖尿
病診療医へ捧げる． 株式会社金芳堂 2023； 258-266
3. 荒田尚子： 甲状腺 妊娠に伴う甲状腺機能の変動は？ 内分泌代謝疾患臨床クエスチョン 100
改訂第2版． 診断と治療社 2023； 44-45
4. 河野千慧, 金子佳代子： ベーチェット病と妊娠． 岳野光洋（編集），現場がエキスパートに聞きた
いベーチェット病，日本医事新報社，2023； 139-145

[ガイドライン、報告書、その他]

1. 荒田 尚子, 川崎麻紀： 妊娠糖尿病既往女性のフォローアップに関する 診療ガイドライン（平松祐
司、杉山隆 編）糖尿病と妊娠 2023 年 10 月（23 巻別冊）

2. 荒田 尚子: 世田谷区リプロダクティブ・ヘルス/ライツ周知啓発専門部会委員として参加 (令和4年度～)
3. 環境省「健康と環境に関する疫学調査検討会」構成員として参加 (令和4年度)
4. 荒田 尚子, 山本 精一郎, 山上 須賀, 武藤 香織, 高松 潔, 片井 みゆき, 立花 良之, 西岡 笑子, 高橋 幸子: 保健・医療・教育機関・産業等における女性の健康支援のための研究. 令和4年度厚生労働科学研究費補助金 (女性の健康の包括的支援政策研究事業), 令和4年度研究報告書, 2023年5月
5. 荒田 尚子, 杉山 隆, 瀧本 秀美, 大田 えりか, 前田 恵理, 秋山 美紀, 小川 浩平, 三瓶 舞紀子: 生涯を通じた健康の実現に向けた「人生最初の1000日」のための、妊娠前から出産後の女性に対する栄養・健康に関する知識の普及と行動変容のための研究. 令和4年度厚生労働科学研究費補助金 (成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業 (健やか次世代育成総合研究事業)), 令和4年度研究報告書, 2023年5月
6. 三小田 亜希子: 生活習慣病に対する遠隔医療・モバイル医療体制の最適化とプラットフォームの構築 文科科学研究費若手研究 21K16336, 2023年度実績報告書
7. 金子佳代子, 後藤美賀子, 高井千夏, 宮川英子, 河野千慧: 関節リウマチ診療ガイドライン改訂を目的とした、RA、JIA の妊婦・授乳婦に関するエビデンスの収集. 厚生労働科学研究費補助金 (免疫アレルギー疾患政策研究事業), 関節リウマチ診療ガイドラインの改訂による医療水準の向上に関する研究班, 令和4年度分担研究報告書, 2023年5月
8. 内田啓子, 前嶋明人, 金子佳代子, 他: 第12章 妊娠 日本腎臓学会 (編集)、エビデンスに基づくCKD診療ガイドライン2023, 東京医学社, 2023年

[学会発表]

1. Arata N: Prediction of Transient Neonatal Hypothyroidism in Euthyroid to Hypothyroid Pregnant Women with Blocking TSH Receptor Antibody Positive. 2023ATA Annual Meeting. Washington DC, 2023. 9. 27-10. 1
2. Suzuki H: A Scoping Review of Health Behavior Changes in Preconception Care Trial. 33rd ICM Triennial Congress 2023. Bali Nusa Dua Convention Center, 2023. 6. 11-14
3. Kayoko Kaneko, Eiko Miyagawa, Atsuko Murashima: Pregnancy outcome and disease activity of pregnant women with early onset of lupus erythematosus; A nationwide prospective cohort study in Japan, 12th International conference on Reproduction, Pregnancy and Rheumatic diseases, London, 2023. 9. 9
4. 細田愛子, 荒田尚子, 佐藤志織, 金子佳代子, 梅原永能, 内木康博, 堀川玲子, 諫山哲哉, 伊藤裕司, 島野仁, 和田誠司: 母体薬物治療による胎児甲状腺腫を認めた甲状腺機能亢進症合併妊婦9例の検討. 第24回日本内分泌学会関東甲信越支部学術集会, 東京, 2023. 9. 8-9
5. 大田えりか, 加藤美佳, 鈴木瞳: 低出生体重児出生予防のための 妊娠期パーソナライズドアプリケーションの実行可能性調査. 第37回日本助産学会学術集会, 2023. 10. 11
6. 川崎麻紀, 荒田尚子: 妊娠糖尿病制御と出産後の2型糖尿病発症予防. 【シンポジウム】 第66回日本糖尿病学会年次学術集会, 鹿児島, 2023. 5. 11
7. 川崎麻紀, 荒田尚子, 守屋達夫: 妊娠糖尿病・糖尿病合併妊娠の妊娠転帰および母児の長期予後に関する登録データベース構築に関する他施設前向き研究. 第39回日本糖尿病・妊娠学会年次学術

集会, 新潟, 2023. 11. 17

8. 川崎麻紀, 荒田尚子, 守屋達美, 杉山隆, 平松祐司. 中後期耐糖能スクリーニング陽性 75g ブドウ糖負荷試験正常耐糖能群についての検討 第 39 回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会, 新潟, 2023. 11. 18
9. 樋口秋津, 金子佳代子, 宮川英子, 黒坂徳子, 藤野佐保, 三井真里, 石黒精, 村島温子: 第IX因子製剤の定期補充により生児を得た血友病 B 合併不育症の 1 例. 第 8 回日本母性内科学会総会・学術集会, 東京, 2023. 7. 23

【講演】

1. 荒田 尚子: 教育講演 1 妊娠、小児. 第 66 回日本甲状腺学会学術集会, 石川, 2023. 12. 8
2. 荒田 尚子: 【シンポジウム】妊娠糖尿病既往女性のフォローアップに関する診療ガイドライン. 第 39 回日本糖尿病・妊娠学会年次学術集会, 新潟, 2023. 11. 18
3. 荒田 尚子: プレコンセプションケア～安心安全で健やかな妊娠・出産・産後の健康管理を支援するために. 第 45 回日本臨床栄養学会総会 第 44 回日本臨床栄養協会総会 第 21 回大連合大会, 大阪, 2023. 11. 12
4. 荒田 尚子: 教育講演 1 日本に必要なプレコンセプションケア. 第 153 回東北連合産科婦人科学会総会・学術講演会, 秋田, 2023. 6. 17
5. 荒田 尚子: 日本に必要なプレコンセプションケア. 第 41 回千葉県母性衛生学会学術集会, 千葉, 2023. 6. 3
6. 荒田 尚子: 胎児甲状腺腫を伴ったバセドウ病合併妊娠の一例. 第 44 回日本内分泌学会東北地方会, 仙台, 2023. 5. 20
7. 荒田 尚子: プレコンセプションケア. 第 20 回かながわ薬剤師学術大会, 横浜, 2023. 5. 14
8. 荒田 尚子: 教育講演 05 特殊な状況での妊婦の栄養療法. 第 38 回日本臨床栄養代謝学会学術集会, 神戸, 2023. 5. 9
9. 荒田 尚子: 妊娠糖尿病の管理. 浙江大学医学院附属産婦人科病院オンライン交流会, WEB, 2023. 7. 22
10. 荒田 尚子: プレコンセプションケア. 令和 4 年度「第 34 回母性衛生学会」, 静岡, 2023. 2. 12
11. 三戸 麻子: 【シンポジウム】周産期薬物治療を取り巻く課題に対して薬剤疫学ができること・すべきこと 妊娠中の医薬品使用の有効性-高血圧合併妊娠において-. 第 28 回日本薬剤疫学会学術総会, 京都, 2023. 11. 17
12. 三戸 麻子: プレコンセプションケアとは. 令和 5 年度健やか親子 21 全国大会 (母子保健家族計画全国大会), 宇都宮, 2023. 11. 10
13. 三戸 麻子: 【教育講演】妊婦さんを診よう. 第 45 回日本高血圧学会総会, 大阪, 2023. 9. 15
14. 三戸 麻子: 【シンポジウム】「妊娠高血圧症候群と将来の健康女性と家族の真の健康を目指して: インターコンセプションケア」. 第 23 回抗加齢医学会総会, 東京, 2023. 6. 9
15. 三戸 麻子: 【シンポジウム I】プレコンの視点からの腎疾患合併女性 高血圧・慢性腎臓病におけるプレコンセプションケア. 第 32 回腎と妊娠研究会. 愛媛, 2023. 3. 4
16. 金子佳代子: 【スポンサードシンポジウム 4】リウマチ医に必要な WoCBA-RA 患者の治療戦略. 第 33 回日本リウマチ学会北海道・東北支部集会, 盛岡, 2023. 10. 1

17. 金子佳代子：【特別講演2 地元愛セミナー】女性のライフステージに応じた関節リウマチの治療. 第34回中部リウマチ学会, 松本, 2023. 9. 16
18. 金子佳代子, 中島亜矢子他：【シンポジウム3 ライフステージに合わせたシームレスなリウマチ性疾患患者の管理～小児期・AYA 世代から挙児可能年齢まで～】挙児可能年齢の膠原病・リウマチ性疾患合併妊娠に対する診療と管理の進歩: オーバービュー. 第67回日本リウマチ学会総会・学術集会, 福岡, 2023. 4. 24

周産期歯科

[原著論文：査読付] (Reviewed Paper)

なし

[原著論文：査読なし]

なし

[症例報告]

なし

[総説]

なし

[著書]

なし

[ガイドライン、報告書、その他]

なし

[学会発表]

1. 齋藤 亮：関節リウマチを合併したシェーグレン症候群妊婦における歯科治療の1例, 第32回日本有病者歯科医療学会学術大会, 2023年3月18・19日, 北佐久郡軽井沢町
2. 齋藤 亮, 奥野 瑛：当院周産期歯科外来における開設から1年間の初診患者の実態調査, 第61回日本小児歯科学会大会, 2023年5月18・19日, 長崎市
3. 齋藤 亮, 奥野 瑛：Web上で公開されている妊婦を対象とした歯科情報について, 日本小児歯科学会第38回関東地方会・令和5年度総会, 2023年10月1日, 川口市
4. 齋藤 亮, 奥野 瑛：歯科治療恐怖症に対し信頼関係を構築しながら, 歯周基本治療を施術した重症妊娠性歯肉炎と妊娠性エプーリス合併症の1例, 第40回日本障害者歯科学会総会および学術大会, 2023年11月10～12日, 札幌市

[講演]

なし

[広報活動]

診療科のご案内 周産期歯科, 成育だより Vo1. 33 冬号, 6 頁

4-10 臓器移植センター

小腸移植科

[総説]

1. 戸田方紀, 新井勝大: 【消化管出血のすべて】総論 小児の消化管出血. 消化器内視鏡 2023; 35 (4) : 443-448
2. 藤紘彰, 新井勝大: 【どうする?小児の便秘・下痢】便秘・下痢の治療薬 近年使用できるようになった薬を中心に. 小児内科 2023;55(3):336-343

[学会発表]

1. 柳佑典, 出口晴教, 中尾俊雅, 兒玉匡, 小峰竜二, 清水誠一, 内田孟, 福田晃也, 阪本靖介, 山田全毅, 新井勝大, 笠原群生: 肝・小腸異時移植を行うも救命できなかった進行性家族性肝内胆汁鬱滞症 1 型の 1 例. 第 59 回 日本移植学会総会, 京都, 2023. 9. 22
2. 清水誠一, 阪本靖介, 内田孟, 柳佑典, 中尾俊雅, 兒玉匡, 小峰竜二, 竹内一朗, 新井勝大, 山田全毅, 福田晃也, 笠原群生: 多臓器移植への課題と解決方法 小腸移植後の難治性拒絶反応に対しベドリズムabを使用した 1 例. 第 59 回 日本移植学会総会, 京都, 2023. 9. 22
3. 清水泰岳, 内田孟, 阪本靖介, 竹内一朗, 福田晃也, 新井勝大, 笠原群生: 腸管不全治療の現状と課題 新規にテデュグルチドを導入した短腸症候群の 2 例. 第 59 回 日本移植学会総会, 京都, 2023. 9. 22

移植外科

[原著論文: 査読付]

1. Uchida H, Sakamoto S, Komine R, Kodama T, Nakao T, Okada N, Yanagi Y, Shimizu S, Fukuda A, Shioda Y, Kiyotani C, Matsumoto K, Yoneda A, Haga C, Yoshioka T, Miyazaki O, Nosaka S, Kasahara M: Strategy for hepatoblastoma with major vascular involvement: A guide for surgical decision-making. Surgery. 2023 Feb;173(2):457-463
2. Funaki T, Yamada M, Ide K, Ito R, Shoji K, Ogimi C, Imadome KI, Kasahara M: Etiology of Severe Acute Hepatitis in a Pediatric Transplant Center in Japan. J Pediatric Infect Dis Soc. 2023 Apr;12(4):248-251

3. Uchida H, Sakamoto S, Yanagi Y, Shimizu S, Fukuda A, Ono H, Miyazaki O, Nosaka S, Schlegel A, Kasahara M: Significance of a multidisciplinary approach to congenital extrahepatic portosystemic shunt: A changing paradigm for the treatment. *Hepatol Res.* 2023 Jun;53(6):540–555
4. Shimizu S, Sakamoto S, Yamada M, Funaki T, Fukuda A, Uchida H, Okada N, Nakao T, Kodama T, Komine R, Shoji K, Baba C, Suzuki Y, Nakagawa S, Ogimi C, Kasahara M: Successful pediatric liver transplantation case with a positive SARS-CoV-2 test at the time of transplant. *Hepatol Res.* 2023 Jun;53(6):569–573
5. Ide K, Uchida H, Sakamoto S, Hayakawa I, Nakagawa S, Kobayashi T, Ito S, Kasahara M: Perioperative risk factors for neurological impairment in infants with acute liver failure following liver transplantation. *Pediatr Transplant.* 2023 Jun;27(4):e14524
6. Yamada M, Fukuda A, Ogura M, Shimizu S, Uchida H, Yanagi Y, Ishikawa Y, Sakamoto S, Kasahara M, Imadome KI: Early Detection of Epstein-Barr Virus as a Risk Factor for Chronic High Epstein-Barr Viral Load Carriage at a Living-donor-dominant Pediatric Liver Transplantation Center. *Transplantation.* 2023 Jun;107(6):1322–1329
7. Akiyama S, Saku N, Miyata S, Ite K, Nonaka H, Toyoda M, Kamiya A, Kiyono T, Kimura T, Kasahara M, Umezawa A: Drug metabolic activity as a selection factor for pluripotent stem cell-derived hepatic progenitor cells. *Prog Mol Biol Transl Sci.* 2023 Jul;199:155–178
8. Ite K, Toyoda M, Akiyama S, Enosawa S, Yoshioka S, Yukitake T, Yamazaki-Inoue M, Tatsumi K, Akutsu H, Nishina H, Kimura T, Otani N, Nakazawa A, Fukuda A, Kasahara M, Umezawa A: Stem cell challenges and opportunities. *Prog Mol Biol Transl Sci.* 2023 Jul;199:379–395
9. Alfares BA, van der Doef HPJ, Wildhaber BE, Casswall T, Nowak G, Delle M, Aldrian D, Berchtold V, Vogel GF, Kaliciński P, Markiewicz-Kijewska M, Kolesnik A, Bernabeu JQ, Hally MM, Larrarte K M, Marra P, Bravi M, Pinelli D, Kasahara M, Sakamoto S, Uchida H, Mali V, Aw M, Franchi-Abella S, Gonzales E, Guérin F, Cervio G, Minetto J, Sierre S, de Santibañes M, Ardiles V, Uno JW, Evans H, Duncan D, McCall J, Hartleif S, Sturm E, Patel J, Mtegha M, Prasad R, Ferreira CT, Nader LS, Farina M, Jaramillo C, Rodriguez-Davalos MI, Feola P, Shah AA, Wood PM, Acord MR, Fischer RT, Mullapudi B, Hendrickson RJ, Khanna R, Pamecha V, Mukund A, Sharif K, Gupte G, McGuirk S, Porta G, Spada M, Alterio T, Maggiore G, Hardikar W, Beretta M, Dierckx R, de Kleine RHJ, Bokkers RPH: Prevalence, management and efficacy of treatment in portal vein obstruction after paediatric liver transplantation: protocol of the retrospective international multicentre PORTAL registry. *BMJ Open.* 2023 Jul 27;13(7):e066343
10. Baba C, Yukimasa S, Yasuno R, Ichiyanagi H, Ninagawa J, Kasuya S, Kasahara M, Horikawa R, Nagasaka Y, Suzuki Y: Anesthesia management protocol for liver transplantation as treatment for ornithine transcarbamylase deficiency. *Pediatr Anaesth.* 2023 Aug;33(8):620–630
11. Uchida H, Sakamoto S, Komine R, Kodama T, Nakao T, Yanagi Y, Shimizu S, Abbas SH, Fukuda A, Kasahara M: Optimal liver transplant procedure in progressive familial intrahepatic cholestasis type 1 treated with biliary diversion or intestinal transplantation: Lessons

- learned from three cases treated with different approaches. *Pediatr Transplant*. 2023 Sep;27(6): e14566
12. Ueno T, Wada M, Ogawa E, Matsuura T, Yamada Y, Sakamoto S, Okuyama H: Present state of intestinal transplantation in Japan. *Pediatr Surg Int*. 2023 Sep 39(1):276
 13. Rodriguez-Davalos MI, Lopez-Verdugo F, Kasahara M, Muiesan P, Raddy MS, Flores-Huidobro MA, Xia Q Hong JC, Niemann CU, Seda-Neto J, Miloh TA, Yi NJ, Mazariegos GV, Ng VL, Esquivel CO, Lerut J, Rela M: International Liver Transplantation Society Global Census: First Look at Pediatric Liver Transplantation Activity Around the World. *Transplantation*. 2023 Oct;107(10):2087-2097
 14. Tamaoka S, Fukuda A, Nakabayashi K, Matsubara K, Ogata-Kawata H, Muranishi Y, Hata K, Kato-Fukui Y, Sakamoto S, Kasahara M, Fukami M: Rare sequence variants associated with the risk of non-syndromic biliary atresia. *Hepatol Res*. 2023 Nov;53(11):1134-1141
 15. Tamura R, Sabu Y, Mizuno T, Mizuno S, Nakano S, Suzuki M, Abukawa D, Kaji S, Azuma Y, Inui A, Okamoto T, Shimizu S, Fukuda A, Sakamoto S, Kasahara M, Takahashi S, Kusuha H, Zen Y, Ando T, Hayashi H: Intestinal Atp8b1 dysfunction causes hepatic choline deficiency and steatohepatitis. *Nat Commun*. 2023 Nov;14(1):6763
 16. Tokuda Y, Yamada M, Fukuda A, Shoji K, Sakamoto S, Uchida H, Ishiguro A, Imadome KI, Kasahara M: No additional risk of Ampicillin rash among pediatric liver transplant recipients with concurrent Epstein-Barr virus infection. *Pediatr Infect Dis J*. 2023 Dec;42(12):1063-1066
 17. Sakamoto S, Shimizu S, Uchida H, Fukuda A, Kasahara M: Portal vein pressure and flow modulation in pediatric liver transplantation. *Pediatr Transplant*. 2023 Nov;27(7):e14563
 18. Kasahara M, Sakamoto S: Optimal graft size in pediatric living donor liver transplantation: How are children different from adults?. *Pediatr Transplant*. 2023 Nov;27(7):e14543
 19. 笠原群生: 世界における臓器移植の展開. *小児外科* 55(6):588-591, 2023
 20. 阪本靖介, 内田孟, 福田晃也, 笠原群生: 小児悪性肝腫瘍に対する移植治療. *小児外科* 55(6):631-635, 2023
 21. 福田晃也, 内田孟, 阪本靖介, 笠原群生: 小児急性肝不全（劇症肝炎）に対する移植治療. *小児外科* 55(6):643-647, 2023
 22. 内田孟, 福田晃也, 阪本靖介, 笠原群生: 小児生体肝移植後の神経学的合併症. *小児外科* 55(6):665-669, 2023
 23. 近藤宏樹, 多屋馨子, 天羽清子, 乾あやの, 笠原群生, 鈴木光幸, 田中孝明, 津川毅, 別所一彦, 保科隆之, 宮入烈, 虫明聡太郎, 吉川哲史, 齋藤昭彦, 塚原宏一, 森岡一朗, 須磨崎亮, 細矢光亮: 原因不明の小児急性肝炎に関する実態調査（一次調査）報告書. 日本小児科学会予防接種・感染症対策委員会報告 127(7):1033-1038, 2023
 24. 清水誠一, 阪本靖介, 山田全毅, 福田晃也, 内田孟, 柳佑典, 小峰竜二, 中尾俊雅, 兒玉匡, 上遠野雅美, 中里弥生, 庄司健介, 船木孝則, 大宜見力, 笠原群生: 小児肝移植患者における新型コロナウイルス感染の現状と治療. *Organ Biology* 30(2):105-111, 2023
 25. 金澤郁恵, 佐島毅, 福田晃也, 内田孟, 阪本靖介, 笠原群生: 小児肝移植患者の青年期のQOLに関

- する実態調査. 移植 58(2):93-101, 2023
26. 阪本清介: 小腸移植の現況と今後の課題. 小児内科 55(5), 2023. 5
27. 内田孟: 小児移植の実際. 小児内科 55(5), 2023. 5

[症例報告]

1. Komine R, Sakamoto S, Uchida H, Nakao T, Kodama T, Okada N, Shimizu S, Fukuda A, Kasahara M: Gallstone ileus at 17 years after living donor liver transplantation: A case report. *Pediatr. Transplant.* 2023 Jun;27(4):e14517
2. Yanagi Y, Sakamoto S, Nakao T, Kodama T, Uchida H, Shimizu S, Fukuda A, Yamada M, Kiyotani C, Matsumoto K, Yoshioka T, Miyazaki O, Nosaka S, Kasahara M: The role of living-donor liver transplantation in children with an advanced malignant rhabdoid tumor of the liver in the era of transplant oncology: Case report and literature review. *Pediatr Blood Cancer.* 2023 Jul; e30582
3. Furukawa K, Haruki K, Kasahara M, Tanial T, Ikegami T: Dual Antibody Treatment for Simultaneous Acute Cellular Rejection and Antibody-Mediated Rejection After Liver Transplantation: A Case Report. *Transplant Proc.* 2023 Oct;55(8):1938-1942
4. Uesato Y, Ono S, Kawamata F, Sakamoto S, Kuda M, Kasahara M, Takatsuki M: Associating liver partition and portal vein ligation for staged hepatectomy as bridging therapy for liver transplantation in an infant with an advanced hepatic rhabdoid tumor. *Pediatr Transplant.* 2023 Sep;27(6):e14559

[学会発表]

1. Kasahara M: Management of Established post-LDLT SFSS - Retransplantation. ILTS-iLDLT-LTSI2023 Consensus Conference, India, 2023.1.27
2. Kasahara M: Liver Transplantation for Hyperoxaluria Sequential Vs Simultaneous. Liver Transplantation. MCLD 2023. India, 2023.1.28
3. Kasahara M: Immunosuppression in Paediatric LT: Is it different from adults?. MCLD2023, India, 2023.1.29
4. Kasahara M: LDLT based experience. ILTS Pediatrics Sponsored Webinars, Korea (online), 2023.2.16
5. Kasahara M: Paediatric Liver Transplantation Surgery Evolving. PLDT2023, India (Online), 2023.3.18 (Video)
6. Kasahara M: Mono segmentectomy and reduced size graft. PLDT2023, India (Online), 2023.3.19 (Video)
7. Kasahara M: Portal vein reconstruction and challenges. MCLD2023, India, 2023.3.19 (Video)
8. Kasahara M: Challenges in pediatric liver transplantation in Japan. Tsinghua University International Forum on Organ Transplant and Bionic Medicine, 2023.4.8 (Online)
9. Kasahara M: Progress in pediatric liver transplantation. 2023 Ruijin Hospital International Seminar for Organ Transplantation, 2023.4.15 (Online)

10. Kasahara M: Multi-organ transplantation outcomes - is it worth it?. ILTS2023, Netherlands, 2023. 5. 4
11. Kasahara M: Overview of hepatic artery complications. International Living Donor Liver Transplantation(iLDLT) Group Colloquium in Mongolia, Mongol (Online), 2023. 5. 26
12. Kasahara M: Panel Discussion, International Meeting of SNUH Alumni of Liver Transplantation(IM SALT), 2023. 6. 15
13. Kasahara M: Surgical tips of donor hepatectomy for pediatric patients. Astellas Transplant Leader Summit (ATLAS) Seoul, Korea, 2023. 6. 16
14. Kasahara M: Personal difficulties of concerns when applying laparoscopic approach in living donor hepatectomy for pediatric patients. Astellas Transplant Leader Summit (ATLAS) Seoul, Korea, 2023. 6. 16
15. Kasahara M: Progress of pediatric liver transplantation. The NEW HORIZON 2023, China, 2023. 7. 15
16. Kasahara M: Child Care Health System Challenges in Japan. Singapore Paediatric Society, Singapore, 2023. 8. 23
17. Kasahara M: Large-For-Size Grafts In Paediatric Liver Transplantation. International Paediatric Liver Transplant Symposium 2023 (IPLTS) Singapore, 2023. 8. 24
18. Kasahara M: Progress in Paediatric Liver Transplantation in Japan. National University Hospital Grand Round, Singapore, 2023. 8. 25
19. Kasahara M: Advances In Biliary Atresia Management-What Has Changed Over The Decades?. Wong Hock Boon Masterclass, Singapore, 2023. 8. 25
20. Sakamoto S: Marginal parental donors for pediatric living donor liver transplantation. (State-of-the-art Symposium), The 18th Congress of Asian Society of Transplantation (CAST 2023), Hong Kong, 2023. 08. 27
21. Kasahara M: Indications & Considerations for Pediatric Living Donor Liver Transplantation. アジア移植学会, China (Online), 2023. 8. 28
22. Kasahara M: Liver transplantation for extended hepatic tumor with extension to right atrium + α . VIII Congress of Surgeons of Kazakhstan, Kazakhstan, 2023. 9. 8
23. Kasahara M: Challenges for MIDH monosegmentectomy. ILLS Naples 2023, Italy, 2023. 9. 16
24. Kasahara M: Child health care in Japan. The 4th International Symposium of Human Phenomics, Fudan, China, 2023. 11. 2
25. Kasahara M: The advancement and prospect of pediatric liver transplantation. 第11回中国天津胆道閉鎖症・小児肝移植研究会, Tianjin, China, 2023. 11. 4
26. Sakamoto S: Short and long-term post-operative problems in LDLT. The 7th Annual meeting of Indonesian transplantation society (InaTS), Indonesia (Online), 2023. 11. 4
27. Fukuda A: Surgical management of vascular problems in post-LDLT patients. The 7th Annual meeting of Indonesian transplantation society (InaTS), Indonesia (Online), 2023. 11. 4
28. Shimizu S: Study on the influence of donor-specific anti-HLA antibody (DSA) to the viral antibody titer associated with vaccination after pediatric liver. (International Research Grant Session), ATW2023, Korea, 2023. 11. 17

29. Sakamoto S: ABOi PED LDLT. (Concurrent Symposium), Asian Transplantation Week 2023 (ATW 2023), Korea, 2023. 11. 18
30. Fukuda A: Monosegment graft in LDLT. The 6th World Congress of International Living Donor Liver Transplantation Group (iLDLT), India, 2023. 11. 18
31. Kasahara M: Optimize graft weight in pediatric liver transplantation and immunosuppression regimen: how is it different between children and adults?. Annual congress of Vietnam organ transplantation society, Vietnam, 2023. 12. 15
32. Sakamoto S: Portal vein pressure and flow modulation in pediatric liver transplantation. 8th Organ Transplant Scientific Conference, Vietnam, 2023. 12. 15
33. 内田孟: 移植医療者の働き方改革. Liver Transplant Postoperative Management Forum 2023, 京都, 2023. 2. 4
34. 笠原群生: 小児腎移植の手技について. 第56回日本臨床腎移植学会教育セミナー, 東京, 2023. 2. 12
35. 笠原群生: 国立成育医療研究センターにおける難病に対する治療の現状. RDD2023 シンポジウム, 東京, 2023. 2. 12
36. 阪本靖介: 当センターにおける短腸症候群に対する肝・小腸異時移植の経験. 第35回日本腸管リハビリテーション・小腸移植研究会, 2023. 3. 4
37. 笠原群生: 小児肝移植の現状と適応. 沖縄小児科学会地方会, 2023. 3. 5, 沖縄 (オンライン)
38. 内田 孟: 肝移植における働き方改革. 第6回脳死肝移植研究会, 東京, 2023. 3. 10
39. 阪本靖介: 先天性門脈体循環シャントに対する治療戦略. 第36回日本小児脾臓・門脈研究会, 神戸, 2023. 3. 11
40. 小峰竜二: 国立成育医療研究センターにおける小児腹部臓器移植の成績. 第31回日本医学会総会 2023, 東京, 2023. 4. 22
41. 柳佑典: 小児生体肝移植における胆道再建法の検討. 第123回日本外科学会定期学術集会, 東京, 2023. 4. 27
42. 笠原群生: 小児腹部腫瘍に対する外科手術. 第123回日本外科学会定期学術集会, 東京, 2023. 4. 28
43. 阪本靖介: 小児脳死ドナーからの小児脳死肝移植の検討. 第123回日本外科学会定期学術集会, 東京, 2023. 4. 28
44. 清水誠一: 小児肝移植患者における術後早期の血流感染陽性症例の検討. 第123回日本外科学会定期学術集会, 東京, 2023. 4. 28
45. 小峰竜二: 当院における術中門脈再吻合症例の経験. 第123回日本外科学会定期学術集会, 東京, 2023. 4. 29
46. 小峰竜二: 高拍出性心不全と右左シャントをきたした Osler 病による肝血管病変に対し、生体肝移植を施行した1例. 第41回日本肝移植学会学術集会, 愛媛, 2023. 6. 1
47. 内田孟: COACH 症候群に対する肝移植の経験. 第41回日本肝移植学会学術集会, 愛媛, 2023. 6. 1
48. 福田晃也: 脳死肝移植における周期加算システム-小児肝移植における効果の検討. 第41回日本肝移植学会学術集会, 愛媛, 2023. 6. 2
49. 内田孟: 当院における小児初回肝移植後の再肝移植の経験. 第41回日本肝移植学会学術集会, 愛媛, 2023. 6. 2

50. 阪本靖介： 当センターにおける小児肝移植の現状とこれからの課題。 第41回日本肝移植学会学術集会，愛媛，2023.6.2
51. 阪本靖介： 肝移植におけるサイズマッチングの問題点（成人・小児）．RTC教育セミナー，第41回日本肝移植学会学術集会，愛媛，2023.6.2
52. 清水誠一： 体外循環併用下に切除可能であった主要血管浸潤を伴う進行肝芽腫の2例．第60回日本小児外科学会学術集会，大阪，2023.6.3
53. 柳佑典： 肝内門脈血流の有無による肝外門脈閉塞症の検討．第60回日本小児外科学会学術集会，大阪，2023.6.3
54. 兒玉匡： 当院におけるアラジール症候群に対する小児肝移植の検討．第60回日本小児外科学会学術集会，大阪，2023.6.3
55. 小峰竜二，阪本靖介，内田孟，清水誠一，柳佑典，中尾俊雅，兒玉匡，福田晃也，笠原群生： 肝移植により救命し得た腹腔内大量出血をきたしたPeliosis hepatisの2例．第49回日本急性肝不全研究会，奈良，2023.6.14
56. 内田孟，出口晴教，中尾俊雅，兒玉匡，小峰竜二，清水誠一，柳佑典，福田晃也，阪本靖介，笠原群生： 生体肝移植後患者における超音波ガイド下肝生検の経験．第39回日本小児肝臓研究会，神奈川，2023.7.15
57. 酒井愛子，齊藤博太，内田孟，富永雅規，福田晃也，森田篤志，今川和生，鈴木忠樹，笠原群生，須磨崎亮： 原因不明の小児急性肝炎により肝移植を要した症例～研究班における病原体・病態解析について～．第39回日本小児肝臓研究会，神奈川，2023.7.15
58. 福岡健志，鈴木光幸，越智崇徳，三原勇太郎，星野碩宏，福田晃也，阪本靖介，笠原群生，金兼弘和，清水俊明： 小葉間胆管消失による閉塞性黄疸をきたしたX連鎖重症複合免疫不全症の乳児例－母児間マイクロキメリズムの関与－．第39回日本小児肝臓研究会，神奈川，2023.7.16
59. 近藤宏樹，中野聡，水野忠快，別所一彦，長谷川泰浩，中澤温子，谷川 健，東良紘，岡本竜弥，乾あやの，今川和生，笠原群生，全陽，鈴木光幸，林久允： 進行性家族性肝内胆汁うっ滞症2型の自己肝自然歴についての疫学調査．第39回日本小児肝臓研究会，神奈川，2023.7.16
60. 柳佑典，出口晴教，兒玉匡，中尾俊雅，小峰竜二，清水誠一，内田孟，福田晃也，阪本靖介，笠原群生： 生体肝移植を行ったAdams-Oliver症候群の1例．第39回日本小児肝臓研究会，神奈川，2023.7.16
61. 清水誠一，阪本靖介，小峰竜二，福田晃也，内田孟，柳佑典，中尾俊雅，兒玉匡，出口晴教，松本正太郎，義岡孝子，笠原群生： Myotubular myopathyにおける肝紫斑病に起因する肝出血が凝われ生体肝移植を施行した1例．第39回日本小児肝臓研究会，神奈川，2023.7.16
62. 齊藤寛貴，中野 聡，武藤大和，平井沙依子，箕輪圭，谷川健，阪本靖介，福田晃也，笠原群生，林久允，鈴木光幸，清水俊明： 生体肝移植後に脂肪肝をきたしたPFIC5の1例．第39回日本小児肝臓研究会，神奈川，2023.7.16
63. 内田孟： 主要脈管侵襲を伴う進行肝芽腫に対する肝移植．第59回日本肝癌研究会，大阪，2023.7.28
64. 阪本靖介： 国立成育医療研究センターにおける小児急性肝不全に対する治療戦略．第22回九州・沖縄小児救急医学研究会，鹿児島，2023.8.19
65. 岡本礼子，宮坂実木子，今井絢子，堤義之，宮寄治，阪本靖介，笠原群生，早川格，野坂俊介： 小児肝破裂の原因となった肝紫斑病の1例．第33回日本救急放射線研究会，徳島，2023.9.16

66. 清水誠一：小児生体肝移植における術後 DSA の現状と Chronic AMR に対する治療戦略. (一般口演), 第 59 回日本肝移植学会総会, 京都, 2023. 9. 21
67. 清水誠一：小腸移植後の難治性拒絶反応に対しベドリズムブを使用した 1 例. (分野別ワークショップ), 第 59 回日本移植学会総会, 京都, 2023. 9. 22
68. 阪本靖介：肝小腸コンボジットグラフト移植実施に向けて. (分野別ワークショップ), 第 59 回日本移植学会総会, 京都, 2023. 9. 22
69. 中尾俊雅：先天性門脈体循環短絡に対する肝移植時門脈再建方法の検討. (一般口演), 第 59 回日本移植学会総会, 京都, 2023. 9. 22
70. 児玉匡：体外循環装置を用いて肝芽腫心房内腫瘍栓を摘出し生体肝移植術を行った一例. (一般口演), 第 59 回日本移植学会総会, 京都, 2023. 9. 22
71. 柳佑典：肝・小腸異時移植を行うも救命できなかった進行性家族性肝内胆汁鬱滞症 1 型の 1 例. (一般口演), 第 59 回日本移植学会総会, 京都, 2023. 9. 22
72. 中里弥生：乳児急性肝不全における生体肝移植ドナーの精神的・身体的サポートの現状と課題. 第 59 回日本移植学会総会 (臓器横断的シンポジウム), 第 59 回日本移植学会総会, 京都, 2023. 9. 22
73. 出口晴教：メチルマロン酸血症による代謝不全を契機に肝細胞癌が判明し生体肝移植を施行した 1 例. (ポスター), 第 59 回日本移植学会総会, 京都, 2023. 9. 22
74. 内田孟：小児肝移植術後 10 年以上経過症例の検討. (分野別シンポジウム【肝 3】), 第 59 回日本移植学会総会, 京都, 2023. 9. 23
75. 笠原群生：肝芽腫に対する原発巣治療の現状 移植外科医の立場から. 第 56 回小児血液・がん学会, 北海道, 2023. 9. 29
76. 阪本靖介：臨床小腸移植における初期免疫抑制療法. (シンポジウム), 第 49 回日本臓器保存生物医学会学術集会, 北海道, 2023. 10. 20
77. 柳佑典：ヒト ES 細胞由来肝細胞を用いた細胞移植療法 First-in-human 試験. (一般口演), 第 49 回日本臓器保存生物医学会学術集会, 北海道, 2023. 10. 20
78. 清水誠一：マージナルグラフトを用いた脳死肝移植後に basiliximab を使用した 2 例. (一般口演), 第 49 回日本臓器保存生物医学会学術集会, 北海道, 2023. 10. 20
79. 二宮葵：空置直腸の炎症再燃により穿孔を来した Crohn 病の 1 例. (ポスター), 第 85 回日本臨床外科学会総会, 岡山, 2023. 11. 17
80. 柳佑典：小児肝移植におけるチーム医療の現状と課題—小児急性肝不全に対する集学的治療の検討. 第 85 回日本臨床外科学会総会, 岡山, 2023. 11. 18
81. 笠原群生, 福田晃也, 阪本靖介：更なるチーム医療の深化に必要な α (技術と情熱) とは？. 第 45 回日本手術医学会, 神奈川, 2023. 11. 25

心臓移植外科

〔原著論文：査読付〕 (Reviewed Paper)

1. Urata S, Michihata N, Inuzuka R, Matsui H, Fushimi K, Ishimaru M, Kato M, Yasunaga H: Factors affecting in-hospital mortality among pediatric patients with myocarditis treated

with mechanical circulatory support. J cardiol. 2023 Aug;82(2):108-112. doi: 10.1016/j.jjcc.2023.03.009

[著書]

1. 浦田晋, 阪井裕一: 深部感染症(筋炎, 筋膜炎, 壊疽など). 日本小児救急医学会(監修), 小児救急標準テキスト basic 編, 中外医学社, 2023; 258-259
2. 浦田晋, 阪井裕一: 尿路感染症. 日本小児救急医学会(監修), 小児救急標準テキスト basic 編, 中外医学社, 2023; 260-261
3. 浦田晋: 心筋症. エキスパートが教える小児の薬物治療, 東京医学社, 2023; 430-433

[学会発表]

1. 浦田晋, 藤村友美, 三崎泰志, 丸山和歌子, 佐藤麻朝, 進藤考洋, 小野博: 心臓カテーテル後に脊髄くも膜下出血を生じた一例. 第33回日本先天性心疾患インターベンション学会学術集会, 東京, 2023. 1. 19
2. 浦田晋, 藤村友美, 丸山和歌子, 佐藤麻朝, 山口章, 武井哲理, 近藤良一, 進藤考洋, 三崎泰志, 金子幸裕, 小野博: 一期的心内修復術を行った心室中隔欠損を伴う肺動脈閉鎖症の治療成績. 第59回日本小児循環器学会, 横浜, 2023. 7. 8
3. 浦田晋, 藪崎将, 西畑綾夏, 浅井ゆみこ, 沼田寛, 金基成, 三崎泰志, 小野博: ソマトロピン投与後に心筋肥厚が進行した Noonan 症候群の一例. 第32回日本小児心筋疾患学会, 札幌, 2023. 10. 29

[講演]

1. 浦田晋: 肺高血圧症を合併した門脈体循環短絡の小児例. 東日本 PAH Next Forum~TSUNACARI~, 東京, 2023. 12. 2

4-11 遺伝診療センター

[原著論文]

1. Yaga T, Iguchi A, Nakayama R, Kosaki R, Ishiguro A: WAGR and Potocki-Shaffer syndromes. *Pediatr Int*. 2023;65(1): e15405.
2. Murofushi Y, Hayakawa I, Kawai M, Abe Y, Kosaki R, Suzuki H, Takenouchi T, Kubota M: Oral Baclofen Therapy for Multifocal Spinal Myoclonus with *TBC1D24* Variant. *Mov Disord Clin Pract*. 2023;10(4):719-721.
3. Fukui K, Amari S, Yotani N, Kosaki R, Hata K, Kosuga M, Sago H, Isayama T, Ito Y: A Neonate with Mucopolysaccharidosis Type VII with Intractable Ascites. *AJP Rep*. 2023;13(1):e25-e28.

4. Seo JH, Kosuga M, Hamazaki T, Shintaku H, Okuyama T: Intracerebroventricular enzyme replacement therapy in patients with neuronopathic mucopolysaccharidosis type II: Final report of 5-year results from a Japanese open-label phase 1/2 study. *Mol Genet Metab.* 2023;140(4):107709.
5. Morikawa H, Nishina S, Torii K, Hosono K, Yokoi T, Shigeyasu C, Yamada M, Kosuga M, Fukami M, Saitsu H, Azuma N, Hori Y, Hotta Y: A pediatric case of congenital stromal corneal dystrophy caused by the novel variant c.953del of the DCN gene. *Hum Genome Var.* 2023;10(1):9.
6. Wada MK, Fukuhara Y, Hayakawa I, Kaname T, Ishiguro A: KARS-related diseases with macrothrombocytes and pulmonary arterial hypertension. *Pediatr Int.* 2023;65(1):e15428.
7. Saettini F, Guerra F, Fazio G, Bugarin C, McMillan HJ, Ohtake A, Ardisson A, Itoh M, Giglio S, Cappuccio G, Giardino G, Romano R, Quadri M, Gasperini S, Moratto D, Chiarini M, Akira I, Fukuhara Y, Hayakawa I, Okazaki Y, Mauri M, Piazza R, Cazzaniga G, Biondi A: Antibody Deficiency in Patients with Biallelic KARS1 Mutations. *J Clin Immunol.* 2023;43(8):2115-2125. Erratum in: *J Clin Immunol.* 2023;43(8):2126.
8. Kamihara Y, Ozawa K, Muromoto J, Sugibayashi R, Wada S, Shibata Y, Hori A, Hasegawa F, Hata K, Sago H: Clinical features of fetal hydrothorax associated with mucopolysaccharidosis-VII. *J Obstet Gynaecol Res.* 2023;49(10):2538-2543.

[著書]

1. 小崎里華: 18トリソミー (加藤元博編) 小児科診療ガイドライン 総合医学社 2023 ; 763-766.
2. 小崎里華: 主な外表奇形 (五十嵐隆、中林正雄、竹田省編) 母子保健マニュアル 改訂8版 南山堂 2023 ; 286.
3. 小崎里華: 主な染色体異常症 (五十嵐隆、中林正雄、竹田省編) 母子保健マニュアル 改訂8版 南山堂 2023 ; 287-288.
4. 小崎里華: 染色体・遺伝子検査総論 (加藤元博、高橋尚人編) 小児臨床検査ガイド 第3版 文光堂, 2023 ; 660-663.
5. 小須賀基通: ムコ多糖症 (MPS) II 型. (衛藤義勝、奥山虎之編) ライソゾーム病 改訂第2版、診断と治療社 2023 ; 215 - 219.
6. 小須賀基通: ムコ多糖症 (MPS) IV 型. (衛藤義勝、奥山虎之編) ライソゾーム病 改訂第2版、診断と治療社 2023 ; 224 - 225.
7. 小須賀基通: シスチノーシス. (衛藤義勝、奥山虎之編) ライソゾーム病, 改訂第2版、診断と治療社 2023 ; 252-254.
8. 小須賀基通: ムコ多糖. (加藤元博、高橋尚人編) 小児臨床検査ガイド, 文光堂, 2023;216-220.
9. 福原康之: 臨床現場からみた臨床研究法の推進と規制. 医事法講座第13巻 臨床研究と医事法 甲斐克則, 信山社, 2023 ; 121-137.

[総説]

1. 本多皓 遠藤麻衣 吉田和恵 小崎里華 山本俊幸: 無汗性外胚葉形成不全症 汎発性脱毛症を合併した例 皮膚病診療 2023 ; 45 : 696-699.
2. 小須賀基通: 特集・遺伝性筋疾患研究の進歩 ポンペ病. 遺伝子医学 2023 ; 13 : 85-90.

[学会発表]

〈国際学会〉

1. Ogawa T, Kosugi Y, Matsui T, Suzuki Y, Kobayashi R, Fukami M, Tateno M, Kosaki R, Kagami M: Molecular Analysis in a Case with Beckwith-Wiedemann Syndrome, Placental Mesenchymal Dysplasia, and Hepatoblastoma. 68th Annual Meeting of the Japan Society of Human Genetics (JSHG) , Tokyo, 2023.10.12.
2. Kosaki R, Uchida Y, Yanagi K, Tsushima S, Uematsu S, Kaname T: Post-mortem whole exome analysis in sudden unexpected death in infancy and children. 68th Annual Meeting of the Japan Society of Human Genetics (JSHG) , Tokyo, 2023.10.12.
3. Kosuga M, So T, Tsushima S, Fukuhara Y, Kosaki R, Okuyama T, Sago H: A case of pre-symptomatic testing and genetic counseling on infantile metachromatic leukodystrophy. 68th Annual Meeting of the Japan Society of Human Genetics (JSHG) , Tokyo, 2023.10.12.
4. Masubuchi H, Hara K, Kosaki R, Koinuma G, Kosaki K, Fukami M, Kagami M: A patient with cystic fibrosis revealed by maternal uniparental disomy of chromosome seven. 68th Annual Meeting of the Japan Society of Human Genetics (JSHG) , Tokyo, 2023.10.12.
5. Kosuga M: Recent advances in genotype-phenotype relationships in Mucopolysaccharidosis typeII (MPSII). The 6th International Forum of Lysosomal Disorders, Tokyo, 2023.3.31
6. So T, Hirakiyama A, Fukuhara Y, Kosuga M: A case of mucopolysaccharidosis VII diagnosed and treated at an early age. The 6th Asian Congress on Inherited Metabolic Diseases (ACIMD 2023), Thailand, 2023.3.23
7. Sekido Y, Fukuhara Y, So T, Shimabukuro R, Umezawa A, Kosuga M: 12 patients with ML in our hospital and their risk of respiratory distress after viral infection. 68th Annual Meeting of the Japan Society of Human Genetics (JSHG) , Tokyo, 2023.10.12.
8. Kosuga M: Recent advances in treatment of lysosomal storage diseases. 68th Annual Meeting of the Japan Society of Human Genetics (JSHG) , Tokyo, 2023.10.12.
9. Hasegawa F, Hori A, Taniguchi K, Muromoto J, Sugibayashi R, Ozawa K, Wada S, Sago H, Hata K: A case of osteogenesis imperfecta with possible maternal somatic cell mosaicism detected by deep sequencing. 68th Annual Meeting of the Japan Society of Human Genetics (JSHG) , Tokyo, 2023.10.12.
10. Akaishi R, Hasegawa F, Kakinuma Y, Nishino C, Morita T, Mouri S, Fujino S, Fujibe Y, Unno S, Muromoto J, Suzuki T, Sugibayashi R, Ozawa K, Sasaki A, Wada S, Sago H: Pregnant women's recent preferences for prenatal genetic testing: A single-center study in Japan. 68th Annual Meeting of the Japan Society of Human Genetics (JSHG) , Tokyo, 2023.10.12.

〈国内学会〉

1. 矢賀勇志, 井口晶裕, 小崎里華, 中山ロバート, 石黒精: 外骨種 を生じた WAGR 症候群患者にマイクロアレイ検査を施行し、Potocki-Shaffer 症候群の合併と診断した一例. 第 126 回 日本小児科学会, 2023. 4. 14
2. 増渕颯, 原香織, 小崎里華, 肥沼悟郎, 深見真紀, 鏡雅代: 乳児期から繰り返す慢性気管支炎と 7 番染色体母親性ダイソミーによる Silver-Russel 症候群から Cystic fibrosis と診断した 1 例. 第 56 回 日本小児内分泌学会学術集会 2023. 10. 19-21
3. 小川朋恵, 小杉洋平, 松井俊大, 鈴木靖人, 小林良二, 立野正敏, 小崎里華, 鏡雅代: 間葉性異形成胎盤に肝芽腫を合併した Beckwith-Wiedemann 症候群女児例の遺伝学的解析. 第 56 回日本小児内分泌学会学術集会. 2023. 10. 19-21.
4. 松山茉衣, 肥沼悟郎, 小崎里華: Silver Russel 症候群と嚢胞性線維症を合併した日本人小児 第 55 回日本小児呼吸器学会学術集会 2023. 10. 7-8.
5. 伊藤裕司, 福井加奈, 甘利昭一郎, 諫山哲哉, 余谷暢之, 小崎里華, 秦健一郎, 左合治彦, 小須賀基通: 重症胎児水腫の原因としてムコ多糖症がみつかった症例 第 59 回 日本周産期新生児医学会学術集会 ランチョンセミナー 2023. 7. 9.
6. 蘇哲民, 津島智子, 福原康之, 宇佐美憲一, 井口晶裕, 坂口大俊, 小崎里華, 奥山虎之, 小須賀基道: 造血幹細胞移植と脳室内酵素補充療法を併用し治療を行ったムコ多糖症 II 型 10 症例の検討 第 64 回 日本先天代謝異常学会 2023. 10. 5-7.
7. 坂尾佳香, 本多皓, 草野美沙希, 増山郁, 遠藤麻衣, 吉田和恵, 小崎里華, 小崎健次郎, 山本俊幸: 無汗性外胚葉形成不全症に汎発性脱毛症を合併した 1 例 第 87 回日本皮膚科学会東京支部学術大会 2023. 11. 9.
8. 小崎里華, 小須賀基道, 要匡, 中林一彦, 松原圭子, 深見真紀, 左合治彦, 松原洋一: 国立成育医療研究センター遺伝診療センター設立 ～子と母とその家族に最良の遺伝医療の提供に向けて～, 第 46 回日本小児遺伝学会学術集会, 2023. 12. 8-9.
9. 富永牧子, 安藤晋介, 村瀬正彦, 小崎里華, 池田裕一: RARB 遺伝子変異による Microphthalmia syndromic12 (MCOPS12) の一例, 第 46 回日本小児遺伝学会学術集会, 2023. 12. 8-9.
10. 関戸雄貴, 福原康之, 蘇哲民, 島袋林秀, 梅澤明宏, 小須賀基通: パラインフルエンザウイルス感染を契機に呼吸状態が急変した MLIII の 11 才女児例と当院 ML12 例の検討. 第 64 回日本先天代謝異常学会学術集会・第 19 回アジア先天代謝異常症シンポジウム. 大阪市, 2023. 10. 6.
11. 大星航, 開山麻美, 渡辺元, 藤直子, 蘇哲民, 小須賀基通, 徐じゅひょん, 奥山虎之: ロングリードシーケンスによるポンペ病の複合ヘテロ接合型および pseudodeficiency の鑑別. 第 64 回日本先天代謝異常学会学術集会・第 19 回アジア先天代謝異常症シンポジウム. 大阪市, 2023. 10. 6.
12. 徐じゅひょん, 小須賀基通, 右田王介, 田中藤樹, 伏見拓矢, 村山圭, 高柳正樹, 望月弘, 大竹明, 奥山虎之: オプショナルスクリーニングの実施状況と患者さんのフォローアップ. 第 64 回日本先天代謝異常学会学術集会・第 19 回アジア先天代謝異常症シンポジウム, 大阪市, 2023. 10. 6.
13. 蘇哲民, 津島智子, 徐じゅひょん, 福原康之, 宇佐美憲一, 井口晶裕, 坂口大俊, 小崎里華, 奥山虎之, 小須賀基通: ムコ多糖症 II 型における造血幹細胞移植と脳室内酵素補充療法の併用療法: 10 例の検討 第 64 回日本先天代謝異常学会学術集会・第 19 回アジア先天代謝異常症シンポジウム. 大阪市, 2023. 10. 6.
14. 山下和香奈, 徐じゅひょん, 小林正久, 小須賀基通: 先天代謝異常症患者登録制度 (JaSMIn) の現

- 状：登録情報の臨床研究への活用. 第64回日本先天代謝異常学会学術集会・第19回アジア先天代謝異常症シンポジウム. 大阪市, 2023. 10. 6.
15. 山川裕之, 小須賀基通, 家田真樹, 高石官均, 石垣泰則, 奥山虎之: ライソゾーム病における在宅酵素補充療法マニュアル作成と運用. 第64回日本先天代謝異常学会学術集会・第19回アジア先天代謝異常症シンポジウム. 大阪市, 2023. 10. 6.
 16. 諸隈史香, 長谷川冬雪, 西山深雪, 井野元茜, 水戸川真由美, 佐々木愛子, 赤石理奈, 室本仁, 鈴木朋, 杉林里佳, 小川浩平, 小澤克典, 梅原永能, 和田誠司, 左合治彦: 21トリソミーのある方の親が求める出生前検査を検討している方々へ必要な情報内容. 第9回産科婦人科遺伝診療学会, 名古屋, 2023. 12. 15.
 17. 荻原真帆, 小澤南, 清水直樹, 長谷川冬雪, 秦健一郎, 右田王介: 全エクソーム解析で児のFLNA 病的バリエントが同定された両親への遺伝カウンセリング. 第46回日本小児遺伝学会学術集会, 沖縄, 2023. 12. 9.

4-12 放射線診療部

[原著論文: 査読付]

1. Miyazaki O, Oguma E, Nishikawa M, Tanami Y, Hosokawa T, Kitami M, Aoki H, Hattori S, Motoori K, Watanabe K, Ida K, Hishiki T, Kitamura M, Nozawa K, Takimoto T, Hiyama E: Usefulness of central radiologic review in clinical trials of children with hepatoblastoma. *Pediatr Radiol* 2023;53:367-377
2. Nakai Y, Miyazaki O, Kitamura M, Imai R, Okamoto R, Tsutsumi Y, Miyasaka M, Ogiwara H, Miura H, Yamada K, Nosaka S: Evaluation of radiation dose reduction in head CT using the half-dose method. *Jpn J Radiol* 2023;41:872-881
3. Yoshitake T, Miyazaki O, Kitamura M, Ono K, Kai M: Quantitative analysis of the clinical reasons influencing the frequency of pediatric head CT examinations: A single-center observation study. *Tomography* 2023;9:829-839
4. Yanagi Y, Sakamoto S, Nakao T, Kodama T, Uchida H, Shimizu S, Fukuda A, Yamada M, Kiyotani C, Matsumoto K, Yoshioka T, Miyazaki O, Nosaka S, Kasahara M: The role of living-donor liver transplantation in children with an advanced malignant rhabdoid tumor of the liver in the era of transplant oncology: Case report and literature review. *Pediatr Blood Cancer* 2023;70:e30582
5. Uchida H, Sakamoto S, Yanagi Y, Shimizu S, Fukuda A, Ono H, Miyazaki O, Nosaka S, Schlegel A, Kasahara M: Significance of a multidisciplinary approach to congenital extrahepatic portosystemic shunt: A changing paradigm for the treatment. *Hepatol Res* 2023;53:540-555
6. Uchida H, Sakamoto S, Komine R, Kodama T, Nakao T, Okada N, Yanagi Y, Shimizu S, Fukuda A, Shioda Y, Kiyotani C, Matsumoto K, Yoneda A, Haga C, Yoshioka T, Miyazaki O, Nosaka S, Kasahara M: Strategy for hepatoblastoma with major vascular involvement: A guide for surgical decision-making. *Surgery* 2023;173:457-463

7. Sakamoto K, Fujimori K, Miyazaki O, Yoshioka T, Yoneda A, Matsumoto K, Shioda Y: Inclusion of thymic Langerhans cell histiocytosis in the "5 Ts" of the differential diagnosis of anterior mediastinal mass. Int J Hematol 2023;117:311-313
8. Ishibashi T, Takei Y, Kato M, Yamashita Y, Tsukamoto A, Matsumoto K, Sakamoto H, Masuda T, Miyazaki O: Patient dosimetry survey of pediatric diagnostic and therapeutic cardiac catheterization in Japan. Radiat Prot Dosimetry 2023;199:1082-1089
9. Nishimura G, Handa A, Miyazaki O, Tsujioka Y, Murotsuki J, Sawai H, Yamada T, Kozuma Y, Takahashi Y, Ozawa K, Pooh R, Sase M: Prenatal diagnosis of bone dysplasias. Br J Radiol 2023;96:20221025
10. Tsujioka Y, Handa A, Nishimura G, Nozaki T, Miyazaki O, Kono T, Bixby SD, Jinzaki M: Pediatric ribs at chest radiography: Normal variants and abnormalities. Radiographics 2023;43:e230076
11. Ajithkumar T, Avanzo M, Yorke E, Tsang DS, Milano MT, Olch AJ, Merchant TE, Dieckmann K, Mahajan A, Fuji H, Paulino AC, Timmermann B, Marks LB, Bentzen SM, Jackson A, Constine LS: Brain and brain stem necrosis after reirradiation for recurrent childhood primary central nervous system tumors: A PENTEC comprehensive review. Int J Radiat Oncol Biol Phys 2024;119:655-668
12. 芳賀大樹, 富田健太郎, 藤原直樹, 石戸美妃子, 岡本吉生, 糟谷周吾, 上村克徳, 堤 義之, 平本龍吾, 松井彦郎, 松永綾子, 朱田博聖, 池山由紀, 西原正人, 福井美保, 塚原宏一, 山岸敬幸: 日本小児科学会医療安全委員会: 小児における院内迅速対応システムに対する意識調査. 日本小児科学会雑誌 2023 ; 127 : 1479-1484

【原著論文：査読なし】

なし

【症例報告】

1. Shiohara T, Miyazaki O, Hasegawa Y, Uematsu S, Nosaka S: Solitary whirlpool sign demonstrated with testicular torsion on ultrasonography. Pediatr Int 2023;65:e15566
2. Fuseda Y, Tagaya T, Tsuji S, Nosaka S, Fujino A, Kubota M, Ishiguro A: Ball-valve syndrome mimicking gastric perforation in a toddler with gastrostomy. Pediatr Int 2023;65:e15694
3. Kikuchi N, Ide K, Tomita K, Hayakawa I, Miyasaka M, Abe Y: A case of rapid progressive fatal encephalopathy associated with coronavirus disease 2019. Pediatr Int 2023;65:e15455
4. 菅原 碧, 中尾 寛, 中村 知夫, 宮寄 治, 平石のぞみ, 岩間 一浩, 窪田 満, 石黒 精: 症例報告: 在宅診療への移行に成功し, 発達を獲得している透明脊椎異骨症の幼児. 日本小児科学会雑誌 2023;127:1067-1073

【総説】

1. 宮寄 治: 画像診断：放射線被曝と防護. 小児外科 2023;55:1140-1143

2. 宮寄 治: 胎児CTを用いた骨系統疾患の診断——低被ばく線量CTで実践する出生前診断. 産婦人科 画像診断アトラス. 臨床産婦人科 2023;77:42-45
3. 宮寄 治: 生殖腺 (性腺) 防護について考える その2 小児放射線診断医の立場から (読影の実際, 弊害の実例, 米国での状況の紹介). 日本診療放射線技師会誌 2023;70:373-380
4. 宮寄 治: 小児がん中央画像診断の設立と流れ, 特に肝腫瘍について. 日本がん検診・診断学会誌 2023;31:77-78
5. 寺村易子, 宮寄 治: 今月の症例 画像診断. 小児科臨床 2023;76:47-50
6. 藤井茜, 佐藤宏朗, 宮寄 治: 今月の症例 画像診断. 小児科臨床 2023;76:197-199
7. 榎園美香子, 宮寄 治: 今月の症例 画像診断. 小児科臨床 2023;76:353-355
8. 増田怜史, 今井絢子, 岡本礼子, 小林真也, 田端克彦, 堤 義之, 宮坂実木子, 野坂俊介, 伊藤裕司, 宮寄 治: 今月の症例 画像診断. 小児科臨床 2023;76:515-517
9. 田端克彦, 今井絢子, 岡本礼子, 小林真也, 堤 義之, 増田怜史, 宮坂実木子, 野坂俊介, 植松悟子, 宮寄 治: 今月の症例 画像診断. 小児科臨床 2023;76:665-668

[著書]

1. 野坂俊介: 先天性門脈体循環シャント. 宮寄 治 (編集), 小児画像診断の勘どころ NEO, メジカルビュー社, 2023 ; 321-326
2. 野坂俊介: 先天性門脈体循環シャントの治療戦略. 宮寄 治 (編集), 小児画像診断の勘どころ NEO, メジカルビュー社, 2023 ; 327-332
3. 宮寄 治: 絨毛病. 宮寄 治 (編集), 小児画像診断の勘どころ NEO, メジカルビュー社, 2023 ; 228-230
4. 宮寄 治: エキスパートに聞く 小児CT被ばくの豆知識. 宮寄 治 (編集), 小児画像診断の勘どころ NEO, メジカルビュー社, 2023 ; 231-233
5. 宮寄 治: 血管炎. 宮寄 治 (編集), 小児画像診断の勘どころ NEO, メジカルビュー社, 2023 ; 305-307
6. 宮寄 治: 造血幹細胞移植の合併症 (GVHD, VOD/SOS). 宮寄 治 (編集), 小児画像診断の勘どころ NEO, メジカルビュー社, 2023 ; 288-292
7. 宮寄 治: 小児の肝腫瘍 成人型肝細胞癌. 肝胆膵の画像診断, 山下康行 (編集), 秀潤社, 2023; 206-207
8. 宮寄 治: 小児の肝腫瘍 未分化肉腫. 肝胆膵の画像診断, 山下康行 (編集), 秀潤社, 2023; 210-211
9. 宮寄 治: 小児頭部CT. 尾田 済太郎, 船間 芳憲 (編集), CT縦横無尽, メジカルビュー社, 2023 ; 32-38
10. 宮寄 治: 胎児骨格CT. 尾田 済太郎, 船間 芳憲 (編集), CT縦横無尽, メジカルビュー社, 2023 ; 255-259
11. 堤 義之: 58. 造影剤. 加藤元博・石川洋一 (編集), 新小児薬用量 改訂第10版, 診断と治療社, 2023 ; 560-574
12. 堤 義之: 脊髄腫瘍. 宮寄 治 (編集), 小児画像診断の勘どころ NEO, メジカルビュー社, 2023 ; 91-93
13. 堤 義之, 飯塚有応: 脊髄血管病変 (脊髄梗塞, 血管奇形). 宮寄 治 (編集), 宮寄治編, 小

児画像診断の勘どころ NEO, メジカルビュー社, 2023 ; 94-96

14. 宮坂実木子: 虐待に伴う乳幼児頭部外傷. 宮寄 治 (編集), 小児画像診断の勘どころ NEO, メジカルビュー社, 2023 ; 55-58
15. 宮坂実木子: 腎尿路の発生と異常. 宮寄 治 (編集), 小児画像診断の勘どころ NEO, メジカルビュー社, 2023 ; 211-215
16. 宮坂実木子: 潜在性・開放性二分脊椎. とにかく基礎から固める脊椎の画像診断, メジカルビュー社, 2023;182-194
17. 岡本礼子: 腸回転異常. 宮寄 治 (編集), 小児画像診断の勘どころ NEO, メジカルビュー社, 2023 ; 178-181
18. 荻原早保, 宮寄 治, 野坂俊介: 胸膜肺芽腫. 宮寄 治 (編集), 小児画像診断の勘どころ NEO, メジカルビュー社, 2023 ; 163-165
19. 塚本 純, 宮寄 治: 先天性肺気道奇形 (CPAM). 宮寄 治 (編集), 小児画像診断の勘どころ NEO, メジカルビュー社, 2023 ; 117-119

[ガイドライン、報告書、その他]

なし

[学会発表]

1. Nosaka S: Diagnostic imaging of neonatal cholestasis. 21st Annual Scientific Meeting of Asian and Oceanic Society for Pediatric Radiology, Hong Kong, 2023. 9. 2
2. Miyazaki O, Okamoto R, Kitamura M, Imai R, Imai A, Tsutsumi Y, Miyasaka M, Nosaka S: Justification and optimization of pediatric CT in Tokyo suburbs. 7th International Symposium on the System of Radiological Protection (ICRP 2023), Tokyo, 2023. 11. 6
3. Fuji H, Tsuchiya Y, Ogawa A: Analysis of inquiries made about the use of radiotherapy during the Japanese nationwide clinical trial for rhabdomyosarcoma. 55th Congress of International Society of Paediatric Oncology, Ottawa, 2023. 10. 12
4. Michishita Y, Miyazaki O, Imai A, Okamoto R, Tsutsumi Y, Miyasaka M, Sago H, Kanamori Y, Nosaka S: A new quantitative approach for prenatal diagnosis of esophageal atresia on fetal MRI. 109th Annual Meeting of Radiological Society of North America (RSNA), Chicago, 2023. 11. 30
5. Michishita Y, Miyazaki O, Imai A, Okamoto R, Tsutsumi Y, Miyasaka M, Sago H, Kanamori Y, Nosaka S: Evaluation of pharyngeal dilation in esophageal atresia: A new approach of fetal MRI. Annual meeting of Society for Pediatric Radiology, Austin, 2023. 5. 16
6. Michishita Y, Miyazaki O, Imai A, Okamoto R, Tsutsumi Y, Miyasaka M, Sago H, Kanamori Y, Nosaka S: Prenatal diagnosis of fetal esophageal atresia: Proposed addition of a quantitative index. The 82nd annual meeting of the Japan radiological society, Kanagawa, 2023. 4. 13
7. Imai R, Miyazaki O, Horiuchi T, Suzuki N, Nosaka S: Ultra-low dose fetal CT: A simple way to understand the various exposure doses to the fetus. 109th Annual Meeting of

Radiological Society of North America (RSNA), Chicago, 2023. 11. 26

8. 宮寄 治, 坂本 慧, 小林真也, 塩原拓実, 今井絢子, 岡本礼子, 堤 義之, 宮坂実木子, 林 健太郎, 福田良嗣, 関 敦人, 中野雅之, 義岡孝子, 野坂俊介: 骨形成不全症女児の骨折後に生じた類骨骨腫の一例. 第33回骨軟部放射線研究会, 福岡, 2023. 1. 27
9. 宮寄 治: 小児がん中央画像診断 肝腫瘍について. 第31回日本がん検診・診断学会, 東京, 2023. 6. 25
10. 宮寄 治: リフレッシュコース 胎児MRI 診断: 特に胸部疾患を中心に. 第59回日本医学放射線学会秋季大会, 徳島, 2023. 9. 15
11. 宮坂実木子: シンポジウム: 虐待による乳幼児頭部外傷 (Abusive Head Trauma) の画像診断. 第82回日本医学放射線学会総会, 神奈川, 2023. 4. 16
12. 岡本礼子, 宮坂実木子, 今井絢子, 堤義之, 宮寄治, 阪本靖介, 笠原群生, 早川格, 野坂俊介: 小児肝破裂の原因となった肝紫斑病の1例. 第33回日本救急放射線研究会, 徳島, 2023. 9. 27
13. 小林真也, 宮坂実木子, 今井絢子, 岡本礼子, 塩原拓実, 堤 義之, 宮寄 治, 長谷川雄一, 金森 豊, 野坂俊介: 異所性精巣3例の臨床像と画像所見. 第59回日本小児放射線学会学術集会, 東京, 2023. 6. 10
14. 道下由紀子, 宮寄 治, 今井絢子, 岡本礼子, 堤 義之, 宮坂実木子, 金森 豊, 左合治彦, 野坂俊介: 食道閉鎖症の出生前MRI 診断: 定量指標の検討. 第59回日本小児放射線学会学術集会, 東京, 2023. 6. 9
15. 染森太三: シンポジウム・少しの心遣いでMRI を安全かつ速やかに. 第46回日本小児放射線技術研究会総会, 神奈川, 2023. 4. 15

[講演]

1. 宮寄 治: ムコ多糖症を中心とした骨系統疾患の画像診断. 第4回東海地区骨系統疾患研究会, 愛知, 2023. 1. 21
2. 宮寄 治: 小児泌尿器腫瘍. 第20回日本小児放射線学会教育セミナー 研修医に知ってほしい小児の泌尿生殖器疾患, オンデマンド配信, 2023. 2. 4
3. 宮寄 治: 胎児MRI による小児外科疾患の診断. 第1回ふくしま周産期・小児セミナー, 福島, 2023. 6. 23
4. 宮寄 治: 大特集! 新生児・乳児大泉門と頭蓋縫合の開大. 第33回骨軟部放射線診断セミナー, 北海道, 2023. 7. 24
5. 宮寄 治: 第2部 これからの生殖腺防護を考える. 生殖腺プロテクターによる診断上の問題が生じた事例. 2023年度市民公開講座 医療被ばくによる生殖腺被ばくを考える, オンデマンド配信, 2023. 8. 1
6. 宮寄 治: 軟骨無形成症の放射線学的特徴と診断. ボックスゴ 1st Anniversary Meeting, 東京, 2023. 9. 2
7. 宮寄 治: 『小児の画像診断 注意すべきポイント』骨軟部病変・胎児MRI をを中心に. 第51回日本磁気共鳴医学会大会, 長野, 2023. 9. 22
8. 宮寄 治: 小児の歩行障害のMRI 診断. 骨軟部画像診断 Web イメージングセミナー, オンライン, 2023. 11. 15
9. 宮寄 治: 胎児MRI による食道閉鎖の胎児診断. 第3回胎児食道研究会, オンライン,

2023. 11. 23

10. 堤 義之: 小児神経画像診断. 日本小児神経外科学会 小児神経外科教育セミナー2023, オンライン, 2023. 06. 08
11. 宮坂実木子: 小児泌尿器正常像と先天性奇形. 第20回日本小児放射線学会教育セミナー 研修医に知ってほしい小児の泌尿生殖器疾患, オンデマンド配信, 2023. 2. 4
12. 宮坂実木子: 小児救急疾患: 診断医に必要な小児救急疾患の画像診断 小児急性腹症. ミッドサマーセミナー, 兵庫, 2023. 7. 15
13. 染森太三: 小児に有用な prep のお話. 第23回東京 MAGNETOM 研究会, 東京, 2023. 1. 14
14. 跡田直利: 画像診断における病院のデジタル化. JICA 国別研修キューバ国, 東京, 2023. 9. 10
15. 田中英之: 成長に合わせた患者対応のポイントー診療放射線技師の立場からー. 令和5年度成育研修会 シンポジウム講演, 東京, 2023. 10. 17
16. 藤田勝則: 小児診療放射線技術 (一般撮影). 子供の目線で診療を考える 令和5年度成育研修会, 東京, 2023. 10. 17
17. 今井瑠美: 小児診療放射線技術 (CT 撮影) 子供の目線で診療を考える 令和5年度成育研修会, 東京, 2023. 10. 17
18. 井原純子: 小児診療放射線技術 (MRI 撮影) 子供の目線で診療を考える 令和5年度成育研修会, 東京, 2023. 10. 17
19. 藤渕智康: 小児診療放射線技術 (放射線治療) 子供の目線で診療を考える 令和5年度成育研修会, 東京, 2023. 10. 17
20. 半田賢一: 小児診療放射線技術 (血管撮影) 子供の目線で診療を考える 令和5年度成育研修会, 東京, 2023. 10. 17
21. 藤田勝則: 一般撮影における被ばくに関して. わが国の小児股関節撮影における生殖腺防護の断続中止に関する報告を受けて, FUJIFILM MEDICAL SEMINAR in 東京 特別講演, 東京, 2023. 12. 13

[広報活動]

1. 令和5年度 成育医療研修会 テーマ: 子供の目線で診療を考える 令和5年度成育研修会, 東京, 2023. 10. 17

4-13 臨床検査部

[原著論文]

1. Uchiyama T, Kawai T, Nakabayashi K, Nakazawa Y, Goto F, Okamura K, Nishimura T, Kato K, Watanabe N, Miura A, Yasuda T, Ando Y, Minegishi T, Edasawa K, Shimura M, Akiba Y, Sato-Otsubo A, Mizukami T, Kato M, Akashi K, Nunoi H, Onodera M. Myelodysplasia after clonal hematopoiesis with APOBEC3-mediated CYBB inactivation in retroviral gene therapy for X-CGD. Mol Ther. 31: 3424-3440, 2023.
2. Yamazaki N, Ohira M, Takada S, Ohtake A, Onodera M, Nakanishi M, Okuyama T, Mashima R. Enhanced osteoblastic differentiation of parietal bone in a novel

murine model of mucopolysaccharidosis type II. Mol Genet Metab Rep. 2023 Nov 11;37:101021.

3. Yasuda T, Uchiyama T, Watanabe N, Ito N, Nakabayashi K, Mochizuki H, Onodera M. Peripheral immune system modulates Purkinje cell degeneration in Niemann-Pick disease type C1. Life Sci Alliance. 2023 Jun 27;6(9):e202201881
4. Onodera M, Uchiyama T, Ariga T, Yamada M, Miyamura T, Arizono H, Morio T. Safety and efficacy of elapegedemase in patients with adenosine deaminase deficiency: A multicenter, open-label, single-arm, phase 3, and postmarketing clinical study. Immun Inflamm Dis. 2023 Jul;11(7):e917.
5. Irikura R, Nishizawa H, Nakajima K, Yamanaka M, Chen G, Tanaka K, Onodera M, Matsumoto M, Igarashi K. Ferroptosis model system by the re-expression of BACH1. J Biochem. 2023 Apr 24:mvad036.
6. Mashima R, Ohira M, Okuyama T, Onodera M, Takada S. A novel mucopolysaccharidosis type II mouse model with an iduronate-2-sulfatase-P88L mutation. Sci Rep. 13:7865, 2023.
7. Ishikawa T, Uejima Y, Okai M, Shiga K, Shoji K, Miyairi I, Kato M, Morooka S, Kubota M, Tagaya T, Tsuji S, Aoki S, Ide K, Niimi H, Uchiyama T, Onodera M, Kawai T. Melting temperature mapping method in children: Rapid identification of pathogenic microbes. J Infect Chemother. 2023 Nov 28:S1341-321X(23)00301-X.
8. Seo JH, Kosuga M, Hamazaki T, Shintaku H, Okuyama T: Intracerebroventricular enzyme replacement therapy in patients with neuronopathic mucopolysaccharidosis type II: Final report of 5-year results from a Japanese open-label phase 1/2 study. Mol Genet Metab. 2023 Oct 18;140(4):107709.
9. Morikawa H, Nishina S, Torii K, Hosono K, Yokoi T, Shigeyasu C, Yamada M, Kosuga M, Fukami M, Saitsu H, Azuma N, Hori Y, Hotta Y: A pediatric case of congenital stromal corneal dystrophy caused by the novel variant c.953del of the DCN gene. Hum Genome Var. 2023 Mar 24;10(1):9.
10. Fukui K, Amari S, Yotani N, Kosaki R, Hata K, Kosuga M, Sago H, Isayama T, Ito Y: A Neonate with Mucopolysaccharidosis Type VII with Intractable Ascites. AJP Rep. 2023 Mar 16;13(1):e25-e28.

[総説]

1. 小野寺雅史. 慢性肉芽腫症 (CGD) . 137-141 原発性免疫不全症候群 診療の手引き (改訂第2版) 2023年
2. 小野寺雅史. 9) プリンスクレオシド・ホスホリラーゼ欠損症. 265-268 別冊日本臨床 血液症候群 (第3版) 2023年
3. 小野寺雅史. 11) アデノシン・デアミナーゼ欠損症. 2279-283 別冊日本臨床 血液症候群 (第3版) 2023年
4. 小野寺雅史. 第IV章 遺伝子治療とは. 210-215 小児科学 日本医師会雑誌 152巻 特別号 (1) 2023年
5. 小野寺雅史. 患者細胞採取における医療機関での実施体制 - 原材料採取・調製時の品質担保について -. 医薬品医療機器レギュラトリーサイエンス 54:100-105. 2023
6. 小野寺雅史. 第52章 遺伝子治療. 1194-1207 小児科学 第11版 加藤元博編, 2023年
7. 小野寺雅史. 我が国の遺伝子治療の現状と課題、そしてその対策について. バイオサイエンスとインダストリー 81, 52-58, 2023

8. Mashima R, Takada S, Miyamoto Y: RNA-Based Therapeutic Technology. *Int J Mol Sci.* 2023 Oct 16;24(20):15230.
9. 小須賀基通: 特集・遺伝性筋疾患研究の進歩「ポンペ病」. 遺伝子医学, メディカルドゥ, 2023 ; 85-90.
10. 小須賀基通: ムコ多糖症 (MPS) II 型. ライソゾーム病, 診断と治療社, 2023 ; 215 - 219.
11. 小須賀基通: ムコ多糖症 (MPS) IV 型. ライソゾーム病, 診断と治療社, 2023 ; 224 - 225.
12. 小須賀基通: シスチノーシス. ライソゾーム病, 診断と治療社, 2023 ; 252-254.
13. 小須賀基通: ムコ多糖. 小児臨床検査ガイド, 文光堂, 2023;216-220.

【学会発表】

〈国際学会〉

1. Masafumi ONODERA. Safety and efficacy evaluation for gene therapy products. 2023 Korea-Japan Joint Symposium on Gene Therapy in Inborn Errors of Immunity. Soul. 2023.2.25 (口頭)
2. Masafumi ONODERA. Current status of gene therapy in Japan. The 6th international forum of lysosomal diseases: workshop 6: gene therapy for LSD. Tokyo. 2023.4.1 (口頭)
3. Masafumi ONODERA. Current Status and Future Prospects of Gene Therapy for Inherited Diseases. Human Genetics Asia 20023. Tokyo. 2023.10.12 (口頭)
4. Kosuga M: Recent advances in genotype-phenotype relationships in Mucopolysaccharidosis typeII (MPSII). The 6th International Forum of Lysosomal Disorders, Tokyo, March 31 2023
5. Kosuga M, So T, Tsushima S, Fukuhara Y, Kosaki R: A case of presymptomatic testing and genetic counseling on infantile metachromatic leukodystrophy. Human Genetics in Asia 2023, Tokyo, Oct 12 2023

〈国内学会〉

1. 小野寺 雅史. 遺伝子治療用製品の安全性・有効性に対する特異的評価系とは. 再生医療産業化フォーラム2023 in 日本橋. 東京. 2023.1.25.
2. 小野寺 雅史. アデノシン・デアミナーゼ欠損症の最新の診断と治療法. 第6回日本免疫不全・自己炎症学会総会 学術集会 モーニングセミナー. 東京. 2023.2.12
3. 小野寺 雅史. In vivo 遺伝子治療ウイルスベクターから非ウイルスベクターへ. 第22回 日本再生医療学会総会. 京都. 2023.3.23
4. 小野寺 雅史. 血液・免疫・代謝疾患に対する ex vivo 遺伝子治療. 第31回 日本医学界総会 2023 東京. 東京. 2023.4.23
5. 小野寺 雅史. どうする日本の遺伝子治療. Link-J&成育共催セミナー vol.2 成育 (小児・周産期) 医療分野のビジネスマッチング. 東京. 2023.7.14
6. 小野寺 雅史. 遺伝子細胞治療の定義と歴史. JSGCT 教育プログラム. 大阪. 2023.9.10
7. 小野寺 雅史. ゲノム組み込み型ウイルスベクター. JSGCT 教育プログラム. 大阪. 2023.9.10
8. 小野寺 雅史. 国内の遺伝子治療を俯瞰して思うこと. 第29回日本遺伝子細胞治療学会学術集会 教育講演2. 大阪. 2023.9.12
9. 小野寺 雅史, 内山徹. 遺伝子治療用ベクター製造プロセスのプラットフォーム化プロジェクト 日本版 PaVe-GT. BioJapan2023 スポンサーセミナー. 東京. 2023.10.13
10. 三浦 茜, 安田 徹, 石川 百合子, 山田 全毅, 枝澤 佳織, 中林 一彦, 志村 真里香, 安藤 由希子, 今留 謙一, 小野寺 雅史, 内山 徹. X連鎖高IgM症候群のCD40L 遺伝子変異に対するゲノム編集技術を用いたT細胞を標的とする遺伝子治療法の開発. 第31回 日本医学会総会 6NC リトリート ポスターセッション 東京. 2023.4.21-23. (ポスター発表)

11. 野口史織, 吉村稔, 尾針崇文, 澤部祥子, 石黒精: 巨大血小板性血小板減少症を呈した Takenouchi-Kosaki 症候群の2症例. 第72回日本医学検査学会 in GUNMA, 群馬, 2023. 5. 20
12. 五十嵐智見, 棚好陽, 櫻井菜々子, 牟禮優菜, 船津茉莉, 関口和也, 岡本桃子, 岡野行宏, 内田ゆみ, 南澤ふみ子, 直野美樹, 中尾知江美, 澤部祥子: 長期脳波ビデオ同時記録検査の現状と有用性について. 第51回国臨協関信支部学会, 東京, 2023. 9. 2
13. 関戸雄貴, 福原康之, 蘇哲民, 島袋林秀, 梅澤明宏, 小須賀基通. パラインフルエンザウイルス感染を契機に呼吸状態が急変した MLIII の11才女児例と当院 ML12 例の検討. 第64回日本先天代謝異常学会学術集会・第19回アジア先天代謝異常症シンポジウム. 2023. 10. 6, 大阪市
14. 大星航, 開山麻美, 渡辺元, 藤直子, 蘇哲民, 小須賀基通, 徐じゅひょん, 奥山虎之. ロングリードシーケンスによるポンペ病の複合ヘテロ接合型および pseudodeficiency の鑑別. 第64回日本先天代謝異常学会学術集会・第19回アジア先天代謝異常症シンポジウム. 2023. 10. 6, 大阪市
15. 真嶋隆一, 大平麻里, 奥山虎之, 小野寺雅史, 高田修治. ムコ多糖症 II 型の新しい疾患マウス. 第64回日本先天代謝異常学会学術集会・第19回アジア先天代謝異常症シンポジウム. 2023. 10. 6, 大阪市
16. 徐じゅひょん, 小須賀基通, 右田王介, 田中藤樹, 伏見拓矢, 村山圭, 高柳正樹, 望月弘, 大竹明, 奥山虎之. オプショナルスクリーニングの実施状況と患者さんのフォローアップ. 第64回日本先天代謝異常学会学術集会・第19回アジア先天代謝異常症シンポジウム. 2023. 10. 6, 大阪市
17. 蘇哲民, 津島智子, 徐じゅひょん, 福原康之, 宇佐美憲一, 井口晶裕, 坂口大俊, 小崎里華, 奥山虎之, 小須賀基通. 第64回日本先天代謝異常学会学術集会・第19回アジア先天代謝異常症シンポジウム. 2023. 10. 6, 大阪市
18. 山下和香奈, 徐じゅひょん, 小林正久, 小須賀基通. 先天代謝異常症患者登録制度 (JaSMIn) の現状: 登録情報の臨床研究への活用. 第64回日本先天代謝異常学会学術集会・第19回アジア先天代謝異常症シンポジウム. 2023. 10. 6, 大阪市
19. 山川裕之, 小須賀基通, 家田真樹, 高石官均, 石垣泰則, 奥山虎之. ライソゾーム病における在宅酵素補充療法マニュアル作成と運用. 第64回日本先天代謝異常学会学術集会・第19回アジア先天代謝異常症シンポジウム. 2023. 10. 6, 大阪市
20. Sekido Y, Fukuhara Y, So T, Shimabukuro R, Umezawa A, Kosuga M: 12 patients with ML in our hospital and their risk of respiratory distress after viral infection. 68th Annual Meeting of the Japan Society of Human Genetics (JSHG), Tokyo, Oct 12. 2023
21. Kosuga M: Recent advances in treatment of lysosomal storage diseases. 68th Annual Meeting of the Japan Society of Human Genetics (JSHG), Tokyo, Oct 12. 2023

4-14 病理診断部

【原著論文: 査読付】 (REVIEWED PAPER)

1. Shirai R, Osumi T, Keino D, Nakabayashi K, Uchiyama T, Sekiguchi M, Hiwatari M, Yoshida M, Yoshida K, Yamada Y, Tomizawa D, Takae S, Kiyokawa N, Matsumoto K, Yoshioka T, Hata K, Hori T, Suzuki N, Kato M: Minimal residual disease detection by mutation-specific droplet digital PCR for leukemia/lymphoma. Int J Hematol 2023; 117(6):910-918
2. Komorizono R, Takeuchi I, Yoshioka T, Yano T, Kumagai H, Ishiguro A, Arai K: Intestinal polypoid arteriovenous malformation in a 5-year-old boy with recurrent anemia. Pediatr Int 2023; 65(1):e15564
3. Fujikawa H, Shimizu H, Nambu R, Takeuchi I, Matsui T, Sakamoto K, Gocho Y, Miyamoto

- T, Yasumi T, Yoshioka T, Arai K: Monogenic inflammatory bowel disease with STXBP2 mutations is not resolved by hematopoietic stem cell transplantation but can be alleviated via immunosuppressive drug therapy. *Clin Immunol* 2023; 246:109203
4. Uchida H, Sakamoto S, Komine R, Kodama T, Nakao T, Okada N, Yanagi Y, Shimizu S, Fukuda A, Shioda Y, Kiyotani C, Matsumoto K, Yoneda A, Haga C, Yoshioka T, Miyazaki O, Nosaka S, Kasahara M: Strategy for hepatoblastoma with major vascular involvement: A guide for surgical decision-making. *Surgery* 2023; 173(2):457-463
 5. Sakamoto K, Fujimori K, Miyazaki O, Yoshioka T, Yoneda A, Matsumoto K, Shioda Y: Inclusion of thymic Langerhans cell histiocytosis in the "5 Ts" of the differential diagnosis of anterior mediastinal mass. *Int J Hematol* 2023; 117(3): 311-313
 6. Takeuchi I, Yanagi K, Takada S, Uchiyama T, Igarashi A, Motomura K, Hayashi Y, Nagano N, Matsuoka R, Sugiyama H, Yoshioka T, Saito H, Kawai T, Miyaji Y, Inuzuka Y, Matsubara Y, Ohya Y, Shimizu T, Matsumoto K, Arai K, Nomura I, Kaname T, Morita H: STAT6 gain-of-function variant exacerbates multiple allergic symptoms. *J Allergy Clin Immunol* 2023; 151(5):1402-1409. e6
 7. Nagashima S, Yamamoto M, Inuzuka Y, Irahara M, Miyaji Y, Tadaki H, Ito S, Masuda S, Ito Y, Saito Y, Kobayashi S, Morita H, Yoshioka T, Shimizu H, Arai K, Ohya Y, Saito H, Matsumoto K, Nomura I: Tolerability and safety of a new elimination diet for pediatric eosinophilic gastritis and duodenitis. *Allergol Int* 2023; 72(2):306-315
 8. Sakiyama H, Hamada S, Oshiro T, Hyakuna N, Kuda M, Hishiki T, Aoyama H, Kuroda N, Yorita K, Wada N, Yoshioka T, Koga Y, Nakanishi K: Juxtaglomerular cell tumor with pulmonary metastases: A case report and review of the literature. *Pediatr Blood Cancer* 2023; 70(4):30068
 9. Fujino A, Fuchimoto Y, Mori T, Kano M, Yamada Y, Ohno M, Baba Y, Isogawa N, Arai K, Yoshioka T, Abe M, Kanai N, Takagi R, Maeda M, Umezawa A: Evaluation of safety and efficacy of autologous oral mucosa-derived epithelial cell sheet transplantation for prevention of anastomotic restenosis in congenital esophageal atresia and congenital esophageal stenosis. *Stem Cell Res Ther* 2023; 14(1):86
 10. Yoshida M, Nakabayashi K, Yang W, Sato-Otsubo A, Tsujimoto SI, Ogata-Kawata H, Kawai T, Ishiwata K, Sakamoto M, Okamura K, Yoshida K, Shirai R, Osumi T, Kiyotani C, Shioda Y, Terashima K, Ishimaru S, Yuza Y, Takagi M, Arakawa Y, Imamura T, Hasegawa D, Inoue A, Yoshioka T, Ito S, Tomizawa D, Koh K, Matsumoto K, Kiyokawa N, Ogawa S, Manabe A, Niwa A, Hata K, Yang JJ, Kato M: Prevalence of pathogenic variants in cancer-predisposing genes in second cancer after childhood solid cancers. *Cancer Med* 2023; 12(10):11264-11273
 11. Yamada Y, Mori T, Takahashi N, Fujimura T, Kano M, Kato M, Takahashi M, Shimojima N, Watanabe T, Yoshioka T, Kanamori Y, Kuroda T, Fujino A: Historical Cohort Study of Congenital Isolated Hypoganglioneosis of the Intestine. Determining the Best Surgical Interventions. *Biomolecules* 2023; 23;13(10):1560
 12. Yanagi Y, Sakamoto S, Nakao T, Kodama T, Uchida H, Shimizu S, Fukuda A, Yamada M, Kiyotani

C, Matsumoto K, Yoshioka T, Miyazaki O, Nosaka S, Kasahara M: The role of living-donor liver transplantation in children with an advanced malignant rhabdoid tumor of the liver in the era of transplant oncology. Case report and literature review. *Pediatr Blood Cancer* 2023; 70(11):e30582

13. 松田 大樹, 藤尾 信吾, 比嘉 那優大, 米澤 大, 義岡 孝子, 高城 朋子, 山畑 仁志, 花谷 亮典, 有田 和徳: 亜全摘出後 11 年以上再発なく経過している視床発生のロゼット形成性グリア神経細胞腫瘍 症例報告と文献レビュー(Thalamic rosette-forming glioneuronal tumor stable for more than 11 years after subtotal removal: Case report and review of literature) (英語). *鹿児島大学医学雑誌*(0368-5063) 2023 ; 75 巻 1-3 号 : 12-19

[症例報告]

1. 中野 雅之, 羽賀 千都子, 藤野 明浩, 宮寄 治, 義岡 孝子: 肝門部腫瘍の一例. *日本小児血液・がん学会雑誌* (2187-011X) 2023;60巻 : 99
2. 佐藤 麻朝, 進藤 考洋, 羽賀 千都子, 平井 聖子, 牛場 義宏, 小野 博: 心室細動で発症した好酸球性心筋炎の 1 歳女児例. *日本小児循環器学会雑誌* 2023 ; 39 巻 2 号 : 99-105
3. 古味 優季, 仁科 幸子, 坂田 公毅, 森川 葉月, 檜塚 絵実, 吉田 朋世, 林 思音, 横井 匡, 東 範行, 寺島 慶太, 羽賀 千都子, 義岡 孝子: 発達白内障に網膜芽細胞腫を合併した 1 例. *日本眼科学会雑誌* 2023 ; 127 巻 5 号 : 563-569
4. 小林 完, 藤野 明浩, 古金 遼也, 沓掛 真衣, 森 禎三郎, 狩野 元宏, 高橋 正貴, 米田 光宏, 金森 豊, 義岡 孝子: 乳児期に肝芽腫を発症後, 思春期に乳房線維腺腫を発症した Beckwith-Wiedemann 症候群の 1 例. *日本小児外科学会雑誌*(0288-609X) 2023 ; 59 巻 4 号 : 804-809
5. 高橋 達也, 清水 泰岳, 義岡 孝子, 吉年 俊文, 藤田 貴子, 山本 陽子, 宮田 恵理, 藤川 皓基, 竹内 一郎, 石黒 精, 野村 伊知郎, 新井 勝大: プロトンポンプ阻害薬による長期治療を要した十二指腸潰瘍合併好酸球性胃腸炎の 3 例. *日本小児科学会雑誌*(0001-6543) 2023 ; 127 巻 6 号 : 866-873

[総説]

1. 加藤実穂, 北菌 育美, 義岡 孝子, 米田 光宏: 【希少固形がんの診断と治療】副腎皮質腫瘍. *小児外科*(0385-6313) 2023 ; 55 : 854-857
2. 羽賀 千都子: 小児がんの胎盤転移. *小児外科*(0385-6313) 2023 ; 55 : 847-850

[国内学会発表]

1. 山田 洋平, 森 禎三郎, 高橋 信博, 狩野 元宏, 加藤 源俊, 藤村 匠, 下島 直樹, 渡辺 稔彦, 藤野 明浩, 義岡 孝子, 高橋 正貴, 金森 豊, 黒田 達夫: 後方視的解析による腸管神経節細胞僅少症における最適な外科的介入法. 第 52 回日本小児消化器機能研究会, 東京, 2023. 2. 11
2. 竹内 一郎, 柳 久美子, 高田 修治, 内山 徹, 五十嵐 ありさ, 本村 健一郎, 林 優佳, 長野 直子, 松岡 諒, 杉山 弘樹, 義岡 孝子, 斎藤 博久, 河合 利尚, 大矢 幸弘, 清水 俊明, 松本 健治, 野村 伊知郎, 要 匡, 森田 英明, 新井 勝大: リンパ濾胞過形成を伴う好酸球性消化管疾患の発症に関与する新規 STAT6 機能獲得型変異. 小児 IBD 研究会, 福岡, 2023. 3. 5

3. 田坂 佳資, 梅田 雄嗣, 神鳥 達哉, 三上 貴司, 内原 嘉仁, 緒方 瑛人, 赤澤 嶺, 磯部 孝, 才田 聡, 加藤 格, 平松 英文, 山田 洋介, 垣内 伸之, 田中 祐吉, 大喜多 肇, 義岡 孝子, 瀧本 哲也, 檜山 英三, 小川 誠司, 滝田 順子: C19MCの異常は肝未分化肉腫と肝間葉系過誤腫に共通する分子基盤である(C19MC aberration is common molecular basis in undifferentiated embryonal sarcoma of the liver and mesenchymal hamartoma). 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023.4.14
4. 荒川 芳輝, 山崎 夏維, 前林 勝也, 副島 俊典, 加藤 実穂, 瀧本 哲也, 市村 幸一, 金村 米博, 信澤 純人, 平戸 純子, 義岡 孝子, 山本 哲哉, 坂本 博昭, 原 純一, 西川 亮, 隈部 俊宏: 小児がん治療の最前線 小児脳腫瘍に対する治療の進歩と今後. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023.4.15
5. 北野 貴暉, 荒川 芳輝, 竹内 康英, 丹治 正大, 峰晴陽平, 平子 純子, 義岡 孝子, 市村 幸一, 羽賀 博典, 宮本 享: 小児のNF1患者に合併したメチル化分類に一致しないHigh grade gliomaの一例. 第41回日本脳腫瘍病理学会学術集会, 東京, 2023.5.26
6. 隈部 俊宏, 柴原 一陽, 犬飼 円, 上野 康平, 豊田 茉莉子, 眞野 唯, 市村 幸一, 平戸 純子, 義岡 孝子, 秀 拓一郎: 脳腫瘍中央診断体制の現状と課題 上衣腫診断における困難さ. 第41回日本脳腫瘍病理学会学術集会, 東京, 2023.5.26
7. 宇佐美 憲一, 水野 貴基, 白井 了太, 義岡 孝子, 寺島 慶太, 荻原 英樹, 清谷 知賀子, 加藤 元博: ガンゲノム医療がもたらす小児脳腫瘍の展開 小児脳腫瘍におけるLiquid biopsyの実効性. 第51回日本小児神経外科学会, 栃木, 2023.6.9
8. 秋山みさき, 松原圭子, 寺嶋宙, 阿部裕一, 大野欽司, 緒方謙太郎, 義岡孝子, 佐藤舞, 亀井宏一: 常染色体潜性Alport症候群に先天性筋無力症と小口病を合併した母性片親性アイソダイソミーの1例. 第58回日本小児腎臓病学会学術集会, 大阪, 2023.6.30
9. 清水 誠一, 阪本 靖介, 小峰 竜二, 福田 晃也, 内田 孟, 柳 佑典, 中尾 俊雅, 兒玉 匡, 出口 晴教, 松本 正太郎, 義岡 孝子, 笠原 群生: Myotubular myopathyにおける肝紫斑病に起因する肝出血が疑われ生体肝移植を施行した1例. 第39回日本小児肝臓研究会, 神奈川, 2023.7.16
10. 井上陽平, 大谷理浩, 佐々木達也, 里見介史, 駿河和城, 藤井謙太郎, 石田穰治, 柳井広之, 小林勝弘, 義岡孝子, 平戸純子, 木村由依, 中野嘉子, 市村幸一, 安原隆雄: てんかんセンサーにおける低悪性度てんかん原性神経上皮腫瘍の分子診断と治療成績. 第23回日本分子脳神経外科学会, 宮崎, 2023.8.25
11. 羽賀 千都子, 中野 雅之, 宮坂 実木子, 松本 公一, 義岡 孝子: 特異な増殖形態を示した腎腫瘍の一例. 第38回神奈川県小児肝・消化器疾患研究会, 神奈川, 2023.8.26
12. 羽賀 千都子, 中野 雅之, 信太 昭子, 清水 誠一, 笠原 群生, 義岡 孝子: 早期に進行したpeliosis hepatisの一例. 第38回神奈川県小児肝・消化器疾患研究会, 神奈川, 2023.8.26
13. 植田和宏, 義岡孝子, 他: 診断に苦慮した松果体部胎児性腫瘍の一例. 第2回小児脳腫瘍カンファレンス, WEB, 2023.9.9
14. 清水 誠一, 阪本 靖介, 福田 晃也, 内田 孟, 柳 佑典, 小峰 竜二, 中尾 俊雅, 兒玉 匡, 羽賀 千都子, 中野 憲之, 義岡 孝子, 笠原 群生: 小児生体肝移植における術後DSAの現状とChronic AMRに対する治療戦略. 第59回 日本移植学会総会, 京都, 2023.9.21
15. 田尾 佳代子, 義岡 孝子, 加藤 実穂, 久保 崇, 高阪 真路, 谷田部 恭, 瀧本 哲也, 市村 幸一, 望

- 月 慎史, 七野 浩之, 油谷 浩幸, 小川 千登世, 鈴木 達也, 松本 公一, 市川 仁, 加藤 元博: JCCG-TOP2小児固形腫瘍における包括的がんゲノムプロファイリング検査の実行可能性と臨床的有用性の評価(JCCG-TOP2: Evaluating the Feasibility and Clinical Utility of Comprehensive Genomic Profiling in Pediatric Solid Tumors) (英語). 第82回日本癌学会総会, 神奈川, 2023. 9. 22
16. 森田麻莉, 山田悠司, 清谷知賀子, 塩田曜子, 寺島慶太, 米田光宏, 義岡孝子, 宮寄治, 松本 公一: 強度を減弱した化学療法で治療を完遂した左異所性多嚢胞性異形成腎 (MCDK) を持つ右副腎神経芽腫の乳児例 A case with the right adrenal infantile neuroblastoma with left heterotopic polycystic dysplastic kidney (MCDK) completed treatment with reduced-intensity chemotherapy. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会, 北海道, 2023. 9. 29
 17. 安江 志保, 羽賀 千都子: DICER1 症候群 - 胸膜肺芽腫、鼻腔軟骨中皮性過誤腫を発症した姉弟例 DICER1 syndrome - A case of siblings with pleuropulmonary blastoma and nasal chondromesenchymal hamartoma. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会, 北海道, 2023. 10. 1
 18. 高杉 奈緒, 白井 了太, 大隅 朋生, 坂本 謙一, 工藤 耕, 田中 麻理子, 富澤 大輔, 牛久 哲男, 義岡 孝子, 塩田 曜子, 加藤 元博: ランゲルハンス細胞組織球症の起源となる BRAF 遺伝子の生殖細胞系列モザイク変異 (英語). 第85回日本血液学会学術集会, 東京, 2023. 10. 13
 19. 中野 雅之, 野中 菜奈, 堀内 千明, 羽賀 千都子, 義岡 孝子: 子宮型羊水塞栓症の組織学的診断における Cytokeratin-Alcian Blue 二重染色の有用性. 第64回日本組織細胞化学会総会・学術集会, 東京, 2023. 10. 20
 20. 東 志勇, 伊藤 玲子, 大坂 溪, 堀川 美和子, 中野 雅之, 小椋 雅夫, 島袋 林秀, 義岡 孝子, 窪田 満, 石黒 精: 全身型若年性特発性関節炎に伴うマクロファージ活性化症候群の経過で見られた小児の急性肝不全. 第50回日本小児栄養消化器肝臓学会学術集会, 宮城, 2023. 10. 21
 21. 大谷理浩, 藤井謙太郎, 石田穰治, 佐々木達也, 水田 亮, 井上陽平, 鷺尾佳奈, 遠西大輔, 柳井広之, 松下博和, 里見介史, 金村米博, 義岡孝子, 平戸純子, 市村幸一, 伊達 勲: マルチモダリティを用いた WHO 新分類への対応と現状. 第82回日本脳神経外科学会総会, 神奈川, 2023. 10. 25
 22. 良本翔子, 高見浩数, 木村由依, 日比谷優子, 中野嘉子, 松下裕子, 高柳俊作, 田中將太, 齊藤延人, 平戸純子, 義岡孝子, 加藤実穂, 瀧本哲也, 市村幸一: 日本小児がん研究グループ (JCCG) における中枢神経系胚細胞腫 178 例の臨床・病理解析 Analysis of clinic-pathological findings in 178 cases of central nervous system germ cell tumors in the JCCG cohort. 第82回日本脳神経外科学会総会, 神奈川, 2023. 10. 26
 23. 井上陽平, 大谷理浩, 佐々木達也, 里見介史, 駿河和城, 藤井謙太郎, 石田穰治, 柳井広之, 小林勝弘, 義岡孝子, 平戸純子, 木村由依, 中野嘉子, 市村幸一, 安原隆雄: 低悪性度てんかん原性神経上皮腫瘍の分子診断と治療成績 Molecular diagnosis and surgical outcome of low-grade, developmental, epilepsy-associated brain tumors (LEAT). 第82回日本脳神経外科学会総会, 神奈川, 2023. 10. 25~27 (ポスター)
 24. 中澤 温子, 義岡 孝子, 坂本 謙一, 工藤 耕, 森本 哲, 塩田 曜子: 若年性黄色肉芽腫における分子標的同定のための免疫組織化学染色の有用性 (Usefulness of immunohistochemistry for identification of targetable kinase gene mutation in juvenile xanthogranuloma) (英語).

第69回日本病理学会秋期特別総会, 福岡, 2023. 11. 9

25. 秋山みさき, 岡田聡司, 坂野嘉紀, 金田朋也, 西健太朗, 佐藤舞, 小椋雅夫, 義岡孝子, 緒方謙太郎, 亀井宏一: COVID-19を契機に急性T細胞関連拒絶反応がみられたJeune症候群・腎移植後の男児例. 第44回日本小児腎不全学会学術集会, 佐賀, 2023. 11. 30
26. 良本翔子, 高見浩数, 木村由依, 日比谷優子, 中野嘉子, 松下裕子, 高柳俊作, 田中將太, 齊藤延人, 平戸純子, 義岡孝子, 加藤実穂, 瀧本哲也, 中里洋一, 鈴木智成, 武笠晃丈, 杉山一彦, 金森政之, 中田光俊, 前原健寿, 西川亮, 市村幸一: 日本小児がん研究グループ及び中枢神経胚細胞腫コンソーシアムにおける中枢神経系胚細胞腫388症例の臨床病理学的解析. Clinicopathological analysis of central nervous system germ cell tumors -388 cases in the JCOG cohort and the iGCT consortium cohort. 第41回日本脳腫瘍学会学術集会, 新潟 2023. 12. 4
27. 井上陽平, 大谷理浩, 佐々木達也, 里見介史, 駿河和城, 外間まどか, 梅田剛志, 水田亮, 家護谷泰仁, 井本良二, 剣持直也, 平野秀一郎, 藤井謙太郎, 石田穰治, 柳井広之, 小林勝弘, 義岡孝子, 平戸純子, 木村由依, 中野嘉子, 市村幸一, 安原隆雄, 伊達勲: 低悪性度てんかん原性神経上皮腫瘍の遺伝子解析と手術成績の検討. 第41回日本脳腫瘍学会学術集会, 新潟, 2023. 12. 5

【講演】

1. 義岡孝子: 小児腫瘍の病理診断とがん遺伝子パネル検査. 第70回神奈川小児腫瘍研究会, 神奈川 (オンライン), 2023. 3. 4

4-15 妊娠と薬情報センター

【原著論文:査読付】 (Reviewed Paper)

1. Saito J, Ishii M, Sandaiji N, Yamaguchi K, Suzuki T, Yakuwa N, Yamatani A, Tachibana Y, Sago H, Murashima A: Lemborexant levels in maternal serum, cord blood, and breast milk during pregnancy and lactation: A case report. PCN Rep. 2023;2(1):e62
2. Ishige T, Shimizu T, Watanabe K, Arai K, Kamei K, Kudo T, Kunisaki R, Tokuhara D, Naganuma M, Mizuochi T, Murashima A, Inoki Y, Iwata N, Iwama I, Koinuma S, Shimizu H, Jimbo K, Takaki Y, Takahashi S, Cho Y, Nambu R, Nishida D, Hagiwara SI, Hikita N, Fujikawa H, Hosoi K, Hosomi S, Mikami Y, Miyoshi J, Yagi R, Yokoyama Y, Hisamatsu T: Expert consensus on vaccination in patients with inflammatory bowel disease in Japan. J Gastroenterol. 2023;58(2):135-157

【総説】

1. Fujioka I, Murashima A: Pharmacokinetic and Safety Evaluation During Pregnancy and Lactation. Brain Nerve. 2023;75(9):993-998
2. 後藤美賀子: 各種診療ガイドラインにみる児希望女性の合併症・併存疾患の取り扱い—プレコンセプションから妊娠・出産まで— 膠原病. 産婦人科の実践 2023 ; 72 : 387-391

3. 肥沼 幸: 各種診療ガイドラインにみる挙児希望女性の合併症・併存疾患の取り扱い・プレコンセプションから妊娠・出産まで- 12. 臓器移植患者. 産婦人科の実際 2023 ; 4 : 409-415
4. 肥沼 幸: エキスパートが教える小児の薬物治療 I 総論 妊娠・授乳中の薬物療法における基本的知識. 小児内科 2023 ; 55 増刊号 : 36-40
5. 藤岡 泉, 村島温子: 【周産期メンタルヘルスケアの最先端】妊娠と薬情報センターの活用. 精神科治療学 2023 ; 38(12) : 1407-1412
6. 藤岡 泉, 村島温子: 【アレルギー疾患診療 up to date】アレルギー疾患と妊娠 薬物療法のあり方. 臨床と研究 2023 ; 100(3) : 334-338
7. 藤岡 泉, 村島温子: 【妊娠と神経疾患】妊娠・授乳中の薬剤動態と安全性評価. BRAIN and NERVE: 神経研究の進歩 2023 ; 75(9) : 0993-0998
8. 藤岡 泉, 村島温子: 【高血圧の病態と管理の最前線】各病態における降圧目標と治療 妊娠と血圧管理. 腎と透析 2023 ; 95(2) : 235-239
9. 山崎香織, 八鍬奈穂, 中島 研: 一步踏み込む妊婦授乳婦の服薬指導 タクロリムス軟膏使用中に妊娠が判明した女性. 日経ドラッグインフォメーション 2023 ; 1 ; PE022-023
10. 三木陽介, 八鍬奈穂, 中島 研: 一步踏み込む妊婦授乳婦の服薬指導 口内炎にトリアムシノロン貼付薬が処方された妊婦. 日経ドラッグインフォメーション 2023 ; 2 ; PE028-029
11. 畠山史朗, 八鍬奈穂, 中島 研: 一步踏み込む妊婦授乳婦の服薬指導 メニエール病でイソパイド服用中の挙児希望女性. 日経ドラッグインフォメーション 2023 ; 3 ; PE022-023
12. 小方清和, 八鍬奈穂: 日本小児科学会と産婦人科医師、薬剤師との連携による妊娠中の医薬品使用の情報提供. 日本歯科医師会雑誌 2023 ; 3 : 16-17
13. 八鍬奈穂: 妊娠と薬情報センターの取り組み. 一般社団法人 くすりの適正使用協議会 RAD-AR NEWS 2023. 12 No. 131 : 13

[著書]

1. 後藤美賀子: 妊娠とくすり. 福井次矢, 高木 誠, 小室一成 (総編集), 今日の治療指針 2023 年版, 医学書院 2023 ; 1378-1379
2. 後藤美賀子: 母性内科領域の基礎知識. 伊藤真也, 村島温子, 鈴木利人 (編集), 向精神薬と妊娠・授乳 改訂3版, 南山堂, 2023 ; 3-7
3. 三浦寄子, 八鍬奈穂: 睡眠薬. 伊藤真也, 村島温子, 鈴木利人 (編集), 向精神薬と妊娠・授乳 改訂3版, 南山堂, 2023 ; 116-120

[ガイドライン、研究報告書、その他]

1. 村島温子, 林 昌洋, 濱田洋実, 中山健夫, 佐瀬一洋, 伊藤直樹, 高橋邦彦, 登美斉俊, 後藤美賀子: 厚生労働行政推進調査事業費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業) 「妊婦・授乳婦における医薬品の安全性に関する情報提供の在り方の研究」, 令和 4 年度事業実績報告書, 2023 年 5 月
2. 村島温子, 林 昌洋, 濱田洋実, 中山健夫, 佐瀬一洋, 伊藤直樹, 高橋邦彦, 登美斉俊, 後藤美賀子: 厚生労働行政推進調査事業費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業) 「妊婦・授乳婦における医薬品の安全性に関する情報提供の在り方の研究」, 令和 4 年度総括研究報告書, 2023 年 5 月

3. 村島温子, 林 昌洋, 濱田洋実, 中山健夫, 佐瀬一洋, 伊藤直樹, 高橋邦彦, 登美斉俊, 後藤美賀子: 厚生労働行政推進調査事業費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業) 「妊婦・授乳婦における医薬品の安全性に関する情報提供の在り方の研究」, 令和2年度～令和4年度総合研究報告書, 2023年5月
4. 高橋邦彦, 後藤美賀子, 中山健夫, 安齋達彦, 齋藤良行: 妊婦・授乳婦における医薬品の安全性検討のための相談症例データベース 活用の検討. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業) 「妊婦・授乳婦における医薬品の安全性に関する情報提供の在り方の研究」, 令和4年度分担研究報告書, 2023; 26-28
5. 後藤美賀子, 藤岡 泉, 八鍬奈穂: 一般医療者ならびに一般女性のニーズにあった提供方法の開発. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業) 「妊婦・授乳婦における医薬品の安全性に関する情報提供の在り方の研究」, 令和4年度分担研究報告書, 2023; 31-32
6. 後藤美賀子, 藤岡 泉: 妊婦・授乳婦における医薬品の安全性に関する研究方法の検討. 厚生労働行政推進調査事業費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業) 「妊婦・授乳婦における医薬品の安全性に関する情報提供の在り方の研究」, 令和4年度分担研究報告書, 2023; 33-36

[学会発表]

1. Izumi Fujioka, Hiroshi Ohtsu, Naohiro Yonemoto, Kazuhiro Sase, Atsuko Murashima: Maternal and neonatal outcomes of women with Rheumatoid Arthritis in Japan: An Analysis of Real-World Data from Nationwide Claims-Based Database. the 22nd Congress of the Federation of Asian and Oceania Perinatal Societies (FAOPS), Tokyo, 2023.10.9
2. 肥沼 幸: 子宮内での生物学的製剤曝露児へのワクチン接種について. 第1回妊娠と薬情報研究会 Exper 教育講演会, 東京, 2023.2.5
3. 高井 千夏, 金子佳代子, 河野千慧, 阿部早和子, 宮川英子, 後藤美賀子, 村島温子: 【ワークショップ】SLE 合併妊娠 全身性エリテマトーデス女性患者のビスホスホネート製剤使用と妊娠中骨密度への影響に関する後ろ向き調査. 第67回日本リウマチ学会総会・学術集会, 福岡, 2023.4.26
4. 肥沼 幸, 福田晃也, 村山 圭, 阪本靖介, 笠原群生: 遺伝的問題を有し、生体肝移植後に妊娠・出産を経験した2症例での妊娠管理についての検討. 第59回日本肝臓学会総会・学術集会, 奈良, 2023.6.16
5. 藤岡 泉, 大津 洋, 米本直裕, 佐瀬一洋, 村島温子: 分娩前後の降圧薬処方実態と周産期予後 Cardio-Obstetrics におけるリアル・ワールド・データ研究. 第59回日本周産期・新生児医学会学術集会, 愛知, 2023.7.10
6. 鈴木 朋, 肥沼 幸, 藤岡 泉, 八鍬奈穂, 後藤美賀子, 渡邊央美, 梅原永能, 和田誠司, 村島 温子, 左合治彦: 妊娠初期におけるクラリスロマイシン服用の胎児への影響についての評価. 第59回日本周産期・新生児医学会学術集会, 愛知, 2023.7.10
7. 藤岡 泉: 【シンポジウム7】「医薬品の安全性-催奇形性リスクの最小化-」ミコフェノール酸モフェチル (MMF) の疫学調査報告. 第63回日本先天異常学会学術集会, 茨城, 2023.7.30
8. 八鍬奈穂: シンポジウム16 妊婦・授乳婦の薬物治療を支える薬剤師の取り組み 妊娠と薬情報センターでの薬剤師の取り組み. 日本病院薬剤師会関東ブロック第53回学術大会, 新潟,

2023. 8. 27

9. 八鍬奈穂： 妊娠中の医薬品の適正な使用における臨床情報充実に向けた研究。 第9回次世代を担う若手のためのレギュラトリーサイエンスフォーラム, 東京, 2023. 9. 16
10. 藤岡 泉： 【シンポジウム2】「新生児薬物離脱症候群」妊娠中の抗うつ薬曝露と新生児合併症リアルワールドデータの解析。 第50回日本小児臨床薬理学会学術集会, 大阪, 2023. 9. 30
11. 肥沼 幸, 藤岡 泉, 八鍬奈穂, 三浦奇子, 後藤美賀子, 高井千夏, 村島温子： 妊娠と薬情報センター相談例からみた緑内障点眼薬の授乳指導に関する課題。 第8回日本母性内科学会総会・学術集会, 東京, 2023. 10. 8
12. 松田真一, 八鍬奈穂, 後藤美賀子, 赤沢 学, 高橋邦彦, 安齋達彦, 太田美穂子, 岡 宏明, 二谷直樹, 内海沙織, 俵木登美子, 村島温子： 妊婦の医薬品曝露に関するデータ収集・評価の重要性と、産官学によるデータ活用推進に関する研究。 第28回日本薬剤師学会学術総会, 京都, 2023. 11. 17

【講演】

1. 三浦奇子： 妊婦・授乳婦におけるCOVID-19治療薬の医薬品情報と課題。 令和4年度第3回JASDIフォーラム, Web開催, 2023. 1. 14
2. 八鍬奈穂： 『妊娠・授乳と薬』の悩みに対して支援のできる薬剤師になるために。 新潟県薬剤師会「すべての薬剤師に知ってほしい『妊娠・授乳と薬』研修会」, Web開催, 2023. 1. 15
3. 八鍬奈穂： 『妊娠・授乳と薬』相談対応 実践研修会。 新潟県薬剤師会「すべての薬剤師に知ってほしい『妊娠・授乳と薬』研修会」, Web開催, 2023. 2. 19
4. 三浦奇子： 妊婦・授乳婦に対する薬カウンセリング 一薬効別の相談事例も含めて。 「妊娠：授乳と薬」相談対応 実践研修会, Web開催, 2023. 2. 19
5. 八鍬奈穂： 妊娠と薬。 明治薬科大学 衛生化学II 特別講義, オンデマンド開催, 2023. 6. 5 収録
6. 八鍬奈穂： 妊娠と薬、授乳と薬に関する基礎知識。 公益社団法人石川県薬剤師会 薬剤師PS講座イノベーション研修会 妊産婦等への適切な服薬管理・健康支援事業研修会, Web開催, 2023. 6. 25
7. 三浦奇子： 妊婦・授乳婦に対する薬カウンセリング。 令和5年度第3回薬剤師PS講座イノベーション(6月)研修会, Web開催, 2023. 6. 25
8. 後藤美賀子： 妊娠とくすり。 第8回母性内科プロバイダーコース basic, Web開催, 2023. 7. 22
9. 肥沼 幸： 授乳中の薬に関する考え方。 第14回保険薬局薬剤師向け「妊娠と薬情報センター」研修会, Web開催, 2023. 7. 2
10. 藤岡 泉： 妊娠と薬の分野に必要な産婦人科の基本的知識。 第14回保険薬局薬剤師向け「妊娠と薬情報センター」研修会, Web開催, 2023. 7. 2
11. 三浦奇子： 妊娠中の薬に関する考え方とカウンセリング方法。 第14回保険薬局薬剤師向け「妊娠と薬情報センター」研修会, Web開催, 2023. 7. 2
12. 肥沼 幸： 授乳中の薬に関する考え方。 第15回保険薬局薬剤師向け「妊娠と薬情報センター」研修会, Web開催, 2023. 12. 17
- 藤岡 泉： 妊娠と薬の分野に必要な産婦人科の基本的知識。 第15回保険薬局薬剤師向け「妊娠と薬情報センター」研修会, Web開催, 2023. 12. 17
13. 三浦奇子： 妊娠中の薬に関する考え方とカウンセリング方法。 第15回保険薬局薬剤師向け「妊娠

4-16 遺伝子細胞治療推進センター

[原著論文]

1. Uchiyama T, Kawai T, Nakabayashi K, Nakazawa Y, Goto F, Okamura K, Nishimura T, Kato K, Watanabe N, Miura A, Yasuda T, Ando Y, Minegishi T, Edasawa K, Shimura M, Akiba Y, Sato-Otsubo A, Mizukami T, Kato M, Akashi K, Nunoi H, Onodera M. Myelodysplasia after clonal hematopoiesis with APOBEC3-mediated CYBB inactivation in retroviral gene therapy for X-CGD. *Mol Ther*. 31: 3424-3440, 2023.
2. Yamazaki N, Ohira M, Takada S, Ohtake A, Onodera M, Nakanishi M, Okuyama T, Mashima R. Enhanced osteoblastic differentiation of parietal bone in a novel murine model of mucopolysaccharidosis type II. *Mol Genet Metab Rep*. 2023 Nov 11;37:101021.
3. Yasuda T, Uchiyama T, Watanabe N, Ito N, Nakabayashi K, Mochizuki H, Onodera M. Peripheral immune system modulates Purkinje cell degeneration in Niemann-Pick disease type C1. *Life Sci Alliance*. 2023 Jun 27;6(9):e202201881
4. Onodera M, Uchiyama T, Ariga T, Yamada M, Miyamura T, Arizono H, Morio T. Safety and efficacy of elapegademase in patients with adenosine deaminase deficiency: A multicenter, open-label, single-arm, phase 3, and postmarketing clinical study. *Immun Inflamm Dis*. 2023 Jul;11(7):e917.
5. Irikura R, Nishizawa H, Nakajima K, Yamanaka M, Chen G, Tanaka K, Onodera M, Matsumoto M, Igarashi K. Ferroptosis model system by the re-expression of BACH1. *J Biochem*. 2023 Apr 24:mvad036.
6. Mashima R, Ohira M, Okuyama T, Onodera M, Takada S. A novel mucopolysaccharidosis type II mouse model with an iduronate-2-sulfatase-P88L mutation. *Sci Rep*. 13:7865, 2023.
7. Ishikawa T, Uejima Y, Okai M, Shiga K, Shoji K, Miyairi I, Kato M, Morooka S, Kubota M, Tagaya T, Tsuji S, Aoki S, Ide K, Niimi H, Uchiyama T, Onodera M, Kawai T. Melting temperature mapping method in children: Rapid identification of pathogenic microbes. *J Infect Chemother*. 2023 Nov 28:S1341-321X(23)00301-X.

[総説]

1. 小野寺雅史. 慢性肉芽腫症 (CGD) . 137-141 原発性免疫不全症候群 診療の手引き (改訂第2版) 2023 年
2. 小野寺雅史. 9) プリンスクレオシド・ホスホリラーゼ欠損症. 265-268 別冊日本臨床 血液症候群 (第3版) 2023 年
3. 小野寺雅史. 11) アデノシン・デアミナーゼ欠損症. 2279-283 別冊日本臨床 血液症候群 (第3版) 2023 年
4. 小野寺雅史. 第IV章 遺伝子治療とは. 210-215 小児科学 日本医師会雑誌 152 巻 特別号 (1) 2023 年
5. 小野寺雅史. 患者細胞採取における医療機関での実施体制 - 原材料採取・調製時の品質担保について -. 医薬品医療機器レギュラトリーサイエンス 54:100-105. 2023
6. 小野寺雅史. 第52章 遺伝子治療. 1194-1207 小児科学 第11版 加藤元博編、2023 年
7. 小野寺雅史. 我が国の遺伝子治療の現状と課題、そしてその対策について. バイオサイエンスとインダストリー 81, 52-58, 2023

[学会発表]

<国際学会>

1. Masafumi ONODERA. Safety and efficacy evaluation for gene therapy products. 2023 Korea-Japan Joint Symposium on Gene Therapy in Inborn Errors of Immunity. Soul. 2023.2.25 (口頭)
2. Masafumi ONODERA. Current status of gene therapy in Japan. The 6th international forum of lysosomal diseases: workshop 6: gene therapy for LSD. Tokyo. 2023.4.1 (口頭)
3. Masafumi ONODERA. Current Status and Future Prospects of Gene Therapy for Inherited Diseases. Human Genetics Asia 20023. Tokyo. 2023.10.12 (口頭)

<国内学会>

1. 小野寺 雅史. 遺伝子治療用製品の安全性・有効性に対する特異的評価系とは. 再生医療産業化フォーラム2023 in 日本橋. 東京. 2023.1.25.
2. 小野寺 雅史. アデノシン・デアミナーゼ欠損症の最新の診断と治療法. 第6回日本免疫不全・自己炎症学会総会 学術集会 モーニングセミナー. 東京. 2023.2.12
3. 小野寺 雅史. In vivo 遺伝子治療ウイルスベクターから非ウイルスベクターへ. 第22回 日本再生医療学会総会. 京都. 2023.3.23
4. 小野寺 雅史. 血液・免疫・代謝疾患に対する ex vivo 遺伝子治療. 第31回 日本医学界総会2023 東京. 東京. 2023.4.23
5. 小野寺 雅史. どうする日本の遺伝子治療. Link-J&成育共催セミナー vol.2 成育(小児・周産期)医療分野のビジネスマッチング. 東京. 2023.7.14
6. 小野寺 雅史. 遺伝子細胞治療の定義と歴史. JSGCT 教育プログラム. 大阪. 2023.9.10
7. 小野寺 雅史. ゲノム組み込み型ウイルスベクター. JSGCT 教育プログラム. 大阪. 2023.9.10
8. 小野寺 雅史. 国内の遺伝子治療を俯瞰して思うこと. 第29回日本遺伝子細胞治療学会学術集会 教育講演2. 大阪. 2023.9.12
9. 小野寺 雅史, 内山徹. 遺伝子治療用ベクター製造プロセスのプラットフォーム化プロジェクト 日本版PaVe-GT. BioJapan2023 スポンサーセミナー. 東京. 2023.10.13
10. 三浦 茜, 安田 徹, 石川 百合子, 山田 全毅, 枝澤 佳織, 中林 一彦, 志村 真里香, 安藤 由希子, 今留 謙一, 小野寺 雅史, 内山 徹. X連鎖高IgM症候群のCD40L 遺伝子変異に対するゲノム編集技術を用いたT細胞を標的とする遺伝子治療法の開発. 第31回 日本医学会総会 6NC リトリート ポスターセッション 東京 2023.4.21~23. (ポスター発表)

4-17 感染制御部

研究業績に関しては、小児内科系専門診療部 感染症科の研究業績を参照

4-18 栄養管理部

なし

4-19 薬剤部

[原著論文]

1. Saito J, Shoji K, Miyairi I, Yamatani A: Drug Formulation for Pediatric Oral Antimicrobial Agents in Japan: Current Status, Prospects, and Challenges. *Pediatr Infect Dis J*. 2023;42:e298-e303.
2. Tang BH, Zhang JY, Allegaert K, Hao GX, Yao BF, Leroux S, Thomson AH, Yu Z, Gao F, Zheng Y, Zhou Y, Capparelli EV, Biran V, Simon N, Meibohm B, Lo YL, Marques R, Peris JE, Lutsar I, Saito J, Jacqz-Aigrain E, van den Anker J, Wu YE, Zhao W: Use of Machine Learning for Dosage Individualization of Vancomycin in Neonates. *Clin Pharmacokinet*. 2023;62:1105-1116.
3. Saito J, Suzuki E, Nakamura Y, Otsuji T, Yamamoto H, Yamamoto H, Kai Y, Totsu M, Hashimoto S, Nakamura H, Akabane M, Yamatani A: Study on the Preparation Method of Quality-Assured In-Hospital Drug Formulation for Children-A Multi-Institutional Collaborative Study. *Children (Basel)*. 2023;10:1190.
4. Saito J, Ishii M, Sandaiji N, Yamaguchi K, Suzuki T, Yakuwa N, Yamatani A, Tachibana Y, Sago H, Murashima A: Lemborexant levels in maternal serum, cord blood, and breast milk during pregnancy and lactation: A case report. *PCN Rep*. 2023;2:e62.
5. 中村秀文, 齊藤順平, 伊藤真也, 山本康次郎, 松倉誠: 症例報告「ホスフェニトインにより意識障害をきたした CYP2C19 遺伝子多型を有する女児」の内容に関する意見. *日本小児科学会雑誌* 第 127 巻第 6 号, 2023. 6. 1
6. 歌野智之, 山谷明正, 竹林晃, 加藤元博, 辻本信一, 田之島玲大: 日本人小児がん患者に対する制吐目的のオランザピンの有効性および安全性. *臨床薬理の進歩*, 2023. 6
7. 堀内萌衣, 丹沢彩乃, 岩橋香奈, 山谷明正: 小児の胸水に対するオクトレオチドの有効性と安全性の後方視的検討. *日本小児臨床薬理学会雑誌*第 36 巻第 1 号, 2023. 8

[総説]

1. 齊藤順平: ジャーナルクラブの広場 小児「精神疾患を有する小児および青年期における薬物療法への反応性の予測因子—4 つの臨床試験データの複合解析—」. *月刊薬事, じほう*, 2023. 2. 1;65(2);391-392
2. 齊藤順平: ジャーナルクラブの広場 小児「小児クローン病において, 導入後のインフリキシマブ濃度の上昇は良好な臨床転帰と関連する - REACH 試験のポストホック分析」. *月刊薬事, じほう*, 2023. 4. 1;65(5);1029-1030
3. 齊藤順平: ジャーナルクラブの広場 小児「無作為化臨床試験 Euro-EWING99-R1 で治療されたユーイング肉腫生存者における, シクロホスファミド (VAC) とイホスファミド (VAI) によるアルキル化ベースの維持レジメンの晩期毒性の比較」. *月刊薬事, じほう*, 2023. 6. 1;65(8); 1679-168
4. 齊藤順平: Clip board 小児領域「直接経口抗凝固薬の小児への使用」. *月刊薬事, じほう*, 2023. 7. 1; 65(9);1828-1829
5. 齊藤順平: ジャーナルクラブの広場 小児「小児てんかんの手術または薬物治療後の健康関連 QOL の媒介因子に関する縦断的コホート研究」. *月刊薬事, じほう*, 2023. 10. 1;65(13);2724-2725
6. 齊藤順平: ジャーナルクラブの広場 小児「小児患者における大豆油由来脂肪乳剤から混合脂肪乳剤へ

の変更によるアウトカム評価」. 月刊薬事, じほう, 2023. 12. 1; 65(16);3385-3386

[著書]

1. 石井真理子, 山谷明正: 薬学的管理に活かす 臨床薬理 UPDATE2023 07 アトピー性皮膚炎治療薬 (ジファミラスト). 調剤と情報, じほう, 2023. 1. 1
2. 詫間梨恵, 望月真維, 小村誠: 小児薬用量. 今日の臨床サポート, エルゼビア, 2023. 2. 1
3. 丹沢彩乃: ケースでわかる処方箋のチェックポイント外来:薬局感染症学 (小児). 月刊薬事, じほう, 2023. 3. 1
4. 三浦寄子, 八鍬奈穂: 睡眠薬 向精神薬と妊娠・授乳改訂3版, 南山堂, 2023. 4. 10;116-120
5. 栗原陽介: 小児・周産期領域での薬剤師レジデント教育. ファルマシア, 日本薬学会, 2023. 5, Vol. 59.No5;381-383
6. 齊藤順平: 邦訳「Poisoning」. Nelson Textbook of Pediatrics, 21st edition (ネルソン小児科学原著第 21 版日本語版), エルゼビア, 2023. 5. 30
7. 三浦寄子, 八鍬奈穂: 妊婦・授乳婦処方のものさし. 向精神薬と妊娠・授乳改訂 3 版, 南山堂, 2023. 10. 5;116-120
8. 栗山猛: エキスパートが教える小児の薬物治療 総論—医薬品開発のための活動—. 小児内科, 東京医学社, 2023. 11

[学会発表]

1. Yamamoto-Hanada K, Kobayashi T, Mikami M, Williams H, Saito-Abe M, Sato M, Miyaji Y, Ishikawa F, Irahara M, Tsuchiya K, Tamagawa-Mineoka R, Takaoka Y, Takemura Y, Sato S, Wakiguchi, H, Hoshi M, Natsume O, Yamaide F, Seike M, Kabashima S, Yoshida K, Inuzuka Y, Nishimura K, Toyokuni K, Ogita H, Kiguchi T, Saito J, Morimoto M, Masuda K, Katoh N, Hosoi H, Kameda M, Shigekawa A, Yamasaki K, Nagai M, Ebisawa M, Asaumi T, Itonaga T, Hasegawa S, Yasudo H, Nagao M, Fujisawa T, Yasuoka R, Fujiyama T, Shimojo N, Nakano T, Mori Y, Kondo Y, Kawaguchi T, Futamura M, Nagai A, Sugiura K, Kaburagi S, Morita K, Kitazawa H, Kido H, Nakayama SF, Inoue E, Saito H, Ohya Y: Early enhanced treatment for infant atopic dermatitis prevents food allergy: a multicenter, parallel-group, open-label, assessor-blind, randomized controlled trial (PACI Study). The European Academy of Allergy and Clinical Immunology (EAACI) Hybrid Congress, Hamberg, 2023. 6. 10.
2. Saito J, Yamatani A, Nakamura H, Akabane M: Study on the quantitative evaluation of potentially harmful pharmaceutical excipients of injectable drugs in children under two years of age - A single-centre, retrospective, observational study in Japan. 15th Conference of the European Paediatric Formulation Initiative (EuPFI), Glasgow, 2023. 9. 20.
3. Yokoyama Y, Murakami M, Saito J, Shimizu S, Uchida H, Fukuda A, Sakamoto S, Jibiki A, Kawazoe H, Kasahara M, Yamatani A, Suzuki S, Nakamura T. 21st International Congress of Therapeutic Drug Monitoring & Clinical Toxicology, Oslo, 2023. 9. 23.
4. Shoji K, Hikino K, Saito J, Matsui T, Utano T, Takebayashi A, Tomizawa D, Kato M, Matsumoto K, Ishikawa T, Kawai T, Nakamura H, Miyairi I, Terao C, Mushiroda T: Effect of CYP2C19 on

- Voriconazole Pharmacokinetics in Children with Malignancy or Inborn Errors in Immunity, Open Forum Infectious Diseases, Boston, 2023. 10. 11.
6. 成瀬彩加, 池内由里, 相場実佑, 占野二千華, 高見謙, 小幡誉子由里, 福田哲也, 山田真由美, 山谷明正: オランザピンゲルからの薬物皮膚透過性の評価. 日本薬学会第143年会, 札幌, 2023. 3. 25
 7. 青柳薫, 齊藤順平, 三浦寄子, 川崎裕世, 大穂東子, 望月真維, 丹沢彩乃, 石井真理子, 山谷明正: 分娩前中止薬剤と健康食品の把握を目的とした妊婦への質問紙票の導入及び情報共有の取り組み. 日本薬学会第143年会, 札幌, 2023. 3. 26
 8. 辻村真由, 笠原沙耶香, 丹沢彩乃, 春岡美姫, 村山彩, 堀内萌衣, 栗原陽介, 山本陽子, 藤紘彰, 竹内一朗, 清水泰岳, 新井勝大, 山谷明正: 小児潰瘍性大腸炎に対するベドリズマブの有用性の調査. 日本薬学会第143年会, 札幌, 2023. 3. 27
 9. 三浦寄子, 八鉦奈穂, 村島温子, 山谷明正: 妊娠と薬情報センターにおける新医薬品の相談症例. 第25回日本医薬品情報学会総会・学術大会, 京都, 2023. 6. 11
 10. 坂口大俊, 牛腸義宏, 山田悠司, 塩田曜子, 清谷知賀子, 寺島慶太, 井口晶裕, 大隅朋生, 加藤元博, 富澤大輔, 松本公一, 松元加奈, 歌野智之: 小児造血幹細胞移植における1日1回法を用いた静注ブスルファンの薬物動態. 第65回小児血液・がん学会学術集会, 札幌, 2023. 9. 29
 11. 岩瀬里佳, 詫間梨恵, 中村知夫, 丹沢彩乃, 山尾晶子, 青柳薫, 村山彩, 堀内萌衣, 栗原陽介, 赤羽三貴: 長期人工呼吸器管理中の小児患者における尿路結石に関する実態調査. 第50回小児臨床薬理学会学術集会, 大阪, 2023. 10. 1
 12. 加藤美和, 歌野智之, 高橋勇人, 柳下祥子, 春岡美姫, 藤本彩貴, 千葉杏子, 齊藤順平, 丹沢彩乃, 赤羽三貴, 松井俊大, 牛腸義宏, 山田悠司, 塩田曜子, 清谷知賀子, 井口晶裕, 富澤大輔, 寺島慶太, 坂口大俊, 松本公一: 小児造血幹細胞移植後の帯状疱疹予防におけるアシクロビルおよびバラシクロビルの投与方法に関する検討. 第50回小児臨床薬理学会学術集会, 大阪, 2023. 10. 1
 13. 先崎希恵, 笠原沙耶香, 山口みほ, 大穂祐介, 澤田京子, 山田真由美, 風間彩, 山口紗季, 丹沢彩乃, 栗原陽介, 赤羽三貴, 竹内一朗, 清水泰岳, 新井勝大: 消化器症状を有する小児患者におけるコルヒチン使用実態の検討. 第50回小児臨床薬理学会学術集会, 大阪, 2023. 10. 1
 14. 長井絵里奈, 小森智也, 山本紗代, 小池博文, 佐橋幸子, 山西純, 栗田大輔, 林弘明, 池田順治, 辻本信一, 竹内正宣, 田野島玲大, 柴徳生, 伊藤秀一, 畑千秋, 歌野智之: 多職種連携により携帯型精密輸液ポンプを用いてブリナツモマブの外来投与が可能となった3症例. 第50回小児臨床薬理学会学術集会, 大阪, 2023. 10. 1
 15. 藤森健太郎, 坂口大俊, 牛腸義宏, 山田悠司, 塩田曜子, 清谷知賀子, 寺島慶太, 井口晶裕, 出口隆生, 富澤大輔, 松本公一, 内山徹, 歌野智之: 小児B細胞性急性リンパ性白血病に対するブリナツモマブの後方視的検討. 第85回日本血液学会学術集会, 2023. 10. 15
 16. 米村雅人, 馬場楓, 網野一真, 日置三紀, 長谷川まゆみ, 佐々木実緒, 小室雅人, 歌野智之: がん治療医が知っておくべき小児・AYA世代がん患者に対するがん・生殖医療の現状-妊孕性温存診療ガイドライン改訂版の概説-新たな性腺毒性のリスク分類 妊孕性温存に関する診療ガイドラインにおける試み. 第61回日本癌治療学会学術集会, 横浜, 2023. 10. 20
 17. 山田真由美, 福田哲也, 詫間梨恵, 山尾晶子, 伊藤栞, 村山彩, 庄司健介, 宇佐美憲一, 荻原英: メロペネム、バンコマイシン静脈注射投与中に黒毛舌と歯の変色が生じた小児の一例. 第33回日本医療薬学会年会, 秋田, 2023. 11. 8

18. 曳野圭子, 福永航也, 蒔田泰誠, 寺尾知可史, 庄司健介, 宮入烈, 齊藤順平, 歌野智之, 松井俊大, 竹林晃, 富澤大輔, 加藤元博, 松本公一, 石川尊土, 河合利尚, 中村秀文: 血漿中ポリコナゾール濃度と副作用の個人差に關与する因子の解析. 第46回日本小兒遺傳学会學術集會, 那覇, 2023. 12. 8

【講演】

1. 三浦寄子: 妊婦・授乳婦におけるCOVID-19治療薬の医薬品情報と課題. 令和4年度第3回JASDIフォーラム, Web, 2023. 1. 14
2. 三浦寄子: 妊婦・授乳婦に対する薬カウンセリングの実際～薬効別の相談事例も含めて～. 『妊娠・授乳と薬』相談対応 実践研修会, Web, 2023. 2. 19
3. 歌野智之: 薬剤師が寄り添い支える小児がん薬物療法の実際～子どもたちの笑顔のために私達ができること～小児領域のがん薬物療法. 日本臨床腫瘍薬学会学術大会 JASPO 2023, 名古屋, 2023. 3. 3
4. 丹沢彩乃: 小児領域における薬学的アプローチ. 東京都病院薬剤師会プレアボイドフォーラム東京 2023, Web, 2023. 3. 18
5. 齊藤順平: 小児薬物療法における薬剤師業務に基づくエビデンス創出. 日本薬学会第143年会, 札幌, 2023. 3. 26
6. 栗山猛: 小児医薬品開発推進のための小児治験ネットワークの活動. 第126回日本小児科学会学術集會, 東京, 2023. 4
7. 齊藤順平: 小児妊婦授乳婦薬物療法におけるファーマコメトリクス活用の可能性. 日本薬剤学会第38年会, 名古屋, 2023. 5. 18
8. 詫間梨恵: 小児医療への薬剤師のかかわり. 平成塾薬剤師業務支援講座, Web, 2023. 5. 21
9. 歌野智之: QOLの向上を目指した治療選択～ビーリンサイトの携帯型輸液ポンプによる投与～. 急性リンパ性白血病～Web Symposium～, Web, 2023. 5. 25
10. 石井真理子: 国立成育医療研究センターでのポリファーマシー対策. 第18回東海北陸国立病院薬剤師会, Web, 2023. 6. 3
11. 齊藤順平: 小児医療におけるPK/PD情報活用の可能性. 第25回日本医薬品情報学会総会・学術大会, 京都, 2023. 6. 11
12. 稲吉美由紀: 未承認新規医薬品等使用評価委員会における情報提供活動. 第25回日本医薬品情報学会総会・学術大会, 京都, 2023. 6. 11
13. 三浦寄子: 妊婦・授乳婦に対する薬カウンセリング. 薬剤師PS講座イノベーション(6月)研修会, Web, 2023. 6. 25
14. 三浦寄子: 妊娠中の薬に関する考え方とカウンセリング方法. 第14回地域女性の妊娠とくすりの悩みの支援と情報提供ができるかかりつけ薬剤師になる!! Web, 2023. 7. 2
15. 詫間梨恵: 小児薬物療法各領域のアップデート 小児腎不全患者へのかかわり. 第31回クリニカルファーマシーシンポジウム, 山形, 2023. 7. 22
16. 齊藤順平: 授乳中の精神疾患治療薬使用に関する安全性の直接的評価. 医療薬学フォーラム 2023 第31回クリニカルファーマシーシンポジウム, 山形, 2023. 7. 23
17. 齊藤順平: 薬物母乳移行に関する基本的な考え方と情報創出の取り組み. 第37回日本母乳哺育学会学術集會, 東京, 2023. 9. 17
18. 齊藤順平: 新生児医療における医薬品添加剤曝露に関する話題. 第50回小児臨床薬理学会学術集會,

大阪, 2023. 9. 30

19. 丹沢彩乃: 小児特有の服薬指導. 2022 年度小児薬物療法研修会, Web, 2023. 9
20. 詫間梨恵: 小児腎代替療法 小児腎機能と腎疾患. 第 18 回腎臓病薬物療法学会, 札幌, 2023. 10. 28
21. 齊藤順平: 小児臨床現場における M&S の活用と展望. 第 33 回日本医療薬学会年会, 秋田, 2023. 11. 3
22. 齊藤順平: 小児・新生児集中治療領域における TDM. 第 33 回日本医療薬学会年会, 秋田, 2023. 11. 4
23. 齊藤順平: 小児における薬物療法への関わりとエビデンスの創出. 第 33 回日本医療薬学会年会, 秋田, 2023. 11. 18
24. 三浦寄子: 妊娠中の薬に関する考え方とカウンセリング方法. 第 15 回地域女性の妊娠とくすりの悩みの支援と情報提供ができるかかりつけ薬剤師になる!! Web, 2023. 12. 17
25. 栗山猛: 小児医薬品の開発推進に向けた環境整備と今後の課題. 第 44 回日本臨床薬理学会学術総会, 神戸, 2023. 12

4-20 看護部

[学会発表]

1. 平本康子 (外来): Systematic review difficulties for midwives working in hospitals. EAFONS2023 26th East Asian Forum of Nursing Scholars, 東京, 2023. 3. 10~11
2. 杉澤由香里 (手術室): 小児の口腔ケア. 第 20 回日本口腔ケア学会総会・学術集会, 東京, 2023. 4. 21
3. 小江寛子 (9 西): 小児 COVID-19 入院施設における小児看護・感染症看護専門看護師による倫理調整-COVID-19 流行初期に焦点をあてて-. 第 10 回 CNS 看護学会, 京都, 2023. 6. 10~11
4. 奥田裕美 (7 東): 間欠導尿を必要とする小児の就園・就学における課題の明確化. 第 37 回日本小児ストーマ排泄創傷管理研究会, 神奈川, 2023. 6. 17
5. 後藤清香 (8 西): 専門看護師の役割を活かした幼児期にある医療的ケア児の在宅移行支援. 日本小児看護学会第 33 回学術集会, 神奈川, 2023. 7. 15~16
6. 畑野愛美 (もみじの家): NICU から緩和ケア病床に転棟し看取りを行った 18 トリソミーの患児への関わりを通して明らかになった医療者の思い. 第 28 回日本緩和医療学会学術大会, 神戸, 2023. 6. 30~7. 1
7. 杉澤由香里 (手術室): 小児救急の現場でチームパフォーマンス向上のための心理的安全性確保のために. 第 36 回日本小児救急医学会学術集会, 千葉, 2023. 7. 22
8. 奥田裕美 (7 東): 末梢静脈カテーテルが関連した小児の医療関連機器圧迫創傷の特徴. 第 25 回日本褥瘡学会学術集会, 神戸, 2023. 9. 1
9. 廣田久美子 (10 東): 肝移植後の乳幼児患児のドレーン管理で看護師が抱く困難感とインシデント事項の認識の乖離についての分析. 日本小児看護学会第 33 回学術集会, 神奈川, 2023. 7. 15~16

10. 酒井未央（専門看護室）： 検体取り違えの逸脱事例から考える実施体制の整備. 第23回CRCと臨床試験の在り方を考える会議2023in岡山, 2023.9.16~17
11. 伊藤綾（専門看護室）： 小児の経験者とその保護者の関わりで信頼関係を築くために大切に思うこと. 第23回CRCと臨床試験のあり方を考える会議in岡山, 2023.9.17
12. 高木若奈（手術室）： 高齢糖尿病患者の低血糖の経験から肯定的側面を引き出すための看護師の関わり. 第28回日本糖尿病看護学会, 岡山, 2023.9.24
13. 後藤清香（8西）： 小児の成長発達に応じたブリナツモマブ投与中のQOL向上に向けた看護支援の検討. 第21回日本小児がん看護学会学術集会, 札幌, 2023.9.30
14. 杉澤由香里（手術室）： 多職種チームを結成して臨んだ意識改革「イソジンプロジェクト」の活動報告. 第45回日本手術医学会総会, 神奈川, 2023.11.24
15. 杉澤由香里（手術室）： 手術室における職場環境の改善～働きやすい環境づくり・雰囲気づくりへの取り組み～. 第45回日本手術医学会総会, 神奈川, 2023.11.24
16. 小野寺麻由（11東）： 小児患者と関わる病棟に勤務する2年目看護師の看護における困難体験とその回復に影響する要因. 第77回国立病院総合医学会, 広島, 2023.10.20~21
17. 戸部茜（10西）： 小児がんの化学療法における悪心嘔吐に対する看護師のアセスメントと介入について. 第21回小児がん看護学会学術集会, 札幌, 2023.9.30
18. 石崎薫（手術室）： 小児肝移植術中の低体温防止策の工夫と周産期管理・術後予後戸の検討. 日本小児麻酔学会第28回, 福井, 2023.10.7
19. 石下綾香（6東）： 周産期の父親の悩みに関するテーマ分析：インタビュー調査. 第19回日本周産期メンタルヘルス学会学術集会, 東京, 2023.10.28~29
20. 深見彩加, 船津秋実（NICU）： NICUにおける人工呼吸器関連肺炎を減らすための取り組み. 第32回日本新生児看護学会, 神奈川, 2023.11.3
21. 上村まや（NICU）： COVID-19流行下での面会制限によるNICU/GCU看護師の退院支援に対する困難感. 第21回国立病院看護研究学会学術集会, 大阪, 2023.12.2

[執筆]

1. 渡邊久美子（看護部長室）： AIコミュニケーションロボットが医療現場にもたらす効果. 月刊新医療, エムイー振興協会, 2023.11
2. 藤田友紀（救急）： 小児の成長発達と服薬. 調剤と服薬指導がわかる 小児これだけ, 南山堂, 2023.10

4-21 臨床研究センター

[原著論文（査読付き）]

1. Saettini F, Guerra F, Fazio G, Bugarin C, McMillan HJ, Ohtake A, Ardisson A, Itoh M, Giglio S, Cappuccio G, Giardino G, Romano R, Quadri M, Gasperini S, Moratto D, Ishiguro A, Fukuhara Y, Hayakawa I, Mauri M, Piazza R, Cazzaniga G, Biondi A: Antibody deficiency

- in patients with biallelic *KARS1* mutations. *J Clin Immunol* 2023 Nov;43(8):2115–2125. doi: 10.1007/s10875-023-01584-7.
2. Nakao H, Nomura O, Yoshihara S, Yoshikawa T, Ishiguro A: Association between residents' scholarly activities and publication requirement policy. *Pediatr Int* 2023 Nov; 65: e15685. doi: 10.1111/ped.15685.
 3. Tokuda Y, Yamada M, Fukuda A, Shoji K, Sakamoto S, Ishiguro A, Imadome K, Kasahara M: No additional risk of ampicillin rash among pediatric liver transplant recipients with concurrent Epstein-Barr virus infection. *Pediatr Infect Dis J* 2023 Dec; 42(12): 1063–1066. doi: 10.1097/INF.0000000000004083
 4. Kondo R, Iijima H, Funaki T, Ishiguro A, Ogimi C: Natural course of acute COVID-19 among healthy children in a tertiary hospital. *Pediatr Int* 2023 Oct; 65(1): e15647.
 5. Kouno H, Kunishima S, Takebe J, Uchiyama T, Kaname T, Ishiguro A: Measurement of immature platelet fraction is useful in the differential diagnosis of MYH9 disorders. *Intern J Lab Hematol* 2023 Oct; 45(5): 700–706. doi: 10.1111/ijlh.14123.
 6. Hamukale A, Imamura T, Kapina M, Borkovska O, Musuka CA, Tembo E, Xie Y, Tedesco C, Zulu PM, Sakubita P, Kapaya F, Hamoonga R, Liwewe MM, Nagata C, Ishiguro A, Kapata N, Mukonka V, Sinyange N: Spatial factors for COVID-19-associated community deaths in an urban area of Lusaka, Zambia: an observational study. *Pan Afr Med J* 2023; 45: 32. May 15. Doi; 10.11604/pamj.2023.45.32.37069.
 7. Takao H, Nishi K, Funaki T, Inoki Y, Osaka K, Nada T, Yokota S, Sato M, Ogura M, Ishikura K, Ishiguro A, Kamei K: Changes in patterns of infection associated with pediatric idiopathic nephrotic syndrome: a single-center experience in Japan. *J Pediatr*. 2023 Mar; 254: 11–16.e1. doi: 10.1016/j.jpeds.2022.10.005.
 8. Uchida H, Sakamoto S, Komine R, Kodama T, Nakao T, Okada N, Yanagi Y, Shimizu S, Fukuda A, Shioda Y, Kiyotani C, Matsumoto K, Yoneda A, Haga C, Yoshioka T, Miyazaki O, Nosaka S, Kasahara M (2023) Strategy for hepatoblastoma with major vascular involvement: A guide for surgical decision-making. *Surgery* 2023; 173(2):457–463
 9. Sugiyama M, Arakawa A, Shirakawa N, Tao K, Tanimura K, Nakajima M, Watanabe Y, Kumamoto T, Maniwa J, Yoneda A, Iwata S, Kobayashi E, Kawai A, Ogawa C: Safety and efficacy of multiple tyrosine kinase inhibitors in pediatric/adolescent and young adult patients with relapsed or refractory osteosarcomas: A single-institution retrospective analysis. *Pediatr Blood Cancer* 2023; 70(7):e30360
 10. Nakata K, Matsuda T, Hori M, Sugiyama H, Tabuchi K, Miyashiro I, Matsumoto K, Yoneda A, Takita J, Shimizu C, Katanoda K: Cancer incidence and type of treatment hospital among children, adolescents, and young adults in Japan, 2016–2018. *Cancer Sci* 2023; 114(9):3770–3782
 11. Kobayashi T, Fujino A, Furugane R, Hashizume N, Mori T, Kano M, Watanabe E, Takahashi M, Yoneda A, Kanamori Y: Seasonal incidence of cellulitis in cystic lymphatic malformation and Klippel-Trenaunay syndrome. *Global Pediatr* 2003; 5: 100071

12. Wada YS, Tani Y, Shindo J, Miyata M, Sakurai M, Nishimaki S, Mizuno K: Survey of Enteral Feeding of Preterm Infants and the Human Milk Bank in Japan. *Pediatr Int.* 2023; 65(1):e15527.
13. Miyazawa T, Arahori H, Ohnishi S, Shoji H, Matsumoto A, Wada YS, Takahashi N, Takayanagi T, Toishi S, Nagaya K, Hasegawa H, Hayakawa M, Hida M, Fukuhara R, Yamada Y, Kawai M, Takashi K, Wada K, Morioka I, Mizuno K: Mortality and morbidity of extremely low birth weight infants in Japan, 2015. *Pediatr Int* 2023 Jan;65(1):e15493. doi: 10.1111/ped.15493.
14. Maruyama H, Amari S, Kanamori Y, Hayakawa M, Nagata K, Yazaki Y, Taniyama Y, Masahata K, Yamoto M, Terui K, Kim K, Koike Y, Okazaki T, Inamura N, Usui N; Japanese Congenital Diaphragmatic Hernia Study Group: Intraoperative Transpyloric Tube Insertion for Congenital Diaphragmatic Hernia: Analysis of Japanese Study Group Data. *J Pediatr Surg.* 2023 Sep;58(9):1663–1669. doi: 10.1016/j.jpedsurg.2023.03.011.
15. Yotani N, Isayama T, Ito Y: Gabapentin for treatment of apnea in infants with trisomy 13 and 18. *Pediatr Int.* 2023;65:e15646
16. Hirayama H, Satomi E, Kizawa Y, Miyazaki M, Tagami K, Sekine R, Suzuki K, Yotani N, Sugano K, Abo H, Sakashita A, Sato K, Nakagawa S, Nakazawa Y, Hamano J, Miyashita M: The effect of palliative care team intervention and symptom improvement using patient-reported outcomes: a multicenter prospective observational study. *Springer Nature.* 2023 July;31:439–439
17. Nakao H, Nomura O, Yoshihara S, Yoshikawa T, Japan Pediatric Society Steering Committee for Board Examinations, Ishiguro A: Association between residents' scholarly activities and publication requirement policy. *Pediatr Int.* 2023; 65: e15685. <https://doi.org/10.1111/ped.15685>
18. 中尾 寛, 野村 理, 窪田 満, 石黒 精: 小児病院における小児科専門研修の環境変化が専攻医に与える影響. *日小児会誌*, 2023; 127(8): 1080–1087.
19. 狩野元宏, 藤野明浩, 古金遼也, 橋詰直樹, 小林 完, 森禎三郎, 渡辺栄一郎, 高橋正貴, 米田光宏, 金森 豊 (2023) 小児気胸に対する治療戦略の再考. *日本小児外科学会雑誌*, 2023; 59(4): 741–746.
20. 清谷知賀子, 山田悠司, 寺島慶太, 塩田曜子, 牛腸義宏, 井口晶裕, 坂口大俊, 米田 光宏, 富澤大輔, 松本公一 (2023) 日本人小児がん患者 38 例におけるアントラサイクリン心筋障害抑制のためのデクスラゾキサン併用治療. *日小児血がん会誌*, 2023; 60(1): 15–19.
21. 森岡一朗, 戸石悟司, 和田友香, 荒堀仁美, 落合正行, 久保井徹, 佐藤義朗, 高橋尚人, 長屋 建, 福原里恵, 松本 敦, 宮沢篤夫, 山田恭聖, 山田洋輔, 東海林宏道, 日下 隆, 大西 聡, 飛騨麻里子, 水野克己: 新型コロナウイルス感染症妊婦から出生した新生児の診療・管理方法および社会的影響に関する調査. *日小児会誌*, 2023; 127 (3) 519–529. 2023.
22. 名古屋祐子, 余谷暢之, 宮下光令, 吉田沙蘭, 津村明美: 小児領域における Care Evaluation Scale (CES) の使用可能性終末期にある子どもと家族へのケアの構造・プロセスに関する文献レビュー. *宮城大学研究ジャーナル*. 2023;3(1) :123–13.
23. 中尾 寛, 野村 理, 窪田満, 石黒 精: 小児病院における小児科専門研修の環境変化が専攻医に与える影響. *日小児会誌*, 2023;127(8);1080–1087.

[原著論文 (査読無し)]

なし

[症例報告]

1. Fuseda Y, Tagaya T, Tsuji S, Nosaka S, Fujino A, Kubota M, Ishiguro A: Ball-valve syndrome mimicking gastric perforation in a toddler with gastrostomy. *Pediatr Int* 2023 Nov; 65:e15694. doi: 10.1111/ped.15694.
2. Komeno Y, Uchiyama T, Kawano F, Kurihara Y, Kurokawa M, Ohara O, Kunishima S, Ishiguro A: Inherited macrothrombocytopenia due to a novel splice donor site mutation in *ITGB3*. *Ann Hematol* 2023 Oct; 102(10):2947-2949. doi: 10.1007/s00277-023-05387-z.
3. Fukayama H, Myojin S, Funaki T, Fukuda Y, Nakamura T, Ishiguro A, Ogimi C: Septic arthritis caused by *Haemophilus parainfluenzae*: A pediatric case report and literature review. *Pediatr Infect Dis J* 2023 Sep 1; 42(9): e336-e340. doi: 10.1097/INF.0000000000003979.
4. Murata Y, Masuda H, Moroka S, Yotani N, Morimoto N, Kubota M, Ishiguro A: Kawasaki Disease with Facial Nerve Palsy. *Indian J Pediatr*.2023 Sep;91:101-101.
5. Ishikawa K, Hayakawa I, Masuda H, Kubota M, Ishiguro A: Multisystem inflammatory syndrome in children with clinically mild encephalitis/encephalopathy with a reversible splenic lesion. *Indian J Pediatr* 2023 Sep; 90(9): 940-941. doi: 10.1007/s12098-023-04542-8
6. Takao H, Iijima H, Odagiri R, Hayakawa I, Ogimi C: Acute cerebellar ataxia during acute COVID-19: A case series and review of the literature. *J Infect Chemother* 2023 Aug; 29(8): 792-795. doi: 10.1016/j.jiac.2023.04.003.
7. Komorizono R, Takeuchi I, Yoshioka T, Yano T, Kumagai H, Ishiguro A, Arai K: Ileal arteriovenous malformation in a five-year-old boy with recurrent anemia. *Pediatr Int* 2023; 65(1): e15564. doi.org/10.1111/ped.15564.
8. Sato J, Yotani N, Shoji K, Mori T, Fujino A, Hikosaka M, Kubota M, Ishiguro A: Necrotizing fasciitis following rapidly deteriorating neonatal omphalitis with good initial presentation. *IDCases*, 2023 Apr; 32: e01750. doi: 10.1016/j.idcr. 2023.e01750.
9. Yamano S, Iguchi A, Ishikawa K, Sakamoto A, Uchiyama T, Yanagi K, Kaname T, Kunishima A, Ishiguro A: Splenectomy as an effective treatment for macrothrombocytopenia in Takenouchi-Kosaki syndrome. *Int J Hematol*, 2023 Mar; 117: 622-625. doi: 10.1007/s12185-022-03491-w.
10. Yaga T, Iguchi A, Nakayama R, Kosaki R, Ishiguro A: Potocki-Shaffer syndrome revealed in a WAGR syndrome with multiple exostoses. *Pediatr Int* 2023; 65: e15405. doi: 10.1111/ped.15405.
11. Wada MK, Fukuhara Y, Hayakawa I, Kaname T, Ishiguro A: *KARS*-related diseases with macrothrombocytes and pulmonary arterial hypertension. *Pediatr Int* 2023; 65: e15428. doi: 10.1111/ped.15428.
12. 中村こずえ, 樋渡光輝, 新戸瑞穂, 佐藤恭弘, 小山隆之, 三牧正和, 内山 徹, 石黒 精: 免疫性血小

板減少症との鑑別診断を必要とした先天性血小板減少症の1例. 日小児血がん会誌, 2023; 60(3): 266-269.

13. 清水俊介, 永井 章, 早川 格, 宮寄 治, 野坂俊介, 窪田 満, 石黒 精: 治療抵抗性の先天性内反足を契機に発見された尾部退行症候群の1例. 小児内科, 2023; 55(9): 1529-1532.
14. 萱原 碧, 中尾 寛, 中村知夫, 宮寄 治, 平石のぞみ, 岩間一浩, 窪田 満, 石黒 精: 在宅診療への移行に成功し、発達を獲得している透明脊椎異骨症の幼児. 日小児会誌, 2023; 127(8): 1067-1073.
15. 水野皓介, 船田桂子, 玉井直敬, 石黒 精, 肥沼悟郎: ヒドロキシクロロキンが著効した特発性肺ヘモジデローシス. 日小児呼吸器会誌, 2023; 34(2): 87-92.
16. 船田桂子, 余谷暢之, 玉井直敬, 冬木真規子, 肥沼悟郎: 間質性肺炎の難治性咳嗽発作に対し、モルヒネ持続投与で症状緩和を得られた小児. 日小児会誌, 2023; 127(7): 968-972.
17. 高橋達也, 清水泰岳, 義岡孝子, 吉年俊文, 藤田貴子, 山本陽子, 宮田恵理, 藤川皓基, 竹内一朗, 石黒 精, 野村伊知郎, 新井勝大: プロトンポンプ阻害薬による長期治療を要した十二指腸潰瘍合併好酸球性胃腸炎の3例. 日小児会誌, 2023; 127(6): 866-873.
18. 徳田雄亮, 井口晶裕, 坂本 淳, 平石のぞみ, 今井庸子, 宮城 徹, 柏瀬貢一, 石黒 精: 抗血小板自己抗体を検出した免疫性血小板減少症の1か月児. 日小児会誌, 2023; 127(5): 701-706.
19. 松村健太, 庄司健介, 吉田美智子, 益田博司, 窪田 満, 石黒 精: 海外渡航歴のない小児の腸チフス再発例. 小児科臨床, 2023; 76(5): 681-685.
20. 二木良平, 永井 章, 益田博司, 横井 匡, 野口杏子, 千先園子, 窪田 満, 石黒 精: 川崎病再燃と診断し、治療経過中に発症した Stevens-Johnson 症候群の1例. 小児内科, 2023; 55(3): 455-460.
21. 鹿島健幹, 多賀谷貴史, 前川貴伸, 江口佳孝, 堤 義之, 窪田 満, 石黒 精: 運動中の軽微な外傷後に生じた恥骨骨髄炎の一例. 日小児救急医会誌, 2023; 22(1): 57-61.
22. 狩野元宏, 米田光宏, 小関元太, 齋藤傑, 橋詰直樹, 藤雄木亨真, 渡辺栄一郎, 山本 裕輝, 藤野明浩, 金森 豊 (2023) 【共有したい術式および手術経験: 手術のポイントや工夫】腹腔鏡・腔鏡を併用し posterior sagittal approach で切除した腔原発卵黄嚢腫瘍の1例. 小児外科, 55(3): 339-343.
23. 小林 完, 藤野明浩, 古金遼也, 沓掛真衣, 森禎三郎, 狩野元宏, 高橋正貴, 米田光宏, 金森 豊, 義岡孝子 (2023) 乳児期に肝芽腫を発症後, 思春期に乳房線維腺腫を発症した Beckwith-Wiedemann 症候群の1例. 日本小児外科学会雑誌, 59(4): 804-809.

[総説]

1. 坂本 淳, 石黒 精, 井口晶裕: 鉄欠乏. 微量元素とビタミンが子どもにとってなぜ必要か. 小児科診療, 2023; 65(12): 1475-1479.
2. 石黒 精: Glanzmann 型血小板無力症. 別刷日本臨床, 領域別症候群シリーズ No. 28, 血液症候群 (第3版) III, 2023; 84-87.
3. 石黒 精: タイプ II 血小板無力症. 別刷日本臨床, 領域別症候群シリーズ No. 28, 血液症候群 (第3版) III, 2023; 88-91.
4. 石黒 精, 森 麻希子, 東川正宗: 小児免疫性血小板減少症診療ガイドライン 2022. 日小児血がん会誌, 2023; 60(3): 228-233.
5. 石黒 精: 血友病. 遺伝を考える. 日医師会誌, 2023; 152 特別号(1): S263-S266.
6. 高橋正貴, 岡本健太郎, 前川貴伸, 米田光宏 (2023): 【希少固形がんの診断と治療】食道がん. 小

- 児外科 2023; 55(8):883-886.
7. 米田光宏, 小関元太, 齋藤 傑, 橋詰直樹, 藤雄木亨真, 狩野元宏, 山本裕輝, 石丸 哲也, 藤野明浩, 金森 豊 (2023): 【小児外科疾患に関連する症候群】Simpson-Golabi-Behmel 症候群. 小児外科 55(4):444-447.
 8. 加藤実穂, 北薊育美, 義岡孝子, 米田光宏 (2023): 【希少固形がんの診断と治療】副腎皮質腫瘍. 小児外科 2023; 55(8):854-857.
 9. Yoneda A (2023): Role of surgery in neuroblastoma. Pediatr Surg Int 2023; 39(1):177.
 10. 余谷暢之: 重篤な疾患をもつ子ども・家族とこれからについて話し合う ～アドバンス・ケア・プランニングの考え方を小児医療に取り入れるために～. 小児科診療, 診断と治療社, 2023;86:101-105.
 11. 余谷暢之: 重篤な疾患をもつ子ども・家族とこれからについて話し合う～リハビリテーション医療におけるACP 治らないかもしれない障害をもつ患者に対応する. Journal of Clinical Rehabilitation, 東京: 医歯薬出版, 2023;32:279-283.
 12. 余谷暢之: 重篤な疾患をもつ子ども・家族とこれからについて話し合う～小児領域におけるアドバンス・ケア・プランニングの実践～. 小児保健研究, 日本小児保健研究, 2023; 82:255-257.
 13. 余谷暢之: 小児在宅医療のこれからを考える～病院勤務医の立場から～. 小児保健研究, 日本小児保健研究, 2023;82:258-261.
 14. 余谷暢之: 小児神経疾患に対する緩和ケアの実践. 難病と在宅ケア, 日本プランニングセンター, 2023; 29:43-46.
 15. 余谷暢之: 小児がん患児に対する緩和医療 血液・腫瘍 小児がん患児に対する緩和医療. 小児科診療, 診断と治療社, 2023;86:500-502.
 16. 余谷暢之: 緩和医療とグリーフケア 胎児期からの緩和ケアの実践. 日本周産期・新生児医学会雑誌, 日本周産期・新生児医学会, 2023;58:967-970.
 17. 余谷暢之: 出生前診断をされた児の看取り～最期まで生きるを支えるための支援について考える. 周産期医学, 東京医学社, 2023; 53:797-802. .
 18. 余谷暢之: 小児の緩和ケア これからの小児緩和ケアについて考える 10 年先を見据えて. 日本臨床麻酔学会誌, 日本臨床麻酔学会, 2023;43:258-263.
 19. 余谷暢之: 出生前診断をされた児の看取り 最期まで生きるを支えるための支援について考える. 周産期医学, 東京医学社, 2023;53:797-801
 20. 余谷暢之: 重篤な疾患をもつ子ども・家族とこれからについて話し合う 小児領域におけるアドバンス・ケア・プランニングの実践. 小児保健研究, 日本小児保健協会, 2023;82:255-257.
 21. 余谷暢之: これからの子どものアドボカシー 子どもの医療・保健にかかわる専門職が子どものこえを社会の声にするために. チャイルドヘルス, 診断と治療社, 2023;26:685-688.
 22. 余谷暢之: 小児科医へのアドボカシー教育—小児科専攻医に対するアドボカシー教育プログラム (CHAT). 小児内科, 東京医学社, 2023;55:1555-1559.
 23. 和田友香: 母乳の特徴と母乳育児の得失. 臨床婦人科産科. 2023; 77(3) 423-428.
 24. 和田友香: 総論 侵襲の大きな先天外科疾患のある児のフォローアップ—外科との連携. 周産期医学 vil. 2023; 53(4) 461-464.

[著書]

1. 石黒 精：血液. 小児科専門医受験のための最速トレーニング. P195-204, 総合医学社, 東京, 2023.
2. 三宅こず恵, 石黒 精：血友病. 第4章 治療実施体制と医療経済, 第2節 AAV 治療実施体制構築, 遺伝子治療開発研究ハンドブック第2版, エヌ・ティー・エス, 東京, 2023.
3. 和田友香：早産児の栄養管理. 今日の治療指針2024年版. 医学書院.
4. 和田友香：「多胎妊娠」5. 新生児の管理と予後. メジカルビュー社.
5. 余谷暢之：がん以外の特定集団への緩和医療に関する知識と実践能力～小児. 緩和医療薬学（改定第2版）, p182-186, 南江堂, 東京, 2023.
6. 余谷暢之：血液・腫瘍 小児がん患者に対する緩和医療. 小児の治療指針（vol.86）, p500-502, 診断と治療社, 東京, 2023.

[ガイドライン、研究報告書、その他]

なし

[学会発表]

1. Ishiguro A, Cuker A, Alzahrani H, Astermark J, Frenzel L, Katsarou O, Kavakli K, Klamroth R, Matino D, Shapiro AD, Wang JD, Fuiman J, McKay J, Sun P, Rupon L, on behalf of the BENEGENE-2 Investigators: Efficacy and Safety of Fidanacogene Elaparvovec in Adults with Moderately Severe/Severe Hemophilia B. The 85th Annual Meeting of the Japanese Society of Hematology, Tokyo, 2023.10.15, 口演.
2. Ishiguro A, Uchiyama T, Sakamoto A, Kunishima S: High-throughput sequencing-based diagnosis of congenital thrombocytopenia/platelet disorders in a registry study. Symposium 6, The 85th Annual Meeting of the Japanese Society of Hematology, Tokyo, 2023.10.14, 口演.
3. Yoneda A, Shichino H, Hishiki T, Matsumoto K, Ohira M, Kamiyo T, Kuroda T, Soejima T, Nakazawa A, Takimoto T, Yokota I, Teramukai S, Takahashi H, Fukushima T, Hara J, Kaneko M, Ikeda H, Tajiri T, Mugishima H, Nakagawara A: Surgical Outcome of A Nationwide Phase II Study of Delayed Local Treatment for Children with High-risk Neuroblastoma (JN-H-11). Advances in Neuroblastoma Research. Amsterdam, Netherland, 19th May 2023
4. Shima M, Takedani H, Kitsukawa K, Taki M, Ishiguro A, Nagae C, Nagao A, Nosaka D, Kyogoku Y, Oki H, Iwasaki K, Nogami K: Three-year interim analysis results of the AOZORA Study to evaluate the long-term safety and joint health in children with hemophilia A without factor VIII inhibitors receiving emicizumab. 65th ASH Annual Meeting and Exposition, San Diego, CA, 2023.12.10.
5. Egami N, Ishimura M, Ochiai M, Ichiyama M, Inoue H, Hotta T, Uchiumi T, Kang D, Ishiguro A, Ohga S: The clinical and genetic characteristics of early-onset thrombophilia in Japan. 65th ASH Annual Meeting and Exposition, San Diego, CA, 2023.12.10.
6. Kondo R, Iijima H, Funaki T, Ishiguro A, Ogimi C: Natural course of acute COVID-19 among healthy children in a tertiary hospital. The 18th Congress of Asian Society for Pediatric Research. Tokyo, 2023.11.11, 口演 (web)

7. Nakao H, Nomura O, Yoshihara S, Yoshikawa T, Ishiguro A: Association between pediatrics residents' scholarship and publication requirement policy in Japan. The 18th Congress of Asian Society for Pediatric Research. Tokyo, 2023.11.11, 口演 (web)
8. Sakamoto A, Uchiyama T, Kunishima S, Kaname T, Iguchi A, Ishiguro A: Delayed diagnosis and inappropriate treatments for inherited thrombocytopenia in a Japanese registry. The 85th Annual Meeting of the Japanese Society of Hematology, Tokyo, 2023.10.15. Poster
9. Hisano H, Shoji K, Kato H, Okazaki-Fukui K, Kano M, Ishiguro A: Bacteraemia associated with intravascular catheter colonization with Gram-negative rods in children. IDWeek 2023, Boston, MA, 2023.10.13.
10. Sato E, Iijima H, Shoji K, Ogimi C, Ishiguro A: Urinary tract infection due to *Aerococcus* *urinae* in children. IDWeek 2023, Boston, MA, 2023.10.13.
11. Lin CC, Takeuchi I, Shimizu H, Kubota M, Ishiguro A, Arai K. The characteristics of perianal disease in pediatric patients with Crohn's disease: A 10-year retrospective cohort study at a tertiary children's hospital. The 16th Congress of Asian Pan-Pacific Society for Pediatric Gastroenterology, Hepatology and Nutrition, Seoul, 2023.10.6. Young Investigator Award
12. Sakamoto A, Uchiyama T, Kunishima S, Kaname T, Iguchi A, Ishiguro A: Diagnosis and treatment of MYH9 disorder with congenital thrombocytopenia based on a Japanese registry study. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会, 札幌, 2023.9.30. ポスター
13. Ikawa Y, Nakamura T, Fujino N, Uchiyama T, Ishiguro A, Wada T: A familial case of double MYH7/MYH9 gene mutations resulting in cardiomyopathy and macrothrombocytopenia. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会, 札幌, 2023.9.30.
14. Nagoshi R, Sakamoto A, Uchiyama T, Kunishima S, Kaname T, Iguchi A, Ishiguro A: Glanzmann thrombasthenia and congenital thrombocytopenia: *ITGA2B* and *ITGB3* variants. 第65回日本小児血液・がん学会学術集会, 札幌, 2023.9.29. 口演
15. Shima M, Takedani H, Kitsukawa K, Taki M, Ishiguro A, Nagao A, Nosaka D, Kyogoku Y, Iwasaki K, Nogami K: AOZORA Study: Interim Analysis of 3-year Joint Health in Participants from HOHOEMI Study. 第45回日本血栓止血学会, 北九州, 2023.6.15. 口演
16. Kubota H, Fukuie T, Kabashima S, Yamamoto-Hanada K, Ishiguro A, Ohya Y: Threshold dose distributions for peanut, cashew nut, and walnut allergy in Japan and effects of specific their IgE levels. European Academy of Allergy and Clinical Immunology Congress 2023, Hamburg, Germany, 2023.6.10.
17. Maruyama H, Amari S, Kanamori Y, Nagata K, Terui K, Usui N: Intraoperative transpyloric tube insertion for congenital diaphragmatic hernia: Analysis of Japanese study group data. Poster. FAOPS. 2023.10.7-9
18. 石黒 精: 新型コロナワクチンおよびインフルエンザワクチン同時接種後に血球貪食性リンパ組織球症を発症した1例 (指定発言) 第689回日本小児科学会東京都地方会懇話会, 東京, 2023.3.11. 口演
19. 米田光宏, 家原知子, 菊田 敦, 連 利博, 常盤和明, 高橋秀人, 手良向 聡, 瀧本哲也, 柳生茂希, 細井 創, 田尻達郎. Non-high-risk 神経芽腫における臓器温存. パネルディスカッション5「小児

- がんの外科治療と機能温存：どこまで取ってどこまで残すか」. 第123回日本外科学会定期学術集会, 2023. 4. 27
20. 余谷暢之, 諫山哲哉, 伊藤裕司: 13/18 トリソミーの無呼吸発作に対するガバペンチンの有効性についての後方視的検討. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 04. 16. 口頭、ポスター
 21. 余谷暢之: こどもの症状を捉えて、介入する. 第65回日本小児神経学会学術集会, 岡山, 2023. 05. 24. 口頭
 22. 徳田雄亮, 山田全毅, 福田晃也, 庄司健介, 阪本靖介, 内田孟, 清水誠一, 岡田憲樹, 石黒 精, 笠原郡生: 急性感染症の疑いで救急受診を要した小児肝移植後患者の初期対応に関する調査研究. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 14. 口演
 23. 酒井伶奈, 益田博司, 堀川美和子, 島袋林秀, 藤村友美, 浦田晋, 大坂溪, 亀井宏一, 石川尊士, 河合利尚, 原真理子, 守本倫子, 福田理紗, 吉田和恵, 窪田満, 石黒 精: 腎梗塞と高度感音性難聴を合併した早期乳児川崎病性冠動脈瘤の1例. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 16. 口演
 24. 矢賀勇志, 井口晶裕, 小崎里華, 中山ロバート, 石黒 精: 外骨腫を生じたWAGR症候群患者にマイクロレイ検査を施行し, Potocki-Shaffer 症候群の合併と診断した一例. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 14. ポスター
 25. 石川和, 益田博司, 小池健太郎, 早川格, 窪田満, 石黒 精: 川崎病主要5症状を呈し可逆性脳梁膨大部病変を有する軽症脳炎・脳症 (MERS) を合併した小児COVID-19 関連多系統炎症性症候群 (MIS-C). 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 16. ポスター
 26. 黒木興心, 相葉裕幸, 松井俊大, 大宜見力, 石黒 精: B 群溶血性連鎖球菌による小児尿路感染症の臨床像. 第55回小児感染症学会, 名古屋, 2023. 11. 25
 27. 竹林 晃, 浜田亮, 赤根祐介, 石黒 精, 山本雅樹: 先天性血小板減少症・異常症レジストリ研究で診断し得た先天性血小板減少症の2家系. 第65回日本血液学会秋季北海道地方会, 札幌, 2023. 9. 16. 口演
 28. 東志勇, 鞍谷沙織, 窪田満, 石黒 精, 余谷暢之: 小児専門病院における院内死亡症例の特徴と緩和ケアチームの介入実態. 第28回日本緩和医療学会学術集会, 神戸, 2023. 6. 30. 口演, 優秀演題賞
 29. 坂本 淳, 内山 徹, 國島伸治, 二木良平, 要 匡, 井口晶裕, 石黒 精: 22q11.2 欠失症候群の血小板機能と出血症状についての検討. 第45回日本血栓止血学会, 北九州, 2023. 6. 16. ポスター
 30. 藤野佐保, 金子佳代子, 三井真理, 石黒 精, 左合治彦, 村島温子: 第IX因子補充を要した血友病B保因者の妊娠管理. 第33回日本産婦人科・新生児血液学会学術集会, 埼玉, 2023. 6. 9. 口演
 31. 野口史織, 吉村 稔, 尾針崇文, 澤部祥子, 石黒 精: 巨大血小板性血小板減少症を呈した Takenouchi-Kosaki 症候群の2症例. 第72回日本医学検査学会, 高崎, 2023. 5. 20. 口演
 32. 中尾 寛, 野村理, 永田知, 石黒 精: 臨床研究教育におけるピアラーニングの効果, 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 14. ポスター.
 33. 貝塚杏菜, 徳田雄亮, 諸岡進太郎, 牛腸義宏, 船木孝則, 内山 徹, 前川貴伸, 窪田 満: 新型コロナウイルスおよびインフルエンザワクチン同時接種後に血球貪食性リンパ組織球症を発症した1例. 第689回日本小児科学会東京都地方会懇話会, 東京, 2023. 3. 11.
 34. 柴田優花, 和田友香, 福井加奈, 上原陽治, 甘利昭一郎, 倉辻言, 丸山秀彦, 塚本桂子, 諫山哲哉, 伊藤 裕司: NICU におけるテレプレゼンスシステム「窓」を用いた家族面会の有用性に関する検討.

- 第59回周産期新生児医学会, 口演, 2023. 7. 9-11
35. 吉井沙織, 甘利昭一郎, 福井加奈, 柴田優花, 上原陽治, 和田友香, 丸山秀彦, 塚本桂子, 諫山哲哉, 伊藤裕司: 当院での新生児における出生時蘇生の末梢静脈路確保に要する時間についての検討. 第59回周産期新生児医学会, 口演, 2023. 7. 9-11.
 36. 森田真知子, 和田友香, 福井加奈, 亀田由佳, 上原陽治, 柴田優花, 丸山秀彦, 塚本桂子, 諫山哲哉, 伊藤裕司: 予期せず緊急気管切開を要した児の後方視的検討. 第67回新生児成育医学会. 2023. 11. 24-26. 口演
 37. 田角悠子, 和田友香, 福井加奈, 亀田由佳, 上原陽治, 柴田優花, 丸山秀彦, 塚本桂子, 諫山哲哉, 伊藤裕司: 当院におけるドナーミルク使用経験とドナー登録状況. 第67回新生児成育医学会. 2023. 11. 24-26. 口演
 38. 柴田優花, 和田友香, 菅原 碧, 田角悠子, 宮田有里奈, 三浦彩乃, 畑山一貴, 森田真知子, 福井加奈, 亀田由佳, 上原陽治, 丸山秀彦, 塚本桂子, 諫山哲哉, 伊藤裕司: 極低出生体重児における母乳育児支援の質改善研究. 第67回新生児成育医学会. 2023. 11. 24-26. 口演
 39. 丸山秀彦, 甘利昭一郎, 古賀愛, 山田華奈, 大島あゆみ, 菅島加奈子, 本間直美, 諫山哲哉, 伊藤裕司: NICUにおける、計画外抜管防止計画チームの質改善活動のまとめ. 第40回四国新生児医療研究会, 2023. 6. 3
 40. 丸山秀彦, 甘利昭一郎, 金森豊, 早川昌弘, 永田公二, 矢崎悠太, 谷山禎彦, 正畠和典, 矢本真也, 照井慶太, 金聖和, 小池勇樹, 岡崎任晴, 臼井規朗: 先天性横隔膜ヘルニアにおいて、根治術時のtransphyloric tubeの検討. 第59回周産期新生児医学会, 口演, 2023. 7. 9-11
 41. 豊島勝昭, 勝又薫, 青木宏諭, 伊藤美春, 丸山秀彦, 荒堀仁美, 井上普介, 矢本真也, 金聖和, 近藤琢也, 早川昌弘, 奥山宏臣, 臼井規朗, 照井慶太, 永田公二, 新生児先天性横隔膜ヘルニア研究グループ: 先天性横隔膜ヘルニアの3歳時発達状況. 第59回周産期新生児医学会, 2023. 7. 9-11. 口演
 42. 矢本真也, 照井慶太, 永田公二, 岡崎任晴, 豊島勝昭, 稲村昇, 佐藤義朗, 丸山秀彦, 横井暁子, 増本幸二, 矢崎悠太, 小池勇樹, 奥山宏臣, 臼井規朗: 「CDH 難治例手術の要点と盲点(重症症例・合併症症例の対応と胸腔鏡手技の実際)」 胸腔鏡下先天性横隔膜ヘルニア手術の開腹移行と再発例についての検討. 第59回周産期新生児医学会, 2023. 7. 9-11. 口演
 43. 丸山秀彦, 甘利昭一郎, 大島あゆみ, 菅島加奈子, 諫山哲哉, 伊藤裕司: NICUにおける、計画外抜管防止計画チームの質改善活動のまとめ. 第67回新生児成育医学会. 2023. 11. 24-26. 口演
 44. 伊東 藍, 上原陽治, 生田泰久, 甘利昭一郎, 丸山秀彦, 伊藤裕司, 諫山哲哉: 当院 NICUにおける重症患者に対する終末期の積極的治療の差し控え・中止—20年間の後方視的検討をふまえて—. 第67回新生児成育医学会. 2023. 11. 24-26. 口演
 45. 二木良平, 島袋林秀, 益田 博司, 中尾 寛, 堀川 美和子, 余谷暢之, 窪田 満: タナトフォリック骨異形成症例の長期管理における Bio-Psycho-Social アプローチ. 日本小児科学会東京都地方会 2023. 9. 9

【講演】

1. Yuka Sano Wada: Enteral feeding of preterm infants and the human milk bank in Japan. PAS Meeting. April. 2023, USA Washington

2. Maruyama H, Seung Han Shin, Oda A, In Gyu Song, Pei Lu, Narantsetseg Chogdon, Buranee Swatesutipun, Femitha Pournami: Difference in the treatment strategies among Asian countries for extremely low birth weight infants FAOPS, 2023.10.7-9
3. Maruyama H, Amari S, Kanamori Y, Hayakawa M, Nagata K, Yazaki Y, Taniyama Y, Masahata K, Yamoto M, Terui K, Kim K, Koike Y, Okazaki T, Inamura N, Usui N: Intraoperative transpyloric tube insertion for congenital diaphragmatic hernia: Analysis of Japanese study group data. 4th Taiwan-Korea-Japan Joint Congress on Neonatology 2023.10.28
4. Yoneda A: Surgical Treatment of Neuroblastomas-from the Japanese Neuroblastoma Clinical Trial-, SIOP Asia 2023. Yerevan, Armenia, 20th May, 2023
5. 石黒 精: 血友病の概要と緊急時に取るべき対応. 血友病 X 救急 CROSS セミナー in 区西南部医療圏, 東京(web講演), 2023.1.26.
6. 和田友香, 田啓樹, 櫻井基一郎, 水野克己: シンポジウム 母乳育児を科学する: データベースから見えてきたこと. 第126回日本小児科学会学術集会. 4月, 東京
7. 和田友香: 周産期におけるハイリスク母子と家族への支援. 愛知母乳の会. 2023年6月, オンライン
8. 和田友香: シンポジウム6「母乳バンク時代を迎えてーこれまでの進歩と周産期医療・社会との調和ー」ドナーミルクの適応を考える. 第59回日本周産期・新生児医学会学術集会. 2023年7月, 名古屋
9. 和田友香: シンポジウム2「早産・極低出生体重児の経腸栄養」早産児に有益な母乳成分. 第67回日本新生児成育医学会学術集会. 11月, 横浜
10. 和田友香: 乳児の成長・観察のポイント. 2022年度東京都委託助産師教育指導講習会. 2023年2月13日, オンライン
11. 和田友香: お母さん, お父さんのための子育て応援講座. 第2回ホームカミングデイ. 国立成育医療研究センター. 2023年2月25日. 東京
12. 和田友香: 国内外の母乳に関する話題. 城南新生児研究会. 2023年5月, オンライン
13. 和田友香: ドナーミルクの適応についてー国内外のレシピエントの基準, 一時的使用でない場合の中止基準ー. 第6回母乳バンクカンファレンス. 6月, 東京, オンライン
14. 和田友香: 周産期におけるハイリスク母子と家族への支援. 愛知母乳の会. 2023年6月4日, オンライン
15. 和田友香: 授乳と薬. 医師のための母乳育児支援セミナー. NPO 法人日本ラクテーション・コンサルタント協会. 2023年11月, 東京, オンライン
16. 和田友香: 食道閉鎖の新生児管理. 第3回胎児食道閉鎖研究会. 2023年11月, オンライン
17. 和田友香: 産後ケア事業における母乳に関する最新情報と科学的根拠に基づいた支援ー母親の思いに寄り添ったケアを考えるー. 奈良県奈良市研修会. 2023年12月, オンライン
18. 丸山秀彦, 志内梨紗, 菅島加奈子, 本間直美, 諫山哲哉, 伊藤裕司: 都市部 NICU の実情, 課題. シンポジウム 第67回新生児成育医学会. 2023.11.24-26
19. 余谷暢之: 周産期緩和ケアの取り組みー胎児期からの緩和ケアとの協働の可能性について考えるー. 第28回日本緩和医療学会学術大会, 2023.7.1. 兵庫
20. 余谷暢之: 小児科医がこどものこえを社会の声にするためにー小児科医によるこどもアドボカシー活動ー. 第36回日本小児救急医学会学術集会, 2023.7.23. 千葉
21. 余谷暢之: Lifeを支える小児緩和ケア. 日本緩和医療学会第5回北海道支部学術大会, 2023.8.26.

北海道

22. 余谷暢之：こどものこえを社会に届けるために～小児科医ができるアドボカシー活動について考える～. 横浜 General Pediatrics フォーラム, 2023. 9. 13. 神奈川
23. 余谷暢之：こどもたちに緩和ケアを届けるために大切にしたいこと. 第2回北海道・東北ブロック小児がん相談支援研修, 2023. 9. 16. Web
24. 余谷暢之：非がん疾患における緩和ケアの視点. 第55回日本小児呼吸器学会学術集会, 2023. 10. 7. 兵庫
25. 余谷暢之：重症心身障害児者の医療における代理意思決定支援について考える～本人を主語に関わるために～. 第48回日本重症心身障害学会学術集会, 2023. 10. 27. 千葉
26. 余谷暢之：わが国における小児緩和ケアの実践. 小児緩和ケアフォーラム2023, 2023. 11. 4. Web
27. 余谷暢之：緩和ケアの視点から見た新生児の症状緩和と意思決定支援. 第26回京浜新生児医療懇話会, 2023. 11. 25. Web
28. 余谷暢之：小児の緩和ケアについて考える. 小児薬物療法研修会, 2023. 12. 12. 東京
29. 余谷暢之：重症心身障害児者医療における代理意思決定支援について考える. 神戸医療福祉センターにこにこハウス講演会 ACP の基礎を学ぶ, 2023. 12. 15. Web
30. 余谷暢之：こどものこえを社会に届ける小児科医の育成～小児科医に対するアドボカシー教育の実践～. 第22回日本小児医学教育研究会, 2023. 12. 16. 神奈川
31. 余谷暢之：最期まで「生きる」を支える. 第51回鹿児島小児在宅ケア・人工呼吸療法研究会記念講演会, 2023. 12. 20. Web
32. 余谷暢之：こどもの終末期について考える. 第2回臓器提供を考えるコーディネートワークショップ, 2023. 12. 21. 東京
33. 余谷暢之：治癒が望めない病気を持つ子どもと家族に関わる際に大切にしたいこと. 都立特別支援学校（病弱教育）長 実践研究会, 2023. 12. 26. 東京
34. 余谷暢之：周産期・新生児領域の緩和ケアの実践～家族になることを支えるために～. 令和5年度緩和ケアチーム主催講演会, 2024. 2. 6. Web
35. 余谷暢之：緩和ケアの視点から見た重症児支援～こどもたちの Life を支える～. 第2回あいち小児小児在宅医療研修会, 2024. 2. 9. 愛知
36. 余谷暢之：周産期・新生児領域の緩和ケアの実践～家族になることを支えるために～. 第36回京滋新生児育成研究会, 2024. 2. 10. Web
37. 余谷暢之：患者家族滞在施設と小児緩和ケア. 第24回 JHH ネットワーク会議講演, 2024. 2. 11. Web
38. 余谷暢之：こどものこえを社会に届けるために～小児科医ができるアドボカシー活動について考える～. 群馬大学小児科専門医特別セミナー, 2024. 3. 19. 群馬

【広報活動】

1. 石黒 精：血液の病気は子どもにもよく起こります. 医学会総会オープンステージ, 東京, 2023. 4. 17
2. 和田友香：ヒューマニエンス「乳」. 2023年6月
3. 和田友香：TBS のNスタ「保育とAI」. 11月10日
4. 和田友香：朝日新聞社. くらし報道部. 保育園と搾乳. 9月
5. 和田友香：Eテレ「はなしちゃお！」おっぱい×生物学. 12月

4-22 小児と薬情報収集ネットワーク整備事業

〔原著論文：査読付〕 (Reviewed Paper)

1. 中山絢愛, 中野孝介, 中國正祥, 出口尚子, 三井誠二, 小林信二, 小西麗子, 向井啓, 小森浩二, 河田興: 小児医療情報収集システムデータベースに基づく新生児におけるデクスメトミジンの処方実態. 日本小児臨床薬理学会 2023. 8 ; 36 (1) : 49-54
2. 東浩二, 三浦大, 小野博, 坂口平馬, 中國正祥, 中野孝介: 小児循環器疾患患者におけるプロプラノロール処方の実態調査. 日本小児科学会 2023. 12 ; 127 (12) : 1499-1504

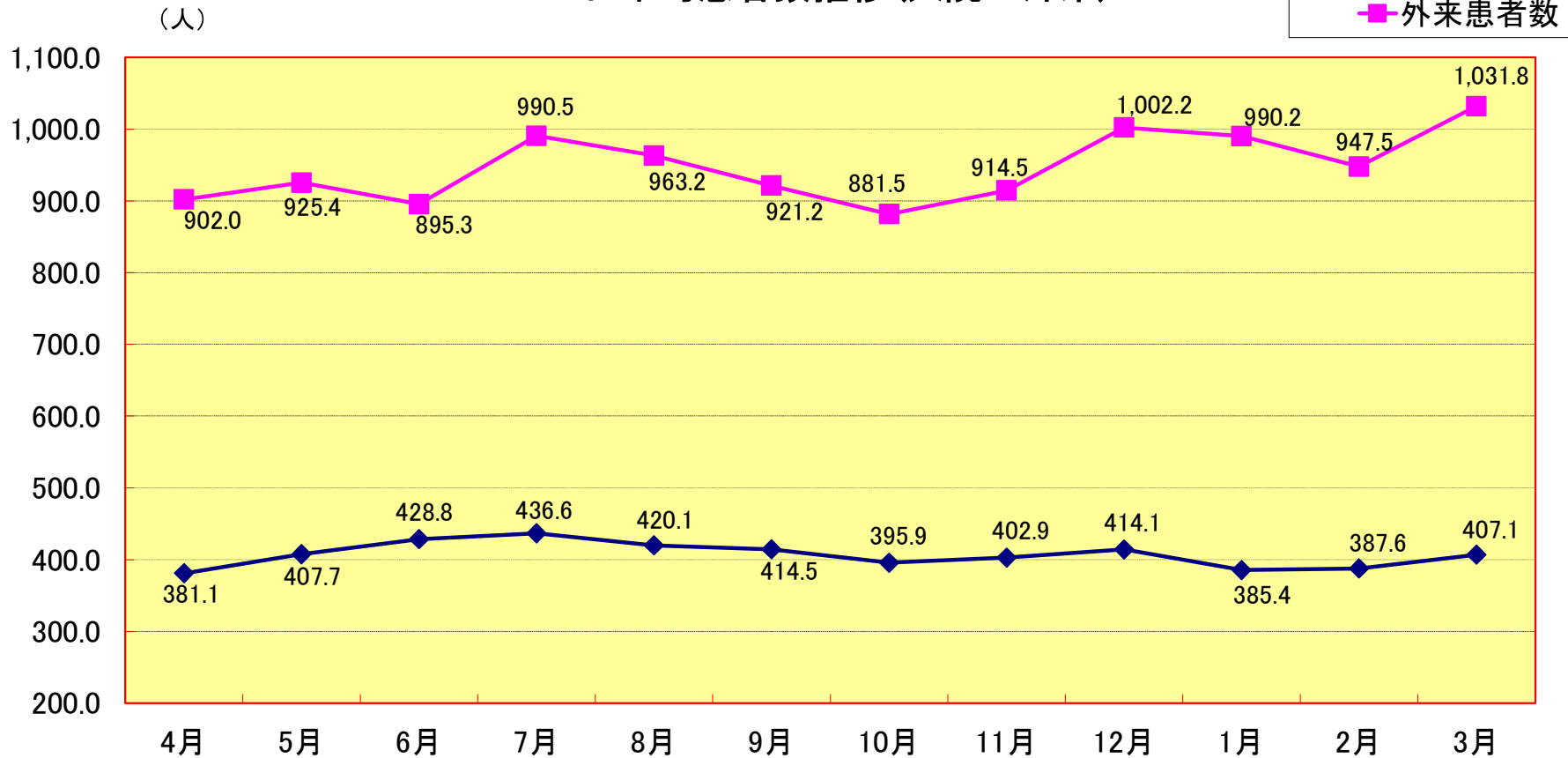
〔学会発表〕

1. 東浩二, 三浦大, 小野博, 坂口平馬, 中國正祥, 中野孝介: 小児循環器疾患患者におけるプロプラノロール処方の実態調査. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4
2. 中野孝介, 伊藤秀一, 出口尚子, 三井誠二, 中國正祥, 小林信二: リアルワールドデータを用いた小児ネフローゼ症候群に対する免疫抑制薬の適応外使用実態調査. 第126回日本小児科学会学術集会, 東京, 2023. 4. 15
3. 中野孝介: 小児医療情報システムを用いた小児科領域におけるTDM (Therapeutic Drug Monitoring) に関する実態調査の実施可能性. 第39回日本TDM学会・学術大会, 東京, 2023. 6
4. 中國正祥, 中野孝介, 乾あやの, 出口尚子, 三井誠二, 小林信二, 宮崎生子, 栗山猛: 小児医療情報収集システムを用いた小児薬物性肝機能障害の臨床実態に関する実態調査. 第50回日本小児栄養消化器肝臓学会学術集会, 宮城, 2023. 10. 20

5.医事統計

別添参照

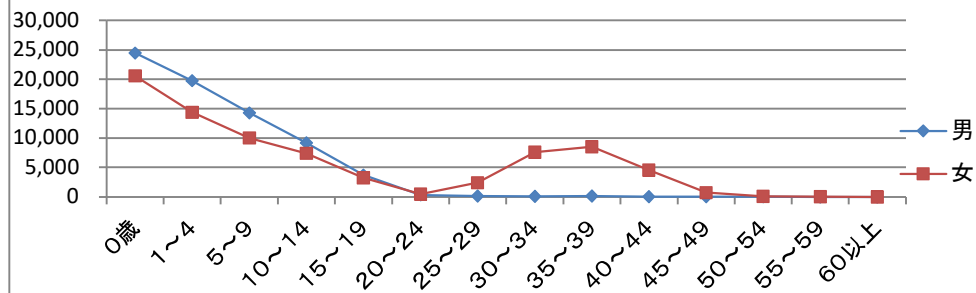
一日平均患者数推移(入院・外来)



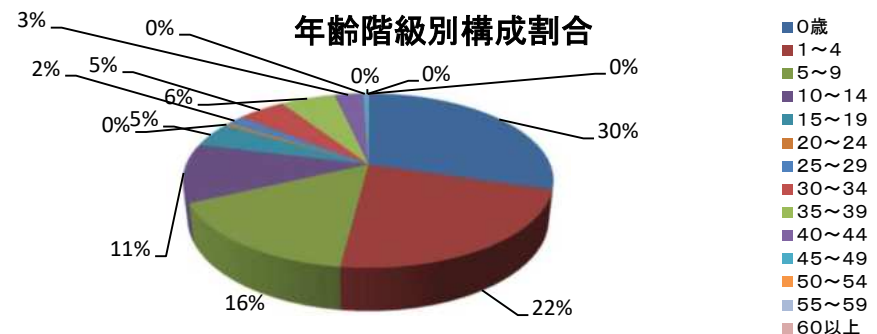
【令和5年度】

区 分	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
入院患者数	381.1	407.7	428.8	436.6	420.1	414.5	395.9	402.9	414.1	385.4	387.6	407.1	406.9
外来患者数	902.0	925.4	895.3	990.5	963.2	921.2	881.5	914.5	1,002.2	990.2	947.5	1,031.8	946.6

年齢階級別入院患者数

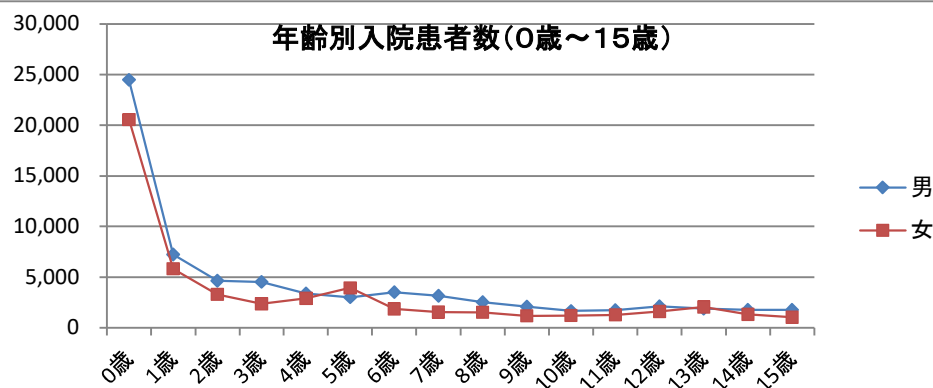


年齢階級別構成割合

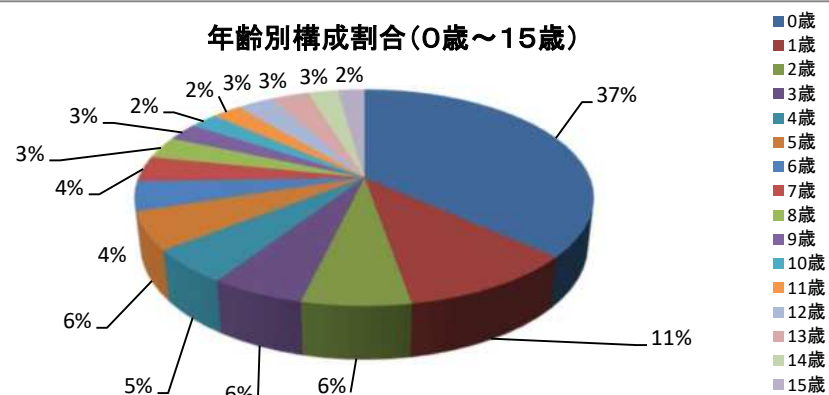


	0歳	1~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59	60以上	総計
男	24,463	19,770	14,285	9,188	3,730	342	152	67	107	38	23	28	0	0	72,193
女	20,557	14,368	10,011	7,420	3,219	490	2,412	7,586	8,526	4,524	712	64	33	0	79,922
合計	45,020	34,138	24,296	16,608	6,949	832	2,564	7,653	8,633	4,562	735	92	33	0	152,115
構成割合	29.6%	22.4%	16.0%	10.9%	4.6%	0.6%	1.7%	5.0%	5.7%	3.0%	0.5%	0.1%	0.0%	0.0%	100.0%

年齢別入院患者数(0歳~15歳)

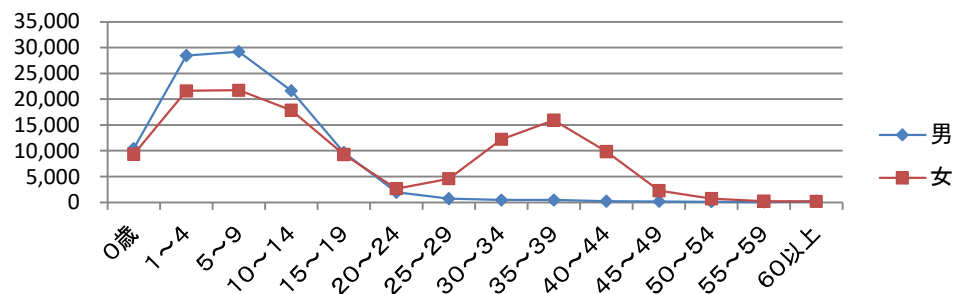


年齢別構成割合(0歳~15歳)

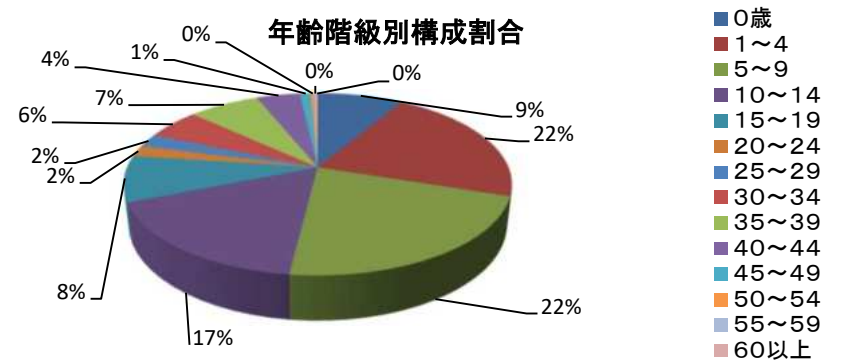


	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	総計
男	24,463	7,232	4,645	4,511	3,382	3,014	3,511	3,147	2,523	2,090	1,670	1,750	2,099	1,891	1,778	1,764	69,470
女	20,557	5,816	3,283	2,365	2,904	3,928	1,840	1,554	1,518	1,171	1,218	1,253	1,595	2,048	1,306	1,042	53,398
合計	45,020	13,048	7,928	6,876	6,286	6,942	5,351	4,701	4,041	3,261	2,888	3,003	3,694	3,939	3,084	2,806	122,868
構成割合	36.6%	10.6%	6.5%	5.6%	5.1%	5.7%	4.4%	3.8%	3.3%	2.7%	2.4%	2.4%	3.0%	3.2%	2.5%	2.3%	100.0%

年齢階級別外来患者数

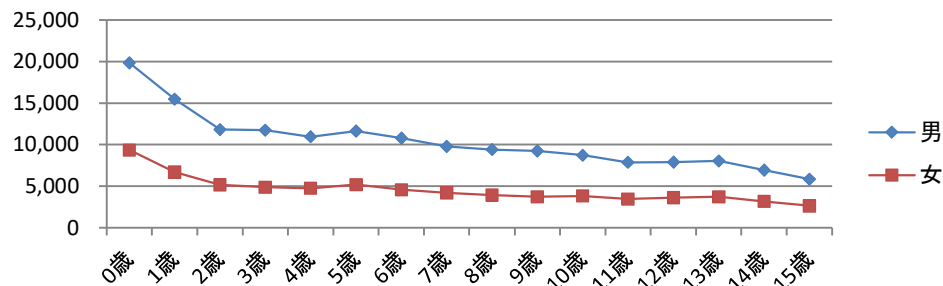


年齢階級別構成割合

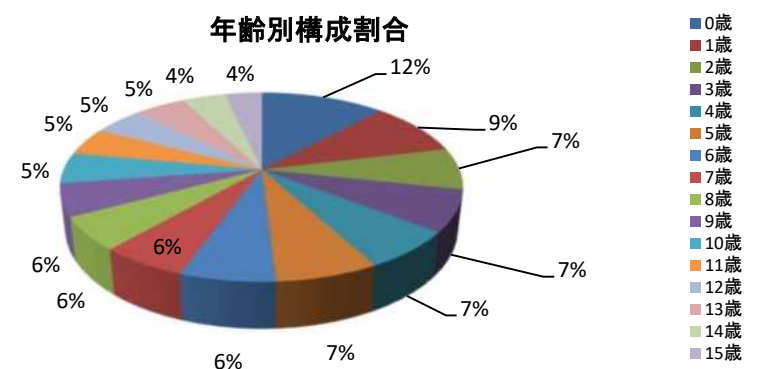


	0歳	1~4	5~9	10~14	15~19	20~24	25~29	30~34	35~39	40~44	45~49	50~54	55~59	60以上	総計
男	10,488	28,457	29,217	21,678	9,687	1,959	761	454	465	244	214	135	61	234	104,054
女	9,369	21,595	21,743	17,872	9,294	2,652	4,624	12,219	15,933	9,871	2,277	745	240	202	128,636
合計	19,857	50,052	50,960	39,550	18,981	4,611	5,385	12,673	16,398	10,115	2,491	880	301	436	232,690
構成割合	8.5%	21.5%	21.9%	17.0%	8.2%	2.0%	2.3%	5.5%	7.1%	4.4%	1.1%	0.4%	0.1%	0.2%	100.0%

年齢別外来患者数(0歳~15歳)



年齢別構成割合



	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12歳	13歳	14歳	15歳	総計
男	10,488	8,757	6,649	6,844	6,207	6,424	6,178	5,597	5,484	5,534	4,897	4,412	4,292	4,318	3,759	3,208	93,048
女	9,369	6,728	5,169	4,920	4,778	5,227	4,612	4,212	3,957	3,735	3,829	3,471	3,637	3,747	3,188	2,654	73,233
合計	19,857	15,485	11,818	11,764	10,985	11,651	10,790	9,809	9,441	9,269	8,726	7,883	7,929	8,065	6,947	5,862	166,281
構成割合	11.9%	9.3%	7.1%	7.1%	6.6%	7.0%	6.5%	5.9%	5.7%	5.6%	5.3%	4.7%	4.8%	4.9%	4.2%	3.5%	100.0%

2 病棟別統計

2－1表 病棟別・月別入院患者数

(単位 : 人)

病棟別			病床数	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	合計
一般	4階東	PICU	20	574	596	598	618	602	590	620	594	602	609	575	606	7,184
	4階西	NICU	21	630	650	630	651	649	629	650	630	650	646	590	633	7,638
		病的新生児・未熟児 (GCU)	18	432	397	475	469	428	411	440	449	482	422	331	319	5,055
	6階東	母性・分娩	22	470	602	541	604	578	547	503	510	551	521	442	545	6,414
		MFICU	6	170	170	167	182	171	165	162	156	161	176	134	168	1,982
	6階西	周産期	36	706	1,008	909	1,032	1,025	908	777	812	933	931	680	875	10,596
		病的新生児・未熟児 (GCU)	12	322	290	303	307	266	275	301	301	326	313	180	151	3,335
	7階東	小児(一般外科)	37	1,000	1,006	1,039	1,084	1,006	973	994	1,003	993	888	948	1,051	11,985
	7階西	小児(特殊外科)	37	967	1,030	1,054	1,080	1,040	970	949	945	972	859	934	1,043	11,843
	8階東	小児(内科系)(学童)	32	859	879	908	902	899	905	915	883	912	855	837	914	10,668
	8階西	小児(小児がん)	30	762	772	750	813	784	762	794	789	801	763	700	760	9,250
	9階東	小児(内科系)(乳幼児)	30	690	772	768	823	742	735	727	693	705	616	695	757	8,723
	9階西	小児(内科系)(乳幼児)	30	837	848	826	837	865	830	863	818	855	815	796	878	10,068
	10階東	成人 (キャリアオーバー)	40	571	792	898	950	823	782	803	843	882	700	715	851	9,610
	10階西	小児(小児がん)	37	990	1,015	1,014	1,042	1,071	993	1,012	966	1,018	1,016	979	1,069	12,185
	11階東	成人(内科系)、周産期	36	564	661	914	994	891	835	772	694	840	671	863	937	9,636
	11階西	周産期(病的新生児8床含)	35	677	921	825	920	935	887	771	777	943	909	615	826	10,006
	もみじの家	医療型短期入所(福祉)	11	211	229		228	248	237	221	224	211	236	225	236	2,506
一般計			490	11,432	12,638	12,619	13,536	13,023	12,434	12,274	12,087	12,837	11,946	11,239	12,619	148,684

※H31.3現在医療法病床数

2-2表 病棟別・月別1日平均入院患者数

(単位：人)

病棟別			病床数	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	合計
一般	4階東	PICU	20	19.1	19.2	19.9	19.9	19.4	19.7	20.0	19.8	19.4	19.6	19.8	19.5	19.7
	4階西	NICU	21	21.0	21.0	21.0	21.0	20.9	21.0	21.0	21.0	21.0	20.8	20.3	20.4	20.9
		病的新生児・未熟児 (GCU)	18	14.4	12.8	15.8	15.1	13.8	13.7	14.2	15.0	15.5	13.6	11.4	10.3	13.8
	6階東	母性・分娩	22	15.7	19.4	18.0	19.5	18.6	18.2	16.2	17.0	17.8	16.8	15.2	17.6	17.6
		MFICU	6	5.7	5.5	5.6	5.9	5.5	5.5	5.2	5.2	5.2	5.7	4.6	5.4	5.4
	6階西	周産期	36	23.5	32.5	30.3	33.3	33.1	30.3	25.1	27.1	30.1	30.0	23.4	28.2	29.0
		病的新生児・未熟児 (GCU)	12	10.7	9.4	10.1	9.9	8.6	9.2	9.7	10.0	10.5	10.1	6.2	4.9	9.1
	7階東	小児（一般外科）	37	33.3	32.5	34.6	35.0	32.5	32.4	32.1	33.4	32.0	28.6	32.7	33.9	32.8
	7階西	小児（特殊外科）	37	32.2	33.2	35.1	34.8	33.5	32.3	30.6	31.5	31.4	27.7	32.2	33.6	32.4
	8階東	小児（内科系）（学童）	32	28.6	28.4	30.3	29.1	29.0	30.2	29.5	29.4	29.4	27.6	28.9	29.5	29.2
	8階西	小児（小児がん）	30	25.4	24.9	25.0	26.2	25.3	25.4	25.6	26.3	25.8	24.6	24.1	24.5	25.3
	9階東	小児（内科系）（乳幼児）	30	23.0	24.9	25.6	26.5	23.9	24.5	23.5	23.1	22.7	19.9	24.0	24.4	23.9
	9階西	小児（内科系）（乳幼児）	30	27.9	27.4	27.5	27.0	27.9	27.7	27.8	27.3	27.6	26.3	27.4	28.3	27.6
	10階東	成人 （キャリアオーバー）	40	19.0	25.5	29.9	30.6	26.5	26.1	25.9	28.1	28.5	22.6	24.7	27.5	26.3
	10階西	小児（小児がん）	37	33.0	32.7	33.8	33.6	34.5	33.1	32.6	32.2	32.8	32.8	33.8	34.5	33.4
	11階東	成人（内科系）、周産期	36	18.8	21.3	30.5	32.1	28.7	27.8	24.9	23.1	27.1	21.6	29.8	30.2	26.4
	11階西	周産期（病的新生児8床舎）	35	22.6	29.7	27.5	29.7	30.2	29.6	24.9	25.9	30.4	29.3	21.2	26.6	27.4
もみじの家			医療型短期入所（福祉）	11	7.0	7.4	8.1	7.4	8.0	7.9	7.1	7.5	6.8	7.6	7.6	6.9
一般計			490	381.1	407.7	420.6	436.6	420.1	414.5	395.9	402.9	414.1	385.4	401.4	407.1	407.4

※H31.3現在医療法病床数

2-3表 病棟別・月別病床利用率

(单位 : %)

病棟別			病床数	令和５年 ４月	５月	６月	７月	８月	９月	１０月	１１月	１２月	令和６年 １月	２月	３月	合　計
一	４階東	P I C U	20	95.5	96.0	99.5	99.5	97.0	98.5	100.0	99.0	97.0	98.0	99.0	97.5	98.5
	４階西	N I C U	21	100.0	100.0	100.0	100.0	99.5	100.0	100.0	100.0	100.0	99.0	96.7	97.1	99.5
		病的新生児・未熟児（GCU）	18	80.0	71.1	87.8	83.9	76.7	76.1	78.9	83.3	86.1	75.6	63.3	57.2	76.7
	６階東	母性・分娩	22	71.4	88.2	81.8	88.6	84.5	82.7	73.6	77.3	80.9	76.4	69.1	80.0	80.0
		MFIGU	6	95.0	91.7	93.3	98.3	91.7	91.7	86.7	86.7	86.7	95.0	76.7	90.0	90.0
	６階西	周産期	36	65.3	90.3	84.2	92.5	91.9	84.2	69.7	75.3	83.6	83.3	65.0	78.3	80.6
		病的新生児・未熟児（GCU）	12	89.2	78.3	84.2	82.5	71.7	76.7	80.8	83.3	87.5	84.2	51.7	40.8	75.8
	７階東	小児（一般外科）	37	90.0	87.8	93.5	94.6	87.8	87.6	86.8	90.3	86.5	77.3	88.4	94.2	88.6
	７階西	小児（特殊外科）	37	87.0	89.7	94.9	94.1	90.5	87.3	82.7	85.1	84.9	74.9	87.0	93.3	87.6
般	８階東	小児（内科系）(学童)	32	89.4	88.8	94.7	90.9	90.6	94.4	92.2	91.9	91.9	86.3	90.3	92.2	91.3
	８階西	小児(小児がん)	30	84.7	83.0	83.3	87.3	84.3	84.7	85.3	87.7	86.0	82.0	80.3	81.7	84.3
	９階東	小児（内科系）(乳幼児)	30	76.7	83.0	85.3	88.3	79.7	81.7	78.3	77.0	75.7	66.3	80.0	81.3	79.7
	９階西	小児（内科系）(乳幼児)	30	93.0	91.3	91.7	90.0	93.0	92.3	92.7	91.0	92.0	87.7	91.3	94.3	92.0
	10階東	成人 （キャリアオーバー）	40	47.5	63.8	74.8	76.5	66.3	65.3	64.8	70.3	71.3	56.5	61.8	70.5	65.8
	10階西	小児（小児がん）	37	89.2	88.4	91.4	90.8	93.2	89.5	88.1	87.0	88.6	88.6	91.4	86.3	90.3
	11階東	成人（内科系）、周産期	36	52.2	59.2	84.7	89.2	79.7	77.2	69.2	64.2	75.3	60.0	82.8	83.9	73.3
	11階西	周産期(病的新生児8床含)	35	64.6	84.9	78.6	84.9	86.3	84.6	71.1	74.0	86.9	83.7	60.6	76.0	78.3
	もみじの家	医療型短期入所（福祉）	11	63.6	67.3	73.6	67.3	72.7	71.8	64.5	68.2	61.8	69.1	70.9	69.1	62.7
一　　　　般　　　　計			490	77.8	83.2	85.8	89.1	85.7	84.6	80.8	82.2	84.5	78.7	81.9	83.1	83.1

※H31.3現在医療法病床数にて算出

2-4表 病棟別・月別新入院患者数

(单位：人)

病棟別			病床数	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	合 計
一般	4階東	PICU	20	25	40	48	43	29	19	31	23	24	19	23	20	344
	4階西	NICU	21	34	35	33	36	33	33	33	28	30	25	30	23	373
		病的新生児・未熟児 (GCU)	18	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	6階東	母性・分娩	22	60	59	66	70	55	35	61	58	66	60	57	69	716
		MFICU	6	7	10	9	13	16	9	7	15	11	14	18	11	140
	6階西	周産期	36	178	264	221	250	244	213	180	205	231	254	168	195	2,603
		病的新生児・未熟児 (GCU)	12	17	22	18	19	19	28	13	31	17	32	16	24	256
	7階東	小児（一般外科）	37	70	80	92	77	97	99	80	77	84	90	74	75	995
	7階西	小児（特殊外科）	37	61	88	91	77	60	69	79	79	83	77	86	59	909
	8階東	小児（内科系）（学童）	32	82	90	60	79	71	56	63	62	57	90	76	83	869
	8階西	小児（小児がん）	30	43	41	68	57	74	69	56	42	53	51	72	80	706
	9階東	小児（内科系）（乳幼児）	30	92	96	103	110	113	124	108	104	105	107	82	119	1,263
	9階西	小児（内科系）（乳幼児）	30	54	53	63	87	50	54	69	73	56	56	59	63	737
	10階東	成人 （キャリアオーバー）	40	93	115	130	121	96	101	109	101	95	75	74	97	1,207
	10階西	小児（小児がん）	37	54	75	66	79	66	58	77	69	73	76	64	65	822
	11階東	成人（内科系）、周産期	36	86	75	90	92	130	84	71	90	85	94	92	103	1,092
	11階西	周産期（病的新生児8床含）	35	8	13	16	17	20	11	7	5	15	14	13	23	162
	もみじの家	医療型短期入所（福祉）	11	51	57	60	52	66	52	54	57	52	54	58	58	671
一 般 計			490	1,015	1,213	1,234	1,279	1,239	1,114	1,098	1,119	1,137	1,188	1,062	1,167	13,865

※H31. 3現在医療法病床数

2－5表 病棟別・月別退院患者数

(単位：人)

病棟別			病床数	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	合計
一般	4階東	PICU	20	1	3	9	6	8	4	2	4	4	4	2	7	54
	4階西	NICU	21	3	3	3	2	3	2	1	1	1	3	3	3	28
		病的新生児・未熟児 (GCU)	18	6	9	5	9	7	11	6	10	5	16	15	19	118
	6階東	母性・分娩	22	58	63	78	70	58	44	40	54	61	66	58	65	715
		MFICU	6	1	0	1	0	3	2	0	1	0	0	0	2	10
	6階西	周産期	36	81	119	106	104	113	86	93	85	106	113	95	101	1,202
		病的新生児・未熟児 (GCU)	12	17	19	21	17	21	15	11	16	18	17	15	13	200
	7階東	小児（一般外科）	37	89	94	104	89	103	117	89	83	109	78	77	85	1,117
	7階西	小児（特殊外科）	37	74	93	87	87	78	84	93	95	106	70	107	78	1,052
	8階東	小児（内科系）（学童）	32	94	84	69	75	80	69	63	71	70	76	83	89	923
	8階西	小児（小児がん）	30	48	37	73	52	76	73	53	45	53	42	74	77	703
	9階東	小児（内科系）（乳幼児）	30	79	85	87	96	105	105	96	86	106	69	71	99	1,084
	9階西	小児（内科系）（乳幼児）	30	57	63	69	88	52	64	69	70	70	54	59	71	786
	10階東	成人 （キャリアオーバー）	40	72	92	117	109	90	80	89	90	110	65	65	78	1,057
	10階西	小児（小児がん）	37	65	73	92	84	74	74	78	80	98	59	74	79	930
	11階東	成人（内科系）、周産期	36	90	82	113	98	148	107	84	90	111	81	112	132	1,248
	11階西	周産期（病的新生児8床舎）	35	126	189	180	193	202	176	148	159	199	194	130	163	2,059
	もみじの家	医療型短期入所（福祉）	11	56	53	58	57	64	52	55	57	53	52	57	63	677
一般計			490	1,017	1,161	1,272	1,236	1,285	1,165	1,070	1,097	1,280	1,059	1,097	1,224	13,963

※H31.3現在医療法病床数

2－6表 病棟別・月別平均在院日数

(単位：日)

病棟別			病床数	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	合計
一般	4階東	PICU	20	44.2	27.7	21.0	25.2	32.5	51.3	37.6	44.0	43.0	53.0	46.0	44.9	36.1
	4階西	NICU	21	34.1	34.2	35.0	34.3	36.1	35.9	38.2	43.4	41.9	46.1	35.8	48.7	38.1
		病的新生児・未熟児 (GCU)	18	144.0	88.2	190.0	104.2	122.3	74.7	146.7	89.8	192.8	52.8	44.1	33.6	85.7
	6階東	母性・分娩	22	8.0	9.9	7.5	8.6	10.2	13.8	10.0	9.1	8.7	8.3	7.7	8.1	9.0
		MFICU	6	42.5	34.0	33.4	28.0	18.0	30.0	46.3	19.5	29.3	25.1	14.9	25.8	26.4
	6階西	周産期	36	5.5	5.3	5.6	5.8	5.7	6.1	5.7	5.6	5.5	5.1	5.2	5.9	5.6
		病的新生児・未熟児 (GCU)	12	18.9	14.1	15.5	17.1	13.3	12.8	25.1	12.8	18.6	12.8	11.6	8.2	14.6
	7階東	小児（一般外科）	37	12.6	11.6	10.6	13.1	10.1	9.0	11.8	12.5	10.3	10.6	12.6	13.1	11.3
	7階西	小児（特殊外科）	37	14.3	11.4	11.8	13.2	15.1	12.7	11.0	10.9	10.3	11.7	9.7	15.2	12.1
	8階東	小児（内科系）（学童）	32	9.8	10.1	14.1	11.7	11.9	14.5	14.5	13.3	14.4	10.3	10.5	10.6	11.9
	8階西	小児（小児がん）	30	16.7	19.8	10.6	14.9	10.5	10.7	14.6	18.1	15.1	16.4	9.6	9.7	13.1
	9階東	小児（内科系）（乳幼児）	30	8.1	8.5	8.1	8.0	6.8	6.4	7.1	7.3	6.7	7.0	9.1	6.9	7.4
	9階西	小児（内科系）（乳幼児）	30	15.1	14.6	12.5	9.6	17.0	14.1	12.5	11.4	13.6	14.8	13.5	13.1	13.2
	10階東	成人 （キャリアオーバー）	40	6.9	7.7	7.3	8.3	8.8	8.6	8.1	8.8	8.6	10.0	10.3	9.7	8.5
	10階西	小児（小児がん）	37	16.6	13.7	12.8	12.8	15.3	15.0	13.1	13.0	11.9	15.1	14.2	14.8	13.9
	11階東	成人（内科系）、周産期	36	6.4	8.4	9.0	10.5	6.4	8.7	10.0	7.7	8.6	7.7	8.5	8.0	8.2
	11階西	周産期（病的新生児8床舎）	35	10.1	9.1	8.4	8.8	8.4	9.5	9.9	9.5	8.8	8.7	8.6	8.9	9.0
	もみじの家	医療型短期入所（福祉）	11	3.9	4.2	0.0	4.2	3.8	4.6	4.1	3.9	4.0	4.5	3.9	3.9	3.7
一般計			490	11.3	10.6	10.1	10.8	10.3	10.9	11.3	10.9	10.6	10.6	10.4	10.6	10.7

※H31.3現在医療法病床数

３－１表 診療科別・月別入院患者数、構成割合

診療科名	院内標榜科名	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	合計	4月～3月 一日平均	4月～3月 割合
内科	母性内科	42	68	26	77	49	10	53	47	60	44	59	54	589	1.6	0.4
精神科	こころの診療科							14	9	6	0	0	7	36	0.1	0.0
	児童・思春期メンタル ヘルス科	2	0	0	0	10	0							12	0.0	0.0
	乳幼児メンタルヘルス科	8	0	0	0	0	0	12						20	0.1	0.0
	小計	10	0	0	0	10	0	12	9	6	0	0	7	68	0.2	0.0
神経科	神経内科	175	268	248	170	187	249	207	213	273	379	278	205	2,852	7.8	1.9
	在宅診療科	211	223	240	227	248	237	218	223	205	230	225	229	2,716	7.4	1.8
	小計	386	491	488	397	435	486	425	436	478	609	503	434	5,568	15.3	3.7
呼吸器科	呼吸器科	30	58	47	95	43	36	40	59	52	22	48	34	564	1.5	0.4
消化器科	消化器科	264	289	315	245	263	387	447	450	402	303	330	313	4,008	11.0	2.7
	肝臓内科													0	0.0	0.0
	小計	264	289	315	245	263	387	447	450	402	303	330	313	4,008	11.0	2.7
循環器科	循環器科	291	358	334	421	450	428	419	413	457	336	276	332	4,515	12.4	3.0
アレルギー科	アレルギー科	229	156	151	203	255	250	207	136	255	184	163	249	2,438	6.7	1.6
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病 総合診（成人診療科含む）	331	348	455	505	452	488	402	362	493	369	434	474	5,113	14.0	3.4
	救急診療科	9	13	8	7	6	3	11	8	15	8	4	9	101	0.3	0.1
	血液腫瘍科	1,257	1,380	1,251	1,402	1,301	1,291	1,401	1,448	1,454	1,576	1,417	1,553	16,731	45.8	11.2
	血液内科													0	0.0	0.0
	ライソゾーム病センター	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0.0	0.0
	内分泌・代謝科	152	144	164	102	250	160	211	193	249	176	128	150	2,079	5.7	1.4
	遺伝診療科													0	0.0	0.0
	免疫科	35	55	60	57	68	43	59	50	89	39	75	59	689	1.9	0.5
	新生児科	1,885	2,110	2,092	2,119	2,057	1,941	1,929	2,028	2,207	2,200	1,596	1,699	23,863	65.4	16.0
	移植外科	700	543	497	513	562	637	538	602	557	549	641	713	7,052	19.3	4.7
	緩和ケア科	0	2	0	0	0	0	3	0	5	5	0	7	22	0.1	0.0
	小計	6,405	7,083	7,430	7,556	6,996	6,506	6,513	6,789	6,999	6,541	6,226	6,708	81,752	224.0	55.0
外科	外科	301	306	374	458	322	299	315	345	267	310	351	486	4,134	11.3	2.8
整形外科	整形外科	400	341	415	491	437	424	396	348	461	397	444	438	4,992	13.7	3.4
形成外科	形成外科	85	55	116	158	147	84	103	55	115	77	87	107	1,189	3.3	0.8
脳神経外科	脳神経外科	475	522	528	421	607	635	561	413	419	346	324	590	5,841	16.0	3.9
心臓血管外科	心臓血管外科	12	1	1	8	4	7	3	15	14	9	11	6	91	0.2	0.1
皮膚科	皮膚科	8	7	9	7	10	11	10	11	14	16	16	20	139	0.4	0.1
泌尿器科	泌尿器科	93	90	78	74	128	98	124	98	49	81	110	111	1,134	3.1	0.8
産婦人科	不妊診療科	2	0	0	0	0	0	0	6	0	0	0	0	8	0.0	0.0
	不育診療科	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.0	0.0
	胎児診療科	161	147	301	178	205	319	219	212	243	190	184	356	2,715	7.4	1.8
	産科	1,313	1,698	1,358	1,692	1,698	1,532	1,396	1,321	1,503	1,466	1,118	1,313	17,408	47.7	11.7
	婦人科													0	0.0	0.0
	小計	1,477	1,845	1,659	1,870	1,903	1,851	1,615	1,539	1,746	1,656	1,302	1,669	20,132	55.2	13.5
眼科	眼科	213	238	148	185	194	169	221	201	286	205	221	271	2,552	7.0	1.7
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	121	115	126	197	151	136	172	106	132	173	175	179	1,783	4.9	1.2
リハビリテーション科	リハビリテーション科													0	0.0	0.0
放射線科	放射線診断科													0	0.0	0.0
	放射線治療科													0	0.0	0.0
	小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.0	0.0
歯科	歯科													0	0.0	0.0
麻酔科	集中治療科	575	605	606	659	605	592	619	596	606	611	578	608	7,260	19.9	4.9
	麻酔科													0	0.0	0.0
	小計	575	605	606	659	605	592	619	596	606	611	578	608	7,260	19.9	4.9
合 計		11,417	12,628	12,851	13,522	13,009	12,421	12,257	12,066	12,818	11,920	11,224	12,616	148,749	389.0	100.0

3-2表 診療科別・月別1日平均入院患者数

診療科名	院内標榜科名	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	合計
内科	母性内科	1.4	2.2	0.9	2.5	1.6	0.3	1.7	1.6	1.9	1.4	2.1	1.7	1.6
精神科	こころの診療科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.3	0.2	0.0	0.0	0.2	0.1
	児童・思春期メンタルヘルス科	0.1	0.0	0.0	0.0	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	乳幼児メンタルヘルス科	0.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1
	小計	0.3	0.0	0.0	0.0	0.3	0.4	0.5	0.3	0.2	0.0	0.0	0.2	0.2
神経科	神経内科	5.8	8.6	8.3	5.5	6.0	8.3	6.7	7.1	8.8	12.2	9.9	6.6	7.8
	在宅診療科	7.0	7.2	8.0	7.3	8.0	7.9	7.0	7.4	6.6	7.4	8.0	7.4	7.4
	小計	12.9	15.8	16.3	12.8	14.0	16.2	13.7	14.5	15.4	19.6	18.0	14.0	15.3
呼吸器科	呼吸器科	1.0	1.9	1.6	3.1	1.4	1.2	1.3	2.0	1.7	0.7	1.7	1.1	1.5
消化器科	消化器科	8.8	9.3	10.5	7.9	8.5	12.9	14.4	15.0	13.0	9.8	11.8	10.1	11.0
	肝臓内科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	小計	8.8	9.3	10.5	7.9	8.5	12.9	14.4	15.0	13.0	9.8	11.8	10.1	11.0
循環器科	循環器科	9.7	11.5	11.1	13.6	14.5	14.3	13.5	13.8	14.7	10.8	9.9	10.7	12.4
アレルギー科	アレルギー科	7.6	5.0	5.0	6.5	8.2	8.3	6.7	4.5	8.2	5.9	5.8	8.0	6.7
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病	11.0	11.2	15.2	16.3	14.6	16.3	13.0	12.1	15.9	11.9	15.5	15.3	14.0
	総合診（成人診療科含む）	67.9	80.3	96.8	91.9	74.2	64.8	63.2	69.9	62.3	52.2	69.0	65.9	71.5
	救急診療科	0.3	0.4	0.3	0.2	0.2	0.1	0.4	0.3	0.5	0.3	0.1	0.3	0.3
	血液腫瘍科	41.9	44.5	41.7	45.2	42.0	43.0	45.2	48.3	46.9	50.8	50.6	50.1	45.8
	血液内科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	ライソゾーム病センター	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	内分泌・代謝科	5.1	4.6	5.5	3.3	8.1	5.3	6.8	6.4	8.0	5.7	4.6	4.8	5.7
	遺伝診療科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	免疫科	1.2	1.8	2.0	1.8	2.2	1.4	1.9	1.7	2.9	1.3	2.7	1.9	1.9
	新生児科	62.8	68.1	69.7	68.4	66.4	64.7	62.2	67.6	71.2	71.0	57.0	54.8	65.4
	移植外科	23.3	17.5	16.6	16.5	18.1	21.2	17.4	20.1	18.0	17.7	22.9	23.0	19.3
	緩和ケア科	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.2	0.2	0.0	0.2	0.1
	小計	213.5	228.5	247.7	243.7	225.7	216.9	210.1	226.3	225.8	211.0	222.4	216.4	224.0
外科	外科	10.0	9.9	12.5	14.8	10.4	10.0	10.2	11.5	8.6	10.0	12.5	15.7	11.3
整形外科	整形外科	13.3	11.0	13.8	15.8	14.1	14.1	12.8	11.6	14.9	12.8	15.9	14.1	13.7
形成外科	形成外科	2.8	1.8	3.9	5.1	4.7	2.8	3.3	1.8	3.7	2.5	3.1	3.5	3.3
脳神経外科	脳神経外科	15.8	16.8	17.6	13.6	19.6	21.2	18.1	13.8	13.5	11.2	11.6	19.0	16.0
心血管外科	心血管外科	0.4	0.0	0.0	0.3	0.1	0.2	0.1	0.5	0.5	0.3	0.4	0.2	0.2
皮膚科	皮膚科	0.3	0.2	0.3	0.2	0.3	0.4	0.3	0.4	0.5	0.5	0.6	0.6	0.4
泌尿器科	泌尿器科	3.1	2.9	2.6	2.4	4.1	3.3	4.0	3.3	1.6	2.6	3.9	3.6	3.1
産婦人科	不妊診療科	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	不育診療科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	胎児診療科	5.4	4.7	10.0	5.7	6.6	10.6	7.1	7.1	7.8	6.1	6.6	11.5	7.4
	産科	43.8	54.8	45.3	54.6	54.8	51.1	45.0	44.0	48.5	47.3	39.9	42.4	47.7
	婦人科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	小計	49.2	59.5	55.3	60.3	61.4	61.7	52.1	51.3	56.3	53.4	46.5	53.8	55.2
眼科	眼科	7.1	7.7	4.9	6.0	6.3	5.6	7.1	6.7	9.2	6.6	7.9	8.7	7.0
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	4.0	3.7	4.2	6.4	4.9	4.5	5.5	3.5	4.3	5.6	6.3	5.8	4.9
リハビリテーション科	リハビリテーション科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
放射線科	放射線診断科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	放射線治療科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	小計	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
歯科	歯科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
麻酔科	集中治療科	19.2	19.5	20.2	21.3	19.5	19.7	20.0	19.9	19.5	19.7	20.6	19.6	19.9
	麻酔科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	小計	19.2	19.5	20.2	21.3	19.5	19.7	20.0	19.9	19.5	19.7	20.6	19.6	19.9
合 計		380.6	407.4	428.4	436.2	419.6	414.0	395.4	402.2	413.5	384.5	400.9	407.0	389.0

4－1表 診療科別・月別外来患者数、構成割合

診療科名	院内標榜科名	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	合計	4月～3月 一日平均	4月～3月 割合
内科	母性内科	734	796	823	793	779	749	786	763	750	688	675	758	9,094	37.4	4.0
	女性総合外来													0	0.0	0.0
	小計	734	796	823	793	779	749	786	763	750	688	675	758	9,094	37.4	4.0
精神科	こころの診療科							715	683	748	690	650	719	4,205	17.3	1.8
	児童・思春期メンタルヘルス科	511	553	571	530	542	549	0	0	0	0	0	0	3,256	13.4	1.4
	乳幼児メンタルヘルス科	166	142	203	174	205	176	0	0	0	0	0	0	1,066	4.4	0.5
	小計	677	695	774	704	747	725	715	683	748	690	650	719	8,527	35.1	3.7
	神経内科	645	593	559	549	771	612	639	575	649	661	624	691	7,568	31.1	3.3
神経科	在宅診療科	238	252	285	255	291	269	259	260	242	266	260	268	3,145	12.9	1.4
	小計	883	845	844	804	1,062	881	898	835	891	927	884	959	10,713	44.1	4.7
呼吸器科	呼吸器科	118	124	140	154	162	120	123	139	168	144	132	185	1,709	7.0	0.7
消化器科	消化器科	373	375	377	341	402	342	365	360	390	348	356	385	4,414	18.2	1.9
	肝臓内科													0	0.0	0.0
	内視鏡科													0	0.0	0.0
	小計	373	375	377	341	402	342	365	360	390	348	356	385	4,414	18.2	1.9
循環器科	循環器科	408	404	429	456	602	424	398	385	423	393	371	546	5,239	21.6	2.3
アレルギー科	アレルギー科	1,431	1,318	1,357	1,279	1,493	1,263	1,255	1,243	1,512	1,487	1,507	1,767	16,912	69.6	7.4
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病	417	463	477	540	620	474	450	461	555	512	436	566	5,971	24.6	2.6
	総合診（成人診療科含む）	1,093	1,098	1,178	1,212	1,332	1,188	1,091	1,091	1,251	1,235	1,046	1,291	14,106	58.0	6.1
	救急診療科	1,649	2,201	2,470	2,232	1,654	1,695	1,840	1,721	1,895	1,660	1,548	1,492	22,057	90.8	9.6
	血液腫瘍科	373	333	353	397	492	393	358	349	421	367	335	437	4,608	19.0	2.0
	血液内科	41	37	49	41	45	31	42	25	13	47	29	38	438	1.8	0.2
	ライソゾーム病センター	56	53	59	50	61	54	58	56	55	54	51	60	667	2.7	0.3
	内分泌・代謝科	1,233	1,173	1,199	1,399	1,642	1,178	1,236	1,290	1,467	1,273	1,325	1,641	16,056	66.1	7.0
	遺伝診療科	104	84	114	112	132	128	124	106	116	113	104	139	1,376	5.7	0.6
	免疫科	78	97	91	97	108	68	101	105	97	80	96	99	1,117	4.6	0.5
	新生児科	204	249	296	256	306	305	303	328	248	256	241	215	3,207	13.2	1.4
	移植外科	268	275	315	306	339	298	323	249	347	326	249	385	3,680	15.1	1.6
	感染症科	17	32	37	33	34	41	34	32	29	28	21	45	383	1.6	0.2
	病理診断科													0	0.0	0.0
	小計	5,533	6,095	6,638	6,675	6,765	5,853	5,960	5,813	6,494	5,951	5,481	6,408	73,666	303.2	32.0
外科	外科	418	337	430	477	533	387	353	396	464	451	409	519	5,174	21.3	2.2
整形外科	整形外科	856	877	1,023	1,158	1,127	1,058	912	933	1,052	997	892	1,153	12,038	49.5	5.2
形成外科	形成外科	281	276	294	339	369	321	296	270	328	299	296	338	3,707	15.3	1.6
脳神経外科	脳神経外科	328	320	334	326	433	347	350	327	314	301	322	342	4,044	16.6	1.8
心臓血管外科	心臓血管外科	9	11	16	21	16	14	14	16	16	16	8	15	172	0.7	0.1
皮膚科	皮膚科	661	642	608	642	741	721	687	767	826	726	694	800	8,515	35.0	3.7
泌尿器科	泌尿器科	358	337	361	368	388	355	345	348	442	353	388	387	4,430	18.2	1.9
産婦人科	不妊診療科	293	345	352	312	337	311	311	304	222	292	269	289	3,637	15.0	1.6
	不育診療科	73	53	81	64	91	66	62	86	61	63	61	71	832	3.4	0.4
	胎児診療科	248	271	291	254	284	242	223	270	311	276	333	315	3,318	13.7	1.4
	産科	1,914	2,050	2,111	1,978	2,014	1,807	1,870	1,844	1,904	1,813	1,753	1,859	22,917	94.3	10.0
	婦人科	8	10	8	10	13	6	13	15	21	8	11	16	139	0.6	0.1
	小計	2,536	2,729	2,843	2,618	2,739	2,432	2,479	2,519	2,519	2,452	2,427	2,550	30,843	126.9	13.4
眼科	眼科	946	930	868	984	1,019	861	929	930	1,012	950	913	1,003	11,345	46.7	4.9
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	737	673	751	718	867	674	711	628	774	754	674	854	8,815	36.3	3.8
リハビリテーション科	リハビリテーション科	133	127	123	131	150	132	133	129	131	141	129	131	1,590	6.5	0.7
放射線科	放射線診断科	16	27	20	23	33	23	38	30	26	22	24	23	305	1.3	0.1
	放射線治療科	43	48	30	35	41	54	41	23	4	1	27	34	381	1.6	0.2
	小計	59	75	50	58	74	77	79	53	30	23	51	57	686	2.8	0.3
歯科	歯科	355	289	319	403	384	344	399	382	396	376	367	419	4,433	18.2	1.9
	周産期歯科	23	20	37	29	31	36	24	41	42	38	39	28	289	1.2	0.1
	小計	378	309	356	432	415	380	423	423	438	414	406	447	4,821	19.8	2.1
麻酔科	集中治療科	2	4	1	0	0	1	0	0	1	2	1	0	12	0.0	0.0
	麻酔科	180	208	256	332	307	307	300	329	320	307	337	313	3,496	14.4	1.5
	小計	182	212	257	332	307	308	300	329	321	309	338	313	3,508	14.4	1.5
合計	計	18,039	18,507	19,696	19,810	21,190	18,424	18,511	18,289	20,043	18,814	18,003	20,636	229,962	946.3	
	救急除く	16,390	16,306	17,226	17,578	19,536	16,729	16,671	16,568	18,148	17,154	16,455	19,144	207,905	855.6	
	救急・歯科除く	16,012	15,997	16,870	17,146	19,121	16,349	16,248	16,145	17,710	16,740	16,049	18,697	203,084	835.7	

4－2表 診療科別・月別外来患者数(初診)

診療科名	院内標榜科名	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	合計	4月～3月 一日平均	4月～3月 割合
内科	母性内科	27	29	39	43	28	32	34	38	37	41	32	41	421	1.7	1.7
	女性総合外来													0	0.0	0.0
	小計	27	29	39	43	28	32	34	38	37	41	32	41	421	1.7	1.7
精神科	こころの診療科	0	0	0	0	0	0	17	18	21	23	21	22	122	0.5	0.5
	児童・思春期メンタルヘルス科	19	17	19	19	20	15	0	0	0	0	0	0	109	0.4	0.5
	乳幼児メンタルヘルス科	2	3	5	5	3	3	0	0	0	0	0	0	21	0.1	0.1
	小計	21	20	24	24	23	18	17	18	21	23	21	22	252	1.0	1.0
神経科	神経内科	21	21	20	16	19	22	12	21	18	15	12	18	215	0.9	0.9
	在宅診療科	2	4	2	2	3	2	2	3	3	3	4	3	33	0.1	0.1
	小計	23	25	22	18	22	24	14	24	21	18	16	21	248	1.0	1.0
呼吸器科	呼吸器科	4	8	11	8	4	5	5	5	8	4	3	1	66	0.3	0.3
消化器科	消化器科	19	12	17	15	23	18	21	19	10	15	16	16	201	0.8	0.8
	肝臓内科													0	0.0	0.0
	内視鏡科													0	0.0	0.0
	小計	19	12	17	15	23	18	21	19	10	15	16	16	201	0.8	0.8
循環器科	循環器科	26	28	34	25	33	19	22	17	23	17	18	17	279	1.1	1.2
アレルギー科	アレルギー科	57	47	53	48	60	45	44	41	34	36	39	43	547	2.3	2.3
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病	12	11	22	33	33	16	7	6	15	8	6	6	175	0.7	0.7
	総合診（成人診療科含む）	35	33	34	50	61	34	35	36	50	34	28	48	478	2.0	2.0
	救急診療科	911	1,147	1,230	1,140	857	920	983	918	1,061	934	845	792	11,738	48.3	48.5
	血液腫瘍科	7	13	7	8	6	12	5	15	5	13	6	9	106	0.4	0.4
	血液内科	0	4	2	2	1	2	3	1	0	2	1	1	19	0.1	0.1
	ライソゾーム病センター	0	0	2	1	2	0	2	1	2	2	3	0	15	0.1	0.1
	内分泌・代謝科	30	33	25	32	25	28	39	29	29	34	30	37	371	1.5	1.5
	遺伝診療科	9	11	15	7	13	11	9	9	8	8	7	10	117	0.5	0.5
	免疫科	6	6	4	5	5	0	7	10	2	1	3	3	52	0.2	0.2
	新生児科	0	1	2	0	0	0	0	1	2	1	0	1	8	0.0	0.0
	移植外科	7	7	7	15	12	8	11	14	8	15	7	13	124	0.5	0.5
	感染症科	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	3	0.0	0.0
	病理診断科													0	0.0	0.0
	小計	1,017	1,266	1,350	1,294	1,016	1,032	1,101	1,040	1,182	1,052	936	920	13,206	54.3	54.6
外科	外科	28	26	34	30	33	24	28	19	20	33	27	32	334	1.4	1.4
整形外科	整形外科	52	65	73	64	59	71	72	62	57	50	49	49	723	3.0	3.0
形成外科	形成外科	16	16	21	18	18	25	20	16	24	21	17	18	230	0.9	1.0
脳神経外科	脳神経外科	13	16	22	16	23	17	21	16	16	13	18	21	212	0.9	0.9
心臓血管外科	心臓血管外科	0	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	3	0.0	0.0
皮膚科	皮膚科	56	57	44	57	67	67	58	64	61	54	48	54	687	2.8	2.8
泌尿器科	泌尿器科	25	32	34	22	32	18	23	29	29	19	27	21	311	1.3	1.3
産婦人科	不妊診療科	11	11	15	6	11	4	5	15	12	10	11	11	122	0.5	0.5
	不育診療科	10	7	11	10	10	4	5	15	8	8	10	10	108	0.4	0.4
	胎児診療科	51	49	47	47	65	47	40	53	52	41	53	63	608	2.5	2.5
	産科	140	156	140	142	142	122	113	128	150	161	132	151	1,677	6.9	6.9
	婦人科	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	3	0.0	0.0
	小計	212	223	213	205	228	177	163	211	223	220	207	236	2,518	10.4	10.4
眼科	眼科	64	59	58	52	57	51	58	59	64	49	50	52	673	2.8	2.8
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	80	81	80	69	80	69	67	61	81	70	73	49	860	3.5	3.6
リハビリテーション科	リハビリテーション科	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	4	0.0	0.0
放射線科	放射線診断科	0	4	4	3	2	1	10	5	7	2	2	5	45	0.2	0.2
	放射線治療科	2	1	1	1	1	1	0	0	0	1	1	0	9	0.0	0.0
	小計	2	5	5	4	3	2	10	5	7	3	3	5	54	0.2	0.2
歯科	歯科	176	134	175	230	209	184	191	178	210	188	169	204	2,248	9.3	9.3
	周産期歯科	6	6	13	12	9	7	5	11	8	5	7	2	91	0.4	0.4
	小計	182	140	188	242	218	191	196	189	218	193	176	206	2,339	9.6	9.7
麻酔科	集中治療科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0.0	0.0
	麻酔科	2	1	0	1	0	1	3	0	3	2	2	4	19	0.1	0.1
	小計	2	1	0	1	0	1	3	0	3	3	2	4	20	0.1	0.1
合計	計	1,927	2,157	2,322	2,255	2,027	1,908	1,977	1,933	2,139	1,934	1,778	1,831	24,188	99.5	
	救急除く	1,016	1,010	1,092	1,115	1,170	988	994	1,015	1,078	1,000	933	1,039	12,450	51.2	
	救急・歯科除く	834	870	904	873	952	797	798	826	860	807	757	833	10,111	41.6	

4－3表 診療科別・月別外来患者数(再診)

診 療 科 名	院内標榜科名	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	合計	4月～3月 一日平均	4月～3月 割合
内 科	母性内科	707	767	784	750	751	717	752	725	713	647	643	717	8,673	35.7	4.2
	女性総合外来													0	0.0	0.0
	小計	707	767	784	750	751	717	752	725	713	647	643	717	8,673	35.7	4.2
精 神 科	こころの診療科	0	0	0	0	0	0	698	665	727	667	629	697	4,083	16.8	2.0
	児童・思春期メンタルヘルス科	492	536	552	511	522	534	0	0	0	0	0	0	3,147	13.0	1.5
	乳幼児メンタルヘルス科	164	139	198	169	202	173	0	0	0	0	0	0	1,045	4.3	0.5
	小計	656	675	750	680	724	707	698	665	727	667	629	697	8,275	34.1	4.0
神 経 科	神経内科	624	572	539	533	752	589	627	554	631	646	612	673	7,352	30.3	3.6
	在宅診療科	236	248	283	253	288	267	257	257	239	263	256	265	3,112	12.8	1.5
	小計	860	820	822	786	1,040	856	884	811	870	909	868	938	10,464	43.1	5.1
呼吸器科	呼吸器科	114	116	129	146	158	115	118	134	160	140	129	184	1,643	6.8	0.8
消化器科	消化器科	354	363	360	326	379	324	344	341	380	333	340	369	4,213	17.3	2.0
	肝臓内科													0	0.0	0.0
	内視鏡科													0	0.0	0.0
	小計	354	363	360	326	379	324	344	341	380	333	340	369	4,213	17.3	2.0
循環器科	循環器科	382	376	395	431	569	405	376	368	400	376	353	529	4,960	20.4	2.4
アレルギー科	アレルギー科	1,374	1,271	1,304	1,231	1,433	1,218	1,211	1,202	1,478	1,451	1,468	1,724	16,365	67.3	8.0
小 児 科	腎臓・リウマチ・膠原病	405	452	455	507	587	458	443	455	540	504	430	560	5,796	23.9	2.8
	総合診（成人診療科含む）	1,058	1,065	1,144	1,162	1,271	1,154	1,056	1,055	1,201	1,201	1,018	1,243	13,628	56.1	6.6
	救急診療科	738	1,053	1,239	1,091	797	775	857	803	834	726	703	700	10,316	42.5	5.0
	血液腫瘍科	366	320	346	389	486	381	353	333	416	354	329	428	4,501	18.5	2.2
	血液内科	41	33	47	39	44	29	39	24	13	45	28	37	419	1.7	0.2
	ライソゾーム病センター	56	53	57	49	59	54	56	55	53	52	48	60	652	2.7	0.3
	内分泌・代謝科	1,203	1,140	1,174	1,367	1,617	1,150	1,197	1,261	1,438	1,239	1,295	1,604	15,685	64.5	7.6
	遺伝診療科	95	73	99	105	119	117	115	97	108	105	97	129	1,259	5.2	0.6
	免疫科	72	91	87	92	103	68	94	95	95	79	93	96	1,065	4.4	0.5
	新生児科	204	248	294	256	306	305	303	327	246	255	241	214	3,199	13.2	1.6
	移植外科	261	268	308	291	327	290	312	235	339	311	242	372	3,556	14.6	1.7
	感染症科	17	32	37	32	33	40	34	32	29	28	21	45	380	1.6	0.2
	病理診断科													0	0.0	0.0
	小計	4,516	4,828	5,287	5,380	5,749	4,821	4,859	4,772	5,312	4,899	4,545	5,488	60,456	248.8	29.4
外 科	外科	390	311	396	447	500	363	325	377	444	418	382	487	4,840	19.9	2.4
整形外科	整形外科	804	812	950	1,094	1,068	987	840	871	995	947	843	1,104	11,315	46.6	5.5
形成外科	形成外科	265	260	273	321	351	296	276	254	304	278	279	320	3,477	14.3	1.7
脳神経外科	脳神経外科	315	304	312	310	410	330	329	311	298	288	304	321	3,832	15.8	1.9
心臓血管外科	心臓血管外科	9	10	16	21	16	12	14	16	16	16	8	15	169	0.7	0.1
皮 膚 科	皮 膚 科	605	585	564	585	674	654	629	703	765	672	646	746	7,828	32.2	3.8
泌尿器科	泌尿器科	333	305	327	346	356	337	322	319	413	334	361	366	4,119	17.0	2.0
産婦人科	不妊診療科	282	334	337	306	326	307	306	289	210	282	258	278	3,515	14.5	1.7
	不育診療科	63	46	70	54	81	62	57	71	53	55	51	61	724	3.0	0.4
	胎児診療科	197	222	244	207	218	195	183	217	259	235	280	252	2,709	11.1	1.3
	産科	1,774	1,894	1,971	1,836	1,872	1,685	1,757	1,716	1,754	1,652	1,621	1,708	21,240	87.4	10.3
	婦人科	8	10	8	10	13	6	13	15	20	8	10	15	136	0.6	0.1
	小計	2,324	2,506	2,630	2,413	2,510	2,255	2,316	2,308	2,296	2,232	2,220	2,314	28,324	116.6	13.8
眼 科	眼 科	881	871	809	932	962	810	871	870	948	901	863	951	10,669	43.9	5.2
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	657	592	671	649	787	605	644	567	693	684	601	805	7,955	32.7	3.9
リハビリテーション科	リハビリテーション科	132	127	123	131	150	132	133	129	131	141	129	128	1,586	6.5	0.8
放射線科	放射線診断科	16	23	16	20	31	22	28	25	19	20	22	18	260	1.1	0.1
	放射線治療科	41	47	29	34	40	53	41	23	4	0	26	34	372	1.5	0.2
	小計	57	70	45	54	71	75	69	48	23	20	48	52	632	2.6	0.3
歯 科	歯科	179	155	144	173	175	160	208	204	186	188	198	215	2,185	9.0	1.1
	周産期歯科	17	14	24	17	22	29	19	30	34	33	32	26	297	1.2	0.1
	小計	196	169	168	190	197	189	227	234	220	221	230	241	2,482	10.2	1.2
麻 酔 科	集中治療科	2	4	1	0	0	1	0	0	1	1	1	0	11	0.0	0.0
	麻酔科	178	207	256	331	307	306	297	329	317	305	335	309	3,477	14.3	1.7
	小計	180	211	257	331	307	307	297	329	318	306	336	309	3,488	14.4	1.7
合 計	計	16,111	16,349	17,372	17,554	19,162	16,515	16,534	16,354	17,904	16,880	16,225	18,805	205,765	839.7	
	救急除く	15,373	15,296	16,133	16,463	18,365	15,740	15,677	15,551	17,070	16,154	15,522	18,105	195,449	797.2	
	救急・歯科除く	15,177	15,127	15,965	16,273	18,168	15,551	15,450	15,317	16,850	15,933	15,292	17,864	192,967	787.0	

4－4表 診療科別・月別1日平均外来患者数

診療科名	院内標榜科名	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	4月～3月 一日平均	4月～3月 割合
内科	母性内科	36.7	41.9	37.4	39.7	35.4	37.5	39.3	38.2	37.5	36.2	35.5	34.5	37.4	4.0
	女性総合外来	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	小計	36.7	41.9	37.4	39.7	35.4	37.5	39.3	38.2	37.5	36.2	35.5	34.5	37.4	4.0
精神科	こころの診療科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	35.8	34.2	37.4	36.3	34.2	32.7	17.3	1.8
	児童・思春期メンタルヘルス科	25.6	29.1	26.0	26.5	24.6	27.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	13.4	1.4
	乳幼児メンタルヘルス科	8.3	7.5	9.2	8.7	9.3	8.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.4	0.5
	小計	33.9	36.6	35.2	35.2	34.0	36.3	35.8	34.2	37.4	36.3	34.2	32.7	35.1	3.7
	神経内科	32.3	31.2	25.4	27.5	35.0	30.6	32.0	28.8	32.5	34.8	32.8	31.4	31.1	3.3
神経科	在宅診療科	11.9	13.3	13.0	12.8	13.2	13.5	13.0	13.0	12.1	14.0	13.7	12.2	12.9	1.4
	小計	44.2	44.5	38.4	40.2	48.3	44.1	44.9	41.8	44.6	48.8	46.5	43.6	44.1	4.7
呼吸器科	呼吸器科	5.9	6.5	6.4	7.7	7.4	6.0	6.2	7.0	8.4	7.6	6.9	8.4	7.0	0.7
消化器科	消化器科	18.7	19.7	17.1	17.1	18.3	17.1	18.3	18.0	19.5	18.3	18.7	17.5	18.2	1.9
	肝臓内科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	内視鏡科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	小計	18.7	19.7	17.1	17.1	18.3	17.1	18.3	18.0	19.5	18.3	18.7	17.5	18.2	1.9
循環器科	循環器科	20.4	21.3	19.5	22.8	27.4	21.2	19.9	19.3	21.2	20.7	19.5	24.8	21.6	2.3
アレルギー科	アレルギー科	71.6	69.4	61.7	64.0	67.9	63.2	62.8	62.2	75.6	78.3	79.3	80.3	69.6	7.4
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病	20.9	24.4	21.7	27.0	28.2	23.7	22.5	23.1	27.8	26.9	22.9	25.7	24.6	2.6
	総合診（成人診療科含む）	54.7	57.8	53.5	60.6	60.5	59.4	54.6	54.6	62.6	65.0	55.1	58.7	58.0	6.1
	救急診療科	82.5	115.8	112.3	111.6	75.2	84.8	92.0	86.1	94.8	87.4	81.5	67.8	90.8	9.6
	血液腫瘍科	18.7	17.5	16.0	19.9	22.4	19.7	17.9	17.5	21.1	19.3	17.6	19.9	19.0	2.0
	血液内科	2.1	1.9	2.2	2.1	2.0	1.6	2.1	1.3	0.7	2.5	1.5	1.7	1.8	0.2
	ライソゾーム病センター	2.8	2.8	2.7	2.5	2.8	2.7	2.9	2.8	2.8	2.8	2.7	2.7	2.7	0.3
	内分泌・代謝科	61.7	61.7	54.5	70.0	74.6	58.9	61.8	64.5	73.4	67.0	69.7	74.6	66.1	7.0
	遺伝診療科	5.2	4.4	5.2	5.6	6.0	6.4	6.2	5.3	5.8	5.9	5.5	6.3	5.7	0.6
	免疫科	3.9	5.1	4.1	4.9	4.9	3.4	5.1	5.3	4.9	4.2	5.1	4.5	4.6	0.5
	新生児科	10.2	13.1	13.5	12.8	13.9	15.3	15.2	16.4	12.4	13.5	12.7	9.8	13.2	1.4
	移植外科	13.4	14.5	14.3	15.3	15.4	14.9	16.2	12.5	17.4	17.2	13.1	17.5	15.1	1.6
	感染症科	0.9	1.7	1.7	1.7	1.5	2.1	1.7	1.6	1.5	1.5	1.1	2.0	1.6	0.2
	病理診断科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	小計	276.7	320.8	301.7	333.8	307.5	292.7	298.0	290.7	324.7	313.2	288.5	291.3	303.2	32.0
外科	外科	20.9	17.7	19.5	23.9	24.2	19.4	17.7	19.8	23.2	23.7	21.5	23.6	21.3	2.3
整形外科	整形外科	42.8	46.2	46.5	57.9	51.2	52.9	45.6	46.7	52.6	52.5	46.9	52.4	49.5	5.2
形成外科	形成外科	14.1	14.5	13.4	17.0	16.8	16.1	14.8	13.5	16.4	15.7	15.6	15.4	15.3	1.6
脳神経外科	脳神経外科	16.4	16.8	15.2	16.3	19.7	17.4	17.5	16.4	15.7	15.8	16.9	15.5	16.6	1.8
心臓血管外科	心臓血管外科	0.5	0.6	0.7	1.1	0.7	0.7	0.7	0.8	0.8	0.8	0.4	0.7	0.7	0.1
皮膚科	皮膚科	33.1	33.8	27.6	32.1	33.7	36.1	34.4	38.4	41.3	38.2	36.5	36.4	35.0	3.7
泌尿器科	泌尿器科	17.9	17.7	16.4	18.4	17.6	17.8	17.3	17.4	22.1	18.6	20.4	17.6	18.2	1.9
産婦人科	不妊診療科	14.7	18.2	16.0	15.6	15.3	15.6	15.6	15.2	11.1	15.4	14.2	13.1	15.0	1.6
	不育診療科	3.7	2.8	3.7	3.2	4.1	3.3	3.1	4.3	3.1	3.3	3.2	3.2	3.4	0.4
	胎児診療科	12.4	14.3	13.2	12.7	12.9	12.1	11.2	13.5	15.6	14.5	17.5	14.3	13.7	1.4
	産科	95.7	107.9	96.0	98.9	91.5	90.4	93.5	92.2	95.2	95.4	92.3	84.5	94.3	10.0
	婦人科	0.4	0.5	0.4	0.5	0.6	0.3	0.7	0.8	1.1	0.4	0.6	0.7	0.6	0.1
	小計	126.8	143.6	129.2	130.9	124.5	121.6	124.0	126.0	126.0	129.1	127.7	115.9	126.9	13.4
眼科	眼科	47.3	48.9	39.5	49.2	46.3	43.1	46.5	46.5	50.6	50.0	48.1	45.6	46.7	4.9
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	36.9	35.4	34.1	35.9	39.4	33.7	35.6	31.4	38.7	39.7	35.5	38.8	36.3	3.8
リハビリテーション科	リハビリテーション科	6.7	6.7	5.6	6.6	6.8	6.6	6.7	6.5	6.6	7.4	6.8	6.0	6.5	0.7
放射線科	放射線診断科	0.8	1.4	0.9	1.2	1.5	1.2	1.9	1.5	1.3	1.2	1.3	1.0	1.3	0.1
	放射線治療科	2.2	2.5	1.4	1.8	1.9	2.7	2.1	1.2	0.2	0.1	1.4	1.5	1.6	0.2
	小計	3.0	3.9	2.3	2.9	3.4	3.9	4.0	2.7	1.5	1.2	2.7	2.6	2.8	0.3
歯科	歯科	208.0	208.0	208.0	208.0	208.0	208.0	208.0	208.0	208.0	208.0	208.0	208.0	2,496.0	10.3
	周産期歯科	28.0	28.0	28.0	28.0	28.0	28.0	28.0	28.0	28.0	28.0	28.0	28.0	336.0	1.4
	小計	236	236	236	236	236	236	236	236	236	236	236	236	2,832	11.7
麻酔科	集中治療科	0.1	0.2	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0
	麻酔科	9.0	10.9	11.6	16.6	14.0	15.4	15.0	16.5	16.0	16.2	17.7	14.2	14.4	1.5
	小計	9.1	11.2	11.7	16.6	14.0	15.4	15.0	16.5	16.1	16.3	17.8	14.2	14.4	1.5
合計	計	902.0	974.1	895.3	990.5	963.2	921.2	925.6	914.5	1,002.2	990.2	947.5	938.0	946.3	109.6
	救急除く	819.5	858.2	783.0	878.9	838.5	833.6	833.6	828.4	907.4	902.8	866.1	870.2	855.6	
	救急・歯科除く	800.6	841.9	766.8	857.3	869.1	817.5	812.4	807.3	885.5	881.1	844.7	849.9	835.7	

4－5表 診療科別・月別1日平均外来患者数(初診)

診療科名	院内標榜科名	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	4月～3月 一日平均	4月～3月 割合
内科	母性内科	1.4	1.5	1.8	2.2	1.3	1.6	1.7	1.9	1.9	2.2	1.7	1.9	1.7	1.7
	女性総合外来	0.0												0.0	0.0
	小計	1.4	1.5	1.8	2.2	1.3	1.6	1.7	1.9	1.9	2.2	1.7	1.9	1.7	1.7
精神科	こころの診療科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9	0.9	1.1	1.2	1.1	1.0	0.5	0.5
	児童・思春期メンタルヘルス科	1.0	0.9	0.9	1.0	0.9	0.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.4
	乳幼児メンタルヘルス科	0.1	0.2	0.2	0.3	0.1	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1
	小計	1.1	1.1	1.1	1.2	1.0	0.9	0.9	0.9	1.1	1.2	1.1	1.0	1.0	1.0
神経科	神経内科	1.1	1.1	0.9	0.8	0.9	1.1	0.6	1.1	0.9	0.8	0.6	0.8	0.9	0.9
	在宅診療科	0.1	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1
	小計	1.2	1.3	1.0	0.9	1.0	1.2	0.7	1.2	1.1	0.9	0.8	1.0	1.0	1.0
呼吸器科	呼吸器科	0.2	0.4	0.5	0.4	0.2	0.3	0.3	0.3	0.4	0.2	0.2	0.0	0.3	0.3
消化器科	消化器科	1.0	0.6	0.8	0.8	1.0	0.9	1.1	1.0	0.5	0.8	0.8	0.7	0.8	0.8
	肝臓内科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	内視鏡科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	小計	1.0	0.6	0.8	0.8	1.0	0.9	1.1	1.0	0.5	0.8	0.8	0.7	0.8	0.8
循環器科	循環器科	1.3	1.5	1.5	1.3	1.5	1.0	1.1	0.9	1.2	0.9	0.9	0.8	1.1	1.1
アレルギー科	アレルギー科	2.9	2.5	2.4	2.4	2.7	2.3	2.2	2.1	1.7	1.9	2.1	2.0	2.3	2.3
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病	0.6	0.6	1.0	1.7	1.5	0.8	0.4	0.3	0.8	0.4	0.3	0.3	0.7	0.7
	総合診（成人診療科含む）	1.8	1.7	1.5	2.5	2.8	1.7	1.8	1.8	2.5	1.8	1.5	2.2	2.0	2.0
	救急診療科	45.6	60.4	55.9	57.0	39.0	46.0	49.2	45.9	53.1	49.2	44.5	36.0	48.3	48.5
	血液腫瘍科	0.4	0.7	0.3	0.4	0.3	0.6	0.3	0.8	0.3	0.7	0.3	0.4	0.4	0.4
	血液内科	0.0	0.2	0.1	0.1	0.0	0.1	0.2	0.1	0.0	0.1	0.1	0.0	0.1	0.1
	ライソゾーム病センター	0.0	0.0	0.1	0.1	0.1	0.0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.2	0.0	0.1	0.1
	内分泌・代謝科	1.5	1.7	1.1	1.6	1.1	1.4	2.0	1.5	1.5	1.8	1.6	1.7	1.5	1.5
	遺伝診療科	0.5	0.6	0.7	0.4	0.6	0.6	0.5	0.5	0.4	0.4	0.4	0.5	0.5	0.5
	免疫科	0.3	0.3	0.2	0.3	0.2	0.0	0.4	0.5	0.1	0.1	0.2	0.1	0.2	0.2
	新生児科	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0
	移植外科	0.4	0.4	0.3	0.8	0.5	0.4	0.6	0.7	0.4	0.8	0.4	0.6	0.5	0.5
	感染症科	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	病理診断科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	小計	50.9	66.6	61.4	64.7	46.2	51.6	55.1	52.0	59.1	55.4	49.3	41.8	54.3	54.6
外科	外科	1.4	1.4	1.5	1.5	1.5	1.2	1.4	1.0	1.0	1.7	1.4	1.5	1.4	1.4
整形外科	整形外科	2.6	3.4	3.3	3.2	2.7	3.6	3.6	3.1	2.9	2.6	2.6	2.2	3.0	3.0
形成外科	形成外科	0.8	0.8	1.0	0.9	0.8	1.3	1.0	0.8	1.2	1.1	0.9	0.8	0.9	0.9
脳神経外科	脳神経外科	0.7	0.8	1.0	0.8	1.0	0.9	1.1	0.8	0.8	0.7	0.9	1.0	0.9	0.9
心臓血管外科	心臓血管外科	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
皮膚科	皮膚科	2.8	3.0	2.0	2.9	3.0	3.4	2.9	3.2	3.1	2.8	2.5	2.5	2.8	2.8
泌尿器科	泌尿器科	1.3	1.7	1.5	1.1	1.5	0.9	1.2	1.5	1.5	1.0	1.4	1.0	1.3	1.3
産婦人科	不妊診療科	0.6	0.6	0.7	0.3	0.5	0.2	0.3	0.8	0.6	0.5	0.6	0.5	0.5	0.5
	不育診療科	0.5	0.4	0.5	0.5	0.5	0.2	0.3	0.8	0.4	0.4	0.5	0.5	0.4	0.4
	胎児診療科	2.6	2.6	2.1	2.4	3.0	2.4	2.0	2.7	2.6	2.2	2.8	2.9	2.5	2.5
	産科	7.0	8.2	6.4	7.1	6.5	6.1	5.7	6.4	7.5	8.5	6.9	6.9	6.9	6.9
	婦人科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	小計	10.6	11.7	9.7	10.3	10.4	8.9	8.2	10.6	11.2	11.6	10.9	10.7	10.4	10.5
眼科	眼科	3.2	3.1	2.6	2.6	2.6	2.6	2.9	3.0	3.2	2.6	2.6	2.4	2.8	2.8
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	4.0	4.3	3.6	3.5	3.6	3.5	3.4	3.1	4.1	3.7	3.8	2.2	3.5	3.5
リハビリテーション科	リハビリテーション科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0
放射線科	放射線診断科	0.0	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.5	0.3	0.4	0.1	0.1	0.0	0.2	0.2
	放射線治療科	0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0
	小計	0.1	0.3	0.2	0.2	0.1	0.1	0.5	0.3	0.4	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2
歯科	歯科	8.8	6.7	8.8	11.5	10.5	9.2	9.6	8.9	10.5	9.4	8.5	10.2	9.3	0.0
	周産期歯科	0.3	0.3	0.7	0.6	0.5	0.4	0.3	0.6	0.4	0.3	0.4	0.1	0.4	0.0
	小計	9.1	7.0	9.4	12.1	10.9	9.6	9.8	9.5	10.9	9.7	8.8	10.3	9.6	0.0
麻酔科	集中治療科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	麻酔科	0.1	0.1	0.0	0.1	0.0	0.1	0.2	0.0	0.2	0.1	0.1	0.0	0.1	0.1
	小計	0.1	0.1	0.0	0.1	0.0	0.1	0.2	0.0	0.2	0.2	0.1	0.2	0.1	0.1
合計	計	96.4	113.5	105.5	112.8	92.1	95.4	98.9	96.7	107.0	101.8	93.6	83.2	99.5	90.3
	救急除く	50.8	53.2	49.6	55.8	53.2	49.4	49.7	50.8	53.9	52.6	49.1	47.2	51.2	
	救急・歯科除く	41.7	45.8	41.1	43.7	43.3	39.9	39.9	41.3	43.0	42.5	39.8	37.9	41.6	

4－6表 診療科別・月別1日平均外来患者数(再診)

診療科名	院内標榜科名	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	4月～3月 一日平均	4月～3月 割合
内科	母性内科	35.4	40.4	35.6	37.5	34.1	35.9	37.6	36.3	35.7	34.1	33.8	32.6	35.7	4.2
	女性総合外来	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	小計	35.4	40.4	35.6	37.5	34.1	35.9	37.6	36.3	35.7	34.1	33.8	32.6	35.7	4.2
精神科	こころの診療科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	34.9	33.3	36.4	35.1	33.1	31.7	16.8	2.0
	児童・思春期メンタルヘルス科	24.6	28.2	25.1	25.6	23.7	26.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	13.0	1.5
	乳幼児メンタルヘルス科	8.2	7.3	9.0	8.5	9.2	8.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.3	0.5
	小計	32.8	35.5	34.1	34.0	32.9	35.4	34.9	33.3	36.4	35.1	33.1	31.7	34.1	4.0
神経科	神経内科	31.2	30.1	24.5	26.7	34.2	29.5	31.4	27.7	31.6	34.0	32.2	30.6	30.3	3.6
	在宅診療科	11.8	13.1	12.9	12.7	13.1	13.4	12.9	12.9	12.0	13.8	13.5	12.0	12.8	1.5
	小計	43.0	43.2	37.4	39.3	47.3	42.8	44.2	40.6	43.5	47.8	45.7	42.6	43.1	5.1
呼吸器科	呼吸器科	5.7	6.1	5.9	7.3	7.2	5.8	5.9	6.7	8.0	7.4	6.8	8.4	6.8	0.8
消化器科	消化器科	17.7	19.1	16.4	16.3	17.2	16.2	17.2	17.1	19.0	17.5	17.9	16.8	17.3	2.0
	肝臓内科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	内視鏡科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	小計	17.7	19.1	16.4	16.3	17.2	16.2	17.2	17.1	19.0	17.5	17.9	16.8	17.3	2.0
循環器科	循環器科	19.1	19.8	18.0	21.6	25.9	20.3	18.8	18.4	20.0	19.8	18.6	24.0	20.4	2.4
アレルギー科	アレルギー科	68.7	66.9	59.3	61.6	65.1	60.9	60.6	60.1	73.9	76.4	77.3	78.4	67.3	7.9
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病	20.3	23.8	20.7	25.4	26.7	22.9	22.2	22.8	27.0	26.5	22.6	25.5	23.9	2.8
	総合診（成人診療科含む）	52.9	56.1	52.0	58.1	57.8	57.7	52.8	52.8	60.1	63.2	53.6	56.5	56.1	6.6
	救急診療科	36.9	55.4	56.3	54.6	36.2	38.8	42.9	40.2	41.7	38.2	37.0	31.8	42.5	5.0
	血液腫瘍科	18.3	16.8	15.7	19.5	22.1	19.1	17.7	16.7	20.8	18.6	17.3	19.5	18.5	2.2
	血液内科	2.1	1.7	2.1	2.0	2.0	1.5	2.0	1.2	0.7	2.4	1.5	1.7	1.7	0.2
	ライソゾーム病センター	2.8	2.8	2.6	2.5	2.7	2.7	2.8	2.8	2.7	2.7	2.5	2.7	2.7	0.3
	内分泌・代謝科	60.2	60.0	53.4	68.4	73.5	57.5	59.9	63.1	71.9	65.2	68.2	72.9	64.5	7.6
	遺伝診療科	4.8	3.8	4.5	5.3	5.4	5.9	5.8	4.9	5.4	5.5	5.1	5.9	5.2	0.6
	免疫科	3.6	4.8	4.0	4.6	4.7	3.4	4.7	4.8	4.8	4.2	4.9	4.4	4.4	0.5
	新生児科	10.2	13.1	13.4	12.8	13.9	15.3	15.2	16.4	12.3	13.4	12.7	9.7	13.2	1.6
	移植外科	13.1	14.1	14.0	14.6	14.9	14.5	15.6	11.8	17.0	16.4	12.7	16.9	14.6	1.7
	感染症科	0.9	1.7	1.7	1.6	1.5	2.0	1.7	1.6	1.5	1.5	1.1	2.0	1.6	0.2
	病理診断科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	小計	225.8	254.1	240.3	269.0	261.3	241.1	243.0	238.6	265.6	257.8	239.2	249.5	248.8	29.4
外科	外科	19.5	16.4	18.0	22.4	22.7	18.2	16.3	18.9	22.2	22.0	20.1	22.1	19.9	2.4
整形外科	整形外科	40.2	42.7	43.2	54.7	48.5	49.4	42.0	43.6	49.8	49.8	44.4	50.2	46.6	5.5
形成外科	形成外科	13.3	13.7	12.4	16.1	16.0	14.8	13.8	12.7	15.2	14.6	14.7	14.5	14.3	1.7
脳神経外科	脳神経外科	15.8	16.0	14.2	15.5	18.6	16.5	16.5	15.6	14.9	15.2	16.0	14.6	15.8	1.9
心臓血管外科	心臓血管外科	0.5	0.5	0.7	1.1	0.7	0.6	0.7	0.8	0.8	0.8	0.4	0.7	0.7	0.1
皮膚科	皮膚科	30.3	30.8	25.6	29.3	30.6	32.7	31.5	35.2	38.3	35.4	34.0	33.9	32.2	3.8
泌尿器科	泌尿器科	16.7	16.1	14.9	17.3	16.2	16.9	16.1	16.0	20.7	17.6	19.0	16.6	17.0	2.0
産婦人科	不妊診療科	14.1	17.6	15.3	15.3	14.8	15.4	15.3	14.5	10.5	14.8	13.6	12.6	14.5	1.7
	不育診療科	3.2	2.4	3.2	2.7	3.7	3.1	2.9	3.6	2.7	2.9	2.7	2.8	3.0	0.4
	胎児診療科	9.9	11.7	11.1	10.4	9.9	9.8	9.2	10.9	13.0	12.4	14.7	11.5	11.1	1.3
	産科	88.7	99.7	89.6	91.8	85.1	84.3	87.9	85.8	87.7	86.9	85.3	77.6	87.4	10.3
	婦人科	0.4	0.5	0.4	0.5	0.6	0.3	0.7	0.8	1.0	0.4	0.5	0.7	0.6	0.1
	小計	116.2	131.9	119.5	120.7	114.1	112.8	115.8	115.4	114.8	117.5	116.8	105.2	116.6	13.8
眼科	眼科	44.1	45.8	36.8	46.6	43.7	40.5	43.6	43.5	47.4	47.4	45.4	43.2	43.9	5.2
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	32.9	31.2	30.5	32.5	35.8	30.3	32.2	28.4	34.7	36.0	31.6	36.6	32.7	3.9
リハビリテーション科	リハビリテーション科	6.6	6.7	5.6	6.6	6.8	6.6	6.7	6.5	6.6	7.4	6.8	5.8	6.5	0.8
放射線科	放射線診断科	0.8	1.2	0.7	1.0	1.4	1.1	1.4	1.3	1.0	1.1	1.2	0.8	1.1	0.1
	放射線治療科	2.1	2.5	1.3	1.7	1.8	2.7	2.1	1.2	0.2	0.0	1.4	1.5	1.5	0.2
	小計	2.9	3.7	2.0	2.7	3.2	3.8	3.5	2.4	1.2	1.1	2.5	2.4	2.6	0.3
歯科	歯科	9.0	7.8	7.2	8.7	8.8	8.0	10.4	10.2	9.3	9.4	9.9	10.8	109.3	12.9
	周産期歯科	0.9	0.7	1.2	0.9	1.1	1.5	1.0	1.5	1.7	1.7	1.6	1.3	14.9	1.8
	小計	9.8	8.5	8.4	9.5	9.9	9.5	11.4	11.7	11.0	11.1	11.5	12.1	124.1	14.7
麻酔科	集中治療科	0.1	0.2	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0
	麻酔科	8.9	10.9	11.6	16.6	14.0	15.3	14.9	16.5	15.9	16.1	17.6	14.0	14.3	1.7
	小計	9.0	11.1	11.7	16.6	14.0	15.4	14.9	16.5	15.9	16.1	17.7	14.0	14.4	1.7
合計	計	805.6	860.5	789.6	877.7	871.0	825.8	826.7	817.7	895.2	888.4	853.9	854.8	846.8	113.5
	救急除く	768.7	805.1	733.3	823.2	834.8	787.0	783.9	777.6	853.5	850.2	816.9	823.0	804.3	
	救急・歯科除く	758.9	796.2	725.7	813.7	825.8	777.6	772.5	765.9	842.5	838.6	804.8	812.0	794.1	

4－7表 診療科別・月別新患率

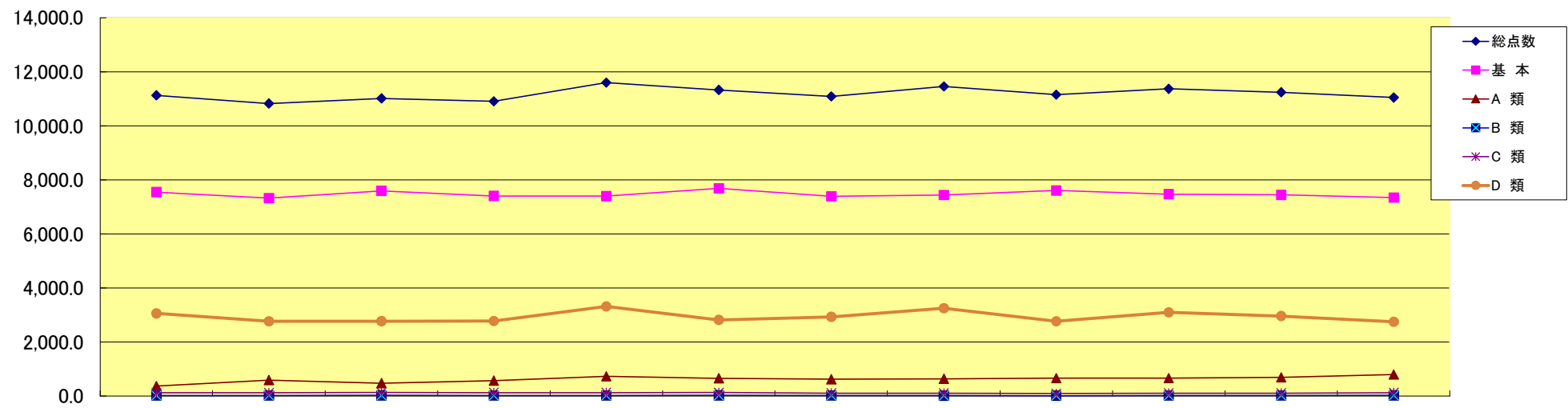
診療科名	院内標榜科名	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	合計
内科	母性内科	3.7	3.6	4.7	5.4	3.6	4.3	4.3	5.0	4.9	6.0	4.7	5.4	4.6
	女性総合外来	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	小計	3.7	3.6	4.7	5.4	3.6	4.3	4.3	5.0	4.9	6.0	4.7	5.4	4.6
精神科	こころの診療科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.4	2.6	2.8	3.3	3.2	3.1	2.9
	児童・思春期メンタルヘルス科	3.7	3.1	3.3	3.6	3.7	2.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	3.3
	乳幼児メンタルヘルス科	1.2	2.1	2.5	2.9	1.5	1.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.0
	小計	3.1	2.9	3.1	3.4	3.1	2.5	2.4	2.6	2.8	3.3	3.2	3.1	3.0
神経科	神経内科	3.3	3.5	3.6	2.9	2.5	3.6	1.9	3.7	2.8	2.3	1.9	2.6	2.8
	在宅診療科	0.8	1.6	0.7	0.8	1.0	0.7	0.8	1.2	1.2	1.1	1.5	1.1	1.0
	小計	2.6	3.0	2.6	2.2	2.1	2.7	1.6	2.9	2.4	1.9	1.8	2.2	2.3
呼吸器科	呼吸器科	3.4	6.5	7.9	5.2	2.5	4.2	4.1	3.6	4.8	2.8	2.3	0.5	3.9
消化器科	消化器科	5.1	3.2	4.5	4.4	5.7	5.3	5.8	5.3	2.6	4.3	4.5	4.2	4.6
	肝臓内科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	内視鏡科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	小計	5.1	3.2	4.5	4.4	5.7	5.3	5.8	5.3	2.6	4.3	4.5	4.2	4.6
循環器科	循環器科	6.4	6.9	7.9	5.5	5.5	4.5	5.5	4.4	5.4	4.3	4.9	3.1	5.3
アレルギー科	アレルギー科	4.0	3.6	3.9	3.8	4.0	3.6	3.5	3.3	2.2	2.4	2.6	2.4	3.2
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病	2.9	2.4	4.6	6.1	5.3	3.4	1.6	1.3	2.7	1.6	1.4	1.1	2.9
	総合診（成人診療科含む）	3.2	3.0	2.9	4.1	4.6	2.9	3.2	3.3	4.0	2.8	2.7	3.7	3.4
	救急診療科	55.2	52.1	49.8	51.1	51.8	54.3	53.4	53.3	56.0	56.3	54.6	53.1	53.2
	血液腫瘍科	1.9	3.9	2.0	2.0	1.2	3.1	1.4	4.3	1.2	3.5	1.8	2.1	2.3
	血液内科	0.0	10.8	4.1	4.9	2.2	6.5	7.1	4.0	0.0	4.3	3.4	2.6	4.3
	ライソゾーム病センター	0.0	0.0	3.4	2.0	3.3	0.0	3.4	1.8	3.6	3.7	5.9	0.0	2.2
	内分泌・代謝科	2.4	2.8	2.1	2.3	1.5	2.4	3.2	2.2	2.0	2.7	2.3	2.3	2.3
	遺伝診療科	8.7	13.1	13.2	6.3	9.8	8.6	7.3	8.5	6.9	7.1	6.7	7.2	8.5
	免疫科	7.7	6.2	4.4	5.2	4.6	0.0	6.9	9.5	2.1	1.3	3.1	3.0	4.7
	新生児科	0.0	0.4	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.8	0.4	0.0	0.0	0.2
	移植外科	2.6	2.5	2.2	4.9	3.5	2.7	3.4	5.6	2.3	4.6	2.8	3.4	3.4
	感染症科	0.0	0.0	0.0	3.0	2.9	2.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.8
	病理診断科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	小計	18.4	20.8	20.3	19.4	15.0	17.6	18.5	17.9	18.2	17.7	17.1	14.4	17.9
外科	外科	6.7	7.7	7.9	6.3	6.2	6.2	7.9	4.8	4.3	7.3	6.6	6.2	6.5
整形外科	整形外科	6.1	7.4	7.1	5.5	5.2	6.7	7.9	6.6	5.4	5.0	5.5	4.2	6.0
形成外科	形成外科	5.7	5.8	7.1	5.3	4.9	7.8	6.8	5.9	7.3	7.0	5.7	5.3	6.2
脳神経外科	脳神経外科	4.0	5.0	6.6	4.9	5.3	4.9	6.0	4.9	5.1	4.3	5.6	6.1	5.2
心臓血管外科	心臓血管外科	0.0	9.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.7
皮膚科	皮膚科	8.5	8.9	7.2	8.9	9.0	9.3	8.4	8.3	7.4	7.4	6.9	6.8	8.1
泌尿器科	泌尿器科	7.0	9.5	9.4	6.0	8.2	5.1	6.7	8.3	6.6	5.4	7.0	5.4	7.0
産婦人科	不妊診療科	3.8	3.2	4.3	1.9	3.3	1.3	1.6	4.9	5.4	3.4	4.1	3.8	3.4
	不育診療科	13.7	13.2	13.6	15.6	11.0	6.1	8.1	17.4	13.1	12.7	16.4	14.1	13.0
	胎児診療科	20.6	18.1	16.2	18.5	22.9	19.4	17.9	19.6	16.7	14.9	15.9	20.0	18.3
	産科	7.3	7.6	6.6	7.2	7.1	6.8	6.0	6.9	7.9	8.9	7.5	8.1	7.3
	婦人科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	4.8	0.0	0.0	0.0	2.2
	小計	8.4	8.2	7.5	7.8	8.3	7.3	6.6	8.4	8.9	9.0	8.5	9.3	8.2
眼科	眼科	6.8	6.3	6.7	5.3	5.6	5.9	6.2	6.3	6.3	5.2	5.5	5.2	5.9
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	10.9	12.0	10.7	9.6	9.2	10.2	9.4	9.7	10.5	9.3	10.8	5.7	9.8
リハビリテーション科	リハビリテーション科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.3	0.3
放射線科	放射線診断科	0.0	14.8	20.0	13.0	6.1	4.3	26.3	16.7	26.9	9.1	8.3	0.0	14.8
	放射線治療科	0.0	2.1	3.3	2.9	2.4	1.9	0.0	0.0	0.0	100.0	3.7	0.0	2.4
	小計	3.4	6.7	10.0	6.9	4.1	2.6	12.7	9.4	23.3	13.0	5.9	8.8	7.9
歯科	歯科	49.6	46.4	54.9	57.1	54.4	53.5	47.9	46.6	53.0	50.0	46.0	48.7	50.7
	周産期歯科	26.1	30.0	35.1	41.4	29.0	19.4	20.8	26.8	19.0	13.2	17.9	7.1	31.5
	小計	48.1	45.3	52.8	56.0	52.5	50.3	46.3	44.7	49.8	46.6	43.3	46.1	48.5
麻酔科	集中治療科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	8.3
	麻酔科	1.1	0.5	0.0	0.3	0.0	0.3	1.0	0.0	0.9	0.7	0.6	0.0	0.5
	小計	1.1	0.5	0.0	0.3	0.0	0.3	1.0	0.0	0.9	1.0	0.6	1.3	0.6
合計	計	10.7	11.7	11.8	11.4	9.6	10.4	10.7	10.6	10.7	10.3	9.9	8.9	10.5
	救急除く	6.2	6.2	6.3	6.3	6.0	5.9	6.0	6.1	5.9	5.8	5.7	5.4	6.0
	救急・歯科除く	5.2	5.4	5.4	5.1	5.0	4.9	4.9	5.1	4.9	4.8	4.7	4.5	5.0

5－1表 月別入院患者延点数

	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	計
総点数	127,221,353	136,831,160	139,007,881	147,632,146	151,038,224	140,826,787	136,063,127	138,502,103	143,189,505	135,770,626	126,319,412	139,339,704	1,661,742,028
基 本	86,302,255	92,597,003	95,872,276	100,262,687	96,361,149	95,556,953	90,735,687	89,900,103	97,686,282	89,264,416	83,667,222	92,704,578	1,110,910,611
特掲計	40,919,098	44,234,157	43,135,605	47,369,459	54,677,075	45,269,834	45,327,440	48,602,000	45,503,223	46,506,210	42,652,190	46,635,126	550,831,417
A 類	4,253,081	7,485,962	6,074,861	7,787,383	9,514,224	8,197,738	7,657,656	7,758,485	8,552,756	7,937,484	7,847,619	10,026,630	93,093,879
B 類	261,483	235,689	343,115	264,151	315,523	329,393	280,289	218,120	235,277	237,169	244,617	317,750	3,282,576
C 類	1,409,610	1,567,394	1,755,305	1,725,605	1,642,079	1,679,352	1,359,858	1,362,833	1,230,050	1,304,329	1,268,580	1,631,760	17,936,755
D 類	34,994,924	34,945,112	34,962,324	37,592,320	43,205,249	35,063,351	36,029,637	39,262,562	35,485,140	37,027,228	33,291,374	34,658,986	436,518,207

	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	計
在院患者延数	11,432	12,638	12,619	13,536	13,023	12,434	12,274	12,087	12,837	11,946	11,239	12,619	148,684
1日平均患者数	381.1	407.7	420.6	436.6	420.1	414.5	395.9	402.9	414.1	385.4	387.6	407.1	406.2

5－2表 月別入院患者1人1日当たり平均診療点数



５－３表 診療科別入院患者１人一日当たり平均診療点数

標榜診療科名	院内標榜科名	総点数	基本	特掲診療計	特掲診療内訳			
					A類	B類	C類	D類
内科	母性内科、女性総合外来	5,182.1	4,699.4	482.6	191.4	4.3	64.0	222.9
心療内科								
精神科	児童・思春期リエゾン科、 児童・思春期メンタルヘルス科、 乳幼児メンタルヘルス科	6,225.8	5,980.9	245.0	52.3	3.7		189.0
神経科	神経内科、在宅診療科	10,773.9	9,083.5	1,690.4	475.0	15.7	81.5	1,118.3
呼吸器科		8,519.3	7,591.4	927.9	97.6	9.6	220.5	600.2
消化器科	消化器科、肝臓内科、内視鏡科	7,476.4	6,072.4	1,404.0	855.2	3.4	360.0	185.4
循環器科		12,490.8	6,514.7	5,976.1	382.7	7.5	170.8	5,415.1
アレルギー科		6,944.7	6,411.3	533.4	460.1	1.6	43.0	28.7
リウマチ科	膠原病							
小児科	{ 総合診療部、救急診療科、内分泌科、 腎臓科、血液腫瘍科、血液内科、遺伝診 療科、新生児科、移植外科、免疫科、感 染症科、ライソゾーム病センター、緩和 ケア科	9,167.9	7,371.5	1,796.4	870.8	16.1	92.8	816.7
外科		9,801.6	7,160.2	2,641.4	388.2	9.0	82.7	2,161.4
整形外科		11,263.6	6,147.5	5,116.1	31.6	14.0	29.7	5,040.8
形成外科		10,834.7	7,365.8	3,468.9	11.1	5.2	62.9	3,389.6
脳神経外科		10,218.9	7,696.5	2,522.4	321.2	39.3	52.0	2,109.9
心臓血管外科		11,272.1	7,576.4	3,695.7	2.5	35.7	16.8	3,640.7
小児外科								
皮膚科		18,809.9	10,879.7	7,930.2	22.2		278.6	7,629.4
泌尿器科		17,115.6	8,303.1	8,812.5	64.1	13.0	67.0	8,668.3
産婦人科	産科、婦人科、不妊診療科 不育診療科、胎児診療科	13,525.0	6,894.3	6,630.8	70.5	1.6	104.6	6,454.0
眼科		12,809.4	7,714.3	5,095.2	18.6	4.5	35.5	5,036.5
耳鼻咽喉科		13,852.6	8,781.2	5,071.5	32.8	4.2	129.9	4,904.5
リハビリテーション科								
放射線科	放射線診断科、放射線治療科							
歯科								
麻酔科	麻酔科、集中治療科	33,523.3	13,994.2	19,529.1	1,152.5	199.0	554.8	17,622.8
結核（再掲）								
合 計		11,168.3	7,463.6	3,704.7	626.1	22.1	120.6	2,935.9

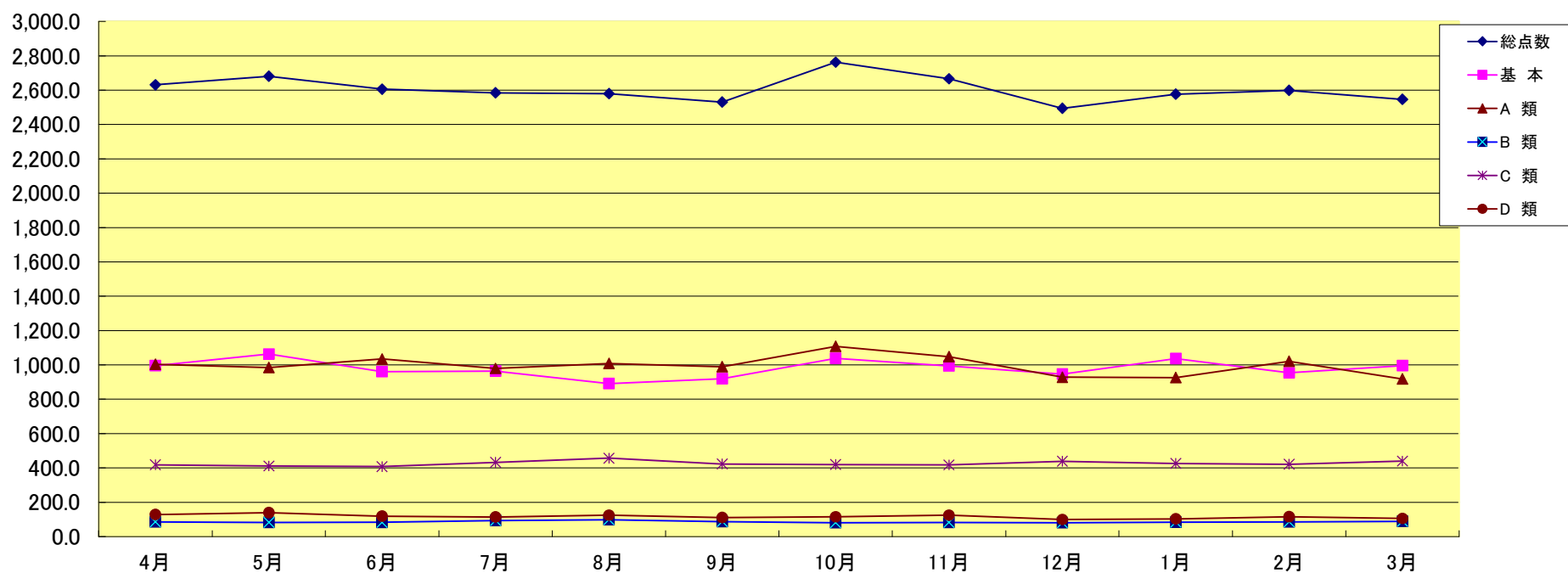
6 診療点数【外来】

6－1表 月別外来患者延点数

	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	計
総点数	47,474,277	49,626,756	51,332,991	51,209,013	54,669,430	46,623,418	51,142,218	48,765,834	49,995,118	48,471,245	46,788,733	52,561,805	598,660,836
基 本	17,946,689	19,683,373	18,943,835	19,113,390	18,893,730	16,945,019	19,232,394	18,182,515	18,967,590	19,494,284	17,179,730	20,534,736	225,117,285
特掲計	29,527,588	29,943,382	32,389,156	32,095,622	35,775,700	29,678,399	31,909,824	30,583,319	31,027,528	28,976,961	29,609,003	32,027,069	373,543,551
A 類	18,101,907	18,231,188	20,374,076	19,407,510	21,363,095	18,223,133	20,499,106	19,165,272	18,619,286	17,428,739	18,378,486	18,955,141	228,746,937
B 類	1,550,718	1,523,062	1,633,637	1,863,120	2,072,566	1,610,938	1,509,863	1,507,039	1,633,886	1,581,720	1,544,531	1,825,078	19,856,158
C 類	7,557,401	7,600,334	8,030,893	8,569,589	9,685,172	7,797,062	7,759,631	7,624,558	8,785,186	8,011,673	7,596,813	9,065,852	98,084,165
D 類	2,317,562	2,588,798	2,350,551	2,255,403	2,654,867	2,047,266	2,141,224	2,286,450	1,989,170	1,954,830	2,089,173	2,180,998	26,856,292

	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	計
患者延数	18,039	18,507	19,696	19,810	21,190	18,424	18,511	18,289	20,043	18,814	18,003	20,636	229,962
1日平均患者数	902.0	925.4	895.3	990.5	963.2	921.2	881.5	914.5	954.4	990.2	947.5	982.7	938.6

6-2表 月別外来患者1人1日当たり平均診療点数



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
総点数	2,631.8	2,681.5	2,606.3	2,585.0	2,580.0	2,530.6	2,762.8	2,666.4	2,494.4	2,576.3	2,598.9	2,547.1	2,603.3
基本	994.9	1,063.6	961.8	964.8	891.6	919.7	1,039.0	994.2	946.3	1,036.2	954.3	995.1	978.9
A類	1,003.5	985.1	1,034.4	979.7	1,008.2	989.1	1,107.4	1,047.9	929.0	926.4	1,020.9	918.5	994.7
B類	86.0	82.3	82.9	94.0	97.8	87.4	81.6	82.4	81.5	84.1	85.8	88.4	86.3
C類	418.9	410.7	407.7	432.6	457.1	423.2	419.2	416.9	438.3	425.8	422.0	439.3	426.5
D類	128.5	139.9	119.3	113.9	125.3	111.1	115.7	125.0	99.2	103.9	116.0	105.7	116.8

6－3表 診療科別外来患者1人1日当たり平均診療点数

標榜診療科名	院内標榜科名	総点数	基本	特掲診療計	特掲診療内訳			
					A類	B類	C類	D類
内 科	母性内科、女性総合外来	1,341.2	503.9	837.3	216.4	12.0	608.9	
心療内科								
精神科	児童・思春期リエゾン科、 児童・思春期メンタルヘルス科、 乳幼児メンタルヘルス科	669.4	122.3	547.2	27.8	0.1	23.0	496.2
神経科	神経内科、在宅診療科	953.9	476.9	477.0	77.5	35.3	145.5	218.8
呼吸器科		1,098.5	575.5	523.1	179.8	90.6	251.2	1.4
消化器科	消化器科、肝臓内科、内視鏡科	8,540.4	464.0	8,076.5	7,251.7	43.0	779.7	2.0
循環器科		2,567.5	834.0	1,733.5	627.9	84.9	1,020.5	0.2
アレルギー科		1,106.1	540.6	565.5	77.6	0.6	486.8	0.6
リウマチ科	膠原病							
小児科	総合診療部、救急診療科、内分泌科、 腎臓科、血液腫瘍科、血液内科、遺伝 診療科、新生児科、移植外科、免疫 科、感染症科、ライソソーム病セン ター	5,225.1	1,938.0	3,287.1	2,537.9	89.6	624.2	35.5
外 科		785.6	345.9	439.7	34.3	88.4	250.0	67.1
整形外科		669.6	193.4	476.2	2.8	345.5	40.1	87.7
形成外科		870.4	677.6	192.8	4.9	55.9	37.2	94.8
脳神経外科		1,113.1	182.3	930.8	3.8	878.1	48.5	0.4
心臓血管外科		759.6	258.1	501.5	21.8	230.8	248.9	
小児外科								
皮膚科		905.2	120.5	784.7	63.5	5.5	92.7	623.1
泌尿器科		1,217.6	632.0	585.6	17.1	194.9	367.4	6.2
産婦人科	産科、婦人科、不妊診療科 不育診療科、胎児診療科	1,726.1	1,212.5	513.6	20.2	7.6	387.8	97.9
眼 科		739.6	141.0	598.6	15.2	29.7	473.4	80.2
耳鼻咽喉科		1,088.5	209.6	878.9	17.0	90.4	565.6	205.9
リハビリテーション科		471.9	145.8	326.1	0.0	3.4	92.4	230.3
放射線科	放射線診断科、放射線治療科	5,454.2	123.9	5,330.3	1.8	1,314.8	1.3	4,012.4
歯 科		930.3	439.7	490.6	1.9	76.8	63.6	348.3
麻酔科	麻酔科、集中治療科	26.4	21.5	4.8	3.6	0.8	0.4	0.0
結 核（再 掲）								
合 計		2,601.1	976.8	1,624.2	994.7	86.3	426.4	116.7

7 都道府県別にみた患者数【入院】
7－1表 診療科別・都道府県別延入院患者数

診療科名	院内標榜科名	北海道	青森県	岩手県	宮城県	秋田県	山形県	福島県	茨城県	栃木県	群馬県	埼玉県	千葉県	東京都	神奈川県	新潟県	富山県	石川県	福井県	山梨県	長野県	岐阜県	静岡県	愛知県	三重県
内科	母性内科			6								37	29	423	94										
精神科	こころの診療科														36										
	児童・思春期リエゾン科														12										
	乳幼児メンタルヘルス科											9		11											
神経科	神経内科											21	37	2,472	317				2					3	
	在宅診療科											106	73	2,204	330								3		
呼吸器科	呼吸器科							17				23	8	319	157	31	7							2	
消化器科	消化器科							67	505	27	44	43	2,183	847	234	2				36			7		
	肝臓内科																								
循環器科	循環器科						4	3	86			130	470	2,891	913					8				5	
アレルギー科	アレルギー科				18	56			59	2	5	226	57	1,377	395	69					6	6	61	2	
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病	126							2	93	109	184	284	3,407	552		3			148	55			117	
	総合診 (成人診療科含む)				59				20			133	159	23,114	2,497							11	42		9
	救急診療科													97	4										
	血液腫瘍科		182				2		438	184	45	618	1,333	9,607	3,693					72		63	11	336	
	血液内科																								
	ライソゾーム病センター								1						1										
	内分泌・代謝科				53		4	4	30		5	36	155	1,279	252	110		4			13		5		
	遺伝診療科																								
	免疫科											54	178	423	34										
外科	新生児科	14	7	7				16	32	31	117	731	740	19,532	2,358			8		8	21		29	7	8
	移植外科	253	55	14	11	19	11	3	280		36	121	1,312	2,478	1,211	15			80	19	28	57	137	412	
	緩和ケア科													22											
整形外科	外科		46						102	25		367	20	2,704	795	35					12		5		
形成外科	整形外科			156	14			17	125	41	26	214	218	2,961	936					25	28		54		
	形成外科					3						48	31	745	312										
脳神経外科	脳神経外科	3		2			16	58	26		75	409	243	3,608	1,079		2	25	3	227	5		16	21	
心臓血管外科	心臓血管外科											8	4	67	8					4					
皮膚科	皮膚科								3			3		106	23								4		
泌尿器科	泌尿器科								8	4	12	31	45	705	246	17	10					22		18	3
産婦人科	不妊診療科							2			1	2	1	93	10										
	不育診療科													1											
	胎児診療科	19						85	73	25	103	44	1,896	365	38					10	3		1		
	産科	31	8	12				93		6	39	347	286	14,071	2,265	13		9			18	8	21	8	9
婦人科	婦人科																								
	婦人科																								
眼科	眼科						47	5	35	61	72	276	213	1,219	405			3	3	19	79		75		
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	16		7	5		4	17	21		44	44	70	1,123	299			20		5	19	18	10	12	
リハビリテーション科	リハビリテーション科																								
放射線科	放射線診断科																								
	放射線治療科																								
歯科	歯科																								
麻酔科	集中治療科	6							59	13	5	147	447	4,358	1,284					87	120		139		
	麻酔科																								
合 計		468	298	204	160	78	88	218	1,496	1,038	643	4,472	6,500	105,497	21,729	562	24	69	88	686	417	162	633	928	26

7 都道府県別にみた患者数【入院】
7－1表 診療科別・都道府県別延入院患者数

診療科名	院内標榜科名	滋賀県	京都府	大阪府	兵庫県	奈良県	和歌山県	鳥取県	島根県	岡山県	広島県	山口県	徳島県	香川県	愛媛県	高知県	福岡県	佐賀県	長崎県	熊本県	大分県	宮崎県	鹿児島県	沖縄県	その他	総計	
内 科	母性内科																									589	
	こころの診療科																									36	
精 神 科	児童・思春期リエゾン科																									12	
	乳幼児メンタルヘルス科																									20	
神 経 科	神経内科																									2,852	
	在宅診療科																									2,716	
呼吸器科	呼吸器科																									564	
消化器科	消化器科				8			3											2							4,008	
	肝臓内科																										
循環器科	循環器科																		5							4,515	
アレルギー科	アレルギー科			81	2												16			5						2,438	
小 児 科	腎臓・リウマチ・ 膠原病 総合診 (成人診療科含む)				28													5							4	26	5,113
	救急診療科				8												11				7						101
	血液腫瘍科		37									62						3		8	37						16,731
	血液内科																										
	ライソソーム病センター																										2
	内分泌・代謝科	15		103						5															6		2,079
	遺伝診療科																										
	免疫科																										689
	新生児科		8	16	46		71				12						8							16		20	23,863
	移植外科	3		49	25			118		140	2	3			8	3	35				83	3		4	24		7,052
緩和ケア科																										22	
外 科	外科																3							15	5		4,134
整形外科	整形外科			6							3			127	8		9				5	19					4,992
形成外科	形成外科			15	8						17										10						1,189
脳神経外科	脳神経外科			2			3					15										3					5,841
心臓血管外科	心臓血管外科																										91
皮 膚 科	皮膚科																										139
泌尿器科	泌尿器科			10																					3		1,134
産婦人科	不妊診療科																										109
	不育診療科																										1
	胎児診療科						9																	10	34		2,715
	産科 婦人科		8	19	8						7		18				7			97							17,408
眼 科	眼 科			10					22		5														3		2,552
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	13	7	16			3				10																1,783
リハビリテーション科	リハビリテーション科																										
放射線科	放射線診断科																										
	放射線治療科																										
歯 科	歯科																										
麻 酔 科	集中治療科			387	187																			13	8		7,260
	麻酔科																										
合 計		31	60	714	320		86	121	22	145	56	80	18	127	16	3	92	5	15	151	88	25	58	87	46	148,850	

7－2表 診療科別・都道府県別一日平均入院患者数

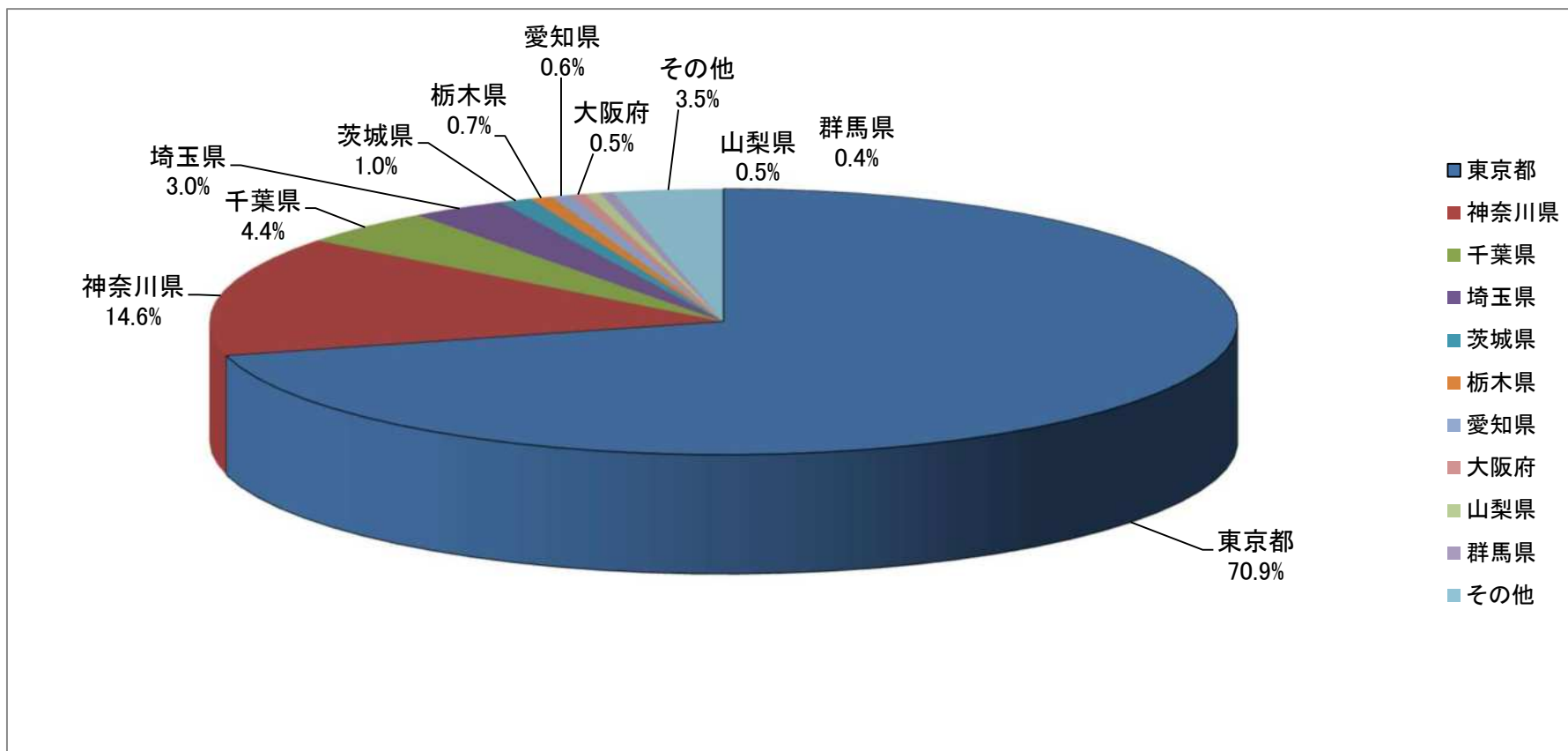
診療科名	院内標榜科名	北海道	青森県	岩手県	宮城県	秋田県	山形県	福島県	茨城県	栃木県	群馬県	埼玉県	千葉県	東京都	神奈川県	新潟県	富山県	石川県	福井県	山梨県	長野県	岐阜県	静岡県	愛知県	三重県
内科	母性内科											0.1	0.1	1.2	0.3										
精神科	こころの診療科														0.1										
	児童・思春期リエゾン科																								
	乳幼児メンタルヘルス科																								
神経科	神経内科											0.1	0.1	6.8	0.9										
	在宅診療科											0.3	0.2	6.0	0.9										
呼吸器科	呼吸器科											0.1		0.9	0.4	0.1									
消化器科	消化器科								0.2	1.4	0.1	0.1	0.1	6.0	2.3	0.6				0.1					
	肝臓内科																								
循環器科	循環器科								0.2			0.4	1.3	7.9	2.5										
アレルギー科	アレルギー科					0.2			0.2			0.6	0.2	3.8	1.1	0.2							0.2		
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病 総合診 (成人診療科含む)	0.3								0.3	0.3	0.5	0.8	9.3	1.5					0.4	0.2			0.3	
	救急診療科				0.2				0.1			0.4	0.4	63.3	6.8								0.1		
	血液腫瘍科		0.5						1.2	0.5	0.1	1.7	3.7	26.3	10.1					0.2		0.2		0.9	
	血液内科																								
	ライソゾーム病センター																								
	内分泌・代謝科				0.1				0.1			0.1	0.4	3.5	0.7	0.3									
	遺伝診療科																								
	免疫科											0.1	0.5	1.2	0.1										
	新生児科								0.1	0.1	0.3	2.0	2.0	53.5	6.5						0.1		0.1		
	移植外科	0.7	0.2			0.1			0.8		0.1	0.3	3.6	6.8	3.3				0.2	0.1	0.1	0.2	0.4	1.1	
外科	外科		0.1						0.3	0.1		1.0	0.1	7.4	2.2	0.1									
整形外科	整形外科			0.4					0.3	0.1	0.1	0.6	0.6	8.1	2.6					0.1	0.1		0.1		
形成外科	形成外科											0.1	0.1	2.0	0.9										
脳神経外科	脳神経外科							0.2	0.1		0.2	1.1	0.7	9.9	3.0		0.1		0.6					0.1	
心臓血管外科	心臓血管外科													0.2											
皮膚科	皮膚科													0.3	0.1										
泌尿器科	泌尿器科											0.1	0.1	1.9	0.7						0.1				
産婦人科	不妊診療科													0.3											
	不育診療科																								
	胎児診療科	0.1							0.2	0.2	0.1	0.3	0.1	5.2	1.0	0.1									
	産科	0.1						0.3			0.1	1.0	0.8	38.6	6.2								0.1		
	婦人科																								
眼科	眼科						0.1		0.1	0.2	0.2	0.8	0.6	3.3	1.1					0.1	0.2		0.2		
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科								0.1		0.1	0.1	0.2	3.1	0.8		0.1				0.1				
リハビリテーション科	リハビリテーション科																								
放射線科	放射線診断科																								
	放射線治療科																								
歯科	歯科																								
麻酔科	集中治療科								0.2			0.4	1.2	11.9	3.5					0.2	0.3		0.4		
	麻酔科																								
合 計		1.3	0.8	0.6	0.4	0.2	0.2	0.6	4.1	2.8	1.8	12.3	17.8	289.0	59.5	1.5	0.1	0.2	0.2	1.9	1.1	0.4	1.7	2.5	0.1

7－2表 診療科別・都道府県別一日平均入院患者数

診療科名	院内標榜科名	滋賀県	京都府	大阪府	兵庫県	奈良県	和歌山県	鳥取県	島根県	岡山県	広島県	山口県	徳島県	香川県	愛媛県	高知県	福岡県	佐賀県	長崎県	熊本県	大分県	宮崎県	鹿児島県	沖縄県	その他	総計
内科	母性内科																									1.6
精神科	こころの診療科																									0.1
	児童・思春期リエゾン科																									
	乳幼児メンタルヘルス科																									0.1
神経科	神経内科																									7.8
	在宅診療科																									7.4
呼吸器科	呼吸器科																									1.5
消化器科	消化器科																									11.0
	肝臓内科																									
循環器科	循環器科																									12.4
アレルギー科	アレルギー科																									6.7
小児科	腎臓・リウマチ・ 膠原病 総合診 (成人診療科含む)																								0.1	14.0
	救急診療科																									71.5
	血液腫瘍科																									0.3
	血液内科											0.2									0.1					45.8
	ライソゾーム病センター																									
	内分泌・代謝科																									5.7
	遺伝診療科																									
	免疫科																									1.9
	新生児科																							0.1		65.4
	移植外科			0.1	0.1			0.3														0.2		0.1		19.3
外科	外科																									11.3
整形外科	整形外科																									13.7
形成外科	形成外科													0.3								0.1				3.3
脳神経外科	脳神経外科																									16.0
心臓血管外科	心臓血管外科																									0.2
皮膚科	皮膚科																									0.4
泌尿器科	泌尿器科																									3.1
産婦人科	不妊診療科																									0.3
	不育診療科																									
	胎児診療科																									7.4
	産科																							0.1		47.7
	婦人科																				0.3					
眼科	眼科																									7.0
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科								0.1																	4.9
リハビリテーション科	リハビリテーション科																									
放射線科	放射線診断科																									
	放射線治療科																									
歯科	歯科																									
麻酔科	集中治療科																									19.9
	麻酔科																									
合 計		0.1	0.2	2.0	0.9		0.2	0.3	0.1	0.4	0.2	0.2		0.3			0.3			0.4	0.2	0.1	0.2	0.2	0.1	389.0

7－3表 入院患者数の都道府県別構成割合（主な都道府県）

東京都	神奈川県	千葉県	埼玉県	茨城県	栃木県	愛知県	大阪府	山梨県	群馬県	その他
105,497	21,729	6,500	4,472	1,496	1,038	928	714	686	642	5,148
70.9%	14.6%	4.4%	3.0%	1.0%	0.7%	0.6%	0.5%	0.5%	0.4%	3.6%



8 都道府県別にみた患者数【新入院】
 8－1表 診療科別・都道府県別延べ新入院患者数

診療科名	院内標榜科名	北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京	神奈川	新潟	富山	石川	福井	山梨	長野	岐阜	静岡	愛知	三重
内科	母性内科		1									3	2	42	5										
精神科	こころの診療科														3										
	児童・思春期リエゾン科														1										
	乳幼児メンタルヘルス科											1		1											
神経科	神経内科											5	9	271	40				1					1	
	在宅診療科											18	14	549	75								1		
呼吸器科	呼吸器科								1			3	1	52	11	2	1								1
消化器科	消化器科								5	8	1	8	10	204	50	3	1			7			1		
	肝臓内科																								
循環器科	循環器科						1	1	4			7	12	116	23					2				1	
アレルギー科	アレルギー科				1				3	1	1	13	11	225	49	3				1	1		7	1	
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病総合診	1				1			1	7	6	15	22	177	63		1			7	3			2	
	(成人診療科含む)				7				2			15	21	1,905	130							2	2		1
	救急診療科													110	1										
	血液腫瘍科		2				1		15	5	5	21	43	411	164					8		2	4	11	
	血液内科																								
	ライソソーム病センター								1						1										
	内分泌・代謝科				1		1	1	2		1	6	11	140	29	2		1			3		1		
	遺伝診療科																								
	免疫科											5	6	55	3										
	新生児科	2	1	1				1	2	1	5	22	21	1,416	188			2		1	2		4		
外科	移植外科	17	3	2	1	3	1	1	15		8	20	57	122	64	2			4	2	3	7	14	21	
	緩和ケア科													5											
	外科		1						4	3		24	4	417	57	4				1		1			
整形外科	整形外科			1	2			2	8	5	4	24	21	351	99					3	3		7		
形成外科	形成外科					1						4	5	176	29										
脳神経外科	脳神経外科	1		1			2	5	6		4	39	33	507	131		1	1	1	12	1		2	2	
心臓血管外科	心臓血管外科											1	3	37	9					1					
皮膚科	皮膚科								1			1		74	8								2		
泌尿器科	泌尿器科								2	1	2	4	7	187	48	2	1				3		3	1	
産婦人科	不妊診療科							2			1	2	1	85	10										
	不育診療科													1											
	胎児診療科	1							8	3	2	23	11	298	47	3				1	2		1		
	産科	2		2				4		1	1	20	22	1,748	223	1		2			2	1	3	1	1
婦人科	婦人科																								
	婦人科																								
眼科	眼科						4	2	3	7	11	42	41	298	86			1	1	3	14		9		
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	2	1	2	2		1	4	2		7	7	17	345	100			3		1	3	2	2	4	
リハビリテーション科	リハビリテーション科																								
放射線科	放射線診断科																								
	放射線治療科																								
歯科	歯科																								
麻酔科	集中治療科	1							3	1	1	5	10	284	48					2	1		2		
	麻酔科																								
合計		27	9	9	14	5	11	23	88	43	60	358	415	10,610	1,794	22	5	10	7	52	41	15	65	46	2

8 都道府県別にみた患者数【新入院】
 8－1表 診療科別・都道府県別延べ新入院患者数

診療科名	院内標榜科名	滋賀	京都	大阪	兵庫	奈良	和歌山	鳥取県	島根県	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	佐賀県	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄	その他	合計
内科	母性内科																									53
精神科	こころの診療科																									3
	児童・思春期リエゾン科																									1
	乳幼児メンタルヘルス科																									2
	神経内科																									327
神経科	在宅診療科																									657
呼吸器科	呼吸器科																									72
消化器科	消化器科				3			1											1							303
	肝臓内科																									
循環器科	循環器科																		1							168
アレルギー科	アレルギー科			1	1												1									320
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病総合診				1													1								308
	(成人診療科含む)				1												1				1			1	2	2,091
	救急診療科																									111
	血液腫瘍科		1									2					1		2	1						699
	血液内科																									
	ライソソーム病センター																									2
	内分泌・代謝科	3		2						1														1		206
	遺伝診療科																									
	免疫科																									69
	新生児科		1	2	1		1				1						1						2		1	1,679
	移植外科	1		6	2			5		1	1	1			2	1	3				3	1	1	7		402
	緩和ケア科																									5
外科	外科																1						2	1		520
整形外科	整形外科			1							1				1	1					1	1				537
形成外科	形成外科			2	2						1										1					221
脳神経外科	脳神経外科			1			1					1										1				753
心臓血管外科	心臓血管外科																									51
皮膚科	皮膚科																									86
泌尿器科	泌尿器科			1																				1		263
産婦人科	不妊診療科																									101
	不育診療科																									1
	胎児診療科						1																1	2		404
	産科		1	3	1						1		1				1			3						2,045
	婦人科																									
眼科	眼科			2					2		1													1		528
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	2	2	2			1				1															513
リハビリテーション科	リハビリテーション科																									
放射線科	放射線診断科																									
	放射線治療科																									
歯科	歯科																									
麻酔科	集中治療科			2	2																		1	1		364
	麻酔科																									
合 計		6	5	25	14		4	6	2	2	7	4	1	1	3	1	10	1	4	6	4	3	7	15	3	13,865

８－２表
診療科別・都道府県別１日平均新入院患者数

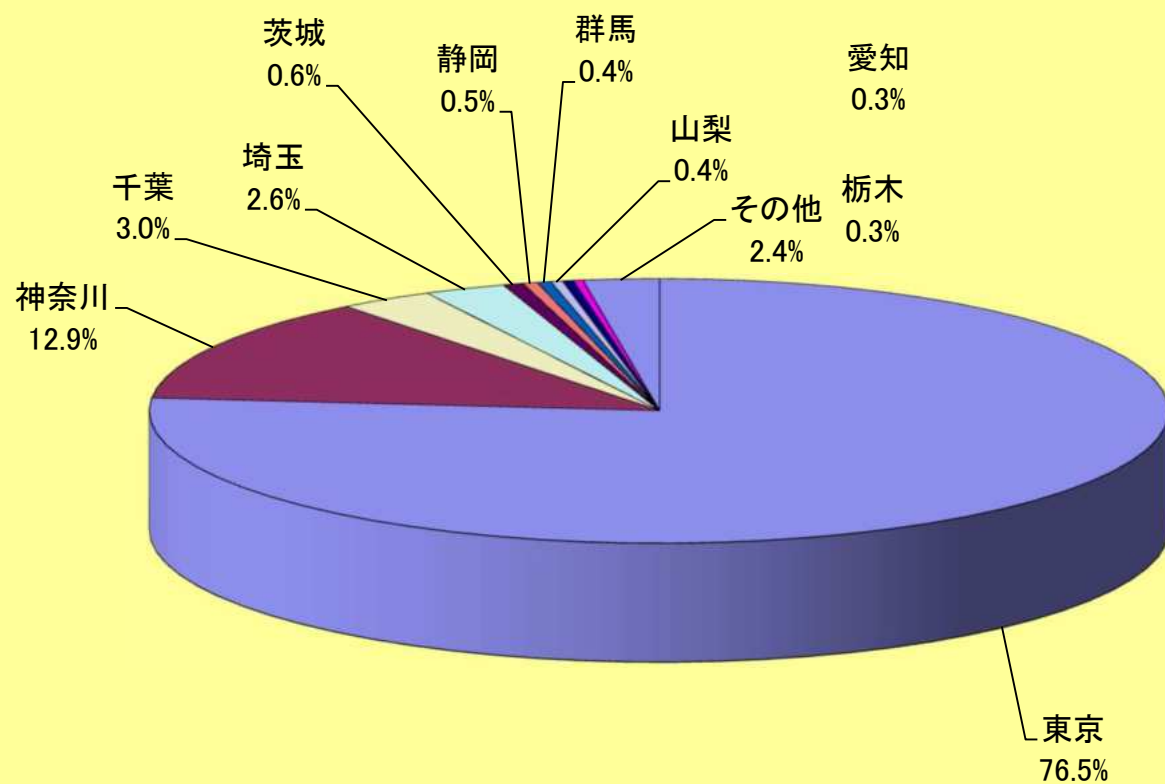
診療科名	院内標榜科名	北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京	神奈川	新潟	富山	石川	福井	山梨	長野	岐阜	静岡	愛知	三重
内科	母性内科											0.0	0.0	0.1	0.0										
精神科	こころの診療科														0.0										
	児童・思春期リエゾン科																								
	乳幼児メンタルヘルス科																								
神経科	神経内科											0.0	0.0	0.7	0.1										
	在宅診療科											0.0	0.0	1.5	0.2								0.0		
呼吸器科	呼吸器科											0.0	0.0	0.1	0.0	0.0									
消化器科	消化器科								0.0	0.0		0.0	0.0	0.6	0.1	0.0				0.0			0.0		
	肝臓内科																								
循環器科	循環器科						0.0	0.0	0.0			0.0	0.0	0.3	0.1					0.0					
アレルギー科	アレルギー科				0.0				0.0			0.0	0.0	0.6	0.1	0.0				0.0	0.0		0.0	0.0	
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病									0.0	0.0	0.0	0.1	0.5	0.2		0.0			0.0	0.0			0.0	
	総合診療科 (成人診療科含む)								0.0			0.0	0.1	5.2	0.4								0.0		
	救急診療科													0.3	0.0										
	血液腫瘍科								0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	1.1	0.4						0.0			0.0	0.0
	血液内科																								
	ライソゾーム病センター													0.0											
	内分泌・代謝科							0.0			0.0	0.0	0.0	0.4	0.1	0.0		0.0					0.0		
	遺伝診療科																								
	免疫科											0.0	0.0	0.2	0.0										
外科	新生児科	0.0							0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	3.9	0.5					0.0			0.0		
	移植外科																								
整形外科	整形外科				0.0			0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	1.0	0.3					0.0			0.0		
形成外科	形成外科											0.0	0.0	0.5	0.1										
脳神経外科	脳神経外科	0.0						0.0	0.0		0.0	0.1	0.1	1.4	0.4					0.0			0.0	0.0	
心臓血管外科	心臓血管外科											0.0	0.0	0.1	0.0										
皮膚科	皮膚科											0.0		0.2	0.0								0.0		
泌尿器科	泌尿器科							0.0		0.0	0.0	0.0	0.0	0.5	0.1										
産婦人科	不妊診療科											0.0	0.0	0.2	0.0										
	不育診療科																								
	胎児診療科	0.0						0.0			0.0	0.1	0.0	0.8	0.1	0.0				0.0	0.0		0.0		
	産科	0.0								0.0	0.0	0.1	0.1	4.8	0.6								0.0	0.0	
	婦人科																								
眼科	眼科						0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.8	0.2			0.0		0.0	0.0		0.0		
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	0.0		0.0			0.0	0.0	0.0		0.0	0.0	0.0	0.9	0.3			0.0		0.0	0.0	0.0		0.0	
リハビリテーション科	リハビリテーション科																								
放射線科	放射線診断科																								
	放射線治療科																								
歯科	歯科																								
麻酔科	集中治療科							0.0		0.0	0.0	0.0	0.0	0.8	0.1					0.0			0.0		
	麻酔科																								
合 計		0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	0.1	0.2	1.0	1.1	28.1	4.9	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.2	0.1	0.0

８－２表
診療科別・都道府県別１日平均新入院患者数

診療科名	院内標榜科名	滋賀	京都	大阪	兵庫	奈良	和歌山	鳥取県	島根県	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	佐賀県	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄	その他	合計
内 科	母性内科																								0.1	0.1
精 神 科	こころの診療科																									0.0
	児童・思春期リエゾン科																									0.0
	乳幼児メンタルヘルス科																									0.0
	神経内科																									0.9
神 経 科	在宅診療科																									1.8
呼吸器科	呼吸器科																									0.2
消化器科	消化器科				0.0																					0.8
	肝臓内科																									
循環器科	循環器科																									0.5
アレルギー科	アレルギー科			0.0	0.0																					0.9
小 児 科	腎臓・リウマチ・膠原病 総合診 (成人診療科含む) 救急診療科				0.0													0.0						0.0	0.0	5.7
	血液腫瘍科											0.0								0.0						0.3
	血液内科																			0.0						1.9
	ライソゾーム病センター																									0.0
	内分泌・代謝科	0.0		0.0																				0.0		0.6
	遺伝診療科																									0.2
	免疫科																									0.0
	新生児科			0.0							0.0														0.0	4.6
	移植外科																									0.0
	外 科	外科																								
整形外科	整形外科			0.0										0.0	0.0		0.0				0.0					1.5
形成外科	形成外科																									0.6
脳神経外科	脳神経外科			0.0								0.0									0.0					2.1
心臓血管外科	心臓血管外科																									0.1
皮 膚 科	皮 膚 科																									0.2
泌尿器科	泌尿器科																									0.7
産婦人科	不妊診療科																									0.3
	不育診療科																									0.0
	胎児診療科																							0.0		1.1
	産科			0.0							0.0															5.6
	婦人科																									
眼 科	眼 科			0.0					0.0																	1.4
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	0.0		0.0							0.0															1.4
リハビリテーション科	リハビリテーション科																									
放射線科	放射線診断科																									
	放射線治療科																									
菌 科	菌科																									
麻 酔 科	集中治療科																									1.0
	麻酔科																									
合 計		0.0	0.0	0.1	0.0		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	38.0

8－3表 新入院患者数の都道府県別構成割合（主な都道府県）

東京	神奈川	千葉	埼玉	茨城	静岡	群馬	山梨	愛知	栃木	その他
10,610.0	1,794.0	415.0	358.0	88.0	65.0	60.0	52.0	46.0	43.0	334
76.5%	12.9%	3.0%	2.6%	0.6%	0.5%	0.4%	0.4%	0.3%	0.3%	2.4%



9 都道府県別にみた患者数【外来新患】

9-1表

診療科別・都道府県別延外来患者数【新患】

診療科名	院内標榜科名	北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京	神奈川	新潟	富山	石川	福井	山梨	長野
内 科	母性内科					1					2	16	19	334	45						
	女性総合外来																				
精 神 科	こころの診療科							1				3	6	93	19						
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾ											5	5	88	10						
	乳幼児メンタルヘルス科											1		18	2						
神 経 科	神経内科	1							1			2	2	181	26						
	在宅診療科											1	1	23	8						
呼吸器科	呼吸器科				1	1			2			4	3	36	16	1				1	1
消化器科	消化器科									1		6	6	152	33		1				
	肝臓内科																				
	内視鏡科																				
循環器科	循環器科	1					1			1		6	3	244	17		1				1
アレルギー科	アレルギー科	1							3		1	22	7	439	67	1				1	
小 児 科	腎臓・リウマチ・膠原病総合診（成人診療科含む）	1			1				2	3	1	2	3	147	17					1	
	救急診療科					1	1	2	3		2	18	9	11,394	262	1			1	2	2
	血液腫瘍科								2		1	10	4	65	23						
	血液内科									1				14	4						
	ライソゾーム病センター								2			1	1	8	2						
	内分泌・代謝科								1	1		6	4	306	48	1				2	
	遺伝診療科								2	1		11	5	85	7					3	1
	免疫科				1				4			4	2	35	4	1					
	新生児科													8							
	移植外科	6			1	1		1	3		3	4	10	45	18	1	1		1	4	1
	感染症科													2	1						
	病理診断科																				
外 科	外科	1			1				2			6	6	290	24					1	
整形外科	整形外科	2				1		4	3	3	5	23	8	553	113					2	
形成外科	形成外科							1	2	3	1	2	7	175	36					1	
脳神経外科	脳神経外科					1	1	1	4		2	9	6	150	34					2	
心臓血管外科	心臓血管外科													1							
皮 膚 科	皮膚科	1							1		2	6	8	599	66						
泌尿器科	泌尿器科							1	2		1	2	4	257	38	1		1			
産婦人科	不妊診療科							2			1	3	2	106	6						
	不育診療科											7	1	83	14						1
	胎児診療科	1						4	1			24	19	467	84					1	2
	産科	1		1	1				2	2	1	13	18	1,445	172					1	2
	婦人科													3							
眼 科	眼 科	2	1	1	2		4	2	4	7	7	44	30	438	97	1		1		6	14
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科				1			2	5		3	11	16	702	104	1	1	1			1
リハビリテーション科	リハビリテーション科													4							
放射線科	放射線診断科											2	1	40	2						
	放射線治療科													7	2						
歯 科	歯科	1			1			3	6	5	10	74	69	1,691	361	1		2	1	6	1
麻 酔 科	周産期歯科												1	83	7						
	集中治療科													1							
	麻酔科						1		1				3	14							
合 計		19	1	2	10	6	8	20	61	29	45	355	297	21,239	1,829	10	4	5	3	34	29

9 都道府県別にみた患者数【外来新患】

9-1表

診療科別・都道府県別延外来患者数【新患】

診療科名	院内標榜科名	岐阜	静岡	愛知	三重	滋賀	京都	大阪	兵庫	奈良	和歌山	鳥取県	島根県	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	福岡
内 科	母性内科		2						2												
	女性総合外来																				
精 神 科	こころの診療科																				
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科																				
	乳幼児メンタルヘルス科																				
神 経 科	神経内科			1				1													
	在宅診療科																				
呼吸器科	呼吸器科																				
消化器科	消化器科							1							1						
	肝臓内科																				
	内視鏡科																				
循環器科	循環器科		1	1			1														1
アレルギー科	アレルギー科		2					1				1									1
小 児 科	腎臓・リウマチ・膠原病総合診（成人診療科含む）	1		1			1														
	救急診療科	3	5	6		2		9	1			1		1					1		7
	血液腫瘍科			1		1															
	血液内科																				
	ライソゾーム病センター		1																		
	内分泌・代謝科			1				1													
	遺伝診療科																				
	免疫科							1													
	新生児科																				
	移植外科	2	5	8				4	2										1		
	感染症科																				
	病理診断科																				
外 科	外科						1														
整形外科	整形外科		4					2													
形成外科	形成外科							1													
脳神経外科	脳神経外科															1					
心臓血管外科	心臓血管外科			2																	
皮 膚 科	皮 膚 科		2	1							1										
泌尿器科	泌尿器科		1						1												
産婦人科	不妊診療科		1					1													
	不育診療科		1											1							
	胎児診療科		3					1													1
	産科		4	6			2	1	1		1					1					
	婦人科																				
眼 科	眼 科		5	1			1	2													1
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科		3	1		1		2	1		1				1						1
リハビリテーション科	リハビリテーション科																				
放射線科	放射線診断科																				
	放射線治療科																				
歯 科	歯科		2	9	1			2													
	周産期歯科																				
麻 酔 科	集中治療科																				
	麻酔科																				
合 計		6	42	39	1	4	6	30	8		3	2		2	2	2			2		12

9 都道府県別にみた患者数【外来新患】

9-1表

診療科別・都道府県別延外来患者数【新患】

診療科名	院内標榜科名	佐賀県	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄	その他	合計
内 科	母性内科									421
	女性総合外来									
精 神 科	こころの診療科									122
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科							1		109
	乳幼児メンタルヘルス科									21
神 経 科	神経内科					1	1			217
	在宅診療科									33
呼吸器科	呼吸器科									66
消化器科	消化器科									201
	肝臓内科									
	内視鏡科									
循環器科	循環器科									279
アレルギー科	アレルギー科									547
小 児 科	腎臓・リウマチ・膠原病総合診（成人診療科含む）									175
	救急診療科		1	1		1	1	3		11,741
	血液腫瘍科									107
	血液内科									19
	ライソゾーム病センター									15
	内分泌・代謝科									371
	遺伝診療科					1	1			117
	免疫科									52
	新生児科									8
	移植外科				1			1		124
	感染症科									3
	病理診断科									
外 科	外科						1	1		334
整形外科	整形外科									723
形成外科	形成外科							1		230
脳神経外科	脳神経外科						1			212
心臓血管外科	心臓血管外科									3
皮 膚 科	皮 膚 科									687
泌尿器科	泌尿器科							2		311
産婦人科	不妊診療科									122
	不育診療科									108
	胎児診療科									608
	産科			1			1			1,677
	婦人科									3
眼 科	眼 科							2		673
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科				1					860
リハビリテーション科	リハビリテーション科									4
放射線科	放射線診断科									45
	放射線治療科									9
歯 科	歯科						1	1		2,248
	周産期歯科									91
麻 酔 科	集中治療科									1
	麻酔科									19
合 計			1	2	2	3	7	12		24,194

9－2表 診療科別・都道府県別
一日平均外来患者数【新患】

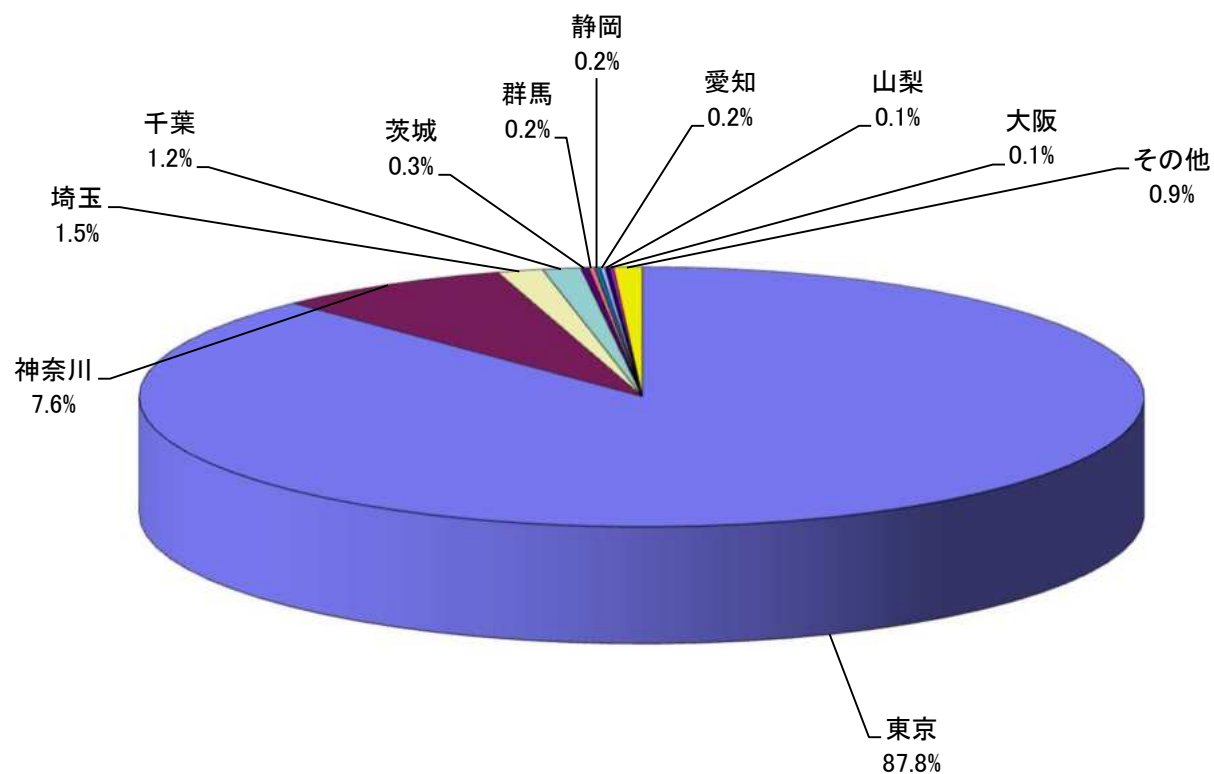
診療科名	院内標榜科名	北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京	神奈川	新潟	富山	石川	福井	山梨	長野	岐阜	静岡	愛知	三重	滋賀	京都	大阪	兵庫	奈良
内科	母性内科										0.0	0.1	0.1	1.4	0.2								0.0							
	女性総合外来																													
精神科	こころの診療科											0.0	0.0	0.4	0.1															
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期メンタルヘルス科											0.0	0.0	0.4	0.0															
	乳幼児メンタルヘルス科											0.0		0.1	0.0															
神経科	神経内科								0.0			0.0	0.0	0.7	0.1									0.0						
	在宅診療科											0.0	0.0	0.1	0.0															
呼吸器科	呼吸器科											0.0	0.0	0.1	0.1	0.0														
消化器科	消化器科											0.0	0.0	0.6	0.1															
	肝臓内科																													
	内視鏡科																													
循環器科	循環器科									0.0		0.0	0.0	1.0	0.1								0.0	0.0						
アレルギー科	アレルギー科								0.0			0.1	0.0	1.8	0.3	0.0				0.0		0.0						0.0		
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病										0.0	0.0	0.0	0.6	0.1					0.0								0.0		
	総合診療科（成人診療科含む）											0.0	0.0	1.7	0.2								0.0							
	救急診療科							0.0	0.0		0.0	0.1	0.0	46.9	1.1	0.0				0.0	0.0	0.0	0.0	0.0				0.0	0.0	
	血液腫瘍科							0.0			0.0	0.0	0.0	0.3	0.1									0.0						
	血液内科													0.1	0.0															
	ライソゾーム病センター											0.0	0.0	0.0	0.0															
	内分泌・代謝科							0.0	0.0			0.0	0.0	1.3	0.2	0.0							0.0							
	遺伝診療科									0.0		0.0	0.0	0.3	0.0															
	免疫科							0.0				0.0		0.1	0.0															
	新生児科													0.0																
	移植外科	0.0			0.0			0.0			0.0	0.0	0.0	0.2	0.1	0.0	0.0				0.0	0.0	0.0	0.0					0.0	
	感染症科													0.0	0.0															
	病理診断科																													
外科	外科							0.0				0.0	0.0	1.2	0.1															
整形外科	整形外科	0.0						0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	2.3	0.5					0.0			0.0							
形成外科	形成外科							0.0		0.0		0.0	0.0	0.7	0.1															
脳神経外科	脳神経外科							0.0			0.0	0.0	0.0	0.6	0.1					0.0										
心臓血管外科	心臓血管外科													0.0										0.0						
皮膚科	皮膚科							0.0				0.0	0.0	2.5	0.3								0.0	0.0						
泌尿器科	泌尿器科											0.0	0.0	1.1	0.2															
産婦人科	不妊診療科							0.0				0.0	0.0	0.4	0.0															
	不育診療科											0.0	0.0	0.3	0.1															
	胎児診療科	0.0						0.0	0.0			0.1	0.1	1.9	0.3					0.0	0.0		0.0					0.0	0.0	
	産科	0.0		0.0				0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	5.9	0.7					0.0	0.0		0.0	0.0			0.0	0.0		
	婦人科													0.0																
眼科	眼科	0.0					0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.1	1.8	0.4	0.0		0.0		0.0	0.1		0.0	0.0				0.0		
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科							0.0			0.0	0.0	0.1	2.9	0.4			0.0			0.0		0.0	0.0				0.0		
リハビリテーション科	リハビリテーション科													0.0																
放射線科	放射線診断科											0.0		0.2	0.0															
	放射線治療科													0.0	0.0															
歯科	歯科	0.0						0.0	0.0	0.0	0.0	0.3	0.3	7.0	1.5					0.0	0.0		0.0	0.0				0.0		
	周産期歯科													0.3	0.0															
麻酔科	集中治療科																													
	麻酔科													0.1																
合 計		0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.3	0.1	0.2	1.5	1.2	87.4	7.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.2	0.2	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	

9-2表 診療科別・都道府県別
一日平均外来患者数【新患】

診療科名	院内標榜科名	和歌山	鳥取県	島根県	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	佐賀県	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄	その他	合計
内科	母性内科																				1.7
	女性総合外来																				
精神科	こころの診療科																				0.5
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期メンタルヘルス科																		0.0		0.4
	乳幼児メンタルヘルス科																				0.1
	神経内科																0.0	0.0			0.9
神経科	在宅診療科																				0.1
呼吸器科	呼吸器科																				0.3
消化器科	消化器科					0.0															0.8
	肝臓内科																				
	内視鏡科																				
循環器科	循環器科											0.0									1.1
アレルギー科	アレルギー科		0.0									0.0									2.3
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病																				0.7
	総合診療科（成人診療科含む）																				2.0
	救急診療科		0.0		0.0					0.0		0.0		0.0	0.0		0.0	0.0	0.0		48.3
	血液腫瘍科																				0.4
	血液内科																				0.1
	ライソソーム病センター																				0.1
	内分泌・代謝科																				1.5
	遺伝診療科																0.0	0.0			0.5
	免疫科																				0.2
	新生児科																				0.0
	移植外科									0.0						0.0			0.0		0.5
	感染症科																				0.0
	病理診断科																				
外科	外科																	0.0	0.0		1.4
整形外科	整形外科																				3.0
形成外科	形成外科																		0.0		0.9
脳神経外科	脳神経外科						0.0											0.0			0.9
心臓血管外科	心臓血管外科																				0.0
皮膚科	皮膚科	0.0																			2.8
泌尿器科	泌尿器科																		0.0		1.3
産婦人科	不妊診療科																				0.5
	不育診療科				0.0																0.4
	胎児診療科											0.0									2.5
	産科	0.0					0.0								0.0			0.0			6.9
	婦人科																				0.0
眼科	眼科											0.0							0.0		2.8
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	0.0				0.0						0.0				0.0					3.5
リハビリテーション科	リハビリテーション科																				0.0
放射線科	放射線診断科																				0.2
	放射線治療科																				0.0
歯科	歯科																	0.0	0.0		9.3
	周産期歯科																				0.4
麻酔科	集中治療科																				0.0
	麻酔科																				0.1
合計		0.0	0.0		0.0	0.0	0.0			0.0		0.0		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0		99.6

9－3表 外来患者数（新患）の都道府県別構成割合（主な都道府県）

東京	神奈川	埼玉	千葉	茨城	群馬	静岡	愛知	山梨	大阪	その他
21,239	1,829	355	297	61	45	42	39	34	30	223
87.8%	7.6%	1.5%	1.2%	0.3%	0.2%	0.2%	0.2%	0.1%	0.1%	0.9%



１０ 都道府県別にみた患者数【外来再診】
 １０－１表 診療科別・都道府県別
 延外来患者数【再診】

診療科名	院内標榜科名	北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京	神奈川	新潟	富山	石川	福井	山梨	長野	岐阜	静岡	愛知	三重	滋賀	京都	大阪
内 科	母性内科	3	6	1		5		8	19	4	6	219	142	7,111	1,109			3		3	2	2	8	5				9
	女性総合外来																											
精 神 科	こころの診療科	2			1				5			90	104	3,313	524				1	3	3	1	7	9				9
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科				1	1			5		1	94	85	2,503	442	1				2	4			5				1
	乳幼児メンタルヘルス科								1			10	5	913	108					2			4					2
	神経内科 在宅診療科					2	1	9	21		6	125	142	5,808	1,199	3			2	13	1	3	8	7				
呼吸器科	呼吸器科			3		10	1	1	13			85	43	1,135	338	4	2			1	1		5					
消化器科	消化器科		2					6	29	24	9	106	163	3,059	715	2	5			57		1	14	8				6
	肝臓内科 内視鏡科																											
循環器科	循環器科				2		4	5	39	10	7	152	208	3,697	781	4				18	5		6	5	3			
アレルギー科	アレルギー科	1						18	76	10	11	588	390	12,642	2,475	31		2		33	7		26	11			3	5
小 児 科	腎臓・リウマチ・膠原病 総合診 (成人診療科含む)		1	1				5	64	16	21	185	291	3,997	1,094	2	1			53	11	1	11	25				6
	救急診療科	1	1	1	3			7	51	14	12	284	295	11,213	1,642	12		1		37	5		30	5	3		3	2
	血液腫瘍科	2				1		1	9	2	3	107	55	9,433	678					8			2	3				5
	血液内科	4	1		3	1			27	50	35	154	191	2,950	961	3	3	1		30	1	4	45	17			6	10
	ライソゾーム病センター								4	12	3	15	22	441	154										1			
	内分泌・代謝科	2		10	1	1		19	71	41	30	430	514	11,910	2,484	15	3		1	53	14	7	31	11	5	2	2	1
	遺伝診療科	1						6	8	2	2	36	44	932	213			1		4	4	1	2	2				1
	免疫科								7			40	65	784	167													2
	新生児科								4	2	8	31	30	2,796	321					4		1					1	
	移植外科	48	12	2	5	11	11	4	97	12	79	361	421	1,291	773	27	1	4	4	27	40	26	115	93	6	5		12
	感染症科	5	1	1		2	4	1	5		3	31	40	163	67	3		1	1	1	10	7	9	10	2			2
	病理診断科																											
外 科	外科		1		1		1	1	20	4	6	171	124	3,687	761	23	1	2		20	1	1	5	1			2	
整形外科	整形外科	9		7	17	1	1	32	68	54	59	338	257	8,234	2,034	8	2	4	2	60	29	1	48	5	1	4		4
形成外科	形成外科	1			1	3	1	4	24	12	21	85	101	2,699	482		5		4	12	3		4	3	1		3	1
脳神経外科	脳神経外科	2	1	2	1	2	1	7	17	3	18	153	141	2,628	779	4	2		1	34	5		7	7	2		1	3
心臓血管外科	心臓血管外科								2			5	4	132	24					2								
皮 膚 科	皮 膚 科			4				1	46	13	19	129	163	6,323	1,089	2					2		26	4			4	1
泌尿器科	泌尿器科	1				1		5	37	2	20	113	87	2,989	774	9	7	1	3	23	11		25	2				
産婦人科	不妊診療科							12	8		11	63	28	3,025	357					10								1
	不育診療科										1	35	12	553	117						3		2					
	胎児診療科								8	7	1	61	45	2,261	308					6		4	3					
	産科	10	5	6				10	6	14	7	178	209	18,444	2,226	2			8	1	25	8	26	9	7		1	10
	婦人科											3	3	113	14													
眼 科	眼 科	17	4	4	4	7	9	38	93	63	127	627	720	6,440	2,162	22	2	10	1	71	79	4	69	39	4		3	12
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科				4		4	9	19	4	17	176	202	6,174	1,276	4	2	4		9	11	1	13	8	2	2	2	6
リハビリテーション科	リハビリテーション科								4		6	61	23	1,218	257					11	1	1	2	2				
放射線科	放射線診断科								1		5	10	6	186	49					3								
	放射線治療科		1									4	297	70														
歯 科	歯科							1	16	6	3	61	67	1,645	363	1	2			7	1	2	1	4	1			2
	周産期歯科													259	38													
麻 酔 科	集中治療科													10	1													
	麻酔科	3	1	2		1		3	7	10	15	85	104	2,688	505	1	1			18	6		8	6	1			3
合 計		112	37	44	44	49	38	213	931	391	572	5,620	5,636	159,064	30,282	183	39	43	20	636	285	76	565	307	38	13	31	116

10 都道府県別にみた患者数【外来再診】
10-1表 診療科別・都道府県別
延外来患者数【再診】

診療科名	院内標榜科名	兵庫	奈良	和歌山	鳥取県	島根県	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	佐賀県	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄	その他	合計
内科	母性内科	1						1												1	5		8,673
	女性総合外来																						
精神科	こころの診療科	2														3		1			5		4,083
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科															1					1		3,147
	乳幼児メンタルヘルス科																						1,045
	神経内科	1												1									7,352
神経科	在宅診療科																						3,112
呼吸器科	呼吸器科													1									1,643
消化器科	消化器科	2			1											2				1	1		4,213
	肝臓内科																						
	内視鏡科																						
循環器科	循環器科	5						2								7							4,960
アレルギー科	アレルギー科	21										1		7		2	3			2			16,365
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病総合診 (成人診療科含む)	1							4				5		1								5,796
	救急診療科				1			1				1		1		1					2		10,316
	血液腫瘍科	1												2							1		4,501
	血液内科																						419
	ライソゾーム病センター																						652
	内分泌・代謝科	5	2				2	2	1		3		2	4			2			1	3		15,685
	遺伝診療科																						1,259
	免疫科																						1,065
	新生児科	1																					3,199
	移植外科	11		2	3		1	1	2			2	2	3		18		2	2	1	19		3,556
	感染症科							1				1		3		2					4		380
	病理診断科																						
外科	外科							1							1				2		3		4,840
整形外科	整形外科	1					4			1	3	2		9		1	1	4	5		5		11,315
形成外科	形成外科										1		1			1	2				2		3,477
脳神経外科	脳神経外科						2	4	2	1			1						1				3,832
心臓血管外科	心臓血管外科																						169
皮膚科	皮膚科															1		1					7,828
泌尿器科	泌尿器科						2			2			1								4		4,119
産婦人科	不妊診療科																						3,515
	不育診療科						1																724
	胎児診療科			5																			2,709
	産科	2						10									8			8			21,240
	婦人科												3										136
眼科	眼科	3	1		1	7		4		2		2		1	3		1	3		1	9		10,669
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	2																3			1		7,955
リハビリテーション科	リハビリテーション科																						1,586
放射線科	放射線診断科																						260
	放射線治療科																						372
歯科	歯科							1												1			2,185
	周産期歯科																						297
麻酔科	集中治療科																						11
	麻酔科	1		1				1	1				1			1		1			2		3,477
合 計		60	3	8	6	7	12	29	10	6	7	9	16	33	5	40	18	15	10	18	68		205,765

10-2表 診療科別・都道府県別
一日平均外来患者数【再診】

診療科名	院内標榜科名	北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京	神奈川	新潟	富山	石川	福井	山梨	長野	岐阜	静岡	愛知	三重	滋賀	京都	大阪	兵庫	奈良
内科	母性内科	0.0	0.0	0.0		0.0		0.0	0.1	0.0	0.0	0.9	0.6	29.3	4.6			0.0		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0				0.0	0.0	
	女性総合外来																													
精神科	児童・思春期リエゾン科	0.0			0.0				0.0			0.4	0.4	13.6	2.2				0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0				0.0	0.0	
	児童・思春期メンタルヘルス科				0.0	0.0			0.0		0.0	0.4	0.3	10.3	1.8	0.0				0.0	0.0			0.0				0.0		
	乳幼児メンタルヘルス科								0.0			0.0	0.0	3.8	0.4					0.0			0.0					0.0		
神経科	神経内科					0.0	0.0	0.0	0.1		0.0	0.5	0.6	23.9	4.9	0.0			0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0					0.0	
	在宅診療科											0.4	0.3	10.9	1.2							0.0								
呼吸器科	呼吸器科			0.0		0.0	0.0	0.1				0.3	0.2	4.7	1.4	0.0	0.0			0.0	0.0		0.0							
消化器科	消化器科		0.0					0.0	0.1	0.1	0.0	0.4	0.7	12.6	2.9	0.0	0.0			0.2		0.0	0.1	0.0				0.0	0.0	
	肝臓内科																													
	内視鏡科																													
循環器科	循環器科				0.0		0.0	0.0	0.2	0.0	0.0	0.6	0.9	15.2	3.2	0.0				0.1	0.0		0.0	0.0	0.0					0.0
アレルギー科	アレルギー科	0.0						0.1	0.3	0.0	0.0	2.4	1.6	52.0	10.2	0.1		0.0		0.1	0.0		0.1	0.0			0.0	0.0	0.1	
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病		0.0	0.0				0.0	0.3	0.1	0.1	0.8	1.2	16.4	4.5	0.0	0.0			0.2	0.0	0.0	0.0	0.1				0.0	0.0	0.0
	総合診 (成人診療科含む)	0.0	0.0	0.0	0.0			0.0	0.2	0.1	0.0	1.2	1.2	46.1	6.8	0.0		0.0		0.2	0.0		0.1	0.0	0.0		0.0	0.0		
	救急診療科	0.0				0.0		0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.2	38.8	2.8			0.0		0.0			0.0	0.0				0.0		
	血液腫瘍科	0.0	0.0		0.0	0.0		0.1	0.2	0.1	0.6	0.8	12.1	4.0	0.0	0.0	0.0			0.1	0.0	0.0	0.2	0.1			0.0	0.0	0.0	
	血液内科											0.1	0.1	1.3	0.2															
	ライソゾーム病センター								0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	1.8	0.6									0.0						
	内分泌・代謝科	0.0		0.0	0.0	0.0		0.1	0.3	0.2	0.1	1.8	2.1	49.0	10.2	0.1	0.0		0.0	0.2	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	遺伝診療科	0.0						0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	3.8	0.9			0.0		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0				0.0		
	免疫科								0.0			0.2	0.3	3.2	0.7													0.0		
	新生児科								0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	11.5	1.3					0.0		0.0					0.0		0.0	
	移植外科	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.4	0.0	0.3	1.5	1.7	5.3	3.2	0.1	0.0	0.0	0.0	0.1	0.2	0.1	0.5	0.4	0.0	0.0		0.0	0.0	
	感染症科	0.0	0.0	0.0		0.0	0.0	0.0	0.0		0.0	0.1	0.2	0.7	0.3	0.0		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0			0.0		
	病理診断科																													
外科	外科		0.0		0.0		0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.7	0.5	15.2	3.1	0.1	0.0	0.0		0.1	0.0	0.0	0.0	0.0			0.0			
整形外科	整形外科	0.0		0.0	0.1	0.0	0.0	0.1	0.3	0.2	0.2	1.4	1.1	33.9	8.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.1	0.0	0.2	0.0	0.0	0.0		0.0	0.0	
形成外科	形成外科	0.0			0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	0.3	0.4	11.1	2.0		0.0		0.0	0.0	0.0		0.0	0.0	0.0		0.0	0.0		
脳神経外科	脳神経外科	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	0.6	0.6	10.8	3.2	0.0	0.0		0.0	0.1	0.0		0.0	0.0	0.0		0.0	0.0		
心臓血管外科	心臓血管外科								0.0			0.0	0.0	0.5	0.1					0.0										
皮膚科	皮膚科			0.0				0.0	0.2	0.1	0.1	0.5	0.7	26.0	4.5	0.0					0.0		0.1	0.0			0.0	0.0		
泌尿器科	泌尿器科	0.0				0.0		0.0	0.2	0.0	0.1	0.5	0.4	12.3	3.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0		0.1	0.0						
産婦人科	不妊診療科							0.0	0.0		0.0	0.3	0.1	12.4	1.5					0.0								0.0		
	不育診療科										0.0	0.1	0.0	2.3	0.5						0.0		0.0							
	胎児診療科								0.0	0.0	0.0	0.3	0.2	9.3	1.3					0.0		0.0								
	産科	0.0	0.0	0.0				0.0	0.0	0.1	0.0	0.7	0.9	75.9	9.2	0.0		0.0		0.0	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0		0.0	0.0	0.0	
	婦人科										0.0	0.0	0.5	0.1																
眼科	眼科	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.2	0.4	0.3	0.5	2.6	3.0	26.5	8.9	0.1	0.0	0.0	0.0	0.3	0.3	0.0	0.3	0.2	0.0		0.0	0.0	0.0	0.0
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科				0.0		0.0	0.0	0.1	0.0	0.1	0.7	0.8	25.4	5.3	0.0	0.0	0.0		0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
リハビリテーション科	リハビリテーション科								0.0		0.0	0.3	0.1	5.0	1.1					0.0	0.0	0.0	0.0	0.0						
放射線科	放射線診断科								0.0		0.0	0.0	0.0	0.8	0.2					0.0										
	放射線治療科		0.0										0.0	1.2	0.3															
歯科	歯科							0.0	0.1	0.0	0.0	0.3	0.3	6.8	1.5	0.0	0.0			0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0			0.0		
	周産期歯科													1.1	0.2															
麻酔科	集中治療科													0.0	0.0															
	麻酔科	0.0	0.0	0.0		0.0		0.0	0.0	0.0	0.1	0.3	0.4	11.1	2.1	0.0	0.0			0.1	0.0		0.0	0.0	0.0			0.0	0.0	
合 計		0.5	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.9	3.8	1.6	2.4	23.1	23.2	654.6	124.6	0.8	0.2	0.2	0.1	2.6	1.2	0.3	2.3	1.3	0.2	0.1	0.1	0.5	0.2	0.0

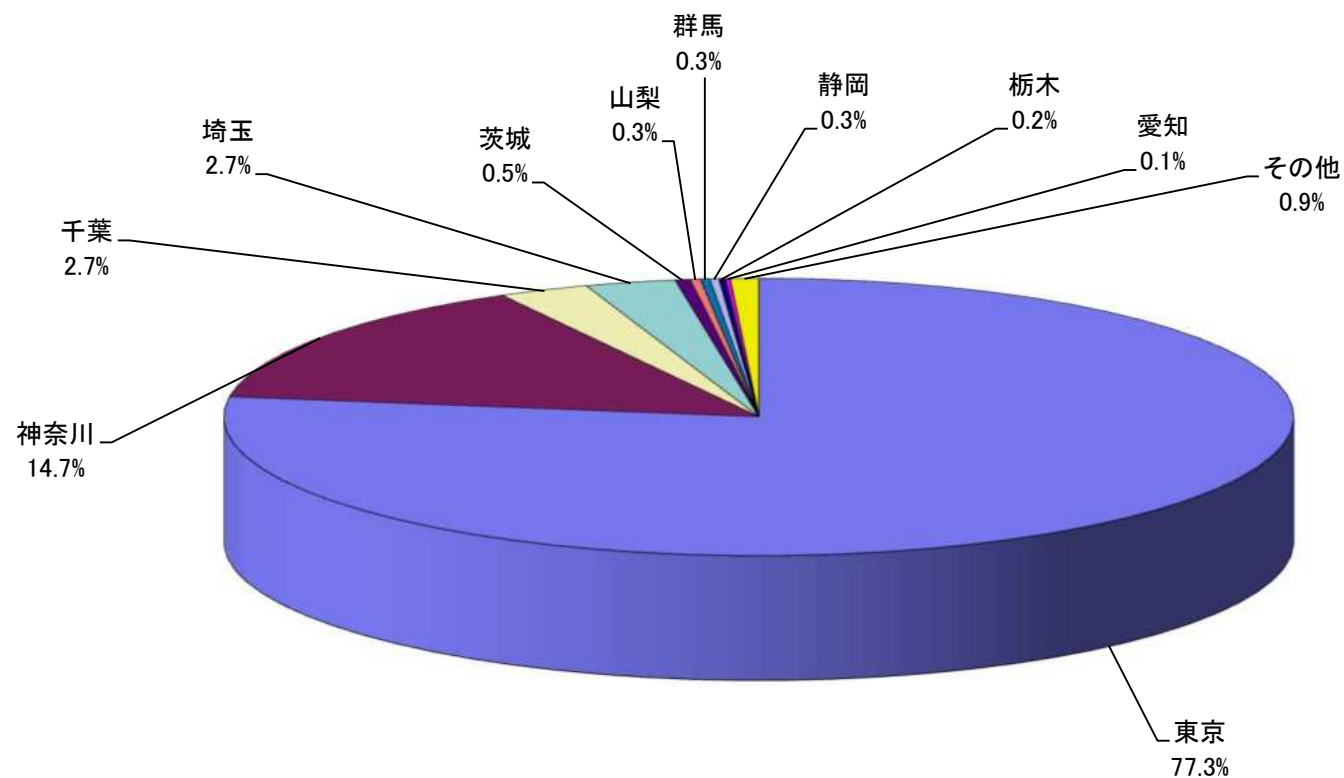
１０－２表 診療科別・都道府県別

一日平均外来患者数【再診】

診療科名	院内標榜科名	和歌山	鳥取県	島根県	岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	佐賀県	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄	その他	合計
内科	母性内科					0.0												0.0	0.0		35.7
	女性総合外来																				
精神科	児童・思春期リエゾン科													0.0		0.0			0.0		16.8
	児童・思春期メンタルヘルス科													0.0					0.0		13.0
	乳幼児メンタルヘルス科																				4.3
	神経内科											0.0									30.3
神経科	在宅診療科																				12.8
呼吸器科	呼吸器科											0.0									6.8
消化器科	消化器科		0.0											0.0				0.0	0.0		17.3
	肝臓内科																				
	内視鏡科																				
循環器科	循環器科					0.0								0.0							20.4
アレルギー科	アレルギー科								0.0			0.0		0.0	0.0			0.0			67.3
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病総合診 (成人診療科含む)					0.0	0.0				0.0	0.0	0.0				0.0		0.0		23.9
	救急診療科		0.0							0.0				0.0					0.0		56.1
	血液腫瘍科									0.0				0.0					0.0		42.5
	血液内科																		0.0		18.5
	ライソゾーム病センター																				1.7
	内分泌・代謝科				0.0	0.0	0.0		0.0		0.0	0.0			0.0			0.0	0.0		2.7
	遺伝診療科																				64.5
	免疫科																				5.2
	新生児科																				4.4
	移植外科	0.0	0.0		0.0	0.0	0.0			0.0	0.0	0.0		0.1		0.0	0.0	0.0	0.1		13.2
	感染症科					0.0				0.0		0.0		0.0					0.0		14.6
	病理診断科																				1.6
外科	外科					0.0							0.0				0.0		0.0		19.9
整形外科	整形外科				0.0			0.0	0.0	0.0		0.0		0.0	0.0	0.0	0.0		0.0		46.6
形成外科	形成外科								0.0		0.0			0.0	0.0				0.0		14.3
脳神経外科	脳神経外科				0.0	0.0	0.0	0.0			0.0						0.0				15.8
心臓血管外科	心臓血管外科																				0.7
皮膚科	皮膚科													0.0		0.0					32.2
泌尿器科	泌尿器科				0.0			0.0			0.0								0.0		17.0
産婦人科	不妊診療科																				14.5
	不育診療科				0.0																3.0
	胎児診療科	0.0																			11.1
	産科					0.0									0.0			0.0			87.4
	婦人科									0.0											0.6
眼科	眼科		0.0	0.0		0.0		0.0		0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		0.0	0.0		43.9
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科															0.0			0.0		32.7
リハビリテーション科	リハビリテーション科																				6.5
放射線科	放射線診断科																				1.1
	放射線治療科																				1.5
歯科	歯科					0.0												0.0			9.0
	周産期歯科																				1.2
麻酔科	集中治療科																				0.0
	麻酔科	0.0				0.0	0.0				0.0			0.0		0.0			0.0		14.3
合 計		0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.1	0.1	0.0	0.2	0.1	0.1	0.0	0.1	0.3		846.8

10-3表 外来患者数（再診）の都道府県別構成割合（主な都道府県）

東京	神奈川	千葉	埼玉	茨城	山梨	群馬	静岡	栃木	愛知	その他
159,064	30,282	5,636	5,620	931	636	572	565	391	307	1,761
77.3%	14.7%	2.7%	2.7%	0.5%	0.3%	0.3%	0.3%	0.2%	0.1%	0.9%



1 1 地域別患者数（東京都）

1 1－1表

東京都の診療科別・市区町村別入院患者数

診療科名	院内標榜科名	千代田区	中央区	港区	新宿区	文京区	台東区	墨田区	江東区	品川区	目黒区	大田区	世田谷区	渋谷区	中野区	杉並区	豊島区	北区	荒川区	板橋区	練馬区	足立区	葛飾区	江戸川区	八王子市	立川市
内科	母性内科			7	31				33	8	15		97	1		94										45
精神科	こころの診療科																									
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科																									
	乳幼児メンタルヘルス科																			11						
神経科	神経内科	43		17	35		14	19	76	63	105	26	1,176	30	24	396	6			17	83	26	42	38		
	在宅診療科	16	18	13	23	2	9	36	31	18	22	74	788	45	93	170	71	9	17	22	113	61	111	2	4	
呼吸器科	呼吸器科			4	12			4		14	49	8	120	5		2			12		21				5	36
消化器科	消化器科	8	2	62		48		3	2	10	47	119	789	95	7	9	2	7	4	14	41	119	16		4	
	肝臓内科																									
循環器科	循環器科		36		44				16	67	88	16	1,342	60	100	120	12	68		16	72	20			60	
アレルギー科	アレルギー科	13	6	129	80		2		5	91	38	14	617	12	1	43	27		9	59	43	4	2	21		
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病総合診療科（成人診療科含む）	26	34	199	159	103	6	46	40	92	1,347	796	13,083	424	312	1,130	50	107	13	211	361	326	60	123	180	15
	救急診療科		1	1							2	2	78			5										
	血液腫瘍科		12	10	192		3		131	366	250	65	2,315	201	1,145	1,145		169		14	683	1,034	163	154	10	5
	血液内科																									
	ライソゾーム病センター												1													
	内分泌・代謝科			16	9	35	5		24	123	32	92	498	17	12	105	9		9	7	19	71	5	74		2
	遺伝診療科																									
	免疫科			29						1	3	62	183			4				13	7	5	44	51		
	新生児科	8	170	215	542	42	92	22	23	565	420	357	9,580	633	346	1,071	131	150		233	540	99		46	302	57
	移植外科		28	28	6		159	23	48	9	28	197	87	145	5	20	143	156			465	21	51	249	215	
	緩和ケア科											2				20										
	病理診断科																									
外科	外科		4	15	7	36				30	115	52	1,370	63	124	138	8	48		48	66	3	19	173		
整形外科	整形外科	14	29	135	13	3	42	8	35	158	149	181	732	40	35	60	84		71	94	88	97	91	82	33	
形成外科	形成外科	2	35	17	12			6	15	5	36	14	260	8	26	43	6	1	1	11	22	32	6	2	13	1
脳神経外科	脳神経外科	30	36	77	38	19	156	57	38	106	161	210	1,135	49	87	202	24	18		159	179	53	18	63	183	52
心臓血管外科	心臓血管外科			1	3					4	3		38	1	3						3					
皮膚科	皮膚科			2	2			2		6	3	2	40	2	6	7				5		2		3		
泌尿器科	泌尿器科			23	9		8		10	33	25	64	280	1		46	10			3	16	5	32	7	1	
産婦人科	不妊診療科			1							2	4	58		3	2	4				2					
	不育診療科												1													
	胎児診療科	6	40	38	27	1	25		10	42	89	31	616	92	75	82	4	42		25	80	12		28		48
	産科	16	14	96	116	38	34	37	66	184	391	349	8,462	423	252	813	100	21		54	243	62		35	96	13
	婦人科																									
眼科	眼科	14	7	46	1		2	3	92	53	60	32	221	12	22	107	17	21	19	18	40	59	18	16	16	19
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科			18	7	10	6		16	15	35	116	384	7	17	75	25	16		65	46	16	7	30		2
リハビリテーション科	リハビリテーション科																									
放射線科	放射線診断科																									
	放射線治療科																									
歯科	歯科																									
麻酔科	集中治療科	7	64	221	89	18	23	93	88	76	167	237	1,414	103	3	373	30	30	15	49	224	169	39	358	7	
	麻酔科																									
合 計		203	539	1,423	1,457	488	586	387	812	2,687	3,976	3,367	46,671	2,484	2,717	6,388	794	925	158	1,262	3,521	2,296	794	1,973	1,072	295

1 1 地域別患者数（東京都）

1 1－1 表

東京都の診療科別・市区町村別入院患者数

診療科名	院内標榜科名	武蔵野市	三鷹市	青梅市	府中市	昭島市	調布市	町田市	小金井市	小平市	日野市	東村山市	国分寺市	国立市	福生市	狛江市	東大和市	清瀬市	東久留米市	武蔵村山市	多摩市	稲城市	羽村市	あきる野市	西東京市	西多摩郡
内科	母性内科		49				41															2				
精神科	こころの診療科																									
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科																									
	乳幼児メンタルヘルス科																									
	神経内科 在宅診療科	2 6	17 53	14	10 61	2	20 67	15 134	27	4 1	7 3					113 13		2 7			22 29	8 2		2		2
呼吸器科	呼吸器科				19						8											5				
消化器科	消化器科 肝臓内科	23	45	349	5		21	18	244		3	28		1	2	11			5		2					12
循環器科	循環器科		28	12			28	285	12							271					118					
アレルギー科	アレルギー科		35		8			6	44		14		5			10					26	6		5	2	
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病総合診療科 （成人診療科含む）		15				95	70			149					52		9			14					
	救急診療科		1				4									2				1						
	血液腫瘍科	195	55				510	497	6					5	4	259						2				
	血液内科																									
	ライソゾーム病センター																									
	内分泌・代謝科						27	10					9			69										
	遺伝診療科																									
	免疫科		11	8			2																			
	新生児科	57	267	454	45		1,453	502	7	62	6		71	14		740	8				43	54				99
	移植外科	3	54	5	31	3	8	205	47		10	3	17			3	3							3		
	緩和ケア科																									
	病理診断科																									
外科	外科	13	30		59		62	85				6				96				3	16					12
整形外科	整形外科	36	30	64	124		156	51		26					9	102			25	3	35	26				
形成外科	形成外科	11	33		18	6	24	23	6	4	8					7		6	6	6	6	1				
脳神経外科	脳神経外科	48	136		2		89	35	19	4	21				1	97			3			1				
心臓血管外科	心臓血管外科		1					5								4					1					
皮膚科	皮膚科	2		2			7	6								1						4				2
泌尿器科	泌尿器科	8	19		1		11	54		3				9		9					9	9				
産婦人科	不妊診療科		4				3	2								6			1			1				
	不育診療科																									
	胎児診療科	20	32	52	132		31	77	7	59			4			26	8		7		4					24
	産科	47	129		54		729	133	15	11	6		28	20		688			20		48	160				62
	婦人科																									
眼科	眼科	5	55	3	17	3	16	61	24	17		50	1	5		19					10	5	4			9
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	1	9	3	5		24	30	52				5	1		48		10		6	15	1				
リハビリテーション科	リハビリテーション科																									
放射線科	放射線診断科 放射線治療科																									
歯科	歯科																									
麻酔科	集中治療科 麻酔科	94	7	18	19		104	66				7				113					6	15				12
合 計		672	1,272	984	980	14	4,730	2,981	546	200	235	141	176	127	16	3,863	26	46	67	19	428	311	6	19	240	

1 1 地域別患者数（東京都）

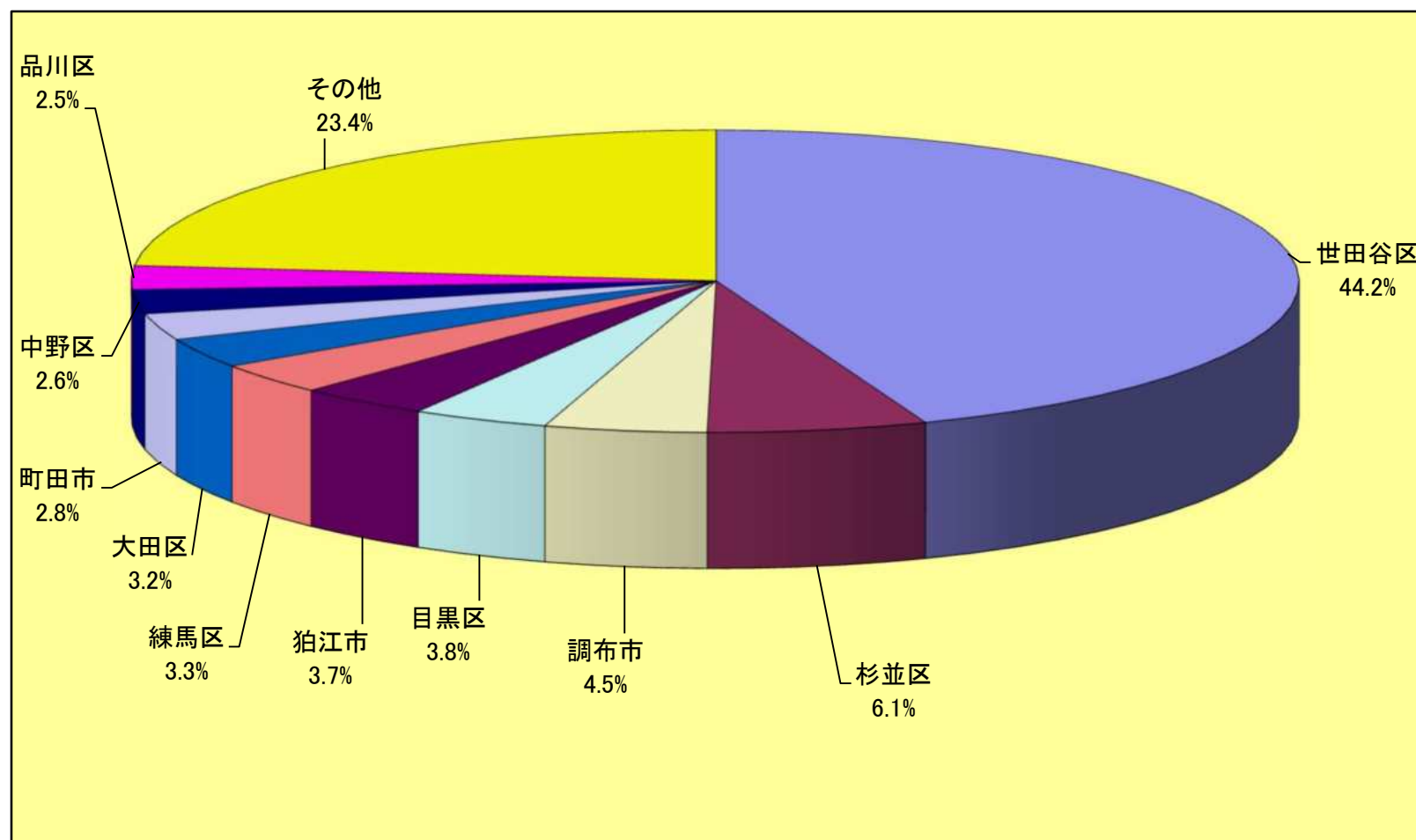
1 1－1 表

東京都の診療科別・市区町村別入院患者数

診 療 科 名	院内標榜科名	西多摩郡 瑞穂町	西多摩郡 日の出町	西多摩郡 檜原村	西多摩郡 奥多摩町	大島支庁	大島町	利島村	新島村	神津島村	三宅支庁	三宅島三 宅村	御蔵島村	八丈支庁	八丈島八 丈町	青ヶ島村	小笠原支 庁	小笠原村	総計
内 科	母性内科																		423
精 神 科	こころの診療科																		
	児童・思春期メンタル ヘルスコ・児童・思春期リ エゾン科																		
	乳幼児メンタルヘルスコ																		11
神 経 科	神経内科																		2,472
	在宅診療科																		2,204
呼吸器科	呼吸器科																		324
消化器科	消化器科									1									2,178
	肝臓内科																		
循環器科	循環器科																		2,891
アレルギー科	アレルギー科																		1,377
小 児 科	腎臓・リウマチ・ 膠原病 総合診 (成人診療科含む)						43		7						42				3,407
	救急診療科																		23,114
	血液腫瘍科		7																97
	血液内科																		9,607
	ライソゾーム病センター																		1
	内分泌・代謝科																		1,279
	遺伝診療科																		
	免疫科																		423
	新生児科						6												19,532
	移植外科																		2,478
	緩和ケア科																		22
	病理診断科																		
外 科	外科											3							2,704
整形外科	整形外科																		2,961
形成外科	形成外科						6												745
脳神経外科	脳神経外科	2																	3,608
心臓血管外科	心臓血管外科																		67
皮 膚 科	皮 膚 科																		106
泌尿器科	泌尿器科																		705
産婦人科	不妊診療科																		93
	不育診療科																		1
	胎児診療科																		1,896
	産科						6												14,071
	婦人科																		
眼 科	眼 科																		1,219
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科																		1,123
リハビリテーション科	リハビリテーション科																		
放射線科	放射線診断科																		
	放射線治療科																		
歯 科	歯科																		
麻 酔 科	集中治療科																		4,358
	麻酔科																		
合 計		2	7				61		7	1		3			42				105,497

1 1－2 表 東京都の入院患者数の主な市区町村割合

世田谷区	杉並区	調布市	目黒区	狛江市	練馬区	大田区	町田市	中野区	品川区	その他
44.2%	6.1%	4.5%	3.8%	3.7%	3.3%	3.2%	2.8%	2.6%	2.5%	23.4%



1 2 地域別（東京都）の外来患者数【新患】

1 2 - 1 表 東京都の診療科別・市区町村別

外来患者数【新患】

診 療 科 名	院内標榜科名	千代田区	中央区	港区	新宿区	文京区	台東区	墨田区	江東区	品川区	目黒区	大田区	世田谷区	渋谷区	中野区	杉並区	豊島区	北区	荒川区	板橋区	練馬区
内 科	母性内科	1	3	5	4	2	1	3	5	6	17	8	156	13	7	27	6		1		11
	女性総合外来																				
精 神 科	こころの診療科		1		1		2	2	2	2	8	2	33	1	3	4	1	2			4
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科			2	1	1	1	2	2	1	4	5	33	3	1	2				1	5
	乳幼児メンタルヘルス科				1								9			3					
	神経内科		2	7	5	1	1	2	4		9	3	94	3	2	13	1				7
神 経 科	在宅診療科			1		1		1					1	1		2					1
	呼吸器科			2	2	1				1	3	1	6			1	2	1	1		3
消化器科	消化器科	3		6	1	3				2	10	3	79	4	3	6		2			3
	肝臓内科																				
	内視鏡科																				
循環器科	循環器科		2	1	2	1			2	1	7	1	168	1	1	5		3		1	3
アレルギー科	アレルギー科	4	12	6	8	2	4	1	2	3	24	4	243	6	8	35	4	7	3	3	14
小 児 科	腎臓・リウマチ・膠原病		2		1	2			7	8	6	65	4		9	1	2			3	
	総合診 (成人診療科含む)	3		4	1	4		2	3	9	14	8	244	7	2	24	3	2	1	4	8
	救急診療科	5	7	26	29	4	6	7	14	22	326	147	8,799	76	27	505	3	4	4	6	29
	血液腫瘍科		1		2	3		1		2	1	3	20	1	3	1		1		2	1
	血液内科			2						1	1	1	3	1	1	1					
	ライソゾーム病センター											1									
	内分泌・代謝科		3	3	5	1			3		13	2	184	4	4	17	1				3
	遺伝診療科		1	7	1	3	1	1	3	4	1	5	26		3	2					3
	免疫科		1		1				1	1	2		10	2		2				2	
	新生児科												8								
	移植外科		1	1			4	2	1		1	3	7	2		1	5	2			3
	感染症科												1								1
	病理診断科																				
外 科	外科		1	3	1	2		3	2	2	7	10	190	2	1	14		4		6	
整形外科	整形外科	3	5	14	7			3	5	12	28	36	260	10	8	34	8	3	3	4	17
形成外科	形成外科	1		2	4		2	1	1	7	6	7	89	6		8	1	1		2	3
脳神経外科	脳神経外科	1	1	2	1	2	1	2	3	5	15	9	58	1	2	8	1	1	3	1	5
心臓血管外科	心臓血管外科												1								
皮 膚 科	皮 膚 科	4		3	5	2		2	3	10	24	22	332	8	5	44	2	3		3	16
泌尿器科	泌尿器科		1	5	2	2				9	15	8	134	6	3	17	1		1	1	2
産婦人科	不妊診療科			1	4	3				2	4	3	64			2					1
	不育診療科		1					3		3	2	2	34	3	2	9	2		2		3
	胎児診療科	3	6	6	13	1	3	1	2	7	14	11	204	13	10	36	4	2		5	8
	産科	5	5	8	17	5	5	4	3	19	49	22	938	43	18	78	2	2	3	3	21
	婦人科															1		1			
眼 科	眼 科	2	9	10	5	7	5	2	5	12	33	7	136	12	17	29	5	5	3	14	15
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	3	4	16	10	9	3	1	6	13	36	20	322	16	14	63	6	2	2	13	14
リハビリテーション科	リハビリテーション科												1					1			
放射線科	放射線診断科												37		3						
	放射線治療科											1	5								
歯 科	歯科	4	4	23	41	4	2	7	21	32	61	55	749	39	30	96	3	8	7	23	61
	周産期歯科	1		2	1			1		1	2	1	47	5	1	5					1
麻 酔 科	集中治療科												1								
	麻酔科				1								7	1		1	1				
合 計		43	73	168	177	66	41	54	93	196	745	417	13,798	294	179	1,105	63	59	34	97	266

1 2 地域別（東京都）の外来患者数【新患】

1 2 - 1 表 東京都の診療科別・市区町村別

外来患者数【新患】

診 療 科 名	院内標榜科名	足立区	葛飾区	江戸川区	八王子市	立川市	武蔵野市	三鷹市	青梅市	府中市	昭島市	調布市	町田市	小金井市	小平市	日野市	東村山市	国分寺市	国立市	福生市	狛江市
内 科	母性内科			1	6		3	1		3		18	2	4							15
	女性総合外来																				
精 神 科	こころの診療科	1	5	2	1		1	2				2	5								2
	児童・思春期メンタルヘルス科	2	3	1				1		2		5	2	1	1	1			1		1
	児童・思春期リエゾン科																				
	乳幼児メンタルヘルス科							1				2	1								
神 経 科	神経内科		2	3	1					1		6	3		1					3	3
	在宅診療科		1	1			1	2				1	1	1	2						
呼吸器科	呼吸器科		1	1								4				4					2
消化器科	消化器科	3		1			1	5		1			1	1		2				2	6
	肝臓内科																				
	内視鏡科																				
循環器科	循環器科	2	1	1			2	4		1		14	6	1							9
アレルギー科	アレルギー科	3	3	3			2	3		2		5	4	1		1		1	1		7
小 児 科	腎臓・リウマチ・膠原病	3	1	1	1			1				7	9							2	11
	総合診 (成人診療科含む)	1	8	4			3	5				15	8	2					1		19
	救急診療科	11	3	7	7	3	19	88		9	1	527	23	2	5	5	1				602
	血液腫瘍科	1	5	4	1	1		2					1						1	1	4
	血液内科	1				1															1
	ライソゾーム病センター				1											1		2			1
	内分泌・代謝科	1	1	2	1		1	4		1		21	8	1		2	2		1	4	9
	遺伝診療科	3	1	3	3	1	4			3			2		2						1
	免疫科		1	1	1		1	1				5									
	新生児科																				
	移植外科	1		4	3							2	1				1				
	感染症科																				
	病理診断科																				
外 科	外科		2	1			1			1		17	4			1					13
整形外科	整形外科	8	9	12	3		2	4		1	1	12	9	1		2		1		4	19
形成外科	形成外科	2		3			1	4				8	3	1							9
脳神経外科	脳神経外科	5	1				3	3		2		4	1			1					8
心臓血管外科	心臓血管外科																				
皮 膚 科	皮膚科	3	2	6	7		4	3		1	1	29	14	2	3	1				1	26
泌尿器科	泌尿器科	4	2	3	2			1			1	8	8							2	16
産婦人科	不妊診療科	1			2					4		6						1			4
	不育診療科		1		5	1	1	1				3								1	3
	胎児診療科	2	3	6	2	2	8	12		1		30	14	1	3	3			1		15
	産科	4	2	6	8	1	8	20		4		48	8	4	1		1	5	1		61
	婦人科					1															
眼 科	眼 科	11	5	3	8		2	5	2			5	23	1	3	5		6	1	1	9
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	5	5	8	5	2	6	9	1	4		32	7		1		1			1	29
リハビリテーション科	リハビリテーション科									2											
放射線科	放射線診断科																				
	放射線治療科																				1
歯 科	歯科	14	26	25	11	3	14	16	4	16	4	85	50	6	4	4	2				104
	周産期歯科							1				7	1	1							2
麻 酔 科	集中治療科																				
	麻酔科			1									1								1
合 計		92	94	114	79	16	88	199	7	59	8	928	220	31	26	33	8	16	8	22	1,013

1 2 地域別（東京都）の外来患者数【新患】

1 2 - 1 表 東京都の診療科別・市区町村別

外来患者数【新患】

診 療 科 名	院内標榜科名	東大和市	清瀬市	東久留米市	武蔵村山市	多摩市	稲城市	羽村市	あきる野市	西東京市	西多摩郡	西多摩郡瑞穂町	西多摩郡日の出町	西多摩郡檜原村	西多摩郡奥多摩町	大島支庁	大島町	利島村	新島村	神津島村	三宅支庁
内 科	母性内科		1				4														
	女性総合外来																				
精 神 科	こころの診療科					1	1			1											
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科			1			1			1											
	乳幼児メンタルヘルス科									1											
神 経 科	神経内科						2														
	在宅診療科	1				2	1			1											
呼吸器科	呼吸器科																				
消化器科	消化器科					1		1		2											
	肝臓内科																				
	内視鏡科																				
循環器科	循環器科					1	2			1											
アレルギー科	アレルギー科		1	1		4	3			1											
小 児 科	腎臓・リウマチ・膠原病総合診 （成人診療科含む）			1			1			2											
	救急診療科	1	1	2	4	5	9			10											
	血液腫瘍科			1																	
	血液内科																				
	ライソゾーム病センター					1	1														
	内分泌・代謝科				1	3															
	遺伝診療科						1														
	免疫科	1					1			1											
	新生児科																				
	移植外科																				
	感染症科																				
	病理診断科																				
外 科	外科					1	1														
整形外科	整形外科			1			1			3											
形成外科	形成外科						2			1											
脳神経外科	脳神経外科																				
心臓血管外科	心臓血管外科																				
皮 膚 科	皮 膚 科					2	4			2											
泌尿器科	泌尿器科					1	1			1											
産婦人科	不妊診療科						4														
	不育診療科						1														
	胎児診療科	2		1		2	6			3			1								
	産科					2	6			5											
	婦人科																				
眼 科	眼 科		2			4	4	1		4											
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科		1			3	6			1							2				
リハビリテーション科	リハビリテーション科																				
放射線科	放射線診断科																				
	放射線治療科																				
歯 科	歯科					8	19			5							1				
	周産期歯科					1	1			1											
麻 酔 科	集中治療科																				
	麻酔科																				
合 計		5	6	8	5	42	84	2		47			1				3				

1 2 地域別（東京都）の外来患者数【新患】

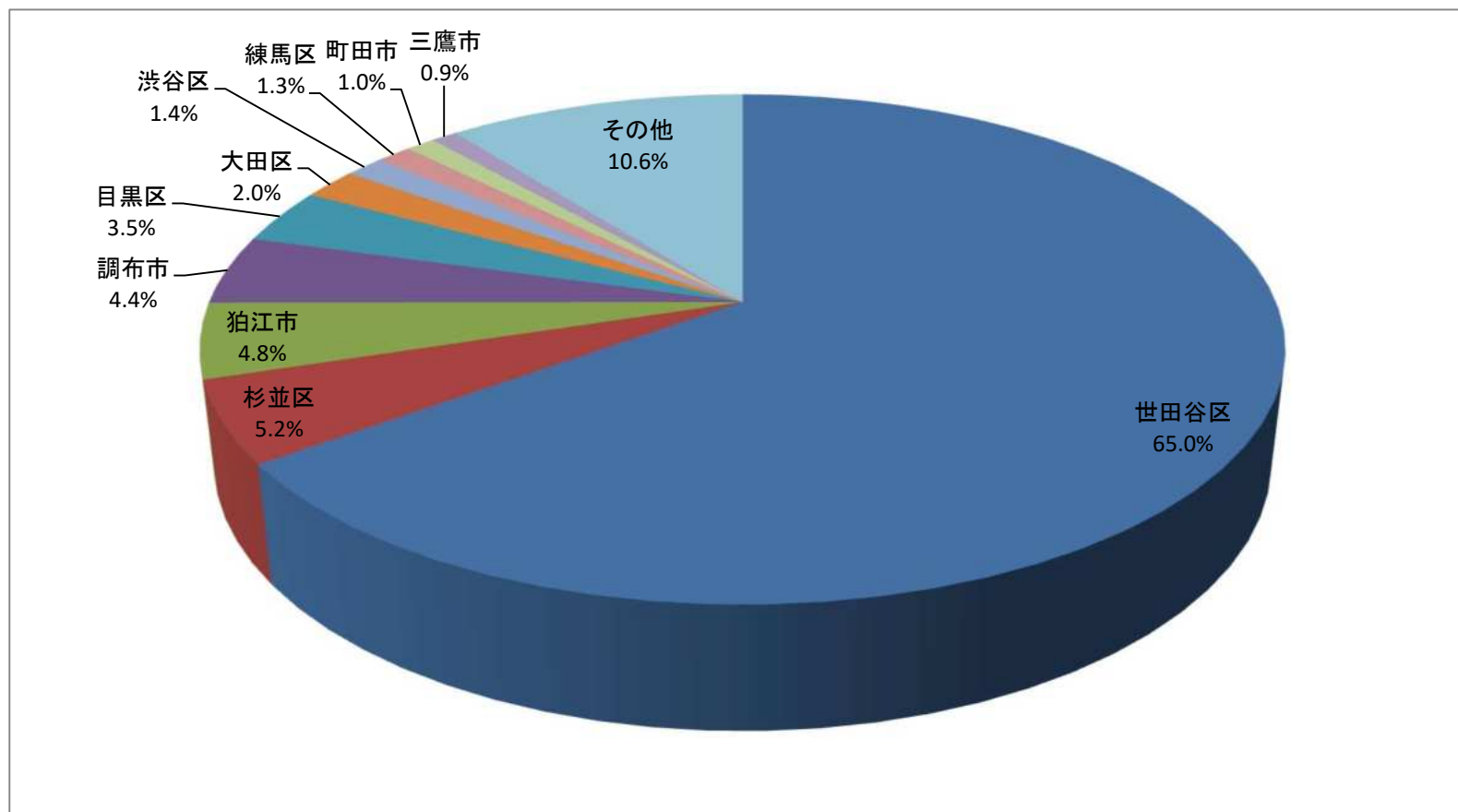
1 2－1 表 東京都の診療科別・市区町村別

外来患者数【新患】

診 療 科 名	院内標榜科名	三宅島三宅村	御蔵島村	八丈支庁	八丈島八丈町	青ヶ島村	小笠原支庁	小笠原村	総計
内 科	母性内科								334
	女性総合外来								
精 神 科	こころの診療科		1						93
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科								88
	乳幼児メンタルヘルス科								18
神 経 科	神経内科								179
	在宅診療科								23
呼吸器科	呼吸器科								36
消化器科	消化器科								152
	肝臓内科								
	内視鏡科								
循環器科	循環器科								244
アレルギー科	アレルギー科								439
小 児 科	腎臓・リウマチ・膠原病総合診 (成人診療科含む)								147
	救急診療科								413
	血液腫瘍科								11,391
	血液内科								64
	ライソゾーム病センター								14
	内分泌・代謝科								8
	遺伝診療科								306
	免疫科								85
	新生児科								35
	移植外科								8
	感染症科								45
	病理診断科								2
外 科	外科								290
整形外科	整形外科								553
形成外科	形成外科								175
脳神経外科	脳神経外科								150
心臓血管外科	心臓血管外科								1
皮 膚 科	皮 膚 科								599
泌尿器科	泌尿器科								257
産婦人科	不妊診療科								106
	不育診療科								83
	胎児診療科								467
	産科								1,445
	婦人科								3
眼 科	眼 科								438
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科								702
リハビリテーション科	リハビリテーション科								4
放射線科	放射線診断科								40
	放射線治療科								7
歯 科	歯科								1,691
	周産期歯科								83
麻 酔 科	集中治療科								1
	麻酔科								14
合 計			1						21,233

12-2表 東京都の外来患者数（新患）の市区町村別割合（主な市区町村）

世田谷区	杉並区	狛江市	調布市	目黒区	大田区	渋谷区	練馬区	町田市	三鷹市	その他
13,798	1,105	1,013	928	745	417	294	266	220	199	2,248
65.0%	5.2%	4.8%	4.4%	3.5%	2.0%	1.4%	1.3%	1.0%	0.9%	10.6%



1 3 性別（総数）、年齢階級別にみた患者数【入院】

1 3－1 表 性別（総数）、診療科別、年齢階級別入院患者数

診療科名	院内標榜科名	0歳	1～4	5～9	10～14	15～19	20～24	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60以上	総計
内科	母性内科							83	281	172	53					589
精神科	こころの診療科				21	15										36
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科					12										12
	乳幼児メンタルヘルス科			12	8											20
	神経内科	289	1,095	804	468	149	27	14	6							2,852
神経科	在宅診療科	2	384	913	772	645										2,716
呼吸器科	呼吸器科	126	236	39	107	56										564
消化器科	消化器科	204	995	894	1,487	411	17									4,008
循環器科	循環器科	1,182	2,253	722	320	26				12						4,515
アレルギー科	アレルギー科	108	496	730	808	248	34			14						2,438
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病総合診療科（成人診療科含む）	583	1,390	1,581	566	659	130	36	25	40	52	34	17			5,113
	救急診療科	1	35	39	21	5										101
	血液腫瘍科	1,331	7,174	4,240	3,209	722	10	17	8	8	8		4			16,731
	血液内科															
	ライソゾーム病センター	1			1											2
	内分泌・代謝科	232	410	310	780	139	48	21	123	14	2					2,079
	遺伝診療科															
	免疫科	14	334	125	91	119	6									689
	新生児科	23,863														23,863
	移植外科	1,603	1,934	348	1,452	588	218	177	223	283	118	70	17	21		7,052
	緩和ケア科			3		19										22
外科	外科	336	1,422	1,196	700	430	21		15	14						4,134
整形外科	整形外科	311	1,141	1,409	1,611	518	2									4,992
形成外科	形成外科	119	568	273	113	109	7									1,189
脳神経外科	脳神経外科	1,644	2,110	781	804	471	18	13								5,841
心臓血管外科	心臓血管外科	22	33	10	14	12										91
皮膚科	皮膚科	2	73	37	17	10										139
泌尿器科	泌尿器科	274	513	228	61	38	10		2	8						1,134
産婦人科	不妊診療科							2	13	21	59	14				109
	不育診療科	1														1
	胎児診療科	6					82	440	1,117	808	232	22	8			2,715
	産科	68				14	96	1,510	5,126	6,413	3,549	566	50	16		17,408
婦人科	婦人科															
眼科	眼科	430	945	876	234	63	2	2								2,552
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	12	773	647	189	156	2	2	2							1,783
リハビリテーション科	リハビリテーション科															
放射線科	放射線診断科															
	放射線治療科															
歯科	歯科															
麻酔科	集中治療科	2,227	2,024	1,960	679	363			7							7,260
	麻酔科															
合 計		41,150	35,763	24,698	17,149	7,129	939	2,355	6,948	7,807	4,073	706	96	37		148,850

13-1表 性別（総数）、診療科別、年齢階級別入院患者数【0歳～15歳再掲】

診療科名	院内標榜科名	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	総計
内科	母性内科																	
精神科	こころの診療科													21			5	26
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科																12	12
	乳幼児メンタルヘルス科						12								8			20
神経科	神経内科	289	238	272	288	297	187	203	153	160	101	24	115	100	61	167	35	2,690
	在宅診療科	2	32	63	83	206	188	79	270	245	131	161	164	98	231	124	186	2,263
呼吸器科	呼吸器科	126	136	34	29	37			13	14	12	16	15	40	25	2		499
消化器科	消化器科	204	281	371	79	264	91	176	246	255	126	157	463	492	119	257	240	3,821
	肝臓内科																	
循環器科	循環器科	1,182	1,445	548	142	118	121	318	67	71	145	57	6	152	53	57		4,482
アレルギー科	アレルギー科	108	247	137	87	25	141	24	124	276	165	232	149	76	141	187	137	2,256
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病 総合診療科 (成人診療科含む)	583	455	104	561	270	294	428	348	248	263	104	35	171	104	170	129	4,267
	救急診療科	1	9	13	8	5	8	9	11	2	9	5	3		11	3	4	101
	血液腫瘍科	1,331	1,771	1,842	2,017	1,544	1,356	1,075	875	577	357	421	230	788	1,117	652	491	16,444
	血液内科																	
	ライソゾーム病センター	1												1				2
	内分泌・代謝科	232	83	176	79	72	59	65	38	63	85	230	12	202	320	2	68	1,786
	遺伝診療科																	
	免疫科	14	68	3	95	168	1	20	3	32	69	28		16	6	49	84	656
	新生児科	23,863																23,863
	移植外科	1,603	1,184	98	443	209	84	83	56	72	53	98	92	344	498	426	198	5,541
	緩和ケア科						3											3
外科	外科	336	417	250	148	607	395	326	99	191	185	58	124	100	233	184	232	3,885
整形外科	整形外科	311	502	202	192	245	368	232	186	305	318	211	530	464	301	100	379	4,846
形成外科	形成外科	119	388	107	38	35	36	72	42	78	45	22	22	45	21	8	29	1,107
脳神経外科	脳神経外科	1,644	949	542	434	185	184	236	115	137	109	161	145	161	91	248	69	5,410
心臓血管外科	心臓血管外科	22	15	14	4		2		6	2			2	6	2	3	2	80
皮膚科	皮膚科	2	26	22	19	6	3	14	3	2	15	6	5	2	4			129
泌尿器科	泌尿器科	274	159	184	97	73	115	25	52	13	23	18	13		28	2	6	1,082
産婦人科	不妊診療科																	
	不育診療科	1																1
	胎児診療科	6																6
	産科 婦人科	68																68
眼科	眼科	430	249	210	293	193	235	202	164	142	133	57	54	41	37	43	21	2,504
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	12	178	181	172	242	281	137	114	60	55	50	39	46	14	36	74	1,691
リハビリテーション科	リハビリテーション科																	
放射線科	放射線診断科																	
	放射線治療科																	
歯科	歯科																	
麻酔科	集中治療科	2,227	987	410	408	219	822	241	490	151	256	167	203	18	126	146	49	6,920
	麻酔科																	
合 計		41,150	14,187	8,100	7,104	6,372	6,981	5,660	4,675	4,086	3,296	2,873	2,978	3,954	4,076	3,248	2,864	121,604

１３－２表 性別（男）、診療科別、年齢階級別入院患者数

診療科名	院内標榜科名	０歳	１～４	５～９	１０～１４	１５～１９	２０～２４	２５～２９	３０～３４	３５～３９	４０～４４	４５～４９	５０～５４	５５～５９	６０以上	総計
内科	母性内科															
精神科	こころの診療科					15										15
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科					12										12
	乳幼児メンタルヘルス科				8											8
神経科	神経内科	145	553	474	360	92	19									1,643
	在宅診療科		242	724	373	230										1,569
呼吸器科	呼吸器科	53	172	13	33	10										281
消化器科	消化器科	62	480	775	1,032	318	11									2,678
	肝臓内科															
循環器科	循環器科	471	1,087	595	215	6										2,374
アレルギー科	アレルギー科	54	309	341	538	202	28									1,472
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病 総合診療 (成人診療科含む)	368	731	650	323	394	105	36		11		17	17			2,652
	救急診療科	1	21	23	17											62
	血液腫瘍科	1,068	4,271	2,169	1,518	293	6	17	8	4	8		4			9,366
	血液内科															
	ライゾソーム病センター	1														1
	内分泌・代謝科	176	251	119	436	97	16	8			2					1,105
	遺伝診療科															
	免疫科	14	316	93	82	97	4									606
	新生児科	12,570														12,570
	移植外科	687	462	161	1,005	334	74	78	50	131	39	15	17			3,053
	緩和ケア科					19										19
外科	外科	221	1,116	640	329	212	4		13							2,535
整形外科	整形外科	136	588	860	681	400	2									2,667
形成外科	形成外科	68	234	195	86	40										623
脳神経外科	脳神経外科	805	1,390	360	332	219	18	12								3,136
心臓血管外科	心臓血管外科	7	12	4	14	6										43
皮膚科	皮膚科	2	18	23	8	5										56
泌尿器科	泌尿器科	223	444	156	57	10	1									891
産婦人科	不妊診療科															
	不育診療科															
	胎児診療科															
	産科	29														29
	婦人科															
眼科	眼科	188	468	440	121	15										1,232
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	5	562	466	91	118	2									1,244
リハビリテーション科	リハビリテーション科															
放射線科	放射線診断科															
	放射線治療科															
歯科	歯科															
麻酔科	集中治療科	1,400	1,184	1,229	375	172			7							4,367
	麻酔科															
合 計		22,227	20,488	14,374	9,552	3,868	416	189	78	146	49	32	38			71,457

13-2表 性別（男）、診療科別、年齢別入院患者数【0歳～15歳再掲】

診療科名	院内標榜科名	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	総計
内科	母性内科																	
精神科	こころの診療科																5	5
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科																12	12
	乳幼児メンタルヘルス科														8			8
神経科	神経内科	145	127	227	143	56	16	165	106	113	74	16	113	65	27	139	11	1,543
	在宅診療科		22	33	39	148	141	48	205	214	116	144	88	34	65	42	77	1,416
呼吸器科	呼吸器科	53	110	14	29	19			13			16			17			271
消化器科	消化器科	62	54	371	29	26	64	159	243	232	77	86	331	455	43	117	220	2,569
	肝臓内科																	
循環器科	循環器科	471	798	125	62	102	92	300	27	46	130	15	6	143	21	30		2,368
アレルギー科	アレルギー科	54	102	114	71	22	46	16	7	170	102	139	144	54	56	145	132	1,374
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病 総合診 (成人診療科含む)	368	321	73	234	103	96	71	209	136	138	47	6	99	64	107	116	2,188
	救急診療科	1	8	4	5	4	3	6	8	2	4	2	2		11	2		62
	血液腫瘍科	1,068	829	997	1,674	771	193	859	717	249	151	128	156	297	488	449	62	9,088
	血液内科																	
	ライソゾーム病センター	1																1
	内分泌・代謝科	176	67	69	59	56	40	32	17	11	19	230	12	163	31		35	1,017
	遺伝診療科																	
	免疫科	14	59	1	88	168	1		3	20	69	27		16	6	33	84	589
	新生児科	12,570																12,570
	移植外科	687	184	53	125	100	34	45	28	44	10	42	60	201	416	286	153	2,468
	緩和ケア科																	
外科	外科	221	351	202	88	475	161	224	57	140	58	40	58	50	65	116	127	2,433
整形外科	整形外科	136	305	75	133	75	197	129	121	205	208	93	118	280	149	41	336	2,601
形成外科	形成外科	68	154	27	19	34	29	64	29	41	32	14	17	34	21		14	597
脳神経外科	脳神経外科	805	740	259	288	103	86	85	49	62	78	59	65	91	58	59	51	2,938
心臓血管外科	心臓血管外科	7	6	6			2		2				2	6	2	4	2	39
皮膚科	皮膚科	2	3	8	6	1	1	4	3	2	13	1	3	2	2			51
泌尿器科	泌尿器科	223	142	162	93	47	92	15	21	11	17	15	12		28	2	6	886
産婦人科	不妊診療科																	
	不育診療科																	
	胎児診療科																	
	産科	29																29
	婦人科																	
眼科	眼科	188	95	90	190	93	117	132	42	77	72	37	35	18	17	14	7	1,224
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	5	117	140	136	169	203	95	76	51	41	14	16	30	8	23	74	1,198
リハビリテーション科	リハビリテーション科																	
放射線科	放射線診断科																	
	放射線治療科																	
歯科	歯科																	
麻酔科	集中治療科	1,400	592	279	212	101	374	151	393	55	141	71	125	10	44	117	27	4,092
	麻酔科																	
合 計		22,227	7,808	4,735	4,576	3,369	2,987	3,658	3,099	2,559	1,956	1,677	1,741	2,230	2,032	1,864	1,782	68,300

13-3表 性別（女）、診療科別、年齢階級別入院患者数

診療科名	院内標榜科名	0歳	1～4	5～9	10～14	15～19	20～24	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60以上	総計
内科	母性内科							83	281	172	53					589
精神科	こころの診療科				21											21
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科															
	乳幼児メンタルヘルス科			12												12
神経科	神経内科	144	542	330	108	57	8	14	6							1,209
	在宅診療科	2	142	189	399	415										1,147
呼吸器科	呼吸器科	73	64	26	74	46										283
消化器科	消化器科	142	515	119	455	93	6									1,330
	肝臓内科															
循環器科	循環器科	711	1,166	127	105	20				12						2,141
アレルギー科	アレルギー科	54	187	389	270	46	6			14						966
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病 総合診療 (成人診療科含む)	215	659	931	243	265	25		25	29	52	17				2,461
	救急診療科	2,686	3,848	2,657	1,098	580	83									10,952
	血液腫瘍科		14	16	4	5										39
	血液内科	263	2,903	2,071	1,691	429	4			4						7,365
	ライソゾーム病センター				1											1
	内分泌・代謝科	56	159	191	344	42	32	13	123	14						974
	遺伝診療科															
	免疫科		18	32	9	22	2									83
	新生児科	11,293														11,293
	移植外科	916	1,472	187	447	254	144	99	173	152	79	55		21		3,999
	緩和ケア科			3												3
外科	外科	115	306	556	371	218	17		2	14						1,599
整形外科	整形外科	175	553	549	930	118										2,325
形成外科	形成外科	51	334	78	27	69	7									566
脳神経外科	脳神経外科	839	720	421	472	252		1								2,705
心臓血管外科	心臓血管外科	15	21	6		6										48
皮膚科	皮膚科		55	14	9	5										83
泌尿器科	泌尿器科	51	69	72	4	28	9		2	8						243
産婦人科	不妊診療科							2	13	21	59	14				109
	不育診療科	1														1
	胎児診療科	6					82	440	1,117	808	232	22	8			2,715
	産科	39				14	96	1,510	5,126	6,413	3,549	566	50	16		17,379
	婦人科															
眼科	眼科	242	477	436	113	48	2	2								1,320
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	7	211	181	98	38		2	2							539
リハビリテーション科	リハビリテーション科															
放射線科	放射線診断科															
	放射線治療科															
歯科	歯科															
麻酔科	集中治療科	827	840	731	304	191										2,893
	麻酔科															
合 計		18,923	15,275	10,324	7,597	3,261	523	2,166	6,870	7,661	4,024	674	58	37		77,393

13-3表 性別（女）、診療科別、年齢別入院患者数【0歳～15歳再掲】

診療科名	院内標榜科名	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	総計
内科	母性内科																	
精神科	こころの診療科													21				21
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科																	
	乳幼児メンタルヘルス科						12											12
神経科	神経内科	144	111	45	145	241	171	38	47	47	27	8	2	35	34	28	24	1,147
	在宅診療科	2	10	30	44	58	47	31	65	31	15	17	76	64	166	82	109	847
呼吸器科	呼吸器科	73	26	20		18				14	12		15	40	8	2		228
消化器科	消化器科	142	227		50	238	27	17	3	23	49	71	132	37	76	140	20	1,252
	肝臓内科																	
循環器科	循環器科	711	647	423	80	16	29	18	40	25	15	42		9	32	27		2,114
アレルギー科	アレルギー科	54	145	23	16	3	95	8	117	106	63	93	5	22	85	42	5	882
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病 総合診療 (成人診療科含む)	215	134	31	327	167	198	357	139	112	125	57	29	72	40	63	13	2,079
	救急診療科		1	9	3	1	5	3	3		5	3	1			1	4	39
	血液腫瘍科	263	942	845	343	773	1,163	216	158	328	206	293	74	491	629	203	429	7,356
	血液内科																	
	ライソゾーム病センター													1				1
	内分泌・代謝科	56	16	107	20	16	19	33	21	52	66			39	289	2	33	769
	遺伝診療科																	
	免疫科		9	2	7			20		12		1				16		67
	新生児科	11,293																11,293
	移植外科	916	1,000	45	318	109	50	38	28	28	43	56	32	143	82	140	45	3,073
	緩和ケア科						3											3
外科	外科	115	66	48	60	132	234	102	42	51	127	18	66	50	168	68	105	1,452
整形外科	整形外科	175	197	127	59	170	171	103	65	100	110	118	412	184	152	59	43	2,245
形成外科	形成外科	51	234	80	19	1	7	8	13	37	13	8	5	11		8	15	510
脳神経外科	脳神経外科	839	209	283	146	82	98	151	66	75	31	102	80	70	33	189	18	2,472
心臓血管外科	心臓血管外科	15	9	8	4				4	2						-1		41
皮膚科	皮膚科		23	14	13	5	2	10			2	5	2		2			78
泌尿器科	泌尿器科	51	17	22	4	26	23	10	31	2	6	3	1					196
産婦人科	不妊診療科																	
	不育診療科	1																1
	胎児診療科	6																6
	産科	39																39
	婦人科																	
眼科	眼科	242	154	120	103	100	118	70	122	65	61	20	19	23	20	29	14	1,280
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	7	61	41	36	73	78	42	38	9	14	36	23	16	6	13		493
リハビリテーション科	リハビリテーション科																	
放射線科	放射線診断科																	
	放射線治療科																	
歯科	歯科																	
麻酔科	集中治療科	827	395	131	196	118	448	90	97	96	115	96	78	8	82	29	22	2,828
	麻酔科																	
合 計		18,923	6,379	3,365	2,528	3,003	3,994	2,002	1,576	1,527	1,340	1,196	1,237	1,724	2,044	1,384	1,082	53,304

1 4 性別（総数）、年齢階級別にみた患者数【外来】

1 4－1 表 性別（総数）、診療科別、年齢階級別外来患者数

診 療 科 名	院内標榜科名	0 歳	1 ～ 4	5 ～ 9	1 0 ～ 1 4	1 5 ～ 1 9	2 0 ～ 2 4	2 5 ～ 2 9	3 0 ～ 3 4	3 5 ～ 3 9	4 0 ～ 4 4	4 5 ～ 4 9	5 0 ～ 5 4	5 5 ～ 5 9	6 0 以上	総計
内 科	母性内科	3	3	1	4	11	67	551	1, 813	2, 902	2, 260	836	385	138	120	9, 094
	女性総合外来															
精 神 科	こころの診療科	2	227	1, 274	1, 671	542	51	32	77	136	119	61	13			4, 205
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科		140	990	1, 542	461	46	20	9	31	6	8	3			3, 256
	乳幼児メンタルヘルス科		143	295	137	17	4	18	84	162	127	67	11		1	1, 066
	神経内科	234	1, 396	2, 027	2, 047	1, 370	318	75	38	49	7	5	1			7, 567
神 経 科	在宅診療科	3	449	1, 085	899	709										3, 145
呼吸器科	呼吸器科	270	590	356	340	141	10	1		1						1, 709
消化器科	消化器科	91	464	892	1, 591	1, 091	245	3	9	16	4	2	5		1	4, 414
	肝臓内科															
	内視鏡科															
循環器科	循環器科	825	1, 259	1, 311	911	507	164	87	54	60	32	16	13			5, 239
アレルギー科	アレルギー科	804	4, 627	5, 768	3, 727	1, 542	203	32	91	52	36	17	12		1	16, 912
小 児 科	腎臓・リウマチ・膠原病	108	773	1, 393	1, 656	1, 150	452	163	62	133	23	15	40	3		5, 971
	総合診 （成人診療科含む）	2, 981	3, 256	2, 772	2, 796	1, 757	238	122	27	103	13	10	2	7	22	14, 106
	救急診療科	2, 860	9, 558	6, 126	2, 574	631	80	45	56	57	40	8	5	5	8	22, 053
	血液腫瘍科	95	999	1, 390	1, 171	607	161	94	37	14	24	9	2		4	4, 607
	血液内科	35	50	135	137	31	12	8	13	6	1	5			5	438
	ライソソーム病センター	18	72	145	149	101	69	63	14	7	20	8	1			667
	内分泌・代謝科	446	2, 031	3, 698	5, 867	2, 193	730	392	288	187	113	78	22	9	2	16, 056
	遺伝診療科	130	402	340	173	158	38	24	40	32	11	7	10	7	4	1, 376
	免疫科	59	214	310	195	122	118	38	22	7	14	13	2		3	1, 117
	新生児科	1, 822	1, 212	149	7			1		6	9				1	3, 207
	移植外科	104	813	664	684	478	228	153	141	167	101	72	23	24	28	3, 680
	感染症科	31	137	119	57	29	4			3	2	1				383
	病理診断科															
	外科	649	1, 563	1, 333	898	459	120	51	37	27	17	11	8	1		5, 174
整形外科	整形外科	1, 375	3, 408	3, 803	2, 456	834	107	22	7	17	6		1		2	12, 038
形成外科	形成外科	1, 202	1, 057	802	367	219	34	3	10	10	1		2			3, 707
脳神経外科	脳神経外科	523	1, 262	919	809	381	90	42	2	3	2	9		2		4, 044
心臓血管外科	心臓血管外科	21	35	24	28	34	10	5		4	2	1	2		6	172
皮 膚 科	皮 膚 科	2, 096	2, 741	1, 614	1, 187	630	104	20	40	41	28	8	1	5		8, 515
泌尿器科	泌尿器科	551	1, 494	1, 209	724	386	46	3	4	13			1			4, 431
産婦人科	不妊診療科		3			3	7	159	471	1, 142	1, 358	429	65			3, 637
	不育診療科		5	2	5	8	1	41	191	323	219	30	4	3		832
	胎児診療科	1	11	1		1	53	395	992	1, 258	543	45	13	1	3	3, 317
	産科		6	7	6	21	195	2, 218	7, 046	8, 421	4, 367	561	49	19	1	22, 917
	婦人科	1	6	8	26	17	23	9	25	21	3					139
眼 科	眼 科	889	3, 680	3, 821	1, 733	860	214	64	40	30	6	5				11, 342
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	606	2, 895	2, 962	1, 372	682	164	78	36	16	4					8, 815
リハビリテーション科	リハビリテーション科	352	569	372	202	75	11	4	2	2	1					1, 590
放射線科	放射線診断科	16	160	57	13	13	4		2	1		2	4	5	28	305
	放射線治療科		35	132	23						19		60	18	94	381
歯 科	歯科	151	834	1777	974	557	69	31	18	19	1	1	1			4433
	周産期歯科						4	11	98	157	101	7	10			388
麻 酔 科	集中治療科		4	3	3					1	1					12
	麻酔科	195	1, 182	607	180	99	19	111	372	470	220	33	4	4		3, 496
合 計		19, 549	49, 765	50, 693	39, 341	18, 927	4, 513	5, 189	12, 268	16, 107	9, 861	2, 380	775	251	334	229, 953

14-1表 性別（総数）、診療科別、年齢別外来患者数【0歳～15歳再掲】

診療科名	院内標榜科名	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	総計
内科	母性内科	3				3			1					4			2	13
	女性総合外来																	
精神科	こころの診療科	2	7	23	63	134	170	172	230	325	377	393	315	307	331	325	254	3,428
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科		3	26	5	7	10	16	19	21	12	13	8	20	44	13	23	240
	乳幼児メンタルヘルス科		4	23	40	76	54	77	49	55	60	36	50	22	18	11	9	584
	神経内科	234	330	335	379	352	365	420	409	412	421	408	385	377	427	450	333	6,037
神経科	在宅診療科	3	45	83	106	215	231	106	326	266	156	199	176	107	267	150	197	2,633
呼吸器科	呼吸器科	270	224	160	82	124	106	63	71	71	45	62	54	73	85	66	46	1,602
消化器科	消化器科	91	99	112	107	146	184	178	131	160	239	257	288	330	326	390	334	3,372
	肝臓内科																	
	内視鏡科																	
循環器科	循環器科	825	403	335	281	240	286	296	257	231	241	188	152	244	195	132	116	4,422
アレルギー科	アレルギー科	804	1,199	1,017	1,191	1,220	1,201	1,367	1,149	1,050	1,001	908	791	738	696	594	481	15,407
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病	108	100	139	294	240	243	249	317	304	280	372	259	385	316	324	306	4,236
	総合診（成人診療科含む）	2,981	1,108	897	690	561	641	644	543	459	485	442	444	524	706	680	579	12,384
	救急診療科	2,860	3,324	2,303	2,124	1,807	1,756	1,341	1,155	1,022	852	636	538	548	452	400	250	21,368
	血液腫瘍科	95	221	239	276	263	360	318	240	224	248	194	179	255	291	252	175	3,830
	血液内科	35	28	8	5	9	27	33	18	23	34	30	6	23	51	27	10	367
	ライソゾーム病センター	18	3	9	28	32	13	17	40	42	33	22	68	20	28	11		384
	内分泌・代謝科	446	408	465	586	572	539	555	622	842	1,140	1,370	1,295	1,231	1,118	853	703	12,745
	遺伝診療科	130	114	122	74	92	74	79	66	50	71	42	28	41	40	22	26	1,071
	免疫科	59	68	60	45	41	60	71	60	69	50	64	27	42	37	25	34	812
	新生児科	1,822	671	178	274	89	86	42	9	7	5	6		1				3,190
	移植外科	104	256	207	195	155	137	134	114	137	142	114	167	138	125	140	174	2,439
	感染症科	31	29	32	46	30	30	43	20	10	16	10	17	20	8	2	9	353
	病理診断科																	
	外科	649	526	377	331	329	347	334	265	202	185	203	172	158	190	175	151	4,594
整形外科	整形外科	1,375	1,066	847	726	769	896	747	731	683	746	592	528	489	476	371	315	11,357
形成外科	形成外科	1,202	483	268	151	155	210	204	149	160	79	74	85	102	64	42	46	3,474
脳神経外科	脳神経外科	523	461	323	256	222	233	188	179	164	155	231	161	130	152	135	89	3,602
心臓血管外科	心臓血管外科	21	11	16	5	3	5	7	6	3	3		3	7	5	13	5	113
皮膚科	皮膚科	2,096	1,235	697	468	341	372	398	283	283	278	258	219	202	270	238	181	7,819
泌尿器科	泌尿器科	551	518	347	377	252	263	325	245	185	191	166	164	126	179	89	135	4,113
産婦人科	不妊診療科		3															3
	不育診療科			1	3	1			1	1				3	1	1	3	15
	胎児診療科	1		1	9	1	1											13
	産科			2	1	3	4		2	1		1				5	5	24
	婦人科	1		3	1	2		3	4	1		2		5	7	12	5	46
眼科	眼科	889	850	864	1,004	962	1,089	897	666	598	571	447	409	343	297	237	214	10,337
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	606	698	602	801	794	785	686	611	512	368	324	270	314	251	213	195	8,030
リハビリテーション科	リハビリテーション科	352	249	95	155	70	83	85	62	73	69	50	46	35	45	26	17	1,512
放射線科	放射線診断科	16	38	49	38	35	25	11	10	5	6	2	3	2	4	2	5	251
	放射線治療科					35	81	15		21	15		11		12			190
歯科	歯科	151	182	193	209	250	382	388	375	343	289	235	204	211	146	178	165	
麻酔科	周産期歯科																	
	集中治療科		1	3			2				1	1			1	1		10
	麻酔科	195	376	307	274	225	194	139	109	89	76	39	47	33	36	26	36	2,201
合 計		19,549	15,341	11,768	11,700	10,857	11,545	10,648	9,544	9,104	8,940	8,391	7,569	7,610	7,697	6,631	5,628	162,522

14-2表 性別（男）、診療科別、年齢階級別外来患者数

診療科名	院内標榜科名	0歳	1～4	5～9	10～14	15～19	20～24	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60以上	総計
内科	母性内科	2	3	1		2	13		2	9	8	10	10	10	75	145
	女性総合外来															
精神科	こころの診療科		157	920	1,105	238	12	3	2	10	3	2	1			2,453
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科		13	58	54	21	4	1	1	3	1					156
	乳幼児メンタルヘルス科		87	197	97	11			5	12		3			1	413
	神経内科	112	812	1,098	1,159	728	156	46	7	25	1		1			4,145
神経科	在宅診療科		306	836	444	235										1,821
呼吸器科	呼吸器科	168	324	189	164	52	5									902
消化器科	消化器科	40	253	536	928	573	136	1	8	10	2		1		1	2,489
	肝臓内科															
	内視鏡科															
循環器科	循環器科	421	620	694	477	240	76	38	11	24	12	9				2,622
アレルギー科	アレルギー科	439	2,723	3,497	2,369	999	101	9	13	9	2	3	10		1	10,175
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病	69	399	700	823	607	189	79	31	4	8	6	7			2,922
	総合診療（成人診療科含む）	1,527	1,885	1,638	1,364	705	111	55	19	51	1	2	1		10	7,369
	救急診療科	1,640	5,487	3,517	1,565	374	31	13	16	12	13	3	1	2	6	12,680
	血液腫瘍科	70	540	738	533	369	69	45	16	9	19	6	2		3	2,419
	血液内科	15	30	85	87	25	3		2	1		4			4	256
	ライソゾーム病センター	12	67	145	123	100	54	60	13			5				579
	内分泌・代謝科	237	1,140	1,579	2,827	1,194	315	146	99	53	33	29	3	7		7,662
	遺伝診療科	68	245	175	92	99	16	10	9	6	2	4	6	7		739
	免疫科	51	141	166	111	58	46	26	14	4	9	12				638
	新生児科	951	619	100	3						8					1,681
	移植外科	49	403	301	258	193	90	65	45	70	26	27	13	6	26	1,572
	感染症科	20	66	79	30	5	2			3	2					207
	病理診断科															
外科	外科	390	942	753	480	219	60	17	17	1	11	8				2,898
整形外科	整形外科	507	1,876	2,234	1,395	418	54	14	3	14	3				2	6,520
形成外科	形成外科	757	541	429	233	81	17	1		2			2			2,063
脳神経外科	脳神経外科	271	741	492	433	197	47	19	2	1		9				2,212
心臓血管外科	心臓血管外科	10	18	16	17	16	6				2				6	91
皮膚科	皮膚科	894	1,226	760	565	286	48	3	6	7		7	1			3,803
泌尿器科	泌尿器科	433	1,201	754	490	213	30	3					1			3,125
産婦人科	不妊診療科		3				1	6	9	18	18	10	4			69
	不育診療科							1	12	21	7	6	2	1		50
	胎児診療科	1							1		1				3	6
	産科		1	1	1	4		1	2	1	1	6			1	19
	婦人科															
眼科	眼科	449	1,950	2,054	898	440	110	27	7	14	1	3				5,953
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	349	1,808	1,821	717	373	81	25	3	6						5,183
リハビリテーション科	リハビリテーション科	188	355	193	92	48	11	4		1	1					893
放射線科	放射線診断科	6	92	31	11	8	2		1	1		1	1	2	16	172
	放射線治療科			62	23											85
歯科	歯科	55	419	1125	544	300	31	14	12	8						2508
	周産期歯科															
麻酔科	集中治療科		3		3					1	1					8
	麻酔科	113	717	404	122	54	3	6	2	3	4	1	1			1,430
合 計		10,314	28,213	28,378	20,637	9,485	1,930	738	390	414	200	176	68	35	155	101,133

14-2表 性別（男）、診療科別、年齢別外来患者数【0歳～15歳再掲】

診療科名	院内標榜科名	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	総計
内科	母性内科	2				3			1								1	7
	女性総合外来																	
精神科	こころの診療科		2	14	52	89	118	147	182	222	251	276	231	201	195	202	125	2,307
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科		3	5	3	2	6	14	16	16	6	4	8	11	24	7	12	137
	乳幼児メンタルヘルス科		4	13	26	44	29	69	31	28	40	19	40	17	11	10	9	390
神経科	神経内科	112	191	235	213	173	186	198	203	233	278	225	251	232	219	232	196	3,377
	在宅診療科		32	46	48	180	166	59	243	227	141	176	106	28	65	69	79	1,665
呼吸器科	呼吸器科	168	143	66	53	62	47	28	38	48	28	38	23	22	47	34	13	858
消化器科	消化器科	40	49	77	67	60	81	110	91	92	162	155	179	209	195	190	187	1,944
	肝臓内科																	
	内視鏡科																	
循環器科	循環器科	421	189	143	149	139	140	173	143	110	128	102	72	118	106	79	60	2,272
アレルギー科	アレルギー科	439	655	615	718	735	730	818	652	655	642	565	506	474	419	405	317	9,345
	腎臓・リウマチ・膠原病	69	59	69	147	124	111	115	133	171	170	220	111	189	156	147	152	2,143
	総合診 (成人診療科含む)	1,527	630	508	435	312	344	370	332	273	319	281	249	239	307	288	261	6,675
	救急診療科	1,640	1,881	1,326	1,237	1,043	983	745	682	585	522	387	354	336	257	231	159	12,368
	血液腫瘍科	70	148	108	141	143	155	175	161	119	128	70	80	70	147	166	112	1,993
	血液内科	15	19	3	5	3	18	18	11	18	20	13	4	12	34	24	8	225
小児科	ライソソーム病センター	12	2	5	28	32	13	17	40	42	33	21	67	24	11			347
	内分泌・代謝科	237	234	268	340	298	215	277	318	342	427	547	542	640	605	493	423	6,206
	遺伝診療科	68	70	79	46	50	37	42	42	24	30	22	12	26	22	10	16	596
	免疫科	51	52	35	25	29	27	37	34	40	28	42	9	26	13	21	28	497
	新生児科	951	328	99	146	46	57	29	8	6		2		1				1,673
	移植外科	49	121	91	105	86	67	59	52	60	63	60	75	44	41	38	80	1,091
	感染症科	20	17	10	20	19	18	24	15	10	12	7	9	9	3	2		195
	病理診断科																	
外科	外科	390	359	204	199	180	156	195	154	117	131	124	97	71	82	106	84	2,649
整形外科	整形外科	507	554	468	420	434	528	432	401	425	448	313	290	283	292	217	140	6,152
形成外科	形成外科	757	241	133	84	83	112	114	78	78	47	42	52	83	36	20	30	1,990
脳神経外科	脳神経外科	271	297	189	139	116	117	102	90	96	87	113	80	80	95	65	58	1,995
心臓血管外科	心臓血管外科	10	6	7	2	3	5	6	4		1		3	5	2	7	1	62
皮膚科	皮膚科	894	531	321	203	171	194	164	126	136	140	132	108	91	123	111	97	3,542
泌尿器科	泌尿器科	433	432	278	307	184	194	203	125	105	127	105	103	93	130	59	86	2,964
産婦人科	不妊診療科		3															3
	不育診療科																	
	胎児診療科	1																1
	産科					1	1									1	4	7
	婦人科																	
眼科	眼科	449	471	429	565	485	572	509	300	335	338	249	212	155	177	105	111	5,462
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	349	450	384	489	485	458	435	363	330	235	164	157	161	123	112	107	4,802
リハビリテーション科	リハビリテーション科	188	151	73	89	42	48	44	38	23	40	35	15	10	17	15	11	839
放射線科	放射線診断科	6	21	30	22	19	15	8	3	3	2	1	3	1	4	2	5	145
	放射線治療科						34	15			13		11		12			85
歯科	歯科	55	78	89	118	134	238	240	231	211	205	137	120	113	69	105	96	
	周産期歯科																	
麻酔科	集中治療科			3								1			1	1		6
	麻酔科	113	247	185	168	117	128	96	64	66	50	27	29	22	28	16	30	1,386
合計		10,314	8,670	6,608	6,809	6,126	6,348	6,087	5,405	5,246	5,292	4,675	4,208	4,072	4,081	3,601	3,098	90,640

14-3表 性別（女）、診療科別、年齢階級別外来患者数

診療科名	院内標榜科名	0歳	1～4	5～9	10～14	15～19	20～24	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60以上	総計
内科	母性内科	1			4	9	54	551	1,811	2,893	2,252	826	375	128	45	8,949
	女性総合外来															
精神科	こころの診療科	2	70	354	566	304	39	29	75	126	116	59	12			1,752
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科		127	932	1,488	440	42	19	8	28	5	8	3			3,100
	乳幼児メンタルヘルス科		56	98	40	6	4	18	79	150	127	64	11			653
神経科	神経内科	122	584	929	888	642	162	29	31	24	6	5				3,422
	在宅診療科	3	143	249	455	474										1,324
呼吸器科		102	266	167	176	89	5	1		1						807
消化器科	消化器科	51	211	356	663	518	109	2	1	6	2	2	4			1,925
	肝臓内科															
	内視鏡科															
循環器科	循環器科	404	639	617	434	267	88	49	43	36	20	7	13			2,617
アレルギー科	アレルギー科	365	1,904	2,271	1,358	543	102	23	78	43	34	14	2			6,737
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病	39	374	693	833	543	263	84	31	129	15	9	33	3		3,049
	総合診 (成人診療科含む)	1,454	1,371	1,134	1,432	1,052	127	67	8	52	12	8	1	7	12	6,737
	救急診療科	1,220	4,071	2,609	1,009	257	49	32	40	45	27	5	4	3	2	9,373
	血液腫瘍科	25	459	652	638	238	92	49	21	5	5	3			1	2,188
	血液内科	20	20	50	50	6	9	8	11	5	1	1			1	182
	ライソゾーム病センター	6	5		26	1	15	3	1	7	20	3	1			88
	内分泌・代謝科	209	891	2,119	3,040	999	415	246	189	134	80	49	19	2	2	8,394
	遺伝診療科	62	157	165	81	59	22	14	31	26	9	3	4		4	637
	免疫科	8	73	144	84	64	72	12	8	3	5	1	2		3	479
	新生児科	871	593	49	4			1		6	1				1	1,526
	移植外科	55	410	363	426	285	138	88	96	97	75	45	10	18	2	2,108
	感染症科	11	71	40	27	24	2					1				176
	病理診断科															
外科	外科	259	621	580	418	240	60	34	20	26	6	3	8	1		2,276
整形外科	整形外科	868	1,532	1,569	1,061	416	53	8	4	3	3		1			5,518
形成外科	形成外科	445	516	373	134	138	17	2	10	8	1					1,644
脳神経外科	脳神経外科	252	521	427	376	184	43	23		2	2			2		1,832
心臓血管外科	心臓血管外科	11	17	8	11	18	4	5		4		1	2			81
皮膚科	皮膚科	1,202	1,515	854	622	344	56	17	34	34	28	1		5		4,712
泌尿器科	泌尿器科	118	293	455	234	173	16		4	13						1,306
産婦人科	不妊診療科					3	6	153	462	1,124	1,340	419	61			3,568
	不育診療科		5	2	5	8	1	40	179	302	212	24	2	2		782
	胎児診療科		11	1		1	53	395	991	1,258	542	45	13	1		3,311
	産科		5	6	5	17	195	2,217	7,044	8,420	4,366	555	49	19		22,898
	婦人科	1	6	8	26	17	23	9	25	21	3					139
眼科	眼科	440	1,730	1,767	835	420	104	37	33	16	5	2				5,389
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	257	1,087	1,141	655	309	83	53	33	10	4					3,632
リハビリテーション科	リハビリテーション科	164	214	179	110	27			2	1						697
放射線科	放射線診断科	10	68	26	2	5	2		1			1	3	3	12	133
	放射線治療科		35	70							19		60	18	94	296
歯科	歯科	96	415	652	430	257	38	17	6	11	1	1	1			1,925
	周産期歯科						4	11	98	157	101	7	10			388
麻酔科	集中治療科		1	3												4
	麻酔科	82	465	203	58	45	16	105	370	467	216	32	3	4		2,066
合 計		9,235	21,552	22,315	18,704	9,442	2,583	4,451	11,878	15,693	9,661	2,204	707	216	179	128,820

14-3表 性別（女）、診療科別、年齢別外来患者数【0歳～15歳再掲】

診療科名	院内標榜科名	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	総計
内科	母性内科	1												4			1	6
	女性総合外来																	
精神科	こころの診療科	2	5	9	11	45	52	25	48	103	126	117	84	106	136	123	129	1,121
	児童・思春期メンタルヘルス科・児童・思春期リエゾン科			21	2	5	4	2	3	5	6	9		9	20	6	11	103
	乳幼児メンタルヘルス科			10	14	32	25	8	18	27	20	17	10	5	7	1		194
神経科	神経内科	122	139	100	166	179	179	222	206	179	143	183	134	145	208	218	137	2,660
	在宅診療科	3	13	37	58	35	65	47	83	39	15	23	70	79	202	81	118	968
呼吸器科	呼吸器科	102	81	94	29	62	59	35	33	23	17	24	31	51	38	32	33	744
消化器科	消化器科	51	50	35	40	86	103	68	40	68	77	102	109	121	131	200	147	1,428
	肝臓内科																	
	内視鏡科																	
循環器科	循環器科	404	214	192	132	101	146	123	114	121	113	86	80	126	89	53	56	2,150
アレルギー科	アレルギー科	365	544	402	473	485	471	549	497	395	359	343	285	264	277	189	164	6,062
小児科	腎臓・リウマチ・膠原病	39	41	70	147	116	132	134	184	133	110	152	148	196	160	177	154	2,093
	総合診療科（成人診療科含む）	1,454	478	389	255	249	297	274	211	186	166	161	195	285	399	392	318	5,709
	救急診療科	1,220	1,443	977	887	764	773	596	473	437	330	249	184	212	195	169	91	9,000
	血液腫瘍科	25	73	131	135	120	205	143	79	105	120	124	99	185	144	86	63	1,837
	血液内科	20	9	5		6	9	15	7	5	14	17	2	11	17	3	2	142
	ライソゾーム病センター	6	1	4								1	1	20	4			37
	内分泌・代謝科	209	174	197	246	274	324	278	304	500	713	823	753	591	513	360	280	6,539
	遺伝診療科	62	44	43	28	42	37	37	24	26	41	20	16	15	18	12	10	475
	免疫科	8	16	25	20	12	33	34	26	29	22	22	18	16	24	4	6	315
	新生児科	871	343	79	128	43	29	13	1	1	5	4						1,517
	移植外科	55	135	116	90	69	70	75	62	77	79	54	92	94	84	102	94	1,348
	感染症科	11	12	22	26	11	12	19	5		4	3	8	11	5		9	158
	病理診断科																	
外科	外科	259	167	173	132	149	191	139	111	85	54	79	75	87	108	69	67	1,945
整形外科	整形外科	868	512	379	306	335	368	315	330	258	298	279	238	206	184	154	175	5,205
形成外科	形成外科	445	242	135	67	72	98	90	71	82	32	32	33	19	28	22	16	1,484
脳神経外科	脳神経外科	252	164	134	117	106	116	86	89	68	68	118	81	50	57	70	31	1,607
心臓血管外科	心臓血管外科	11	5	9	3		1	2	3	2				2	3	6	4	51
皮膚科	皮膚科	1,202	704	376	265	170	178	234	157	147	138	126	111	111	147	127	84	4,277
泌尿器科	泌尿器科	118	86	69	70	68	69	122	120	80	64	61	61	33	49	30	49	1,149
産婦人科	不妊診療科																	
	不育診療科			1	3	1			1	1				3	1	1	3	15
	胎児診療科			1	9	1	1											12
	産科			2	1	2	3		2	1		1				4	1	17
	婦人科	1		3	1	2		3	4	1		2		5	7	12	5	46
眼科	眼科	440	379	435	439	477	517	388	366	263	233	198	197	188	120	132	103	4,875
耳鼻咽喉科	耳鼻咽喉科	257	248	218	312	309	327	251	248	182	133	160	113	153	128	101	88	3,228
リハビリテーション科	リハビリテーション科	164	98	22	66	28	35	41	24	50	29	15	31	25	28	11	6	673
放射線科	放射線診断科	10	17	19	16	16	10	3	7	2	4	1		1				106
	放射線治療科					35	47			21	2							105
歯科	歯科	96	104	104	91	116	144	148	144	132	84	98	84	98	77	73	69	
	周産期歯科																	
麻酔科	集中治療科		1				2				1							4
	麻酔科	82	129	122	106	108	66	43	45	23	26	12	18	11	8	10	6	815
合計		9,235	6,671	5,160	4,891	4,731	5,197	4,561	4,139	3,858	3,648	3,716	3,361	3,538	3,616	3,030	2,530	71,882

15-1表 月別、年齢別救急患者数

年齢	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	計
0	282	404	454	437	332	271	259	192	223	233	231	250	3,568
1	318	456	526	418	301	261	249	255	252	237	246	232	3,751
2	162	258	306	301	198	181	208	182	204	206	197	194	2,597
3	223	271	305	235	180	193	177	176	197	148	105	134	2,344
4	174	225	265	190	144	155	169	135	171	135	114	123	2,000
5	127	164	209	202	146	155	175	212	161	136	131	135	1,953
6	118	128	140	140	97	124	151	127	192	114	86	92	1,509
7	93	113	142	129	84	106	117	125	131	94	85	104	1,323
8	53	106	131	100	76	95	132	115	108	77	106	69	1,168
9	47	75	81	81	62	77	97	93	105	81	92	68	959
10	51	56	61	36	56	43	73	59	88	69	76	58	726
11	38	48	54	58	39	54	52	50	57	61	47	45	603
12	29	38	38	60	50	50	45	49	76	59	68	49	611
13	29	36	44	46	48	45	55	46	44	53	48	44	538
14	28	31	45	38	32	30	52	38	40	55	34	43	466
15	13	21	15	34	15	27	22	37	33	27	28	26	298
16	7	15	10	17	9	17	17	17	11	21	16	14	171
17	11	8	14	14	11	11	21	14	9	14	8	11	146
18	4	13	7	5	5	11	11	8	6	12	6	6	94
19	6	5	7	4	5	6	6	3	4	3		7	56
20		3	1	3	7	6	3	1		2	1		27
21			1		2	2	2		3	2	2	3	17
22		1	5	1		3	2	3	1	1	2	1	20
23		1	1	2		1	1	3			2	2	13
24	2	1		1	1	1	1					1	8
25				1	2	1		4	3	2			13
26		5	1	2	2								10
27	1	3		2	1	4	1		1	1		1	15
28	1	3	2	1	3	2	2	3	1	1	3		22
29	8	4	1	3	6	2		2	2	3		1	32
30	4	3	7	3	2	1	1	4	4	3	3	2	37
31	6	3	6	6	3	3		3	2	4	1	5	42
32	4	3	1	5	2		6	5	1	2	3	5	37
33	7	6	8	2	2	3	1	5	7	5	4	4	54
34	3	4	2	4	2		3	3	5	3	2	7	38
35	4	8	2	3	5	4	8	4	7	4	5	3	57
36	7	11	3	9	5	6	6	4	3	4	2	3	63
37	2	4	5	7	6	4	4	5	4	2	7	8	58
38	3	2	3	3	1	2	4	5	2	2	1	7	35
39	7	9	4	2	2	1	2	2	4	6	3	2	44
40	9	6	3	3	5	3	4	7	8	3	1	2	54
41	3	1	3	3	1	1	1	2	5	3	3	1	27
42	7	4	5	2	6	1	3	3	1	1	3	1	37
43	1	2				4		1		4	3	3	18
44	3	1	2		1	1	2		1	2	1	1	15
45				1		3		1	1			1	7
46		1		1		1		1			2		6
47	1	2			2		1					1	7
48		2		3									5
49								1	1				2
50													
51													
52	1												1
53	1												1
54													
55	1												1
56													
57													
58													
59													
60以上	3	1				1					1		6
総計	1,902	2,565	2,920	2,618	1,959	1,973	2,146	2,005	2,179	1,895	1,779	1,769	25,710

15-2表 月別、トリアージ別、時間帯別救急患者数

時間帯	分類別	令和5年4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月		令和6年1月		2月		3月		計	
		外来	入院	外来	入院	外来	入院	外来	入院	外来	入院	外来	入院	外来	入院	外来	入院	外来	入院	外来	入院	外来	入院	外来	入院	外来	入院
日勤帯	蘇生（最重症）	16	14	20	18	24	20	16	15	19	16	12	11	15	14	13	10	14	13	6	6	10	8	9	9	174	154
	緊急（重症）	67	35	110	60	137	81	137	79	106	58	99	50	96	39	68	33	62	31	63	36	71	36	96	52	1,112	590
	準緊急（中症）	344	63	521	91	659	109	580	94	440	78	426	68	489	84	422	87	445	78	374	64	379	69	382	73	5,461	958
	低緊急（軽症）	384	5	553	6	549	16	481	7	354	11	360	8	401	12	428	12	469	10	425	10	352	10	325	8	5,081	115
	非緊急（軽症）	140	0	182	2	146	1	120	0	122	2	124	0	132	0	114	0	136	1	133	1	112	0	91	0	1,552	7
	直入	13	13	16	15	14	14	13	13	8	8	11	11	8	8	16	15	12	10	15	15	11	9	18	18	155	149
小計		964	130	1,402	192	1,529	241	1,347	208	1,049	173	1,032	148	1,141	157	1,061	157	1,138	143	1,016	132	935	132	921	160	13,535	1,973
準夜帯	蘇生（最重症）	14	11	12	10	14	12	9	8	5	3	11	9	14	14	10	8	11	8	6	4	8	4	5	4	119	95
	緊急（重症）	75	35	71	34	112	51	97	45	63	20	74	39	56	23	65	32	62	30	61	23	48	12	61	28	845	372
	準緊急（中症）	282	29	358	33	455	45	383	40	283	26	279	28	316	45	303	32	356	32	284	34	256	23	290	36	3,845	403
	低緊急（軽症）	298	0	393	11	429	3	394	6	302	7	297	3	338	6	330	6	326	3	308	2	293	2	293	3	4,001	52
	非緊急（軽症）	24	4	21	1	6	1	5	0	5	0	13	0	7	0	6	0	4	0	8	0	9	0	4	0	112	6
	直入	6	5	8	7	5	5	5	5	3	3	2	2	4	4	2	1	5	4	4	4	5	5	3	3	52	48
小計		699	84	863	96	1,021	117	893	104	661	59	676	81	735	92	716	79	764	77	671	67	619	46	656	74	8,974	976
深夜帯	蘇生（最重症）	4	3	8	8	12	9	9	7	13	11	8	6	7	2	3	2	1	1	6	5	6	4	5	4	82	62
	緊急（重症）	16	8	44	23	36	22	38	12	36	19	36	14	31	9	24	14	19	11	14	4	23	9	18	4	335	149
	準緊急（中症）	120	14	127	11	178	15	200	26	124	5	110	8	140	17	119	15	120	19	92	12	118	14	103	13	1,551	169
	低緊急（軽症）	91	2	111	1	142	4	124	0	74	1	109	3	89	0	78	2	133	2	90	1	75	2	63	1	1,179	19
	非緊急（軽症）	7	0	5	0	2	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2	0	21	0
	直入	1	1	5	4	0	0	6	5	1	1	1	1	3	4	3	3	2	5	5	3	3	1	1	1	33	29
小計		239	28	300	47	370	50	378	50	249	37	265	32	270	31	228	36	277	35	208	27	225	32	192	23	3,201	428
合計		1,902	242	2,565	335	2,920	408	2,618	362	1,959	269	1,973	261	2,146	280	2,005	272	2,179	255	1,895	226	1,779	210	1,769	257	25,710	3,377

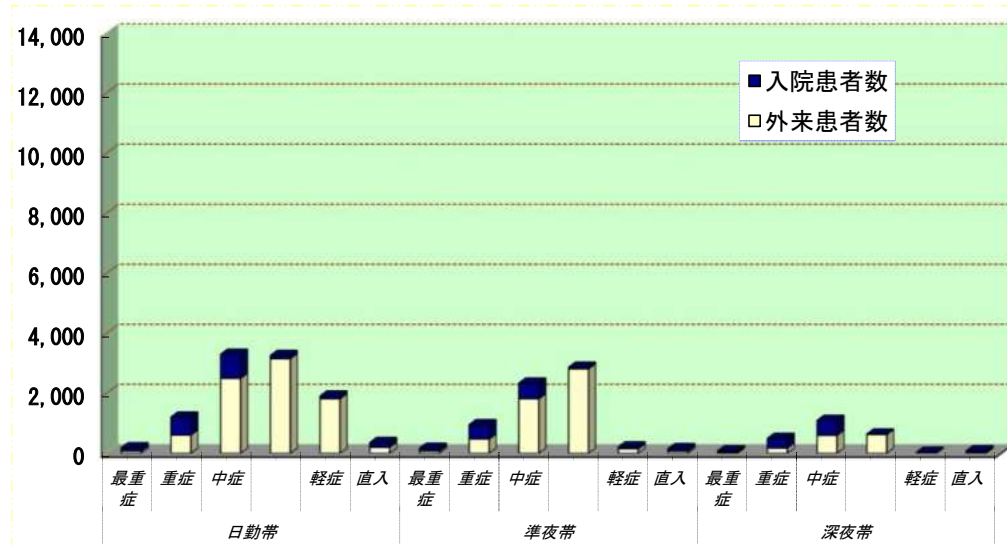
注）入院数は外来数の再掲である。

蘇生（最重症）：生命または四肢・臓器の危急の状態に、ただちに診療・加療を要する（診察までの時間3分）

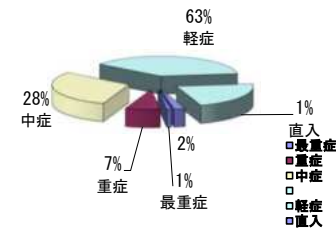
緊急（重症）：生命または四肢・臓器の危急の状態に陥る可能性が高く、早急に診療・加療を要する（診察までの時間20分以内）

準緊急（中症）：生命または四肢・臓器の危急の状態に陥る可能性があり、比較的早くに診療・加療を要する（診察までの時間40分以内）

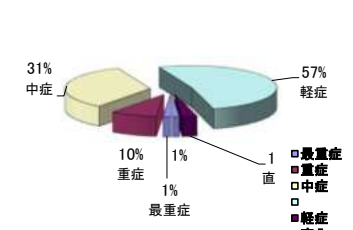
非緊急（軽症）：生命または四肢・臓器の危急の状態に陥る可能性がその時点で強く見出せず、診療を急ぐ必要性がない（診察までの時間60分）



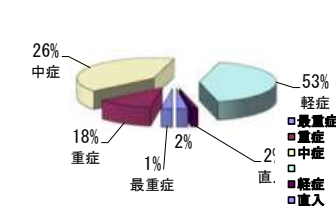
日勤帯外来患者構成割合



準夜帯外来患者構成割合



深夜帯外来患者構成割合



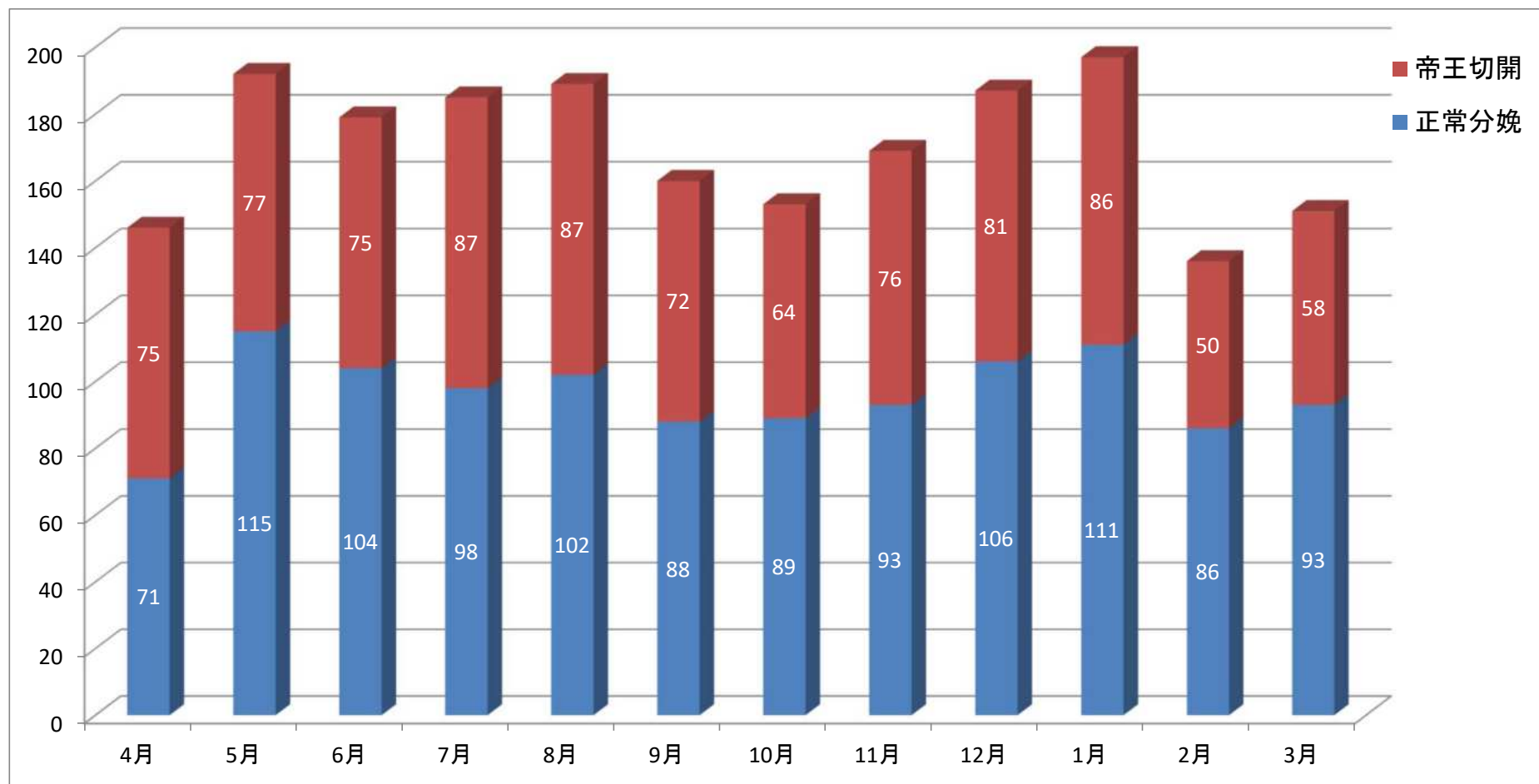
16 診療科別手術件数(その診療科に属する患児数)

標榜診療科名	院内標榜科名	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	計
外科		37	49	33	49	49	47	44	54	65	55	55	63	600
(小児科)	移植外科	34	24	30	36	42	36	21	37	40	32	32	27	391
消化器科		6	2	7	3	5	5	4	6	6	4	0	4	52
呼吸器科		3	5	0	2	4	3	1	4	3	3	2	2	32
循環器科		13	11	16	13	13	12	13	17	14	8	7	13	150
脳神経外科		29	28	26	23	23	32	20	24	24	17	22	28	296
心臓血管外科		9	9	12	14	12	10	9	14	12	15	11	10	137
整形外科		44	47	48	47	47	48	46	35	48	36	47	40	533
形成外科		18	16	15	17	24	14	24	13	16	19	23	24	223
泌尿器科		19	27	19	22	42	28	22	29	20	24	18	27	297
皮膚科		3	4	6	5	6	7	5	7	7	7	13	10	80
産婦人科	不妊診療科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	胎児診療科	6	7	14	6	7	10	7	11	11	9	8	10	106
	産科	72	78	67	81	75	67	61	68	72	70	48	63	822
眼科		38	46	24	46	26	41	44	48	53	44	38	51	499
耳鼻咽喉科		35	34	31	32	47	35	54	40	38	47	52	46	491
歯科		7	7	5	8	7	4	10	8	7	4	8	10	85
麻酔科	集中治療科	0	0	1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	3
放射線科		6	7	1	2	4	4	6	2	2	2	1	3	40
その他診療科	腎臓・リウマチ・膠原病	0	3	4	5	8	3	3	7	3	4	8	7	55
	総合診	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	婦人科	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	血液腫瘍科	0	1	4	1	1	0	1	2	1	2	3	2	18
	神経内科	0	1	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	4
合計		379	406	364	412	443	407	395	427	442	403	396	440	4,914

17 診療科別日帰り手術件数(その診療科に属する患児数)

標榜診療科名	院内標榜科名	令和5年 4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	令和6年 1月	2月	3月	計
外科			1			1								2
(小児科)	移植外科													0
消化器科														0
呼吸器科														0
循環器科														0
脳神経外科														0
心臓血管外科														0
整形外科														0
形成外科														0
泌尿器科														0
皮膚科														0
産婦人科	不妊診療科	5	6	8	4	9	6	6	6	4	9	3	4	70
	胎児診療科													0
	産科													0
眼科														0
耳鼻咽喉科		7	7	2	4	3	5	14	11	9	7	10	3	82
歯科														0
麻酔科	集中治療科													0
放射線科														0
その他診療科	腎臓・リウマチ・膠原病													0
	血液腫瘍科													0
	神経内科													0
	新生児科													0
合計		12	14	10	8	13	11	20	17	13	16	13	7	154

1 8 月別分娩数、正常分娩及び帝王切開の割合



	令和5年												計	1ヶ月平均
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
正常分娩	71	115	104	98	102	88	89	93	106	111	86	93	1,156	96.3
帝王切開	75	77	75	87	87	72	64	76	81	86	50	58	888	74.0
計	167	161	172	188	203	176	190	177	180	153	166	152	2,044	170.3

(単位：件)

令和5年度 ヘリ搬送状況（疾患別）666

6. そよ風分教室

東京都立光明学園

統括校長 島添 聡

(1) 沿革と概要

東京都立光明学園（以下、本校という）の前身である東京都立光明養護学校（後に光明特別支援学校に改称）は、病気療養児に対する教育の機会を確保するために、国立小児病院内での訪問教育を昭和 61 年 4 月に開始した。平成 4 年に関係機関の理解及び支援により教員が常駐し、小・中学部 9 学級の分教室が設立され、その後、平成 7 年に高等部の 1 学級が認められ合計 10 学級となった。

平成 14 年 3 月国立小児病院と国立大蔵病院が統合され、「国立成育医療研究センター」（以下、センターという）が開院することに伴い、国立小児病院内に設置されていたそよ風分教室（以下、分教室）は、センター内 5 階に新たに作られた教育環境に移転し、再出発した。

東京都立光明学園は、平成 29 年 4 月、肢体不自由教育部門と病弱教育部門の 2 部門を 2 拠点（世田谷区松原の本校と分教室）、5 つの指導形態（①通学区域から本校へ通学する教育、②本校から在宅訪問教育、③寄宿舍を利用し、そこから通学する学園生への教育、④そよ風分教室での教育、⑤分教室拠点から病院訪問教育）を有する、新たなタイプの併置型特別支援学校として開校したことにより、そよ風分教室は病弱教育部門となった。

令和 5 年度の分教室には教員 15 名、非常勤講師が 8 名おり、小学部から高等部の児童・生徒が年間 80 名程学習している。

(2) 分教室の教育

入院中の子供たちには、長期欠席による学習空白の心配をせずに、治療に専念することが大切であり、入院生活にもリズムや潤いが必要である。退院後の復学に向けた学力維持と入院生活にメリハリをつけ、希望を持って治療が受けられるよう精神的な支えと励みの一助になることを願い、以下の教育目標を掲げている。

○主体的に学習に取り組み、確かな学力を身に付ける。

○自分の身体を大切に考え、健康維持や回復・改善に努める態度を身に付ける。

○学校生活において人間関係を深め、心理的に安定した入院生活を送るための力を身に付ける。

○集団の一員として自分の役割を果たし、仲間と協力してより良い学校生活を築くための主体的に臨む自主的な態度を身に付ける。

学習形態は、児童・生徒が登校して行う分教室での授業を基本として、治療の状況や体調によっては教員が病室に出向くベッドサイドでの授業も実施している。

学習内容は前籍校の学習を引き継いで、教科指導及び自立活動や、生活単元学習等の各教科等を併せた指導など、児童・生徒一人一人の興味・関心を引き出す授業づくりに努めている。令和 2 年からは COVID-19 の感染予防のために、オンライン授業を積極的に実施した。新たな日常に応じた学習支援に、病院からの多大な支援をいただいた。

（３）連携のあり方

本校は、肢体不自由教育部門・病弱教育部門の併置校であり、長期入院・療養中の児童・生徒の教育支援におけるセンター的機能を果たしている。分教室では、児童・生徒一人一人に合わせた教育相談の充実、前籍校との連携、センターをはじめ関係諸機関との連携支援を推進していくことを大切に考え、例年以下３点の機会を中心とした連携を行っている。

❶「東京都立光明学園・国立研究開発法人国立成育医療研究センター連絡協議会」では、病院から病院長、特命副院長、総務部長、看護部長、副看護部長、総務課長及び医療連携室長、学校からは校長、副校長、分教室主幹教諭及び経営企画室担当者が出席して、分教室の運営方針や昨年度の報告や本年度の活動計画の他、教育環境整備等、病院と関わる課題について情報共有する。

❷「看護部・分教室連絡会」を開催し、副看護部長、関係病棟師長に分教室の教育活動について説明する。

❸「卒業式」、「入学式」又は各儀式に準じる「讃える会」、「祝う会」を、前籍校での式に出席できない児童・生徒のために、病院関係者にも御参加いただき分教室内で厳かに実施している。

令和３年度は COVID-19 の感染予防のため、例年実施している「東京都立光明学園・国立研究開発法人国立成育医療研究センター連絡協議会」「看護部・分教室の連絡会」が実施できなかった。令和４年は２年ぶりに「東京都立光明学園・国立研究開発法人国立成育医療研究センター連絡協議会」が開催できたため、改めて「国立成育医療センターにおける病院内分教室に関する覚書」、分教室の運営方針等を確認した。

今後も、センターとより一層の連携・協力を図り、病気療養児の教育的ニーズに応えていきたいと考えている。

（４）そよ風分教室の様子

３月「令和４年度卒業式」「卒業を讃える会」

４月「令和５年度入学式」「入学を祝う会」

９月「遠足」：砧公園、世田谷美術館に行き、レクリエーションや美術館での作品鑑賞、買い物学習を行った。児童・生徒は主治医と相談し、昼食を売店で購入して楽しんだ。病院関係者の協力のおかげで、児童・生徒は貴重な校外での体験をすることができた。

１０月「そよ風ライブ」：病院の感染予防方針に基づき、そよ風分教室を会場にして学習発表を行った。多くの保護者や病院関係者の方々に、これまでの学習の成果を披露した。児童・生徒の励みとなると同時に、児童・生徒の様子や分教室の教育活動を伝える場となった。

１１月「そよ風作品展」：分教室内に学習の成果である作品を展示し、保護者や病院関係者の方に鑑賞していただき、温かい励ましの言葉をたくさんいた。また、１階ロビーでの展示を行い、保護者や病院に訪れる方々にも児童・生徒の作品を見ていただき、そよ風分教室を知っていただく良い機会となった。